THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第四十二年 第一號 第四百六十



現代の社會生活が齎せる怖るべき疾病……

として血壓昂進症は近時醫俗兩界より多大の注意を惹起するに至れり、乃ち精神的并びに肉體的過勞、不攝生なる生活慣習等のために血管に持續せる緊張を與へ、不知不識の間に動脈壁に硬化を來し、その結果何等の豫告なく突如として『生命の三脚臺』の一なる腦（腦溢血）腎臟（慢性腎臟炎）又は心臟（狹心症）を襲ひ貴重なる壯年者の生命を奪取す、されど早期に於てその潜在を發見し食餌上の攝生を行ひ……

健康なる幼若動物の脈管臟器製劑

アニマザ

を内服せしむる時は病症の進行を阻止し豫防的效果大なりと認めらるゝに至れり

この療法によりて血管の緊張を去り、血壓を低下せしめ、頭痛、眩暈、耳鳴、不眠、胸部苦悶等の自他覺的症狀を消失せしむ、特に過劇なる精神的作業に從事するもの、遺傳を有するもの、カフエイン（茶コーヒ）ニコチン（煙草）アルコール（酒）中毒者、美味佳肴の多食者、肥滿せる體格の所有者等にして退行季年齡（四十歳以上）にあるものは血壓に注意し、その危險より脱出すべきものとせらる。

詳細なる説明書あり送呈す


獨逸オスナブルク 臓器治療製劑會社

三〇錠入……二圓四十錢
一〇〇錠入……六圓八十錢
各地藥店にあり

東京日本橋區本町
株式會社 田邊元三郎商店

八町堀の與力同心

東西司事譚」


保健と衛生に
クラブ煉歯磨
一番衛生的なセルロイド製柄の
クラブ歯刷子
口腔衛生標語
磨けば光る歯と心
CLUB



朝陽　　　安田靫彦筆


一年の計——
生活改善は
元旦の接待より
サクラビール
サクラ
Sakura
サクラ
Sakura

大正十六年

中央公論

一月一日發行

一月號

第四十二年第一號

第四百六十八號

無產政黨運動に依て指示された二つの途

普選三つ四つの無產政黨が出現してから、世人の既成政黨に對する興味は頓と薄らいだ。本能的に政事に關心せずには居れぬと云ふ様な人でも、之れからの政治は無產政黨の動き方に依て大勢がきまるものと觀て居るらしい。大正十六年の政論界は、思ふにこの無產政黨問題で大に賑はうことであらう。

併し何と云ても實際の政治は、今のところまだ確實に既成政黨の人達に依て握られて居る。假りに近く總選擧があつたとしても、無產政黨が直に彼等に代り得べしとは思はれぬから、殘念なことではあるが、我々の運命はもう暫くの間彼等の支配から免れることは出來ない。從て彼等の離合集散は直接に我々の利福に關係し、その限りに於て彼等の行動并に之より生ずる波紋も吾人の等閑に附し得ざるものではある。けれども要するに彼等は早晚亡び去るべき運命にあるものだ。自然にはぐくまれる芽は、その始めいかに纎弱でも、包藏する生命の力の抑ふ可らざる如く、一旦產聲を擧げた新興階級が、遠からず民衆多年の翹望に温められて見事な發達を遂ぐべきは、一點の疑を容れない。生れた子供は至て弱々しい。併し乍ら見よ、之に對する民衆の歡呼と期待との今日既に如何に大なるかを。

× × × ×

新しい子供の誕生はその事自身大なる喜びに相違ない。併しその喜びに陶醉して之に伴ふ大なる責任を忘るるは、決して賢明な父母の爲す所ではない。蓋し子供の生れた以上は之を健やかに育てなければならぬ、之を社會有用の材たるべく教育しなければならぬ、而して結局彼れをして自己の天分を完うし社會の向上發展に大なる貢獻をなさしめねばならぬ。斯く子供の生ひ先きに光明あらしめてこそ、始めて誕生のよろこびも終りを完うせるものと云ふことが出來よう。遠大の見識より觀れば、實は誕生その事に意義があるのではない、生れたる者をして他日社會有用の働きを爲さしむる所に本當の意味が存するのである。

無產政黨についても固より同じ事がいへる。謂はば今日まで無產階級には子供がなかつたのだ。その爲に彼等階級

の[illegible]は、[illegible]眞に[illegible]の爲に爲されたる
なしとせば――今この新政黨に新出するを擧げたことに大なる責任に相違ない。けれどもこの新生兒に、[illegible]長の
後、果してよく眞にその本來の立場を理解し周圍の期待に背かず忠實にその本分をつくすだらうか。斯く云へばとて
私は敢てこゝに杞人の憂を抱くのではない。新生兒の誕生に際して、徒らに一時の喜びに眩惑し今後に於ける教養の
責任を忘れざらん様、お互に深く愼戒する所あらんと欲してこの言を爲すものに外ならぬ。

× × × × ×

予輩が玆に故らに斯うした立言を公にするには別にまた多少の理由もある。それは世上一部の論理には、新生兒の誕生その事を無上の喜びと爲し、爾後に於ける教養の無用を説くものがあるからである。この説は色々の形に現はれて居り、今一々之を列擧し得ぬが、試にその一二を述べん乎、例へば予輩が新無產政黨にだけは既成政黨間に見る様な醜惡な喧嘩はさせたくないと云へば、論者は自己の伸びることとそのこと以外に何の顧慮する所があると逆襲する。自己あるを知て社會あるを忘れてはなるまいと說けば、自己を活かすこと即ち社會を活かす所以ではないかといきまく。黨あるを知て國家を忘れるのは吾人の最も既成政黨に憎む所でなかつたかと云へば、國家の利害と黨の利害とは無產政黨に在ては完全に一致すると曲辯する。即ちこの論者は、社會全般の爲に時ありて自己の抑遜謙讓すべき所以を覺らないのである。私共は之を以て必しも左右兩翼の分岐點とするものではないが、兎に角無產政黨運動の首途に當て、豫めこの點に嚴格なる警戒の眼を光らすの必要は大にあると考へる。

× × × × ×

無產政黨運動の當事者その人には、その執る所の立場につき固より各々相當の根據はあらう。只我々無產大衆に取ては、この新しい運動に因て玆に明に二つの途が指示されたわけになる。一に曰く、無產者を背景とする政黨が出來さへすればいゝのか。二に曰く、無產政黨に依て、多年冀望して得なかつた本當の明るい政治を、やつて貰ひたいのか。諸君は果してこの孰れを擇ばれるだらうか。

中央公論



第四十二年第一號
一月號
第四百六十八號

轉換期に於ける政界の新狀勢

大山郁夫

一　大勢の觀測

第五十二議會の解散が到底避けられないであらうとの見究めが一般的に流布されるやうになつてから、そのことの當然の歸結として、最近の政界の上に或る急遽なる動搖が現はれ始めた。既成諸政黨が早くも、各自の議會對策を總選擧對策に結びつけて建て直すやうになつたのも、無論そのためである。憲政會內閣の日銀利子引下げの斷行とか、金輸解禁の前觸れとか、財政計畫に於ける從來の消極政策から或る程度の積極政策への轉向とかの如きも、大部分はその視角

からのみ理解されるこ[illegible]如として再出したのも、それと同じ意味に於てのみ、その偶然的現象でない事が把持されるのである。

だが、來るべき議會解散の豫想の下に政治的活動への不可抗的な興奮を感じてゐるものは、無論既に旣成諸政黨だけに止まつてゐるものではない。そこにはまた、政治的には新興勢力と見られてゐる諸社會層を代表しようと意氣込んでゐる無產諸政黨が、それぞれに政治鬪爭の初舞臺に登場すべく要意して、若き胸を躍らせつつ、着々陣容を整へつつある。そして、それらの無產諸政黨の前途の活躍は、一般社會のあらゆる方面から、特に異常の關心を以て注視されつつあるものである。しかもそれは、單なる一片の好奇心からといふ以上に、或る方面からは多少の疑惑若しくは危虞乃至反感を以て、更らにまた或る他の方面からは多少の期待若しくは熱心を以て、といつたやうに、それぞれの社會層から、それぞれの態度に於て、しかし何れの場合に於ても、決して冷淡に――もしくは冷靜に――でなく、迎へられてゐるのである。

旣成諸政黨は、いづれも皆、旣に充分に頽廢期に入つたものの諸徵候を歷然と示してはゐるものの、しかも現政界に於ける海千年山千年の古參者としての强味を多分に保留してゐる。これに反して無產諸政黨は、新銳の氣勢に充ち滿ちてゐるとはいへ、何と言つてもまだ、これから未踏の原野に分け入らうとしてゐるものの不安から、全然脫却してゐるものではない。かうした點からだけでも、これらの二大勢力の對立を約束してゐるところの來るべき政局への豫見が、一般世人の注意を極度に緊張せしめてゐることの決して偶然でない理由が、容易に看取し得られるのである。

が、尙ほそれに附け加へて、若し第五十二議會の解散が不可避的のものだとするならば、當然それに續いて到來すべき總選擧は、一般に『普選法』と呼び做されてゐる新選擧法の下に行はれるであらうといふ豫想が、近き將來の政局に

對する誰れもの觀測を、一層烈しく攪亂する要因となつて働いてゐるといふことは、拒むことの出來ない事實である。普選法としては如何に不完全なものにもせよ、新選擧法は、もう既に世間で充分に言ひ盡くされてゐる通りに、衆議院議員選擧に於ける有權者數を、三百萬臺から一躍して千二百萬臺に上らしめた。かくて、新選擧法によつて加へられた新有權者數は、舊來の有權者數に對して、三倍强に當ることになつてゐるのである。それは少くとも、單にそのことだけとして見れば、たしかに急激なる變化といへるものである。そしてそれは、近年來眼まぐろしくも慌ただしき轉換期の諸特徴を次から次へと示して來た我國の政界の發展の途上の顯著なる一産物であつたと同時に、更らに今後の政局の進展を一層急轉直下的なものとならしめようとする槓杵としてかのやうな作用をなし遂げつつあるものでもある。殊にそれは一方に於て、新興政治的勢力としての無産政黨の有形的成立を可能にした直接的諸原因中の最も重要な一つと見られるものである。のみならず、それはまた他方に於て、既成諸政黨の舊來の地盤關係の上に激動を惹き起したことによつて、特に彼等の總選擧對策に於ける態度を、著るしく盲探しのやうなものに見せてゐるものでもある。即ち、過去幾十年間に亙つて蓄積された既成諸政黨の政戰上の經驗も、かうした眼前の狀勢の一大變化の前には、最早從前通りに頼みにならないものになつて來てゐるのである。少くとも彼等は、すべてのことを學び改める必要を持たないまでも、多くのことを新たに學び始めなければならない破目に陷つて來てゐるのである。殊に新選擧法の下に加へられた新有權者たちの容易ならざる大部分を構成する無産大衆の獲得に關しては、そのことが最も適切に言ひ得られるのである。即ち、この方面では、彼等は、綱領とか、政策とか、標語とかの選擇の如き、主として理論上の範圍に亙る事柄に關しても、それからまた、組織とか、宣傳とか、戰術とかの如き、主として實踐上の範圍に亙る事柄に關しても、遙に無産政黨の水準に及ばないものを、多分に持つてゐるのである。

といへ、最低限の自由、[illegible]と共に[illegible]
貴の全力を擁してゐる。そして、ブルジョアジーの支配を支持する一大金字塔ともいふべき議會の選擧に於て、全力が非常な威力を發揮することは如何なる手段を以てしても、急速には阻止することの出來ない嚴然たる一事實であるが、既成諸政黨は現在、單にこの一點に於て、無産諸政黨のいづれもが及びもつかぬ優越地位の上にあるばかりでなく、まだその上に、國家權力の支持といふやうな、牢固な基礎の上に據つてゐるものでもある。近代的規模の上に組織され運用されてゐる立法、司法、及び行政の諸機關は、依然としてブルジョア政治の難攻不落の堡壘としての機能を發揮してゐる。そして無産諸政黨は、少くとも名實共に階級的政黨として行動しようと決心してゐる限り、否でも應でも、そこから絶えず發せられる猛烈なる砲火を浴びつつ前進しなければならない事情の下におかれてゐるのである。

それさへあるに、新選擧法は、單に消極的に普選法として不完全極まるものといへるだけでなく、更らにまた積極的にも、無産政黨の擡頭の上に幾多の障碍を積み重ねてゐるのである。この方面に關する諸點は、他の多くの諸論客と共に、私自身もまた、新選擧法の制定の當時から、巨細に指摘して來たことではあり、且つまた今日では一般に廣く認知されて來てゐることでもあるから、いま玆に重ねてそれに觸れる必要はないであらう。が、何れにしても、無産諸政黨は、やがて總選擧戰に打つて出る日には、必ずそれらの諸點から來る苦味をしみじみと嘗めるべく餘儀なくされるであらう。否、それらのうちでも特に立候補に附帶せしめられてゐる供託金問題の如きは、今のうちから既に、彼等の容易ならぬ頭痛の種となつてゐるものであることは、世間周知の一事實である。

かうした樣々の事情を念頭において考察するとき、既成諸政黨は將來に對して甚だ心細く見られる展望をしか持つてゐないものであるにもせよ、現在から近き將來にかけては尚ほ、全體としては非常な優勢を維持して行くに相違なから

うが、無産政黨はこれに反して最も多望なる將來を約束されてゐるものと見られはするものの、今のところ暫らくの間は、著るしき劣勢に甘んずるより外はないであらう。

けれども、さういふのは、單に議會に於ける議席數の如き外形上のことについてのみ、いへることにすぎないものである。だが、事實上に於ては、無産諸政黨を支持しようとする社會的諸分子は、現在でも既に、決して狹まく限られたる範圍内に止まつてゐるものでない。そして彼等の實數は、今後にかけて日を積み年を重ねるに從つて、益々壓倒的に增進する見込みさへあるのである。もとより、彼等の聲は、何よりも殊に諸法制から來る樣々の障碍のために、尙ほ當分の間は、さほどの外形上の政治的影響を示すまでに至らないかも知れないが、しかしそれにしても、それはそれの實質上の効果を、恐らく多數世人の意外とするであらう方面に於て、無視すべからざる程度に發揮しないでは已まないであらう。就中それは、次の總選擧の結果として、多分比較的少數に於てではあらうが、兎に角無産階級の代表者として議會に送られるであらうところの議員たちの態度や言論や進退の上に、可なり明確に反映されるであらう。我々は今日に於て既に、多勢を恃む既成諸政黨側の議員たちの言動が、何となく滅びゆくものゝ悲哀を表現するであらうことが考へられるに反して、如何に小さき團結を構成するすぎないにもせよ、無産諸政黨側の議員たちが、新興諸勢力を代表するものにふさはしき潑剌さを彼等の態度の上に示すであらうことを想像することが、決して甚だしき妄斷でないことを信じようとするものである。

いづれにしても、かうした二大勢力の對立關係のうちから、我々の眼前に動いてゐる轉換期の政治形態を、層一層と顯著に特徴づけるであらうところの樣々の新狀勢が、次々と應接に追がないやうに展開して來るであらうことは、疑ふべくもないことのやうに思はれる。けれども、假りに若し人々が、それに關聯して、一方の側に於ては既成諸政黨が常

に呼應して一團を形づくり、他方の側に於ては無産諸政黨が大同に團結して他の一翼を形づくつて、さうしてそれらの間から一齊に、各問題の討議毎に正面衝突を演ずることになるのであらう、といふ風に考へてゐるものとすると、それは恐らく、大なる誤謬であることが、後に至つて判明するであらう。既成諸政黨側の陣列もさうだが、殊に無産諸政黨側のそれとなると、樣々の諸關係が非常に複雜に錯綜してゐるのである。そしてそれらの中には、同じ無産諸政黨の線上の或る他のものに對してよりも、寧ろ反對側の既成諸政黨の陣營内の或るものに對してこそ、却てより多くの相互的牽引を感じてゐるやうに見られてゐるものすら、全然ないとはいへないのである。だとすると、若し我々が、來るべき總選擧後の政局の動きに對して、今のうちから或る程度の豫想を立てておかうとするならば、我々は是非とも、既成諸政黨と無産諸政黨との間の諸接觸點を聯結して描かれたる戰線の各部の、或ひは突出してゐたり、或ひは彎曲してゐたりしてゐる形勢の實狀を、出來るだけ明確に見定めることから差し掛からなければならないのである。いふまでもなく、さうした形勢は、始終一處に固定的に停滯してゐるのであるものよりは、寧ろ所謂歷史的必然性の下に、常に流動して息まない過程の上にあるものだから、從つて我々が、それの現在の位置及び將來への傾向を知らうとする前には、我々はまづそれの過去からの來歷を跡づけておく必要がある。で私はその目的のために、以下しばらくの間、幾分回顧的敍述を挿入しておかうと考へてゐるのである。

二　無産政黨を迎ふる一般世人の態度の變遷

無産政黨促進運動が稍々纏まつた形態を取りかけた頃——それは大正十三年の後半期に寄つた頃であつた——から、各方面の人々は、無産階級からの代議士たちが議會に送られるやうになると、我國の政治の上にも、一脈の新味が注入

されるやうになるであらう、といふやうなことを言ひだした。これはもとより、無產政黨の本質的意義には毛頭交渉ない漠然たる考へ方の表現であつた。けれども、さういふことが言はれるやうになつたことには、また、それ相當の理由のない譯でもなかつた。それは手短かにいへば、『疲れたる文化』に倦怠し切つたものが新鮮なる文化への强き誘惑を感じる、といつたやうな心持から言はれたものだつたのである。

事實上、少くとも世界大戰勃發時代以來の我國の議會は、『疲れたる文化』の雰圍氣の最も典型的な代表物であつたかのやうに見られて來たものであつた。そこでは、或る期間大に世間を騷がした所謂戰爭成金輩出の形勢と相呼應して、諸政黨間の腐敗事件摘發競爭の泥合戰が間斷なく戰はれて來たものであつた。そして、そこでの興味の中心は、所謂議政壇上の辯論から、次第に議場での彌次、叫喚、紛擾、格鬪、等々の方へ移り行きつつあつたのである。曾て我國の議會政治の創始時代に於ては、『憲政濟美』といふやうな言葉が、熱烈なる信仰の底から湧いて出たやうに、極めて嚴粛な心持で叫びかはされたやうなことがあつたにしても、近年に至つては最早、さうした標語は、縱し時々は忘れ物を思ひ出したやうに、再び取り出されたことがあつても、それは段々と力なく唱へられて、力なく反響されて行くにすぎないものになつて來てゐた。

世界大戰勃發當時から急に我國の論壇を風靡し始めたデモクラシーの聲は、或る期間に亘つて、たしかに我國の政界に一新紀元を現實的に齎らさうとしてゐたものと一般的に思惟されたまでに、相當に壯烈なる氣勢を示したものであつたが、しかしその期待がそのままに充實されるには、時機が既に遲れてゐたことが、次第に明瞭になつた。もとよりそれは、後に第五十議會に於て始めて具體化されたところの『普選』の名の下に於ける選擧權の擴張への輿論の成熟を促進した點に於て、我國の政治史上に於て永く記念されるべき實效を擧げたことは、否定することの出來ない一事實で

きるが、しかし同時にまたに、ここ[illegible]と共に、それ自身の[illegible]ことされたもの[illegible]うになつたといふこともまた、同様に顯著なる一事實である。かうした事實の進行してゐる間に於て、時としては、政[illegible]の擁護運動騷ぎが型の如く繰り返されたり、時としては、「政界廓清」とか、「黨弊刷新」とか、「既成政黨打破」とかとはつたやうな様々の叫び聲が入れ替へ差し替へ公衆に向つて放送されたりなどしてゐたが、しかし現實の議會政治そのものは、益々泥沼の深みに陷つて行くばかりであつた。かくて、そこでの百鬼夜行の闘のやうな走馬燈的光景は、間斷なく廻轉に廻轉を續けつつ、今日にまで及んで來たものである。で、我々がかういふことを我々の記憶の上に呼びかへすとき、我々は、たとへば我國の勞働運動の上に、少くとも大正七八年頃からの四五年間に亙つて、サンディカリズムの理論を反響した議會否認の聲が一ト際高く擧げられたやうなことの、決して偶然でなかつたことを知ることが出來るのである。更らにまた、それと全然に異がつた動機からではあるが、最近我國の支配階級の側に於て、例のムッソリニ式の獨裁振りをそれとなく謳歌する傾向が時々片鱗を現はすのが見られてゐるやうなことがあるのも、矢張り同樣に、彼等が頽廢したブルジョア議會に多少愛想をつかしたことから來てゐるものと考へられる理由があるのである。

兎に角、無産政黨促進運動――それに關して、今は過去のものとなつてゐる政治研究會の開拓者的貢獻は、忘れられてはならぬものの一つである――が着々と具體的効果を擧げ始めた頃は、ブルジョア議會の絕望的頽廢狀態が、既に充分に一般世人の共通話題となり、且つそれが次第に一の重大政治問題として視られるやうになつてゐた時代であつた。それ故に、その頃の無産政黨組織計畫は、世間の各方面から、――時としては意外の諸方面からさへも、――可なりに緊張した興味を以て、――時としては或る程度に熱心なる期待を以てさへも、――迎へられたものであつた。それに、その頃は恰度、イギリスに於てマクドナルドの率ゐてゐた勞働黨內閣の施設の狀況が、日々海外電報によつて傳へられ

て、我國の民衆の眼を見張らせてゐた際でもあつた。かういふ樣々の事情が重なり合つて、我國では兎に角物珍らしさの充分に伴つた無産政黨組織計畫に對する一般世人の注意を、益々募らせて行つたものであつた。かくて彼等の多くは、まだ一度も試みられたことのない新しき政治的勢力としての無産政黨に向つて、誠心誠意に或る期待を繋ぐやうに誘ひ込まれて行つたのである。そして、さうした情態の下に於て、無産政黨が政治行動を開始するやうになれば、政界に一脈の新味が送り込まれるであらう、といふやうなことが囁かれ始めたのである。もとよりそれは、前に言つた通りに、疲れた文化から新鮮なる文化への轉換に對する憧憬といつたやうなものと同列の上に置き並べられるべき、極めて漠然たる期待として見られるべきものにしかすぎなかつた。しかもそれは、その疲れたる文化や、それの代替物としての新鮮なる文化やの、それぞれの本質への洞察の缺乏の上に基礎づけられたところの、一種の感傷的氣分から出た囁きとして見られるべきものにしか、すぎなかつた。從つて、その後に至つて、眞の意味に於ける階級的政黨としての無産政黨が當然のこととして立脚地とすべき——そしてまた實際に於てさうもしてゐる——無産階級的政治鬪爭意識の本質が、少しづつその本來の生地を現はすやうになりだしてからは、さうした漠然なる迎新的感情は、いつとはなく『時』の篩にかけられてかのやうに、次第に無産階級的政治鬪爭意識そのものに對する反感もしくは共鳴へと分化して行くやうになつて來たのである。更らにまた、それと同樣に我々の注意から逸らしてならないことは、かうした傾向と同一步調を保ちつつ、當初に於ては一種の漠然たる政治的意識もしくは無意識の下に於ける混沌たる一個の團塊を形づくつてゐたにすぎなかつた無産政黨運動の上にもまた、それに相應した分化作用が行はれ始めたことである。即ち、當初に於てさうした不明確な形態から出發した無産政黨運動が、時日の經過してゐる間に、內部からの必然的發展性と、外部の諸事情の轉變との交錯の下に於て、段々と鍛錬され陶冶されてゐた間に、次第に無産階級的政治鬪爭意識の濃厚なものと、それの稀薄な

[illegible]々の色合ひに彩られてゐる諸政黨に組分けされて行くやうになつて來たのであらう。茲へ於て、我々は[illegible]政黨運動が漸く現實的政治行動に入らうとしだした間際に當つて、僅かにその陣列の上に複雜性ある混亂を現出せしめて來たことの由來について、語ることが出來るのである。しかし、私がその點の論述を企てる前には、私は尚ほ別に、他の一二の問題に觸れておかなければならない必要を感じる。

三　既成諸政黨の態度の上に於ける或る變化

普選法の制定を見越して着手されたる無產政黨組織の計畫が具體的に進行しかけてから、既成諸政黨の政策や態度の上に、或る種の相當に重要なる變化が見え始めたといふやうなことは、その普選法が取扱はれた第五十議會の會期の前後の頃から、一般的に喧傳されて來たことである。そしてそれは、概括的に云へば、實際の事實を反映してゐたものではある。たゞしかし、その變化がどういふ性質のものであつたかについては、一般世人の觀測は、必ずしも當初から正鵠を得てゐたものだとは言はれないやうに考へられる。

この點に關しては、當初に於ては、一般世人は、既成諸政黨が無產政黨を向ふに廻はして、普選實施後の新有權者層の大部分を構成すべき無產大衆の獲得の競爭に乘り出す準備として、その政策や綱領の上に社會政策的立法の必要を盛に強調し始めてゐたやうな點だけを見たのである。事實上、普選法制定や貴族院改革やを鬪爭題目とした所謂『護憲三派』(憲・政・革)の聯立內閣が出來た頃から、既成諸政黨はいづれも皆さうした方向に踏み出すことを急ぐやうになつてゐたのである。そして、その頃の政界の流行語の一つとなつてゐた所謂『看板の塗り替へ』といふ言葉は、全然その傾

向に聯關せしめられて言はれてゐたものである。

しかし、既成諸政黨の、さうした『看板の塗り替へ』の傾向の眞意義は、實はその表面上の字義が示してゐるやうな簡單な性質のものではなかつたのである。それには、裏に裏があつた。そして我々は、その裏の裏までを見透した上でなければ、最近に於ける政局の全面的動きの由つて來るところを、確實に把握することは出來ないのである。

けれども、當時に於ては、一般世人はもとより、無產政黨運動に直接に從事してゐた人々の中にあつても、多少とも政治的自由主義の信條を無差別的に渇仰してゐた人々——さうした人々が、當時尙ほ初期の混沌狀態を脫してゐなかつた無產政黨運動の渦中に於て相當の多數に見出されたことは、今から思へば、一の必然的な歷史的事實だつたのである——さへも、普選の實施の豫想の下に既成諸政黨が看板の塗り替へに急いでゐた狀況を見て、あだかも政治上の一新紀元の曙光が眼の前に仄めき始めたかのやうに言ひ囃して、喜んでゐたものである。彼等はもとより、決して既成諸政黨の『誠意』に信賴してゐた譯ではなく、またそれに信賴してゐなかつたからこそ、無產政黨組織の計畫に參加してゐたのではあつたが、しかし彼等から見れば、既成諸政黨が縱し嘘から出た誠のやうな關係からにでもせよ、社會政策的立法の必要といふやうなことを口にしなければならないやうになつたのは、偏へに普選の偉力に基づいたものであり、且つまた、その普選の實現の機運を成熟せしめたものは、結局は民衆の政治意識の眼ざめのためだつたのである。で、それは結局、その所謂『民衆の政治意識の眼ざめ』と『普選の偉力』とに對する彼等の殆んど無條件的にも見えた信賴が、彼等をして、單純にさうした原因によつて促進されたものと彼等に思惟されたところの既成諸政黨の看板の塗り替へを通して、政治上の一新紀元の曙光を見たやうな幻覺に陷らしめたのだ、といふことに歸着するのである。

だが、彼等のさうした解釋が、畢竟するに、彼等の素樸な自由主義的政治觀及び樂天的社會觀の反映にすぎなかつたの

であつたことだ、[illegible]事實によつて[illegible]であらう。

私は次にしばらく、その點を明かにすることに努めようと思ふ。

四　普選法及び治安維持法の同時制定の謎

最近の政界の觀察者たちのすべてによつて記憶されてゐる筈である通りに、普選法を通過せしめた第五十議會は、同時にまた、無產階級運動の壓迫をその眼目としてゐる治安維持法を通過せしめた議會でもあつた。しかも、普選法案は大正七年以來の多年の懸案として、ブルジョアジーの利害關係の立場から、熟議に熟議を重ねられたものであつたにも拘らず、尙ほそれが最後に決定を與へられたまでには、餘りにも多大の日數が必要とされたのであつたが、しかし他方の治安維持法案は？——といふと、それは政府によつて極秘裡に立案起草された上で、疾風迅雷の如き勢で議會に提出され、それからといふものは、全く息をつぐ暇もなかつた程に慌ただしく討議され、そして普選法案の採決をも待たずに、早急に兩院を通過せしめられたのであつて、その間殆んど旬日をも數へなかつたやうな有樣だつたのである。かうした手續の下に制定されたその治安維持法の本質の如何なるものであるかは、最近に至つて、所謂學生檢擧事件を通して、その一端が具體的に把握されたものである。が、無產階級運動の陣營に於ては、それが議會に提出された瞬間から、それが無產階級に向つて未曾有の辛辣なる彈壓を加へようとしてゐるものであることが、殆んど本能的にと言ひ得られる程の俊敏さを以て鋭く感づかれて、且つそれに應じて、惡法反對運動の烽火が、そこから直ちに擧げられたのである。疑ひもなく、この運動は、それが最後の成功の日を見るまでは、すべての無產諸政黨によつて、不退轉の勇氣を以て、絕えず頑强に繰返されるであらう。現に、この頃次から次へ頻々と新たに組織されてゐる無產諸政黨のうちで、

無産階級を壓迫する諸法令の撤廢といふことを、その鬪爭題目の一つとして採擇してゐないものは、唯の一つもないやうな次第である。そして、この方面に於て特に排擊の中心目標として眼指されてゐるものは、實に無産階級的立場から見て諸惡法中の最惡法といはれてゐるところの、この治安維持法を措いて外にないのである。

ところで、第五十議會は、一方に於ては普選法を制定しながら、他方に於てはまた治安維持法をも制定した。更にまた、まだ無産政黨の參加なきその第五十議會を獨占した既成諸政黨は、一方に於ては社會政策的立法の新看板で無産大衆に媚を送りながら、他方に於てはまた同じ無産大衆を絶望の淵に陥れようとする惡法案に協贊を與へた。かういふことは、一見恰かも甚だしき矛盾のやうに思へるものであつた。そしてまた、實際それに對して矛盾呼ばはりを連發した人々が、各方面に於て少からず見受けられた。だが、事實上それは、決して毫も矛盾ではなかつたのである。かの、右手に劍を、そして左手にコランを持つて敵地に臨んだのは、昔のマホメツト敎界の征服者たちの故智であつた。また古來の宗敎家たちは、地獄と天國とを等分に巧妙に使ひ分けるとによつて幾多の善男善女を獲得することを慣用手段として來たものである。さうした事と同樣の趣向の下に、どこでも各時代の支配階級は、懷柔政策の飴と彈壓政策の鞭とを、被支配階級の上に並用するのを常例として來たものである。といふのは、單にそれらの一方が他方と矛盾なしに兩立することが出來るといふだけではなく、更に進んで積極的に、一方が常に他方を必要とするものであつて、そして兩兩相待ち相補償しつつ、支配階級の一切の態度の核心に潜む眞の目的の達成に奉仕するものだからである。

だが、それだけのことを言つただけでは、まだまだ普選法と治安維持法との同時制定の謎が完全に解かれたものとすることが出來ないのである。我々はそれには、もつと深刻な意味が包藏されてゐるといふ點に注意を向けねばならぬ。そして、その隱れたる意味を讀むことは、同時にまた、普選實施の豫想の下に着手された既成諸政黨の看板の塗り替へを

政治的一事件その前後[illegible]たことが、如何に[illegible]ない一片の文書にすぎないものであるかといふこと[illegible]即ち私が前に提出したなりで未解決のまま放置しておいた一問題——に對して最後の答案を與へ[illegible]に來たのである。で、私は次に、その問題の究明に向はなければならぬ。

五　「資本の攻勢」の政治的顯現

この點に關してもまた、私は、第五十議會に於ける治安維持法制定の動機に關する考察から始めよう。

治安維持法は、大正十一年に高橋内閣によつて第四十五議會に提出されて、衆議院で握り潰ぶしの運命を見た過激社會運動取締法案の後身であり、更らにそれが一層多く無産階級運動壓迫の意味を含ませられたものであつた。過激社會運動取締法案が提出された當時に於ては、それが嘗て稀代の惡法としての名を世界に馳せたドイツの社會主義鎭壓法（一八七八——一八九〇年）の蹤を追うたものと見られて、如何に痛烈なる輿論の反對を受けたかは、今尙ほ世人の記憶に新な事實である。だが、封建的保守思想の最後の隱れ家である貴族院は、一旦議決したのを、再審査の要求があつたために再度修正を重ねた上ででではあつたが、兎も角それを大多數を以て通過させて、衆議院に送つたのであつた。けれども、衆議院ではさすがに、多數の議員たちが、當面の輿論に調子を合はせて、それを危險極まる言論壓迫の具として批難し、且つ政府與黨であつた政友會の内部に於てさへ反對意見が盛に起つたので、それは遂に會期の終るまで上程を見なかつたのであつた。ところが、その同じ法案が更らに一層深刻にも惡辣にも加工され、治安維持法といふ新しき名を冠せしめられて、三年後に第五十議會に提出されたとき、それは、議會の外部の世間では矢張り同樣に盛に批難されてゐたにも拘はらず、議會内に於ては、たゞ若干の少數の鬪士たちの猛烈なる突撃を受けただけで、大體上に於ては、

無人の野を行くやうな勢で兩院を驅け拔けたのであつた。そこには、この暴戾なる——無產階級的見地から見て——法案の支持のためには、敵味方の區別が見られなかつた。普通の場合には、些細な問題に對してでも意見が區々に分れがちな議會に於て、その時ほど殆んどすべての議員たちの態度の上に完全な一致が示されたことは、少くと所謂戰爭議會の時などを除いては、絕えて類例のないことであつた。で、その議會の共同意志の對象は何であつたか?——といふと、それは實に、無產階級運動に對する强烈な彈壓の加重といふこと以外の何ものでもなかつたのである。

大正十一年には、我國の議會は尙ほ、過激社會運動取締法案を採決することを躊躇した。が、大正十五年には、それは何等の遲疑する樣子もなく、それの極度に辛辣化された後身である治安維持法を制定したのである。この前後わづか三個年を隔てたにすぎない短時日の間に起つたところの、かうした狀勢上の激變は、一體何を物語るものであらうか?

それは一口にいへば、現在の社會生活の各方面に於て、樣々の外被の下にではあるが、絕えず目擊し得られる所謂支配階級の反動化的傾向及びその下に行はれる『資本の攻勢』の、最も尖銳化されたる一角の最も具體的なる政治的表現として見らるべきものでなければならぬ。もとより、支配階級の反動化的傾向と言つたところで、現在我國の支配階級の中間的地位を占めてゐるブルジョアジーは、未だ曾て一度も、西ヨーロッパ諸國の最近世史の或る期間を通じて見られたやうな自由主義の時代を實現するための戰ひを戰つた經驗を持たなかつたのだから、從つて彼等の反動化的傾向にしたところで、格別に一の顯著な漸進的趨勢としての外觀を以て現はれて來たやうにも見えなかつたのは、別に不思議とすべきことではないのである。だが、それにしても、我國に於ても、殊に近年の狀勢の下にあつては、支配階級の反動化的傾向について語り得る基礎が全然缺けてゐた譯ではなかつたといふことは、もとより當然のことである。どいふのは、曾て無產大衆の階級的要求が特にそれとして考慮される必要のある重大政治問題として現はれて來るに至らなか

つた間には、我國の憲政の發達が、超然內閣時代から政黨內閣時代への推移といふ道程を踏みつつ、遲々ながらにもせよ、擴大に政治的自由主義への傾向を辿つてゐたものであるからである。殊に最近の約十個年に於ては、一時不可抗の勢ひを以て各社會層に浸潤して行つたデモクラシーの思潮が、實際政治の進行の上に向つても、或る無視すべからざる影響を及ぼしたことは、否定の出來ない一の歷史的事實である。それは例の『普選』が『曲りなりにも』——實はその『曲りなりにも』のうちに、別に他の非常に重要な意味が潜んでゐるものであることは、後に一言しようとしてゐることであるが——遂に第五十議會を通過した事實によつても、證明されてゐるものと見ることが出來るのである。けれども、さうした傾向の進行が、それ自身に宛てがはれてゐたやうに見えた軌道の上を、まだ充分に進行し盡してしまはないうちに、皮肉にも反動時代が早くも到來したのである。だからこそ、所謂『護憲運動』の成果として產まれて、靜かに官僚主義の貴族院內閣であつた淸浦內閣に取つて代はつた三派聯立內閣の下において、普選法と共に治安維持法が、これはとばかり驚いた公衆に向つて投げ附けられた、と言つたやうな事態が、突如として出現した譯である。さういふことは、直接には何よりも殊に、世界大戰時代から急に眼立つて來だした無產階級の擡頭いふを一新事實に對する反動として見られるべきものであるが、それと同時に、否、因果的にそれに關聯してゐて、しかもそれよりも一層重大なる實質上の意義のあるものとして、我々は尙ほ、上に掲げた傾向は、世界帝國主義——もしくは最近の一新造語としての『超帝國主義』——の一特殊相を反映してゐるものだ、といふ一中心的事實を忘れてはならないのである。

六　我國の政治生活上に於ける資本文明末期の諸相

所謂資本主義の歷史的發展の最後の段階としての帝國主義時代を特徵づけるところの樣々の事象は、我國の政治的、

經濟的、社會的の各方面の上にも、近來に於ては非常に手廣く現はれるやうになつて來た。無論、現在の實情の下に於ては、我國はまだ有力に帝國主義の實行に堪へ得るほどの大金融資本國の水準に達してゐる譯でもないのに、一齊に先進のブルジョア諸國家を襲うたその全般的潮流の力に押されて、早くも所謂『世界帝國主義の鎖の弱い一環』をなすやうになつて來たところから、ややもすれば、そのために或る種の重大なる破綻を暴露することが全然ないでもないやうである。たとへば、若槻內閣の下に於て、寺內內閣時代以來の我國の財政への遺產である西原借欵の跡始末が企てられたときに、植民地、半植民地、屬領地等々の搾取といふやうな、型の通りの惡結果が現はれて來なかつた代りに、國內の民衆の肩上に多額の負擔（關係三銀行に對する公債及び現金交附の形式で）が課されたといつたやうな、少くともそれと同程度のものと見らなければならない他の惡結果が現はれたことなどは、たしかに最近に於けるその最も顯著なる一例であるやうに、私には考へられるのである。

かういふ風に、我國に於ても帝國主義の支配が具體化して來てゐることを見る時、資本主義文明の末期を象徵するやうに見られる各種各樣の社會的頹廢相の出現が、我國の全社會生活を驅つて、滔々たる濁流の中に投げ込んでゐる趨勢が我々に痛感されるのも、決して何等の根據のないことではない、といはなければならないのである。そして近年來特に頻頻と官界及び黨界に起つて來た各種の腐敗事件の如きものもまた、まさしくその列上に配置して見られなければならないものである。それらのうちでも殊に、第五十一議會で大波瀾を卷き起した軍事機密費の使途問題とか、松島遊廓問題とかは、我々が最も細心なる注意を以て觀察しなければならないものである。少くとも、前者には軍閥の巨頭連が卷き添へになつて居り、後者には衆議院で有力なる三政黨が、如何なる點かで、滿遍なく懸り合ひになつて居た、といふやうな容易ならぬ諸事實は、一般の社會的頹廢の增進の傾向と共に、特に支配階級內の風紀の廢爛狀態が、如何なる程度

及び範圍に及んでゐるかの特徴として見られべきものだといふことは、必ずしも不當でないやうに、我々には考へられるのである。

かういふ風に、世紀末的頽廢狀態の雰圍氣が帝國主義の支配下の我國の社會生活をも包んでゐるといふ事實に、たしかに一の重大問題には相違ないが、しかし我々の立場から、それにも劣らない重大な或る他の構成を民衆の上に抑付けてゐるものとして見られるものは、前にいつた支配階級の反動化的傾向を示唆する幾多の事象の續出である。といふことを、私は茲で再び強調しておかなければならぬ。『金融資本は自由を欲しないで、支配を欲する』――これは、帝國主義の政治的發現に關して與へられてゐるところの、最も簡明直截且つ妥當的な說明であるが、それは、金融資本國としては尙ほ未發達の狀態にある我國をも例外にしてゐないのである。否、それは、政治的及び社會的生活に關する各種の封建的イデオロギーが支配階級の間に尙ほ多分に保有されてゐる我國の場合に於ては、特に適切に當て篏まるものとさへ、いふことが出來るのである。私が、本論文のここまでの進行中に於て、可なり執拗とも見える程度に引張り廻はして來た例の治安維持法などが、『護憲運動』から產まれて出た三派聯立內閣によつて制定された事實の如きは、この視角から見てのみ有理に解釋し得られるものである。その他、尙ほ、その時以來の出來事として算へることの出來るところの、學校教育への軍事教練の引き入れとか、靑年訓練の開始とか、各種の反動團體結成の促進とか、等々の如きものもまた、てッきり同樣の意味を帶びてゐるものと見られなければならないものである。最後に我々は尙ほ、それらに附け加へて、勞働及び農民運動壓迫の深刻化、及びそれと同系の一傾向の最も具體的な現はれの一つとして見られることが出來る農民勞働黨への禁止命令、幷にそれ以來の支配階級の對無產政黨分裂政策等々をも、同じカテゴリーに屬するものとして擧げることが出來る。で、簡單にいへば、かうした樣々のことは、それら以外にも尙ほ數限りなく擧げられることの出

來る同類の他の諸現象と共に、いづれも皆一律に、政治的には、帝國主義時代に於ける支配階級の反動化傾向を表示してゐるものであるが、更らに同じことを經濟的見地からいへば、それらは所謂『資本の攻勢』の外部的發露に外ならないものである。要するに、帝國主義下の支配階級の反動化傾向といふものは、本質的には、資本の攻勢と相互に表裏してゐるものに外ならないものである。

七　帝國主義政策と普通選擧

世界大戰進行中もしくはその直後の或る期間に於ては、世界を通じての資本主義的社會組織の全般的崩壞が、或る可なりに廣き諸方面に於て豫想されてゐたものだが、然しブルジョア諸國家は、政治的經濟的社會的に全力をあげて、その斷末魔の破綻の到來の防止に努めた結果として、辛くもその危機を乘り越すことが出來たのである。かくて現在に於ては、大體上の傾向としては、世界の資本主義は、その最後の崩壞への過程の上に於て、一時的安定——もしくは不安定の安定——を保つてゐるものと見られ得る狀態にある。そして、この結果が今日までに將來されたまでには、政治的には國際聯盟が、また經濟的には國際トラストが、如何に廣大なる役割りを演じたかは、主として最近の國際政治史の範圍に屬することであつて、私が玆でそれを細叙するのは餘りに多岐に亘りすぎる嫌があるから、私はそれを上のやうに、たゞ必要上の考慮から一顧しておくだけに止めておく。だが、さうしたことと同時に、各ブルジョア國家内に於ては、産業の再組織とか、生産機關の合理化とかの名の下に、この上の資本の安定への努力が、プロレタリアートの利益を犧牲として、殆んど絶望的に試みられつつあることは、現在諸方面の研究者たちによつて、精細に究明されつつあることとである。かうした狀態の下に、近來の各ブルジョア諸國家内に於ける資本の攻勢が、必然的に益々その鋭鋒を示す

やうになつて來たこともまた、更に多くの社會民主主義指導者たちに依つて、明確に認められ、表明されてゐることである。そして、若し我々がその傾向に關して最も代表的な實例を示せと要求されるならば、我々はその傾向の一つのタイプとしては、イギリスの炭坑夫ストライキの動因及びその繼續期間に於けるボルドウィン内閣のそれへの對策などを擧げるとも出來るし、且つまた、他の一つのタイプとしては、イタリアやポーランドに於けるファシズム的獨裁の支配などを擧げるとも出來るのである。我國に於て見られる資本の攻勢の趨勢にしても、世界を通じて見られるさうした全般的世界的傾向の、我國の特殊事情に於ける部分的顯現として見て、始めてその本質が明確に把握され得るのである。

『しかし――』と、政治的自由主義の信奉者たちは言ふかも知れない。『しかし治安維持法の制定の出來は、さういふ風に解釋が出來るかも知れないが、それと共に議會を通過した他の一方の普選法は、全然別の見地からでなければ說明が出來ないではないか？ 從つてその普選法の效力開始の日が、政治上の一新紀元の曉鐘が鳴らされる日でないとは、ただそれを聞いただけでは、承認が出來ないことである。のみならず、我々から見れば、普選の實施によつて開始されるであらうところの政治的自由主義時代こそ、帝國主義政策に逆らつて現實に作用する諸般の狀勢が出現すべき時代でなければならないのである。』――

諸君が果して眞實さう思ふなら、獨りで勝手にさう決めてゐるがいい！ しかしその代りに、現實の諸事象が畫く諸君の注文に反して進行しようとも、諸君はそれに對して何等の異議を挾む權利がないものであることを、諸君は豫め篤と承知しておかなければならないのである！

事實上、普通選擧そのもののうちに、世界的帝國主義の流れに逆つて有效に作用し得る偉力が含まれてゐると妄想してゐるものは、現在の世界の大帝國主義的諸國家は、いづれも皆、我國に於ける所謂『普選法』以上に廣い有權者の範

園を掩うてゐる選擧法を所有してゐるといふ、あまりにも顯著な事實を忘れてゐるものである。普通選擧そのものの上に帝國主義政策の進行の阻止の希望を繋いでゐる人々は、彼等の所謂『民衆』の政治意識の眼ざめに對する信頼から、明示的もしくは暗默的に、さうした氣持に陶酔してゐるのであるが、しかし、單純に漠然とした觀念に於て把握された『民衆』の政治意識は、そのままで必然的に、もしくは自然生長的に、反帝國主義的傾向を辿るべく運命づけられてゐるものとは限らないのである。否、單なる『民衆』は、歴史的現實的諸關係から、支配階級によつて吹き込まれる樣々の觀念思想のうちに彼等の精神的生活を生活して來たところから、そのままに放任しておけば、寧ろ却て帝國主義謳歌の渦中へ卷き込まれてさへ行く危險を、充分に保有してゐるのである。昔はローマの征服將軍の凱旋を熱狂的に歡迎した市井の庶民から、近代は領土獲得戰爭の崇高美を潛意識の底にまで烙きつけられてゐる世界の各部の諸國民に至るまで、非常時に於ける、否、屢々平時に於てさへもの、對異人種的乃至對異民族的敵愾心の發露を以て、彼等がそれに殉しなければならない愛國的精神の最高潮としてゐる點に於ては、少しも變りはないのである。三年前の關東地方震災當時の、あの不祥なる出來事を思へ！　また誰れもが知つてゐる通りに、白人の世界に於ける有色人排斥の態度にしても、同じ系統の精神から出て來てゐるものである。かうした『民衆』が、金融資本の支配の壓倒的前進の下に、滔々として帝國主義政策の渦中に卷き込まれてしまふであらうことを想像することには、少くも無理がない筈のことではないか！

だが、若し帝國主義政策のさうした凄じき昂進が、『民衆』の政治意識の眼ざめによつても絶對的に阻止されないものとするならば、それの支配下に於て益々放縱になつて來た社會的頽廢の種々相が、遂には慢性的の症狀に固定してしまふものではなからうか？　更らにまた、それに加へて、若し帝國主義政策は、それの本質上將來の世界戰爭の禍機を、そ

[illegible]に包藏してゐることを[illegible]、この點から來る全人類の[illegible]ないものではなからうか？　いかにも現在では、世界帝國主義の支配下に、國際的の平和時代が實現されてゐる。そして、帝國主義諸國家は、政治的には國際聯盟を通じ、經濟的には國際トラストによつての[illegible]諸國への救濟手段を通じて、未來の世界的禍亂の到來を防止しようとして、一生懸命に努力してゐる。しかし、それは畢竟、運命づけられてゐる最後の日までの、暫しの息繼ぎの時間にすぎないのではあるまいか？　そして若し、過去に於ける帝國主義戰爭が領土獲得戰爭だつたとすれば、將來に於けるそれは、今までに既に分配しつくされてゐる世界の隅々までの領土の再分配戰爭でなければならない。ところが、さうした未來戰爭の危險の萌芽の實在は、今日でも充分に看取されることが出來るのである。殊に、既發達產業諸國と未發達產業諸國との間に於ける、全體として見ての、及び各別の部門部門に就いて見ての今後の產業發達の上に於て起るべきものとして豫想し得られるところの、その速度の不平均の可能性は、現在に於て危ぶなく維持されてゐるところの國際間の力と力との均衡への動搖の脅威を不斷に掲げてゐることに依つて、原料品產地とか、商品の捌け口とか、企業上の投資地とかの爭奪競爭を中心とする未來の大戰爭を、刻々に示唆してゐるのである。別けても、太平洋が血の海に化するであらうことが各方面で懸念されてゐることなどは、その場面に近く住んでゐるすべての日本人に取つては、決して對岸の火災視ですませる譯にゆくことではないのである。

日本の政界の一波の動きでも、それを單に日本國內だけのこととして、解釋し得られる時代は、既に完全に過ぎ去つた。今日では我々はそれをも、世界政治の流れの全般的動きの、日本の國內の特殊事情の下での現はれとして、全面的に、且つその內部的聯關性に於て、把握しなければならなくなつて來てゐる。例の外來思想恐怖病患者どもが何といはうとも、我々がさうすることは、我々が我々自身の現實生活を適當に生活するためにも、最早避けられないことになつ

て來てゐるのである。

ところで、前に言ひかけしてゐた通りに、單なる『民衆』の政治意識の眼ざめだけでは、現在滔々として前進してゐる帝國主義政策の流れを有効に堰き止めることができないものとすれば、人類の前途にかかつてゐる暗憺たる黑影は、竟に永遠にどうにも消散しつくされようのないものではなからうか？

我々はいきなりこの問ひに答へるよりも、現在に於て既にその點にめざめて來てゐるところの、純粋なる意味に於ての無産階級運動が、着々と帝國主義排撃の傾向を辿りつつあるといふことを一言するのを、寧ろ適當だと考へる。しかも世界の無産階級運動の上に於けるその反帝國主義傾向の影響は漸次に被壓迫諸民族の獨立運動の上にまで及びつつある。第十九世紀を通じて全盛を極めた民族運動は、同世紀の終り頃には、帝國主義的諸國家の政治家たちによつて完全に利用せられてゐたが、しかし現在ではその形勢の上に幾分かの變化が生じて來てゐる。即ち所在の半開國、未開國、植民地、半植民地、屬領地、等々に於ける被壓迫諸民族は、無産階級運動のその一面を採用して、從來彼等の上に恣まに經濟的搾取及び政治的支配を加へて來た帝國主義諸國家に對して、いつしか矛を逆まにして抗爭し始めてゐるのである。

かくの如く、無産階級が生一本に帝國主義政策に向つて突撃することは、この階級がそれ自身をそれ自身として意識するやうになつてからは、最早避けられないことになつたのである。資本主義の歴史的發展が、それの必然的進路を辿りつつ、現在に於て終に到達した段階をなしてゐるところの帝國主義に對立せしめられてゐる無産階級は、それ自身の存在がそれ自身の肩の上に課してゐるところの、それ自身の歴史的使命を明確に意識する限り、帝國主義そのものに向つて正面から否定的に働きかけることを回避することが出來ないのである。だとすると、世界の帝國主義諸國家が、純

能たる政治に於ける[illegible]してゐるのに、[illegible]のだ
だといはなければならないのである。

我々はこの點に來て新たに、第五十議會に於ける普選法及び治安維持法の同時制定の迹の秘密を、一層確實に摑み得たことを感ぜしめられると同時に、普選法が『曲りなり』にもその議會を通過した根據をも、一層明白に看取し得たことを意識せしめられるのである。普選法の制定までの由來を見ると、それ以外の樣々の說明は幾らでも附けられはするが、しかし、あらゆることを言ひ盡したあとでも尙ほ、唯一つ、それの成立の究極の根本原因は、それが帝國主義政策への民衆の支持の獲得のために必要だといふことに關する支配階級の認識であつた、といふ一點に歸着するのである。それと同時に、支配階級はそれに添へて治安維持法を作つたばかりでなく、普選法の諸條項中にも、出來得る限り無產政黨の擡頭を阻止することを目的とする諸規定を挿入したのである。それは、支配階級としては、當然の行き方であつた。けれども、彼等が無上に恐れてゐた無產政黨の擡頭は、それにも拘らず、その普選法によつて、始めて、可能の基礎的條件を得たのである。そこにも我々は、歷史の皮肉の一片を見出すことが出來る。

普選法は、別にそれ自身のうちに、帝國主義政策に逆つて有効に作用し得る偉力を藏してゐるものではない。しかし、無產階級は、それを通して無產階級的政治鬪爭意識を活現することによつて始めて、それをして、さうした偉力への媒介者であらしめることで出來るのである。

八　現政局に於ける諸勢力の分布關係

私はここまでに、可なりに長い廻り道――と言つて、それは結局、私の豫定の目標への正當な道筋だと、私に初めから考

へられた——をして、今漸く、我々の眼前に展開されてゐるところの、轉換期に立つ現政局上の諸勢力の分布關係を說明し得る基礎を得て來た。

上來、私はまづ第一に、無產政黨運動開始以來、既成ブルジョア諸政黨との對立關係の上に現はれたところの諸形相、及びそれの一切を裏附けた諸狀勢の推移を、その表裏に亙つて觀察した。更らに私は、無產政黨運動への支配階級の對策の發展の過程についても語つた。それに關聯して、私は殊に、それらの決定的條件としての支配階級の反動化的傾向、及びそれと相互的に表裏をなす『資本の攻勢』について語つた。私は無論、私がさうしなればならなかつた通りに、それらを、世界の帝國主義の全般的の流れの、我國の特殊事情の下での顯現として取扱つた。

さうした基礎から、第五十議會に於ける治安維持法及び普選法の同時制定の謎や、普通選擧と帝國主義との關係やについての私の論述が引き出されて來たことは、事實と理論との交互錯綜的進行の當然の歸結であらねばならぬ。

かういふ諸事情は決して、今更ら新たに發見されたことではなく、少くとも斷片的には既に一般によく知られてゐることであが、しかし、私が現前の轉換期の政局の上に展開して來た新狀勢の敍述を以て本文を結ぶ前に當つて、それらを一の鳥瞰圖のうちにまとめて概觀しておいたことに關しては、別に辯解の言葉が必要でもないやうに、私には考へられるのである。それは兎に角、私は以上の一段落の結論を前提として、そこから更らにこれからさきの最後の結論に急がうとしてゐるのである

前に既に長々と述べた通りの複雜な諸關係に於て、新興社會的勢力の、まだ形成過程の上にある政治的組織としての無產諸政黨は、支配階級の全勢力の、既に充分に成熟した主位的政治的組織であるところの、既成ブルジョア諸政黨に

鼎立して對立してゐるのであるが、ただ我々は、かういふことのみに[illegible]、支配諸勢力の上に於ても、その或るもの[illegible]依然として、曾て久しく主位的地位を占めてゐたのが、今では副次的地位に引き下げられて來てゐるとはいへ、それでもまだ、隱然として決して無視すべからざる程度の重味を保有してゐるものであるところの、官僚、軍閥、樞密院、貴族院などといふ諸集團があつて、彼等の曾て擁してゐた政治的主導力の具體者であるブルジョア諸政黨の一翼を、それの背後から支持してゐる、といふことを記憶しておかなければならないのである。これらの封建的武斷國家的乃至警察國家的色彩の甚だ濃厚な政治的諸組織は、表面上に於ては、最早充分に力拔けのしたアンシャン・レジームからの遺物らしくも見えるが、しかし事實上に於ては、封建的追憶のまだ充分に衰滅を見せてゐない我國では、尙ほ引續き相當の程度に傳統的活動力を維持してゐるばかりでなく、近來支配階級が全體として著るしく反動化的傾向を示して來だしてからは、寧ろ却て別に或る新たな政治的機能を得て來てゐるやうにさへ見られるのである。從つて、無產諸政黨による近き將來の政治行動上の一尖端は、當然のことゝして、それらの政治的諸組織の方へも向けられようとしてゐるのである。

支配階級の側の内部に於て、これらの政治的諸組織とブルジョア諸政黨との間に、或る程度の相剋關係の存在してゐることは、從來折に觸れて現はれて來た護憲運動や、普選法の制定と共に、例の三派聯立内閣によつて企てられた貴族院改革――出來損ひの――などによつて證明されてゐる。けれども、これらの政治的諸組織とブルジョア諸政黨との間のその相剋關係は、ブルジョア諸政黨の仲間うちだけでのそれと一樣に、全體としての支配階級の共通的鬪爭題目である『資本の攻勢』の要求による對無產階級態度決定の場合には、比較的無雜作に拭ひ去られて、それぞれの場合の必要に應じて、多少の程度に强固なる共同戰線に取つ代はられるのを常とするのである。そして、この間の經緯は、矢張り同じ三派聯立内閣による普選法と治安維持法との同時制定の謎にまつはる諸狀況の上にも、可なり明瞭に反映されてゐる

たものである。

だが、他の一方の側の無産諸政黨の陣營內では、少くともその對支配階級態度の上に於て、同樣の强固なる共同戰線の下に完全なる協調關係が保たれてゐるといへるであらうか？　この問ひに對する答としては、我々はたゞ簡單に、『否！』と叫ぶだけで濟む。もとより、先年來の無產政黨運動の上に於ては、早くからそれの必要が充分に認識されてゐたので、單一無產政黨主義がそれに應じて、立黨の指導原理として最も有力に支持されて來たばかりでなく、昨年（一九二五年）末に產まれたばかりで直ぐ壓殺された農民勞働黨はもとよりのこと、次いでその蹤を追うて數個月後に組織されて、最近まで唯一の無產政黨で通つてゐた勞働農民黨もまた、事實上その基礎の上に築き上げられたのであつた。ところが、最近に至つてこの狀勢の上に、突如として一大激變が生じたのである。即ち、去る十月末から今日に至るまでの短き期間內にかけて、旣存の勞働農民黨の外に、日本農民黨、社會民衆黨及び日本勞働農民黨が、新たに、順々に、矢次ぎ早やに、出現して、それぞれに無產階級政治戰線上の左右兩翼及び中間の或る位置に割據して、早くも猛烈なる相互排擊を演じだしてゐるのである。かうして、無產階級の政治鬪爭の開始の前夜に於て、その戰線の上に、異常な大龜裂が生じて來た。

九　無產政黨陣列上の分裂的傾向とその克服の道

無產階級が眞にその階級的政治鬪爭意識に即して政治行動に從事することを決心する限り、それは、絕えず絕大なる既存權力の組織から來る一切の火の出るやうな彈壓の下を潜つて生死の戰ひを戰はなければ、その所定の目標に一步も近

りくことを明確にすることが出來ないやうな發展におかれてゐるのである。それ故に、無産階級の政治闘爭に於いては、その全戰線の上に嚴格なる規律と堅固なる統制とが維持されてゐて、その下に鐵の如き團結が行はれてゐなければならないのである。それでも尚ほ、その無産階級の政治闘爭が最後の勝利の段階にまで運ばれる前には、それが一不可測の大多數者の利益のための、不可測の大多數者の獨立的運動」（マルクス）にまで展開してゐなければならないのである。

さうした無産階級の政治闘爭の最後の勝利の段階は、果たして何時かは現實的に到達し得られるのであらうか？　なぜ到達し得られないか！　だが、その議論は、ここでは問題外である。たゞしかし、ここでも有理に言へることは、若し我々がそれへの到達に對して何等の確信を持たないでゐて、しかも尚ほ無産階級の政治闘爭の陣營に參加するといふやうなことは、無益無意味のことだ、といふ一事である。で、若し我々がその確信を持つ限りは、我々は必然的に、單一無産政黨主義こそ無産政黨運動に於ける唯一の立黨の指導原理だ、といふことを、承認しなければならないのである。

だが、實際上に於ては、單一無産政黨への道は、決して平坦な野中の一本道のやうなものではない。それは險惡でもあり、昏迷でもあり、且つ迂餘曲折にも富む羊腸の難路である。マルクスは既に約八十年前に於て、無産大衆を階級に、從つて政黨に、結成する組織が、その最後の合同の日までに、勞働者側の相剋によつて如何に分裂に分裂を重ねて行くものであるかを指摘した。だが、我々は、マルクスのその説明を聞くまでもなく、無産政黨の運動開始以來の我々自身の經驗によつても、その點に泌々と味到してゐるのである。我々は無産階級の政治闘爭の最後の勝利に對する我々の希望及び確信を喪失してはならないが、しかしそれと同時に、我々はまた、我々の途上に實在する殆んど無數の難關や障碍やを無視してはならないのである。ただ肝要な問題は、我々がさうした難關や障碍を克服するための意識的努力をする決心を持つてゐるか否かの一點の上にあるだけである。

そこで我々は先づ、現在我國の無産政黨の陣營に於ける不斷の分裂を惹起してゐる主要諸原因となつて作用してゐるものが何であるかを、見究めておかねばならぬ。

それらの主要諸原因は、我々の見るところでは、支配階級側の上にもあれば、また無産階級側の上にもある。無論、これらの兩側の上にある諸原因は、實際上に於ては、相互的に不可分的に錯綜しあつて働いてゐるものであるが、說明の便宜上、それらを分析的に點檢すると、大體は次の通りにいへるのである。

支配階級側の上に見られるところの、無産政黨の分裂促進の主要諸原因のすべては、例の『資本の攻勢』の要求から出たその分裂政策の項下に要約されることができる。そして、その分裂政策はまた、それが行はれる形態から見て、彈壓手段と懷柔手段との二大種目に分たれ得る。支配階級はこれらの二種の手段を、別々に無産階級の陣營内のそれぞれに異つた諸部分の上に巧みに使ひ分けすることによつて、その分裂政策の目的を達成しようとするのである。

無産政黨の陣列上の分裂促進の主要諸原因の無産階級側の上にあるものを見れば、それらは先づ、議會行動に關せざるものと、議會行動に關するものとの二大種目に大別し得られる。前者は無産階級に於て常に見られる職業心理とか、團體利己心とかの活躍を包括するものである。さうした職業心理とか、團體利己心とかが、全無産階級的意識による統制を壓倒するほどに昂進する時、そこに分裂の傾向が萠するのである。更らに、若しその傾向が支配階級側から來る分裂政策と結び附く機會があるならば、無産階級の一部にある諸團體が懷柔手段の對象となつて『黃色』化する傍らに、他の一部が赤色諸團體と看做されて、强硬なる彈壓手段の砲火の下に置かれるやうな事態さへもが出現するのである。

更らにまた、我々は無産政黨の議會行動の上にも、分裂促進の諸原因が多分に包容されてゐるのを見る。もとより我我は、この方面に於て、逆に、旣に分裂してゐる無産諸政黨を隨時に提携關係に繫ぐ可能性のある諸般の共同鬪爭題目も

[illegible]

い〔ん〕ら行[illegible]に於て[illegible]に、無産階級[illegible]する[illegible]

[illegible]の方策として現存政黨的色彩の多い諸政の要求に[illegible]とこれを[illegible]して[illegible]が、[illegible]

行動に導くやうな場合も、將來屢々見られるであらう。

が、それに反して、將來に於て議會の討議に上程されてあらうところの、たとへ得られる限りの樣々の、議題が、屢々無産政黨の陣列上に頻繁なる離合集散の動きを惹き起すであらうといふこともまた、決して一片の憶斷として斥ける譯にはゆかないのである。殊に今日のやうに、支配階級が帝國主義政策に深入りしてゐる時代に於ては、無産政黨の陣列上の諸派が、それぞれ各自に持つてゐる全無産階級意識の厚薄によつて、或ひは外交上の、或ひは軍事上の、或ひは教育上の、或ひは社會上(等々)の諸問題に對して、それぞれに異つた態度を取ることを要求される機會が、屢々出て來るであらうことも、有理に想像し得られるのである。それに加へて、若し無産政黨の陣列上の各派の、全體としての支配階級、若しくは支配階級側の諸集團に對する表面上及び裏面上の諸關係が、さうした事態に絡らみつくときには、事端が益々複雜になつて行つて、殆んど端倪を許さないものに化成しないにも限らないのである。

最後に私は、無産政黨の陣列上の分裂を促進する可能性のある一切の諸原因は、ただ單に、目的意識的な無産大衆の——殊に強大なる指導力を有するその前衛諸分子の、——熾烈に燃えさかる全無産階級意識の下に於ける不斷の積極的努力の集積によつてのみ、一歩一歩と克服しつくされることが期待し得られものだ、といふことを、よし一言だけによつてにもせよ、極度に強調しておかれなければならぬ。といふのは、單一無産政黨への——從つて無産階級の究極目標への——第一の關門は、實にそこにおかれてあるものに外ならないからである。

勞働保險に一指を染めし日本

法學博士 森 莊三郎

緒言

大正十六年一月一日は我が國勞働史上に記憶せらるべき日の一である。久しく懸案となつて居た健康保險法は正に此の日を以て實施せられることゝなつた。而して本年五月二十五日からジュネーヴ市に開催せらるべき第十回國際勞働總會においては、偶然にも疾病保險（健康保險）が議題として討議せられるのである。かくて我が日本帝國は勞働保險にその一指を染め、而して國際勞働總會においても眞に發言權を有するに至つたのである。この記憶せらるべき歳首において、勞働保險の一端を述べ進んで健康保險制度の大意を記述し、工場及び鑛山における二百萬の強制被保險者のみならず、國民一般のためにその眞髓を紹介することは、意義深き擧と考へる。

勞働保險の肝要

勞働保險の名稱は我が國においては通俗に廣く用ひられて居るにも拘はらず、歐米諸國においては曾て用ひられし此の名稱が既にすたれて、今や一般に社會保險の名を以て呼ばれて居る。之れ勞働者階級の福利增進施設として採用されし此の制度が、次第にその効果を現はし、着々として其實績を擧ぐるに及んで、次第にその適用範圍をひろめ、今や單に勞働者（狹義の）のためにする社會政策的施設たるに止まらず、廣く一般に少額所得者の生計安定策として歡迎せらるゝに至つたからである。然しながら社會政策の對象たる少額所得者の内について、その中心となるものは勞働者であるが故に、社會保險といふも勞働保險といふも大體において同一に歸するのである。さて勞働者階級の生計を安定ならしめんと欲するに當りては、その生計の安定をおびやかす各種の危險に對して、適當の準備をしなければならぬ。疾病、老衰、死亡、失業、その他種々なる事故が勞働者の生計を不安ならしめる憂患であることは、釋迦が生

老病死を人生の四苦と數へた事實を待つまでもなく、あまねく世人の知り且つ體驗する事實である。此等の事故が生じた場合には、勞働者は先づその所得を喪失し又は減少せしめられて、一家の生計困難を來すことあるのみならず、醫藥の費用などに臨時の失費を必要とするに至るのである。

今若し勞働保險の制度を完備し、且つ之れに附屬した諸制度を整頓したならば、たゞに勞働者の生計を安定せしむるに留まらず、國民の産業上の發展のためにも顯著なる貢献をなすであらう。例へば疾病保險の制度あらば、勞働者はその醫療施設によつて疾病の治療を速ならしめ、肉體上及び精神上の苦痛を減少し、勞働能力を速に回復して産業上の能率を加へ、且つ賃銀に代る所の手當金の給付によつて、一家の生計を安樂ならしめ得るであらう。また失業保險の制度と共に職業紹介所が完備せられたならば、最大多數の者に職業が與へられて、國民の勞働力は最もよく利用せられ、國民經濟の上に寄與する所多きに加へて、勞働界の不安を最少限度に減少せしめ、しかも尙ほ餘儀なく生ずるに至りし失業者のためには、失業手當金の給付によつて、一家の經濟を維持せしめ得るであらう。老衰者及び廢疾者に對する諸般の施設、或は一家の柱石を失ひし遺族に對する施設、その他諸般の施設は悉く勞働保險の關係する所である。而して今之より述べんと欲する我が健康保險の制度は、實にその一端として、しかも其の最初の、且つ最も根幹たるものである。

健康保險制度の要旨

健康保險は何を目的とするものであるか。如何なる理由によつて我が國に之れが設けられたのであるか。此の問題に答へるがためには、嘗て農商務大臣として山本達雄氏の述べられた左の演說を引用することが、最も適切にして且つ簡明であると信ずる。之は大正十年に於て勞働保險調査會が設置せられたとき、その第一回會議の席上で述べられた所のものである。

『……歐洲戰爭以來、內外に於ける急激なる經濟事情の變化と、思想の推移とは、本邦産業界に於て勞資の關係につき幾多の紛糾せる問題を招來し、之が解決の方策の機宜を得ると否とは、本邦諸産業の盛衰に深甚なる影響を及ぼし、延ては國運の消長にかゝること重大なるものあり。殊に方今國際間の經濟競爭益々激甚ならんとする秋に際し、産業の要素たる天賦の資源と富力とに於て、之を歐米の諸國に比し遙に遜色ある本邦にありては、勞資問題の解決策につき一層愼重なる考慮を拂ひ、勞働者の福祉を增進して、その生活の向上を圖ると共に、産業の發達と國富の增

を認むるの必要なることは、[illegible]『惟ふに自己の勞働力を生活資料の唯一の資源とする賃金生活者に於て、日常の生活を不安ならしむる主要なる原因は、業務災害、疾病、廢疾、失業等に基因する勞働能力及び勞働機會の喪失に對する危惧に在るべく、是等の諸災厄に共ふる途を拓くは、勞働者保護施設中最も實施を急とするもの丶一たるべしと信ず。然るに本邦に於て斯る場合に際し、直接に勞働者又はその家族の救濟を目的とする法制の現に存するは、僅に工場及鑛業に關する法令に依り、業務上の負傷、疾病、死亡の場合に工場職工及び鑛夫に對する事業主の扶助義務を定めたると、傭人扶助令、及び相互救濟を目的とする組合に關する命令により、官業に從事する勞働者に救濟の途を與へたると、商法中に服役中の海員に對する救助の義務を船主に負はしめたるとを擧ぐるとを得るに止まり、尚ほ民間の任意的施設として、工場、鑛山、鐵道等に於て、若干の共濟組合と、事業主の情誼に基く救與制度あるを見るに過ぎずして、法令上の保護に漏れたる勞働者尚ほ多數を算し、且つ其保護に付ても未だ充分なりと稱するとを得ざるは、吾人の常に遺憾とする所なり。『茲に於て勞働保險の制度を樹立し、以て公平なる負擔の下に以上の[illegible]に對する[illegible]に付ては、當然の[illegible]にして[illegible]しめ、收入の途を失ひたる者に對しては、生活費を支給して本人並にその家族の生活に不安無からしめ、傷病、廢疾、死亡、その他の場合に付ても相當救助の途を講ずるは、勞働能率を增進し、産業の健全なる發達を期する上に於て、頗る喫緊事たるのみならず、勞働者に對する公正なる待遇を保障する方法として一日も忽にすべからざるものなりと信ず……。』

健康保險の發達

我が健康保險法第一條は規定して曰く、『健康保險に於ては保險者が被保險者の疾病、負傷、死亡又は分娩にかんし、療養の給付、又は傷病手當金、埋葬料、分娩費、若は出産手當金の支給をなすものとす』と。かくの如き目的を以て發生した勞働者の相互救濟の制度は、先づ共濟組合にその萌芽を發した。共濟組合の發達は國によりその狀況を異にするが、何れの國にあつても相當の成績を示したことは事實である。しかし國法の力を用ひてその發達に大なる刺戟を與へた最初のものは、一八八三年（明治十六年）のドイツ疾病保險法であつた。ドイツに於て

は帝國宰相ビスマルク公が大に社會政策に意を注ぎ、社會の平和を保ち、多數民衆の幸福を增進せんがためには、工場法及び勞働保險法の力に待たねばならぬことを看破して、他國に先だち疾病保險法を制定し、一般勞働者に之を强制したのであつた。その成績は甚だ顯著であつた爲め、他の諸國も相次で此の制度を採用するに至つた。一九二五年（大正十四年）ジュネーヴにおける國際勞働局の調査によれば、疾病保險即ち健康保險につき强制主義を採用して居る國は、歐洲において十八個國を數へ、歐洲以外においては日本と南米チリとを數へる。此の外イタリーは出産保險にかんしてのみ强制保險の方法を採用して居る。此等の内で若干の國は單に工業的企業の勞働者のみにその適用範圍を限定して居るが、多くの國は一歩進めて、之を商業的企業及び農業的企業の勞働者にも及ぼして居る。更に最も進歩せる諸國においては、總ての俸給生活者にまでその適用を擴めて居る例が少なくない。かくの如くにして今日では强制保險の制度が、健康保險（即ち疾病保險）として最も普通の形式になつて居るのである。

此の外に今日なほ任意保險の原則を採用し、任意的團結によりて行へる健康保險の施設に對して、國庫補助金を交附し、以てその發達を助長して居る國がある。此の政策は一八九一年（明治二十四年）にスウェーデンで始め行はれたものであり、之がために疾病保險を目的とする共濟組合の數も著しく增加し、組合員の數も增大し、また組合の支給する給付の内容も充實さるゝに至つたことは、其の制度の功績として數へなければならぬ。現にベルギー、デンマーク、フランスの如きも同樣の政策を採つて居る。此の方法は前記の如き實績を舉げたことは疑なき事實であるが、任意保險の常として種々の缺點を伴ひ、殊に一般勞働者に普及せしめることが困難であり、到底强制保險の方法に及ばないのである。從つて現今一般に健康保險と言へば、法律を以て之を强制するものと考へても、大なる過誤では無いのである。

我が國においては工場、鑛山、鐵道、各種の會社商店等に共濟組合が何時となく組織せられて居た。官業勞働者のためには一九〇七年（明治四十年）勅令第一二七號に基いて創設された國有鐵道現業員の共濟組合を始めとし、十數個の共濟組合が現に存在し、健康保險の事務をもその内に包含して居る。然しながら國法を以て勞働者に健康保險を强制するに至つたのは、一九二二年（大正十一年）の健康保險法に始まる。我が政府は大正八年の秋から農商務省内において此の立法準備に着手し、大正十年の末にはその成案を得たので、之を勞働保險調査會の議

に[illegible]して二つの修正を[illegible]、十一年[illegible]して直にその協賛を得、同年四月二十二日法律第七[illegible]號として公布せられたのであつた。然るに其の後政府に於ては内務省社會局を設けて勞働行政を之の管轄に移したこと、大正十二年には東京大震災のため本法の實施に打撃を與へたこと、經濟界の一般的不況の影響を受けたこと等の種々なる事情が重なつて、本法の實施は意外に延引するに至つたが、遂に大正十五年（一九二六年）三月法律第二四號を以てその施行期を定め、保險給付及び費用負擔に關する規定は十六年一月より之を實施し、その他の規定は十五年七月より實施せらるゝことゝ成つた。茲において十五年六月三十日勅令第二四三號を以て健康保險法施行令が公布せられ、同年七月一日内務省令第三六號を以て健康保險法施行規則が公布せられた。かくの如くにして十五年七月より十二月までがその實施準備にあてられ、今や大正十六年の曙光と共にその實際の運用が始められんとするのである。今左にその法令の概要を紹介する。但し本論文においては法律を法、施行令を令、施行規則を則、と略稱する。

被保險者

本法による被保險者には三種ある。第一種は工場法の適用を

[illegible]

[illegible]られたる者は臨時に使用せらるゝ者にして命令を以て指定するものである。令第九條に被保險者たらざる臨時使用者を左の通り規定して居る。

一、六十日以内の期間を定めて使用せらるゝ者、但し所定の時期を越えて引續き使用せらるゝに至りたるときは此の限に在らず。

二、使用期間の定なく、勞務供給契約に基きて試に使用せらるゝ者、但し三十日を越えて引續き使用せらるゝに至りたるときは此の限に在らず。

三、日日雇入れらるゝ者、但し三十日を越えて引續き使用せらるゝに至りたるときは此の限にあらず。

四、その外内務大臣の定むる者。

次に強制被保險者より除外せらるゝ者の第二は一年の報酬千二百圓を越ゆる職員である。筋肉勞働者は賃銀の大小を問はず強制的に被保險者となるのであるが、精神的勞働者即ち職員には此の制限がある。何を以て其の報酬額を決定するかは、法第二條に報酬とは事業に使用せらるゝ者が勞務の對價として事[illegible]

主より受くる賃金、給料又は俸給、及び之に準ずべきものを謂ふ、と規定して居る。故に日給、月給の類が報酬であることは勿論であるが、臨時手當、年末賞與、社宅料又は社宅の給與、寄宿舍の寄宿などに至つては、どの點までを報酬の計算に入れるか、殊に實物給與の價格は何によつて計算するかゞ甚だ不明瞭である。故に令第一條はその範圍を決定するために、賃金給料又は俸給に準ずべきものゝ範圍は、常時又は定期に受くる給與、其他の利益とす。但し左に掲ぐるものを除く、と規定して居る。

一　三月を越ゆる期間毎に支給する賞與又は手當。
二　通勤手當。
三　住居に關する利益又は住宅料にして、賃金給料又は俸給の額の決定に影響なきもの。
四　其他内務大臣の指定するもの。

また實物給與の價格の算定にかんしては、第二條に金錢以外の給與其の他の利益の價格は保險官署の定むる標準價格により之を算定す、前項の標準價格はその地方の時價により之を定む。健康保險組合は第一項の規定に拘らず、規約をもつて別段の定をなすことを得、と規定して居る。此等の規定において給與とは金錢又は物品の支給であつて、その所有權の移轉せらるゝものをいひ、利益とは其の物に關し單に使用權を得、又利益を享有し得る無形のものをいふ例へば社宅の支給の如きは之に屬する。而して被保險者の受くる報酬額の決定は、右の如き規定を標準とし、現實には健康保險組合の理事又は健康保險署長が之を決定する。職員に就ては通例毎年一回又は二回支給せらるゝ賞與があり、實際には俸給の一部であるにも拘らず、令第一條は之を除外したが故に年收千二百圓以下のものとして本法中に包含せしめらるゝ者の數は、之が爲に増加したのである。

第二種の被保險者は強制被保險者以外の者で、法第十四條列記せらるゝ事業に使用せらるゝ者、及び之に附屬する事業に使用せらるゝ者である。之を任意包括被保險者といふ。此の場合にも臨時使用人及び高級職員は前の場合と同じく除外せられる。法の列記する事業は

一　鑛物の採掘又は採取の事業。
二　物の製造、加工、選別、包裝、修理又は解體の事業。
三　電氣又は動力の發生、變更又は傳導の事業。
四　土木事業又は工作物の建設、保存、修理若は破壊の工事にして主務大臣の指定するもの。
五　地方鐵道法又は軌道法の適用を受くる事業。
六　前號に掲ぐるものを除くの外、陸上に於て爲す貨物又

は貨客の運送の事業にして主務大臣の指定するもの。

七　貨物積卸の事業。

八　前各號に掲ぐるものゝ外、勅令を以て指定する事業。

右の内一乃至七の事業は、法第十三條の事業と共に、工業的企業と呼ばれるものであるから、本法は即ち工業勞働者のためにする健康保險と考へらるべきものである。但し最後の第八號により、勅令を以て本法を商業的企業又は農業的企業などに擴張し得る餘地が存在する。此の任意包括被保險者については、事業主が被保險者たるべき者の二分の一以上の同意を得、且つ主務大臣の認可を受けたるときは、その使用者全部を包括して被保險者となし得るのである。

被保險者の第三種は任意繼續被保險者であつて、從來被保險者たりし者がその資格を失ひたる後、直に申請をなすときは、繼續して被保險者となり得るのである。（法二〇條）此の規定は主として轉職の際の便宜をはかることが目的であるから、濫用を防ぐために種々の制限がある。即ち法第十八條の規定により被保險者の資格を喪失したる者であること、資格喪失の日前一年内に於て百八十日以上被保險者たりし者、又は資格喪失の際引續き六十日以上被保險者たりし者であること、資格喪失の日より十日以内に繼續を申告すること、資格喪失後に引續き保險給付を受くる者にありては其の給付を受けざるに至りたる日より十日以内に申請すること、繼續期間は百八十日以内なること等の制限が存在する。（法二一條、令一〇條）。

被保險者に關しては、政府の事業に使用せらるゝ者のため例外規定が設けられてゐる（法一二條）。政府の事業に使用せらるゝ官吏又は待遇官吏に付ては當分の内、内務大臣は之を健康保險の被保險者と爲さゞることを得（令附則第三項）政府事業に使用せらるゝ被保險者が健康保險法の規定により保險給付を受くべき場合に於て、内務大臣の指定したる官業勞働者共濟組合より其の保險給付に相當する給付を受くるときは、その重複する部分に付ては保險給付を爲さず（令七條）此の共濟組合とは例へば國有鐵道共濟組合、專賣局現業員共濟組合などを云ふのであるが、其の組合は左の條件を具へて居るものに限るのである。

一　健康保險法の規定に依る保險給付と同種の給付を爲すこと。

二　給付に要する費用につき、政府が健康保險法の規定に依る國庫及事業主の負擔と同一の割合を下らざる負擔を爲すこと。

保險者

保險者即ち保險機關は三種類である。第一は政府自ら健康保險署を設け、健康保險組合の組合員にあらざる被保險者の保險事務を司るのである(法二四條)。政府はすでに內地の三府四十三縣に各一個の保險署を設け、北海道には特に四個を設けて、その事務を取扱つて居るのである。殖民地に對しては本法は實施されない。第二種の保險者は健康保險組合であつて、各その組合員たる被保險者の保險を掌る(法二五條)。この健康保險組合については後に詳述するが、多くは從來各地の工場、鑛山等にある共濟組合の組織が改造されて、設立せらるゝことに成るであらう。第三種の保險者は官業共濟組合である(令七條)。此種の組合は健康保險のみならず、他の種々なる社會保險の方面にもその活動を及ぼして居るのであるが、前記の如き條件を具へて居るならば、特に之を本法上の一機關として公認せられるのである。

政府の保險署及び官業共濟組合については說明の必要を見ないから、以下專ら民間の健康保險組合について說明する。法律は被保險者三百人以上を常時使用する事業主が、その經營する一又は二以上の事業につき之を設け得ることゝし、尙ほ二以上の事業主が共同して一組合を設立することをも認めて居る(法二八條)。また一事業に於て作業の場所が二以上あるときは、作業の場所毎に獨立の組合を作ることも出來る(法三三條)。强制被保險者五百人以上を常時使用する事業主に對しては、主務大臣は組合の設立を命ずることを得(法三一條)。

組合を設立せんとする事業主は、組合員たる資格を有する被保險者の過半數の同意を得て規約を作り、主務大臣の認可を受けねばならぬ(法二九條)。規約の變更も認可を要する(法三六條)。

組合は常に主務大臣(社會局長官)の監督を受ける。主務大臣は組合に對して、事業に關する報告を爲さしめ、事業及び財產の狀況を檢査し、規約の變更を命じ、その他監督上必要なる處分を爲すことを得(法三七條)。組合の役員に欠缺若は故障あるとき、又は組合の役員が其の執行すべき職務を執行せざるときは、主務大臣は官吏又はその他の者を指定してその職務を代執行せしむることを得(法三八條)。主務大臣は組合の決議若は役員の行爲が、法令、主務大臣の處分、若は規約に違反し、組合員の利益を害し若は害する虞ありと認むるとき、又は組合の事業若は財產の狀況により其の事業の繼續を困難なりと認むるときは、決議を取消し、役員を解職し、又は組合の解散を命ずることを得(法三九條)。

組合には議決機關として組合會を設く(令一九條以下)。その

[illegible]の二分は二十人以下の[illegible]の代理人及び其の事業に使用せらるゝ者の中につき事業主たる[illegible]を選定し、他の半數は被保險者たる組合員に於て之を互選する。組合會は豫算、決算、財産の管理、保險料率、その他重要なる事項につき議決する。組合會の議長は理事長を以て之に充てる。內務大臣は組合會の解散を命ずを得る（令七一條）。組合には執行機關として理事を置く（令三六條以下）。理事の定數は四人以上の偶數とし、その半數は事業主の選定したる議員に於て之を互選し、他の半數は被保險者たる組合員の互選したる議員に於て之を互選する。理事の內一人を理事長とし、事業主の選定したる議員たる理事中につき、理事が之を選擧する。理事長は組合を代表する。組合の會計年度は政府の會計年度による（令四四條以下）。組合は每會計年度收入支出の豫算を調製し、社會局長官の認可を受くるを要す。組合は剩餘金中より準備金を積立つるを要す。組合は一時借入金をなし又は組合債を起すことを得。組合は分割、合併又は解散をなすことを得（令五六條以下）。解散によりて消滅したる組合の權利義務は政府に於て之を承繼する（法四〇條）。

本法において保險者が被保險者に與へる所のものは、數種の保險給付であれけれども、保險者は更に積極的方面にも力を注[illegible]

[illegible]に關する[illegible]（[illegible]）[illegible]に關する[illegible]（[illegible]）[illegible]關する[illegible]（四）保存に關する[illegible]、ただし[illegible]し得ることゝなめられた（四九條）。

保險給付

健康保險制度の目的は本法第一條に宣言せらるゝが如く、被保險者の疾病、負傷、死亡又は分娩の場合に際して、保險者が療養給付、傷病手當金、埋葬料、分娩費又は出産手當金を支給するのである。この場合に業務上の事故と業務外の事故とにつき、成るべく差別を設けず、同等の取扱をなさんと欲することが、我が健康保險法の世界に誇るべき一特色である。初め立案者の考では、抑々この制度は勞働者の經濟上の困難に備へんと欲するものであるが、經濟上の必要といふ點から見れば、事故の原因は業務上であると業務外であるとに依つて差別のあるべき理由がない。たゞ問題となるのは責任の歸屬者、換言すれば費用負擔の割合である。之は費用負擔の割合を決定するに當つて考慮すれば宜いのである（法七二條乃至七四條）と云ふのであつた。此の理由によつて業務上及び業務外の事故に對する取扱を

全く同一にせんと欲する意見に對して、一方から反對論があつた。それは、業務上の事故に對する扶助は既に數年前から工場法などによつて勞働者に與へられて居る既得權であるのに、之を業務外の事故と同一視することに依つて勞働者に不利益を與へる結果になつてはならぬ、と云ふのであつた。玆において此の兩說を調和するために、原則としては兩種の事故を同一に取扱ひ、例外として若干の場合に業務上の事故に差別的待遇を認めることに成つたのである（法四五條及び四七條、令八八條）。

保險給付の第一種は被保險者の疾病又は負傷に際して、即日より**療養の給付**をなすことである（法四三條）。之は醫師の診察、手術、藥劑、醫療用具などすべて實物で給與するのが原則である。尙ほ療養のため必要ありと認むるときは、保險者は被保險者を病院に收容することを得る。療養給付の範圍は（一）診察、（二）藥劑又は治療材料の支給、（三）處置、手術其の他の治療、（四）看護、（五）被保險者の移送と定められて居る（令七四條乃至七六條）。その內第三號の給付は緊急の場合、其他保險者が必要ありと認むる場合を除くの外、之に要する費用は一回二十圓を以て限度とする。また第四號及び第五號の給付は保險者が必要ありと認むる場合に於て爲すものに限る。第一號乃至第三號の給付については被保險者は保險者の指定したる醫師又は齒科醫師中、自己の選定したる者につき之を受けることを得る。但し病院に收容せられたるときは此の限にあらず。被保險者が醫師又は齒科醫師を選定したるときは、保險者の承認ありたる場合を除くの外、同一の疾病又は負傷の療養に付ては之を變更することを得ない。醫師又は齒科醫師が處方箋を交付したるときは、被保險者は保險者の指定したる藥劑師中、自己の選擇したる者につき藥劑を受くることを得る。玆に云ふ保險醫の選擇の自由は總ての利害關係者にとつて重要なることである。此點にかんして政府は日本醫師會、齒科醫師會及び藥劑師會と協定し、一定の價格を以て診察、手術、投藥などを請負はしめることゝなし、且つ此等の會員中の有志者を保險醫に囑託し、原則として各府縣を地域として被保險者が任意にその醫師を選擇し得ることゝ定められた。健康保險組合の場合には各地の實情に應じ、適當の方法を講ぜられる筈である。

療養給付は右の如く實物給與を原則とするが、左の場合には其の代りに療養費を支給することが出來る。その金額は療養給付をなす場合に要する額を標準として保險者が之を定める（法四四條、令七七條及び七八條）。（一）保險者に於て療養給付をなすことを困難と認めたるとき、（二）被保險者が保險者の承認を受けて指定以外の保險醫の診療を受けたるとき、（三）被保險者が緊

この場合に於ては以外の[illegible]の
組合の規約を以て定めたるとき。

療養給付は業務上の傷病たると業務外の傷病たるとを問はず同一の傷病及び之に因りて發したる疾病につき、事故の生じたる日より起算し百八十日を超えて之を爲さず、その後においては業務上の傷病に對しては勞働者補償の原則により、雇主の負擔を以て別に之を給付せられるが、業務外の事故に對してはもはや本法により給付は行はれなくなる。また百八十日未滿にて治癒したる傷病が二同以上重なりたるとき、業務外の傷病ならば一暦年内に百八十日を超えて療養給付が行はれない。此の日數の計算については、業務上の傷病は全く之を度外視するのである。以上二方面の制限に拘はらず、傷病手當金の支給を受け得る期間は尚ほ療養給付を受ける（法四七條、則六九條）此の百八十日といふ制限は、健康保險に關して多くの國において採用して居る所である。業務上の傷病に對しては前記の如く勞働者補償の原則により、工場法又は鑛業法の扶助規定により、事業主の負擔を以て給付を與へられるから、勞働者のため支障を生ずることは無いにもせよ、業務外の傷病に對しては百八十日以後に全く何等の給付の無くなることは社會政策上適當の處置ではない。之は速に廢疾保險制度を設けて、百八十日を超えて

[illegible]
[illegible]

保險給付の[illegible]傷病手當金[illegible]法四七條乃至四九條
被保險者が療養のため勞務に服することを得ざるときは、其の期間傷病手當金として一日につき報酬日額の六割に相當する金額を支給す。但し業務上の事故による休業に對しては四日より、業務外の場合には第四日目より之を支給す。病院に收容したるときは、(甲) 主として被保險者により生計を維持する者なき場合には二割に減額し、(乙) 斯かる者二人以內なる場合には四割に減額する（令七九條）。手當金の支給日數に關しては、前述の療養給付におけると同一の制限が適用せられる。

報酬の範圍については前に述べた。法律は手當金の支給を右の如く報酬日額に比例するものとして居る。報酬日額の算定方法は、年俸の三百六十分の一、月給の三十分の一、週給の七分の一、日給又は稼高による場合は最近三個月間の所得の九十分の一、と云ふが如く種々なる方法を用ひて一日分の報酬が算出される（令五條）。而して保險給付又は保險料の額を報酬額に基いて定める場合には、實際報酬の額によらずして、標準報酬により之を算定するのである（法三條）。故に法律（第四五條）には報酬日額といひ、施行令（第七九條）には標準報酬日額といふけれ

ども、要するに同一のものであつて、常に標準報酬日額に着眼して居るのである。我が國では之を左の十六級に分けた（令三條）

標準報酬の等級	標準報酬日額	實際報酬日額
第一級	三十錢	三十五錢未滿
第二級	四十錢	三十五錢以上四十五錢未滿
第三級	五十錢	四十五錢以上五十五錢未滿
第四級	六十錢	五十五錢以上六十五錢未滿
第五級	七十錢	六十五錢以上七十五錢未滿
第六級	八十錢	七十五錢以上八十五錢未滿
第七級	一圓	八十五錢以上一圓十五錢未滿
第八級	一圓三十錢	一圓十五錢以上一圓四十五錢未滿
第九級	一圓六十錢	一圓四十五錢以上一圓七十五錢未滿
第十級	一圓九十錢	一圓七十五錢以上二圓五錢未滿
第十一級	二圓二十錢	二圓五錢以上二圓三十五錢未滿
第十二級	二圓五十錢	二圓三十五錢以上二圓六十五錢未滿
第十三級	二圓八十錢	二圓六十五錢以上二圓九十五錢未滿
第十四級	三圓十錢	二圓九十五錢以上三圓二十五錢未滿
第十五級	三圓五十錢	三圓二十五錢以上三圓七十五錢未滿
第十六級	四圓	三圓七十五錢以上

かくの如く標準報酬日額を基礎として傷病手當金の額を計算することは、手續の簡便を欲するがためである。故に例へば實際報酬日額が九十錢の者も一圓十錢の者も、共に一圓として取扱はれ、之に對して六割即ち六十錢の傷病手當金が給付されるのである。健康保險においては、此の場合のみならず、保險料の決定、埋葬料、出産手當金などに就ても、常に標準報酬日額を基準として計算するのである。

保險給付の第三種は埋葬料であつて、被保險者死亡したるときは、被保險者により生計を維持したる者にして埋葬を行ふものに對し、埋葬料として被保險者の標準報酬日額の二十日分に相當する金額を支給す。但し最少限を二十圓とす。右の如き者なきときは、埋葬を行ひたる者に對し、右の金額の範圍内にて其の埋葬に要せし費用に相當する金額を支給す（法四九條）。

保險給付の第四種及び第五種として數ふべきものは、分娩に關する給付であつて、甲を分娩費とし、乙を出産手當金とする。被保險者分娩したるときは分娩費として金二十圓を支給し、なほ産前産後の休養中は出産手當金として傷病手當金と同額を支給せらる。之は被保險者が分娩の日の前二十八日、分娩の日以後四十二日以内に於て、勞務に服せざりし期間之を支給せらるる。もし分娩の日が其の豫定日より後れたるときは、保險者は分娩の日前の期間を七日以内延長することを得る。出産手當金と傷病手當金とは之を併給せず。保險者は被保險者を産院に收容し、又は助産の手當をなすことを得る。此の場合には分娩費

を十日に超過し、[illegible]。分娩に關する保險給付は分娩前一年内に通算二百八十日以上被保險者たりし者に非ざれば之を認めず、但し九十日以上被保險者たりし者に對しては分娩費を支給し又は助産の手當をなす（法五〇條乃至五四條、令八〇條乃至八二條）。

以上が保險給付に關する原則である。之に對して法律は若干の場合に給付の延長を認めて居る。第一には被保險者たる資格を喪失したる際、現に保險給付を受けつゝある者は、被保險者として給付を受くることを得べかりし期間だけ引續き之を支給せられる。第二は被保險者たる資格を喪失したる後九十日以内に死亡せしとき、その他若干の場合には、埋葬料を支給せられる。第三は被保險者たる資格を喪失したる後百八十日以内に分娩したるときは、分娩に關する給付を支給せられる（法五五條乃至五七條、令八四條）。

之と反對に、一定の場合には保險給付の支給が制限せられる。その内には理論上當然の場合と、制裁として不利益を課せられる場合とがある。第一は傷病又は分娩のとき繼續して報酬を受くる者には手當金を支給せず。第二は故意の犯罪行爲により事故を生ぜしめ、又は故意に事故を生ぜしめたるときは、保險給付を與へず。第三は鬪爭、泥醉、又は故意に危害豫防に關[illegible]るときは、[illegible]他の法令の規定により公費を以て入院せしめられたる者には、其療養給付をなさず。第五に正當の理由なくして療養に關する指揮に從はざる者には傷病手當金の一部を支給せざることあり。第六は詐欺其他不正の行爲により保險給付を受けたる者、又は受けんとしたる者に對しては、百八十日以内の期間を限り、手當金を支給せざることあり。第七に保險給付を受くる者が正當の理由なくして診斷を拒むときは、保險給付を爲さゞることあり（法五八條乃至六五條、令八五條乃至八八條）。

傷病手當金及び出産手當金は少なくとも毎月二回、一定の期日に之を支給す。政府の管掌する保險にありては毎月十日及び二十五日とす。毎月一回報酬の支拂を受くる被保險者には、毎月一回その報酬支拂日に之を支給す。政府の保險にありては之を毎月二十五日とす。療養費、埋葬料及び分娩費は其の都度之を支給す。（令八九條、則六八條）。

費用の負擔

保險に要する費用は政府と事業主と被保險者との三者で負擔する。國庫は各健康保險組合の保險給付に要する費用の約十

の一を組合に交附する。政府の保險にかんしても同様の割合で負擔するであらう。其金額は被保險者一人につき一年平均二圓ほどの割合にあたる。政府の負擔額は組合の事務費に必要であらうと思はるゝ所のものを標準として立法せられたのである。被保險者及事業主の負擔するものを玆に保險料と名づける。保險料は原則として兩者が各二分の一を負擔する。但し任意繼續被保險者はその全部を負擔しなければならぬ。保險料額は一日につき各被保險者の標準報酬日額に保險料率を乘じたるものとす。保險料の率は保險者が之を定める。その率は各被保險者につき同一なることを要す。但し性質上事故多き業務に使用せらるゝ被保險者に付ては、その業務の種類に從ひ異なる保險料率を定めることが出來る（法七〇條乃至七二條、令九四條乃至九五條）。

右の如く保險料は原則として勞資折半、即ち被保險者と事業主とが各二分の一を負擔する主義を採用したことは、歐州における現代的思潮及び現代的立法の趨勢に從つたことの外に、なほ勞資協調の精神の發露であり、健康保險組合にありては組合會議員及び組合理事を勞資各同數とすることに依つて、決議が一方に偏することを避ける上などにも實益を見るのである。此等の大局達觀的議論の外に、此の主義は統計の上からも大體において是認せられ得るものである。今若し一組合に於て、業務上の事故が四分の一、業務外の事故が四分の三の割合で起るものと假定する。而して業務上の事故に對しては勞働者補償の原則に從つて、その全部の費用を事業主の負擔とし、業務外の事故に對してはその三分の二を勞働者の負擔とし、その三分の一を事業主の補助と假定する。然るときは事業主及び勞働者の負擔は正に二分の一づゝになる。尙ほ若し業務上及び業務外の事故の割合が多少異つて、五分の一と五分の四の割合で起るとしても、或は六分の一と六分の五との割合で起るとしても、その計算の結果は勞資折半の原則が打破られることは無い。

右の如き勞資折半の原則は普通の場合について採用し得べきことである。若し業務上の事故が餘りに多く、之れがため保險費用を多く要する場合、或は之に準ずべき場合において、尙ほ此の原則を固守するときは、事業主が當然に負擔すべき勞働者補償費用の一部を、勞働者にも分擔せしめるが如き結果となる虞がある。それ故に本法は二の場合に、事業主の負擔を重くすることを定めて居る。その一は、業務の性質上事故多き事業に使用せらるゝ被保險者に關する保險料に付ては、內務大臣は事業主の負擔すべき割合を、保險料額の三分の二まで增加するを得る。その二は、被保險者の負擔すべき保險料額は一日につき標準報酬日額の百分の三を超ゆるを得ず、此の制限を超えて保

[illegible]を負擔する必要あることは、其の[illegible]事業主[illegible]とする法一[illegible]円[illegible]合し[illegible]條[illegible]

[illegible]勞働者の報酬を目例とする社會政策的施設においては、或る場合には雇主の負擔を重くし、勞働者の負擔を輕減すること[illegible]、敢て妨げざるのみならず、時としては寧ろ好ましいことで[illegible]る。この意味を以て本法は二の場合を規定して居る。第一は保[illegible]りに少額の報酬を受くる勞働者に對する場合であつて、標準報酬日額三十錢、四十錢又は五十錢（第一級乃至第三級）の者に關する保險料に付ては、事業主の負擔額は標準報酬日額六十錢（第四級）の者につき事業主の負擔すべき額と同額とす。從つて被保險者の負擔額は之に應じて輕減せられ、第一級の被保險者の如きは全く保險料を免除せらるる結果になる。第二に健康保險組合はその規約を以て、事業主の負擔すべき保險料額の負擔の割合を増加することを得るのである。從つて現存の共濟組合中に若干の例を見るが如く、全部を事業主の負擔とし、或は事業主より寄附の基本金の利息のみを以て、組合の費用を支辨することとすら可能である（法七三條及び七五條、令九七條）。

事業主及び被保險者が保險料を同じ割合で負擔する理由は、右の説明で十分明白である筈である。然るに世上には之に對して批難を加へる者がある。その言によれば、業務上の事故に對し[illegible]本法では[illegible]負擔し[illegible]る給付と同じく健康保險の費用[illegible]は、勞働者にもその費用の一部を負擔せしめること[illegible]だ不當であると言ふのである。然しながら此の意見の誤は前述の説明によつて明白であらう。本法は業務上の事故に對する費用を悉く事業主の負擔とする精神であつて、その前提の下に保險料が計算せられ、その計算の結果が勞資折半となつて現はれたのである。また或る一部の論者は更に進んで、保險料は悉く雇主の負擔とせよと言ふ。然しながら保險制度は救濟制度と異なり、被保險者が保險費用の全部又は少なくとも一部を負擔し、その自助獨立の精神に重きを置き、自己の負擔に對する報償として保險給付の請求權を得るものである。故に若し雇主がその創意に基き、全部の負擔を申出でる場合は例外であるが、被保險者側より之を要求するが如きことは、本法の精神に照して適當な處置ではないのである。

保險料の納付については、事業主は自己の保險料と其の使用する被保險者の保險料とを合せて納付する義務を負ひ、而して被保險者の負擔は其の支拂ふべき報酬の内より控除する。原則

として保險料は本月分を翌月末日までに納付するのであるから、事業主は被保險者の負擔すべき前月分の保險料を本月分の報酬中から控除することを原則とする（法七七條以下、令九八條以下）。各被保險者の負擔すべき保險料額は、その報酬の多少幷に危險率の大小により差異があるのであるけれども、今假りに全國の被保險者を悉く平均して見れば、保險費用は一人一年につき凡そ二十圓內外を要するものと考へられる。而して其の內凡そ二圓を政府が負擔し、殘額の二分の一即ち凡そ九圓を被保險者が負擔する計算になるのである。故に被保險者の平均一日の負擔は『敷島三本』の價にも足りない。

爭議の決定

健康保險に關する爭議を、直に司法裁判所又は行政裁判所へ提起すべきものとするときは、手續が面倒になり、費用を要し、時間を要し、且つ實際事情に幾分か疎い決定が與へられるかも知れない虞がある。かくの如きは本法の如き社會的立法において適當なる方法と言はれない。故に本法は爭議の決定は先づ審査會によらしめることゝなし、最後の手段として司法裁判又は行政裁判の手續に及ぶことゝしたのである。健康保險審査會は內務大臣の監督に屬し、その委員は、（一）官吏公吏又は學識經驗ある者、（二）被保險者を使用する事業主、（三）被保險者につき、各同數を任命せられる（令一〇二條以下）。

保險給付に關する決定に不服ある者は第一次審査會に審査を請求し、その決定に不服ある者は第二次審査會に審査を請求し、尙ほその決定に不服あるとき始めて通常裁判所に訴を提起することを得る（法八〇條）。

保險料、其の他本法の規定による徵收金の賦課又は徵收の處分に不服ある者は、その處分をなしたる健康保險署を監督する保險署（即ち社會局長官）、又はその處分をなしたる健康保險組合を監督する保險官署（即ち社會局長官）に先づ訴願する。此の場合に社會局長官は第二審査會の審査を經て、裁決を與へなければならぬ。此裁決に不服ある者は內務大臣に訴願するか、或は行政裁判所に出訴することが出來る。大臣に訴願された場合には、大臣は第三次審査會の審査を經て裁決を與へなければならぬ（法八一條及び八二條）。

保險料、其の他本法の規定に依る徵收金を滯納する者ある場合に於て、保險者の請求あるときは、市町村は市町村稅の例に依り之を處分す。この處分に不服ある者は地方長官に訴願し、その裁決に不服ある者は行政裁判所に出訴することを得。（法一一一條及八四條）。

健康保險法の將來

我が健康保險法の大要は以上述べた通りである。此の制度は我が國において初めて實行されるものであつて、その適用範圍の狭いのは事情止むを得ないことではあるが、成るべく近き將來において法律を改正し、その適用範圍を擴張せられんことを希望する。電車、地方鐵道、電氣事業の如き危險なる業務に從事するものが任意被保險者たるに留まる如きは、立法當時には止を得ない事情があつたにもせよ、速に之を強制被保險者とすることが望ましい。また船員、商業勞働者、農林業勞働者、家庭的勞働者の如きも、速に本法の適用範圍内に包含せしめることを適當と考へる。既に述べたるが如く、勞働者一日一人平均の負擔が『敷島三本の價』に過ぎずして、しかも種々なる事故の發生に際し其生計を安全ならしめ、十分なる醫療の得らるることは本制度の如き方法により初めて期待し得らるゝ所である。

本法による各種の給付は、産前一週間以内の出産手當金を除き、他は何れも法令により嚴く一定せらるゝ所であつて、毫も擴張の餘地のないものである。歐洲諸國の法制によれば、法令はその最小限及び最大限を定めて、伸縮の餘地を認めて居るのが寧ろ普通である。例へば傷病に對する給付期間を百八十日と定めると同時に、組合の規約を以て何日までは之を延長し得ることにして居ることが少くない。[illegible]ば之を得ることとなる。[illegible]て、その者は被保險者でないときこの家族に對しても給付を及ぼし得ることを定めて居る國が多いのである。我が法令が之を定めなかつたことは、初めて此の制度を設立する際の試驗的方法としては止を得ない事であつたにもせよ、甚だ遺憾なことであつて、本制度の自然的發達を阻害するものと言はねばならぬ。現に若干の共濟組合では本法に規定する以上又は以外の給付をして居た實例がある。此等の共濟組合にありては、本法の要求に適合するために、その組織を改造して、一方には健康保險組合を設け、同時に本法以上又は本法以外の給付をなすことを目的とする共濟組合を、その傍に併置しなければならぬことに成つた。私の見る所によれば、健康保險組合はその規約により、主務大臣の認可を得て、本法の目的に違背せず且つ本法の目的を更に進展せしめ得る範圍内において、多少の自由裁量の餘地を許容されるとが、本法の精神を活かす所以であらう。

本法は健康保險即ち疾病保險の制度を定めたものであるから、傷病に對する給付を比較的短期に限定したことは當然である。その結果として、業務外の傷病に對しては、ただその全治せざる間に給付を打切られる場合が生じ得る。殊に一年内に百八十日を限度とする結果、年末にはもはや給付を得られな

て、新年になれば更に之を得らるる場合すら生じ得る。斯くの如きは廢疾保險制度——比較的長期の傷病者、及び傷病治癒後における勞働能力の喪失者又は減少者に對する保險制度——の備らざる場合に、當然生ずべき缺陷である。故に健康保險法についで、その延長又は補充として速に廢疾保險法の制定せられんことを希望する。或は英國の例に見るが如く、傷病は長期短期を區別せず、悉く健康保險の取扱ふべきものとすることも、研究に値する一方法であらう。

健康保險制度の目的を最も狹く考へるならば、單に事故發生後に一定の給付をするに過ぎないこととなる。之れだけでも重大なる結果をもたらすものであつて、傷病に對する療養を迅速且つ完全にして心身の苦痛を減少せしめ、その勞働能力の恢復を速ならしめ、一家の生計の資源を確實にするものである。けれども本法は更に一歩を進めて、保險者は被保險者の健康保全に必要なる施設をなし得べきことゝ定め（法二三條）。保健に關する宣傳、傷病の豫防に關する施設、健康診斷に關する施設、保養に關する施設をなし得べきものと規定して居る（則九條）。之れ保險制度より一歩を進めて、事故の豫防的方面にまで踏み出したものである。抑々事故の發生を待ち、その損害の結果を救濟する保險制度は、幾分か消極的性質を有するを免れない。それ故に更に一歩を積極的方面に進めて、事故の豫防につとめることは肝要なことゝ言はねばならぬ。但し此方面の活動を保度に包含せしめる場合には、費用の點よりして自ら制限を受けることを免れない。保險費用の四五%は勞働者自身が負擔して居る。故に本法においても健康保持といふ點に留め、進んで健康增進に必要なる施設とまでは言つて居ないのである。然しながら人類生活の幸福から見て、健康增進の必要なことは言を待たない。故に雇主は自己の費用を以て、また國家は公費を以て、此等の積極的施設に力を注がねばならぬ。かくの如くにして社會一般の衞生設備が次第に完全になることを希望する。而して既に敎育が國家的制度に進んだと同じく、醫藥もまた悉く國家的制度に移る日の、速に至らんことを希望する。既に今日の國家は傳染病、癩病、肺結核等の療養、並に一般に社會衞生の施設に關しては、之を重要なる行政事務として取扱つて居る。學校兒童に對する衞生及び療養、工場鑛山の衞生的監督なども、今や國家事務に移つた。然らば國民一般に對する保險及び醫藥の施設が、私的營利事業の手を離れて、公益的制度として組織せられ、『國民醫藥』が國民敎育と同一に取扱はれるに至ることが、自然の發達の徑路であらう。今や我が國が勞働保險にその第一指を染めんとする年始にあたり、將來におけるその發達の方向を豫測し、以て本論の筆を措く。

（終）

世界の失業苦

石濱知行

（一）

愛蘭の文人イエーツは、土の作家ウヰリアム・カールトンの名作『面影と物語』を論ずるの一文に於いて、『國民の歴史は、議會や戰場にあるのではなくして、民衆が市場の立つ日や、祭禮の日に何を語り合ひ、彼等が如何なる方法を以つて耕作を營み、如何に喧嘩し、どんな風に巡禮に出掛けるかにあるのだ。』と藝術家らしき表現をもつて、社會の歴史の重點が卑俗の所にあるべきを教へてゐる。我々は今日、日々の新聞を通じて、松島遊廓問題その他の諸事件に對して、世人が轟々の論を鬪はして之を以つて最も重大なる事柄と看做してゐるのを知る事が出來る。併し我々は、これらの事件の如く表面的には紙面を賑かすものではなくして最も卑俗なものであるが、しかもこれと同一又はこれよりより以上の重大なる意味を有する事が、我々の面前に、日々市井の談らざる事實として、全世界を通じて一様に現存してゐるのを看逃しては居ないだらうか。又たとへ、その事實を認識するものと雖も、その事實の發生原因、その歴史上に於ける重要さに對して注意深き考察を怠つてゐると斷じ得ないと言ひ得るであらうか。

『殊に土曜日の晩に、澤山の勞働者が街路に出て來る頃には、行商をして生きてゐる多數の人々が見られる。靴紐、ズボン吊、眞田紐、櫛、菓子——要するにありとあらゆる可能だけの品物が、無數の男女子供に依つて鬻がれてゐる。又其の他の日でも、始終、櫛や菓子や、ジンジャービーヤ等を賣る行商人が大道に立つてゐたり、徘徊して歩いてゐるのが見られる。マッチ並びにその同種の物、封臘、點火用の專賣特許のある合金、それ等は何れもこれ等の人々の商品となるのである。その他の者、所謂仲仕は市中を徘徊して、行當り次第の小仕事を見附けてゐる。それ等の中で、幸にも一日の仕事に有りつくものも可成あるが、皆が皆多數さう幸福といふ譯に

ね行かない。

『凡ての船渠の入口には、毎朝寒い冬の日にも已に黎明から何か一日の仕事にありつきたいと云ふ希望を懷いてゐる數百の貧民が、戸口の開くのを待つてゐる。そこで一番年の若い者、最も強い者、最も好く顏馴染になつてゐる者だけが雇つて貰ふ事になると、それでも尚ほ、取り殘された數百の亡者は欺されたる期待のために、元氣を落してその哀れなる住家に引き上げて行く。

『然らば彼等にして若し他に何等の仕事をも見出し得ず、又社會に對して反抗する事も欲しないならば、彼等にとつては門に乞ふより外に何れの方法が殘つてゐるであらう、

『彼等は門に乞ひ、家に盜み、街路の掃除をなし、馬糞を拾ひ集め、手車や驢馬で荷物を持ち歩き行商して廻り、或はその場、その場のつまらぬ仕事を漁りまはつて僅かに窮迫の生を延長してゐるに過ぎないのである。

『市中を貫いてゐる馬車の澤山通行する大通りには、小さな手車を押し歩いて、生命の危險さへも冒して、疾走する馬車や、乘合馬車の間をくぐつて、落ち立ての新らしい馬糞を寄せ集めてゐる一群の人が見られる。しかも彼等は往々にして、その代償として一週幾干かの金を市當局者に支拂はねばならぬ事がある。又馬糞拾ひの全然嚴禁されてゐる所さへ澤山ある。その譯は市當局者が之を禁止して置かないと、彼等はその拾ひ集めた餘り澤山馬糞の肥料を含んでゐない汚物糞便を「効能ある」肥料として「高價」に拂ひ下げるを得ないからである。手車を手に入れてそれで荷物でも運んで歩く事の出來る「過剩なる人々」は幸である、車に驢馬をつなぎつけて、それで、金を儲ける事の出來る者は、一層幸である

……………』

私は、今こゝに、長々と、誰れでもが通りすがりには看逃すであらうと思はれる。市井の極く卑俗な事實を拾ひ集めて書いて見た。これこそ、イエーツの言ふ所の『議會や、戰場の』大事件ではなくして、まことに、有りふれた卑近なる街頭の一小景に過ぎない。しかし、これは、卑俗なる民衆の行動の中に歴史の回轉の法則を發見したフリードリッヒ・エンゲルスが、その名著『英國勞働者階級の狀態』の中に於いて、第十九世紀中葉の失業勞働者の困窮の樣を如實に描いたものの一部であつて、私の友人竹内謙二君が苦心して譯述した所のものを、拜借したのである。そして、この市井の俗事として、我々一般が看逃すであらう失業の事實こそ、實に現在資本主義經濟制度の胎内にインマネントに存在せるものであつて、資本主義がその充分なる

[illegible]の程度に達した今日に於いて、更に失業の[illegible]、質の後に於いて、從來のサイクリカルな、周期的な性質より、永續的の性質に變化し、以つて歴代不易と思惟せしめた所の、「砂上の水道」、中世のカセドラル埃及のピラミッドよりも偉大たる「近代資本主義經濟組織に一抹の陰影を投じたる所のものなのである。私のこの短い文章に於いて取り扱はんとする所のテーマは、この失業の性質、その源因たる恐慌、不景氣、その恐慌不景氣の原因、歐洲大戰前の失業と歐洲大戰後の失業との性質の相違、大戰中及び大戰後の世界列强の失業統計、失業に對する對策とその効果、並びにこの世界苦たる今日の失業状態の經濟史上に於ける意味等である。中には判り切つた事や、他人の既に書いた事もあるであらうけれど、この一篇の論を進むる上に一應述べた方が適當であると考へて書いた所も尠なからずある――といふ事は、筆者が豫めここに斷つて置きたい事である。

（二）

失業者は、一名、産業豫備軍、「遊離」されたる階級、又は、相對的過剩人口、等の名に依つて今日經濟學上の問題となりつつある。しかし一定の生業を奪はれて街頭を放浪するを餘儀なくされた失業者は、決して單に近代の産物ではない。我々は遠

く[illegible]に惱ませられ、[illegible]に[illegible]、[illegible]に[illegible]末に、多くの[illegible]を奪はれた失業者がパンを求めて[illegible]出した史實を發見する事が出來る。しかし、これらの失業に、ハインドマンの指摘する如く、直接には、旱魃或は大洪水の如き自然的原因か、又は大戰爭の如き比較的突發的事實の原因かに依つて生じたものが多く、又は一國、一地にその範圍が限局せられ、その失業の襲來も突發的、不規則的であつて決して今日のそれの如く週期的又は規則的循環の性質を帶びたものではない。

失業問題が、問題として我々の先祖及び我々の焦眉の問題となつたのは、この失業が、經濟史又は社會史上に於いて、從來の失業よりはより强き度をもつてその發現に於いて一定の規則性を有し來り、その發生の原因に於いて直接經濟上の事實及び理論に基礎を置き、その結果に於いて社會全體の機構の上に致命的の影響を與へるに至つたからである。そして、かくなり來つたのは、實に、産業革命以後、從來の中世經濟制度の胎内よりその母胎を破つて誕生し來つた所の資本主義經濟組織成立以後なのである。今日、識者、學者に依つて稱へらるる失業問題といふ名稱は實に、この資本主義經濟組織の下に於ける失業問題

ある。私のここに取り扱はむとする失業問題も亦、資本主義經濟に固有的であり、必然的である失業問題に限局しようと思ふ。

今日、一般に失業者と言はるる所のものは、主として、全く職業を得ざるもののみを指すのが普通である。乃ち『全く雇傭されない狀態』にあるものを主稱するのである。官廳の發表する失業者統計、資本家が好景氣を裝はんがために明示する失業者數の如きは、これを基礎とせるものである。併し、我々は、資本主義の展開と共に、それらのものの外に、『半ば雇傭された狀態から、全く雇傭されない狀態』の中間にあつて、しかも半ば雇傭されたる時と雖も、平均的勞賃の四十乃至五十プロセントしかを得ずして饑餓線上を上下する多數の勞働者の存在する事を忘れてはならぬ。乃ち饑餓勞賃——Hungerlohn——をうくる所の準失業者がこれである。この範疇に屬する主なるものの第一は、『短時日勞働者』——Kurzarbeiter, Labourers working on short time——と言はるる所の勞働者である。これにも二種あつて、その（イ）は一週間に亘り全部勞働するのであるが、その勞働時間が極端に短縮せられ、從つてそれに應ずる勞賃が極端に低下せられたる所のものであつて、この現象は、鑛山業及び織物工業を經營する資本家が不景氣を隱蔽するためとストライキその他の勞働爭議を寬和せんがために時々採る手段の結果生せる所のものである。その（ロ）は、一日の勞働時間は前者の如くには短縮せられず、從つて、一日の勞賃は低下せられるゝ事なきも、勞働日數が一週間の全部に亘らずして、一週間の內僅かに二日乃至三日に短縮せられ、從つて全體としての勞働者の收入が五割乃至六割方減下するを餘儀なくせらるる所の勞働者である。準失業者の範疇に入るべき主なるものの第二は、時節的變動——seasonal Fluctuation——に依つてその勞賃の取得が、ある場合に全く無き勞働者で、例へば建築工業に屬する勞働者の如きがこれである。

これらの準失業者は、普通全く失業者の範疇の中に入れられてゐない。しかし、失業といふ事が今日單に全く職業を得ざるもののみを指示せずして生活を保證せられずして饑餓線上を常に超えてゐる事が失業問題として社會問題の一中心をなしてゐるのであるが故に、これらの者を全く失業者の範疇外に置くといふ事は、事實上全く不合理と言はなければならない。尚ほこれらの外に、マルクスが相對的過剩人口の三つの形態として示してゐる所の流動的（flüssige）、潜在的（latent）、停止的（stockende）の形態に屬する所のもの、及び相對的過剩人口の最低にあるもの（Der tiefste Niederschlag）に屬するものも、失業問題を論ずるに當つては、決して看過出來ない所のも

のである。

今日各國の官廳又は公私の團體に依つて發表せられてゐる所の失業統計なるものは、主として、彼等の立場よりする見方によつたもの〻みで國家又は公共團體の救恤を受けるもの、強制又は任意の失業保險に加入せるもの、公の貯蓄機關(獨乙の Sparkasse の如きもの)に加入せるもの等を主たる基礎として計算せるものである。所が、後で述べるであらう如く、これらの公の機關の恩惠をうける所の失業者は、全體の實數の僅かな一部分に過ぎない。のみならず、これらの失業統計は、意識的にか又は無意識的にか、上に述べた準失業者を全く除外してゐるのである。從つて、我々は失業問題を論ずるに當つては、この事を常に頭に置き、か〻る統計及びか〻る統計の上にのみ立つて組立てられた議論に對しては、深甚なる注意を拂ふ事を怠つてはならぬのである。

(三)

第十七世紀末より第十九世紀に亘つて、世界の各國の經濟史の上に大變革をもたらした産業革命は、中世の莊園經濟及びギルドを中心とせる都市經濟を崩壞させて、その代りに資本主義的經濟組織を誕生させ、その生産の經營方法としては、中世の[illegible]生産と消費との調和を[illegible]らば、[illegible](Privatkapitalismus)と[illegible](Rationalismus)の基礎に立つて[illegible]生し、それらが各自無制限の大量生産をなすに至つて、需要と調和し得ざる生産の無政府狀態を持ち來したのである。

大量生産に依つて一方に於ては商品が過剩に存在するに拘らず、一方に饑餓線下に沈淪する失業者があるといふ事は、一見すれば甚しく諒解し難き所である。シャルル・フーリエは、一方に於て多くの食ひ得ざる失業者が生じてゐるに拘らず、一方に於て或る商人がマルセーユ港内に多くの食料品たる米を投げ棄ててゐるのを見て、奇異の觀に打れたといふ事であるが、この一見奇異な現象は、現行經濟制度の下に於ては、極めて普通なる事なのである。

資本主義經濟組織の下に於ては、失業の存在は、固有的のものである。「勞働者の過剩人口なるものは、蓄積又は資本主義的基礎に於ける富の發達の必然的産物であると同時に、また資本主義的蓄積の槓杆ともなり、否、資本制生産方法の存在條件の一つともなるのである。」「勞働者人口なるものは、一方に資

本の蓄積を生ぜしむると同時に又、他方には已れ自身を相對的に過剩ならしむる手段を絕えず、ますます產出することゝなるのである。これ資本制生產方法獨特の人口律である。』

從つて、今日に於ては、如何に好景氣の時代でも尙ほ、失業者の多くが存在するのである。コールはこの事實を『近代工業主義の下に於ては、常に幾千かの失業勞働者が存在する。貿易が最も活潑なる時と雖も、最も多忙なる工業部門に於いてさへ尙ほ幾千かの失業者が存在する。かくして、歐洲大戰前に於ては、失業者はすべての商業に對しては二パーセント、工業に於ては一パーセントより以下に下る事は決してなかつた』といふ敍述を以て、我々に告げて居る。今これを失業の歷史について觀察するに、千八百五十八年、千八百七十九年、千八百八十六年に於いては十乃至十一パーセントの失業率であつた。千八百九十三年には八パーセント、千九百〇三年には七パーセント、千九百二十一年には六パーセントの失業者が存在してゐた。

今ここに、失業の一般的原因を論ずるに當つて便宜上好景氣時代と、不景氣乃ち恐怖時代の二つに分つて述べて見る。

好景氣なるにも拘らず、失業者の生ずる原因の第一は、ある種の工業が非常に盛で、その生產能力が非常に增加する時は、多くの餘剩勞働者がそれに吸收される。しかし、商況がいくら好況の時でも、市場はこれらの多量の生產物を盡くこなすはず、ここに事業の緊縮が起り、雇傭された餘剩勞働者は再び街頭に投げ出されて失業者となる。かゝる經路が全般の工業部門に亙つて、今すこし强度に現れる時が乃ち恐怖となるのである。

第二の原因としては、企業家が生產物の價格を高騰せしめんが爲に、故意に生產を制限する事がある。又、企業家に必要なる粗原料を供給すべきものが自己の供給する材料を高價にせんが爲、その材料の供給を減じ從つて、それを以て營まれる生產の企業が制限される。かゝる現象が生じた時には、たとへ好況時代と雖も、失業者は產出されるのである。

第三に、生產界に新らしい發明がおこり、流行が變じ、國際交易の方向が轉換する等の事が起つた時には、ある一部分の分業のみをなしてゐた熟練勞働者は、これらの變化の爲めに多く失業する。又たとへば、既存の油鑛が閉鎖され、他の新らしい油鑛が他の土地に發見せらるる樣な場合には、たとへ好景氣時代と雖もそこに失業者を生ずるのである。

第四に、政治上又は財政上の事件が、好景氣時代と雖も、多くの失業者を發生させる原因となる事が尠くない。例へば政治的又は外交的事件のために國外に於ける販賣區域が封鎖され、粗原料の供給地を失ふが如き場合は、それらの影響を直接うけ

[illegible]
[illegible]に騰貴か[illegible]
は同じく失業者の多くを出さざるを得ないのである。
以上は、好景氣時代の失業であるが、失業はその反對の恐慌襲來に依つて最も深刻となり、ここに所謂失業問題として重要視さるるに至るのである。好景氣時代に於いては、失業者は、その數に於いて全體に對して比較的僅かな部分であり、失業の期間も比較的短く、從つてある種類の救濟も可能であるが、恐慌時代の襲來と共に、失業問題は全經濟生活の脅威となるまで深酷さを加へ來るのである。

（四）

廣い意味に於ける商業及び工業全般に亘る不活潑、沈滯、一時的破滅を伴ふ恐慌なるものは、資本主義的經濟制度成立以前に於いても、或は自然的原因又は突發的の事件を機緣として發生したのである。しかし、それが、資本主義的經濟制度發生後に生じ來つた産業恐慌と異る所以は、外觀的には、産業恐慌の襲來が一定の規則正しき週期律を有する事であり、資本主義の潤熟と共にその恐慌の範圍が全世界の産業列強國に一般的、普遍的に發生するといふ事である。乃ち或る時期に於いて好景氣

[illegible]
くの[illegible]を[illegible]として[illegible]
めにも[illegible]の勞働者を[illegible]し、[illegible]さるる時に、[illegible]に更に時間外の勞働を強制するのである。企業家はここに[illegible]企業の膨脹を計畫し機械するために、金を銀行より、どしどし前借りし、彼等は好景氣時代のために全く浮調子となり、各自企業家の間に何等の聯絡も、又全體としての産業的統制も全く存在せざるに至るのである。乃ち好景氣時代には、かゝる企業家の狂奔せる利潤追及のために、失業者の率は最低の段階に來るのである。

所がこの生産に於ける極度の無政府狀態は、ここに生産品の過剩をもたらし、それが好景氣と正反對なる反動時代を將來するのである。過剩生産物は市場に堆積し、市場はそれを吸收し得ざるが爲め財の生産は全く息み、物價、利潤、勞賃は急足の度を以て低下し、銀行は前借を拒絶するのみならず、既往の前借金の回收をなすに至り、生産界は全くその活動を停止し、勞働者は群をなして企業家の手より街頭に抛り出される。ここに失業は、その強度に於いて、その範圍に於いて、最も極度の高率の段階に達するのである。これ恐慌の時期か襲來したので

る。所がこの恐慌時代は若干もなくして漸次好景氣への傾向に向ひ遂には、又好景氣時代を現出する。この好景氣時代は又近き將來に恐慌の時代を實現するのである。かくして、產業恐慌は常に好景氣時代を通じて常に週期的に循環し來るのである。しかもこの循環は、一定の規則正しき週期律を有するのである。換言すれば、恐慌は、八年乃至十年の正常的な時間的距離を置いて規則正しく循環し來るのである。今第十九世紀に於ける恐慌の襲來を、ハインドマン著の「第十九世紀の商業恐慌」から、年度順に並列すれば次の如くである。

千八百十五年
千八百二十五年
千八百三十六年――千八百三十九年
千八百四十七年
千八百五十七年
千八百六十六年
千八百七十三年
千八百八十二年
千八百九十年

この事實は、恐慌の規則正しき週期律の存在を證據立ててゐる。

恐慌の襲來は、同時に又失業の襲來である。資本主義經濟の下に於ける失業の原因を知るには、この恐慌の原因を知らなければならない。恐慌の原因についての諸說は大體次の如く分類し得ると思ふ。

（一）人口の過剩が恐慌の原因なりとする說がある。しかしこの說は、千八百五十六年や、千八百七十二年に於ける北米合衆國の如く、恐慌以前に於いて過剩人口を持たず、又持つ事を得なかつた國にも恐慌が襲來して、數百萬の失業者を發生せしめたといふ確實なる證明に依つて破られてゐる。

（二）英國の經濟學者、スタンレイ・ヂエボンスは、恐慌の原因を凶作に歸し、凶作と太陽の黑點（Sun-Spot）とを結びつけ、恐慌をもつて、彼の大なる天體の中に於けるこの奇異なる變化に基くものなりとの說を立てたのである。そして當時のオックスフォードやケンブリッヂの經濟學教授達は、このジエボンスの說を支持したのであつた。しかしながら、この奇妙なる說は、今日に於いては『太陽の表面にある黑點が產業恐慌に影響を及ぼす事は、恰も動物園の豹の斑點が恐慌に影響を及ぼす位の程度だ』と嘲弄せらるるに至つてゐる。併し、最近に於いても或る學者は尙ほ世界に於ける豐凶作が恐慌の原因なりと主張し、その理由としては、豐凶作にも一定の規則正しき週期

律があるを事實づけてゐるが、事實に於いて、景氣恐慌に一定の週期律がある事も一般には承認せられてゐないし、又周期律の週期律と恐慌の週期律が一致するといふ事も證明せられてゐない今日、この説を主張すべき正當性はない。

（三）恐慌の原因を銀行制度の罪に歸する説がある。この説に依れば、好景氣時代には銀行は、無制限に金を貸す。大企業や、大商業は、銀行よりの當座貸越の補助によつて行はれる。所が恐慌が來ると銀行は、新らしい信用貸を廣く一般に拒絶する。その爲めに企業家や製造業者は、その生產を制限し、新しき企業を擴張したり新設したりする事を妨めるべく強制する。故に恐慌の罪は銀行制度にありとするのである。しかし、銀行は決して恐慌を『製造』するのではなくして、恐慌の事實の前徴を早く豫知して、その結果、貸付の拒絶を行ふのである。乃ち、銀行が恐慌の原因ではなくして、銀行が、かゝる行動を採る前に、既に先驅的ではあるが、恐慌の事實が發生してゐるのである。

（四）諸商品を流通せしむる手段たる通貨の不足又は過剩が恐慌の原因なりとする説がある。この説も前項と同じ樣に、『信用制度の糊塗だけで、瑕疵ある生產制度それ自體の缺陷を治療し得るは全く不可能』であるのである。

（五）恐慌の原因は、好景氣時代に於いて、それが、將に來らんとする抱く一つの心理的危惧の念、乃ち不況時代は必ず來るであらうといふ危惧の念が、來るべき恐慌の原因たりとする説がある。しかし、產業上の恐慌を心理的要素を以て説明する事は、方法それ自體が既に正當でないと考へられる。

（六）『近代資本主義の進化』の著者として有名なるチエー・ホブソンは、千九百二十一年發刊の『失業の經濟』といふ本の中で、恐慌の原因について新説を提供してゐる。それは一言で言へば、恐慌は『所得の誤まれる分配』にありとする説である。乃ち好況時代に於いては、利潤は、勞賃よりも急足に、高騰する。その結果、小數の富豪の手に餘剩所得が集中する。そして、この集中せられた所得は、主として生產財の企業及び外國貿易に投資せられる。所がこの生產財の企業及び外國貿易は、消費財の生產よりも一層擴大する可能性を持つてゐる。何となれば、所得の大部分を消費財の購入に使用する勞働階級の所得は、利潤の擴大に應じて擴大し得ないからである。かくして生じた生產財の生產業の過度の膨脹は、やがて、すぐ、直接に恐慌となるのであるが、この過度の膨脹は實に、不平等なる惡しき分配の結果である――といふのがホブソンの主張である。

（七）マルクスを始めとして多くの社會主義經濟學者の恐慌の原因に關する說は恐慌を資本主義的生產の固有の惡とするのである。彼等の主張する所に依れば原始的な社會や、封鎖的經濟の社會に於いては、凡ての財の生產量は、消費者の必要を斟酌して決定せられたが、近代資本主義の社會では、財の生產量は、生產組織それ自體の必然性によつて決定せられる。それ故に、種々の財の生產を平均の取れる樣にする事も出來ないし、又生產した財を完全に賣却すべき市場を發見する事も出來ない。乃ち生產に於いて規律もなければ、統制もないからである。そこに生產過剩が生じて、先づ內國に恐慌を惹起する。そこで國外に販賣區域を求めるため、又は粗原料供給地を獲得する爲めに、租借又は侵略を始めて帝國主義の形式を採る。所が、遂には、それも行詰まつて、ここに世界的の大恐慌となり、廣い範圍に亙る失業者を發生せしむるのである。

以上私は、失業の主たる原因は恐慌の襲來にあり、而して恐慌の襲來は、資本主義經濟制度の下に於いては、循環的の性質を有し、その循環は、八年乃至十年といふ規則正しき週規律の下にめぐり來るものである事を述べた。又それ故に失業も亦、恐慌と同じ正しき週期律の下に來るべきものであり、失業の原因たる恐慌の原因は、何處の邊に存するかに就いて、諸學者に依つて主張せられた所の者を大體一通り簡單に述べたつもりである。

——以上ここまでは、實は、私のこの論文の序文をなすべき部分である。何となれば、私がこの論文に於いて目的とする所は、歐洲大戰中及び大戰後今日に至るまでの失業狀態を述べて、それが、從來の失業と如何なる外觀、性質の差異あるかを示すにあるからである。そして、その目的のためには、豫め、一大戰前に於ける失業、恐慌の性質、外觀に對する鳥瞰的觀察をなす必要ありと思惟したが故に、序文的に、從來の一般的の失業に關する說を述べたのである。私の筆は、更に、この論文の中心たる大戰後の失業に進まなければならぬ。

（五）

コールは、失業には一定の限界（Margin of Unemployment）あるべきを主張し、如何なる好景氣時代にも、最低限度として必らず二パーセント乃至一パーセントの失業者が存在し、不況時代にも、ある限界以上には失業者の增加せざるべきを述べてゐる。これは、歐洲大戰以前の統計の上よりは、稍や正しき斷定と推測され得るが、歐洲大戰の世界經濟への大打擊、並

ずに[illegible]
或る永續的の失業者の實數を[illegible]
が存在すべきであるといふの說は是正されなければならぬと思ふ。歐洲大戰以前に於いては、千八百五十八年、千八百七十九年、千八百八十六年の不況時代に於ける十乃至十一パーセント、千八百九十三年の八パーセント、千九〇三年の七パーセントを例外として、平均三乃至四パーセントの失業者率であつたが、戰後の千九百二十年に至るや六・一パーセントとなり、その年の中葉に至つては一躍して十八パーセントに上り、その翌年には十六パーセント、千九百二十二年の初頭には十三パーセントの率を持續し、更に昨年（千九百二十六年）に於いては、例へば英國は十一乃至十二パーセント、獨乙は、十八乃至二十パーセント、波蘭は、二十乃至二十五パーセントの失業率を有し、この形勢は今後そのまゝ持續するか、又はそれより以上の高率を示すであらうと豫想されてゐる。かくして、失業の限界なるものは、その最大限度（マキシマム）の方面に於いて全く豫測を許さず、それに一定の限界の存在を示すが如きは全く不可能事乃至不合理なのである。

この失業の増加に對する觀察は、單に無產者側の觀察に止らず、失業の事實を最も隱蔽せんとする資本家及びそれの補助者

[illegible]この事實[illegible]
[illegible]
首席重役たるマツク・ケナ氏（[illegible]）は、千九百二十六年一月二十六日の株主總會に於いて次の如き演說を試みた。

『今世紀の最初の十五年間に於いては、千九百八年、大恐慌の襲來した時、失業はその最高點に達した。しかし千九百八年に於てすら、平均の失業者數は八十萬以上ではなかつた。千九百九年には稍や良くなつた。その翌年は、比較的好景氣で、從つて千九百十年及び十一年には平均三十萬乃至四十萬となつた。千九百二十一年に發表が開始された統計に依れば、千九百二十年に於いては五十萬に達しなかつた。所が、六ケ月後には百萬に達し、七月には二百二十萬に達した。次の三ケ年は、比較的に失業者が減少したが、千九百二十四年の後半には百四十萬、千九百二十五年には百四十萬に達した。―後略―』

これは、英國丈の話しであるが、そして統計の數も、前に述べた樣な不完全極まるものであるが、歐洲に於ける經濟上最も堅實なるべき英國の失業者數が、戰前の倍に達し、しかもそれが永續的の性質を帶べるを見る時には、以て、他の諸國に於ける失業の傾向をトしうると思ふ。

千九百二十六年の初頭に於ける歐洲及び他の諸國の失業者數は、千三百萬乃至千四百萬に達し、それと共にそれらの失業者の家族を加へる時には、三千五百萬乃至四千萬の食を得ざるものが全世界に存在してゐるのである。歐洲では、その中七百萬乃至七百五十萬の失業者があり、それは、千九百二十一年——二十二年の四百萬に對比する時は、『經濟が安定した』と稱せらるる歐洲でさへ、失業者が僅か四五年の間に倍加したのを見るであらう。そして、この失業者數は今後益々增加すべき事は、獨乙以外の歐洲諸國が未だ新らしい恐慌に入つてゐないのに徴しても明らかである。

次に世界各國に於ける失業者の狀態を述べて見やうと思ふ。

（六）

【英國】　英國は、今日、經濟恐慌及び失業問題の永續的連續に最も苦しめられてゐる國である。石炭工業、鑛山業、機械工業、造船工業、織物工業、等の重要工業は今日世界の市場から驅逐され、その生産は、戰前よりも以下に連續的に制限せらるべく餘儀なくされた。鐵、鋼鐵、石炭工業の利潤は低下し、千九百二十四年に於ては二百八十七萬九千磅あつたものが二十五年には八十二萬七千磅に急下してゐる。又石炭工業の如きも、政府の補助あるにも拘らず、生産を制限し、千九百十三年の生産額よりも以下に低下してゐる。又、之を輸出入について見るも、輸出に於いては千九百二十五年は、その前年より千四百萬磅減じ、輸入に於いては、六千百萬磅の增加を示してゐる。加之英國の商品は、世界市場から排斥せらるるに至つたが故に、その輸出に於いても次の如く、減少の傾向を見るのである。

	一九一三	一九二四	一九二五
石炭（噸標準）	七九、五〇〇、〇〇〇	六一、六五一、〇〇〇	五〇、八一七、〇〇〇
鐵（同）	八九三、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	五九九、〇〇〇
鐵及び鋼鐵製品（同）	四、三二八、〇〇〇	三、八五一、〇〇〇	三、七三一、〇〇〇
木綿織物（千ヤード標準）	四、一四〇、〇〇〇	四、四四四、〇〇〇	四、四三五、〇〇〇
麻織物（同）	八九、〇〇〇	三、〇〇〇	八四、〇〇〇

（セークマン氏の『世界失業』に依る）

かくの如き經濟狀態の下に於いて、失業者が永續的に增加して産出せらるる事は、明らかな事である。戰前に於いては、官廳の統計によると十五萬乃至二十萬の經濟的豫備軍は、戰後、百二十五萬乃至百五十萬の多數に達してゐる。そのパーセンテイジより言へば、戰前平均二乃至四パーセントであつたが、戰後は九乃至十一パーセントに達してゐる。そして益々增加又は永續の傾向にある事は次に示す表によつて明かであらう。

	一、九二四	一、九二五
石炭業	一三〇、〇〇〇	一四七、〇〇〇
鐵及び鋼鐵工業	五八、〇〇〇	五四、〇〇〇
造船業	七四、〇〇〇	八三、〇〇〇
機械製造業	九五、〇〇〇	八八、〇〇〇
木綿織物業	三五、〇〇〇	四〇、〇〇〇
麻織物業	二四、〇〇〇	二八、〇〇〇
建築業	七九、〇〇〇	九九、〇〇〇
被服工業	三一、〇〇〇	四八、〇〇〇
農業機械業	三二、〇〇〇	三一、〇〇〇
全産業	一、三三一、〇〇〇	一、二五二、〇〇〇

(セリクマン氏世界失業による)

かくの如く、行詰まつた英國の現状について、スコツト教授(J. W. Scott)は、次の如く嘆息してゐる。(氏の著書「失業問題」に依る)

『第十九世紀の初頭に於いては、我々英國人は、唯一の工業國民であつた。諸國は我々の商品を必要とした。彼等は、我々が唯一の商店であつたが故に、多少に拘らず我々の所へ來た。しかし今は、誰れでもが知るが如く、我々は唯一の商店ではなくなつた。多くの敵對國が出現した。しかも彼等は、その自國の市場に於いて、我々と云ふ上に重きをなしてゐる。我々は彼等と爭はねばならなかつた。しかし、それにも困難した。我々の商品は、最早最も善良で、最も廉價ではなくなつた。我々は最早適當に我々の商賣を維持する事が出來なくなつた。かくして、我々の倉庫には賣れざる商品が充ち、工場は荒廢となり、失業者は街頭を放浪してゐる。しかも我々は心配相に、新らしき市場を得んがために世界の全水平線をにらめてゐる。しかし、それは、發見する事も出來ぬし、又疑もなくそんなものは存在しないであらう。』

【獨逸】 歐洲經濟の混亂の最も劇しく表現したのは獨乙であつた。獨乙は、英國と同じく全く生産を制限するべく餘儀なくされ、その經濟は今や全く砂上に築かれたりといふも過言でない。加ふるに米國の資本が獨乙に侵入し、その外國市場も内國市場も全くアメリカ化するに至つた。この混亂せる獨乙の經濟の衰亡を語るものは、生産を制限された結果、生産過程より餘剰物として追ひ出された失業者の增加の傾向である。失業の範圍が最も露骨に、最も强度に發現したのは獨乙である。今獨乙の失業の推移を示すと次の如くである。

一九一九	一、〇〇〇、〇〇〇
一九二〇	三〇〇、〇〇〇
一九二一	一五〇、〇〇〇
一九二二	一二、〇〇〇
一九二三（一月）	八五、〇〇〇
一九二三（十二月）	一、五〇〇、〇〇〇
一九二四（一月）	一、五四〇、〇〇〇
一九二四（十二月）	四五八、〇〇〇
一九二五（七月）	一九八、〇〇〇
一九二五（十二月一日）	六七三、〇〇〇
一九二五（十二月十五日）	一、〇五七、〇〇〇
一九二六（一月一日）	一、五〇〇、〇〇〇
一九二六（一月末日）	二、〇三〇、〇〇〇

（一九一九—一九二三（十二月）：約五年間）
（一九二四（一月）—一九二五（十二月十五日）：約二年間）

—セリクマン「世界失業」による。

以上の表より觀取し得る事は、後に來る程、失業の波が、急足に來つた事と、その波の波頭乃ち失業數が、その度毎に高騰してゐる事である。今ま、その急足なる増加率を示す爲めに、組織せる勞働者の千九百二十五年の五月と十二月との間の短き期間に於ける失業率の増減を示すと次の如し。

全き失業者パーセント率

	五月	十二月
鉛鉱工業	三・六（パーセント）	一五・二
織物工業	三・二	六・六
煙草工業	八・七	二五・四
木材工業	二・九	二四・七
菓子工業	一・三	二四・七
製靴工業	四・六	三三・四

—セリクマン氏「世界失業」による

千九百二十五年十二月のケルン新聞は、この獨乙の失業について、左の如き社説を掲載した。

『失業は冬期のみの現象でない。失業問題は冬期の問題より以上である。我々は、この大なる失業を長き期間に亙る現象として認める。それは恰度、英國に於いて長い期間行はれてゐるのと同じ性質である。』

【北米合衆國】今日迄に於いて、世界の經濟的不景氣の影響を最も尠なくうけてゐるのは、言ふ迄もなく北米合衆國である。今、世界列國の國富の増進の工合を表示すると。

	一八七〇	一八九〇	一九一二	一九二二
北米合衆國	三〇、一	六五、〇	一八七、七	三二〇、八
英國	四〇、〇	五三、三	七九、三	八八、八
佛蘭西	三三、一	四三、八	五七、一	六七、七
獨逸	三八、〇	四九、五	七七、八	三五、七
伊太利	七、三	九、七	二三、〇	二六、〇

注意　標準は、十億ダラー、
——ナショナル、シチイ、バンク誌所載——

以上の如くであるが、この表の示す所に依ると、歐洲各國の國富は、全體としては漸次増加の傾向にあるが、その増加の率は漸進的であり、中には退嬰の徴候を示す國もあるに拘らず、北米合衆國のみは、ひとり急足なる増加の率を示して、經濟力の如何に旺盛なるかを示してゐる。又之を外國貿易に見るも、この國の經濟的發達の盛なる事を推知すろ事が出來る。殊に、歐洲の經濟を攪亂した歐洲大戰には經濟的に大なる損害もうけず、反つて戰后には歐洲の疲弊に乘じて、アメリカの資本が歐洲に流入した。かのドーズ案の如きも、歐洲を經濟的に復興させるよりも、むしろアメリカの資本をして歐洲を支配するに至らしめたのでゐる。今日、歐洲はアメリカに對して百二十億の[illegible]ゐる。從つて、[illegible]等によつて獨乙ご賠償金にも[illegible]十億の金は、これらの負債の償還として結局アメリカの懐中に入るのである。又戰後、アメリカの資本は、獨乙、オーストリア、ポーランドに侵入してゐる事は明瞭なる事實である。

かくの如き膨大なる國富と、生產力を有するにも拘らず、アメリカも今日に於いては、その生產力を制限せざるを得なくなつた。それは、疲弊した世界市場が最早アメリカの大量に生產せられたる生產物を消化し得ざるがためである。そしてこの生產の制限は、内國に於ける失業の增加と外國に於ける販賣區域の減少に反射してゐるのである。

アメリカには、完全なる失業統計が存在しない。たゞ反對に就業統計がある。それによると、千九百二十一年には六百五十萬の失業者があり、全體の十五・九パーセントを占めてゐる。千九百二十三年には、九乃至十パーセントの失業者があり、その數は約三百萬に及んでゐるのである。所が、前にも述べた樣に、歐洲は經濟的に衰弱し、從來の販賣區域には獨立の工業が興つて他よりの商品の流入を許さざるに至つた結果として、アメリカに採つて、最早戰前の如き連續的の生產擴張は今や全く見るを得ざる狀態となつたのであるから、アメリカに於ける失

業も、今後益々慢性的、永續的の性質を帶び來るものと考へられるのである。

【波蘭】 今日失業に最も苦しむ國の一として波蘭がある。その統計(官廳發表)に依れば、千九百二十三年には五萬一千、千九百二十四年には、十五萬六千、千九百二十五年の初頭には二十萬、十二月には三十萬に達し、千九百二十六年の初頭には三十五萬、同年末には五十萬に達するだらうと言はれてゐる。

以上は、失業の現象の著名なる國を擧げたのであるが、その他、チエックには六十萬乃至七十萬の失業者があり、伊太利には、千九百二十六年に十六萬乃至十八萬、希臘には約五萬、白耳義には千九百二十五年九月には一萬五千、十二月には四萬五千、和蘭には千九百二〇年に八・七パーセント、二十一年には十三・八、二十二年には、一七・〇、二十三年には一七・一、二十四年には一九・七パーセントの失業者が存在した。諾威には三萬六千、瑞典には四萬、その他、西班牙、ポルトガル、丁抹、瑞西、ハンガリー、バルカン諸國その他の各國共に多數の失業者を有してゐる。我日本も亦多數の失業者を擁してゐる。世界に於ける失業者の少い唯一の國と言はれてゐる佛蘭西すら、尚ほ三萬の失業者を有し、しかも、現在フランスの比較的善良なる景氣は、かつて獨乙の商業が下落しつつありしマークの上に一時的の好景氣を齎んだと同じく、下落しつつあるフランの上に踊りつつあるのである。

之を總括するに、前にも述べた樣に、千九百二十六年の初頭には、千三百萬乃至千四百萬の失業者が全世界に存在し、歐洲丈でも七百萬乃至七百五十萬あり、從つて現在の世界の失業は千百萬の失業者を出した千九百二十一年乃至二年の大不景氣時代よりも益々増大せる割合の「遊離」階級を出しつつあるのである。そして、この形成は今後長く續くべき性質を有してゐる。

千九百二十六年一月五日發刊の通信に於いてアムステルダム・インターナショナルの樂天家達も、「世界各國の勞働市場の一般的形勢は、非常に困難である。悲しむべき事には、この恐慌は、更に更に甚しくなる事を豫期しなければならぬ」と漸やく遲蒔ながら悲觀の聲を擧げてゐる。在米英國大使ホワードは、千九百二十五年五月の『ニューヨーク・タイムス』紙上で『我々は信ずる。多くの失業者は決して怠惰なるが故に働かないのではない。彼等が生産した商品を我々が捌き得ないが故に働き得ないのである。我々が眼をやる所、そこには至る所、水平線上に暗雲が深くたれてゐる』

然り！暗雲は今や深く全世界を鎖してゐる。この暗雲は果して何をもたらすであらう。

[illegible]
[illegible]と題して次の[illegible]
「ヂネバ國際勞働局の發表に依れば、歐洲の失業問題は更に慢性的となつたのみならず、殆んど永久的となつてゐる。獨乙では千九百二十五年六月失業保險その他の給附を受けつゝあつた失業者數は三十萬人であつたが、今やその數は伯林だけで、二十萬人、全國で百七十萬人に達した。英國の失業者も百萬の線を上下してゐる。失業は今や歐洲一般の現狀である。國際勞働局はその失業の對策として批判を各國に求めんとしてゐる。」

(七)

戰後の失業と戰前の失業は、次の點に於いて著るしき相違を有してゐる。乃ち戰前に於いては、失業の增加は徐々であり、たゞ恐慌の時にのみ激增するのである。恐慌一度去れば、失業は激減して恐慌前の狀態に立ち歸り、生產も亦活氣を呈し來つた。そして、その恐慌、不景氣も亦規則正しき週期律の下に出現し來つたのであるが、戰後の失業は、之に反して、常に多數の失業者が恒在し、不景氣らしきもの來れば、更に多數となり、それが去つても、最早舊態に復せず、そのまゝ永續の傾向を有し、生產力も生產の基礎も共に減じて行く趨勢を示してゐ[illegible]的となつたのみならず、殆んど永久的のものとなつた[illegible]でゐる」のである。失業は、不景氣の時と雖も多少存する事は、既に述べた通りであるか、その最も甚しくして、社會問題となり來る時は、不景氣又は恐慌の時である。而して今日失業は、世界經濟に伴ふ一大現象として世界の問題となつてゐるのであるか故に、失業問題が慢性的となり、永久的となつたといふ事は、とりもなほさず、不景氣又は恐慌が慢性的となり永久的となつた事である。

戰後の一大問題である永續的失業の原因たる永續的不景氣は、然らば、如何なる原因より生じたのであらうか。それに對する諸說は次の如くである。

(一)　この不景氣の原因を歐洲戰爭にのみ歸せんとする說。

この說に依れば、歐洲大戰は、多くの勞働力ある勞働者を殺したのみならず、又多くの生產機械を破壞し、多くの資本を不生產的なる戰事需要品の生產に使用し盡し、加ふるに多くの價値と强度の徵發を伴つたがために、世界の經濟界は、根柢より大打擊をうけた。故に今日の不景氣は、この歐洲大戰の經濟的創痍全く癒えざる所に、その原因ありとするのである。而して、この說の主張者は、時日の經過と共に、この創痍は漸次治癒

れ、歐洲が經濟的に復興するに至るや、現在の永續的不景氣はやがて好景氣に轉ずるであらうといふ樂天的の考を抱いてゐる。

然し、歐洲大戰後今日迄すで八年を經過してゐる。來年は、來年はと言ひつつ既に八度の星霜を迎へた。しかも歐洲の經濟的實狀は復興の途に向ふと反對に、低下の傾向をとりつつあるのである。

(二)戰後の平和條約の履行が、現在の不景氣の原因なりとする說。この說に依れば、平和條約は(イ)政治的國境の變更を來したがために、從つて從來の經濟的統一を破り、生產の統制を破つた。(ロ)戰敗國は多額の償金を要求され、從つて生產は攪亂され、國外の販賣市場は毀棄された。(ハ)ロシアは歐洲經濟より遠ざかつたがために、歐洲の經濟的權衡は破れた。これらの結果を作つたが故に、歐洲に不景氣が襲來したりとするのである。

(三)歐洲大戰の勃發した年は、週期律によれば、恐慌の襲來すべき年であつた。所が、歐洲大戰の突然の發生のために、この恐慌は延期され、戰後にても、戰後の一時的好景氣の爲めに更に延ばされ、今日に至つて、その正常的恐慌が現れ來つたのであるとする說である。

以上の三說は共に、現在の不景氣を以て一時的の現象し、この一時的現象はやがて、雲散するであらう。そしたら、今日の不景氣の雲は晴れて、再び美はしき好景氣が天上高く登るであらうとするのである。

併し、歐洲の戰雲收まつて既に約十年の月日を經過せんとして、しかも經濟界の前途未だに暗憺たる事實を如何にせんとするのであらう。

セリークマン(Selikman)は、その著書『世界の失業』に於いて、この永續的不景氣の原因を斷じて次の如く言ふ。

その一つの原因は歐洲の大戰である。從來の世界各國間に行はれた戰爭の經濟上の混亂は、戰爭終了後比較的速かに、經濟機關が再び復活した。例へば、千八百七十年プロシヤとの一戰に一敗地に塗れたフランスは、その爲めに、五十億の償金を支拂ひ、加ふるに三月には有名なる巴里コンミユーンの騷動があつたのにも拘らず、八十年代の初頭には、戰爭による經濟上の創痍から立派に脫がるる事を得た。しかるに、今度の世界大戰による混亂は、約十年を閲せんとする今日、何等復舊の希望を示してゐない。それは、今次の大戰の結果が、經濟界に致命的の打擊を與へたからである。その事は、次の事實を見れば明瞭である。乃ち千七百九十三年から世界大戰に至るまでのすべて

の戰爭に費されたる額は總計二千□百億ダラーにものぼる。今までの世界大戰爭に費された額が實に二千三百八十億ダラーの巨額に上つてゐる。そして、その中二千億ダラーが歐洲諸國の消耗した額である。英國、フランス、獨乙、伊太利、等の歐洲列強が戰前に有した國富を總計すると、約二千三百七十億ダラーである。從つて、歐洲は千九百十四年より千九百十八年に亘る四年間の世界大戰に於いて、幾代もかけて積み來つた歐洲の總國富を費消し盡した勘定になる。從つて、今日再び戰前の經濟上の狀態を再び取り戻さんが爲めには、幾代もの人達が從來なした努力を僅かの間になさなければならぬ。それが爲めには、今の世には珍らしい奇蹟でも出現しなければ、可能なる事ではない。加ふるに、全歐洲の人達が奇蹟的の懸命なる努力をした所で、又に述ぶるが如き、第二の原因によつて、それは不可能事と言ふも過言でない。

永續性の歐洲不景氣の第二の原因は、戰後に於ける經濟上の無能力である。乃ち歐洲全體が、全く生産を制限せざるを得ざるに至つた事である。乃ち資本主義的大量生産を行ふに當つても販路は之を内外を問はず全く閉塞さるるに至り、その爲めに生産制限を余儀なくさるるに至つてゐるのである。その例の最も著るしいのは英國である。英國はかつては、經濟上に於ける世界の民衆が失業者を有し、今日でも尚ほ多數者に於ける苦しみ、資本主義の機構を支配してゐるにも拘らず、前に述べた如く經濟上の貧窮の爲めに、凡ゆる方法で生産を制限せざるを得ざるに至つてゐる。この英國の生産界に於ける行詰りを説明するのは、先に述べた、マック、ケナス氏の英國産業行詰りの原因として擧げてゐる事を見れば明らかである。この原因は次の如くである。

（一）我英國の重工業の大部分が老朽し、惡しく組織されてゐる事。

（二）かつて我英國の輸出した商品の過剩が世界市場に堆積されてゐる事。

（三）英帝國及びその内部の自治體による課税の苛重なる額のために、我英國の工業が世界市場に於いて他國と競爭する能力を失つた事。

（四）歐洲一般が惱んでゐる經濟界の不安のために、英國人の購買力が減退した事。

ケナス氏は、先にも述べた通り、英國有數のミッドランド銀行の首席重役である。かゝる地位にある人が、英國を診斷して斯くの如く斷ずるのであるから、英國の經濟的窮乏は想像し得られる所である。

この傾向は、單に英國のみではなくして、歐洲一般の狀態である。例へば千九百十三年に於いて全歐洲の工業材料の生産額は百三十億五千萬マークであつたのが、千九百二十三年には百十億七千萬マークに減じ、率で言へば、三十七パーセントから二十八パーセントに下落してゐる。又農産物は、千九百十三年には二百六十億三千萬マークであつたのが、千九百二十三年には、百七十億二千萬マークに減じ、率で言へば、六十七パーセントから五十四パーセントに減じてゐる。又之を重要工業の生産額について見るに、千九百十三年と千九百二十五年の間に、石炭は六億五千萬噸から五億千噸へ、鐵は三千九百萬噸から、三千百萬噸へ、鋼鐵は三千七百萬から三千三百萬へ皆な減じてゐる。『歐洲の生産能力は、最も良き場合に、千九百十三年の水平線に止る事を得るが、それに反して、實際上の生産活動力は、歐洲生産物の外國市場よりの排斥と、貧窮せる國民の消費減退の影響のための國内に於ける販賣區域の減少との結果、生産能力に比して十乃至十二パーセント丈け減退してゐる』

又これは歐洲丈の問題ではない。世界に於いて不景氣に取り殘された唯一の國たる北米合衆國すらも既にこの傾向が現れて、生産を制限する事を余儀なくされた事は、前に述べた通りである。それは一言にして言へば、いくら北米合衆國が富んで生産能力があつても、世界市場は最早、アメリカの生産物なし得ないからである。

かくして、企業の短縮、生産の制限、販路の減退需要、購買力の低下は單に歐洲のみの問題に止らず、世界一様に今日見る事の出來る現象である。

セリクマンの擧げた以上二つの原因を、よく觀察する時は、それは、資本主義經濟制度といふものが、漸く行詰まりつゝある事を暗示してゐる。乃ち現今の世界の不景氣の永續は、現存經濟制度そのものの中から必然的に發生し來つてゐるものの如くである。

（八）

この膨湃として世界に襲ひかゝつて來た不景氣の連續、その結果としての失業の永續に對して世界各國は如何なる對策を採つてゐるだらうか。

その第一に失業保險がある。失業保險は初め勞働組合によつて行はれ、續いて自治體により、更に勞働組合と自治體との聯合に依つて行はれ、最後に國家が保險をなすに至つた。國家が失業保險を行つた最初は、千九百十一年十二月英國に發布された『國民保險條令』による英國の制強保險である。失業保險に

に[illegible]。これに反し、は、獨乙、墺太利、英國、露國、伊太利、波蘭、アイスランド等であり、後者を採用してゐる國は、白耳義、和蘭、丁抹、諾威、フィンランド、フランス、瑞西、チェッコ、西班牙であり、その他瑞典、ブルガリア、希臘、日本等は今や正に失業保險を採用せんとしてゐる。

しかしこの失業保險は今日迄の所この永續的な失業に對しては單なる麻醉の動をなせるに過ぎず、それも度々の保險法の變化によつて、むしろ失業者並びに一般勞働者に對して苦痛となりつつある。失業保險の欠點としては、失業の時に給付される金は、極く小額で、以て生活の資にするには不足の上、今日の如く失業が永續化するに及んでは、少額の保險金は何等勞働者救濟の實効を奏しない。又失業保險は、一般の勞働者には、法律上その他の理由に由つて、及ぼされず、殊に農業勞働者、家庭使用人、官廳の下級使用人、外國人勞働者は、各國共全く除外されてゐる狀態である。

その第二には貯蓄制度がある。この制度を初めて提唱したのは、千九百十一年に『失業』に、この制度を論じたラベルニュ及びアンリ兩學者である。この制度の行はれてゐる國の主なるものは、北米合衆國、匈牙利、プロシヤ、墺太利、丁抹、諾威、露西亞、瑞典、フランス、伊太利、英國、白耳義、和蘭等である。しかし、この制度に依るも、到底、永い期間に亘る失業させ[illegible]ることは[illegible]である。

その第三には、[illegible]に[illegible]させることである。しかしながら、今日においては、[illegible]になる多くの失業者に悩んでゐる[illegible]、[illegible]を[illegible]地は絶對にない。而も[illegible]人[illegible]各國共に[illegible]されてゐるのはこの事實を語る。又今日は、昔と異つて自由に[illegible]人を納る不斷の開拓地は全く存在しないといつてもよい。

その第四の對策としては、最近スコット氏に依つて提唱されたホーム・クロフト計畫（The Home Croft Plan）といふものがある。この計畫は、氏の言明する如く、失業の波を止めんとするものでなくして、失業の悪をさけんと試みるのである。今氏の言葉を借りて、この計畫を説明する。

『ホーム・クロフト・セッツルメントを商工業の中心に建設して、そこには商工業の勞働者を住まはせる。セッツルメントは都市の郊外に設けられ、そこには多くの勞働者の小屋の群があり、そこに都市の勞働者が三分ノ一乃至一エーカーの土地を與へられる。これらの宅地は一つの食物製造區域である。各住宅は、その中でなされなければならない勞働に都合の良い様に考案される。

ホーム・クロフティングは、自分の食料を自分の手で造る法の一種である故、食料を他から買ひ込る必要がない。短い産業時間を利用するといふのが、この制度の暗示である。一

日に、一人の人間にとつて、二度の執務時間がある。その一つでは、賃銀を得る爲めに産業的の勞働をなし、他の一つでは、彼の妻や子供と共に庭園で食料をつくる』

この計畫を見るものは、幾千萬を算する現代の失業者に對して、かゝる吞氣な失業防止法を考へてゐる暇人があるのに驚かずにはゐられぬであらう。

その第四の對策としては、大都市が恐慌に際して、巨額の救濟資金を提供する方法である。しかし、これもたゞ一時的の救濟であつて、以つて今日の如き多數の、しかも永續的の失業に對しては何等の効果も期待せられぬであらう。

その第五の對策としては、失業者のために、特に道路の新設、改修、運河の新造その他種々の仕事を作り、失業者に仕事を給せんとする方法である。しかし、この方法は第一、仕事が一時的である性質上、一時的救濟に止る事と、第二、かゝる仕事に從事する失業者の賃銀は、一般の賃銀より遙かに低廉である事との爲めに、矢張他の對策と共に一時的の糊塗的救濟に過ぎない。私が、一九二四年英國滯在中、時の勞働黨内閣大藏大臣フヰツプ・スノーデンは失業救濟のために、テームス河底にトンネルを開鑿する計畫を樹てた事があつたが、これも又この糊塗的政策の一つの例として見うるであらう。

現代の世界の失業は、根を深く資本主義經濟制度に張つた所の永續的の慢性的性質を有してゐる。それは誠に國際■發表せる如く『失業は最早慢性的で、永久的の性質を帶べ■である。』かゝる強度の、範圍の廣い、永續的の失業に對して、上にのべた、失業對策なるものが、何等の効果をも期待し得られないのは明瞭である。

私は最後に、再び、在米英國大使ホワードの言を繰り返す。

『我々は信ずる。多くの失業者は決して怠惰なるが故に働かないのではない。彼等が生産した商品を、我々が捌き得ないが故に働き得ないのである。我々が眼をやる所、そこには至る所、水平線上に暗雲が深く垂れてゐる！』

然り！　暗雲は今や深く世界の水平線を閉してゐる。この暗雲は晴れて、一天拭ふが如き晴空となる乎。それとも更に雨となり、風となり、雪となる乎。――殘念な事に、私は豫言者でもなければ、『豫言の喇叭』――Trumpet of Prophecy――を鳴らしたシエリーの如き詩人でもない。たゞ冷酷なる事實を冷かに見つむる事を運命づけられた一學究に過ぎない。ここで、筆を擱くを安全とするであらう。

（追記）本論文は次の三者に負ふ所が多い。殊に戰後の失業の統計は、殆んどセリクマンの著書に負ふ。

Hobson, Economics of Unemployment (1921)

Cole, Unemployment (1923)

Selikman und Schumann, Weltarbeitslosigkeit. (1926)

小作立法の本質

農學博士 那須 皓

一 慣行と法的統制

蛇が成長するに伴つて脱皮する如く、社會も成長し變化するに伴つて社會的統制の衣を脱ぎ換へねばならない。社會的統制は或ひは社會生活に於ける慣行の形式を取り、或ひは法律制度の形式を取りて行はれる。祝賀、弔問、贈答等の慣行が好意を表現する手段として社交生活の滑かなる運轉に寄與する如く、經濟社會の進展が亦慣行によりて統制せられて居る場合は決して少なくない。例へば商取引や小作關係の繼續の如き、往々にしてこれである。斯く慣行は吾人の社會生活の上に於て重大なる意義を有するものたるが故に、屢々法律によりて之に法的權威が賦與せられて居る。而して此の慣行の變化は少數の突飛なる人の存在によりて直ちに招致し得べきものでないから、極めて徐々として到來するを特長とし、從つて慣行による社會的統制も亦漸を以て遷るを常とする。

之に反して法律制度による社會的統制は急激に變化する事が起り得る。抑も法的統制の變化が如何なる事情によりて促されるかと云ふに、これは第一には統制の對象たる社會的事實そのもの丶變動することにより、第二には統制を決定する社會人の意志構成が變化することによるのである。第一の事情は概して第二の事情を生むものであるが必ずしも常に然りとは云へぬ。又第二の事情は第一の事情と獨立して生ずることも可能である。例へば統制に關與する特定の人々の

黒柯が成遂せられたる爲め、或ひは統制に關與する人々の範圍が擴大せられたる爲め、統制せらるべき社會的事ものには何等變動なきにも拘らず統制の形式内容が變化せしめらるゝことがある如きはこれである。普通選擧制が事によりて制限選擧制時代の法制が改廢せらるゝに至ることは當然期待し得べき最も視易き事例であると云へよう。

法制上の急激なる變革は時に平和に、又時に革命の形を取りて來る。革命なる語は種々の意味で用ひられて居るが、政治上には國家統治制度上の大變革を合法的手段によらずして實行する場合を指すのであつて、單に合法的手段によつて法制上の急激なる變革をなす場合をも革命と呼ぶは此の語の濫用ではないかと思はれる。この論は兎も角もとして革命であれ又は非革命であれ法制上の變革は往々にして急激に來ることがあるが、かゝる變革が成功するや否やは、それが慣行による社會的統制と兩立し得るや否や、又若し兩者の間に著しき矛盾衝突ありとせば、相當の期間内に此の矛盾衝突が調和せらるべき可能性ありや、換言せば社會的慣行が新法制と兩立し得る程度まで變化し來るべきや否やによりて決せらるゝのである。米國の禁酒制の如きは此の意味にて目下正に試錬の最中にありと云へる。更に往々にして社會的慣行と著しく背馳せる法令が其の儘永く存續することがあるが、斯かる場合を仔細に點檢すれば該法令が事實上に適用せらるゝ機會甚だ乏しかりしが故に社會が無關心に之を放置せしに過ぎずして、決して成功を以て之を目すべきにあらざることが分明するであらう。

二　小作立法に對する社會的要求

今日我が國に於て小作法の制定が當面の重大問題となつて居る。之は何を意味するかと云ふに、小作關係を律する現行法規が社會の實勢に適せざることが痛感せらるゝに至つたが爲めに、現在の小作關係の事實に即し又現在の統制的勢

れ其の理由に[illegible]

としては、農村に於ける經濟の事情の變化、殊に小作爭議の頻發と、[illegible]に對して[illegible]付けて來た事實とを擧げることが出來る。從來の民法に於ける小作關係の規定は餘りに今日の實情と掛け離れてゐるのであり又餘りに小作階級の立場を無視して地主の利益のみを重んじたるものであつた。所有權の過重は無用に賃借者の地位の安定を犠牲とする事によつて遂げられて居つた。例へば些かたりとも小作料の滯納ある時は[illegible]小作契約を容易に解約し得る權能を地主に與へたる如きは正に其の一例であつて農業經營の特質に反し地主小作間の情誼を無視せる規定なりと云ひ得る。此の種の法規は從來其の適用を見る場合乏しかりしが故にさして問題とならなかつたのであるが、小作爭議の頻發するに至りし今日に於ては其の妥當性を疑はるゝに至る事已むを得ざる次第である。更に在來の法規は啻に妥當性を缺くのみならず、現下の事態に鑑みて必要とする規定を全然缺如せる事も稀でないから、茲に新時代に應ずべき種種の新規定を設くることが必要視せらるゝに至つた。裁判所に於ける小作關係訴訟の永引くことは單に訴訟件數の多き事や辯護士證人等の都合に基きて審議を進め難き事に依るのみならず、實に上述せる所の法規の非現實性及び缺乏に基く點尠なからざるものである。如何となれば常識ある裁判官は無理なる法文を杓子定木的に強行適用して過大なる社會的混亂を招致することを躊躇し、出來得べくんば和解調停の成立を希望すべき筋合なるを以てゞある。

曩きに小作調停法が制定せられたるは全く之を證するものであつて、當時に於ける司法當局の說明中にも「小作爭議は性質上民事訴訟の外特殊の解決方法を必要とする」と云ひ、而して更に「調停法に於ては明文に反せざる限り條理の命ずる所に從て適當なる處置を爲すは寧ろ法の希望する所なり」として運用者の自由裁量の餘地を大にしたる所以を說いて居るのは、此の間の事情を反面より證明せるものである。小作法が既に出づべくして先づ小作調停法が出でたる

ことは實體法に先ちて手續法を定むるものなりとか其の他種々の批評を招いたが、之は當時に於ける支配階級の意識が小作問題に關して未だ充分に啓發されて居なかつたからでもあるし、又一面には本邦に於ける小作紛爭惹起以來年尙淺くして小作法として規定すべき內容に就て充分の見極めがついて居らなかつたからでもあつた。爲めに大正十年十月新聞紙上に洩れて物議を醸した小作制度調査委員會幹事私案の小作法案は充分に同會に於て攻究せらるることなくして握り潰しの運命に逢つたのである。が、さすがに之に關して何等かの申し譯をなす必要を感じた當局は「小作法制定の必要は認むるがそれは困難にして愼重周密の研究を要するから」、との意味の釋明を大正十三年小作調停法施行に際して農商務大臣及び司法省民事局長の口を藉りて述べて居るのである。而してそれは强ちに遁辭とのみ目すべきではなかつた。

然るに今日に於ては小作調停法實施後僅かに滿二年を經過せるのみであるが、既に其の成績相當に見るべきものがあり、或る程度迄小作紛爭解決の條件につき具體的資料と目安とを得るに至つた。而して之と同時に、又調停法そのものの活用の限界の見極めもつき小作法の必要を感ずること愈々切なるを加へた。小作調停法を先づ出して次に小作法を規定することは、歸納的に法律を定むる合理的態度であつたとも今日では考へられる次第である。更に時勢の變する所、地主階級に於ても眞向より小作立法に反對する者減じ來り、中には小作紛爭を厭ひ時勢を明察して或程度迄の讓歩をなすを辭せざると共に正當なる權利は飽迄擁護せらるべきことを期待して小作立法に贊成する者すら生じたのである。支配階級や多數識者の意嚮も徐々に異り來つた。而して新たに衆議院議員選擧權を得たる無產階級の意嚮は既に一個の大なる政治的勢力となつて居り、數年前までは往々にして危險視せられた社會政策の實行が今では重要なる國策として何人も之を許しまぬに到つて居る位である。小作法制定の機は斯くして漸く熟し來つたのである。私が嚢きに述べた

る法的統制要望が[illegible]たことである。[illegible]
二者が、小作問題に對しては其に役割とは大いに異り來つたのである。[illegible]小作立法に對する[illegible]は[illegible]
の勢ひなりと謂ふべきである。此の機運に促がされて政府の小作調査會は大正十五年五月を以て[illegible]し、爾來屢々たる會合を重ねて去る十月には既に小作法要綱に關する同會答申案の提出を見るに至つたのである。

三　小作立法の階級性と非階級性

小作法制定の趣旨奈邊にありやを訊さるゝならば、私は上述せる所を以て其の總括的答解となさゞるを得ぬ。即ち社會が其の成長するに伴つて法的統制の衣を改むるの必要を感ずるに至つたこと、これである。而して社會の法的統制は、本邦に於ては必しも常に純粹なる階級的目的を以てしては行はれて居らない。そこには種々の色彩と混雜と及び錯誤とがある。法規の或種類のものは可成り階級的色彩が濃厚であつて、例へば治安維持法の如きは有産階級擁護を以て其の主目的とするやうにも考へられるが、他の種類のもの例へば工場法の如き或程度迄勞資兩階級の利益を相當に考慮し全社會的幸廣を眼中に置けるものとも見ることが出來る。產業組合法や勞働者の健康保險法の如き亦後者に屬する。全然無產階級の利益擁護のみを目的とせる法律は尙絕無であるやうであるが、貧富に無關係なる法規も數多あるし、又或る程度迄無產階級の利益を考へ居れる法規は決して尠なくない。事實、支配階級に屬する多數者は、國家的統制は一社會階級の利益に偏することなく須らく階級的色彩を超越すべしとの信條を唱へて居るのであるが、惜むらくは彼等の見解は往々固陋にして、其の目して、國利民福となす所は實質的には有產階級の利益のみに限らるゝ場合が尠なからぬのである。而して此の誤解に基きて彼等が主張し實行する政策が、若し單に有產階級に便益を與ふるに止まりて特に無產

階級に不利益を齎らすことがないならばまだ宜しいのであるが、事實は之に反して少數有產階級の利益の爲めに多數無階級の利益を犧牲として居ることが屢々起り勝ちなのである。例へば國家の爲めに產業を振興すべしと唱へ、產業振興の爲めには勞賃の騰貴や勞働條件の向上は不利の事情を生むとなして勞働者の至當なる要求をも抑ふることある如き、これである。此の際の國家の利益は餘りに多く資本家の利益と一致し之と同時に勞働階級の不利を齎らすものなのである。斯かる無知に出づる錯誤は法規の上にも屢々現はれるのであつて、又或種法規の制定を沮むのである。これは、國際勞働會議に於ける諸條約の實行が渉々しからざるに見ても之を察することが出來るのである。尤も是等の場合、無知にあらずして惡意ある階級的利己心が之を利用し之と相協力することは決して珍らしくはない。但し、さすがに意識的なる階級的利己心のみに依りて萬事が決定されることとは稀かと思はるゝのである。純然たる政治の階級性を意識して法規を作るは、寧ろ資本主義的國家にあらずして、勞農露國の如き社會主義的國家である。資本主義的國家がさまで階級的政治に徹底するを得ないのは國民の大多數を占むる無產階級を全然無視することを得ないからである。されば本邦に於ては無產階級の利益が無視又は不當に輕視されたる法規ある時、直ちに之を以て悉く惡意ある偏頗のみに出づるものと看做す事は敢て當らない。それは惡意ある意識的行動である場合も、惡意なき錯誤である場合もあり得るのであつて、寧ろ兩者の混合なるを常とするのである。更に又、今日上級官吏となり議員となる者の大多數は有產階級に屬するか然らずとも之に接近せる者であつて、彼等の生活經驗は彼等の見解を有產階級的たらしめて居ることは疑ひもない。彼等の公平と觀る所が既に階級的利益によつて動かされて居るものである場合は決して稀でないであらう。さり乍ら、少くとも意識的には斯かる特定なる階級的利益によりて動かさるゝことなく、寧ろ舊來の迷夢より目醒めて眞に各社會階級を綱羅せる全共同社會の利益及び發展の爲めに國政を處理すべく努力せる者も、現代の若き官吏や學者や政治家の中に

はなして[illegible]我々は[illegible]
ほす直接間接の影響を無視する譯には行かぬ。

更に政治は云ふ迄もなく社會的實勢力の集成の結果である。而して社會的實勢力中に於て資本家で土地を代表する資本家、地主の勢力の大なるは論を俟たぬが、併し無産勞働大衆の勢力も近時著しく增大せる事は之を否定することが出來ない。此等勞働大衆の勢力が法規の上に影響を及ぼすことなしと斷ずるは、餘りに往時の事實に捉はれたる見解である。

以上を要するに單に經濟的事情のみを唯一の目安として社會階級を分類し、而して國家の政治は特定なる有産階級の階級的利己心のみに基きて行はれるものであり法規は之を表現するものなりと見る事は、餘りに偏したる見方である。現在の法規の多くは超階級的國家觀の產物であつて、そこには共同社會の利益追求と、對立せる各社會階級の個々の利益擁護とが種々の割合で混在して居るものである。階級性を云ふならば、それは寧ろ各階級の利害を相殺せる結果、特定階級の利益が後に殘ると云ふ位の程度のものたるに過ぎぬ場合が多いのである。革命國家を除き、少なくとも現代文明國の穩健なる立法には私は上述の趨勢を見る。ブルジョア的支配階級はブルヂョア擁護の法律のみを作ると看做すは、餘りに概念に捉はれたる非實證的議論である。封建時代に於てならいざ知らず、國民全般に參政權が與へられ、民權の大いに伸張したる今日に於ては、特定なる一社會階級の利益のみを圖る政治が、社會生活の全部門に亙つて永續的に行はれると云ふやうな事は、到底考ふ可らざることである。要するに階級國家的觀念を有する一部の人々の存在を私は否定しないが、併し國政擔當者又は一般識者の大多數は超階級的國家觀の保持者であり、此等人々の努力又は影響の下になる法制は假令事實に於て充分に此の理想を體現して居らぬとしても、或る程度迄此の觀念によつて動かされて居る

と云ふことは之を認めねばならぬと思ふ。これ私が曩きに我國の法的統制は純粹なる階級的目的のみによりて行はれて居らぬと云ふた所以である。さり乍ら事實に於て或る階級に厚く或る階級に薄いと云ふことは勿論あり得るのであるから、問題は純然たる階級性の有無と云ふことよりも寧ろ、如何なる程度迄意識的又は無意識的に特定階級の利益を重視し擁護したか、其の事が果して社會全體の利益と一致するか否かと云ふ所に存するのである。

斯く考ふる時は今日の、我が國情に照らして立案且實施され得べき小作立法が純然たる階級的のものたるを得ぬことは直ちに分明するのである。今回の小作調査會の答申案にしても地主側の一部よりは恰もそれが地主寄めのみを目的とするものであるかの如き批評を受けて居る傍ら、小作側の一部よりは小作人を壓迫する地主保護法なりとの非難を受けて居るのである。同一法案に對し斯の如く全然氷炭相容れざる二個の見解が下される事は奇妙であるが、此の事實は偶々以て該答申案が純然たる階級性を有せざることを證するものに外ならぬ。即ち絕對的の小作保護にもあらず又絕對的の地主擁護にもあらず、地主小作兩者に對して、或點に於ては其の利益を圖り或點に於ては其の放恣を禁しむるが故に、徹底的小作擁護論者又は徹底的地主擁護論者の何れよりも無條件なる贊成を得難いのである。世には往々にして地主小作の兩方より非難を蒙る如き法案は關係當事者全部によりて悅ばれざるものであるから、實施の價値乏しと考ふる者がある。併し之は思はざるの甚しきものであつて、爭議兩當事者の主張を悉く容れて兩者に十全なる滿足を與ふる如き解決案の到來を待つは百年河淸を待つに類するものである。それに只第三者の利益を犧牲とする事によりてのみ可能である。例へば小作料につきて見るも地主の受くる所を極めて厚くし小作人の拂ふ所を極めて薄くし其の差額を國家自らが負擔すると云ふような案を立てれば、或ひは兩當事者の滿足を得るかも知れぬが此の際は第三者たる一般公衆の支持を得ることと極めて困難となるであらう。而もかゝる案でも立てざる限りは一方の得る所は必ず他方の失ふ所となるの

であつて、一方の安全なる満足を與へ得ざる場合に他方に甚しき不満足を生ずるものであるが、それには止むを得ざる場合もあり、それが已むを得ずと思ふ場合を除けば、臨時特別國家が超越的にかゝる弱者を擁護する法規を定めることになるが、ない。若しありとすればそれは甚しき例外であつて、かゝる際には場合によつては國家に犠牲を拂ふ者の苦痛を除去せらしむべく相當に考慮してもよいのである。かゝる事のない以上、實際の政策は相對立する各種利害關係を相當に考慮の中に加へたる妥協交讓的の點に落ちつくに至るべきこと、蓋し自然の歸結である。唯、各種利害を考慮するに當つて、可及的に公正なる中立的立場を支持すべく努力するの外はないのである。

尚茲に附言すべきは、假令中立的立場にありとしても、それは必しも兩方の云ひ分の丁度眞中を結着點と定むるものではないことである。即ち相對立する地主小作の何れか一方が今日不當に不利益の地位に置かれ居り、その結果として社會全體の健全なる發展が阻害せられ居ると云ふが如き場合に於ては、この被抑壓者の利益を圖る事は必しも其の公正且中立なる立場と矛盾せざることである。小作立法が特に小作者の利益を伸長するものとすれば、それは正に上述の理由に立脚すべきである。即ち國家は社會立法の名の下に漫然現在の弱者保護のみに努力すればよいと云ふ筋合のものではないのであるから――丁度乞食が弱者なればとて無暗に乞食保護を主張する人が無い如く――小作立法が或點に於て地主の利益を犠牲として小作人保護に努むるとせば、そは單に小作人が經濟上又は社會上の弱者たりと云ふだけでなく、それ以上の全社會的事由に基く所がなければならぬのである。而して本邦の現狀に於ては正に斯かる事由が存するのである。故に地主側の一部より中小地主こそ小作以上の弱者であると論じて、小作人よりも寧ろ中小地主の保護により多く意を用ふべしと要求し耕作權の確立に反對するが如きは其の論據充分强固なりと稱し難いのである。反對に又小作側より小作法中に存する若干地主保護の條項を見て直ちに小作立法の本旨に背くものとたすも必しも妥當なる見解と

稱することを得ぬ。如何となれば前述せる如く超階級的國家觀を前提とせる小作立法は純粹なる階級的見地より考へられて居る次第ではないからである。

「盧山」は見る人の位置の異ると共にその狀貌を異にすると云ふ。小作法亦盧山に類するものなしとせぬのである。盜難に罹れる者は警察を以て生命財產の安全の爲めに必要なるものと感じ、之に反し檢束の經驗を有する勞働運動者は警察を以て無產階級壓迫の爲めにのみ存するものゝ如く論ずることが多い。小作法案に對する批判亦同樣の趣きを呈するのである。私は玆に重ねて今日本邦にて立案實施せられ得べき小作法は純一無雜なる階級性に立つことを許されざることを述ぶると共に、純粹なる階級的見地に立たざるの故を以て小作法を攻擊する人々は樹に依りて魚を求むる亞流なるを思ふ者である。階級的國家觀を抱くにあらざる以上は斯かる態度は取れぬ筈である。私自身としては小作法の徹底的階級性は、若しそれが地主の立場を全然無視してよいと云ふことを意味するとすれば、必しも合理的でもなければ又歡迎すべきものでもないと信ずる。但し斯く云ふことは、共同社會的見地に立てる徹底性を缺くが如き不得要領なる妥協論を無條件に肯定するの意にあらざることは勿論であつて、又地主の利益を犧牲とすべからずと云ふ地主的議論に贊成する次第でも無いことは、改めて斷はる迄もないことである。また今回の小作調査會の答申案が完全無缺なる理想案なりと云ふ意味では尙更らないのであつて、唯同案を以て徹底的なる階級的法律なりと主張する地主側及び小作側の批評が共に的を外れたるものなることを論ずるに過ぎないのである。同案の內容が地主に偏するや小作に偏するやは見る人によりて意見を異にするであらうが、今日の政府、並びに同調査會委員の顏觸れ等より考へて、甚しく小作側に偏する急進的法案が同會より生れざるは、當然豫期すべきことであつた。同會委員には地主的立場の經驗を有する人はあつても、小作人的經驗を有する人は無いようであるし、大多數委員の接觸交際する相手は小作人よりも寧ろ地主が多いのであ

る。故に同会[illegible]に於て[illegible]つても、[illegible]事情には[illegible]ことは[illegible]にと云ふ憾みがあるかと想像せられる。但し同会が会員として、地主小作者の代表者を[illegible]ことには、甚だ妥當なことであつて或意味に於て同會委員の缺を多少補足せるものと云へる。又、今日の時勢に於て專ら地主保護論の唱ふ可らざるも明かであり、彼此諸事情が相俟つて彼の答申案の非階級性を生み出すに至つたものであらう。

四　小作立法と小作爭議

小作法制定に對する要求が今日殆んど輿論の觀を呈し、小作立法に對する絶對的反對論者の聲が頗る微々たることは、之を僅々數年前に於ける世態と比較して、吾人に時勢の急變せるを想はしめる。斯かる時代思潮の變遷は一面には小作爭議の勃發と云ふ社會的事實に促されたものであつて、それ丈けに小作立法は小作爭議絶滅を目的とすると考へる人が尠なくない。併し乍ら本邦の現狀に顧みて果して小作立法が小作爭議を絶滅し得るやは大なる疑問であり、寧ろ之によりて小作爭議は却つて增加するとも減ぜざるべしと憂ふる人の言に若干の理由無しとせぬ。之と同時に小作爭議を絶滅し得ぬと云ふ故を以て小作立法を無價値且不必要なるものなりと斷ずる事も甚しき僻事と云はざるを得ない。

私の見る所を以てすれば、小作制度を合理化することによりて小作爭議が減少することは之を期待し得るものであるが、全然小作爭議無からしむる譯にはゆかぬ。之をなさんが爲めには地主か小作人か孰れか一方の云ひ分を悉く通し、而も其の絶對的優越の立場を確保すべき手段を講ずることが必要なのであつて、然らざる限りは爭議の絶滅を期待する譯にはゆかない。而して斯かる猛烈なる小作法又は地主法の制定は現下の我國に於て到底其の見込無きことも亦云はずして明かである。翻つて想ふに小作爭議は其の極端に惡化するに至れば多大の禍害を生むものであつて之を避けな

ければならぬが、然らざる限り強ち無條件に之を嫌ひ恐るべきものではない。固より爭議狀態それ自身を以て望ましすべきではないが、より良好にして合理的なる小作關係を到來せしむる爲めの已むを得ざる犧牲として之を認めねばならぬことがある。所謂「必要なる禍害」と目すべきことの存在は誠に遺憾であるが、人間が常に賢明にして何等外來の強制なくとも悦んで自己を犧牲として合理的改革を行ふものにあらざる以上は、かゝる禍害は社會的に存在理由を有するのである。それは恰も發熱が病の存在を示して病人をして醫療に向はしむる效あると同樣である。而して發熱が單に手段として意味ある如く、小作爭議も亦單に手段として意味あるのであつて、決してそれ自身が終局の目的ではないのであるから徒らに爭鬪の爲めに爭鬪するが如きこと無からしむるよう注意することは肝要である。

私は小作立法は敢て小作爭議を絶滅せずとも、小作爭議が蹈みゆくべき軌道を明示し爭議の範圍を限定して其の極端なる惡化を防ぎ得れば大いに意味あるものであると信ずる。更に小作立法は裁判官諸公が小作爭議に關する訴訟を取扱ふべき法的規準を提供すると云ふ點からも意味あるものであると信ずる。固より今日の如く社會事情も農村生活も急變しつゝある時に際して、變化しつゝある小作關係を人爲的に停止固定せしむるが如き立法を爲すことは策の得たるものではない。寧ろ時としては當事者間に於て相爭ひつゝも世運の進展と歩調を共にして小作關係が改善せられゆくべき法的基礎を與ふることが望ましいのである。活き動き進みつゝある社會に對する小作立法は相當の彈力性を有せねばならぬ。それは爭議の絶滅のみを其の目標とすべきではなく、從つて小作法實施後に於ける爭議件數の增減を見て直ちに其の成功と否とを判ずべきではない。否、小作法の制定は古き矛盾の一を止揚すると同時に新たに一の矛盾を發生せしむるかも知れない。此の矛盾の克服に向つて社會も法制も共に進むべきであつて、絶對的に矛盾を發生せざる社會は寧ろ死滅せる社會であるであらう。小作法は死滅せる社會の到來を庶期するものでは斷じて無い。

更に社會の一面に於ては今日の如く小作爭議により農村が不安なる際に當りて小作法を制定すべきでは無く寧ろ藉す

に際[illegible]して農民が小作問題に論ずることは[illegible]近く[illegible]すべしと論ぜられて来た。[illegible]き時期に於てこそ最も強く要求せらるゝのであつて、農民が窮乏に陥し、彼の小作紛争が一段に於て[illegible]して必要を感ぜられずに多くの人から忘れられて仕舞うものである。外國の小作立法を見ても多くは紛争によりて促進せられて居る。徒らに大事を取りて現状維持を唱ふるならば、永久に一歩をも踏み出せないで終るであらう。今日小作立法をなせば農村に於ける過渡的現象を過大視して妥當ならざる法規を制定する憂ひありと論ずる向きもあるが、過渡的と云ふならば一切が過渡的なのであるし其の中でも特に短期の一時的現象と確然たる見極めがついて居るならば其の積りで立法すれば宜しいのである。但し論者が若し小作紛争を以て此の儘に放擲するも數年にして跡を絶つものと觀察するならば私は其の餘りに樂觀論なるに吃驚せざるを得ない。一度制定したる小作法は永久に之を改むるを得ざる筋合のものではないから、若し或る條項が一時的現象に基けるものであつて其の現象が後に消滅したとしたならば、其の時に該條項を改廢して然る可きである。外國の小作法も年を逐うて屢々改訂せられて居るものが多い。何等改訂の必要無き永久に完全なる小作法を作らむと主張する人は、寧ろ虹の橋を渡ることを考へた方がよいのである。私共は斯かるユートピアンに係はつて居る閑暇を有たない。

五　小作法案に對する態度

併し乍ら以上の議論と、小作法案の内容そのものゝ點檢とは自ら別論である。小作法さへ出來れば、どんなものであつても無きに優ると云ふ議論は成り立たない。小作法が絶對に完全なるものでない限り……而して萬人が認めて完全なりとする小作法は出來る筈がない……小作法の缺陷不備による若干の社會的損害は之を免るゝことが出來ぬが、我々は此の損害と、小作法無き爲めに生ずる社會的損害との大小輕重を比較せねばならない。更に缺陷あるの故を以て今日小

作法を否定することは數年後に遙かに優良なる小作法を得る所以なりや否や、或ひは多少不滿足なりとも今日一先づ之を制定し置きて他日之を改善する方が宜しきや否や等をも愼重に考慮しなければならない。小作法が甚しく非進歩的のものにして數年後の時勢を洞察する明なきは勿論、現在の事象をすら正確に理解把握せざる底のものであつたならば、而してそれは將來に於ける進歩せる小作立法を阻止するに役立つ虞れ大なるものであつたならば、極めての保守主義者一派を除きて何人も全力を擧げて之を排撃するに躊躇しないであらう。又た小作法は其の性質上、萬人から悉く歡迎されることと不可能なるもの乍らさして特定の人々に犧牲を拂はせることも無く、云はゞ毒にも藥にもならぬ類のものであるならば、強いて之に反對する人も尠ないであらう。さり乍ら小作法が或程度迄進歩的であり關係當事者の利害關係にも多大の影響あり而も同時に相當の缺陷を有する場合に於ては、之に對して採るべき態度に就きて困惑を感ずる人が多く生ずるに相違ない。其の缺點を見て之を排す可きであるか、其の長所を見て之を支持すべきであるか、今回の小作調査會答申案の如きは想ふに之に類するものではなからうか。急進主義者より見れば物足らぬ點頗る多々であるが、保守主義者より見れば進み過ぎたりと感ぜらるゝ條項が無いでもない。玆に於てか該案は今や左右兩派より挾撃の憂き目を見て居る。而もそれ丈けに該案は現實性に富むるものとも評し得る。現代の本邦にて近き將來に實施し得る小作法は該案より餘りに掛け離れたものではあり得ぬように感ぜられる。玆に於てか單に破壞を以て快しとせずして建設的に努力せむとする人は、該案の短所のみを見て頭ごなしに之を放棄することなく、寧ろ該案の缺陷を指摘し、之を修正することにより可及的に自家の理想に近づかしむべく努力すべきではなからうか。今日の狀勢を以てすれば該案に基く法律案はいづれ普選後の新議會に於て討議せらるゝに至るかと思はれる。然らば今日の議會に失望する人と雖も、修正意見の提出を無意義なりとして差し控ゆるには及ぶまい。況んや輿論を背景とする政治が漸く近づきつゝあるに際し、各人が忌憚なき所信を吐露するは、それのみにても相當の意味あり、議會其他を動かすの力無きにあらざるをや。

今回の小作調査會に於ても、さらに之に就て政府の試案を審議しつゝある小作法の骨子をなすものであらうと思はれ實に直ちに法律案の形式を取らずして規定すべき要綱並に其の理由を説明せるに、英國に於ける各種委員會報告の形式に多少類するものであつた、法律家に取りては細微の點につき疑問の餘地を殘すべきも、一般民衆には解り易き長所がある。該案は小作に關する事項一切を網羅する趣旨でなく、先づ當面の急に應ずる意味で重要事項のみを規定したものであるから、固より規定洩れとなれる事柄が種々あるが、之は漸を以て必要に應じて補充してゆけば宜しいのであつて、此の點を以て該案の著しき欠點と看做す事は當らぬと思ふ。併し乍ら該案に規定せる事項に即して内在的批評を加へることは固より出來るのであつて、私の如きも該案に於て小作權が未だ充分確立せられざること、小作地取上げに際して小作人の實害に對する地主の賠償額最高限度が不當に低きこと、不必要なる小作期間の規定を入れて襲きの小委員會案を改惡したること、小作協約に關する規定を缺くこと等につきは不滿を感じて居る。但し該案が在來の多くの法案に見る如き翻譯臭味無きことは其の特長であつて、本邦現下の實情に專心留意せる點は之を認めて可なりである。該案が人により種々の缺陷を認めらるゝにもせよ、兎に角此の至難の問題につき斯かる形式迄纏め上げたる事は、日本農政史上劃期的重要性を有することであり、該案が法律として具體化すると否とを問はず小作調停其他の上に一種の道德的權威を有するに至るべきことは、容易に想像し得られる。該案によりて小作側は充分滿足なし難きにせよ、少くとも今日よりはより良き立場に置かるゝに至るであらうし、地主としてはあれ位の犧牲は當然拂ふべきものとして他に二三得る所あるを悦ぶべきであらう。私は今茲に此等諸點につきて詳論する餘裕を有しないが、該案並びに之に基く法律案は充分に攻究審議すべき價値ありと信ずるから、近く適當の機會に私の意見や、世間の各種批評の吟味を發表したいと思ふ。本論文は唯本邦現下に於ける小作立法の目的なり性質なりを明かにすることを以て足れりとして之を以て擱筆することゝする。（大正十五年十二月十三日）

普選に直面せる財政策

經濟學博士　太田正孝

一

財政策は、何のために樹てるか。何を目的としてゐるか。そんなことを、いまさらのやうに說かなければならぬほど、わが國の財政策は、不徹底である。幼稚である。そこに、理想もなく、經綸もない。しかも、わかつたやうな顏をして、財政を取り扱つてゐる。誤魔化さうとしてゐる。氣がつくまいと思つてゐるのは、淺はかな、罪ふかい業である。しかも、すぐ、化けもの丶正體を見すかされるに至つては、笑止千萬であると申さざるを得ない。いふまでもなく、財政の目的は、國の榮えることにある。國の榮えるには、相互國民の生活をゆたかにすることにある。すなはち、財政が、國民經濟に基礎をおくからには、これを正視して、その進歩改善をはからねばならぬ道理である。私たちは、こゝに、明年度の財政策をみるにおよんで、當局者は、はたして、いまの國民經濟が、どういふ立場におかれてゐるかを正視してゐるかを疑ひたくなる。假りに世間で想像せらるゝが如く議會が解散せらるゝものとして、當局者はその財政策が重大な意味をもつてゐることに氣付いてゐるかを疑ひたくなる。それを正視し氣付いてゐて、なほかつ、かやうなやりくちをするとすれば、その心事を疑ひたくなる。この意味において、どこまでも、當局者の心事をつきとめたい。そこに不純な分子があるならば、責めもしたい。いはゆる政權維持の手段として、財政策を弄ぶものならば、ゆるすわけにゆかぬ。——お互の國民經濟は、かゝる道具につかはれるほどのゆとりがないからである。行きづまつてゐるからである。のびて行けないからである。のびて行くどころか、さらに壓迫せられていくからである。

二

不景氣といふのは、商人の合ひ言葉とばかり放つておけな

い。お互國民全體に、かぶさつてゐる衣である。黑い衣である。陰鬱極まる衣である。業を失ひたるもの二十萬を下らず。就職難は、諸學校卒業生の前途を暗うしてゐる。事業に生色あるもの少なく、配當を減ずるはおろか、無配當の細工をする餘地さへない、決算報告に、欠損を載してゐるものも、少なくない。いはゆる元手まで喰ひ込んでゐるほどである。大正九年の春、不景氣がはじまつてから、年々會社の解散したものも多い。しかも大正十五年になつても、十一月までの間に、三千九百九十三も數へられてゐる。その額も、三億四千百萬圓（拂込資本）の多きにのぼつてゐる。十四年とくらべ、もしくは十三年とくらべて、少なくはなつてゐるが、ふるひ落されたうへに、さらにふるはれたものであるから、事態が深刻である。さうして、大正九年以來、十五年の五月までの間に、會社解散による拂込資本額をしらべてみると、十六億一千百萬圓といふ額に達してゐる。いふまでもなく、かやうに解散される一方には、新設される會社もあるし、事業を擴張していくものもある。さらに、一方に解散して、他の會社と合併してゐるものもある。が、大體において、事業をつゞけていけず、どうにもならなくて、解散したものが多い事實を認めざるを得ない。なかには、合併しやうとして、事實會社財産をしらべてみると、飛んだボロを出したものさへある。日本製粉會社のごとき、年々一割の配當をしてゐたが、日清製粉會社と合併するに當つて、話のすゝんでいくうちに六百萬圓も穴のあることがわかり、つひに、日本銀行をして、臺灣銀行を通して救つてやつたほどである。――また、解散するまでにならなくとも、資本を減じて、不景氣に對應したものも、少なくない。大正十五年の一月から十一月までに、二百八十四社が減資を行ひ、その額一億九千八百萬圓の高きを示してゐる。これを十三年および十四年の同期間とくらべてみると、すべて多い。しかも、大正九年の不景氣から十五年の五月まで通してみると、五億四百余萬圓に達するのである。かやうに貧乏人は益々ふへるばかりであり、金もち若くは有産者たちも次第に暗い霧につゝまれつゝあるのである。

三

私は、かやうな不景氣の衣につゝまれてゐるお互經濟生活の内輪を、もつと突き込んで、さぐつてみたい。それには、まづ對外關係をながめてみなければならぬ。――國際勘定はどうなつてゐるであらうか。

輸入超過は、大正八年から、つながつてゐる。大正三年のヨーロッパ戰爭がはじまつてからの數字を見る。と、十四年まで

の月二億八百萬圓に上つて、そ[illegible]つて、に出超になつた頃は、十四[illegible]しのない。[illegible]十一[illegible]圓の輸入超過になる。これに、十九年は、もう不[illegible]を[illegible]入れて、貿易状況もよくなるだらうと思ふ[illegible]つてゐたにかゝはらず、やつぱり悪るい。上半期も、豫想以上の入超であつた。下半期になれば、いつものやうに出超に向ふべきものと考へてゐたが、その期待も、何とかのフンドシのやうにはづれてしまつた。九月の中旬には、三百七十萬圓の入超を見たといふやうに未だ曾てない赤い數字を示してしまつた。それで、貿易が季節的におくれてゐるからと、氣安めをいつて暦を繰つてゐるが、その後も、香ばしい結果は、あらはれて來ない。勿論十四年よりも、入超の額は多い。おそらく五千萬圓見當も多く、入超總額三億二千萬圓見當を數ふるに至るではないかと見られてゐる。さうなると、大正三年からの入出超勘定は、差引十四億といふことになる。――それならば、貿易外の勘定はどうなつてゐるかといふに、これもよくない。船成金の出たころのことは、本當の夢物語になつてしまつた。思ひ出すのも馬鹿げてゐる。運賃收入の減じて來たばかりでなく、利子も、保險料も、口錢も、外國からもたらされるものは少ない。遊覧客とても、物價の高いのに尻ごみしてゐるほどである。

[illegible]あるが、[illegible]あるし、大正十[illegible]年の秋に、[illegible]三十八ドル[illegible]となつたときにくらべると、いかにも[illegible]しく恢復してゐる。いまは、四十九ドルに達し、[illegible]價に近くなつて來てゐる。しかも、爲替の恢復するとともに、輸出貿易が思はしくいかない。ことに輸出の大宗といはれる生糸と綿糸とは、目も當られぬみぢめな狀態にある。とくに生糸業者は、一方には、操業休止（十一月十八日から末日まで）の決議をするやら、他方には政府筋に泣きついて、普通の擔保價格から百圓方高めて、日歩も最低一錢八厘（市場のは一錢三厘）で、二千二百五十萬圓を、日本銀行から（帝蠶倉庫に）融通してもらう（正金銀行も無手數料で）ことになつて、やつと息をついてゐるほどである。もと〳〵爲替相場のよくなつたのは、正貨を現送したり、外國筋の思惑があつたり、ロンドン銀塊の低落したことにもよるのであるが、とにかく、輸出貿易には少なからぬ打撃を與へたのである。また、綿業界とても、綿絲二十萬梱・織布一億碼といふ生産過剩であるうへに、奉天票や銀地相場も悪るく、かつ高い原棉を持つてゐるので、どうにもならぬ始末である。大正十八年八月一日から行ふことになつてゐる深夜業廢止のことたども、いづれは、斯界における頭痛の種

である。

四

ひるがへつて、国内関係をみても、世界の風で消えない事情がある。不景気を作ゐる条件がある。いふまでもなく、国際関係も、国内関係も、互に影響し合ふものである。

とくに、アメリカや英国などの景気が深く響いて来るわが国は、輸入超過になると、金融も窮んで来る、株もさがる、商売も活潑に行はれなくなるほどである。――この国内関係で、不景気になつて苦しんでゐるのは、物価である。物価が下落する。だん／＼低くなつて来たものゝ、まだ高い。米価、年じりの最高のほどまつたと云ふ同じものと、十九年の十月は、八割分に高くなつてゐる、わが一つも大部に低くなつて来たといつても、まだ戦前よりも、二割方高い。これは、主として、ゐ税時代に回復して来たからにもある。物価がたつて来たから、物の価が低まつて来たのである。しかし、これも、戦時通貨が下に以上よくなる見込もないから、よくなつたとしても、なかなか何でもとりかへさない。まだ、これには幾分ともいはれないで来ることとなつてゐるから、これによつて物価を今よりも上げるわがあらうとは思へない。また、其の他いろ／＼の物価にゐよう。が、これも、第一回の豫想は五千九百余万石で、豊作とせられてゐたが、第二回の發表によると、五千六百余万石であるから、昨年度の需給関係よりも不足するであらう。だから、これによつても、物価を下げる力が働きかけようとは思はれない。また、大部に物価がさがつて来たのは、不景気につれて、需要が減へたからでもある。けれども、各種の物について調べてみると、おもの生活必需品が、低くなつてゐない。言葉を換へていへば、おもの消費力を減じやうにも減じられないものである。従つて、さういふ物価をいま以上低める力は弱いものであると見なければならぬ。しかも、かやうに各方面からみて低落するりのない現在の物価は、海外国にくらべても、ドイツと高いのであるから、やりきれない。すなはち、イギリスよりも、十月の物価（戦前二の六割方余方高）は、一割あかくも高い。アメリカ（戦前二の円割八分も高）とくらべては、一割八分以上も高くなつてゐる。まさしく、戦前における国内の物価に比し最近は、割してゐるさうにに物価が高いから、消費者の苦しむのは、いふまでもない。生産者としても、原料の仕入などに、困まる。商業は、申すまでもなく、農業にしても、肥料代や何代などが高いために、生産費が高んで来る。そして物価が高いのにつれて、賃銀も高くなつてゐる。賃

景氣が良くな[illegible]
あるが、生活を脅かされてゐる。[illegible]
い。

これから、いまの不景氣のなほらないのは、事業をするものにとつての油ともいふべき資金を得るのに利子が高くて、どうにもならぬからである。これではソロバンがとれない。借金を整理して事業をもちなほしていかうとするにも、利子が高いため、整理が、はか〴〵しく進まない。世界の一等國といはれながら、その金利をみると、いかにも高くて、肩もならべられない。十五年の十月二日に、日本銀行が利下げをして、一歩八厘にした。時機を失したことや、銀行業者の反感なども手傳つて、一般の市場利子はさがつて來ない。が、假りに日本銀行の利子を以てするも、年六分五厘七毛になる。しかるに、イギリスの英蘭銀行のそれは、五分（千九百二十五年十二月三日改定）ではないか。また、アメリカの聯邦準備銀行のそれが、四分（千九百二十六年八月十二日改定）ではないか。そんなに安い金利で仕事が出來るのであるから、わが國の事業界が、不利な立場に置かれるのは當然である。生産するものにとつても、商賣していくものにとつても、うまくいかない。事業界に、活氣の出やうはずがない。

五

かう書いてみると、なげかはしいことばかりである。――ま[illegible]業者からの、[illegible]、貿易は、年々入超をつゞけてゐる。しかも、爲替も、これ以上の低るのは困難であり、物價も、いまより下げるには、さらに一段の工夫を要する。金利も下げなければ、事業をすゝめるにも、整理をするにも、うまくいかぬ。――これが、いまの不景氣と、その原因とである。これを救ふのは、お互の生活にとつて、最も大切な問題である。どうすればよいか。

手を加へてみるか。たとへば、さきにのべたやうに、日本製粉と日清製粉との合併（話が頓挫してゐるが）にあたつて、特殊銀行が融通してやるとか、生糸業者を救濟するために、日本銀行から多額の金を融通せしめるごときである。もとより、ありあまる救濟資金があつてのことならば格別であるが、到底各種の事業に對して、さういふ力を借すことの出來ないのは、いふをまたない。否、さういふ人爲を加へて、いまの不景氣を恢復し、あるひは、お互の生活の脅迫をゆるめることが出來るはずがない。私のこれから說かうとする財政策にしても、いはゆる積極策によらば、いまの不景氣の衣がぬげることになるとは

思はれない。この文を草してゐる十二月八日も、例の政友會と政友本黨との提携について、本黨からの覺書にある不景氣對策については手を取つていかう——政府のやりくちを攻め立てやうとするのであるが、私たちとしては彼等の主張が、世上に傳へらるゝ如き積極的施設を以てするのであるならば、起死回生的に現狀を救ひ出し得るとは信ぜられない。問題は、國民生活に對する財政のやりくちであるが、それは、とくにわが國の如く、財政によつて國民の經濟に影響することが多い國にとつては、充分注意しなければならぬ問題である。稅にも、ひゞく。公債にも、影響する。少なからず生活と事業とに影響する。國の事業——施設もしくは新規の事業が、經濟界に影響する。この意味において、私は、當局者が、果して如何なる態度を以て、明年度に處せんとするかを論及してみたい。

六

當局者は、明年度の財政策に對して、「依然として緊縮方針」を採つていくといつてゐる。少くとも普通の解釋によるならば、「切りつめていく」といふのであらう。經費の總額としても、前年より少なくなるといふのであらう。はたしてさうなつてゐるか。

槪算として大阪に於ける關西銀行大會(十一月廿七日)において、片岡藏相は、斯う發表されて居る。即ち明年度の豫算は、經常歲出十一億七千五百余萬圓、臨時歲出五億五千五百餘萬圓、合計十七億三千餘萬圓となつてゐる。これが藏相のいはゆる緊縮豫算の數字上の表現である。いまお互によつて認められてゐる十五年度の豫算は、追加豫算としてみられたものも加へると、十六億三千九百餘萬圓になつてゐる。それとくらべてみると、明年度は九千餘萬圓も多くなるではないか。それが、緊縮豫算であるといひ得るか。さらに、この十五年度の豫算は、そのうちに、明年度に對して當然うつちやつてゐても增してやらなければならぬ七千九百萬圓といふものがある。同時に當然減額すべき一億二千二百餘萬圓がある。この當然增減すべきものを差別してみると、十五億九千六百餘萬圓になる。それは、とりもなほさず、十六年度の豫算を編成するについての標準豫算とすべきものである。新規事業をしないものとすれば、その額に落ちつくべきものである。尤も、このうちに、豫定の計畫を變更したり、自然に不要となつたものが五百餘萬圓ある。さらに當時局が、鋭意努力して經費を節減したり、あるひは事業の繰り延べをした額が三千九百余萬圓にのぼつてゐるとのことであるから、合せて四千四百余萬圓は、さらに、その標準豫算から差引

[illegible]なる、これでおさめておいてくれゝば、政府の表示された文句どほり緊縮豫算である。しかるに、十七億三千餘萬圓とは何ことごとく比較すれば三億三千七八百餘萬圓の增加となるではないか。それが何につかはれたかは、後で論評するとして、異常の增額である。少なからぬ膨脹豫算である。未曾有の大豫算である。このうちには、震災善後諸費としての一億七八千萬圓も含んでゐるが、それを引いてみても、やつぱり多い、すなはち、震災前の大豫算として、いまの當局者が野にあつて大に責め立てた大正十年度の決算十四億八千九百餘萬圓とくらべても、ずんと增してゐる。また、軍備縮少をした前の大正十一年度の決算十四億二千九百餘萬圓とくらべても、多くなつてゐる。しかも、さきに述べたやうに、物價が次第に下落して來て諸費の減ずべきものがあることなども考へのうちに入れるならば、さらに、その開きは大きくなるわけである。そしてまた、いづれは提出すべき追加豫算のことも考へるならば、明年度の豫算は、おそらく十八億圓を突發するのではないかと思ふ。——それをしも、緊縮豫算といふのは、私たちのどうしても受けとれぬことである。ウソである。假面をかぶつてゐる。一寸ソロバンをとつてみれば、すぐ正體がわかる。それにしても、なぜ緊

[illegible]

七

もと〳〵いまの當局者は、その野に在るの日において、ながく消極政策なるものを信條としてゐた。そして、いはゆる護憲三派の內容をつくりあげるとともに、私たちからみれば不充分であるが、その色あいを出して來た。大正十三年度の豫算も、大正十四年の豫算も、その態度で進んで來た。鳴物入りで、はやし立つたほどではないが、ともかく行政財政の整理もした。それは、少くとも積極政策を信條とする政黨のやりくちとは、ちがつてゐた。この意味において、物價もさがつて來、爲替相場の恢復にも助くるところがあつた。そして、一般事業界にも、整理をうながすことになつたことを認められる。——しかるに、かういふやりくちは、派手でないからでもあらう、また、積極政策といへば景氣でも來るやうに誤解する世間を氣がねしたでもあらう、次第に、實際のうへにも、消極政策を口にせず、何となくいやがるやうな態度に移りかけて來た。現に、私の見るところでは、大正十五年度の豫算とても、一億圓からの增額をしてゐるので、おどろいたほどである。それでも、他の政黨による場合よりも少ないと思ふ。が、十六年度の財政策を

樹てるに當つては、さらに少なからず消極策を氣にしたあとがみえる。鐵道を布いてくれなどいふ地方的利益を眼目とした——いはゆる黨員の要求もあつたにちがひない。まんざらなこともいへない。しかも、世間に出した手形の手前もあるので、いまさら名義を積極政策とも名づけられない。そこで考へ出されたのが、適當主義の名である。もとより公表ものには、これを歌つてゐないが、世間周知の合ひ言葉である。積極政策を加味する意味のカモフラージである。おそらく、財政上の信念をもつものとして、いまの場合、積極政策を加味することの必要を認めないことは、わかつてゐる。たゞ自黨のため、政權を維持していくために、積極政策といへば景氣の生れるものとする愚衆におもねらんがために考へ出されたのである。——一體、適當主義などいふものが、主義といへるかは、問題とするまでもない。反對に不適當を主義とするものなどのあらうはずがないからである。水にはいつておよぐのは、主義でも何でもないからである。とかくは、ものごとを成り行きによつてやつていかうとする白紙主義（これも主義ではない）の流行する世に、ふさはしい合ひ言葉であらう。しかし、政治は、信念を以て當り、はつきりした態度をとるべきものである。ごまかしは、いかない。策なきは、さらに、いかない。もとより、七年もつゞいてゐる不景氣は、誰れにとつても、面白いものではない。が、はじめの振れ出しのやうに、消極政策の眼目とする經濟財政の整理のためには、當然それを忍んでいくべき約束ごとではなかつたか。かりに積極的政策を加味するとして、物資と勞力との需要をよびおこし、これによつて景氣の世を出現するとしても、さほどに余るほどの財源があるはずがないではないか。新稅や增稅の出來るわけがない。それどころか、いまの負擔にさへ苦しんでゐる。公債とても、募る餘力も乏しい。そして、その高は、日に增すといつてよいほどの狀態に置かれてゐる。しかも公債を募るだけ、世間から事業資金を奪ふことになる。かういふ意味から、私たちは、いまは、一路消極の道をふみ、やつぱり、財政經濟立て直しのために、いま少し忍んでいくべき秋であると信ずる。

八

當局者は、とにかく、緊縮主義といつてゐるが、その實、積極政策を加味してゐることは、明かである。しからば、どういふ役目に向つて、その必要を認めたのであらうか。私たちは、辛棒して、それを檢討してみたい。

片岡藏相は、新財政策においては、年來の懸案を解決したと

いつこゐる[illegible]
どんなものであるか。

一、海軍補助艦製造費の追加——總額二億六千一百余萬圓にして、五ケ年間の繼續事業とし、明年度割は、四百七十余萬圓である。

二、北海道第二期計畫による拓殖費の増加——千百九十余萬圓。それは、北海道における收入と、拓殖費以外の支出の差を以てし、財政計畫としては、毎年二千五百余萬圓を充當する見込である。

三、小學校教員俸給費國庫分擔額の増加——五百萬圓。

なるほど、三つとも、年來の問題である。海軍問題は、ワシントン會議後に於けるヨーロツパやアメリカに於ける製艦關係もあり、海洋策戰に大巡洋艦をつくらねばならぬとしても、そんなに急を要するものであらうか。私たちとても、イギリスが、多年保守黨一派によつて目論まれてゐたシンガポールの要塞を建造するボールドウインの案も知つてゐる。財政が不如意であつて、植民地にまでその經費を分擔せしめてやらうしてゐることも知つてゐる。しかも、それがわが國を假想の敵國としてゐるのではないかとも思はれてゐる。が、こゝに海軍費として昨年の分と併せて總額三億圓にならうとする大計畫をするには、余程の理由[illegible]ることになり、國民經濟の[illegible]べきものであるかも考へねばならぬ。況んや、國策といふのは、海軍側の主張であつて、もしツムジを曲げられたならば、內閣の運命にもひゞくといふことだけでは、この案に絶對價値を認めることは出來ない。これは、こと國防に關するとはいひながら、あるひは國防に關することであるから、充分國民に納得せしめる理由のなからねばならぬ。私たちは、國際の現狀から押せば、かほどまでに急いで手をかけなければならぬ問題とは信んぜられない。況んや、イギリスのシンガポール要塞建造案を以て批難するもの多き今日においておやである。北海道拓植計畫も、わるいとはいはぬ。とくに産米増加の見地からも、よいことにはちがひない。しかし、一日をゆるがせにすることの出來ないことゝは思はれない。國民一般の經濟生活をよくするためにする消極的方針を犧牲にしてまでやるべきことゝは信じられない。若しそれ、義務教育費の國庫分擔問題にいたつては、前議會において、政府と政友本黨との妥協によつて相當增額し、いまは七千萬圓にも達してゐるではないか。當初寺內內閣當時における臨時教育會議の決議による——全國小學校教員俸給の半額を國庫で分擔していくといふ額を超してゐるほどではない

か。もとより、地方財政は苦しい。とくに、小學校の教育費に少なからざる負擔をしてゐるのであるから、國庫で負擔してくれるほど多々色々辨ずるにちがひない。けれども昨年とちがひ、非常に差し迫つた問題とは思はれない。この問題は、もと〳〵政友本黨が力を入れてゐる問題である。前議會においては、憲政會に地租一歩減を讓らせたほどの主張をもつてゐる。從つて、かういふ額をかゝげてゐるのは、場合によつては、政友本黨と妥協する糸口を開いてゐるのではないかとさへいはれてゐるのである。さらに地方財政にゆとりをつけるやうな案を出しておくことは、想像せられる解散後の選擧戰にのぞむ看板とするのではないかとさへ思はれてゐる。要するに、三つとも、懸案にはちがひない。しかも、いま是非解決しなければならぬほどのものとは思はれない。內閣の命を延ばすためには、理由となるかもしれぬ。しかし、一般の國民經濟を立て直ほしていかうとするためには、ゆづつてもらうだけ、延ばしていけだるけ、よいことであると思ふ。

九

かういふ懸案解決のために多額の經費を見込んでゐる以外に、「國運の進展」「社會の福祉を圖るべき施設」をなすためであると稱して、いろ〳〵な新規費目をかゝげてゐる。すなはち、つぎのやうたものである。

一、陸軍年限短縮に伴ふ經費──四百五十餘萬圓
二、產業の助長獎勵に關する經費の增加──八百餘萬圓
三、通信現業員その他給與改善費──八百餘萬圓
四、金鵄勳章等年金の增加──三百餘萬圓
五、復興事業費貸付金ならびに同補助の增加─千九百餘萬圓
六、剩余金による國債償還の增加──四千四百萬圓

そのほかに、移民保護獎勵とか、貿易振興とか、荒川狩野川大淀川改修とか、横濱築港費の追加とか、名古屋港修築費の補助とか、銀行遮民金融機關檢査官設置とか、人口食糧問題調査とか、航空路設置などいふための經費を見込んでゐる。どれが、そんなに、誇り得る施設であるか。各省からの要求をはねつけきれたく、分取りに應じてまとめたといふよりほかないものである。また、何々の調査費といふごとき、責任と信念とを以てする政治家の採らざる費目をかゝげてゐる如きは、甚だ面白くたい。たゞ、國債償還の增額については、特筆すべきことがある。おそらく、いまの內閣の財政策として論議せらるべき價値のある唯一のものであらう。しかし、それは、剩餘金とも關係し、歲入問題に觸れる點も多いから、その場合に一つしよに說きたい。

要するに、[illegible]、このように[illegible]國を貫いた一億三千四百余萬圓のうちには、目覚しい、非常に金を要する費目を見出されない。しかも、役所として認めた額は、意外にも多くなり、本年度の大擴張となつてしまつたのである。否、第二次税制整理の財源まで台なしにして、各省の要求を認めて、かやうな数字を現出したのである。積極的政策を加味せる適當主義も、何人にも、緊急な事業としてうなづかれるほどのものならば、まだしも、たゞ、事なかれ主義により、あるひは選擧のためにする地方民を釣る道具として、あるひは内閣の壽命を引きのばす材料として、かゝる豫算を作つたとするならば、まことに言語同斷であるといはねばならぬ。かくいへばとて、野黨のいはゆる臆面もなく積極主義を以て景氣を作り出し得るものとしてゐる人たちの肩をもつのではない。私たちは、いまの政黨のどれもが、國民經濟の現狀に即して策を樹てゝゐるものがあるかを疑ふものである。それはさておいて、かやうな新規事業をするには、どんな財源を以てしたのであらうか。私は、經費の立場を去り、歳入の見地に移つて、しらべてみたい。

歳入は、經常部十四億五千八百余萬圓、臨時部二億七千二百余萬圓、[illegible]千余萬圓[illegible]。[illegible]財政を切り詰めしてもらひたいといふのは、[illegible]、[illegible]てその財源としての歳入、とくに國民の負擔となるべきものを[illegible]くしてもらひたいといふことである。この負擔のうちには、租税もあれば、將來の國民の負擔となる公債もある。租税と名はつけずとも、專賣とか、郵便關係の收入などもある。かういふ負擔を輕くすることによつて、相互の働きを自由にし、お互の生活をうるほしていきたいからである。重い荷を負はされてゐては、どうにもならぬからである。收入なり所得があつても、出てゆく道が多くては、どうにもならぬからである。もとより、これは、國への御奉公である。拒んだり、否むといふのではない。たゞいまの形においては、お互の生活が延びていけないから、延びていくことを第一義としてもらひたいといふのである。

まづ經常歳入を見ると、前年度のそれにくらべて、八千四百余萬圓を増してゐる。その大部分は、いはゆる自然増收と名づけらるべきものであらう。大正十六年の景氣をどうみたかは、當局者の口ぶりでは、相當もちなほす腹をもつてゐるらしい。尤も、あとにも述べるやうに、年々少からざる剰余金を生み出す原因が、經常收入にあり、歳入の見積りが過小であるとの批難

もあるくらいであるから、この額は、あるひは、相當のものであらう。私たちは、剩余金による公債償還の増額を計畫をしたからとて、まさか歳入見積を、例年よりも輕くするとは見ない。あるひはまた、本年のやうに、貿易が逆調になつて、入超による關税收入を多く見込んだのでもなからう。否問題となるのは、それほどの自然増收があるのならばこれを新規事業に向けるよりも、お互の負擔そのものを輕くする方に向くべきものではなからうかといふ點にある。たとひ景氣の状況において、財産や所得の増進率において、くらべにならぬとはいひながら、アメリカあたりの財務當局のやりくちは、そのやうであつて、それが學者によつてジヤスティフアイされてゐるではないか。この意味に於て、私たちは、租税の整理すべきことを年來さけんでゐる。尤も、前議會において、永年手をつくべくしてつけなかつた税制の整理をした。その種目も、所得税・地租・營業税・資本利子税・相續税といふ直接税よりして、酒税・醤油税・通行税・清涼飲料税・織物消費税・賣藥税・骨牌税ならびに煙草專賣(議會關係ではないが)などの間接税に及んでゐる。負擔の公平を看板にして、廢減税もしくは新税に振り替へたものもある。また、文字どほりには受け入れることは出來ないが、免税點の引上とか、綿織物税廢止などの社會政策的の色どりもしてゐる。

しかし、その聲明にあるとほり、歳入に左したる増減のないことを以て、ソロバンをとつてゐる。私たちのいふのは、さうでない。負擔の公平は、もとよりよい。社會政策的の整理も、もとより當然である。しかも、問題としては、全體として、租税の減額といふことに落ちつかしめねばならぬ。さうしなければ、整理の第一義に缺けてゐる。それには、國家事業も、ちゞめる。役人の整理もする。さうして、租税を減額しなければならぬといふのである。しかるに、事實は、私たちの期待にそはないでゐる。新規事業一億圓もみとめるがためには、歳入を減ずるなどのことは、どうしたつて出來ないからである。――それが、十五年の財政策に對する私たちの批難である。そして、議會においても、第二次の税制整理をすべき要求多く、政府また、これを聲明して來てゐる。しかるに、そのことがないのは何故か。尤も、そのことについて、片岡藏相は、いふだけはいつてゐる。やつぱり、負擔の均衡をはかるためと、社會政策上に於ける考慮と、さらに、税務行政上の便宜といふ立場から官民相互の手數を省くといふ趣旨で第二次の整理をし、來るべき議會に提出するといつてゐる。そして、その税の種目は、登錄税、印紙税、砂糖消費税などで、これによつて、租税及印紙收入に相當の減少を見るであらうとのことである。しかし、こゝ

に稍[illegible]といふのに、[illegible]いま[illegible]いことに、[illegible]となれば、留保せられてゐる剰余金なども、それ／＼運用僅少などの財源としてきまつており、減税の充手となる額は、しれたものであるからである。ほかに、どんな財源と工夫があるか。傳へらるるところによれば減税は高々二百萬圓見當のものではなからうかとのことである。私たちが、減税によるお互の負擔を軽めやうといふのは、こんな額ではない。否、私たちからいへば、さきに述べたやうな新規事業に手を出しさへしなければ、もつとずんと多くの減税を行ひ得ることゝ信じてやまない。さらに、突き込んで申せば、當初財政當局の方針としては、これよりも多額の減税計畫があつたけれど、各省からの要求に迫られて、やむなくこれに應じたゝめ、わづかばかりの、しかも、さきの聲明に對する申譯までに整理のお茶を濁さうとするのではなからうか。

二

私たちは、さらに、臨時部歳入について、批評の筆を進めたい。それは、前年度よりも、四千萬圓見當増してゐる。公債は、六千四百萬圓（ほかに特別會計のものがあることは、あとでのべる）で、前年度より一千六百萬圓少なくなつてゐる。財政上に、一[illegible]、[illegible]一千[illegible]い。その他の雜收入も、前年よりは、一千[illegible]増となつてゐる。かうしてみると、歳入歳出の辻褄を合せてゐるのが、公債と剰余金であることは、多言を要しないことである。公債については、項を改めて說くこととして、剰余金を一億六千六百余萬圓も持つて來なければ、明年度の計畫が出來ぬとは何事であるか。もとより、これは、本年のみに限つたことではない。近く十四年度をみるも、一億四百萬圓をつかつてゐる。十五年度も、一億二千七百余萬圓を當初繰り入れ、さらに追加豫算のために四千一百余萬圓を繰り入れたから、一億六千七百余萬圓になつてゐる。明年度とても、追加豫算の關係を考へるときは、一億八千萬圓にもおよぶであらうと思ふ。しかも、剰余金繰り入れによつて歳計の辻褄を合せていくことは、いまの財務當局、いまの内閣にかぎつたことではない。ほとんど最近歴代の内閣は、みなさうしてゐる。しかも、その額が少なくない。話は少しちがふが、甚しきは、多額にのぼる責任支出の財源にしたものさへある。國民からとりあげた金を、勿體ないことは別として、議會には事後に承諾を求むるやうな形式で、何億といふ金をつかはれたほどである。それはさておいて、明明となつてゐる明年度豫算において、かやうに多額の剰余金を見

込んだのも、やつぱり、少なからぬ新規事業を見込んだのと、因果の關係にある。なるほど、明年度においては、公債の償還增加をするために、四千四百余萬圓を剩余金によつて計畫してゐる。しかし、それを差引いてみても、なほ、一億二千二百余萬圓となり、それはとりもなほさず十五年度の當初の剩余金繰入れ額と、ほとんど同額となる。いづれにするも、少なくない。いはゞ剩余金は、國庫に殘つたヘソクリ金である。親からもらつた財布の金を、わけもなく費かつていくのは、誰れでも出來る。それを有用につかつていつてこそ、腕がある。さういふ意味からすれば、剩余金で歲計の辻褄を合せていくのは、平凡な財政家のやることであると申さねばならぬ。否、素直に申せば、新規事業の財源とする程度を低め、もしくは無くして、それを以て、公債償還にふりむける額を更に多くし、あるひは減稅の財源とすべきものであると信ずる。家をもちなほしていからといふのに、借金はそのまゝとし、あるひは、やりくりのためには借金もやめないことにし、ヘソクリ金で、さらに新しい事業――それも差し迫つた目的でなく、いままで折角減じて來た雇人もふやすといふやうなために用ゐて、それでもつて、當初の目的が達し得られるかは、八幡知らずの財政は別として、何人といへども、答案を書くのにこまるものはなからう。

二

私は、公債の計畫に話をすゝめる。これは、募る計畫と、還す計畫と二つある。仕事をするために、どうして借金する。いまある借金をどうする。これからも借金するであらう場合をどうする。――さういふいろ／＼の場合に觸れる問題である。また、いままで說いて來たのは、一般會計に關することであつたが、その募債關係等については、特別會計との關係もみなければならぬ。

明年度に募集しやうといふ公債は、さきに述べた一般會計における震災善後公債の六千四百萬圓のほかに、特別會計においてつぎのものがある。

一、鐵道公債……五千九百萬圓
二、朝鮮事業公債……千九百萬圓
三、台灣事業公債……五百萬圓
四、關東州事業公債……百萬圓
五、樺太事業公債……二百萬圓

そして、一般及特別會計を合してみると、一億五千萬圓で、前年度と同額である。一般會計が減じて特別會計が增したのである。震災善後公債は、十四年度が一億圓、十五年度が八千圓で

あるから、[illegible]六百萬圓を減じたのは、從來事業の[illegible]いからである。それをよいことにして、特別會計の負擔を増したのである。乙上に鐵道にあつては、不景氣等に伴ふ豫定の收入を得られない埋草として、十五年度に比して一千九百萬圓も募集額を増さうとしてゐる。そして、現内閣の方針であつた改良を主とし建設を從とするやりくちも、どうやら反對にならうとしてゐる。かういふ特別會計の公債は、それ〳〵將來生ずべき利益を當てこんでゐるのであるが、その日の來るや頗る遠いといはねばならぬ。いはゞ、償還能力の弱いものである。それは別にするも、國民の經濟生活を持ち直す必要以上に大切で、いま急いでやらねばならぬ事業として、それに向けらるべきものといふ強い主張はない。なほこれらの公債は、一般市場に募らない。いはゆる非公募であることを表示してゐる。これは、三年もつゞいて多く現内閣得意の財政標語である。言葉をかへていへば、郵便局を通して賣り出しまたは大藏省預金部において引受けしめやうとする特別發行の方法によるのである。非公募であるがゆえに、世間の事業に用ひらるべき資本を吸ひとるやうな結果を生まないことを、當局者は述べたてゝゐる。果してさうであらうか。しかし、いやしくも公債となるからには、たと[illegible]おはない。[illegible]借りやうとする人たちにとつても不利になる[illegible]も、その持つてゐるものゝ價が低くゝなるために、資金の融通にもひゞかないわけにはいかぬ。これよりもなほさず、民間の事業界もしくは金融界を壓迫するものではなからうか。如上の意味において、私たちは、明年度の公債計畫について贊成することが出來ない。それも、いまある公債額でも少ないといふのならば、まだしもであるが、政府當局とても、それを氣にして償還額も増さうとしてゐる一方に、かういふ公債計畫を樹てるのは、私たちの諒解に苦しむところである。持ち上げた鈴の音が聞こへないのかと、問ひたくなる。

三

政府は、明年度は、從來の減債基金制度により前年度はじめにおける國債現在高の萬分の百十六の償還を爲すほかに、前々年度に新に生じた剰余金に對し最低四分の一を下らさる償還をしやうといふ新計畫を發表してゐる。そして、十四年度に生じた剰余金は、一億七千八百余萬圓になつてゐるから、その額は四千四百五十一萬一千圓になる。その目的とするところは、何

か。――現在非常の巨額に達してゐる公債をこのまゝにしておいては增すばかりで、その利子だけでも少なくない。從つて公債の市價も、低落して來る。これから新に發行するにも、條件が不利である。さなきだに金融市場を壓迫してゐる。かういふ點を救濟するには、どうしても償還額を增さなくてはならぬ。言葉を換へていへば、かうして償還額を增すことによつて、その騰價を高め、民間資金の供給を潤澤にし、金利を引下げ、かたがた財界整理の爲めに資せようとするのである。また一つには、別に金融制度を改善する施設の一つとして、商業手形を普及せしめ割引市場を發達せしむるために、日本銀行をして、その割引政策を變更し、國債擔保の貸付よりも、商業手形を一二厘方の低利で優遇せしめやうとする計畫をもつてゐるが、それが實行されることになると、國債の市價に影響するから、この際償還額を增しておいてその市價の維持をはかる必要もあるからである。

なるほど、いま公債は、驚くべき額に達してゐる。大正十五年十一月末日現在額は、內國債三十六億九千二百余萬圓、外國債十四億七千八百萬圓、合計五十一億七千余萬圓といふ數に達してゐる。大正元年度末には、二十五億七千三百余萬圓であつたから、二倍以上になる勘定である。これは、どうして增したのであらうか。さきに述べたように、減債基金による償還あるではないか。大正元年度から十四年度までに四億五千五百萬圓も償還してゐる。しかも、公債は、同じ期間において、二十六億五千余萬圓も增してゐるから、そのくらゐの減債では追ひつくはずがない。さらによくみると、同期間に於ける一般會計所屬の公債は、四億五千三百萬圓であるから、減債基金による償還額よりも、二百萬圓少ない。すなはち、一般會計だけの募債であつたなら、いまの減債基金法だけでやつていつても公債は增さなかつたわけである。言葉を換へていへば、その以外の二十億九千八百余萬圓は、どういふものであらうか。――それは、鐵道や植民地などの特別會計のものや、民間の事業救濟などのためにやつた、いはゆる交附公債や、いままでの公債を借り替へるために增していくものから成つてゐる。

一四

一體、わが國の國債償還の方法は、いくたびか變つて來てゐる。古るい話は措く。日露戰爭によつて國債が著しく增して來たため、桂內閣が、明治三十九年減債基金制度をつくつたのが、いまの制度のはじめである。それは、一億一千萬圓を軍事公債の元利拂ひとし、さうして元金の減じて來たための利子は、その次

その結果[illegible]に於て[illegible]
三十四年中に、當時の公債を[illegible]
つた。これを、明治四十一年になつて、第二次桂内閣が、元金の償還は、年額五千萬圓を下るべからずとしたから、さつと從來の倍額となつて來た。そして國債市價を高め、以て四分利公債の借換を行つて、味啥をつけたのである。大正四年大隈内閣のとき、これを三千萬圓とするとともに、非募債主義を執つた。寺内内閣になつて、大正七年五千萬圓に還元し、原内閣になつて、大正九年から向ふ四ヶ年間國債償還の繰り入れを中止した。加藤友三郎内閣になつて、十二年度から（すなはち一年早めて）繰り入れをすることになり、今日におよんでゐるのである。一言にして申せば、この制度によつては、國債を償却していくといふ目的は達せられなく、たゞ、その市價を維持するうへにおいて効があつたといふにすぎない。だから、こんど増額するといつても、やつぱり、市價を維持する以上の效はないではなからうか。――それにしても、剰餘金を、かういふ方面につかうのはよいことであらうか。片岡藏相得意とし、現内閣の一枚看板として掲げるところであるから、少しく立ち入つてしらべてみたい。

詳しい問題として[illegible]てもなく、[illegible]は、[illegible]して[illegible]るものであるか、それは、現實の收入歳額（豫定[illegible]に對しないものはふくまない）から、現實の支出歳額（小切手を發出しても支拂未濟のものは含まない）を引いて、現實に國庫に殘つたものである。だから、剰餘金は、單純な豫算の殘額ではない。が、豫想以上に歳入がはいるとか、歳出に不要のものがあつたときに生ずる。言葉を換へて言へば、歳入を控へ目に見積れば見積るほど、また、歳出を大きく見積れば見積るほど、その勢を馴致するはずである。つまり、豫算技術から結果する問題である。この準則としては、古るく定められた明治二十四年三月大藏大臣通達歳入豫算算出規程とか、明治卅三年六月閣令第十九號各省豫定經費算出概則といふやうな、應の定めがある。歳入については、法規で定額がきまつてゐたり、年々増減の甚しくない税などは、これを見積るのに苦労はないが、所得税とか營業税とか、消費税とか、專賣その他の官業の益金などは、世のなかの景氣でその收入がうごいて來るから、さういふものを算定するのにむつかしい。歳出とても、人件費にせよ、物件費にせよ、きまつたものの動きの少ないものは何でも

ないが、物價により、爲替相場により動くものとか、永い繼續費で見當のつかないものの如きは、厄介千萬である。そして、大體において、歳入を少し控へ目に、歳出を少し餘裕をみておくといふ原則が行はるべきである。――が、事實は、毎年多額の剩餘金を生み出してゐる。いまこゝに大正元年度以降の數字をあげてみやう。（單位千圓。）

大正元年	九三、七九六
二年	一四八、三四一
三年	八六、二二七
四年	一二五、三四六
五年	二二五、五一三
六年	三四九、九三四
七年	四六二、〇八〇
八年	六三六、三〇四
九年	六四〇、六七四
十年	五七五、八五五
十一年	六五七、六五五
十二年	五二四、二四七
十三年	五〇二、三五一
十四年	五四六、三八三

むろん、これは、その年に新に生ずる額だけではない。が、新に生ずるものも一億五千萬圓から二億圓見當になつた年が少なくない。現に十四年度は新に一億七千八百餘萬圓を生み出してゐる。いづれにするも、當局者は、みづからの見積の誤つてゐた不明を恥ぢなければならぬ。それも、わづかな額ではない。一億圓以下なのは、大正三年だけである。そして、八年以降は、五億圓を降つたことがない。世のなかは、不景氣だ〳〵といつてゐるのに、かやうな多額の剩餘金を殘すとは、どう考へてみても、勿體ない極みである。そんな金が出るのならば、なぜあんなに税を取り立てたのかといひたい人たちも少なくなからう。大正十四年度の租税收入總額の豫算は七億九千五百餘萬圓であつて、その年に生れた剩餘金が五億四千六百餘萬圓であるから、その開きは一億五千九百餘萬圓にすぎないといふことになる。つまり、それだけの税をとつていけば、この二つの歳入の關する限りにおいては、歳計の辻褄は合つたはずである。しかるに國民は、非常にゆたかな氣分をもつてゐる財政家と議會とにこれを託しておいたゝめに、不景氣で困つてゐるといふのに、高い税をおしげもなく、國のためぢや、御奉公であるとして、收めて來たのである。私は、かく申せばとて、剩餘金が出たら租税の減廢にふりむけよといふのではない。それは

[illegible]い
くらと豫定しおたいし、[illegible]といふのも、[illegible]たいした[illegible]でな
く、高々四五千萬圓を出づべきものでない。その豫定に
おいては、减税に向けるといふ説も立てられやう。いづれに
するも剩餘金をどうつかふべきかは、愼重に考慮を要する問題
である。

一六

けれども、學者ならびに歐米の先例としては、公債の償還にふりむくべきものとするものが多い。しかるに、わが國では、さうなつてゐない。年々の剩餘金使用計畫を見ると、豫備金がなくなつて責任支出をするために用ひたり（それは大正七八年ごろは特に甚しかつた、外米買入のごときはその著しきものである）、追加豫算の財源としたり、年々の新規事業の財源としたり、繼續費などの後年度分の引き當てとしたりする。要するに、これを以て、一般の歳入と同じ氣分で取り扱つてゐる。よつて以て、租税を減じやうとか、公債を減じやうなどと考へたものはない。否、考へたとしても實行したものがない。いろいろの新規事業の要求が出ると、かういふ金があるのをよいことにして、それをみとめ、放漫な財政を年々くりかへして來たの

[illegible]
なけれ[illegible]
したならば、まづ以て負擔[illegible]。既にも[illegible]べきであらう。負擔の輕減といつても、さきにいつたやうに、現在の負擔となる租税もあり、將來の負擔となる公債もある。一定の額を豫想し得、かつ當然の永續性あれば格別、さうでなくば、公債にふりあてるがよいにちがひない。もとより、收入も豐富であり、世の景氣もよく租税も難なく國庫にはいり公債の現在高も少ないといふのならば、また考へ方もある。問題とされてゐるわが國の現在の財政狀態に於いては、そんな餘地はない。公債の額も五十一億圓を越しており、世のなかは、不景氣のため極度にふるへてゐるといふ立場におかれてゐる。この際この時、剩餘金を公債にふりむけるのは當然のことである。もしこれ、歳入出の見積だに正確であつたとしたならば、あるひは從來の公債もつのらずともすんだであらうではないか。よし募つたとしても、その額を少なくすることが出來たにちがひないではないか。見積りちがひがなかつたならば、公債を減じまたは無くすることが出來るとせば、剩餘金をこれにふりむけるのは、當然であるともいひ得るではないか。しかも當然と考へらるべきことを今までやらず、明年度にはじめて行はうとするのであるから、當局者

は、さてこそ、劃時代的などいふ鳴物入りで得意がるのである。私たちは、おそまきのことではあるが、よいこと〻信ずる。しかし、かうするのがよいことであるとして、今後も、そのために剰餘金の生れるのがよいといふのではない。またか〻る制度になつたからとて、そのために剰餘金を生むやうにせよといふのでもない。また繰り入れる額が、當局者の案の程度のものでよいといふのでもない。それは、別の問題である。

一七

當局者の案は、前々年度に生じた新規剰餘金の二割五分を以て、減債資金にしやうといふのである。もとより今後生ずべき剰餘金は不定であるが、從來の放漫な見積りによるも二億圓內外で、最も近い十四年度の例にみるも、一億七千八百余萬圓である。だから、その二割五分は、四五千萬圓見當といふことになる。さらに豫算の見積を嚴格にすればするほど、その額は少なくなつて來る道理である。私たちから申せば、なぜもつと多く振り向けないかと主張したい。否、全額を振り向くべきものと信ずる。さらにす〻んでいへば、歲計の辻褄を合はす材料とし、新規事業を認めることにしたればこそ、折角の案を作りながら、そのこれに振り當てられる額を少なうしてしまつたのではないかと思ふのである。それが、私たちの殘念に堪へないところである。その點に遺憾をとゞむるとして、果して、この計畫によつて、目的とする國債の市價を高むることが出來るであらうか。

一體、減債基金そのものも、借金の元手を減じていく効能は乏しい。年々新規の募債があつては、どうにもならぬからである。たゞ、市價を下げていかないやうにする用心棒となるにすぎない。借金を返へす氣があるといふ氣分を知らしめるにすぎない。これは、各種の公債の平均價格をみても、わかる。尤も、大正十一年は、九年の不景氣がはじまつてから、減債基金を繰り入れなかつたにかゝはらず、五分利公債の如き九十四圓九十六錢といふ高値を出してゐるが、その年には、募債も二千七百萬圓といふ少額であつたことを記しなければならぬ。それにしても、發行價格とくらべて、年々の市價が低い――たとへば、大正三年末が八十九圓十年末が八十一圓、いまが八十八圓六十錢(十五年十二月十日)といふごとく――のは、公債總額が年々增して、その信用力を低めていくからである。それはさておいて、こんどの償還增額の計畫も、いはゞ、減債基金の增額であるから(たとひ資金となるものは剰餘金であるにせよ)やつぱり市價維持の目的以上には出ず、減債の實をあげる

ここはなかなかむづかしいにちがひない。しかも、これで、一寸に[illegible]まれてゐる今度の改善案により時價よりも高く手形を保有し低利で割引をしやうといふ策に對抗するものであるから、どつちもうまくいくといふことが出來るであらうか。なつたとしても、現狀の市價をくづさない程度の効しかなからう。

一八

剰餘金による減債計畫は、その實において公債市價の維持策たるにすぎない。私たちの望むのは、實質の意味における減債である。それに手をつけるのでなければ、公債は、年々その額を増していくばかりである。現に西原借款を整理するためにする交附公債も、一億三千八百萬圓もあるではないか。震災手形の整理にしても、一億圓は、やつぱり交附公債の形式で増すではないか。臨時國庫證劵の跡始末をすべきものも、三億圓以上も殘つてゐるではないか。かういふやうに、五億圓以上のものが増すことになつてゐるではないか。問題は、今度の計畫は、なきにまさる程度、市價維持の程度のものにすぎなくて、根本的のものではない。根本案としては、剰餘金を以て新規事業の財源とせず、その全部を減債資金に繰り入るゝこと、公債の新規募債をせざることである。明年度の如き、一方に、一億五千萬圓の新規公債を考へて、他方に四千四百萬圓の償還をすることの子供にもわかるやうな世を僞る策をとらないことである。一歩をゆづつて公債をつのるべき必要事業があるとしても、それだけに[illegible]もつと信ずる。さもなくば、百年たつたとて、わが國の財政をよくすることは出來ない。

當局者は、以上の償還計畫のほかに、その方法としても、從年來專らやつてゐた買入償還と並んで、時宜により抽籤償還もするとのことである。すでに大正十五年の暮れにも、特別五分利公債千萬圓について、これを行ひ、年末資金をうるほしてゐる。これは、やつぱり公債市價の維持のためにすぎない。しかも、これは大正十二年度に加藤友三郎内閣が、減債基金繰入中止を再開したときにも約二千百萬圓につき實行し、帝國經濟會議とか、手形交換所の決議などにも出て來たものである。つまりは、額面で返すのであるから、公債の時價との開きだけ、公債をもつてゐる人の利益になる。この前によつては、相當の景氣も生み出すかも知れないが、公債政策の根本問題ではない。

一九

私は、いままで説いたところにより、明年度は、經費は本位有の膨脹を來たし、決して消極政策でないこと、しかも目星しい、どうしても、いま手をつけなければならぬやうな新規事業のないこと、お互の租税の負擔はへらず、公債償還増額計畫は樹てたが市價の維持をはかるほかに効果もなかるべく、公債總額は益々増加するばかりであることを述べたのである。言葉をかへて言へば、この不景氣の世に處する財政々策として適當で

あるか、お互の生活の壓迫を少しでもゆるめていくことになるか、といふ點において期待をつなぐことが出來ないことがわかつたであらうと思ふ

も一の問題がある。金輸出解禁の問題である。大正六年九月から足掛け十年の間、とかくの議論もあつたが、そのまゝに過して來た。それが、爲替相場が一時三十八ドル二分の一まで下つてゐたものが、次第に恢復し、十五年になつてからは急速によくなつて、いまは四十九ドルを保ち、平價にもう少しといふところまでになるとともに、再び世間がやかましくなつた。かへりみれば外國でも、すでに解禁したものが多い。アメリカ、スウエデン、イギリス、南アフリカ聯邦、オランダ、オーストラリア、スウイッツル、カナダ、みな解禁してゐる。デンマークも、十六年の一月から解禁することを聲明してゐる。もとより、貿易逆調で、國際貸借狀況の面白くないわが國としては、解禁の曉を思つて、愼重の態度をもつて掛らねばならぬ。國際經濟の常道に復し、金本位制を確立し、通貨を安定せしむるための努力を要する。準備を要する。それは、片岡藏相のいふごとく、政府にのみたよるべき事ではない。お互の方面においても、缺損を銷却して事業を樹て直ほし、收支の均衡を得るやうに、しつかりした經營をし、資産を充實していく――どこからみても堅實そのものであるやうにしなければならぬ。が、政府そのものにおいても、その努力が充分でなければならぬことはいふまでもない。國民の覺悟を叫ぶ當局者は、みづから行ふべきを行つてゐるだらうか。曰く、財政を整理したといふ。緊策を採つて來たといふ。對支借款關係の銀行貨幣の整理をたといふ、公債償還及抽籤方法を採つたといふ、震災手形の善後措置をするといふ――しかも、それは、そんなに誇るべきことであらうか。私たちは、臆面もなく積極政策を振りかざし、それによつて景氣が必ず來るものと思つてゐる政黨のやるよりもいまの內閣のやりくちの方が控へ目にやつていく程度の效果はあるとみとめる。が、政府の吹聽する效能書ほどにはみとめられない。また、一時中止してゐた政府保有の內地正貨を開始したこともよい。尤も、十五年十月末をみると、政府の正貨は二億五千三百萬圓しかない。內地にあるのは、六千萬圓であるから、いまの輸送方法ですれば、十六年の五月には盡きる勘定である。在外正貨の一億八千萬圓中の多くは預金部のもので、一般會計のものは三千萬圓にすぎない。そんな金では、元利拂はおろか、役所で買ふ品物の代などにもおよばない。だから日本銀行保有正貨も送ることにするといふが、それもよい。むろん政府の計算で、すべきもので、內地金融界に悪影響をもたらすやうなことがあつてはいかぬ。いづれは、解禁直前の思惑金など考へると一億五千萬圓見當の正貨が出ることになるであらうか。それにしても、政府の準備はそれでよいだらうか、否、私たちとしては、本文の論者としては、それほど大切な問題であるとすれば、何故未曾有の大豫算を出して、政府みづから放漫政策を敢てせんとするのであるか。不完全ながらも、折角整

提出された予算は、人目の驚[illegible]を喚起し[illegible]ものになり、そして、閣議に於ける[illegible]といふ[illegible]は、それを[illegible]にあるまいか。さらにまた、内閣当局は、外国に財政のために充分の準備をしてかゝつたといふが、まさしくそのとほりであるか、その方法として、イギリスの如き、行政財政の整理を根本的にしたといふ事実を知つてゐるか。解禁問題を別にするも、世界の金の半分以上をもつてゐるといふアメリカの如きも、従来の予算編成法を変更してまでも、その緊縮ぶりを示したではないか。ことに一千九百十九年二十年あたりの両国の予算をみれば、大に手本とすべきものを見出すであらう。――私は、明年度の財政策といふ立場から見るも、解禁問題に対する当局の態度を良いものとは思はない。

二

私は、まだ申したいことがあるが、結論に急ぐことにする。

こんどの予算は、解散準備のための予算であると評するものもあるのである。評するもの〻根性は、問はない。もしさういふ考へを以て、当局者がかういふ財政策を樹てたとすれば、無智である。無恥でもある。この財政策によつて、国民が喜ぶものと思ふのか。自覚ある国民は、その国の栄え、その生活のゆたかになることを願へ。その目的を達せさる財政策を迎ふる理由がないからである。いはゆる従来の政党屋根性では、あるひは喜ぶであらう。しかし、国民生活はゆたかにならぬ。さういふ政党屋を心つぎに入れて、それに[illegible]ことさへすれば、[illegible]は大臣と[illegible]の一[illegible]であり、[illegible]は、いまさら[illegible]ないものとするはなぜであるか。[illegible]るべきは、[illegible]普選[illegible]る。技術の新しい[illegible]であるか。普政に一新時期を画せんとする重大な時期である。その時期に対するに、[illegible]を以てし、国民生活をゆたかにする積極的なものを以てするのは、そのおろかさを問はざるを得ない。国民としても、その点については、よく考へねばならぬ。お互の欲しいと思ふのは、お互の生活をゆたかにするやうな新議会の成立ではないか。そこに議せらるべき国民最高の数字である予算に対しては、慎重の態度を以てみなければならぬ。

× × × × ×

おもひ起す。立憲政治の布かれんとするに当つて、当時の国民と当局者の如何にまじめであつたかを。当局者は、整理に整理をして、明治二十四年度の予算約八千三百万円の如きは、二十三年度のそれよりも縮めて提出したほどである。しかも、当時の議会は、六百五十万円といふ提出予算額に対して少なからぬ額の削除をしたほどである。――普通選挙制度といふ憲政上のジャンプした衣を得てお互は、実質的にどう処していくかについて、明年度予算を意味ふかくながめるのである。――

五・二一・一一夜

あまりに、あはたゞしく書きつらねて、読みなほすひまも、数字を再調する時間もなかつた。

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら屹度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット (凡百日分)

金貳圓五拾錢 (ベークライト製)(パイプ付)

金參圓五拾錢 (サツク入象牙製)(パイプ付)

(送料各内地十八錢 臺朝樺四十五錢)

(代金引替内地卅錢 臺朝樺五十五錢)

東京大森不入斗四五一 振東五二九一一

發賣元 **榮川堂**

東京京橋區瀧山町十三

代理店 **天下堂**

世界に於ける急進・反動兩勢力の對立

世界に於ける二つの勢力の對立

青野季吉

世界を基準として見ての、反動勢力と新興勢力との對立の現勢は、どうであらうか？ 私はいまこの廣汎な問題を取扱はうとするのであるが、こゝでは仔細に亘つて、それを解剖してゐることは出來ない。そこで、その概況だけを見るにとどめておく。

新興勢力と反動勢力の對立といふ場合には、勞働階級の革命的勢力と、たとへばファスチストの如き意識的の反動勢力との對立と解されるのが、普通である。が私はこゝでは問題をそういふ具合に狹く解さないで、世界の資本主義、帝國主義にたいする革命的勢力と、それの革命的勢力にたいする反動的勢力、即ち現狀維持的、保守的勢力の對立といふ風に解して行くつもりである。

それぞれの資本主義國家内にあつての、勞働階級の勢力と意識的反動勢力とを、比較對立させ考へるのも、もとより必要なことではあるが、それよりも一層必要なのは、世界を基準としての、革命勢力の波の高低、保守勢力の潮の滿退を見ておくことである。思ふに、一國内での新興勢力と反動勢力との勢力の消長には、幾多の特殊事情が作用してゐて、その各を個別的に

ていつたのでは、必らずしも世界を基準としてのその兩勢力の消長を知ることが出來ない。ところで大切なのは、各々の國家にあつての細かい波の高低ではなくて、世界的に觀たところの大きな潮の滿退である。

今日一般には、世界は今や反動の大きな波の中にあると、言はれてゐる。この言葉は幾分割引して考へなければならず、尠くとも最近には、その波の低くなつて來た事實が認められるが、それにしても世界がいまなほ反動の大きな波の中にあることは、爭ふことの出來ない事實である。

極く表面的に見ても、アメリカの資本主義的勢力は、空前とも言つてよいまでに高揚してゐる。その盛況は、世界の資本家の御用學者だちをして、資本主義の永久發展性を云々させてゐるほどである。イギリスでは保守黨が、確固たる基礎に立つて、勞働階級の勢力を抑へてゐるかに觀える。フランス、ドイツでも尠くとも革命的勢力は、表面へ現はれて居らず、イタリーにおける國粹黨の支配は、ひと頃のやうに全能ではなくなつたにしても、兎に角衰へたと言ふ譯にいかず、革命的勢力が底に押へられつゝあることは望察し得ても、それはまだ表面的な結果を見ない。更に帝國主義的資本主義國家にたいして、一つの有力な革命的勢力であるところの、殖民地、半殖民地、屬國に於ける民族解放運動や、自治獨立運動を見ても、戰後の革命的勢力の高潮期と比べて、今日では決して盛んであるとは言へない。

それならば、その反動的勢力の支配の根帶は何であるか？これを單に、前期の革命的勢力の高潮期にたいする反動と言ふ風に解することは、間違ひである。そこには經濟的な根帶がなければならないし、また事實それが存在する。それは世界資本主義の一時的の安定である。前期の世界に於ける革命的勢力の高潮は、戰後の世界資本主義の大動搖の上に立つたものであるが、今期の世界に於ける反動的勢力の支配は、まさにその世界資本主義の一時的の安定である。

そこで今日に於ける反動勢力の支配、その下にあつての新興革命勢力の狀態、その兩者の動的な對立關係を知るがためには、その世界資本主義の一時的安定の內容を解剖して觀なければならぬ。この解剖を通じてのみ、我々は、兩者對立の現實と、その行衛を把握することが出來る。

私はいま、世界資本主義の安定にたいして、一時的と言ふ言葉を、說明なしに附加して來た。が、これには多くの異論がある。或る人々は、現在の資本主義の安定をもつて、決して一時

的のものでなく、永續的なものであつて、この意味に於て、世界の革命的な潮は、跡方もなく退きさつたと主張してゐる——主張してゐると言ふよりも、それを否定してゐると言つた方が、より安當かも知れないが。この議論の誤りであることは、この小考の進行と共に分明すると思ふが、現にその安定が、實践に於て、崩壞しつゝあると言ふ事實——その目立つた一二の尖端をあとで示さうと思ふ——は、その主張の立派な反駁となつてゐる。

世界の資本主義はなるほど、今日、一時的に安定してゐる。その限りに於て、世界の新興革命的勢力は、現在、干潮期にある。が、ここに忘れてならぬことは、その安定はたゞ一面の事實だけであつて、世界には、その安定の事實とならんで、別個の大きな對立的現象が存在すると言ふことである。それは外でもない。ソヴイエツト國家の勢力の安定と云ふ事實である。

一方に、世界資本主義の一時的の安定、他方に、ソヴイエツト勢力の安定、この二つの安定が對立してゐて、その對立のうちに一時的の均衡が保たれてゐる。これが、世界を基準として觀ての、現在の安定の內容の大きな特質である。この大きな特質をも一瞥することによつては、今日一般に言はれてゐるそれを考へてることにはならない。

それならば、この二つの對立した安定、それぞれの內容には、どんな差異が存するであらうか？そしてまた、この二つの安定のそれぞれは、何處へ指して進む必然性をもつてゐるか？

世界資本主義の一時的の安定とは、資本獨裁の一時的の安定を意味するものに外ならないが、その安定には資本主義に內在してゐる條件が必然的に伴はねばならない。それは資本主義の矛盾の增大といふ條件である。即ちこの安定は、必然に、その矛盾の昂進を伴ふのである。そして今日の帝國主義的階級に於けるその矛盾は、先づ第一には、一つの資本主義國家內の帝國主義的集團と、他の資本主義國家內のそれとの、利益の矛盾對立であり、次いでは、各資本主義の內部に於ての、資本家階級對勞働階級の利益の矛盾對立であり、第三にはすべての殖民地、半殖民地に於ける被壓迫民族の利益と、それの壓迫者たる帝國主義の利益との矛盾、對立である。

資本主義の一時的安定の內容には、必然的に展開されるそれらの矛盾が包藏されてゐるのである。——實に今更說明するまでもなく、資本主義は、それが安定し、發達するがために は、嫌でも勞働階級を極度に搾取し、植民地や半殖民地の他民

族の大衆を抑壓し、敵對する帝國主義國家と鬪爭しなければならないのである。

然らばソヴィエット勢力の安定の内容はどうであるか？　その勢力は反資本主義經濟の上に立つものである以上、それは必然に、資本主義の矛盾の統一、對立の調和に向つて進まなければならぬ。ソヴィエット國家内にあつての、プロレタリアートと農民大衆との利益の統一、ソヴィエット國家に於けるプロレタリヤ權力と、世界勞働階級との間の關係の確立、抑壓國家のプロレタリアートと被抑壓國家及び民族のプロレタリアートとの利益の結合が、それである。ソヴィエット勢力の安定は、必然に、これらの統一と關係と調和を齎らさなければならないのである。——實に、プロレタリアの權力の維持發展は、勞働者と農民との結合、その物質的文化的の條件の改善、全世界の勞働者への積極的な接近、プロレタリア勢力と被抑壓民族の解放運動との結合なくしては、不可能だからである。

一方に世界資本主義の一時的の安定があり、他方に反資本主義的世界勢力の安定があり、而してその兩勢力の間に、一時的の均衡が保たれてゐるといふのが、今日の世界の現實である。そしてその均衡の現實は、言ふまでなく、世界の資本主義、反動勢力にとつては、勢力の増大を意味するものであり、世界の反資本主義、新興革命的勢力にとつては、勢力の一時的停滯を意味するものに相違はないがその安定のそれぞれの内容に立入つて見ると、右のやうな差異があり、その行衛に右のやうな對立が存するのである。

それはやがて、今日の世界の反動勢力の支配が、何ものを準備しつゝあるかを語るものに外ならない。

私の指摘した二つの安定の間の差異はそうであるとして、それならば、世界資本主義の安定は、どれだけ繼續し得るものであるか？それは巳に述べたやうな要因で必然にその安定の破れるものであるにせよ、その破れるまでの期間は如何？これを知るがためには、更に立ち入つて、世界資本主義の一時的安定の内容を、具體的に調べて見なければならぬ。即ち、その安定を齎らした諸の要素を取出して見て、その堅牢性を穿鑿して見なければならぬ。

世界資本主義の一時的安定を齎らした第一の要因として永らく世界資本主義の進路を惱ましてゐたドイツにたいする資本主義列强間の鬪爭の停止を指摘することは、誰もが認めるところであらう。言ひ換へると、ドイツを搾取する方法と、その搾取の程度に關して、イギリス、フランス、アメリカの間に協定が

立つたこと[illegible]である。

しかしこの原因は耐く堅牢であるだらうか？ 極く表面的に見ても、この協定はドイツ國民の同意なしに取結ばれたものであつて、ドイツ國民に對する、資本主義的ならびに民族的に二重の壓迫に外ならぬことに明らかな事實である。ドイツ國民の如き開化民族が、長くこの地位に甘んじ得ざることは言ふまでもない。その徴候はすでに國民の動搖となつて現はれてゐる。かのヒンデンブルク元師を擔ぎ出したやうな、最極端な反動化は、他方に於ける革命的勢力の動きを實證するものであらう。

世界資本主義の宏大な活動範圍たる支那、これこそ殘された世界資本主義の鬪爭場であるが、その大市場の搾取方法について、イギリス、アメリカ、日本の間に、一種の協定が成立つたこと、それが世界資本主義の一時的の安定を齎らした第二の要因である。

この要因の堅牢性は、それらの強國の利益が、右の協定あるに拘らず、到底長く一致し得ないものであるといふ事實によつて否定されてゐるが、今日既にその非堅牢性が實踐に於て、證明されてゐる。それは最近に於ける文明の反帝國主義運動の擡頭、それに基くイギリス、アメリカの利益の衝突である。これ

[illegible]

一擧の帝國主義國家には、[illegible]相互に非干渉主義を採ることに協定した。これがまた世界資本主義の安定を齎らした主要な要因である。即ちこの協定によつて、帝國主義國家は一時、他よりの干渉と壓迫とを受けることなしに、容易に自國の植民地民族を搾取し得るにいたつたのである。

しかし本來から言つて、その一聯の帝國主義國家の各々は、他國の植民地へ手を伸す機會を刻々に狙つてゐるもので、自國の植民地搾取に於て、一定の局限に達せらるるや、それは必然的に表面的となつて來なければならない。それに加ふるにその氣儘なる搾取は、植民地の民族運動を誘致し、それを革命運動化しないではおかないのであらう。この要因が堅牢性を持つがためには、實に、列國資本主義がその資本蓄積を放棄せねばならず、その民族の搾取をある程度で停止しなければならない。が、そうなれば、それまた列國の資本主義の安定の破壞に外ならないのである。

世界資本主義の一時的安定を齎らした第四の要因は、ソヴィエット國家に對抗する上で、世界の資本主義列強の間に、事實上の共同戰線が成つたことである。世界の資本主義の進路に於

で、常に大きな障害であるところの、その權力、その國家にたいして、それの利用又は搾取に關して、資本主義國家が對抗し闘爭してゐたのでは、世界資本主義の進路は亂されるばかりである。そこでこんどは、その利用と搾取、その權力との對抗のために、列强が共同戰線を張り廻した。かくて世界資本主義は、一時、その進路に横はる障害物の被害の程度をひくめたのである。

この要因の堅牢性は如何？

今日誰もが認めるやうに、ソヴイエツト國家は單獨に孤立して存在するのではない。その周圍には、各國の勞働階級の運動と、被壓迫民族の解放運動とがある。資本主義列强のその共同戰線の維持は、必然に、その國家内での、勞働階級の反抗と、自國殖民地の解放運動の昇進とを齎らさずにはおかない。もし一端、列强がソヴイエツト國家に對して、武力的闘爭を試みるとすれば、自國の軍隊内に於ける　　　　勢力の結成を覺悟しなければならぬ。それに加ふるに、列國それぞれの資本主義の利益の、ソヴイエツト國家にたいする關係は、非常に異つてゐる。そしてそれは決して長く、その共同戰線の維持を許すものではない。これらの條件は、この要因の堅牢性を否定して餘りあるものである。

世界の資本主義はたしかに一時的に安定してゐる。然しその具體的の内容を解剖して見ると、それを構成する要因は、脆く、不安な、もろいものである。そればかりではない。その不安ともろさとは、革命的勢力の伸展を約束してゐるものである。

それが重要な點である。

ところでこれまでも示唆しておいた如く、その世界資本主義の安定、それに基く世界反動勢力の支配は、この時期の壓倒的事實ではあるが、既にその安定の頂點が逹せられて、革命的勢力興隆の尖端が、力强く露出されて來てゐる。この事實を見逃してはならない。

その一つは、イギリスに於ける左翼運動の增大であり、その二つは支那に於ける反帝國主義戰爭の勃發である。

今日世界の資本主義にとつて、アメリカが最大の支柱であるとすれば、イギリスはそれにつぐ支柱である。この二つの支柱によつて、不安ながらに世界の資本主義が支持されてゐる。歐州に於ける資本主義の建直しに於て、有力な役目を演じたのもこの兩國であつたし、東洋特に支那に於いての資本主義的搾取を確立したのも、この兩國の協定によるのであつた。その意味

に於て、[illegible]

いのである。

その反動的勢力の中堅は、イギリスの國內について言へば、言ふまでもなく保守黨であるが、自由黨及び勞働黨も亦、或意味に於て、反動的勢力を構成してゐるのである。と言ふのは、それらは保守黨のやうに意識的、戰鬪的に反動的勢力を形成してはおらず、特に勞働黨の如きは、反資本主義な標的を揭げてはゐるが、それらは決して革命的な勢力と合體するものでなく、寧ろ、それに對抗してゐるものであって、その意味に於て、結局、反動的勢力の分野を構成するものなのである。

その現實が暴露されたのは、旣に歐洲戰爭の當時であるが、それが決定的に暴露されて來たのは、勞働黨の政權獲得當時、ついで最近の炭坑夫爭議に於てである。そうしてそれの暴露と共に結成されて來たものは、勞働組合運動の內部、及び、政治運動の方面での左翼運動の擡頭である。

この左翼運動の昂進については、こゝで敍述してゐる暇はないが、今日重大なる危機を藏して依然として繼續されてゐる炭坑夫爭議が、左翼運動の昂進の一つの現はれであることは、一般に認められてゐることである。そしてイギリス勞働運動に於けるこの左翼運動の昂進は、世界の勞働運動に一新局面を展開す[illegible]つゝ、今やイギリス[illegible]は、決して架空の言ではない。

世界資本主義の反抗の內部に、この[illegible]が生じたと言ふことは、その安定の動搖の痛ましい徵候であり、他の一つの安定、卽ちソヴィエット權力を中心とする安定の增大を語るものである。——イギリスの左翼運動が、ソヴィエット國家とイギリスのプロレタリアートとの接近を齎らしてゐるのは、今日周知の事實である。

かくて歐洲を舞臺として、二つの安定の間の均衡が、現に、崩れかけてゐる。この均衡の破壞は、言ふまでもなく、世界の反動勢力の退却と、新興勢力の興隆とを意味してゐる。

更に世界資本主義の搾取の最後の足溜りである支那の現狀がある。

そこでは何が進行してゐるであらうか。

廣東の反帝國主義運動、國民軍の活動が、あれほどまでに支那の軍閥を脅威し、現に脅威しつゝあるのは、軍閥の間の內爭が原因であるばかりでなく、支那を搾取してゐる列强國家間の不一致がその因をなしてゐる。

そこではアメリカとイギリスとの提携が破れてしまつて、日

本とアメリカとの接近の過程が見られてゐるのである。この帝國主義國家間の利益の對立、それにもとづく共同戰線の破壞、それが支那の反帝國主義運動に油をそそいでゐるのである。

アメリカの支那に於ける位置は、今日決して從來ほど堅固ではない。今日支那にあつてのアメリカのポピユラリチーは、ロシア及びドイツと同等だと言つてよいであらう。それと言ふのはこれまでにアメリカの對支政策、他方でイギリスの如き帝國主義國家と協力してゐながら、他方で支那國民の友好者たらうとした二重政策の結果である。この現實が、反帝國主義運動の興隆につれて、支那の國民の眼に大きく映つて來たのである。そこで今日のアメリカの必要は、イギリスとの協力をつゞけて、反帝國主義運動の敵となることを避けるにある。その事情は、日本の面してゐる事情と同樣である。

日本の支那に於ける今日の主要利害は、滿洲にあるのであつて、その限りでは當面にはアメリカの利害と積極的に衝突しはしない。その上、イギリスの勢力がアメリカとの協力の消滅によつて、支那に於て萬分でも失はれることは、たしかに日本にとつて利益である。そこで日本とアメリカの接近の過程が見られて來たのである。

かくて孤立させられたイギリスは、今や直接の威嚇によつて、支那の國民に面し、その市場を維持しやうとしてゐるのである。

他方支那の反帝國主義の運動、民族的獨立の運動は、必然に、ソヴイエット權力を中心とする革命勢力への接近、と言ふよりも密着を齎らしてゐることは、諸の形態に於て報道されてゐる通りである。

かくの如く世界資本主義の一時的安定の一つの重大な要因であつた支那の市場に於ける列强の搾取協定は、强國間の帝國主義的利益の矛盾の增大によつて、今日、まさまさ失はれかけてゐる。そしてこゝにもまた、二つの安定の間の均衡が破れかけてゐるのである。

イギリスの改良的勞働組合及び政黨と言ひ、支那の市場と言ひ、いづれも世界資本主義の維持にとつては、基礎の基礎たるものであるが、それが、或は『腐蝕』しかけ、失はれかけたと言ふことは、世界の新興勢力の近き將來の巨人的な進出を示唆するものでなくて、何であらう。

世界を基準として眺めた反動勢力と新興勢力との對立、その紐帶たる世界資本主義及び世界の反資本主義運動の關係は、右の通りである。重要なのは、この世界的の動向を正しく把握す

イタリーの反動政治と其反對派

法學博士　米田實

一

大戰後の世界を眺めると、新興的精神とその勢力の擡頭も見逃がすことが出來ぬのであるが、又反動分子の活動とその成功も顯著であり、何人も之に對して目を閉ぢることを得ないのである、憲政の母國イギリスに於てさへ、保守黨が總員六百十五の下院で四百十九と言ふ類例少き壓倒的多數を占め、約二年餘、些の困惑も無く國政を處理しつゝある如き、他國のやうな不健全性が無いとしても、矢張り反動系擡頭の一例だ、その他になると、バルカン半島ではギリシアのパンガロス獨裁政治（一昨年六月から昨年八月迄）並びに之に代つたコンヂリス將軍執政（昨年八月以來）ブルガリアのタンコフ內閣（大正十二年から昨年一月に及ぶ、昨年一月之に代つたリアプチエフ內閣は前者に比較して幾分立憲的又進歩的だ）があり、對岸のアジア、トルコでは、大體民族覺醒の新氣運に副ひ、進歩的政治を行ふを任務と自覺し乍ら、猶ほ前藏相ジヤウイド・ベイ、前首相ローフ・ベイ等死刑に見ゆるやうに反對黨壓迫、其他屢々反動政治に後退するムスタフア、ケマル・パーシアがある、若しそれ大正十二年秋以來繼續し、昨年政府の小刀細工で造られた虛僞な人民投票で確認せられたと言ふスペインのリベラ將軍の內閣、將た六年半に亙るハンガリーのホルチー執政になると、是れ屢世に傳へられた所である。

併しながら、予は玆に此等の反動政治を一々檢討しやうと言ふのでは無い、唯だ此等反動政治中、その世界五大國の一に現

はれた點に於て、運用振の出色であり又た徹底的な點に於て、且つムソリーニてふ一種の人傑に依つて行はるゝ點に於て、言はば此種政治の代表とも言ひ得可きイタリーのそれを少しく考へて見度いと思ふものである。

二

然らば、本年四十三歳の鍛冶屋の息子、『無冠の君王』ベニトームソリーニー氏の獨裁政治は如何に進行しつゝある乎、イタリーが社會黨の無謀な工場占領其他暴行、更迭頻々たる内閣の無爲無能力に惱める時機に當り、大正十一年十月三十日、ムソリニー氏がフアツショ團を引率し、ローマに入都し、翌日内閣を組織した活動振りは、天下共に知る所である。敢て問ふ、かくして成つたム内閣は、爾後四年餘の間如何なる反動政治を行つて來た乎、如何にして此政治は今猶ほ繼續して居る乎、又た其反動政治下に於ける新舊進歩分子は如何なる地位に置かれて居る乎。

先づ政權掌握から最近までのムソリニー氏の活動を見ると、その形こそ變化を經たれ、其反動振りは一貫して動かないのである、それは第一彼れが議會と人民に屬する政權を奪ひ去つて自己の掌裡に獨占し今猶ほその獨占をつゞけつゝある遣り口に最も明かに現はれて居るのである、始め彼は羅馬に入り首相兼内相、外相となると、「自分の手には武裝せる三十萬の青年が居る、彼等は命令一下何時でも任務に服するの用意がある、議會を閉鎖する如きは一朝の茶飯事である」と豪語し、先づ一年間ムソリニー氏に國政の全權を委するの案を無理に議會に可決せしめたのである、その票數が贊成二百十五、反對八十二あつたのは、言ふ迄も無く彼の猛烈なる威壓政策の結果であつた、ところが此「國政一任」の期限が終末に近くと、彼が第二策として行つたものは、實に變挺な選擧法改正であつた、それは一九二三年（大正十二年）十一月十八日の法律として知らるゝものである、即ち五百三十五人の議員を選出する全國を一選擧區視し、全體で多數を占めた政黨に議員數の三分の二を占めしむる組織であつた。（尤も十五區に分たれた形式はあつたけれども）而して翌一九二四年四月此法律の下に選擧が行はるゝと、從前二十八名の議員しか持たなかつたフアツショ系は三百七十五名の多數を占め、殘餘の百七十ばかりが人民黨即ち羅馬教派、社會黨、其他諸派に分配せらるゝことゝなつたのである。そこでムソリニー氏は完全に議會を支配するに至つたのである、左れど此選擧法に無理があつた、その全國一選擧區化は爭ひを候補者でけ無く專ら黨派全體の爭ひとし、他黨に比し個人優良候補者を有せさるフアツショ系を利益したのであつたが、識者は決

して之に贊成したものでは無かつた。反民主主義者の不滿足が起り又た一九二四年マテオチー暗殺事件などで、國民の反感が起つて來たので、人心の離向を見、之を巧みに轉向する術策に富むムソリニー氏は、緩和策として、又た〳〵一區一人の小選擧區に復歸する案を立て、一九二五年二月十五日之をして法律たらしめたのである。その際ファ黨員は不安に感じたが、首領の命なればとて止むを得ず贊票を投じ、在野諸黨は欣喜「ムソリニー漸く少しく正道に歸らんとす」と思惟したのであつた。而して此選擧法は次回の選擧から適用せらるゝことになつて居るのである。しかしムソリニーの眞意は決してかくして政治を常道に還らしめんとするものではなかつた。彼は從前以上に辛辣な政權獨占策を考へて居たのであつた。ムソリニー氏は一年一箇月前（一九二五年末）議會を强壓して首相は之迄通り皇帝と議會とに責任を負ふものにあらず、唯た皇帝に對してのみ責任を負ふものだと言ふ新法律を通過せしめたのである。玆に於て乎イタリーの議會は普通の立法府と異り、言はゞ首相の參考のためにする一種の國政討論場と化したのである。ムソリニー氏は言つて居る、「人民は自由を欲するものでは無い、彼等は鐵道、家屋、橋梁、道路、水、燈火を欲するものである、被治者の同意に基礎を置く政府と言ふものは、曾つて存在したこともなければ、現に存在せず又將來決して存在することもないであらう」と。思ふにファ黨の政府が此の選擧法によつて人民に議會に於ける下院な干渉に依つて勝利を望んだ點は、なほ幾分か民選議員の形式だ殘つて居たと言へる、然かも今度の對議會政策に依つての法律になると、誰か專制振りの極度な發露で無いと言ふものがあらう。

右は中央政治機關に關する部分だが、翻つて地方政治機關を見ると、玆にも彼の專制主義の現はれがある。何ぞや、約一年前、彼は地方の市長選擧を改め、人口五千以下の町村長を官選とし、市町村の議員も市長等と政府とで定め以て選擧を廢したのである、又た彼は、政府任命の知事の權限を增大したのである、ところが昨年八月になると、市長官選の範圍を擴大し、千七百の市、官選市長を持たねばならぬことにしたのである。ファ團執政の始めは市長民選を廢せず、唯だファ團の暴力を利用して之を威壓したものであつたが、今や一轉地方自治權にも指を染むるに至つては、ムソリニー執政が一切の權力をその手に集めて止まぬことを證するものである。

三

以上はイタリーの政治機關若くは組織に現はれたムソリニー氏の反動政治振りを紹介したものだ、コウ言ふ反動的政治機關

若くは組織を造り出した彼れが、又た國際的政治の運用に於て、同じく益々反動政治振りを發揮し來るも、毫も不可思議とするに足らないのである。

左らば彼は如何なる政策を取つて居る乎と言ふと、世界諸國が大體資本家保護から漸次勞働者保護に移りつゝある形勢に反し、彼れは思ひ切つて資本家保護若くは擁護に固まつて居るのである、然らば彼が此點で行つたところは何か、第一資本家に有利な勞資仲裁裁判所を組織し且つ同盟罷業を禁止し之を行ふを犯罪としたこと、第二、勞働組合をファッショ組合に限つたこと、第三、八時間勞働を九時間に延長したこと、第四、有價證券の强制登記を廢止したこと、第五、相續税を激減したこと等、最も注目を惹くのである、先づ勞働裁判所とは如何と言ふと、約一年餘前制定の法律で政府系三名、資本家系一名、勞働系一名の判事より成る裁判所に勞働紛議を解決せしむることとしたのであるが、現在のところでかくの如き種類の裁判官の下に勞働者にとり公平な判決を見られ得可くも無いであらう、然かも之を本として勞働側の武器たる同盟罷業を禁止し、之を犯罪としたのは正當と言へるであらう乎、次ぎにム氏は執政後間も無く資本家と結託し、ファ系勞働組合に屬せざる勞働者を解雇せしむることに依つてそのファ系組合加入を强いたが、一昨年末になると、「獨りファ系勞働組合をのみ承認する」法律を制定し、以て勞働者の自由を奪つたのである、又た八時間勞働制は本來ムソリニー氏の綱領としたもので、大正十二年（一九二三年）三月採用したのであつたが、昨年六月九時間制の發布を見るに至つた、之は生産增加の目的だと言ふ辯解もあらうが、目下の處ドウ見ても勞働者に不利なものが多いやうだ、更らに一轉、ムソリニー氏が從來存した「有價證券の强制登記制」を廢止したのは、同制に依つて税の誅求の機會を造ると言ふ富豪連の不平に答へたもので、言はゞ有産階級の脱税を容易にするものである、それがムソリニー氏の「貯蓄心奬勵」の名の下に行つた相續税の激減と同じく富豪恩寵政策の一なるは言を俟たぬ所であらう。

此外に彼は種々の反動政策を行つて居るのである。彼れは最初から行つて居る暴行團の使用を今なほ續けて居る、之は先きに行はれた前首相ニッチ氏邸襲撃事件、議員マテオチイ暗殺事件などの數例を擧するものがある、又た亂暴な新聞紙法及び集會法は一九二三年七月の立法を始めとし、度々制定せられ一昨年一月、同三月の立法に至つて、亂暴、益甚しく、今や言論の自由も、集會の自由も、政府黨の獨占と言ふ如き狀態となつて居るのである、だが之は世人周知のことだから、縷說するまでもあるまい、ただ此一兩年間漸次壓迫策が進められてそれが擧

[illegible]畢竟責任議院を無視したしめたる如き、又たファシスト[illegible]の在外[illegible]太利人に對し、種々の口實の下に「市民權の剝奪」と、「そのイタリー國內に有する財產の沒收」を以て之を脅かし、否な[illegible]成するばかりで無く昨年中盛んに之を實行したる如きは、予がドウしても世上の注意を促さぬ譯にはいかぬところである、尤も自己の子分は殺人等の重罪犯も之を助け、親分株狭客肌で內政をやつて恬然たる彼としては、之も別段不思議でないかも知れぬのであるムソリニーの反動政治振の實狀を列擧すれば、際限が無い、先づ之れ位にして、餘は賢明なる讀者が推斷を進むるに任せて置かう。

四

然らば箇樣に亂暴を極むるイタリー刻下の專制政治は、何故に已に四年二個月の長き生命を持續し、なほ續く可き勢ひにある乎、之には種々な理由と事情とがある。

予は世人に對し第一に、ムソリニー以前の政治も決して民意代表の政治では無かつたので、それ丈け人民の此點につきての神經が鈍いこと、第二に、ムソリニーの內治外交が壓迫、專斷以外に、數箇の點で相應な成績を擧げて居ることを擧げねばな[illegible]

けだし今日、ヨーロッパでも、何れの國も眞の[illegible]に依る政治が善く運用されて居るまでは無い、わけてスペイン、イタリーなどになると、現在の反動政府以前でも、政府と政黨とは殆んど民意を代表せず、その利益と乖離して居た、政治は循環內閣の語が示すやうに、私かに政權を授受し、順番に交代したのであつた、たとへば今日、八十歳の老齡であるヂヨリチーの如き、戰爭前、自己の內閣が在職長く漸く人心に倦怠の狀が見えると、自己の傀儡となる如きものに後繼內閣を造らしめて去り、一定の期間が過ぎると、自ら出馬、國政に當つたのである、議會の諸政黨も國家の爲めに政治を議するのでなくて、一黨派の利益の爲めに政治を取引して居たのに過ぎ無い、斯くの如き狀態に馴らされて居た、イタリー國民は、專制振りが一層甚しいとしても、英米民主國人が示しそうな程度の反對を示し來らぬのも、敢て不思議とするに足らぬのである。

だが、一つはムソリニー執政が過去及現在の諸獨裁政治に善く見る「功率無き有害」を示す代りに、案外、內治外交に相應の仕事をやつて、此點で或る程度迄民信を繋いで居ることも忘れてはならぬのである、先づ內政から言ふと、約四萬の官吏を罷免し、二十億リラの國費を節約したこと、「回復州省」を廢止

し更らに農務省、工務省を合併し國民經濟省を起したこと等、行政整理、國費節約には思ひ切つた功績を舉げたのである、彼れが五十の地方裁判所を廢止し、數個大審院の對峙を廢しローマの一個の大審院に統一し得た如き、又た最近フランスのフラン貨失敗の史を繰り返さざらん爲め、紙幣減縮策を進めつゝある如きも、良例の一である。彼は又た官私小學校卒業生が中等學校に進む上の差別待遇問題（長く面倒であつたもの）を解決し、國家試驗に依る一率處置策を建てた、だが內政よりも外交に於ては一層好成績を收めて居る、即ち大正十三年一月ユーゴスラヴヰアとの條約で單にイタリーが多年翹望して居たフイウメを自領とした許りで無く、同國との同盟約定をも造つて爲めにフランスの勢力圈と見られた中歐「小協商（プチー、アンタント）」内にイタリー勢力を造つた機敏さの如き、自から極右系であり乍ら、極左のソヴヰエツト・ロシアと同じく十三年二月に締約し、以て之からの物資獲得、並びに沿岸貿易權獲得に於て、大にイタリーを利したるが如き、十二年（一九二三年）スペインを藥籠中の物とし以て地中海に於けるフランスとの軍事的、政治的勢力の競爭に於て自國の立場を有利にした如き、自領リビアとエヂプトとの國境紛議に於て巧みなる活躍をなし、一昨年末遂に有力なるセヌスイ蕃族の宗教的根據地たるヤラバブ沃地一帶をエヂプトよりイタリーに獲取したる如き、目下アビシニヤの棉產地として有望なるを見、此方面に膨脹を策し、此點につきイギリスとの或る種の妥協に成功したるが如き、孰れもイタリー國民の前に彼の名聲を揚ぐるものであらねばならない、殊に彼も人心を魅するに於て特腕あり、切りに「大ローマの再現」を叫んで、イタリー國民の想像力を刺戟しつゝあるでは無い乎。

要するに、予は上記の二點が彼の專制政治持續に貢獻する大なることを思ふものである。

五

しかし予はムソリニーの此亂暴な政治が安全だと言はぬ、その反對熱を挑發せずして止み得可きで無いことも明了である、否な今日已に議會内のフアツショ以外の諸派も、新進の青年級も、漸次所謂敵黨に奔り、一旦誤つてムソリニーの味方となつた面々の中にさへ戈を逆まにして居るものがあるでは無い乎。

けだし、十四に達するイタリーの政黨中、最初からムソリニー内閣に反對したのは、ツラチ氏の率ゆる社會黨前首相ニツチ氏の率ゆる立憲民主黨などであつた、自由黨諸系と羅馬教派（人民黨）になると、曖昧極まるものであつた、だが之も一九二四年夏からして、一轉漸く反對の色彩を強らして來たのであ

る、昨年四月の總選擧に於てさへムッソリーニー派を支持して選ばれた前首相サランドラ氏も、同年六月の議會にムッソリーニー信任投票をなした前首相ジョリテイ氏も、共に態度一變、その後反對の大演説を敢てしたでは無い乎、又たレグホーン氏の全國自由黨大會は「政府の基礎が憲法上の形式に於て現はれた民黨にあらざる可からざること、自由の尊重せられざる可からざること、地方政治を人民の選擧に成る行政機關に委す可きこと等の決議案を贊成二萬三千七百十四票、反對五千四百九十票で可決したでは無い乎、久しくファショ派内閣に加はつて居た自由黨諸大臣一昨年一月から袂を分つて野に下り、ファ派内閣の孤立を明白にしたでは無い乎、次ぎに軍人團は如何と言ふと、之も一九二四年七月の在郷軍人會大會で「文化的人民生活の自由なる發展を可能にする法治狀態の確立」を要求する決議を可決したのでは無い乎。

然かも予の考へに依ると、イタリーに於ける簡樣な外部に現はれた既存せる有名な政治家、政黨若くは團體のムソリーニー氏反對共者は、左迄重視するに足らぬのである唯だ因循な上記の個人若くは團體さへ、コウした反對態度を示し來たと言ふことは、裏面的にイタリー民心に動きつゝある覺醒の氣運を示すものとして唯だ重視す可きであらうと思ふ丈である、何ぞやジョリティ氏でも、ナッティニ氏でも、ボノミ氏でも皆着々發言に努め、更に活動する餘力を有せず、この有樣もまたそれ、しつゝあるからである、これだからこそムッソリーニ氏も右の三老政治家の言論には割合に壓迫を加ふことが少い位ゐだからである。

然らばイタリーに於て新興勢力が反對的勢力と對抗することと、恰かも我隣國支那に於ける南方派のやうに（その反抗の形式は異るかも知れぬが）なる時期は如何、之には餘程時間がかゝるだらうと思ふ、何となればムッソリーニ氏の極端な言論及集會壓迫策と周到な警察探偵政治は、にはかに國内に於ける反對運動の結晶を許さ無いからである、故に今のところたゞ秘密な小團結、小運動が散在しつゝある丈けだからである、極端な運動者は、止むを得ず國外に奔り、フランス其他で畫策して居る、それだからムッソリーニ氏も、ファッショ諸新聞も最近フランスの寛大を怒り、引續き惡罵を放つて居るのである。

だが、それでも世人はム氏反對熱を輕視してはならぬのである、それは日一日に猛烈になつて居る、それは自然的な發展を待つを得ぬ徒が失望の極、ムッソリーニ暗殺策に力を致して居るのでも分る、ムソリーニ氏は過去一年間に三回暗殺計畫に會した、一昨大正十四年十一月四日ホテルの窓から射撃せられた事

件、昨年四月七日ギブソン孃の暗殺未遂事件並ひに同九月十一日彼の自動車に爆彈を投付られた事件是れだ、讀者は之に依つても空氣の惡化を推す可きであつて、單に之を無政府黨員の暴擧と輕く片付けてはならぬのである。

危機に直面せる露西亞

播磨楢吉

△**一變せる反對派の作戰**　ロシア共產黨の內訌は一九二三年九月の『四十六人組』事件以來、一九二六年十月に至る四箇年間に前後四回に及んでゐる。每年內訌が繰り返されてゐる譯にして、若し一九二六年夏におけるジノヰエフ一派の陰謀事件と、同年十月におけるトロツキー及びジノヰエフ兩派の合同的反對運動とを區別する時は事件五回となる。かく內訌は既に慢性的になつてゐるから別に珍らしいともなく、またさして驚くにも足りないが、今回の反對派合同はこれまでの事件とは頗るその性質を異にしてゐるものがある。同じ反對運動にしても今度のは運動の方向が一變して來た。

一九二四年末のトロツキー排斥事件にせよ、翌二五年末のジノヰエフ、カーメネフの少數派對スターリン、ブハーリンの多數派の爭ひにせよ、その爭ふ所は專ら主義と政策上の問題に限られた。常もスターリン氏を中心とする幹部派と反對派とは主義政策上の問題に關して意見の衝突を演じた。從つてその爭ひは主として議政壇上における舌戰若くは言論機關（新聞雜誌）に依つて正邪曲直を爭ひ勝敗を決したのであつた。從來筆舌の上で爭つてゐた反對派は一九二六年の夏に至り、戰法を一轉して直接行動に訴へるやうになつた。この變化はロシア共產黨の將來をトするに當り看過すべからざる現象である。

曩に第十四回黨會（一九二五年）において多數幹部派の爲めに壓倒されたジノヰエフ及びカーメネフ一派は、彼等とは主義主張を異にする反對分子と氣脈を通じて廣く黨內における不平

黨[illegible]のため、ジノヰエフ氏は（共産）インターナショナル幹事長たる自己の地位を利用してロシヤ全國の支部に、黨幹部を批難攻撃した秘密文書を配布し、部下を各地に密派して宣傳を行はしめ、或はモスクワ郊外に秘密會議を催ほしたりしたことは讀者の尚ほ記憶する所であらう。ジノヰエフ派がこうして直接反對運動を試みたのは、それによつて單に反幹部熱を鼓吹し、輿論を喚起するだけが目的ではなかつた。目指す所は分派組織にあつたと推せられる。無論分派運動を公然標榜した譯ではないが、前後の事情から考へて、單なる反對運動とは受取れない節がある。この想像は間もなくジノヰエフ派がトロツキー派と提携した事實によつて裏書きされた。幹部に對する不平が相當に黨内に漲つてゐることは蔽ひ難い事實である。反對派はこの形勢に着目して大規模に飛躍を試み、若し出來得べくんば分派を組織して幹部に肉迫しやうといふ計劃を抱いてゐたやうである。ジノヰエフ一派の運動が幹部に一大ショックを與へたのはこの所以である。

△意外なる兩雄の提携　分派運動の傾向はトロツキーとジノヰエフ兩氏の握手によつて愈々顯著になり露骨になつた。兩氏の接近はたしかに世人の意表に出でた、平素兩人の不和は誰知らぬものもない周知のことであるだけに、兩派の合同は尠からず社會の耳目を聳動した。たとへスターリン派に[illegible]起た理由の爲めに、あれ程仲の悪い政敵同志が握手したのだとはどうしても思へない。兩者合同の裏面にはもつと以上に深い原因があらねばならぬ。合同の目標は矢張り分派運動にあつたものと觀られてゐる。分派を組織して幹部派と決戰を試みやうといふ心算であつた。今日まで反對派は幾度か反抗を企てたけれども悉く失敗に終つた、多數を擁する幹部派を對手に單騎打は到底駄目だといふ苦い經驗を嘗めた。單獨行動の徒勞なるを悟つた反對派は、茲に合同結束して敵に當るの必要を痛感するに至つた。兩派は主義上の一致點に達した爲めに合同が成立したと觀るよりも、作戰上の必要が合同を促進したものと斷ずる方が至當である

ジノヰエフ派とトロツキー派は合同の旗の下に共同戰線を張り、直に實際運動に着手した。その運動がどんな結果を齎らしたかは後廻はしにして、茲に兩雄の思想系統に就いて一言し度い。

トロツキーとジノヰエフとは全然別種の思想系統に屬する人であるから、兩人の間に主義の一致點を見出すことは甚だ困難である。元とメンシェヰキー黨であるトロツキー氏は多年レーニン派を敵として闘つて來た、一九一二年の夏までトロツキー

氏はメンシェヰキー黨を指揮してレニン派を悩ましてゐたが、一九一七年の革命の際初めてボリシェヰキー黨に投じてレニンと行動を共にするやうになつたのである。斯の如くトロツキー氏がメンシェヰズム系統の人物なるに反し、ジノヰエフ氏は生粋のボリシェヰキー黨にして故レニンの高弟である。この思想、その政見において兩人が相容れないのは素よりその所にして何等怪しむを須ゐない。曾つてトロツキー事件起るや飽くまでトロツキー氏排斥を主張して讓らなかつたのは即ちジノヰエフとカーメネフ兩氏であつた。當時ジノヰエフ氏はスターリン氏に向ひ、トロツキー氏を黨の最高幹部政治部の地位から放逐せんことを迫つたが、スターリン氏は何故かジノヰエフ氏の要求に反對した。かうした行掛りのある間柄であるのだから兩人は總ての問題に關して互に意見の衝突こそ見るなれ、兩者の間に主義主張の一致などとは想像することすら出來ない。しかるに突如としてこの二者が手を握つたのであるから、世人の驚いたのも無理はない。世人は兩雄の意外なる合同に一驚を喫すると同時に、この提携が決して尋常一樣の反對運動を意味するものでないといふことをも察したのである。

△分派の傾向　前に言つた如く從來とは異つた方向を採んで分派運動に着手した反對派合同は、運動を開始するや早くも事實分派の危險に逢着した。黨内における不平の聲は思つたより甚だしかつた、幹部の官僚主義、軟化傾向に對する一部黨員の不滿は豫想外であつた。一言にすれば、黨内には分派の氣運が熟してゐる、反幹部的思想は黨内に漲つてゐる。故に若しも反對派合同がこの潮に乘じて分派運動を續けて行つたであらうならば、全露の不平分子は糾然としてトロツキー及びジノヰエフの麾下に馳せ集つたであらう。この氣運はさすがに分派運動を始めた所の反對派自身にとつても意外の感があつた、餘りのことに反對派は愕然たらざるを得なかつた次第である。分派はすなはち分裂離散を意味するものにして、共産黨の破滅である、致命的打撃である。黨にして分裂を來たさんか、反對派も幹部派も遂に諸倒れの悲劇となるであらう。かゝる危險に直面した反對派は直に分派運動を中止して、幹部派と妥協して黨の統一を救ふに決した（十月四日）

△黨内思想の惡化　反對派はその運動の結果の恐るべきを察して愛黨の念から運動を中止したものであると自狀してゐるが、黨内における一部黨員の心理狀態に徴する時は思ひ半ばに過ぐるものがある。ソルモフ市の一黨員は『レニンの教へを過信すべき必要はない、レニン自身だつて隨分間違つてゐる、がレニンは理論家と言ふよりは實際家の方が勝つてゐたから、實地に方

つて、この主義を確守したのである』と云はねばならない。レーニンに對してさへ抵抗した大膽な考へを有する黨員がゐる位なのであれば、現在の黨幹部連に對する不平不滿の聲が高まりつゝあるのは寧ろ當然と言ふべきである。更にポドリスク縣の黨員某の言葉に耳を傾けよ。彼は時の推移に從ひ政治思想に對する黨員の要求も自然と變化して行くものであるといふ意見を持つてゐる。彼はこの見地からレーニズムを批評して『以前はマルクシズムであつた、今ではレーニズムである、そして今後は何かレーニズム以上のものでなければならぬ。レーニンの教へは當然ズタるべきものである、我が黨は一箇所に足踏みして立止つてゐる譯に行かない』と言つてゐる。黨内には既に黨の福音書たり信條たるレーニズムの凋落を豫見する黨員さへ見當るやうになつた。これと同感の黨員が一人にあらず二人にあらず、隨處に共鳴者を見出すとすれば、今やロシヤ共産黨は重大なる場面に際會してゐることを否むことは出來ない。共産（第三）インターナショナルの中央委員會委員ペーレ氏はトロツキー氏を禮讃しレーニン派を罵倒して『レーニズムの熱狂者よ、トロツキー氏の如き天才的人物を捉へて抑も戯談が言へると思ふか。友よ、速かにレーニズムを棄てよ。レーニズムの修正は何が故に不可ないか。レーニンの手に成るもの、レーニズムの多くの點は寧ろ既に現在の政情には當らなくなつてゐる。レーニズムを現代にとつて一層適當な新しい意味と解釋をすることが出來るではないか』と叫ぶ。これは甚だ大膽に思ひ切つた意見であるが、これ等の斷片的例證によつてロシヤ共産黨の内部の空氣が如何に動搖しつゝあるか、大體に想像が付くと思ふ。要するに、レーニンの教へは最早や現代人の要求に適應しないといふ思想が黨の一部に擡頭しかけてゐることは爭へない事實と認めざるを得ない。かくて分派の氣運はレーニズムの修正思想に胚胎してゐることを推知することが出來る。レーニズムの修正乃至別個のものを以てレーニズムに取替へんと欲する試みは、トロツキー氏の多年の野心である。トロツキー事件は實に斯かる野望とレーニズムとの正面衝突に外ならなかつたのである。今日黨内一部の人心は次第にトロツキー氏の目指す方向に向つて辿りつゝあるのではあるまいか。

△運動中止の動機　黨の危機を救はんが爲めに運動を中止し反對派解散に決した反對派合同は十月十六日、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフ外三名から成る指導者の連署を以て聲明書を發表して反對派運動中止の理由を明かにした。彼等は右聲明書において反對派運動は中止するけれども、彼等の主張は決して撤回するものでない旨を聲明してゐる。反對派は當局の[illegible]

似ず中途にして運動中止の已むなきに立至つた理由を、十一月一日の第十五回黨大會において説明してゐる。反對派の領袖連は交々起つて這般の事情を述べたが、カーメネフ氏は『黨員一般の我々に對する要求を諒として運動を中止したのである。分裂の危險を惧れて中止した』と言つてゐる。トロツキー氏また『最近に及び內訌は非常に惡化し、分裂の傾向を帶び來つたことは疑ひを容れない』と斷言し、更にジノヰエフは『我々が運動を中止するに至つたのは黨の統一を要望して止まない黨員一般の希望と心的傾向に副はんが爲めである』と自白してゐる。三氏の言葉を玩味すれば分裂の兆候歴然たるものあるを看取するに難くないであらう。しかるにスターリン氏は反對派の運動中止に關する聲明を以て反對派の降服と見做し、而してその敗因を論じて彼等の無主義、無節操にあると斷じてゐる。元來トロツキー派とジノヰエフ派の合同の如きは常識を以ては想像の出來ない藝當である。彼等は一時政略の爲めに落合つたに過ぎない、決して主義主張の一致から提携したのではない、一種の野合である、變節漢同志の寄り合ひである、彼等の爲には統一もなければ結束もない。さればこそ未だ一戰をだに交えない內に早くも講和を申し込んだのである、敗れるのが當り前であると見くびッてゐる。スターリン氏は反對派の歸順を目して彼等の敗北にして、幹部派の勝利であるかの如く喜んで黨の將樂觀してゐる。反對派が口を極めて黨の危機を絶叫して警與へてゐるにも拘らず、スターリン氏は反對派が黨の危機呼ばはりをして幹部を攻撃するのは、要するに黨員を煽動して幹部を中傷せんとの魂膽であると見てゐる。幹部派は黨は未だ反對派が騒ぎ立てる程左樣に危險に瀕してはゐないと信じて、反對派の輕擧妄動を戒めてゐる。ロシヤ共產黨は幹部派が樂觀するが如くに果して安泰であり得るだらうか、但しは反對派が切りに指摘するやうにグラツキ出してゐるだらうかは、これを將來に徴することが出來る。

△來るべき內訌の豫想　反對派はその共同聲明書に、彼等は依然その主義主張を枉げるものでないことを言明して、またジノヰエフ氏は前記十一月の黨會において『吾人は黨規の範圍內において、黨の許す形式において吾人の主張意見を擁護するであらう』と豫告を與へてゐる。反對派は上に述べたやうな事情で已むなく幹部派と妥協はしたものの、彼等は斷じてその主張を放棄することなく、今後は黨規の範圍內で闘つて見せるといふ。されば中止されたのはたゞ分派運動であつて、主義上の爭ひは今後も依然合法的手段によつて何處までも繼續すべきことを明かにしてゐる。そこで問題は、ジノヰエフ氏が言ふ如く合法的手

段に於いて[illegible]なるかとい
ふことになる。今日まで彼等の反對派は實現の示すやうに[illegible]にお
いて合法的に幹部派と闘つて來た、そしてその結果は從來の方
法では彼等の主張を貫徹することは六箇敷しいといふ結論に達
した。その結果がジノヰエフ派の陰謀的策動となり、次いでト
ロツキー及びジノヰエフ兩派合同の分派運動となつたのであ
る。既に合法的運動に失敗してゐることとなれば、今更反對派が
失敗を繰り返すの愚は演じないだらうと思はれる。過去の歴史
に顧みる時は、反對派は今後と雖も分派運動の直接行動に復歸
するものと見るが妥當であらう。ジノヰエフ氏が「新たなる內
訌が起るとはないだらうか、彼の聲明書は新しき形式において
將來分派運動を開始する爲めの保留ではないだらうか」と言つ
てゐるのは、反對派の決意の那邊にあるかを示すものではある
まいか。

黨の內訌は最近に至り愈々惡化して分派的傾向を帶びて來た
とトロツキー氏は幹部派並に一般黨員に對して注意を促がして
ゐる。共產黨の現狀から見て彼の警告は決して偶然でない。內訌
は初めレニニズムに關する見解の衝突に起り一轉してレニニズ
ムに對する修正派と、レニニズムの傳統を固守する幹部派との
爭ひに變化しつゝある。幹部派を代表するスターリン氏の意見
[illegible]
あるかといふ[illegible]レニニズ
ムの[illegible]代は漸く過ぎ去らんとしてゐる。[illegible]してこれが
爲めに最も危險性を含む分派運動が內訌の中心問題となつて來
た。知らず、この恐るべき分派運動に對して幹部派は如何の對
策ありや。スターリン氏は十一月一日の黨大會において前後二
回に亘り堂々數萬言を費して反對派を論駁擊破せんとしてゐる
が、その中に彼は反對派の分派運動に打ち勝つべき唯一の對策
として、黨員最多數の一致團結の必要を大に力說高調してゐ
る。トロツキーやジノヰエフの如き傑物に對抗して善く黨の統
一を維持し分裂を喰ひ止めるには、偉大な人格と非凡の才能に
俟たねばならぬ次第であるが、小レニンを以て任ずるスターリ
ン氏がこの資格を具備してゐるかは自ら疑問たらざるを得ない
であらう。ジノヰエフ、トロツキー派對幹部派との妥協にこれ
を休戰期に譬へることが出來やう、兩派の協調が圓滿に行けば黨
の平和を期待することが出來るであらうが、若し然うでない時
は再び不祥事を惹き起すに至るべきは明かである。その場合新
たなる內訌が更に深刻の度を增し、更に危險に陷いるべきは今
よりしてこれを想像するに難くない。

レニン逝いてまたレニンなしの感を深うして筆を擱く。

英國産業の凋落と勞資の激闘

高橋龜吉

一

英國産業の平和は、英國産業の世界的覇權が揺ぎ出すと共に綻び始めた。而して、その産業平和の破綻は、英國經濟の繁榮が凋落するにつれて愈々増大し、遂に今日の險惡なる狀態にまで發展するに至つた。

一八〇〇年頃の英國は、「その製造工業は公平に云へば他の凡ての諸大陸のそれを總計したよりも四倍大きく見積ることが出來、木綿に就いて云へば、歐洲大陸の十六ケ國が一つになつて來ても英吉利一國の生産する程生産することは出來ないのであらう」と謳はれ、世界の工場國として、世界の産業學校として、實に洋々たる前途に揮してゐた。然るに、一八八〇年代に於ては、已に獨逸の驚くべき發展のために、英國從來の獨占的位置は覆され、米國の隆々たる發達に由つて英國從來の繁榮は脅かされてゐた。この傾向はその後愈々強大となり、二十世紀に入ると共に、英國産業の衰運は漸く顯著となつた。その結果、これ迄、その國民一般の生活程度を向上せしめ、國内上下の平和を謳歌せしめ來つた英國産業は、茲に、その能力を失することゝなつたのである。一九一一年から一九一三年にかけて、炭坑夫、鐵道從業員及び一般運輸勞働者等が未曾有の勞働爭議を引き起し、英國資本家をして「勞働不安」に怯えしめるに至つたわけは、要するに以上の如き英國産業の凋落に基因するものである

斯かる所へ、一九一四年から一八年へかけての歐洲大戰爭は勃發した。この一擧に由つて、獨逸の出鼻を挫き、再び英國産業の世界的覇權を挽回せんとするのが英國政府の大魂膽であつた。而して、戰爭中は「愛國心」の名に由つて、さしもの勞働爭議もこれを宥め得たかに見へた。しかし乍ら、事實は全く逆であつた。

歐洲戰爭は思ひも寄らぬ莫大な負擔を英國に強ひた。先づ第一にその巨額の戰費のために、英國の富強は著しく衰弱した。

第三に[illegible]に[illegible]に[illegible]
[illegible]して、[illegible]くの[illegible]に英國最大の得意先である歐洲大陸が戰爭のために疲弊して著しく購買力を減少した。第四に戰爭中米國の産業は一大飛躍と莫大の巨利を得て、單に英國の産業を凌駕するに至れるのみならず、從來英國最上の強味であつた世界の金融的霸權を倫敦から紐育に奪ふに至つた。

例へば、歐洲戰爭前に於ては、紐育は普通の場合常に倫敦よりも金利が高かつたのが、最近に於ては多くの場合紐育の金利の方が倫敦よりも安くなつてゐる。現に英蘭銀行の公定割引率は五%であるが、紐育準備銀行のそれは四%である。更に例へば、英國は一九二四年春金解禁を斷行したが、その目的は之に由つて英國の世界金融中心地たるの霸權を挽回すると共に、磅計算で海外に投資してゐる英國資本の巨大の損失を（磅貨の下落に由る）防止せんとしたのであつた。所がそのためには、英國は米國から巨億の信用を借用せねばならず、斯くして、結局、英國は米國の金融霸權の下に屈服することゝなつたのである、この點につき、英國の朝野が如何にイラ／＼してゐるかは、トロツキーがその近著「英國は何處へ往く」に於て引用してゐる左の一節を讀むだけで十分であらう。

「[illegible]一大國際[illegible]は[illegible]ドに[illegible]に對しその成する時には何時でもイギリスに於ける[illegible]を發生せしめ得る機能を獲得しつゝある。英國政府は自國の金融政策の全部を擧げて外國民に委ねんとしつゝある。…英帝國は合衆國に買入せられんとしてゐる」と。保守黨機關紙デーリー、エクスプレスは曰ふ「チヤーチルの御蔭で英國は米國銀行家の足下に平伏しつゝある、」と。デイリー、クロニクルは更に決定的た意見を述べて曰ふ「英國は事實上アメリカの第四十九州たるの地位に低下せしめられてゐる」と。これ以上明瞭に截然と敍べることは不可能だ―。これらの烈しい自己叱責（但し理論も方法もないが）に對し、藏相チヤーチルは英國にはその財政組織を實情と一致せしむるより外に途なしとの意味で應答してゐる。チヤーチルの言葉の意味は、吾々は謬りなく貧乏になつた、合衆國は謬りなく富裕になつた、吾々は合衆國と爭鬪するか或は合衆國に屈服するかの何れかを選ばねばならぬ。英貨ポンドの將來をアメリカ銀行に依存せしめることによつて吾々の一般的經濟の衰運を正貨に表現さしてゐるのみである。吾々は自ら頭上を飛び越へることはできぬ。吾々は「實情と一致」しなければならぬと云ふのだ』――主として秋原久興、越智道順

兩氏譯に由る――

二

加ふるに、歐洲戰爭に由つてタヽキ潰したと考へた獨逸の産業は、ベルサイユ平和條約異常の壓迫にも抗して、最近來著しく頭を擡げて來た。就中、褐炭生産の激增、造船業の復興は英國の同種産業に最も多大の壓迫を與へた。その上に、この重大の時期に於て英國の産業はスツカリ衰退し始めてゐる。例へば、石炭や鐵の資源は老境に這入つて來て、とても、米國その他の新進のそれと太刀打ちは困難である。のみでなく、英國の産業は從來永く世界の覇者たる位地を占めて來たと云ふことの故に、その設備や經濟法が日進月歩の發達に後れて著しく時代後れな、能率鈍きものとなつて來た。しかも、その勞働階級は、從來の世界産業の覇者時代の特權的待遇に慣れて來てゐるので、容易に不遇時代に適應せず、從つて益々勞働爭議は深刻となり、斯くて愈々資本家の利益は減退し、損失の脅威は益々大となる。さうなると、資本家はその新たな資本を英本國に投資よりも、之を海外に投資する方が益々有利となるので、玆に、英國資本家の自國産業の進歩改善に必要な手入は愈々疎となり、英國産業の凋落荒廢の傾向は加速的となる狀態である。

斯樣なわけで、英國の輸出は世界到處に於て減退しつゝあるが、就中英國人の悲觀を最も深からしめつゝある現象は、英國經濟最後の賴みとする自國植民地に於てさへ、外國、就中米國に蠶食されつゝある形勢の顯著なことである。例へば、英國各自治領の外國輸入總額の中、英國と米國とがその中に占むる夫夫の割合を見るに左の如く、英國の占むる割合は戰前に比し何れも著減しつゝあるに反し、米國のそれは長足の進歩をなしつつあつて、明かに英國産業は米國産業のために敗られて漸次減退しつゝあることを窺ひ得る。

英國自治領の總輸入高中英米の占むる割合

	英國よりの輸入		米國よりの輸入	
	一九一三—一四年	一九二五—二六年	一九一三—一四年	一九二五—二六年
加奈陀	二〇・七%	一七・三%	六五・〇%	×六七・三
濠洲	五二・四	四五・二	一三・九	二四・六
新西蘭	五一・五	四七・八	一一・六	一六・〇
南阿	五四・四	×五二・一	九・五	×一二・九
印度	六四・二	×六〇・三	二・六	×五・七

(備考)×印は一九二二—二三年

三

斯様にして、英國の持つ世界的覇權は愈々凋落し、英國資本家の利益は著減し、英國經濟の人口支持力は減退するに至つた。歐州大戰終息以來今日迄已に八ヶ年を經ながら、此間、英國の失業者は百萬人台を下れることなく、その家族を合すれば實に約五百萬人內外の人々が一時的でなく恒久的に飢餓に脅かされてゐるのだ！　しかし乍ら、英國產業凋落の生んだ大悲劇は、單に以上の如き恒久的莫大な失業者を出した丈で幕を閉ぢたわけではない。單にこの莫大な失業者を何とか始末せねばならないと云ふ大仕事がいま頭上に落ちて來てゐるのみでなく——さうでなくてこのまゝこの莫大な失業者を支へてゐては、その維持費だけでも英國經濟は遂に破產せざるを得ない、さもなくて飢餓に委すれば更に恐るべき社會不安が脅かしてゐる。現に辛うじて職業に從事しつゝある勞働者、現に辛うじて煙を吐きつゝある工場の多くも亦、此際何とかその產業を改革せねば漸次衰亡するの外なき窮狀にある。

この英國產業の窮狀打開策として提案されたものは二種だ。一は資本家側からで、要するに、勞働賃銀を引下げ、勞働時間を延長することに主力を注がんとする改革案である。英國產業は貧乏になつた。もう昔の如く勞働者を優遇することが出來ない。英國の產業を再生さす道は只だ一つ勞働賃銀を引下げ、勞働時間を延長し、以て、外國產業との競爭に勝つの外にないと云ふのがその理由だ。いま一つの產業改造提案は勞働側からで、要するに、勞働者の生活程度はこの上引き下げる餘地はないから——勞働賃銀引下も勞働時間延長も反對——產業上の技術的、組織的不利の點を改造することによつて之に代へよと云ふのである。而して、その技術的、組織的改造は、資本家の所有權にまで立ち入つて、之を國有化し、結局資本家により大なる犧牲を支拂はしめんとするものである。

かうして、英國產業行詰の打開、轉換の問題は、結局、その打開、轉換に必要な改革の犧牲を、主として勞働者側に荷はすべきか、將又之を主として資本家側に負擔せしむべきかの資勞對戰にまで導いたのである。この勞資の對戰は、已述の一九一一年から一三年にかけての「勞働不安」所の沙汰ではない。資本家側も文字通り「死ぬるか生きるか」の問題であり、勞働側も文字通り「殺されるか生き續けるか」の關ケ原である。しかも、その戰備は勞資共已に歐洲大戰末期頃から徐々に着手したもので、殊に近年、戰雲愈々急なるに從ひ漸く激烈露骨となり、傳統的「穩健着實」の國民性も、自由主義も、忽ち霧散して、資本家側は愈々反動となり、勞働側は益々急進的となり、茲に、勞資の對戰は著しく激化し、惡化し行く傾向が著しくなつ

たものである。尤も、初めは、勞資の對立戰を避け得る見込みで、勞資協調會議が高調せられ、一九一九年前後に於ては、サンケー報告や（炭坑國有案を建議した）ホヰ，トレー案（勞資產業經營會議案）などを生んだ勞資會議が盛行したのであつたが、それらの決議や建議が、資本家の利益のために政府に由つて裏切られるや、茲に、勞働側は一路實力戰の戰略に移るに至つたのである。而して、資本家側もこの形勢を見て、早晩何れ徹底的に勞働軍と激戰せねばならないのならば、出來るだけ早く徹底的に勞働軍とを慘敗せしめたがよい、そのためには如何なる犠牲を拂ふも此際致方がない、と或は私かに或は公然と主張するものが多かつた。斯くして、勞資双方ともに、何時かは決戰の避くべからざるを覺悟し、（それ迄已に幾度かの爭議は鬪されたが未だ決戰に至らないで水を入れたものであつた）その日に備へることに全力を擧げたと云つてよかつた。

而して、この一大勞資戰の戰線に撰ばれ立つたものは、今日、英國產業の樞軸を成し、しかもその產業行詰の狀態最も甚しき炭坑業であること周知の如くである。即ち、資本家はコソッテ炭坑業家を助け、勞働側は全力を擧げて炭坑夫を援助したのである。斯くて、去る五月、世界の耳目を聳動せしめた英國總罷業となつたのであるが、いまその直前に於ける勞資双方の陣容を見るに實に左の如き總動員的戰列を布いてゐたのである。

▼勞働側陣營

一、勞働組合會議……英國勞働運動を指導統一する。就中一九二四年組合會議內に總務評議會が設置されて、更に强固な指導權が確立された。

二、統一運動……國際勞働組合運動の統一に賛成する左翼派で、一九二四年勞働內閣の失敗以來漸次に（一）の勞働組合會議の指導權を掌中に收め來つた。

三、少數派運動……トム・マン等を首領とし英國共產黨と有機的關係を有するもので、八九十萬人の組合員を擁し一九二四年以來英國勞働組合運動內の一勢力となつて現はれ始めた。

四、產業聯盟（四角同盟）一九二一年三角同盟失敗に鑑み一九二五年六月結成せられたもので、炭坑、鐵道、運輸、金屬の四大勞働組合、二百萬人の攻守同盟である。

五、英國共產黨……五六千人の會員に過ぎないが、しかし英國勞働運動の最左翼として活動する政治團體、即ち、（三）の少數派運動と有機的關係にある。

六、勞働黨……三百五十萬人の會員を有する勞働側の政治團體。

▼資本家側、

一、大英產業聯盟……一九一六年の成立にて英國資本家の大同團結である。例へば一九二三年六月現在に由ると加盟會社千八百、加盟協會百七十、所屬產業部門二十三種、下院議員六十六人、上院議員七十である。歐洲戰後英國に勃興した國有運動を撲滅して政府をして遂に約束を破らしたものは此聯盟の全力を擧げた活動に由る。

二、全國炭坑主協會……（一）の大英產業聯盟と密接の關係を保ち、且つ全炭坑業者必死の團結を以て勞働側の中心戰鬪力たる大英炭坑夫同盟に對峙してゐる。

▼政府側及資本家社會側

一、勞働者壓迫法令

（イ）非常權力法……同情罷業運動の或點以上に達したるものを兵力を以て鎭壓せんとするもの、

（ロ）秘密法……一九二〇年發布、第三インターナショナルとの聯絡を斷んとするもの、

二、罷工破り團體……在郷軍人、舊官公吏其他を糾合して、罷工の際公共事業、運輸、交通、通信等に從事さし、以て罷工の壓迫を避けるため豫め設けられた團體。その重なるものには、（イ）保給團、（ロ）全國市民團、（ハ）國民當兵、（ニ）英國ファシスト等がある。

然るに、大資本家とともに中流に準備をしここ、資本家側は政府を先頭に立て、勞働側は坑夫を先頭として、一大決戰を宣言した。これは去る五月初であつた。しかし、この英國の總同盟罷工、及び炭坑大罷業の詳細については、當時、（十五年六月號）の本誌に於て已に紹介された所であるから茲に之を繰返さない。問題は、その後の炭坑大罷業の經過と英國勞資戰の前途である。

四

英國炭坑罷業を助けに立つた同國總同盟罷業は、五月四日に始つて十二日に撤去せられた。斯くて十三日には已に同情罷業者の復職者續出するに至つたのであつたが、獨り、坑夫側のみはこの通告に從はずして單獨罷業を續けた。世界に一大衝動を與へた英國總同盟罷業は明かに失敗に終つたのである。この失敗因は、要するに、英國產業凋落の爲め蒙る勞働側の壓迫が、產業に由り非常に差があることに在る。就中、今度の總同盟罷業の中心をなすべき炭坑夫と、鐵道從業員とはこの兩極端に立つて、その利害が著しく距離を異にしてゐた。例へば、炭坑業はその產業の特性から、他の產業よりも就中多大の打擊を蒙り、從つて炭坑夫は最重の壓迫を受けつゝあるに反し、鐵道業は

の事業の性質上最も輕微な打擊に過ぎず、從つてその從業員の待遇は他に比しいま最も壓迫の少い位置に本る。勢ひ、總罷業に由つて達成せんとした目的、總罷業に盛られた階級意識等にも深淺の差少からず、遂に總罷業の解決條件に於て炭坑夫側と其他との歩調揃はずして分裂するに至つたのである。

總罷業失敗後に於ける炭坑夫側の孤軍奮鬪は、文字通り死物狂ひであつた。之に對抗する坑主側の戰意は更に頑強にして、豐富なる金力と、全資本家を背景とする政治力（保守黨政府を驅使する實力）とに由つて、一歩も假借することなく、此の機會に勞働勢力を徹底に打ち碎かんとするものであつた。斯くて、或る程度の條件の下に於て妥協せん機會を狙つてゐる坑夫側領袖に些かのスキをも與へなかつたのである。これ、坑夫側が、已に、その勝算を失ひながら尙ほ罷業打ち切りの機會を捕へ得ずして、五月より十一月末まで前後七ケ月間の大罷業――それこそ必死の――を餘儀なくされた根因である。しかも、その結果は、坑夫側の殆んど無條件屈服に等しい慘敗であつた。以下、その經緯の概略を鳥瞰するであらう。

炭坑爭議調停案の第一は、總同盟罷業撤去の理由となつた衝炭坑業調査委員會長ハーバート・サミュエル氏の覺書であるが、これは、五月十一日坑夫側から「之を善意に解釋した所で、炭坑夫多數の賃銀値下を意味するものであつて、こ(れ)やがて坑夫聯合會がかねての聲明に背反するもので且つ全合員が炭坑夫を援助したのは實に之に反對せんが爲であつた」として一蹴された。

總罷業を中止しない限り、調停はしないと大上段にかまへた政府は、總同盟罷業中止後の五月十五日、始めてその炭坑爭議解決案を双方の爭議當事者に送つた。その要點は、政府は炭坑調査委員會の勸告（中央公論十五年六月號拙稿「英國炭鑛業行詰の實相と其原因」にその要領あり參照）に基き、炭坑業の組織改善及能率增進を圖るため、實行し得べき凡ゆる方法を採用することゝし、先づ、直ちに立法すべき事項を例擧し、且つ一定期間政府補助を繼續し、（三百萬磅即約三千萬圓を限り）而して勞働條件決定のため勞資及中立代表者より成る會議を組織し、それの決定に從ふべきことを提案した。しかし乍ら、この提案は勞資兩方から峻拒せられた。坑夫側から云へば彼等が死守せんとする、勞働時間延長反對、賃銀の全國的協定原則維持、國有に進むべく炭坑業の改造の三點に反するからであり、炭坑主側から云へば、彼等が「炭坑業蘇活の唯一方法として」頑强に固執する、國有に進むべき炭坑業改造の反對、八時間制度復活（七時間制を八時間制に）、賃銀の地方的協定及び賃銀引下げの

三點に反するからである。政府注目すべきことは、炭業主側が「炭坑業を私的企業として經營せんためには、他の事業に於けるが如く、政治的干渉より自由となるにあらざれば不可能なり」と力說して、一切の政府の干渉より脱し、かくて坑夫を壓迫せん態度を强硬に且つ露骨に現はすに至つたことである。斯様にして、勞資共頑强にその主張を固守して下らず、炭坑大罷業は暗の中をズン／＼と進行し續けた。（此間七月十九日全國クリスト教會代表者が仲裁に立つたが政府之を拒絶した）

茲に於て政府は爭議解決の主動的態度に出づることを控へて、英全國を炭坑勞資爭鬪の蹂躪するに任かせ、僅かに、爭議解決の交渉を容易ならしむる素地となり且つ政府の措置を必要とすることを着々と實行したに過ぎなかつた。しかし乍ら、結局これ等の措置は、何れも、炭礦主側のみを利して坑夫側を壓迫する作用のみをなし、之を以て政府が資本家と一所になつて、『賃銀及勞働時間に對し總攻擊をなす第一歩』なりとする聲が勞働側から旺んに絕叫せらるるに至つた。事實、勞働側のこの絕叫には多くの理由が發見せられる。例へば、此間政府の採つた措置の重なるものは、勞働側の議院内外に於ける必死の反對運動ありしにも拘らず、（一）炭坑勞働時間の七時間制を八時間制の法律に改めたこと（六月二十一日成立）と（二）新鑛業法の制定（八月四日成立）したことの二つである。中、勞働時間の延長は、さきに政府の任命した炭礦委員會の報告に於ても排斥されたものであることは自己の任命した委員會の報告に違反した所であつたが、いまや政府は敢て炭礦資本側の要求に強いられて之を法律化したのである。更に、新に制定せられた鑛業法は、炭礦業調査會の報告を實現したものだと稱せられながら、その肝心の趣旨とは少からず離れたものである。例へば、

一、調査委員會は炭坑業繁榮に必要なる炭礦の合併を强制的に且つ組織的になすべき旨を答申せるに對し、新鑛業法は單に之を炭礦主の意思に一任し、唯だ、その合併を容易にしたに過ぎない。

二、調査會は又、ロイヤリティ（採鑛料）の國有を答申してゐるが、新法は僅かにロイヤリティの二十分の一を徴收して、炭坑夫に對する福利基金となさんとするに過ぎない。

三、石炭販賣法改正につき、地方公共團體に石炭販賣の權限を與ふる規定がない

試に今、新鑛業法の重なる點を要約すると左の如くである。

一、炭業の合併――石炭の經濟的且有効なる作業を促進する目的の爲炭業者は全部的又は部分的（作業又は營業の一部分に限る）合併計畫を立て、又右目的の爲合併に不同意なる炭

をも吸集するを便宜と認むるときには、其の吸集計畫を立て、之を商務省に提出し、審査の上認可された時は强制力を有する。

一、採炭の便宜――採鑛又は採炭をさんとする者が千九百二十三年鑛山法第一編に依り其の願出を爲せる場合には、鐵道運河委員會は國利に適するものと認めたるときは、從來の規定の如く願出人が旣に該炭坑又は隣接炭坑に利害關係を有すること、又は該炭坑が永久に採掘されざる惧なきこと等を條件とせずして之を許可することが出來る。

一、福祉基金――採鑛税支拂義務者より本會計年度以降每年度ロイヤリテイ二拾志に付一志を徵收し、之を千九百二十年鑛業法第二十節に依り設立せられたる基金に繰込む。

一、勞働者の補充――勞働大臣は炭坑勞働者の補充に關し千九百二十六年四月末の從業者に優先を與ふる規定を設くることを得。又同規定中には炭業勞働者の雇傭に關し制限を設くることを得る。

×　　×　　×

然るに、炭坑主側は、政府が一度び八時間制を法律化するや、直ちに八時間の下に舊賃銀を支給すべきを定め、坑夫側の結束最も弱く且つ炭坑の事情最も有利で、最も高賃銀を支拂ひ得る能力ある地方に於ては更に之をより有利にし、以て罷業の結束を破らんとする方法に訴へた。斯様にして、復業者は に增加する傾向あり、坑夫側にいさゝか焦慮の氣味が見へた。斯くて、八月二十七日には、坑夫組合代表者（會長スス、書記クック氏外二名）は內閣石炭委員會と會見したるを始めとし、八月三十日には議會內勞働黨と始めて會見するなど種種對策を樹てることに奔走し、九月三日には坑夫側は總相に對し、『當方は炭業刻下の急に應ずるため勞働費輕減の目的を以て新全國的協定の交涉をなす意思があるから、政府は坑主聯合會と坑夫組合との會議を召集し、且つ之に參加せんことを望む』旨を申出でた。然るに、坑主側は政府のこの召集に對し、『坑主聯合會は全國的協定をなすべき權限は最早無く、地方的協定外の交涉には應じ難し』として之を拒絕した（九月六日）。坑主側が全國的協定に斷乎として反對なる態度を見よ！

之に對し、政府は坑主側のこの態度を改めさせんとして、種種之を或は勸說し或は强迫した。曰く、サミュル委員會も地方的協定に反對なり、坑主聯合會自身も罷業開始以前には全國的協定に同意したるに非ずや、曰く政府の八時間勞働制は全國的協定可能の狀態の下に於て制定したもので若し然らざれば同法案は提出せられなかつた筈である。曰く坑主側聯合會が罷業前一ヶ年餘も全國的團體として行動しながら、今更その立場を棄

これは各十數論の文書に見ふべし、曰く若し炭坑主側が決定的に全國的協定を拒絶せば政府は獨立して相當の手段を取る、例へば奉天裁判所設置の場合には坑主は當然全國的團體として取扱はれ、之を拒絶せば欠席裁判を受ける、等々が即ちそれである。

而して、藏相は同月九日に至り、坑主側に書面を送り、政府の企圖する勞資及政府會議の性質及び其の議事の範圍を說明した。その趣旨は、

一、差當り限範圍の一般原則を全國的に設定すること

二、右一般原則に準據して地方的協定を行ひ賃銀時間其他の條件を定むること

三、右地方的協定成立と同時に炭坑作業を開始すること

四、地方的協定中從來慣習上全國的協定を受けし事項に付ては中央團體の確認を求むべきこと、而して必要あれば更に地方的審議會に廻付し得べきこと、

之に對し坑夫側は之を商議開始の基礎とするに異存なきものと目されたるにも拘らず、坑主側は、全國的協定反對の態度愈々熾んとなり、合計二十五の坑主地方協會中二十四協會迄は、之に反對した。而して坑主側代表者は更に之に附言して政府に傳へて云ふ「地方坑主の此決定は、全國的協定は產業と政治とを關連させ、純然たる產業問題を必然的に經濟問題の範圍から逸脫させ、炭坑夫に於ても曾て經驗せざる會議になることを確信せしむる結果になつたのであつて、若し炭坑主側が其の手段を取る)ならば何時にても各地方坑夫組合と交渉を開くことを歡迎してゐると。

見よ、坑主側は、政府の提案に對し一度とも之を峻拒してゐる。一は政治的干涉を排すると云ふ理由に於て、一は全國的協定は必然に政治的干涉を誘ひ、國民を脅威(全國的大罷業になるの意と見るべし)するに至るとの理由に於て……。而して、坑主側のこの態度は罷業が永引くにつれて愈々硬化し益々頑强になつた。損失ついでに、此際、徹底的に將來の禍根(資本家側から見ての)を絕滅せん、そのためには、如何なる犧牲を此際支拂ふも僞ほ永い目で見れば利益であるといふのがその根據であつて、そのため炭坑夫が如何に悲慘に陷り、そのため社會が如何に迷惑するとも、是が非でも此の機會に賃銀の全國的協定の打破、勞働時間の延長、賃銀の引下げを斷行せんとするものであつて、之れ資本家の過激化に外ならない。しかも、保守黨政府は遂に之を如何ともすることが出來ず、政府の威信殆んど地に墜ち、炭礦資本家に散々飜弄せられて爲す所を知らない。斯樣にして、賃銀の全國的協定を條件にして制定せられた八時間勞働側まで、資本家が丸儲けをして舌を出してゐる形と

なつた

坑夫側は、こゝに於て、その初めの主張を全部滅茶〱にされたわけだ。第一に七時間勞働制の延長に對する絶對反對は保守黨の政治的勢力で敗られて了つた。第二の陣地である賃銀の全國的協定は以上の如くにして資本家側から一蹴せられた。第三の陣地であつた炭礦業の國有に至る改造は保守黨の新礦業法で丸で骨抜きのものが立法せられた。而して、賃銀の引下げはかうなつては最早問題にはならないのだ！ 坑夫側が勝利の見込全く無きに至りながらも、斯かる事情の下に於ては、死物狂ひに罷業を續ける外なきに至つたわけが容易に理解出來るであらう。死物狂ひと云へば、坑夫側は斯かる窮地に陷るや、最後の死物狂ひとしてこれ迄炭坑保存のために就業さしてゐたポンプ夫其他に罷業を命じ、炭坑を水中に沒せしめんと圖るものが少からず生ずるに至つたが、已にこの時には、罷業の歩調が亂れて、斯くの如き手段も直ちに代人に出つて代られ、結局、炭坑夫側に對する社會の同情を失ふに過ぎない事情にあつたので、大事に至らずして濟んだ。

併し乍ら、解決の目當て全く無くして、何時迄も飢餓に抗するわけには行かぬ。地方の炭坑夫は、致方なく、その地方々々で勝手の地方的協定を遂げて復職するもの愈々増加し、最も強硬に反抗し來つたサウス・ウエルス地方が、八時間勞働制に賃銀は罷業前と同樣と云ふ地方的協定で十二月一日より復業するに至つて、玆に、全世界の耳目を衝動せしめた大罷業も、いよ〱、各地方バラ〱に坑夫側が殆んど無條件降伏の形で終息を告げたと云つてよいことゝなつた。然り、七ケ月の大苦鬪にも拘らず、坑夫側は、一九二〇年、一九二一年の二大罷業以來爭ひ來つたものゝすべてを失つたのだ！

五

以上に由つて誰にも分る通り、坑夫側今度の敗北は、飢餓に手足の自由がきかなくなつた體を、坑主側から散々に踏んで蹴られて、降伏を強ひられたものである。恨み骨髓に徹すとは眞にいまの坑夫側の心境であらう。如何にも、炭坑大罷業は復職した。しかし、それは『爭議が解決』したからではなくて、この恨みを他日に晴らさんがためだ。上に述べ來れるが如き狀態の下に於て、如何にして、産業に平和が望み得られやうぞ。斯の如き勞働側の反感の下に於て、如何にして炭坑業の能率が上らうぞ。

かうした考へは、今や英國人すべてが、嫌でも應でも認めさるを得さるに至つた。七ケ月に亘る炭礦夫の苦鬪は、かうした

[illegible]なかつた。いまのまゝでは[illegible]ない！ 戰[illegible]勝天に戰闘力が再び出來上つた時、英國人は更に今度の如き大犧牲——一日一三千萬圓の損失と見て約五十億圓——を強ひられる運命に在るのだ。この理解がどれだけ英國人に教へることであらう。思ふに、英國は、今度の苦い經驗に由つて、この英國產業最大の痛を料理すべく、政治的に必死の努力をなすに至らう。次の總選擧が之を如何に處置するかゞ見ものである。現に、保守黨政府今回の處置は、英國民の多數に保守黨無能の聲を大ならしめ、その資本家的反動政策が如何に犧牲多きものであるかの知れると共に、保守黨不評の傾向は漸く大となりつゝある。

更に他の一つの傾向は、これ迄「穩健着實」を以て鳴つた英國勞働運動が、今度の罷業に苦められ、壓迫せられて、著しく左傾し來りつゝあることである。例へば、今度の總罷業の失敗は、食料品其他日常必要品を例外としたからである、蓋し、總罷業の威力は之を脅かす所にのみあるのだから！と云ふが如き問題に耳を傾けるものを生じつゝあるが如きはその一例である。而して、英國勞働運動の左翼（共產黨と有機的關係に在る）なる全國少數派運動は、益々膨脹しつゝあつて、已に去る八[illegible]十五萬六千人の會員を包含する約八百の[illegible]代表者が出席したと稱せらるゝが、この大會に於ても、今度の總罷業の失敗に鑑み、次の大罷業に備ふべき重大決議が通過してゐる。更に又、この左傾運動は、勞働黨内に於ても、左翼派を生じ、マクドナルド、トーマス一派の右翼との分裂が危まれつゝあるに至つた。斯樣の傾向は、英國資本家及保守黨政府の反動的政策の進行するに連れて更に益々增大するに至らう。この方面からも又、英國產業凋落の蘇活に要する負擔を主として勞働者側に荷はしめんとする資本家側の戰術は永續すべき事情に置かれてゐない。

而して、斯くの如き勞資爭闘の不安に怯えつゝある英國產業が、再び繁榮を齎らし得ることを望むの至難なるは改めて云ふ迄もないが、しかし、いま、われ〲の興味は、その幻滅の日に於ける英國民の動き方である。思ふに、いま英國の資本家側は、其の勢力下にある保守黨政府を動かして、彼等が主張通りの反動政策を採用し得たわけである。然りさうすることに由つてのみ、英國產業を蘇活し得ると云ふ理由の下に資本家的反對政策を強要したのであつた。されば、今後に於て、英國產業の凋落が依然改まさるに於ては、——英國產業今日の世界的位置

とその勞働階級の已述の如き反感の下に於ては、それは殆んど已定の事實と見てよい——民衆は最早再び資本家の聲に耳を傾けざるに至るであらう。

斯かる秋に於て、いま、恨み骨髓に徹しつゝも他日の仇討のために屈服した炭坑夫は更に今日の鬪爭を繰返すであらう。英國の國民が如何に鈍重でありとするも、斯かる場合に於ては、炭坑業を私的企業の下に經營することの不可能なることを[illegible]ざるを得ないであらう。今後の勞働者側の爭鬪目標は、思ふに此の秋の勝利のために集中せられるであらう。果然、最近着の外電は英國勞働黨が炭坑罷業問題に關し、政府彈劾案を十二月八日に上程し、坑夫の生活を保證する道は今や炭業を國有として大改造を施す外に途なしとの戰陣を進めたと報じてゐる。

中世紀的封建軍閥の凋落とソヴヰエート式革命進行の支那並びにその國際關係

小村俊三郎

×

現在の世界に、反動的傾向と急進的勢力の對抗してゐる最も顯著な實例を求むるなら、隣國の支那ほど最も適切にこれに該當する國はなからう。それは、現に支那の南北に分れて、我等の眼前に展開し、双方の勢力がおの〳〵武裝的對峙をしてゐる通りの實狀であるが、その一方の反動的勢力そのものは、即ち北方の軍閥であり、一方の急進的勢力は、即ち南方の國民黨である。一方がヨウロッパの中世紀や、日本の戰國時代にあつた封建軍閥に似たものであれば、一方は二十世紀の現世界において、その最前線に立ち、最急進的なソヴヰエート式のものである。一方は鳴物入りの大時代劇であるかと思へば、一方は恐ろ

[illegible]てゐるのであるか

支那において、現實に相對峙し、相關聯してゐるのであるか

ら、これ程[illegible]な時代錯誤と、奇抜な對照とはあるまい。

これ故に支那における新舊思想の衝突、乃至その勢力の闘爭などといふことは、歐洲その他現代のそれを以て、これに比較することは出來ぬ。支那以外における現代のそれは、大戰以後の新思想や、新運動に對する反動的傾向が盛んであつたり、個々スパルタカスの暴動後に、ヒンデンブルグが出たり、共産主義の跋扈後に、ムッソリニーが出たりしてゐる位の話である。然るに、支那の反動勢力たる北方軍閥は、前述の如く、歐洲中世紀の封建諸侯や、日本戰國時代のそれに似たといへば、頗る立派に聞ゆるが、その實ナイトや士杯とは比較にならず、野武士にも劣つた馬賊出身の軍人をまで包含する程、蠻的獸的のものである。かやうな反動勢力の壓迫を受け、武力萬能主義の犧牲となつてゐる支那の智識階級や、一般の國民が、果して如何なる心理狀態に在るか。ついには目的の爲に手段を擇ばず、國内の極左派は愚か、ロシヤの共産主義者とも結託し、その力を借りてまで、その敵を倒さんとしてゐる變態的心理杯は、到底我々現代人の普通心理を以て、これを想像することは出來まい。

これを正しく想像してやらうとするには、ヨウロッパでは、[illegible]

[illegible]

政治に進化し行き、しかも一方外部からは、文化復興や宗教改革等を經、ルーソウの民約論その他の思想的影響を受け、更にフランス大革命の勃發となつて、その帝政を覆へした所謂恐怖時代の革命心理にまで溯り、幾分か同樣の歷史的過程に立てる支那國民の變態心理にも立入つて、これを想像してやるだけの必要があるかも知れぬ。また日本では、戰國時代の封建制度が、徳川幕府の將軍政治に進化したものを、王政復古の志士浪人が、無理に極端を拵へてまで、その幕府を倒し、さうかと思へばまた、當時の攘夷論者が、第一に開國論者となり、明治維新の大改革を成就したこと杯を回想し、略ぼ同樣な支那の時勢に同情してやるべきであらうと思ふ。フランス大革命が、百年後に自由共和の基礎となり、日本の討幕攘夷が、明治維新の成功となつたことを思へば、支那の革命も、強ちこれに反對すべきでなく、又た反對したからとて、これを阻止し得られる譯でもあるまいが、兎に角、かやうな觀方や考へ方により、これに正當な理解や同情をもつてこそ、始めて支那の爲、自國の爲に、有效な指導もし、有利な解決もし得るやうになる譯ではあるまいかと思ふ。

自分は前に、封建軍閥とボルセヴヰーキの對立から、支那の新

舊衝突程、極端な時代錯誤と、奇拔な對照はあるまいことをいつたが、現在支那の新運動の中には、同じ歐洲中世紀暗黑時代のハンザ同盟を思ひ出させるものすらある。これを支那以外の思想運動と對照し、支那の爲に正當な理解と同情を增さしめんが爲、ここにその説明を蛇足する。當時イタリーの共和諸都市以外、北ドイツのルーベック、ブレメン、ハンブルグ等に行はれたハンザ同盟は、これ等の商業的自由都市を、山賊海賊や、就中封建君主や、諸侯の暴威から自治自衛する爲の武裝的聯合であつたが、終には强大なその武力によつて、これ等の君主や諸侯と宣戰講和もし、かのバルチツク海に覇權を振つたデンマーク王を降參せしめたこと杯は、勿論史上に有名な話である。支那商人の同業組合を主とし、地方的な利害關係に至るまで、古來から多少なりギルドやリーグの組織、乃至自治體發達の傾向杯を備へてゐたことも、また人の知る通りであるが、それが近年打續く全國の內亂、即ち封建軍閥の暴威に對し、又た多少なりヨウロッパのハンザ同盟と、やゝ同樣の働きを始めるやうになつて來たことは、一種の歷史的興味でもある。軍閥の爲既に失敗に歸した彼の聯省自治運動の如きも、その一例ともいへるが、最近特に著しくこれに似通ふてゐるのは、即ち上海の特別市計畫や江蘇、浙江、安徽三省人民の孫傳芳驅逐、張宗昌拒絶の運動である。それが地方軍閥のプルーテリズムに對し、果して何程の對抗力があるかは、聯省自治同樣の疑問に屬するが、兎に角彼等が政治委員、軍事委員、外交委員を設け、武裝した一省の自治自衛と、他省との同盟聯合により、軍閥に反抗したり、これを拒否したりしようとする健氣な努力は、正しくこれを初期時代のハンザ同盟に比すべきであると思ふ。殊に支那のハンザ同盟が、主もに軍閥忌避の運動から、ソヴヰエート式ボルセヴヰーキ流の廣東派と同情關係に立ち、むしろ軍閥を驅逐し、その代りに廣東派を歡迎せんとしてをるところ杯は、何といふ時代錯誤の皮肉であらうか。

以上自分がハンザ同盟のことまで加へて、支那の事情を説明して來たのは、支那の新舊衝突即ち現在の時局は、ハンザ同盟同然な副產物を流生する程、それ程時代離れのしたものであつて、尋常では諒解が困難であること、支那の國民が、大小軍閥の爲に、水火塗炭の苦しみを受けてゐることは、ヨウロッパ中世紀の暗黑時代にも劣らぬこと、從つて人民の軍閥に對する反感は、想像以上に深刻であること、同時にその暴威に反抗する方法も、また相當に過激であるべきこと、極言すれば、支那の革命運動が、多量にソヴヰエート式ボルセヴヰーキ流の戰術戰略を含むに至つたのは、むしろ軍閥の壓迫そのものが、已むを得ず彼等

[illegible]
か[illegible]北方軍閥に同情し、援助する方面とは、[illegible]
を、理解して貰ひたい爲に外ならないのである。理解は同情を喚び、同情ある理解によつてこそ、始めて公平な觀察を遂げ、その公平な觀察がまた正しき態度を生み、相手を幸福に導びくと共に、自己の利益をも維持し得ることになるのであらうと思ふ。

但し、以上は皆な支那革命の對內的一面を說述したものに過ぎぬ。支那の國民的革命運動には、元來對內對外の二方面があり、ロシア流に宣傳され、感化された支那民衆の頭には、その二ツは各々相倚つて支那を毒するものである。從つて支那國民革命の目的たることにおいて、二者は二にして一、一にして二なりといふ觀念が、十分に滲み渡つてゐるやうである。彼等の主張に從へば、列國の帝國主義は、資本主義と同身一體で、幾十年間支那を壓迫し、掠奪し來つたのであるが、現在また支那の軍閥を利用し、これをその手足として、赤化防止の役目を務めしめ、軍閥もまた列國の援助によつて、その生存を續け、內亂をも續けつゝあるといふのであつて、從つて國民運動の標語として、專ら打倒軍閥と、打倒帝國主義とが叫ばれて、今日に至つてをる。過去十年全國に亘つた排外運動——その始めは排日か

[illegible]
[illegible]代運動は、即ち軍閥打破の一面を實行せんとしたもの
のである。二者は常に平行的に行はれて來た。けれども、兩者にヒゞの入つた列國の方が、武力の强大な軍閥よりも、多くその犧牲者となつて今日に及んだ。今度の北伐にも、兩者は勿論平行的であるが、しかし、軍事上北方軍閥の打破に意外の勝利を占めた結果は、外交上にも、またその所謂帝國主義の打破に對し、急進的な刺戟を與へんとしてゐる。これが爲めかの不對等條約破棄の問題の如き、列國は俄かに根本的な脅威を受くるに至つた。

支那に於ける新舊勢力の衝突、即ち國民革命の標榜には、かくの如く對內の一方面と、對外の一方面とを備へてゐる。しかして、對內方面が、甚しく時代錯誤である如く、對外方面もまた現在の世界に、その類例を見ぬ程にバックワードの狀態に置かれてある。列國が支那と結んだ通商條約は、阿片の押賣を主なる目的とし、しかも砲門の威力によつて、これを締結したものであつた。所謂右に法權左りに稅權のその何れもが、皆な偏務的偏惠的のもののみであつて、稅率の如き、何十年間輸出入一率に五分といふ世界の何處にも類例のないものである。法權の如き

は、トルコでさへ、ペルシヤでさへ、シヤムロでさへ、今は既に回復し、若しくはこれを回復せんとしてゐる。然るに支那はその法權稅權共に、八十年の長きに亘つて、略ぼ昔のまゝである。日本の安政條約が一度の修正をも經なかつた勘定である。日本ではその間に、井伊掃部頭の首も飛び、大隈伯の脚も飛んだが、支那ではその安政條約が、今日尙現實のものとして、その遵奉を强ゐられてゐる。しかして、列國は、口を揃へて、それは支那自身の責任である。支那は日本を見習はないといふのであるが、しかし、その間には時代の變化もある。列國の仕向けが餘りに甚しかつた反動もある。兎に角支那國民は、列國の忠告する通り、國內の整頓を先きにして、條約の改正を後にする考へばかりにはなれない。況んや既に獨逸や、勞農露國の先例もあり、宣傳もある。それが爲の帝國主義打破と、不對等條約破棄の叫びである。しかして、この問題も、軍閥打破の問題同樣、一强者の弱者に對する壓迫の度が餘りに甚しかつた爲、その水平運動に對しても、また一時は頗る過激な調子と手段とを以て、これに對向して來るであらうとは、それがいかに好ましからぬ事實ではあるとはいへ、それは已むを得ぬ動、反動、反々動の原則であらう。

この對內的革命と對外的革命とが、別々に來るとしたところで、支那自身の爲には勿論、列國殊に我日本に取つてもまた勿論、一大事件である。況んや今度はその內外兩面を兼ねたロシアの革命に次いでの一大事件である。我日本に取つて、その影響の大きいとは、國際聯盟における歐洲問題どころの沙汰ではないのであるが、不思議にも、世間ではさうは思はぬらしい。それは兎に角、革命運動の對內對外の兩面は、今では猶ほ双刃の劍の如く、軍閥と列國との双方を、一時に傷けねば已まぬ勢となつてゐる。これをどうするかが、即ち現時日英その他の列國における自覺的乃至非自覺的の惱みである。列國はたとひ支那やロシアのいふ如くに、直接に軍閥を援助したことがないにもせよ、今日までその軍閥の支持せる北方政府のみを相手とし、これとの間に國際交渉や條約關係を維持し、これを以て總べての現狀として來た以上、萬一その軍閥勢力の一角が崩壞すれば、列國の對支國際現狀も、またその一角を崩壞せらるゝ運命にある。況んや一方の廣東派の新勢力は、條約の全部を破棄せんことを主張し、近頃では北京政府の外交部でさへ、人氣政策からの競爭上、またその破棄を叫んでをるやうな狀態である。外交上の赤化は、南北を問はず、何處まで行くかも分らぬやうな形勢である。是れがそも〳〵列國共同の大きな惱みである。

[illegible]支那に古く根を張つた國は、何といつても英國である。香港や上海の居留地、税關組織の如きは、その特殊な勢力である。次に近くて重大な利害のある國は日本である。日本は支那全體に關する問題の外に滿洲に對する特殊の關係がある。日英の特殊利益は、一寸考へても、支那の新興勢力とは一致せず、寧ろ北方軍閥の保守的勢力と一致するやうである。そこで一應の考へでは、北方軍閥を支持し、これを援助して、赤化の洪水を防ぐ堤防とすることが、共同の利害のやうにも見える。それ故この考へは、呉張聯合赤化防止等、隨分各國の策士によつて計畫せられた。英國人の如きは、最初は香港に陳炯明、次には漢口に呉佩孚、上海に孫傳芳の援助等、隨分人知れぬ憂身をやつした。最後には呉張孫の聯合から、張作霖の單獨援助も考へて見た。併し英國としては、その利害の重心は、何としても、揚子江以南に存ずる。この重力の關係と、國民黨の意外な成功とに顧りみ、早くも張の馬を蔣の馬に乘換へんとしてゐることは、さすがに英國人である。何となれば、呉佩孚や孫傳芳の將來は、最早問題とはならぬとし、然らば張作霖によつて、英國南方の利益を擁護し得るか、是ももちろん問題とならぬ。只問題となるのは、却つてその張作霖が何時まで北京に止まり、乃至東三省内部の

[illegible]

こゝにおいて、[illegible]本は支那に二つの利害的重心を有する。即ち一は支那本土であり、一は滿洲である。支那本土の利害は、主として輸出入貿易に關し、滿洲の利害は、所謂特殊利權に存する。支那問題が本土と滿洲と無關係で濟む場合は割合無難だが、これが相關聯して來た場合には、何時も大問題が起つて來る。支那は勿論滿洲を自國の一部と考へてをる。日本も一般には、殊に不斷には勿論そう考へてゐるには違ひなく、事實滿洲の利權全部を喰つただけで、一時は兎も角永久に生きて行かれる譯でもない。滿洲の利權はトニックで、支那全體の貿易は、三度の食事のやうなものであると考へて置けば、支那と日本との關係も案外無事で濟もうと思ふ。然るに、滿洲に問題がなければ格別、何かの場合にはそう簡短に行かぬのが、日本と支那との關係である。そうして、そこにまた問題を惹起し、關係を複雜機微に導くのが、即ち張作霖とロシアとである。英國と支那との關係は、假令困難でも、比較的簡短である。ロシアとの關係はあつても、張作霖のやうな關係はない。それがあるのは、陳炯明の如く、英國自身にこれを作つたものに過ぎぬから、又た自らその關係を絕てば絕たれる。ところが、日本と張作霖との關係は、そう簡短に

は行かぬ。その製作品を輸出し一関内に入らしむれば、支那に二
れを製作は関より、外部にこれを輸出し一地方に向はしむれば、
[illegible]
彼等は自らやらうとする。こゝに日露支の関係が生じ、その[illegible]
関係に製作品が加はるによつて、[illegible]にこれを[illegible]化せしめ
る。

この点の[illegible]では、日本は[illegible]
[illegible]

露と日本といふ[illegible]の關係も、[illegible]る[illegible]。しかし、これを[illegible]に一[illegible]、[illegible]で不即不離の關係を保つか、又は進んでこれを[illegible]るやうにも見られるまゝで終つたなら、これこそ、日本と支那全體との關係、乃至滿洲自身の問題にまで、非常に不利で險惡な形勢に導かるやうになるかも知れぬ。これが特に大切で心配な要點であるのである。要するに今度の時局は、それ等日支兩國根本大局の關係にまで、一大變化を及ぼすやうな場合であることを、正確に認識してもらはぬ限り、話しは出來ぬが、兎に角、その認識には手早く問題の根柢につき進み、その新興勢力の赤化的傾向と、その背後のロシア關係とをどう見るかといふことを、この際的確に突止めることが何よりの早路であらう。

我等はその問題につき、こゝで再び長談義に這入らうとは思はぬが、物は見やうによつて、案外簡短にも考へられやう。たとへば先づ北方軍閥總沒落の場合について考へて見る。その結果、支那が果してロシヤの尻押しにより、全國を擧げて赤化し、左傾し、ソヴヰエート共和國か、共產主義國家かになり、既成條約抔をドンドン廢棄するやうになつたとして、果してこれをどうする。ロシアの赤化については、列國は一たびデニキン、コルチヤコフを助け、且つ共同の出兵もし、日本はこれが爲、[illegible]アに對[illegible]兵か、乃至[illegible]により、[illegible]か。狂人でない限り、今頃これに贊成する[illegible]はなく、[illegible]て見たところで、又何等成功の見込はなからう。列國はロシアの對策に失敗した結果、遂個ではあり、資本主義で固まつてをる米國を除いては、ついには不承々々にこれを承認し、日本も御多分に漏れなかつたではないか。そして今も丁度支那に關して八釜しい條約破棄、その他の所謂國際信義問題抔、有耶無耶に葬り去られ、平氣な顏でロシアと新條約を訂結し、國禁貿易の鎖國政策でも、これをどうする事も出來なかつたではないか。

かやうに考へて來れば、支那がよし、全然ソヴヰエート式の革命運動に成功し、反對に封建軍閥の反動勢力が沒落して見たところで、列國も日本も、大して慌て騷ぐ必要もなし、結局はロシアに對したのと同じことをするだけに止まるであらう。しかし、それは、主として結果について判斷した冷靜な理論からの話であるが、刹那の現象に眩惑し、感情の爲に理性を失ひ易い一般社會では、そうは行かぬ。たとへば、ロシア革命當時の恐怖時代に、これを承認しろといつて見たところで、話しに[illegible]

ならず、つひには、共同出兵、反革援助の愚舉を演じた譯であるが、現在の支那に對しては、今直ちに形式だけの承認を南方に向つてする必要もない代りに、むしろ張作霖援助の嫌疑を避くる方法を講じた方が、差當り悧巧でもあれば急務でもあろう。支那自身に急進の傾向があり、そのまた背後に本物のロシアが控へてゐるとは、日本及び世界の爲にも、勿論一大問題である。しかし、今日まで廣東孫文派の國民黨や、西北馮玉祥の國民軍に、一顧を與ゆるものもなかつた日本及び列國は、今日露支の特殊な接近關係につき、不平をいふ資格はあるまい。若しこの上誤つて支那の反動勢力、即ち北方の軍閥杯に同情援助し、南方派を壓迫するやうなことでもあれば、彼等はますますロシアと接近する外はなかろう。是れ果して支那の幸福であり、日本及び列國の利益であろうか。これに反し、その誤つたる同情援助を、寧ろ適當に南方の爲に振向けたら、却つて彼等の神經を緩和し、彼等自身の中にも、反動作用が起つて、極左より中間に、赤色より紅色に轉換するの見込もあろう。同時にロシアとの關係も、その本然に立戻ると、猶トルコとロシアとの如きものがあろう。繰返していふが、支那の赤化は、支那自身の爲にも、日本及び世界の爲にも、勿論一つの大きな脅威であり、危險である。我等も決して無條件に、これに同情するものではない。たゞ、彼等をして、行く〳〵その向背を誤らせず、國際關係をも緩和せしむる爲には、その對敵である北方軍閥に誤つたる援助を與へぬとは勿論、ロシア以外に列國からの同情理解が、直接南方派に注がれるとの必要を思ひ、本誌から與へられた大事な機會を利用し、折柄病餘の拙筆を呵してこれだけのことを述べて置く。

帝國主義の現勢

矢内原忠雄

一

一八八〇年代よりの飛躍的なる獨占資本主義の發展は諸列强

[illegible]
[illegible]及び南洋諸島に[illegible]されて居た所謂國際法上の無主地はまた[illegible]く國に分割せられてしまつた。日清戰爭後支那に租借地のつくられた頃、歐米の著書には公然と、次の分割は支那であると論ずる有様であつた。幸に支那は領土的分割の厄を免れたけれども、各國の鐵道等の利權競爭は激しく繼續せられた。ドイツは膠州灣に據つて直ちに北京を威嚇するの地の利を占めた。獨亞銀行は巧みにイギリス系の香上銀行の株式を買占めにかゝつた。一方小アジヤ及びメソポタミヤに對するドイツのバグダツト鐵道計畫はイギリスの利益を正面より脅威した。ドイツは又モロツコに對するフランスの野心に强硬に抗議して政治的經濟的利益の進出を計つたが、一九一一年には獨佛間の關係緊張して戰爭の危機間一髪に迫り、イギリスの猛烈なるフランス後援によつて漸く事無きを得た。其他世界の各地に於ける利害の衝突抗爭は協定妥協によりて一時々糊塗せられて來たが、遂に爆發して一九一四年の世界大戰となつたのである。世界大戰は實に帝國主義的戰爭であつた。而して正に帝國主義的戰爭なればこそ世界大戰となり得たものである。聯合國側と同盟國側との戰爭は經濟的には英佛系の資本とドイツ系の資本との闘爭であつた。米國が前者に加擔したることは戰爭の運命を決定し、同

[illegible]の地位を決定した。ドイツの帝國主義的發展は[illegible]ランスにも米國にも日本にも等しく脅威であつた。聯合國[illegible]の利害が必ずしも相一致して居たのではない。[illegible]對して共同戰線を張るべく一致したのである。而してこれ等[illegible]主義的列强は自らドイツに戰を宣したのみでない。資本主義的發達の尙幼稚なる、即ち列强の帝國主義的活動の對象たる諸國をも誘つて半ば强制的にドイツへの宣戰を爲さしめた。蓋し之によつて之等諸國に於けるドイツの勢力を驅逐しその利權を掠奪せんと欲したるが故である。その最も顯著なる一例は支那の參戰である。當時支那は財政窮乏して參戰の費用など到底支出の途が無かつたが、その費用は日英米佛四國が貸付くるものとして、支那に迫つて參戰せしめた。之によりて聯合國は支那に對して投資の利權を新たに得ると共に、支那に於けるドイツの利權を掠取するを得た。

當時聯合國側の言ふ處は次の如くであつた、ドイツの帝國主義は世界の脅威である、それが此の大戰の原因である、吾人のドイツと戰ふは戰爭廢止の爲めの戰爭である、これが「最後の戰爭」たらんが爲めの戰爭であると。ドイツは敗れその帝國主義は擊破せられた。然らば之によりて世界の帝國主義は衰退の

時期に入つたであらうか。世界平和の曙光は確實となつたであらうか。戰後數年を經たるに過ぎざる今日、早くもかくの如き希望を裏切るの事實が續出して居る。戰爭と戰爭の風評は絶えない。劍を打ち代へて鋤と爲すといふ時代では毛頭無いのである。

聯合國はドイツの帝國主義を壓迫するために協同した。戰時中のパリに於ける聯合國經濟會議や、平和條約中の經濟條項などは徹底的にドイツの再起を抑壓するの趣旨に基いた。併し乍らかくの如き態度そのものが帝國主義的でないか。ドイツの帝國主義を破りたるものは聯合國の帝國主義である。聯合國はドイツを敵として帝國主義の共同戰線を張りしものである。かくて一方共同的にドイツを抑壓すると共に、聯合各國相互間に於ては競爭を制限するの政策に出でた。國際聯盟がそれであり、ワシントン會議がそれである。

國際聯盟が今日まで繼續せることは一の顯著なる事實である。ドイツの加入は一層この聯盟を合理的なものとした。その不徹底なる點については遺憾も多いけれども、聯盟が今日まで國際的了解の進捗に努め、國際的紛爭の平和的處理に成功したる例も少くない。國際聯盟といひ軍縮會議といひ、平和運動の有力なる表徴である。

戰爭の後には平和を求める。戰爭の創傷を癒し國力を恢復するためには必然的に平和が求められる。戰爭の犧牲の深刻さが忘れられない間は平和が求められる。併し乍ら資本主義國家相互間に於て永久的平和は有り得やう筈がない。共同の敵に對し、或は相互の創傷を癒す期間、彼等は國家の國際的カルテルを組織する。既に共同の敵が倒れ、或は各自の創傷が漸く恢復すれば、彼等は再び互に抗爭の機會をつかむ。カルテル内の均衡關係は變化し、或はカルテルそのものが破れるに至る。ドイツの帝國主義は敗れても帝國主義一般は亡びない。帝國主義は休息するが死んでは居ない。疲勞が恢復すれば再び活動せんとする。之れ國際聯盟等の平和運動あるに拘らず、各國の帝國主義的活動漸く旺盛ならんとする所以である。

二

戰後の帝國主義はその政策に於て、各國間の均衡に於て、及び之に對する抵抗的勢力に關して、戰前の帝國主義に對し若干の特徴がある。

第一は門戸開放機會均等の高調である。この主張は戰前にもあつたけれども、戰後特に高調せられる。その趣旨は、帝國主義の對象たるべき地域に於ける或る一國の獨占的利益の排斥で

[illegible]…國…を妨げるものでない…[illegible]…つて、勢力範圍其他既得權を有せざる新しき國家の割り込みを許容するものたるに過ぎない。門戸開放主義も亦帝國主義の・政策たるに過ぎざるものである。この主義の最も熱心なる主張者であり從つて利用者たるものは米國である。この主義は事實上世界各地方に於ける帝國主義的利益に對する米國の割り込み運動である。アメリカ帝國主義の特徴的政策である。二三の例を以て之を說明しやう。

その一はロシア領コーカサスに於ける石油利權の競爭である。戰前英國系のロイヤル・ダツチ・シエル會社を第一として、フランス、ベルギー等の資本家が此地方に油田を所有して居た。革命後ロシヤは之等をすべて國有としたが、資本不足の爲め外資を輸入し、且つソヴイエート政府の承認を求めんと欲したから、ロイヤル・ダツチとの間に同地方の油田開發の獨占的利權賦與の商議が進行した。ロイド・ジヨージは主唱して列國會議をば一九二二年四月ゼノアに開き、ソヴイエート・ロシヤの代表者をも之に招いた。會議の中心問題は實質上ロイヤル・ダツチの石油利權問題であつた。米國スタンダード石油會社はフランス及びベルギーの尻押しをして極力イギリスの主張に反對せし[illegible]…者に、門戸開放主義に反する…[illegible]…承認する…[illegible]…はイギリスを沈默せしむるに足りた。會議は目的を達せずして終つた。ロイヤル・ダツチの計畫は挫折し、ロイド・ジヨージは沒落した。スタンダード石油會社の主張と米國外交の成功であつた。而してその後米國資本家は單獨にロシアとの石油利權契約の交渉を進めたのである。

モスール油田問題も亦門戸開放主義による米國帝國主義の一例である。戰前トルコ政府はメソポタミヤのモスール及びバグダツド油田地方の租借權をトルコ石油會社に特許した。この會社の持株の五割はアングロ・ペルシヤ會社（英）、二割五分はロイヤル・ダツチ會社（英）、殘りの二割五分はドイツ銀行（獨）の系統に屬した。ドイツの持株は戰後一九二〇年のサン・レモ會議の結果、フランスに與へられた。米國は直に之を以て委任統治の精神に反するものとして抗議し、メソポタミヤに於ける機會均等門戸開放を主張した。ローザンヌ會議に際しても米國はその抗議を強硬に維持した。遂にトルコ石油會社に於けるアングロ・ペルシヤ會社の持株中半分を米國に讓渡する交渉が開始せられ、一九二六年春に之が決定した。而して同年六月には

モスール條約が成立して、トルコはモスール油田に關する權利を放棄し、トルコ石油會社のコンセツションを承認するに至つた。この場合米國の門戸開放主張は、前述コーカサス油田問題の場合の如く單に競爭國の獨占を阻止する消極的効果に止まらず、積極的に利權參加に割り込んだものである。

支那に於ける利權競爭について、米國が傳統的に門戸開放主義を主張して居ることについては、こゝに詳述する必要がないであらう。讀者の耳に新たなるべき無線電信臺建設に關する日米の紛議もその一例である。一九一八年二月三井物産株式會社は支那政府海軍部と契約を結びて北京郊外双橋に五百キロの無線電信臺を建設し、對歐米通信を一手に取扱ふのみならず、他會社に對歐米通信の無電臺建設を許さゞるの獨占的利權を特許せられた。然るに米國のフエデラル電信會社は一九二一年一月支那政府交通部と契約を締結して上海に一千キロの對歐米無線電信臺を建設するの許可を得た。日本は既得權侵害を以て米國に抗議した。米國は門戸開放機會均等主義によりて日本に抗議した。一九二四年双橋無電臺は落成して營業を開始せんとしたが、米國は支那政府に迫りてその營業不許可の決定を爲さしめた。この紛爭は今日未だ解決に至らない。尙、一九二一年十一月開會のワシントン會議に於ても米國の熱心なる主張によりて支那に於ける門戸開放機會均等を維持する條約が成立し、支那も此の主義を尊重すべき條約上の義務を負擔するに至つた。

以上の如く門戸開放機會均等主義は獨占の排斥、自由競爭の主張である。そは植民地若くは準植民地に對する利權獲得そのものを排斥するものではない。之等の地方はたゞ諸列强より均等なる機會を以て搾取――若くは開發――せられるといふに過ぎない。又諸列强間の競爭はこの主義の下に於て激化する。新興勢力は競爭參加の機會を與へられ、而して自由競爭場裡にありては有力なるものが優勢となる。門戸開放主義は帝國主義の均衡關係を變化せしめるが、帝國主義そのものを否定するものでない。正に米國が發明し主張し、よつて以て自己の帝國主義的利益を進捗するに最も恰好なる政策である。

三

各國帝國主義の現勢を瞥見しやう。

米國は大戰の影響により國際的債務國より一躍して債權國たる地位に代つた。米國の資本と外交とは世界の各國に進出して來た。ヨーロツパに、ロシヤに、小アジア中央アジアに、米國の資本は割り込んで來た。支那に於ては益々指導的なる中心勢力の一となつた。之等の地域に於て門戸を開放せしめたるのみ

[illegible]イ、及び[illegible]的支配者としての地位を益々固くなつ[illegible]フィリッピンには一九一六年に自治を約束したけれども、一九二一年以後は僅かに米國統治の繼續を維持する態度を示して居る。メキシコよりパナマに至る中米諸國及び西印度諸島の諸國に對する政治的支配は益々鞏固である。ハイチをば一九一五年に保護國となし、又ドミニカン共和國には一九一六年より一九二二年まで軍事占領をなし、キューバには一九二一年に內政干涉して、いづれも事實上の保護國と爲した。故に米國は本國々土の廣大に加へて、西印度諸島より中米をかけての一大地域を支配し、東洋ではフィリッピンを固めて支那南洋を睥睨し、メソポタミヤ油田を始めとして小アジア地方に經濟的利權を獲得し、尙溯りにヨーロッパ諸國、ロシア、アフリカ等にも資本家的進出を試みて居る。何分一九一四年の世界大戰開始以來十ケ年間に二十二億六千三百萬弗の金の流入超過を見たる米國である。資本輸出の必要にも迫られるし、軍艦や飛行船も造らざるを得ないわけである。大戰は米國をして一躍世界一の帝國主義國に仕立てた。巨大なる資本蓄積の必然の結果である。「弗外交」は世界を橫行濶步して居る。

戰前世界一の帝國主義たりしイギリスは健在なりや。米國の[illegible]するに至[illegible]として居る[illegible]屬領[illegible]カナダ、濠洲、南阿聯邦、ニュージーランド等のドミニオンの自主的地位が大部分に容認せられたが、一九二六年の帝國會議に於てイギリス本國とドミニオンとは自由意思を以て結合する對等の自主國民たるの地位が確認せられ、本國植民地の支配關係は全然消滅した。勿論之を以て直ちに英帝國解體の開始と見ることは出來ない。併し乍らニュージーランド、濠洲等が帝國的結合に熱心なるに比し、カナダ及び南阿聯邦には分離的傾向も亦認められる。之等のドミニオンは又いづれもそれ自身が帝國主義的に發展して居る。濠洲がシンガポール軍港計畫を熱心に主張せる如き、南阿聯邦がその委任統治地たる舊ドイツ領西南アフリカを、國際聯盟の數次の警告に拘らず、自國の領土として取扱ふの態度に出づるが如き、その例である。之等諸邦が帝國主義的に發達する曉き、イギリス本國の帝國主義と衝突することなしとは誰も保證し得ないであらう。要するにドミニオンの自主はそれだけイギリス本國の帝國主義的地位を弱むる原因である。英帝國會議に代表せらるゝ他の二者、即ちアイルランド自由國及びインドが、イギリス本國に對して分離的傾向を多分に藏することは當然である。蓋し此の二者は數世紀に亘り

てイギリスに搾取せられし植民地であつたから、之に自主若くば自主に近き地位を認めて帝國會議の一員として收容せることとは、イギリスの英斷でありその帝國的結合の維持に腐心せるを示すものであるが、現在の狀況では此の二國はその國民的發達の向上に伴ひ、英帝國内に留まるべき意思を更に減少するであらう。從來イギリスが經濟的利權を占め居たるペルシヤ、支那等に於ける排英運動も戰後熾烈となつて居る。イギリスは過去久しきに亘る帝國主義的搾取の結果を今自ら刈り取らざるを得なくなつた。かくてイギリスは戰前顧みる處少なかりしアフリカや南洋の直轄植民地の開發に着眼し、戰爭の影響として一旦獨立を認めざるを得ざりしエジプトに對しても容易に政治的支配の實權を棄てず、スーダンを固くつかんでエジプトを制し、又戰爭の結果パレスタイン及メソポタミヤに得たる帝國主義的發展の地歩を維持せんとして居る。イギリスはその國際的地位を維持するためには帝國的結合の維持發展より他に途なきを知る。故にその爲めに努力を吝しまない。その點では勞働黨内閣も保守黨内閣も大して變らなかつた。しかしアメリカを壯年者の活動とすれば、イギリスの帝國主義は老年者の努力である。

然らばイタリーは腕白なる青年か。人口の激増と資本の蓄積と、ファシスト政府の政治的支配慾と軍國主義とは、イタリーの帝國主義的活動を必然ならしめる。之が公然と表面に現はれたのは一九二六年のことである。此年ムソリーニが自らアフリカ北岸のイタリー植民地トリポリを訪問したるを始めとして國民の植民地旅行を奬勵し、植民地博物館植民學校を設け、ローマ建設の紀念日たる四月二十一日をば「植民日」と公稱し、其他植民精神の振興に努めて來た。又一九二五年末チエンバレンとムソリーニとの締結したるアビシニアに關する英伊協定も此年六月に發表せられた。此の協定はイギリスがアビシニアのダナ湖に閘門を設け且つスーダンと該湖水との間に自働車道路を敷設する利權の獲得に對してイタリーが援助すると共に、イタリーがアビシニアを貫通してイタリー領ソマリランドとエリトリア間を連絡する鐵道敷設權獲得に對しイギリスの援助を約したるものである。然るにアビシニアに關し同じく利害關係をもつフランスの輿論は烈しく之に抗議して居る。イタリーは又スペインがジブラルタル對岸のタンヂールをスペイン領モロッコに編入せんとする要求を支持して、フランスに對抗せしめて居る。かくイタリーがフランスに反對の行動をとるは、イタリーの對岸にして現在フランス領なるチュニスを獲得せんとの野心あるが爲めであるといふ。

今日ヨーロッパで植民地の最も豊かなるはイタリーであらう。之れに次いではドイツである。ドイツは戦争の結果その植民地の全部を奪はれた。之が恢復はドイツの一貫したる輿論であつたが、一九二六年その國際聯盟加入と共に、旧植民地の委任統治權の讓渡を要求する聲が一層強くなつた。かくてイタリーとドイツとは早くも植民地再分割の希望を現はして居る。

日本も戰後東アフリカ、小アジア、ペルシヤ地方に通商關係の新設を計り、又ブラジルに土地を購入する資本家も出たが、その帝國主義的勢力は主としてシベリヤ及び支那に向けられて居る。シベリア出兵は失敗に歸し、北カラフトの軍事占領も結局撤兵せられたが、併し「平和的」なる通商談判によつて經濟的利權獲得の目的は達せられた。北カラフトの石油及石炭利權、シベリアの森林利權、漁業利權など。支那に對しても世界大戰中には二十一ケ條の要求等高壓手段を以つて迫つたが、かくの如き手段の不成績に鑑みて最近は平和的手段をとり、關稅會議及治外法權會議に於て列國に率先して支那の要求を容認援助するの態度に出でた。かくして支那と友誼關係に入ることは第三國との競争上有利の地位に立つものであり、又かくして支那の財政收入が良好になれば外債及利子償却に對する擔保力が增大する所謂でもある。

而してその帝國主義は主として外交的手段により經濟的利權の獲得を目的とする。併し乍ら軍事的手段による領土的獲得、又は政治的干渉が全然姿を没せるものではない。蓋し經濟的利權は政治的支配によりて最もよく確保せられ、而して各帝國主義國相互間の均衡は常に變化するが故に、經濟的競争は政治的競争の危險をそのうちに包藏して居る。政治的抗争は戰爭の危險を包藏して居る。世界は平和を欲して居る。併し乍ら必ずしも平和の途に進んで居ない。

四

世界大戰は帝國主義を終らしめなかつた。米國は却つて之を原因として一大帝國主義國となつた。他の諸國は戰爭の創痍の恢復すると共に、否むしろ之を恢復せんがために、帝國主義的活動を繼續した。日本に於ても海外發展は今日資本家の輿論である。帝國主義的戰爭が帝國主義を絕つべき筈がない。帝國主義は資本蓄積の必然的要求である。資本主義の繼續する限り、資本家的國家の帝國主義が戰爭によりて本質的に變化すべき道理がない。

併し乍ら帝國主義に抵抗する勢力を喚び起すに於いて、世界大戰は新たなる時期を劃した。この抵抗的勢力の第一は國際聯

盟である。國際聯盟は帝國主義的國家相互間の牽制たるのみならず、帝國主義の對象たる如き弱國もその成員たることによりて、帝國主義的鬪爭及び搾取に制限を加へ得る。帝國主義的戰爭の殘虐と損失とを將來に阻止すべく國際聯盟は組織せられたのである。併し乍ら聯盟の指導的勢力は帝國主義的强國であるが故に、彼等が共同して聯盟を無視する時は、帝國主義の進出を阻むことは出來ない。聯盟の力は主として帝國主義的國家自身の自制に基く。こゝにまた帝國主義に對抗する勢力としての聯盟の弱點がある。

第二は帝國主義の對象たる植民地及び諸國に於ける國民運動反帝國主義運動である。世界大戰の際獨墺諸國を崩壞せしむべく民族主義を鼓吹したる聯合國は、その鼓吹したる民族主義なるイデオロギーの爲め、自國の支配下にある諸民族より反抗せらるゝに至つた。アイルランド、インド、エジプト、それから支那に於ける國民運動、利權回收運動、反帝國主義運動を思ひ見よ。資本主義國家の植民地的活動の結果、植民地その他の非資本主義的諸國も亦資本主義化せしめられる。之等の國民自身の間より成立すべき資本家階級は外來の資本家階級の侵入に對し競爭者として抵抗するであらう。帝國主義的侵入の結果之等國民の無產階級化したるものも亦、資本家階級に對して抗爭するに際し、先づ外來者を排斥するであらう。そは資本家階級の主力は外來の帝國主義國民たるべく、且つ民族的意識は經濟的鬪爭に加ふるに國民的鬪爭を以てすべきが故である。かくて國民運動は帝國主義に對する正面的なる抵抗的勢力であつて、帝國主義的國家の政策を緩和し或は阻止せしむるものであるたゞ併し乍ら之等の植民地的國家が資本蓄積して自ら有力なる資本主義的國家に發展するに至れば、これらの國家自身帝國主義を實行するに至るであらう。故に國民運動それ自身が理論上帝國主義を止揚するものではない。

第三に各國に於ける無產階級運動の覺醒である。戰時中の好景氣、戰後の不景氣、戰爭による團體的訓練等、いづれも戰後勞働運動發達の原因であつた。帝國主義の平和的活動の時期には、勞働者階級も亦之による利益に均霑し得るであらう。國內產業は興り勞銀は上り生活程度は向上し得るであらう。併し乍ら帝國主義は勞働者を利するよりも遙かに大なる割合を以て資本家を利するが故に、資本主義社會に於ける對抗的分配關係の基礎の上に於ては、勞働者は相對的損失を蒙る。帝國主義より受くることあるべき勞働者の利益は寄生的利益たるに過ぎない。況んや戰爭の災禍は人命に於ても財政的負擔に於ても、又經濟的恐慌に於ても、勞働者階級が最大の犧牲を拂はざるを得

なので、これ[illegible]に世界資本主義の[illegible]主義に[illegible]對[illegible]ることは併乍ら帝國主義的活動の此點を爲す場合に於ては、勞働者の受くる寄生的利益も亦大であるから、この階級意識が階級的に鋭敏ならざる限り徹底的なる反帝國主義の勢力とはなり得ない。米國の勞働者は勿論、イギリスの勞働黨も、ドイツの社會民主黨も、徹底的なる反帝國主義の勢力とはなり得て居ない。

第四世界大戰の最大記念の一つはロシヤ革命である。ロシヤが社會主義國となつたことは帝國主義の形勢に大なる影響を與へた。ロシヤ自身が資本主義の原理及政策を否定せるのみならず、帝國主義國家の無產階級、帝國主義の對象たる諸國諸植民地の民族主義者に、反帝國主義の原理と政策とを指示する。

資本主義が世界的に擴大せんとする傾向を有する如く、社會主義も亦世界的たらざるを得ない。孤立的一國主義は到底成立し得ない。資本主義的にせよ社會主義的にせよ、一大經濟地域を支配することは富强の必要條件である。故にロシヤも亦外部的發展を計るは當然である。トルコ、ペルシヤ、支那等をその勢力圏内に置くべく、資本主義諸國と相競爭して居る。否、世界の各植民地に於てロシヤよりの有形無形の影響はその支配國家を脅かして居る。其處には又共產主義運動の植ゑつけらるゝに最も適したる素地が、帝國主義的統治によりて準備せられて[illegible]るのであるから、[illegible]資本主義國家に對して[illegible]ひらるゝものであるから、[illegible]いふ[illegible]に於ては面白くないけれども、世界はいはゞ社會主義的帝國主義と資本主義的帝國主義との對抗に分たれた。資本主義國家はロシヤの思想は怖ろしいが、ロシヤの天然資源の利權は欲しいのである。ロシヤの石油と森林と水產は帝國主義的國家垂涎の對象である。之等の經濟的利權を得んと欲すれば、思ひ切つてロシヤ政府を承認せねばならない。併し乍ら之れは帝國主義國家にとりては非常に危險なるものゝ承認に外ならない。こゝに帝國主義のディレンマがある。要するに帝國主義は戰後衰へたのではない。近年新なる活力を以て遂行せられつゝある。但し資本主義國家の帝國主義に抵抗する勢力も亦興つて來た。而して最も根本的なる抵抗的勢力は、ソヴイエート・ロシヤと共に生れたるものと言ふことが出來る。(一九二六・一二・一二)

■作州山中百姓一揆

黑正巖

右一篇本號へ掲載の豫定で旣に印刷校正まで濟ませたが頁數の都合で、已むなく次號へ割愛せり。此段筆者並に讀者諸彦の御宥恕を乞ふ。

我が國無產政黨の辿るべき途

法學博士　吉野作造

無產政黨の簇出

昨年の暮、一時に二つの無產政黨が出來た。曰く社會民衆黨、曰く日本勞農黨。之に春の三月に出來た勞働農民黨と秋の十月に出來た日本農民黨とを加へると四つになる。更に地方々々に出來たもの又之から出來るものを算へたら總數幾つになるだらう。いづれにしても無產階級の政治運動は之からの政界の興味の中心になる。否、單に興味を以て之を注視するばかりではない。心ある國民の多數は、一つにはその前途を祝し、一つには之に多大の囑望を寄せて居る樣だ。知らず、以上の諸政黨は果してよくその祝福に値しその囑望に孤負する所なきを得るや。

無產政黨の結成は第一に既成政黨を脅かす意味に於て國民の歡迎する所となつて居る。既成政黨の罪惡は今更數へ立てるまでもない。新に有權者となつた無產階級を背景として玆に生氣ある對陣の張らるるのは、何と云ても既成政黨の心膽を寒からしむるに足る。之に依て既成政黨を撲滅し得ば結構此上もないが、そこまで往かなくとも、彼等を牽制し

深刻に從來の非を反省せしむるの效は十分にある。既成政黨を絕對の敵とするものに取ても、又はその改過遷善を期望するに止まるものに取ても、この點に於て無產政黨の結成はその齊しく歡迎する所でなければならぬ。

無產政黨の結成は第二にまた恰も新有權者の希望に副ふものと謂ふことが出來る。彼等は既成政黨の流す弊害には多年愛想をつかして來た。今度新に權利を得て之を有效に使はんが爲に何等か別個の組織あれかしと祈つて居た。そこへ丁度無產大衆の利福と新社會の建設とを叫んで所謂無產政黨が起る。即ち彼等はこゝに始めてその據りどころを見出し得るわけである。客觀的に見ても、新有權者の政治的活動が斯くして有效な組織に統轄せらるることは、大に喜ばしいことに相違ない。而してこの同じ希望を以て新組織に來り投ぜんことを欲するものが舊有權者中にも尠らずあるべきは、また云ふまでもない。

斯くの如く無產政黨の出現は、新有權者の歡迎する所であり又心ある多數國民の歡迎する所である。而して之を歡迎する所以が、政治的に無視せらる可からざる無產階級の新に權利を與へられたるに際し、之を最も有効に行使せしむるの機會が斯くして作られたといふに在るは無論のことだが、次に斯くして作られた機會を善用し新なる權利を最も有効に行使せしむる所以の方法如何に關しては、必しも萬人が其の覩る所を一にしない。無產政黨の出現は例へば永年子供のなかつた結婚生活にやつと後嗣ぎが生れたやうなものだ。待ち焦れた誕生に喜ぶのあまり、之を將來如何に敎育すべきやを一寸忘れたと云ふ嫌がないでもない。その上一時に三つも四つも生れたので其間また嫡庶の爭ひも相當に烈しいやうだ。當事者に取つては之も固より大事な問題であらうが、併し我々國民の超越的立場からすれば、彼等が今後どんなに育つて行くかが何よりも大切な問題なのである。誕生の根元に遡つて嫡庶の別を糺すが如きはそれ程の大事ではあるまい。無產政黨としての本當の使命を完うするは寧ろ彼等が今後辿るべき途の如何にあるものと私は考へる。

私の立場

この議論を進める前に、私はこゝに一寸自分の立場を明にしておく必要を認める。私は去年十一月安部磯雄堀江歸一の兩君と共に右翼無產政黨結成の產婆役をつとめた。從て私が所謂左翼の立場とは根本的に反對の見地に在るは云ふをまたない。而して何を以て右翼とし何を以て左翼とするかは、從來色々の機會に於て說いたから茲に再び繰り返さぬ。さて私は無產政黨結成の產婆役をつとむるに當り、初めから次の二點を念頭に置いてゐた。(1)私の所謂右翼の系統内に入るものでも、種々の理由に依て直に參加し得ぬものもあらう。故に自分達の斡旋に依て出來た政黨以外に更に種々の政黨の出現するは免れない狀勢である。(2)それでも苟くも政治行動を標榜する以上、之等の諸政黨はいつまでも異を樹て通さねばならぬ理由はない。從て早晚何等かの形に於て共同提携するの日あるべきを豫想して掛る必要がある。以上二つの考は今日でも持つてゐる。故に私は茲に無產政黨を論ずるに當ても、自分達の斡旋に由て出來た政黨を特に偏愛するの考は毛頭ない。國民の一人として最も公平なる立場から卒直な批評を試みんと期するものである。

× × × ×

特にこの際一言しておきたいのは、社會民衆黨と日本勞農黨との不幸なる確執に就てである。後者は前者の結成の基礎に疑をおいてその不純を攻擊して居る樣だ。けれどもその發企者の一人たる麻生久君がその初め最も熱心に私に產婆役たらんことを勸め、私が從來の立場の許し難きを忍んで起つたのも主としては同君の熱情に動かされた結果たるの事實に照合しても、少くとも麻生君だけはしか考へて居られぬことを私は確信する。麻生君は私との會見に於て、左翼と絕緣せる無產大衆を此際單一の政黨に結束するの困難なる事情を述べ、新黨組織と共に之に參加せざるものを未組織の

[illegible]

政黨問題に對する意見を發したのは一昨年の春である。永い病氣から恢復しやつと筆を執ることを許されて直ちに書いたのが、實に「無產政黨問題に對する吾人の態度」(本誌大正十四年十月號及び拙著「現代政治講話」第三九三頁以下)と題するものであつた。この中で私は(一)無產政黨の出現とその健全なる發達とは大に希望する所なるも、(二)一般の公民は濫りに之に加入すべきものでない、(三)本來政黨は政治家の仕事であり從て之は政治家に委していゝ、(四)只民衆は十分に之を監督することを要する、之に由て政黨は亦始めて正しく進むものであるといふ樣なことを述べた。其後私はまた政治教育運動と政黨運動との外形的矛盾を說き、一般公民は須らく政黨の圏外に在て間接にその發達を援くべき旨を說いたこともある(近く公刊すべき「古い政治の新しい觀方」參照)。それは政黨運動としては一人でも多くの味方を得んことに努めなければならぬのだが、政治教育者としては、一生懸命に政黨と腐れ緣をつないではならぬと民衆に說き勸める必要があるからだ。一見矛盾のやうではあるが、民衆が斯く超然的態度を執るが爲に、各政黨は始めて善事を競うて民心を獲んことに骨折るものなるを思ふとき、結局に於て同一の目的に協動するものなるを覺ることが出來る。蓋し政治の墮落は政黨の怠慢に始まる。政黨の怠慢を促す最大の――殆んど唯一の――原因は安全なる地盤を有することである。故に民衆が甘んじて政黨の地盤となることは、取りも直さず政黨の惡を助け併せて自ら傷く結果を招ぐに外ならない。斯く云ふ立場から私は、自ら政黨に參加せざるのみならず又人をして參加せしめず、而も之に由て政黨を健全に發達せしめんと期して居つたのだ。この考は今以て變らない。今後無產政黨の行動を監視し批判するに付ても、之が實にその重要なる基礎的標準なるべきは申す迄もない。然らば斯うした年來の立場は如何にして私を今日新政黨結成の產婆役たることを許したのか。

この質問に對する一つの答は、無產政黨の結成に主動的の役目を勤むべき地位にある人々の多くが幸にして私の多年

の友人であるといふことである。第二には勞働農民黨の分裂に依て右翼結成の機運が熟して居つたといふことである。終りに第三には切迫した特殊の政情は新有權者の政治的結束を必要ならしめたことである。この第三點に付ては、前號の本誌に於て私は「既成政黨の關心事」なる論文をかゝげてやゝ詳細の説明を與へて置いた。右翼無產政黨の起るべき必然性は實に私共の斡旋を待たなくとも動き始めてゐたのではあるが、特殊の事情から本來政黨に對して超越的態度を取るべき筈の無產大衆が何等かの形で其の結成に包括さるべき形勢にありとせば、やり樣に依ては飛んでもない弊害を後世に殘さぬとも限らない。この邊の事に關する私の所見を聞いて貰ひたいと云ふのが私の敢て斡旋の勞を取るに至つた一つの理由である。之等の點に關する私の考は追て本論を進めて行く中に一再ならず現れることと思ふから改めては述べぬ。玆には只私共の周旋に依て出來た新政黨が構成單位を團體に取らず個人本位としたことは、私をして著しくこの點に關する懸念を減ぜしめたことを特記しておく。

猶ほ私が新政黨の出現と共に直に之と絶緣し再び元の超越的立場に復したのは、私の年來の主張を忠實に貫かんが爲に外ならぬことは言ふまでもない。政黨の側が私共の援助を欲するや否やは分らないが、私一己としては今後どの政黨でもいゝ一番正しい道を步むものを助けることにする意圖である。且つ又之を廣く國民の多數に諮り、私と同じ立場を取る樣その自由なる聰明を開かんことを說き廻るであらう。最早私共は何黨の地盤でもない。我々の投票を欲しいなら善い事をする競爭に勝つて來い。之が政黨の健全なる發達に對しての最も親切な立場でなければならぬと私は考へるのである。

私が無產政黨の辿るべき道につき玆に蕪言をならべるのも、畢竟この立場からするものに外ならぬ。

無產政黨提唱の動機

さて之よりいよ〳〵無產政黨の進るべき途如何を論ずるのであるが、之を說くに當り第一にきめて置かねばならぬのは、政黨結成提唱の動機如何の問題である。之を何處に見出すかに依り今後の行く道は自ら單一であり得ないからである。今日現に無產政黨の結成を提唱する人々に就きその眞實の動機を察するに、凡そ二種類あるやうに思ふ。一は新に得たる權利の行使につきその正當なる運用を誤らぬ樣にと新有權者に呼びかける立場であり、他は新有權者自身の全般的綜合活動として新政黨を築き上げんとする立場である。前者は新有權者をば在來の政界に染ましたくない何とかして政界今後の向上發展に貢獻せしめたいとの動機に發足し、後者は權利の獲得と共に無產階級をして眞にその當然の地位たる主動的勢力を占めさせようとの考に基礎をおく。つまり民衆を受動的地位におくか能動的地位におくかの相違である。斯の立場の相違は自らまた無產政黨の本質に關する見解の相違に關連するものとも觀られる。無產政黨は無產大衆そのものの政治行動の組織であるとするのが即ち第二のもので、無產政黨は無產階級の利益を伸張擁護しその意思希望を表明する政治的機關だとするのが第一のものである。而して私は一方を自由主義的政黨觀と云ひ、他方を階級主義的政黨觀と云つておかうと思ふ。さういへば略ぼ當今評論家の用語例にも合するだらうと思ふからである。

さてこの意義に於ける自由主義と階級主義との立場の爭は、日本勞農黨をして社會民衆黨と相容れずと考へしめた一つの論點であるやうだ。私の解する所にして誤らずんば、この點に關し、前者の後者に對する不滿は二つあるらしい。一は純階級的でないといふことで、二は假りに階級的立場を取るとしても純無產者に非るものを混入せしめたのがわるいといふのである。社會民衆黨の包含せんとする新有權者中、筋肉勞働者に非る勤勞階級を純無產者にあらずとする見

地の正しきか否かは別として、自由主義的立場を取る限り、所謂純無産者に非る者の來り投ずるは必ずしも一概に拒むべきではあるまい。純無産者に非る者の來投を放漫に取扱つた爲に斯く〳〵の弊害ありと責めるのはいゝ。單に斯種の者の混入その事を咎めるのは無條件に是認し難いと考へる。若し夫れ政黨の本來當に階級的なるべきものなりや否やに關してはまた大に議論の餘地がある。我國最近の評論界に、階級的立場が自由主義の立場より一歩進んだものだなど云ふ漠然たる考が可なり跋扈して居るのを見るだけ、この點は最も愼重に吟味するの必要があると思ふ。

階級主義的立場

「自由主義は階級主義に取て代らるべきものだ」。之を無産階級の經濟行動に付て云ふのは或は正しいかも知れぬ。經濟行動に在て、自由主義の横行は時として勞資協調に墮するの嫌なしとせず、而も本人の痛苦は本人でなくてはよく分らぬからである。是れ經濟行動が階級主義で行かなければならぬとせらるる所以である。併し繰り返してことわつて置くが、之は經濟行動についての話なのだ。無産階級の政治行動に至ては、その政治行動の本質に基いて自ら全く別個の見地から論歩が進められなければならぬのである。彼に在て斯く〳〵だからとて、此に在ても一から十までその通りと速斷するのは誤りだ。

序に注意しておきたいのは、經濟行動に於ける自由主義より類推して、政治行動に於ける自由主義又階級主義の意味を輕々に定めてはいけないことである。言葉の意味を窮屈に解せず、虚心に私の云はんと欲する所をよく呑み込んで貰ひたい。私がこゝに政治行動に於ける階級主義といふのは、無産大衆それ自身に直に政權の主動的地位に立てとの主張を意味するので、之に反し、大衆自身は受動的地位を守り、自家階級中特に政治的能力に秀でた者を實際行動の主動

者たらしめよと云ふのと自由主義と云ふのとの[illegible]、[illegible]に、政權獲得と云はれた樣な妥協を容認するといふ意味を含むのではない。政策樹立の根本を何處に置くかの點で——即ち代表主義的で行くか代表主義的で行くかの點で——二つの立場の對立を認めようといふのである。

斯く解して觀ると、一體政治行動に在て所謂階級主義的立場など云ふものは本來成立し得るものかどうか、又成立しても果して無產階級の利福に資するものかどうか、此點少しく疑なきを得ぬ。蓋し(1)大衆はもと自ら政治行動の首動者たり得る程に發達して居ぬを常とし、(2)經濟方面の事なら、直接痛苦を感ずる所だけに相當の意見もあり且關心で居れぬ所でもあるが、政治の事になると、事柄が專門の智識に待つ所から、概して格別に現實の興味を感ぜぬやうである、(3)從て政治の事は自然特にその方面に優れた他の人々に託するといふことになる。この三つの理由だけを擧げて見ても、所謂階級的立場なるものの本來容易に成立せざるものなる所以は明であらう。現に階級的政黨を標榜するものに付て見ても、之に屬する大衆の大部分は事實西も東も分らず、一に幹部を信賴してその指揮に盲從して居る有樣ではないか。表面の申分は何であれ、今日の無產政黨の中に、無產大衆自身が直に自ら立案し眞に自ら運動するものは一つもないではないか。近き將來に於て之を見るを得べきの見込も無論ない。一切の御膳立は悉く少數の幹部がやる。此點既成政黨と少しも異る所はない。只異るは、之を自分の意見と正直に告白して大衆に協贊を求むるか、又は之は諸君の意見だなどと僭稱して巧に大衆の盲目的服從を强ゐるかの差に過ぎぬ。大衆の眞の自由は決して斯うした階級的立場に安全なるを得るものではない。

加之現代に在ては政治は決して國民の常識を以て處理し得べきものではなくなつた。世の中が複雜になるに從つて政治の問題も頗る複雜である。之を適當に處理するには專門の智識と特殊の經驗とを必要とする。之を國民の誰でもが處

理し得ると思ふのは間違だ。私はこの關係をよく病氣の治療に譬へて説明したことがある。病氣の有無は固より國民自身でなければ分らぬ。併しそれが何んな性質の疾患であり又如何にして治療すべきかは彼のよく判じ得る所ではない。自分の事は自分が一番よく識つてゐるといふ諺は、この際には全然適用しないのである。無理に適用すれば、所謂生兵法大疵の基となるを免れぬ。この意味に於て醫者は缺くべからざる必要だ。而して之と同じ意味に於て、政界に政治家といふ特殊部落の存在する理由があるのである。政治の段々專門化するに連れ、或る理由から、特に狹い範圍に國民自身の常識に委し得べき領域を劃して、自治制といふものを布いてみた。その自治制に於てさへ、最近は段々特殊の專門家に托する樣になつてゐるではないか。亞米利加などでは、營利會社の經營を一專務取締役に托すると同じ樣に、市政を一マネージャーに托するを便とする風が段々流行つて居るとか。自治制にして猶且つ斯の如し。國政處理の專門的事項たる所以は之を推しても益々明白であらう。故に政治行動の問題につき所謂階級主義を說くが如きは、全く政治の本質を知らざるものの空言に過ぎぬのである。

國民的監督の必要

階級的政黨なるものの本質的に不可能だといふことは、固より、政治は之を專門の政治家に托し大衆は拱手傍觀していゝと云ふ意味ではない。政治家の方策の當れりや否やは、もと民衆の直接に受くる所の痛痒に依てのみ判ぜらるべきものだ。客觀的に云へば民衆は即ち政治家の施設の當否を判ずべき實驗臺だからである。そこで主觀的にいふと、民衆はその直接に影響さるる利害關係に基いて政治家の反省を要求するの權利があるといへる。政治の取扱ふ相手は云ふまでもなく大衆の利福だ。大衆自ら痛い痒いを訴へなければ、醫者にはどうとも手の下しようがない。大衆自らはその痛

苦を訴するの方法を知らないのだけれども、患者の希望の決して必要に中たらぬものあることは、患者の率直にして大胆な遠慮なき感想を發表するによりてわかる。同時に之に依りて醫者はまた反省に反省を重ねて益々その智能をみがいてゆくことになる。醫者が屢々失策を重ねるからとて、大衆が自分で藥を盛るは危險此上もない。が、さりとて全然拙い醫者を頼り過ぎて効果の擧らぬをその儘默過するのも宜しくない。於是大衆は政治の問題につき、主動的地位を取るの特權を持してはならないが、政治家の施設につき常に鋭意監督の任務に勵まねばならぬのである。政治家の專門的材能と國民大衆の無遠慮な監督と、兩々相待つて始めて政治は本當に國民のもの又國民の爲めのものとなるのである。

思ふに階級主義的政黨觀は、國民的監督の必要を極度に痛感する所より起つた已むを得ざる謬論ではあるまいか。どの醫者もどの醫者もあんまり再々失策を繰り返しては病氣を益々深みに陷れる。そこで民衆はこれに愛想をつかして一つ自分で療治して見ようと云ふ氣になる。之も實は尤もの話だ。政治に於てこの類の事實殊に多いのを見るとき、我々は大衆が政治を全然自分達の手に奪還せんと憤るのに、限りなき同情を寄せずには居れない。

先年私が北陸地方に旅行しての歸途、途中俄に汽車が不通になり、數十名の一隊と共に、數里の山道を徒歩し漸つ日かの驛に辿り着き、臨時列車を仕立てて我々を東京に送つて貰ひたいと談判したことがある。それは寒い冬の眞夜中であつた。談判委員の役をつとめたのは相當年配の立派な紳士である。中々要求に應ぜぬ驛長を說き伏せて、兎も角も貨車の中に立ち乍ら東京に向つたのは、主として彼れのお蔭であつた。車が動き出してから、誰かの發議で彼れに感謝の意を表さうと云ふ段になつて、不思議に思つたことは、彼れの顏が一向其附近に見へぬことであつた。勿論燈火もないのですぐには分らなかつたが、段々探してもとうとう見付からぬ。乘り損つたのなら氣の毒な次第と、一同期せずして心を痛め乍らやがて明け方東京に着いた。その時始めて一同は、彼一人驛員と共にランプもあり火鉢もあり腰掛けもあ

る別仕立の一室に悠然と治まり返つて居るのを見た。是に於て先きの心配は俄に期せずして侮辱に變り、中には後から高聲に彼れの不德を罵るものもあつた。別に惡い事をしたのではないが、人の爲に謀つて人と己れとを區別した其態度は、成程あまり感心した話ではない。而して斯うした類の人は、民衆の代表と稱する政治家輩の中に頗る多いことは云ふまでもない。

單に之だけ位ならいゝ。更に進んで之を私利を營む機會に濫用するものも尠くないのである。寧ろその方が、我國政治家の常態だと謂てもいゝ。而してその結果一番困しむのは無産大衆だ。そこで彼等が憤然として起つのは尤もの次第であり又頗る好もしいことでもある。無産大衆が起たねば政治家の眼は醒めぬからだ。然り無産大衆が起て彼等の眼を醒ますことは目下の急務である。併し眼を醒ます以上更に進んで彼等を撲滅するの必要ありやは自ら別問題だ。勢の赴く所多少極端に失するの事實は恕すべきも、理論の說明としては、兎に角何處までも角を矯めんとして牛を殺さぬ用愼が肝要だと謂はねばならぬ。

有産階級を代表する今の政治家は本質的に無産大衆の利害を代表し得ぬものだとする說に對しても、私に多少文句を云ひたい點はあるが、それは姑く許すとして、無産階級內部の事に付ても、代表者に事を託するといふ組織に兎角間違の起るのは、一體この組織に根本的缺陷がある爲なのか、又は大衆的監督が十分に行き屆かなかつた爲なのかは、愼重に考ふる必要があると思ふ。但しこの事は、前々から述べ來れる所でも十分明了だと思ふから、諄々しくは說かぬ。只呉々も健全なる政治運行の上に民衆的監督の如何に必要なものであるかを知つて貰へばいゝ。孰れにしても民衆を政治的に覺醒し、緊張させ、場合に依ては多少昂奮させることは大に必要である。但しそれは政治の主動者たらしめる爲ではない、監督者としての任務を十分に盡さしめる爲であることを忘れてはならない。

無產階級政治鬪爭論

以上述ぶる所の私の立場は、何等先入の偏見なく虛心にこの問題を考へて呉れる人には、一點の疑りもなく明了に分る筈だ。けれども昨今の世上には、到底斯の立場を承認出來ぬと考ふる人の尠らずあることを、私は知つて居る。それはマルクス正系と稱する唯物主義的政治思想が消化されずにそこゝに澤山ころがつて居るからである。私はあらゆる政弊の根元は民衆の政治的開發が等閑に附せられ併せてその自由判斷が妨げらるゝ所に在りと說く。之に對して否さうではない、ブルジョア階級の支配者たることがその唯一の原因だと主張する者を見る。搾取する者と搾取さるゝ者と、自ら別個の階級を爲し、其間利害の異り從てまた思想感情の同じからざるは之を認める。從てブルジョア支配といふこと其自身に弊根の伏することも、私は認める。併しそれかと云ふて、甲に代ゆるに乙を以てし依て以て直に十全の理想世界をもたらすことが出來るだらうか。蓋しこの期待は、人は全然物質的環境に依てのみその何であるかがきまるとする唯物的人生觀の下に於てのみ成り立ち得るものである。この考方の正否はいま茲で爭ふ問題ではない。唯斯かる考方よりして來る當然の結論が、ブルジョア階級よりの單純なる支配權の奪還に最高の價値をおくに在ることを注意すればいゝ。こゝから所謂無產階級の政治鬪爭論なるものが生れる。從來の樣に經濟行動に齷齪するだけでは無產階級の生命は伸びぬ、一擧に政治的支配權を獲得せねば駄目だと云ふのである。斯くて所謂政治的方向轉換が決定せられ、遮二無二支配權の奪還に邁進するのである。この事の正否如何の問題も重要なことではあるが、今こゝに詳說するの必要はない。唯この種の論者は、新に樹てたその目的を達する爲に有效だとあれば何んな方法でも厭はないと云ふことを注意しておきたい。

そこで勞働者はこの目的を達成する爲に最も有効な方法を撰んだ。之は何ぞといふに、大衆の力を結束して政府に當らしむること是れである。於是勞働者は叫ぶ、大衆自ら起てと、起て有産階級より支配權を奪回せよと、斯う云ふのが無産階級の政治闘争論でありその議論に基いて無産政黨が作らるるのなら、斯る無産政黨は立派な階級的政黨であり、又さうであらねばならぬことも明白だ。併し傍から觀れば、甘き好餌を以て大衆を誘ふ少數者の煽動的仕事に外ならぬ。現に今日見る所の所謂無産階級的政黨論の如き、かのナポレオンの平民主義と何の擇ぶ所もないではないか。しかも熱心に狂奔して居る窮人から觀れば、彼が何の爲にはかる如く、相手方になり代つて直に自分を忘却して居るに相違ないのであらう。併し之れを忘れると忘れざるとに拘らず、自己の偏見を以て大衆を率ゐんとする獨裁的態度に於ては果して自由主義と何の異る所があるか、その事の善悪は別として、今日無産大衆本位を叫ぶ階級主義の立場を強調するものを見るに、その主張に熱心なるもの程最も專制的であり且つ最も非妥協的であるは疑もなき事實である。無産階級運動の內に於て、心酔者の專制に依て最も甚しく自由を奪はれて居る者の何なりやは、多くを要せずして明であらう。

そこで階級的政黨の主張は、その實中央集權的たる政黨幹部の專制主義の强行に外ならぬことが分る、從て專制主義に代ふるに自由を以てする爲には、先づこの論と戰はねばならぬ所である、更にもう一つ云ふべきは、之と類似なるムッソリニ式專制に反對して、大衆の獲得を以て目標とする黨派的專制なるが故に、大衆は一方に捕らはれず自由の不完全な狀態を強へられつゝも、他方內部たる大衆自身の部分的專制に苦しめられて、個人の自由を奪ふことである、一つの方の要求が生じると、例へば大衆政治時にはムッソリニの如き獨裁者を作らねばならぬ怖れがある。斯んなことはアリストートル以來說き古されたことであるが、[illegible]。然し、何れにしても、今日の政治運動に關與するものは其の主張を明にするについて[illegible]は、大いに研究するの價値があると思へる。

自由主義の政黨觀

繰り返して斷つておくが、玆に自由主義といふのは、十九世紀の政治史上社會主義に前驅した自由主義の謂ではない。無産政黨結成の基礎に關し、階級主義的立場に對抗し代表主義に則るべきを主張するものの謂に之を用ひるのである。

政黨結成の問題に關する自由主義の立場は、第一に政黨に依る政治活動は、その標置する立場の何であれ、實際は必ず政治家と呼ばるべき專門家の一團に依て指導さるるといふ客觀的事實から發足する。既成政黨の如きは萬事を少數最高幹部の裁量に獨占せしめて代議士にすら事實上の干與を許して居ぬ。昨今出來た無産政黨にした所が、この點に於ては毫末も既成政黨に異る所はない。成る程所屬黨員のそれぞれの集團から代表者が擧げられ、代表者が集つて委員を選び、委員の中から幹部がきまると云ふ形式だけを見れば、大衆が直接間接に幹部を指導牽制する樣になつては居る。それでも實際に於て幹部が大衆の意思の單純な執行者だとは決して受け取れない。況んや多くの場合その所謂代表者たり委員たる者は事實幹部の指定に係るを常とするに於てをや。

人或は曰ふ、無産政黨に於て幹部たるものは、概ね筋肉勞働の出身か又は之に類するものを多しとすると。然り、所謂職業的政治家の出に非る點に於て、無産政黨の幹部に異彩あるは否めない。それだけ彼等には在來の政客の有たない貴い經驗がある。少くとも彼等は過去に於てその地位を利用して私をはかるが如き惡弊に觸れたことはない。だから彼等には他の何人よりも能く無産階級の利益を代表すべしと期待することは出來る。私も無産政黨が彼等に依て指導さるることに十二分の滿足を表して居る。けれども忘れてならぬことは、一旦政黨幹部の座に据つた以上彼等は最早勞働者で

はないことである。例へば社會民衆黨の松岡君にしろ、日本勞農黨の望月君にしろ、成る程昔は純然たる勞働者であつた。併し今日も依然として兩君を勞働者と呼ぶのは、兩君自身のためにも間違であり又政黨の爲にも間違である。もと勞働者であつたと云ふ經驗に立脚して、他の氣付かざる方面に自由にその頭を働かすのはいゝ。併し今日は現に自ら手足の勞働に從事して居るのではない。於是彼等はその境遇の變化を念頭に置いて常に謙遜して純勞働者の新しき體驗を徴取するの努力を忘れてはならない。一般黨員としても同じ事だ。幹部の中に松岡望月兩君の如き自家の先業を有つことは如何にも氣強いことに相違ない。併し兩君をして眞に勞働階級の代表者としての大成を期せしめんには、常に彼等を監視し、境遇の變化の結果動もすれば陷り易き迷路より彼等を引き戻す樣常に十分の注意を怠つてはならぬのである。いづれにしても幹部が勞働出身だと云ふことは、その政黨をして直に純階級的ならしむる所以ではない。幹部の任に就いて筋肉勞働より離れた以上、彼れは最早一かどの政治家（政治行動の指導に與る限りに於て）である。この點に於て松岡望月の二君の如きは鈴木文治君や大山郁夫君などと何の異る所もないのである。

斯くて政黨といふものは、その實體に於ては要するにみな專門政治家の集團に外ならぬものである。少數政治家に左右さるる政黨はいけないから玆に大衆本位の政黨を作れなどと云ふても、そんな政黨は本質上あり得ない。政治に於て一般民衆は、本質的に積極的地位には立ち得ざるものである。政黨の當事者は固よりその政黨としての目的を達する爲めにいろ／＼勝手の事を云ふだらう。併し一般國民としては、彼等の行動をその儘自分の行動と考へてはいけない。必しも一般大衆の爲と稱して私利をはかるものと疑ふの必要はない。中には眞に一般大衆の爲に犧牲獻身の至誠を竭して居るものもあらう。之等に對しては心から感謝の意を表していゝが、併し實際問題として彼等の行動を是認し又之を支持するか否かは全然此方の勝手とする。諸君の爲にやるのだと云ふたからとて、盲目的に之を後援せねばならぬ義理はない。

場合に於ては賛成するも、否に於ては飽くまで自分の良心に基いて其の政府に反對をなすべきである。

右の各項から私は、自由主義の政治論の根本原則として次の數項を擧げようと思ふ。

（一）政黨は政治家の仕事である。一般民衆は本來之に直接の關係を有すべきものではない。

（二）一般民衆は常に自由の判斷を以て政黨の行動を批判すべきものである。特殊の政黨と腐れ縁を繋いではいけない。

（三）政黨は所謂地盤をもつとき、每に墮落に陷り易い。善事を競ひ道德的信望を自然に收むると云ふ形に於てのみ大衆に呼びかくべきものである。

（四）一般民衆が政黨の誘惑に應ぜず常に自由獨立の超然的態度を維持するとき、各政黨は始めて善を爲すことを競ふ樣になる。

つまり一般民衆から觀れば、政黨の呼び掛けは商店の廣告の樣なものだと思へばいゝ。商賣の上手な者ほど、自分の店の品はよく價は安くお客樣のお勸めに依つて斯んなものを賣り出したなどとうまいことを云ふ。併し廣告がうまいからとて必ずその店から買はねばならぬ義理はない。否、民衆が廣告に釣られて輕々しく去就を決するほど、商人は宣傳を虚飾するに急にして品物の改良を怠る樣になる。民衆が冷靜になつて眞に品のよい價の安い店を擇ぶとき、而してその選擇が概して誤らないとき、商人は始めて價の安い良い品を提供することに骨折るのである。民衆の正しい自由の判斷が常に動くのでなければ、社會の文化は本當に進歩するものでない。

所謂代議士中心の政黨

政黨が本質上政治家の團體である以上、或る意味で之を代議士中心の團體といふても差支はない。政治家は必ず代議士に限ると云ふのではないけれども、今日の政治組織に於て、代議士といふ地位が政治家の駿足をのばす殆んど唯一の機會だからである。そこで通俗の云ひ方としては、政黨は本來代議士中心のものだと云つていゝ。その外のものでは斷じてあり得ない筈のものである。若し之を否定するものがあれば、そは必ずや政黨そのものゝ實體を理解せざるものでなければならぬ。然らずんば、自信のない小商人が信用のある老舗を罵倒して「彼は買ふと買はぬはお客の勝手だと傲慢なことを云つて居る、我こそは本當にお客本位でやつて居るのだ」などと叫ぶの類であらう。

私共が先きに新政黨結成促進運動を起すや、之に狼狽した左翼派の何とか云ふ團體は、その聲明書に於て吾人の企圖を評し「代議士中心の政黨を目指すものであり、その點に於て何等ブルジョア政黨と選ぶところがない」と云つてゐた。然り、私共は、代議士中心の政黨を作らうとしたのである。今日の政治組織の下に於てこの外の形式はあり得ないからである。成る程この一點だけを取るなら我々の斡旋した政黨は正にブルジョア政黨と何の選ぶ所はない。併しブルジョア政黨と何の選ぶ所もないのは、實は我々の政黨ばかりではない、あらゆる無産政黨が皆同じなのである。但し大衆を誘惑する爲めの表看板は、流石に必しもさうとは明言しないかも知れぬ。けれども事の實相に於て、代議士中心に非る政黨はてんで存在し得ないのだから仕方がない。一種宣傳の目的で大衆本位を強調するは恕する。心から代議士中心でない政黨の存在し得るを信じて居るのなら、私は彼等の救ふべからざる觀念的錯覺を憫笑せずには居られないのである。

× × × × ×

現在の政治組織の下に於て存在し得る唯一の政黨的形式は、代議士中心のそれである。その外の形式のものもあり得

ると考へるのは妄想に過ぎぬ。但しこれは現在の政治組織の下に於ての話だ。この組織を異にしての話ならば、代議士中心でない政黨の存し得ることは論を待たない。而してさうした意味の政黨の主張は現に西洋にはある。併し西洋にあるからとて其儘之を日本に振り廻はしていゝと云ふ理窟はない。假令そんな論者もあるまいと思ふが、若しあつたとすれば、私はそれは現在の政治組織の承認を前提とせざる議論なることを識つて居て貰ひたいと思ふ。

無産階級の政治行動は抑も何を目的とするか。直接の目標は支配權の獲得である。而して支配權獲得の方法はもと一にして足らぬが、その中に就き、議會に多數を制するに由て之を獲得する方法のみが法律上許されてゐるのである。是れ今日の制度の下に於て、政治行動の一機關たる政黨が代議士中心の形式を取らざるを得ざる所以である。何となればその以外の方法を以てする政權の獲得はすべて法律の禁ずる所だからである。多くの政黨がよく「合法的手段に依て」と云ふのは畢竟之が爲めに外ならぬ。而して之に依らざるものを私共は直接行動の名を與へて別du種の變類とする。時としては革命的手段と呼ぶこともあるが、暴力を用ふると否とは必しも問ふ所ではない。均しく皆法禁に觸れるのである。故に我國に於ては、法禁に觸れずして代議士中心の政黨組織に反對するの餘地は絕對にないのである。

× × × × ×

尤も私は法禁に觸るるを恐れて良心を枉げよと云ふのではない。法の禁制には時としてその當を得ないものもあるからである。只懸念するのは、代議士中心の政黨組織を難ずる輩が果してよくその主張の實體を識つて居るか否かの點である。代議士中心の政黨運動のいゝものかどうかは別問題として、之に頼ては無産階級の利福は到底十分に伸張され得ないと彼等は云ふ。少くとも無産階級の支配權獲得の目的からいへば代議制度は最も迂遠なものである、何か他にもつと早く支配權を掌握する方法はないものか。其の爲の手段としてはどんな事をしても構はないといふが彼等の考だ。斯

くして彼等は、民衆の力を結束して之に當らしむることの外に良法はないと云ふ結論に到達した。是れ即ち彼等の政鬪爭論ではないか。大衆を政權獲得の鬪爭に覺醒せしめ、所謂階級鬪爭の方向を經濟行動より政治行動に轉換せしめんとするのである。この立場からいへば、議會に代議士を送るが如きは彼等の政治行動の全部ではない。少くとも最良の方法ではない。選擧は大衆の鬪爭訓練に役立つ好個の機會である。この限りに於て選擧を大に利用すべしとするが、代議士に依て結局確實なる政權獲得を實現し得べしとは全然考へてゐない。從て彼等は始めから代議政治をその本來の性質に應じて運用しようとはしないのである。各國の議會内に於ける所謂共產黨代議士なるものの行動が明に之を證明してゐるではないか。つまり彼等は自家の代議士に依て議會を内部から壞せばいゝのだ。尤も利害の打算上刑律に觸れる樣な馬鹿はせまい。併し如何に合法的の假面を冠つてゐても、要するに彼等の目標は代議制の完成ではなくてその徹底的破壞に外ならぬ。この點に於て彼等は他の諸政黨と根本的にその志向を同じうせざるものである。されば彼に在ては代議士は一切の行動の中心たるを得ず、寧ろ黨中幹部の傀儡たるに甘んぜざるを得ないのだ。加之彼等に取てはまた特に強く代議士中心を罵倒しておく必要もある。それは動もすれば漫然たる破壞に倦んで代議士其ものに中心勢力が集りたがるものであるからである。何れにしても、斯んなやり方の政黨に在つて何が中心かといへば、彼等の表面に標榜するが如く大衆全體が中心なのではなくして、實は大衆を踏台とする少數幹部の專制が指導的中心に立つものである。この點に於て、政治鬪爭を主張し大衆本位を標榜する政黨ほど、そのやり口に我國既成政黨の腐敗したそれに最も多く類似するものを見るのである。

我國政弊の根源

私は前段に於て、大衆本位を標榜する政黨は成るべく多く大衆の自由意思を擁護するといふ事實に求むべきことを強調して置いた。この意味に於ても私が左翼派の政黨論に承服するを得ない理由は分らう。段々と本論を進めて行く中に、私が左翼派と相容れぬ更に多くの論點をもつことが明となるわけだが、少くとも右の一點だけに於て、私は左翼派と既成政黨とに一樣の反感を有つことを表明しておく。

一體我々が既成政黨に反感をもつのは如何なる點に在つたのか。それは外でもない。選擧民の無智なるに乘じ、利を以て彼れを誘ひ、その良心を買收して我意を強ゆるからではないか。徳を以て民心の輿望を收め、その結果多數の民衆から推されて政權の行使に與るべきだのに、醜惡なる方法に依て政權行使の地位に占據した者が遂に其地位を利用して不義を行ひ、由て以て得る所の利權の一部を選擧民に割いて自家の地位の此上の維持を圖らんとするからではないか。その結果として現はるるものは、第一に惡政の横行である　第二に民心の腐敗である　第三には民間に於ける聰明の掩塞と風教の頽廢とである。社會全般の受くる直接間接の損害に至ては實に量る可らざるものがある。而して斯の政弊の起る所を一言に約していへば、要するに監督すべき地位に在る者があべこべに操縱せられて居ること、即ち主客の地位の顚倒されて居る爲めでないか。この主客顚倒の順序を正さずして我國の政弊は到底救はれ得るものでないと云ふのが、實に私の多年の宿論である。之等のことは既に屢々述べた所でもあるから略する。玆にはたゞ政界革新運動だの、既成政黨打破だのと、所謂政治家階級の反省を促す方法にのみ賴るのでは駄目だ、それよりも端的に民衆の良心を叩き、その聰明を喚び覺まして、政黨の宣傳に誤られざる樣自由の判斷を確保さすこととの外に時弊救濟の良法のないといふ結論に、讀者の注意を促しておくに止める。

我國政弊の根源を右の如く解する說に對して反對の見解を抱く者がある。表て向きははツきり反對といはなくとも、

著しくこの點を無視し、他の飛んでもない方面に別個の理由を擧ぐるものに至つては澤山ある。その中の一つに、ブルジョアが支配權を握つて居ることが政弊の唯一の根源だといふ說がある。從つて此種の論者は、無產階級が之に取て代りさへすれば一切の政弊は全然跡を絕つと考へ込む。併し斯の考は次の二つの前提を豫定しなければ成り立たない。(一)從來ブルジョア階級は完全に結束して多年その利己的階級政策を遂行してゐたこと、(二)之に虐げられて來た無產階級が、新なる權利の賦與に促され、玆に結束して起たん乎、政權の獲得は困難に非ず、之を獲得すれば自ら十分にその目的を達成し得らるべきこと即ち是れ。併し斯うした前提は我國の實際に於て許し得ることかどうか。西洋なら云へぬこともあるまい。日本の現狀に即しての言說なら、何人も直に首肯することを躊躇するだらう。斯んな淺薄な飜譯思想を以て大事な現實の政黨問題を取扱はれては、誰よりも一番に當の無產階級が迷惑する。

或る階級が政權を壟斷して我儘を振舞ひ、就中無產階級を極度に虐げた事例の實在は私も認める。私は先きに政治家を醫者にたとへたが、世上には實に腕の拙く且橫着を極むるばかりではなく、時としては碌に患者を診察もせでお前は肺病な筈だの胃病な筈だのときめ、いゝ加減な藥を盛るといふ亂暴振りを示す醫者も少くはない。藥がきかぬと訴へれば罪はお前の身體に在る當方の處方に誤りはないと叱られる。それでも效驗のないことを爭ふと、はては秩序を紊亂する危險人物などとの折紙をつけられてしまう。斯く大衆の無視さるるも畢竟は政界に發言權を有たなかつた爲と、彼等は多年普通選擧制の採用を希望し又要求したのであつたが、之が最近やつとの事で與へられたのだ。之からはさう無視されることもあるまいと云ふわけになつたのだが、併し之で完全に無產階級の要望が豫期通り容れられるものと思つたら大間違であらう。何となれば、從來の支配階級は多年の經驗上有權者たる民衆の良心を巧に誘惑するの方法をよく心得て居るからである。

論者は曰ふ、ブルジョア政黨は由來常に結束して階級的利己心を十分に滿足して來たと。一體これは何處の國の話なのか。少しく我國の實狀に通ずるものは、今日猶ほ少數閥族特權階級が斯くも嚴しく有產階級を抑壓して居るの事實に驚かずには居れまい。人はよく曰ふ、資本主義の最高の發展形式として帝國主義があると。西洋はさうかも知れぬ。併し日本では封建的特權階級の帝國主義が常に資本主義に先行し、後者は却て前者の庇蔭に依て多少の發展を遂げ、之を離れては今日猶ほ未だ十分獨立の地歩を占め得ない有樣である。本來の運命をいへば、無產階級の擡頭によりて混亂されざる限り、資本主義の發達が遂に帝國主義を使役するに至るものなのであらう。併し今の所は主客の地位西洋に比して丁度逆になつて居る。無論帝國主義も資本主義を利用するを得策とするは疑ない。その限度に於て資本主義の勞働搾取は現に國家の厚き保護を受けても居る。之を以てブルジョアを責むるは一向妨げない。併し之を資本家階級の積極的な自主的な策動の結果と看做すのは、少くとも我國の實狀にはあてはまらない。

なぜ資本主義が帝國主義の威服の下に屈して居るのかと云へば、外でもない。有產階級の連中と雖も、選擧權の行使については殘念ながら獨立の判斷を以て良心の自由に立脚しないからである。換言すれば、政治家に籠絡され、甚しきはその利を以て誘ふに委せ、監督者たるべき身を以て却て彼等の走狗たるに甘ずるからである。或る意味に於ては、選擧權者の數の限定されて居ることが誘惑に便なのだともいへるが、又或る意味に於ては、政治家の籠絡手段は事程左樣に巧妙惡辣を極めて居るのだとも觀られる。故に之にも拘らず毅然たる獨立の地歩を確守するといふは、實は常人に望み難いことでもある。弊害を見ては誰しも憤慨するが、一たび誘惑にあつて果してよく之を切り拔け得るや は何人にも甚だ覺束ない。是れ政弊を慨くものの頗る多くして其事實の毫も跡を絕たざる所以である。斯う云ふ所から私は、從來の有權者に良心の自由を確持するの訓練がついて居つたなら、政弊は斯くまで甚しからずして濟んだのではなかつ

たかとさへ考へて居る。尤も彼等の選擧權行使が理想的に行はれたところが、どの途搾取階級の政治である限り、無産階級の排擊を蒙るべきは疑ないが、現に見るが如き政界大弊の根源は、選擧權を有産階級に限つたといふ事よりも、寧ろ國民の多數に訓練の著しく缺けて居るといふ點に歸すべきものと考へる。少くとも之れ丈けは間違なくいへる、同じ樣な訓練を缺く限り、假令選擧權が一般無産階級の大衆に擴張されても、立派な無産階級の理想政治の直に實現するの見込はないと。

無産階級の政治は政權を獲得しさへすれば實現するとの考は、人をして自ら政權獲得の目標に庶二無二突進せしめずば熄まない。無産階級が選擧圈外に無視されて居たのでは固より始めから問題にならないが、假令權利を認められても有産階級をして政治的に失敗せしめたと同じ原因が此處にも活らいて、無産階級をもこの同じ失態に捲き込むことがなからうか。蓋し權利擴張は一片の法律で以て出來る。精神的訓練は一朝一夕のことではない。一たび惡習に染ましめては終に取り返しのつかぬことになる。眞に無産階級の爲を思ふものは、此際斷じて鹿を逐ふもの山を見ざるの愚を繰り返へさしてはならぬ。

於是私は、更に進んで無産政黨運動に於ける教育的見地の肝要なる所以を説かねばならぬことになる。

教育的見地

前にも述べた如く、私共は無産階級がたゞ支配權を握りさへすればいゝとは思はない。握ることが先決の急務には相違ないが、握つた政權を如何運用するかも均しく重大問題として考慮せられんことを要求する。之が即ち政治教育の問題に關連する。而して之は教育する立場から觀ても教育さるる立場から觀ても、歸する所は只一つで、即ち如何にせば

無產階級をして社會の發展向上を遂げしめ得るかを標準として考察されなければならぬのである。

無產階級の人達が如上の目的を十分に達せんには、消極的要件としては先づ何物にも制束せられざる良心の自由を保持することが必要であり、次に積極的要件としては與へられたる問題に對し正しき判斷を爲し得る樣常にその聰明をみがく所なければならぬ。政治的活動の當否は主としてこの點をどう影響するかの標準から評價せられねばならぬは勿論だ。一黨の勢力擴張に資する所謂黨略が往々公益の名の下に斥けられるのは之が爲めに外ならぬ。

× × × ×

消極的要件として無產階級をしてその良心の自由を保持せしむる爲め大に注意を要する點は二つある。

(一)既成政黨の籠絡より無產階級を遮斷すること。　既成政黨の運動方針が必然的に從來の醜汚な方法に依らざるべからざる旨は、本誌前號に於て既に述べた（時評欄「既成政黨の關心事」參照）。この特殊な事情の下に於て、無產階級を絶對に既成政黨と遮斷するは、凡ゆる無產政黨に通ずる共通のスローガンでなければならぬ。殊に政界の情弊なるものは、一度味を覺へると容易に之を思ひ切れぬ質のものなるに於て、この必要は最も強く叫ばれなければならぬ。之を外にして更に既成政黨を絶對の敵と看做すべきや否やは、また別個の見地から論ぜらるべき問題である。

(二)前項の理由はまた自ら新無產政黨に禁ずるに既成政黨と同一の方法を取ることを以てする。　尤も既成政黨をブルジョアの機關となし之を倒しさへすればいゝとする見地に立てば、無產政黨の成功のために何んな方法を取てもいいわけだ。我黨だけは買收などをせぬと、折角高く標置しても、選擧に見苦しき敗北を取つては要するに宋襄の仁として世上の一笑を買ふに過ぎぬ。併し單に敵を倒すことが目的ではない、敵を倒して後徐ろに立派な政治をするのが主眼だとすれば、他日立派な政治をする時の妨げとなる樣なことは今より斷じて之を避けなければならぬ。故に如何に差當

り有效だと云つても、既成政黨の顰みに傚うて買收請托を敢てするが如きは、最も愼んで避けねばならぬは勿論だ。選擧に金が附きものの樣に觀られて居る今日、斯種の誘惑は無産政黨に在ても油斷は出來ぬ。黨勢の伸張に急いでこの過誤を犯す者あらば、他に如何の辯解あつても、彼は斷じて無産階級の敵と謂はざるを得ぬ。

（三）無産政黨の運動に買收請托を嚴禁するは、選擧權者の良心の自由を傷けてはならぬからである。故に良心の自由を傷ふの恐れあるものは、買收請求に限らず、一切みな之を排斥せなければならぬ。　この點を顧慮して私は、從來一般大衆に向ひ、出來るなら政黨の地盤となる勿れと說き來つたのであつた。屢々述べた如く、政黨は政治家の仕事である。受動的地位に在る一般大衆の政黨に入るは、理に於て正しからざるのみならず、包括的に良心の自由を政黨幹部に捧ぐると云ふ點に大なる弊害もある。併し特殊の事情あつて政黨的結束に入るを必要とする場合あることは認める。それでもその良心の自由は出來る丈け保持して置くことが必要だ。從て既成政黨や又は左翼諸派の政黨組織に見るが如き極端なる中央集權主義は、この點に於て斷じて無産政黨の採るべき正道ではない。

× × × ×

次に積極的要件として無産階級の聰明を開拓すべき方面のことを考へて見よう。

（一）吾々は先づ在來の腐敗手段を嚴重に封ずることが同時に聰明開拓の適當な途を通ずる所以なることを知らねばならぬ。　今日の政治組織に於ては、どの途大衆の推擧を得た者でなければ經綸は行へぬ。大衆の推擧は、極めて稀な例外を除いては、無償にしては得られない。大衆を促して自分に投票せしむる迄には實は相當に骨が折れるのだ。然るに從來はその最も簡單直截な方法として買收請托の手段に依たものである。所が若し之が嚴重に封ぜられたとしたら、吾々は別に何の新しい方法によるべきであるか。則ち言論人格を以て相手方に訴ふるの外途がないのではないか。

但し本來の宣傳手段を生ずるは、云ふに足らぬことなから[illegible]
動方法としての[illegible]人格[illegible]色々その威力を示すは疑はれない。若し斯くして段々さうな[illegible]とすること、[illegible]
考へれば、正に選擧民に對する最も大仕掛な而して最も有效な教育の機會が提供されたことになる。一般大衆が選擧の[illegible]士に接するといふは、平時に在てさう度々あることではない。選擧になると頼まなくとも向ふからやつて來る。そして大衆に說き且訴ふること亦懇切を極めて居る。是れ容易に得難き教育の機會ではないか。之に較べると、平時に於ける政治教育運動の如きは、その效果殆んど言ふに足らぬと謂ていゝ。之を以て觀ても、選擧をきれいにすることの如何に大切であるかが分るであらう。

（二）勞働組合主義を離れぬこと

之は特に勞働組合を作れる無產階級に就ていふのである。彼等が利害の共同に依て團結し、その地位の自覺に基いて協動の步調を取るは、彼等の爲にも社會の爲にも誠によろこばしいことである。而してこの方針を持續することが同時にまた大に彼等の聰明を開く所以なることも論を待たぬ。この意味に於て私は、た組織勞働者に向つては速に斯うした健全な組合の結成を企てられんことを勸めたい。同じ事は固より農民階級にもまた各種の勤勞階級にもあてはまる。

只茲に一つ注意しておきたいのは、政治運動に付てだけは決して自ら主動的地位に立たれざらんことである。私の友人に高名な美術鑑定家がある。彼れの言に依れば、鑑定家としての最も大事な心掛けの一つは、自ら美術品を所有せぬことであるさうな。自分が物を有つと、自然鑑定眼がくもると云ふ。大衆は謂はば政治家と云ふ技術家の作る政策方針の鑑賞家だ。自家の體驗に基いて正直に其觀る所を表示するを職分とする。判斷の基礎たる體驗は固より大に組合共同の運動に依て深められ又豐富にもされよう。が、その判斷の邪路に迷ひ入らぬ爲には、自ら政治に沒頭せぬことが肝要

である。彼れが自ら政治に沒頭するは、即ち鑑定家が自ら美術品を買ひ集めた時だ。政治家監督の大使命は斯くの如くしては遂に滿足に出來なくなる。この意味に於て、かの無產階級政治鬪爭論の如きは最も警むべき外道であると謂はねばならぬ。

政治道德を論ずる者はよく、一般民衆の政治行動に取て最も怖るべき誘惑は二つあると云ふ。一は金錢其他の方法を以てする政治家側より來る誘惑で、二はお前が政界の主人公だと吹き込む例の尤もらしい煽動だと。前者のことは改めて論ずるまでもない。後者の害を或る人は、お前には此河を飛び超えるの能力があるぞと子供をおだてて遂に溺死の不幸に陷らしめた大人の惡戯に比して居た。何れにしても無產階級（無產階級に限つたことではないが）を煽つて不當に政治に沒頭せしめるのは罪だ。同時にまた社會の健全なる發達に對する反逆でもある。斯く云ふは彼等をして全然政治から絕緣せしめようとするのではない。寧ろ政治を監督すると云ふ彼等の本來の職分を最も正しく果さしめたいからである。政治に對する彼等の交涉を最も有意義のものたらしめんが爲めに外ならぬのである。

猶この事は所謂勞働者以外の無產階級にもその儘適用さるべきは論を待たぬ。

×　×　×　×　×

終りに一言附け加へる。右の樣な次第で教育的見地に基く要求は、一見純然たる政黨運動とは相容れぬものの樣に見える。政黨の側では一生懸命多くの人を捉えては頻りに入黨をすゝめるだらう。然るに我々は迂つかり其手に乘るなと唆かす。彼は誠心誠意公事に奉仕する旨を說いて懇ろに自黨の支持を求めてやまぬ。我々は之を聞いてゐる大衆に向つてよく考へてから去就を決しなさいと注意する。斯くて一から十まで政黨運動者の裏を搔く樣に見えるが、併し政黨運動は本來決して教育運動と根本的に相矛盾するものではない。彼等が所謂鹿を逐ふに急にして山を見ざるの過誤を犯すと

き、或る程[illegible]の主張とは[illegible]に關[illegible]ことになるのだ。而して[illegible]に[illegible]、[illegible]相一致するものなることに氣付くだらう。少くとも今後の政黨政治に取ては、その運動を[illegible]の爲すに[illegible]し、之を以て社會文運の發達に貢獻せんと期する限り、常に教育的見地の要求に教を乞ふの必要あることは[illegible]ない。

教育的見地に對する反對

斯うした教育的見地は從來いろ〳〵の場合に隨分無視され又反對されたことがある。古くから能くあるその最も普通なものは、遠き將來に於て到達さるべき姿を現在目前に實存するかに妄想する場合である。或る觀方からいへば、物の本質と現實との混同と謂ていゝ。物を完全な姿に描くのだから、教育の必要を無視するは當然である。無政府主義の如きはその最も著しい適例であらう。完全に自由な人間に政治はいらないと云ふ。政治を不要とする境地を作り出す爲に政治に依る人間の訓練の必要なる所以を忘れるのだ。斯うした誤りは植民地統治などにも往々現れる。例へば朝鮮に於て土人が排日運動でも起すと直に之を捕へて極刑に處する。法律上朝鮮人も日本臣民には相違ないが、出來上つた日本人の氣持をその儘彼等に要求するのは無理ではあるまいか。而して之と同じ樣なことは無產階級運動に付てもいへると思ふ。無產階級運動を說くに當り、ブルジョアの批判に於て嚴峻を極むるはいゝ。その反對にプロレタリヤに付ては、之を讚美するに急いで夫の第十八世紀末の浪漫主義の政治思想家と同じ樣な過誤を重ね、あらゆる美しき屬性を漫然と無產階級に附するの嫌はないか。時としては面白味もあるが之が爲めに若し少しでも無產階級訓育の現實的必要を度にすることあらば大變だ。無產階級運動に在ては、戀愛に於けるが如き甘い陶醉を許さない。急迫した幾多の問題は我々の解決を待ち焦れて居る。而して何よりも大切なことは、如何にしてよく無產階級を教養し彼等に期待された大使命を

よく果さしむべきかに在る。

以上は教育的見地の誤つて無視された場合を說いたのである。之に次いで私は更に、之れが大に毛嫌された時代あることを語らうと思ふ。この事は或る意味に於ては今日に續いて居ると云へぬこともない。尤も毛嫌ひされたには理由がある。それは無産階級の無智なるに乘じ、有産階級がその教育に藉口して巧に搾取の目的を達したからである。換言すれば、有産階級は教育の名に於て無産階級に封建的奴隷道德を教へたのである。故に後に至つて本當の眼を開いて見ると、所謂教育の機會を惠まれただけ無産階級の不幸なる期間が永びいたわけなのである。併し之は有産階級より提供された教育の內容がわるいので、教育そのものがわるいのではない。が、あつものに懲りてなますを吹くの喩に洩れず、無産階級自らの自主的教養の必要を說いても、彼等が容易に之に耳傾けず、却て自家行動の拘束として之を忌避する風を示すのは、遺憾でもあるが又已むを得ない。

右の如き教養の必要に對する反感が、最近遂に昇じて一種の理論の形を取つて現はるる樣になつたのは、注意すべき現象である。教養だの理想だのといふことは無用の長物だ。人事百般自然に任していゝといふのである。道德上の規則などいふものは、その時々の環境が作つたものに過ぎぬ。環境が變れば自らまた之に應ずる相當の規則が出て來る。作るまいと思つても出來るものは出來るし、斯うしたくないと願つてもなる樣にしかならぬ。小さい人間の意欲を此間に働かさうなどと焦るのは馬鹿氣て居るといふのである。之が即ち純唯物觀に基く社會思想で、要するに吾々の爲すべきことは環境を變へることに盡くる、之を變へさへすれば、必要なすべてのものは自然に出來てくるといふのである。友人大宅壯一君の譯されたボクダーノフの「赤い星」は、外のいろ／＼の意味でも大變面白い小說だが、斯うした考に基いて書かれた點に於て大に吾々の參考になる。その外にも同じ樣な主張を小說の形にあらはしたものは澤山あると聞いて居る。理論は理論として、實際それで新社會の立つて往けることを納得させるには、斯く具體的の形に描き示すのが

一層有害だ。併し私共から觀れば、要するにそれは目的に於て一つの空想に過ぎず、内容の方法に於て一つのユートピアに外ならぬ。現實に即した人間の發展を土台とすることなくして、環境の改變と共に直に新しき社會に躍進した新しい秩序の出來るものかどうかは、大に疑なきを得ぬのである。いづれにしても斯うした主張の唱へらるるに至つた歴史的事情に對しては、私と雖も無暗に眼を閉ぢようとするものでないが、併しその歴史的事情から引き離し、之を一つの抽象的理論として主張するに至ては、到底賛同することが出來ぬのである。

現實主義と急進主義

唯物的社會觀が、環境の改變を唯一最高の目的とする所から、自らまた現實主義を排斥するは云ふを待たぬ所である。環境の改變といふことそれ自身が、彼に在つてはもと／＼現實の否認から發足する。現實に發程する些でもの影響は改變の徹底を妨ぐるからである。併し斯うした社會改革は一體事實可能なものであるかどうか。詳しいことはその方面の專門家に委して玆には說かぬ。只次に私は、私の現實主義的立場から一部の急進主義者の言說に不滿を感ずる二三點を列擧して讀者の批判を乞ひたいと思ふ。

（一）彼等は一方に於て理論上から現實に執するの謬を說くと同時に、他面に於ては或一定の方針を指示してその無條件的遵奉を強要し、之に對する現實主義的の批判を許さない。この點に於て我々現實主義者は實に二重の不滿を感ぜさせられるのである。私共は社會の進化には一定の理法あることを信ずる。その當然の發展には飛躍を許さないと敎へられて來た。故に現實に即せざる改革方針は順當なる展開を紛更することの外の何ものでもないと信じて居る。併し之が只理屈の上で爭はれてゐる間は無難だが、現實に即せざる特定の方針を掲げてその強行を迫らるる段になると、大變な迷惑を感ぜざるを得ぬ。殊にそれが意外にも全然素質を異にせる他國の現實の產んだものなるを知るとき、迷惑の程度は

一段と甚しい。

日露戰爭直後私は暫く足を奉天に停めたことがある。日本の留學から歸つた一青年警察官は、日本の見聞をその儘飜譯してか、突如令を發して鼠の買上げを始めた。町の辻々に貼つたビラの文句は實に堂々たるものであつて、正に今日の左翼派の宣傳ビラに匹敵するものである。近頃疫病が流行る。この疫病は西名之をペストといふ。ペストは鼠に依つて傳播する。故に鼠を驅除して疫病の跡を絕たうといふのである。而して買つた鼠はどうするかといふに、驚いたことには、警察署の裏庭にビールの空箱に入れて山と積み、その腐敗するに委して置いたのであつた。固より支那としては鼠の買上げより先きに取り掛らねばならぬ仕事が外に澤山ある。差し當り買上げた鼠をあの儘に放置しては、却てペストの媒介を助ける樣なものだ。斯うした外人の風評を耳にして、官憲はまた假に警察醫を傭ふの日本から顯微鏡を買ふのと、大騷ぎを重ねたのであつた。現實主義者から觀ると、昨今の左翼派の議論にはたしかに當年の奉天警察官憲の所爲に類するものがあるやうだ。現實主義を楯に取りて一部の者が正當なる改革をまで阻まんとする惡弊あることは確に私も認める。故に現實主義者と稱するものに警戒せよといふのはいゝ。併し之が爲に現實主義その者を捨てねばならぬ理由は毛頭ない。之と同じく、私も急進主義的立場を一概にわるいと難ずるのでないことを一言しておく。單に現實主義に執するの故を以て一切吾人の立場を否定せんとするの妄を明にせんとするまでである。

(二) 次に急進主義者の陷り易き惡癖として、その議論のやり方が徹頭徹尾宣傳的であることを指摘しておきたい。前の事實に基いて當然の理路を探らうと云ふのではなく、豫定された針路に無理に大衆を追ひ込まうと云ふのだから、さうなるも實は怪むに足らないのでもあらう。例へば彼等は曰ふ、「わが國に於ける資本家階級は、歐洲戰爭後先進資本主義國の復興の影響を受け、その國際的抗爭を續ける爲に、全無産階級に對する極端なる積極的攻勢に轉じて來た」と。我國の資本主義が近き將來に或はこゝに到るべきは、略ぼ想像がつかぬでない。けれども現在の姿が斯うだといふのは、

事實を證するのみならず、又却て國民をして本當の敵を見誤らしむるの惡作もある。[illegible]し彼等が狂を資本家の廻し者と云ふなら、彼等は意外にも、自分達が資本家の手先となつて居る本當の[illegible]族階級の廻し者になつて居ることに反省すべきである。又彼等は過般の社共の新政黨結成促進運動を目していふ、ブルジョアの野心家安部・堀江・吉野並にその一味は、支配階級の積極的懐柔政策に呼應し、資本家階級と野合して階級戰線内部に於ける反感を挑發し、今や勇敢に全無産大衆の要望に裏切ることに骨折りつゝあると。宣傳に急なる者には寛容の徳がない。否、往々にして他を傷くることに依て僅に自己の存立を示さんとする。之では既成政黨の泥合戰と何の擇む所もないではないか。尤もこゝが一面急進主義者の本然の特徴かも知れぬ。我々現實主義者は、既成政黨のやる様な醜惡なる手段を避けて只管政界を廓情せんと努めるのだが、急進主義者に在ては、自家の掌握に支配權を奪ひさへすればいゝので、その爲に執る所の手段の如きは初めから問ふ所でないからである。

(三) 終りに彼等は、環境さへ變れば必要なものは自然に出來る、どんな手段を執てもいゝから一刻も早く新しい社會に造り換へねばならぬとするのだから、自然非常に功を急ぐことになる。その結果彼等の間には一つの特色ある戰術というものが生れた。所謂細胞扶殖といふのが是れである。相當世間に知られて居ることであるから詳しく説くの必要はないが、要するに夫の軍國主義のやり方と思へば間違はない。左翼派を始め一般無産階級から最も嫌はれて居る岡田文部大臣の軍閥と結托してやる青年訓練とか、又は昨今また新に問題となつて居る處女會とかのやり方の、もツと徹底したのが實に左翼派のやり方なのである。若しやり方それ自身に弊害の伴はぬものであつたら、左翼派の戰術は頗る賞讃に値する最も有効な方法と謂ふべきである。

一個の假想敵を立て之が撲滅をはかる點に於て、文部省のやり方は左翼派のそれと全然異曲同巧である。他日この敵と生き死にの爭をすべき時が來る。その時の用意に今の中からフロントに出陣すべき者を養成しておく必要がある。そ

れには各方面にいろ〳〵の團體を作り、いざと云ふ場合に直に動員することの出來る様よく訓練しておくの必要がある。大人は在郷軍人會でゆけ、子供は青年團と青年訓練でゆく、更に處女會の統一もやつておけと云ふわけである。驅り集められた大衆には、必しも本來の目的を知らしておく必要はない。否、却て之を隱した方が都合がいゝかも知れぬ。たゞ中心になる二三人に十分その意を含めておけば十分だ。是れ即ち所謂鬪士の養成に格別骨折る所以である。能く訓練された二三人の鬪士を所在に分布する。之で大衆を動すことは決して不可能ではない。故を以て彼等は非常に鬪士を大事にする。時としては陰に物質的の保障も與へる。少し位の失態があつても大目に見るは云ふまでもない。丁度原敬時代の政友會内閣が、政友會員であれば少し位人の頭を擲つても罪に落ちなかつたと云つた風のところがある。世間の至當な攻撃に對しても、依つてたかつて仲間を曲庇して呉れるからである。而して文部省の這のやり方に就ては、世上既に色々の方面から非難の聲が向けられて居るが、左翼派のやり方に對しては、之に悩まされて居るものの可なり多いに拘らず、之を難ずべき適當の理論を見出さなかつた爲めか、公然非議を加ふる者今日までは案外に少かつた様である。

× × × × ×

左翼派のやり方は實に次の諸點に於て文部省のやり方に更に一歩を進めたものである。

（一）鬪士を見出すに特殊の苦心を拂ふこと。文部省などの方は、官憲を笠に衣てゐる丈け進んで來り投ずる者少からず、從つてその中から適當な才能を擧用するに苦まない。無産階級の方になると、人を釣るべきさうした好餌がない。そこで彼等は多く勞働爭議を之に利用するらしい。勞働爭議を純經濟行動とする現實主義の立場からすれば、漸を以て勞働條件を向上するに甘んじ、時に讓歩して相手方と妥協するを得策とすることがある。併し左翼派は、所謂方向轉換に依て階級的政治爭鬪を唯一の旗幟とすることになつたから。何等の讓歩も一切之を屈辱として斥ける。差當りの勞

斷者の妄語の如きは固より深く顧みるところではない。斯うした妄論から、各派の各者の理論を誠實に研究したならば得る所の唯一の收穫は、彼等の闘士の發見である。闘士を見出す爲に會議を利用すると云つたら、或は間違つた
と反駁さるゝかも知れない。併し誰か事實の正に斯くの如くなるを否み得よう。但し彼等の立場から云へば、斯くあつても何の不思議はないのである。政治闘爭の最後の勝利の來るまでは、無產階級の前途に何の光明なく、勞働條件の一時的且部分的改善の如きは、畢竟幻覺に過ぎぬものだからである。而してまた我々は丁度斯く如くあることの理由の上に、彼等に反對せざるを得ないのである。

（二）次に彼等はその所謂闘士を各方面に放つて既成團體の侵略を試みる。所謂細胞扶殖の最も明白なる特色は實にこの方面に現はれるのである。各種勞働組合の赤化などといふ現象は畢竟この結果として起るのだ。彼等の立場からすれば當然の運動だといふだらう。侵略されたものからいへば、正に廂を貸して母家を奪はれたものに外ならぬ。之も大衆の順序正しき了解を得た上になされたのなら文句はない。多くの場合その手段には陰險惡辣の譏を免れぬものがあるので紛爭が絕えないのである。今日左右兩翼の反感は頗る烈しいと見られてゐる。而してその實際の原因は主として右述ぶるが如き情實にあるのではあるまいか。

孰れにても、斯うしたやり方は大衆の教養を怠りその良心の聰明を蹂躪する點に於て、徹頭徹尾現實主義者の相容れざる所である。現實主義者は、何處までも大衆の聰明をひらき、その良心の判斷の上に一切の基礎をおかんとするものだからである。大衆の教養を無視せる改革は、畢竟砂上の樓閣に過ぎぬと觀る。故に左翼派のやり方は、環境さへ變れば獨り手によくなるとする純唯物的人生觀の下に於てのみ許さるべきものである。その立場を認めざる限り、これは一時の事功を急いで遂に救ふ可らざる弊毒を將來にのこすの譏は免れぬであらう。

政治の現實的性質

更にモ一つ急進主義者の最も陥り易き弊害として、理論的徹底に拘泥することを擧げて置きたい。政治に理論の講明が必要でないとは云はぬ。理論の指示に從はぬは、それ自身誤りであるのみならず、それが多くの場合に於て一時の便宜や一方の私益に偏する結果たるを常とするが故に、愼密に警戒さるるを必要とする。されば私は全然理論を無視せよと云ふのではない。只理論に聽けとの提説を重んずるのあまり、不當に之を跋扈さしてはいけないと主張するのである。理論のきごちなき徹底は、本來政治には何よりの禁物なることを知つて貰ひたいと思ふのである。

× × × × ×

第一に政治は政治學ではない。政治學に於ける講究の對象は、抽象的模型としての政治現象である。之に反して政治は現實の政治社會を相手とする。學問の研究に依て得たる原理に從へば、酸素と水素との化合で立派に水が出來る。併し酸素と水素との外他の何物も含まないと云ふものは此世の中に絶對にない。眠れぬ人間にはこれ／＼の藥をやれと醫學が教へる。併し實在の人間は、抽象的の學問の豫定せる如き見本通りの人間ではなく、或は腦に故障があつたり或は胸に疾患を有つたりしてゐるから、之に應じて盛る藥にも多大の斟酌がいる。是れ抽象的學理の攻明の外に、臨床的經驗を積み、即ち學理の指示する治療法以外に、經驗に基く特殊の練達を處方箋の作成に加へらるるを要する所以である。學理の十分なる攻究に加ふるに、當の相手の閲歷に應じ相當の顧慮を加ふるのが、我々現實主義者の立場である。急進主義の或る者は、往々にして現實の拘泥をわるいと排斥する。一々病人を診察せず、肺病と聞けば甲にも乙にも書物に書いた通りの藥を盛る。之で癒らなければ藥がわるいのではない軀の方がわるいのだと强辯する。軀の方にも責任があるには相違ないが、之は今更如何とも仕方がないのである。仕方のないものを仕方がないと許して呉れぬ所に、偏

[illegible]にモスカウ党の[illegible]
度ではないか。

我國今日の政界に於て「理論に拘泥するな」と敎ふるを必要とするか、又は「もつと理論を攻究してかゝれ」と迫るを急務とするかといへば、無論後者の方だと謂はなければならぬ。何となれば、今日の爲政階級は、大部分私利私欲に動き、然らざるも行き當りばツたりの臨機應變主義者を以て滿たされて居るからである。譬はばたゞの水を賣つて患者の懐を絞るか、又は胃病患者に風邪の藥を平氣でやる樣な族だ。モ少し理論を識つて貰つたら、分量をあやまる位は致方なしとして、せめて風を引いたものにアスピリンをやる位の智慧はあつたらうと思ふ。この點に於て、今日の政治家の頭は餘りにひどい。勞働組合法案などの討議に觀ても、そのひどさ加減はわかるではないか。丸で政治學のイロハが解つて居ないと云ふ有樣だ。故に理論攻明の必要を叫ぶは、今日の我國に於て極めて適切であるは論を待たぬのである。從て私の理論拘泥の弊を說くのは、決して右の必要を打ち消すものでないことも亦勿論である。

つまり私の言分としては、警告を發する相手が違ふのだ。現在の爲政階級に對つては理論の攻明にはげめと云ふ。理論に拘泥するなと云ふのは、政治理論の攻明に陶醉してその實際的適用の工夫を忘れた人達に對つての話である。政治學は何處までも抽象的の推理である。政治そのものに至ては、始めから現實に立脚しての工夫なることを忘れてはならない。現實主義に反對する政治と云ふものは、本質的に在り得ない。之を在り得ると思ふのは、飛んでもない錯覺である。

× × × × ×

第二に政治に在ては理論の當否よりも主として効果の得失が顧慮せらるる。例へば敎育なら、或る原理を敎へて生徒が覺へなければ生徒がわるいとされる。よく覺へるものと然らざるものとあれば、其間に甲乙の區別を附けることもあ

る。勿論よく覺へさせなかつたといふに就て、教へ方の良否も問題とならぬではないが、主として論議の目標になるのは、教へた原理の正しかりしや否やに在る。教育の效果の如何なりしかは寧ろ生徒の素質に依るとされ、豫期の如くならざるものあるも致方なしと許される。所が醫療になるとさうは往かぬ。根本の學理も問題とならぬではないが、專ら醫者の手腕に期待さるるのは、患者の體質を按じて處方箋を巧妙に斟酌する所にある。專ら效果の擧るを可とし、擧らざるは悉く失敗として何等の辯解も認めない。政治も亦實に之に類する所があるのである。

理論上の歸結は抽象的にはきまつたとする（之も實はきまらぬことは多いのだが）。之を如何に實地に行うか。是れ國に依て一樣なるを得ざるところ、而して國家社會の複雜なる又その變化進展の烈しきに至ては、到底個々の人間の比ではない。醫療に於ても、甲に於ける經驗が必しもその儘乙に適用し得るとは限らないが、一方の經驗を他方に應用し得べき範圍と度合とは政治に於て殊に薄い。加之政治に在ては、醫療に於けると同じく、必ず效果を擧げなければ承知されぬのだ。效果の擧らない眞理は、天上の星と同じく、それ自身に多分の價値の爭ひ難きものあるにしても、實地の立場からは一文の價値もないとされる。從てそは弊履の如くにすてられて、直に他の方策に代られなければならない。而もその新しい方策たるや、固より前よりも良い結果を生むとも限らないのだが、古い方策を以て更に效果の擧らざる限り、速に他の方法を探し用ふるは絕對に必要である。是れ政治に在て同一の方策に拘泥するが何よりの禁物とされる所以である。朝令暮改も時として大に必要ありとせらるるもこの爲めに外ならない。

不幸にして急進主義には、動もすればこの見地を見誤るものが多い。

×　×　×　×

第三に政治に在ては時として――少くも客觀的には――盲目的な行動を取るべく餘儀なくさるる場合がある。また醫を醫者に取る。突然急病人が擔ぎ込まれて治療を求められたとしよう。いろ〳〵診斷して見ても病質が分らない。分ら

ないからとて放任しては置けぬ。乃ち大體の見當に依り、俗諺に云へば盲滅法に、いゝ加減の處置を施こして徐ろにその經過を見ることにする。之も診斷の一過程といへぬこともないが、見極めのつかぬうちに處置その當を得ずして死んで了はぬとも限らない。然らざるも、最初の處置が確信に基いたものでないのだから、彼れは常に別個の處置に移らんことの用意を怠つてはならない。政治に在ては固より斯の如く簡單なることを得ぬは勿論だ。一旦の施設は直に種々の固定的關係を社會に殘すから、間違つたと知ても直に之を改めるに種々の困難を伴ふを常とする。それでも一旦の試みを永遠に墨守すべきに非るの理は同一である。施設の當局者が責任上不當に之を拘泥するの事實はある。併し政治運用の大局に於て、特に此種の拘泥の許す可らざるは論を待たない所である。

× × × ×

之れ丈けの事を云つたら、政治の本質上現實的ならざる可らざる所以は極めて明白であらう。現在の爲政階級が餘りに理論の攻究に怠慢なるを責むるの意味に於て、現實主義を難ずるのはまだいゝとする。私共が現實主義的立場を强調するを觀て、階級運動の墮落などと罵るのは、一體政治を何と心得て居るのか、甚だ了解に苦む次第である。

代議制度

以上述ぶる所に依ても明なるが如く、實際政治に在ては實は適確なる眞理といふものはないのである。否、ないのではない、容易に見出せぬのである。而も見出せないからとて無爲にして放任して置くわけには往かず、斯うもあらうかあゝもあらうかと、兎に角何等かの施設を試行せなければならぬ。それでも、飽くまで最善の途を探つて跡から訂正を要せぬ樣にせよといふのは、政治家の心掛として誠に傾聽に値するが、之を政界運營の客觀的規準として說くのは、畢竟一つの屁理屈に過ぎぬ。故に實際政界に通用する議論として何が一番大切かといへば、最善の政策そのものを探究施

行することではなくして、寧ろ常に最善の政策が行はれ得る樣の途をつけておくことでなければならぬ。換言すれば、少しでもヨリ良き方策が見出されたら、何時でもこだわりなく之に遷り得る樣の仕組を立つることが肝要なのである。個人の生活に在ても、正しからずと識て行動するは固よりわるいが、之が正しいと固執するは不正の始まりで常に正しからんとする態度こそ、一番正しい生活だとされるではないか。政治に在ても亦然り。絶對善の客觀的に定め難き限り之が正しいと自信して特定の政策を固執する程、危險なことはない。當事者が主觀的にその確信に動くはいゝ。客觀的にはもツと良いものが現れたら何時でも之に取つて代らしむる樣にしなくては、社會の進歩は停滯する。一時の方策には間違もあらうが、斯くして始めて我々は、全體の進歩の上に着々として最も良きものの發現するを期待することが出來るのだと考へる。

然らば如何にすればさうしたことが可能であるか。是に於て私は言ひ古したことではあるが少しく代議制度の効能に付て述べなくてはならぬ。

× × × × ×

代議制度は元來人間の團體生活に於てヨリ良き價値——全體としては最高の價値——の發現を可能ならしむる仕組みたのである。而して今日の代議制度は、次の細目の條件の上に、この目的を達するとせられてゐる。

(一) 團體生活に於ける價値の創成は、間接には大衆の與る所だけれども、直接には先覺の士の掌る所である。

(二) 先覺の士が其の奉ずる所を最善と信ずるは妨げなきも、客觀的に——政治的に——そが果して最善のものなりや否やは、その當人に決定せしめてはいけない。この點に於て專制政治は、制度としては斷じて推奬さるべきものではない。事實上局に當るものの最良の才能なりや否やは始めから問題ではない。

(三) 先覺の士の確信は事實上一に歸せざるを常とする。その孰れを採用するかは彼等自身をして決定せしめず、彼等

の施設に依て直接の影響を受くる民衆をして決せしめる。若し間接の點に就ては之を決せしむるは當事者自身に決せしむるの外はないからである。

（四）決を民衆の判斷に取るは必しもその判斷に誤りなしとするからではない。之に由て先覺の士を刺戟し、更にヨリ良き立場を發見し、又更に向上するを促すからである。聰明な民衆の正直な告白ほど、先覺者の叡智をみがくものはない。

(5)先覺者の叡智をみがくには思想言論の自由を要件とする。自由に對する些でもの拘束は、必ず精神的活動の茶際を來さずしては熄まない。

(6)民衆の判斷を最高價値の社會的發現に貢獻せしむる爲には、彼れに自らの聰明をひらく機會を潤澤ならしめ、又その良心の自由を懇切に保護してやらねばならぬ。廣き意味に於ての教育を振興することが必要とせられ、又色々の形を以てする民衆の誘惑が凡ゆる方法を以て嚴しく禁壓せられるを急要とする所以である。この點に於て、各種の制度に對し教育的乃至道義的見地より加へらるる批判は、最も尊重せられねばならぬものである。無產階級の政治運動に在ても、目前の功利的必要を楯として道義的拘束を無視するが如きは、眞の政治の發達に忠實なるものの態度ではない。

(7)斯れ程までに民衆の判斷を重んずるは、一つには近代民主主義的人生觀に根柢を有つものたることも心得ておく必要がある。民主主義とは、單純に民衆を主位に置くといふ思想的立場を指すのではない。凡そ人間は、適當な教養の機會さへ提供さるれば無限に其の能力を發達するものであり、又之に不當の拘束を加へざれば結局必ず正しき判斷に到達するものである。斯かる人生觀に立脚し、環境・閱歷・傳統その他の經驗的諸影響に拘らず、或は少くともその影響を或る程度まで征服して、人間は人間としての本來の面目をぐん〳〵發揮して止まないものだと信ずるのが民主主義の根本基調である。斯く云ふ態度で民衆を觀る。茲に結局彼れの判斷に賴んで安んずるを得る根據がある。斯うした人生觀を

取らない限り、近代のデモクラシーは決して成り立ち得るものではない。從て唯物的人生觀からは、綜合的民衆本位思想は到底出て來る筈がないのである。偏狹なる階級觀念が時としてニーチェ一流の超人主義と相隣りし、階級鬪爭實行が動もすれば反動的ファシチシズムに墮することあるは、毫も怪しむに足らぬのである。

×　×　×　×　×

所が世上には代議制度を非難するの聲が相當に強い。代議制度では民衆の要望は完全に現れないと云ふのである。甚しきは代議制度は專制的寡人政治から自由な大衆政治に遷る一時の經過的政治形式だなどと說くものもある。現在の代議制度が見事な成功を收めて居ないことは事實だ。彼等はその原因を代議といふ形式に歸して居る。代議は本人の意思その儘の執行ではない、人格的信賴に基いて他の人の自由の裁量に許すものだからである。そこで之を廢して一擧に民衆自身の裁量といふことにしようと主張するのだ。けれども一體大衆自身の裁量と云ふことは可能なものかどうか。大衆自身はもと自分の問題を如何に處置していゝかを知らない。適當な處置をするには專門家にたのまなければならぬ。斯くして可能なる唯一の制度はやはり代議制なのである。代議制度は成る程專制的寡人政治の廢墟の上に發達したものだ。而して之は凡ゆる團體生活に通ずる唯一の政治形式であつて、之が廢止は取りも直さず民衆政治そのものの廢止である。之に代つて大衆政治なんど云ふものがあると思ふのは飛んでもない間違だ。現在の代議制度に不滿を感ずると云ふのはよく分る。併し之を推して制度そのものの維持す可らざるを說くのは、原因を取り違へたものでなくて何だ。

私共の考では、所謂代議制度の効果の舉らないのは、そが正しく行はれて居ないからだと認める。米も料理法がわるければ腹を害ふ。腹を害ふのは米がわるいのではない。從つて適當な解決は、米を廢することでなくて料理法の改良でなくてはならぬ。之と同じく代議制度に在ても、今日多くの弊害を示して居る根本の禍因は、一番大事な民衆の自由判斷が一向利いてゐない爲めである。政治家の施設を民衆が虛心に批判し、自由にその感ずる所を述べてこそ、立派な

政治に行はれるのに、實質は全く之に反し、政治家は一時人民の歓心を求めし、民衆をして之を望み込んだと思はせることになつて居るではないか。昔の專制政治家は、自分の言動に對し何人にも文句を云はせなかつた。今の政治家は、豫め操縦籠絡せる民衆を巧に動かして、自分の立場に有利的の表示を強要する。外觀上民衆と共に事を圖るの形式を取つて、その實一己の私意を以て天下の事を擅行するに外ならざるは、何等專制政治家と異る所はない。故に今日の代議制は、斯く惡用せらるることに依て、文明を假面とする一種の變裝的專制政治に外ならぬものとなつた。此處に今日の政弊の根本禍因がある。然らば之を匡救するの途は、代議制を廢することに非ず、寧ろ之をその本來の姿に恢復することに在るは、多言を要せずして明である。

× × × ×

斯く云へば分り切つた話の樣だが、世上には不思議にこの分り切つた話を呑み込めぬものが多いのだから驚く。つまり現今代議制度の禍因をば、如實にはツきりと理解しないのである。而して斯うした認識不足に基く新しい弊害を、私は特に著しく次の二つの方面に於て之を見る。一は例の議會否認の思想であつて、他は政黨運動在來の形式の無意識的模倣である。

議會否認論にもいろ／＼の種類がある。今之を詳々しく說くの必要はあるまい。その當否の論も讀者には最早說明を要せぬだらう。たゞ玆には議會の絕對的否認又はその或程度の否認の結果はどうなるものかに付て、一二讀者の注意を乞うて置きたい。

（一）議會否認の思想を前提して成立し得べき一つの政治形式は、云ふまでもなく專制的寡人政治である。時として哲人政治だの善政主義だのと呼ばるることもあるが、要するに專制政治たることに變りはない。議會政治のまごついた結果として、西洋の一部に斯うした思想の跋扈すると云ふ事實はある。之を見聞した觀光客が、歸朝土產としてこの反動

政治に不當の稱讃を捧げ、殊に戰後經營の難局に當らせるには之に限るなどと說く者昨今我國にも少くない。一時的現象としてこの思想にも多少の存在理由あるは私も認めぬでないが、制度としてもと重大の缺陷を有し民智開明の新時代と結局相伴ふものに非ることは、最近伊太利の政情に徵しても明白であらう。ムツソリニの偉大を以てして猶且遂に政權維持の爲に努力を惜まねばならぬ所に、大に吾人を反省せしむるものがある。如何なる經綸も權力を握らなくては行へぬ。併し一旦權力を握ると、之を放すまいとしてその持續に腐心するの餘り、動もすれば經綸の正しき實現を知らず知らず犧牲にする樣になる。蓋し專制主義の下に在て、政權爭奪は斷じて道德的な方法では行はれぬからである。而して政權爭奪を道德的に行はれしめ、その競爭に勝つた者を其儘安心して正しい者と認め得る境地は、ひとり始めて代議制度に由てその實現を期待されるのである。

(二) 議會否認の思想の下に成り立ち得べきモ一つの政治形式は所謂大衆政治である。代議士は信ずるに足らぬ、大衆自ら政治せよといふのだ。言葉は大衆に取て極めて蠱惑的である。併し大衆自ら政治すると云ふことの事實不可能なるは前屢々說いた通りであつて、事の實質に於ては、矢張り二三の先達が一切を切り盛りするに外ならぬ。レーニンの政治が即ち明に之を語つて居るではないか。代議士は曰ふ、我々は大衆に代つてその意思を代辯しその利益を伸張すると。大衆政治主義者は曰ふ、我々は大衆の單なる奴僕に過ぎぬと。言葉を正直に取れば、その表はす所の地位に固より霄壤の差があるといへる。併し我は國家の公僕なりと云つたフレデリック二世と、朕は國家なりと云つたルイ十四世との間に、專制君主たるの實質に於て果して何の異る所があつたらうか。名に依て實を誤り見てはいけない。民衆の聰明を掩塞しその良心を欺瞞しその自由を買收する點に於て、今日の大衆政治主義者の爲す所は在來の政治家のやり口と大した差異はないと考へる。固より斯は彼等の意識してやつて居ることでないかも知れぬが、一旦代議政治を否認して掛つた以上、當然の歸結としてこの窮地に陷るのは避け難いのである。過誤の根本は現代政界の弊根に關する正しき認識

の根元に在る。彼等が眞に民衆政黨の趣旨に忠實ならんとする以上、速に其人の偏見を改し、以て代議制度に於て之に努力する所なくてはならない。

政黨在來の運動形式の無意識的模倣

前述の如く一部の論者は今日の議會政治の弊を語つてその原因を有産階級の政權壟斷に歸する。併し政權の分配と議會政治とは本來相對立する觀念ではない。政權分配の有限なるは固によろしくない。之も政弊を生む一原因には相違ない。從て無産階級をして支配權を掌握せしめんとの努力は、それ自身正しい運動と謂はねばならぬ。而して無産階級はこの新に獲たる支配權をどう運用すべきであるか。この點の研究になつて始めて代議制の當否が問題になる。權利の分配は謂はば地主から不當に壟斷されて居つた米を百姓の手に返還すると云つた様の問題だ。さすれば議會政治の當否は正に米の料理法の問題に當る。而して料理法の得失は地主と小作人とに依て著しくその效果を異にするものではない。地主が議會主義で料理して居つたからとて、小作人が之に賴つていけないと云ふ理窟はなからう。議會政治の得失は、權利分配の廣狹如何に拘らず、凡そ人類の團體生活に在て如何にするが最も正しき政治價値の發現に便なりやの點から主として講究されねばならぬのである。一方が例へば洋服にするか和服にするかの問題であるとすれば、他は毛織物にするか木綿物にするかの問題だ。兩者は丸でカテゴリーが違ふ。漫然と之を混同してはいけない。

所が之を混同して居るのだから話がもつれる。論者は無産階級の支配權さへ確立すれば能事おはるとする。代議政治の迷謬から醒めて大衆直接の政治を確立せよと叫ぶ。而してこの目的のために彼等の執る所の方法は、正に在來政治家のやり口そツくりではないか。さらでだに人は古い習慣によりたがるものだ。之が惡いと識つても、新しき形式に慣れるまでには相當の時間が掛る。其間は捨つべき舊習につきまとわれて暫くは無用の苦みを繰り返すが常だ。それ丈けに

惡いときまつたものには特に鋭敏な警戒を必要とするわけである。然るに始めからそれを是認して仕事を仕上げようと云ふのだから堪らない。無產階級の爲にはかるもの、速にこの點に眼をひらき、一刻も早くその妄を覺らずしては、遂に回復し難きの弊害を將來にのこすことなきや。私は心中ひそかに之を恐れる。

私は屢々代議制度に在ては主客の地位を正すことが何よりも大事だと云つた。監督すべき地位に在る大衆が逆に操縱されるといふが、有らゆる政弊の根本的原因だと云つた。どの途今日の政治に在て勢力の基礎は民衆に在る。而して才識德望なきものは民衆の信望を購ひ得ぬ。そこで才識德望を積むこと即ち勢力を得る所以になる。所が在來の政治家は、この順當なる進行を故らに紛更し、腐敗手段に依て民衆の良心を縛し、之に依て不義の勢力を張つて來た。此處から一切の禍惡が生れたのだ。故に苟くも政治を本來の光明に導き救はんとする者は、先づ此事から改めて掛らねばならぬ筈である。所が新興階級を背景とし政界の廓清を標榜して起つた者の多數は、その勢力確立の方法として殆んど例外なく皆舊式政治家のやり方を踏襲して居るではないか。尤も無產階級が支配權を握りさへすればいゝとする唯物論的革命主義者は、始めから、執る所の手段方法の如き、問題でないと云ふのだらう。併し其外識らずして或はこの過誤を犯して居る者もないではあるまいと思はれる。何れにしても私は、現代政弊に關する世上の理解の餘りに淺薄なるものあるに一驚を喫して居る次第である。

何を以て斯く云ふや。

第一に私は、無產政黨の內部に於ても大衆の支持を得る唯一の根據を才識德望にをくと云ふ思想の一般に頗る薄弱なるの事實に視て之を云ふ。斯うした方面に由來民衆の訓練が乏しく、在來の選擧が亦餘りに甚しき惡例を示して民間の良心を麻痺しても居るので、才識德望一點張りで進むのに多少の危惧を感ぜしむるは已むを得ないともいへる。が、さりとて些でも在來のやり方を取り入れるのは、それ自身既に大なる罪惡なることを覺らないとあつては、何處に新興階

級の歡迎すべき所以であるか。否かに見く者に生れば、或る方面では多くの[illegible]はむしろ[illegible]へて居るものもあるとか。然らざるも、彼等は今やみな既成政黨の顰みに倣うて一生懸命地盤の開拓に腐心して居る。既成政黨は云ふまでもなく金を以て地盤を開拓したものだ。無產政黨は今や專ら肉體に依て地盤を作らんとして居る。武器は異れども、民衆の聰明を蔽ひその盲目的追隨を强ふる點に至ては彼此全然同一である。

私は或る有力なる新聞が社會民衆黨を評して地盤なき空名の政黨に終るなきかと笑つたのを見て驚いたことがある。社會民衆黨が地盤開拓の點に於て私の與みする所たり得るや否やは姑く別問題として、地盤に乏しきの故を以て殊しき譴責を受くべしとは私の全く意想外とする所であつた。若し夫れ一般諸新聞が、各無產政黨の出現する每に所屬黨員何萬と算へて地盤の大小を重視するが如き態度を示し、各無產黨の幹部なるべき人々亦大に之を氣にしてその大小に依り喜憂を分つが如きものあるは、少くとも私の大に奇怪に感ずる所である。當事者としては成る程地盤の大小は問題であらう。局外の批評家の立場よりしては、地盤の擴張は常に警戒の對象である。善い事をしようが惡い事をしようが、我黨の行動は一切無條件に之を後援支持するといふ連中が眞にさう澤山あつては、立派な政治は行はれない。それは、暫くどうでもいゝとして、無產政黨それ自身が今より早く既成政黨をまね込んで斯んな方面に多分の力瘤を入れるのは、何と云つても賞めた話ではない。否寧ろ無產階級の政治運動の前途の爲に大に之を憂ふる理由がある。而してこの憂ふべき事態は、今日既に著しくその萌芽を吹き出して居るのではないか。

之等の點に就き私は實は餘り巨細の事に說き亘るを好まない、又之を云ふにも忍びない。若し彼等が黨勢擴張の方法に付いてその新しい使命に自覺し、この點に於て既成政黨とは全く別個の境地に在るものなるを識つて居たら、左右兩黨の分離も或はなくて濟んだかも知れぬ。尤も左翼派の理論は始めから手段方法を擇ばぬのだから致方がないとして、少くとも右翼の分野に於ける確執又は右翼と中間派との分立の如きは十分に避け得たらうと考へる。表面の言ひ分は何で

あれ、右の如き分離確執は、地盤の爭奪といふことを念頭に置かずしては到底考へられぬ所である。さればにや彼等は相分るる度毎に必ず聲明書なるものを發しては大衆に訴へる。而してその內容は、多くの場合に於て、醜陋なる惡罵に非れば執拗なる宣傳ではないか。事實を闡明して民衆の良心に訴へその自由なる判斷を待つて黑白を天下の公壇に爭ふといふ態度は爪の垢ほどもない。試みに彼等の好んで慣用する二三の用語を見よ。曰く、全無產大衆の要望を裏切る反逆行爲。曰く、社會的公正を振り翳して無產大衆を欺瞞する。曰く、ブルジョア政黨と結托し或は之に資金を仰ぎ巧に無產大衆を彼等に賣り付けんとする。即ち彼等は一から十まで相手方を惡罵することの上に自家の勢容を張り民衆の盲目的來投を誘はんとするのである。是れ豈既成政黨が從來幾多の泥試合に於て遺憾なくその醜狀をさらせる戰術ではないか。敢て問ふ、彼等は民衆の聰明を誘惑することを意とせないのか。抑も亦斯んな方法で誘ひ得るものと始めから民衆を侮弄して掛るのか。惟ふに民衆は既成政黨の泥合戰には全く以て愛想をつかして居る。新興階級の——又は新興階級の爲の——政治運動に對しては、その反動として實は今なほ過分の好意と同情とを寄せて居る。それ丈け多少の過失も大目に見て居る樣ではあるが、早く反省する所なくばいつまで斯の寬大を恃めるか分つたものではない。もツと自信のある堂々たる態度に出ては來れぬものか、切に諸君の反省を冀ふ。

單一政黨主義の僻見

今日の無產政黨が極端に汚い言葉を以てお互を罵り合つて居るのは、深くその憎むべき所以を覺らずして在來政黨のやり口を漫然まねてゐる爲めだとも說明されるが、モ一つの原因は單一無產政黨といふ間違つた僻見に迷はされて居るからだとも考へられる。一つでなければならぬと固守する立場が如何に全體の協同を妨げるものかは、世界の歷史が之を證明すべき幾多の例を示してゐる。今更之を說明するのが野暮のいたりと云ひたい位である。

眞理は唯一つであるべきだ、唯一つであるべきだ、また總てその唯一の眞理に歸依せねばならないと云ふ信念に基きたるこそ政治の眞理と唱導するものは、古來一にして足らぬが、そんなのが國家に於ても社會にもその間で兎角爭ひが起る。故に客觀的に云へば、眞理は同時に二つも三つもあるのだと認めてゐい。而して之等を互々安々と爭はしめ、其間に切磋琢磨の功を積ましむることだ、社會的に最も必要だ。當の本人が自分の主張を最善の眞理と自信するに不思議はないが、之に附與するに社會的公認を以てするは、徹頭徹尾あやまりである。この點に於てかの單一無産政黨の主張は偏狹なる忠君愛國主義と全然其の體裁を同うするものと云ふことが出來る。

これを相爭ふ當の本人の問題としても、その確信に據つて主張する所の立場に關し、一面常に懷疑的態度を以て愼重に反省を重ぬるは大に望ましいことである。眞理はもと一朝にしてその全姿を顯はさぬ。人の頭も漸を以て進歩するのが常理ではないか。始めから完全を期するは間違である。是れ一方に於て確信に忠實なるを要すると共に、他方に於てまた常に他の言說に傾聽するを怠る可からざる所以である。故に眞に事理の明白なる闡明を翼ふ者は、恒に謙遜と寛容と公平の德を喪ふてはならない。自信の乏しく而も自己吹聽に急なる者ほど、他に異を樹つるものあるを忍び得ぬものだ。頑强に自己の立場を主張することその事が、既に自家の弱點の明白なる表明なることを識らねばならぬ。

眞の協同は相手方の立場を尊重する所から起る。互に他の個性を尊重し、而も其間自ら有機的統一の立派に立つのが、近代社會生活の特徴である。「離れて合せよ」とは英國政界に於ける有名なる合言葉だと聞く。この呼吸を解せずしてはステーツマンシップを語るの資格はない。無産階級をして對有産階級の戰鬪に眞の統一ある共同線を張らせようとなら、何よりも先づ第一にその單一政黨主義の鬼面を放擲することが必要だと思ふ。

頑强に單一主義を强調して常に世界的協動を破つた最も著しい例に、私は加特力教會を擧げることが出來る。かれは人間の魂をあづかり得る本當の神の教會は自分のとこだけだと頑張る。即ちチヤーチの名に値するものは自分の外には

ないと云ふ。そこで加特力教の盛な國に在ては、チャーチといへば始めから天主教會のことなので、他はみなテンプルと呼ぶことになつて居る。故に例へば佛蘭西語で新教々會のことを譯すときはタンプルの字を使はなくてはならぬ。エグリーズといへば當然天主教會の意味になるのである。斯うした立場は自ら天主教會をして、人間の魂の救濟に關する限り、あらゆる世界的共同事業に關與せしめない。不純なる團體と提携するは、正に神の冒瀆に當るからである。恰かも勞働農民黨が、日本農民黨や社會民衆黨の排擊を綱領の一に揭げて、子供らしき潔癖を誇ると一斑である。但し流石に加特力教會には、ステーツマンシップに惠まれた偉人も尠くはない。表面の傳統を露骨に傷けることはせぬが、また頑固に之を振り廻して、自らの愚をさらし他の迷惑を顧みぬ樣な馬鹿はせぬ。それでも斯うした單一主義の要求は、由來普ねく加特力教會の痼疾と認められ、教會自身またひそかに之に煩悶を感じても居るとやら。之に較べると我國單一政黨主義者の迷妄には、一寸度し難きもののあるを思はしめぬでない。

× × × × ×

我國の論壇に單一無產政黨主義の跋扈して居るに就ては、その一つの原因として、階級鬪爭と階級內部の鬪爭との關係に付ての理論的認識を誤つて居ることをも擧げておく必要がある。斯の認識のあやまりには二つの種類があるやうだ。一つは無產階級が眞に階級的に眼さむれば、その內部には鬪爭の起るべき所緣がなくなる、內部鬪爭の存在は有產階級特有の現象だとするもので、他は無產階級にも內部に鬪爭はあるにはあるが、そは初期の運動に限り必要なので、やがては消滅に歸すべきものと觀るものである。兩つ乍ら無產階級運動の現實に徹した認識でないことは勿論である。

(一)無產者の階級的覺醒に於ては內部鬪爭の當然に起り得べき理由がないと云ふ議論の中にも、それの無いのが必然的だとする立場と、有つてもそんなことを考へて居れぬとする立場と、二つの種別があり得ると思ふ。內部鬪爭の標的を概して幻像に過ぎぬとするは前者に屬し、有產階級の熾烈な意識的攻勢に對し、無產階級は凡ゆる犧牲を拂つて是非と

し統一戰線に參加せねばならぬと謂ふのは後者に屬する。共に事實を無視せるの謬を犯したことは同一するものであつて、さな
として、さて選の謬見にも塊する以上、往々に單一結成主義の主張に雷同するは、事態むに足らずと謂ふべきである。

（二）若し夫れ所謂内部闘爭の原因を階級運動の初期に限るとするの見解に至ては、内部闘爭の何たるやに一顧をも與へざる極めて不當なる見解である。階級闘爭を例へば男女の別の如きものとすれば、内部闘爭は丁度老幼の別の如きものに當る。假りに年の老幼に依て或る時代に思想の分岐があつたとすれば、そは男女の別に依て異る所あるべき道理はない。性の異るに從て程度に强弱の差を示すことはあらう。が、男に在て烈しく爭はれたものが、女に於ては偕々その自覺の初めに限つて相爭はれると觀ねばならぬ道理はない。寧ろ階級的自覺の初期に於て相爭はず、階級的對立關係の稍々鮮明となるに及んで、漸く内部闘爭が强まるものと觀るべきではあるまいか。日本も開國の當初は、盲目的に擧國一致して外國の壓迫に對抗せんとした。内部の整ひ自信のついて漸く内爭が始まつて來る。内爭に浮身をやつすは、必しも外勢壓迫の弱まつた證據ではなく、又之に注意することの薄くなつた證據でもない。わが無產階級運動に在ても、昨今漸く階級内部の理論闘爭が烈しくなつて行くのは、私の考では、寧ろ進化の當然の一過程だと認めて居る。只その爭ひ方に感服の出來ないものが多々あるけれども、斯うした爭ひの全くなかつたとしたら、私は却つて無產階級運動の前途に大なる失望を感じたであらう。この點に於て私は、勞働農民黨の人々が、新しい政黨の起る每に、之を目して單一政黨主義に對する悄むべき挑戰となし、統一戰線の攪亂者とか階級的裏切者とかの惡名を附し、躍起となつてその排擊に狂奔するのを見て、眞に小兒病者の名に背かざることを覺へさせられるのである。

單一政黨主義今日の流行が、右述ぶるが如き理論的認識の謬妄にのみ原因してゐぬことは言を待たぬ。（一）最も多く露西亞の「共同戰線」に影響されたものたるは人の多く知る所。之に次いでは（二）唯物的人生觀あり、（三）革命的闘爭說がある。而して之を更に（四）政治の現實的性質に關する無理解が助けて居ることは疑ない。斯く原因は一に

して足らぬが、その結果に至ては頗る簡單だ。彼等は識らずして遂に彼等の最も嫌ふ所の侵略的軍國主義、敎令主上主義、盲目的統制主義の戰術を襲用して居るのである。この點を反省さする爲めにも、單一政黨主義の放擲は此際特に必要だと考へる。

× × × × ×

私が單一政黨主義の絕對的否認論者でないことは、之れまで發表した種々の論文に依ても明かな筈だ。或る意味に於て私は寧ろ熱心なる共同戰線論者なのである。實は共同戰線の本當の實現を熱求するが故に、私は所謂單一政黨主義の放棄を說くものである。その理由としては簡單に次の數點を擧げておく。

（一）階級內部の鬪爭には、皆に由て來る所の久しきものあるのみならず、之を適當に爭はしむるを必要とする理由もある。爭ふべきものを强て抑壓するは個性の滅却である。個性の滅却を基礎とする盲目的統一からは、決して本當の進步は出て來ない。

（二）階級鬪爭に於て、ブルジョア階級の陣營に、一部論者の說くが如き、戰陣の統一と鬪志の熾烈とを見るやは問題だが、從來無產階級のあまりに虐げられ來りしの事實に鑑み、此際その解放の爲に大に結束奮鬪するの要あるは論を待たない。無用の內部鬪爭に精力を浪費するは固より愚の骨頂である。

（三）內部鬪爭の必要と階級鬪爭の必要とその孰れを急務とするかといへば無論後者である。併し之に急ぐのあまり前者を全然沒却して顧みぬのは、亦結局に於てそれ自身の目的に裏切る自殺的行爲である。同じく大阪に行かうと云ふものは、同じく東京驛から同じ汽車に乘る。同じ汽車に乘るからとて財布まで一緒にせねばならぬ必要はない。況んや大阪に着いてから先きの仕事は彼と我と必しも同一に非るをや。

（四）單一政黨主義者は、無產階級の爲に圖るのなら必ず俺の處へ來べき筈だといふ。大阪へ行くのなら財布まで出

せよといふに等しい。而も異を唱ふる者を憎むことは權力教育よりも甚しい。吾人は之を毀る者が一人さへあると、こ
す全體の和合協同はみだされる。この意味に於て單一政黨主義に因つて無産階級共同戰線の形成たらざる所以である。

（五）結婚しなくとも男女は立派に交際して行ける。強て同じ家に住まふとすると、兎角お互が束縛と制約との仲がよくない。機械的強制統轄は、專制の弊を伴ふか又は混亂排擠の因たるを常とする。故に眞に確實なる統制を成ふものは、所謂共同戰線の合理的構成を忘れてはならぬのである。

（六）共同戰線の合理的構成は、その共同の基礎を單に階級鬪爭上の必要におくものでなくてはならぬ。無産階級の間に於ける諸々の團體に、合して一となるの本質的必然性ありと觀るのは、唯物的人生觀に立脚する主張に過ぎぬ。この立場を採らざる限り、之等の集團は寧ろそれ〴〵の個性に立脚し、各々その賦與せられたる獨自の途を步むべしとするが當然だ（如何樣に分立するものかはまた別の機會に說かう）。而して之が今日共同の戰線に立つの運命にありとせば、そは唯階級鬪爭の遂行に伴ふ現實の必要に促された結果でなくてはならぬ。所謂現實の必要の何であるかは別の機會の說明に讓るが、茲には只その重なるものに共同の政策があることを一言しておく。

（七）今日の無産政黨がその政策中澤山の共同條目を有する事は言ふを待たぬ。而してその最も普通なるもの程最も熱心に要求せらるるものたるも亦明なた。從て之等の問題につき緊密なる共同戰線の張り難からざるは申すまでもない。之が即ち共同戰線の合理的構成の基礎である。

（八）階級鬪爭の指導に當る實際家の立場としては、常に味方の足並の揃はぬを憂慮するも尤もである。一番安全な方法は、大衆をば必ず自分の言ふことを聽かねばならぬ樣に縛り付けておくことだ。既成政黨はこの爲めに金で政客の良心を買收したものだ。無産階級の政治家は單一無産政黨主義の好餌を以て大衆の盲目的追隨を强ゐんとする。當面の目的を達するに餘りに有効なだけ、斯うしたやり方は無産大衆の眞の開發の爲めに斷乎として排斥せられなければなら

ない。

政綱政策の列擧

各無産政黨を促して眞に階級的共同戰線を張らしむるものは、共通政策の遂行の外にないことは既に述べた。よく人は無産階級の黨同伐異も今のうちだ、やがて議會に代議士を送つたら否應なしに協同の歩調を取るだらうと云ふのも之れが爲めだ。私などは疾くから此事を豫想し、些でも後日に於ける平穩の協調を礙げることなからしむる爲に、早きに過ぎて政黨結成に急ぐ勿らんことを忠告して來たのである。蓋し議會の懸引と沒交涉な政黨運動は、現に觀るが如く、動もすれば不急有害な觀念的紛爭に墮し勝ちのものだからである。而して今日始つた此種の觀念的鬪爭が、他日本當の統一結成の必要の起つたとき、多少その平穩なる進行を妨ぐることなきやは、既に聊か懸念せられぬでもない。

斯く論じて來ると、人或は曰はん、今日無産政黨間に爭あるは、正閏の分をたゞすことばかりではない、政策にも實は大に文句があるのだと。斯くして彼等は政策の共通といふことすらが既に容易に見られないと云ふのである。成る程事實それに相違ない。各々揭ぐる所の政策の條目を比較して互に論難を交換して居るからである。併し乍ら斯く云ふ彼等に、實は實際政治に於ける政策といふことの本當の意味が解つて居るだらうか。種々の希望條件を洩れなく列擧したとて、それは我々のいふ所謂政策ではない。

實際政治に於ける政策は、差し當り現に實行せらるるを要する條目を云ふのである。或る事項につき、その完成の爲に施設さるべき一切の條目を並べることは所謂政策ではない。此點に實際政治の政治學と異る最も著しき特色がある。例を以て云ふに、政治はたとへば幼童の教育の如きものである。理論上の立案としては、あれも教へたし之も授けたしと、凡ゆる課目を殘す所なく列擧するもよからう。併し一時に之を授けては幼童の腦力が堪らない。實際家の仕事とし

[illegible]かず。實際政治に在ては、[illegible]も下らぬとさる所から着手するの[illegible]開けたとされる。[illegible]問題の起つたとき、私は伯子男爵議員互選規則の改正に全力を集中すべきを唱導した。世論は多く一時の[illegible]し、[illegible]要求は、取りも直さず不可能の要求である。故に改革の提案を喜ばざるさる政治家は、表に反對の意を隱して故らに一層急進的な改革案を主張し、以て巧に裏面よりその案の失敗をはかつたものもありしとか。之に依て觀ても、實際政治に於ける政策の並べ方は政策理論の攻明とは全然その方針を異にするものなることを解すべきである。

極端なことを云へば、所謂政策はその時々にきまるものである。豫め列擧すべきものではない。投藥は病人次第である。藥鋪の店頭の如く、有らゆる藥品を並べて大衆の眷顧を買はんとするは、實際政治家の爲す所ではない。されば英國の政黨などでは、あまり政綱政策を云はぬと聞く。尤も我國に在ては、積弊纏綿して改革を要するもの多々あり、從て豫め大體の輪廓を國民に示すを便宜とせんも、それにしても今日は識者の間に自ら定論があり、就中最も早く施設せらるるを要するものに付ては、各黨各派を通して略ぼ一致する所ある筈と考へる。色々の綱目を洩れなく列擧し、甲の擧ぐる所偶々乙之を揭げずとて互に惡聲を交換するは、吾人殆んどその何の意に出づるやを知るに苦むのである。

× × × × ×

我國政界當面の最大急務は、實は何を爲すべきかの綱目の列擧に非ずして、久しく爲されざる可からずして而も仍ほ閑却せられ居る急迫の諸問題を如何にして速に實現せしめ得べきかの攻究である。西洋でなら數十年も前に施行されて居るもの、之を政策のイロハと云ふ。今頃眞顔でイロハの稽古でもあるまいと思ふが、不幸にして我國ではこのイロハすらが全然行はれて居ないのである。のみならず、それは近き將來に行はれる見込さへもないではないか。イロハすらが

行はれぬ様な處に、高尙な理論の要求を見事にならべたとて何になる。完全なる綱目の列擧は、良い事は何でもすらすら行はれる樣になつてからの事にしていゝ。且つ學者は賴まなくとも親切に之等を研究して呉れて居る。政治家の仕事としては、何よりも先きにイロハの消化されて滯りなく疏通するの途を開くことが肝要だ。この爲にこそ新興階級は蹶然として起つべきではないか。所謂政界の廓情を叫ぶのは、要するにこの凝滯に大一弊根の伏在を觀たからではないか。この見地からいふと、綱目の列擧などに拘泥するのは老人の骨董いぢり以上の閑事業である。

最近政界の革新を標榜して起つた者に後藤新平子と武藤山治氏とがある。後藤子が徹頭徹尾既成政黨の漫罵に終始し、如何にして當今の政弊を根絶すべきかの具體案を示さないのは、心ある者をして同子の心事を疑はしむるに十分である。政本提携の仲介に勞するの醜態は姑く措くとして、かの所謂政治の倫理化の主張の如きは、先覺政治家の經綸を說くの言として惜い哉半文の價値もない。武藤氏の活動に至ては、具さに本邦財政經濟の實勢を精査し、その攻究の結果に基いて適確なる改革案を提示する所、誠に敬服に値するものがある。說の當否は必しも問ふ所ではない。併し之とても只氏の苦心と努力とに敬服するに止まり、之に依て同氏の政治家としての見識には何等の重きを加ふるものはないと思ふ。何となれば之は一個の研究に過ぎずして未だ私の所謂政策と稱するを得ざるものだからである。思ふに武藤氏も亦單純なる經綸の列擧を以て即ち政治也と混同して居るのではあるまいか。それかあらぬか、彼れは屢々研究の結果を公にしては國民に實行の約束をする。併し國民の切實に欲する所は、手形の濫發ではなくて政界に於ける掩塞の排除である。不幸にして、武藤氏の眼光はこの方面になると至て鈍い。見よ、彼は同志の立候補に際して黃金を以て民心を誘ふを毫も耻ぢないではないか。之れ〳〵の綱目を實行すると約束しさへすれば、手段の如きはどうでもいゝと云ふのか。然らば彼れの政治的見識は、醜惡なる既成政黨より斷じて一歩も擢んずるものではない。この點に於て彼れは亦革命的左翼政黨と全然その過ちを同うするものである。

繼子が繼母の手許でいぢめられ、碌に物も喰べさせられないで心と共に痩せ切つてゐるとする。窶れた繼子に對して只管繼母に反抗させようと焦るのは左翼派の人達である。後藤子はたゞ口で繼母の悪口を罵つ丈け、武藤氏は立派な獨立を見せる點で若干子供の心を誘ふものあるも、果して喰せるかどうか分らない。此間迂遠な樣ではあるが、その繼子本人をして自ら食つて行ける樣にしてやり、繼母に對しても自發的に適當の途を取らせようと云ふのが私共の立場である。

×　×　×　×　×

無產政黨の任務の何處に在るかを願くは虛心平氣に考へて貰ひたい。以上縷述する所、私は之を左翼派の人達を排擊するために云ふのではない、又右翼派の人々を辯護するために書いたのでもない。國民の一人としての僞らざる告白が一人でも眞面目に政界の前途を憂ふる方々の同感を得れば滿足だ。匆卒の際言ひ足らぬ點又言つて適切を失した點も多からう。併し全體の上に私の語らんと欲する心持は相當によく現はれて居る筈と考へる。未だ深く覺らずして犯した過誤は、大方の叱正に依て之を正すに吝なるものではない。

お　斷　り

吉野博士は前記長論文の完成に忙殺され爲めに時評に筆を執らるるの遑がなかつた。本號に限り之を缺くのは讀者と共に本誌の深く遺憾とする所である。



加藤清正の切支丹迫害

肥後八代の殉死者

文學博士　姉崎正治

一　加藤清正と小西行長

天正十七年（1589）秀吉が發したバテレン追放令は、一面は大閤樣の御機嫌が爆發した爲でもあるが、又開教以來四十年、駸々と進んで來たキリシタンの教勢に對する一部分日本人の反感、猜疑、畏怖が集まつて大閤を動かした結果でもある。而して此の對抗、相互反感は、秀吉の重臣の中にも、個人關係の間に生じつゝあつたので、その代表的對抗者は小西行長と加藤清正とであつた。加藤は法華信仰のかたまり、直情徑行の野戰家、而して小西は高山右近の感化で十年以來のキリシタン、經營の智謀に富むだ參謀、又海軍の組織者、而して共に大閤股肱の臣、公事に於ても私情に於ても相容れないのは自然の勢であるに加へて、九州征伐の後、秀吉は肥後を折半して此二人に與へ、清正の居城熊本と行長の居城宇土（ウト）とは互に遠望し得る近さにある。その上に、朝鮮征伐には二人を二道の先鋒として相競はしめた。その後二人の間のいきさつは一々述べるまでもなく、二人をして相競爭せしめた秀吉は、二人の間の衝突を激成したもので、その祟りは彼の死後、大阪の運命にも影響したと云つて差支ない。而してその結果は肥後のキリシタンに延長し、峻嚴な迫害と慘烈の殉教とを生み出した。

肥後國のキリシタンは、天草諸島に始まり（永祿年間）、それから十數年、天正十五年（1587）薩摩征伐の頃には、教勢が殆ど全州に及むでゐた。そこへもつて來て、小西がその南半を領し、名護屋の陣中で不興を蒙つた高山右近父子とその一族が、大

草の湯ケ島に住むで堂々たるキリシタン部落をなしてゐる。即ち天正十六年から慶長五年まで（1588－1600）十數年間は、肥後キリシタンの最も盛な興隆期であつて、淸正が肥後全州を領して直に始めたキリシタン迫害は、三十餘年間傳道の結果を一朝にして覆さうとしたもの、彼れの一徹な法華折伏の現れである。但し、それが單に信仰問題たる外に、小西に對する個人的感情も加はつての事たるは推測し得る事、又小西の殘徒が信仰と政治との混淆から、宇土城に立て籠つた事も、淸正の癇癪を爆發せしめる一事情であつた。

そこで、此に物語るのは、加藤主計頭（後に肥後守）淸正が、肥後全州を領して後迫害を始め、特に八代の士族町人の信者がひどい目にあつた事情であるが、それを述べる前に、先づ加藤と小西とに關する世人一般の先入主に對して少しく注意を加へる必要がある。淸正は朝鮮征伐での虎狩や蔚山籠城に加へて、地震加藤の芝居や何かで、民間に最も人望のある英雄。多くの人は、その畫姿だけでも親愛尊敬の情を持ち、而して法華宗では淸正公として殆ど神樣と崇められてゐる。之に反して、小西は、第一藥屋の息子といふ點で（淸正の百姓に對して）、日本人に感じが惡く、沈惟敬との折衝で一層疑はれ、（その間にはキリシタンたる內藤如安も働いてゐ）、而して最後は、關ケ原戰役の結果として、德川時代を通して、何かなしに奸智に長けた人として鍜ひ作られた。且つ又、淸正の陸戰は、人々の目に華々しく映ずるに反して、小西が小田原征伐以來の海軍海運の經營は、一向人心を引かない。鎖國の日本、否今日の日本でも、やはりその偏見が勝をしめてゐる。況や朝鮮征伐の眞相は、一般の歷史や物語には殆ど知らされない今日、小西は、一般の感じの上には、最も割の惡い役目を勤めたものである。

之に反して、西洋側の記錄では、Cauzouyedono（主計殿）は殘忍の暴君、流血を好む迫害者で、その法華信仰は迷信に外ならぬ。而して Tsounocamidono（津ノ守殿）は Grand Admiral で大智謀の君子で、篤信敬虔のDon Ogostinho（オゴチチニョ殿）である。關ケ原の役後、自ら切腹せずに六條河原で刑に處せられたのは、日本では卑怯と見られる正反對に、デウスの掟を守る爲で、此の恥を忍むでも信心を貫いたのは、信者の立場から見て殆ど殉教に値する。

此の兩方を對照して、我等は、各々その立場の異りたる批判或は感情が、氷炭相容れない點に興味を感ずる。而して日本の歷史は、まだ此の兩人とその時勢の背景とについて、眞に公平に、又各々事情と性格とを參照して、正當の批判を下すまでに至つてゐないのを遺憾とする。二人共、棺を蔽ふて三百年、

[illegible]まり、以下迫害の事情を述べるに當つて、英雄だからとて清正のした事を一々是認し或は讃美も出來ないと共に、又迫害したからとて、それで直に惡人だとも云へないといふことを、前以て注意したい爲である。

二　肥後切支丹の全盛と急轉の迫害

さて、關ケ原役に先つ頃、肥後小西領の狀態は、前にも述べた通り、キリシタン全盛の時であつた。日本キリシタンの元締として、傳道經營の才を具へた司教セルケイラ（Cerqueira）は、長崎で寺澤志摩守の迫害を避け、その教師や學生多數を伴つて天草に移り、志岐（シキ）には新に司教館を造つて、それを中心に有馬、大村、長崎などに聯絡をとつてゐる。島の中だけでも三箇所の駐在所には十六人（中六人パデレ）の教師が居て、一年の中に六つ新寺を建てる（その外四十五の寺が山間まで散在してゐた）。今では天草の中にしてゐるが、古は別と見てゐた大矢野島には、有爲の教師ポルロ（G-B. Porro）が居て、一年に千三百人の洗禮を施す。領主の城下なる宇土には十二人の教師（中五人パデレ）、近傍の八代と野津、山間の矢部には新に分遣駐在所が出來て、今までの一萬の信者に加へて、慶長四年（1599）だけに一萬四千[illegible]た。宇土[illegible]の閉めたる間の内には、行長の[illegible]で、住民三千人に洗禮を施す外、佛僧にキリシタンになるか、然らずば領内を立退けと命じたので、六人は命に從つたが他は立退いて佛僧の影を止めなくなつた。八代の城は、同苗美作殿（教名ディイゴ）の預りであるが、八代と野津だけで新に十四の寺が出來、八代最大の佛寺（名は傳はらぬ）の住持は、自らキリシタンになつて、その寺を献じ、佛像を破壞した。（此等の事を教介側では、信仰の功德としてゐるが、その間に迫害壓迫がなかつたといふ事を誰か保證し得やう）。飛で東の方矢部ノ庄は、ジョルジ・彌平次殿の預りで、一年に千五百人の洗禮があつた。

然るに、關ケ原の一戰に天下の形勢が變化した中にも、肥後小西領のキリシタンは、その隆盛の頂上から、危難の淵に墜落した。加藤勢は形勢の動くと共に先づ宇土城を包圍したが、大多數はキリシタンたる留守兵が、小西隼人の指揮の下に能く防戰した。清正はバテレン等を說き、その仲介で開城させうとしたが、それも無効で、攻防共に死力を出してゐる最中、關ケ原の敗報が屆いて、城中色を失ひ、終に落城。主將の死の外、城兵は盡く捕虜となり、バテレンは殘忍に取扱はれ、その中の一人レモンは、黑田如水の力で漸く救はれた。八代の守將美作は勢

の窮するを見て、「手兵五百を引連れ、城を棄てて薩摩に逃れた。(その後島津に事へたが、その子の代にキリシタンたる故に追放せられた)。その年の十月ドン・オゴスチニョは六條河原の露と消え、つゞいて天草は唐津の領主寺澤志摩守に、肥後南半は加藤主計頭に與へられた。キリシタンは、何れに向つても立つ瀬はなくなつた。然し、寺澤は從來のやり口に似ず、キリシタンと和議を結び、天草の信徒を苦めない事を約した。加藤の方は、直に着手したのではないが、迫害は殆と必然の勢で、先つ士分に對して領外立去を禁じ、而して人質を入れしめた。それでも屈しない者には、段々壓迫を進めて財産を沒收し(秩祿返上といふ名目で)、且つその他の財源や産業の途を斷つた。彼等は、假小屋を作つて、その中に食ふや食はずの生活をしたが、教徒の同情は之に集まり、教師は長崎その他から施與を集めて救助する。此間に特に働いたのはルイス宮原といふ日本人パデレで、百姓に扮して、困窮の人との間に慰問の巡回をした。此の如き慰問が信徒を激勵したことは勿論の次第で、曾ては一城の主、今は窮迫の教徒たるジョルジ・彌平次が、司教に宛てた手紙は左の如くである。

日本パデレ・ルイス樣が此處におはし候事は、誠に大なる力にて、我等を勵まし、マルチリョを勸め下され候。キリシタンの人々皆同樣にて、パデレ樣おはし候爲に、アニマの救を得べき力を新に得申し候。今までは、パデレ樣が我等の間に御出でなされ候ても、ゼンチョ等の見張強く、暫くの間、一日も御逗留下さるるやを危み候も、今度は既に四五日にも相成り、又ゼンチョ等は、既にその居られ候を知り居り候も、今までの如くに、町々が騷がしく、どよめくを聞き申さず候。我等が待ち望み候マルチリョも遠からぬ事と存じ候へば、此度こそは、パデレ樣が我等の間に尙ほ御留まりある樣願度く存候。

此は月日は分からぬが、この第一期の迫害は慶長七年から八年(1602-3)に亙つたので、その勢の大分進むだ時と思はれる。又、前から小西の保護を受けてゐた内藤飛彈守は、天草にゐたらしいが、同樣の手紙を出してゐる。

迫害は日々に勢を加へ、又我等の御主の爲に一命を棄てん覺悟仕候者も少なからず、誠に多人數に有之候。又迫害は今の處中々鎭まらざるべく、我等がデウスを敬ひ奉る爲に、如何なる試錬をも危險をも凌ぎ得る樣、デウスは御容し下さるる事と存じ候。斯くならば、ヒイデスの爲に命を棄てさせられし古の聖(たふと)ぎマルチレス達の御生涯を、一分たりとも我等まなび奉るべく候。私自らも深く心を定めて、死に至るまで凌

き通し得る様、或はオラショと祭式とにて、デウスに願はみ下さるる様願上候。此の日本の國にもマルチレス相出來、又我等の如きあはれの科人がそのマルチリヨの手始とならんとは、不思議の至にて、此事を考へ來りて、歡喜の涙抑へ難く候。

此時、まだ實際のマルチルは生じて居ないのであるが、教徒の中でしつかりした者が、マルチリヨの覺悟を定めてゐた狀態は、此に一端を見得る。飛彈守の子采女奸次も亦、熊本の同信徒に書を送つて曰く、

主計殿の殘忍極まる禁令と、それにつゞいて迫害起りし爲、そこばくのキリシタン落ち申せしとの事を聞及びて、誠に深くなげかはしく存ずる。されど又多くのキリシタンよりの音信ありて、その人々は、堅くヒイデスを守りて不退なるを知りて、誠に喜ばしく、且つその人々を羨しう思ふばかり。その人々がマルチレスとなられん時には、此身もその伴を致し、注がれし血に我が唇を染めて後、つゞいてマルチルとなる様に願ひ申す。その爲に、御身達が我等の御主に祈らるる節には、此のガラサを賜はる樣賴まるゝ樣に願ふ。御身達が、家をも土地をも棄てて、殿の役人に委せられしを聞きて、誠に喜ばしく存ずる。御身達は、マルチリヨの月桂冠をデウスより賜はるに同意したらず、更非のせずとてはこれと、此身も同じく大なる科人とて同じ思を抱くとはいへ、デウスが我等を召して此の試錬に逢はさせ賜ふと思ひ、その御ガラサにて我等もマルチレスたるべしと信じ申す。

僅の人にても、此世の財寶を重んじ、妻子の愛にひかれ、其爲にヒイデスを棄てし人々あるは嘆はしく、それ等の人々は、生來マルチルたるを得ぬ人と申す外なし。此世の秩祿財寶も妻子眷族も、何れも救の妨げとなる事もあり、而かも我等はおそかれ早かれ、それ等に別るゝ事は避け得ぬ次第なれば、今主計殿が此等の財寶を取り上げらるゝは、我等の爲に結構なる世話をせらるるとも申すべく、パライソへ行く道の妨げを除かるるに異ならず。いつまでも盡きぬ寶を得る爲に、何れは空しき此世の財寶を棄つるキリシタンは、天に忍び入る術を知る智慧ある盜人とも申すべきか。此身も、今までコンヒサンやオラショの力にて此寶を得んと勉めしも、今にそこに到らず、今こそ天に到る直路ともいふべきマルチリヨの時節到來いたしたれば、デウスに千萬御禮を申上げ、此折をはづさぬ樣にと心を決め、天に忍び入る御許しを得たく思ふ。御身達には、此身が言葉を待つ要もなかるべきも、天に到らるる樣切に望み、我等が常々語り合ひ、共々決心した

る迹り、此度こそは、デウスが我等をためし又淨めさせ賜ふと思ひ定められよ。善き鍛冶は爐の中にて鐵を鍛へ淨め、此によりてやくざの鏽はとけて滓となり、健げの分は假令ひ少くとも、誠に淨き鐵となりて、最良の器を作るに相應しきものとなる。此に似てデウスは迫害といふ火にてキリシタンをためし鍛へ賜ひ、此のためしを經たる者は、ヒイデス堅固に、誠にキリシタンの善德と眞の信心とを示し、此に於てデウスは其人々を御用ひなされて、高く貴き仕事を仰せつけられ、マルチレスとせさせ賜ふ。此の位こそ秀で優れ、又榮に溢るるものぞ。

我等が御主のガラサの御蔭にて、此身はヒイデス堅固と自ら信じ、遲疑も迷ひもなきが、何れにしても今此處には數多の天狗ありて、此身を陷るるに力をこめて働き、或は妻子財寶に眼を轉ぜしめんとは致せど、デウスはガラサを垂れ賜ひて、此身の眼を開き、光を與へ賜ひ、救に入用のことを見分けしめ賜はる。されば惡人共が此身を惑はし得ぬは、偏にデウスの御惠に外ならず。

此等の目に見ゆる天狗が此身にしかくる戰ひは、御身達の凌ぎ賜ふものよりも恐ろしく、此の城中にて、我は只一人、相談相手も援助もなく、周圍は信仰を棄てさせ、ヒイデスより落さうずるたくみをする反間者のみにて、その目ざす所は、殿より賜はる知行（ちぎやう）にはづれず、その蔭にて自分を護らんとするに外ならず。此身の今の有樣、御推察あれ。さりながら、前かどより申せし通り、デウスの御惠みにて、その人々に對して、はつきり言ひ切り、此の戰に勝ちて今に及びぬ。此の難を凌ぎ通して、パライソに行き着くまで堪ゆる樣、我等の御主に御願ひ申さるる樣、呉れ〲も賴み申す。此く申すも、自分の力にたよるあだの心は露ほどもなく、我等の御主が格段の御惠を垂れさせ給はぬ限り、此身は何をも成し得ぬ事を篤と存知し、デウスが此身につきそひ賜はらずは、此の戰に在りて心をたしかに凌ぎ通し得ぬ事は明白至極と存ずる。

その後釆女は自ら熊本に出かけたものと見えて、そこから副管區長に出した手紙には、同樣の覺悟を示してゐる。

大切なるスピリチュアルの御敎訓に充ち候尊慮の御書簡は熊本にて拜受仕候て、それを拜見し、又讀みきかせて、我等一同誠に深く心を慰め又堅め申候。我等が御主のガラサの御蔭を以て、ヒイデス堅固に覺え、些少なりとも此身の財寶をも妻子をもデウスへ供へ申候。此樣の心持と志願とは、此身の力にてはなく、偏に我等の御主より賜はる所と存じ、デウスの限なき御大切御慈悲は、言葉に述べ、思ひに盡し難く覺

へ參り、此の至貴なる[illegible]られし事を思ひ候へば、忘恩御へ驚く、あはれなる罪人たる我等を御用に召し候はるデウスの御恵をつくづく思ひ暮らし候。

此身は、相應しからねど、マルチリヨの道より外に、直路パライソに參り得べき道はなく、何よりも大なる御恵としてマルチルの位に列なるを疑はず、千萬の御禮を申上候。

パウチスモを授かり候て、天狗の鎖より解き離し賜はり、御用に立つ御召を蒙り候は、全くデウスの廣大なる御恵にて、此のみにても價知れぬ賜と存じ候。それ以來、コンヒサンやいとも聖きサカラメントに與りて、段々に御恵みを蒙り候へば、此等の事を思ひつつ不斷にメデタサンを凝らしつつ、如何樣に致さば御恩に報ひ得べきかと考へ、現在にては、マルチリヨの時の來る用意を整ふる様、御教訓を仰ぐのみに御座候。何人も、いつかは妻子にも、此世の財貨にも別るべき者ながら、只その別れがマルチリヨにて遂げらるべくば、此に越したる御恵はなかるべく、先づ思慮分別に越えたる次第と存じ候。此身は、人に施すことも、よき事をすることもなくて、盡きぬ財貨を得るよき盜人の樣に思ほれ候。

ヒイデスを棄てよと、ゼンチヨも氣の弱きキリシタンも說き勸めて、日毎に私によからぬ勸めを致し候。又此の町にても、キリシタンに對して[illegible]を申し候が、[illegible]天狗よりも惡人なりと存じ候。此の者共にて、[illegible]しき事御[illegible]下さるべく候。されば、[illegible]が祭を仕せられ、日毎にオラシヨ捧げ賜ふ砌に、私が最期まで強き候樣、デウスに御願ひある様に願上候。

此の手紙によれば采女は天草邊で一部落を率ゐてゐたらしいが、兎に角、内藤父子は、その後、加賀へ行つて前田家に保護せられ、肥後での迫害には死ななかつた。然し、その迫害の中に居て自らも殉教の覺悟を定め、又他人を激勵した跡は、此の三通の書簡に殘つてゐる。又、迫害の中に信仰退轉の者もあつたが、又毅然として屈しなかつた者もあり、一婦人は、その子が人質に取られてゐて、自ら棄教しなければ、愛兒が殺されると聞き、子も亦殉教の榮を得ると喜んだと傳へる。

此の慶長六年から翌年に亙る（1601-1602）迫害は肥後全體の外に、肥後領たる豐後の鶴崎地方（後にも多く殉教者を生じた）にも及んで、何れも退轉者の外は、多く長崎に逃れたが、清正の一徹な壓迫も長續きはせず、約半年で一時寛いで來た。その頃、當時豐前の領主であり、篤信なる故ガラシヤ夫人の夫たる細川越中守（忠興）は、一日清正の酷薄を責めたと傳へるが、その細川家も、後には肥後と豐後（鶴崎邊）を領しては、

やはり迫害禁教を續けざるを得ず、云はゞ清正の事業を續承し完成したのである。

一旦寛むだとはいふものの、禁令は依然嚴存して、教師の駐在する者は一人もなく只時々隱れ忍むで信徒を慰問するのみ。而してその間、信徒が佛教徒と衝突したこともあり（佛教徒がお上の御威光を笠にして私的迫害を加へた爲）、又信徒でその多難に屈する者もあつた。

三　法華宗強制と武田、三並二家族の殉教

かゝる間、初の迫害から一年餘を過ぎて主計頭の熱心が再燃した。それは清正が信心で建立した本妙寺といふ寺を熊本に移し、その住職たらしめた日眞の刺戟もあつたので、今度は只キリシタン門徒を苦めるだけでなく、法華宗の信仰に誘はう、或は之を強制しやうといふ宗教政策と密着して來た。特に、前年、人質、財産沒收、交通遮斷等の苦痛を與へて棄教させやうとした政策が意外にも効力薄く、否却て熱信者の信仰と團結とを固め、且つ他領信徒からの援助を誘致したので、單なる脅威の外に、何か方法を用ひざるを得ざるに至つたのである。

そこで禁令を新にして、熊本、宇土（ウド）、八代（ヤツシロ）の士分の者に、直接上役から勸誘せしめる外に、本妙寺日眞とその徒弟をして巡回説教をさせた。勸誘といひ勸化といつても、一轍短氣の封建君主には、壓迫強制といふ方法を捨てる餘裕も雅量もない。そこで日眞の巡回には、士分のものは皆、法會に出席して、説法を聽聞する義務を負はせる。慶長八年（又は七年ともいふ）十月二十一日（陽十一月二十三日）八代の士分に出席聽聞を命じた。キリシタンの者も、それだけは承諾して出席し、つゞいて二十四日にも同樣の説法を聞いた。此れだけの段取をとつた後、その翌日は、法筵に於て法華經の經卷を頭にいたゞく事を命じた。多くは、危難を恐れ、内心は兎に角、段々その命に服したが、最後十四家の人々は信仰を主張して、命に服しない。その中堅人物はシモン竹田五兵衛とジョアン三並（ミナミ）五郎左衛門とであつて、その結果は殉教の血を流すに至つた。

士分の外に八代の町人にも同樣の事を命じたが、此にも三人の中堅人物があつて、命が容易に行はれぬ。その三人といふのは、信徒の世話方で、慈悲役と呼ばれ、ジョアキム渡邊治郎左衛門、ジョアン服部甚五郎、ミゲル三行（ミツイシ）彦右衛門（又八右衛門とも傳へる）の三人であつた。此の三人とその激勵を受けた多數の信者等は法華説法の座に出席することも肯じないで、渡邊の家に集まつてオラショの會合を開いた。その同志は八代だけでも千人餘あ

つて、役人も手のつけやうがない、そこで自分が庄屋になつて、一旦宗教の形を示したその中にも、その取締をする者も出來て來た。その風が八代から宇土や熊本にも延びて、形勢は容易ならぬ態になつて來た。

但し、十四家の中、十二家は終に壓迫に屈したが、竹田と三並とはどうしても命に應ぜぬ。棄教實行の役目を承つた角左衛門は、元來竹田五兵衛の親友であり、又三並とも交があつたので、色々と棄教を勸めたが、力に及ばず、そこで一旦熊本に引返して主君の命を求めた。清正の命は豫測するに難くない、最後の手段を執れといふのにある。その間に三並五郎左衛門は、ジョアンを始め慈悲役を家に招いて、共々信仰を堅めて禮拜をし、皆が別れを惜むで辭して行く時、捕卒は三並の家を圍みに來た。それは強制して本妙寺の會座に連れ出し、無理にでも法華經をいたゞかせる爲であつた。家を出る時、妻女マダレナは夫を激勵し、三並は、本妙寺の居る處へつれられても、それに近づくを肯じない。無理に法華經頂戴をさせやうとするとそれに唾をはきかける。手のつけやうなく、連出された。その後、慈悲役ジョアキム渡邊が司教の書狀を持つて來ると、共々それを頂戴して、感涙を流す。どうしても最後まで行かさるを得なくなつた。

ここで[illegible]打にされ、竹田は角左衛門の許で八代に[illegible]された。角左衛門は尙ほどうにかして竹田を救はうとし、その妻ジョアンナや妻女イネスを說き、終に主人が斬首になれば、兩族は苦役に使はれると脅かして見た。これに對する婦人の答は[illegible]として、今まででも貧者の爲に盡し、癩病者の世話をして、ゼスの御意に副はうと勉めた身の、苦役ぐらゐは何でもないと言ひ切る。角左衛門は又翻つて、竹田に領外逃亡を勸め、家族もあとから送つてやると說いたが、竹田が殉教の覺悟は動かない。「逃亡は罪ではなくとも、一旦命を捧げた心を翻す卑怯はせぬ」と言ひ張る。角左衛門は尙ほ一度熊本に歸つて上意を伺ひ、終に死刑の已むを得ざるを確め、八代に歸つて、手紙を認め、下役市河治兵衛を使として最後を言ひ渡した。

シモン竹田は、その間に他の信者、特に三人の慈悲役と會合して、互に信仰を激勵し、又財産を處分して奴僕友人への遺物を分配し、母と妻と共に、信仰の爲に命を棄てる身の覺悟を語り合ひ、共に聖像の前に禮拜にいそしむだ。愈よ上使が來た。來り會した三人の慈悲役と妻子眷族は、最後の別として、尙ほもマルチリヨの光榮を感謝し、天上の再會を期し、共々最後のオラショを捧げ、それから聖像を前に掲げ、蠟燭の光りに行列を

整へて、上使の待ち設けて來る座敷へ出た。慈悲役三人と母と妻はその身邊に坐し、奴婢は下座で侍座して、最後を待つ。シモンは尙ほ最期の式を營むで後、頭を前に出し、上使の一刀に首は斷たれた。母ジョアンナは、一子の頭に手を据えて、一滴の淚も流さず毅然として述べた。「誠に太前は、よくも御主(ぜんすさま)の爲に命を棄ててくれた。此の母も此で一子を育て上げた甲斐がある。此身は罪の身ながら、一子をデウスに捧げる御恩命に應じて、マルチリヨの母たる名譽を賜はるを得た」と。實に十一月七日(陽十二月九日)未明の事であつた。

かくて、シモン竹田の首は熊本に送られ、ジョアンン三並の首と共にさらされ、その側には左の札を立てた。

此者共、三並五郎左衞門、竹田五兵衞は、一旦キリシタンを棄てて正宗に歸する旨誓詞を立てながら、誓に背きて從前の通りキリシタン宗を固守するに依り、見せしめの爲、本人幷に家內の者共を斬首に處するもの也。

慶長三年十一月七日　　主計頭

棄教の誓詞云々の事は、事實の根據はあつたので、三並の方は一度は弱つて誓詞に署名をしたが、後直に悔悟して之を取消し、それから殉教に邁進したのである。竹田の方は、角左衞門がどうにかして助けたいとの考から、本人の知らない書面を作つたのである。兎に角、藩では、此等の殉教者を單に信仰を主張する爲に處刑するといふ事にしたくない(それは江戶や他藩に對しても、又人民に對してもよくない影響のあるを恐れての事)、而して誓を守らぬといふ罪狀で處刑したといふことにしたのである。

跡に殘つた母と妻は殉教の願に燃え立つてゐるが、同じく殉教者の遺族三並の妻女マダレナと共に死にたいと願つて許され、使は三並の家に走つた。その間、ジョアンナ刀自は、出向の警固に對し、又奴婢に對して、信仰を說き、三人の慈悲役とは共に信仰を語り合ひつつ時を過ごした。そこへ三並マダレナは七歲の小兒ルイスを伴つて來て、共に亡き夫の跡を追ふて天へ行く旅路の門出を喜むだ。かくて日の暮れる頃、四人をはりつけにせよとの命が届いた。女小供をはりつけにするとは、實に稀有の殘忍事で、その命が淸正から出たとすれば、そのキリシタンに對する憎惡の心を測る料である。

愈よ家を出るに臨むでジョアンナ刀自はその沈痛の言を以て、人々に說法を始めた。先づデウスに對して自己の罪科を懺悔して宥しを求め、次に殉教の光榮を謝して云つた。

御主、此の卑しい身にかくまでの光榮を賜はるについての御思召の程は測られませず、又何と御禮を申すべきやも存じ

ませぬが、今御前に[illegible]の前に[illegible]申し、今は又此の身を差上げますが、此の身と此のアニマとを御受け下さる様に頼ひ上げまする。それと共に、モルタル科に落ちてゐる人々が、悔ひ改めて御主の御膝元に戻り申す様に、又御主の事を少しも存じ申さぬゼンチョがキリシタンになり申す様に、又特に御願ひ申上げるのは、主計殿の御事で、殿に對して私共は決して御恨み申し上げず、却てヒイデスの爲に此身をクルスにおかけ下さる事を有り難く存じまする。而して殿の御家御繁昌に、肥後國が泰平に、殿を始めその人民が盡くキリシタンになり申す様に、又迫害に屈してころびました人人が立ち戻りまする様に御願致し、我等共々御歌を歌ひまつりませう。

かく述べ終つて自ら先導して「御主、我等を憐み給へ」を居並ぶ人々と共に誦した。捕卒等は外に待つてゐるが、ジョアンナは悠々と聖歌を終へて、他の人々と共に出て、「さあ參りませう」と云つた落着きは、死の門出にある人とは思へなかつた。かくて一行は、シモンが臨終まで拜してゐた「此處に人」の聖像を先に立てて進まうとした。婦人との事でもあり、又士分に對する扱として、乘物三挺の用意が角左衛門の好意で出來てゐた。氣丈の老刀自は、ゼススの御跡を學ぶ爲にはカルバリヨへの[illegible]三人の[illegible]になつた。[illegible]し、夕暮つころに[illegible]を照らす後につゞいて、一行の前に刑場に到着した。刑場の十字架を遙拜した後、ジョアンナ刀自は再び最後の説法を始めた。

皆の衆、聽かれよ。今我等がこゝから空に高く仰ぎ見る月（陰暦七日の半弦の月）と星を、間もなく此身は脚下に見る様にならう。貧賤人間の扶になる道はキリシタンの外になく他の宗門は暗の中に盲目の手探をしてゐるばかりぞ。皆の衆がキリシタンにならるゝことを祈り申すが、その時こそ、今此身の話す誠の道を悟られう。又信仰をころんだ衆は、早く悔ひ改めて立ち歸られよ。ヒイデスの强い人々は、尙も深く根をおろして死ぬまで持ち堪へられよ。

語りつゝある中に、槍で突かれたが、つきそこなつたので健氣な老婦人は、「槍が能く通りませぬぞ」と呼ばはりつゝ、ゼススとマリヤの御名を呼び、第二の槍が左脇を貫いて呼吸たへた。

次は三歳のマダレナと幼兒ルイスで、此も刑吏の手が戰いてつき損ふ。マダレナは髮が顏に蔽ひかゝるので、「あゝ天が見えぬ」と叫び、次につかれて共々天と父の跡を追ふた。最後は竹

田の妻女イネス。先の刑吏は、もう槍を振ふ勇氣がなくなつて、他の一人が之に代はつた。これもつき損つては又つき直し、最も慘憺たる光景を呈したが、イネスは御名を呼びつつ母と夫の跡を追ふて逝いた。

武士と烈女は此の如くにして殉教の死を遂げた。ジョアンナ刀自は五十五歳、イネスは三十、マダレナは三十三歳、竹田も三並も三十代の壯年であつた。何れも生國は上方である點から見れば、元は小西について九州に來たものと思はれる。婦人等刑死の場には、警固の制止を排して信者が入込み、その血を紙や巾に浸ませて持ち歸つた。屍骸は何れも監視を附して埋められたが、一年の後、堀出して長崎に送られ、コレジヨの中に祭つたが、竹田と三並と二人の首なし屍骸は、後に死んだ人々と共に、有馬のセミナリヨで篤く祭られ、七年後にもその祭壇に殘つた。

三人婦人の悲壯の死は、涙と共に人の感動を深くし、その事をきゝ傳へて棄教者の立上り（復教）があつたのみならず、召捕から處刑を指揮した市河治兵衞は、感極まつて、迫害の任に當るに忍びず、長崎へ逃げ出して、そこで洗禮を受け、同時に、自分が竹田を殺した刀を司教に獻じた（殉教者の形見として）。清正は、市河の祿を沒收したのみで、それ以上は追究しなかつた。市河は後に日本をも逃れて邏羅へ行つた。

四　三人の慈悲役入牢とその一人の牢死

嵐の後に小康が來た。然し淸正の心は變つてゐない。彼の考では士分の者を改教させれば、町人は暫く措いてもよしといふ事で、先づ士を嚴刑に處したのであるが、その結果キリシタンの熱心は却て增した。八代の別當フアビアン圓助（Yensou-ke）がキリシタンたる故、之を罷めて他の人を入れ、且つ奉行角左衞門をして段々迫害手段を執らせる事にした。而して一度は淸正自ら八代に來て、指揮をした位であるが、その鋒先にかかつたのは、自然に三人の慈悲役で、三人共召捕になつた。

その中、先づ召捕られたのは、元は播磨國の生れのジョアン甚五郎で、小西行長が室の津を領してゐる間にキリシタンに接し、八代に來てから信者になつた者であるが、奉行の吟味を受けた顚末を書簡で長崎へ知らせてゐる。その書中にある角左衞門との問答は甚だ興味多く、左の如くである。

角左　お前が奉じてゐる教は、殿樣の御法度（はつと）で、斬罪になるべきもの、お前の事は何もかもよく知れてゐる。それでも若しその教を棄てるなら、まだ助かる途もあらうから、能く考へて

見よう

甚五 殿様、此の世の何事も、此の信仰の道にまさる事はござりませぬ。不斷に限なく恩を垂れさせられるデウスに對して、今直にでも捧げられるのは此の命(いのち)で、デウス様を敬ひ奉る爲に、わたしの血をさゝげるに越したことはござらぬ。わたしが思を淸めるにも、お祈りをしまするにも、此の捧物をする用意の爲でござる故、ゼンチョ(異教)に歸れと仰せられても、それは出來ぬ御相談だといふ事はお分りになりませう。

角左 誠に驚いた事だが、お前の様に仕合せに見える人があらうとは、曾て思ひよらなかつた。(暫く考へ後)どうしてそう不思議に仕合せの様に見えるのかなあ。

甚五 前かど、日本の宗旨について大抵の書物を讀み申したが、何れも皆荒誕無稽の事が記してあるのみでござつた。その實質を深く探り、その中には天と地と、又人と萬物を作らせられた作主(つくりぬし)の事が全く欠けてゐるのを見て、天地は全く偶然に出來たものと考へました。されば魂の教を求めてそれを得やうとするのは、全く空事(そらごと)と思はれ、現世の財寶のみ眞實と思はれ申した。然るに、その後オグスチニヨ肥後守殿(小西行長)が、わたしの生國宇土(肥後)を知行なされる様になつて、御自分の信ぜられる宗旨を、新米の家來共にも勸めさせられたが、その說法をきゝ申して、說法者と議論も致したが、どうもまだ腑に落ち申さなかつた。その後、八代に參つて、此處のキリシタンに疑を質し、魂の不滅について段々尋ねましたが其解決が出來ず、尙ほゼスス會の教師達に付つたがよからうといふ事でござつた。然し、自分は自らゑらい者と思ひ込み、自分の頭を抑へる力のあるパデレもイルマンもござらぬと考へ申した。さうする中に、朝鮮から歸られたデーゴ美作小西殿が、辯舌と熱心に御自分の生活を實例として人々に說き勸め、澤山の人々、特に八代での身分高い方々にゼススキリシトを信ぜさせる様にせられた。一番頑張つてゐた此のわたしも、その一人であつた。但し、愈よ洗禮を受けまするには、前以て熟慮し、キリシタンが救について申す申分をよく吟味致し、世界の作手がおはさぬといふ事はどうしてもあり得ず、その事を教へる宗旨は、誠の宗旨、誤のないものと見極め、申さば手を以てその誠をさぐり當てました。

角左(微笑しながら) キリシタンの吟味を掌り、その刑罰を行ふ爲の役人が キリシタン宗にかはつたとしたならば、誠に面白い事であらう。誠を云はゞ、わしは救手だといふ阿彌陀や釋迦の面を見た事はない。又坊主等の教へる様に、南無阿彌陀佛と唱へたなら、それで助からうとは毛頭思はぬ。然し

キリシタンの教も同樣で、何も善い事もせずに、ゼスス マリヤと唱へて それで助かるとは思はぬ。又釋迦は澤山うそをついておいたに違ひないが、バテレンも同じかどうか、又その思惑が正しいか邪であるか、わしには分からぬ。「つまり、遠方から態々此國に渡來し、不思議な辨舌や熱心を以て、自分の國の物語を此國の人に教へるからといつて、それでその人々を全く信じて宜しいとも考へられぬ。

甚五 わたしも、只バデレ方の辨舌で信仰すると申すのではござらぬ。その申す所に道理ある故で、その道理がこの心に透り申す故、今キリシタンたる爲に死にまするのが、此上ない喜びとなり申した。

角左 勇氣のある人で、死を見る塵に均しいといふ例はいくらもあるが、今わしの見る如く、大膽の上に喜ばしく死を迎へるのは、見た事はない。若し自分の眼でそれを見たのでなくば、うその話しと思はう。

甚五 殿樣、此の樣な喜び、又此上ない滿足、少しも死を恐れませぬといふ事は、此世の外に命(いのち)があり、唯一つの作手がおはすと申す眞理を手で握むで見てをりまする爲で、それなくば、此の樣な滿足は出て來ませぬ。

角左 お前は、始からして、バテレンの説法を信じ、その人柄を信用してゐるが、その樣に氣の大きな善い人でも、その樣にして死を迎へるといふ事がわしには分からぬ。

甚五 殿樣が考へさせられる樣に、わたしがうぶで單純なのではござらぬ。洗禮を受け申す前には、來世の事は少しも考へず、此世の迷に打沈み、又人々を迷はせも致した。然るに今は、ゼンチヨが貴重してゐるものを何とも思はず、命も惜み申さず、若しわたしが、御作手(つくりて)の御名譽の爲に、此の身の命を棄て申してよいとの事ならば、永遠の生命と天上の仕合の爲に喜んで命を捧げ申さう。何卒、殿もバデレ達の教へらるる御教を奉ぜさせらるる樣、デウスの御計らひある樣に、又若し殿が左樣にせらるるなら、それを世に公言せられるに違ひないと思ひ申す。

角左 あのシモン竹田は、わしと同國で又親友であつたから、わしの指を一つ切つてまでも、その命を助けやうとして見たが、彼の男は全くわしの勸を用ゐず、その上、他のキリシタンに弱くてはならぬと説き勸めた。此樣に殿樣の御法度に公然背いた爲に、その死を救ふことが出來なかつたのぢや。わしは度々、竹田に申した、「君はそれまで明白に救の事を知つてゐるならば、わしにそれを美事に説き明し、又證據を見せてくれ。」それに答へて、竹田は、自分も只言説では説き明

す事にどうも出来ぬことと云つたら

兎に角、お上の御法度であるから、お前を牢に入れなけやならぬが、尚又、人の噂によれば、マダレナ、イネス、ジョアンナと小供のルイスと、四人ははりつけになつた者の衣服をはずして、長崎に賣りに行つたといふが、それはどうか。

甚五　わたしは商賣は致しません。只はりつけで地上に殘つた遺物を集めました。それはそれ等の人々の爲にキリシタンの儀式でねんごろに葬り申さん爲であります。

角左　さもあらう。兎に角、牢屋に待つてゐなさい。何とか助ける樣にしたい。

甚五　お志は有り難う、御禮を申上げまするが、宗門の爲に命を棄てるは當然で、その他の何事にもかへられません。

此の問答を見て、殉教者の心持が歷々と見えると共に、奉行たる士の精神狀態も伺はれる。即ち自分は特別の信仰があるのでなく、又敢てキリシタンを憎むのでもなく、却て或る點ではその信仰に驚き又その毅然たる態度に感服もしてゐて、迫害は只上の命令だから御役目を勤めてゐるのみである。正直な人間なれば、先に述べた市河次郎兵衛の如く、殉教者の感化を受けてキリシタンになる。それ程でなくとも、人情としてどれだけかは殉教者に同情する。然し、多くは感服に深入りしないで、迫害の役目を勤める。併し其中には、友人たる者を罰つ爲に至す人情はあつたが、又殉教者に同情しても、その爲に自らを犠牲にするだけの物ずきでもなく、役目は役目として勤め、その間にはキリシタンの頑迷を憐みもする。自分の考は全然ポシチビストであるから、佛教をも愚だと思つてゐるが、キリシタンの頑迷には愛想をつかす。此の如きもの、迫害の役目を勤めた多くの士に通有の態度であつて、此の問題に現れた角左衞門はその一例、後の宗門改役井上筑後守の如きは、それに檢事としての智謀を加へた人物であつた。その他にも同樣の人は多かつた。

それは兎に角、甚五郎に次で捕はれたのはミゲル三右衞門で、甚五郎と二人獄中で互に慰め合つた。第三のジョアキム渡邊次郎左衞門は、その時長崎に行つた不在であつたので、代りに人質として、妻女マリヤが召捕になつた。そこで、その報知を得た渡邊は八代に歸り、先づ信者の間で生兒に洗禮を施し、信仰の心得を示し、且つ後事をジョアン治右衞門に託して後、自ら奉行所に名乘り出て、獄に投ぜられ、三人の財産は皆收沒せられ、小供等は奴隷としてどこかへやられるとの事であつた。それでも三人は牢舍の中で一緒になつた。三人の慈悲役は屈せず、次に手紙に出す樣に、小供等を犠牲にするのは、アブラハムの跡を追ふのだと覺悟してゐる。此は三婦人の殉教後

約一年、慶長九年（1604）の秋であつた。

その間に八代全體に亙つて、信者に棄教の壓迫を加へる。ころぶ者もあつたが、屈せぬ者も多く、八代の中德ノ淵區域の如きは、全部壓迫に屈しない。その間、又信者等は、見張番のあるにかゝはらず、夜な／＼忍むで刑場に殘る殉教者の骨や遺物（着物の切れ端でも何でも）を集めて、之を長崎に送る。長崎からも種々の方法で慰問をして來る。その慰問を受けて、三人の慈悲役が牢舍から、長崎の副教區長へ送つた手紙（年月不明）は左の通である。

尊意の御手紙をいたゞき候て、我等が慰められて力づき候事、誠に如何ばかりに候ぞ。デウスを敬ひ奉る爲に苦み候は、我等平素の願ながら、自ら大なる科人（とがびと）なるを思へば、御用を勤むるには不相應と考へ居候。然るに、聖（たふと）き御名を唱へん爲に、今は囚人の身と相成り候喜び、申し樣無之存し、御禮として何事を致すべきやと思ひ迷ひ候。それについては、御主の跡を學び奉りて、いとも殘忍なる苛責（かしやく）をも受け申さんとの願ひ益々加はるを覺え候。妻子眷屬は、既に我等の命と共に捧物に致し候事なれば、少しも氣遣ひ申さず、全く尊意始めパデレ樣方の御世話に委せ奉り候。八代にてはジョアン治右衛門が我等に代りてキリシタンの見張り世話萬事を引受くべく、尊意は、人々を御勵まし下れたく、迫害に屈して落ち候弱き人々の跡を學ぶ事なき樣に御心附け下さるべく候。噂によれば、パデレ樣一人熊本へ參られ候との事、若しその御用が、我等の赦免について主計殿と御懸合（おかけあひ）にてもなるならば、それは全く御無用にて、我等はその樣の事を好み申さず、甚だ嘆はしき事と存じ候。尊意始め、コンパニヤのパデレ樣方は、我等が御主の御爲に死に申す樣、御祈りと捧物を以てデウスへ御願ひ下さるべく候。その外の事はジョアン治右衛門が申上ぐべく、我等が憚なく心中を申上候段、御免し下され度候

右の中にあるパデレ一人熊本に來たといふのはルイス宮原といふ日本人パデレが一人のイルマンを伴ひ、變裝して肥後のキリシタンを訪問し激勵した事實で、それは多分翌慶長十年（1605）の事を指すと思はれる。而して三人の慈悲役は、宮原に對して禮狀を出してゐる。その文に曰く、

尊意の御手紙拜見仕り御禮申上げ、特に我等を御訪ね御慰め下さる爲に、危きを冒して長き旅路を御越し下され候事御の禮言葉に餘り候。若し御目にかゝり御話し申上ぐるを得ば何ぼう嬉しかるべきも、今の有樣にてはそれも相叶はず、それには色々の厄介を生ずべくと存じ候。我等の見張は中々嚴し

く、牢屋の中にては、深山のゼンチョと一緒にて、其の中の一人は惡しき狐の爲にか、全く狂亂仕り、日夜叱へ叫んで居候。我等は、デウスの御陰にて、氣も確かにて、若し役人の御目にかゝり得ば、色々御教もいたし、且つコンヒサンを御聽き下さるる樣に致すべきも、只今我等の爲に御出下され、その爲に深山の人々にも危難を及ぼす樣の事なき樣、デウスに御願致候。貴殿が不意に此港に御着にても、舟よりお上り成さるる前に、皆に知れ亙り居候事など、御考へ下さるべく候。只、我等、あはれの科人の爲に御祈り下さる樣奉願候。

牢中の人は慰問使が來ても會へないが、手紙は屆く。又慰問使は長崎や大村からの慰問施物を分配すると共に、信者のコンヒサンを聽き、信仰を激勵する。それにしても獄中の悲慘はいつもながら同じで、右の手紙にもある如く、他の囚人の中には、その爲に發狂するに至つた位である。獄中の狀態は一々敍するまでもなく、想像に餘りあるが、三人の信仰は愈よ堅く、その中ジョアキム渡邊は、曾て在牢した有馬のコレジョ長に手紙を出して信仰を告白した。曰く、

我等の御主デウスの御惠を以て、何よりも先づ申上候は、我等の御主ゼスキリシトの御教、御掟は、萬の道理に越えて眞實に、萬の浮き以上に淨くおはします事を書記して申上げ、扨又日にはオラシヨとイヂヂナンに於て、八つの罪なきは ふ中にくらし候間、盲なるゼンチヨの人々に、其を教へ申さんとのみ念じ居り候。此身は科人に候へば、明暮しからば、おながら、偏にデウスの御誘導の御陰を以て、此の胸に燃え立ち候間、私生國なる此の八代にて囚人となりてくらし候樣に相成、玆に、我等の御主ゼスキリシトの御掟のみ聖く又眞なる事を、此身を以て證致し候。此の美はしき御事の爲に囚人と成り候へば、喜び身に餘りて心勇み立ち、ビルゼンマリヤ樣がその御子に對して、私の爲に御合力を御賴み下され候て、御用の爲に死に候まで心を確に保ち候樣賴上げ、デウスの御惠によりて、御主を敬ひ奉る爲には、此身が粉と相成候までも、拷問苛責に堪え候樣偏に賴上候。

此手紙に年號はないが前後の關係から見て、在牢一年の後、慶長十年（一六〇五）に編すべきもので、然らばその月附陰暦十月廿日は陽暦十一月卅日に當る。かくて在牢一年半以上、慶長十一年（一六〇六）の晩春、ジョアキム渡邊は熱病にかゝつた。獄吏は何でも彼でも棄教の形をとらせたく、高熱の病人にころび證文の署名をさせた。ジョアキムは熱が減じた時、それを知つて取消を聲明し、死すとも棄教せぬ態度を示した。而して有馬のコレジョからは一人のパデレ（先に記したルイス高原）を遣し、

彼は扮裝して牢中に忍び入り二人に會ふ事を得た。瀕死のジョアキムは、パデレに接して病苦をも忘れ、先のころびの虚なる事を明にし、コンヒサンに告白し、堅信の禮を受け、而して證文を書いた。その日附は慶長十一年五月十七日（1606 六月二十六日）であつて、左の通である。

私ジョアキム儀、御主ゼススキリシトを敬ひ奉りその御用を勤めん爲、その御名によつて聖き御教を擴げ候爲に囚人となり候、今までにも此牢屋に於て數々の苛責を受け候も皆此一儀の爲に外ならぬ事を切に申上候。又牢屋に於ても、重病の節に、本心ならぬ事、又はその外の誤を申上げし事あるやも計られず候へども、此皆眞の心に出でし事にては無之、我を失ひ、自分の申したる事をも全く知らざる次第。此儀を特に申切り候。然るに、今は眞の心に立戻り、分別も相出來候につき今更に奉教告白として申上ぐれば、私の心持の眞實肝要の次第は、今にも申せし通りをそのまゝに繰返すばかりにて、此まゝ十年二十年牢屋に囚はれ候とも、デウスとその聖き御名の爲に受け候苛責は、いつにても喜び勇むで堪え通すべく候。若し此の堅き決心、此の思ひに違ふ事も出來仕候はゞ、それは本心を失ひ、分別を缺くが爲に外ならず、此外に何等の二心無之、此事の眞を證し候爲、パデレ様ルイスの御前にて、之を申し明かし、申し切り、私の名前を書き記して證據の一札書上候也。

此の署名をし、儀式を受けて、彼は安心し、病中ながら獄中に感謝の日を送り、それから二ケ月の後、七月廿九日（陽暦八月二十二日）瞑目した。此人は信者となつて十年、即ち肥後の南半が加藤領になる前からの信者で、八代キリシタンの柱石であり、死んだ時は齢五十五であつた。豫ての宿望たる殉教の血は流しはしなかつたが、信仰を守つての牢死はやはり殉教であつた。遺骨は一旦八代に葬られたが、三日後有馬へ移され、先に殉教の死を遂げた竹川、三並二人の屍骸と共に、後まで有馬の祭壇で、殉教者としての敬禮を受けた。

五　殘る二人の殉教

殘つた二人、ジョアン甚五郎とミゲル彥右衛門とは、獄中の苦に屈せず、牢舍の中でも未信者を感化する、祭式を行ふ。淸正は一度八代に來て、此狀態に怒り、彼等を死刑にしやうとしたが、キリシタンは死刑を殉教として喜ぶといふことをきゝ、どこか荒野に追ひやり、人間との交通と食物とを絕たうとしたが、それもキリストが四十日間荒野で斷食をして生きてゐたといふ話に動かされ、やはり牢獄に閉ち込めることにし、只監視

を一層苦にせしめた。

今までにも入牢以来一年半餘、最後の殉教まで二年半、二人の受けた苦の試練は容易でなかつた。特にジョアン甚五郎は播州生れで、その若い妻は病弱の上に、他國で夫に離れて寄邊なき身の、夫が上命に屈服して出獄してくれることを迫る。その愁訴にはり裂く胸を抑へつつ、妻を激勵して信仰を貫いたのは容易の事ではなかつた。その上自分も獄中で病に罹り、食も乏しく、僅に一人同信徒の忍び隱れの供給で命を繼ぎつつ信仰を守り、且つ非常の苦行修練をした。ミゲル彦右衛門も亦妻子のある身ながら、その恩愛に牽かれず、且つ此も重病にかゝつたが、健康の小康を得ては、偏に血を以て殉教したいといふ願の祈りを捧げた。此間にも教師の側では慰問の方法を講じ、バエサ(Baeza)といふパデレは文通の外に、一度は牢に忍び込むだらしく、ジョアンが餘りに苦行を嚴しくするので、假令ひ病むでも身を大切にするのが、デウスに對する務めだと諭したといふ。

此くて在牢第三のナタル(キリスマス)を獄中で祝ひ、二人は、その祝の意と共に覺悟を述べた手紙を副教區長へ送つた。

デウスの御恵を以て、此手紙を尊翁に差上げ、ナタルの御祝申上候。デウスの架き御名を唱へ候爲に、此の罪重く功德もなき身にてありながら、牢屋に入りて二ヶ年に迄り候ほどに、し下されし御恩を申上げ、又こつゝにおふ〻る種々の試練をも心實かに悦び勇みて受け候て、囚人となりて以来一日の間の様に思はれ候事なと、皆御主の限なき御慈悲の御陰と存じ、只此身の足らぬ智恵には、不思議と申す外なく存ぜられ候。

近日になり申して、デウスは此身に重病を與へさせられ、身は牢屋の中にて死ぬるかと考へ候に、デウスは此の生を長らへさせ下され、その架き御教の證(あかし)として御用に立つ様に御取計らひを賜はり、何とも御禮の申上げ様無之候。此身は只管謙り(へりくだ)、又大切の御做ひを以て、此の測られぬ賜をいたゞき、且尊翁始めコンパニヤ(ゼスス會)のパデレ、イルマンの方々が捧げ下さるミサとオラショの御功德に與り申し候。此等に對して、特には尊翁に對して御禮申上、尚此上の御合力を願上候。

一六〇九年一月七日(慶長十三年十二月二日)

次にジョアン甚五郎が副教區長へ送つた手紙は左の通りである。

デウスの御恵を以つて尊翁へ一書差上候。御主の御計らひにて事定まり、小子が日頃望み候時節到來致し、我が妻子を

も、家をも、此の世の何物をも、又其と共に此の命をも、御主の御名聲の爲に、御主を敬ひ奉る爲に、又その聖き宗旨の爲に、何事をも捧げまつるべき事と相成候。此の特別なる御惠を頂仕難候について深き御禮の心を一々申上げんは、拙き筆の及ばぬ事に御座候。貴宗が只今の此身に對して御示しなされ候御慈み、且は常々御申聽け下され候聖く、且合力と相成候御言葉の數々、特にはミサの時、オラショの場合に小子の爲に賜はりし不斷の御心盡しに對して、懃く御禮申上ぐるは、力及ばぬ次第に候。此身は深大なる罪人ながら、四年の間、牢屋の中にて試煉を喜び受け候て、春過ぎ秋來る間をも一時(ひとゝき)の樣に過ごし候て後、今玆に、何物をも此身の命をも御主に捧げ候時に近づき候。申上ぐるにも中々言葉及ばず覺え候。

此の手紙を出した時は、彼等の死期の近きつつあつた時で、八代の奉行は主君肥後守と往復を重ねつつあつたのである。即ち角左衞門の下役に蟹江藤兵衞と野尻久藏の二人があつて、在牢中の者に同情し、何とかして助けたいと考へ、いつまでも入牢させないで何とかしたいといふ旨を上に申し入れた。それが淸正の御機嫌をそこねて、それならば殺してしまへといふ命が傳はつた。二人は藪蛇をついて如何ともし難い。そこで囚人二人の四年間の牢舍の生活が終るべき運命は定まり、且つその子等をも共に殺す事になつた。但し奇妙にも妻女には及ばなかつた。その命令が愈々執行と定つたのは、慶長十三年の十二月六日（1608一月十一日）。獄吏が之を傳へた時に、二人は愈の最期(さいご)を喜び迎へて、早速書面を認めて、同じく獄中で慰問を受けた神父バエサに宛てゝ最後の別を告げた。ジョアンは、その前から書きかけてゐたのを、その日に書きつゞけ、刑の執行に引き出される時にも尙ほ書かんとして中止した程である。その二通を左に出す、二つとも告白として最後の覺悟と喜びを表すると共に、一生の告白として最期の準備をしたものである。

デウスの御計らひの御蔭を以て、此書を尊豪に差上候。

十四年前、ベント（Bento）が死に候時、その妻ルシヤを慰問の爲長崎へ參り候節、ベントが度々小子にキリシタンたるを勸め候ひしを思ひ出し、ルシヤに說法を聽聞致し度旨申し候。ルシヤは大に悅びて敎師ゴメス（Gomez）樣に引合せくれ、その御敎を受け、それより、天地と萬物の御作手に萬を能くし賜ふデウス、世界の御主おはし、その御意(こゝろ)にて世界を治めさせ賜ふと堅く信し申し、又今まで拜み候神(かみ)や佛(ほとけ)は、迷ひ爲に外ならず、今まで此身のなせし事、申せし事、考へし事は皆間違にて、道理に叶はぬと申す事を悟り候。かくて洗禮を受けんと決心仕り、ピエトロ・パウロ（卽ちナバルロ）樣に之を授

かり候て、今日の仕合まで此命を長らへ候事については、デウスの深き御合力に對して御禮申上候。それ以來、自分の父母、妻子、眷屬、その他友人達も皆デウスの聖き教を知り、又之に歸して洗禮を受くる樣にと祈り申し、それより心は喜に充ち、仕合の中にも不仕合の中にも、デウスの御思召に隨ひ奉る樣に生き申し度き熱き望にて一貫仕り、此アニマは、これを作り賜ひし御方を敬ひ奉るに隨つて、日に日に深みに進み候事を、つくづくと心に覺え候て、何時も、何事にもデウスの御思召を成し遂げ奉らんと努めて今日に至り候。然るに、あはれの罪人たる此身は、此の願が霧と散るを覺え、その心を實行するに力足らぬを感じ候へば、我等が御主の御母なる聖きマリヤ樣に御願ひ申上げ、あはれの此身の上を見そなはし、その御子の御惠によりて此の身も、父と母、妻と子、諸共に、御主の御用を勤め奉り、デウスの御名譽の爲に盡し得る樣、常々祈り奉り候。かくて、惡人が死罪になるを見申す毎に、心に考へ候。彼の人は浮世の寶を愛する爲に、その貴き命をかくまでも惡く用ゐて、御仕置の最期を遂げ候に、此身はデウスの御爲に命を棄て得ぬやと考へ候。此身のあはれなる命は、何の御爲にもならで終るべきや。此身は重き罪人にて何の功徳もなき身ながら、御用を勤めたき願に燃え立ち候へば、御主の御爲には、あらゆる苦みをも凌ぎ申すべき候樣に、御主に御願ひ申上げ、只デウスの御守護に依りて苦患を堪へ得るならば、此の身の屍をも御仕置の場に棄てられ候樣にと念じ申候。

此の樣にしてデウスの御思命の此身に加はるを待ち候も、時としては、次ぎ／＼に起り候困苦病乏に弱はり候て、場處を代へて逃げ隱れ、人の奴僕となり、如何なる卑賤の仕事をも致し候て、一生を送らんかなど考へ候事も有之候へども、デウスの御惠に依りてその樣の考を仰へ、今此場合に、御主の御用を勤め候爲には、此の八代に越したる場處は無之と存し、此處にては、世間擧りて、此身を卑め辱め候へども、此く卑め辱めらるるも、御主を救ひ奉るが爲に起る事に候へば、此世の貴人が榮華權勢に誇り候にましたる貴き賜に外ならずと覺へ候。此く考へ候て心は平靜に相成り、御主の御名の爲に牢舍の人となることの御許しを蒙り、その御惠に對して千萬御禮を申上候。此くて、此身も心も、皆デウスの御召に預り候を悟り、此身を全くその御手の中に委せ奉り候へば、その上は何の心配も不安も覺え申さず候。

此くまでの御惠に御對へ申し上ぐる爲に、何事をなして宜しきや、自分には辨へ申さず候へども、如何にして牢屋の中に

て病死致さず、御主の御名譽の爲に此身を御用立つる時に會ひ度き望のみに候。戰ふべき場處に出で候ふまで生き延び、勝利者たる御惠を受け候て、我が肉身は惡人の骨堂に歸し、デウスの御名譽が此の國々に遍き樣致し度く存し候。

刑吏三太夫殿、今朝來られ、此身の刑死は間違なかるべしとの事に候。此の音信についてデウスを稱へまつり、敬の心と謙の心をもちて、此身を召さるる御使の來るを待ち申べく候。此喜び言葉に盡し難く、拙き筆にては記され申さず候。長の間、尊寮が賜はりし御親切を忘れず、只此身の不つゝかを御赦し下され候樣奉願候。

ゼスス樣、マリア樣

一六〇九年一月十一日（慶長十三年十二月六日）

次にジョアン甚五郎の長文は、前に述べた如く二段になつてゐる。

御主の御惠を以て、萬事打明けて申上げん爲に、尊寮に一筆差上候。十年前までは、ゼンチョの暗と過の中に沈み、あらゆる罪科にからまれ居り候ひしが、不思議に又無なきデウスの御慈悲によりて、聖き洗禮を受け候て（それより一日も怠らず、此の言ひ知れぬ御惠の御禮申上候）、聖きヒデスの御光に照らされしを覺え候。此と申すも、天と地と萬の物の御主が、人間全體、特にはあはれなる罪人なる此の身をも、御慈みの中に包み遊ばさるゝを思ひ、尚又デウスの御子、我等の御主ゼススキリシトが、我等を救はん爲に人間と御生れ遊ばされ候て、いたましき御パッショを受け賜ひて一命を御棄てありしを目前に見候爲に有之候。此の限なき御惠を思ひ見ては、此身の骨をも全身をも粉に碎き灰と致し候ても、御惠みには相應すべしとも思はれ申さず。此の御慈悲に對し奉りて、今直にも、我が妻子をも、我が家をも財寶をも、此身の命をも、何物をも殘さず、盡く、御主に捧げ奉りたく存じ候。但、此身はあはれの罪人とて、我が力のみにては足り申さざるにつき、特に深く聖きマリヤ樣に御賴み申上げ、その御子に御取なしを願奉り候。

小子が教に入り候て二年の後、此の肥後國に戰亂相起り、今までキリシタンなる領主の御領分なりし處もゼンチョの領分と相成候。肥後は元來生國にて候はず、只生計の爲に參り候次第故、そこを去りて、長崎なり生國鄕なりに落居仕候事も相叶候へども、御主の御用を勤むるは此の國に過したる處なしと考へて、そのまゝ住居仕候。その間に迫害は段々にはげしく相成候も、五年の間、デウスの御合力にてそれに打勝ちて今日に及び候。又力の及ぶ限り仲間の人々を援け候て、

御主の御名專の爲に殘りなく此の身を御用に立てらるゝ様、斷えず御主に願上申候。

かゝる間に町の奉行より召出され、殿が小子のキリシタンなるを怒られ候については、ゼンチヨに立歸るか、又は數々の苛責を經て命を失ふか、二つに一つを撰べとの申渡を受け申候。それに答へて申候は、如何に申渡され、又如何なる御仕置を蒙るとも、キリシタンをやめ申さざるべく、此身が崇め奉る御主は、萬の事を能くし賜ひ、天と地を作り、その御はからひにて天地を治め賜ひ、量なき御恩にて人間を包ませ賜ふ旨を申し陳じ候。尚又、御主が肉身に生れ賜ひし事、御主の御パッショと御命終と、その他聖きヒデスの條々を申述べ候。奉行の申さるゝには、その數の條々は結構にて尤らしきも、領主の言附に從ふ爲には牢に入れる外なしとの事にて、それより領主が來られて、最後に死罪の申渡を受け候。

此くて牢舍の身と相成り候が、此の罪人の我身に此くまでの御恩を下され、御主を敬ひ奉る爲に閉ぢ込められ候御禮を申し盡し難く覺え候。牢舍の試練については不足は無之候も、今まで此の脆き肉身に左右せられ候て、重き罪科の數々を行ひ候事を悔みてはもだへ申候。此の爲に、此身の力に叶ふ事をもと存じ、斷へずオラシヨを申上げ、デシピリナ（苦行）とゼジユン（斷食）とを致し、今までに既に妻子と財寶とを御前に奉り、此よりは我がアニマと肉身とを捧げ奉るべく候。

今まで度々死罪の時はありながら、今日まで延び／＼に相成候爲、時が卒事にてもあるやと氣遣ひ候も、愈よ御主の御計らひの御恩にて、最期に近づき候。此身を詣づるキリシタン多く相成り、綜も長からぬ事と存し候。

（死刑が愈々十二月六日（陽暦一月十一日）になつたので、その後に又書き加へた分がある）

全能の御慈みに對して謹く御禮申上ぐるに言葉なく、此御慈みは聖きチリンダデ（三位一體）の御思召と量なき御慈悲、又スピリトサントの御示しより事起るとは申しながら、小子が洗禮を受け候は全能の御手にて、それより後聖きサガラメント、その後御教訓、御慈悲を度々に賜はりし御恩にて、此身の心には、聖きヒデス愈よ相固まり申候。即ち萬づ能くし叶ふ永遠なるデウス、我等の御主は萬の善徳を量なく具へ賜ひ、宏大の御仁慈を以て、溢るばかりのその御名譽を我等にも知らしめ給はん爲に、天と地と萬の物を御作り遊ばされし事、人間全體が、アダムの罪科にて御作手の懲らしめを蒙り、パライソの光榮を失ひし後にも、尚ほ人間全體をその御慈みに包ませらるる事、此等は總て言葉も及ばぬ仕儀なる事をも考

へ得る樣に相成候。その上、誠に聖きデウスの御位は、哀れの人間を扶けん爲に、下生して人身を受け賜ひし事、此は皆デウス御自分の御爲ならで、我等の爲に量りなき善德たる事、此れ皆人間の智慧の及ばぬ事を承知仕候。御主の聖き御生涯は三十三年にて、その最後の尊き御業は御パツシヨに極まり候。デウスの御子は、人間の間に御交り遊ばされて、御父が我等人間の罪科を赦させらるる樣、又我等があらゆる惡を避けて萬の善を行ふ樣、又我等が萬の物事に越えて、御親デウスの御意を行ひ、その御敬を以て御用を勤むる樣に、我等を御導きなされ、我等の御師匠、御導手にて在らせられ候。此等の眞の道理を考へ候て、小子は、假令微小にてもあらゆる過を犯さゞる樣に、力の限り精進すべきを承知仕り、此の思は深く心に銘じ候。それにもかゝはらず、惡に慣れたる身の、善き心は散り易く、困りはて候につき、御取なし役を聖きマリヤ樣に御願申上げ、それと共にアンジヨス（天使）サントス（聖者）皆々樣の御合力を求め候て、我が罪科の御赦を蒙り、善德の備へを得る樣に致すべくと決心仕り、初めの年にはセスタ（金曜）毎にゼジユン（斷食）仕り（此もデウスの御惠にて仕遂げ候）、次の年にはセスタとサバト（土曜）にゼジユン仕りて、今日まで相續け、一年以來、ゼジユンの外にソマナ（週）毎にデシピリナ（苦行）を加へ候。牢屋の中には、セスタとサバト毎にデシピリナ仕り、數ケ月たちて後よりはソマナ毎に四回仕候。相應しからぬ祈り又思ひながら、それにて常に御主に御願申上候は、妻子も家督財寶も、亦考へ、言業、行ひ、その他何事をも盡く御主にさゝげまつる一事に御座候。かくて量なき御情の御陰にて、此身は牢舍に入れらるる樣に相成り候へば、此上はデウスを敬ひ奉る爲に苛責にあひ、命を棄つる人々の數に御加へあらん事を、夜となく晝となく不斷に願上居候。又聖きエケレジアの和合と榮の御爲に、パツパ樣の御爲に、又ゼススキリシトの御教が萬の國々に擴がりしみ込み候樣に、キシリタンダデ（宗門）特には日本のキリシタンダデの平穩無事なる樣に、その他ビスポ（司教）樣、此の會（ゼス會）の管區長、パデレ、イルマン、同宿、その他アニマ飼達のみならず、異端、反教、背教の人々の爲にも、モルタル科に陷れる人々、プルガトリヨに居候アニマの爲に、その他總てエケレジアの御用の爲にと、オラシヨを捧げ居候。オラシヨは通常夜中より相始め、朝飯の時まで續け、その後少しく休息仕候て、スピリチユアルの書を讀み、且つ思を潜めてメデタサン仕候。夕飯の後、少しく眠り候て後、念誦仕候。此くて、肺臟閉塞に冒され候まで續けて今に至り、……

此が終りで、章句は中斷してゐる。即ち書き續けてゐる間に刑場に引出されたので、此の手紙が筆者の死後に殘り、宛名に送られたのは不思議な位であるが、他の信者等が、如何に熱心に殉教者の爲に盡し、危きを冒してその遺筆遺物の一片をも大

切にしたかといふことを證する材料である。それには、獄卒に賄賂を贈つて遺物を集めたか、又は獄卒の中にも信者があつて、ひそかにその任に當つたか、何れにしても殉教者のぐるりには、獄中でも刑場でも、他の信者の影がつき副ふてゐたのである。

此の如くにして、慶長十三年十二月六日（1609一月十一日）の黎明、四年の牢舎生活を經た二人の慈悲役は刑場に引き出された。本人の外に、その小供をも一處に死刑にする爲に、それを召捕に向つてゐたが、彦右衛門の子、年は十二歳、名はトメといふのがつれられて來て父に會つた。此子は幼少ながら、母から常々殉教の覺悟を教へられてゐたので、愈々召出される時には、喜び勇み、母に晴着を着せて貰ひ、おもちや類を小供友達に分配し、母と兄とに別れを告げて家を出た。（妻子共にといふ命であるのに、トメの母と兄とが共に捕はれなかつた理由は不明である）。四年を牢中に過ごし、今はの際に幼兒と運命を共にする父の心根。まだ物心も十分つかぬ位の八歳の時に別れ、それから獄中の人として日々その上を氣遣つて居た父に會ひ、意味は定かには知らぬが、父と共に天上の旅路に出る幼兒の心。共に悲壯の極みである。かくて刑吏は執行をいそぎ、トメの來着と共に、直にそこで（即ち刑場の中一般罪人の死ぬ處よりも入口に近い場處で）先づ父を一打に殺した。子は父の遺骸に抱きつき腕を延ばした時に、一刀の下に殺され、父子の屍骸は重なり合つた。父ミゲルは五十歳、彼れが十五年のキリシタン生活は、此の如くにして、あはれな最後を遂げた。

ジョアン兵五郎の方は、不幸にも子の來る前に、たつた一人と共に殺されてしまつた。その時三十五歳。その子ペドロは七歳の幼兒であつたが、刑吏がその母の家に來た時、兄の家へ行つて居たので、（此の場合にも母と兄は捕はれない）父の死期に後れてしまつた。而して刑場に着いた時、父の遺骸が首を失つて横はつて居たが、血を見て恐れもせず、その前に跪いて頸を延はした。先に三人を打つた太刀取は、もう忍びなくなつて、刀を下し得ない。上役は已むを得ず、傍に居た朝鮮人の僕に命じて刀を下させた。慣れぬ太刀取の下す刀は切り損つて、あはれ七歳のペドロは、なぶり殺しの態になつて死んだ。さすがの奉行もその光景に打たれ、キリシタンの殉教精神に感動したものか、刑に用ゐた刀を取り上げ「自分は此刀を帯びるに忍びぬ」といつて、別にして保存したといふ。先の三人の屍骸は尚ほも切りさいなまれて埋められたが、ペドロのはそのまゝになつたので、信者等がそれを貰つて丁重に葬つた。四人の首は八代東門外にさらされたが、遺骸は信者の手で段々に拾ひ集め、後に大矢野島なる柳港へ渡し、それから上津浦で殉教者の遺物として大切に祭られ、その後何れも有馬のコレジョに移された。

六　清正の死と餘波

八代に於ける迫害は此で一段を告げ、慈悲役三人の妻子も、

その他のキリシタンも、此以上には追究されなかつたらしい。清正も或は殉教者の奉行も殘忍を續け得なかつたであらうし、手を責めたのでなからう實例が却て他を激勵するに顧みて、一旦ころむだ者が立上るに至るか。此等の悲壯の殉教ある毎に、一旦ころむだ者が立上るに至り、その中には有馬に出かけて悔ひ改め、罪の宥しを求める者もあつた。而して有馬からは教師が肥後に出張して立上り者のコンヒサンを聽き、信の强い者を慰問し激勵して、感化は却て興隆した。而かも淸正はそれに對して今までの樣な壓迫を加へず、只公に儀式を營む事を禁じ、特に自ら城中にある女中達の間にその禁令を嚴にした。それでも奥女中の間には篤信の者があつて、熱は衰へない。その中の一人はデシピリナで自分の身體を打つ修行をしたが、その音響が外にきこえるのを避け、方法をかへて斷食修行をした。八代の奉行角左衞門も、友人たる竹田と三並の首を大切に保存するのみならず、殉教者に感服して、それを公言する位になつた。

前後十年に亙る迫害の波瀾は、靜まつたとはいへないにしても、餘りはげしく荒れない樣になつた。淸正は他方大阪の事で心痛し、而して終に慶長十六年（1611）六月、即ち三人慈悲役の殉教後二年半で死んだ。その死因について種々の風説もあり、キリシタンの人々は、之を神罰の如く考へた。且つ又、淸正を助けて（或は勸めて）迫害せしめた本妙寺の宗門日蓮宗は、慶長十三年（1608）、その常樂院日經が江戸城で宗論を强いられ、甚しい拷問苛責にあつた。此もキリシタン側では神[illegible]へたのである。

淸正の跡は、その子藤虎丸が繼いだが、始はまだ十三四歲の少年で、萬事は老臣等が掌り、禁教の事は先代の通りながら、時々思ひ出した樣に監禁や追放を行つた。その受難者の中には士分の者も絕えなかつた。然し、二代目加藤の代に於ける迫害は、先代の如く熊本領だけの特別政策でなく、德川幕府の一般政策が段々に隅々に行はれた結果に外ならぬ。

長崎の傳說では、淸正の死んだ慶長十六年に、八代キリシタンの一徒弟がその師匠に憤る所あり、江戸に出てキリシタンの秘密を訴へ出たので、幕府が大に警戒を加へるに至つたと傳へてゐる。兎に角、二代將軍の元和年間から、三代の寬永にかけて、幕府の權力が諸藩の上に加はるに及むで、大名等は自家の考で動くよりも、中央の命令に從つて禁教を勵行した。されば淸正の死後二十一年、寬永九年（1632）二代目加藤が改易せられ、細川家が肥後の大守となつても、禁教勵行は同じであつて、ガラシヤ夫人の後、キリシタンに好意を表した忠興の子孫も、やはり迫害者になり、領內の禁教以外に、天草亂の討滅にも加はり、正保四年（1647）外船が長崎へ入港した時には、三百二十艘の船に一萬餘人の軍勢を出して幕府に忠勤した。その後、寬文年間に於ける熊本藩の宗門改は、「切支丹宗門の迫害と潛伏」に叙した通りである。

山岳夜話

石川欣一

アイスアックス

「私のアイスアックスはチューリッヒのフリッツシ製」……と書き出すと、如何にも「マッタアホーン征服の前日ツエルマットで買つた」とか、「アルバータを下りて來た槇さんが紀念として呉れた」とかいふ事になりさうであるが、何もそんな大した物ではなく、實をいふと三年前の夏、大阪は淀屋橋筋の運動具店で、買つたばかりのボーナス袋から十七圓をぬき出して買つたといふ、甚だ不景氣な、ロマンティックでない品なのである。だが、フリッツシ製であることだけは本當で、持つて見ると中々バランスがよく取れてゐる。その夏、眞新しくて羞かしくもあり、また、如何に勇氣凛々としてゐたとは云へ、アイスアックスをかついで大阪から汽車に乗りこむ譯にも行かないので、新聞紙に包んで信州大町まで持つて行つた。この時は針ノ木峠から鹿島槍まで、尾根を傳ふのだから大した雪がある筈は無く、眞田紐で頭を縛つて偃松の中や岩の上をガランガラン引きずつて歩いたもんだから、石突きの金具や、その上五六寸ばかりの處がザラザラになつて了つた。

この年から大正十五年の六月まで、私のアイスアックスは大町の對山館に居候をしてゐた。居候と云つても只安逸な日を送つてゐたのではなく、何度か對山館の百瀬愼太郎氏に伴はれて山に行つた筈である。今年六月、まる二年振りで對山館へ行つて見たら、土間の天井に近い紐の物掛に、大部黒くなつた長い身體を横たへてゐた。即ちこれを取り下ろし、大町から針ノ木峠、平、刈安峠、五色ケ原、立山温泉、富山といふ旅行に使用した。非常な雪で、また大町――富山の大正十五年度最初の旅行だつたので、アイスアックスが大いに役に立つた。

富山から同行者二人は長野經由で大町へ歸り、私は直接大阪へ歸ることになつた。從つてアイスアックスも大阪へ歸つて來たが、何もすることがない。戸棚の隅でゴロゴロしてゐる丈で

ある。時々令夫人が石突きで石油の鑵をあけたり、立てつけの悪い襖をアックスを用ひてこじあけたりする。山ですべてを意味するアイスアックスも、大阪郊外の住宅地では、かくの如く虐待されてゐる。

所で、私はこのアイスアックスが非常に好きである。時々酔つぱらふと戸棚から出して來て愛撫したりする。アイスアックスが、登山のシンボルであるやうな氣がするからである。元來私が、氷河の無い日本の山を、而も夏に限つて登るのに（將來あるひは冬登るかも知れないが）、大して必要でないばかりか、ある時には却つて邪魔になるアイスアックスなんぞを買ひ込んだ理由は、實にこれなのであつた。刀劍の好きな人が、日本刀に大和魂を見るやうに、私はアイスアックスに登山者の魂を見出す。それにまた、冬の夜長など、心しきりに山を思ふ時、取り出して愛撫する品としては、アイスアックス以外何も無い。

登山者としての私は、道具音痴ではないから、あまり色々な物を持つてゐはしないが、それにしても若干はある登山具を、一つ一つ考へて見るに、座敷に持ち込んで愛撫し得るものは、アイスアックス丈である。登山靴――これはツーグスピッツエの麓なるパルテンキルヘンで買つた本場物には相違ないが盃片手に泥靴を撫で廻すことは出來まい。ルックサック――れも登山にはつきものであるが、空の頭陀袋を前に置いた所で、何の感興も起らぬ。たかだか山寺の和尚さんみたいに、猫でも押し込んでポンと蹴る位が關の山であらう。飯盒――飯盒はいたる處で、私の爲にふつくらした飯を提供してくれたが、さりとて食卓の上にのせて見ると、どうにもしやうがない。お箸でたゝくとカチンカチン音を立てるから、赤ン坊はよろこぶが、一家の主人として威厳を保つ必要がある身分として、そんなことは出來ない。然らばロープか。ロープは一昨年の春、大阪の人西岡氏がいろ〳〵考へたあげくつくつたのを百呎ばかり、使つて見てくれとて持つて來られたのがある。ロープこそはアルプスのシンボルと云へやう。登山、ことにロック・クライミングには必要欠く可からざる品である。現にアブラハム氏の「コムプリート・マウンテニヤ」の第三章「登山具」を讀むと、第一に登山靴、第二にロープ、次でアイスアックス、ルックサックなる順序に説明してある。また、かの有名なるウインパアが、マッタアホーン登攀に成功した話、下山の途中起つた悲劇、それ等に關してロープが如何に重大な役目をつとめてゐるかを思へば、これこそ登山具中の王者とも云ふ可きであ

る。だが不幸にして私は本式のロツク・クライミングをやつたこともなければ、實際ロープを必要とするやうな山を登つたこともない。その上、如何に山を思へばとて、直徑五六分もあるやうな太い繩を百呎、坐敷へかつぎ込んだ日には、井戸替へ屋の新年宴會みたいで、面白くも何ともない。

　そこでいよ〳〵アイスアツクスが出て來る。アツクスは鋼鐵を冠つた鍛鐵である。柄はグレインの通つたアツシで出來てゐる。長さ三尺、重量は手頃と來てゐるから、よしんば振り廻しても大したことはない。右手に持ち、左手に持ち、あるひは柄の木理を研究し、アツクスをカチ〳〵爪でたゝゐて盃の數を重ねて行けば、いつか四疊半の茶の間は見えなくなり、白皚々たる雪を踏んで大雪原に立つ氣になつたりする。寒風身にしみて嚏をし、氣がついたらうたゝ寢をしてゐたなどといふのでは困るが、とにかくアイスアツクスは、我をして山を思はしめ、山を思へば私はアイスアツクスを取り出して愛撫する。

　一九〇二年のことである。モン・ブランの頂上から四人の登山者が下りて來た。内二人はスヰスのガイドであつた。グラン・プラトーと呼ばれる地點まで來た時、突然物凄い雪風（スノーストーム）が一行を襲ひ、進むことも退くことも出來なくなつて了つた。止むを得ず、アイスアツクスで雪に穴を掘り、四人がかたまつて一夜をあかすことにしたが、氣溫は下降する一方で、ついに曉近く、二人は凍死した。

　翌日はうらゝかに晴れ渡つた。殘つた二人は、とにかく急いで下山することにしたが、あまり急いだので、その中の一人が深いクレヴアスに落ちて了つた。クレヴアスとは氷河や雪田に出來る裂目である。深いのも淺いのもあるが、この男が落ちたのは二百尺近くもあつたといふ。そんな所に落ち込めば、命は無いものであるが、この人は不思議に、大した怪我もせずにゐた。

　一行四人が、今はたつた一人になつた。この最後の一人は、これは大變だ、どうしたらうと、しきりにクレヴアスをのぞいてゐる内に、足をすべらして、自分もまた同じクレヴアスに落ち込んだ。同じクレヴアスと云つた所で萬古の堅氷に、電光のやうに切れ込む裂目である。勿論前に落ちた男は、自分の仲間がクレヴアスに落ちて即死したとは知る由も無い。どつちを見ても氷ばかりの狹い場所で、早くあいつが麓に着いて、救援隊をよこしてくれゝばいゝとばかり思ひつゞけた。だがその、救援隊を求む可き人は、今はもう死んでゐるのである。これ程頼り無い、心細い話は無い。

所でその地點から一萬尺下に、シャモニの町がある。この町には非常に强力な望遠鏡が据へつけてあり、この日もある人が晴れ渡つたモン・ブランを山嶺から山麓まで、しきりに観察してゐると、ふとレンズに入つたグラン・プラトーの人の姿。どうやらクレヴァスを覗き込んでゐるらしい。はてな、今頃たつた一人で、何をしてゐるんだらう、と思つた次の瞬間、もう黒い姿は、どこをさがしても見えない。

グラン・プラトーのクレヴァスに人が落ちた。すぐ救助に行かなくてはならぬ。この叫び聲によつて救援隊は立ちどころに組織された。選りぬきのガイド達、手足まとひの登山客がゐないだけに足が早い羚羊のやうに岩を飛び雪を踏んで、遮二無二に急ぐ。

一方、グラン・プラトーの上方に五六人のガイドが、無事に前夜を送つた登山者達と一緒に休んでゐたが、ふと氣がつくと麓から一群の人々が登つて來る。只登つて來るのなら何の不思議もないが、恐ろしく足が早い。とても普通の登山ではない。何か起つたのに相違ない。應援に行かう。とばかり山を下りかけた。

數時間の後、救援隊とガイド達とは落ち合つた。グラン・プラトーのクレヴァスに人が落ちたと云ふ。それでは一緒にさがして見やうといふことになつて、さてグラン・プラトーに來て見はしたものゝ、果してどのクレヴァスのどの邊に落ちたかハッキリしない。あちらこちら覗き込んでは吹鳴つて見ても一向返事がない。さては死んで了つたのか、さつき望遠鏡で見た時から、七時間餘も經つてゐる。よしんば即死しなかつたにしても、もう死んだのだらう。仕方がない歸らう……と話し合つてゐると、どこか變な處で變な聲がする。まだ生きてゐる！と一同急に元氣を出して、又、あちらこちらと覗いては吹鳴り、吹鳴つては覗くうちに、とうとう落ちてゐる場所を發見した。そら、こゝにゐる。綱を下せ。だが、どの位深いところにゐるか判らぬ。一番長い奴を下せ。かくて百五十呎の綱が、スルスルと氷の裂目に呑まれて行つた。すると下から聲がする——まだ四十呎ばかり足りないと云ふ、そこで五十呎ばかりつぎ足した。都合二百呎である。

「よし、引つ張つてくれろ！」といふ聲を聞いて、一同は力を合せて綱を引いた。二百呎の氷の裂目を、ブランブランと上るのは、危險至極である。氷の壁にたゝきつけられたら、頭を割るか、足を折るか、とにかく碌なことは無い。だが、どこ迄も運のいゝこの男は、無事に表面まで出て來た。

前夜、すくなくとも十時間を雪に埋つた穴の中で凍え、二人に死なれ、たつた一人でクレヴァスにうづくまること八時間、

たいていの人間なら、もう山は厭に、ガイドなんぞするよりは、山麓のホテルで門番でもした方がいゝと思ふであらうが、この男はどこからどこ迄アルプスのガイドに出來上つてゐた。もう弱り切つて、ヒヨロ〳〵してゐるのにもかゝはらず、「誠に申譯ないが、もう一度綱でしばつて、クレヴアスに降して異れ」といふ。救援隊の連中を聞いた悅しさに、つい夢中になつて、アイスアツクスをクレヴアスの底に忘れて來て了つたのである。懇望するまゝに、また二百呎の綱を彼の胴に縛りつけて、クレヴアスに降してやる。後生大事にアイスアックスをかゝえ込んだ男が、再びクレヴアスの口に顏を出したのは、それからしばらく經つてのことである。

この話はコリンスといふ人の書いた、「マウンテン・クライミング」なる本に出てゐる。アルプスのガイド達は、登山中如何なる事情があつてもアイスアツクスを置きざりにしてはならぬといふ不文律を、固く守るのださうである。一寸面白い話だから、うそか本當か知らないが——まさかうそではあるまいけれど、コリンス先生の著述目錄を見ると、カメラ、ワイヤレス、飛行機、山、等。いろ〳〵な物に關して本を出してゐるので、いさゝか當世流行の大衆向きライタアらしく、從つて面白く書くことを目的にしてゐるから、ひよつとしたらこゝ迄も又眉唾位かも知れぬ。——アイスアックスの話も序に紹介する。

ノアの山

こゝに述べる迄もないが、手近に素晴があるから書き出いて見やう——

赤淵の源と天の戸閉塞りて天よりの雨止ぬ。是に於て水次第に地より退き百五十日を經てのち水減り、方舟は七月に至り其月の十七日にアララテの山に止りぬ

——すなはち「人の惡の地に大なると其心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡しきのみなるを見たまへ」るヱホバが、地上の生物すべてを洪水で亡さうとしたが、ノアの家族だけは方舟にのせて救つた話。その方舟がアララテの山、アララット山の山巓にひつかゝつたといふのだから、私はつひ近頃まで、アララットなる山は上野の山か愛宕山——どちらも東京の——位な岡だとばかり思つてゐた。所が、ふとしたことで小亞細亞の地圖を見ると、中々どうして、アララットは富士山なんぞより、づつと高い。歐洲第一の高山、モン・ブランよりも高い。大變な山である。これに興味を感じて、あれやこれや、本をひつくり返して集めた知識を、さゝやかながらこゝに書いて見やうと思

ふ。ノアの洪水の話。方舟がアララットに坐礁した話を知つてゐる人は世に多いが、そのアララットの正確な所在地や高さを知つてゐる人は餘り多くあるまいと思ふから。

アララットはアルメニヤとトルコとペルシヤとの三國が合する地點に聳えてゐる。どんな風に聳えてゐるか、私は見たことがないから困るが、何でもあの邊は一帶のプラトーで、その最高地點が、アララットの大塊（マシーフ）になつてゐるらしい。この大塊は大體に於て孤立してゐるのだが、北西に當つて六千九百呎ばかりの col があり、それが火山性の山々の長い尾根につながつてゐるのださうである。

この col といふ語は、よく山の話に出て來る。峠を意味するフランス語だが、鞍部とでも云つた方が判りが早いであらう。つまり二つの高い峯をつなぐ尾根の最低部を指すのである。

所で、このマシーフから峯（ピーク）が二つ立ち上つてゐる、その高い方が大アララットで、高さ一萬七千呎(一)――「大きな、肩幅の廣い塊で、圓錐（コーン）と呼ばんよりも寧ろ圓屋根（ドーム）と云ひ度い」と記述されてゐる。低い方、即ち小アララットは一萬二千八百四十呎、これは前者に比較すると形もよく、險しい面を持つ峯であるといふ。

アララットの雪線は極めて高く、一萬四千呎、降雨量がすくないのと、麓なるアラレックスの平原から乾燥した空氣が吹き上げるからである。

山それ自體の説明はこの位にしておいて、アララットに關する傳説と登山の歴史とを簡單に紹介しやう。

アララットの傳説は、ノアの方舟に關するもの以外に何もない。然るに、幸か不幸か、私は基督教信者では無く、殊に聖書の歴史に關しては全然無智であるから、變てこな本を拾ひ讀みしては間違つたことを書く恐れがある。むしろ別所梅之助先生の「運命以外の一路」の一節を拜借した方がよいらしい。別所先生はこの著述中「背景としての山」なるチヤプタアに於て、次のやうに云はれてゐる――

スメリアの文明は、ユーフラテス、チグリス兩河の流域に起れるもの乍ら、神々の怒に洪水來りて、全地の人皆の溺れ死せるをり「人種を保存せる者」といふ英雄の、一家と共に難を船に避けて、遂に山に住んだといふ傳へがある。このつたへがバビロニヤのギルガメシの詩の中に收められて「生を見いでたる者」といふ英雄が、人皆の大水に土と化せるをり、御座船やうの大船をニシルといふ山につないで、生を得たと

たい、それは其中に入つては、方舟をアララットの山によせたノアの物語となつてをる。

如何にもさうであらう。大洪水がどんなに大規模であらうと、一萬七千尺の山をかくす程の水が出たとは思はれぬ。だが、それにしても、黒海とカスピアン・シイとの略々中間に、アラクセスの平野を北に、メソポタミヤの平原を南にしてよこたはるこの一大プラトウ中、最も高く、最も壯嚴な山を仰ぐ人人が、こゝから我等人類の祖先が下りて來たと思つたのは、無理のない話である。傳説はアララットの附近に、大洪水に關係のある多くの場所を持ち來した。エデンの園はアラクセスの谷に、ノアの妻の墳墓はマーランドにと、いふ風にされてゐる。またアーフユリにはノアが最初に植ゑた葡萄の木なるものがあつた。これは一八四〇年に地震があり、山の上から落ちて來た岩と氷と雪とが、アーフユリの村も、そこにあつたセント・ヂエームスの僧院も、また葡萄畑も押しつぶして了ふまでは、見ることが出來たといふ。創世紀の第九章には「爰にノア農夫となりて葡萄園を植ることを始めしが、葡萄酒を飲て醉ひ天幕の中にありて裸になれり」といふことが記してある。素裸になつて眠て了ひ、伜のハムに醜態を見られるのである。やがて一ノア酒さめて其若き子の己に爲したる事をしれり。ここに於て彼言ひけるはカナン詛はれよ彼は僕等の僕となりて其兄弟に事へん」と云つてゐる。ハムはカナンの父であるが、自分は醉つぱらつて醜態を演じながら、「カナン詛はれよ」もないもんだと云ふやうな氣がする。

それはどうでもいゝとして、とにかくアララットはこんな山であるから、アルメニアの僧侶達は長い間、この山の「秘密の頂」には神聖な遺物があり、人間は登つてはならぬものと信じてゐた。山の上に何か神聖な、恐る可き物があつて、登つてはならぬといふ迷信は、大部方々にあつたらしい。マッタアホーンの如きもさうである。麓の住人だちは、マッタアホーンの頂上には荒廢した都會があり、惡魔が住んでゐるものと思つてゐた。地質構造上、この山は時々大きな岩片を落すが、それは惡魔の仕業だと信じてゐた。

最初にアララットの頂を極めたのはパロット教授の率ゐた一隊である。彼は一七九二年に生れて一八四〇年に死んだ獨逸人で、當時露西亞の政府に雇はれてゐた。このパロットが一八二九年の九月廿七日「永遠の氷が形づくる圓屋根」の上に立つたのである。第一夜を山腹の僧院で送つて、翌朝、山の東南を登

り、一萬二千尺の地點まで行つた時、險しい氷の斜面に出喰はして引返した。それで今度は北西の方からとつついて見た。第一日に雪線まで達し、翌朝は一同、晝までには山巓に達する積りで、大元氣で出かけたが、又しても急な傾斜面にぶつかつて、立往生して了つた。この時は一萬四千四百四十呎の點まで達したと云はれる。

パロットは第三回の登山を計畫した。今度は人員も増し、道具類も前より多く準備した。それ迄の經驗によつて、氷雪の斜面は斧でステップを切つて登り、それに天氣もよかつたので、絶頂を極めることが出來た。この時パロットが觀察した處によつて、アララットは火山であつたこと、恐らく亞細亞大陸で一番古い山であること、ノアの遺物は何も無いこと等が判つた。

これが一八二九年の話で、引き續き一八三四、四三、四五、五〇、五六、六八、七六、といふ年に登山が行はれた。場所がら露西亞人が一番多く登つてゐるが、中にも一八五〇年にコーデイケ、カニコヴ、モリッツ等が、露西亞につかへるコザックの一隊を引卒して登山したことと、一八七六年に有名なチエームス・ブライスが、たつた一人でブラブラ登山したことは、色色な點で人の注意を引いてゐる。前者は非常な困難をしながらも――あと九百歩で絶頂といふ所で三日二晩を天幕で送つたりした――ついに大きな十字架と重い測量機械を山巓まで運び上げた。コーデイケは彼の報告書の最後に「アララット登山がこれ程困難であることから考へると、どうもノアの方舟がこの山の絶頂に流れついたといふ説は本當らしくない。何故かといふに、かゝる急な、險しい雪の斜面を下るといふことは獸類の多數にとつては致命的であつたに違ひないからである。」と書いてゐる。御承知の通り、ノアは彼の妻、子、子の妻と共に方舟に入つたばかりでなく、鳥獸昆蟲その他すべての「生物、總て肉なる者を」一番づつ連れ込んだ。そしていよ〳〵洪水が減くと、これ等のすべてを率ゐて方舟から出、そして山を下つたことになつてゐる。

これ等の登山家が遭遇した困難に對して、ブライス卿――有名な歴史家、外交官なるチエームス・ブライスに關しては何も書く必要があるまい。――のアララット登山は、あつけ無い程、呑氣なものである。先づ武裝した露西亞兵士六人、案内者二人、通辯一人と、都合九人を引きつれて麓を歩いて行くと、恐ろしく暑い。そこで洋傘をさした。一萬七千呎の山に登らうといふ人が、洋傘をさすといふのだから面白い。

その日は八千八百呎ばかりの處で野營。翌日は何でも早く出

見するに至るといふので、夜中に起きて一時には登り始めた。傾斜はかなり急だつたが別に大したこともなく、間もなく一萬三千呎の點まで來た時、困つたことが起つた。それは兵隊や案内や通辯共が、それ〳〵異る人種に屬するのでお互に意思の疎通を欠き、仲間喧嘩を始めたのである。

この地方に於る人種、從つて言語が複雑してゐることに就ては、ハロルド・レーバン氏も「マウンテン・クラフト」――一九二〇年出版――に書いてゐる。バベルの塔はこの附近にあつたさうだが、今でもバクの市ではすくなくとも百種の異る言語と方言とが使用されてゐると。

ブライス卿は、手のつけやうが無いから、默つて仲間喧嘩を見てゐたが、その中にどうやら話がまとまつたらしいと思ふと、もうこれよりは一足も上に登らないといふ事である。そこで彼は「そんなら俺一人で行く」とばかり、アイスアックスを提げてスタスタ登り出した。外套も持たねば毛布もかつがず、あたり前のトウヰードの服を着た丈であつたといふ。この調子で、寒くなれば上衣にボタンをかけ、霧の中を磁石を頼りに登つて行くと、やがて岩の斜面に出た。恐ろしく寒い上に、霧がひどくて見當がつかぬ。迷ひでもしたらそれつ切りだから、とにかくこれから一時間登つて見て、どこ迄行くか判らぬがどこからでも引き返さうと思つてゐると、突然に岩が無くなつて平らな雪田に出た。そこで、歸途に迷はぬやう、アイスアックスを引きずつて、雪に跡をつけながら進んで行く内に、どうやら下り加減になつた。こいつは變だな、と思つてゐると、この時パッと霧が晴れた。見るとアララット山の絶頂に立つてゐたといふ。

ブライス卿はこの旅行に關して「Transcaucasia and Ararat」なる著述をしてゐる。雪線近く大きな丸太を見つけ、これこそノアの方舟の破片だらうと笑つたことなど、有名な話である。

最後にこの山、普通にアララットと呼ばれるがこれは勿論聖書から來た名で、アルメニア・トルコ・ペルシヤそれ〳〵異る名を持つてゐる。中にもトルコの Egri Dagh は「苦しみ多き山」を意味し、ペルシヤの Koh-i-Nuh は「ノアの山」を意味するといふ。「ノアの山」！　いつか一度は登つて見度い山である。

（一）前に書いたコリンスは一萬七千二百六十呎といふ數字を出してゐるが大英百科辭書によると一萬七千呎。エンサイクロペディア・アメリカナも同樣一萬七千呎。ニュー・インターナショナル・エンサイクロペディアは一萬六千九百十二呎、但し別の測量によれば

一萬七千二百十二呎」と書いてゐる。更にマイエルのレキシコンによれば大アララットが五一六五米で、小アララットが四〇三〇米。ラルースだと大が五二一一米で小が三九六〇米となつてゐる。

秋の山

やつと都合をつけた土曜日と日曜日。金曜の午後大阪を立つて名古屋で乘りかへ、鹽尻で目をさまして窓から覗くと空は眞暗である。松本下車、いやにあたゝかい。これはいけない、折角の二日間を雨にでも降られた日にはことだ……と思ひながら、一時間ばかり經つて大町行きの一番電車に乘つた。十一月六日のことである。

電車が動き出す頃には、まつたく夜が明けた。果して雨模樣である。東の方はまだいくらかましだが西の方は大變な雲で、前山のあたり、渦を卷いてゐたりする。もちろん山は見えない。

もうすつかり冬の景色である。奇麗に刈りとられた水田はカラカラに乾き、眞白く霜さへ見える。借金までして山を見に來たのに、この調子では先づ絶望らしい。仁科の炬燵にもぐり込んで白馬錦をのみながら、ばあさんの濁み聲でも聞くのが關の山かと思ふ。「仁科」はうどんや。「白馬錦」とは地酒の名である。大町から山に登る人は大勢あつても、こんな妙なことを知つてゐる人は、たんとはあるまいと、威張つた處でうどんやと地酒では仕方がない。

穗高、有明、安曇、追分と行くうちに、突然空の一部分が口をあいて、安曇平野の一部にかなり強い日光を投げつけた。直徑約一里ぐらゐであらうか。山の裾と、山に入つて行く廣い谷の一部分とを含む不規則な圓形。そこは、他の場所の鼠色に比較して、毒々しいまでに鮮かな色彩を見せた。全體の調子は、もう全く枯れ切つた雜草や灌木の、黑ずんだ褐色である。それに、何の木か、血のやうな紅葉、更に浮き上るやうに黃色い落葉松。我々が大阪附近でいふもみぢは、如何に多くかたまつてゐても、かう一時に紅葉しないから、たとへ一本の樹であつても、紅、赤、黃、綠、茶といふやうな色々な色彩が集つて、何とも形容の出來ない、やはらかな美しさを見せる。それに反して、こゝ信州も北の方の高原では、紅葉するものは何から何まで一度に紅葉して了ひ、二度三度と霜が來るに從つて、むやみに色を濃くする。殊にこの朝、灰鼠色の天地の中に、ポカリと浮いた木々の紅葉は、植物といふよりも何か動物の臟腑を見てゐるやうで氣味が惡かつた。

大町に着いて電車を下り、クルリと空を眺め廻す。天頂いささか雲切れがして青空が見えるが、それでも雲の動きが早いので、いつ隠れるか判らない。冬外套の襟を立てゝ、ガランとした廣い路を歩く。

對山館の三階の山に面した部屋。三重に覆ひをかけた大きな炬燵に肩までもぐり込んで、愼太郎、耕造の兩氏と話をする。

一昨日は悪い天氣で心配したが、昨日は實にいゝ天氣で、この調子なら二三日は大丈夫と思つてゐたのに今日はまたこんなありさま、だが午後からは晴れるかも知れないと、鶴の子のやうに首をのばして、硝子ごしに北西の方角を見ると、籠川のあたり濛々と霧雨が渦をまいてゐる。時々、バラバラと時雨れに來る。これが山では雪、カラツと晴れると、本當に奇麗な雪の尾根が見えるんだが……と云つた處で、カラリと晴れないのは仕方が無い。バツトを喫ひ茶をのみ、むなしく數時間を送つたが、さりとて無聊に苦んだでもない。半年ぶりに逢つた友達とは、かなり話の種がわいて來る。

蓮華から一寸東の方の山へ行つた。この山、乘越しを越へた所に[illegible]場所があり、[illegible]出かけ、明日未明に島がカスミにかゝるのを見て歸るつもりであつたが、第一天氣はこの通り、おまけにヒユーヒユー風が吹くので、山の裾から引つ返して豫定の如く村へ寄り、店の炬燵にがんばつて、ぢいさま、ばあさまの昔話を聞いた。座敷があるのに通らず、店に坐り込んで只の茶を飲むことを、大阪のお茶屋では油むしといふさうだが、その油むしをやつた譯になる。だが、ぢいさまも——名古屋の生れで大阪にゐたり大連にゐたりした——ばあさまも一向いやな顔をせず、その中に若い藝者が遊びに來たので、ます／＼昔話がはづんだ。所へ隣から藥湯をわかしたからとの招待が來た。ばあさま我等に向つて、

「今日は早くけえつて、あすまた遊びにおいで。」

往來に出ると、もう暗い。カサカサになつた桑の葉に、冬の風が音を立てゝる。愼太郎さんと私とは、並んで立小便をした。

旅のつかれに、いさゝかなる酒の醉が加つて、私はグツスリ眠つた。そして曉近く、何故ともなく目をさまして、見ると障子のガラスと、硝子戸とを通して、黑い空に白い山。白い山と、後で知つたからこそ云ふが、その時は只一面に白いものが、北西の方に當つて黑い空をさへぎると思つたゞけであつた。

またひとねいり。話聲に目をあけると あたりは明るい。頭をもたげる……ハツとばかりに飛び起きて、床の間に置いた眼鏡をかけた。何といふ素晴しい景色だつたらう。

私は寝間着のまゝ廊下に出た。硝子戸をくつて物干台に出る。霜を踏む、寒い空氣が身體をとりまく。それ等のみの故にもあらず、私は異常な緊張を感じて、骨の髄まで身を震はせた。蓮華、爺、鹿島槍、五龍……とのびて、はるか北、白馬の鎗にいたるまで、折からの朝日を受けて櫻色といふか薔薇色といふか、澄み切つた空にキツクリと聳えてゐるではないか。里の時雨は山の雪、その雪は恐らく金曜日の夜から始つて土曜日一日降りつゞけ、夜半に至つて止んだのであらう。降つたばかりの雪、それも高い山の、煙も埃もない空氣を通じて降つた雪である。何が清淨潔白だと云つて、これ程奇麗なものはあるまい。

しばらくしてから私は、眞赤な足と眞赤な手と――恐らくは眞赤な鼻とを部屋に持ち歸つた。いつの間にか炬燵に火が入つてゐる。もぐり込んで、身震ひしながら考へた。面白くない、下らない日を送つては徒に酒をのんで身體を腐らしてゐる私に、萬一ほんのチヨビツとでも、いはゆる眞善美を信じる心がありとすれば、それは一年に一度か二度接する山の、このやうな晴しい景色によつて續けられつゝあるのではあるまいか。

寒い國は朝が遲い。仕度が出來て對山館を出かけた時は、かれこれ十一時に近かつたであらう。ルツクサツクに登山靴といふ愼太郎さん、肘やお尻のピカピカする背廣の私。饅頭やによつて鳥燒きの話を聞いてゐると（饅頭やさんが冬になると小鳥も賣る）チリンチリンと音がして、耕造さんが自轉車で通つた。一足さきに行つてゐるから……といふ後姿を見ると、これまた登山服にルツクサツク。荷物をすつかり二人に持たせて了つた私は、さしづめ殿樣の格である。

製糸場、養鯉池、田。田はもう庭しめ（恐らく庭仕舞であらう。すつかり稻を刈り取つたことをいふ）を終へてカチ〱になつてゐる。前の日こゝを歩いた時は、實に荒涼たる光景であつたが、この時は正午に近い陽が、うらゝかに照るので、何とも云へず陽氣である。小さな谷、その谷の南に向いた方を、路が上つて行く。日溜りに風さへ除けて、額のあたり汗ばむ程あたゝかい。だが、谷の向ふ側は北を受けて、枯れた羊齒の葉に露が白く光つてゐる。あの霜は一日中消えないのであらう。

路が急に曲つた。かん高い女の唄聲と笑聲とが耳に入る。見ると左手に一寸した枯草の平地があつて、年頃の娘が五六人、登つて來る我々には氣がつかぬらしく、しきりに歌を唄ひながら踊つてゐる。「安來踊の稽古をしてゐる！」と誰かゞ云つた。

我々は立ち止つて、小さな樹の木のこちらから、踊の稽古を見た。どこかの工女か何からしい。野暮な、派手な襟卷が草の上に投げ出してある。カルメンのやうな瞳が光る。

ふと一人が叫び聲をあげた。一同は歌と踊をやめた。我々が見てゐるのに氣がついたのである。キヤツとか、ワツとか云つたかと思ふと、中には草に身を投げて、ゴロ／＼ころがりながら笑ふのもある。大膽らしいのが「鳥燒きにつれてつてくれ！」と叫んだ。ひとしきり、若い笑聲が山の沈默を破つた。

しばらく行くと一杯水。路の右手は雜木林の急斜面、左は芝地が約十坪、雜木林の上に大きな落葉松が、まつ黄色な針葉をつけて、スツクリと立つてゐる。

我々はこゝ迄來て休んだ。歩くのをやめると流石に冷える。と、一陣の風が谷から吹き上げた。枯れ切つた林の木の葉が、一時にさわめく。さわめくと云つて了へばそれ迄だが、木によつこ音が違ふ。ガサガサと云ふのもあれば、キヲキヲと云ふのもある。何か囁くもの、不平らしいもの、いろ／＼な聲である。

慎太郎さんはこゝで辨當をつかつた。耕造さんは鎌を揮つて杖をつくつた。私は芝の上にねころがつて、落葉松を見上げた。落葉松の梢から、目が痛くなる程澄んだ空を見た。

山の中腹に、たつた一本生えた落葉松である。高さ何十尺か。幹がすーつとのびて、その幹には犬の毛を植ゑたやうに、短い枝が密生してゐる。上は美事にひらいて、落傘の形である。元來が短い、細い葉だから、枝から生えたといふよりも、枝に從きつけた氣持がする。若葉の時は、まるで煙のやう。黄葉は金粉。

灌木の中に二間ばかりの栗の木が立つてゐる。栗は氣が早い、すつかり葉を落して了つてゐるが、枝のさきに毬を二つ三つつけてゐるので、ガサガサと根もとまで登つて見た。

草を分けると毬は澤山ちらばつてゐる。だが實は一つも見えない。どうしたのだらう、こんな小さな栗を拾ひに來る人もあるまいし、まだ落葉に埋れた筈はなし……と思つてゐると、下から耕造さんが聲をかけた

「栗は無いでせう。栗鼠がみんな持つてつちまふから。」

栗鼠が栗を持つて行く。冬の仕度に、自分の家へ、貯藏庫へ、兩手でかゝえて行く。私はその姿を思ひ浮べながら、一生懸命にさがし求めた。そしてやつと見つけたのは、私の栂指の爪より小さい奴三つ。栗鼠の忘れた栗――これ丈が家へのおみやげである。大切に、チョッキのポケットへ仕舞ひ込んだ。

尾根に近く落葉松の林を歩いた。

落葉松の林には下生えがしない。只一面に針葉の絨氈。しかもこれは餘程上等の絨氈である。柔く、適度の彈力をもつて足に觸れる。また太陽は頭上から、黃金色の梢を通して照る。靜かな、あたゝかい、高貴な光線が我々をつゝむ。何だか宮殿にゐるやうな氣持がした。

登りつくとズラリと山のパノラマ。左手、前山の肩から首を出す鹿島槍から、右手かすかに霞む淺間まで、遠い山、近い山、高い山、低い山、まつ白な山、雪の筋を持つ山、茶褐色の山。眞正面に當る妙高は、いくらか姿を見せてゐるが、雨飾山は雲にかくれて、僅か左の山腹だけしか出してゐない。

半日の山歩き。霜柱を踏んだり落葉を蹴ちらしたり、またはカスミを張つて鳥を取る人を小屋に訪ねたり。そして山の裾に家が五六軒かたまつた相川といふ部落へ出たのは、日の暮れかたであつた。

こゝからトンネルが山を貫いて大町への道をなす。我々は最初から相川の茶屋でビールを飲まうときめてゐたので、軒の低い、すゝけた家まで來て立ち止つた。

家の前は道路、その向ふが松林。銀鼠の薄明がつめたく流れる。松林の中から、子供の歌が聞えて來た――

夕燒こやけで日が暮れる
山のお寺の鐘が鳴る
お手手つないでみな歸ろ――

塡太郎さんと私とは、何故か顔を見合せた。

家の中はまつくらであつた。爐べりで串にさした鳥を燒いてゐたお内儀さんは、不意にドヤ〳〵入つて來た三人の洋服姿に、一寸驚いたらしかつたが、それでも愛想よく

「さア、踏んごんであたつてお吳んなせえよ。」と、爐に松の根を投げ込んだ。

板の間に大きく切つた爐、まさに踏ん込むことが出來るやう

[illegible]
[illegible]る。

折からの接待に、お内儀さんは蝋燭を洋樽の上に立てた。茶の請物でビール一本。風が障子を鳴らして、蝋燭の焔がゆらゆら振れる。

出がけに、ルックサックを背負ひながら拓造さんが云つた—

「お内儀さん、こゝらは朝がいゝだらうね。」お内儀さんは、變なことを聞く人だといふ調子で、しばらく默つてゐたが

「寒いでね。」と、しみ〲云つた。

山と酒

廣い世間には一を讀んで十を考へる人が隨分ゐるらしい。私がパイプの話を書くと、私なる者は朝から晩までパイプを啣へつきりにしてゐるに違ひないと思つたり、酒が好きだとどこかに書いたのを讀んで、私のことを年がら年中酒ばかり飲んでゐる野郎と思ひ込んだりする。このやうな人がどうにかして、私が山に登ることを知ると、「お前のやうに酒をのんでも山に登れるかい」なんて質問をする。

山登りばかりでなく、如何なる運動にも、酒のよくないことをは判つてゐる。私とて勿論登山の最中に酒をのみはしたい。一

[illegible]
[illegible]
酒……但し私[illegible]とりのみ[illegible]にとゞまる[illegible]……といふ問題を[illegible]へ出すと、かなり色々なことがある。

そも〲私が一番最初に山に持つて入つた酒はウイスキーであつた。そのウイスキーが何であつたかは覺えてゐない。これは出發に際して父が所謂氣つけとして、小さな平瓶にいれて與れたものである。

氣つけとしてウイスキーなりブランデーなりを山に持つて行くことは、合理的であり、且つ必要である。水にあたつて急に腹が痛くなつたりした時、シャツであらうと手拭であらうとルックサックであらうと、何でもかでも腹にまきつけ、そして熱い湯をわつたウイスキーかブランデーをグツと飲むと、たいていは治る。

この故を以て十數年前、仙臺の第二高等學校で第一回山岳部講演會兼展覽會をやつた時、展覽會場の一隅にしつらへた「登山必要品」の中には、片パンやウエーファースやコールゲートの練歯磨と共にウイスキーの平瓶が一つ置かれた。片パン及びウエーファースには、おそよ山に入つてゐる間は、いつ、どんなとで連れとわかれるかも知れぬ、たつた一人で深山幽谷を迷・

て歩くやうな場合に陥るかも知れぬ、かゝる時取り出して食ふためで、決しておやつの代りにがり〳〵嚙る可きものではないといふやうな説明書をつけたやうな氣がする。嚙るといへば鰹節も、同じ意味で必要品に加へたやうに記憶する。コールゲートの練歯磨に至つては、實に吃驚すべきもので、その當時誰だつたか日本山岳會の一員が、甲州の山で路に迷ひ、流れに從つて下れば必ず里に出るとの信念を以て、ある溪流に添ふて下るうち、一日二日三日と、ビスケットも食つちまひ、ドロップスもしやぶり盡し、ヘト〳〵になつた時、ルックサックの底にコールゲートの練歯磨が入つてゐるのを發見、これを舐めては水を飲み、水を飲んではこれを舐め、つひに命を全うして里に着いたといふ話が傳つてゐた。我々二高の山岳部幹事は、いたくこの話に感激し、さてこそ練歯磨のチューブを陳列したのである。

所でウイスキーの話に立ちかへると、この展覽會非常な大盛況で、二日だか三日だか續いたが、これでいよ〳〵お仕舞といふ時、ウイスキーの瓶を見ると、大部内容が減つてゐるばかりでなく、變なあぶくが浮いてゐる。誰か見物人が……恐らく二高の生徒であらう……そつと手をのばして喇叭をやつたに違ひない。會が濟んだら飲んでやらうと、實は心まちに待つてゐた我々幹事は、大いに憤慨した。飲んだ奴が判つてゐれば辨償させるなり何なり方法もあるが、それは判らず、第一きたないや、なんて云つてゐたが、その内に誰がのむともなく飲み始めて、とう〳〵空にして了つたことがある。

今年の六月、百瀬愼太郎氏と二人、案内者北澤清志をつれて大町から富山へぬけた時、二人とも至つて酒が好きなくせに、おそよアルコール分を含んだものとては一滴も持たずに出かけたものである。何故またそんな眞似をしたのかといふと、すくなくとも私自身は、それまでにさん〴〵酒をのんで、詰らない、下らない日を送つてゐたのだから、せめて山の中では酒精分は一際口に入れまいと思つた。

これは誠にいゝ決心であつたが、さて大澤の小屋に着いて爐で火が燃え、鍋で白い飯がフツフツいひ出すと、一杯やり度くなる。どこかに殘つてゐやあしないかと、心は同じ兩人が薄暗い蠟燭の光をたよりに、鼠の糞や埃で一杯の小屋の内をゴソゴソかき廻して、樽といふ樽、罐といふ罐をゆすぶつて見たが、コトンともドブンとも音を立てぬ。泥まみれの瓶を見つけ出して、やあ あつたぞとばかり、苦心慘澹、栓をぬいて嗅ぐと醬油だつたりした。仕方がない、あしたは平で、日電の小屋には乾

麦酒があるだらうと、その日はてくてく歩いて了ひ、さてその翌日、針ノ木峠から蓮華の裏の大沢渓を辿つて平に着く。日が暮れて路が判らず、東信の空小屋を借りて一泊するのにも、若しやどこかに酒がありはしまいかと、キョロ〳〵した。次の日は對岸の日本電力の出張所で、手あつい歡待を受け、岩魚や熊の肉の晩飯となる。一行三人、キチンと坐ると出張所長の宮本さんが、お酒を上げ度いがあひにく切らして……と云はれる。いいえ、一向不調法でして……と云ひはしたものゝ、また實際酒があつた所で、とても恐縮でさう呑めはしないにきまつてゐるものゝ、とにかく世界中にこんな美味いものはあるまいと迄傳へられる黑部川の岩魚が、チヂリ、チヂリと燒けて、その香が鼻を打つと、家にしあれば一升瓶だが、あの德利にコクコクと移して銅壺につける。北ではあすこの酒場のおやぢが、松竹梅、白鷹、菊正宗、都菊とそろへてゐるのを、私が行けばむろん「菊」。德利を持ち上げて、如何にももつともらしく底にさはつて見る。南のあの家では櫻正宗、靑磁色の猪口で……と、實に意地のきたない話ながら大阪の酒が目の前にチラ〳〵して、今頃酒をのんでゐるであらう所の、日本國中の何十萬人かが、二皆不俱戴天の仇のやうな氣がして來た。

その次の日は立山溫泉どまり。刈安峠から屋根をつたつて五色ケ原、作見峠、一日中暑い上ばかり歩いてゐたら、そしてはるか下に溫泉の低い屋根を見た時、我々は今夜こそ酒がのめるぞ！と口に出して云つた。若しまだ番人が來てゐなかつたら錠前をねじ切つて倉庫に入つても酒をのんでやらう等と、物騒な考へを起したりした。

溫泉には番人と若い男と二人ゐた。だが、まだ時期が早いので、何の準備も出來てゐない。ヘトヘトに疲れて口をきく氣もしない身體を爐のわきに横たへながらも「おぢさん、酒はあるかね」と聞いたものである。さあ、あるか無いか、藏へ行つて見なくては判らないといふ心細い返事に、濟みませんが行つて見ておくんなさい、若しあつたら二合瓶を二本ばかり積みますと云つておいて、やうやく掃除の出來た部屋へ行く。ここへ、溫泉に入りに入つた北澤が二合瓶を二本さげて歸つて來た。溫泉といふのが野天で、あつくて仕方がねえからスコップで雪を三杯たゝき込んだといふ素晴しいもの。（もつともこれは、また溫泉場を開いてゐなかつたからの話で、本式に始めればこゝから湯を引いた立派な浴場が出來る。立山溫泉の名譽のために、一言辯じておく。）それはともかく、そら酒が來たといふので急に元氣づいて、見れば其レッテルの色もあざやかな櫻正宗である。早速燗をして飲んで見ると、うまくも何ともない。苦くつ

て、ピリピリして、猫いらずを溶いた水を飲んでゐるやうな氣がする。三人かゝつてやつと二合瓶を一本あけた頃には、頭がガンガンして來た。二本目は封を切つただけで、番人だちに贈呈して了つた。

あんなに飲みたかつた酒が、どうしてから飲めないのだらう――我々は不思議に思つた。だが考へて見ると相當な理由がある。第一櫻正宗が非常にいゝ酒であるとしても、二合瓶につめられて大阪から富山へ送られ、それから何里かの山路を立山溫泉まで持つて來られる內には、多少どうかするに決つてゐる。つづいて冬、どんた倉庫だか知らないが、いづれ雪に埋つて一冬を送るのだから、酒の味それ自體もすこしは變らう。だがそれ以外に、私だちの身體の狀態が、どんた酒を飲んでもうまいとは感じないやうになつてゐたのではあるまいか。

要するに日本酒は淺酌低唱といふところ、小さな猪口を口にふくんで、氣永にチビリチビリやる可き性質の飲料である。盃洗でひつかけたり、デカンショに合はせてあふつたりするのは邪道である。衣食足つて――禮節の方は知らぬが――銀行に特別當座預金でもあらうといふ泰平の逸民が、四疊半の投げ入れを見ながら、一杯一杯、「河豚汁や」を考へて、頭をピシャピシャやつて飲む可きものである。

かくの如き日本酒を、立山溫泉で飲んだ我々は、一體どん「我々」だつたらう。三日も四日も激しい勞働をやつて、而も紫外線の多いといふ高山の日光と雪の照りかへしとで、手や顏の皮がむける程まつ黑になつてゐた。自然のぼせる。唇には縱に罅が入つて、笑つたり、欠伸をしたりすると血が吹き出す。口腔はネチ〳〵して、いくら水やお茶を飲んでも平常狀態にならぬ。兩眼は雪眼鏡をかけてゐたにもかゝわらず、やはり充血してゐる。齒はみがかず鬚は生えつぱなし。こんな野蠻人にごくわしては、酒の方から忌避しても、一向不思議でない。

過激な筋肉勞働をする人々が、一日の仕事を終へると、電氣ブランとか燒酒とかいふ強烈な酒を飲むのには、あるひはこれ等の酒が日本酒に比べると安價で、早く醉がまはるといふ原因もあるであらう。だが、あるひはそれ以外に、肉體の疲勞が甚しい時には、燗をした日本酒のチビ〳〵飲みが、何等の快樂をも持ち來させぬといふやうな理由も存在するのかも知れぬ。

大正十三年の夏、黑岩直吉の兄弟と、針ノ木から鹿島槍まで行つた時には、ウイスキーを一瓶持つて行つた。大瓶一本、山ではかなりの荷物になる。やめやうかとも思つたが、何、俺が持つてゆくといふので黑岩に賴んだ。第一夜大澤。天幕も張れ、飯も出來たといふ時コルクをぬいて、氷のやうな水に割つ

て一息に飲んだ。冷たい水が胃の腑に達すると同時に、ふーつと、何とも云へぬ醉が出て來て、疲れが一時に消えて行く。腹もうきければ元氣も出る。その後マヤクボ、棒小屋の乗越し、冷ノ池と三個所で野營することに皆で――と云つて、主に黑岩と私だが――一杯づつやり、とう〳〵一本空にして了つた。

棒小屋乗越しのウイスキーは、もう二年半になる今日、まだ忘れらぬ位うまかつた。元來、前夜はマヤクボで野營する筈ではなかつたのに、雨が降つて來た爲急に豫定を變更したのである。從つて乗越に着いた時は、まだ日が高かつた。早速天幕を張る。いつでも寢られるやうにしておく。甑のやうな形をした竈に火を焚いて、その上に太い枝をさしかける。黑岩の兄は近くの水溜りへ米を洗ひに行つた。同行者のT君は、如何にも光線が面白いからといふので、寫眞器を持て天幕のまはりをウロ〳〵してゐる。私はウイスキーの瓶と瀬戸引のコップとをさげて、黑岩の横に腰を下した。

コップを差出しながら「直吉さん、どうだね、一杯。」と云ふと、吃驚したやうな顏をして「さうかね、えれえ濟まねえな。」といひながら、底に一寸ばかり受ける。そいつをキユッ！「うめえね」と手の甲で口を拭く。

私も一息にやつてから、コロリと草の上に長くなつた。とか星いなはまことにたく、そしてたかい。風もなければ心もしかぬ日暮れ時。足のさきで、パチパチはねる枯枝の音を聽きながら、ウイスキーの醉が、疲勞につかれた身體中の筋肉を一つ一つ、ほぐして行くのを感じる。山に登るたのしみ！私は前人未踏の所謂處女峯を征服しやうとも思はないし、エヴエレストの絶頂に日章旗を押し立てやうとも望まない。かくの如き草の柔かい場所にねころがつて、野營地をさがす心配もなく、飯をたく水に不自由もせず、ウイスキーの醉を感じてゐさへすれば、私は滿足する。

山と女

酒の話のすぐ次に、女の話が出て來ると、すこし、よろしくないやうだが、婦人と登山とに就て心に浮ぶまゝを、ボツリボツリ書いて見やうかと思ふのである。

「婦人と登山」と云へば日本體育叢書の第十五篇「登山」に於て、著者田中薫君は「婦人の登山者の爲に」なる見出しの下に、詳細に服裝のことを書いてゐる。どうもブラウスとかナイトキヤツプとかワンピースとか富士絹とか、いやにくはしいと思つてゐるなら、今年の夏は夫人同伴鹿島槍に登つてゐる。これではくはしいのがあたり前である。

閑話休題――と云つたところで私の山岳夜話、ことごとく閑話ならざるはなしだが――こゝに英國ケスウヰックの住人、ヂヨーヂ・アブラハム氏の著「コムプリート・マウンテニヤ」は、日本にも澤山來てゐるから、たいていの登山家は知つてゐるであらうが、一九〇七年の十一月に第一版を出し、翌年二月、たゞちに第二版を出した。飛んで一九二三年に改訂第三版が出たことは、著者自身も書いてゐるやうに、一般向きとは云へぬ登山なるスポート界ではエポックとも考へる可きである。然し別の考へやうをすれば、この「コムプリート・マウンテニヤ」は、山登りの技術だけを書いた本なのではなく、いろ／＼なアネクドートや、エピソードが澤山入つてゐるので、所謂讀物としても面白く、從つてよく賣れたのであらう。

それはとにかく、「コムプリート・マウンテニヤ」を開くと、先づリッフェルアルプから見たマッタアホーンの寫眞、タイトル・ページ、それに續いて全一頁のまん中に小さく

TO
HER WHOM I MET
ON THE ROCKS

と、三行にわけて印刷してある。申す迄もない、デディケーシヨンで、著者ヂョーヂ・D・アブラハムはこの本を「岩の上で逢つた所の彼女に」さゝげてゐるのである。

私はアブラハム氏の私生活を知らないから、「岩の上」の彼女が誰だか、もちろん判らぬが、このデディケーション、一寸氣になる。氣が利いてゐるやうな、思はせぶりなやうな、變な文句ではないか。高等學校の山岳部員が感激しさうである。いや、事實、高等學校時代の吾人は、大いに感激して、いろ／＼と岩頭の彼女を空想したものである。だがその頃、富士や筑波はいざ知らず、所謂日本アルプスに登る女は至つて少數であつた。たまに登る人は奥さん方で、これでは著述をデディケートする譯にも行かない。

その後十數年、今日では大部女の登山者が増加した。女學生の洋服税、女子スポーツの隆盛が、今後ます／＼若い娘をして登山せしめるやうになるものと思ふ。すると、これからさきの若い登山家たちは「岩の上で逢つた彼女」に、著書なり一生涯なりを捧げる機會を多く持つやうになるので、これ誠に沸山しい話だ。何もこゝで婦人問題を論じやうとは思はないが、元來登山なるものは、平素運動をしてゐる人にとつては、その性の如何を問はず、大して過激なものではない。といふより、登山は、プランの立てやうに依つては、比較的樂な、愉快なスポートである。だから、夏休なり何なりに、夫婦でルックサックを

背負つて山に出かけることに實に面白いと言ふ。

[illegible]以前、ウエールスの山、スノードンに登つたことがある。この山、高さは僅か三千五百七十呎だが——それでもイングランドとウエールスでは一番高い——實にいゝ形をしてゐるので、普通「ブリティッシ・マウテンスの女王」と呼ばれてゐる。殊にワッツ・ダントンの小説「エルウヰン」に出て來るので、私は大部昔から、所謂憧憬を持つてゐた。

所でこのスノードンは、ロッタ・クライミングで有名な山であると同時に、山岳鐵道が麓から絶頂まで走つてゐて、おまけにその絶頂にはホテルが建つてゐる。アブラハムの言によれば「絶頂に達する壑(ガリース)の中の若干は、今や頂上ホテルのゴミ卸樋(シュート)になつて了ひ、如何に登山術を心得た人でも、スノードンの秀麗なる北側面を殆ど絶間なく落ちて來るチンチヤ・ビアの空瓶や、鰯の空罐や、その他の物品を避けるだけの技能は持ち合はさぬ」のであり、また「ラスキンの所謂『山の憂鬱と山の榮光』とは不信心な旅行者の群をはこび上げる。キヽ〳〵いふ、煙だらけな山岳鐵道によつて攪亂されてゐる」のである。私もこの「不信心な旅行者」の一人として、ある美しい秋の日の午後、スノードンの峯に立つた。別に辯解するのでもないが、その後一月足らずで日本へ歸る時だつたので、金も無く時間も無し、とても悠々と山を登つてゐる譯に行かなかつたのである。

やがて汽車が出るといふので、停車場の方へ足を運んだ時、突然橋下の岩角から、かなり大きなルックサックを背負つた男があらはれた。登山服、登山靴、汗ばんだ顔。あゝ、ガリースの一つを登つて來たのだなと思ふ間も無く、續いて今度は、まつたく男と同じやうな身なりをした女が顔を出した。頭をキリッと絹のハンケチで捲いてゐる。引きしまつた身體つき、日に焼けた頬。その晩は恐らくホテルで泊るのであらう。下山する汽車には目も呉れず、大股に絶頂の方に歩いて行つた。

私と一緒の汽車で下りる人々は、いづれも不思議さうな、好奇的なまなざしで兩人を見送つてゐたが、私は浦山しかつた。時間さへあれば、金の方はどう都合つけても、エルウヰンの路をたどつてスノードニアを歩いて見たいと思つた。

それから日本へ歸つてからのある夏。私は久しく登る機會を得なかつた鹿島槍を再び訪れる可く、信州大町へ向つた。暑い七月の終り、寢不足な身體を信濃鐵道のせまい窓にもたらせて、松本から大町まで、汽車の速度の極めて遲々たるのに、いさゝか癇癪を起してゐると、とあるステーションで、こちらの汽車を待避してゐた列車。キャーワーといふ黄色い叫び聲に吃驚して見ると、丁度直向に當る車室は一杯の女學生である。

鼠色によごれた上衣、紺のスカート、ナイト・キャップみたいな帽子、中には鉢まきをしてゐる娘もある。「白馬登山の女學生が歸つて來た！」と同室の地方人の話に、なる程この連中、白馬へ行つたのかと知ると同時に、汗くさい、日向つ臭い女學生數十名に、一ときに絶頂を踏んづけられた白馬が可哀想になつた。「岩の上の彼の女」は單數にかぎる。若し「彼女等」になるならば、せいぜい一人か二人までのこと。數十名の彼女等に取りかこまれた日には、如何なる Lusty knight of Alpenstock 元氣よきアルペンスツクの騎士――も、たぢ／＼になることであらう。

山と煙草

酒の話を書いたからには、煙草のことも書かねば義理が惡い――といふ譯でもないが、筆の序に一言して見度い。

G・W・YOUNG氏の編纂した「マウンテン・クラフト」は、いろいろな意味に於て私の愛讀書である。讀み物としての面白味からいへば、ヂョーヂ・アブラハム氏の著書の方に遙かに面白いのがあるが、登山のテクニックに關する知識を得る點から見ると、このマウンテン・クラフトが一般的の役に立つやうな氣がする。

話はいさゝか横路に入るが、ヤング氏がこの本に書いた序は愉快な言葉で始つてゐる――

「この本はマウンテニヤスの爲に書かれたものである。而して マウンテニヤとは登山をする人だけを指すのでは無く、好んで山の周圍を歩き、好んで山のことを讀み、且つ考へる人の誰でもをいふのである。」

私はこの言葉が非常に氣に入つた。そこでマウンテニヤなる英語は果して何を意味するのか、調べて見やうと思ひ、手近の辭書類をひつくり返して次の結果を得た。

第一に三省堂の「模範新英和大辭典」。これによると名詞の一が「山住みの人、山人。」二が「登山者。」別に「山に登る」なる自動詞があげてある。

次に中學校時代かに使用した齋藤秀三郎氏の「英和中辭典」を見ると「山國の人、山人、登山(業)者。」としてある。三省堂のに比較すると自動詞以外は殆ど同じだが、只「登山(業)者。」として、登山者と登山を職業にする者とをわけた處が面白い。

これ丈で澤山なのだが、どうせ乘りかけた船だと、机の引き出しに入つてゐるのだしするから、ウエブスターのリットル・ヂエム・ディクナショナリイを引いて見ると、マウンテンには「丘より高い高所」と説明してあるが、「マウンテニヤ」は只かか

る[illegible]ることを示してあるので是非[illegible]してみたい。

そこで最後に英語の字引きとしてはこれ以上のものが無いといはれる、チエームス・マレー卿の「新英語辭典」を、圖書館に出かけて讀んで見ると

（一）山間の土民、あるひは住人。

（二）マウンテン黨の一員。

（三）登山（マウンテン・クライミング）に熟練せる人、あるひは登山を職業とする人。

と、かう三通り出てゐる。第二を除くと齊藤さんのと同じになる。しかもこの（二）は、フランス革命時代の山岳黨（la montagne）のことだから、この場合吾人とは無關係なのである。

かくの如くどの辭書によつても、マウンテニヤとは山間に住む人か、山に登る人かになるが、ヤング氏の緒言があるので私もこの「山岳夜話」をマウンテニヤの爲に書いてゐると意識することが出來て、甚だ有難いのである。

所で道草ばかり食つてゐないで、煙草の話にうつると、「マウンテン・クラフト」の第一章が「管理と指導。」食料飲料と二つ區分があつて、その次に「喫煙」の項が出てゐる。この章はヤング氏自身が執筆してゐるが同氏の意見によると、煙草を吸ふとか吸はないとかいふ問題は各人がそれぞれ決定す可きことで、別に一定の區別は[illegible]パイプを吸ふことは[illegible]にとつて不愉快、パイプ・スモーカーにとつて[illegible]親友し。」と書いてゐる。續いて次のやうな文句が現れて、大いに私をよろこばせる。私ばかりでなく、世のパイプ黨、殊にマウンテニヤ達をよろこばせさうだから書いて見る——

「パイプは食物、飲料、あるひは睡眠の、よき一時的代用品となる。それは待つことのつめたき幾多の瞬間を慰め、困難に際しては心をやすめてくれる助言者になる。煙草を吸ひ得ること、従つて登山者の眞の親交を特長づける處の努力なき沈默中に彼自身を支持し得ることは、如何なる登山仲間も持つてゐねばならぬ資格である。」

この譯は、夏目さんの「巨人引力」みたいだが、意味は判るだらうと思ふ。またヤング氏が恐らくパイプを好むであらうことも想像出來る。パイプを吸ふものは沈默を愛する——これは登山家ばかりでもない、誰でもさうである。もちろんパイプを啣へたまゝ話をすることは出來ぬからであらう。

それはさうとして、まつたく、目的の峯に達した時、ルックサックを下に置いてから、手頃の岩に腰をかけて吸ふ一服は、恐らく最もうまい煙草の吸ひやうであらう。ことに天氣がよくて、遠近の山々が所謂手に取るやうに見える時なぞは、どの山

が何だとか、どこの屋根がどうとか喋舌られると、うるさくて仕方がない。か丶る時には、只、默つて紫の煙を空に吹き上げるに限る。

私はパイプとシガレットとを山に持つて行く。シガレットは上衣のポケットに入れておいて時々吸ふが、パイプはルックサックに入れて、大休みする時、例へば目的地に達した時か、晝飯の時かに吸ふやうにしてゐる。一日中雪を踏んだり岩を匐つたりして野營地に着く。先づ上衣を脫いで厚いスウエッタアを着込み、天幕を張つてから。パイプを啣へて焚火の傍に座る時の氣持は、一寸說明出來ない。說明を試みてもそれは山を知らぬ人にはピッタリ來まいと思ふ。か丶る時、煙草を吸はぬ人が、しみ〴〵と「あゝ、俺も煙草が吸へたら……」と、よくいふこと丈を記してこの稿を終へやう。

附記

「山岳夜話」といふ題をか丶げたに就て一言お斷りいたし度い。私の山の先輩にして、勤めさき大阪每日新聞社の先輩——そして私と机をならべてゐる——北尾鐐之助氏に「山岳夜話」なる著述がある。だから私は何か別の題をつけ度いと思つたが、どうも冬夜、炬燵にでも入つてするやうな漫談の題としてはこれより適當なものが思ひ當らぬ。それで北尾氏に「今度中央公論にこれ〳〵の性質の物を書くに就ては貴下、本の題をつけてもかまはぬか」とたづねた處が、「一向かまはぬ」との返事であつた。こ丶に誌して同氏の厚意を感謝と共に、讀者諸彥ならびに編輯者の御了解を得て置き度い第である。

日本巾着切

長谷川伸

（一）

通稱を九の・といふ彼は、彼が嫌つてゐる夜になつたので、浮かぬ顔をして歩いてゐた、灯の巷の賑かな通りから、街燈の色たよりない裏通りへ出て、星まばらな宵を的もなく歩いてゐる、どうで彼は塒へかへつた處で、着替を後からかけてくれる肌白い女が待つてゐる譯ではない。一人ものにしてはキチンとした、二階借の一室ではあるが、脂粉の香がすこしも漂はぬ淋しさは、キチンとしてゐるだけに餘計潤ひを缺いてゐた、が、それを氣にする九の一ではない、素ッ堅氣と違つて彼はなうての巾着切だつた、しかも、仕事は天日あからさまな下でするのを好いた。夜の闇に隠れてしては氣がすまぬ、といふ男なのである。どこか並々でないといふ程度を越して、數多い仲間の者からも「九の一は別さ」と、何かにつけて妙な尊敬をうけてゐる彼なのである。だから彼は定つた女を持つて、二階借の細世帶ながら、睨み合つてくらさうと考へた事がない。はつきり考へた末ではないが、巾着切渡世が水に浮いた徒卅としか思はれない、いつまで浮んでゐられるものか自分にもわからない、といつて彼のわざが、人目について世の中の明るみから、暗いところへ行くだらうとは、かつて・度も考へた事がない。それ程自信と名をつけていゝ程の自信をもつてゐるのではない、たゞ茫と朧氣に、巾着切渡世のはかなさを感じながら、直ぐにも破滅の闇が襲つてくるなぞとは、思ひも寄らずに生きてゐるのであつた。しかし、それが爲に彼は女を持たないのだと、いへばいへない事もない男なのであつた。

九の・の姿はすんなりとしこゐた、男にしては描かれた線が和かきに過ぎる、それは彼の顔のどこかしこ殆んどから、他人がうける印象が、女といふ感じを外にしてはないのと同じ事である。色白な彼の頬はふくよかであつた、唇は赤い、眼は円ら

ふといゝが優しかつた、ふとした目遣ひに媚がふくまれたかに見える事すらある、であるから倒底、沖伊知亮といふ本名から、赤の他人が起す聯想では、とても描き出す事の出來ない男振りであつた、變な奴には先づ相違ない。

彼は西の空が夕映てくると、いかによい代物が目の前にあらはれても、卓拔な伎倆の潜んでゐる、象牙細工のやうな細い指を、決して働かさうとはしなかつた。

強き色彩の灯の色に、陽氣めかされた賑かな街に、たまさか九の一の姿があらはれても、それは巾着切の九の一ではなかつた、都會に住みながらの寂しい若者だつた、色も戀もなく、惱みの極の持合せもない、その銷沈んだ氣になり易い獨り者の彼であつた。

まだ駈け出しのぽたはたきの二才も、かすりで食つてゐる故老も、渡り禽のやうな、乘物かせぎも、口をひらいて話が九の一に及べば、文句なしに「あれは別さ」といつた。それは九の一が、白日の下でなくては決して仕事をしないのを指すのか、それとも啖ひとりを一切つかはない潔癖をいふのか、わざか、度胸か、さもなくて彼の顏かたちが、綽名の通り九の一、すなはち女にちかいのをいふのか、とに角彼は仲間うちではなうてであつた。

その九の一が今夜も塒に翼をやすめず、ふら／＼と徘徊してゐる裏通りは、街燈の光り錆く、人の往來も絶えがちだつた。

たつぱの高い異人館が、ずらりと片側ならびの川岸通りは、街燈の瓦斯の灯が青白い、といつても遠く届く輝きではないから、青ペンキ塗りの脚下くらく、その外廓をぼかしたやうに照らしてゐるだけだ。

九の一は草履穿きだつたから、跫音もたてずに川岸へかゝつた。街路樹の柳が夜風にゆれて、瓦斯街燈のむだな光りに、枝垂れて長いかたちを地に印し、だれも見ないところに風情をつくつてゐる、その柳の枝の下影で、九の一はぴつたり足をとめた。

と、成程そこから遠からず、女が一人妙に歩いてゐた。

海に近いところだけに、今滿潮の川の水は、磯の香をそのままに高い。小波を寄せてもつれる波に、夜の光りがきらついてゐる。川向ふは闇と同じ色の石炭倉、その棧橋近くだらう、繋り船のともに裸火が舌を吐いてゐる、その眞赤な色が波に落ち、千段卷の形ちを崩してゆら／＼と美しい、が、九の一はそんなものに目をつけなかつた。

女の態度は九の一にぴんと響いた、身投げだ、まさにこの見込み狂ひはない、と思ふと九の一は體中に冷汗をかいた、彼の頭は直ぐに救ひ損ねた時を考へた、くだらない處へ來合せた不運をかこちたい氣もする。

女は荒荒しい足どりで、往き來を何度となく繰り返してゐた。身投げをする女の姿といふものは、悲みに閉られて、水に濡れたやうに見えるだらうと九の一は思つてゐた、が、目のあたりに見る女はさうではない、女から女らしさを除いた荒んだ姿だ、なりふりを忘れた態度は、どつちかといへば男よりも形が悪い、といつて、突き詰めた心のあらはれが、何處となしに出てゐる、それが爲に九の一はこの女が身投げをするのだと、別段理由もなく信ずるに至つたのではあるが。

女の姿がちらと瓦斯燈の光りのうちにはいつた、と見る間に闇の中へ踏み出した、川はもう直ぐ目の前だ。女はいよいよ死に際に近づいたらしい。

九の一は息を殺して瞶めた、餘りに荒荒しい女の態度は、反感に似たものを起させさへした、しかし、事態はもうどん詰りにきてゐた。女は夜光りの潮にむかつて立つてゐる、たつた今までゐた悍せぬ〳〵と、歩いてゐたのとは別人のやうに、彫像でもあるかのやうに佇んだ、と、女の肩がおくおくと動いて、壓し殺すやうな咽び泣きが漏れた、忍び様にも出になつたのだらう、含んだ咽び聲が陰氣に九の一の耳へはいつた。

かうなつては手の出しやうが、實は遅い憾みがある、「待つた」とでも聲をかけたら、必ずやそれがキッカケとなつて、女は白泡を潮にたてさせ、屍になる途をとるに極つてゐる。九の一は冷汗を再び掻いた。

が、彼は、救ひ損ねる事を賺つてゐるのだ、しかし、やる處までやつてそれでも救ひ損ねたら、それは九の一の知つた事ではない、天が與へた捌きなのだらう、と、さう思つて氣を輕く持つ事が出來る氣がした。それには救ひ得るとも救ひ得ぬとも、一か八かぶつかつてみる外に途がない、さうなると九の一は、白晝夥しい往來の人中で、狙ひをつけた相手に對し、渡世の指をはたらかす、その瞬間と同じ氣分がして、體中に淡淡しいとはいひながら、一種の快さにほてる氣がした。

女の咽び泣きが尾を曳いてゐる。

九の一の白い顔が、すこしばかり緊張して、さすがに動悸が起つてきた。

九の一は素早く女の體に、自分の體を殆んど叩きつける程急に近よつた、で、わざでは無類と仲間が評價した白い指をのばして、女の頬をびしりと毆つた、彼の指と掌とは、存外冷たい女の顔なのをその時知つた。

「きやツ」、

と、女は叫んだ、が、其叫びは九の一がかつて知つてゐる聲ではなかつた、それは成程人おのおの聲が違ふ、しかし、この女の叫びは妙に甲高くそして力が當り前の女にしてはあり過ぎた。

女は地の上に横座りになるかと思ふ程、一時よろよろとしたが、ぐいと踏み耐へて突立つた、しかも却つて九の一の暴行を憤るものらしく胸を反らした、肩も恐ろしくいからせた。呼吸が凄じく喘んでゐる。

「馬鹿、何をするのだ」

やけくそな聲だ、そして妙な聲だ。

「何が馬鹿でい、うぬの馬鹿がわからねえのか」

九の一は早間調子でぺらぺらと捲し立てた。と　その女は突然大跨にぐいと寄つてきて、九の一の顔を見下した、女は意外に脊丈が高い。

「毆つたね、何故だい、どうしてだい。あたしお前を知らないよ。」

あきらかに女は憤りに燃えて、身投げはともかくも、たつた咽び泣いてゐた女とは　全く違つた人間らしく見えてきた。

「…………」

餘りに凄じい權幕だつたので、九の一は默つて顔をみた、しかし美人ではないらしいと思はれるだけであつた。はつきりと見るよすがのない暗さに女は面してゐるのだつた。

「パパの處へおいで、さあおいで、パパは强いんだ」

咬みつくやうに女は叫んで、九の一の腕を無雜作に摑んだ。妙な事にはその把握の力が、女らしくない强さをもつてゐる。

「そんなに怒るもんぢやねえよ。考へておみよ、お前さんどこの人か知らねえが、何だつてこんな處で泣いてゐたのだい」

「泣いてゐた——あゝ、あたし泣いてゐたのだつた」

女は手をはなして悄氣た、今度こそはじめて女らしく、大柄な女ではあるが、矢張り女の持つ線のやさしさで、たよりなげに肩をすぼめて、引つこめた手をだらりと下げて佇んだ。

「間違つたらご免だが、お前さん不料簡を出したのだらう、死ぬ氣だつたのだらう、それに違ひねえのだ——俺の眼は黒い」

「え」

と、女はふいと顔をあげた、が、直ぐ俯向いて啜り泣きをは

じれた。

「いきなり除つたのは俺がわるいさ、けれ共ね、どうにも仕方がねえ、この場合なんだから勘辨して貰ひていいのだ、だれだつて目の前で死なれてはおつとしこいられねえからね」

といふ中に、女の啜り泣きが激しくなつてきた、九の一の耕明が恐らく耳にはいるまい程、やがて女は咽び泣きをした。

「泣きなさるな、さう泣かれては俺が困つてしまふ、一體お前さんはこの近所の人かね、それとも何處か遠方の人なのか、事情によつては送つて行つてあげてもいゝのだが」

「…………」

女は何も答へなかつた。

九の一は厭な氣もちで女を見あげた、ほんとをいへばこの女には、死ぬなら俺の眼の屆かねえ處で、こつそりと死んでくれるがいゝ、といひたかつたのである。

女は際限もなく咽び泣いてゐた、その介錯をいつまでもしてゐる氣にはなれない九の一だつた、何とかこゝの鬼をつけて、調子の違つたこの女と別れてしまひたくなつた、といつて、この儘こゝへ置いて行くには、氣がかりでならないのでもある。

しかし、そのうちに九の一と手を別つべく、女はだしぬけに

陸に背いて身を躍らせた

「あ、あぶねえ」

九の一は兩手を前に、思はず踏み出した足を、最後の一步で踏みとどめねばならなかつた、そこはもう地上ではなく潮の深い川であつた、のみならず九の一の耳は、はじめから氣にしてゐた厭な水音を聞いたのである、體を反らして一應は避けてみたものの、餘沫は高くあがつて、彼は頭からからい潮をあびた。

女はたうとう身を滿潮へ棄てた。

「畜生ツやりやがつたな」

と、九の一は躍起となつた、躍起となりながらも、女を救ひ得ずに終つたなら、これから後の永い生涯に快くない陰のさすのを恐れる氣もあつた。

水にはいつた人の體が、どう筋斗をうつてから、一旦水面に姿を見せるのだか、九の一は知つてゐなかつた、が、こんな場合一度は浮んでくるものだとは知つてゐた、だから彼は眼を水面に廣くつけて、兩手を素早く動かせて帶を解き着物を脫いだ。

向ふ川岸の繋り船の、ともで燃えてゐる石炭の焚火が、吐く

焰の色が、水に落ちて染めた紅千段谷のゆらめきの、影はあるかなきかに消えてはゐるが、それでも餘光がかすかにあるものと見え、ぽつかりと黑いものが浮みあがつたのが、割合によく見えた、そればかりか潮を搔く亂れた音も聞えだし、喘ぐ呼吸が苦しげに咽喉笛が鳴るかのやうに聞えもした。それが今の女で、これから死に入るのだとは直ぐに覺れた。

九の一は勢ひよく潮に飛び込んだ。

「身投げだツ、身投げだツ」

と高らかに叫んで、もし人が近くにゐたのなら、協力するであらうを望んだつもりだつたが、彼の聲は中途半端で、たとへだれが聞いてゐても、意味がとれなかつた。水音飛沫に消されたのである。

九の一は水泳に巧みな男ではない、たゞ一と通り泳ぎ得るだけだつたが、瞬くうちに目ざす女に近づいた。まだまだ近づいてはゐまい、もう少しもう少しと、われから心を勵ましてゐるうちに、手に觸れた物が髮の毛であるのを知つた、と、いつぞや聞いた話が稻光りのやうに頭を掠めた、身投げを救ふのには餘り近づくな、近づいて相手にしがみつかれたら、水地獄の道づれをとても免かれない、だから相手の指一本でも足首でも摑んで泳げ、女だつたら髮の毛が一番いゝ、こんなことを小耳に挾んでゐたのを九の一は、ねつとりと浮いてゐる髮の毛に觸れた瞬間に氣がついた、で、一と摑みの髮の毛を握つて泳いだ、無論、救ひ得たといふ得意が體一杯にあふれる程起つてゐる、それだけに疲勞は少しも感じないが、あせり氣味にはなつてゐた、こんなにあせる氣もちは、今までさまざました仕事の上で、かつて一度も彼の經驗しないものだつた。

九の一は水の中で石垣に足をかけた、片手は女の髮の毛を摑んでゐるので、自由の利くのは片手だけだつた、片手だけでは彼より背丈の高い女を、潮の外へ突き出すのに力が足らなかつた。

「だれか手傳つてくれ」

と、九の一は苦みながら思はず叫んだ、が、そこに援助者が駈けつけてゐるかどうか、そんな事を見極める餘裕が彼には今ない、しかし、陸の暗い處から直に應ずる聲があつた。

「ヲーライ」

その聲は妙に鼻にかゝつた、日本人ばなれのした返事を、九の一はあやしと聞きとる暇もなく、鼻先に人の姿をみた、それは後肢で起つた牛のやうな大きな洋服男であつた。

「そら賴むぜ、と、と、引つぱつてくれ」

必死の力を絞つて九の一は抱きしめた、水びたりになつた女は、それ程扱ひにくい半死半生の體だつた。

「ヲーライ」

手をさしのべた洋服男が、女の脇から腋の下へ、力をこめて腕を入れた時、九の一はその男の體温の高い肉に觸れた。

あつたかい野郎だな、かうは思つたものの、それ以上究める氣はなかつた。

女の體はずるずると陸へ引揚げられた、はだかつた裾の一端が、石垣の頭からすこし出てゐると見え、雫が潮に落ちる音が、些細な音の癖に強い響きをしてゐる。

「はな、はな。わたしわかる?。はな、はな」

鼻の詰つた聲が再び九の一をすこし駭かした、思ひもかけない熱心さで、女の體をゆすつてゐる洋服の男は、その巨大な體を丸くして、一語づつに恐ろしく緊張した聲を絞つてゐた。九の一は脱ぎ棄の着物から、漸く探し出した手拭を、體にあてたばかりで手をとめた、ぢつと瞶める眼の下で、鼻の詰つた聲が次第に涙ぐもるのがよくわかつた、彼はこの二人の關係を何と解釋をつけていいかわからない、が、他人同志でないだけは明白だと思つた、それにしても女は和服を着てゐる、であるがこの洋服男は牛の乳臭い、のみならず日本人のもつてゐる形ちとは全然違つたものであつた。

そこへ近く跫音が聞えてきた、九の一は咄嗟に體を石垣にひそめた。瓦斯街燈の青白い光りの下を横切つて、街の樹影を踏みつけて走つてくる、裂けた和服の女がある、取り乱したその女の青い顔に、べつとり血が片頬に流れてゐるのを、樹の間ながら偶然にも九の一は見つけた。

「おや」

と、九の一は口走つた、女はその間に飛びつくやうに、水びたりの女にしがみついて泣き出した。

「死んだんじやない、まだ死んだんじやない」

と、洋服男は猛るやうに叫んで手を振つた。

「お花や、死んでおくれでないよ、ママは怒つてなんかいないのだよ」

といふ泣き喋舌りが、九の一の足下で破裂するやうに起つた。

けれども、九の一は、かういふ有様をいつまでも見てはゐられなかつた。彼の耳には、いつも快く聞えた事のない佩劍の鞘鳴りが、固い靴の跫音と共に近づいたのを聞きつけたのであつた。九の一は遠い處に立つてゐる瓦斯街燈の下を、黒い姿が走つてゐるのを見つけると、手早く着物を浚つて、近い方の街燈

の光の内へ姿が見えないうちに、駈け出した。ヘン、女を助けて身許調べをされたのぢや、やりきれねえからなあ。

九の一はそれから間もなく、人のゐない團平船にもぐつて、ゆつくりと體を拭いてゐた。しかし、潮で濡れた體は、いくら拭いてもねとりとして氣もちが惡かつた。

（二）

九の一にいくら女めいた處があつたといつても、全くは男に違ひない。ふたなりでもない以上は、男心の出ない時がまるでない筈はない。彼も時には廓へ足を入れた。

が、仲間の者にいはせれば「九の一は別さ」といふ。「別さ」といふ意味は、彼が廓へ足を入れた時にも、認められない事ではなかつた。九の一はたまさかはいつてきた廓で、一軒として厚化粧の女が寢起きしてゐる家をのぞいた事がない。彼の歩く路はさうした家の軒下に近いけれども、妓夫台からかける呼び込みに、白い顏を向けた事がなかつた。

彼といへどもはじめから、廓の女の味を知らぬ程、淸教徒めかした男ではなかつた。しかし、そんな處へ落ちてきた女から、何をいはれても嬉しくはなかつた。どう手厚くもてなされても情愛めいた氣は起らなかつた。却つて悲しい氣がして、ソ檔の赤い色黑い襟、しみのついた膝の上に、寢ぶとりの肉の丸みを見た時などは、眞暗になつて行く氣がしてならなかつた。それからまた、解けて結ぶ夢の中にも、枯れ木の感じをうけるばかりだつた。花の春がときめいてゐる感じで、枕にのせた夢を縮んだ事は一度もなかつた。

所詮、九の一は廓の女から、十分にものを充されないのを知つた。渡り歩いたどの女からも、いつもうける感じは冷めたい。

今夜の九の一は、矢張りいつもの通り、廓の家の軒下近くを、靜に歩いてゐるのであつた。

「おや、伊知ちやんぢやないの」

そこは不二見樓といふ、が、トリヰハウスといふ名で、牛の乳臭い人々には知られてゐる異人屋だつた。

「あ、姐さんですか、今晩は」

九の一はこの人だけには頭があがらない、で、相手は異人屋で勤めをする女だが、綺麗に徹つてものをいふのを例としてゐた。

「どう?、好いのが見つかつた?」

九の一は苦笑ひをした、ふくよかな白い頬に笑ひ窪が出てはゐるが、悩ましい眼はいつもよりは深い色を見せてゐる。
「ね、伊知ちやん、おあがりよ」
「え、あたしが――だつて姐さん」
　日本名は東雲といふ、が、牛の乳臭い世界では、メレーといふ名で通用してゐるこの女は、昔昔の都新聞のつゞき物に、挿繪をかいてゐた松本洗耳といふ人がある、どつちかといへば太り肉の、目鼻立ちのぱらりとした豊艶な顔つきが、楠楣の裾にでも洗耳畫と、入れてみたい程の女だつた。
「馬鹿だねこの子は。いやだ伊知ちやんお前さんあたしを買ふ氣かい、大膽な」
　からからと赤い口で笑つた。
「だつて、あがれといふから、困るなあおもちやにしては」
「いいのだよ、默つておあがり、逢はせる人があるからさ」
　東雲は腕を九の一の首に卷いた、脣が近いだけに、ウヰスキーの酔がぷんときた。
「姐さん酔つてますね」
「あゝ、ジヤマンが一人きてゐてね、やけに飲ませる奴なの、だから。酔つてるかねえ、さう見えるかい」
「では、しらふの時にまた逢ひます」

[illegible]ん、おあがり」
「まさか、あたしちや駄目ですよ」
「あんな事いつてらあ、いよいよあたしが買ひたいのだね」
「…………」
　姉さんといふ態度を元からとつて、すこしも崩した事のない東雲から、小僧に扱はれながら悪い感じのしない九の一は、これをいゝ潮時にして、ここの赤鳥居が仰仰しく装飾されてゐる廣間へ通り、鑞びきの廊下、白ペン塗の手摺、隅隅の三角台に七寶燒の花瓶、額縁入りの飜刻錦畫、雪のやうなベツト、そんなこんなの様子が、普通の廓の家とはがらりと變はつた異人屋の客に、なつてみやうかと思はぬでもなかつた、が、ただ並並の異人屋遊びなら、何もトリヰハウスの不二見樓に限つた事はない、日本字で櫻花樓、羅馬字でチエリーハウスと書いた、水浅黄に塗つた家をはじめ大小五六軒、この土地にはあつた。
「何を愚圖愚圖してるのさ、おあがり」
「ええ」
　九の一は思ひ切つて客になる氣になつた。
「伊知ちやんこつちだよ、お前さんテーブルする氣かい」
　彼が敷台から蹴つけ草履のスレツパに、片足をかけかける

と、東雲の赤い口が白い米齒を見せて可笑しさうに笑つた。
「何だ。バーへ行くんですか」
「さうよ、當り前、ヲールライト」
　テーブル部屋へ行つて、女を見立てるのではなく、バーでジンでも飲めといふのだ、それなら何も「おあがりよ」といふ程の事ではない、異人屋のバーは酒を賣る處に過ぎない。
　九の一はウヲツカを舐めた。
「うまい？」
「あたしには矢張り酒の方がいゝわ」
「それだつて酒だよ伊知ちやん」
「でも、あたしは酒つてのは、日本の酒の事をしかいひません」
「お株をいつてるねえ」
　東雲は異人がするやうに、肘かけ椅子にずつと淺く腰を落し、片手に紙卷煙草、片手は頬杖をついてゐる。足をいれこに組んでゐるので、極端に派手な友仙の裾から、白い脛をぐつと見せてゐるのだが、そんな事にすこしも頓着しないでゐる。
「ほんとに、あがる？」
　くるりと太い眼を向けて訊ねた、長い睫毛がせせこましく瞬いてゐる。
「ええ、あがります」
「で、だれを買ふ氣？」
「――あたしにやわからない」
　女は足を組み直して、聲高に笑つた。
「あたしをお買ひ、賣つてあげるよ、だけどさつきのチヤマンの奴が歸つてくるよ、だからねえ」
　東雲はいたづらツ兒のやうな眼をして、九の一の白い顔を眺め、またひと頻り體をゆすつて笑つた。

　女の部屋は日本間と洋間と、それから別に洋間のつゞきを、更紗のカーテンで仕切つて寢室がつくられてゐた。といつてもこの部屋が九の一にとつて、珍らしいものでは決してなかつた。九の一がまだ堅氣で、中學の制帽をかぶつてゐた頃、ここに勤めの實の姉を尋ね、制帽をもみくしやにして、彩りの強い女にはにかんだ昔もあつた。つい二三年前には、東雲の妹分でホルトギーと心中した女に馴染み、通つてきた雨の宵、星の夜更の思ひ出がないでもない。
「姐さんわたしに逢はせる人つてのは？」

「まあ泣く事はない。おちたりもあたしの自由さ、伊知ちやんの自由は利かさないよ」
「だつて」
「何がだつてさ、いゝから温和しくしてゐる事さ、いふ事をきかないとお灸を据ゑてやる」
「子供ぢやあるまいし——だれだらう」
「何がさ」
「あたしに逢はせる人がですよ」
「氣にしてゐるのだねこの子は、評判程でもない氣が弱いのだねえ」
「ええ評判、とは何です姐さん」
「白ばツくれてさ。いいのよ萬事ご承知なんだ——でもね、こんな蟲も殺さない顏をしてゐて、ほんとに驚くよ」
「人聞きの悪い事を。いやな姐さんだ」
「さうかも知れない、あたし不仕合せで、伊知ちやんよりは三年ばかり早生れだからね」
「年の事いつてやしません」
「あたしや男が年下なので氣が沈むといつてゐるのさ」
「姐さん——ぢやあたしを」
さうではないかと思つてゐた事が、矢張りさうであつたのを九つ一ト釘つた、て、今までとのにも[illegible]て、いはうとした時に、ニス塗りの扉を、開けた[illegible]て、トントンと外から叩いたものがあつた
東雲は平氣な顏で、ふり向きもしないで「はいれ」といつた、その調子が妙に媚をもつてゐた。と、扉の外から出た顏は獨逸型四角ばつた、年は三十四五かも知れない、なりはまさに紳士と見える。
九の一はさすがに間が悪かつた。異人屋の異人客は、醬油のこげる匂ひよりも、日本人の客がゐるのを厭惡するものだ、といふ事を九の一も知つてゐる、で、この場合、東雲の流連の船來掠鳥が、到底、嫉かずにゐる筈はない事も覺つてゐる、だからどうあつても一と悶着なしに納るとは考へられない。しかも、九の一はこうなれば、船來掠鳥に蹴込まれて引き下る弱ツ氣にはとてもなれなかつた。
「伊知ちやんお前さん構はないからね、あたしに甘つたれな、いゝかい。餘所行きの振舞ひなんてのはいけないよ」
永い巧を積んだだけに慣れたもの、東雲のメレーは諸國の言葉を混ぜて、不氣嫌な異人客に何かいつてゐる、その間間で九の一に、さういつた風の指圖をしてゐるのが、とンと挾み言葉

の格だ。

「この異人はお前さんを弟かつてさ、遠廻しに嫉いてゐるのだよ。だから弟ですといつてあるからね、お前さんその氣でゐるのだよ」

しかし、何を苦んで船來人に、弟でもない者が弟だといはうぞ、九の一は巾着切渡世をしてゐても日本人だ、千里萬里の旅人に嘘をついて遊んでやる氣は微塵もない。

東雲のメレーの口前で、たうたう氣嫌を直した船來客は、前とはうつて變つて愛想がよくなつた、金色の毛が生へてゐる手を出して、九の一の象牙細工めいた白い手を握つた。體温が、そして何とくな觸覺が、この間身投げを助けた晩に、ふと觸つた體の大きな洋服男を聯想させた、といつても、まさかにこの異人があの時のまるで、立ちあがつた牛のやうな、鼻詰り聲の男だとは思はれない。

「伊知ちやん、お前さんに土耳古の金貨をあげるとさ」

東雲が客の言葉を通譯してくれた。が、九の一は、まともに顔を向けて膠もなく拒絶した。

「貰ひたくねえや、何處の馬の骨かわからねい奴なんかに」

「あら、伊知ちやんひどく鐵火だねえ」

と、東雲は、九の一の爲に笑つた顔を異人客に向けて、日九の一に語つてゐる。

「それでこそ評判の九の一だよ、頼むから確りしておくれ」

「え、何ですつて姐さん、妙な、妙な事を」

「いいのよ、一切心得てゐるのさ――――逢はせる人つてのはこの野郎さ」

いかにも巧みに客と九の一とに、半分づゝ話を掛けて行く手際を、感心して見てゐる彼の眼も耳も、次第に熱してくるのであつた。

「この野郎ただ者ぢやないよ、詐欺師かしらそれとも密輸入屋か、持逃げかも知れない、まさかお前さんのご同業ぢやあるまい、この指の不器用な處ぢや、出來る藝ぢやないからね」

異人客は評價されてゐるのを知らない、太い桃色の指を東雲にまさぐられて、愛敬のある眼をして笑つた。

「伊知ちやん、あたしや敎へるのぢやないよ、だけれどこの野郎が、すばらしくお金を持つてゐるのだよ、現金で持つてゐるのが變ぢやない?。あたしは曲者だと睨んでるわ、日本でやつたか、外國でやつたか、それはわからないけれど、旅他國で現金をしこたま持ち歩く奴はただの人間のしない事だよ」

一だから」
「それからさきはあたし知らない」
「………」
九の一は厭な氣がして默つた、何だか東雲が仲間のあばずれ女のやうな氣がして。

（三）

新聞で九の一は自分が助けた女の町處も姓名も知つた、が、外處ながらにしろ、行つてみて、どんな人柄の女だつたかを極める氣はすこしもなかつた。けれ共その町の名、女の名は覺えて置く用もないのに忘れなかつた。それが何故だかは氣がつかない、といつて戀でもないのは明白だ。成程九の一は素肌で女をぐつと抱いた、が、それは水の中の事、どう間違つてもそれだけで、色も戀も起らう筈はない。

しかし九の一は、東雲が與へた暗示によつて、仕事をする氣にはなつてゐなかつた、ではあるが、あの現金をしこたま持つてゐるといふ異人客に、興味を感じない譯ではない、仕事をしない氣になつたのは、ただほんの感情が東雲の言葉に快くなかつた、それだけの理由しかなかつた。

一體、九の一が好んで撰む巾着切の獲物は、屈托のない顔の持出しか、[illegible]めいた[illegible]。[illegible]か、そんな[illegible]持つ人に[illegible]、その手法からいへば現金をしこたま持つてゐるあの異人なら、自在に働いてくれる白い指先を向けても、まんざら惡いとは思はれなかつた。

九の一はそんな氣がしてきたので、今夜、異人街へは入り込んだのだ。しかし、運がない、目ざしてゐる異人に出會さなかつた。狭いやうでも、廣い世界を縮圖したやうな元居留地へ、ぶらりときて直ぐ見出すやうな事は、餘程珍らしい偶然でない限りある筈がない。

九の一はその翌日から方針をあらため、邸の外へ網を張りはじめた、この間の様子ではあの異人客は、東雲のメレーに餘程惚れてゐる――と思ふと九の一は腹が立つてきた、たとへ千萬里の遠くからきた異國の男でも、客である限りは、惚れてこそ通ふ筈なのはわかつてゐながら、矢つ張り九の一は面白くない氣がした――だから、あいつの持つてゐる金を、捲きあげる事は、痛快な氣もちで出來る仕事であつた。

が、その獲物にぶつからなかつた。しびれを切らせた九の一は、やがて自分の愚さを嗤ふ事に氣がついた。この間の晩とも

角も東雲の客になつた體だから、頭からおはき物を食ふ苦がない、だから客であがつて樣子を聞いてみやう、一つには年上なから可愛いがるとよりも、何となく懷かしさが先に立つ東雲にも逢へるし、と、兩天秤にかけて行く氣がきざした、で、トリヰハウスの白ペンキ塗の棟の高い家の前へ立つた。が、女には客があつた、さてはあいつ來てゐるなと思つた、しかしそれは違つてゐた、九の一が廓の中を一とめぐりしてきた時、東雲が送り出した客は、よく支那街で見かける海岸通りの辨房(かんぼ)の疵南京だつた。顔に深く二條の疵痕がある五十近い肥滿したその男は、金ばなれのいいのでは有名な支那人であつた。

「あれからどうして?」

東雲の態度が先頃とはがらりと變つてきてゐる、かりそめの眼づかひにも、媚が含まれてゐるのは、僅にこの間の一夜の短い時間がさせる事なのだ、といふ處へ氣がついた九の一は、薄すらと悲しい氣がしてきた、姐さんと呼んで頭のあがらない女と極めてゐた、その頃の方が今夜の東雲よりは餘ッ程懷かしかつた。

「何の事?、もしやあの獨逸の男の事を姐さんはいつてゐるのですか」

「あら、姐さんはもういやよ、ね、止して、ね、さういはれると年上なのに氣がさして、思ふ事もいへやしない、それに他人行儀な、ゐるのですだの、さうですかのと、冷たくて厭な言葉だわ、後生だからたつた今から止してね」

「でも、今までの口癖で仕方がない」

「ほんとに姐さん扱ひはお廢止、ね、いゝ事」

「えゝ」

「さうさう、話す事があるわ、いつかの異人ね、ジヤマンの變な奴、あれが持つてゐたお金みんな盜まれてしまつたつて」

「へえゝ」

さすがに九の一の胸にも、どしりと强い響きを起させた、自分の外に、もう手をつけた仲間があつたのか、勾配の早いのを持前とする巾着切仲間、そんな事もあるだらうと思つた、が、どう隱しても九の一の落膽はあらはだつた。

「それがね、ホテルで落したのか盜まれたのか、何でもホテルの内なのだつてねえ」

それでは仲間がやつたのではない、目色毛色の變つた奴が、うまくやつたものなのだらう。

「それでも少し許り、別にお金があつたのだつて、ね、それを持つてゆふべこゝへきたわ」

そんなになつても、思ふ女の處へは、足を運ばずにゐられな

いゝ人の心もわかり、よいとこの一ばん惜になつてきた
「でも、そのお金は三圓足らずよ、家の上へみんな出して見せて、これだけで辛抱してくれといふの――――ここの家も錢でなしで強情を張つて客にしないのよ、ひどいわね」
「そいつは情がねえなあ」
と、九の一は異人客の爲に息をついた。
「さうでせう、ねえ――あの異人、階下のバーで泣き出したわ、私は二度とあなたに會へないのだ、と繰返して何遍もいつて、手放しで泣くのだもの、あたしも可哀さうになつたわ。でもたうとう諦めて、悄悄として出て行きかけて、赤い鳥居の下に立ちどまつて、いふにいはれない悲しい顔をして、あたしを瞶めてゐる眼から、涙がぼろぼろ出てゐるの――可哀さうだつたわ。だからあたし、傍へかけて行つて唇を出してやつた、貧乏人になつた異人にやる物つて、あたし外に何もないからねえ」
浮いた調子がまるで東雲からはなくなつてゐた。

（四）

二月ばかり立つた、異人街は夏帽子ばかりになつて、往來の女異人の衣裳が、目がさめるやうに明るく輕さうになつた頃、九の一は何の爲といふでもなく、市の繁華とは緣の遠い、しかしなかつた爲に其の事も無い、寂しい港まちにした一人町の夜を歩いてゐた
巾着切はしてゐても、惱みと名のつく程ではないが、空虚にくらしてゐない日日を、かうして紛らせてゐる九の一は、月が出入の雲の流れをいただいて、いつもの夜の散歩のやうに、佗しげな顔をしてさまよつてゐた。
何の氣もつかずに歩いてゐた道が、いつ變つたと知らずに、入り込んで、九の一は、森の茂みが黒い丘の下の小徑に出た、そこから先は間もなく盡きて、底の知れない海になつてゐる。九の一は雲を仰いだ、月を隱した黒い雲の一團が、急に暗くした地上は、滅入るやうに靜だつた。
九の一は丁度よい木の株に腰をかけ、煙草を吸つて、うつとりしてゐた。
あゝ――俺はいつまで巾着切をしてゐるのだらう。
と、彼は肚の裡で自分に訊いてゐた。
煙草を吸ひ終つて暫らく、木の株から腰をあげずにゐた九の一は、歩き出す機會を實は失つてゐた。といふのはいつの間にか、洋服姿の背丈の高い男と、それに少し劣つた位の背丈の女と、二人はぴつたり寄り添つて、夜光りのある海の波を見てゐ

た。女は和服を着てゐた。

俺がここにゐるのを知らねえのだらう、それならもう少しぢつとしてゐてやつてゐても良い。と、思つたばかりで九の一は、目の前の二つの黒い姿が、異常なのに氣がついた。

身投げだ。

と、心づいた時に九の一はもう飛び出してゐた、しかも、彼は洋服の男よりも和服の女に、無意識の間に手をかけて捉まへた。生れた國の日本、育つた國の日本、その日本の服を見て、考へるゆとりもなく出した手が日本を捉まへたのだ、もし九の一に手が四本あつたら、洋服姿から推してみても、間違ひなく異國人らしい男にも、多分手をかけたであらうが、巾着切でも二本しか手はなかつた。

ざぶん、と、水音と立つ白い水の高い泡とが、いつかの晩よりも厭な深さを持つて、九の一の眼と耳とを怖れさせた。

「何をするんだい、馬鹿、はなせ」

女の猛り立つ聲が、食らひつくやうに九の一には聞えた。

「待ちねえ、と、飛んでもねえ」

引き戻して捻ぢ伏せるのに、九の一は汗をびつしより掻いた、と、女は九の一の足許で、金切聲に似た聲を出して號泣しはじめた。

「死んぢやいけねえ、と、途方もねえ不料簡だ、面白い世の中に何が悲しくてわざわざ死ぬのだ。詰らねえぢやねえか」

と、早間調子で捲し立てる樣にいつてから、九の一は我ながら淋しさを感じた、「面白い世の中」といつた、其當人の九の一が、果して面白い世の中として、巾着切を樂んでゐるのか――遂ら、大きに迷つてゐるのだ。九の一は自分から默つてしまつた。

女は急に頭をあげた、雲から出たばかりの月の色が、九の一をも照らしたが、女の顏をも照らした、女の顏は何といふ色だ、和服を着てゐる九の一の生れた國に、こんな女は生れない筈の眞黑い皮膚で眼が白い。

「聞いたやうな聲だ」

女は喚くやうに、また、罵るらしくもある聲を出した。

「え、何だつて？」

「お前だ、多分さうだ、それに違ひないだらう、あたしの身投げの邪魔をしたのは」

稻光りのやうに或る明るさを以つて、九の一はこの女の姿と聲とを、忽ち思ひ出させられた。

「さうだ、いつかの女だ」

「あの時何故餘計な事をした」

女は反撃の態度に起ちあがつた。
「何故？べら棒な、人の死ぬのが見てゐられるか、俺は日本人だ」
「フン日本人だから今の男は死んでもいいのか、フンあたしを日本人だと思つてるのか」
「それは知らねえ、だが、人間として人が死ぬのを見てゐられるか」
「馬鹿」
　何といふ女だ、狂人か、さもなくて一度ならず二度まで、自殺をとどめられた男に對し、ものいひの惡さは別として、馬鹿と高飛車に出てくるとは——面の色も變つてゐるが、料簡も變つてゐる變なめすだ、と、九の一は睨むやうな眼つきをしはじめた。
「お前は日本人か、えらいな、あたしは日本人ぢやないよ」
「何、では何處の人間だ」
「世界中に國のない人間だ」
「そんな奴があるものか、國のねえ人間なんて、世界中探したつてある譯はねえ」
「あき盲、だから餘計な事をして、一度死んだものを生返らせ、また死なくちやならないやうにするのだ」
「え、何だつて」
「あたしの顏を見るがいい、これが日本人か」
　成程、日本人ばなれをした黑い顏だ、そしてどうやら目鼻立ちも違つてゐる。

「聞かせてやらう、お前はよく聞くがいい、[illegible]日本人でもないのだよ、パパが黑人だといふだけの事だ、けど、日本人でもないのだよ、ママが日本人だといふだけの事では—」
「それにしても、どつちかの國の者だ」
「國籍だけが日本になつてゐたら、お前もわたしを日本人の女だとするかい」
「……………」
「返事が出來まい——それ見ろ、わたしは國のない女だ」
「だが」
「口を出すな。わたしは好きで生れてきやしない、パパとママが勝手にわたしを苦めに生んだのだ、パパの馬鹿、ママの馬鹿め」
「無法だ、こりや滅茶苦茶だ」
「この前の時もさうなんだ、今夜もさうなんだ、死にたい者は死ぬ事があるから死ぬのだ、餘計な眞似をするな馬鹿」
「……………」
「この前の時はママの顏を切つてやつた」
「あゝ——あの時血を流してゐたのは。さうなのか」
　この女が毒づいてゐる母は、瓦斯街燈の青白い灯の下を走つて水から引きあげられて假死してゐたこの女に、號泣したあの若からぬ女だつた。それならばあの時の巨大な男は、黑人だといふこの女の父だつたらう。
「今夜はパパを切らうとした。けど、止して死にきたのをお前がまた邪魔した」

九の一はもう何もいへない、默つてゐる外はない。

「そしてお前はきた、わたしの一番上等な物を破壊にした」

「ウンにや、そんな事はしねえ」

「ある、わたしと死ぬ約束の男を、一人だけ死なせて、わたしを邪魔した」

また九の一は默り込まねばならなかつた。

「あの男は何處の生れだか知らない南の方で儲けた金を持つて、この國へきて、この國の女に戀して永住するつもりだつた男だ、それがお金みんな無くなつた」

「え」

「死ぬのだといふからわたしと一緒に死なぬかといつたのだ、したらあの男は、どうせ死ぬのだ。人が聞いたら名はダブリユー・シーだといつてもいゝ位、何も望のない體だから一緒に死んでもいいといつた――わたしは黑と黃色とでどつちつかずの女だ、白い男と死ねば、二人の死んだんじが流れついたら面白いだけでなく、わたしには名譽だ」

「白い人間と死ぬのが名譽か、ちえツ」

「馬鹿にはわからない」

かういつてからその女は、後も振向かずに大股に歩いて去らうとした。

「死なねえのか、それぢやあ」

くるりと振向いた女は、白い齒を剝いて、憎さげにいつた。

「お前は馬鹿、わかりません」

幾日かたつた雨の日だつた。九の一は柄に珍らしく悄こんでゐた。あれつきり東雲の處へも行かず、といつて、仕事もせずにぶらぶらしてゐた。

妙に黑い顏の女が、歪んだやうな面つきをして、白い眼白い齒に月の光を宿したのが思ひ出され、仕事をするのが厭はしかつた。氣がついてわざと心に弾みをつけ、賑かな稼ぎいい町へ出ても、そこで手頃な獲物に目星はついても、渡世の種の指を働かす心にはなれなかつた、どんな黃色い顏の女を見ても、直ぐ眼に浮いてくるのはあの變に黑い猛り立つた女の顏だつた。

しかし、階下の煙草屋の小母さんが、氣を利かして借してくれた新聞をみてゐる中に、黑い顏の女の事を漸く忘れた、その代り東雲の處であつた獨逸人だといふ男、金を無くしたあの男、最後の遊びを拒まれて餞別代りのキスを貰つて出て行つた男、その男の顏を思ひ出した。

新聞には海岸に漂着した外國人の記事が出てゐた、その人は煙草の技師で、日本金にして三千八百五十二圓餘を紛失し、落膽して自殺したのだと。しかし、その金は拾つた人があつて警察署の手で保管してあつたのだと書き足してあつた。

九の一は新聞を抛り出して、自分の指を眺めた。

「この指が働いてその三千何百圓をすつたのだつたらどうなるんでい――――俺が人を殺した事になる！」

巾着切は自分の美しい指を熟視して、ひそかに戰慄した。

（をはり）

兎卯雜筆

鎮目桃泉

白兎匆々乾坤改まりてまた卯の作辰に遇ふ、これ抃舞踴躍して慶ぶべきの歳ならんか。

卯は兎にして古來靈獸となす、性柔にして節は和順にして嘗て怒ることを知らず、祁寒三伏亦敢て泣くことなし、しかも雪中に嬉戯して寒烈に耐ゆ、聳々たる耳擴は能く一切の音響を納めて遂に誤らず、眞に學ぶべきもの多しとす。

その肉は補血催産の滋藥となり、皮毛は保溫の具として好且つ廉なり、柔毫は龍飛彩發の黒頭公と成つて紙帛の間に往來す、又近く洋醫の術進みてより兎仔を以て究理の犧と爲すに至り、人と世とを救ふこと幾何なるを知らず、その德眞に廣大にして無爲徒食の輩は將に兎輩に愧死すべきなり、宋史に『王者德盛ナレバ赤兎見ハレ、王者耆老ヲ敬スレバ則チ白兎見ハル』と、今や玉澤四隣に普ねくして白兎亦野に周ねし、亦慶すべきなり。

今茲に兎卯の雜篇を誌して敢て茶後の一餐に供へ、吉朝笑を頒つの資と爲さんとす、

兔と兎　音讀は何れも「ト」で共に「うさぎ」と訓む、兔は古字で兎は略字である。國語調査會制定の常用語には兔の方を失敬して兎丈を採用して居る、日本式ローマ字國字論の有勢な折柄一劃でも書くのに手のかゝらぬ方がいゝだらう。

兎を頂く　古い時代の勤め人は非職になるのを「蚰蜒に爲る」と云つて蚰蜒の様に嫌がつたのは、その非の字の形が蚰蜒に似て居るからの隱語である、又免職になるのを「兎を頂く」と云つたもので、それは兎と免の字が酷似して居るからの洒落であつた、今の人は「首になつた」と汚なくいつてのける。

卯　卯は「ウ」と訓じ「ボウ」と讀む、又「うさぎ」の意がある、卯の毛、卯の月、卯腹など日常の多くは兎の字を使はない。

十二支の卯　干支のうさぎとしては第四位に卯がある。俚諺集覽に『三十六禽を配當すれば卯は兎にあたれり』とある。

時刻の卯　昔の時刻として卯の時あり、一晝夜を十二分したる

時代の時の名で午前六時から八時迄の間をいふ、即ち六ツである、夕方の六ツと區別して「明け六ツ」といふ、源氏行幸の卷に『うの時に出たまひて朱雀より五條の大路を』又暦家が太陽の出沒を定むる古き歌八章の中に『二八出卯入鷄鳴』とあつて二月と八月は卯の刻に陽があがるといつてる、又

雨水、霜降、の節には卯の正三刻に日出で
啓蟄、寒露、の節には卯の正一刻に日出で
春分、秋分、の節には卯の初三刻に日出で
晴明、白露、の節には卯の初二刻に日出で
穀雨、處暑、の節には卯の初一刻に日出で
立夏、立秋、の節には卯の初初刻に日出で

と云つて二十四節の内半分は卯の刻に陽が出ると觀測されてあつた。

方位の卯　これ又支那傳來の學問で、古く暦家、陰陽師によつて利用されたものである、即ち四方の第一位である東の方を卯の方といつた。

和漢三才圖繪天部に『東動也陽動物屬木於干爲卯日出時爲萬物發生春』とあつて、それ故日と木とを重ねて東の字が出來たとうまいことをいつてる、松の内に風屋を覗くと月の出に波と跳び兎を畫いた繪風を見かけるが、これは東は卯の方であるとの繪である、兎が水の上を行くはおかしい話だがそれは後節でお話する。

兎の語源　兎の語源に就て瑞兎奇談に「兎ノ名義ヲ能ク考フルニウハ得ノ意、サギハ幸ノ義ニテ得幸ト云フコトナルベシ、其ハ如何ニト云フニ兎ハ奇獸ナルモノカラ自然ニ幸魂ト云フ、幸福自在ノ靈ヲ性中ニ具シテ、神ニモ人ニモ其幸魂ノ幸ヒヲ得サシメテ幸運ヲ開カシメルノ謂ナリケン」と語呂合の樣な説明がしてある。一概に採るべからず、又兎を單に『う』と略して云ふがそれは三十六禽を十二支に割り當てると卯に兎と一致するから兎は即ち『う』であるといふのである、三十六禽とは大集經に十二獸と稱するもので一晝夜を守護して居ると云ふ所の蛇、馬、羊、猴、雞、犬、猪、鼠、牛、獅子、兎、龍、などである。

おさぎ　兎の古名であるが、近江國の一部の方言にもおさぎといつてる。

つゆねぶり　兎の子の雅名、兎は子を生んでもその子を、養育することを知らず、夜露にそぼたるゝといふ說より、露舐り居るなりとの意で名けたものである。

露結び耳　兎の子の雅名で前と同じ說によつたもので、親兎は子を生み放しにて子兎が夜露に濡れそぼつのも顧みぬ故夜露

お斗に結ばうとの意である、小野なの歌に「宮城野のこはぎ（小萩）お本を床として親をも知らぬ露結斗」とある。

つゆぬすみ 兎の雅名、語源をしらず、露盜と書く。

月の輪 兎の雅名、月中に兎ありとの説より出たものか。

明眎 別名の一つ、眎は古文の視で又

明視 とも記す、和漢三才圖繪に『兎ハ瞬セズシテ瞭然タリ故ニ明眎ト名ク』と又『毎ニ熟睡スト雖モ眼ヲ閉ズシテ黒睛瞭然タリ』とある、本當にさうであらふか。

明叔 別名の一つ、月兎よりでし名か、尚ほ月精、卯月丈人、明秋、など月に依る雅名がある、又菊道人、決鼻、卯商、僕渥、淘褒、靉雞鳩扶、など文章博士でもなければ判らぬ様な名もある、又細い柔毛を持つので

秋毫 といひ、白い毫があるので

白毫子 などとも云はれる、又山地を馳け巡る靈獸なるが故に

地神 といふ敬稱もある。

舍迦 梵書に兎を舍迦と誌すと三才圖繪に見へ、和訓栞にも『うさぎ、兎、うは本名さぎは、兎を梵書に舍迦といへるによりて合せ稱するなるべし』とあるが一理屈有る。

うさ 童語でうさぎの略、うささんなどいふ。

野兎 野生の兎をいひ又山兎といもふ、毛が茶褐色で脚が早く、常に穴居して居る、肉は美味で賞美されてない、よつて獵師の的にする。

家兎 飼兎をいふ、今は食用として飼ひ昔は愛玩用として飼ふた、古くは金魚や蠶の様に道樂に飼ふことが流行し身代をよろけさせた者もあつた。

飼兎の流行 明治五年から七八年頃まで都下に兎を飼ふことが流行した、まだ渡來兎の少ない時であつたので色々種付させては變り物を生ませて競爭をして居た、白の更紗、三毛、茶の更紗、鼠更紗或は淺黄更紗などといふのが出來て、その頃の金で五拾圓から千圓以上もするのがあつた、やがて上方地方にも流行が移つて、これが爲めに士族の商法をやり秩祿奉還金の虎の子を兎の子に代へたが、〆子の兎の當が外れて破産したものも少なくなかつたので政府でも捨て丶置けず一疋につき毎月一圓づつの税金を取り立てたので忽ち廢れて終には貰ひ人さへ無く、食つたり捨てたりしたといふ。

越後兎 古書によると日本一の兎は北越の白兎であると云つて自慢をして居る、三才圖繪に『北國の兎ニ白キ者多シ、越後兎ト稱ス、形小ニシテ潔白愛スベシ、常ニ蔬菜皮ヲ食シテ能ク馴ル』と又北越奇談には、白兎は諸國にあるが、それは生れつき白いので、珍らしくはないが、北越の兎は春から秋ま

では毛が灰色であるが、冬になると白毛になる、これを白兎といふ、と誌してある。これは雪國のこと故動物の保護色として白變するので珍とするに足らぬが、昔の本草學者は讃美して居たものと見える、兎は禽獸で中にも白兎は藥にするといはれる。

兎の品位　白い兎が藥用になるの、珍らしいのといふかと思ふと簡堂叢書の僎書卷之三に『兎黄色爲最、灰色亞之』とある、書物が僎書なる處より見れば、其味の上下であらう、

月中の兎　月の中に兎が居るといふ神話のやうな考は相當に古くから人々の頭に喰ひ入つて居たものと見へる、これも亦支那傳來の架空的の說話で、月と兎は修文上離るべからざるものとなつて來た、されば月の雅名に玉兎、銀兎、月兎、兎輪、蟾兎、兎光、兎影、兎魂、などいふのがある、されば童謡にも童話にも月と兎を結びつけさせてしまつた。月中の兎について未曾有經に『波羅痆斯國、烈士池面有卒都婆狐猿兎彼是菩薩行修處當時爲帝釋兎燒身供養、帝釋將骸骨安在月中、以示天下人』とあつて兎が佛の爲に犠となりその骸骨が月中にあるのだといふ、此れと同じ話が塵添壒囊鈔にも載せてある、又、法苑珠林には『過去有兎行菩薩、帝釋試云、索目欲食、捨身火中、天帝愍之、取其燋骸置月中、令未來衆生知是過去菩薩行慈之身』とあつて前說と異なつて居るが兎の燋骸が安置されてあることは一致して居る、これでは餅をつくことは思ひも寄らぬ藪當だ、儒者は迷信嫌ひで五雜俎の一に『皆兒童里俗の談、近於遊戲』と云つて佛家の諸說を罵倒して居るのは偉い。

兎雀となる　究理の學開けなかつた時代の珍說を笑ふものが間違つて居ると承知して居ても、中々聞捨ならぬ話が多い、三才圖繪に兎は大水が出ると水中に入つて雀に爲り、雀は旱天になつて水が乾くと山に出でて兎に爲るといつて居るが山芋が鰻になつたり、雀が蛤に爲つたりした時代の兎であらう、又、

雄兎を生む　天宮に當てはめては『熒惑星明ラカナラザレバ則チ雄兎ヲ生ム』と與太つて居る。

月を見て孕む　鷄が牡鷄なくして卵を産むことは確實に經驗して居るが、昔の兎は月を見て孕んだと見える。『兎無雄而中秋望月中顧兎以孕』と和漢三才圖繪にある、又、撰集抄第九卷に『孔雀は雷を聞きてはらみ、くり（栗）は風を懷妊の緣とし、兎は月の光をみてはらむ』といひ、博物志には『兎望月孕、兎吐子』と瑯邪代醉篇にも『兎無雄、故見月孕』とあれば「十五夜お月様見ては、ねェる」の刹那に受胎するの

だらうか、をかしいことだ。

毛を舐めて孕む 又一書には『雄の毫を舐めて孕み、五ヶ月にして子を吐く、或は謂ふ兎は雄無しと』女護島の女は濱邊へ並び、南風に腰を吹かせて孕んだといふが色々重寶な孕み樣があるものだ。

兎は口から生む 兎は口から子を産むので、それで唇が裂けて居るのだと考へて居た、近峰聞略に『兎從口中出、蛙亦然』といひ、祖庭事苑第八十一に『兎は毫を舐りて孕み、其子を生むに及んで口より出す』と記してある、この說諸書に見えるが、彼是共引用して居るのであらうか、瑞兎奇談にも細說してある。

兎を鳥扱ひ 肉食禁止の風盛んなりし昔でも、四ツ足のうまい味は知つて居た、しかも柳營では元朝の羹として食べた位で、これを鳥として扱ひ、一羽二羽と數へ進物の目錄にも何羽と誌した、その云ふ處はうさぎを二分すれば、鵜、鷺であるなどは謎かけのやうな茶氣滿な話である。

一疋を片耳 古書に兎は一疋、二疋と書くべからず一耳二耳と書けと敎へて居る『兎一疋を片耳といふ』ので一耳とは即ち兎二疋のことである。

耳は武器 鷄でさへ蹴爪があるに兎には何の恐ろしげな武器が無い、併しその脚部に非常な走ることの早いのと、二つの武器を持雄の樣に走る、遁足、逃早く、逃出などの言ひ方は兎にことをかけて居るのでも判る、又耳が唯一の武器をなしてゐる代表者で、よく遠くの微音を收め、空洞ける聲の微音を聽きとるのは他の獸類に見られぬことで、耳は特異の形態をして居る、平常耳を折つて居るがスワといへば忽ちにして直立せしめ、或る角度の方向轉換をやつて發する方向を知るのである、人の噂や出來事を逸早く搜り知る人のことを兎耳といふのもこゝに語源があるのだ。

兎水を渡る 兎はよく水の上を走ると昔の人は云つてる、淺い河や澤は泳ぎ渉ることはあるが、深い處は疑問である、俚諺集覽にも海錄碎事を引用して『三獸渡河、兎浮水上、馬及一半、象徹底』（婆沙論）とある、諺に『兎波を走る』とあるが、これは月が出て金波が碎け躍る樣をいつたので、月即ち兎が波に躍つて居るのである、謠曲竹生島に『月海上に浮んでは、兎も浪を走るか』とあるのもそれである、繪風に波上の兎と日の出を畫いたのも、この意を畫いたもので、日月の意を巧みに表はしたものである、この構圖の風も大分少なくなつて來たやうである。

兎屁を裂く 兎の奇智よく強敵より免るゝことが五雜俎第九に

見へる、『狡兎遇ニ鷹來攫一翻仰臥以レ足擘ニ其爪一而裂レ之鷹即死』これ窮鼠却て猫を食むの類か、瑞兎奇談にも『鷹ハ諸鳥ヲトリヒシグ猛鳥ナルヲ兎ニ遇ヒテハ却テ擒ニセラル、ヨシナリコレ兎ノ驟獸ナレバサモアルベキ理ナリケリ』といつてる、

鷹兎を捉ふ 昔鷹狩の獲物の内獸類では兎を唯一の目標として居た、勿論他のものは大きくて手におへなかつたのでもあらう、されば鷹の餌袋の紐の結び方にも兎結びといふ名を持つたのさへある、簽啖雜記第一に『凡鷹兎ヲ見レバ必ズ逐フテ之ヲ搏ツ此兎避ケ能ハザレバ則チ仰デ四足ヲ腹ニ攢シ鷹來リ擘テ之ヲ開クヲ待ツ則チ鷹ノ裂ク所トナルナリ』鷹が目の敵にするかと思ふと、又同書に鷹の巣の中に往々生きた兎を發見することがある、これは鷹が生んだので我子故に食はない、其捷きこと鷹の飛ぶに同じだと記してある。話もこゝ迄來るとおもしろい。

お伽話の兎 兎と龜と駈け比べをしたお伽話は西洋の渡りものらしく、俚諺にも見えて居る、又兎と鰐のお伽話は古くからあつたと見えて、古風土記逸文の因幡記にその詳細の話が出て居る、水に溺れようとする離れ島の兎が多くの鰐を僞つて鰐の橋を作らせ、その背を渡つて無事に陸地へ戻つたといふ筋であるが、今傳はつて居る話とは少しばかり違ひがある、因幡の海といへば日本海だが鰐が居たとも思へない、風土記とは云へお伽話である かち／＼山のお伽も傳統は古さうで、赤本でも元祿頃のものを見たとがある、この話は燕石雜志に詳しく出て居るが、今傳はつて居るものと僅かに違つて居る、即ち兎が狸をおびき出す爲めに豆を煮ると、狸は其香りに釣り寄せられて豆を少し呉れろといふ、兎は俺と一緒に山に行くなら望み通り豆を遣らふと柴負ふた狸を伴れ出す、といふ條は近頃の話には無いやうだ。

遊戯の兎 全國の童謠を調べて見たが、自分の眼には兎を扱つたものが見當らぬ、たゞ一ツ遊戯の時の歌として江戸時代からのものが東京に殘つて居る、『うワさぎ、うさぎ、何見て跳ねる、十ワ五夜おうつき様見てはアねエる、ピョン、ピョンピョン』江戸期の寄席には物眞似や身振りが相當に喜ばれたもので、其中に兎の身振があつた、それは長い耳と跳ねるといふ特徴とを捉へたものであつた、又影芝居、影繪などいふ幼稚なもので滿足して居た、手首から先きの影繪當で隨分拙くない情景をも見せたもので、その中に罪のない兎があつて前半身の躍動が眞に迫つて居たといふ。

小舞の『兎』 能狂言の内には隨分多くの動物を採り入れてあるが、兎を主題としたものが小舞の中にある、こゝには歌謠を

すべる頌を評ける。

兎の羹 兎のあつもの即ち吸物で兎の陸を主材としたものである。兎の羹は徳川家代々の嘉例として元朝之を祝の膳に添へ又近侍の者へ下された。當日は兩御所白書院に於て三家及大廊下詰の者へ盃と兎の羹を下され又呉服を添へてくれた、又此朝宿老少老が登城して政所の部屋へ出仕する前に厨膳司が兎の羹を持つて出で御酒三獻をすゝむるが恒例であつて、これに列して大目付の輩も御相伴をしたのである、元朝に兎の羹を祝ふに至つた起りは、本朝食鑑第拾壹に『神大君草創之始。偶寓二信州一正月朔、獵レ兎爲レ羹以獻レ之、今爲二歳始之嘉例一歟』とあり、神大君は家康のことである。瑞兎奇談に『東照神君ヨリ九代ノアナタ有親君御息親氏君御父子上州新田ノ里ヲ立出テ信州林郷ナル林藤助光政ヲ御尋アリテ御滯留ノ時光政極月晦日雪中ニ兎ヲ得テ狩得テ翌ル元旦ノ御吸物トシテ御好ノ饗應シタルナリ其年ヨリ彌マスマスニ御開運ニ趣セ給ヘレバ、兎ノ好キ嘉瑞ナリト御賞美シタマヒキ當初ノ由緒ニヨリテ今ニ林侯ヨリ例年十二月兎ヲ獻上スルコトトハナリタリシ』と詳細に起源を述べてある。

兎の效能 肉食の稀であつた昔に於て兎肉の滋養價を稱へたものが少なくない、三才圖繪に『中ヲ補ヒ氣ヲ益シ渴ヲ止メ兒ノ[illegible]といひ、兎の[illegible]には[illegible]生易[illegible]不[illegible]といひ、肉は[illegible]皮を[illegible]くするといふのである、又この[illegible]は不[illegible]繪に『[illegible]生[illegible]生[illegible]治[illegible]』とある、この皮毛は『臘月收レ之、治二難産及胞衣不一レ出、餘血搶レ心脹刺欲レ死者極驗燒レ灰、酒服方寸匕』とあつて、兎に角安産浄血の効ありといふのが多い、又兎の毫の古い筆の頭先を『燒レ灰治二小便不通及難産一』といつてる、これでは餉の骨まで骨湯で舐ると一般殘る所がない。

兎肉を忌む こゝに一つ矛盾がある、論衡命義篇に兎の肉を食ふと胎兒は兎に背かつて兎脣の子が生れると誌してあることで、諸書には産を助くるといひたから、こゝには姙婦に食ふなと戒めて居る、先年サツカリンを使用したラムネを有毒だといふので數千本隅田川へ流さした故、[illegible]は砂糖が發騰した四五年前に、サツカリンは人體に害なしと新聞で發表したことがあつた、矛盾は今も昔もあるものだ、兎肉の食べ合せについて三才圖繪に『雞芥橘及ビ雞肉ハ兎ト同食ヲ忌ム』と出て居る、大正の今日では雞肉の中へ兎肉を交へて賣る狡るい者が大分居るが外見は實によく似て居る。

兎の醢 兎のしゝびしほは補血の効があるとて本朝食鑑第拾壹

に『古者有二兎醢一、供二於釋典一』とあつて、その作り方は『碎肉百星枯鹽十二升、麴三十升、加二椒韲一三星一、酷酒和拌、封二藏甕中一、六七十日乃成』と儀禮第三に出て居る、如何にも山國の食べ物らしいが糀漬とあればうまいだらう、そのまゝ食べるものと見える、今ある牛肉の粕漬は燒いて食ふものだ。

兎い食べ時と臭ひ兎 の本當の味は八月から十月迄としてある、極寒のものは脂が少なく、春先のものは肉に締りがなくて不味であるといふ兎肉は殆んど鷄肉の樣だがたゞ一種特有の臭ひがあるので鼻につく、兎を屠ると同時に頸動脈を切つて倒まにし、充分にしかも急いで全身の血を絞り捨てると、殆んど持前の臭ひが無くなる、もし臭ひのあるものであつたら煮る前に鍋を生葱と胡椒でいためるか牛乳でかき廻すか、鷄、牛の脂身でかき廻して置いてから、肉を入れると臭味が無くなる。

兎の言葉 兎同士の言葉ではない、言葉に見えた兎である。

○兎の毛の末　すべて物の小さいのに譬へていふ言葉で毫末の熟字もこの意より起つたのである、法苑珠林に雜心論を引用して七極微塵を紹介して居るがそれによると兎毛をいかに微小に譬へたか呆れる。七極微塵成二一阿耨池上塵一（中略）、七阿耨塵爲二銅上塵一、七銅上塵爲二水上塵一、七水上塵爲二兎上塵一』とあつて想像も出來ぬ細かさ、和訓栞中卷に、兎の毛の塵を『兎ハ其毛至て細しとて譬とせる也それにたまる塵を兎塵といふと梵書に見えたり』とあつた、日常の言葉にも小さいものを卯の毛で突いた程などと云つてる。

○兎　耳　長い耳の人に對して擧めていふ言葉で、又、他人の善惡を逸早く聞き搜り出す人をもいふ、これを

○兎の耳　ともいふ、

○うさぎ　生花の折の花止めの仕方の中にうさぎといふ止め方がある。

○卯なみ、舊四月即ち卯月に立つ浪をいふ、九州南方の方言である、無名抄にも『四月五月にはあけくれ浪たちてしづまる間もなく卯月に立つをばうなみといひ』云々とある

○うの花　不良漢仲間の隱語で、雪降りのことをいふ、白く咲き亂れた卯の花に譬へたのである。

○うさぎ　小盜仲間の隱語で、手提鞄のこと、その形が蹲まれる兎に似てゐるからの言葉。

○うさぎ　小盜仲間の隱語で、畑や圃の作物を專門に窃盜する者をいふ、兎も隨分作物を荒す故にいつたものであらふ。

○うさぎ　遊客が人目を忍ぶ爲めに頭からスッポリと羽織を

渡りたるをいふ、[illegible]
る。

○うさぎ　拐子を使用する賭博の一種、細説は略述しておく。

○うさぎばね　兎跳ねは動作の名で、言の泉に『一たび身を屈め足に力を入れて前へ飛ぶこと』。

○卯の花の　かけ言葉の一つ、卯の花と同じ頭音を用ふる憂きにかけていひ、又さつき(五月)にかけていふ、萬葉「うぐひすの通ふ垣根のうのはなのうきことあれや君の來まさぬ」同「時ならず玉をぞ貫ける卯の花のさつきを待たば久しかるべき。

○兎　缺「みつくち」の義、生れたがら口唇の一部缺けたもので、兎唇ともいふ、又うぐち、くちかけ、すぐち、ゐぐち、三つ口、などいふ。

○兎　園　熟語の一つ、もと梁の孝王の庭園の名であつて、その庭を庶民に貸し下げて耕作播種させたが、その時の簿帖には皆俗語で記錄をした、これを引いて後には俗語で書いた書物とか、內容の淺薄な書冊をば兎園冊子といふ樣になつたので、有名な隨筆兎園小說などもこの意を汲んで名けたものであらう。

兎の角論　當然判り切つた事を無駄に論議するをいふ、兎に角俚諺にも穿つたおもしろい四五の兎がある、

[illegible]
俳諧に、[illegible]
云り』

兎の登り坂　兎は前脚が短いので、坂を降りる速さに較べて登り坂の早過るといふより轉じて、物事の早過ぎるをいふ、毛吹草の中にはやく越る年や兎の上り坂　などあり

兎の晝寢　「油斷大敵」と同意で、人に勝れたる者でも油斷をすると失敗するとの諺、童謠や童話でお馴染のイソップ物語の龜と兎の話によるものであるが、この諺は我國にも古く在つたと見えて世諺諡にもこの語が見える。

兎の糞　物事の長く續かぬにいふ俚諺で、その糞が粒々として少しも連續せぬのに譬へていつたもの、狂談にも『兎の糞で長く續かぬ』など問答體のきまり言葉さへある、俚諺集覽にも『思ひ立たる事を早く息るを云』と

兎の股引　兎の糞と同義で、短かい脚の方の股引を長い脚に穿いても途中で足りなくなつて長く續かぬとの意より取つて、物事の長續きのしないことにいふ。

兎兵法　身の程を考へずに無謀の行をなすことで、晒吟我集に『中々にやめよ兎の生兵法、犬に囓るゝ傷の甚ぞ』

卯の時雨に笠を脫げ　この卯は時刻をいへり、卯の刻に降り出

した時雨はすぐに霽れるといふ意。

兎も五日なぶれば喰つく　「地藏の顔も三度」と同じ心で、柔順な兎でも度々弄れば喰付くといふのである。

卯味噌寅酒　卯の日をいへり、卯の日には味噌を造るを忌み、寅の日には酒造ることを厭むとの諺。

卯腹辰腿寅背中　灸治をするに避くべき時刻を教へた俚諺で、卯の刻には腹に据えるなといふ意である。

見レ兎放レ鷹　物事は目當無しに爲るなとの俚諺で、兎が見えたら鷹を放てとの意である、戰國策に『見レ兎而顧レ犬未レ爲レ晩也』とあるのも同義である。

兎の珍談　俚諺は大凡盡したつもりである、こゝに兎の譚二つをかゝげる

○**八足の兎**　前々太平記第二十卷にこんな話が出て居る、延長二年春二月大和國から一首八足の兎を獻じたので、それは珍らしい事だがと、早速陰陽博士に申付けて占はせた處、これは雌雄の兎が二身合體したものである、貌は陰であるから消え易いが、足は陽でまだ消へきらずに四本餘計に有る、かういふ爲めだから、御憂慮には及ばぬと占つたので事濟んだといふ。

○**兎の腹皷**　蜀山人の隨筆一話一言の一節に、兎も腹皷を打つことがある、伊豆の國へ行つた人の話に、新左衛門村といふのがもとの河津家の領分にある、この山地は兎の多く居る所で、或る年土地の老人が三社詣をして歸るさ、この山中を通つた所、程近くに箱の銃でカタ〳〵と箱の胴を打叩くやうな音がしたので、不思議に思つて、そつと忍び寄つて見ると、數十疋の兎が圓く連なつて、皆な立上り、短かい前脚で自分の腹を打つて居たが、思はず洩らした老人の咳に驚いて、忽ち散り〳〵に逃げ失せた。といふのである、これは月に緣ある狸の腹皷を借りて、同じく月に因みの深い兎を捉へて腹を叩かせたのではあるまいか、

兎を冠する動植物　兎にあらざるうさぎとしてその名を冒す動植物がある。

○うさぎ蝙蝠、我國には稀で、耳の長大なのが特徴である。

○兎馬、馬と兎の合の子のやうなもので、よく人の知る處。

○うさぎ蟲、東京の言葉で「おかまこうろぎ」正しくはいとゞである、よく跳るよりいふか。

○兎ぎく、菊科に屬する多年生の高山植物。

○兎かくし、木の名、又「はまうさぎ」ともいふ。

○兎絲、藥草茯苓の別名。

○兎兒傘、又の名「やぶれがさ」といふ、草の名。

○變兒形卯ハルトテノヲ一ト云ガ、ナの名
○卯月花、伊勢の方言に俗稱卯月花といふ。
なまである。

卯にうさぎに同じけれども、兎として忌さるゝことが殆どない、此兎ならさるうさぎとして、行事に器財に又は神事に、多くの卯を見ることが出來る、煩はしいが次に大概を解說する、これも亦卯の歲日の景物となるであらう。

卯槌（うづち） 正月卯の日の祝に用ゆる小形の槌で桃の木で作り、長さ三寸五色の糸を垂ることと五尺ばかりである、此日槌を持てば邪氣を打拂ふといはれる、昔は糸所より内裏に奉ると西南の柱に懸けおかれたといふ。現在でも此槌を採つて長さ三寸ばかりに縮製し、柳の守と稱へて弘前在岩木山神社で正月に施與する。

卯杖 これ亦破邪の呪として、正月初卯の日に作るもの、桃又はその他の木を五尺三寸に切り二本か四本づつに束ねて朝廷に奉つたもので、その折卯杖祝（うづゑほがひ）といふ壽びの詞を奏する、今でも東京龜戸神社にては正月初卯の日に丈け三尺ばかりの枝に五彩の糸を垂れた卯杖を希望者に施與する、尾張の熱田神宮でも正月には、

卯杖舞の神事 をとり行はれる、胸尻にその祝歌が出てゐる（上略）今にたちふしく出木のふたふてゐに、とあり、とかれさかりなるべきに」とある。

卯月 陰曆四月の別名で卯の花月の略、一書には卯月に咲く花なる故に卯月の卯の字をとりて花の名につけたり」と主客を轉倒してしまつたのもある、この月は草木茂る月で茂にはウの音がありその音卯に通ずるので卯月と名けたのだといふ說もある、又一說に植月（うゑづき）の略だともいはれる、

卯の花 卯の花はうつぎの花のことで、卯月の頃、と歌にも云はるゝ様に眞ッ白に咲き亂れる。

卯月の忌 陰曆四月賀茂祭の折にからだを潔める爲に引籠ることをいふ、一書には釋迦の生れた四月八日には神事を忌むべしとの俚諺ともいはれる。

卯の日の神事 毎月卯の日に攝津國住吉神社にて行はるゝ神事である。

卯月八日 年中行事の一つで、毎年舊四月八日つゝじと石楠花を竹の尖に結びつけて戶毎に軒に立て、蟲除を拂ふの法とする、今でも竿の先に日旗又は鎌を結んで軒に立て疫病を拂ふの風が關東各地にある、二月八日、十二月八日共に行はれるが卯月八日の餘風か。

卯の花くだし 舊四月降る雨をいふ、くだしは降しではない、

初夏の雨が長く降つて「咲いた卯の花を朽す」といふので即ち卯の花朽しであるといふか。

卯の花曇り　鶉衣に「卯月は例の卯の花ぐもりに」とある通卯月の曇り勝なるより名けたのである。

卯の花月夜　うのはなづくよは垣などにびつしりと雪でも降つたやうに真白つに咲いた夜目の明るさを、雅人共が月光に見立て、卯の花づくよと洒落たのである。

卯の花おどし　鎧の鐶を紐で綴ることを縅といふ、卯の花に見立てた真つ白た紐にて上部を綴り下方をその葉の色に擬らへた萌黄又は藍の紐で縅したのを卯の花縅の鎧といふのである。

卯の花色　青と白の色をいひ、卯の花に擬らへていふ又、

卯の花衣　はその重ね衣をいふので、表白く裏は青いのである、狩衣、下襲衣などに仕立て丶四月に着用されたものである。

うの花いり　雪花菜をうの花といふので、豆腐のから煎りをいふ、はら〳〵とした姿が卯の花に似たよりいふ。

卯の花膾　ぬたなますの上に大根の千切り又は湯を通した魚肉などを散らしたなます。

卯の花飯　玉子とダシ汁杯で味を付けたきらずをかけて食べる飯をいふ。

卯の花焼　鯡を焼いて酢に浸し、豆腐のからをかけた食べ物。

卯の花あへ　おからをよく〳〵擂りつぶし、酒と鹽とでカラ〳〵にいりつけたもので他の食品を合へる料理。

色々卯の花の陳列で恐れ入る。こ丶に筆を擱くにあたり、わざと書冊に關する卯を誌しておく。

卯月本　謡曲の印本出版に際して、一番早く出来たものを卯月本といふのである。

兎屋　古い頃の通語の一つ、明治十八九年頃に内容卑俗にしていかさもの丶金文字入りの大部の書冊を發行した望月某といふ山師があつた。その屋號を兎屋といつたので轉じて總てのいかさま物の通名となつた。「あれは兎屋ものさ」などと云つた。

（大正一五、一一、六、稿）

楚囚文學考

日夏耿之介

かつて古代語獄文字を物色して、ボエティウスの『哲學安慰論』をはじめとし、マルコ・ボオロ、サーリ伯ヘンリイ・ホワード、セルバンテス、サウスウェル、ウキザー等の鐵窓詩文の、その多くは非理なる亂獄裡に在つて計らずも創作せられ、たま〱今日に殘つてゐる種類のもののみを說いた事があるが、(拙著『瞳人閑話』第一頁——第二十一頁「獄中文學考」參照)もと東京朝日新聞の懇囑に基き新紙上に掲げた雜稿故、短文に過ぎ繁簡よろしきを得なかつたが、既に一部讀書家の眼に觸れ、筆者としても今更再說の迂に堪えないからその大半は略くとして、爰には主として英吉利十七八世紀の拘囹文學の中から、東西比照興味の存するもの三四を拔いて日本支那のそれと合せ說き冬夜の茶譚として見ようと思ふ。

一　囹圄の騎士詩人

附、『世界史』爭情。『史記』の筆者。元好問の詩風。

騎士的感想はシラノ・ド・ベルジユラクをも忍ばしめ、快活はエリザ女王朝の大學才人派を想はしめる、而も忠誠にして敏慶且寸毛の私心をも挿さず、あまつさへ人生及びその運命に恬淡は東方高士の欣懷をさへ有する美貌の紳士、これが囹圄の騎士詩人と世に謠はれた十七世紀英吉利の人、リチャード・ラヴレスである。

眞理と光明と自由とのために幾多の鮮血をそそぎつくして獲得した淸教徒の獨裁權の活用は、とにかく英國十七世紀の一壯觀たるを失はなかつた。まことに、グロオシヤスの印象ふかい一語のごとくに、エリザ女王崩御の後一年にして英吉利を治めてゐたものは神學である。新譯聖書が、萬人の胸に新らしい教義を示し、信仰を鼓吹し、これが導火線となつて國民のテムペラメントの變兆が將來された。けれども、初期淸教徒は只もう沈鬱で謹嚴顏ばかりしつづけてゐた我家の宗旨の偏狹な狂信者流のタイプでは必ずしもなかつた。エリザ朝の遺臣である伊達

で寬潤な典雅で輕快な文化的トンはこの新時代の初期にも尙浴け込んでゐるのである。凡そ淸教徒たるものは貴族の間よりも、中流以下に多かつたから、その屬する階級の感化によつて、ある職業者にもあるひは淸教徒たり、あるひは王朝式たる特色が色づけられてをる事はいふ迄もない。しかも、その何れにも、さまざまな時代相の複雜な反影を見る事が出來るのである。

たとへば、ミルトンといへば、晩年盲して尙詩筆を手離さなかつた點でよく曲亭馬琴を聯想するのみでなく、ひとしく道義的に氣むづかしい、禁慾的な、腐儒の臭味をさへ帶びた、堅苦しい教訓的作者のやうに毅然と考へ去つてしまふ者が、特に今代の青衿の間に多く見受けるやうだが、少からぬ淸教徒詩人群中の帝位に立つたこの大詩家の青春の若姿は、丈夫であるが華奢に細りとして、凛とした細面の美貌の額上には鳶色の頭髮房々と豐かにもの思はしげに垂れ下つてゐた。また、父親に倣つてオルガンや琴をもたしなみ、王朝末期頽唐青年の演劇好きにも似て沙翁やジョンスン劇の一看客だつたのである。

が、王黨詩人に至つては、勿論ミルトン並の耽美僻の比でない。ラヴレスを王黨詩人中の獄中文學作家の雄とすれば、その他の俳作詩家には例へば、エイブラハム・コウリがあり、サー・ジョン・サツクリングがあり、ヰリアム・ダヰナントがあり、サー・ジョン・デナムがあり、ヰリアム・バビントンがあり、エドマンド・ウォーラァがある。中で、ダヰナントもウォーラァも事に坐して獄に下つてゐるが、囹圄文學は產んではをらぬ。

元來、王黨派の喜び愛するものは、即ち、音樂であり、繪畫であり、詩歌であり、戲曲であつて、人生の樂しみ、この世の喜として之を愛用する事を競ひ嗜み、爭つてこれを玩賞したので、淸教徒がこれ等の藝文の精華を相當に貶んでゐたものゝ、かれらは營々として嚴しく勁き日々のパンを求め得て而して後にこれを漸く認めたに反して、王黨騎士派は直ちに以て人生最美の花と觀じ、人生最厚味の美酒と味はふたのである。兩派ともに人生の一面に對して大膽敢爲の等しき熱心を示してゐたが、その方向は全く異つてゐた。

さて、ラヴレスは沙翁死んで二年後の初春ケント州はウーリッチの住人なるサー・ヰリアム・ラヴレスなる地方紳士家の長男に生れて倫敦近郊の初級學校を經て牛津に入學したが、十六七歲頃の彼は世にも稀な女にもしま欲しき美少年で「かつて目のあたりせし人にてかばかり美貌の可憐兒はなく、生來內氣の性にして優にやさしき立居振舞ひなれば後にはいたく女性だちに尊崇敬愛せられ」云々とラヴレス傳の唯一の典據であるアン

ソニー・ウッドの「アテーナ・オクソニエンシス」を引證して諸家もよく述べてゐるから、よく／＼の次第であつたに相違はなく、先は本朝義政將軍の頃に京師近く隱れ住んだ豪族の若様のたぐひとも想像せられよう。尤も、かりに詩人が十六歳の一六二四年を目途とすれば、この年は明正女帝の第五年寛永十一年の徳川家光入朝の歳であり、左甚五郎歿するの當年であり光悅死年の四歳前であるから、文化の素質は大分カロライン朝詩人在世の砌とはちがふ。

ジェイムズ王が西班牙政策にたよる處多く、つひに政治上に孤立してしまひ、同時に清教徒とも加特力教徒ともいよ／＼まづくなつて、結局、どうにもかうにもならなくなつた頃は、マーテルリンクの『智慧と運命』論の無智者の引證にしてもよかりさうなヘマ計りつゞいたので、その名著「ノヴム・オルガヌム」を今上に獻じた大狀師フランシス・ベイコンの『學問の進歩」の程度を以てしても、「新アトランティス」に二十世紀考古學上の新發見を豫感せしめる知識の深さ廣さにあつても、當時の頽勢を既倒に先んじて能く挽回するの叡智は働らきえなかつたばかりか、吾身まで下院の反對黨から苞苴の疑ひを以て告訴せられ罪狀たちまち明白に及んで、倫敦塔に幽閉せられ罰金四萬磅は幸ひに王の慈悲で免されたが、牢を出てからは政治上の勢力を喪失して貧乏と失意との間にたま／＼科學上の實驗中病をしてゐた折の惡寒が祟つて病死してしまつたほどで、延臣大官悉く王にそむいて僅かにバッキンガムのクランフィールド藏相の心配の瞳が光つてゐるばかり、おまけに、議會は財政、法律、宗教、外交あらゆる方面にその權利を要求してやまず、而も着々とそれを獲得して行つたので、一朝變裝して首都を忍び出でたチャールズ王子が西班牙の首都マドリッドに於ける暗中飛躍も事つひに効を奏せず再び空しく歸國に及んだ時倫敦はあげて祝酒に篝火に歡喜の衷情をもたらしたのは、執念き西班牙の怕るべき巨手からまぬがれる事になつた英吉利の政治的自由を突如完全に自覺したために外ならないが、その父王子が一向にたよりにならず、西班牙との政略婚は止めになつて卒然として佛蘭西のアンリ四世の公主にあたり、時の佛王には妹であるヘンリエッタとチャールズ王子との婚儀が結ばれ、いふ迄もなく下院は忽ちこの加特力的新王子妃擁立に政治的宗教的反對の鐵意をもらしたが、時も時ジェイムズ王が俄然崩御に及んだので、王子は即ちその王位を承け、新王の議會が又新たに召集せられるに至つた。時に、一六二五年五月、詩人ラヴレスは七歳の春である。

史家グリーンがチャールズ新王の性格を評して「片意地と

と奇妙に混り合ふてゐる The strange mixture of obstinacy and weakness in the Prince's character と評したは巧妙の觀察語で、新王一代の擧措悉くこの性格の二方面の反撥と妥協との犠牲ならぬはない。否、むしろ、暗愚の人間性一般の所有する對抗的二氣質の孕む月足らず兒である。

チャールズの新政は最初からケチをつけられてゐた。元來、當年の英吉利では慣習として即位に際して新王に關税の一部であるところの噸税と磅税とを一生涯呈上するのであるが、議院はチャールズに對して破格にもこの慣習的終身權をたつた一年に制限してしまつた。議會は即ち停會となり、ついでバッキンガムの蠢動で西班牙征服艦隊一萬人九十隻の艨艟がカデスに船寄せてそこで荏苒としてなす所なく戰陣の閑日月を送つてしまひ、次いで、同じバッキンガムの無知無策から、佛蘭西、西班牙を向ふに廻して新しく戰火を交へねばならぬ困つた運命に立ちいたり、サン・マルタン城の包圍攻撃には英吉利兵二千人の屍を徒らに狹い堤防のほとりに横たへしめた。冷靜と熱情とを兼ね備へた剛毅の政治家サー・ジョン・エリオットの活躍したのは實にこの際である。かれの抗議が宣告せらるるや、議會は慘たる大嵐の前のいと氣味惡き沈默に陥り、議長がその演舌を法を以て干渉すると、演者はピタリと座に坐つてしまふ、そのとたん、忽ち蜂の巣をつついた樣な大混亂が現出されて、泣くもの、喚くもの、怒號するもの、泣いてをる者を責めるものもあれば、英國は滅亡だぞオと叫びだすもの、神に祈つて自分と英國との罪を懺悔するものもあり、皆あまりに昂奮して演舌も何も出來なくなる始末。程なく暗殺者フェルトン中尉はポーツマウスの大會堂に雲霞の如く群つた民衆に立ち交り、バッキンガムの小胸のあたりに匕首一閃、心臟ふかくぐさりと刺さつた。泣き悲しんだは新王で、喜び勇んだは國民であつた。議會はここに解散せられたのである。

コロンブスが新世界探險の壯途に出る前の事である。伊太利はヂェノアの血に孕まれ、英吉利に生れ育つた海客セバスチャン・カボットなる者、一四九七年にブリストルを船出してアメリカの海岸線を南進してフロリダに辿りつき、更に北上してハドソン灣に到達した事がある。同行者は悉く英吉利人であつた。しかし、水夫カボットの夢の跡を追ふものは大英吉利に一人もなかつた。かくして、コロンブスの發見が世界に新らしき大陸をもたらするに至つた。その間、英吉利人は何處で何をしてゐたか。かれ等はニウ・ファウンドランドで貧しき漁業に從事してそれで滿足してゐたのである。エリザ女王朝に至つて英吉利人は漸く新大陸に着眼し初めて、北米の北岸から阿細亞に

□しをしたいといふことであつた、而してかの一人なるマーティン・フロビッシャなる者ラブラドルに赴き、該地に素晴らしき黄金ありといふ吉報をもたらし、爾後少からぬ冒險家の數々がバッフィン灣頭に浮べる大氷山の間にその探險の舟を進めたのであるが、エル・ドラドの夢は破れ易く、搖錢樹のまぼろしは昔の事である。かの金鑛話がウソ僞りと判ると、飽くなき人間の射倖心、冒險魂は、更にその邊に移民してやがては大殖民地を設定しようと企てしめたが、人煙稀薄にして寒氣凛烈であるから到底定住するに由なく、おめおめと歸還の日どりを定めねばならなかつた。かゝる冒險者の中に、サー・ハンフリィ・ギルバアトなる勇士あつて、壯心空しくして大風のためにわが船は碎け、輕舸にとびうつつて、逃れ出でんとしたがそれも叶はず、その小舟さへ沈沒に迫つて今しも點じてゐた一點の燈火が永劫の眞暗の中にとわが運命ともどもに消えて行くその刹那、かれが發した最後の言葉こそは有名なものとなつてゐる「海を通つても、陸とおんなじに天國へ近づけるのぢや。」と。而もこの人の異母兄弟こそは、これ亦獄中文學者の急先鋒として知らるゝエリザ朝才人のサー・ウォーター・ロウリその人である。

横道ではあるが、話の序にロウリが事をかいつまんで話してをかう。

兵隊であつて、政治家で、詩人であつて、歷史家で、しかも傑れた詩人でもあつたロウリはデヴォンシャの生れで、生れた一五五二年前後である。六十八年牛津に學んで早くも哲學と數學を以て嶄然と頭角を青年學者流の間にあらはにしたが、翌年には既に新教徒ユグノー派を助けんとて志願して佛國義勇軍の一員となつて佛蘭西にわたつたのがそもそもかれが一生の大冒險の初まりで、前記ハンフリ・ギルバアトと共力して北米開發に意を傾け、西班牙人の反對にあつて事空しく水泡に歸したのは一五七九年の事である。その又明年には愛蘭叛亂征討軍に加はつたが、間もなくエリザベス女王のお目にとまり御寵愛いとど淺からず、運命の芽が漸く吹き出した頃、八十四年に再び北米殖民の夢忘じがたくて、バーヂニャ州發見占領の事に從ふた。このバーヂニャなる地名は外ならぬ女王の命名にかゝるのである。

歸ると早速ナイトに叙せられサーを冠りする身となつたが、八十七八年の無敵艦隊の際にも海事上の敏腕を示しお覺え愈々芽出度かつた。博學多才、稀に見るエリザ朝型の才人ではあつたが、どうも重厚の資性、有德の人ではなかつたらしく只無暗に冒險心押へがたきものあつて、今日は佛國に在るかと思へば、明日はネザーランド、明後日はバージニャと悴々し、哲學を勉强したと思へば翌年はミドル、テンプルで法律を習ふといふ

風でムラ氣といへばムラ氣であるがその代り死生の間にも屢々出入し、一五七二年巴里に在つた日、聖バルトロメオ祭八月二十四日日曜日の大虐殺日に廻り合せ、駐佛大使ウォルシンガムの邸に身を寄せて僅かに災害を免れた事もある。

一五八五年四月九日再びバーヂニア遠征の舟出して、史上有名な煙草の逸話を殘すに至つたはこの際の事である。オルディーズの『ロウリ傳』によると

「ロウリが喫煙の傳說は、最初かれがコッソリ書齋でその莨を一服してゐるところへ、主人づきの從僕が强麥酒(エイル)を大コップへついで彼のもとへやつて來た。主人はパイプをくはへて本を讀んでをる。見ると、その口からは濛々と白煙立ちのぼつてをる爲(ため)體(からだ)に、魂をつぶした從僕は、ありあふ麥酒をザブリと計りロウリの顔に浴せかけて、轉げるやうに二階を駈け下つて、大變だ、旦那さまが火事だぞよ、早く行かんと灰になつてしまふ哩と怒鳴つたのであると云ふ」とあるが英蘭に莨を愛蘭に馬鈴薯を輸入の元祖は彼かどうか、眞僞は何れにしても、事件の發頭人がロウリであるのはこの逸話を益す興味のあるものとしてゐるのである。

黑日は遍く廻り來つた。一六〇三年女王崩御あり、新王ジェイムズ即位したが、女丈夫の劍は柔弱男子の女仕事と更代したのであるから、女傑ヘンリーズはじめで明哲オムフレ妃の御世となつたのであるから、勇士も才人も篤信者も天才も能才者も巧者も今や自らその人影を隱し衒學家と柔弱男子と凡俗と鈍物卑劣漢とがはびこる事となり、三月即位式あつて、年の十一月七日には早くもロウリは大逆罪のとがめを受けてゐる。女王在世の砌、かれは女官の一人エリザベス・スロックモートンと懇契を通じてコッソリ結婚に及んで、忽ち男まさりの女王の女らしい逆鱗にふれ一時宮廷を追出された事もあるが、その間は例の冒險で憂さ晴らしをやり間もなくお許しが出て舞ひもどり、今度は海軍提督となつて各地に轉戰し忽ち勇名を天下に轟かした。で、國事犯の嫌疑といふは、表面のその理由を誌した本文には、「王位ヲ剝奪セント叛亂ヲ企テ、宗旨ヲ改メテ羅馬迷信教トナシ、外敵ヲ誘入シテ王領ヲ侵略セシメント」したのだが、少くとも、ジェイムズの從弟アラベルラ・ステュアートを王位に就けんとした形跡は明らかであつたといふ。この時の裁判は英國史稀に見る大裁判で、判官には一代の名流悉く椅子を並べた判廷で、かれは「蝮蛇」、「謀反人」、「破廉恥漢」などの名を以て呼ばれ、中には咳唾など吐き掛けた非道い法曹もあつたが、如何な權力とてこの女王朝の英雄の靜かな魂を損ずる事は到底出來なかつた。法廷に於ける模樣に就てプリンスの『デ

ヴォン州人傳記によると、ロウリの態度は判官に對し　悉く恭順謙遜ではあつたが、決して屈從的ではなかつた、義務的ではあつたが、斷じて哀心してはゐなかつた、陪審員に對しては、慇懃を極めてはゐたが、決して卑しい請謁のそぶりは見えなかつた、彼等に希望的の態度ではあつたが、斷じて信用はしてゐないらしかつた。心を込めて理を以て說服せしめん樣子ではあつたが、かまへて見苦しくしつこく懇願する模樣はさら〳〵なかつた。死の恐怖よりも生への愛をあらはしてゐたと云はれる。かくして有罪を宣せられ國王特赦の餘地を殘してをいて倫敦塔に送られてしまつたのである。

「塔」の中で十三年の春秋を送つたのであるが、その獄中で物した數々の文章、中には、議會の特權論もあれば貿易論もあり、海運論もあれば西班牙現狀論もあり、マホメット一代記もあれば征服王ウヰリアム御一代誌もあり、又、鑛山論や鑛石試驗法論もあるといふ樣に實に廣汎な題目にわたつて一々細心の攻究を試みたのであるが、中に著名の作篇がかの有名な『世界史』であつた。

獄中に在つて心にかゝるは多難な國政國事の上であつたから、ヘンリイ王子にしば〳〵書を裁して己が所懷を陳じてゐるが、王子は不幸夭折してかれの擁護者はその最後の人を失つた。されど、尙もロウリは勇敢に國王に歎願して、一六一六年八月南北ギアナに殖民する故を以て任官を發され、翌年三月二十六日かれとしては一世一代の運命掛けての冒險の旅に上つた。かれ米西班牙植民地は悉く此偉大なる英人來の襲報を受けとつた。まさにわが全運命、わが友、わが子、わが安住の望みの悉くを賭けた冒險であつた。かくて運命は試されたが、所有は悉くこれを失ひ、最愛のわが子は殺害され、勇敢なる友人ケミス船長はピストル自殺をとげ、恥しめられて、零丁れて斷腸の思ひで謀叛仲間の犧牲となるべく敢然とわが故山に還つて來た。歸還前三ケ月その妻に與へた尺牘は哀切を極めてゐる。

「手翰を物すこと今は氣も進み不申候、御身を慰めん術だになければ。今まで悲しみとは何の意味かを知らざりし也、げに神こそ知り玉はめ。わがおん身に申しきけん事はたゞ神意、神助に從ふべしといふ一事のみ、又、ハーリントン夫人が獨り子を喪へるがごとくに、皇妃も柔從のみ心もてヘンリー王子の薨去を堪え忍び玉へりといふ事を記憶せられ度候。最愛のわが妻よ、心慰めてあるべし、吾等は兩人にて心悲しむ也、されどわれの方少かるべきか。久しく心悲しんであるだに叶はねば。餘命既に盡何もあらざるこの身なれば。

心進まば、シクレタリ・ウヰンウッド氏が書翰を一覽　之可く、同氏はその手信の寫しをおん身に送るべく候。御覽相ならば一切の事情判明いたすべく候。小生は幸にしてかの書翰を、わが腦も亂れ勝ちなる間に認め申候、如何にも右認めしは苦痛の事にて事の外に困難を覺え申候。

手紙の寫しをケリウ卿に差上ぐる樣シクレタリに希望致置候。病人のわが持船を満めて、病人はそれ〳〵家郷に返し申候。この上は神われ等が歸還前に何物かを賜けらん一事のみ。ロスベリの皆々樣にもよろし〳〵御申上候。若し生命あらばニウフアウンドランドよりおたより致可候。該地にて船を満め糧食を供する心算に候。そのために支拂ふ程の煙草は十分に所有致居候。雄々しきわが子の死せしをばいと健氣に御辛棒有之可く、神々こそお惠みお慰め玉はるべく候也。」

とあり、更に哀れなるは、「神に抗辯いたし度は、サー・フランシス・ドレーク及サー・ジョン・ホーキンズの事業失敗して傷心死去に及候一事に候。われ等も然あらばやと希望致居候。御身を慰め救はんため、何ぞを御身がために準備せん望みにて、おん身がために悲嘆に抗するの念も今は無之候。生きて戻らば、わが心に勞ひつけてくれたるは、おん身を懸念の一存ぞとお覺悟なさるべし。………われ等が護られてありし仔細を今更談るも古き事なるが、それも生命だにあらば申上ぐ可し。わが脳は亂れ、長文の筆執る事叶はねば。尙、小生は生きてあれば事の仔細を認むべく候。(此段落以下と以前との間には時間や空間の距離があるらしい)ウイトニイにプリマウスにてわが板金を悉く賣却に及び、又、わが艦隊の船長等よりも多く債權や假用貨幣を與へたるに、グラナドオズに逃亡し、ウールンストン之れに伴ひ逝れ候。されば、今は五隻を餘すのみ、一隻は家鄕に送り申候。要なきやくざの烏合の衆たる速船の類に身を墮たんは容赦もあるまじけれど心に掛くる事にも非ず。長らく苦勞心配の種なりし卑しき奴隷はわが艦隊中には今は一人もなく、かく計り僅かに睡り、かく計り多く旋せし次第にて、わが友人等もそを信ぜざらんが、そも心には得掛くまじく候。在天の神おん身惠ませ玉へ、おん身が心に勞ひあらしめ玉へと祈り申候。」

一六一八年六月ロウリは英吉利に歸つてサー・ルウヰズ・スタックレに逮捕せられた。自ら云ふ通り脳を痛めてをり自ら切實に生を冀ふてかの有名な『辯疏文』を書いたが四圍の事情はこれをも見過して十月二十九日あはれにも遂に斷頭臺上の人となつてしまつた。ロウリは足どり嚴かに而も愉快げな樣子で處刑臺に歩み寄つた。期せずして尊仰同情の聲海のやうに四方に沸いた。觀衆は、この偉人の臨終の言葉を聽きもらさじと全身耳立てた。「では、皆さん、私と一緒に祈りをささげて下さりませい。私は、天なる大神の怒りをいたく招いて了ひました、虛榮にみちた人間でムりまするで、罪ふかき出來心で罪ふかき一生をば送りましたる故に、軍人ともなり、艦長ともなり、首領ともなり、宮内官ともなりましたが、それらは悉く罪惡と悖德の府でムります。願はくば、神よ私を赦免なされわが罪をば放たしめ玉へ、永生のおん懷にこの私を擁かしめ玉へ。さればお別れを告げませう、平和は神とともにあれ!」

ロウリの獄囚文學『世界史』は部分的にその十二年間の獄房生活から生れたものだが、原史から紀元前一七〇年マケドニア帝國沒落までの頃をば書き上げたので、一六一四年獄中にある間に最初の一部分を出版させた。これが『世界史』の初版本である。この書の成るに就ては當代史家の援助を受けたが、中でも

ロバート・バーレル博士といふノオッフォークの長官が、然かも年表も不精確馬作家の稿案も、大部分の作者作品にひとりで當つたので、かれはロウリの可愛がつてゐるものの隨一人であつた。只、大體の仕事の意匠と結構がロウリ自らの手によつたもので、文體といひ內容といひ英吉利際史文學の雄であるのみか、獄中文學全般の間にあつての一異彩である。

このロウリの獄裡の史文學を思ふにつけ憶起せらるるは司馬遷の修史である。固より子長の史記は父談の先業を承けたものであり、太史令となつて先人の遺業を繼いでから十三年目に匈奴に降將となりし李陵を救はんとして罪を得、任安への書に詬莫レ大二於宮刑一と自ら云つたその宮辟に處せられてしまつた。宮罪はすなはち男子の恥とする去勢の刑である。事は、漢將李陵が步卒五千を提げて戎馬之地を踐んで單于が億萬の兵と連戰十有餘日、所レ殺過當、氈裘之君長咸震怖すとある。そこで、左右賢王を徵して引弓之人を舉げ、包圍攻擊と出かけたので、轉鬪千里、矢盡道窮るも救援の兵は來ない、士卒の死傷如レ積しである。ところが、陵が一呼軍を勞らふと士起たざるはなしで再び盛り返した處へ來報あつて陵の敗を書聞すると主上は食も甘からず朝を聽いても怡ばずとて大臣憂懼してゐるので司馬遷は李陵のために辯じ明主の慘愴怛悼を見て款々之愚を效さんとしてかへつて思はざる誣罔に觸れたのだ、苟しくし一旦日もなしを游ぶ故はねば殺欲不見て見ぬふりをしてゐるので、遂につひに失降となり遷はつひに宮刑に處せられたのであるが、十數本記十二書八篇世家三十列傳七十凡百三十篇をなし帝例未だ就らず、遷は怨言して下獄して死したりとあるから、ロウリの様に獄房裡紙筆の自由がなかつたため、その楚囚の文學はつひに成らなかつたが、遷は自らその未完成を慨いて名山に藏し知己を後世に得んと云つてゐる通り、自信深き著作であつた。恥刑と修史と相わたつた處、ロウリと遷とに對照の興味なしとせぬ。

却說、ロウリと眞、眞とヴーヂニヤ。ロウリの記憶に今にノオス・カロライナ首府に名を止めてゐる位で、新世界とかれとの交涉のふかさを忍ばしめる。

此等先進辛苦のその甲斐あつて開拓漸く進捗しかのメイフラワ丸の三本檣船が四十有一人の男女を乘せマサッチュセッツ岬嶼の砂濱に着したのも程なき後の事で、一百人、八百人、七百人と淸敎徒の移民は續いて新大陸に上陸した。それらの中に淸敎徒は只殘間しき黃金の爆進に冒險の功心に北國を實行したのでなく、神の愛のために口惜ら戀しき故國から逃避の人々であつた。その數は十年間に二萬人に及んだといふ。

一方、英蘭にあつては、ロオド大僧正あつて峻厳の國教主義

を施行し、清教徒と羅馬教徒との間にあつて、加特力教的背抵とその感情との規準迄わが國教を高めんと志して清教徒を盛んに壓迫したに對し、下院は國教の新教的改新を宣し、第三議會閉會のまゝ議會の開かれぬ事十一年に及び、エリオットは獄死し、バッキンガム公亡んで、ヴェントオースの擡頭となり、ハムプダン公然と公債課税を抗拒するや、王黨、民黨二派の確執愈よ露骨になり、かれを判決した一人、バークリィ判事は曰く、「法（LEX）が王（REX）だとは今の今まで聞きも讀みもせなんだのだが、王（REX）が法（LEX）たる事はあり來りの事で一番眞實なことである。」と。この時の清教徒感情の狀態はミルトンの「リシデース」に覗ふ事が出來る。蘇國エディンバラこれよりして立ち、王は和蘭と戰ふといふ云ひ分で西班牙から金を借らんとして失敗し、フランドルから二千の兵員を得てエディンバラを占領せんとして斷はられ、金力と兵力と兩つ乍ら事缺いて見苦しきその非力をさらけ出し、ヨークに貴族大集會を企て成らず支方なくなくウエストミンスタ新議會を召集した。ウエントオース既に節を屈し、コーク、エリオット既に亡き今日下院を背負つて立つたピムは剛毅と典雅、果斷と快活を兼備した好政治家で、ロオドも入獄しウエントオース斷頭臺に立つに及んで、「圓顱黨」と「王黨」と院內に確執した際巧みに上院より僧侶の群れを斥けたのは外ならぬ彼である。妥協は既に不可能である。協調破れるや戰機正に熟し、王黨はノッティンガムに依り民黨はノオザムプトンに集合し、エッヂヒルの大野に火花を散らしたを初めに、內亂時代現出して、地方禁王軍の援兵を借りルウパート親王兵を率ゐて王黨振ひ、市民は議會に和平を希つたが、クロムウェル東里に呼號し蘇軍北雪を拂つて出るに及で一進一退となり、つひにネイズビーの役で一擊クロムウェルの鐵甲隊は王軍を粉碎し、蘇陣にチャールズ王囚虜となつて又ワイトの島に蒙塵し再び囚はれて暴君と謀反人と殺戮者と國賊との罪名を以て斷頭臺上に露と消えた。一六四九年一月三十日である。

さても、詩人ラヴレスは美少年の學生時代を過ぐると大學より宮廷に移りノリッチ伯に愛せられ蘇國二回の遠征にも從つて一方の將ともなつたが、パーウィック媾和で鄉里に還り、王黨として長期議會へ提出したケント州の請願にたづさはつて王權回復を希つたが因となり、かれがその提出者の故をもて一六四二年下獄し、ウエストミンスタはゲイトハウスの幽囚裡にて佳詩あまたを作つた。『囹圄より阿爾答亞女に』の一卷である。在監三四ケ月（又七週日許りともいふ）で四萬磅の保證を以て出獄した。而も尙王黨の先頭に立ち自費にて禁軍兵士を養つた事もある。彼の弟大佐フランシス、大尉ウヰリアムの兩人は孰カ

ーマァスンで殺されたが、一六四六年牛津屯營引渡し後ラヴレスが侍王御用軍を組織して、大佐に任じ、ダンキルクに傷き、四八年、歸英して今一人の弟ダドレ（當時彼の下に大尉であつた）と共に捕へられて、倫敦ピータハウスに幽囚の身となり、四九年刊行の詩集『リュカスタ』を獄舍中で作つた。中には有名な『戰に赴くの歌』が入つてをる。ラヴレスに戀人あつて絕世の美姬であり且富家の子にして、その名をリューシ・サシェバレルといひ自ら恒にリュクス・カスタと稱へてゐたが、たまたま愛人ラヴレスがダンキルクに戰死した情報あつて、他家に嫁付いてしまつたその古戀人を記念する詩冊子であつた。出獄後、非常に窮乏しかつては金銀の美裝に伊達をこらした旒りもあつた禁衞軍の騎士詩人が、身には襤褸を纏ひいぶせき茅舍を選み住んで、賤人よりも乞丐よりも尚慘めな暮しに落ちてしまひ、あまつさへ、失戀と憂苦の果ては重き肺痨を病んで僅に心ある人人の慈けにすがつて敗殘の羸軀を生き存へてゐたが、五八年にひとりわびしく死んで了つた。

ラヴレスが詩は、その純情へリックに及ばず、その機智はドンに遠くして尚且カリウ、サクリングの下位に立つと稱されるが、織情を抒べた短詩形の間に仄見ゆるかれの詩態には詩人的本質性が正しく裏付けられてゐる。その詩品は到底十七世紀王黨詩派中二流の域を出でないが、英朝の貴人詞客を友として世軍の陣頭に立ち、黑獄恐怖に偶く缺けた作夜の月を眺いて、こたきよつた懷しき匹人の佛を忍ぶかと見れば、卒然として、吉丁志昂かたく政節を持して楚囚に作る。詩中の人である。

今これを、遠祖は拓拔魏、明昌元年太原秀容に生れ、哀宗の元年權國史院編修となり、後、南陽令に官となり、天興元汴城降つて金朝傾くや、忽ち元人に媚辭を呈して恥さりし元好問遺山が人とその詩品とに比ぶればどうか。天興は西曆の一二三二―三四年にして英吉利は『尼僧法規錄』や『梟と夜鳴鳥』の出たヘンリィ三世の御世であり、その間四百餘年の差あつて加ふるに東俗西風趣を異にしてゐるから比較に重點を置くのでないが、ひとしく詩人にしてひとしく地方顯家に人となり、共に社稷の頽るゝに逢ふて、一は詩に描くとも王黨騎士派忠朴の名を恥かしめず、一は絕妙の詞技をいと措みて恬として異朝に額づく。人各信じる所あり史翰の粗莽なるや、到底貧寒の材料をあげて兩者の心事を云々するのでないが、よしんば、英騎士詩人の『蠡蝌行』は亡國遺臣詞人の『甲寅九日同臨漳提領王明之鹿泉令張秦先賈千令春李進之與衛甫遊龍泉寺僧顯求詩二首』の作調に及ばずも、われ等の感傷的なるや常に元理宗寶祐五年長月迄生きのびて六十八歳獲鹿寓舍に于左百餘篇を殘して逝いた事

柔燦發、遠婉高古の老詩客の流儀を故あつての仔細とは思ふが、より多く、かの戀に泣き王者に忠誠を效した衰殘青年詞家の徒をあはれと思ふ。しかも王黨派に柔媚の艷態あつて、かの變節派に悲憤跌宕の慨あるは如何。この傷心詩人がエリザ女王朝華奢風流の遺香を承けて、若し所謂カロライン・ポエッツ等王朝の榮華に醉ひつゞけたらば、ラヴレス如き正に最もその流風の粹を極むべきかのオンブルを玩び假髮の長きを誇るポオの隨一人にして「自然の感情に忠なるの時んば、happy moods に於ける gallant Cavalier たらん也。」といふ先人の所見は正しと見るべく、その人口に膾炙せる『戰ひに赴くのうた』たる

To Lucasta

Tell me not sweet I am unkind,
That from the nunnery
Of thy chaste breast and quiet mind
To war arms I fly.

True: a new mistress now I chase,
The first foe in the field;
And with a stronger faith embrace
A sword, a horse, a shield.

Yet this inconstancy is such,
As you too shall adore;
I could not love thee, dear, so much
Lov'd I not Honour more.

の如き簡明の野調に仄見ゆる詩情の切なるは此人の獨壇場にして、やがて夫の腐敗墮落の王朝に眷戀を示せし心緒の特性を談るものであり、これ必ずしも東洋流の悲憤慷慨の勤王詩客と同一視すべからざる要點である。

好問遂囚となつて聊城に在つた日、元太宗六年一月哀宗自ら縊れ死んで金朝亡び、詩人ひとり悄然と

聊城寒食

輕陰何負探花期。白髮於レ春自不レ宜。
城外杏園人去盡。煮茶聲裏獨支レ頤。

と歌ふは何の意ぞ。あるひは『南冠行』となり、あるひは

夢歸

顦顇南冠一楚囚。歸心江漢日東流。
青山歷々鄕國夢。黃葉蕭々風雨秋。
貧裏有詩工作レ祟。亂來無淚可レ供レ愁。

遺年兄弟相逢たる　曹方盛　劉喜事体。

となる。北渡後のこの詩は漸く沈鬱高古の文致を加へ遺言後進を導き聲名當代に傑然として巨匠の域に入つた。七言詩をよくし神道の稱あつたが、もと老來次第に大成するの詩的資性にあつたので、醜怪にも臣節を變じたその急所に如何の身邊の事情が伏在したか、これをこゝに索訊する暇はないが、吾等邦人の節義觀を以て直ちに徹頭徹尾束縛し去るの非はいふ迄もない。ヲヴレスの快暢が快悒に終り、好問の患悔が恬安に畢つた處好個對照の妙味にして人と才と時代と環境との微妙な影響を窺ふべきである。

二　幽囚歷程

附　西遊傳奇の事。

十七世紀清教徒文學の二大産物として、詩歌に於けるミルトンの『失樂園』と對立するジョン・バンヤンの『天路歷程』は、獄中文學としても、散文作品中の太白として普ねく世俗に知られてゐるものであるがゆゑに、爰には今更詳かに說くをもちひないが、作者の投獄せらるゝに至つた理由とこれに照應する東方文學の佳篇とに就ては一通り說明する要がある。

『失樂園』の詩人が碩學大知の政治家であつたに反し、天路歷程の[illegible]に近い鋳掛のせがれにすぎなかつた。[illegible]は一六二八年、父親は見すぼらしい鋳掛師にして、その子も鋳掛の商賣を見習はさせられた事實よりであるが、默阿彌の鋳掛松が兩國橋の上で惡く悟つて道具一切大河にドブンと抛り込んで忽ち大惡になりすましたに反し、この鋳掛ジョンは無類の善玉であつたばかりか、シングの『鋳掛屋の嫁とり』に出てくる神父さまのやうに、愛蘭土無宿のマイケルやメアリやセーラのやうな鋳掛族どもの手で袋の中へ詰め込まれて

神父（片手を擧げて『わしは今日、お前たちの罪を言ひ立てて人間の罰をば受けさせぬと誓言はしたが、全能の神の御手から天の火を呼びおろさぬとは誓言しなかつた。』

——松村みね子譯

と宗教家くさい大聲で拉甸語の呪咀を吐いて無知なヂプシーどもを追拂つて意氣軒昂たる神父型以上に素晴らしい天成の說教家であつたが、若い頃方外に自墮落で仲々の惡るであつた樣にいふものがあるのは、バプテ　ストに改宗しなかつた前だからとて宗派根性からさういふのだが、日曜の午前にはちやんと教會にも出かけて、午後からはホッケー遊びやティップ・カット遊びをやつた位が關の山、大酒も呑まねばさしたる色出入もなかつた世間並の欲望だけは備へてゐた先は堅氣な一人前の鋳掛屋であつたのだ。が、その自傳的作品によると、隨分[illegible]した

たか者で、非道い肉欲的なその上目の悪い大酒呑みで、最初嫁をとつたのが十九歳前の事で二度目の妻も娶つたが十五年以上も悲しい目に合したとある。一體どちらが本當なのか。幾度も自殺しかゝつて、家人は剃刀や小刀を匿しどうしであつた事もあり、燈火のない部屋が大嫌ひだつたのは、火がないと惡魔がやつてくるからだと考へてゐたからだと自ら言ひ、朋輩や同職には敬はれて同じ親方に二十年も奉公したといふ幼時同職の一人物を傳してゐるのは興味がある。世に數少からぬ狂信家の宗教的情熱と罪惡感と反省力と自毀的發作とをハンヤンも持つてゐたに外ならぬ。小兒の様な怡悅と詩人の様な感激と狂人の様な恍惚と名僧の様な信念とに燃え燃えてゐたのである。かゝる性格と無學とは宛然東洋風の神秘道人の類似型であり、一般神秘家——波斯白羊毛派詩人や新プラトーン學派やブレーク派やヤーコブ・ベーメ型やに通じる特性でもある。かれは、自ら「選民」を以て任じてゐた。その選民の集りがあつて出かけて行つた事があつたが、夜も更けてから歸つて來た處を主人が見ると、凄まじき恐怖に顏色はいとど靑ざめ、如何にも苦しみにたえぬらしく、泣き且唸つて主人の足下に身を投げかけて、「惡魔に誘惑せられました。實は自分の家の祈禱會用にとつひ木材を盜んで了ひましたのです。」と白狀に及んだが、固より主人は刑罰に處するよりも憐憫をかけるべき筋合の事件だなどゝいふ事を悟らう筈もない平俗人であるから、その儘その木材を元の場所に還させて鳬がついたが、その記憶は長く一生かれを苦しめる種となつた。

かういふ人物のバンヤンである。深刻な絕望畏怖にも襲はれ、最高の信樂や法悅にも參してゐたので、天の聲を聽けば惡魔の姿も見た彼である。特に惡魔は實際に出ると信じてゐた。マルチン・ルータと同様に目に見える。實際にいつも出現する强敵だと考へてゐたので、ルータの惡魔はミルトンのセイタンやゲーテのメフィストフェレスよりも聖教の本文通りで、『三種の惡魔』といふ本の著者の言を引くと、劇中人物である所のメフィストフェレスは諸惡を一身に備へた實際に全能の惡魔ではないので、地球を廻る大氣が彼の魂の毒液を飽和してゐるが如くに到るところの人間の心に遺つてゐるものである。ミルトンのロイタンになると、そんな難事はない、かうなると悉皆ゆる惑星が危うくなるので、たつた二個の人間が存する計である。が、ルータの惡魔にかゝると聖經全體の危急となるので、………彼に於ける惡魔は氣象學的動因とさへなつた。バンヤンのそれもこの類に外ならなかつた。聲を聽いたり言葉を聞き分けた計りではない實際に視たのである。教會にゆく事は大した問題ではない、ベドフォードでは三人の家刀自とよく敬虔な話を交した、

ジョン・ジャフォード師といふ牧師に導かれて、王政復古の後数ヶ月即ち一六六〇年十一月十二日から自分もサムゼルに出かけて說教したのが、さきに出た一六〇七年の「教式統一令」や一六七〇年の「私會令」に前後して出た宗教政策の網に引かゝり、ベドフォード監獄に投ぜられるに至つたのが、五人以上の說教會を禁ずとか、都會を離るゝ五哩内の說教は處罰すといつた類のチャールズ二世治下の國教主義の眼目に逆らつたがためで、キーリング判事といふに調べるといふ調もせられず三ヶ月の禁錮となり、說教をやめれば放免ぢやとそそのかされたを斷然はねつけて更に十二年の入獄となり、その間四人の幼兒（一人は盲目であつた）を抱へて人の慈けにすがつて辛くも生きて行つた二度目のかれの妻の行ひは當時に珍らしい貞女の鑑とも評判せられたが、その監獄の役人には友人も居つてその仁けの目こぼしで私かに誓言をした上監獄を出て我家を見舞ふ事も出來た（こんな事は此時代の英吉利では自由が利いたものである。）その上に、友人にも逢つたり、說教もしたり、倫敦の宗徒に出逢ふ折さへあつた。が、多くは暗澹の監房から窓外の春を空しく眺めたり、町をへりとつて流れる川の秋の水を徒らに見送つて、その間にも大作『天路歴程』の一町を創作したのであるが、かの光明的天路の紀行を綴つたこの恵まれたる精神的冒險家の心中には、實に當時の[illegible]としかつたのである。

處が、一六七一年のベドフォード信徒會は、獄中なるかれを牧師に選擧し、之に感激して翌年出獄後正規の牧師となつた。チャールズ二世王が、ある時、當代の碩學オーウェン博士に「その方の様な博學が何故あの無學文盲の鑄掛師などの說教を聴聞に出かけるのぢや？」と訊ねると、博士は答へて、「あの鑄掛師ほどの說教の才がさづかりましたらば、今にも臣の學問などは悉く擲つてしまひたう存じまする。」と答へたといふ話がある。その後は、毎年倫敦に出かけて、たつた一日いつもサウスワークの集會場で說教をしたが、三千の聴衆を集め、尙過半は入場を拒絶せられる程の盛況であつた、それも英京の冬の朝の七時頃といふ時である。バンヤンは、然し、そんな人氣など頓着する男ではなかつた。

レディング市に住んでゐる一友があつて、その町へはバンヤンよく說教に出かけたのであるが、その友人が自分の伜を、仔細あつて廢嫡に決めた事があり、息子から助まれてバンヤンが調停をしてやりに出かけた事があつた。首尾よく家庭もめも落着したので、安堵して折からの大雨を凌いで馬上で倫敦への歸りの途で風邪を引いたがもとで十日ほど病んでこの清教文學の

散文的代表作者は永久に仆れて再び起たなかつた。死んだのは友人の雜貨商ストラドウヰックといふ者の家で、友人の家の墓地に葬られた。碑銘は、「天路歷程著者ジョン・バンヤン一六八八年八月十二日沒、享年六十歳」

天路の歷程今や畢り
大地の床に死して横はる

とはサウジーの「傳記」にある二行詩である。

バンヤンの人柄は、赤ら顏の厳畳な髮の赤つぽい大男で額は秀で口髭を蓄へて鼻や口は尋常だつたが、一見粗野の感じのする男で、話して見ると實は、話しぶりが中々溫和なしく愛相がよかつたと古い傳記にある。

牢屋の中での創作には、初めの入獄中に『聖市』と『罪人の長にも溢るゝ恩寵』が出來、次に『天路歷程』の第一部が出來て、一六七八年に上梓された。『惡玉一代記』や『聖戰』や『歷程』第二部はその後の作に屬する。

マコウリは、英吉利十七世紀後半には只二種の心があつて最高の想像的才能を發揮した、一は『失樂園』であり、一は『天路歷程』であると云つたが、ともにこれらが淸敎文學に屬し、英吉利文學全野を通じて最高位にある若干篇中に收めらるべき傑作であることは、かのともすれば偏狹な頑固な欠點の初めからつきまとひ、そのために仆れて了つた嚴さへある淸教主義が、プレスビテリアンに屬するものでも、君主を奉戴するの念を去らざる一派でも、また自由信仰の徒でも、皆一樣に當代思潮の大勢を決する國民精神を代表してゐた事實を裏書し、同時に、淸敎的文學以外の種類に屬する空世の大文學が出でがたき時勢の急潮にあつた事を示してゐる。すなはち、同時代のトマス・ブラウンの『醫人敎』にしても『俗說辯妄』にしても、ジョン・セルダンの『卓上語』にしても、アイザック・ウォルトンの『釣魚大全』にしても、ロバート・バートンの『憂悒解剖篇』にしても、王政復古後四十年前後の反動時代に於ける英國が、ルイ十四世治下リシュリウ、パスカル、コルネイユ、ラシーヌ、モリエル、ボワロオ、フエヌロンの佛蘭西文化の影響をうけてドライデン擬古時代を現出して生み出した諸文學、オトウエイの脚本でもアフラ・ベーンの女の小說でも、サミュエル・バトラーの『ヒューディブラス』にしても、ドライデンの諷諧にしても、イヴリンやピープズの日誌にしても、特殊興味の卓れた文學ではあるが綜合統一的に人心の同時代的展開を示した「古典的」作品ではない。ただ、ブラウン、ウォルトン、バートンの三家の文品は、十七世紀前半獨得の好學と淸隱の風潮が看取せられ、いらひどいミルトンやバンヤン以外、この頃のこ

の眞この國にこの宗教世界ありしを誇つて全人に示すべき讀代にはない絶好の美文字であり、ミルトンはこれを抜き、バンヤンと比べては、これらは階梯口である故に小説的『歴程』と對比する事は不能であるが、一個の著作としては、これを英吉利文學全史を通じて見るときは、『歴程』と全く同等の興味と價値とを持つてゐるもので、世上往々小説である故に『歴程』を周知するところから、これをあげて、後者三家の好學高雅の文字あるを知らぬは遺憾である。

『天路歴程』を下手な飜譯で見たり　梗概計りで讀んだりすると、敬虔姫や形式道人や虚榮の市や疑惑城や絶望大王などいふ譬へ話獨得の名詮自稱の人間名が出て來て、自然主義的なる事甚しきにすぎる現代人の反感と滑稽感と嘲笑とを買ふ恐れがあるが、馬琴の八犬傳の犬塚信乃戌孝や犬山道節忠與のやうな仁義八行の怪け物染みた名前に嘲笑を放ち乍ら讀み初めても、いつしか南總傳奇榮鐵小説の世界に引き入れられて了ふごとくに、聖書の書きかへであつてもなくても、作中人物の活寫に俘となつて、そんな狹小な反感はいつの間にか吹きとばして讀み込んで了ふので、アレゴリカルなる文學は凡てこの魅力を持ち得て初めて永久に存在しうるのだ、序でに誌すが、明治十年版ホワイト師譯、倫敦聖教書類會社發兌、横濱製紙分社印刷の『天讀[illegible]よりの[illegible]として出たものであることから野暮文學の教訓書によるものとは[illegible]ないが、下獄の作家の採納が深山入つて

第九章

[illegible]ヶ谷に從道[illegible]と闘ふ

偖ても、從道は、讒謗ヶ谷を只獨り、行く程に、又もや難る厄難の、從道が身に迫りしぞ哀れなる、未だ旅路を遠くも去らぬに、野邊の彼方より、アポリオンといへる悪魔の顯れ出で……云々

の調子の馬琴くづしで鳥波士俗的興味がある。

支那の西遊記は長春眞人でなくて吳承恩であつても、獄中文學とは關係はない。玄奘求經に事よせて東勝神州傲來國華果山怪石から生れて南無闘戰勝佛に解脱する心猿一代記に觔斗雲や緊箍兒や芭蕉扇や飛龍杖を種に羅刹女や牛魔王や伶俐蟲や精細鬼まで持ち出して唐太宗皇帝貞觀十三年九月望前三日に發して十四年目の貞觀二十七年に十萬八千里を旅して五千餘卷經文を將來したとある俗本興味は、楊志和の『西遊記傳』が源泉となつたが、むかし學海居士の憶測したやうに西洋千一夜譚がいつの間にかまぎれ込んだものか、宋の取經詩話や元雜劇の感化を得た記傳と他の怪異小説とをあんばいして出來上つたものかどうかは知らないが、何れにしても宗教教訓紀行型の譬喩文學で今人の興趣をなほつかんで放さぬところ、東西軌を一にするもの

であり、篤信敬虔の一念は『歷程』にあつて、『西遊』著しく劣り、『後西遊記』に至つては流布の原本の袖にかくれて誨婬の說をなす外道本だが、小大と天地と春秋と寒暑と悉皆ゆる境致に意匠の斬新と結構の奇拔とを兌めて之れを得た豐富の想像に至つては西遊は歷程の上に出でたものと稱してよい。すなはち、西遊は、歷程のごとく、信仰文學の形式を備へてはゐるが、作の中心興味はロマンティックな荒唐無稽の間に畸異と、架空と、非現實と、擬理想とを描破し、歷程は、西遊のごとく、譬喩文學の形式に即してはゐるが、一篇のライト・モティーフはミスティックな篤信性の基礎の上に善惡、曲邪、超道德性、宗教信仰を强調してゐる。

三　君牧師のデカダン詩

附。都の錦の訴狀文字。

通俗と名づけるものに一つとして昔から碌なものはない、通俗小說、通俗詩人、通俗大學、通俗教授。それが今では通俗が眞理で新しくて當世であると考へて一等室を三等室に統一するがデモクラシーと早呑込みする大衆氏が多いのは世に立派な文化である。さてもこゝに、十八世紀初め英京倫敦にキリアム・ドッドといふ博士住ひしてこれは又通俗教授を業としてをつた。生れはリンカン州のバーン。一七二九年五月二十九日出生と明記してあるから、日本では將軍吉宗の享保十四年正に人を喰つた天一坊がとう〳〵誅戮に伏した年で、而も四月の何日かに死刑となつたから、邪魂千里を渡海して英吉利に出生したわけでもあるまい。いや、ドッドに就てはかの惡黨坊主以上譯るべき多くの善人性がある。

父親も牧師で、これは模範的な敬虔篤信の坊さんだつたといふ。ドッドは其處の私塾を出て劍橋に入りバチェラー・オブ・アーツの學位をとつたのが二十歲の時、仲々學は卓れてゐたが野心大望のありすぎる男で、あはよくば名聲天下に籍甚をと私かに虎視耽々の樣子は朋輩にもそれと判つた程であつた。早くも大家の著述の簡略本類を澤山著はしたが、自分で書いたものは一つもなくして、たとへば法曹にして神學者なる阿蘭陀のグロオテイウス鈔本などがそれである。大學を出た翌々年に結婚してメアリ・パーキンズといふ女と一緒になつたがその結婚にも變ないきさつがあつたらしく勿論幸福な家庭ではなかつた。妻を娶つて又翌々年には僧職に任ぜられて倫敦に駐まる事となり、大分濫費の生活を初めたが、ハート街の聖オレヴ教會の說教僧となつた、こゝが彼活躍の本舞臺である。

爰に通俗說教家となつたかれは善男善女、特にも上流中流さ

さまざまの女性にとり巻かれて十八世紀ぶりの紛々、酒色の間に若くして早く神を說く幸ひ?の身となつたところが、固より弱氣な不眞面目なかれの事であるから、流行を追ふ陽氣とかつらと顔パッチの伊達な女の姿計りが目について敬虔神に身を獻ぐる處の騒ぎではない、浪費と放蕩と快樂と、紋切型の怪しい行者やにせ坊主の所行を眞似る運命に陷り、教會初め所々の說教場に雨と降る明眸數々の視線の喜ばしさ嬉しさが忘られず、その明眸の中に呼吸し、それによつて生きてゐた。三十歲の年にはホール僧正の『瞑想錄』のある版本を本屋から上梓させ、それをセツカー大僧正の一族と同居してゐたタルボツト孃といふ女に獻本なぞしたが、その獻本辭たるや、見られないお世辭たらく〳〵で而も下司な文句であつたので、これを見た大僧正はカッと憤怒して非道い手紙を突きつけたので、とうとう折角の好意文句も抹消させられるといふ始末。

が、そんな事に勇氣を挫くドッド先生ではない。通俗的名聲は愈よ擧る一方で、文筆の收入も益す多くなり、教會の評判もだん〳〵よいといふわけで、事實八方に大車輪の活動を續けたので、教會に群る婦女子のみに止まらず方々のアマゾン軍の救援を辱うし、自分も益す精一杯にハタライタが、濫費がかさんで、それ計りでは追つつかず、稼げば稼ぐ程ふへるものは借金の山で、仕舞に溜つた負債は踏倒さうと賭や酒との噂さへパッとたたくなる、それだけそんな際には印象的で魅力的な人間であつたので、いつそ坊主は廢業して然るべき十八世紀に數多い標本的の酒場人種であつたのだ。同じ年にマスタ・オブ・アーツを取り、一七六三年、三十四歲の齡には遂に宮廷附の所謂君牧師に出世して聖デヴイツドのスクワイヤ僧正の推挽でチエスタフイールド伯に近づき、嗣子フイリツプ・スタノツプ公子の家庭教師となり、まだ〳〵三十七には劍橋大學法學博士の學位をさへ貰つてベドフオード州はホクリフの教區會堂に出る事となつた。而も借金は愈々かさむ一方である。

爰に、ハノーヴア・スクエヤの聖約翰の會堂は富裕な收入ありと知られて、それとなくその職よりもその金に目をつけてゐたのが一七七四年に大法官裁判所が賣却する事となつた。で、乃公はその教會内の一個所を貰ふに足る莫大の金子を出す事が出來る、即ち一書を裁して賄賂を提供するとする、そこでと、とつをいつ細心に考へて、大法官にはわざとやらずに、その夫人に手紙を書いて思ふ寺縣が夫人の盡力で獲られたなら、三千磅さし上げますと云つた。處が、この鼻藥にも目のくらまなかつた夫人は直ぐさまその手紙を大法官に見せたから耐らない、僧官の手を經て國王の御目に觸れ、結果はハノーヴア・スクエヤ

の聖約翰の寺祿がころげ込むどころではない、逃座に若牧師の籍を削られてしまひ、當時の新聞の珍種にはなる、世間からは揶揄はれる、嘲られるいふ散々の爲體。

これを機會に、運命の掌がぐらりと飜へり、倫敦を都落ちしてジエネヴアにゐた貴族出の弟子のもとに落ちつき、その者の手より前からのホクリフの寺祿にバツキンガムはウヰングの寺祿を合せ獲る事となつた。僧祿を併取するのはこの時分少くとも法律上の違法行爲ではなかつたのである。それから又、倫敦に還つてある破産事件にのさばり込み、まんまと自分の借錢を棒引して了はうと計つて失敗した。が、それでも勿論說教も虛榮心も贅澤も痴行をもやめる段ではない。

一七七六年には愈よ借金取りには追ひまくられ、商人にはおどかされ、極端に非道い墮落生活のドン底に陷つて了つた。かれが、生來弱氣であり、意地悪きまで弱い人間であることは落目に際して愈々明白になつた。

今や、最後の運命がこの通俗說教家が上に加へられるに至る計りとなつた。博士ドッドは、ある時、ロバートスンと呼ぶブローカーを呼んで、ある貴族の丁年に達した若様が四千磅ばかり秘密に金を借りたいについては、家庭教師である自分がその全權を帶びて相談するのぢやといふて、サインのしてない證書を出して見せ言葉巧みに說きかゝり、職業柄にも似合はぬ人の好いロバートスンの信用を得て、方々へあたつた末にフレッチャ・ピーチ商會といふが引受けることとなり、ロバートスンは一旦ドッドにその證書を返却し、ドッドは訓成して改めてその翌日かへしてよこした。その際、ロバートスンは愚かにも不注意にも證人のやうにドッドの名の次ぎに自分の名を書き加へてしまつた。後、裁判の折、ロバートスンの陳述に「フレッチヤさんが喧しい人で證人が一人では故障を持ち出す手合だと思ひまして、博士の名の下に手前の名も書き加へましたので、出掛けて行つて受取つて來て、ドッド博士さんの手にお渡し申した金は、サア・チャールズ・レイモンド商會の手形で三千磅、殘る千二百磅は銀行の手形でムりました。」といふてゐるが、そのロバートスンは百磅の駄賃を貰つてゐる。

まさかに事の破れる氣づかひはないと自分も考へたが、ドッドは苦面が出來たらとにかく一刻も早く尻拭ひをしてをからと思つてはゐたが、端なくも、その證書が違約金八千四百磅の代ものであることが、フレッチヤ・ピーチ商會の訟師マンリなる者の手にわたつた際、その證書の額面文字の內で七(seven)といふ言葉のeが余り汚れてゐるので不審を抱き、發行したチエスタフイールド卿に送附した事から判明に及んで、忽ちドッ

ドの足がつき、あはてたドッドは何同ちに贋物返して四千一百磅を弁濟に及び、ロバートスンも百磅をはき出したが、明るみに出た罪の裁決は免れず、市長に呼び出されてその面前で口を緘くして辯明を試みたがその甲斐なく、一七七七年二月二十二日オールド・ベイレ裁判所で問罪せられて宣告せられてしまつたのがこれは又余りに酷すぎる絞罪の刑で、その頃の現行法ではこの種の罪はどうしても絞罪であつたのだから當時としては止むをえぬ。

必死となつたドッド博士は辯明書を提出して

「判官並ニ陪審諸公ヨ。本日拙者ニ提示セラレシ證據ニツキ拙者ニ下サレシ告發ニ對スル返答トシテ些カ斷フルトコロアラントス。諸公ヨ、拙者ガ告發セラレシ惡ハシキ罪ノ深刻ナル意義ヲ解スルモノハ世ニ無カラン。公等ヨ、拙者ハ夫ノ惡ハシキ罪ノ全範圍ノ中ニソヲ見ルモノナリ、サレド、公等ヨ、拙者ハ恒ニ罪ノ惡意ハ、法律眼、理智眼、及ビ宗教眼ニ於テ意向ノ裡ニ存ストイフコトヲ了解セリ。拙者ハ知ル、議會ノ條令ハ拙者ガコノ頭上ヲカノ詐欺ノ意向アルモノトイフ形式ニ於テ恒ニ走リユクナルヲ。而モ斯ル意向ハ、判官並ニ陪審諸公ヨ、拙者ガ身ノ上ニ立證セラルルヨウ試ミラレザリシナリ。拙者ノ目前ニ現レタル證據狀態ニヨリ、完全豐富ナル金額返附ノ濟ミタルコトハ十分ニ立證セラレタリ。判官並ニ陪審諸公ヨ、爰ニ若シ何時ニテモ一介ノ不幸ノ人物アリテ公正ノ法律ニ外レシナラバ、又、若シ回憶ノ最初ノ刹那ニ於テ完全十分ナル改善ヲ決行シウルナラバ、判官並ニ陪審諸公ヨ、斯クテモ尚神又人ハコノ者ノ上ニ何ヲカ求ムヤトイフコトヲ乞フ一考セラレタシ。諸公ヨ、拙者自身ニ關シテ今ヤ論弁ナツズトヘモニハ證明ニ居キヨレ其々ノ事業アリ。感情ヲ放任スルアラバ、陳述ノ事務シタレドモ、當ニハ諸ニ同情セラル、ナラン。然レドモ、諸公ヨ、諸方面ニ見ユルガ如ク、マヨ見ユルガ如ク、判官諸公ヨ、種々ノ意味ニ於テ、拙者ハ地上ノ如何ナル人間ニ對シテモ些カモ不正行為ヲセント欲セシ意向ナカリシナリ。眞正ノ事情ニ於テ切ニ此レニツキテ斟酌セラレンコトヲ希望ニタヘズ」。

云々と以下娓々數千言慣用の婉曲文字で或ひは妻を引きて同情に訴へ、或ひは懺悔を說きて公正を裝つてゐるが、その本心はその文章の裏にも歴然と現れてゐる。しかし、この一文の最終の項に近づくと流石に冗漫な格式文の果てに虛飾を棄ててむき出しの感情を露出したと覺しく、「强烈ナル死ノ自然ノ提携ヲ感ズ、」と告白し、「僧職ト俗世ト敎ヘトニナシタル我ガ不正ヲ償ヒ、ワガ悔恨ノ例證トシテワガ罪ノ醜聞ヲ拭ヒ消サナン。」とさんげして、「シカレドモ、分ケテモ自分ハ、更ニ思考ヲ整頓シ、更ニ靜ケキ準備ヲナシテ死ニタケレ。」と希ひ、更に今一度悲願を訴へて「コレラの理由ノタメニ、諸公ヨ、恥辱ト困苦ノ裡ニモ尚モ生キ存ラヘタシ。」といひ「公等ノ御職掌柄ニヨリ、陛下ノ御仁慈ニ訴ヘラレンコトヲ偏ヘニ懇願存ル。」とあるは小人物の臨終の哀訴乍ら、罪が罪で而も刑が刑であるだけにもの哀れにもおぼへ、人間の生の執着、特に身に法衣をまとふ享樂人物の最後の訴として特殊の人生證券的價値をさへ感じる。

これよりさき、一七七二年、ホクリフの寺領地より倫敦への歸るさ、パンカルス附近で一人の山賊に襲はれ、忽然一發馬車を目掛けて撃ち込んだピストルの彈丸は硝子窓を碎いただけで負傷はなかつたが、間もなくその山賊がつかまつて自白の際に證人としてドッドも法廷に呼ばれ、審理の末に證言明白にして動かず、ついに絞罪に處せられて了つた事がある。身桑門に在つてかの酷らしい野蠻な法律の犠牲となつた一介の草賊の心まどひのために半言隻句の哀訴さへしなかつた牧師ドッドが、ついには同じ運命の下にこの世を去らねばならなかつたのも因緣である。「パンクラス路傍の剪徑と聖オレヴの通俗說教家との間に基督の御慈悲はけじめをつけなかつたのだ、自業自得だ。」と毒づいた史論家もあるが、さうまで攻めるにはあたるまい。とにかく萬事は爰に休して一七七七年六月二十七日タイバーンの絞刑台上で脆くも最後の呼吸を終へたのである。

この僧官賣買の詐欺罪の法學博士ドッド君牧師が、最初の糺問から斷罪に及ぶ間獄中に在つて書いたものが『獄舍のおもひ』といふブランク・ヴァースで當時の標準を以ては純詩といはんは如何かとも評判せられ思惟せられた自由詩だが、ブランク・ヴァース乃至は自由詩として見ても決して上乘の文學的作品ではなく、かれの殘した文學は創作としてはこの一篇で、他に『沙翁麗句集』一卷の撰著がある丈けであるが、固より學家としては抄出、編纂の雜著が多く、重んずべき作篇がない。し、基督教思想の立場から見れば、その恭敬心もその悲哀も悔恨もドン底からの眞摯切實の叫びを發してゐないのであるから、これ亦墮落教師の撚喘文字の類にしか諭ひせられてはならぬ。苦艱に直面した弱い人間の發した、痙攣的な、ヒステリックな、不眞面目な嘆聲だともけなされ、かれの傳記や記錄や外の著書を讀まないで卒然とこの作だけに接すると如何にもそれ程惡い不良ではないがとにかく罪を犯したには相違ない人間で、一方にはしかし善良な敬虔な神聖な刑事被告人だと思ふかも知れないがなどと突つ込まれ、更に又、かれが世間とその惡德に怨言を絕叫し、かゝる惡德にもはや與かる事が出來ない、かの惡德を享樂するなど思ひもよらぬと云つて極力非難攻擊してゐるが、こんな亂暴な勝手氣隨の叫びを聽かされると、これこそエソップ物語にある狐と葡萄との「酸つぱい葡萄」の寓話で、欲しくても得られないから之れを貶すといふ筆法で、一方ドッドに就いて吾等の持つてゐる同情も、このために輕蔑じみたものに變つてしまふのは止むを得ぬなどと究明せられてもゐるが、成程牧師の聖職にあつて獵艷漁色に耽り、パンの神の神殿に日參して酒神頌歌を歌つた末に、僧職賣買をやつたり、詐

聖耳をたしかに犯したりしたのだから排閉の安罪は一口も無かるべく、古人の作を集めて安本にして神學者や文士系流の仲間入りをしたりしたのだから遺憾のない此頃の日本のモダーンボーイ文士見たやうな猪尾助の一人でもあるし、さうかと見れば僧官としては人も羨む君牧師になつたり時めく貴族、それも名にし負ふチエスタフイールド伯などに取入つてうまい汁をすつたり、お門違ひの法學博士など貰つて見たりしたのだから世才、俗才、小才に富んだ、これも日本にはさらにある賣俗上りの怪しい博士の類であらうが、かれの獄中文學だけは別の見地から見て大いに面白い讀物であり、あまつさへ相當に立派な文學で特に近代調を著しく帶びた詩でさへありうる。批評家が、怕ろしい。單調な、不快な古い格言がガン〳〵ひびくと云つた──

惡魔が病むと惡魔が坊主になる
惡魔が快いと惡魔は坊主だつた

など、その評家が基督者であつても一寸信仰を離れて考へて見ると味のある言葉でない事はない。ヒステリーで瘋癲だと評家が云つた條、──

俺れの魂よ、泣きだしやがれ！
俺れの氣狂い染みた御璣珠の盃よ、噴出せい。
血の滴りとなつて噴出せい！
天使の盃をくれ！──あれが欲しいな、
死人を蘇らせる程に吹きからかすのだ、
空想を跳らかすまぼろしを見るとて
（ああ、あれが欲しいな、）睡つてる奴を起してやるのだ。
手剛な呪文を拂り拂ふのだ、
彼奴らの魂の上で破裂して了ふ前に
俺れの魂の上で破裂した時に。
あの時、何ぜあんな酷らしい熱情で
不思議な神意が追つ駈けたのだ！　何ぜ俺れを
知らん人間が、怕ろしい死の境目迄追つかけたのだ！
何ぜ、──しつこい質問はもう止めにせい、魂が潰れてしま
ふわ、
目がくらむ、ひよろひよろする！　地球がまわる！──

の頭腦が
うろたへてくら〳〵する！　慄悍な心臓が
とめ度もなく動悸を打つ！
何ぜだ？――何處だ？――ああ、チエスタフイールドだ！
若さまだ！
いゝや、落付いてなどと抜かしをるな、
嚴肅な大理石の眼が
俺れの官能の手綱を擁つてをる纖弱な神經を擊ち砕いて
俺れを氣狂ひにしてしまふのだ。

當時の英國教界に於てはた詩壇にかてこの様な詩が全く詩でないと云はれたのも尤もである。いや、その思想感情表現の歇私的里亞性や痙攣性をののしられたのも無理はない。詩に緣なき教界の人達が、莫然たる一般概念の霧の中に突き入れてをいて、その人間性の薄弱を哀れむ態度は肯けるが、それ丈けでは問題にはならぬ。この詩を誦んで直接にあの男を（日本にも牧師にして同様な犯罪を行ふた者は居る。それを手近に引寄せて考へて見るとい丶。）何んと見るか、何と感じる乎。當代牧師の善詈惡罵は畢竟右の頰が左の頰を嗤笑するの類であつたのだ。デカダン博士ドッドについて赦免の運動を熱心に試みた一人がある。外ならぬかの『英辭書』の編者であり『詩人傳』の作者であるジョンスン博士である。かれは、色々の手段で獄中のドッドを助けてやつたが、面會にはゆかなかつた。死を宣告せられんとする際は、オールド・ベイレの裁判所に向けて一書を裁して熱心に輕減を希望した。かれは又、『懲役人がその不幸なる仲間に與へし書』にといふ説教文を書いて、それを博士が敎言をつけ加へて一七七七年六月六日ニュゲイトの敎會で演說した。後に、自分のものとして出版させてゐる。

ジョンスンはドッドの説教に少からず滿足し、ボォティアス嬢といふ人はジョンスンとドッドとの關係を少しも知らなかつたのであるが、その婦人が『ドッド博士が囚人にした説教を讀んで、ジョンスン博士でもこれ以上にはいかないと思ひましたわ。』と云つたといふ言葉をスレール夫人に書いた手紙の中に挿んである。詳しくは例のボズウエルのジョンスン傳にある。

ジョンスンの活動はこれに止まらず、更に國王に一書を奉り、陸軍大臣チャルズ・ジエンキンスンにも手柬を送つて陛下御前の取りなしを懇々と依賴した。ある傳記家にいはせると、ジョンスンは斯くドッドのために盡力したけれど個人的意見としては穴勝ち赦免説に同情してゐたわけでなく寧ろその價値なしとさへ考へてゐたのであるが、かれが若し國王の顧問官の役

月にあつたなら、ドツド牧師となると、ペロオ兄弟當害に對する王の判斷が問題となつて非難せられようといふ事たばかりに上申したらうとも噂させられたとの事だが、事實はどうか知らない。ペロオ兄弟といふのは、一七七六年一月十七日に書類僞造の件で死刑に處せられた當時噂に上つた犯人である。

當時の世評はどうか、英吉利書翰文學一方の雄として知られる『ホレス・ウオルポオル尺牘集』(ウオルポオルは十八世紀後半怪談作家の太白で、名高い怪異小說『オトラント城』の作者である)中に、一七七四年一月二十九日附、オソリー夫人といふに贈つた手紙の中で、

「ジョージ王が今度あの英邁に悶苦しい(反語である。日夏註)ドッド博士を宮廷牧師の籍から削られるよう御命令なされたといふ事ですが、と申しても貴女がお待ち受けの、マグダレン妖女の類に騎士的慇懃をつくしたからと申すのでけさらさらない、ハノーヴア・スクエヤの聖約翰のあの身入りの多い寺祿のために大法官に素晴らしい鼻薬を突きつけたので。あの若い道化た牧師先生が、悔罪のマリヤのでも、又その主、法利衆のシモンのでもなく、まことはかのシモン・マグスの罪に陥ちたのは面白い事ではありませぬか。」

とある。シモン・マグスは即ち魔法使のシモンで、使徒の行ふ奇蹟を見て、同じ魔力を授けて下されとペテロに頼んだ時にペテロが與へた返答は名高い。即ち、使徒行傳第八章第十八節以下に曰く「使徒たちの手を按る因て聖靈を賜られしを見てシモン金を持來り我手を按ところの者も凡て聖靈を受ん爲に此權を我にも與よペテロ彼に曰けるは爾の金は爾と偕に亡よ爾は神の賜を金にて得んと思ひ爾この事に於て分なく又與なし爾の心神の前に正しからず故に爾この惡を悔改めて神に祈れ爾の心の念或は赦れん我爾が膽の苦にをり不義の縛に在を見れば也シモン答て曰けるは爾ら我ために主に祈り爾らが言しところ一も我に及ばざるやう我爲に主に祈れ」云々。後、かれは羅馬に現はれわれは神の權化と稱して愚民をまどわした。シモニイといへば、物的利益のために精神的特權を賣買して得た罪をいふ。十八世紀人のウオルポオルがこの比喩に恰好な引用例を見逃しつこはない。

それを又當時の役者で俗劇作者で英國のアリストフアーネスなど呼ばれたフートが目付けて『いかさま師』の中でシモニイ博士といふ役を私かにわがドッドのためにふつてあるが、ドッドの惡評は余程の評判物であつたらしい。この喜劇の中で一番よくスケツチが出來たと云はれたのがこのシモニイ博士なる流行說教家實はドツド博士で、寺祿賣却の話が出たのも、ぬくすりが失敗したのも、芝居になつたのも、君牧師をやめられたのも七十四年中なのだから話が早く進んだわけである。而もウオ

ルポオルの手紙は年の一月末である。それにしても、チエスタフイールド伯とウォルポオール即ちオーフオド伯と揃ひも揃つて古今に名だたる書翰文學の大家に挿まれて甚だ世紀末的な詩を書いて今日迄認められぬ小詩人ドッド。代議士となり官にもつき後聾耳となつて退耕した伯とは政敵であつたこれも代議士のウォルポオル伯と、何れも一筋縄でゆかぬ十八世紀式政治家で、其間に小さくなつて惡事を企てたドッドは運のわるい弱い人間であつた。

倫敦の町人どもはこの牧師の事を「マカロニー人」とあだ名をつけてゐた。若くて道化けた牧師先生といふ名稱は當時知られたあだ名であつたのかフートの脚本にも使つてあるが、マカロニーといふ名も亦のがしつこはない使用してある。當時有名のマカロニー倶樂部の會員であつたかどうかは調べつかぬから知らぬが、マカロニー人と呼んだのであるから或は左樣かも知れぬ。マカロニーは十七世紀末からあつたが、いはゆるボオの集りで、ダンデイやバツクやブラツドの組がかつて榮えたごとく此マカロニーも佛蘭西かぶれのハイカラ紳士團で、遠眼鏡や縮髮の長い奴を携へては衣裝に贅を凝らし、始終大陸へ出かけては最新流行を學ばうとしたのだが、實はあまり佛蘭西式ではなかつたこと今の銀座街上の猪尾助紳士が米利堅にも劣るにひとしい。フローリツクズといひブラツドといふやうな血櫻團のやうな硬派とは事變り、伊達で懸想でバカげて素暢氣な一團で新しき男の『ウソ吐き倶樂部』や『聖ビフテキ會』や新しき女の『青踏協會』が出たのもこの頃であるから、道樂者の標本見たやうなドッドが君牧師や博士になつたのも怪むに足らず、いはゆる監獄結婚のやうな怪事まで職業的に日常事件としてとり扱はれるに至るのである。目に一丁字なきゴロツキ牧師が夥しい數に上つてゐた事を考へれば、又、浪費に身を喰はれて下獄した上流社會人が少くなかつた事を思へばドッドの博士は寧ろ當然の運命に陷るべく本筋の大通りを歩いた十八世紀ボオの好適例である。

今この十八世紀の英吉利君牧師の計らずも世に殘した楚囚文學に對照するものを本邦に求めんに、寶永元載申霜月十八日御客屋御奉行樣宛に不敵豪快の世に珍らしき訴狀を提出して自己を祖先より初めて見在に至るまで吹張に及び、且、自ら進んで獄門を請求に及んだ流人宍戸鐵州事小說作者都の錦こそその人であると思ふ。

ドッドの絞罪となつた一七七七年は、都の錦の生れた延寶三年の一六七五年と凡そ百年の相異はあるが、錦亦十八世紀かけて生存した人で、今兩者の生時と死年を近接せしめ一七〇〇年

より五十年間の世態を見れば、英吉利アーン女王の即位一七〇二年は元祿十五年義士本懐の年で、一七五〇年はジョーチ二世崩御前十年の我朝將軍家重の寛延三年で恰も櫻町上皇崩御の年に當るが　兩者相通ずる處は社會風俗の淫靡であり、信仰の頽廢であり。大文豪地を拂つて空しかつた時代であり「(一六一六年元和二年)沙翁歿。一六七四年(延寶二年)ミルトン歿。元祿六年(一六九三年)西鶴歿。享保九年(一七二四年)巣林子歿。」、一七二七年にニウトン死し、一七二五年には博物館が建設せられてゐる英吉利の科學進歩時代に對し、程度こそ違へ、洋樂が市鉄によつて製された享保十年(一七二五年)から蘭學開けた延享の初め(一七四四年)を經て一七五四年(寶曆四年)の山脇尚德が屍體解剖の事、玄白の外科、源内のエレキテルや物産會や火浣布に寶曆から明和かけての新學である。英吉利十八世紀後半に榮えた怪異譚小說は早く前述のウオルポオール(一七一七——一七九七)に端を開き、その傑作オトラント城はゴシツク・ローマンスの先驅であるが、出版は一七六四年の明和元年で『繁野話』の出る三年前であり、『諸國怪談帳』の出た八年後だが、怪異譚は本邦の方が季が早く、既に文會堂『玉櫛笥』や『玉箒木』、雜山子の『怪談全書』を十七世紀末に出し、十八世紀初めには『御前お伽婢子』(都の錦)が新世紀第三年の元祿十五年に出たと共に十七年[illegible]改元して[illegible]、の『古今新撰忍記』から、『新色三つ巴』、『大和怪異記』、『お伽人形』等續出し、白眼居士の『一夜船』や文會堂の『當世智恵鑑』も相次ぎ、下つて寛保中の『怪談お伽櫻』や寛延二年の『英草紙』翌年の『登志男』烏有庵の『萬世百物語』(寶曆元年)や安永元年の『怪談お伽童』を經て同五年の『雨月物語』に至り、『怪異談叢』(天明元年)より『怪談旅硯』(寛政二年)、『怪旅の曙』(同八年)、享和元年の『蕣顯草』以後新唐時代に入つてゐるが、クララ・リーヴがホレスを模倣した『老英吉利男爵』(一七七七年版)に續いて出た、ラドクリフの『獅子里綺譚』、『ユドルフオの怪異』は更にルイズの『桑門』や『怪異談叢』やマチユーリンの『漂泊のメルモス』、詩人シエリ第二夫人メアリの『フランクンスタイン』を生んだが是等は多く十八世紀末から十九世紀初頭かけての產で、ベクフオードの『ヴテツク』を中心に全盛期を示してあとはばつさり衰へたから、時代は些か雁行するが殆ど同時に怪異譚が時花つたのも面白い對照で、本稿には長くなるから割愛したが『ロビンスン・クルウソオ』の作者デフオーの如きも楚囚文學の大立物で、かれ亦『幽靈の歷史と事實』とを書いても居れば、得意の諷諧文學『非國教徒對策捷徑』で忽ち筆禍を得て架刑臺に立たせられた上に、

のう〳〵としてその『架刑臺の頌』を作つたり、獄舍から逃虜なく發行した『評論新聞』が娑婆に出てからも續いて一七一三年に至つたのなどは好個のジャーナリストであり實際生活智識も豐富であつたかれ獨得のはなれ業で、それ丈け純文學として殘るものは僅少だが、獄中文學史にはなくて叶ふまじき一人であつて到底血の廻りの惡い日本國士などの仕業ではない。

さて、ドッドが法衣を纏ふて酒色に耽溺したに對し、都の錦は『乍恐奉願口上覺』と題した有名なその訴狀によると、本國常陸宍戸郷宇都宮八田之流右大將賴朝公同腹兄左衛門尉知家二十一世とあり、生國は播州大阪、本名宍戸鐵州三十歳とあるから延寶三年（一六七五年）の生れなるべく、佐川姬明神の神官をしてゐて二十一歳上洛して儒學を仁齋に學ぶ傍、季吟に歌書を烏丸資慶に作歌を習ふて諸方の門をたゝく事六年島原の遊蕩に耽つて金銀過分につかひすて、祖父隱婦家の所持家敷を謀計以て密かに賣拂、書物衣類をもなくして近緣の勘氣をうけ、二十七才新黑谷門前に引込み小庵を結んで佛法修業に志し山科大宅寺の月波和尙に參禪し傍戲作の筆をとつて糊口の資となした。御前お伽婢子』の序にも「怪力亂神かたる事我の親仁が惡なれば不言はいふに勝れども春秋莊公七年に空から星が破落々々と阿米の如くに隕と書、易經には魂跳て遊といひ左傳にまた腸持の幽靈を殺し事勿論なりかゝれば怪異を傳るとて藪から棒を出すにもあらず見る事聞く事思ふ事我にひとしき安房の爲舌長口に墨を含硯の海に心を灌筆の山積りつもりて紙を重絲六帖とはたゝりかの一帖の移情が剪燈新話の拔書を恨み頭から御前の威を借て漸に殿樣風を吹せ御伽御坊を招寄あの世と此世の境目を滅法界の公事にして訴る事は此方の負。」とある通り、筆もたつしやなれば學問も可なり深くて『風流日本莊子』といひ『風流源氏物語』といひ『風流神代卷』といふ古典のアダプテイション物は渡世のたつきに外ならぬが、『元祿曾我物語』といふ仇討物や『沖津白波』といふ白波譚叢やこの因果物をも作つて創作の才をためし、元祿十六年立身のために同學の方から書狀をうけ東武の親類にかくれ、四月三日江府に罷下り、誇書の當人を探したが燒出されたとて目付からず、諸方を彷徨中を無宿改分施孫兵衛に見咎められ、寺社奉行永井某に引渡され十月薩州山ケ野金山に遠流となつて召放された處、弓術を役人衆に敎へて厚情に預かつて流人仲間源次郞といふ者にそねまれ無念至極に感じて翌年七月二十二日夜小屋を忍び出て自害の覺悟で深山に入り込み變心して「いや〳〵死は輕くして生は重し」と逃出したところを小河內で被召捕、八月四日に又入牢の身となつたが、「赤米一合も無汁にて被下候へば追日衰勞仕り生ながら餓鬼道の苦をうけ二六時中苦痛止事なく、來世に於ての罪障又思ひやられ歎ケ敷存候」と獄中の苦艱を述べて、即ち、「あはれ願くは御仁心を以て被召出忽ち首を刎られ被下候はゞ生前の大幸難有奉存候」と願つて、その後に、

牢屋番大極　善惡兩天明
捨てにけり今日の命は惜しからで
亡きからになる恥の悲しさ

と所懐を陳じ、終りに「私事京にて都の錦と申し候由緒は諸藝太平記と申すものに有之候、猶御當地金山牢七など能く存じ申候。」と身の上を明してゐる。倘又、この訴狀の劈頭には藤氏系圖一卷、加州濱太刀、六孫王經基より傳來だとて預置人名迄書き、父康昌は家康から諱字を貰ひ、母は廣幡大納言豐忠女、六年以前死去、號心月院と書き添へてある。系圖に初まつて學藝經歷から放蕩の次第、母方の祖父が屋敷迄賣拂つた放埒まであり〳〵と書き立ててあるを見れば彼の豪放の稟質は察せられるが、自ら死刑を希ふにいたつては自ら高うした豪毅の一徹心が忍び難き獄舍の苦楚に耐へかねて自屈して生き存へんより、一思ひに生を絕たん事を欲し、同時にわが歷史と才學が認められて萬一にも赦免と迄はゆかずとも寬裕の扱ひをうける事もやと僥倖を期待した點も確かにあつたに相違ない、然るところ、幸ひにも同情するものがあつたか、同じ薩州の鹿籠金山に徙され、こゝでは明らかに待遇がよくなつて、この山に居る間に「播磨杉原三冊（赤穗義士の事なり）を」著はしたと饗庭篁村が『小說家の人物』中にもあるが此書は一予未見の作で、藤岡東甫も「寬永四年の傾城播磨石、寬永八年の忠義武道播磨石の外にかゝる書もありしにや。」と疑つてゐるが、何れにしても悲壯快の事件の外にこの諸國文學があつて、一世の人の目には確かに觸れたものらしい。

元祿十五年版の『元祿太平記』の著者梅園堂が都の錦當人であるなれば、西鶴を無學と罵り、都の錦自身をも才學を盛んに推賞し乍ら西鶴の亞流にすぎずと大いにおとしめてをるかと見れば、「惜しいかな、都の錦その功積何もあらずして行年二十七を限りに西海の浪の泡と消る事洛中書林の嘆ぞかし。」と自ら稱してをる處は一度自殺を決し一度梟首を願つた死ぬ事好きの錢舟が不平滿々の間に先人を罵詈し自己を活殺しつゝも巧みにその名を廣めんとした彼らしいやり口を感じる。『物之本江戶作者部類』に隱れたる作家などと大いにその性僻を異にする點である。

その梅園堂の罵詈讒謗は多く漫罵に類し（たとへば西鶴地獄めぐりの下りのごとし、）左もなければ、些細のあやまりを拾ひ上げ、（たとへば、『好色一代男世之助島わたりの段に、いのこづちと牛膠と別に』書いてゐると云ひ、仲子のことばを孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづつたること多しといひ、小大のあやまりあらずといふ事なく、ひたすらかた言をのせずといふ事なし」といふ類である。）畢竟文盲を罵るも通俗と射利との一點で西鶴の多幸を羨望するの情が眞に無學を非とする心以上に強かつたは言を俟たず、（たとへば「御前お伽婢子」の總論に「昔はむかし今はいま文章の時所位ある事の理りで、難波

書林來てこの一卷古語を交へて理學の羯論かき餅のごとく堅い、とかくかな物は西鶴流といふを引取つて、「それほどの事此方にぬかりはしませぬ、」よつて我等も柔か好きだが、茶屋の久三、中衆の茂助が仁義を稱へ、糊賣姥が論語を讀む世の中で生物知が多いから「柔かなる中にも又ちんふんかんを加へねば中中合點」參らぬ、「西鶴が時代は野鄙な言計りいひふれて一盃宛に吸りけれど今時其手は食はぬ粹通し、」云々とある。）わざと書林の慾を釣つて自己の正を通さうとする程の手段とは創作そのものを檢して左樣には考へられぬ。思ふに、この野心滿々たる神佛儒粹四道四兼學の都の錦が、心中私かに西鶴の才藝に感服しながらも一旦時宜を得て大鵬一飛すれば、十分にあの程度の創作と成功は占めうるといふ自信の底ごころがあつて、現在の不滿に驅られてこの激語をなしたものらしい。都の錦が一代の文章はつひに『燕石襍志』の馬琴もいふごとく西鶴に遠く及ばなかつた事いふ迄もないが、『御前お伽婢子』の杜撰の書なる事は恐らく作者も承知の上らしく、所々で無駄を云ひ〳〵筆を進めた所募しに困つての手間仕事であつたに相違はない。

ドツドが學藝拙くして君牧師となり博士となつたに對し、都の錦はとにかく京師で和漢の學問に遊んで俳諧小說家の半端知識を嘲つたが報ひられた何物も持たなかつた。放埒に身を持ち崩したは同一だが、一は牧師の定職に安じたけれど、他は戲作者の儚なき生活におびやかされ通しで、附官賣買と詐欺取財とで忽ち絞罪に逢つた不幸な博士にひとしく、浮浪の罪科の外に嫌疑となつた何物かがあつたかどうか不分明だが、流竄の人となつて亂獄の非を咲じた都の錦はよくよく惠まれぬ星の下に生れた人であつた。斷末魔の惱苦裏から自暴自棄の風狂歌を發し且生に執した君牧師の臨終は、弱き人間性の赤裸々なる全形を露はし、牢苦に堪えで死を希つた戲作者の心緒には狷介にして孤獨な個人主義者の絕望的悲鳴を聽く。かの牧師の最後の呻吟が期せずして興趣尠からぬ反時代的の、輓近的の歌口を示し、この戲作者の訴狀文は直ちに人の肺腑を突いて昔ながらのある型式の稟賦の傳統を物語る。而してこの文士に獄中文學あつて楚因文學の完き形式を見出さぬに對し、かの非文學的な牧師に偶然にも純文學所產を見出すは面白い事實であらう。

楚囚の文學を尋ねて、われらは尚多くの隱れたる殘餘の逸作を數へるが、それは他日の機會に述べよう。ヱルレーヌの幽囚がかの世界獄中文學の冠冕たる『智慧』一卷の詩冊を生む機會を作り、ワイルドの『感傷記』が卓れた英散文史の位相にあるは人の知るところだが、監房番號を署名して出た『レディング監獄のうた』とともに英吉利監獄制度改良の重大な動因をなしたは記錄すべき逸話の一であり、シルギオ・ペリコの『獄中錄』やモントゴメリイの詩やクウパの『自殺の煉獄』初め東西古今鐵窓文字の曲折を顧みて、われらはその間にある系統及び屬類の過程とその價値とを發見するのである。

生地の國日本

佐々木指月

ながながと、あくびして、机の上に腕をかさねて、その上に顏を押しあてゝ、そのまゝぐつすり一と寢入だ。

『どうでもいゝや、成るまゝにしか、成りはせぬ』と、なげ拾てた世の中を、また拾ひとつて、と見、かう見する四十男のこころもちほど、くだらないものはない。

ふらりとアメリカへ渡つて、ふらりと歸つて來て、またもとの早稻田町の、家の二階におさまつて、十一月の末の日に、日なたぼつこをしながら寢る。

『いつも御無事で』と、舊友が訪ねて來ての挨拶だ。

御無事にちがひない。やつも、いひ草にこまつて、御無事とぬかしたことだらう。

『また、あちらへお出でになりますか。』

『さあ、どうなるかわかりません。』

『へえ？』

さア、どうしやうか。向ふへ歸らうか。それとも日本にゐやうか。どつちしても同じやうなものではあるが、どつちにしたらよからうかと、實はこれが問題なんだ。

アメリカに二十年ゐて、もうアメリカも倦きてはゐる。だが日本といふ國が、――來て見ると――なんだか、わたしには珍らしい。

かうして、日本の日に照らされて、日本の空氣を吸つて、日本の家に寢そべつてゐるといふことだけで、あたしは嬉しくつてたまらない。

前に歸つたときには、日本といふ國は、西洋の眞似ばかりしてゐて、しかもそれが西洋に及ばず。いやな國だと思つた。

しかし今度は、西洋の眞似をしてゐる日本の文化なんかは、あたしには、どうだつてかまはない。だがもう日本の土地、日本の空、日本そのものが、あたしに、かう、なんともいへぬ安樂な、こゝろもちを與えてくれる。

あたしは、四十年以前の子どもに歸つて、母親の聲のきこ

えるところで、日を浴びながら、まどろんでゐるやうな氣もちだ。

自然に歸つた氣持といふのはこれだらう。歸らう歸らうとしたその自然に歸つて見れば、そこはやつぱり父と母との産れた國、日本であつたわけだ。

アメリカの旅も長かつたが、自然に歸るこころの旅も長かつたと、あたしは今、自分自身で感心してゐるところだ。

まア、これで歸つて來たが、歸つたばかりじや、しやうがない。まだ、父や母の、はいつた墓へ、はいるのも間がありさうだし。どこかへまた、出かけなけりやア、ならないことになるかも知れない。

『今度、出かけるとしたら、支那へでも行つて見ようかと思つてゐます』とは、この五六日、あたしが、人に、答へる言葉だ。

あんまり日が暖かいので、目を明けかねて、うつらうつらとしてゐると、夢はいつしか、ニウヨークの眞ん中へ、あたしをはこびもどしてゐた。

續くは續くは自動車が、しつきりなしに續いてゐる。交通巡査は女と立ち話をしてゐてなかなか呼び子を吹きさうにもしない。この四つ角は、いやに暗いが、やかましいことは二つの耳が、とんぼ返つて、かなつんぼになりさうだ。

高架電車が上を通つてゐるんだ。往復で四つの軌道のある上を、列車が一度に通るときは、その響で、あたまの心が虚つぽになつて目や鼻から黄色いけむりが立ちさうだ。

『ここはどこだい?』

『こゝはサアドアヴェニウと、フェフテナインスの四つ角だ。ブルーミングデールの前じやないか。』

『なんだいそのサアドアヴェニウといふのは。』

『サアドアヴェニウか。サアドアヴェニウは、街の名じやないか。ニウヨークの貧乏通りの隨一で、下町はバウエリーからはじまつて、上町はワンハンドレツト、トワンテーナインス迄ぬけてゐる大通りだ。』

『恐ろしく長い通りと見えるなア。』

『長い通りだよ。土地の人は、サアドアヴェニウとはいはないよ。トルデアヴェニウといふよ。』

『トルデアヴェニウとねエ!』

『あゝ、その、トルデアヴェニウの、ギンクとくるとね。』

『なんだい、そのギンクといふのは?』

『ギンクは、ガイの若いのよ。』

『なんだいそのガイといふのは？』

『ガイは、日本の言葉で、いへば、野郎とでもいふところかな。ジス、ガイといへば、この野郎さ。ザット、ガイといへば、あの野郎さ。チープ、ガイといへば、けちな野郎といふことよ。』

『で、ギンクといふのは？』

『ギンクとなると、ガイよりは、氣がきいてゐる。フエルのトハットに、赤ネクタイ、絹のサックスを赤革の靴の上にちよいと見せ、ブケイに、ハンカチー、金ぐさりで、左の手を腰に、右の手を、かう、パンツのポケットに入れて、向ふを通るチキンかなにかに目をつけて『ヘイ、メアリー！』と、きたもんだ。マリーのことを、ちよいと訛つて、メアリーとよぶところに、いきなところがあるんだ。『ホエヤ、アー、ユー、ゴーイン？ ツエ、ラスカル！ オール、ダルダップ！』と、やじる。下等だが、齒ぎれはいゝねエ。』

『ちよいと待て。何んだいその、ホヤがどうしたとか、かうしたとかで、ダルダップ、ダルダップといふやつは。』

『ダルダップかい？ ダルダップは英語だよ。意味かい？ 面倒だなア、さう、一つ一つ意味をきかれては、話もなにも出來やしない。ダールは人形のことで、アップは尻ッぱしよりをすることだ。人形が、尻ッぱしよりをするからには、おめかしをしてといふ意味になるんだ。』

『で、ブルーミングデールといふのは？』

『うるさいなア、ブルーミングデールといふのは、木の花の咲いてゐる谷といふことだが、これは、デパートメントストアの名まへだ。』

あれ！ 交通巡査は、まだ女と立ち話をしてゐる。長い話だなア。ストリートに、ぎつしりつめかけた自動車は、今や遲しと呼び子のなるのを待つてゐるが、なか／＼ならない。待ちかねて、一臺が、ホーンをならす。ホンク！ ホンク！ すると十臺ばかりが一度にならす。ホホホン、ホンク！ ホホンク、ホンク！ 巡査はやつと氣がついて呼び子を吹いて、とたんに、アヴエニウの方には。止れ！ と、大きな手の平を押してた。

ストリートの自働車は一時に馳け出す。それに添ふて人間も、押すな、押すなの大さはぎさ。生憎、道に敷きつめた石が、でこぼこで、靴のかゝとがすべつて急には歩けない。

『ヤッ！ 女がころんだ。』

それを自動車がひいて通つた。白い足から赤い血が流れてゐる。

『どれ、見せな見せな。もうすこし、上の方まで見せな！』

一人が馳ければ、みんなが馳ける。なにも、馳けずに歩いてゐればいゝものを、一人馳け出したために二人馳け。二人馳け出したために三人馳け。三人馳け出したために、十人、十五人。それ馳けろ馳けろと、しまひには、千人萬人、都を擧げ、國を擧げて馳け出すやうになるのだ。

『それがニウヨークだ。それがアメリカだ。それが西洋だ。』

人を踏み殺し、馬を踏み殺し、野を踏みつぶし、山を踏みつぶし、四千哩の太平洋を踏みつぶして、西洋の文明は、この日本へも馳け込んで來た。

『おい！ 馳けないか。みんな馳けてゐるぜ。まご〳〵してゐると踏み殺されるぜ。晝寢なんかしてゐる今日ではないぞ。それ馳けろ！ やれ馳けろ！』

『まあ待て、何んのために馳けるんだ。馳けて一たい、どこへ行くんだ？』

『なにもくそもあるものか。みんな馳けるから馳けるんだ。』

『では、こつちにはかまはずに、馳けてくれ！。』

『馳けるとも。』

日本の人も、もう馳けてゐる。

西洋にゐて二十年、あたしも、いのちがけで馳けた。

しかし、四十の頃も越えて、馳け込む先が見えてくると、

『こりや、いけない。いくら馳けたつて、行きつく先は同しだ』と、氣がついた。

食事をするのにラヂオをかけて話をしながら食事をする。馳けてゐる證據だ。

話をしながら食事をすれば、食べものの味は、まあ、わからない。話をするのにラヂオをかければ、話す話もわからないし、かけたラヂオも、たゞやかましい。その上に電話のベルはなるし、電氣扇のプロペラーは、うなるといふことになつて見れば、『食するに語らず』なぞと、しかつめらしく云つて御座つた孔子さまは、さぞびつくりすることだらう。

左の手にはラムの酒、右には煙草、膝には女。しかもそれは船のなか。アメリカの日曜は目がまわる。馳けてゐる證據だ。

ラムでのぼせて、煙草でむせ、女でとろけて、船で醉へば、一生の歡樂を一時につくすといふものだ。ハドソン河の兩岸の一日の景色は、まさに百年のメリゴラウンドに違ひない。

この船は、明る日の朝、アルバニーへ着く。船は遲いが、それでゐて、馳けてゐる證據だ。

ニウヨークへ下る夜汽車の窓から見渡すと、川すぢの島々の

自のおけをこの街が、青いおと、青いおとをひきながら、そろそろ上つてゆくのが見える。はゝア、駈けてゐるなと思はせられる。

ニウヨークには、六百萬人の人口があつて、三人頭に自働車が・臺づつあるといふことだが、駈けてゐる證據だね。

その自働車が一度に出てくるのだから大變だ。往來はいつも自働車で埋つてゐる。人間は駈けたくも駈けられない。自働車も駈けたくも駈けられない。

『地の上はもう駄目だ。空を駈けやう。』

空も今に飛行機で一ぱいになるにきまつてゐる。

『止れッ！』といふ聲が天の方からきこえてくる。

『いや、あたしは日本へ歸らう』

まだあそこには、自働車の通らない裏店町があるにちがひない。そこに住んでゐる人は、まだ駈け出さずにゐるにちがひない。ぼつたら燒のおぢいさんは、相變らず往來のまんなかへ荷を卸して、子供たちにかこまれてゐるにちがひない。

秋のなかばの十月十五日、暮れかゝるセントラルパーク、ウエストの住まひをあとにして、ペンシルヴアニア、ステーションから、シカゴ行きのナンバア、ナインの汽車にのつて、あたしはニウヨークを立ちいでた。

立つとなると、それでも名残に惜まれた。スチーション、グランドホールの、まんなかに立つてゐると、

『アイ、キヤン、シー、ヒズ、カンミング、バツク―』あたしには、かれの歸つてくるのが見へますと、もう、アメリカに住みふるして、日本語も大方は忘れてしまつた・人の友人がさゝやいだ。

『アイ、ノー、ユール、ドラツプ、ジーズ、サンデツチーズ、オール、ゼー、ウエイ、アロング、ゼイ、トラツク、ツー、シカゴ！』きつと、おまへは、このサンデツチーズを、シカゴ迄ゆく途中のレールのわきへ、一つ、一つ、おつことして行くことよと、これは、あたしをひどく憎んで、モルヒネを呑ましたことのある女が、汽車のなかで、おなかゞすくといけないとて、こしらへてよこしたそのお辨當に、そへて、はなむけてくれた・話である。

午后七時十分過ぎ、あたしの汽車は涙ぐんだ友人の顔をうしろにして、ニウヨークをはなれた。

ハドソン河のチユーブを出て、汽車がウイハウゲンへ渡つたときは、烟のすえに夜の星がかゞやいてゐた。

ふりかへると、ニユーヨークの灯のやぐらは、その數をつく

して、はるかのかなたにならんでゐた。

『さようなら、ニューヨーク！長のお世話になりました。』多分また歸つてくるか知れないが、一刻の別れが永遠の別れになることもある世の中だから、と思ふと、あたしはなんだか、うしろ髪をひかれるやうな氣がした。

『でも、ニューヨークは、いそがしすぎる都會だつた。』なにしろ煉瓦を積む職工が一日に十四弗の日給をとつて、大學の法科の卒業生は、なにか仕事にありつかうと思へば、どこかの法律事務所で、三年も只奉公をしなければ、一週間に二十五弗の給金も貰へないと云ふ都合なんだ。

勞働の高いことと世界第一で、學問の安いこと、これまた世界第一だ。そこらの事務所の電話給仕が、マスクラットの毛皮の外套を新調する今日この頃を、大學のプロフエッサーは、肘のぬけたフロックコート一枚で、そろ〳〵水ツぱなを、すゝりはじめる。

金がなければ人ではない。學問はおもちやだ。活きるには腕の力と、けつの力だ。ひどい都會があつたものだ。あたしには腕の力もないし、けつの力は男のあたしに、はじめからありッこはない。

『ニューヨークよ！おさらばだ。』

今度は紳士の旅ではなく、たゞ一介の放浪者の旅である。シカゴ迄は寝ずにゆくのだ。

フイラデルフイアに汽車がつく。あたしは窓によりかゝつたまゝ目を閉ぢてゐた。

ぎつしり一ぱい乘つてゐた人たちは、大てい卸りて、車のなかはがらあきになつた。

とまりがけでこの都の博覽會を見物に來た人たちが乘つてゐたので、汽車は、かう、込んでゐたのであると知れた。

日本から、この博覽會に出品されてゐる眞珠の塔の噂を思ひ出した。

『あれは、似せものだ』といふ呼び聲が高いさうであるが、實は似せものではないのださうだ。

眞珠も稀にあれば尊いが、それを集めて塔を作るほどあれば、もう寶とは見えぬのであらう。

美人も稀に見れば、千金をなげ出す氣にもなるであらうが、それを聚めて都をなせば、なんの有り難い事もなくなる。

あのシネマ役者の都、ホーリーウッドへ行くと、我れこそはアメリカ一のスターにならうと思つて、世界から聚まつて來る美人のために、往來が埋まつてゐるといふことだ。

そこのホテルでは美人がチャンバアメードになり、こゝのレストランでは美人がウエートレスをやつてゐて、美人の安いことお話にならないといふことだ。

　そこへゆくと、このフイラデルフイアの博覽會へ、連れてきた日本の製糸女工さん、二人ともお顔を見せずにうしろむきで、毎日糸を採つてゐるさうなが、その前はいつも人の黒山で、ちよつとお顔を拜ましてと、祈りをあげる男たちもあるといふ。

　この二人の女工さんに宛られた戀文は、毎便、ポストメンが汗だくで運んでくるのだが、それはみんな事務所の方で握りつぶしてゐるのだとは、さてもつれないあつかひ方だ。さうした事務員たちは、いづれも犬にくはれるだらう。

　この女工さんたちの着てゐる着物を賣つてくれといふものもできて來て、すでにもう賣却の契約もきまつてしまつてゐるとは嘘のやうな話だが、全くの事實だといふことだ。

　女工さんたちの着物を買つて、一たいどうするつもりなんだらう。まさか、そのかをりをかぎながら、だきしめて寝やうといふのでもあるまい。

　なにしろ日本の、たとへばそれが女工さんでも、若い女が西洋で、もてることは、まことに目出たい。

　考へて見ると、日本の女が、割り込んでゆける隙は、いくらアメリカが黄色い人間をきらつてゐるし、また[illegible]ゐるわけだ。

『もし、おまへが女だつたらどうするか』といふ問ひには、よく發される問ひであるが、そのたびに、あたしは返事にこまつてしまう。

　男が、もし『だつたら』と、想像して考へ得るくらゐな道は、女自身は、とつくの昔の原人時代に、もう經驗してしまつてゐやう。

　だがだ。あたしがもしも日本人の血をうけた女だつたらと考へると、西洋人のなかにまざる日本人の娘たちは、なんにも知らない。日本から來たのはともかく、アメリカで產れたのまで、なんにも知つてはゐないので、これではたよりにならないと思はせられる。

　日本の女はまだ『つけ入る』といふことを知らないらしい。つけ入るといふことは、一寸くれゝば一尺とるといふことなのだ。一寸くれゝば一尺とるといふことは、

『おや、ぼちや子さん、今日は、おめかしですな』と、社長がいへば、

『じやア、今晩は芝居へつれていつてくださるのねェ。さうして、來月から、もう十圓月給をあげてくださるのねェ』と、い

ふことなんだ。

ニウヨークにゐるユダヤ人の娘や、アイルランド人の娘や、イタリヤ人の娘となると、そのあたりの呼吸を心得てゐること神の如く賊の如しで、自分たちがぶつかつて割り込んだそのうしろへ、すぐ自分の身うちのものや、同じ國のものを引き入れて、追々にはそこのビジネスに喰ひこんで、やがてのことにインコーポレーションの看版をあげさせる。

ピッツバルクへ急ぐ汽車は、野の朝もやのなかを走つてゐた。丘つゞきに並んだ小さな村々は、まだ目さめてゐなかつた。

汽車の旅になくてならないものは、煙草とマッチと、實のところは女の顔だ。

見渡すと、いづれも寢ぼけまなこをしてゐる旅客のうちに、ニウヨルクから乘つて來た一人の若い女があつて、いつ見ても目に涙をためながら、もの思はしげにしてゐたが、一夜のうちに泣き萎れて、今は見る目もあはれである。

誰れ一人言葉をかけるものもなく、誰れ一人なぐさめてやるものもないひとり旅だ。よけいなお世話だが、氣の毒なことである。しかし、どうするわけにもゆかないので、あたしはそれを遠くから眺めた。黄色い髪のその下にうるんでゐる目は夢のやうだつた。

アメリカの人情といふものは、かういふところは全く冷たいものだ。日本ならば、あたしのやうな男が一人、きつと出て行つて、

『實はさきほどから、お見うけ申してゐますところ、なにか、御心配ごとがおありになる御様子ですが、お差し支へなくばお聞かせ下さい。出來ますことならば、及ばずながらもお力になりましやう』と、いふに、女はひとしほ涙にむせて、

『いゝえ、お話し申すほどのことでもございません。一人の母親が急病で、國元へ歸るものでございまするが、この切符を買ひますときに殘りのお金を見うしなひまして、これから先き、向ふへ着きましてもまだ、長の道中をしなければなりませんが、歩いてゆけば母の死に目に逢はれますまひし、どうしたらよからうかと思案にくれてゐるところでございます』とまた泣き入る。

『と、云つて、この金を――待つてくれ――この女にやるわけには行かず』と、その男、人の見てゐるまんなかで、赤恥をかきながら、すご／＼と引き返すところだ。

ピッツバルクにまだ遠い、ある、樹の多い村のステーションに、卸り立つたその若い女は、スーツケースを手にさげて、外

室の扉をたてたから消えていつた

あとに殘るは煙草にマッチ。あたしは立つて、スモーキングカアへ、はいつた。

『チエントルマンス、コンプレヘンション、エンド、レディス、コンフイデンス。』これでアメリカの男女のなかは盡きてゐるのだ。

井上さんの英和辭典によつてしらべると、コンプレヘンションは、ここでは『理解』と譯し、コンフイデンスは『信頼』と譯すべきであらう。

『紳士の理解に淑女の信頼』だ。それで、アメリカの男女のなかは盡きてゐるのだ。

『どうだ、わかつたかね?』

『いや、わからない!』

『おまへの腹は、おツと合點、理解したといふ、あの理解をコンプレヘンションといふのだ。』

『女の腹を讀むことだな。』

『腹ばかりぢやない、どこからどこまで讀んでしまうことよ。』

『さうか。して、その信頼の方は?』

『あたいは、あなたを信頼してよ。だから二人の間の秘密は誰れにも話しちやいけないことよ、の、あの信頼よ。』

『お寶ア、ないにきまつた』

『ところがこいつがお高いものにつくのよ。なぜならに、金に信頼されたからには、こちらは、向ふを理解してやらなければなるまい。』

『つまり金だな。』

ある時、ある後家さんが、あたしをつかまへて、おまへにはコンプレヘンションがないといつた。

あたしにはそのコンプレヘンションといふ言葉の意味がわからなかつたので、歸宅早々、例の井上さんの辭典を出してしらべて見ると、理解とか合點とか書いてあるだらう。

して見ると、あの後家さんは、わたしには理を解することが出來ないといつたのだな。失敬なことをいふ後家さんだと思つたから、あたしはその後、その家へは遊びにゆかなかつた。

だが、今、考へて見ると、殘念なことをした。あの時に、あの後家さんの情を解して置からものなら、とつくの昔に世界見物ぐらゐは出來たものを。

それから、またある時、あたしはある婆さアんの家へ遊びにいつて、夜の一時の時計を聞いて歸らうと思つたが、婆アさんは深切に、あんまり遅くなつたから、泊つてゆけと、いつてくれる。

夏のことではあつたし、夜も間もなく明けるだらうと思つたから、あたしはそこのソフアの上へ着ぐるみで横になつた。目が覺めたときには、もう、窓には日がさしてゐて、婆アさんは朝の珈琲をわかしてゐた。

その後ある茶話會で、その婆アさんに逢つた時、先夜はどうも御厄介になりましたと禮をいふと、婆アさんは顏色をかへた。そこにゐた人々は目をまるくした。

婆アさんは、早速そこから出て行つたが、戻つてはこなかつたし、人々のうち誰一人、あたしに話をしかけてくれるものはなかつたので、あたしは手もちぶさたになつて引きさがつた。

あとで、婆さんに電話をかけたが、いや、婆さん、おこつてゐるの、おこつてゐないのつて、おまへは淑女のコンフイデンスを重んじないね！　もう、決してこちらへ足ぶみをしてくれてはこまりますといふ挨拶で、あたしは、すつかり味噌をつけた。

婆アさんやつぱり色氣があつて、あたしを一と晩泊めたとは、その頃のあたしには氣がつかうわけもなかつた。

遂ひ先日、ニウヨークを立つまへに、あたしはその婆さんをおとづれて、

『アメリカの男女のなかは、ヂエントルマンス、コンプレヘンション、エンド、レデース、コンフイデンスで諾きてゐますね』と、いつたところが、婆さんは、

『いまだにそんなことを云つてゐるやうでは、おまへはまだ、以前のまんまの、赤んぼだよ』と、あたしを評した。

シカゴは宵の霧雨のなかに烟つてゐた。

汽車がユニオンデッポーへ着いたのは、かれこれ九時頃で、あたしはその新らしく建て直された、大きなデッポーのなかで、まごついた。

ユニオンデッポーといふと、以前は馬糞の臭ひのする、けちな停車場だつたのが、いつの間にか、どうも、すばらしい建物になつてゐたので、とんまなあたしは全く目をまはしてしまつた。

日本の東京驛の百倍もあらうといふ停車場だ。ニウヨークのグランドセントラルステーションにも負けないくらゐで、今さらながらアメリカは建物を建てるにつけては、早い國だと感心した。

外は雨だし暗くはあるし、元來、尻の重いあたしだから、目のまはつたのを幸ひに、そこの食堂の椅子へ腰を据えて、先づ腹ごしらへにかゝつた。

それから顏を洗つたり、ひげを剃つたり、靴をみがかしたり。まご／＼してゐるうちに、乗車制限の十一時が迫つたので、あたしは廣い場内をうろつきながら、オリンピアンと赤いあかりで照し出した、トラツク、エンタランスへ差しかゝつた。

テーブルをそこへ控へて、がんばつてゐた二人の車掌が、

『切符を拜見！』

まごついたねェ。なにしろ西洋の着物といふやつは、ポケツトがあんまり澤山つきすぎてゐる。パンツに五つ、ヴェストに五つ、コートに五つ、オーバに五つ、合せて二十のポケツトを一々さがして見たがない。途方にくれてゐると車掌が、

『お手に持つてゐるのはなんですか？』

氣がつくと、あたしは、シヤトル經由、トランスパシフイツクの切符を後生大事に手のひらに握つてゐた。

プラツトホームへ馳けおりやうとすると車掌が大聲で、

『ちよいと、お待ちなさい』といふ。

ふり向くと、そこへあたしが置き忘れたスーツケースを笑ひながら取つて渡す。

『これがなくては、日本へ歸つて、着るもの一つありません』と、それを受け取つたあたしはそのまゝ、プラツトホームを馳けぬけて、長い／＼列車に添ふて、自分の乗るべき寝台車をさがした。

さがしあてゝ飛び乗ると、もう寝台は敷いてゐた。

『チユーリストは、これかね？』と、聲をかけると、黑ん坊のポーターが

『さうですよ。』と答へた。

『あたしの寝台は？』

『何番です？』

『八番のローアバースだ。』

『如何にも、ちやんとこしらへてあります。』

『それは何よりだ。時に、この車は込んでゐるかね？』

『込んでゐますよ。赤ん坊ばかりが三十人。娘が十人。支那人が五人。』

『日本人のあたしが一人か？』

『そこへ黑ん坊のポーターで。』

『インタアナショナルか？』

旅烏のあたしは、どこへ行つても、わが家と同じだ。はやばやと乗り込んで、もう寝ついてゐる人の、いびきのきこえるそのあひだを通りぬけて、自分のバースへ、もぐりこんだ。

ニウヨークの家を出てから、三十時間もはきつめたハイタツプのトランプシユースを、はじめてこゝでぬぎ棄てた。

朝の汽車は、ミシシッピーの流れを右に、眺めながら走つてゐる。

ポーターが寝台をたゝむあひだに、顔を洗つて、煙草を吸つて、自分の窓へもどつてきたあたしは、これが乗り合ひの人々と顔を合せるはじめての朝である。

見るとなる程、車のなかは、赤ん坊と、子供と、娘と、婆アさんで一ぱいである。ちんぷんかんぷんわからない言葉でみんな喋つてゐる。

これは何事だい！髪の毛の黄色いところや、目の色の青いところや、子供たちの着てゐるものと模様から察しると、これはたしかにスカンデナビアンであらう。一と船の移民が、みんなこの車にのりこんだものにちがひない。

こちらには支那人が一とかたまり、車のなかへ、チャイナタウンを持ちこんで、いや、しやべるは、しやべるは、例の調子で、それこそ口角泡をとばして、しやべりたてる。多分は祖國の大事でも論議してゐるのであらう。

あたしと向き合つたシーツにかけてゐるのは、一人の若い女である。

『しめたな！』と、あたしは思つた。

マキノコートに、シヤーツの衿をひろげたまんまのいでで、

『グードモーニン！マム！』と、言葉をかけると、

『グードモーニン！』と、返事した女の呂律はみだれてゐた。

『ハウ、チユー、ライキー、ユーア、トレイン、トリツプ？』

と、こんどは、こちらも略して出た。

女は、ぱつたり、こまつたやうな顔をして返事がない。

すると、左り側の窓に凭つてゐた、一人の、おやぢさんが、この娘は、このあひだ、ノールウエイから出てきたばかりで、まだ英語は一ロもしやべれないと、あたしに告げて、それから、あたしの、ハウ、チユー、ライキーを、その大きな娘に譯してきかせた。

娘は、あたしの顔を見て、にこ／＼しながら、その首を竪にふつて、取りだしたのは赤いオレンヂ。皮もむかずに、あたしにくれた。

思ひ出せば二た昔。はじめてあたしがアメリカへ來たときは、何を云はれても、ただにこ／＼と、首を竪にふるばかりで、三四年通したが、今、考へると涙がにじむ。あたしはこの大きな娘が、あはれになつて、こまらせまいと、それつきり、ものは言ひかけなかつた。

ーターたち[illegible]て、[illegible]
付けさして、朝の食事を食堂車から取り寄せてたべ出すと、あ[illegible]は、乾いたブレッドにジャムをつけて、大きなポットルから牛乳を吞みながら、朝の飢えをしのいでゐた。

どこでもこゝでも食事ははじまる。子供ははねる、赤ん坊はなく、車のなかはごつた返して、これはまるで幼稚園だか、それとも氣ちがひ病院だか、なんともはや云ひやうはなかつた。

アメリカの、プルーマン寢臺車は、いつもかも、よそ行き氣分で、誰れも彼れも、きちんと氣取つて、カラーのボタン一つはづす男はなく、くしやみ一つする女もないくらゐで、長の旅行は、あれでは全く閉口するゆゑ、あたしはいつも、チューリストに乘ることにきめてゐたが、なんぼチューリストが氣樂でも、これは少し度がすぎる。

『六年も、この汽車でポーターをしてゐますが、幼稚園が車のなかで出來たことはこれがはじめて』と、食事の皿を取りに來た黑ん坊は、耳をおさへて逃げ出した。

あたしは、たゞもう、笑ふよりしかたがなかつた。

ミネアポリス、セントポールも、晝頃にうち過ぎて、ミネソタ州からダコタにかゝつて、日がな一日走つた汽車は、地平に[illegible]

[illegible]
また、一と晩、[illegible]
はじめて、ニューヨークへ[illegible]ときに、こゝ[illegible]たときには、世にも珍らしいことに思つて、詩なぞを作りながら行つたものだが、度々通るにしたがつて、詩どころの騒ぎか、いつも、あたまは窓に凭り、うつらうつらと寢てとほるばかりである。

今は、もう、娘たちも遠慮はない。言葉こそ通じないが、うたゝ寢してゐるあたしの耳を、ひつぱつてゆくのさへ出來て來た。

支那人とあたしは筆談をはじめる。子供たちはあたしを圍んで反古紙に繪をかゝす。婆アさんたちは、みんな再三の渡米者と見えて、英語をうまく話すのもあつて、この娘たちは大方ピクチュアブライドで、寫眞をあてに海山越えてお嫁にゆく、戀愛の遠征隊であると敎へてくれた。

『おまへも日本へお嫁をさがしにゆくのだらう？』と、問はれてぎつくり、

『いゝえ、お嫁どころの話ではありません。一人口（ひとりぐち）さへサツポートしかねるありさまですからね。』と、いゝ加減な返事をする。

「その娘はね！」と、婆アさんは、あたしのまへの例の大きな、にきびだらけの娘をさして、

「遠征隊中第一の失戀者でね。それがニウョークへ着いたとき、シャトルにゐる富貴のお婿さんが死んじやつて、たとへこの汽車が向ふへ着いても待つてゐるものはないわけさ。でも着いた先で、別なお婿さんを見あてるといふので、こゝまで來たほどの冒險家だよ。おまへと二人を向け合はせて、二日もこれで見てゐるが丁度似合ふよ。結婚を申し込んでごらん」と、あたしをなぶる。

娘は婆アさんの顔を見てゐたが、意味がわかつたらしく、まつ赤な顔になつてしまつた。目とにきびは流星のやうに輝いた。

子供たちは、すつかり小便くさくなり。女たちも少々へんな臭ひがしだした。ことに、あたしのまへにゐる冒險家は臭ひがひどく、その膝をかさね直すたびごとに、あたしの魂は天外に飛んで容易に歸つて來なかつた。

支那人の一と群は、とう／＼その議事堂を洗面所のなかに移し、黒ん坊のポータアは、滅多に顔さへ見せなくなつた。

ロッキー山中の難所、モンタナの谿谷を入り日のなかに眺め。高さは六千三百と三十五尺、長さは二千二百九十尺、この大陸の分水嶺、パイプストンのトンネルを夕闇のうちに通り。丁度燈火の湖水のやうな、夜るのビューテへ、汽車はくだつて、またまた一と夜、明ければ、いよ／＼スポーケン。コロンビヤの大河を渡つて、日一ぱいに、人々は目ざすシャトルへ着くのである。

旅の道づれは、なじみそめると、別れる日の迫まるもので、「これは呑んではいけない。噛むのだよ」と、手眞似で教えて、あたしがくれたチューインガムを、例の娘がごつくりと呑みおろして大騒ぎになり。黒ん坊のポータアが、

「エブリバデース、フレンド」みんなのお友だちといふ名をあたしにたてまつツて、あたしから別に二弗のチップをせしめたので大笑ひになつたのがお名ごり。

汽車はもうシャトルの郊外レントンの町にかゝつて、戀愛の遠征隊は、總立ちになり、お化粧をはじめたが、例の娘ばかりは身じろぎもせず、手提げのなかの金をかぞへて、心細さうな顔をしてゐた。

十月十九日の晩にシャトルに着いて、同じく二十七日に、あたしは船の人となつた。

シャトルの七つの丘を、ピユーゼツトサウンドの彼方に殘し

て、あたしの乘つたヨコハマ丸はヴイクトリヤに近づいた。

丁度晝すこしまはつたところで、空は晴れてゐるし、風はなぎてゐるし、デツキの上に立つたあたしは、碧くつらなるオリンピヤンの山々や、雪をいたゞいたレニヤ富士の姿をはるかにながめてゐたが、

『あなたは誰れぞれさんではありませんの』と、いつて近づいた日本の女があつた。

この旅行は女難の旅行だピツツバルクの手前では、泣いてる女に同情して、まさに恥をかきそこね。ローキイ山の山中では、にきびの娘に、月宮殿の無魂香をたてまつられて、危く、いのち嫦娥の玉座のまへに取りとめ。またいまこゝでは見覺えもない日本の女に名をよばれて、今度こそは、いよ〱海底のもくづとなるかと驚いた。

『はい、あたしはその誰れそれでございますが、あなたは、どなたでしたつけ？』

『あたしは、あなたの御存じないものなの』

『道理で、顔も知らず名も知らない方だと思ひました。』

『あたしは、あの、ニウヨークの、コロンビヤ大學にゐましたものなの。今度、失戀して急に日本に歸るところなの。』

『へへい、近頃は失戀がはやると見えて、あたしはこの道中で、これで二人目の失戀屋さんに逢ふわけですよ、ミツス、ピツツバルクも多分はその失戀屋さんでしたのよ。ミツス、ロツキー山は無論のこと失戀屋さんで。で、あなたの失戀といふのは、一たいどういふ筋書きですか、お差しつかへなければ、おきかせください。』

『さうですねエ、胸に思つてゐることは人さまに聞いて貰ふに限りますわ』と、この、ミツス、コロンビヤ大學が、語り出した戀物語りの一とくさり。

わきで聞いてた、ヨコハマ丸の事務長さんはたまりかね、こそ〱と逃げ出した。

ヴイクトリヤを離れると、日はとつぷりと暮れて、海はなか〱荒かつた。北斗七星を右舷に見て、船の煙は左舷になびいた。

友は類をもつてあつまるとはよくいつた。その、ミツス、コロンビヤ大學を頂禮して、船内の喫煙所の燈火の下にあつまつたのが、第一に、マダム、ヤルポチヤ。すてきもない微笑の美人で、その笑聲のなかへ、あたしたちは吸ひ込まれ、足が日本の地を踏むまで正氣にもどらなかつたほどだ。

第二には、ミストル、ワシントン。この若者は、首府ワシントンの美術學校で、繪の修行をしてゐたもの。船へ乘つてか

ら、おひげを蓄へて、日本へ着く迄に間に合ふだらうかとの御心配。

第三は、船内の郵便局長、ミストル、ミチアキ。この人は上海(シャンハイ)の花柳の道に通じてゐて、おまけに追分節をうたはしては、龍宮のラヂオ掛りが、ために海を靜めると、いふほどの名人。

第四には、アドミラル、トーゴー。このキッドは當年二十と一才で、アメリカ産れで日本へくるのは今度がはじめて、日本語を話させると、赤ん坊が、とろゝ芋をたべたやうに、だらだらだが、英語をしやべらしては、さすがの、ミツス、コロンビヤ大學も如何ともすることが出來ない。

第五には、かく申すそれがしで、毎日毎晩、ただもう、謹しんで、ミツス、コロンビヤ大學の、美少年式お河童さんと、あぶないほど出てゐるお膝の赤いガーターとを遙拜しながら、ひたすら航海の安全を祈つた。

日本人でありながら、アメリカの水と土とに養はれて育ちあがり、株をつがれた樹のやうな心をもつて、根の國日本をなづかしみ、歸つてくるものは、あたし一人ではなかつた。

この船には、子供と、赤ん坊と、つきくるめて百人足らず乘つてゐたが、みんな向ふでうまれて、あこがれの桃太郎と、かち〱山の國、日本をさして來たのである。

赤ん坊も、子供も、英語を話し、それを連れてゐる親は、叱るにも、あやすにも、日本語をつかつてゐた。

鷄が家鴨の卵をかへした感じはこんなものだらう。向ふの風に染みてゐる子供たちの心は、母親にも、父親にも、よくはわかつてゐなかつたやうである。

『どうだいワシントン！日本へ歸つてからどうするつもりだ。』

『庭のある家へ住んで、金のかゝらぬ女を抱いて、氷に詰めぬ食べ物をたべてゐるつもりだ。』

『まア、それがアメリカにゐたものゝ落ちてくるところよ。なんといつても日本は、まだ空氣と太陽の光線だけは只だからなア！』

『只の空氣と、只の太陽！　有り難い』と細かきのワシントンは感激した。

空氣は天の與へ給ふところだが、人間の都ニウヨークや、シカゴでは、空氣の流通のいゝところは、そのために家賃が高い。惡い空氣のあつまる家に住んでゐると、丁度あの泥水に醉つた、たなごのやうなもので、窓のところへ口を出して、ただ、あつぱ〱とやるばかり。經驗のないものには、その苦みはわからなからうが、ニウヨークあたりにゐると、さういふ家

にほみあはせることがよくきこえ。

太陽は勿論、天に屬してゐるものであるが、人間の國アメリカには、明けても暮れても、その太陽の拜めない家がたくさんある。たゞもう慾の力ばかりで、あんまり高い建物を建るから、太陽の光線をも、その慾の力で遮ぎつて、まつぴるまでも、人工の明りをつけてゐなければならないところがいくらもある。

まつたく、アメリカの大都會の食べ物は、まずくつて食べられたものではない。なにしろ大きな冷藏庫に入れてある肉類なぞは、古いのから先きに市場に賣り出されて、新しい品なぞは、そこらのレストランなぞへ廻つてくるやうなことは先づない。

ニウヨークの或る冷藏庫などには、七年も昔の肉がしまつてあつて、それを賣り出してゐたことがあらはれて、大きな騷動の起つたことがあつた。

「シヤトルの食べ物は、うまかつたらう？」

「あそこへ來てから腹ばかりすいてしまつて、あの大砲の庭のやうなボートハウスステーキを、食べてしまふことが出來たのには驚いたよ」と、ワシントンは感心してゐる。

「大都會の食べ物は、身になるよりも瓦斯になつてしまふから、私はすつかりふくらんでしまつて、食べたものがまるで役にたたないんだ。日本へ行つて見ろ！どうしてかう、すつぽり、お腹にいも食べられたものかと、自分たちから不思議に思ふよ。そのかはり、たれることもたれるがね。」と、あたしは先年日本へ來たときの經驗を語つた。

繪かきのワシントンは、金のかゝらぬ女を抱くといふことをいつたが、女といふものは、どんな、すべたや、おたまじやくしのやうな女でも、抱いたからには金のかゝらぬといふためしは、あたしの今日までの生涯には、たゞの一度もないことだつた。

只のやうに見せかけて默つて抱かれる女がかへつて、あとでは恐ろしく高いものにつくので、女房は只のやうであるが、あとでは命とつりがへの厄介ものになつてしまうそのことは、アメリカも日本もかはつたことはあるまい。

「尤もねェ、ワシントンよ。おまへのやうに持參金のお嫁さんが待つてゐるといふ身分の人には、金のかゝらぬ女といふことも考へられるわけだがね。日本には、おまへのやうな男を金で買ふ女もあると見えるねえ。」

「日本は、まだ〳〵男の國さ。」と、ワシントン桃の毛のやうなひげをひねる。

『なんですッて！』と、あちらの方にゐた、ミッス、コロンヒヤ大學がきゝとがめてこちらを向いた。ただでさへつるし上つてゐる目が、ます〳〵つるし上つてゐた。

『この船が百八十度を越すとねエ』と、マダム、マルボチヤは『男と女の置位がひつくりかへるのですとさァ』と、しとやかにうまいことをいふ。

『置位がひつくりかへりましても、船がひつくりかへらなければ、えへゝゝゝ、奥さん、あの郵便物は安泰で』と、ミストルミチアキ、あたまの上へ手をのせた。

『………』アドミラル、トーゴーには、この話はさつぱりわかつた様子もなかつた。

庭のある家は、成る程、大都會で、アパートメントの暮しをしてゐるものには夢にも見られぬことだ。

ニウヨークあたりでは、郊外の家でさへ庭のあるのはめつたにない。あれば大てい古い家で、とりこはされる日が迫つてゐるのばかりである。

シヤトルに滞在してゐたあひだの一週間は、あちらへぶらぶら、こちらへぶら〳〵、なにしろこゝが、あたしにとつては第二の故郷だから、こゝへくると、もう自分の家へ帰つたやうな氣がする。

『ニウヨークは、ばかに家賃が高いといふのは本當かい。』と、組さんといふ舊友の一人がきいた。

『その話よ。このあひだも大北日報の太郎作が、そのことをきくからね。あの太郎作の住んでゐるベーコンヒルの家ぐらゐなのが、もしもニウヨークのまんなかにあるとしたら、その家賃は一年に五千弗がところは請け合ひだと、かう返事したわけさ。』

『一年に五千弗！』と、組さんは目をまるくして、『あの、太郎作の家ぐらゐなのが東京のまんなかにあつたら、いくらぐらいな家賃だらう』と、かうきいた。

『さあ、間のかずをかぞへれば、あたしの牛込の家の方が、あれよりは多いけれど、一年に三百と六十圓。アメリカの金に直すと、たつた百八十弗しか拂つてゐないよ』と、あたしは答へた。

『ニウヨークで一年に五千弗の家が、牛込では百八十弗で住めるかねエ』と、組さん、すつかり腕ぐみをした。

『牛込では百八十弗で得られるものが、ニウヨークでは五千弗もするのさ。』

『して見ると、牛込の人は百八十弗で、ニウヨークの人の五千

ゐかところの生活をしてゐるのだねエ』

『つまりは、高い生活を、安くしてゐるわけなのさ。』

『安い生活を高くするニウヨークはつまらないところだねエ』

『それだけ牛込の人は自然の恩寵を蒙つてゐるわけだ。』

『それだけニウヨークのやつは、人間として、もがいてゐるんだな』

『總さんや、全くさうだよ。自然に近く住めば住むほど、人間は安く暮せる。』

『自然に遠ざかれば遠ざかるほど、金の力で行かなければならないんだな。』

『金の力で行けばゆく程、エデンの園を追はれるわけだ。』

『そのエデンの園を金の力で築かうとしてゐるのがニウヨークじやないか。』

『そりや、駄目だねエ』

『駄目かなア』

二人は、自然に近いシヤトルの郊外の道に立つて、樹にかこまれてゐる家々の、のどかなさまを眺めた。

船が横濱の港外へ來ると、稅關の官吏が出張して、船客の手荷物をしらべはじめた。

あたしはもう上陸の仕度で、例のハイヤァの鞄をおいて、しらべの濟んだ手荷物を始末してゐると、

『なにか御材料の御感想は』と、横から聲をかけた人があつた。出された名刺を貰つて見ると、どこそこの通信員、なにがしさんだ。

『こん度は海が荒れましてねェ、アリューシャン群島のあひだを通つて、ベーリング海へ、はいるところで、海が一日甲板を洗ひつゞけました。それから、カムチャツカ沖では低氣壓に襲はれまして、船は夜通し南の方へ逃げました。』

『近頃アメリカの景氣はどうですか。』

『まさに地上の天國が出來さうな工合ですな。そのかはり人間は飛ぶやうなせはしい思ひをしてゐます。』

『アメリカから近頃の日本を見ると、どう見えますかなア』

『銀座の舗で、盛りそばを、靑い筋入りのプレートへ入れて出すといふことを聞いて、あたしたちは憤慨しました。日本は萬事が西洋の眞似でないと、夜も日も明けないのだから、今に亡びる日がくるだらうと、西洋かぶれのして行く日本を遠く眺めて、あたしたちは、苦しく慨嘆したものでした。しかしねエ！』

と、あたしは言葉尻を濁した。

太平洋を行つたり來たり何度もすると、日本とアメリカのあ

ひだの距離がなくなつて、遂ひ隣國といふ氣がする。それだのにアメリカと日本は、何から何まで、あんまり違ひすぎる。これではやはり不自然だ。

これはどうしても、自然に兩方から融合しあつて、あきり違ひのないところまで、行くべきものだらう。今のところでは、アメリカの方が、金があるのだから、貧乏國の日本は、何から何までアメリカに壓されて、向ふの眞似ばかりしてしまうのは無理もないことである。

『考へ直して見ると、銀座の藪で、盛りをプレートへ入れて出す。それもいゝではありませんか。』

お孃さまは髮の毛をちゞらして、奥さまは西洋の女優のやうな地獄眉毛をおひきになるし。幅飛びの名人や、馳ッこの天才が、女學校から飛びだして、世界をあつといはせる今日の日本だ。

『さうでないと、日本は世界とともに進むことが出來なくなるのぢやありますまいか。』

『いやどうも有り難う』とその人は立ち去つた。

十一月の十二日の午後の三時に、あたしの足は再び日本の地を踏んでその日の暮れ方に、また東京の人となつた。

電車の窓から見渡す宵の東京は、以前の姿はなかつた。重なつてゐたものは石一つない、燒けずにゐたものは草一つないといはれた、あの大災難のあとで出來た東京は、全く、生地の都だつた。土の上には一本の樹木も見あたらず、低くならんだ家はみな、白ら木のまゝで、西洋の赤や青やのペンキ塗りの街を見馴れたあたしには、なんだかまた、裸にかへつた昔の江戸とやらを、見せられるやうな氣がした

『だが日本は昔から生地の國なんだ。』とあたしは、人力で飯田町を通りながら考へた。

生地の家に、生地の人情に、生地の義理。有り難い國ではないか。

もし、この町を赤や青や黄色やのペンキで塗りたくつたらどうならう。そこに住む女や子供は、西洋のやうに、色の濃い、ぱつとしたものを着るだらう。さうすると、食べ物も脂ッこくなつて來て、戀愛もいけすかないキッスに變り、義理はこつてりとした微笑にかはることだらう。

『だが、遂には日本も、さうなるかも知れない。』寒くなつて來た、日がかげつたらしい。

—了—

バルザツクの巨きい味と寫實味

山田珠樹

バルザツクを褒める言葉は多くあるが、そのうちに最も屢々眼につくもので、私が最もいゝと思ふ言葉は、『偉大なる作家(グラン・テクリヴアン)』と云ふ言葉と『無缺な天才(ジエニ・コンプレ)』と云ふ言葉の二つである。自分はこの二つの言葉が如何にもよくバルザツクの特長を出してゐるものと思ふ。兎角人を褒める時には、誇張し過ぎるものである。然るにこの二つの言葉はバルザツクの褒むべきところを正しく褒めてゐるといふ氣がする。自分はバルザツクが大好である。しかしバルザツクには厭な點もある。この二つの言葉はバルザツクの厭な點に觸れないで、わたしのいゝと思ふ點をよく表はし、同時にそのいゝ點が普通以上、最上級のものであることをよく表はしてゐるものと思ふ。そこで自分は今この二つの評言の說明役を務めて見たい。

『偉大なる作家(グラン・テクリヴアン)』と云ふ言葉は、勿論藝術作家として最上級のものであるといふことを示してゐるが、それ以上に、この人の書くものにはどこか巨きいところがあり、この人の作品全部がなにか巨きい感を與へると云ふ意味を多分に含んでゐる。日常の會話に使ふ言葉で云へば、――バルザツクは大きい――と云ふことである。『無缺の天才(ジエニ・コンプレ)』と云ふ言葉は、『無缺』だなぞといふ拙い譯語を見れば判からないが、直譯すれば『滿員の天才』である。勿論この言葉にはバルザツクの人物なり作品なりに天才の氣あることを示してゐるが、それよりも、充ち足りる感のあることを表はしてゐる。――バルザツクは滿員だ――とは日本の會話では云はない。日本やアメリカの滿員電車を見てゐる人が、この言葉をきいた時の想像は少し當らないが、巴里でオートブスに乘らうとしてセ・コンプレ!(滿員です)と斷られた時に、感ずる滿員の感を思ひ起こせる人は、この言葉をきいて正當に了解が出來やう。ハミ出てゐるのでなく、充ち足りてゐるのである。要するに難かしいことを云はなければ、先づこの二つの評言共に――巨きい――と云ふ言葉で簡單に云ひ表はしてしまふことが出來るものと思ふ。この巨きいと云ふ感が、バ

ルザツクを嘆賞する時に我々の心に起る心持のうちの主なるものであることは否めない。ところで、この巨きな感は徒らに高い山を見て巨きいと感じた時とは違ふ。ある幅廣い厚ぼつたいものを連想さす巨きさである。寒い晩に幅廣い毛布にしつかり包まれた時の感、綿の充分入つた搔卷に肩まですつかり包まれた時の感、子供が親爺に飛びついた時の感じである。この時の巨きい感にはある充ち足りた感が入つてゐる。

バルザツクの小説を讀んで特に感ずることは、バルザツクは我々の精神生活を形成する各種の心の働をなんでも知つてゐるといふ點である。ことに我々が特に注意して内省して見るべき、價値ある心の働は悉くバルザツクの鋭い觀察の對象となつてゐる。この凡てに及んでゐるといふこと、即ち廣いと云ふことがバルザツクにある偉大さを與へる。ある豐富な巨きな感を與へる。ある一つの方面に限られたものには名人の名は與へられるが、巨きいと云ふ評はし難い。バルザツクはこの點で及第者の第一席である。

然もその心の働の描寫法によつて又ある巨きい感が與へられる。バルザツクの描寫法は普通に寫實的といふけれども、實際は普通に云ふ寫實とは少し違ふ。普通に寫實的といふのは、フローベルのボバリー夫人或はフロマンタンのドミニツクに用ひられた如き手法を云ふ。バルザツクのは、それと少し異り、自然を自然のまゝで寫してゐない。自然の大きさよりも擴大して描寫する。恰かも擴大鏡を透して世の中を見せるやうなものである。こゝにある偉大さがある。しかしその偉大さは子供だましの蟲眼鏡により擴大鏡によるものではない。自然を故意に擴大した誇張の痕は少しも見えない。學者の擴大鏡による眞面目さを保つてゐる擴大である。こゝに他人の追從を許さぬバルザツクの天才の表れがある。

この天才といふことを最も明らかにするものはバルザツクの想像力である。バルザツクの想像の力は實に天才的想像力である。その想像のうちで最も深い感を我々に與へ、我々に巨きいと感じさせることは、バルザツクが一見分離不統一に見えるこの人間世界の現象に、絶えず或る連絡を見つけ、これを一つの組織あるものに組み立てゝゐることである。バルザツクは、人生は多くの力の集合的産物であつて、その各種の力は互に結合し依賴し反動し合ふものと考へる。故にこの人生を忠實に描寫しやうと心掛けるものが、若しその一つの力を描いて他の力との交渉を描かなかつたならば、人生を不完全に描いたものと云はなければならないと考へてゐた。さればバルサツクは一の魂の運命を描く場合に、必らずこの魂の運命をいろ〳〵と形を

榮へて行くその階級の遠さをよく描き出して來る。そしてその各々を中心としたある廣い世界をそこに描き出して來る。この全部を見渡しうる、全體を想像しうると云ふ事が既にバルザックの一つの巨きな點であるのに、バルザックは更にこの廣い全體の間に脈絡を捉んで來るのに長じてゐたのであるから、愈々バルザックは巨きく見える。

バルザックが元來滑稽に近い位の强度の統一癖を持つてゐたことは事實である。かの『人生の芝居』と命名したその小說全集に、ある組織を立てゝゐるなぞはそのよき例である。ところでこの小說集に立てた組織を以て直ちにバルザックが人生に加へた組織とし、こゝにバルザックの偉大さを見出さんとする人もある。然しこの組織はむしろ癖であつて、バルザックの興味或は稚氣でこそあれ、決してバルザックの偉大を證することにはならない。更に又バルザックを巨きいと見せる、その人生の組織は決して形而上學者の立てた組織でもない。バルザックの形而上學は笑ふべきものである。バルザックが理論で組み立てた形而上學はこゝでは問題にしない。こゝに云ふバルザックの人生組織は、バルザックの藝術心が感じ、表現したもので、驚嘆すべきものである。人生諸現像相互間のつながりの相のまゝ、これがこゝに云ふバルザックの人生の組織である。この組織をバルザックが明に意識してゐたかどうかは別として、我々讀者はこの人生組織を感得しうるのである。この組織を想像しえたバルザックは偉大だと思ふ。この組織の性質、感得法、表現法から考へて、このバルザックの巨きな感は藝術家としての巨きい感であると云ふことが出來る。

バルザックを目して偉大なる風俗小說家といふ。若しこの風俗小說といふ言葉を歷史小說と同意義に解して、バルザックの秀れた十九世紀初頭のフランス社會の描寫を以つて、バルザックの巨きさを云はうとしたら、間違ひだと思ふ。いかにもバルザックの小說はその時代を知るに又なき物であり、その時代を出す手腕で一寸他に及ぶものがないのも事實である。然して時代を出すと云ふことは小說家が好んでするところであり、又過去を追慕する人間の情から、これが藝術觀賞の一つの要素にもなることも明である。然しそれはバルザックに對して感ずる偉大の感と合はない。この事からでは偉大と云ふ感は起らない。バルザックの風俗小說が偉大の感を與へるのは、その時代の俤を表はしてゐるが故ではない。その小說集の總稱の示すが如く、『人間の芝居』を表はしてゐるからである。人間の風俗を表はしてゐるからである。バルザック自身はこの小說の一部に『十九世紀に於ける風俗研究』と云ふ別名を與へて、自らその

範圍を限定してゐるが、事實はそんな限定のない廣い人間の風俗が出てゐる。時代的地方的限定のない人間『生活の情景』が出てゐる。それでバルザツクは巨きいと云はれるのである。

實際を云へば、人間の魂の不變の姿とか、常住の人間の風俗なぞと云ふものは、誰れにも判るものではない。分かつてゐるやうで判からないのが常である。ところが、バルザツクの作品を讀むと、これが人間の魂の不變の姿であると云ふ氣がする。それが實際に當つてゐるものやら否やは實際は問題にならない。さう思ひこませるところにバルザツクの巨きさがあると云はなければならない。

この點からして、バルザツクは人間の魂をよく知つてゐる人だと云ひたくなる。バルザツクが外面的の事物に對する描寫に秀れてゐる外、この人間の魂をよく描いた故に、この人間永世の風俗を描いた感を與へたものではないかしらと思ふ。殊に情熱の世界を描いた故にこの感が深いのではないか。理智の世界は時代と共に變化して行くことが見易い。ところが情熱の世界は變らないやうに見える。バルザツクが偉大な情熱描寫家であるとは明である。フランス劇文學に於てラシーヌは巨きいとされる。それとこのバルザツクの場合とは同じとではないかと思ふ。

しかしこのことを強調するために、バルザツクの得意とする外面的な事物に對する細かい描寫から起る深い享樂を決して忘れてはならない。これも亦比類のないと云ふ點からして、偉大の感が起らないでもない。しかしこれは直接の感でなく、他との比較の後に起ることで、偉大とは直接の干係のないある享樂であらうと思ふ。

バルザツクに對して偉大の感を抱く最も直接な原因、バルザツク入門者をしてバルザツクを崇拜せしめる第一の原因は、バルザツクが偉大な性格の所有者を小說の人物とすることであらう。その偉大は人間として偉大なのである。凡ての規範を超越して、傍から批判したくなく、その性格の强さ大きさに頭から打たれてしまう人物を描き出すことである。愛の權化のゴリオ、性慾の權化のユロ、利己心の權化のグランデ、更に神と惡魔との權化であるヴオトラン、なぞはその最も著しきもので、ドストエウスキーの諸人物なぞと共に近代小說の描いたのに拘らず既に古典的のものとなつてゐる。

これらの性格が偉大なる故にバルザツクが偉大であるといふばかりではない。これらの人物が決して異常な人物と見られず、恐ろしい然も我々に近い、たゞ偉いと思ふしかし我々もなるかも知れないと思ふ、人間らしい性格と讀者に考へさす點にもバルザツクの偉大さが感じられると思ふ。しかしこれは第二

文の反省的の感心であつて、直接にはこの人物に小說で接した時に直ちにある偉大な感をうける力が主である。

斯くの如くバルザックの作品に接すると、巨きいと思はせるものが必らず出てゐる。この事實の根本の原因はなにかといふ事が考へられる。自分はこれはバルザック自身の性格がその作品に出てゐる故と思ふ。云ひ換へればバルザックの性格が巨きかつた故と自分は思ふ。バルザックの性格が偉らいか偉らくないか倫理的批判は別問題として、巨きいと云ふことについては異論を差しはさむものはあるまいと思ふ。このことはその傳記を見れば明に認められるが、その傳記をこゝに詳述する暇はない。今この性格を表はすものを、簡單にバルザックの考のうちから探がして來るなら、バルザックの意志の哲學と愛の倫理である。意志の哲學とは人間の力の絕對的勢力を認める信念である。簡單に云へば、自分の考を飽くまで押して行くことである。勢力主義である。バルザックの生涯は恐ろしい程この勢力主義を發揚したものである。一刻の無駄もない、張り詰めた生涯である。その勞作、研鑽、熱愛と、能くあんなに續くと思ふ行爲の休みなき連續である。この強い努力主義は自然に小說にも出る。それがいろ〳〵と形をとつて、いつも巨きいと云ふ感を讀者に與へるのである。愛の倫理とは愛を倫理的に絕對のものなりとするものであつて、あらゆる愛は絕對に、あらゆる愛は行爲の上に立ち、他のあらゆる行爲を捧げて可なりとする考である。その生涯の戀史を見れば、これはバルザックが實際に行つてゐたものであることが判る。この考は小說のうちにそのまゝ表れて、各種の愛情の力強き描寫となる。更に描寫そのものに對するバルザックの愛着、ことに作中の人物に對するバルザックの愛は、その作品を力強きものとさせる。この二つはバルザックの考とは云へ、バルザックが後天的に考へ出したものではない。性格的に出來上つてゐたものを、考の形にしたに過ぎない。さればこの二つの考が小說のうちに表れるのは、バルザックの性格が表れることであつて、從つてその影響も自然であるし、又その表れ方の程度も強い譯である。バルザックの愛の倫理はその勢力主義の一端かも知れない。しかしあらゆる力強きもののうち、特に愛或は愛情の力と云ふものは、なんにも優つて力強いものといふ氣は人間の奧深い性質のうちに常に秘んでゐる。その力をすぐ認め、すぐ感ずるのが人間の性質である。

宗教的興味を有するものは、バルザックの抱いてゐた神秘的宗教に對して偉大を認める。バルザックの神秘的宗教は、例の統一癖から自然現象にある統一を見出したいと云ふ願望に端を發し、これに藝術家としてこの自然に詩趣を與へたいと云ふ要

味に彩られてゐる。ある詩的の美はしい宗教ではあるが、餘りにスエデンボルグの神秘宗教に似てゐる。そしてバルザツクがスエデンボルグに感化されたことは證據がある。自分はこの點で別にバルザツクの巨きい感を與へられない。然し日本人は一體に宗教的興味について冷淡な故かも知れない。歐洲人は宗教から我々日本人が窺ひ知れない或る魅力をうける。從つて歐州の批評家はよくこのバルザツクの神秘宗教から受ける感について事々しく述べてゐる。

更に文學史的にバルザツクを研究をした人は、小說界中興の祖として、バルザツクの偉さを認めるだらう。バルザツク以前には小說は餘技とされ、文藝殿堂は詩と劇とに占められて、小說はその御殿の小使に過ぎなかつたのである、バルザツクが出て初めて詩及劇と共に小說も崇拜すべきものとなり、文藝殿上の一神に出世したのである。更に近代の大小說家フロオベル、ゾラ、トルストイ、ドストエウフスキー等が悉くこのバルザツクに依つて先づ啓發されたものであることを考へる點からも、バルザツクの偉さは考へられる。これらの事はバルザツクの作品からうける巨きい感を裏書するものではある。その感は決して自分一人の氣紛れな感でないことを證明し、その感を一層深くして呉れるものではある。然しバルザツクの作品から直接に起る巨きい感の原因とはならない。

このバルザツクの作品からうける巨きな感は、バルザツクの作品の味として、重大なものであることは言をまたない。ところでこの巨きい感は必らずしも藝術家に限つたものではない。この感は藝術とは無干係らしい武人及びその行績などにも抱きうる。政治家にも抱きうる。科學的著述に對しても抱きうる。經濟學的著述にも抱きうる。故にこの感を基にしたバルザツクに對する評言は、バルザツクの最もよき、褒むべき、感嘆すべき一面を表はしてゐるものではあるが、藝術家としてのバルザツクを褒める言葉、藝術作品としてその小說を褒める言葉としては、最も適當な言葉とは云はれない。

純藝術的な味としてバルザツクに就いて云ふべきは、なんにしてもその寫實味にある。寫實味と云ふ言葉は變な言葉かも知れない。しかし自分は藝術觀賞のある心理過程を表はすに最も適當した言葉だと思つてゐる。或る作品を讀んだり、見たりした時にその作品の作る世界に惹き入れられた時、少しの無理も矛盾も感ぜず、或る心安さを感じながら、然もまさ〱と如實の感を見せられる感がして、そのうちにある大きな享樂が起る。この時の氣持を寫實味といひ、この感を味はして呉れる作品を寫實味のある作品といふ。この時の氣持を分解したらこの

作用は物質の世界との對立といふことが基となり、この對比が融合といふ結果になれば寫實味が出ると云へるかも知れない。この時對比の材料となる物質の世界といふのも決して自分の目のあたりに見るまゝの世界ではないであらう。作品に接した時に直ぐ我々の心にある著者により潤色された世界が出來上る。これと作品の表はす世界との對比をするらしい。故に寫實味のある作家といふのはこの潤色された世界を讀者に強く作らせる藝術的手腕と、更にこの世界と作品中に表はされた世界との融合を巧みに作つて行きうる藝術家の手腕を持つてゐる人のことである。言葉を換へて云へば、自分が寫さうとしてゐる、ある世界がある、この世界をいかに觀察したり想像したりするか又その結果が自分の滿足の行くやうに文字で發表が出來たかどうかで、寫實味があるか否かといふことになるのである。が、これは議論である。分解である。かかる心理過程があるにしても、それは殆んど無意識のうちに行ふものに過ぎない。それでこそ無理のないものが出來るのであらう。讀者も明にそんな批判的な心持では作品に接しない。說明なしにいきなりこの享樂が感ぜられる譯である。自分はこの享樂は小說の感覺に於て特に重要な役目を務めてゐるものであると思ふ。バルザツクはこの味を十二分に味はして呉れる作者である。——バルザツクの人物には自分の知人がいつもゐる——とフランス人はよく云ふが、これがよくこの寫實味の深いことを表はしてゐると思ふ。自分はバルザツクの與へる巨きい感を說明した。續いて更にその寫實味について說明したい。

バルザツクがある地方を舞台にして小說を書く時には、必らすその地方に旅行をして來る。そこでバルザツクの地理的の描寫には嘘がない。かう云つてバルザツクの小說の地理的正確さを云ふものもある。或はバルザツクの小說を讀む時に、その頃の巴里の細圖面を擴げておいて、參照しながら讀むと面白い、と云ふものもある。同じく地理的の正確さを云ふのである。地理がそれほど正確ならば、そのなかに出て來る人物も實際の人間をモデルにしたものではないかと、云ふので態々モデル探しをする人もある。バルザツクの人物は、若しモデル探しをするなら、どれに決めていゝか判らない位モデルと見られる人間は多い譯である。特定の人間でなく、廣い意味の人間を描いてゐるからである。バルザツクの場合には實際このモデル探しは多く失敗に終つてゐる。然し少し穿鑿好きの人なら成る程このモデル探し位はしさうだと思ふ。それほどバルザツクの小說は寫實味が深い。所謂造り話を讀んでゐるのでなく、生きた話をきかされる氣が讀者に湧くのである。然しこ

の人物の場合は失敗に終つてゐるが、地理の場合は鑑賞家は多く成功してゐる。ベデカーを持つて行くよりも、バルザックの小説を持つて行く方が、その土地、ことに都市とよく親まれる譯である。傍に巴里の繪圖面を開いて、バルザックの小説を讀む好事家はきつと失望はしない。多少偏した享樂の方法ではあるが、とにかくその小說鑑賞法は十二分に滿足されるに違ひない。ラブレについて、『ラブレの地理學』と云ふ研究書が出てゐるが、いづれ『バルザックの地理學』と云ふ研究書が出るものと思へる。然しこの實際の地理と小說に描寫された地理との干係が一致してゐるか否かと云ふことは、小說の寫實味と大した關係はない。理論から云へば描寫法さへ寫實的なれば、實際と一致しなくともよい譯である。この地理と寫實味との干係について第一に云ふべきことは、地理的な描寫そのものが、寫實味に干係のあることである。小說の舞臺について、はつきりとした印象を讀者に與へると云ふことは、その小說の寫實味を增すことは論なしと思ふ。その小說を大地に結びつけて、架空のことでなくなすのである。バルザックがことに細かに地理的の描寫をすることは、この土地の考を強く印象することになる。土地の印象が強くなれば、從つてそれを舞臺にする小說も生きたものになる大きな要件を持つことになる。ところがこの土地の描寫をするのに死んだ描寫をすれば、その効果は薄いばでなく、倦怠の感を讀者に起こして、讀者はそれを讀まなくなる。從つて切角の準備は閑却されてしまう。そこで問題は描寫法といふことになる。寫實的の描寫法は云ふのを簡單に云へば、僞でないと思はせるやうな描寫である。人物を描寫する時と地理を描寫する時とは、作者の用意が違ふ。又一面讀者側から云つても心持が違ふ。著者から云へば勿論モデルを捉へる時もあるが、それよりも自分の心のなかの働を熟視してそれを描寫するのが、人物描寫の普通の場合である。寫實的の傾向のある作者なれば、自分以外を推測して書くと云ふことは、恐ろしくてなし得ない。自分の心持として是認出來るものであつて、初めて描寫しうるのであらう。讀者としても、その小說に寫實味を感ずるや否やは、人物については先づ自分に就いて描寫が妥當なりや否やを判斷するものであらう、この場合に云ふ自分とは、小說の力により潤色された自己であることは前に云つた如くである。ところが地理の場合は云ふまでもなく外の問題である。外の問題になると之をある特定した場所に引きつけ度くなる。外國の小說を讀む時に、この地理的環境をはつきり浮び出されない恨のあるのはこの故である。人物だとこの特定物に引きつけ憎いが、地理だとその仕事は容易に出來る。ことに某

市とかT地方とか書くことは、寫實的の効果を重んずる作者の書かないところだし、讀者も某市、T地方では、この方面からの寫實的興味は初めから期待しない。バルザックは人物の姓名にすら非常な苦心をして、姓名から或る寫實的な印象を出さうとさへしてゐるのであるから、もとよりT市、某地方とは書かない。必らず實際の町の名を擧げる。實際の町の名を擧げられると、讀者の心にはどうしても如實の町の印象が強く起つて、著作がこれに特別の潤色を施こさうとしても無駄である。從つてバルザックの地理的描寫の場合は寫實味と云ふよりも、如實と云ふことになる。實際バルザックは地理的描寫ではこの點をよく知つてゐて、如實より寫實味を落してゐるのである。

この地理的描寫に似て、バルザックが更に力を入れてゐるものは、家及び家具についてである。地理的描寫に依つて限定した小説の舞臺を更にこの描寫により愈々限定して行くのである。限定すればその空漠とした性質は段々となくなつて、寫實味は增して來る。家とか家具と云ふものは小説の運びには干係がないもののやうである。然し翻つて我々の生活を考へて來ると、かなり大きく影響を及ぼしてゐるものであることが感ぜられる。さうすれば生活を寫す、寫實小説にはこの描寫が必要な譯である。この家及び家具により愈々明かな小説の舞臺が我々の心に浮んで來る。さうすればこの描寫が小説に於いて寫實味を起す大切なものの一つと云へる。更に家とか家具とか云ふものの描寫は寫實味を深める爲めに考へられる許りでなく、更にその描寫そのものが寫實味の深いものではないかと思はれる。これは必らずしも文藝のみに限つたことではないやうな氣がする。繪畫などに於ても心を主として描いたものより、物を主として描いたものが寫實味が深いのではなからうか。靜物を描いたものの方が寫實味が深いのではなからうか。勿論繪畫は文字とは違ふから寫實味と云ふ點からだけでは論ぜられないが、若し寫實味と云ふことを中心に考へれば、この議論は成り立つと思ふ。この點から云へば、死物を生かして描寫する、云ひ換へれば藝術的に描寫すると云ふ點に面白味があり、その面白味は寫實味ではないか。著者により或は藝術により潤色された死物と、實際に出來上つた作品との對比に興味があるのではないか。その寫實味は魂よりも物の場合に、生物よりも死物の場合に多いのではないか。いづれの場合にも對比がよりよくし易いからではないか。バルザック自身が家具及家に對して特に興味を持つてゐたことは傳記を讀んだものは知つてゐる。從つてその敍述は義務的の描寫でなく、家及家具の興味及び力と云ふものについて實際の感を述べ、その外面的な描寫も亦細かな觀察

に基いてゐる。この事實は寫實味とは干渉なく、家及家具そのものが持つてゐる興味と云ふ點からして、その描寫を興味あるものにする。寫實味と云ふ點から云へば、力強い細い描寫だけに、その印象が深く、從つて準備としても亦その描寫そのものとしても、寫實味が多いと云ふ結果になつてゐる。

同じことがバルザツクの衣裳の描寫についても云へる。洋裝については深い經驗なく、和裝はすたれ氣味のため、衣裳について比較的無關心の態度をとる癖のついてゐる現代の日本人、ことに衣裳などの趣味を持ちうる餘裕のなかつたものが多い現代の日本文士は、明治時代の小說家が屢々力をこめた衣裳の描寫について餘り興味を感ぜず、これを閑過し去るか或は寧ろ低級な藝術より持つてゐなかつた證據とさへし勝ちである。然し寫實味を主として考へればこの衣裳の描寫といふことは決して輕々しくは見られない。我々の生活を衣裳を除いて考へることは出來ない。我々の日常生活に衣裳の趣味が絕えず考へられることは普通で、ただこの趣味に煩らはせられないやうにする習慣を日本人はつけてゐるのである。我々の生活に衣裳は必らずつき、日常生活に實際には衣裳の趣味といふものが絕へず頭に入つて來るならば、小說の舞臺なり人物を限定して行くに、明にして行くに衣裳の描寫は當然必要ではないか。舞臺より人物を限定すると云ふことは、その對比の材料をいよ〳〵多くすることである。對比の材料の多少は、寫實味の深淺に干係がある材料が少くとも、味は濃くなりうる。然し材料の多いと云ふことは又味を濃くする原因ともなりうる。議論は兎に角としても、バルザツクを讀む時は、實際この衣裳の描寫により、寫實味を多分に味はせられるのである。その寫實味は、家や家具と同じく寫實味を起す準備として云ふばかりでなく、この描寫そのものに、同じく、物であるといふ理由により、寫實味が少からず湧く。

曩きに、バルザツクの小說は巨きさと云ふ感から云へば、單に歷史小說と見ては間違ひ、だと云つた。然し寫實味と云ふ點から云へば、歷史小說として見て云ふことが出來る。或る時代を出すと云ふことである。バルザツクは人間の風俗を描いてゐるのであることは云ふまでもないが、寫實小說家としてバルザツクは、決してこれを抽象的な人間の風俗として描いてゐない。永世の人間の風俗に、ある時代を假し、これを時代的に限定してゐる。そこでたゞ巨きいと云ふ感ばかりでなく、寫實味といふものが出て來る、歷史的記述といふ意味が廣くなるが、之を狹く解釋して、たゞ時代の俤を出したと云ふことにして見ると、これと寫實味との干係はいろ〳〵とある。老人に云はせれば――吾々の時代はあの通りだつたよ――と云ふ。歷史家は――

歷史家バルザック——と云ふ特別な研究を出してゐる。即ち實際の姿が出てゐる、如實であると云ふことである。これと寫實味との干係は勿論ある。然し我々外國人、ことに歷史家でなく、自分にその頃の回想もないものは、この對比は出來ない。我々は先づ第一に時代的に限定して現れると云ふことに寫實味を作る材料をうる。第二に時代の俤を出したといふことは、小說の舞台を描くして現れたと云ふことに考へ、我々の凡ての行動が自己の行動でなく、所謂社會との協同作業であると云ふ事實の觀察に照らして、この描寫があると云ふことに寫實味を見出す。この第二の社會的の協同作業として人の行爲を描くと云ふことはバルザックの大きな仕事の一である。この事は嚮きに人生の組織をバルザックが見出したと云ふ點で述べておいた。更にこの社會を描く同じことが寫實味の原因となるのである。と云ふことは、ことに近代人にとつて寫實味を起こさせる原因となる。近代人の意識には個人の意識よりも社會の意識の方が強い。實際にさうなつてゐるか否かはこゝで問題でない。我々はたとひ少くとも考へとして社會の意識にある重大さを持たす習慣がついて來た。この時にバルザックが個人と共に社會を描くことに力を入れてゐることは、自分の考と對比して、ある寫實味の濃いものを感ぜしめられる。

この歷史的敍述の一として、バルザックは作中の人物を[illegible]てその場にいきなり出して、そのまゝ放つておくと云ふことをしない。必らずその傳記を書いてゐる。作中の人物の前半生を書かないといふことは小說の古い形とされて、近代小說家の採らない所と一般に考へられてゐる。新時代の小說家は人物のある時期についてのみ書くのが本領とされてゐる。然しこれは日本の人が常にする早合點の一つである。新時代の小說の傾向とこの傳記體形式とは干係のないことである。この形式が否定されるのは小說の本質的傾向の變化には關係なく、たゞ讀者の趣味が變つて來たといふ附隨的な原因に基くものである。されば新傾向の小說家にして猶この傳記體によるものが少くない。これはこれと寫實味と關係が深いからである。ことに古き時代の小說と目すべき寫實派の小說にとつては必要のものであつた。寫實味を出すために、作中の人物を具體的の人物とする爲めには、傳記的敍述は必要のものである。その人物を小說中の人物として樂なと云ふことが目的でなく、實際の人として、自分の化身として感ぜしめるのが目的であるからである。TなりSなり人間がたゞそこにゐて、その斷片的行爲なり、心理過程なりが出てゐればよいのではない。特定の個人が具體的に出てゐることを目的としてゐる。そのためには傳記的記述と云ふことが必要[illegible]

なる譯である。ここにも前同樣に、寫實味を起す對比の材料としても考へられるし、又傳記の描寫そのものにも寫實味がある。

斯くの如き以上數項の外的事物の描寫と云ふことがバルザックの作品に寫實味を充分に含ませる原因になつてゐることは確かである。しかしバルザックの魂の動き方の描寫にも同じく濃い寫實味が湧くのである。それといふのも、今云つた外的事物の描寫がこの魂の動きの寫實味を起こす原因となつてくれるのである。即ち外的事物とこの魂の働きとの間に對比を無意識に試みて、その調和的な融合にある滿足を感じさせられるのである。外的事物の描寫から心のうちに起る感と魂の働を描いたところから起る心の働とが少しも矛盾をしないばかりか、兩者相連絡のあることが深く感じられるのである。更に今一段進んで云へばバルザックの魂の動き方の見方が眞なる故に寫實味を感ずるとも云へる。即ちバルザックの魂の見方は、多數の魂が同じ樣に働く所を見ることが出來、又多數のものが同感しうる見方なのである。その爲めにその叙述には常に切實の感が深い譯である。

斯くの如く種々の原因から寫實味は起る。要するにこれまで述べたものは取り扱ふものの選擇のしかた、及びその取り扱ひ方である。材料と觀察法にある原因を述べた譯である。が今更に考へて見ると、材料の如何に拘らず、その觀察法の如何に拘らず、その小說に寫實味を深くする原因がありさうに思ふ。如何なる材料、觀察法にも共通するものがありはしないかと思ふ。

それはバルザックの叙寫法にあると思ふ。バルザックの描寫法のうちに寫實味を起す原因があるので、ここで先づ大體にすぐ寫實味が讀者に起るのではないかと思ふ。この寫實味を起すバルザックの描寫法は二つ見つけることが出來る。

バルザックは客觀的な描寫法をとつてゐる。私見を交へることが少ないのである。勿論バルザックの私見で小說が出來上つてゐるのであるし、又バルザックの私意を意見として御談義に及んでゐる箇所もある。然しバルザックはこれらの場合にも私見の私と云ふ文字だけはかくしてしまつてゐる。これはバルザックがロマン派時代の人であり乍ら、ユーゴーと同時代の人でありながら、常にこれらと離されて寫實派に入れられる大きな原因である。ロマン派の特長である、『私』『自個』と云ふものが出てゐないからである。バルザックの小說には自傳體小說はなく、又バルザック傳記作者の材料となるべきものが極めて少ない。僅かにルイ・ランベール及びボオ・ド・シヤグランその他に多少の材料があると云ふに過ぎない。この事實はバルザックの客觀的描寫法と干係が深いものと思へる。バルザックが社會を描く

のが主であつて、個人を描くのが主でない、まして自己は描くべからざるものとした、結果として客觀的描寫法になつたとも云へる。客觀的描寫をすることが出來惜いから、自己は描かなかつたとも云へる。バルザツクがたゞ一途に藝術家肌の男とは見へず、絶へず大きな考のもとに動かうとしゐる男なのだから、兩方とも考へられる。

バルザツクは感覺的の描寫法を絶へずとつてゐる。一方には感覺を刺激することを目的とした描寫法をとつてゐる。これは餘り多くはない。この近代の新描寫法はこゝで先づ試みられてゐるといふ位の程度にすぎない。それよりも將來の感覺的描寫法である、感覺を情緒より餘計に叙寫すると云ふ手法はバルザツクが常に用ひてゐるところである。バルザツクは情緒の描寫は非常に多いし、又秀れてゐる。然しその描寫に當つて常に情緒そのものの趣を、胸の思を縷々と流出してこない。この情緒が感覺に現れた方面の描寫をする。外的事物の描寫に至つては、それからうける情緒的印象は多く語らない。感覺的印象を語る。目で見たところを語るのである。情趣的印象を語る場合には具體的の事實により、或は具體の比喩により現はすのを主としてゐる。感覺と寫實味との干係は誠に明らかである。感覺が最も、或はもつと極端に云へば、感覺だけが我々に明らかたのだ、といふ事實だけを考へても兩者の干係は判る。

斯くの如く、客觀的描寫法、感覺的描寫法の二つがあるので、バルザツクの作品に寫實味をそこら一面に漂はすとになるのだ思ふ。そこに外面的事物の描寫、内面的事象の觀察法などがあつて、この寫實味を細かに又嚴密にして行くものと思はれる。

バルザツクの小説の讀者は初めは先づその筋に面白味を見出すのが普通である。次いでその巨きさに引かれて、崇拜の心から讀むのが第二段である。この邊までは先づ素人と云ふべきであらう。更に進むと寫實味を玩味するやうになる。先づこの邊が玄人と云ふべきである。更に年でもとれば、そのうちの名言名句に同感して、バルザツクの考に面白さを見出すやうになる。かうなると、バルザツクの甘い處は味ひ盡くして、まだ未練があつて骨をしやぶつてゐる形である。小説觀賞の本領からは外れてゐる。

バルザツクの巨きい味及び寫實味といふこの二つの味はフランス文學の傳統的な味の一つであると思ふ。フランス文學の傳統はゴーロアの精神とラテンの精神とである。そのゴーロアの精神の味と云ふもののうちでこの巨きい味と寫實味といふものが大事なものではなからうかと思れる。バルザツクの味とラブレの味と非常に似てゐるのも、この二つの味を共有してゐる故であると考るし、二人共にゴーロア精神の代表者と考られてゐるのだから、この二つの味は確かにゴーロア精神の味だと思ふ。

食はずに生きる法

大泉黒石

一

「明日までに、授業料御納附なきときは、貴殿御子息の除名も、止むを得ざることゝ御承知願度候。」と、先生が催促するから、はい。はい。畏まりましたと言へば「指定の期日までに、所得税納入これなきに於ては、貴家財産の競賣處分に出づ可く、念のために通告候也。」と、役人が仰有る。はい。はい。それも合點だが、間におはなかつたら、茶碗でも皿でも遠慮たく持つていらつしやい。」「ねえ。もし。旦那。胃病の大將！先の短い先生！くれ〴〵も言ふて置きますが、今日一ぱいに、あなたの保險料を藏かないと、掛金はお流れですよ。ようございますか？あなたが亡くなられても、あなたの奥さんが御貰ひなさる二度月の旦那の手には、鐚一文だつて入りませんよ。」と集金人が脅かすから、何とかするよ。待て〳〵と狼狽へるところへ、ぞろぞろ犬を引つぱつて、巡査の一行が踏み込んで來たかと思ふと、子どもが抱いてる仔犬の耳を取つて釣るし上げるんだ。「これは御宅のだね？鑑札がないから連れて行く。三日以内に畜犬税上納の手續きをしなければ、撲殺します。」と言ふから面喰つてゐると、そこへ來たのが帽子をかぶつて鞄をさげた工夫だ。「こいつは失敗つた。もし。電燈屋さん。今すぐに會社へ金を届けるから、切るのは暫く勘辨してくれませんか？」「いや。お氣の毒ですが、昨日のお約束通り、ともかくも、ちよつと切りませんと、形式が立ちません。料金を支拂ひにお出でなすつたといふことがわかれば、ぢきにまた取附に參ります。」と言ひながら燈を消した眞つ暗がりで、死にかけてゐる老病人が呻き出さうもんなら、醫者へ電話と行くだらう。「牛込の×××番！×××番だよ！どうしたんだい？聞こえないのかい？交換手さん。何だつて？おい。駄目だつて？……今朝ほど警告致しましたにも拘はらず……ふん……未だに料金の御支拂がございませんので……ふん。ふん……規則上つなぐわけに行きませ

せん……と言ふのかい？さうか。弱つたなア。畜生！」だ。電話口から彈き飛ばされた勢ひ、醫者の玄關へころがり込むと。仁術つかひの書生が現はれて言ふに違ひない「さあ。先生はゐらつしやるか、どうかな。ときに大ぶん藥代が滯つてゐるやうだが、どうです。一つ。この際綺麗に片づけて貰へませんか？」「まことに申譯のないことですが、只今ちよつと、ふところ都合が」「わるい面つきでもしやうもんなら、先生は留守と來る。病人は見殺しだ。」「和尚樣に讀經を願ひます。」「納所へ行かつしやい。收入係がゐるわい。南無阿彌陀佛。」「この佛を燒いて下さい。」「火葬料金の受取證を拜見します。」「やれ／＼腹が減つちやつた。」「いらつしやい。あちらで食券のお求めを願ひます。」さつと、こんなものだ。「おい、君。支拂ひたまへ。法の名によつて請求するのだ。規定の料金を出せよ。貴樣は他人の女房の顔を、只で見て逃げるのか？さあ支拂へ。支拂はんのか、コラッ」と、さうなつたら何うだらう？支拂へ！支拂へだ。現代に於て、舌により筆によつて言ひ表はす人間の言葉のなかで最も悲しいのは何だといふなら、この「支拂」ではないかと答へてやる。こいつに肚を刳られる月末も近い今月の十月。台所の長火鉢に凭つて此の響を感じてゐると、煙草屋甚九郎が血迷ふて來た。…………話にだらしがなくて恥かしい。年は相當食つてゐるんだが、呂列のまわらぬ文學の生れつきに、近來めツきり金氣に乏しく、頭の具合が變てこだ。書いてゐる本人も餘り確でないから、讀者、よつぽど用心をしないことには、到るところで桁を飛び出す饒舌。何を言つてゐるんだか、言ふつもりなんだか解らなくなるかも知れないが……ともかくも、やつて來たのが甚九郎だ。東京から目白驛。驛から六丁北は落合町の俺の家までが、文明人の繩張り區域で、一步分け入ると、はや人種が變るけれども、物の相場は、都に負けない草つ原だ。塵芥の入れものでも一つ一圓する當節。人間の入れものが、一圓二十錢の家賃といへば、投げ込まれた中味が塵芥よりも粗末なことは、天理の示すところだ。こんな番地でなければ見られない。棒杭を押し立てたやうな、老大頭る斜めに傾いた湯屋の煙突の眞下に、いつ何時潰されても、さらさら此の世に未練のないトタン葺き赤塗りの三軒長屋がある筈だ。武藏野の路に迷ふて、この長屋の一番はしの家のまへに、彷ひ來る人は氣を確かに持ちまへ。一枚の硝子も嵌つてゐない[illegible]の入口の硝子戸を見たばかりで、膽を潰さずにはゐられまいからな——。「中央公論」「改造」を筆頭に「不同調」や「好きな娘ちやん」に到る凡百の雜誌を列擧して「中央公論」小説二百枚。「改造」論文百枚といふ具合に「不同調」ゴシツプ十枚。

[illegible]
註文依頼の分なり。稿數總計一千有餘枚——と騒々しく半紙に書いて貼り出してあるので、一體何といふ精力絶倫の偉い先生が、こんな破ら家に[illegible]
骨ばかりの障子の外から、中を覗くと、古箪笥に机代用のチャブ臺が財産。一間きりの薄暗ひ六疊だ　新作の阿保陀羅經に孝子美談とか、人を泣かせる雄辯術に、インキの汗點(じみ)は何でとるか?といつたやうな原稿の下書が、腸ばかりの疊の上に、足の踏み場もないほど散亂してゐるほかには、何一つ發見する物がないからだが、その戸口の貼り紙を見ると「近來多忙につき面會希望者は、豫め書面にて時日照會のこと」云々と詠つてあるほど忙しいに拘はらず、十中八九までは留守だらうから、先生は何處で何をしてゐるかと、隣りの下駄の齒入屋に伺ふならば、天井の抜けたソフトを被り、場末の女郎に貰つた紫メリンスの着物に、昆布よりも鹽辛い角帶。白足袋。短艇(ボート)よろしくの草履ばきで、今頃は大てい目白通りの繩暖簾に首を突っ込んで歩いてゐるだらうと答へるに違ひないからだ。これだけでも凡その人物は解る。文壇。世間。知る人ぞ知る。例の雄辯會講談社あたりに、一貫目いくらで埋草でも押賣らなくちゃ行き倒れるHack 仲間に厚顔無學の大將で通つてゐるのが此の先生だ。

戸口の貼り紙[illegible]れもしない[illegible]に、原稿の執筆を[illegible]稿渡期十年に垂んとする月日の手まへ、[illegible]る仲間に、蔑まれて仲に入らうといふ情けない見栄の仕業だ。他國(よそ)の者なら念頭にかけるのも御免だが、これだけ見消化してやる手數を齒まないのも、この埋草屋と俺の産地が、同じ九州の果だから、よろ〱やつて來れば、口の先だけでも故郷の噂をする誼みだ。埋草屋とは俺がつけた。何がし甚九郎と人並に銘を打つだけの柄でない。鯨が晝寝をしてゐるやうな恰好の、大きな齒くさい鼻に、畏れをなして、目も口も片隅に屏息してゐる化ケもの面だ。流し口からヌツと出して

「居ますかね?ふツ。ふツ。ふツ。」

と笑ひやがる。

「何處へ行つたんだい?」

「談語の友に金取りに。」

「呉れたかい?」

「駄目だア。」

と言ひながら、悄々と上り込んで、長火鉢の向ふに、どかりとこき坐つた。

「駄目とは？」
「お金がないと仰有る。」
「またかい？」
「うん。もう諦めた。足を運ぶこと凡そ十六回に及んで、一文もくれないんだ。さうは拙者の根氣もつゞくまいよ。へん。かうなつたら白狀しますぜ。大泉さん。十年近くも交際つてゐながら、たゞの一度も原稿を賣つてやらうか、と曰ひしことなき足下がだ。いゝかい？　どうした物の間違ひか、始めて、あの『毒婦』を談話の友に世話しやうと仰せ出されたときには、實のところ、少し氣味がわるかつたのサ。失禮な申し分だが、あとで一杯奢れの、半金貸せのと言はれやしないか？　內心ビクビクしてゐたら、この始末だ。とは賴母しくない先輩もあつたもんだ。夫子自らは、さう御考へになりませんかい？」
ぷッと甚九郎だ。汗で汚れて靑黴の生えた眞鍮の眼鏡も、すりこけんばかりに、荒々しく鼻を鳴らすのだ。面くらつた。
「それは話が違つてゐる！　談話の友に君を紹介したのは、あの時、君に泣きつかれて困つたからだよ。おい。忘れたのか？」
と俺は怒鳴つた。あの時といふのは、一月あまり前なんだ。東京からの歸途。俺を抱えて目白驛を出やうとすると、目に止つたのが、ベンチに凭れてボカンとした此奴の、蒼ざめた鼻だ。「おい。どうしたい？」と聲を掛けると、俺を見てニヤく笑ひながら「只今ちよつと醉いでをります。」と、物悲しげた返事だから、訊き糺して見ると、かういふ譯だ。甚九郎が御得意先の雄辯會講談社へ、埋草の御用聞きに廻ると、講談俱樂部だか何俱樂部だか忘れたが、お馴染の主任がいふには「ね。甚さん。今度に限り特別の稿料を上げるから、一ツ、高橋お傳に蹴爪を食はせるやうな維新前後の、世に隱れたる毒婦を知つてゐるなら、その女の傳記を五十枚ばかり、出來るだけ面白く書いて寫眞添附の上、大至急持つて來てくれないか？」とあるのだ。夢ではないかと甚九郎。たちまち九天に昇る勢ひで逆上しちまつたが、おツと待つたり。一體全體。そんな毒婦がゐたかしらん？　いやどうも聞いたことがないな？　と、さう氣がつくと、おやおやだ。九天から眞つ逆さまに落こツて、がつかり失望の體。だが、そこはまた甚九郎だ。五十枚といふ紙數の原稿は、埋草屋開業以來の大註文ではあるし、特別に優待すると聞いては、折角の御好意も生憎ながら、と頭を搔いて引つ込んぢや、お金眞加につきるわ。鼻がすたるは。南無矢八幡、やツつけちまへ！と勇ましく引受けて歸つた。かういふ時に働くのが、座右のヨタ智慧だ、着物の代りに講談雜誌で一ぱいの古箪司から、引きずり出した小册子も、近代に於ては知る人少ない三遊亭圓朝口述の小

よ一貫吾百[illegible]中の一[illegible]今吉一[illegible]絵紙ごろの毒婦に誂へ向きだから、名まへを變へたら、紙ノかれる隠れはなからう？大丈夫だ。妙案だ。今年や南瓜の當り年。善は急げと件の小説を五十枚に[redacted]め。「一週こも[redacted]ます。[redacted]る明治稀代の毒婦は釣鐘お松の悪事爆露す。」と筋を打つて、講談社の應接室へ駈けつけると、さつそく目を通した先刻の主任記者だ。お了ひまで讀み切らぬうちに、掌をふるつて驚嘆した「素敵々々！素敵に面白いぜ。こりや全部事實かい？」「事實は事實ですが、僕の創意も加はつて濃厚に潤色されてゐます。出來るだけ面白く書いてくれと仰有いましたからね」「いゝとも！大いに結構だ。さうして見ると、これは君が作つたやうなもんだね？」と感動されて、グラグラゆるぎ出す誠しやかな鯨の鼻だ。べらぼう得意なことがあると、こいつがだん／＼前の方にせり出して、人を突き倒す。「まあ、さうですな。一句一語と雖も、この僕の頭から絞り出されないものはないんですからなア。」と大きな面で、偉さうに見栄を切つたのはよかつたが、たちまちガラリと變つた主任記者の態度だ。手に持つた原稿をポンと投げ遣く卓子のまへに、聯隊長と話をする兵卒よろしく不動の姿勢だ。ピタッと直立して、ありッたけの尊敬を顔に浮べた。「これは／＼飛んだ御無禮をいたしました。どうかお許し下さいと[illegible]ので、[illegible]とは、つい氣がつきませんでした[illegible]こゝで斯うして三遊亭圓朝氏とお月にかゝるのは近來の愉快[redacted]」と言[redacted]ら、甚九郎の手を握つて、よろこばしげに笑つたらう。釣鐘お松より先に、こつちの悪事が露見したんだから、流石の泥棒も蒼くなつたさうだ。動いてゐる鼻が眞つ先に驚いて石のやうに固まると、目が見えなくなつて引つくら返りさうな按排だから堪らない。今は是迄。かうなる上はだ。逃げるに如かず。原稿を引つ拉つて目白驛まで風をくらつてきた先生。ベンチに腰かけ冷汗の方は拭いたが、折角書いた原稿だから、反故にするのも悲しい。いや。實はその特別優待料をもつて、月末の支拂ひに設へる考へだつたので、當が脱れて見ると、講談社のほかに一軒のお得意もない埋草屋だ。振り向ける先がないので、さあ何うしたものかと、首投げの圖に凝つてゐたといふ話だ。話し終ると、いきなり幽霊のやうな手つきで俺の袖に縋つて泣きやがつた。「是非何處かへ賣らなくちや困るんです。三遊亭圓朝を知らない雜誌社があつたら、手を合せて拜みますから、僕を紹介して下さい。ね。大泉さん。この先の「談話の友」は、あなたのお知合ひとか聞いてゐますが、どうでせう。圓朝を知つた、

ゐるやうな風ですか？」と言ふのだ。圓朝ぐらゐ知つてなくちや不自由だらう。雑誌に向くものなら、知つてゐたつて差支へあるまい。「そりやもう何處へでも向くやうに出來てるんです。まあ一寸見て下さい。」と、ふところから取り出した原稿を一枚めくると、小型の寫眞があらはれた。床几の上に坐つた洗ひ髮の女の姿、おぼろ蒼然として消え入りさうな時代物だ。かたはらに「釣師お松十八歳之時寫」とあるから訊いて見れば「これは僕のお祖母さんの、若いときの寫眞です。明治になるまへ、例の有名な上野彦馬に撮つてもらつた、珍らしい家寶ですよ。寫眞がなくちや感心しないといふので、取り敢へず持ち出したんですが、なるほど、かうして見ると、實際お松といふ人物が居つたやうに受取れるから妙だ。講談社の馬の骨も、雑誌記者だけの見識はあつたね。」と感じてやがる。佛壇にでも奉つて置くべき先祖だ。物もあらうに毒婦に仕立てゝ、見世物に晒すやうた、極道の細工まで平氣でやるんだから呆れた。お祖母さんこそ、いゝ面の皮だ。「今に佛罰が當るぜ。」「佛罰よりや、月末が怖いや。人間。食ふに困つたら、何でもしまさあね。」と洒亞々々したもんだ。そんなに困るなら、連れて行かうと言つたが、「談語の友」社は目白驛と俺の家との中程にあつて、社長の岩村泰山といふのが、俺の知合ひなんだ。こやつ。

本來僞造專門の書家で、もつとも御得意の南洲などは篦棒吹く、かけるが、たとへば、蜀山人の短冊一枚八圓するものなら八十錢。鵬齋の七絶一本四圓するものなら五十錢ぐらゐの安値だ。もつぱら贋物で間に合はせる料理屋。待合。女郎屋。廐舍。旅籠屋などの需めに應ずる、商賣の器用な山師なんだが、酒毒のために半身不隨意といふほどの中風病みではないけれども、肝腎の右の手が利かなくなつて、これ或は故人諸名家の怨靈決議の上の祟りか？筆は執れず。遊んでゐては干しあがる始末。尋常の者なら、この際、何か口すぐ仕事はなからうか？と神妙に周旋するところ。山師の魂膽は飽くまで人を食つてゐる。即ち此の際一生安樂にくらせる底の儲け口はないか？といふのだが、それも今どき賣れのいゝ流行物の贋物を拵へて、パツと一當せしめやうか？と、またしても僞造で行くつもりなんだ。が、只今世間の人氣に投じてゐる流行品と言へば、西の大關に、婦人服とラヂオの道具あり、東の旗頭に、トツカピンと大衆文學があるぐらゐのもんだらう？もつとも西洋服の裁ち方や、礦石の鑑別や、昂奮藥の調劑は、岩村泰山が幾ら器用でも、素人の手際だ。あざやかな贋物は望めないから問題にはなるまいが、大衆文學に到つては、それ自體が既にはや文學の贋物と思つたか何うか知らんが、とにかく、こいつなら盲人にも拵へる代物と睨

[illegible]だらうといふ[illegible]であるから、会社に
なつてくれた人の相談を持つて行つたのか、浅草公園名代の寿司屋
「蛇のや」の大人の瓜實顔を眺めて喜んでゐる江戸兒のオヤヂを、どんな按排に、[illegible]介千萬な講談雑誌「談話の友」第一號金四千錢が何より結構で、而も先々月の椿事だ、などと、山師の私事が囁いてゐた日には「蛇姫」の閉店に片がつかないが、つまり、僕は此の雑誌社へ蛇九郎を連れて行つて、岩村奈山に麗爪らしく紹介したわけなんだ。ところが、初對面の口上相済んで用談は「蛇姫」に取り掛ると、「はゝあ。成る程。さうですか？ それが貴君の仰有る通り正直面白ければいゝんですがね。近来屡々さういふ觸れ込みに引つ掛つて、恐ろしいイカ物ばかり掴まされるもんだから、臆病になりましてねェ。」とイカ物師あがりの奈山だ。原稿と作者の鼻を見くらべて、この鼻で物が書けるかと言はぬばかり。面妖の體だ。さすがにムツと來た勢ひもあるだらうが、紹介してくれるなら手を合はせて拜みますと言ふほど、みじめに兵古垂れた奴が、いきなり傲然とフンぞり返つて、鼻の穴から吹き感した御託が實に断うだ「いや。ごもつともですなッ。充分警戒されたがいゝです。素人雑誌記者の貴君などは文壇の消息に通じて居られないから、原稿を一見したゞけでは區別がつかんの

も[illegible]ないか[illegible]の書いた文字は、かういふ臺にキチンと[illegible]中へ[illegible]ないから直ぐ判りますよ。自分ではないけれど、見なくとも判らんい[illegible]の作者には絶對[illegible]にない未成の作家を以て[illegible]が、謂を以て迫られると、また、さうばかりも行かないね。人間。己れを知る者のために死ぬ例もある。トッても素敵だ！こりや全部事實かい？事實は事實だが、僕の創意も加はつて潤色に潤色されてゐるんだよ。さうして見ると、君が作つたも同然。この素張らしい一語一句が、みんな君の頭から絞り出されたのかい？うゝむ。傑作だ。君。これは何うか他所へ遣らずに、僕の友人の雑誌「談話の友」に是非くれたまへ。一枚三圓たらいゝだらう？あそことしては飛び切りの待遇だ――と此の大泉君に手を握つて頼まるれば厭とも言へませんからね。」とは驚いた。相手によつて法を説いたのか何うか知らん。聞いたら乾度ふき出すだらうと思つたら、何の奈山。度膽を抜かれて、そんな譯なら文句なしに戴きます、と、うろたへ乍ら敬意を拂ひかゝつた。もつとも金は月末に拂ふといふ條件だ。厭でもあらうが、言ひ値の三圓に免じて我慢したんだらう？話は決つた。
「わざ〲の御志有り難うございました。これからも宜しく御引立てを願ひます。ところで、もしも心當かりがありましたら、

ついでに書生さんを一人お周旋下さいませんか？創刊號は私と家内と二人で編輯しましたが、馴れない上に忙しくて遣り切れないから、手頃の助手を探してゐるけれども、適當なのが見つからないんです。」と泰山がいふから承知した。東京へ來て分別のつかぬ書生さんや、鑑札のない野良犬に不自由するがものはなからう。この邊の下宿屋といへば落合館だ。四疊半に閉ぢこもつて、支拂の恐怖に感慨無量の口が一つあるから、すぐさまよこしませう、と答へて別れたが、先々月、俺を賴りに風來した田舍の青年だ。文士稼業も、これがなかつたら、少しは人心地になれるだらう。博奕打ちの親分とは違つて、草鞋代を投ずるだけの度胸がないのだ。あなたの子分にして下さいと、玄關に行李をドツとおろされると、毎度のことだが、命を縮めるのだ。それには及ばないと斷るのに窶れてゐるところへ、そのころ矢つ張り、その落合館の冷飯が咽喉を通らない身分の埋草屋甚九郎が、ふら〳〵來合はせて曰く。よろしい。拙者に任せたまへ。拙者大ひに引受けたと、大層な鼻氣を出したので、一體どうするつもりかと思つてゐると、人間は十日や二十日食はなくても死ぬもんぢやないよ。君。安心したまへ。と言ひ渡して置いて、自分の下宿につれて行くと一室に放り込んだ。そこで改めて上京君の運命を天に任せて了つたのだから無責任な奴だ。以來無一文。亭主に追ひ立てを食つてゐる。それも追ひ〳〵紹介するつもりだが、泰山の所謂家內といふのは、滿洲西伯利に迂路ついた昔の俺に言はせると、あの土地の支那人の妾だつた娼妓あがりの豪傑なんだ。この豪傑と下宿屋の油蟲とが編輯する。壽司屋のオヤヂが監督して、山師の泰山が采配を振る雜誌に、鯨の鼻どもが寄つて集つて泥筆をふるつたら、申し分はない。大衆文學も黃金時代の花が咲くだらう、と思ひながら、甚九郎と一諸に門を出たが、それまで漸く持ちこたへてゐたのは、肚に据えかねる一物。此奴の口から出まかせに列べやがつた不埒な出放題が、癪に障ること一應でないのだから、俺の自尊心のためにも、此奴の謹愼のためにも、思ひ切り噴火しなくつちや納まるまい。胸を抑へてゐるので、固めた拳骨の振りまわしに不便を感じて、まご〳〵してゐると、俺の顏いろで悟つたか、但しは豫定の段取りか？たちまち變つた鼻の態度が、どうかといふと、まづ此奴の面上に、嘗て一度も現はれたことのない心中の誠だ。罪を謝する人間の詐らざる色を浮べて帽子を脫ると、思ひがけなくも、手を合はせて、俺を拜みながら、これも此奴の口から嘗て聞いたことのない敬語をつかふのだ。「先生！先生の前で、あんな失禮な嘘をついた私に對して、先生は怒つて居られるでせう。お赦し下さい。衷心お詫び致します。私

の經歴によれば、私のやうな無名作家に、知らない雜誌に原稿を賣りつける場合。紹介者の有無に拘らず、あんな具合ひに頭から脅かさなくちや、取合つてくれません。先刻も實は形勢險惡。こいつは大變と見たので、不都合とは思ひながらも、先生の尊嚴を犯し且つ御迷惑になるやうな啖呵を切つて放つたのが偉効を奏した事實。之を證明しますでせう。奴よりも私の方が役者は一枚上であることもわかりまして、お蔭樣で此月の瀬は何うやら越せて重疊の至り。かういふ惡黨だが眞人間になれる時節もありませうから何卒御見棄なく御指導下さるやうに御願致します。さあ。どうか其の鞄をお寄越し下さい。お宅まで私が持ちますから。」と言ひさま俺の鞄を引つたくつて、サツサと歩き出すのだ。爆發する勢ひも拔けちまつた。手に負へない鼻め。眞人間になつたつもりで俺の氣嫌を取るのかと思つたら、途中で落合館の油蟲に出會つたのだ。「恐縮ですが、ちよつと是を返上します」と持つてゐる鞄を俺に押しつけた。俺のお供をしてゐると見られては、鼻の權威にかゝわるんだらう？油蟲をつらまへて、親分が子分に金をくれるやうな勿體ぶつた口調だ。「いゝところで會つたな。おい。君の下宿へ報せに行かうと思つてたんだ。こないだから心配中の君の就職口。やつと此の先の「談話の友」社。知つてるだらう？ あの看板の家？ あそこで編輯助手が欲しいつてんだから、俺の名刺をもつて行けば、話はつけてある。」といふのだから圖々々しい。俺の言ふ文句を、俺の目のまへで、手柄顏に横取したものだお「あの人の名刺で行きましたら、私の仕事は貴方のお肝煎りだと、社長さんが仰有いました。」と油蟲だ。翌日。俺の家へ禮に來て報告した。「そのとき社長の泰山先生が私のために、南洲の詩から取つて、拔山といふ號を下さいました。月給は七十圓です。」云々。甚九郎の祖母さんが、釣鐘お松に化けて百五十圓に賣れるのも大出來だが、本人の話によれば、小學時代から今日まで、文藝雜誌に作を投じない月はなく、當選した月はないほどの油蟲が、一朝拔山に早變つて七十圓の扶持にありつくのも當り狂言だ。泰山。正氣の沙汰かしらんと思つたら、成る程。約束通り甚九郎の傑作は「談話の友」第二號に、初號見出しの大活字となつて、夥しく優待されたが、その月末になつても、翌月半ば――――即ち今――――に至つても、百五十圓は偖て、一錢にもならんのだ。拔山の月給も同斷と來た。流石は泰山だ。人にやる金があつたら一錢でも餘計に使ひ込むだらう？會計の都合が惡いから暫く待つてくれださうだ。暫の埒だから二三日で明くのかと思つたら、一月あまりの今日まで塞がつてゐる。いかな惡黨も支拂の恐怖には辟易すると見えて、催促

のお百度だ。釜の中で憤死した茄蛸よろしく、ヤケ酒くらつて眞つ赤に膨れ上り、激烈な血眼だ。取るものが取れなかつたら、火でも放けかねぬ鼻息で押し込むけれども、戻つて來る時の姿は、どんな具合ひに赤氣をぬかれるものか、海鼠みたいに蒼ざめ萎えてゐる。といつた調子で弱る一方だが、實は此の月末に、第三號の金を取りに「梅のや」へ出掛けるから、その時は間違ひなく支拂ひます、と言ふ山師の言葉に最後の望みをかけて、いくら何でも今度こそはと、その月末——即ち今日——を待つてゐたのだ。それがまた當脫れと來て、やりどころのない悲憤の鼻を俺の家へ持つて來ることからして、そもそもお門違ひではないか？而も俺を捉へて八ツ當ることの淋々しさに到つては、この話の劈頭に於て見るが如きもの之有るかぎり、また以上の經緯を申し聞かせる必要もあらうではないか？……口で言へば五分もかゝらぬ話だが、紙に寫せば、自分で書きたがらも、面白くないこと夥しい間のびがして、あくびが出る。言つて了つたら早速元へ引返す……俺だ。

「要するに僕のあづかり知つた悶着ではないよ。結論はかうだ。君は泰山よりも役者が一枚上だと吐いたが、なか／＼何う致しまして、上には上がある。君の咳呵ぐらゐで百五十圓ふんだくられる理とは、思はなかつたが、果して其通り。君の要求に唯

唯諾々と應じて、君の原稿の只取りをする奴の方が、役者は一枚上だといふことになるね。何うして金はないのかい？」

「淺草の壽司屋も都合が惡いと言つた。」

「雜誌は？」

「繼續するつてさ。」

と甚九郎だ。

「さうだらうとも。廢めたら大將食へないんだからね。然し君へて見たまへ。信用も名前もないのに、一文なしで雜誌が出せるかい？　金はあるよ。君は瞞されてゐるんだ。釣鐘お松の主

圓も、拔山君の七十圓も話がよすぎると思つたのさ。他の大衆連や埋當黨は何んな風だい？」

「さあ知りませんね。」

「拔山君は？」

といふ處へ木棉絣織に小倉袴の拔山の失望面が流し口に現はれて上り込んだ。「今まで社長さんと月給の談判をしてゐました。」

「駄目だらう？始めから踏み倒す了見だよ。」

「踏み倒す!?へエ！」と拔山。驚いて目を丸くした。「さうでせうか？ねさ。う仰有しやれば思ひ當ることもあります。先生も御承知の通り先々月から滯つてゐる下宿代の抵當に、私の行李は押

へられな、追ひ立てには叶ふこといふ意味でせうね。この頃いくらでもいゝから、是非頂きたいと、社長さんに縋りますと、七然氏面白な顔つきで、手ぶり身ぶり、かう仰有るんです。さういふ時には君！書物でも賣るんだよ。賣つたお錢で田舍紳士の一反も張り込むんだ。そいつを女將のまへに差出して、感に打たれて見たまへ――まことに是は粗末なもんで、お目にかけるのも恥かしいくらゐだが、まあ聽いて下さいよ。女將さん。先刻。町の吳服屋のまへを通りかゝると、目についたのが、店窓に飾つてある此一品。色合といひ、柄といひ、實に何とも言へないほど素敵だ。思はず踏み止まつて、ほれ〴〵眺め入ると、たちまち朦朧と現れ出たる貴女の幻。小柄で粹で、江戸風で、三十には手も屆かないのに、もう油が乘りかけてゐる。人殺しめ！貴女は知らないでせうが、こちらは迚も耐へられないと想つてゐるんだから、爭はれない人ごゝろ。つい。あんたのことが浮んでね。笑つちや不可ませんよ。これを貴女に着せたら何うだらう？その丸髷に其の御縹緻と合はせて、こいつは似合つたね。いゝですよ、たちまち御覽なさい。七ツ八ツは確かに若く見えるぢやないか！おや〳〵とびつきたいほど色つぽく引立つて來たぞ。こりや堪らん。ど、ど、どうしてくれるんだい。女將さん？と、さう思ふと、もう先は夢心地です。何處で何う工面したか、さらに覺えないけれども、[illegible]を見ると、お金と引替へに持つて來たことだけは確かだ。女將さんの御氣に召すか何うか知らんが、さういふわけだから、折角の志と思つて、これを仕立てゝ、着て見せてくれませんか？――と、でれ〳〵秋波嬌態つて見たまへ。馬鹿げてゐるかも知れないが、效力は即座に 100 per cent だよ。巧く考へたものさ。面が化ケ物でなかつたから、たいがい轆轤首だ。いかに獨り者の下宿人でも、到底ラブする氣になれないやうな缺點がなくつちや、下宿屋の女將が勤まらんのは、適者生存の法則に照らしても、明らかな現象だらう？しかも女といふ感情の動物は、平生他人に非難されるのを怖れてゐる自分の缺點が、何かの間違ひで賞められる時ほど感涙に咽ぶことはないと來てゐるんだから、たとい、それが追ひ立て命令を避ける方便の御世辭ではないかしら、と思つても、こんな物はいりませんから、出て行つて下さい！とは言ひたくつてもだ。人の情と書いて讀む人情が許さないよ――まあ。あなた。こんな高いものを、何うしませう？ 頂いてもいゝこと？ すみませんわね。御親切樣。どうも有り難うございます――と目の色を變へて、その代物を肩にかける。つら〳〵眺める――――ほんたうに好く似合つてよ。抜山さん。あなたは隨分お目が高くてゐらつしやるわね

——と來らア。下宿屋の油蟲め！ と、君の頭をつきんで、窓から棄てやうかと思つた火箸の先で、ちよいと、火鉢の灰でも平均してくれるかね？ 追ひ立ては倚ておいて、さうなると、亭主の手前まで繕つてくれるから、メたもんだ。おや。顔が赤くなつたぜ。君。何だい。これしきのことが恥かしいのかい？ おどろいたね。呆れたね。そんなこツちや、天下は取れませんなツ。其ノ心ヲ鋼セント欲セバ、必ズ厚ク之ニ賂ヒセヨ。さ。ヒソカニ左右ニ賄ヒデ、情ヲ得ルコト甚ダ深クセヨ。さ。之ヲシテ業ヲ輕カラシムレバ、蓄積空虚トナラム。さ。わかつたかい？ この兵法が呑み込めなくちや、天下は滅多に取れません、と文王に申し上げたのが、例の太公望だよ。文王曰く。公ノ言ハ乃チ、予ガ懐ニ協ヘリ。夙夜之ヲ念ジテ忘レズ。以テ用ヒ、常トナサン。とか何とか云々だ。嘘と思ふなら六韜三略を見れば一目瞭然。況んや、下宿を踏み倒すに於てをやだ。苟くも他人の飯を喰ふほどの者に、これしきの考へがないやうでは、困るぢやないか！ ね。君。このさい惡いこたア言はないから、僕の言は乃ち君の懐に協つてゐると心得て、大いに用ゐ、以て常となしたまへ。一體その女將の年は幾つだい？ と泰山先生が仰有るので、たしか七十一だつたと思ひます、と、さう申しますと先生は一聲唸と唸つて、息がつまつたやうに、しばらく目を白黒やつて居られます 僕。びつくりしました。」

「笑はせやがる。ふツ。ふツ。ふツ。」と、口を窄めて、小鼻をゆする、埋草屋甚九郎だ「小柄で、粋で、江戸風でサ。油でも乘りかけてゐる女將さんなら、田舍銘仙の一反ぐらい、夙の昔に俺が何とか都合してらア、七十一でも、白髮を染めたり、義齒を入れたり、ときには、ホロ醉ひ氣嫌で、三味の爪彈きに、端唄の一つも出やうかといふたら、物は相談だ。我慢の餘地もあるか知らんが、あの、おクラと來た日には、面を見たばつかりで寒氣がすらア。淺芽ケ原の鬼婆よりや、よつぽど凄いんだからね。此の間なんかも、おどろいたよ。あの婆アが、白髮頭をふり〱牙をむいて、救世軍の小隊へ押しかけて行つたつてんだ。小隊長の細君をつらまへて、何をいふかと思ふと、ねエ、奥樣。あなた樣は此の町内の參田長屋にころがつてゐる梯子賣り親子を御存じではないでせうね？ 小さい子供が四人！ 先達手。父親に死なれ。引きつゞき母親に病みつかれ。食べるものは屋根裏の鼠まで食べつくして、今はもはや骨と皮でございます。から家賃なども拂ふことは出來ない始末で、噂によりますと、今日明日のうちには、店立てを食つて、往來へ摑み出されさうな按排。お慈悲ぶかい御商賣の奥樣！ あなた樣でも此の際、可哀相な者にお恵み下さらないことには、警察も誰も

擲ひつける者がゐませんてんだ。鬼の目にも涙とやら。鉄拳な話だ。ホロリ／＼と啜り上げて斉へに及んだのさ。いやだよツ。ほんとに餘計なお世話ぢやないか。とも言へない商賣柄の細君だ。こんな時に參園振をするのも、日ごろ他人様の巾着に迷惑をかける天罰とあきらめたに違ひない。それは／＼お氣の毒な！ 世間の人々は顧みてくれなくても神様は決してお見棄になりません！ ほんとに好く知せらて下さいましたわね。さあ。どうか私を案内して下さい。といふ譯だ。參園長屋に連れ立つて行くと、早速お米やら味噌やら買つてやり、金を參園患んで置いて、そのうちに、また見舞ひに來ますが、いゝですか、これだけは心に止めて、感謝を捧げねばなりませんよ。これは、みんな、あの天にまします神様が、あなたがたに御投けなさるんですよ。と勿體さうに天を指さしながら仰有ると、法華宗の婆アまでが一緒に天を仰いで曰くのだ――全くでございますよ。あの神様ほど有り難いものはございませんよ――つてね。けだし、こいつは婆アの肚から出た僞りのない詠嘆だらうぜ。梯子賣り親子の感謝は、この神様屋さんも御解りだらうが、婆アの喜びに到つては、誰とて窺ひ知り得ないもの之有るんだからな。救世軍の妻君が行つちまつた後で、さつそく作らと、金參圓を頂戴する長屋の家主は誰かといへば、この婆アぢやないか。などゝいつたさうだ！ おい、いふ程君にはなくちや、様も君見だよ。だからサ。旗山君。金があつても無くつても、奴の言ふことを信用して、あてにならぬ金を當に、婆アの下宿へ立て籠つてゐた日には、だん／＼身動きが取れなくなつて、お了ひには身の皮まで剝がれるぜ。おい。今のうちに夜逃げなら夜逃げと、はやく決めちやつて、荷物を持ち出さうぢやないか。但し。あんな婆アとは知らずに、俺は口を利いて、おそこへ君を引つぱり込んだんだから、この際、君が如何に素つ裸にならうと、血だらけにならうと、俺の責任に關する問題ではないけれども、さうは行かん。泰山の言ひ草ではないが、人の情と畜いて讀む代物が承知しないや。講談倶樂部ぢや、一枚五十錢の埋草製造より藝のない男だと極めてやがる樣子だが、素を洗へば炭屋の悴の甚九郎。昇ぐことなら二十五貫の俵でも、へいへいのさい／＼。だ。君の夜具・蒲團・机・火鉢・鐵瓶・行李ぐらい、片手にも足りないよ。おい。どうだい。やらうぢやないか？ ねえ。大泉さん。あなたも贊成でせう？」

と、蟋蟀の髭みたいな腕をまくつて、夜逃げをすゝめやがる。こんな事には、親父の葬式なんか押しやつて置いて勇み立つ男なんだ。例の大地震の際には、山の手の長屋に巣食つてゐ

たが、大將の子どもが、入院しなくちや助からん病氣で死にかけてゐた。ある夜。その枕頭に頭垂れてゐると、そとから不意に「〇〇人が來たツ」と叫ぶ聲だ。大將。はね上つて十能を摑み取り、まツ暗がりに飛び出すや否や、向ふから走つて來るのが、その叫び聲で、しかも近所の鋳掛屋さんとは知らず、滅多打ちに打ち据えたこともある。他人の入院料なら、何とか工面がつくもんですなア、と言ふ底の馬鹿野郎だ。そこで最後に俺の出る幕が來た。

「もういゝ。もう澤山だ。この人は君のやうな人間の稽古木ぢやないんだから、こんなハメに打ツつかると、眞剣に心配するんだ。君のヨタリズムの御相手を勤める氣色なんか、ありやしないんだから、夜逃げの相談なんさ、講談倶樂部へでも持つて行きたまへ。」と、拔山の方に向き直つた「聞けば聞くほど、人を舐めやがる山師め！　テレン。パレンと、そんな挨拶で、君を踏み倒すのは、奴の家に君を世話した僕を踏み倒すのも同然だ。奴が、さういふ無茶な態度を取るなら、こちらにも了見がある。泰山風情に見泥化されてたまるものか。金があれば無論だが、ほんたうに無くても、無いとは言はせないさ。なアに有るんだよ。なくて叶うものか。よろしい。君の月給は僕が行つて取つて來るから、しばらく此處で待つてゝくれたまへ。」

と、立ち上つて、下駄を突つかけた俺は、どてらのまゝ、帽子もかぶらず、事務所の木戸から飛び出した。中氣病みの癖に、不埒な奴だ。變な挨拶でも吐したら、ぶツ叩いてやる鼻息で、掛け合ひに向つたが、「談話の友」社まで五六町もあるから、捩ぢ込むには五分ぐらい掛るだらう。俺は歩き出した。歩くうちに、こんなことを考へた。

二

岩村泰山はこんな奴だ。こんな奴だと言ふくらひだ。友義や敬意の沙汰に及びかねることは無論。こん畜生なんかと口を利くのも、人間の名譽にかゝわる災難だと思つてゐるのだ。思ひながらも我慢してゐる處を以て見れば、この野郎と俺のあいだに、よく〱絶ち切りがたい因緣の糸があるんだらう？　さうだ。實はさうなんだが、因緣の糸たア何だい？　といふことになると、話は忽ち長くなり、事はとかく面到に屬する。もつとも、こいつは何うやら、この大泉さんも――浮世の雨かぜに打ち叩かれて、いつの間にやら、涙も聲もサ。枯れた野末の卒塔婆かな。では下手な發句まがひの都々逸みたやうで恥かしいけれども實際――いや實際！われながら持てあますほどの人情家であつたものサ。といふ廣告になるかも知れないから、ザッと

物語るのも、悪くはなさゝうだ。よし来た。今より十年の昔に溯つて、俺の斷割事書を繙くならば、ここに「おお風来上人。西伯利亜の雪中に行き悩み給ふ事」の一節があるのだ。あると思へ。上人の俺が、いくら風来に出来上つてゐるか知らないけれども、零下三十度の朔風と睨押しに赴くほど、浮世に退屈したわけもなからうし、また何かしらんに感ずるところがあつた筈もない。大した心掛けとは言へないが、要するに専ら食へなかつたせいだ。と思ふと、食へない責任が、俺の不徳になるやうで口惜しいから、即ち、俺の存在を眼中に置くだけの眼鏡が、日本帝國にはなかつたんだといふ風に考へたら、蟲のおさまりは付くかも知れないが、承知しないのは腹の皮だ。日に日に弛む一方だから、目もくらむだらう。只今の文士渡世も、その頃からの持病で「人間廢業」にも、このくらい厭た商賣は又とないやうな愚痴を列べて置いた通り、今以て此の先生の足元は頗る怪しげなものだが、その頃は？　だひたい御天道様の姿が見えないのだから悲觀した。さうだらう。何しろ雑誌や本屋の數は少ないし、その中でも、あそこで俺の原稿を買つてくれると助かるがなア、と、こちらで仰望する向きの先様に限つて、非常に禮儀正しく遠慮されるのだ――だらしのない餘談は、大泉さんも禁物とは心得てゐる按排だが、仰望といふ文句で甦

へ[illegible]然ても許されまでは[illegible]になるんだらう。[illegible]これは上刺をお納する「中央公論」に始めて原稿を送つけた時分から二三年前だから、つまり、西伯利亜の道行きごろ[illegible]の「入水記」といふ革命詩の譯述原稿を懐中に、あつさり届けるつもりだ。一ぱい呷つて度胸を据えて、本郷町の中央公論社まで走ることは走つたが、あの西洋館を見ると――駄目だ。腰が引けちまつて、門の前をウロウロ徘徊の體とある。折しもお誂れ。二階の窓から此の様子を見てゐる人があらうとは御存じないのだから「君！　何をしてゐるんです？」と聲を掛けられてハツとするなんて、いよいよ拙い。極りがわるくても、逃げるわけに行かないので、あたふた懐中から取り出した一物を差しかざしながら「寄稿はいりませんか？」と二階住居のお内儀さんに呼びかける百姓の娘よりも、商賣馴れのしない恰好だ。「實はこの原稿を」云々と、眞つ赤になつて、二階の窓を仰望すると、かういふ不躾な手合には取り合はぬ規則と見えて、美しく髪を分けて角帯を締めた窓の紳士は、人間が犬を追つぱらふときの手つきで、ウンともスンとも言はずに、フラ〳〵横に振りながら、窓を閉めて引つ込んだ。こちらも犬のやうな氣持になるから妙だ。尻つぽを巻いたつもりで、逃ふ〳〵逃げたこ

とがある。近頃。例の島田清次郎と、巣鴨の奧の狂人病院で、久しぶり會つて鹿爪らしく身に泌みた。原稿が賣れないので、こんな淺間しい風袋にもなるんだらうが、なればいよ〳〵相手にされなくなる。その時引つ張つて行つた或る本屋の親爺たつて、狂人の原稿を見ない先に、もう手を振つて鼻を抓むのも人情だと思つた。人に金を借りるなら、憫れつぽい聲で哀願しちや不可い。そんなこたア、お安い御用だ。何でもないといつた風に構へてゐなくちや、貸手は用心して話に乘らない理屈もある。昔。石川島造船所の鑄鐵(ツク)かつぎに傭つてくれと言つたら、親分が羽織袴の俺を眺めて、お前なんぞに勤まるものかと、手を横に振るから、これでもか？と袖をまくつて、腕に瘤を入れて見せた經驗もある。學問はカラ駄目だが、腕ツぷしには自信のある俺みたいな書生もゐるんだから、見そこなふのだ。引つ提げてあるく自分の姿を顧れば、はや影法師よりも賴りなく、鳥の羽ばたきみたいな音を立て、桐の枯葉のまろぶやうな足どりだ。秋風落莫と嘣めいてゐるんだから、原稿の直訴も効を奏しないのだと負け惜みながら、持ちまわる「モスクワ入牢記」粘り強く賣れない。「雄辯」にでも捩ぢ込まうかといふことになつた。俺にとつては原稿の姥捨山だ。こんなときに脊負ひ込むには屈強の屑籠だ。どんな襤褸でも引取つてくれるから便利だが、その代り、着せるだけの恩を着せられた上に、口から火の出るやうな厭味皮肉を食はされた揚句「一枚九錢なら頂きませう」と、頭からどやされても氣を失はない度胸がいるのだ。即ち此處に於て、文士は米を食ふ人間として扱はれなくても憤慨しないだけの覺悟がゐるのだ。もとより其の覺悟で、革命斷三十幾枚に引導を渡してはもらつたが、原稿最低價金五十錢と見ても十五圓にはなるやうな算術の夢を見ながら書いた物が五圓足らずでは握つたボロ札の身の振り方にも困るだらう？困る。だから何うしたのか？いや。さう一口に言へない。ぼつ〳〵だ。

八町堀の與力同心

鳶魚

例外の役人

彼等の住所が八町堀であつたから、八町堀の與力同心といふだけではない、彼等を町與力、町同心とも云つたが、それは與力同心が町奉行に附いたのだけでなく、御先手にも御留守居にも大御番にも、まだ其他にも與力同心が附屬して居るので、斯く云ひ分ける必要もあつたのである。

町奉行所屬の與力同心は、慶長五年十月、板倉四郎左衞門（勝重）の新任以來、それ〴〵沿革もあるが、幕末の現數は與力が四十六騎、同心が二百八十人あつた、是を北南兩町奉行所に分配して、一人の町奉行に與力が二十三騎、同心が百四十人附屬して居た。

此の町與力といふものは餘程變なものであつた、德川氏の家來で萬石以上の者は御譜代大名であつて、萬石以下を御旗本、御家人と分け、將軍に謁見する資格のあるものを御旗本といひ、其の資格のない者を御家人と云つた、將軍に謁見することを御目見（おめみえ）といつたから、目見以上、以下と云つて、御旗本御家人の分限を定めた、有事の日に萬石以上の者は一方の攻め方なり、防ぎ方なりを承り、然らざるは手勢を引率して將軍の本營を固める、即ち將軍の旗下に集るのであるから、御旗本の唱へをも生じたのである、其處で御家人も同樣ではあるが、旗本のやうに手勢がない、自分だけが馳け參じるに過ぎない、さて其の手勢を連れて出掛ける御旗本の分限は鎗一筋馬一匹の分限を最低とした、此の最低分限は二百石であつた。

町與力は二百石取りなのだから御旗本の譯だのに、御旗本とも違ひ、御家人とも違つて居た、職掌に依つて有事の日にも戰場へ出掛けないから、江戸時代の武士の大體の分別に外れたのではない、町與力の定員五十人、此の知行一萬石を上總下總の地方で賜はり、一人の定額二百石といふことになつて居た、故に與力全體の知行所はあつても、自分一個の采地といふのがな

い、所屬のまゝに南北二組に與力を分けて、各組に二人づつ古參の與力が給知世話番になつて、其の方の用辨をして居た、祿の貰ひ方が一般の御旗本御家人と違ふだけでなく、孰れも一代抱へであつた、事實は世襲だのだけれども、一代限りの型式にたつて居た、與力の悴が十三四になると無給で見習に出る、それから採用されて與力に任命されるので、親の跡目を相續する譯ではない、町同心も同じことであつた。

町與力は馬上の者であるから雜人とは算へず、何騎と算へ、それこそ槍一筋の武士だのに、御目見はない、將軍に謁見することを許されないから、御目見以上以下と分ける時には以下である、以下だとすれば御家人だが、御家人には槍の持てる分限の者はない、のみならず町與力は決して轉勤轉役しない、如何にしても現在より立身出世することが出來なかつた、大鹽平八郎は大阪の町與力だつたが、何とかして立身出世したいと思つて、色々運動もしたが、江戸のには限らず町與力や町同心が轉役轉勤した例がないので、絶望した話もある。

同心は三十俵二人扶持、年寄同心になると五俵、物書同心になると三俵の增給がある、同心は功勞に依つて加棒されても俵數を增すのみで、領地を與へられることはない、又た與力に拔擢される外に、同心の出世する道はない。

此等の與力同心は一代切りの型式でも、實は代々其の職を執つて居る、勿論町奉行といふ職務に從屬してゐるので、町奉行其の人に附いて居るのではない、與力同心は町奉行所の居附であつて、お奉行樣の方が却つて新米なのである、町奉行は他から陞任して來る、又た町奉行から他へ榮轉もする、町奉行が新米でも或は甘くとも、町奉行所に與力同心が居附いて居るから、如何なる場合にも其の機能を鈍らせるやうなことはなかつた。

八町堀の七不思議

町與力、町同心が一齊に八町堀（今の松島町）に住居したのは、正徳三年三月以來のことで、其の前には多少の沿革もあつた、八町堀では與力は一人三百坪、同心は百坪づつの宅地を貰つて居た、彼等は變な待遇を受ける例外な御役人だけに、其の生活も尋常でない、二百石も取る町與力が四十六軒もありながら、八町堀には長屋門が一つもなかつた、皆お揃ひで冠木門ばかりだつた、彼等は旗本風といひ、御家人風といつて、妙に忌み嫌つたからではあろが、其處に一種の八町堀風があつたのだ、云ひ慣された八町堀の七不思議などは正しく其の情況を傳へて居る。

奥樣あつて殿樣なし。

女湯の刀掛。
金で首が繋げる。
地獄の中の地獄橋。
貧乏小路に提灯かけ横町。
寺あつて墓なし。
（最後の一つを今何とも思ひ出せぬ）

今日は誰彼なしに女房でさへあれば悉く奥様だが、昔は殿様の女房でなければ奥様と云はなかつた、だから同心は亭主が旦那様で、女房は御新造さんであつた、處が與力は旦那様であるのに、其の妻は奥様だつたから七不思議の一つになつたのだ、愛で思ひ出すのは『殿様といひませうかと女房云ひ』といふ落首、是は和學方の塙保己一の嗣子次郎が、目見以上の待遇を受けることになつた時、其の妻が斯ういふだらうといふ悪る口なのだ。目見以上なら殿様なのだが、新任匆々だけに口慣れないのみか、女房の方も未だ奥様になつて居ない、昨日までもの御新造さんなのだ、其處に皮肉な處がある、しかし八町堀の與力の家庭では、亭主は旦那様でも、女房は全然奥様になつて居るから不思議なのだ。

江戸では場所に依つて町の錢湯で武士の來るのも珍しくない、從つて男湯に刀掛けのあるのは勿論だが、葺屋町龜島町邊の錢湯五六軒には女湯に刀掛けがあつた、婦女に限りしかつはないのだから、江戸中は愚か、日本中に女湯に刀掛の錢湯はない、是は八町堀の連中が自宅に風呂はあつても、早朝に入浴したい時に出掛けるから斯ういふことにもなつたのである、江戸ッ子の朝湯、早天から男湯の方は混雜する、女湯の方は朝つぱらから來もしない、其處で靜な女湯を早くから焚いて置いて、旦那方の入浴を待つ、小者に浴衣を持たせて出て來て、女湯の方へ這入る、出て來るまでお供は番臺の脇に屈んで待つて居るといふ寸法、入浴だからと云つて無刀では出て來ない、兩刀を帶する者で町の女湯などへ這入る者は、八町堀の連中の他にない、他にはないが八丁堀にはあるのだから七不思議の一つにもなり、女湯に刀掛けが必要でもあつたのだ。

玄關から進物

諸大名は孰れも江戸に屋敷もあれば、家來も置いてあるから、何時江戸の町方と面倒が起るか知れない、それ故に町奉行との連絡が取つてある、與力同心にしても御用頼み、それに御役中頼みと代々頼みとあつて、御役中（年番方、吟味方、廻り役等）は在職間、代々は其の家々との關係である、諸大名は常に町方の役向と打合せ、又た頼み附けの與力同心とも話合つ

て、藩邸外との交渉をする準備がしてあつた、従つて時々の進物は絶えない、是は俗に附け屆けといつて、公然と受授するのだ、諸大名が參覲交替で江戸へ來た時、歸國した時、又た主人の在否に拘らず盆暮寒暑には、進物持參の使者が來る。

町奉行の役宅へ切棒の留守居駕へ乘り、侍二人、草履取、合羽籠といふ行裝の諸侯の使者が來る、中番といつて袴羽織の小使、是は足輕よりも低い者で無刀である、其の中番が出て白木の臺に乘せた進物を請取り、玄關正面の中棚へ置いて、用部屋へ通じる、其處で公用人が使者に接見する、使者は主人が參府したとか、歸國したとかいふ挨拶を述べる、さもなければ——守から時候を伺はれます——といふ口上がある。

諸大名は武鑑にも書いてある通り、國々の名産を將軍家へ獻上する例で、此の獻上殘りといつて、老中三奉行(寺社、町、勘定の三奉行)及び與力へ贈遺する、それに金馬代(目錄包み多いのは金卄五兩)が附く、與力同心の分は筆頭が請取つて配分する、先方から名宛で來るのもあつた、御用頼みで十人扶持ぐらゐ貰つて居るのもあり、銀十枚又は金千疋などといふのは澤山あつた、其の方面だけで與力の年收は一年に金ばかり三千兩位はあつたといふ、何かの用事で大名の使者と面會する度毎に千疋、(金二兩二分)五百疋、(金一兩一分)三百疋、(金三分)と諸侯の大小に依つて差はあるが、奉書二ツ折を折返した中に一分判か二分判かを貼附したのを八寸臺へ乘せて、屹度持つて來る、只だの面會といふのは決してなかつた、それが一軒や二軒の大名でない、まして何事かあれば格別な附け屆けがあるのだから、極つた俸祿よりも貰ふ方が何程多いのか知れぬ、それが賄賂ではないのだ、町奉行をはじめ請取證を出して受授する進物なのである。

飛んだ話は加役方

江戸の捕物といふと、直ぐに八町堀の與力同心が云ひ出されるけれども町奉行に附屬する八町堀の與力同心は、決して捕物だけの役目でなく、所管の事務が頗る多く、それぞれ分擔して居た、捕物の如きも其の分擔の一つなので、三廻りといつた擔任者のみが其の方を働いたのである、勿論與力同心の全體としては、町奉行の下に江戸市政の全般に執掌するのだ、捕物のみを本職とするのは、御先手と稱した御持弓御持筒の兩組の各組に頭が四人づつあつて、其の各の頭に與力十人同心五十五人づつ附けてある、其の先手頭が任命される火方盜賊改といふのがあつた、是は本役の御先手頭へ火方盜 賊改を云ひ附けるの

だから、本役に對して加役といつた、加役とは兼務役務の意味たのだが、江戸時代には火方盗賊改といふよりも加役といふ方を云ひ慣れて居た、江戸の捕物は町奉行の手と加役の手と二樣になつて居たが、憲兵と巡査と云つたやうな氣味合ひがあつて、加役には隨分荒つぽいのが居た、或は殘忍刻薄な往き方もした、それで加役を蓆張りの乞食芝居、町奉行の方を檜舞台の大芝居に見立てゝも居た、從つて飛んでもない話の種子は加役の方に澤山ある、と共に町奉行の方には面白い事が尠い。

傳說にしても御愛嬌なのは加役の方でなければ見附らぬ、天和の加役で名高かつた中山勘解由について、

天和三年六月、江戸にて火付七人捕へ、盗賊奉行の中山勘解由殿、さま〴〵辛く責られしに、其中に鶉權兵衞といふ者、白狀せざりければ、己れ能く聞け、髭を拔居て、物を聽くやうなる奉行とは違ふぞよ、苦しき目に逢て死んより、早く白狀せよとありしかば、權兵衞居丈高になり、いかに勘解由殿、髭を拔とは誰の事ぞ、推するに甲斐庄喜右衞門（延寶八年八月より元祿三年十二月まで、江戸町奉行勤役）殿の事なるべし、彼御方は明白にして少も邪なる事なし、某にかく辛き目を見する事、餘り情なし、此恨み骨髓に徹せり、恐くは三年の內に其驗を見せんとて嘲りし、權兵衞を四谷に晒すとて引行しに、勘解由殿は門外を通る時、やがて思ひ知らせんぞと、高聲に呼はりしが、其聲奥まで聞え、人々身をちゞめ恐れけり、其月十二日鈴ヶ森にて處刑の列に行れしに、權兵衞、口より火を吹て、勘解由々々々と三度呼はりし時、頭の鉢割しとかや、其後勘解由殿の子息門平に成しが、其乳母殿に、暇を乞ひける、何故に斯くはいふぞやと尋ねられしに、定かに得いはざりければ、扨は密通の事にやあらんと、嚴敷し給ひしに、今は包むべきに侍らず、若殿の人々寢入りし頃、懷より縁に出給ひ、人々に鼻をあて覗ひ、夫より行燈によらせ、土器を傾け、燈油を殘りなくねぶり侍り、怖き事言計なしと申せば、殿も不審に思ひ、或夜ためせしに、さる事なかりければ、汝僞申なと責給へば、兎に角御免あれ、若し殿の威勢に怖れさせ、斯く有まじきも知れずと申せば、實にさる事よとて、翌夜次の間より伺給ひしに、果して違はざりしかば、頓て捕へて刺殺されしといふ、又嫡子も亂心あつて死去、勘解由殿も全身に赤筋いで、腰かゞまり苦しみて、やれ權兵衞が來ると、一向に言給ひ終られしと、勘解由殿海老責（海老責といふ、拷問四種の內、第一笞打、第二石抱、第三海老責、第四釣責、勘解由が此の第三を按出した）といふ事を始め給ひ、斯く珍しき刑は、此報にてやありなんと人々云

會へり。

油背め小僧さへ出て來る怪談仕立の傳說などと來ては、何としても町奉行の方にはない。

與力同心の分擔

南の與力であつた佐久間長敬翁の書き送られしものの中に、

年番方　與力三人、同心六人、同書物方三人、

舊時は同心支配役中より、每年交代にて勤務したり、因て年番の稱あり、近時は拔擢により任命せられ繼續して勤務す、而して其職とする所は、役所全般の取締、金錢の保管出納及組中の監督、同心分課の任免等にあり、亦臨時主要なる事項を處理す、

本所方　與力一人、同心二人、

本所深川に關する諸般の事務を取扱ふ者にして、橋梁道路の普請、建物の調査及名主の進退等を掌り、本所道役と稱する屬吏あり、又鯨船と稱する快船二艘を管し、供水の際、橋梁の保護及人命救助の事に從ふ、

養生所見廻　與力一人、同心二人、

小石川白山に設置したる貧民施療所の事務を管理す、

牢屋見廻　與力一人、同心二人、

小傳馬上町の囚獄に於ける諸般の事務を監督するものなり、

吟味方　與力十人、（内本役四人、助四人、見習二人）、同心二十人、

民事の審理勸解、刑事の糺紀及終結執行に關する事務を掌る、

赦帳撰要方人別調掛　與力四人、同心八人、

既決囚人の罪質に據り調査し置き、赦令ある時、これが名簿を製し、其取扱をなし及び、撰要類集（判決例）の編纂を掌り、又人別帳の事を管す、

高積見廻　與力一人、同心二人、

體裁の維持、危險の豫防のため、町々河岸地等、商品を積重ぬるに制限ありて、之が違犯者なきかを巡廻して取締ることを掌る、

町火消人足改　與力二人、同心四人、

十一月より三月まで、與力一人、同心二人を增す、

出火の際、町火消の防火進退の指揮を爲す、

風烈廻、晝夜廻　與力二人、同心四人、

常に市中を巡廻して非常警戒をなすを掌る、

例繰方　與力二人、同心四人、

罪囚の犯罪の情狀、斷罪の擬案を蒐集記錄し、他日の參考の

査に供し、又事に臨んで検討案例の事を掌る、

町會所掛　與力二人、同心四人、

町會所（町年寄の役場、今日の市役所に比べて好からう）に於ける積金貸金、窮民救助、圍籾に關する事務等を監督す、

定橋掛　與力一人、同心二人、

官費經營に係る橋梁に關することを掌る、

古銅吹所見廻　與力一人、同心二人、

本所横川なる松田甚兵衛の經營する古銅吹替の業務を監督す、

市中取締諸色調掛　與力　同心

時により異同あり、定員なし、

市中取締に關する諸般の事を掌る、

猿屋町會所見廻　與力一人、同心二人、

淺草御藏、札差の業務の執行を監査す、

御肴靑物御鷹餌鳥掛

名稱の事務を掌るものにして、南町奉行の年番方兼掌す、（是は北になし、南にのみあるもの）

諸問屋組合再興掛　與力八人、同心若干

諸問屋組合再興に關する事務を掌る（天保改革の時に諸問屋株を廢止し、其の復舊したので此の一科を設けた）

非常取締掛　與力八人、同心十六人、

非常事件の取締に關する事務を掌る（從來非常と云へば先づ火事と解して居た、それが此の頃では種々な混雜事件を意味するやうになつた）

外國掛　與力　人、同心　人、

外國及外國人に關する事務を掌る、

開港掛

横濱及江戸開港開市に關する事務を掌る、

御國益御仕法掛

名稱の事務を掌る、

諸色潤澤掛

名稱の事務を掌る、

諸式値下掛

同上

箱館産物會所見廻　與力一人、同心二人、

箱館奉行管轄地の物産賣捌の事を監督す、

外國人居留地掛　與力一人、同心

築地外國人居留地設定に關する事務を掌る、

町兵掛

江戸市民の壯丁を募り、訓練して自衛の事に任ずる事務を掌

る、

人足寄場定掛　與力一人、同心二人、

石川島に設置したる無宿罪人の懲治場の事務を監査し、且横須賀埋立に使役する寄場人足を監督す、

硝石會所見廻　與力一人、同心二人、

硝石採集、彈藥製造に關する事務を監査す、

用部屋手附　同心十人

奉行用人に屬し、刑事斷案の調査起稿を掌る、

隱密廻　同心二人、

奉行に直屬して秘密探偵の事を掌る、

定町廻　同心六人、

法令の施行を視察し、非違を勘査し、犯罪の捜査逮捕の事を掌る、

臨時廻　同心六人、

職掌、定町に亞ぐ、

下馬廻　同心六人、

諸侯登城の日、大手門外其他に於て僕隸の取締をなす、

門前廻　同心十人、

月番老中若年寄の對客日に其門前の取締をなす、

御出座御張掛　同心六人、

評定所（幕府の高等裁判所）へ老中出座の日に於ける事件簿の調製を掌る、

定觸役　同心三人、

臨時出役事件ある時、同心當任者の觸當をなすことを掌る

引纏役　同心二人、

出火にて奉行出馬の際、隨行諸般の用務に服す

定中役　同心十人

臨時觸當によりて諸般の出役に從事す、

兩御組姓名掛　同心一人、

兩組與力同心姓名帳編纂及加除記入の事を掌る、

此の外に出役と云つて與力同心の職掌として必ず働かなければならない事が、凡そ二十七項もあつた、先づ分擔を一瞥しただけでも、彼等の服務が單純なものでないのが知れるだらう。

前記の分擔は文久以來更替されたもので、大に幕末の忙しさうな樣子が現はれもするが、些少溯つて文政の江戸町鑑で眺めても、南北兩町奉行所屬の與力同心（各與力廿五騎、同心各百人）總員を双方共に一番から五番まで組別けのまゝに其の氏名を舉げ、更に其の職掌に依つて、年番與力同下役（同心）、御詮議役、同下役、糺摘係、同下役、本所改役、同下役、養生所見廻役、同下役、町々高積改役、同下役、本屋見廻り役、下同

役、町火消人足改役、同下役、江戸向地掛り、同下役、古町代町役、同下役、定廻り、臨時廻り、同格（此の三勤は同心のみの勤役）の氏名を書いてある、是で大凡文久以前の分擔が察せられやう。

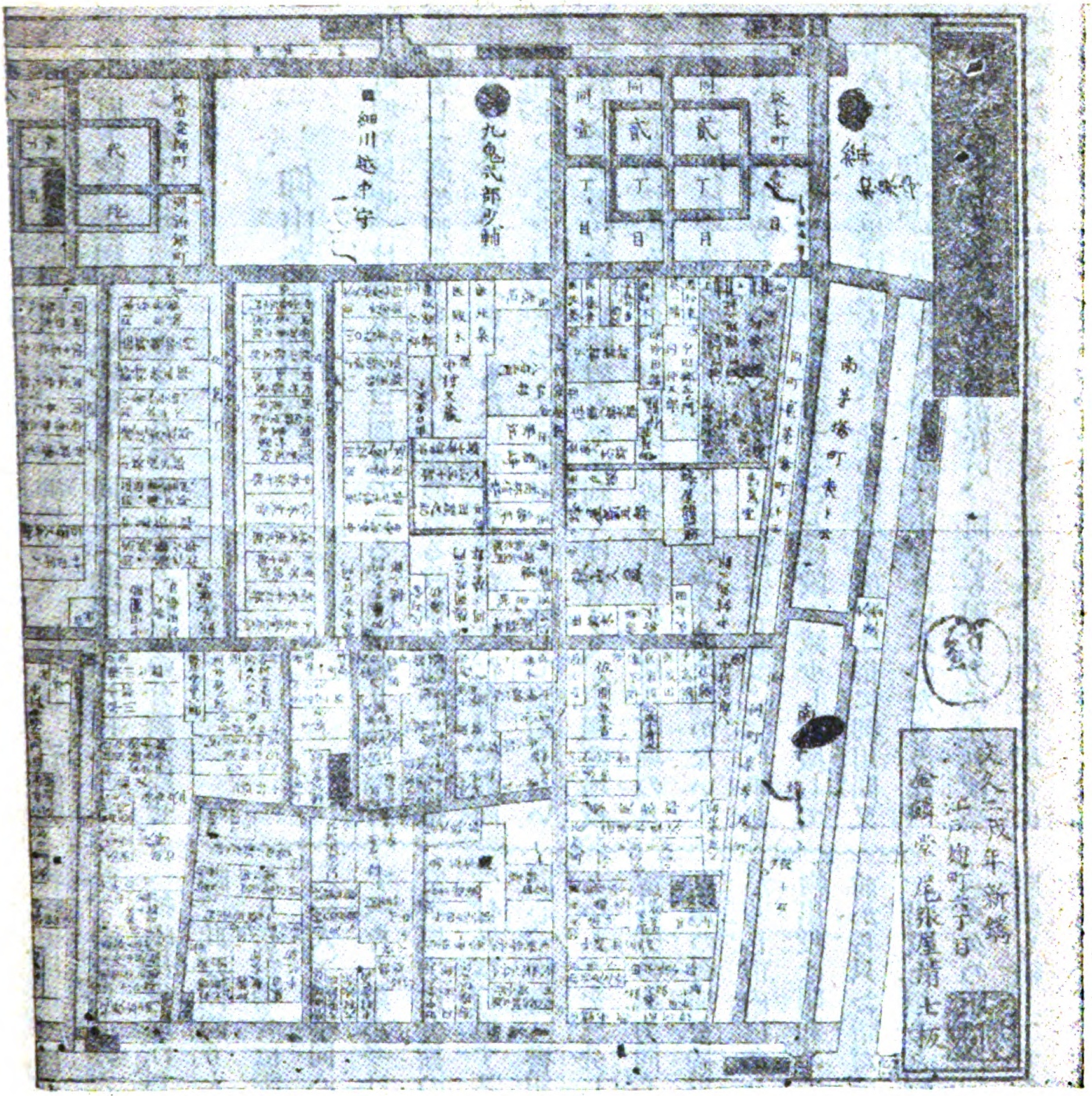
仰山な捕物出役

八町堀を見せつけるものは三廻りである、隠密廻りは町奉行に直屬した高等刑事でもあり、才能のある故參の同心から拔擢されるのだから、云ふまでもない利け者だが、又た市民に親而な揣利生のある定廻（正しくは定町廻なのを略して定廻りといふ）が大に威張れた、臨時廻も幅が利くけれども、定廻の附役のやうなものであるから、同じ様に或る社會からは八町堀の旦那方と云はれはするものゝ、本役の定廻のやうには往かない、捕物に與力のするものでなく、必ず同心の仕事であつたが、手どらまへといつて同心自身に捕縛することは段々減少し、概して部下の手で縄を掛けたものだ、此の同心の部下は俗に御用聞又は手先又は岡引と稱せられた、表向は小者といふのださうな。

與力も吟味方といへば景氣が好い、同心も廻り方になれば豪勢なものであつた、與力よりも見せ場が多い、如何なる場合にも與力は縛ることをしないが、それでも捕物出役（正しくは捕物役も出役）は出來なかつた、詞は古めかしいといふのか、お出張にみたといふのか、餘所々々しい趣もある。

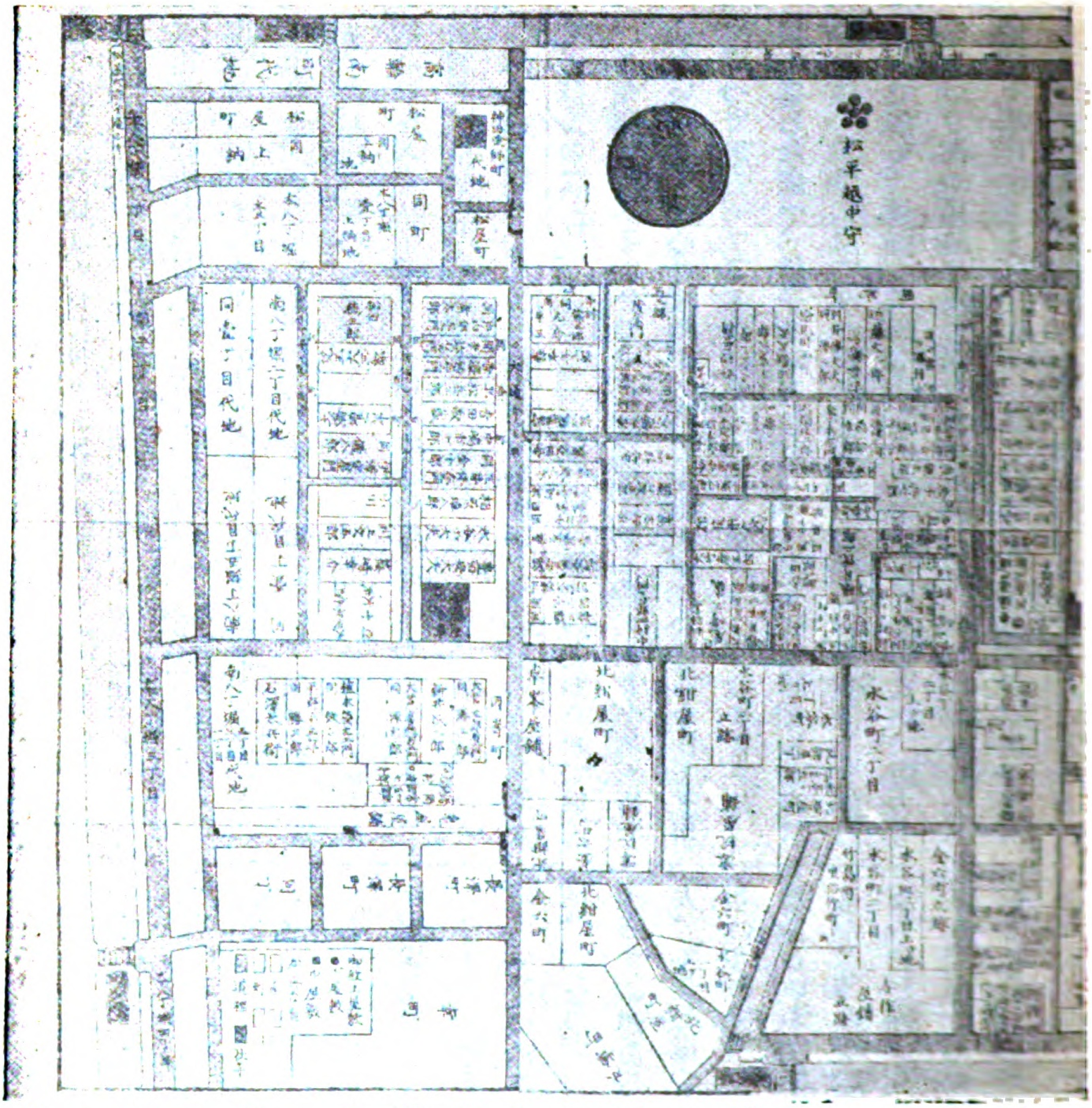
捕物出役は江戸市内に殺傷狼藉を働く者、又は閉籠りがあつた時、此の閉籠りといふのは犯人が或る民家に楯籠つたことだ、さうした場合に訴へに依つて、町奉行の指揮により、當番與力（一人）が平同心三人を引率して出役するのである、尤も捕縛すべき人數が多ければ與力も一人でなく同心の數も増す、此の當番與力は分擔のない者が順番に町奉行所に詰めて居て、庶務受付及び宿直する、當番方の人員は與力二人、年寄（故參者）同心、物書（書記）同心各三人と分擔のない同心（是を平同心といふ）を三分して交互に執務させてある、捕物出役の例には丸橋忠彌の召捕を持出すが、最近に大騷ぎであつた事態のやうなのが若し市内にあれば、早速捕物出役がある段取なのだ、しかし捕物出役は明和の頃までゝ其の後に實現しなかつた、從つて百年前から只お話だけのことになつて了つた。

出役と極ると繼上下で居た當番與力は手早く衣服を改める、（文久の頃には捕物出役などといふこともなくなつた、與力の服裝も繼上下でなく袴羽織になつて居た、浪人風などといふ言葉もあつて、與力の風俗も一變して居る）、着流しになり、帶の



上へ胴締めをする、勿論兩刀を帶し、手拭で後鉢卷、白木棉の手襷、ジン〳〵端折、草鞋を穿き、槍は中間に持たせ、若黨を二人、草履取一人を連れる。

一體與力の挾箱ぐらゐ混雜したものはあるまい、要用十五點といつて、常に熨斗目、麻上下、紋付、裏付肩衣、上下（ホロ麻、横麻、龍門）裏付上下、縞の着物、紋付着物、野羽織（木棉の割羽織、俗にブツサキと云ふ、勝色無地が多し）、野袴（ふん込、黒八丈の縁取り）、乘馬袴、野服（半天股引、半天は前を合はせる、小紋又は無地で紋を付けず）、帶（木綿の上帶色縞）、帶締め（麻で三尺、何色でも前へ結ぶ）、野羽織（是は冬だけ、脇差ヒキハダ、此の時は一本ざし、刀は家來に持たせる）、脚袢（小紋）、紋付帷子、白帷子（八朔だけ）、紋付黑羽織（斜子、羽二重、無地の糸織）、羅紗羽織（無地、夜寒出役の時）、白足袋、紺足袋（裏白は古いのを穿かないのを見せ處にしたもので、小普請方あたりから始つ



た極新しい物好みに過ぎぬ、昔の定式は裏も共色だ、何役でも疊の上の勤務には紺足袋を穿かない、只だ御庭番だけは裃上下の時でも紺足袋であつた、是は登城しても直ぐに御庭へ往くから白足袋で出勤しないのだ、與力も奉行所に居る時は白足袋であるし、出役には紺足袋でなければ往けない、そこで融通の好いやうに足袋も二足用意するといつたもの）が入れてあつた、だから場所を嫌はず何時でも着替へられたものだ、槍持は共襟の法被に丸くげの結び切り帶、草履取は勝色無地、共襟の法服に綿を心にした梵天帶、供の被法は勝色で背中に大きな紋の一つ附いたのを着る、孰れも股引を穿かぬ。

當事の同心は羽織袴で出て居るが、麻裏の鎖帷子を着込み、其の上へ、芝居の四天が着て居るやうな半天、それに股引、是もズツト引上げて穿けるもの、其の下の方は脚絆になつて居る。前を合せて帶を締める。小手脛當、長脇差一本（平常は無論兩刀だが、捕物

に出るのには刃引を一本だけ、鎖の這入つた鉢卷に白木綿の手襷、足拵へ、同心の供は供と云はずに物持といつた。紺無地の法被に目くら縞か千草の股引を穿いて居る。

出役の仕度が濟むと、一同に町奉行の前へ呼び出されて、町奉行から與力には檢使に往けと命じ、同心には十分に働けと云ひ附ける。さうして桐の實を三方へ載せて出し、各々水盃をする。是は明和度の定めださうだ。其處で與力は一番手二番手と同心の部署を極め、出役一同を町奉行自身に表玄關まで送り、表門を開かせて繰出す。

此の出役與力にしても決して捕物に手を下さない。槍を持たせて往くのは、同心の手に剩つた時に、持槍で敵を弱らせて取捕へる便利を與へるためで、それで傷けたり殺したりするためではない。全く同心に援助する爲めなのだ。其の節は今日も芝居に殘つて居る。アアリヤアどん／＼で散々トンボ返りをさせ、追ひ返した處へ、捕子の頭人とあつて、物々しい顏をしたのが槍を持つて出て來て渡り逢ふ。渠れが出役の與力の樣子を象つたのである。威張つて出て來ながら大概負けもしない、勝ちもしない、何の爲めに出て來たか分らないが、出役與力は自分が成績を舉げずとも好いので、敵を疲れさせるのが仕事なのだから、芝居にすれば是非あゝした體裁にもなつて了ふのである。

芝居のトツタリ

芝居といへば例のトツタリが出る、渠のトツタリは同心を寫したのではない、手先とも御用聞とも岡引ともいふ、同心に遣はれて居る小者の樣子から見取つたものらしい、拵えから何から小者の風體を寫したものなのは紛れもない、だが芝居でトツタリが赤房の十手を持つて居るのは怪しからぬ、小者の十手には房はない、赤い房の附いたのは與力と同心が持つのに限る。

手先といふものは同心の下働きであつて、表向きの給金は半季二朱だつたとやら、下女の給金が二兩二分も三兩もするのに、大の男が一年一分（一兩の四分の一）しか貰へぬ、そんな馬鹿な話があるものじやない、表は表、裏は裏で、同心が幾人、手先を遣つて居るか奉行所へ知れては居ない、全く同心限りのもので、町奉行へ通つたものでない、從つて改まつた任命などといふ順序もなく、同心が自筆の手札を渡して置くまでのもの、其の中に古參の者があつて、それが大親分になり、多數な子分を持つて居るのもあつた、其の大親分が子分の中から、旦那、何分御願ひいたしますと推薦するのを、手札を與れて働かせて見る、それから巣立つて立派な御用聞に成り濟し、澤山の子分を持つやうにもなる、まだ手札を貰はない子分が、大親

分の下で隨分數多く働いて居る、だから廻り方は大親分の親分なのだ、大抵な奴は何か商賣を持つて居た、料理屋だとか寄席だとかいふのが多い、さういふ譯だから旦那、今度質屋をはじめますとか、天麩羅屋を開業したいとか云つて來て、二十兩三十兩の資金を出して遣ることは珍しくもなかつた、廻り方の宅には何時でも二人や三人は何とも附かない者が居て、拭掃除などをして下男のやうに働いて居た。

彼等はノラクラして居るやうでも、鍵縄や十手の稽古は懸命にした、鍵縄といふのは縄の先に鉤が附いて居る、其の鉤を左の襟先へ引掛け、一本縄でグル〱巻きにして了ふ、それは素早い、目ばたきする間に縛つて了ふ、さうして本縄に掛け換へるのだ、だが手先は廻り先へ附いて出た時も、さうでない時も同心の指揮がなければ決して捕縛することは出來ない、手先は毎日八町堀の出入の處で落合ふことになつて居たが、彼等の所屬は常の出入によつて定つて居た、孰れの廻り方でも勝手次第といふではなく、自然と出入が極つて居る、勿論廻り方が呼んで遣はうとすれば、出入に拘らず自由に遣へた、彼等は手札を貰つた同心が他の役になつても、新役から改めて手札を貰ひ直すことはなく、其の儘で勤めて居た、けれども必ず後任者へ出入するとは限らぬ、互に氣に入つた勝負に違ひもすれば、違は

れもするといつたもの、これで手先は犯人を突き留めて、用人の處へ來て、委細を報告し、これでは上げろ（捕縛することを上げろといふ）と命令されない内は、手を下されないのである、手先の意志では決して縛ばれないのだ。

文久三年三月晦日の夜、六ツ半といふから午後七時、赤坂表傳馬町の繪草紙店丸屋半七方へ、野州都賀高椋の浪人體の者が六人で押込み、主人半七に面會を求めたが、半七は不在だつたので、兄文助が出てゝ留守だといつて斷ると、浪人は矢庭に拔刀して文助を斬り殺し、半七の女房とみに深手を負はせ、其の足で表傳馬町二丁目の自身番へ立寄り、町役人共へ書付一枚を渡して立去つた。

赤坂表傳馬町二丁目藤兵衛店
南御廻り方　手先　半七

右之者儀大橋順藏一件にて、小島強助召捕の節、御用の權威を振、賄金七十兩を貪取、四人にて配分いたし、其外有志の者所業、跡形も無之儀等を、八町堀與力同心の者と同意致、公邊へ讒訴致し、數多の有志を相惱候始末、重々の大惡に付、誅戮可致もの也、猶此上右等の惡計相企候はゞ、容赦の上急度令誅罪者也、半七誅戮可致所逃去候に付、同意の者斬戮いたし候。

亥三月晦日

是は前年（文久二）正月十五日、閣老安藤對馬守を坂下門の下馬先で要擊した浪人で、其の場を逃走した小島强助逮捕の事から降つて湧いた椿事なのだが、一年前に京都の目明し文吉は全く同じ往き方で、浪人に殺されたのに引換へて江戸の半七は自分が助かつて、家族が遣られた、我等は今爰で文久度の江戸の狀況や浪人の亂法を語さうといふのではない、手先の半七が繪草紙屋をして居たことを云はうとするのだ。

おめかの商賣

地本問屋は別だが、繪草紙屋には三間間口の店は尠く、大概間口の狹い奧行の無い、極小體なものであつた、一文字のやうに水引のやうに錦繪を吊し、眞中へ引込めて加留多や合巻を積み上げ、其の前へ双六や拵り繪を飾り、一段低く箱に入れた手遊繪千代紙を並べてある、見附きな奇麗な事、まして別品の見世番と來て居る、江戸の商家では大小の店舖となく、店先へ婦女を出さないのが定例であつて、稀に女房などの店へ出て居るのは大變目立つたものだ、處で繪草紙屋と來ると大半が、奇麗づくしであつた、それも其の筈、弘化頃から繪草紙屋はオメカの商ひと見られて居た、船板塀に見越しの松、猫一疋に下女一人といふお約束の圍ひ者、それでは退屈だとあつて、繪草紙屋が開店される、是は明治まで連續し、やがて烟草屋に振替へられた、是で繪草紙屋の店番をする主婦が變な譯も飲み込めやう、本人の退屈除けと共に、世間から外妾らしく眺められずに濟む厭勝（おまじなひ）でもあるのだ、從つて繪草紙屋といふ商賣が、旦那の來ない間を狆や猫を膝の上に、造り飾つたお姿を新板の錦繪と見比べさせる意氣だけのものであつた、それだから繪草紙屋の店頭は何時も人立ちが多い、大通りには商賣になる繪草紙屋がある、勿論鮮な店番も居らぬ、少し引込んだ處とか新道とか、場末とかのは算盤を失敬した繪草紙屋が多い、餘り人立ちのするのも嬉しくないなどといふ好みもあつたのであらう。

半七は當時其の仲間での大親分だつたといふが、四十近い女房に場末の繪草紙屋をさせて置いた、圍ひ者のとは意味が違つて、町家に住んで無商賣で居るのは目立つ、渠の家は何者だらうと直ぐに指目される、半七の御用聞であることは當時に知れ切つても居たが、それでも聊か隱す心持から遣らせたものらしい、何にしてもオメカの商賣を女房にさせて置くといふことは、彼の生計の好い說明であつて、自分の住宅が妾宅のやうな暮しだつたのが認められる。

親分株の者が町家に住んで色々な商賣を持つて居たのみならず、其の子分等は尙更樣々な世渡りをして居た、親分の家に轉

ろがつて居るのもあれば、職人日傭取川並茶大道商人などで子分になつてゐるのもある、是等は同心から手札を貰つては居らぬ、未だ名前さへ廻り方の旦那衆へ通つて居ない、親分限りの代物なのだ、斯うした雜輩を澤山持つて居るから、改めて化け込むの玉を下げるのといふことはせずとも、聞き込みだけでも隨分獲物はある、此の陰武者の中から働き出して大親分にもなれるのだが、その弊害も亦た甚だしい。

親分の處にゴロ〳〵して居る奴が、近處の興行場とか、私娼の匂ひを嗅ぎ附けるとか、博奕の出來さうな處とかへ、ブラリツと出掛けて往く、ヤア兄いか、茶でも飮んで往つてくんねエ、直ぐ其の後は、是は誠に尠いけれどもと、物を云せはずに若干か包んで出す、近處を懷ろ手で一巡りすれば二朱や一分の小遣が出來る、味を占めて段々足が近くなると、先方でも笑顔ばかり見せては居ない、兄い餘りじやアねエか、此の間ナンシたばかりじやアねエか、此の頃は景氣も好くねエからね、又た來てくんねエなども出る、此處の調子合から顔が善くも惡くもならうといふもの、だが何れにもねだらずには濟まないのである、同じ强請でも下手な啖火を切るやうでは手際が見へぬ、しかし何程巧妙であつても世間の迷惑である、慥に弊害なのだ、のみならず强請の範圍を擴め、何の弱味もない商家を困らせるやうなことも多かつた、店先でゴタ〳〵させては商賣の邪魔になるから、何となしに包んで出す、それにさへ多い少いを云ふ奴もあつたといふ、斯うした奴は芝居に出るトツタリ程の役割りでもない、それでも風聞風說を聞き嚙つて、親分に報告するだけの働きはする、一體市井の無賴を使用するために、明るい場所へも黑い影が映るやうになる、其の影も子分のは小さく、親分のは大きい、親分が派手な茶屋小屋渡世に賑しく暮したり、妾宅好みの乙な暮向であつたりする、其の資本は何處から出る、別段に探偵の費用といふものゝなかつた江戸町奉行所、殊に同心限りの使用人であつた岡引共、聞けば幕末には南北双方の手先の數が五百人あつたといふ、此の大勢の手先の中に大親分は算へる程であつたにせよ、それで喰はなければならない人間が同心の二倍も居たのだ。

今更弊害論でもあるまい、そんなことは先刻荻生徂徠が「盜賊惡人ヲ搦捕ハ衛士ノ役也、當時の與力同心是也、サレドモ衛士ノ方ニテ刑罰ヲ執行ト云フコトハ和漢ノ例ナキコト也。子細ハ刑罰ノ權、其手に在ト見レバ、賄賂シテ罪ヲ免ントスルコト民ノ常情也、故ニ衛士ハ搦捕計リヲ役ニシテ、是ヲ外ノ刑罰ヲ司ル役人ニ渡ス、其役人ノ方ニテ咎ヲ糺シテ、生ストモ死ストモスル事也、然ルニ當時盜賊奉行ノ方ニテ刑罰ヲスル故、與力

同心賄賂ヲ取テ心儘ニ私ヲスルコト、是元來仕方、古法ニ違ヒタル故也、其上江戸中ノ武家町方ニ隱レ居ル惡人ヲ知ルベキヤウナキ故目明トヤラン云ヤウナル者ヲ圍置テ、夫ニサヽセテ御奉行ヲスルヨリ外ノ仕方ハナシ、其指圖ヲスル者、元來惡人ナレバ樣々の惡事ヲスルコト、是又彼テヨリ知レタコトナレドモ、元來ノ仕方行屆ザルヲ改メズシテ役儀ヲ仰付ラルヽ故、御役儀ヲ承ル人モ仕方ニ困リテ是ノ如クスル也」（政談）といつた、是は火方盜賊改の方で盛に目明しを使用したことを指摘したのであるが、當時に名高い目明し爪の仁助は江戸中を締め上げて、茸屋町の芝居の金主をする程だつた、閣老松平左近將監乘邑は、此の仁助を町奉行の手で檢擧させ、獄門の刑に行ひ、以來目明しといふ者を禁制した、火方盜賊改めの權限も縮少され、町奉行の手にしても吟味と捕縛とは課業を分けて、前者を與力後者を同心の仕事にはしたものゝ、結局目明しといふ名稱を江戸で云はなくなつただけで、手先といひ御用聞といふ異名同物が出て來た迄だ。

日髮日剃の小銀杏

廻り方は三ツ紋付の黒羽織、龍紋の裏付、夏なら紗か絽であつた、熱い時分に菅の一文字笠、寒天とか風烈とかには頭巾を用ゐるが、夏冬共冠り物をしない方が多い、それで頭髮が承知しない、小銀杏といつて一種八町堀に限つた結ひ方だ、日髮日剃といつて毎日廻髮結が來る、月代は額を廣く生際を見せないやうに小鬢の處までを剃り、一が詰つて髷は短く、一文字の撥毛先を擴げたゞけで散らさずに、引詰めずに髱を出し、頭へピツタリと附かないやうに出來て居る、一の長いのは御家人のやうだといつて大の禁物、リヤンと極め込んで、博多の帶に雪踏といふ拵へ、御成先（將軍の出向）でも着流し御免なのだから、何時だつて廻りに出るのに羽織袋などは穿いて居ない、斯うした風俗からは與力も同心も變りがないけれども、例の赤い房の附いた十手を佩刀と並べて差すのが與力で、後へ差して居て前からは見へないのが同心だ、それに供の一本ざしは同じだが、與力のは御用箱を後向きに持ち、同心の供は背負つて居る、廻り方は御用箱を背負つた供と、紺看板梵天帶に股引草鞋で木刀一本さした中間が一人、其外に手先が二三人附いて居る。

廻り方は毎日南北兩町奉行所から出る、廻り場は大凡四筋ほどに分けてあつて、交互に巡邏するのだ、江戸の町々には一ケ町に一つ宛は必ずあつた渠の自身番、大道に向いた九尺二間、何町自身番と書いた腰障子が二枚建てゝある、廻り方は此處へ來て、

番人、
ハアーア、
町內に何事もないか、
ヘエーエ
と遣つて次々へ巡つて住く、此の自身番には町役人（家主、地主の代表者）が交替で詰める外に、書役が居り、定番が居る、町內の出來事を記錄するのは書役の任務で、自身番日記へ書き留める、廻り方は巡廻の途上で擧動不審と見て取押へることもあれば、町役人の訴へに依つて召捕ることもあれば、小者（手先）の密告に依つて上げる時もあれば、待つて居て差し口（手先の子分から密告）をする場合もある、踏み込む必要があれば町役人を案内にして小者を遣つて縛らせる、さもなければ自身番まで呼び附ける、廻り方が自身に出掛けるやうなことはない、踏み込んで縛ばるにしても騷がせずに繩を打つのを手柄にした、芝居で見るやうに手先がトンボ返りをするなどといふ事はない、假令抵抗した處でドタン、バタンさせずに召捕るだけの修練はしてある、手剛い閉ぢ籠り者でもなければ、立廻りは見られない、引捕へた犯人は孰れも自身番で、廻り方が一往取調べる。

八町堀には背中へ腓を切らせるといふ通言があつた、十三四から見習に出て、二十年三十年の勤を積まなければ、廻り方まで漕ぎ附けられぬ、それから炎天寒夜、風に雨に吹き曝らされて、成程定廻りで威張るには背中へ腓も切らせたらう、同じ背中の腓だけに賭場の受けを貰ひの裸虫でも、多年の功には盆の明るいもの、定廻りにも盆暗は居ない、朝鮮人に摘まれて寫眞を撮つて進上するやうなのは江戸の昔には見當らなかつた、廻り方は自身番で一往の調書を作製する、町內預けとか、放免とか、送りとか即坐に片附ける、送ると極れば只自身番へは置けない、假監のある大番屋、大番屋は江戸中に七八つもあつたらしいが、名高いのは茅場町と三四の番屋（本材木町三四丁目）だつた、其の大番屋まで小者が繩を執つて、町役人附添ひで送るのである、何故直ぐに傳馬町の牢屋へ遣らずに、大番屋へ預けるかといふと、昔だつて收監となれば輕い事柄でない、如何に廻り方が召捕つたといつても、入牢證文がなければ傳馬町で請取らない、直ぐには決して牢屋へ入れられなかつた、是非とも入牢證文の出來る間は大番屋へ預けるより外に仕樣はなかつたのである。

廻り方は自身に町奉行の前へ出てゝ一件書類を出して、入牢證文を請求する、それが公用人（用部屋といふ、町奉行の官房とでもいふのか、爰に用部屋手附の同心が十人ある。手附同心

といふのは、官房の事務を扱ふ者のことで、其の他の組同心を手附といふのは間違ひだと聞いて居る）を經て吟味中入牢と極り、一件書類は吟味方へ廻り、入牢證文は當番方へ渡る、其處で初めて大番屋へ預けてあつた身柄を引張り出して牢屋へ入れる、吟味方で一調べ濟むと、刑事被告人になるから、入牢證文が換はる、牢屋の帳面に何年何月何日入牢、何年何月何日再入牢と記載してあるのは、此の手續の捗びなのだ、それだから入牢だけなら免許になつたのだが、再入牢となれば乾度口書爪印が濟んで、お奉行様が宣告する處まで往く。

お奉行様の白洲といふものは二度三度のものだ、三度目か四度目には申渡になる、それもその筈、吟味方で吟味を詰めて口書爪印を濟せ、用部屋手附（同心）が擬律から、申渡まで書くのだから、お奉行様の半日仕事（朝から登城して歸邸後に白洲を開ける、町奉行の裁判をする時間は五六時間しかない）に三四件づつ片附けて往けるのだ。

捕物も芝居で見るやうに面白いものでなく、探偵も此の頃の大衆文藝家の書くやうに興味のあるものでない、昔からある大岡政談、遠山政談は小說なので、それさへ支那の小說隨筆から持込んだ趣向だといふことが、實際話では讀者を引附けられないからの手段であるのを既に〳〵證明して居るのである。

江戸町奉行であつた者は前後九十七人あるが、其中でスパイ遣ひの第一は南町奉行鳥居甲斐守忠耀であつた、甲斐守の通稱を耀藏と云つたので、妖怪を音通に耀甲斐とさへ書かれた程、辣腕苛察な男だつたけれども、彼の得意な暗中飛躍に部下の與力同心を使用しなかつた、それには八町堀連中でない者共を働かせた、町與力町同心には一定の規矩があつて、格外な作業を命令する譯に往かぬ、又た命令した處が承知するものでもない。

鳥居は家來の本庄茂平次に謀計を授けて、家齊將軍の寵臣であつた水野美濃守を陷穽した、茂平次の親類の一女が久しく水野美濃守の奥に奉行して居たのがあつた、其の女を水野の奥方の代參に仕立て、茂平次も水野の家來の顏をして、水野が兼ねて信仰し居る品川の修驗教光院了善の處へ出掛け、先方でも顏馴染の女であるから、些少も疑はずに水野の奥方の代參の積りで取持つた、其處で茂平次は内談といふので、弟子小僧を退け、持つて往つた小判包みを與へ、主人美濃守は閣老水野越前守や鳥居甲斐守の讒言のために失職して如何にも殘念だから、貴僧に越前守調伏の祈禱をして貰ひたいと頼んだ、けれども教光院は以ての外だといつて承知しない、茂平次は此の手では往けないと見て取り、其の後數回參詣して心安くなり、僧揃者も武家奉公が面白くなくなつたから、今度水野家から暇を貰つた

が、此の上は渡り奉行もしたくない、貴僧のお弟子になつて山伏の修行が致したいと懇々頼み込み、敎光院へ住み込んで朝夕まめ／＼しく働き、十分了善に安心させ、間合を考へて、お陰で月毎の修行事も油斷なく、勤修するまゝに信心、肝に銘して有り難く、お弟子になるのが遲かつたやうにも思ふ、其の昔を悔ゐる中に忘れ難いのは故主の身の上、及ばぬまで山修行をして、孔雀明王の秘法に勵み、何とぞ美濃守殿の御心願御成就を祈りたい、就いて師僧の法力をも添へられ、驗者の功德を示して頂きたいと涙を流した、了善は正直律義な人だけに、欺かれるとは知らずに、忠義な者もあるものだと大變に感動し、其の儀ならば御身の苦行を幇助しやうと、高尾山へ同道し、琵琶の瀧で水行することになつた、高尾山に籠つて孔雀明王の秘法を修する第三日目、難行に弛んでならぬ、信心は飽くまで勇猛にと、了善は茂平次を策勵しながら、行衣へ着替へさせ、共に漲り落る瀧壺へ下りやうとする其の時、御用々々と口々に叫んで、大勢の捕方が出て來て、了善茂平次を捕縛して江戸へ引立てた。

鳥居甲斐守は了善を白洲へ引出して、最初から自身に調べた、誰に頼まれて誰を呪咀したと嚴重に訊問した、了善は身に覺へのない事だから白狀する筈もない、鳥居は知らぬと云つて

も證人がある、其の方は此の者を存じて居らうがと云つて、引出して來たのは繩付の茂平次だ、茂平次は隠して見ても隠し切れない、師の坊と共に美濃守殿に頼まれて、越前殿を調伏したことを白狀して了つた、今は御坊も左樣に申立てゝ御慈悲の御沙汰をお願ひなさいと云つた、是で氣の毒にも了善は無實の罪に落ち、水野美濃守も敎光院に水野越前守を調伏させた科で信州諏訪へ山流しになつた。

此の話は護持院原仇討の話に依つて、誰彼にも知られて居る、茂平次は浪人やら囚人やらになつて、盛にスパイ振りを發揮した、斯うした例話が、若しも八丁堀の與力同心にあつたなら、何程江戸の警察は危險なものであつたらう、幸に讀者を喜ばすやうな話が八町堀の連中になかつたのは、八百八町の幸福だつたに相違ない。

東西同事譚

富士川游

東西類事談

○

處變れば品變る。難波の蘆も伊勢の濱荻とやら、東洋と西洋と、人種も異りて風俗も同じからず。互に相くらべて考へるときは相反して居ることは數ふるに暇のないほどである。手近なる例を擧げると、西洋の人は鉛筆を削るに小刀を手前に向けるが我邦の人は向ふに小刀を使ふ。西洋の鋸は押して引ききるやうに出來て居るが、我邦の鋸は引きてきるやうに造られて居る。西洋にありては人を呼ぶに、手掌を自分の方に向けて示指を內の方に曲げて動かすのであるが、我邦の風で人を麾くには手掌を外面にする。西洋の人は他人の前に足を露はすことを非禮とするが、肩から胸までを裸にすることは無禮とせぬ。我邦では足を裸にすることは禮儀上は八釜敷言はぬが、肩から胸までを露はすことは非禮として咎める。獨逸などでは物を買ふに個數を前にいふ、たとへば三枚の三錢郵便切手といふ類であるが、我邦では三錢郵便切手三枚といふ。たとへば六十錢の買物をして一圓の紙幣を出すと、我邦の商店では一圓から六十錢を差引いた殘りの金額四十錢を釣錢として戻して吳れるが、獨逸では六十錢を引き去りて、七十錢と言ひながら十錢銀貨を出し、又八十錢、九十錢と言ひながら各一個の十錢銀貨を出し、最後の十錢銀貨を出して一圓といひ、それにて釣錢の全部を渡すのである。

○

かやうに西洋と我國とは、その風俗習慣を異にする間に於て、

東西その揆を一にするものがあり、又彼此互に相類するものが有るのは亦一奇と稱すべきであらう。

○

獨逸の言葉に「ヘバムメ」(Hebamme) といふのがある。「ヘブ」(Heb) と (Amme) とを結びつけたものであるが、「ヘブ」とは「持ち上げる」の意、「アムメ」は乳母の義、それを合せて「ヘバムメ」としたので、すなはち我邦に言ふところの穩婆(産婆) である。穩婆を「トリアゲババ」といふのは獨逸人が「ヘバムメ」といふのと正に同じ意味である。

○

今から二十四五年前、私が獨逸のエーナ市に居つたときに實見したことであるが、その頃エーナから南の方に五六里ばかり距つたるチウリンゲン州の山中の一小村里に開業した一人の青年醫師が居つた。一生懸命にはたらいて澤山の病者を取扱つた。ところがこの地方の風習として醫師の許に謝禮を贈るのは春の昇天祭の時と冬の降誕祭の時との二度で、それも病家から勝手に持て來るのであつた。丁度舊時の我邦の風習のやうに、盆と暮とに病家から藥禮を贈るのと同様であつた。降誕祭の頃になつて病家からどの位の謝禮を贈つて來るかと心待ちに待つて居つた青年の醫師はその時に一驚を喫した。それはその地方では多くの家で硝子製の玩具を製造することを業として居るところからどの病家からも謝禮として硝子製の玩具が持參せられたからである。青年醫師は山の如く積まれたる硝子製玩具をどうすることも出來ず、それを卸問屋に引き取つて貰つたが、謝禮としてこれを貨幣につもれば一年中無給で病家のために奉仕したに過ぎなかつた。驚いて業務を閉ぢて他に轉じた。醫學の進歩は世界第一と稱せらるる獨逸の中にも片田舍にはかういふ狀態が存在して居つた。

○

エーナに就て思ひ出したのは、町の中央に「マルクトプラッツ」(Marktplatz) と名づけて、廣場があつて、そこに年の暮に「ヤールマルクト」(Jahrmarkt) といふものが開かれることである。「ヤール」は年、「マルクト」は市で、すなはち年の市である。江戸のむかしから今の東京に至るまで毎年、十二月に淺草、神田明神などで開かれる年の市と同じやうに、年の暮になつて、箒やらバケツやら種々の日用雜器の類を陳列して賣聲喧しく噪いで居る。この狀態まで我邦の年の市と同様であつた。

○

匈牙利のブータペスト附近の村落に、我邦の田舍に見るやうな釣瓶の井戸が處々に存在するのを見て不思議に感じた。それ

に匈牙利の人が我邦に於けると同じやうに姓名を稱するに姓を前にし、名を後にするのを見て更に不思議の感じを深くした。西洋の諸國ではすべて名を前にして姓を後につけて呼ぶのに、ひとり匈牙利にありて、姓名を呼稱することが我邦に同じやうであるのはいかにも不思議といはざるを得ぬことである。

○

西洋（殊に葡萄牙）の言葉が足利氏時代の末に我邦に傳はりて、それが今に廣く行はれて居るものが尠なくないといふことは誰も知つて居ることである。先年なくなられた元良博士の話に、同博士が伊太利の旅館に宿泊せられたとき、一夜蠟燭の必用に際し、その伊太利語がわからぬので、圖を書いて給仕に示されたところが給仕はそれを見て忽ち燭を出して、ああカンテラかと言つたので自分も驚いたといふことであつた。これはカンテラ（蠟燭）の言葉が葡萄牙人よりして我邦に傳はつたのを我邦ではその儘に使用して居るのであるが、それとは違つて、西洋にある言葉と我邦にある言葉とその形式が同じことで意味が非常に相違して居るものがある。我邦に寶田石油會社といふのを羅馬字にて書けば Hoden（ホーデン）となる。それは獨逸語の睪丸（Hoden）である。余は露西亞語には不案内であるが、「エビス」は女子の陰部の稱呼であるといふことであるからエビスビールの名稱などは露西亞では不都合であらう。

○

西洋の人の苗字のつけ方と、我邦の人の苗字の附け方とには、根本に於て相違するところがあると言つてもよいが、しかもこの苗字の内には東西全くその揆を一にするものもある。

Stern　星　　Lange　長
Fontan　泉　　Fichte　松
Kleinenberg　小山　　Ostwald　東野
Steinthal　石谷

キッスカルト（Risskalt 褥又は枕の寒冷）のやうな奇抜の苗字は我邦には無いにしても、ベーゼ（Böse 惡）は我邦にも惡七兵衛景清といふ相手がある。

○

ヘンリーといふ人は獨逸で有名の解剖學者であつたが、チューリヒ大學の教授であつたときに或宴會で一人の美人を見染めて結婚を申込むだが、その人には已に婚約の男が有りて先生大失敗をした。その後又一人の婦人と婚約を結んだまではよかつたが、今度は婦人の方から破談を申込まれた。先生も大に困まつて居つたところが、その友人の家に一人の下女が居つてヘンリー先生が訪ねて來ると俄に氣が浮き立ちて立しく働くが、へ

ンリー先生が歸つた後には悄然として沈鬱するといふ風で、その動作がいかにも怪しいのでその家から暇を出された。所でこの女中は大に運動したと見へて、ヘンリー先生が住居して居る建物(ビルヂング)の中の某家に雇はれて同じく女中奉公をして、ヘンリー先生の出入に目をつけて居つた。ヘンリー先生もその女中の執着に動かされて遂に夫婦の約束を結ぶに至つた。しかしながらその女中の身柄があまりに卑いので流石に人の噂も氣にかかるので學者先生もこれは閉口して、一策を案じ、その女中を自分の妹の家に預けて相應の教育作法を習はした。ところがこの女中は中々の才物にて數年を經る内に大學教授の妻としてはづかしからぬやうになつたといふことである。

○

これと同一轍の話は頼山陽がその夫人リエ女史と結婚したときである。頼山陽がまだ故郷の廣島に居つた頃には藩の醫官御園氏の女を夫人としてその間に男子があつたが、これは離縁となつた。山陽が京都に來てから新しい夫人を迎へるに當りて江馬細香女史を始め外にも二三の女子との間に話があつたが、その話は纒らなかつた。ところが山陽が或日、友人の小石元瑞を訪ふたときにその席に茶をくむで出た女中が氣に入つてその女中を懸望した。小石は蘭醫の巨擘で富裕の生活をして居つた人であるから、この家の上女中は固より尋常の女中とは類を異にして居つたのであらう。しかしながらその女中はもと江州の煙草屋の娘で固より身分の卑しいものであつた。そこで小石はその女中を自分の娘分として山陽の許に嫁かせた。それが後に賢夫人として聞えたるリエ女史である。これ等は東西類事談の好材料であらう。

○

迷信といふものは知識を離れて現はれるものであるから、これこそ眞に東西同轍である。西洋では「七」といふ數字を貴び、我邦では「五」といふ數字を貴ぶ。西洋では「十三」を忌み、我邦では「四」を嫌ふ。我邦で女の厄年は「十九」と「三三」とであるが、「十九」は「重苦」の音に通ひ、「三三」は「散散な目に遇ふ」といふ意味でそれを忌むまでのことである。數につきての迷信は西洋でも同じやうに滑稽に過ぎたものがある。その他、日のよしあし、年のよしあしなどをいひ、又符呪の類にて疾病を治し、幸運を求むることなど、この迷信の狀態は東西全く同一である。

妖婆

畑耕一

西洋にWitchといふものがある。日本にも「みちのくの安達ケ原の黒塚に鬼こもれりときくはまことか」の古歌から、謡曲や浄瑠璃に仕組まれた悪婆がある。宿借る旅人の肉を食つたり、孕み兒の生血を取つたり、石の枕で眠し殺して金銀財寶を奪つたりする恐ろしい婆さんだ。今昔物語にある、北山科や羅城門の白髪婆、源平盛衰記にある藍婆鬼や、また多くの奇聞集や諸國物語などを讀むと悪婆の話には随分ぶつつかる。すでに書紀神代卷にも鬼婆の字が見えてゐるから、日本では原始的である。いや、希臘神話にもパアシユースの條の中に、氷海の彼方に棲む白髪青面の三人の妖婆の話が出てゐるから、西洋でも大いに原始的である。

しかし、鬼婆妖婆といつても、これを現代的に解釋すれば、べつに地獄の鬼とか、妖怪變化とかの空想的の形をとつたものではない筈で、實は女子の邪智奸悪の相(すがた)を、こう見たてたものなのである。吳淑の諸名錄に、「鬼婆則天武后」とあるが如く、むかしから一つの形容として用ひられたと見るが至當であらう。

ところで、Witchのはうがお株守になつたが、Witchの思想は今から千二百年前、偶像教が基督教に侵されはじめたころからはじまつた——、いや、ロゼツテイの詩「リリス」に、アダムがイヴを與へられた以前の、彼の最初の女としてのリリスを、Witchとしてゐる位ゐだが——だが、なんといつてもWitchの隆盛は十六世紀以降の話で、シエークスピアのごときは、その作にWitchを現し、或はWitchといふ言葉を、随分各所に用ひてゐる。なかにWitchの美しい、とろかすやうな魅力(チヤム)を説いてゐるところがあるから、若盛りのWitchも想像されたにはちがひなからうが、大體Witchといへば恐ろしげな妖婆を想像する。代表的な、「マクベス」の中のWitchがそれだ。暗い洞穴のなかで、グラ〱沸えたつ大釜に、蛇や蠑螈(いもり)の眼や蛙の趾指(あしゆび)や蝙蝠の羽や、犬の舌などを投げ込み、怪しい呪文をとなへながら、その周圍を踊り廻る三人のWitchは、どの役者が扮し

醜惡な婆さんである。

この惡婆の魔法が、すなはち Witchcraft なるもので、この言葉は英和辭書を引くと、魔術、妖術、魔力、魅力、不可抗力と譯してある。勿論それでいゝのだが、僕は故あつてこれに飛んでもなく馬鹿々々しい譯語を與へたのである。なにを故あつてといふ?——それにはちつと面白い仔細があるのだ。

で、譯語は? 曰く——婆妖!

再びシエークスピアを引きあひに出すが、Witch をよく用ひたゞけに、この Witchcraft といふ言葉を、たくみに人間の心理を貫いて使つたのも、やつぱりシエークスピアである。

「オセロ」の第一幕第三場に、こんな言葉がある——

……………Upon this hint I spake;
She lov'd me for the dangers I had pass'd, And I lov'd her, that she did pity them. This only is the witchcraft I have us'd: Here comes the lady; let her witness it.

これはオセロが、ヴエニス大公に、その妻デスデモナと自分との愛を、面白く解釋していふ言葉である。——女は男の受けた危難のために男を愛する。男は女がその危難を憐れみ同情してくれるところで女を愛する。これこそ男が常用した Witchcraft であるいふわけだ。

しかし、この Witchcraft は、男が利用するものなので、女もすなる「婆妖」の譯には、ちよつとあてはまらない。そこで、ぼくは折角のこの飛んでもなく馬鹿々々しい譯語のために、また、こゝにお話しやうとするぼくの事件に都合よくあてはめるために、シエークスピアの詩句を敢へて冒瀆して、終りの文句の一字だけを變へさせて貰ふ。「男」を「女」に變へさせて貰ふ。——と、かうなる。

——女は男の受けた危難のために男を愛する。男は女がその危難を憐れんでくれるところで女を愛する。これこそ女が常用した Witchcraft なのである。——

そこで、半年ばかり前の話。

なんでも夏の暑い盛りだつたと思ふ。ぼくは毎日N新聞に斷片的な隨筆を書きつゞけてゐた。その或る日の題目に「老嬢」といふのがあつた。どんなことを書いたか、くはしいことは忘れてしまつたが、老嬢といふのは、浪漫的な戀愛から見はなされ、多くの場合、社會的利益にもはなはだ緣遠いものだといふやうなことを書いた。老嬢が男性化されることは、生理學的にしかたのない話で、ダアキンも、女性がそのまゝへといふのは

結婚しないで年とると、その性格がまつたく男になるといひ
てゐる。彼は雌鶏がそのまゝ老いると、長い尾羽やとさかや蹴爪を生じ、時をつくり、遂には雄鶏同様な好闘性まで備へて來るといつてゐる。こうした男性化された老嬢が、浪漫的戀愛から見放されること、換言すれば男性から嫌はれるといふことは、なによりも先づ彼等が自然の法則の除外例であるといふ點にある。では、年齢からいつて、どの邊からを老嬢とするかといふに、評論家ゲオルグ・ブランデスは、女性が眞に戀愛を感ずる定年を基本として鑑識し、卅歳を標準とした。小説家バルザックやジョオジ・サンドなどもこの標準を踏襲して老嬢を描き、佛蘭西の小説家であり評論家であるヂュール・ジャアナンは、卅歳から四十歳の老嬢には、熱情（パッション）も戯曲（ドラマ）もローマンスも失はれてしまふと斷じた。――と、そんなことを書いた。

すると、それから一日をいて同じ新聞の投書欄に、同じく「老嬢」と題した一文が掲げられた。おや〳〵と思つて讀んで見ると、これはまた大變な老嬢讃美論なのである。これも今では逐一を記憶してはをらぬが、なんでも世界の重なる女性の仕事は、すべて獨身の老嬢によつてなされたものであるといふ風のえらいいきまきかたで、戀愛に最も深い現代的解決を與へたエレン・ケイ女史のごときも、堂々たる老嬢ではなかつたかと、さらきなほつてゐる。こんな気分だつたが、それも忘れてしまつたが、そのうち遂にその投書家は、ぼくの住居をあてゝ、無名の手紙を續けざまによこした。達者な萬年ペンの走り書きで、ひどく立腹してゐる様子は、その文字が、まるでさゝらで刷（は）いたやうに、跳りあがつてゐるのでもわかる――貴下はわたしを知るまいが、わたしは貴下を知つてゐる。或る講演會に出た貴下を見たことがあるし、また或る時は劇場の廊下で、貴下を見うけたことがある。わたしは貴下が下劣な嘲笑をあびせかけやうとする老嬢なのである。今までは貴下の書く戯曲に小説に隨筆に、相當敬意を拂つてゐたのであるが、貴下がこんどN新聞に發表した一文によつて、貴下は女性に對していかに無理解で沒同情であるかゞわかつた。今後、わたしはあらゆる機會に、貴下の愚劣な人物であることを知己友人に吹聽してやる。やがて貴下は讀者を失つて、原稿も賣れずに、悲鳴をあげる時が來るであらう。――と、まづこんな猛烈さであつた。

續いて來る手紙々々、いよ〳〵猛烈の度を增し、およそ世の中で、お前位ゐ憎むべく卑しむべく呪ふべき男はないといふほどになつた。まかりまちがつたら、女ながらも闇打ちの一つし兼ねまじい權幕となつた。飛んだ奇妙な災禍を買つたわけだなと、ぼくは唯苦笑した。五六度目になると、お前は何月何日の

夜銀座の××カフエーで、酒をのみながら女給に相手になつてゐたらう。またお前は何月何日の夜、××劇場の廊下で女優と得意らしく話をしてゐたらう。お前はそんな輕薄才子である。人格劣等な男である。それだからあんな誤つた批判をするのだ。お前に老孃の眞價がわかるものか。お前のやうな男は一日も早く文壇から消え失せろ。――と、ますます物騒になつて來た。物騒はいゝが、この手紙で見ると、この女はどこからかぼくの行動を張り番して、悪事摘發を試みやうと構へてゐるかの如くである。一時は、誰かぼく自身の友達が物好き半分に嫌がらせをやつてゐるのかとも考へたが、ぼくの友達には、そんな暇人はない筈だし、また暇はあつても、こうまで根よくいたづらをする男はない。ぼくを嫌がらせるなら、彼等には、もつとほかに賢明なる方法がいくらもある筈である。すると無名の手紙の主は、やつぱりなにがしなる老孃でなければならぬ。

――で、手紙は毎日のやうに舞ひ込む。かくべつ氣にもとめないが、しかし讀んだ途端は、ちよつと不愉快になる。ぼくは、例のさゝらで掃いたやうな、ペンの字を見る每に、安達ケ原や羅城門の悪婆、それからマクベスの witch など、眼のギロリと意地わるく光る、醜怪な異形の婆の姿を思ひ出した。くだらんことだが、こうまで執拗にやられると、多少不氣味でもあるし癪にもさはつて來る。が、なにしろ無名の手紙であるどうすることもできない。氣をつけて消印を調べて見ると、或は牛込のはうから或は芝のはうから或は赤坂のはうから或は四谷のはうから、御苦勞千萬にも毎日投函の箇所を變へてゐる。ひどく計畫的であるところが、また面白くもあるし、なんだか嫌でもある。

『たしかに婆妖だ。婆妖にとつ憑かれはじめたんだ。』

或る夜、第九通目の手紙を受取つた時、ぼくは、第九番目の苦笑を漏らしながらつぶやいた。婆妖とはこの時、たくまずして口から滑り出たぼくの新造語であつた。

――そして、まさに數をそろへて第十通目、大變な大團圓が來た。

手紙には、こんな意味のことが書いてある。――貴下は、次第に一つの危機が迫つて來たことを感ずるでせう。貴下はすでに幾十人かの女性の讀者を失つた。彼等は非常な反感を貴下に對してもつてゐる。彼等は更に貴下の愚劣を諸方に向つて吹聽するから、貴下の讀者は波紋のひろがるやうに減つてゆくでせう。貴下が文筆の人として生命を斷たれることは、眼のあたりである。だが、こうして危機に瀕して來た貴下を考へると、わたしはなんだか貴下を憐れみ、貴下に同情したくなつた。この

わたしの同情によつて、貴下がひろい人類愛といふものに眼ざめてくれて、しかもわたしの同情を受入れて、貴下がわたしの孤獨な生活にまで、その人類愛をふり向けてくれるなら、わたしは明日午後×時頃××劇場の南側入口に待つてゐるから、いつしよに芝居を見物しながら、温かい意見を交換したいと思ひます。貴下はわたしを知らずとも、わたしは貴下を知つてゐるから、わたしのはうから聲をかけて あげます——

『馬鹿！人類愛が笑かせる！』

ぼくは手紙をちぎつて床の上に敲きつけた。これだけでは氣がをさまらないので、またつまみあげて、便所の糞壺の中へ蹴込んでしまつた。そして第十番目の苦笑をした。

無論、ぼくがどんな氣まぐれ屋であつても、翌日××劇場へ見物に出かける物好さは持合はさなかつた。

手紙はそれつきり來なくなつた。

『馬鹿々々しい。飛んだ妖妖だ！』

——と、その後一と月もたつて、ふとこのことを思ひ出して笑つたが、その時、またふと「オセロ」になんだか、これに似た心持の文句があることを思ひ出して、書棚から沙翁全集をひつぱり出して見た。そして第一幕第三場に讀み到つて、これだく面白い、とまた笑つた。

Witchcraft といふ意味たつぷりな言葉に、飛んでもなく馬鹿々々しい、妖妖といふぼくの新造語をあてはめようとするのは、かうして、まつたくは、あの飛んでもなく馬鹿々々しい老嬢事件の、飛んでもなく馬鹿々々しい記念なのである。

東西絶句帳

松居松翁

◎芝居の初とり

どうせ同じ人類のする事、顏の色が白からうが、黄ろからうが、鼻の高さが二三分低からうが高からうが、住つて居る國土

が西と東に立分れて居やうが、さう丸つきり違つた事の起らう筈はない。なれども英國と日本の芝居の濫觴ほど、符節を合するほどに似たものも少ない。まづ「時」からいふと、倫敦の最初の劇場が、初めて蓋をあけたのは、千五百七十六年といふから、我朝にては正親町天皇の御宇で、織田信長が一向宗の坊さんと戰をした年、出雲のお國が女歌舞伎を初めた年と二十年しか違はない。それに其劇場を立てた場所はといふと、前者はテームス河畔、後者は四條の河原。向ふは鬪牛、鬪熊、撃劍、綱飛等の見世物小屋の中へ、割り込んで初めたのだが、こつちのも禽獸、蓮飛、放下師などの見世物小屋と軒をならべて居たのも一奇だ。それに一部に高い櫓があつて、そこへ旗の立てゝあるのも、日本の梵天櫓と共通するところがあり、興行のある日は窓から顏を出して喇叭を吹くといふ向ふの習慣は、こつちの人寄の太皷と同じである。たゞ一つまるで反對なのは、女優の盛んな英國でも、昔は若衆が女方をつとめたもので、今でもまだ十分に女優の發達せぬ日本では、女優が芝居の創始者となつた事だ。

◎女優の惡口

女優に對する世界の惡口の烈しい事も、東西揆を同うして居るらしい。たとへばわが森律子孃の口の如き、贔負目といふのか、愚老などには大して大きいとは思はれないが、近頃では、律子孃自身でも賣物にして居る程、大きいものと相場が極つてしまつた。ところが數年前に世を去つた佛國の名女優サラ、ベルナル夫人なども、若い頃は痩つぽちだつたところから、それがいろ〳〵に誇大されて、隨分馬鹿々々しい噂が起つた。その中の一つは、彼女が芝居の歸りに馬車へ乘らうとするところを、兇漢に襲はれた。すんでの事に身に危害をうけやうとする處を、ひらりと身をかはして、馭者のもつて居る鞭の蔭へかくれたので、兇漢は彼女の姿を見失ひ、すご〳〵と立去つたといふのだ。なんぼ痩つぽちだからと云つて、鞭より細い人間もあるまい。又或興行師は、彼女を自分の座へ雇はうと思つて會見したが、「彼女はどうも鍵の穴からもぐつて、他の室へ闖入しさうだから、御免蒙らう」と云つたと、眞しやかな噂が今も殘つて居る。又有名なルバージ畫伯が彼女の肖像を描いた。而してその足下に彼女の愛犬を一匹描き加へた。それを見た小デウマは、から畫伯にたづねた。「はゝあ、これは犬が骨をくわへて居るところだね。」この調子で惡口を云はれる段になると律子孃の口の中から、天竺德兵衛が蝦蟇へ乘つて出る新狂言が書下されたなどといふ評判が言へぬものでも無い。

○無學な文學ファン

戯曲の作者に對して一般見物の冷かな事も、東西相共通して居るものが有る。愚老の様な平凡作者は、もとより當然な事ではあるが、それでも帝劇、歌舞伎の兩劇場などは、可成深い馴染になつて居るが、寶店の人などには、愚作が出て居る時でさへ、「久しく御作を拜見致しませんね、その中見たいものです」などゝ、えらい御世辭を云はれる事があり、帝劇の樂屋などには、帝劇以外に愚老の物が出るといふ事は、何か不思議とでも思つて居るかの様に、「たまには御書きになつたら如何です」などとやられる事もある。自分のかいた狂言を見たばかりの人が、愚老の作といふ事はまるで知らずに、變な褒め方をしたりする事もある。兎に角、日本の見物は、作者に對して大抵留意をして居ないらしい。そこへ行くと、西洋では……なぞ、愚老も能く云つたものだが、西洋にも帝劇の樂屋流の人は絶無とはいへない。久しい前であつたが、愛蘭（アイルランド）のダブリンの或劇場で、ソフオクルスの悲劇を上場した事が有る。半可通の文學ファン連中は、新らしい戯曲とか、劇とかいふ事は、耳學問で知つて居ても、希臘劇については何の造詣もない事、日本の所謂歌舞伎劇に一知半解なると同じ程度であつたらしい。最後の幕が下ると、「作者を出せ」「作者を出せ！」と要求したら、[illegible]にすつかりお株を喰つて、散々蹴々と、窓外へ身を現にして、一時には三千年前に死んでしまひました。」すると新らしい文學者先生忽ちどなり返して、「では、その墓を發いて骨をもつて來い。」

○新劇運動

から新代の文學通が、所謂新劇運動なるものをやる事、あちらの國でも深山ある。いや、あちらの國の模倣（イミテーシヨン）が、日本にも出來たのだといふ方が正しいかも知れぬ。日本の方のは、それに關係のある人でない限り、御仲間でない限り、可成閉口な代物も大分あるらしいが、西洋にも數（かず）限りなく有る。それが雜誌や、新聞に、麗々（れいれい）しく名を掲げて、そのまゝ御仲間が御大層に吹聴する。一萬里隔つた國の若い人が、それを見て眞似がしたくなるのに無理もない。愚老は西洋へ行つてもなかなかいか物喰ひで、手の届く限り、變な代物を漁（あさ）つて歩いたが、一番まいつたのは、ウエストボーン・グローヴのビジヨ・スヰアタアへ、英國戯曲協會（インダリツシユ・ドラマテツクソサイテー）の演出を見に行つた時だ。何しろ『アワア』といふ三幕の前にアーサア・シモンズの『クレオパトラとユデア』が出るといふのであるし、英國戯曲協會といふ名が名であるから、郵便で座所をレザアヴして、はるばると見物に出かけた

ものだ。ウエストボーン・グローヴといふのだから、下町の見当はついて、最も近いところまでバスに乗つて行つて見たが、それが[illegible]・スエアタアなるものが[illegible]事を[illegible]たい。[illegible]に[illegible]いて、やつとそれでもこの[illegible]へ入つて見ると、[illegible]白人の[illegible]を[illegible]、小さい[illegible]い[illegible]え、[illegible]は[illegible]たつたが、[illegible]人の外には[illegible]。人[illegible]居ない。これでも[illegible]時は[illegible]の[illegible]を[illegible]て、やつと[illegible]十人ばかりの[illegible]た。もつともそれから[illegible]切[illegible]に居る[illegible] [illegible]

客だつてこいの[illegible]ば、お[illegible]といふことを、お[illegible]のおずいとよつて、[illegible]なしにしたといふ[illegible]いてあつたた、[illegible]行にもこんな[illegible]は[illegible]ある。[illegible]たケンブルが[illegible]て居る時、[illegible]に[illegible]たケンブル[illegible]。自分ればあるほど、[illegible]を[illegible]る。ケンブルこゝに見いて[illegible]として[illegible]を[illegible]、[illegible]人[illegible]、あの[illegible]にふへた[illegible]って行けません[illegible]に[illegible]

後見に問いて來る

[illegible]

芝居をやめなければ

たしかに[illegible]に、[illegible]をした[illegible] [illegible]

つ左團次君にことはつて、奥へ入つた。丁度また二日目で、作者が後見について居たから、正本の表紙をはがし一蝶之助君に渡した。蝶之助君は之を受取つて舞台に来た。すると時は闇暗の谷瀬休之助に讀めといふ。谷瀬は壽美藏君の役、毎日かいた文字通りに讀んで居る人が、「江戸城總攻め一條」と書いてある紙片を渡されたのだから、目を白黒させたが、どうにか記憶をたどつて無事に讀んでしまつた。あとは樂屋で大笑ひになつたが、舞台監督などといふ責任ある役目を引受けて居ると、どうにもならない問題だが、時々生命を削るほどの苦みをしなければならぬ。これに似た話は例の名小説家デッケンスの有名な話として、今以て英國俳優の間に膾炙されて居るのがある。それはローチエスタア劇場での話で、或俳優がひよいと台詞を忘れた。後見役のプロンプタアは、どこかへ、遊びに出かけ、台詞をつけて貰ふ道はない。四苦八苦でもがいたが、どうにも仕様がない。そこで相手方の前に手を下げて、「遺憾ながら後刻参上。」かうきつぱり斷つて置いて、舞台裏へ引込んでしまつた。而してプロンプタアから台詞を聽くと、今度は元氣よく又舞台へ歸つて、「只今立歸りました。」

◎俳優の涙

これも第一の大切な場合につ…ての時のは、ぱたになつた兒太郎君の身体さ、愛之助君に位の高く成つて、ここはあるなし張つて、もつと強くなつてと云つて聞かせたが、如何も出ふ様でない。附人の成瀬君にその話をすると、「どうも相済みません。實はあそこになると、坊ちやんは自分から泣いてしまふので、どうも手のつけやうが有りません」といふ。愚老はそれを聞いて、大に感動し、もう自分の注文を悉く撤回した。ほんとうに心から感動して泣いてくれるのなら、之れに上越す自然な表情法はない筈だ。側から附焼刃の注文などは餘計な事だと思つたから、もう、何も兒太郎君には云はない事にした。併しこれは西洋の名優にも澤山ある事だ。ペッタアトンがハムレットをして、父の亡靈に出つくわすと、凄い程蒼白になつたさうだ。有名なシドン夫人はかなしい役をすると、幾度涙をぽろ〳〵こぼしたといふ。米國で有名な女優マウロウ孃が『ジヤン・ダアク』で、止め度なく涙をこぼすのは、愚老も自身で見た。併しまだ十一歳か十二歳の兒太郎君が、此の如く其役に感動するといふ事は驚くべき事だ。彼の將來には、刮目して待つべきものがある。

◎

近頃は『忠臣藏』の芝居を見るのに、筋書が無ければならな

らない人があると、愚老程度の頭の古い芝居關係者は、みんな憤慨する。ところが近頃の演劇雜誌などを拜見すると、自國の文藝を論じておいでになる文學者諸公、評劇家諸公にも、此程度と思はれるが、決して稀ではない。歌舞伎劇なんてものは、知らないのが自慢になるらしいのだから、無理に知らうとするのは、耻の種を増すやうなものだ。況してや西洋にも、かういふ程度の見物は決して少くない。忠臣藏を見た事がなくとも、勸進帳を知らなくとも、それで戯曲を論じ、舞台藝術を論じていけないといふ事は、國際聯盟の法條のどこに書いてある。全く箆棒な話だ。或晩ダブリン劇場で、デッグスといふ俳優がハムレットを出した。ところが父の亡靈に逢ふ件で、血管が破裂して急に倒れてしまつた。興行人は仕方が無いので、外の一座の連中にシエリダンの喜劇を出させる事にした。ところがデッグスの有名なハムレットを見やうと思つてやつて來た見物の一人、樂屋がごつた返して居る間に、劇場外の料理屋で食事をして、さて見物席へ還つて來て見ると、滿場の見物はみな腹をかゝへて笑つて居る。喜劇ならいざ知らず、『ハムレット』といふ悲劇に、かう見物が笑ふ筈はない。これは劇場を間違へたのであらうと、別の劇場へ入つて見ると、こゝはたしかに悲劇で、見物もしづかに見て居る。成程これでこそ『ハムレット』だと、二幕ばかり見て居る内に、それがつまらない探偵劇であつた事がやつと分つた。少し拵へたやうな話だが『演劇逸話（スエアトリカル・アネクドート）』といふ本に出て居る。いや、胸に手をあてゝ考へて見ると、愚老などが劇評家と妄稱したり、舞台藝術がどうのかうのと云つて居た頃は、悉皆此愛蘭の見物そのまゝであつた。いやはや耻かしい話だ。

舌のパイ

小島政二郎

（一）

一人の友人が、

「コジヤツク・ツールンプローシユの愉快な話」と云ふ本を讀んだことがあるか。」と敎へてくれた。

早速買つて來て讀んで見ると、成程愉快な話が充滿してゐる。地獄の閻魔大王が胃病をわづらつて、醫者から「舌のパイ」を食ふことを勸められる。で、大膳頭が巴里から人間の舌を取り寄せて料理して食膳に供へた。ところが、大王は一口味はつて、旨くないと仰しやる。

「陛下、不思議に堪へませぬ。今朝程仕入れましたばかりで、ごく新鮮な品なのでございますが。ハイ、一人の婦人の綻針に集まつてペチヤクチヤ無駄話をしてゐる一ダースのお友達の中から選びましたので。」

「うん、それで香味に乏しい理由が分つた。町の女房達は、舌料理にかけては、天才的な閃きに缺けてゐる。從つて、纎細な味がない。最上の舌料理を得ようと思つたら、尼寺へ行くに限る。あすこの少し歳を取つた手合は、必要缺くべからざる香料を巧みに混ぜることにかけて實に天下一品である。――例へば、怨みの胡椒とか、陰口の麝香とか、あてこすりの茴香とか、中傷の肉桂とか……。」

そんな話があるかと思ふと、シヤーレマン帝が十二人の貴族を從へて、ジエルサレムへ巡禮に出た時の話がある。一同は聖地での巡拜を終はつて後、コンスタンチノープルへ旅行を續けた。そこには、武侠勝々たるキング、ユーゴーが、宮殿の華麗を誇つてゐた。

一同は歡待されて、珍酒美肴を滿喫した。やがて揃つて寢室に退いたが、醉が發して眠られぬ。酒は人を快活にする。眠られぬまゝに、彼等は大言壯語を樂んだ。

「十分鎧つた、キングユーゴー陛下第一の騎士を馬上にてわしの面前に連れ出して來て貰ひたいな。わしが一度劍を揮へば、冑や鎖帷子は勿論のこと、鞍も馬も斬つて、劍の先が地下一尺も切り込むだらうと思ふよ。」

かう云ふシヤーレマン帝の大法螺を冒頭に、

「私は、六十人かかつてやつと持ち上げ得る鐵の球を力一杯投げつけて、この御殿の壁を六十間もボクンと穴を明けて見せますね。」と云ふ者もあれば、

「どうです、向の柱は誇らかに圓天井を支へてゐるぢやありませんか。しかし、明日になつて見ろ、私はあいつを麥藁のやうに膨し折つて見せますから。」

「フン、あなたは、そんなこと。私はこの御殿全體を肩に載せて海岸まで運んで行つてごらんに入れますよ。」

「それぢや私は、王立公園の樹と云ふ樹を、片手で根こそぎ引

ツ繰り返して見せますかな、それも一時間のうちに。」

「私は海豹の皮で拵へた魔法の帽子を持つてゐます。これを被ると、見えなくなる。明朝は一つ、これで姿を隠して、食卓に向つてゐるキングユーゴーの前へ出て、キングの手を附ける前に、肴も葡萄酒も横取してしまひ、果ては鼻を捻つたり、耳をぶつたりしてからかつてやらうと思つてゐます。ところが、キング方には誰がそんな悪戯をするのか分らない。そこで、家來達が逆鱗に觸れて牢へぶち込まれたり、鞭刑に處されたりする、それを見て、我々はこつちで笑つてやらうぢやありませんか。」

「成程、いかにもそれは面白い、が、私のは海豹の帽子も何にも使はずに、このまゝでキングの鬚や眉毛を切り落して而も悟られないと云ふ手練の早業。」

「私にはそんな藝當はない。唯一時間で、果樹園のオレンジと云ふオレンジ、レモンと云ふレモン、無花果と云ふ無花果をペロツと平らげてごらんに入れませう。」

「私は御宴會の廣間に忍び込んで、銀の徳利に金の盃を全部盜み出して、一つ殘さず空へ投げ上げてごらんに入れませう、すると、一つも落ちて來ない。來ない筈です、月宮殿へみんな轉がり込んでゐるのですもの。」

「私のはもう少し上等。コンスタンチノープルの傍を流れる川の幅と深さを、諸君、御存じでせう。あの川は、エヂプト、バビロンを通つて、地上の樂園に注いでゐる。それを、私が流れを捻ぢ曲げて、この市街に洪水を氾濫させて見せます。」

「まづ十二人の騎士を一列に並ばして置く。私はこつちに立つてゐて、風と太刀風一つで、十二人が十二人とも鼻を突いて轉がる――これが私のお約束。」

「私は角笛を持つて街に出で、これを一息蕭々と吹けば、家々の戸と云ふ戸が忽ちバタリバタリと蝶番をはづれてしまふでせう。」

最後に殘つたのが、オリヴイエであつた。彼は若く、愼み深かつた。シャーレマン帝は、彼を深く愛してゐた。

「オリヴイエよ、わが子よ。なぜ外の人たちのやうに、お前も大言壯語を樂しまぬのか。」

「いえ、喜んで。――陛下よ、陛下はギリシヤのハーキユレスの名をお耳になされたことがおありですか。」

「人が彼のことを論じてゐたのを聞いたことがある。その人達の云ふところに據ると、彼は異端邪説の神だとのことであつた。」

「陛下、それは違ひます。ハーキユレスは、無信仰者間に於け

る騎士、無信仰國の王でありました。彼は斯愛のチャンピョンで、實に堂々たる體格を持つてゐました。或朝廷を訪うた時、皇帝の五十人の王女に一夜にして結婚して、しかも一人の餘すなく滿足を與へました。彼女等にとつて、學ぶべき何物もあとに殘されてゐなかつたと云ふことでございます。陛下、私はそのハーキュレスの顰みに倣つて、同じことを賭けようと存じます。」

「いや、お前のしようとすることは、罪惡だ。そのハーキュレスと云ふ王は、わしには羞づべき野蠻人のやうに思はれる。」

「陛下、御心配には及びませぬ。キングユーゴーには、ヘレンと呼ぶ王女一人しかありません。この一人に向つて、私はハーキュレスが五十人になしたと同じことを果さうとするのでございます。」

「それならばよからう。どうか正直に、基督教徒として羞しくない振舞をして貰ひたい。お前の場合に、五十人の王女の例を引くから惡いのだ。」

それに答へて、オリヴイエが何か云つてゐる最中だつた。圓柱の一つが突然開いた。見ると、中は空洞で、人一人樂に隱れて秘密に見聞きすることが出來るやうに作られてゐた。シャーレマン帝も、十二人の貴族も、無論から云ふ仕掛けになつてゐることを知らなかつたので、キングユーゴーの姿が現れた時は、唯々驚きの目を見張るばかりであつた。皇帝の顏は怒りに蒼白み、目は炎の如く光つてゐた。

「あなた方は、わしの歡待に對して、何と云ふ感謝の表しやうをするだらう。無作法とも何とも云ひやうがない。あなた方は高言を吐いて悉くわしを侮辱した。皇帝よ、さうして十二人の騎士達よ、明日、あなた方の御自慢の數々をしおほさなかつたら、あなた方の首はないものと思つて戴かう。」

キングユーゴーは恐ろしい聲でから云ひ放つて、再び圓柱の中に歩を返した。すると、柱は音もなく彼の姿を隱くした。十二人は、暫くの間、呆氣にとれて啞だつた。

「股肱の士よ。」最初に沈默を破つたのはシャーレマン帝であつた。「われ〱が餘りに自由に法螺を吹き合ひ過ぎたのは事實だ。喋らない方がいゝことまで口にした非難は免れ得まい。我々は葡萄酒を飲み過ぎた結果、一時叡智を失つたのだ。第一の張本人は、かく云ふわしだ。皇帝であるわしが、先に立つて惡い例を示したのがよくない。わしは責任を以つて、明日になつたら、我々を待つてゐる危險から逃げる方法を工夫するから、今度は靜かに眠つて欲しい。神があなた方を守つてゐます。」

一瞬の間に後は、彼等は絹の夜帘の下で鼾をかいてぐつすり眠

込んでゐた。

翌朝目をさました時には、昨夜のことは夢幻に過ぎなかつたやうな氣がしてならなかつた。しかし、さうでない證據には、間もなく四五名の兵士が、彼等を迎へに來た。

「さあ、行かう。王の前に出る前に、その加護によつて、我等の高言が無事に成し遂げられるやうに神と聖母とに祈るより外にない。」

帝はかう云つて、堂々たる態度で眞ツ先に立つて歩いて行つた。宮殿に着くと、十三人はまづ聖母の前に跪いて手を合せた。

再び立ち上つた時、一同は慰められ、勇氣を與へられ、信頼し切つた心持になつてゐた。彼等の祈願に對して、聖母はにこやかに答へられたと感じたのである。

キングユーゴーは、黄金作りの玉座に悠然と腰打ち掛けたまま、一同を迎へた。

「あなた方が約束を果す時間が來た。失敗すれば、わしはあなた方の首を貰ひ受けるだらう。さ、わが騎士に送られて、必要な位置に就かれるがいゝ。」

命令に從つて、一同は別れ〳〵に各々の路を選んで去つた。或者は、一夜を過した廣間に歸り、或者は庭園に出で、或者は果樹園に入つた。唯シャーレマンとオリヴイエの二人だけは中に留つた。一人は、馬毎鎧毎眞二つにすべき騎士の來るのを待ち、一人は婚すべき處女の來るのを待つた。

間もなく、この世の最後が來たやうな恐ろしい物音が起つた。紅い小鳥が、エメラルドの棲り木の上で顫へ、キングユーゴーは黄金の玉座の上で身顫ひした。と、四方から急を傳へる使が馳集まつて來た。

「陛下、壁が六十間ほど打ち落されました。」

「陛下。圓柱の一本が、粉微塵に折れ碎けました。さうして、その御殿がまるで鵝の子のやうに、海の方へ歩き出すのを見てまゐりました。」

「陛下。川が、船と魚とを載せたまゝ、街々へ流れ込んでまゐりました。間もなく、御殿の壁も洗はれることと存じます。」

彼等は口々にかう云つた。それを聞いた國王は、顏色蒼白に變つて、

「彼等は疑ひもなく魔術師に相違ない。」と呟いた。

シャーレマン帝は唇に笑みを湛へながら

「陛下。私の待つてゐる騎士は來方が遲うございますな。」

やがて來た。シャーレマン帝は、彼の高言の如く、騎士を二つに斬つた。

キングユーゴーは、オリヴイエに
「伯爵よ、今度はあなたの番だ。」
「陛下。私は大なる忍耐をもつて、王女のお出でをお待ちしてをります。」
　間もなく、寺院で擧げられた式の間、オリヴイエは
「王女は美しく淑かだ。彼女を自分の腕に抱く滿足を思ふと、大言壯語も惡くない。」と考へてゐた。
　その後、晩餐の後に、王女ヘレンと伯爵オリヴイエとは、十二人の侍女と同じ數の騎士とに前後を守られて、一室に送られた。
　そこで彼等は一夜を明かした。翌朝、警護の士に迎へられて、二人はキングユーゴーの前に出た。王は、既に玉座に就いてゐた。多くの騎士がその周圍に侍立してゐた。シヤーレマン帝も、貴族も、その近くに立つてゐた。
「伯爵、あなたは自分の高言を滿足に果されたか。」と、キングユーゴーはやをら答へを促した。
　しかし、オリヴイエは默つてゐた。それを見て、王は心竊に新郎の首を刎ねられることを喜んだ。なぜと云つて、大言壯語のうち、オリヴイエの高言が王を一番怒らしたからである。
「お答へなさい。」と、王は叱した。「あなたは自分の高言を成し遂げたかどうか語る義務がある。」
　するとその時、王女ヘレンが頰を赤らめながら、目を床に落して、微かな聲で、しかしハツキリと
「はい。」と云つた。
　シヤーレマン帝を始め十一人の貴族達は、この一言ゆゑにどんなに喜んだであらう。
「このフランスの人達は、神と惡魔とを味方にしてゐるに違ひない。しかし一人の首も切れなかつたと云ふのも、わしの運命だ。——新郎よ、ここへ來るがいゝ。」キングユーゴーはオリヴイエに手を伸べた。その手に彼はキスをした。
　シヤーレマン帝は王女ヘレンを抱きながら、云つた。
「ヘレンよ、わしはあなたを娘として抱く。あなたは、われわれと一緒にフランスへ行つて、わしの宮廷で生活しなければならない。」帝は、ヘレンの頰にそつと脣を當てながら、猶も彼女の耳に囁いた。「あなたは、愛情に富んだ女の答へるやうに答へてくれた。しかし、わしにだけは本當のことを打ち明けてくれて一向差支へない。——あなたは本當のことを答へたのかね。」
「陛下よ。」王女は言下に答へた。「オリヴイエは優しい禮儀深い男子です。彼は私の心を奪ふに十分な快い方法と、優美な樂出とに富んでゐました。I never thought of coming. Nor

yet did he keep score. Needs therefore must I hold him quit of his promise.

——この話の外にも、「よく學ばれたよき教訓」と云ふ美しい細君に關する「愉快な話」がある。いや、「オリヴィエの大言壯言」よりも、この方が紹介して一層面白いかも知れなかつた。殘念なことをしたと思ふ。

「一體、誰の作です。」

さうさう、それを云ふのを忘れた。實はアナトール・フランスの作である。わが敬愛する木下杢太郎氏は、「桐下亭隨筆」の中で、「その頃予はアナトール・フランスを再讀した。（中略）このエロチイクは、一層深くこの作家を愛せしめる」と云つてゐられた。

「カウンターパートをなすべき日本の話と云ふのは、どうなのですか？」

それも書き忘れるところであつた。實は、大して似てもゐないのだ。唯ハーキユレスの話から、西鶴の「一代男」の世之介が、一代に契つた三千七百四十二人と云ふ途方もない數を聯想したに過ぎない。若しこの數に不審を抱く人があるなら、芥川龍之介氏作るところの「世之介の話」を一讀せられんことをお勸めする。

「よく學ばれたよき教訓」の方は、話せば、例の「笑府」の中の醫者を愛する細君を彷彿せしめるものがあるだらう。

犯罪と怪奇に關する類話

小酒井不木

一

日本に安達が原の傳說があるかと思へば西洋には靑髯（ブルユーベアド）の傳說がある。靑髯の名は、フランスの文豪シャール・ペロール（一六二八——一七〇三）の童話バルブ・ブリヨ（靑い髯）から起つたのであつて、或る金持の惡漢が、六人の女と結婚し、順次に殺

してその死體を秘密室にかくした。その秘密室を決してあけてはならぬと、彼は七人目の細君にも命じたが、その細君が好奇心にかられて、彼の留守中にあけて見ると、恐ろしい光景があらはれた。丁度その時彼女の二人の兄弟が訪ねて來たので、委細を物語つて救を求め、兄弟はすなはち青鬚（即ちその惡漢）の歸るのを待つて之を殺したと云ふのが、この童話の梗概である。尤もこの話はペロールが考へ出したのではなく實は歐洲の各國に傳說として古くから存してゐたのである。安達が原の傳說も、かの「陸奥の安達が原の黑塚に鬼籠れりときくは誠か」の歌にある如く、やはり古くから日本に存在して居たものであるらしいが、それが有名になつたのは謠曲の「安達原」で、それによると、鬼女が深山の人を殺す話になつてゐる。「ふしぎや主の閨の內を、物の隙よりよく見れば、膿血忽ち融滌し、臭穢は滿ちて膨脹し、膚にことごとく爛壞せり。人の死骸は數しらず、軒と等しく積み置きたり。」のあたり、青鬚の傳說とよく似てゐるが、ちがふところは、主人公が一方は男性であり、一方は女性であることと、さうして、青鬚は女と結婚してその妻を殺すのであるに反し、安達原では結婚とは無關係なことである。

然し、男と結婚してはその男を殺す毒婦も決して稀でなく、かゝる犯罪者を特に「女青鬚」と呼んで居る。その最も著しい例證は、アメリカ、インヂヤナ州のベル・ガンネスといふ寡婦で、今から十五六年前、新聞に求婚廣告をしては男を釣り寄せ、金を持つて來させては特別室へ入れて殺し、死體を屋敷のまはりの畑に埋めたのであつて、罪の發覺と共に三十七箇の死骸が掘り出されたが、殺した男の數は百八十人の多きに達したといはれて居る。何分田舎のことゝて、そのやうな怖ろしい犯罪も長らくわからずに濟んだのである。

男の青鬚で名高いのはフランスのランドルーである。彼は歐州戰爭の當時、十人の女と結婚してそれ等を殺し、漸く狀況證據で有罪と認められた程巧みに死骸を處置してしまつた。少し趣はちがふが、日本最近の犯罪史にその類例を求めるならば、京都生れの吹上佐太郎の犯罪がそれであつて、ちようど前記のランドルーが色々の僞名をつかつて居たごとく、佐太郎も早川義郎とか木村道藏と名乘り、幼い時分から色情が異常に發達し、明治三十九年、婦女凌辱殺人の罪で無期懲役となり、大正十一年二月に恩赦によつて出獄してから、東京附近に於て、總計十三人の婦女を凌辱し殺害した。

殺した死體を切斷し、袋又は行李に入れて遠い所の川又は土地に運んで捨てるといふ犯罪も、また、日本でも西洋でもよく行はれるところである。フランスの有名な法醫學者ラカッサーニュは「死體切斷」といふ書物を著はした位であつて、中でも名高いものとして、フランスのブルターニュのマダム・アンリの犯罪を擧げることが出來る。彼女は農夫の妻であつたが、良人が酒亂で金づかひの荒いのを憤つて、ある夜太い棍棒で一擊のもとに良人を殺した。彼女はそれから死體を地下室に入れて、藁で蔽つて置き、その夜は熟睡し、翌朝隣人から斧を借りて死體を切斷し、三袋に分けて、一夜に一袋づゝ、凡そ五哩ほど隔つた河へ持つて行つて、石をつけて沈めた。ところが、運惡くそのうちの一つの袋が、水車小屋の水車に引つかゝつて、遂に彼女の罪が發覺するに至つた

これと頗る似寄つて居るのは、わが山田憲の犯罪である。彼は東京で、共犯者と共に、鈴辨を野球用のバットで撲殺し、鋸などを使つて死體を切斷し、それを行李に入れて郷里の信濃川に投じたのであるが、間もなく發覺して遂に死刑に處せられた。

死體を行李に詰めて、石をつけて河の中に投ずるといふやうな方法は、一寸考へれば、危險極まるものであるにも拘はらず、それが比較的知力の優れた犯罪者によつても行はれるといふことは、殺人のやうな大罪を犯したときには、精神が所謂迷ふからであらう。

マダム・アンリの犯罪は第十九世紀の初頭に行はれ、山田憲の犯罪は第二十世紀の初頭に行はれて、實にその間に百年の差異があるに拘はらず、殺人死體の處分方法は少しもちがつて居ない。だから私は、今から百年の後に於ても、やはり、死體を切斷して行李に詰め、それを河へ投ずるといふやうな犯罪が行はれるものと想像するのである。

死體の行李詰で思ひ出したが、明治四十三四年頃、私が、京都の日出新聞に連載小說を書いて、その中に、絞殺死體を行李につめて警察へ送る話を書いたことがある。その頃、自分では全く新奇な方法であると思つて居ると、まだその小說が新聞に發表されぬ先に、ある男が女を殺してその死體を行李に詰め東京から善光寺へ送つた事件が起つた。從つて私は、いかにも、その事件からヒントを得て小說を作つたやうなことになつてしまつたが、このやうに、小說の筋と實際の事件とが暗合することは、極めて普通に見られる所である。オースチン・フリーマンの探偵小說「猫の眼」の序文に、その內容と全くよく似た事件が實際に起つたことを書いて居るが、小說と實事件との類似話

を、東洋と西洋から持ち出すならば、これまた枚擧に遑のないくらゐである。で、私は次に、東洋の小説と、西洋の事實談との類似を述べようと思ふ。

三

罪を犯した後、犯人は、恐怖と不安とのために、じつとして居ることが出來ず、われとわが罪を裏切るやうな行動をする。支那の裁判小説棠陰比事にこんな話がある。

唐の貞觀年中、衛州の板橋といふ所に、張逖といふ男が旅人宿を營んで居た。ある日その妻が里がへりをして留守の折、魏州の王衛、楊正などと名ける男たちが二三人その宿にとまつた。するとその夜、何者かゞ、王衛の刀をとつて、宿の主人の首を打落し、又もとのところへ返して置いた。かやうなことゝは夢にも知らず、一行は、朝早く宿をたつて道を急いだが、程なく跡から大勢の人が追かけて來て、そのうちの一人が王衛の刀を拔いて見ると、生血がべつとり附いて居たので、一行のものをしばり上げて役所へ訴へた。役人が王衛を拷問にかけると、遂に犯さぬ罪を自白したけれども、皇帝は怪しいと思つて、蔣常に再吟味を行はせた。すると蔣常は、板橋の年齢十五歳以上のものを一人殘らず役所へ召集し、まだ人數が足らぬと言つてかへし、たゞ八十ばかりの老婆をとゞめ、日が暮れてから返してやつた。老婆の後から、役人がそつとついて行くと、途中、一人の男が老婆をとらへて何事をか話しかけたので、部下はその男の名をきいて蔣常に報告した。蔣常はあくる日も又そのあくる日も同じことを繰返すと、やはり同じ男が老婆に話しかけた。よつて四日目に男女合せて三百人あまりを召集し、その中から、老婆に話しかけた男を呼び出し、他のものをかへして、きつく訊問すると、かねて張逖の妻と密通して居て、それがために張逖を殺したのであると自白した。蔣常は即ち犯罪者の犯行後の心理をたくみに利用したわけである。

先年英國でエルムスレー夫人といふ物持ちの寡婦が自宅で何ものかに殺された。彼女は靴屋のエンムといふ男を雇つて家賃を集めさせて居たが、ある日エンムが訪ねると、彼女が奥の間で殺されて居るのを見つけた。訴によつて警察から探偵が出張したが、これといふ證據がなくて、事件は迷宮に入らうとした。ところが丁度一ケ月ばかりの後、近所に住ふ左官のマリンスといふ男が、わざ／＼警察へ出頭して、集金人のエンムが怪しいと思ふと訴へたので、色々問ひ詰めると、どうも返答が曖昧になり、警察は却つてマリンスを疑ふに至つた。果して取調べを進めると證據があがり、後にマリンスはエルムスレー夫人殺し

を自白した。「雉子も鳴かずば」といふ言葉があるが、これなどは犯罪者の心理を覗ふに足る最も著しい例である。

以上の話は、筋そのものの類似とは言ひ得ないかも知れぬが、これから述べやうとする詐欺騙盜の話は、その筋も甚だ似通つて居る。

これは曾て本誌の「當世晝夜用心記」の中に紹介した、英國の「デテクチヴ・マガジーン」の中に書かれてあつた實話であるが、數年前ロンドンの場末の街にレストーランを營んで慾の深い猶太人が住んで居た。ある晩ヴァイオリンを奏でゝ物を乞ふみすぼらしい男が、店へはひつて來て一食惠んでくれと言つたけれど、彼はすげなく拒絶した。そこでその男は、自分の持つてゐるヴァイオリンを質に置くから食べさせてくれと頼んだ。見ると素人目にも相當立派な品物だつたので損はなからうと思つて食を與へると、男は大に感謝し、二週間以内に代金をもつて必ず取りに來るから。決して樂器を他へ賣拂はぬやうにしてくれ、この品は先祖代々わが家に傳へられた由緒あるものだからといつて歸つて行つた。

二週間もいつの間にか過ぎて、愈よ今日が期限であるといふ日に、猶太人の店へ人品の卑しからぬ老紳士がはいつて來て食事を濟まし、勘定の際ふと棚の上のヴァイオリンに眼をつけ、「一寸見せてくれ」といつて手にとり暫らくの間じつとたて居たが、やがてこれを賣つてくれぬかと言つた。猶太人が事情を話すと紳士は殘念がり、これはガルネリウスの作だから百ポンドならいつでも買ふ、若し持主が取りに來たら是非讓つて貰つてくれといつて、骨董商何某といふ名刺を置いて歸つた。猶太人はこれをきいて、出來るなら、件の男が歸つて來ないやうにと願つたが、紳士が歸ると間もなく男がはひつて來た。今度は先日とちがつて相當の服裝をして居て、代金を差出しながら樂器を受取つて行からうとしたので、猶太人は男に向つて賣つてくれぬかと頼んだ。はじめ男は承知しなかつたが、たうとう猶太人が說き伏せて四十ポンドで買ふことになつた。

猶太人は、男が去つてから、ガルネリウスを携へ、六十ポンド儲けにほくほくしながら、名刺に書かれた老紳士の住所をたづねると、こはそもいかに、その邊には工場が立ち並んで、骨董店らしいものは一軒もなかつた。はツと驚いてその足で知りあひの骨董店をたづねると、そのヴァイオリンはガルネリウスどころか、十シルリングも出せば何處でも買へる代物であつた。

これと全く類似して居る話が、「晝夜用心記」の中にある。「一盃喰うたる伊丹諸白」といふのがそれで、遠國の旅人らしい主

從二人が、尼ケ崎街道から伊丹に立寄り、一軒の大きな酒家に立寄つて、存分のみ、なほ道中の樂しみに二升樽に酒をつめさせて、さて代金を支拂はうとすると、懐中物の紛失して居るのに氣附いた。さては途中ですられたにちがひない、自分は筑前のもので、此度伊勢參宮をするのだが、路銀をなくしては動くことが出來ぬから、誠に御迷惑だが、この脇差を御預けする故、三兩貸して頂きたいと申し出た。見るとその脇差は拵らへといひ中身といひ實に眼もさめるばかりの立派なもので、素人眼にも拾兩は下るまいと思はれたので、三兩快く取替へてやつた。二人は喜んで歸途にはお金をもつて必ず取りに來ると約して出て行つたが、四五日過ぎると、その酒家の前を手代六七人にかつがせた乘物がとほつた。手代たちが酒を飲みにはひつたので誰樣かときくと、本阿彌某が堺見物に出かけられるのだといふ。それは幸ひと御立寄りを願つて、件の脇差を見せると、某は一目見るなり畏まり、手水、うがひをして、これは天下に二腰の名劍である。千兩とは下らぬ、折紙が御望みならば京都へ來てほしいと言つたので、一家中大に喜んで、何とかして手に入れたいものと思つた。

すると十四五日過ぎに筑前の伊勢詣りが、金子返却に立寄つたので、色々御馳走をして、先日の脇差百兩で賣つて貰へぬかと申し出すと、はじめはなか／＼承知しなかつたが、遂に刀をたてに振り百金を受取つて歸つて行つた。そこで亭主は、京都へ行つて折紙を願ふと、本阿彌家でことし堺見物に行つたものはなく、又、この脇差は百文が物でもないとの事であつた。

四

小說の筋と事實との一致よりも、東西小說の筋と筋の一致は、更に屢ば讀書子の遭遇するところである。ことに怪奇を取り扱つた小說に於て、かゝる一致が著しいやうに思はれる。幽靈の出現する事情などは、どこの國でも殆んどきまつて居るのであるから一致するのも無理はなく、ことに超自然のことになると、人間の空想の範圍も略ぼきまつて居るので、餘計に一致し易いのであらう。

殺されたものの亡靈が犯人を告げる話は、西洋では沙翁の「ハムレット」がその代表的のものであるが、日本では「古今奇談英草紙」の中の「白水翁が賣卜直言奇を示す話」がそれで、殺された主人の亡靈が、間接の方法で下女に告げることになつて居る。

淺井了意の「伽婢子」の中に「眞紅の打帶」といふ話がある。これは支那の剪燈新話中の「金鳳釵記」を飜案したもの

で、越前敦賀の檜垣平次といふ士の遭遇した怪奇談となつて居る。平次の一族が織田信長に攻められたゝめ、平次は身をかくして上洛し五年間を過した。彼には許嫁の女があつたが、別離の悲哀のために思ひ死をしてしまつた。彼女の親は平次が出立の際與へて行つた眞紅の帶を死骸に結びつけて野邊送りをすませたが、後幾許もなく平次は歸り、彼女の死をきいて、物思ひに沈みながら暮して居ると、ある日彼女の妹が外出するのに出逢つた。その時妹は乘物から眞紅の帶を落して行つたので、不思議に思つて家に歸ると、その夜妹が忍んで來てさま〲に搔きくどいたので、彼はやむなく駈落して三國港に行き一年ばかり暮した。が、良心の苛責に堪へかねて二人で敦賀にかへり、妹の兩親に詫を入れると、兩親は驚いて、その帶を姉娘と共に葬つたこと、及び妹娘は一年このかた重病で寢て居ることを語つた。こんどは平次が驚いて船に殘して來た女を見せにやると、女はどこへ行つたか見えなかつた。するとその時病床の妹は、姉そのまゝの聲を出し、平次の手をとつて、前世に深い因緣があつたから、閻魔大王に暇をもらつて一年あまり暮しましたが、私はもう歸ります。」といひ乍ら兩親を拜み更に「平次さんの妻となつても、必ず女の道を守つて兩親に孝行をなさい。」といつてばたりとたふれた。それから皆の手當によつて妹は甦つたが、病中のことは少しも知らず、病は忽ち癒えてしまつた。後平次は妹と夫妻になつて姉娘の跡を弔つた。

この話と頗るよく似てゐるのが、エドガア・アラン・ポーの「リジア」である。ある男が容貌も知識も古今に稀なといつてよい女と灼熱的な戀をする、ところが女ははからずも病氣によつて死なねばならくなり、强烈な意志は決して死なぬといひ乍ら死んで了ふ。男は悲歎のあまり、ライン河畔を去つてイギリスの片田舍に渡り、阿片の溺愛者となつたが、女の遺産で東洋風な邸宅に住ひ、そこで二度目の妻を迎へた。この女は前妻とくらべて比較にならぬほど教養が低く、男はしきりに前妻を戀ひしたつた。ところが程なく第二の妻も病氣に罹つて死んだが、やがて甦つた姿はまさしく前妻のリジアであつた。「眞紅の打帶」では姉の靈が血緣ある妹の身體に宿るに反し、「リジア」では、意思の强い女の靈が、見ず知らぬ他の女の身體に宿るといふところだけのちがひで、兩者とも、熱烈な戀は死をも征服することを描いたものといつてもよい。

（をはり）

「此の人を見よ」

―凡人列傳―

長谷川如是閑

（一）髪結ひのおとら

彼女は生へぬきの女髪結ひであつた。「髪結のおとらさん」といへば彼女の町内や其界隈では可なり有名な女であつた。

彼女は生れついて太鼓のやうな腹を突き出してゐる大女であつた。肥へてゐる上に脊も高く、立つたまゝかゞんで人の髪を結ふことが出來ないので、立て膝で結つてゐた。結つて貰ふ婦人連は大概、おとらの腹に、椅子の凭れに寄りかかるやうに脊を寄せかけて、何うかするといゝ氣持に居睡を始めるのもあつた。

おとらは日本髪の外の髪を結ふのがぶ器用で、とても、お客の註文に應じられなかつた。迅速な勢で遷り變つて行く新らしい髪の結ひ方をおとらが辛うじて呑み込んだ頃には、その髪はもう廢れてゐた。結ひ方は辛うじて呑み込んでも、これが何うしていゝ恰好なのであるかはとても呑み込めないうちに、その髪はさつさと廢れて行つた。

『當り前な話でさあね。あんな變ちきりんな髪！』

さういつて彼女が勝ち誇る暇もなく、又新らたな、一層變ちきりんな髪が現はれるので彼女はいら／＼した。

偶々さういふ髪に結つた女の顔が自分の眼の前に現はれると、彼女はこれをほごす前に、一つだけ殴ぐりつけてやり

たかつた。さうしてそんな頭の上に自分の結つた日本髪が乘つかるのかと思ふと情けなくなつた。

そのうちに、表通りに、男の理髪やを眞似て、しかも女の世界のみじめさに應じてみぢめに出來てゐる、「おぐしあげ處」などゝいふものが出來た。同時に横町には、美容院だの美顏術だのといふ看板をかけた、中では何をするのかおとらにはわからない家がいくつも出來た。

それにも拘らずてく／＼廻つて歩いてゐるおとらはいろ／＼の口實で、お得意先から斷られた。表通りや横町に、「おぐしあげ處」や「美容院」やを作る資本は無論おとらにはなかつた。彼女の住居は、そのまゝおぐしあげ處や美容院になるには、餘りに汚たなく、餘りに狹い路次のぬかるみの奧の掃溜の傍に引込み過ぎてゐた。

彼女は、だん／＼と郊外の方へ移つて行つた。けれども、前の得意を失うだけで新らしい得意は得られなかつた。それを得る前に、家主や米屋やゝに借りが出來て何度も逃げ出した。あとで考へると、いつそ市内の眞中へ行つた方がよかつたのだが、それに氣づいた時には、彼女はもう自分の身體の外に何もたない大女になつてゐたで彼女は、近所のかみさんの世話で、そのかみさんのしてゐる女土方になることにきめた。

シャベルをかついで始めて砂利場へ入つて行つた關取のやうな彼女を見て、そこにゐる男の土方どもは喝采した。

『何を笑つてやがるんだい。女土方の開業式だい！　手拭の一本も持つて來やがれッ。』と彼女は叫んだ。

(二) 食客越智

越智はいつも恐しく齒の曲つた日和下駄を穿いてゐる男であつた。

その下駄の兩方の横鼻緒は引切れて、いろ／＼の紐や麻繩や時によると棕櫚繩でつないであつた。それは彼れが彼れ

の厄介になつてゐる家の主人の飼つてゐる小犬を盗んで、主人や妻君の留守に、その犬を彼れの下駄の鼻緒に括りつけて、それに頭からタンクの水をザー／＼と浴びせかけるためであつた。

その犬は、彼れが精出して作つた裏の畑を堀かへしたり、彼れが丹念に貼りあげて乾して置いた御櫃入れを噛み破つたり、彼れが恐しく嬉れしいことを考てゐる時に肝高な聲でカラ吠へしたり、彼を焦ら立たせることを怠らなかつた。が、それよりも、それが犬であることが最も彼れを焦ら立たせるのであつた。

アメリカだか神戸だかから送つて來たその犬を、主人の命で停車場へ受取りに行く時に、越智は、意味のわからない不安を感じた。自分がもし此犬と地位をかへて、何處からか主人の家に來る時に、主人は此犬を俺の迎ひによこすだらうか、といふやうなことを考へた。

そんな風に、何の意味だか自分にもわからないことを考へるのが彼れの癖であつた。ザー／＼と犬に水をかけてゐるうち、犬が苦しがつてキヤン／＼いひながら跳ね上つて、とう／＼鼻緒を引き切ると、彼れは、フト軍艦の錨索を思ひ浮べた。ガラ／＼／＼と雷のやうな音を立て、ウインチに巻きあげられるその鎖の一つの輪が、丁度此犬位な大きさだと彼れは考へた。その錨索が彼れの下駄の鼻緒であらうことを彼れは考へるのだ。

犬は、彼れに屢水をかけられる毎にその反抗の烈しさを増すのであつた。彼れは水だらけにならなければ、犬に充分水をかけることは出來なかつた。段々寒くなると、それは彼れにとつて辛らい仕事であつた。

寒くなると、犬は益その強制的水浴を嫌つた。すると越智は愈度々愈烈しく犬に水をかけねばならなかつた。けれども、犬の反抗の仕方は段々發達して、しまひには、それは、犬に水を浴びせるのか、越智自身水を浴びるのかわからなくなつてしまつた。彼れが充分に水を浴びるに拘らず、犬は甚だ不充分にしか浴びなかつた。

そのことが、いつも越智を氣遣ひのやうにした。彼れは夢中で水を迸ばしらせるのであつた。三和土の上は瀧のやうに水が流れた。彼れは濡鼠になつた。犬は、越智の下ぎれ相に引き伸ばされた足の先きで綱引をやつてゐるが、その尻には温かさ相な日が當つてゐる。

へト／＼になつて、――犬がではない、越智がだ――濡れた着物を乾してゐる時の越智の虚脱した氣持ちは、神樣にも名のつけやうがなかつた。

『人間はこんな時に死ねるのだ』と彼れは考へた。相手が犬だから死ねないだけだ。』

こんな時に、突然主人が歸つて來ると、越智の虚脱した氣持は、忽ち何かで一杯になるのであつた。さうして死ねるのか死ねないのか、相手が犬なのか人間なのか、さつぱりわからなくなつてしまつて、有耶無耶に生きて行くことになつてしまふのであつた。始終鼻緒の切れた下駄を穿いて、時々、軍艦の錨索がその下駄の鼻緒であるであらうことを考へながら。

（三）鳩婆さん

鳩の豆をうつてゐる婆さんの年をきけば、彼女は『八十八で米の字でさあ。』と、何年經つてもさう答へるであらう。彼女の名をきけば、皆が彼女を呼ぶ『鳩婆さん』と答へるであらう。

『連れ合ひは？』ときけば『おてんと樣』と答へ、『息子さんは？』ときけば、彼女が膝を突込んでゐる炬燵を叩いて見せる。

一世紀に近い歷史が、いろ／＼な人格や衣服や被り物や穿き物やの形で彼女の前を往つたり來たりしてゐたゞけで

[illegible]なつてゐ相なものだのに、此婆さんは、たゞカナ聾になつてゐるだけにすぎなかつた。

それだのに、誰れかゞ婆の年と名と連れ合ひと悴とについてきけば、間違ひなく答へるのは不思議のやうだが、ある心理學者の說では、昔のきくことが、型の如くたゞそれだけなので、婆さんは、聞き手の口の動き方によつて、何をきいてるるのかを、解し得るに至つたのだといふことである。が時々、年をきくと拒娃を叩いて見せたり、名をきくと『おてんと樣』といつたりすることもあつて、心理學もあてにならない。

豆を買つて鳩にやる子供連に、兩䐔だけの口の內でムニヤ〱御世辭をいふことと貰つた銅貨を盲目のやうに指の先きで數へることの外には、生きてるとも死んでるともわからないやうな恰好でぢつと坐つてゐる此婆さんは、つひその近所にある何とかいふ婆さんの銅像の押し潰ぶされたやうな色と恰好をしてゐるのであつた。

傍の交番で醉つぱらつた兵隊が大暴れに暴れて、ついに大勢の巡査のためにぐる〱卷きにされて、荷車の上に乘せられて行つたといふのが、此婆さんの語り得る自分の邦の歷史の全部であつた。それは四十何年前かの天長節の日のことであつた。

尤も日本が封建政治から立憲政治になつたり、東京が大地震で産れ代つたりしたことを、此婆さんも話をする事はあるが、それを外國で出會つた災難のやうに話すのであつた。

彰義隊が、自分の本家の家を陣屋にしたといふことと黑船が伊豆の下田に來たといふこととを、同じ意味の同じ性質の災難のやうに婆さんは話すのであつた。彰義隊も、黑船も、本家の家も、伊豆の下田も、此婆さんには、一樣に外國であり、外國人であつたのだ。

それを話す時に、此婆さんは、必ず『瓢簞を開らく』といふ術語を使ふのである。これは幕府が、浦賀に來た米船が

日本に對して『兵端を開く』虞があるから、江戸の市民は立退きの用意をしろと觸れた時に、當時の市民一般がそれを『瓢箪を開く』と受取つたのを、此婆さんもそのまゝ套襲してゐるのであつた。これはこの婆さんが若い頃、淨瑠璃の稽古をした時に『もも稗はしやつて下さいますな』といふ文句を『もも釜を背負つて下さいますな。』と、終ひまで覺へてゐたのと同一轍であつた。

それほど軍國の日本も、藝術の日本も、この婆さんには外國的であつた。然し婆さんは、今の日本人も皆さうだと思つてゐるのだから、少しも煩悶する理由はなかつた。たとへさうでなかつたところで、婆さんはそれを何ういふ風に問題にすべきであるかを考へることは出來なかつた。

婆さんにとつては、大風が起つてその豆賣臺を翻つくりかへされることの外に、世界に事件といふものがないのであつた。

驚くべき事には、此婆さんは、そこらに群をなしてゐる大道商人の多くに金を貸してゐるのである。しかもそれが『日の玉のでんぐり返る程の』高利なのである。

(四) 傳五爺や

傳五爺やは茂衛門殿の雇人であつた。飯もたけば、野良仕事もし、大工の眞似事もすれば、子供の守もするし、植木屋の代りもすれば、馬方もする。冬になれば夜番もするが、それで晝間も働いてゐる。

その上に、『遊んでゐて』は勿體ないといふので、主人の許を得て、人力車夫の内職をしてゐる。年をいへばもう六十

だ。

傳五の自慢は、停車場から主人の邸までの間の二十町の往來、主人の邸からその菩提寺までの十二町の道、その反對の見當の鎭守の社までの十町の道が、悉く主人の地面を通つてゐること、、その道の何處にでも立つて、朝のお日樣に向つて大きく柏手をうつと、その手の動く方角に見へる山といふ山は皆主人の持山であるといふことでなどあつた。

主人の家へ訪ねて來る東京の客を自分の車に乘せて走つてゐると、傳五は必ずこのことをその客にいつて聽かせる。何度か訪ねて來て、何度か傳五の車に乘つた客は、何度かその話をきかせられた。

車の上の客は、突然この老車夫が、歩みをゆるめて、車の梶棒を膝で支へながら柏手を打つのを見る時には、たゞその手の廻る方角にある山々が、彼れの主人の持山であることを話されてゐるのだといふことはわかるが、彼れが、その時に、同時に彼れ自身の主人に對して柏手をうつ心持になつてゐることを知ることは出來ないだらう。

大なる所有が人間を威壓するといふ現象が、段々この地上から消へて行く時代に反抗するやうに、傳五は主人の所有の大いさに威壓れてゐることを誇示するのであつた。

その傳五は、ある日主人が菩提寺に停錫中のある禪宗の管長の提唱とやらに行くのについて行つて、本堂の側の方に控へて、眞白い眉毛の尊い老僧の、時々叱りつけるやうに怒鳴る、その提唱とかを聽くことが出來た。

傳五にはその坊さんのいふことが尊いことのやうではあつたが大概わからなかつた。時々わかることはたいして尊いことでもなかつた。坊さんが大聲で何かいつて、長い自然木の杖でどんと床を叩いて、飛び上るやうな音をさせる時には、傳五もその音だけには飛びあがるが、『理合ひ』は少しもはわからなかつた。

そんな時に主人を見ると、『理に打たれた』やうに力きみ返つた顏をして、老師を見上げてゐるのであつた。主人は昔

京都で、こんな坊さんについて座禪を組んだことがあるといふ話を傳五はきいてゐた。

傳五はさうやつて七日の間尊い坊さんの姿を見、聲をききつづけた。坊さんの白い眉毛が、飯をたいてゐる傳五の眼にチラついた。尊ひかすれ聲が馬を洗つてゐる傳五の耳元にきこへた。物の倒れた音は、自然木の杖の音のやうに傳五を飛び上らせた。

その坊さんが更に一里程奥の寺に移る時に、傳五は自分の車でそれを送つた。その時は傳吾は、東京の客にするやうに、梶棒を膝で受けとめて柏手をうつこともしなかつた。割れ物でも乘せて行くやうに、さうして、いつも車を曳けば必らず自然と出て來る話が出て來ないやうに、堅くなつて曳いた。

が和尚が傳五の歳をきいたので堅くなつてゐた傳五の身體も氣持も少しばかり樂になつて、自分の年を答へて、更らに恭しく和尚の年をきいた。

『わしはもう八十の坂を越へたのぢやよ。六十で車を曳くのもえらからうが、八十にもなつて、こんな田舍廻りをやつて居るのもえらうないこともない。』

と和尚はいつた。

『和尚さんといふものは、勿體ないことをいふやうぢやが、わしどもと同じで隱居をするといふことがないのでごわすかね。』と傳五は云つた。

『いや和尚でも隱居はするのぢやが、わしの寺は先代の時に燒けて、先代がわしに、おまへの一生の間に此の寺をどうでも再建せろといふて遺言をしたのぢや。でわしは、邪が非でもわしの一生に寺を再建せにやあの世へ行つて先代に對して合はせる顔がないのぢや。でわしはそれから今日まで二十何年といふものかうやつて全國を歩いて、いまだ嘗て尻り

返つたもたんぢや。わしはこれで安心したんぢや。佛様の足元も作らんで自分の慾手を持つて出た傳五までもあらうかし

それをきいて傳五は覺へず少しばかり駆けだした。和尚は言葉を續けた。

『この年をしてとないた風をして、日本國中歩き廻るのも、苦しい話ぢやが、金が欲しいからぢや。金がなうては寺は建たぬ。』

和尚はまた默つてしまつた。傳五はまた馳け出した。しばらくすると、和尚のかすれ聲がまた聞へた。

『二十年餘りもたないにして來たが、もう八十四ぢや。九十まで生きてもあと六年しかないのぢや。さう思ふと片時もぢつとしては居られん。野倒れ死をするまでかうして歩るいて居らにやならん。』

傳五はまた馳け出した。

先方の寺へついて、和尚が一と休みしてゐる所に、その前に恐る〳〵現はれたのは傳五であつた。

彼れは恭しく、鼻紙に包んだ紙幣の束を和尚の前に差し出して、何か口のうちで云つた。彼れの顏には玉のやうな汗が滲み出してゐる。

『それは御奇特なことぢや。』

さういつて和尚は兩手を額の所へもつて行つたかと思ふと、それを鼻の先で合はして、つまり合掌をして目をねむつた。さうして乾杏のやうなその唇をムグ〳〵させながら、長い間さうしてゐた。

和尚の前にある鼻紙の裡の紙幣の束は、和尚が先代に遺言された頃よりもずつとずつと前から、傳五が主人の家で働いた給金と、稼いだ車代とを貯めて、肌身離さずもつてゐた彼れの全財産であつた。

此の金は傳五の先代が人手に渡した田地を、傳五が一生かゝつて買ひ戻すための基金であつた。和尚には和尚の事情

があるが、傳五にも傳五の事情があるのであつた。和尚の事情を源五はきいたが、源五の事情を、和尚は聽きもしなければ、傳五もいひもしなかつた。そんな事情をもし和尚がきいたら、和尚は一層固く目をねむり、一層確かと合掌をして、一層烈しく脣をムグ〱させ、一層長いことさうして居たであらう。

然し結局、和尚が紙幣の束を押し戴いて、それを四十五度の所に置き直すことに變りはなかつたであらう。

和尚の前をすさり出た傳五はボロ〱涙をこぼしてゐた。何を泣いてゐるのか佛樣にだつてわかりやしない。

(五) 詩人道平

道平は若い詩人らしい風采の詩人であつた。

詩人の道平は自動車に轢き倒された。

詩人を轢いたのはA男爵の自動車であつた。男爵自身が操縱して、夫人と一緒に郊外をドライヴしてゐる間の出來事であつた。

怪我はたいしたこともなかつた。夫人は男爵と共に詩人を介抱して、自動車に乘せて自邸に伴れて行つた。夫人は詩人の顏を見知つてゐたのであつた。

A男爵の邸には、轢き倒されもしない詩人や藝術家が澤山出入りしてゐた。それが皆夫人の友達なのであつた。應接の間が夫人を中心としたさういふ人々に占領されてゐる時に、男爵が間違つて入つて來ると、一寸腰をくの字に曲げて見せて、そのまゝ出て行くのであつた。

けれども、まだ詩人道平のやうに、別室のベットの上で、三日も四日も、親しく夫人の介抱をうけた詩人も藝術家も

なかつた。

何ういふ話になつたのか、一週間ほどするうちに、怪我の全快した道平は、そのまゝずる／＼に男爵家の厄介になつてゐた。

ところがそれから幾日經つてからか明かでないが、詩人道平は、誰れも外に人のゐない所で男爵夫人と差向ひでゐると、すぐに右の掌を横に兩眼にあてがつて俯向いてしまうやうにあつた。さうして若い女のするやうに肩をふるはして啜り泣きを始めるのであつた。

男爵夫人は、別に不思議のものを見てゐるやうな風もせずに、しばらくそれを眺めて、やがて首をふつたり、溜息をついたり、につこり笑つたり、しかめ面をしたり、兩手をぐいと後に開いて長椅子の凭れを抱へたり、その兩手を急につぼめて兩膝の間にさし込んだり……盛んにそんな動作を繰り返へすのであつた。

そんなことが幾日がつゞいた。ある日、それをやつてゐる最中に主人の姿が突然扉の所に現はれた。

夫人は、例の通り目を瞑つてゐる詩人の方を一寸見て、すぐと、男爵と顔を見合せて、クヽと變な聲を出して、慌はてたやうに兩手を口の上に重ねて肩をつぼめた。

男爵は、身體をゆすつて大笑ひに笑ふ眞似をして見せて、音のしないやうに身體を廻はして姿を隱した。

あくる日、詩人を轢き倒したのでない自働車に乘せられて、道平は、彼れのもとの下宿に送り込まれた。

彼れの友人のある詩人はいつた。道平は詩人ではなかつた。何故なら、彼れはそれつきり詩を作ることをやめた。當はそれから詩を作り出すべきであつたのだ。

（六）小田青年

小田は長くイギリスで鑛山に關する研究をしてゐた青年であつた。

彼れは郵船のK丸の二等船客になつて、五年ぶりで日本に歸ることになつた。

船が香港を出て、明日は愈日本が見へるといふ日の晩に、二等船室の日本人七八名が狹い喫煙室で別れの演藝會を開くことになつた。その發起人が小田であつた。

所がその七八名のプロフエツサーや會社員や官吏や技師や新聞記者やは、何れも生眞面目な、不器用な連中で、酒も碌々飮めず、無論隱し藝のやうなことの出來るものは一人もゐなかつた。

小田はそれを眞劍に憤慨して、獨りで無暗とウヰスキーを飮んで、友達の會社員のAにも無暗と飮ました。これも同じく無藝ではあつたが、酒を飮むことは小田以上だつた。小田が皆の無能に腹を立てゝやけになつてAにウヰスキーを飮ませるのを、Aは亦眞劍に相手になつて、しまひに、小田のもつてゐるウヰスキーの罎をひつたくつて、グビ〳〵と筒呑みにした。

流石の小田もびつくりして、その罎をひつたくつたが、もう空になつてゐた。小田はあわてゝフラスコの口をAの口に突込んで無理に水を呑ませて、『大丈夫か〳〵。』と青くなつてAの背中を叩いた。

Aが醉ひ倒れると、小田は自分の餘興にとりかゝるために出て行つた。やがて、顏一面に、墨とお白粉とを混ぜこぜに塗つて、鼻と唇の間に杉箸二本の突つかへ棒をして、裏返しに着た着物をじんじん端折りにして現はれたのが小田であつた。

既ひり既をして横兵衛の種蒔を躍り出したので、皆で喝采した。

所が、その横兵衛は、『ずんぺら〳〵』といつまでゝも、そこら中をうろ〳〵して中々引込まない。するうちにその『ずんぺら〳〵』が段々泣き聲になつたかと思ふと、横兵衛はそこにぴたりと尻餅をついたまゝ、おい〳〵泣き出した。

一同は呆氣にとられてぽんやり見てゐたが、いつまで經つても泣きやまないので、一人二人傍へ行つて、肩をゆすつて『何うしたのだ』などゝ聞いて見た。

それでも益烈しく泣くばかりなので、泣上戸なのだらうといふ事で、皆はボツ〳〵自分の部屋へ引揚げることゝなつたが、泣いてゐる男を一人殘して置く譯にも行かないので、プロフエツサーと新聞記者とがお守役を承つて後に殘つた。

いつまでたつても泣きやまない小田を二人は援け起して、椅子によらせて宥めすかしてそれほど悲しい事情を尋ねたところ、小田の途切れ〳〵にいふ所を綜合すると、要するに、小田には相思の女があつて、双方の親の許を得て婚約を結んだところ、間もなくその女が肺病になつたので、小田の父は、二人を引離すために、小田を英國に追ひやつて、女の死ぬまでは、歸つて來ることを許さなかつたのであつた。でその女が五年ぶりで死んだので、小田は漸く日本に歸ることを許されたのだが、愈明日になると見へるといふその日本に、もう彼女は居ないのだと思ふと、小田は堪へ切れなくなつて、それを紛らかすために横兵衛の種蒔を踊つたのであつた。

それを話して、子供のやうにしやくり上げながら、その切ない心持を絞り出すやうに訴へる小田を、二人はほと〳〵慰めかねた。

『だけれど、親父がイギリスへ行けといつたつて、ヘイコラと出かけて行かなくともいゝぢやないか。女が死ぬまでは歸つてはならんと云はれて、そのまゝぢつとイギリスに居るのもあんまり親孝行過ぎるぢやないか』

新聞記者はさうプロフエツサーに云つた。

『然しそれでなかつたら、世の中に悲劇も喜劇もありやしない。』

と胡麻鹽頭のプロフェッサーが落ちついた調子でさういつた時は、もう愈日本が見へるといふ日の朝であつた。

(七) 田宮主事

田宮は某保險會社の主事であつた。それは勸誘人のことであつたが、しかし彼れは可なり古いいろ〳〵の經歷をもつた男であつた。

從つて彼の學生時代、教員時代、新聞記者時代、市吏員時代、何々時代等の同輩後輩で、今はそれ〳〵優れた地位にあるものを個人的に數多知つてゐるが、いまはそれらのたれ一人とも行き通ひしてはゐなかつた。それらの人々に、偶々電車の裡などで出會つても、昔のやうに君僕で挨拶すると、大概先方に澁い顏を見せられるのであつた。

そんなことはとうの昔にちつとも氣にしないことにした彼れも、昔の同輩後輩からその手を食ふ度に、今更のやうに不平を感じない譯には行かなかつた。けれども、また、休日にぞろ〳〵小供達を引つれて公園などを歩いてゐて、さういふ同輩後輩が同じやうに一族を引つれて歩るいてゐるのに出喰はした時に、自分の子供達と先方の子供達と比べて見ると、まるで階級の違ふ事が、互の子供達の身裝にも、擧動にも言語にも歴然と現はれてゐるので、田宮はいつもがつかりさせられるのであつた。

殊に先方の妻君と自分の妻君とを見比べると、階級は愚か、時代も國籍も人種も違つた女同志のやうに見へるので。何を考へる餘地もないのであつた。それをまた、自分の妻君が、先方の妻君のあの頭髮がをかしいの、あのコートは何といふ恰好だらうの、上品ぶつたあの風つきは何うだらうのと、別れてしまうとすぐと、彼れにまくし立てるのが情けなかつた。

ご田宮には自分の妻君に不平をするのではなかつた。世の科學者の妻君とも比べて行つてみたとも、その妻君のやうな女が自分の妻君であつたらそれこそ災難だと思ふ外になかつた。多年の貧乏暮らしにビクともしないで多勢の子供を育て上げた妻君の努力は、容貌や風采や學問などよりも、田宮にとつては遙か有り難い賜物であつたことを、彼自身充分知つてもゐる。田宮は、誰れに向つても、未だ嘗つてそんなことをいつたことはないが、自分の妻君に對して、誰れに對するよりも深い感謝の念を抱いてゐるのであつた。

その妻君が、俄かに急性の胃腸病に罹つた。利かぬ氣の妻君は、平生信仰してゐるある非醫者の食料療法によつて午蒡や澤庵を喰つて腹を揉むといふ亂暴な方法をとつたので、忽ち危險に陷つて、醫者の診た時にはもう九分通り見込がないが、とにかく至急に手術を要するといふことであつた。それは盲腸炎だつたのだ。

田宮は狼狽して、すぐと、病人を自動車にのせて、部屋がないと斷つてゐるA病院に連れ込んで、泣面で强談して無理に三等に入れて貰つた。

それはA病院の外科醫長のB博士が有名な盲腸炎の專門家である上に、それが田宮の市吏員時代に役所で面倒を見てやつたことのある同僚の從弟で、その頃は學生で、よく田宮の所へも遊びに來たりした男だつたからである。が第一回の手術は、そんなもこんなもない、たゞもう至急を要するといふので、外の醫員が早速やつてくれた。

その後の妻女は全くの昏睡狀態をつゞけて、酸素吸入と注射とで僅かに持ちつゞけてゐるのだつた。

やがて醫長の巡廻時間が來たので、間もなくB博士が見えるといふ看護婦の前觸れがあつた。田宮は、久しぶりでBに會ふことゝそのBが自分の妻君の生死の鍵を握つてゐるその人だといふことを考へるばかりで、電車の中や公園やで舊友に會つた時の經驗などはすつかり忘れてゐた。

とそのB博士が病室に入つて來た。田宮はいそ〳〵と立ち上つたが、恐ろしく年をとつて、大博士の貫目がその白髮頭

のてつぺんから足の先きまですき間なく備つてゐるB博士の堂々たる風采を仰いで、とても昔のやうに『ヤア君』と呼びかけることは出來なかつた。でわれ知らず恭しく一つ叩頭して、『僕は田宮ですよ』とおづ〳〵と口ごもりながら云つた

『いやさつき聽きました、』とB博士は、入院患者の身許でもきいてゐるやうな口調で云つた。田宮は仕方がなく、とつてつけたやうに、

『何うも久しぶりですな。』といつた。

『久しぶりですな。』

博士はさういひ終らないうちに、病人の傍によつて二分間程何かやつて、こちらを向き直つたので、田宮は容態をきかうと思つてゐると、博士は、横目で田宮を見て、心持頭を下げるやうにして、そのまゝふいと室を出て行つた

田宮は驚いてあとを追ひかけて廊下に出で、樣子を尋ねると、博士は歩るきながら、何か一言二言云つて、そのきま行つてしまつた。田宮は狐につまゝれたやうにぼんやり戻つて來た。

それは田宮が電車の中や公園やで出喰はした經驗をこゝでもくりかへしたに過ぎないのだが、田宮は今始めてそんな目に遭つたやうにぼんやりしてゐた。が病人が俄かに弱り出して、附添がのべつにベルを鳴らして醫員や看護婦を呼ぶので、田宮は、そんなことを皆忘れてしまつた。

さうしてもうこんなことを思ひ出す暇もなかつた。その日も次ぎの日も、田宮は夜晝病人につききりで看護をつゞけた。三日目の晩に病人はとう〳〵死んでしまつた。

眞夜中に、牢屋のやうな死亡室に持ち込まれた妻君の死骸の傍にたゞ一人しよんぼりと座つた田宮は、やがてシクシク子供のやうに泣き出した。さうして口の中で

『俺は豪らい人になんかなりたかないのだ。俺は豪らい人になんかなりたかないのだ。』と繰り返した。

西洋羇旅小品

齋藤茂吉

十一 ワイマアル途上

獨逸のCassel(カッセル)を立つてWeimar(ワイマアル)へ向つたのは六月二十三日である。西暦一九二四年の夏、留學地民顯(ミュンヘン)を出でて獨逸各大學の神經學教室遍歷の目的で出掛けたのであつた。なぜCassel(カッセル)に寄つたかといふに、其處の美術館にレムブラントのものが澤山あることを小宮豐隆さんから注意して貰つたためである。

實際Cassel(カッセル)はさういふいゝものを持つてゐた。町の眺めもなかなか好かつた。繁り合つてゐる森林を隔てて向うに丘陵の起伏してゐる工合も好く、フルダ河も哀ふかく、大街を一直線に辿つてもとの大公の宮殿を見に行つたときなどは、一人旅の靜かさをつくづくと味ふことが出來た。

けれどもCassel(カッセル)の人氣は奈何にも惡く、物價も高くて足掛け三日の不愉快な日を過ごしたのであつた。或る夕方カフエの隅で、此の土地の人氣が惡いのは、Hessen(ヘッセン)地方の特色ではあるまいかとも思つたのであつたが、よく考へると此の土地は戰前から大きな軍團のあつた處であり、また工業地として榮えたところである。僕はひとり釋然としたやう

な氣持になり、はやく不愉快な此地を去りせめてWeimer（ワイマアル）あたりで靜かに一夜を眠らうと思つて、そこまでの三等切符を買つたのであつた。

手荷物も自分で持つて停車場まで歩いて來た。汽車は六時五十二分發であるから夕食を先づ濟まさうとしたが、食店に入らずに、少年の賣つてゐる麵麭にハムの附いたのをひとつ買つた。七十片（ペニヒ）だといふから、これは高いと思つたが兎に角一麻克（マルク）を出した。すると少年は何の躊躇もなく銀貨三つ釣錢としてよこした。それを見るともなく見れば獨逸の貨幣ではなく、和蘭の十仙（セント）の銀貨である。僕は突嗟の間に、これは興あることだとおもひ、『君はこの銀貨を何處で手に入れたかね』と訊ねた見た。少年は平然として、『ここの停車場で手に入れました』といふ。そこで『このお金は獨逸のではないね。和蘭の十仙の金だらう』ときいた。少年はやはり平然として、たゞ狡いやうな微笑を一瞬顔にあらはしただけであつた。僕はこれも興あることに思ひ、三つの銀貨をそのまゝ蟇口のなかに入れた。當時日本貨が下がつて英貨一磅に對して十三圓五十錢を出てゐ、英貨一磅に對して獨貨一七・五麻克（マルク）であつたから、割が惡かつた。

汽車に乘込むと、房内の片側だけに乘客のゐるやうに出來てゐる狹いところがあつた。向合つて乘る客が無いので氣が落付くだらうと思つて其處に這入つて行つた。質素な娘がたゞ一人乘つてゐた。僕は窓際に居を占め、娘は眞中ごろに居を占めてゐる。僕等の前は板で仕切られて、隣の車房との交通が斷たれて居り、入口にも戶があつて、それをしめれば如何にも氣が落付くのであつた。僕は、娘に會釋して房内に入り、窓際に居を占め、汽車の未だ動かぬうちに先程買求めた麵麭を食ひはじめた。

汽車の立つまでに未だ幾らか間があつた。その時、戶をあけて一人の瘦せた四十格好の女が這入つて來て、僕のところに身をかゞめて隨分くどいことを云つた。これはつまり貧兒・孤兒のために幾らか寄附して吳れといふ歎願であつ

た。僕は鞄を持つて坐つたまゝ、その女の顔を凝視して、『いや駄目です』といつた。女は暫らく默してゐたが、ふふんと鼻で息して僕のところを去つた。布施をしないといふことは餘りいゝ氣持ではない。それは大戰前の維也納人は乞丐に錢を施して、das goldene Wienerherz と謂つてゐた。ただ僕は嘗て帝國の所在地として驕つてゐたこの地に一錢をも多く使ふことを拒んだのに過ぎない。さういつて自らを慰めて居た。

暫く經つて汽車は動き出した。汽車の旅であるから窓外の景色の飛ぶやうに去來するのを僕は見てゐた。太陽は地平線に傾いていつたころ、線路の近くの水溜で童兒が水浴びてゐるのなどが見える。麥畑がそのあたり一面にあり、青野の草はもう刈られてゐる。或る驛を過ぎたころ川が見え出した。まさしく三日前に來る途中見た川のやうであるが、その時よりも澄んでゐる。さうすると汽車は南下してゐるのである。青野の草を刈つた跡に鴉が群をなしておりてゐる所などもある。また川が見えた。その川はどうもドナウの源流のやうな氣持でもあり、その川上の方に小山がずうつと斷續してゐた。しばらくすると川は小山の裾のやうなところを流れ、さうして遙か向うまで光つて見えてゐた。その川はフルダ川であつた。

或る時は蟋蟀でも鳴くやうな聲をして小鳥が鳴いてゐた。麥畑のそばに馬鈴薯畑があつて三人ばかりの女がその手入をしてゐた。それが線路の左側にも隱見するから、いまは馬鈴薯の手入時と見える。暫くするとまた川に會つた。もう森林が目睫の間に迫つて來て、小さい隧道を一つくぐつた。線路の右手の街道には林檎の並樹が遙か向うまで續いてゐ、その向うに黝ずんだ森があり、牛が群れてゐる。丘から轉がつて遊んでゐる女童などでも、小さい女隊が見えないやうに服裝してゐるのは、日本よりもいゝ習慣だと、僕はさうおもつた。

僕は窓外の景色にも稍飽きて、側の娘と時々口を利いた。娘は Cassel よりももつと西の方から乘り、Leipzig の近

くへ行くのであつた。稍痩せた鄙びた娘で、はしやぐよりも沈むといふ方であつた。言葉に何處かの訛があつて、早口に云はれると聽取にくい。けれども東洋種の僕に對して談話を避けるといふ風がなく、僕の言ひまはしのまづい時などは、僕の方に寄つて來て聽返したりもした。Cassel（カッセル）で不愉快になつた僕はこの娘と口を利いてゐるうちにいつか心の和（なご）むのをおぼえた。

Bebra（ベブラ）といふ驛に着いたのは八時五分前であつたから、汽車は約一時間走つた訣である。この驛のほとりに赤土の崖があつて、その一部雨で崩れたのを柴を編んで喰止めたところなどもある。その近くには盛に瓦を燒いて積んであつたりした。赤土の畑には小さい野菜がいろいろ植ゑてあつて、莖の延びるやうに手を呉れたところなどもあつた。恐らく豌豆か胡瓜のたぐひででもあらうか。

この驛では人の乘降が活潑で、今まで二人きりであつた僕等の房内に一人の若い男が乘込んで來た。男は僕と娘との間に居を占めて、直ぐ僕に話しかけた。『いかゞです、獨逸はお氣に召しましたか』といふ。二言三言（ふたことみこと）いつてゐるうちに、『君は獨逸語が旨いねえ』などと云ふ。男は此處から東南に當るIlmenau（イルメナウ）の町に硝子工場を持つてゐると話をした。それから亞米利加合衆國のChicago（シカゴ）にも店を持つてゐて、そこで大勢の日本人を知つてゐるなどともいつた。男は蠶のことなどを聽くから、僕は彼等の謂ふ『絹の蟲』に就いて大分骨折りながら話をした。Ilmenau（イルメナウ）の町は工業町であるが、ゲーテの爲事なども關係があるので僕は案内書でその町の名を知つてゐた。たゞ工業のことには興味が無いので、試みにマルチン・ルーテルの事を訊ねて見た。すると男は大體のことは知つてゐて、Wartburg（ワルトブルク）に籠つて聖書を譯したことなども話した。

一寸話がと切れたかと思ふと、男は娘に話しかけた。男の發音は明快であつたが、今度は小聲でひそひそ話してゐ

る。『街の塵』の話工合で大凡の僕の素性を見て取つたものと見え、いろいろの事を云つて居る。僕は直ぐこの男の一つの焦點は娘にあつたのだといふことに感付いた。男は戸口を締めて、兩足を前方の板まで延ばした。『お前さんは Jena のところへ行くのだらう』などといふことが聞こえる。『幾つ。十七歳』などといつてゐる。『廿四歳だつて、僕はさう思はないね』などといふ。下等なことを云つてゐると思ひながら、それでも旅の拾物のやうな氣もしてゐると、『今晩 Jena まで一所に行かない』と男は訊いてゐる。僕は急に緊張して娘が何をいふかと思つてゐると俯向加減になつてゐる娘は何にも云はなかつた。

そのうち太陽が沈み、夕映の色がいまだ鮮明に西天に殘つてゐる。汽車は Eisenach 驛に著いた。そこでも客の乘降があつたが、僕等の車房には誰も來なかつた。汽車が動き出して間もなく西南の空に Wartburg の寺院が見え出した。山上に建つてゐる寺院で尖塔に十字が附いてゐる。寺院の前手の山には木が繁つてゐる。僕は窓をあけて首を延ばしてそれを見た。あれはマルチン・ルーテルの爲事したところだとおもふと、旅の心が新たになつた。

その時僕に突き當る者があるから、ふり向くと、その男は娘を抱ぎ上げて僕にのしかゝるやうにして、彼の山上の寺院を見せようとしてゐる。娘は別に拒ばなかつた。『あれですよ。ほうら見えませう』などと男がいふ。汽車の進行に連れて森林の右手に見えてゐた寺院は左手に見えるやうになり、次いで森林の邪魔から離れて全く山上の一寺院として見えるやうになつた。男は、『おゝ重い』などといつて娘をおろした。その一瞬に僕は少しく嫉ましさを感じたが、内心には親嘴でもすればいゝと思つてゐた。併しこの無遠慮な振舞をする男も目の前に親嘴はしなかつた。

間もなく男は車房を出て行つた。さうして廊下でほかの男と何か話をしてゐた。が、また入つて來た時には娘の左側に腰をかけて話してゐた。すでに九時半になるけれども、西の空の餘光は未だ消えない。そして意外に草を刈つてゐる

農夫などがちらりほらりと見えてゐる。男は汽車の時間の事などを娘に云つてゐる。そして『このあとはもう汽車はありませんよ』などともいふ。それから何とか何とかが三麻克（マルク）ですなどといふ。それら少しすると二人で車房を出て行つてしまつた。僕は、あやしい事をする者どもだと思つたが、怺へてゐた。稍經つて娘は一人で車房に歸つて來て、手鏡を出して顏を一寸見た。そこに男がまた二たび入つて來た。Thüringen（チュリンゲン）の森がどうだとか、靜かだとか、戀の哀があるとか、節（ふし）をつけ小ごゑで唄のやうなものを歌ひ出した。さうかとおもふと『僕はお前さんを好いたね』といふことを云つた。"verlobt" といふ字を使つたのである。が、娘は別に拒みもせず、はしやぎもしなかつた。沈默が少し續いたかとおもふとき男は車房を出て行つた。

僕は先程男の云つた『三麻克（マルク）』といふ語が心に懸かつた。いづれ遍歷の身の上であり、遙々と國を出でて留學してゐる身分である。思切つて訊ねてもいゝと思つた。すると娘は僕の方に寄つて來て話して云ふに、この車內でクッションを賣つてゐる者がゐた。それが格安で三麻克（マルク）だから二人して見に行つたが、別に必要でもなかつたから買はなかつたといふことであつた。僕は嘗て生れ故鄕の神の祭に見世物（みせもの）小屋に這入つたときの失望に似た失望をその時感じたけれども、嘗は救はれたやうに、喉のあたりがすいたのであつた。

『僕はそれで安心しました』といつた。『平靜』といふ字を使つたが、人間として、餘り洗練された挨拶ではなかつた。それのみではない。僕は支那の國に昔孔子（コンフシウス）といふ學者がゐて、童男童女七歳になれば席を同じうしない教を說いたことを話した。靜かな娘は、一寸目を瞬つて僕を見た。この僕の話も誠に洗練を缺いた挨拶であつた。このことは後になつて僕は氣が附いて、さうしてみづから舌打をした。

汽車が Gotha（ゴータ）驛に着いたとき、二人の媼が僕等の車房に乘入んで來た。もうこのへんに來ると發音が齒切よく、口

をつぶつて聞いてゐると早口で十八ぐらゐの娘のやうな声を出してゐる。Weimar 人の話と両通せぬ調子をしたことに一昨年の旅で、直ちに分つたことで、ゲエテも此處に住み、ユイチエたんかも此處で暮したことなどが特におもひこくるやうな氣もしたのであつた。車内には既に燈がつき、媼の一人は娘と何か話込んでゐた。

Erfurt に十時過ぎに着いた。そこで二人の媼も下車し、さつきの男もつひに顔を見せなかつた。男は此驛で乗換へて、Ilmenau 行の汽車に乗込んだに相違ない。

それから間もなく汽車は Weimar に着いたときに、僕は急いで降りようとして娘に挨拶をした。二人は手を握り、娘は、"glückliche Reise!" といつて呉れた。僕は停車場近くの質素な旅舎の一室に入つて、Weimar における明日の大體の豫定を考へ、それから Jena に立つ汽車の時間などを調べたりした。この土地を見るのは二度目である。しかし一昨年以來僕はこの土地を好いてゐる。それはゲエテやシルレルに關係があるためのみではない。全體としていゝのであつた。

夜半に近く床に入つた。けふの汽車の旅のことなどが糸か何かの繋がりのやうに浮んでくる。妻は今頃は日本郵船會社の船に乗込んだ頃ではあるまいかなどともおもふ。けふの靜かな娘を祝福してやりたいやうな氣にもなる。一昨年は勞働者か何かの大會で、ここの停車場に人があふれてゐたことなどをおもふうちにいつか寢入つてゐた。

十二 オウヴェル行【上】

巴里にゐるうち、オウヴェルの Paul Gachet さんのところにあるゴッホの繪も見たいと思つてゐたのであるが、も

う十一月にも這入るし、巴里の街にも朝毎に濃い霧がおりるやうになつた。これではもう駄目かと思つてゐると、[illegible]の宮坂さんが骨折つて呉れたのでガツセさんを訪ふことにした。

西暦一九二四年十一月二日の朝、巴里の北の停車場から出發した。宮坂勝さん、安倍能成さん、板垣鷹穗さん、それに僕夫婦五人の同行である。

汽車が一時間ぐらゐ走ると Auvers（オウヴエル）の驛に著いた。朝來寒い雨が降つて、田舍道を歩く靴が隨分よごれた。宮坂さんの案内でゴツホが自殺したといふところに行つて午食をすることにした。そこはカフエも食店も下宿も旅舍も兼てゐた、Café Restaurant ,, Maison（メイゾン） blot（ブロー）" といふ古びて小さい店であつた。床の上には古びて頑丈な大きい卓が四つ五つ並んでゐる。その向うには玉突臺が一つある。反對の側には棚があつていろいろなものが載せてある。その方の側で咖啡を作り、食物を煮たりするらしい。

肥つた上（かみ）さんが出て來て快活に話した。午（ひる）の料理を註文したところが少し手間どるといふので、そんなら料理の出來るまでゴオホの墓に詣でようと相談した。雨が降るから僕の妻を此處に殘して四人で出掛けた。この家の前に役場がある。これはゴオホが生前に寫生したことのあるもので畫集にも載つて居る。ゴオホは七月廿九日に死んでゐるが、七月十四日にこの役場の記念祭か何かを描いてゐるのである。ゴオホは、普通の畫家の顧みないやうなものをもどしどし率直に畫いた。役場の寫生などもその一つと看做していゝとおもふが、弱い神經を持つてゐたゴオホは晩年になるほど、纖細甘美の境から離れようとしてゐる。『詩的』な畫因（モチーフ）を好かぬやうになつたといふよりも、もつと端的になつて行つたやうにおもふ。

僕等は村の坂道をのぼつて行つた。その途中に古びた寺が一つある。多分加特力（カトリツク）の寺であらうか。『ゴオホが死ぬ少し

前にこの寺を畫いたのがガッセのところにあります。それは隨分つきつめたいゝものだと私はおもひます」から宮坂さんが話した。

　それから畑と畑の間の道を僕等は歩いた。雨は横しぶきにしぶいて、延びた草の上を行く僕等のズボンは大分上の方まで濡れた。しばらく行くと一劃があつて、それがオウヴェル村の墓地であつた。かういふ、うすら寒い雨の日には誰も墓を訪ふものはない。ゴオホの墓は入つて左手の方に直ぐあつた。小さい二基の墓石が立つてゐる。向つて左がゴオホの墓で、Ici repose. Vincent van Gogh. 1853—1890 と書いてある。それから向つて右が弟の墓で、Ici repose. Theodor van Gogh. 1857—1891 と書いてある。二つの墓の前には延びた草が未だうら枯れずにゐる。僕等はその草を踏んで墓石に近づき脱帽をした。

　雨はまだ劇しく降つてゐる。僕等はなづみながら元來た道を歸つて來た。店に僕の妻は寂しさうにして待つてゐたが、料理はもう出來かかつてゐた。「肉も野菜もわざわざ新規に仕入れて來たやうよ」こんなことを妻が僕にいつた。料理は鄙びてゐたけれども、分量が多く腹に飽くことが出來た。

　ゴオホは西暦一八九〇年七月に、いまだ若い身空で此の家の中庭で自殺を企てたのであつた。ゴオホは短銃を以て自らを射てたふれた。家の者が驚いて寄つて來、ゴオホを玉突臺の上に載せて手當したと云つてゐる。こゝにある玉突臺は即ちそれであつた。弟のテオドル・ヴアン・ゴオホが巴里にゐたのを電報で呼び寄せた。手當はやはりゴオホの恩人の醫師ガッセがして與れたに相違なかつた。

　ゴオホの自殺した中庭には、今は雞を飼つてゐる。金網の圍があり、その中に多くの雛が啼いてゐた。近くに便所があつて、日光の差すところには蠅がたかつてゐた。この便所は昔の儘であるらしく、小便所には床の中の石灰分が附い

てゐた。その向うの一段高いところが納屋になつてゐて、雜具や藥などを積んである。犬が一つそこに寢て居り、時々僕等を白眼に見たが吠えようとはしなかつた。客馴がしてゐて東洋人種でも不思議がらないのである。

階段をのぼつて、ゴオホが下宿してゐたといふ部屋を見た。中庭に面した窓のある狹い部屋で、木製の床があり、その外歐羅巴のいづこの田舍にもある家の部屋と變りはない、貧しい寂しい部屋である。

ゴオホは寂しく、氣がいらいらして、發揚と沈欝と交々に、この部屋に起臥し、郊外に繪をかき、常規を逸した行動も多かつたに相違ない。つきつめて來ると眠れなかつた夜が幾晩も續いたとおもふ。ただドクトル・ガツセの厚い保護のもとに、その日その日が暮れ、藥も飲み、繪もかいたと看ることが出來る。けれどもとうとうゴオホは自殺してしまつた。

目下、獨逸ハイデルベルヒ大學の教授に、ヤスペルス（Karl Jaspers）といふ人が居る。この人は今は哲學を講じてゐるが、醫學をも修め一時精神病學を專攻した。その著「精神病理學汎論」の世に行はれてゐるのはそのためである。ヤスペルスは僕の未だ民顯にゐたころ、ゴオホとストリンドベルヒの病志を考察してゐた。ヤスペルスは多くゴオホの書簡を根據として、ゴオホの疾病を Schizophrenie だらうと斷じてゐる。Schizophrenie は精神乖離症の義である。その命名は瑞西のブロイレルから出でて、おほよそ、クレペリンの謂ふ早發性癡呆（Dementia präcox）に該當するのである。僕は民顯にゐたときその說を一讀したことがあつたが、にはかに承服することを欲せなかつた。その後諸國を歩いてゴオホのものを觀、和蘭でその多くを觀、このたび此處で多くを觀るに及んで、恐らく、躁欝性のものではなかつたかといふ考を抱くに到つたのである。

ゴオホは和蘭ではホオホといふ。此處の上さんはゴオグといふ。現存のガツセさんもさう呼んでゐるから、ゴオホ在

世中もこのあたりではやはりゴオグと呼んでゐたのであらうとおもふ。

勘定しようとすると、上さんは白墨を持つて來て何が幾ら幾らと僕等の食卓に大きい算用數字を書きはじめた。そしてい丶發音をしながらそれを加へて行つた。今は晝だから農夫の働きどきである。夜分になれば此處にも村の大勢が集まつて來て、茶を飲み珈琲を飲み葡萄酒を飲み、そして玉を突いて、談笑に時を移すだらうと思ふ。

十三 オウヴェル行【下】

今のガッセさんは、ゴオホの恩人であつた醫師ガッセ (Dr. Paul Ferdinand Gachet. Lille. 1828-Auvers. 1909) の子である。

ゴオホの描いた醫師ガッセの肖像は二つあつて、一つは獨逸のフランクフルト・アム・マイン市にある。僕は西暦一九二二年の夏の旅でそれを見てゐる。一つは現在ここのガッセさんのところにある。二つの構圖は殆ど同じであるが、獨逸にある方にはガッセの肘を突いてゐる卓の上に佛蘭西版の假綴本が二冊置いてあるが、ガッセさんのところの肖像にはそれがない。肖像は學生帽のやうな小さい白つぽいのを冠つた初老の人で、面長で髭も頭髪も明褐色である。左の手を卓に置き、右手を右の頬杖にして、肘を卓上に突かせてゐる。服は冬服で天鵞絨の黒襟がある。服は紺の濃淡の繪具をとり交ぜ、いつもの短い強い線を重ねて塗りつぶしてゐる。その上に白い線を懸けて色合を出してゐる。大きな紐釦が三つ見えてゐる。卓の掛物は赤く、コップに草花をさしてある。背景は丘陵のやうな恰好にして藍と緑と白で塗つてゐる。その上の空際はそれよりも淡くやはり同じやうな短い勁健な線で塗つてゐる。晩年のものとしては矢張りい丶も

のとおもふ。ガツセさんの處にあるものは、服の紐釦が畫いてなく、草花ばかり横はらせてあつてコツプがなく、前にも記した如く書物二冊が畫いてない。僕等から見れば獨逸にあるものの方が稍好いと思ふが、本人は現在のものを殘して一つを手離したものゝ如くである。なほガツセさんの處には、醫師ガツセの後姿をセザンヌの畫いたものがあり、セザンヌとガツセと並んだところの鉛筆畫も殘つてゐる。

から故人ガツセの面影を念頭に浮べて、その子の現存のガツセさんに對すると誠に興深く感ずるのであつた。僕等は店で、先程よごれた靴を出來るだけ拭つて、そしてガツセさんのところを訪づれた。主人は喜んで盡くの繪を見せて吳れた。何しろ住宅の部屋部屋に懸けてある繪を見せてもらふのであるから、かういふ雨の日にどやどや入込んで見てまはるのに氣が引けた。併しそれだけ感謝の念も深かつたのである。

もう其處の廊下にもゴオホの素描などが懸かつてゐた。麥畑の收穫のところ、二人で落穗を拾つてゐるところなどは、元々はミレー尊敬などから來てゐるとも思ふが、動く流動してゐる線で描いた全くの寫生であつた。

そのほか、セザンヌの初期の靜物で、面(めん)と人形と林檎などのあるもの、ゴオガンの裸體童子の圖。マネの描いたクウルベの像。ゴオホのやつたエツチング。ドミエの小品。セザンヌのパステル夕燒風景圖。木炭畫。ドウミエの馬車馬の頭。セザンヌの初期靜物數點。鉛筆畫などが部屋部屋に懸かつてゐた。

ガツセのお孃さんのピアノひく圖は、ゴオホの死んだ前月あたりに描いたもので當時娘さんは廿一歳であつたさうである。背景などは單に靑と赤の點で埋めてある。床の處は赤・黃・綠などの短線で塗り、襦(ジユ)のところもさうである。かういふ繪は、もはや詩的ではない。曲(きよく)がない。器械的であつけないところがある。ヤスペルスの說はかういふ所に根ざしてゐるかも知れないが、さうばかりも行かぬ。

なほ、ガッセの娘さんが花園の中に立つてゐるところの圖もある。前景には黄赤の花が咲いて居る、其花の葉は明るく淡い線で描いてゐる。娘さんの顏の目のかき方などは東洋南畫家の筆法に見る如き單純さがある。白衣で立つてゐる壊の前方に植木鉢が數個ある。その向手はるかに樹木が矢張り強く波立つて動いてゐるやうに描いてゐる。その向うに家の屋根が見えてゐるところである。この繪は綿密丁寧ではなく一見極く粗雜のやうに見えるが、いかにも素樸簡素の趣がある。民顯から立つて、獨逸、英吉利、和蘭と多くゴオホの繪を見て來て、この繪に對したとき、直ぐ僕はゴオホの疾病のことを思つたのであつたが、僕はやはりゴオホの晩年の畫風をこの繪に見出したのであつた。この畫風は恐らく疾病のためもあつただらう。けれどもゴオホは承知してやつたものと思ふ。ゴオホよりももつと新しい時代の佛蘭西畫家は果してこのへんの畫風をも見免してはゐまいと僕はおもふのであつた。

だんだん見てまはるうち、冬の日は短く、部屋の中はうすぐらいやうになつた。僕等は何となし急がねばならぬ氣持で行くと、中ほどの部屋に一つの繪が目に立つた。これはゴオホの墓まゐりに行く途中、坂の中腹にあつた寺院を描いたものであつた。

寺院は岡の上に建つてゐる。眞中に聳えた塔がありそのほかの寺の屋根は左右に低まつてゐるが、窓などはいかにも曲がつて描いてある。寺の前手は岡で、暗綠・黄・藍・淡青などで草原を描いてゐる。坂道がついてゐて寺の方にのぼるやうに描いてゐる。黄土・褐・黄などの短線に白と藍の線なども交へ、隨分複雜な線で積上げてゐるが、全體は赤土道を描いたものである。坂の左手も草原で綠や黄や白や黄土や種々の繪具が使つてある。坂をのぼりつめたあたりの向うに靑樹が描いてあり、その間に紅い屋根の家が見えてゐる。向つて右の方の端にも、先方にある人家が一つ二つ低く描いてある。いま一人の女がその坂道をのぼつて行くところである。女は黒い袴を穿いてゐる。上半身は白い。容は非常に深

く澄んだ藍色に描いてあり、その中に二ところばかり雲の湧いてゐるところがある。併しその雲もいつものゴオホの
く雲とは違つて、まだまだ深いいろを示してゐた。その深い紺色の空に突立つてゐる寺院は思ひ切り歪んで、今にも動
き出しさうに思はれる。宮坂さんは、『實に突つめた、恐ろしいやうな繪ですね』と云つた。また、『空はオルトラマリン
と少しのプロシャブリユとを交ぜてやつたやうに思はれます』などとも云つた。この繪はゴオホの自殺する少し前の作
らしく、強い日光と澄切つた空の色とに、渦巻く魂を打込んだ、極く急迫した繪のやうにおもふ。さうかと思ふと、赤
土坡にある陰影などは決して見免してないのであつて、また寺院の屋根の橙紅のところに一寸青綠の繪具を塗つてゐる
あたりは、到底鈍痲した精神の持主の成し能はざるところである。寺院が歪んだならば、それなりにこだはりが無く、
おのづから迫つてくる動律を保たしめてゐる。聰明な巴里の現代畫家は、かういふ道を通らないのは好い。併しかうい
ふ繪は世界に一人二人は必ず出現せねばならぬものである。

舟夫の妻が子を抱いて夫の歸りを待つ圖などもあつた。妻の傍には火が赤く燃えてゐるところが描いてあつた。火は紅
と黄の短い線法で描いてある。畫集にも出てゐる姉妹圖もあつた。背景が綠と白つぽい青綠で波渦形を描いたゴオホの
自畫像などもあつた。帶黃褐色の髭が生へ、藍と淡綠の繪具で服を塗つてゐた。そのほか、Arles（アール）時代に描いた景色畫
も五六點はあつた。

前景に蘭のやうな葉の熱帶植物があつて、そのもとに小草が生へ、その向うに渦巻くやうな筆法の木立があり、その
向うは青野で、そのまた向うに紅い屋根の家が見え、空の際涯に白雲の湧いてゐるといふ、ゴオホ一流の構圖の小品を
見た頃は、そろそろ部屋は暗がりに入つたやうな氣がした。

僕等はガウセさん夫婦に深く感謝してそこを辭した。雨の降る道を急いで、巴里行の汽車に乘込んだ。

代の寫象に、ゴオホがアール時代に描いた寢室（chambre à coucher）と題した油繪が浮んで來た。木製の寢床があり、窓際に鏡が糸で壁に吊してあり、小さい卓上には、手水盥と、水入と、コップと、ブラシと香水瓶のやうなものが置いてある。その左手の壁に釘が打ちあつて、それにタオルがぶらさがつてゐる。椅子が二つある。腰かけるところは麥藁のやうなもので編んである。これは主に佛蘭西で見る粗末な椅子である。床の上方の壁に肖像畫の額が二つ、向に風景。その下に服などが懸つてゐる。

ゴオホはオウヴエルで起臥してゐた部屋はもつと狹かつた。併し大體同じやうなものであつただらう。僕は畫家でないが、どうもゴオホの境涯の分かるやうな氣もして汽車のなかに暫し沈默してゐたのであつた。

獨逸マグデブルグの美術館にある、畫家寫生に出かけるところの圖は、恐らくオウヴエル時代のものゝやうに推側されるが、粗い筆法で、麥の秋の頃の往來に黑い影をおとしながら、兩手に物を持ち、肩に道具を荷つて歩くひとりの畫家を描いてゐる。恐らくゴオホはこんな具合にして時々歩いてゐたものゝ如くである。ゴオホを傳した種々の書物に、そのへんの消息は書いてあるとおもふが、どうも、割合にしじゆう興奮してゐて、〃Autismus〃といつた狀態は尠なかつたのではあるまいか、僕にはそんな氣がしてゐる。

巴里の北の停車場で皆とわかれた。妻は旅舍に歸つた。宮坂さんと僕は、ルクサンブウル公園の近くの支那飯店に行つて、支那語、日本語、佛蘭西語の雜然と聞こえるなかで、蟹の肉と豌豆の入つた、どろどろしたものを註文して慌しく口中に飯を搔き込み、おもひだしたやうにオウヴエルの事をも話合つたのである。

十三　Rigi 山上の一夜【上】

瑞西の首都 Zürich をば午後二時十分發の急行列車で立つた。そして、方嚮を東南に取り、いはば四方から湖に圍まれたといふ姿の、Rigi の山上に一夜泊らうとしたのであつた。

汽車の立つ時、窓から首を出して見てゐると、向うの丘陵に家のたて込んでゐる工合は丁度長崎を思はせるやうなところがあつた。汽車は急いで走つた。だんだん山地になり、その起伏の工合が如何にも鮮媚であるのが通常ではない。遙かの谷間から出て來る川の水は濁つて勢づいて流れてゐた。

それから汽車は Zuger See の湖に沿うて南下した。その湖畔には綺麗で小さつぱりとした村落などが見える。長い短い隧道を幾つかくぐり、隧道を出ると電氣工場などがあつた。すでに峻峰が見え出して來て、その裾に雲がかたまり薄く藍の色に見えてゐる。午後三時頃 Zug といふ驛に著いた。ここは前面には湖を眺め、うしろに山を負うた村であつた。そこらを通るとき、どうも瑞西の住民は獨逸人などとは人種の違ふところがある、猶太人などと共通の顏貌をした者が幾らもゐるなどと思つたのであつた。ただ鼻が大きく眉の濃い者がゐて、それが山人さびた重厚の感じを與へた。

Arth-Goldau といふところから愈々登山車に乘り換へた。山に登るに從つて眼界がひろくなり、西北の方にも、東南の方にも湖が見える。さうして、湖の水の光つてゐるところ、影になつて紺青に黝ずんでゐるところ、さういふ趣が段段と變つて行つた。紅葉した木々もそろそろ見えるやうになつた。高い峰の方から流れて來る水が瀧となつて懸かつてゐるところもある。頸に鈴をつけた牛が直ぐ近くに居て、耳を動かしてこちらを見てゐたり、幾つかの鈴の音が下の谿の方で鳴るのが聞こえたりした。さういふ牧牛がこの山に五千から居るさうであつた。實用向の鈴が、遍歷する旅人の耳には實用向でなくきこえる。一體、『假感』とか『假象』とか謂ふ審美論者の說にも、やはり根ざすところがあるので

ある。

紅い木の實が固まつて見えてゐた。支那の山水畫家が人頭よりも大きい紅い丸を幾つも木の枝に畫いてゐるのにも、自然寫生に根ざすところがあつた。或る時は、綿の樣な雲の上に夕陽を受けた雪山が見えたり、光を受けぬものは鋭く黑く見えたりした。

頂上までには幾つかの停車場があつた。頂上に行くまでの山水が既によかつた。Rigi-Staffel, Rigi-Klösterli などいふところを通つて、Rigi-Kulm に著いたのは、太陽の傾きかけた頃であつた。そこの旅舍は立派で大きかつた。旅舍に著いて洋傘の無いのに氣付き慌ててゐると、同車して來た外國の旅人が洋傘を持つて來て吳れた。旅人は稍老いた夫婦でルマニアあたりの者であつた。旅舍の部屋は立派なのは幾つもあるが、幾つか見て廻つて十八フランケンのに極た。當時の相場で邦貨九圓餘に當つてゐた。

それから旅舍を出て、後ろの方にある丘にのぼつて行つた。この丘は展望が好く利くので、アルプス山系のうねりを觀ることが出來る。山系のうねりといふのも、高く鋭いのには白雪が降り、いまだ雪の降らないのもあり、相交錯したうねりであつて、謂はば生きてゐるやうなものである。

湖の大小がその間に湛へてゐる。直ぐ目の下にはZuger Seeが、間に稍狹い縊を以て北方に見えなくなつてゐる。太陽は傾きかけて、湖水の面は、遙か向うは水銀の色に光り、近きあたりは黝ずんだ紺に見えてゐる。北の方に湖の盡きてゐるその彼方は瑞西の首都Zürichであつて、ゆうべまでそこの旅舍に宿つてゐたのであつた。そのあたりから山脈が稍低くなつて、獨逸の國境を越え、遙か彼方に見えずなつてゐる。こゝから稍左手は黑林地方である。それから右手に行くと、Baden地方になり、もつと右手はBayern地方になるのであるが、そのBayernの首府の民顯にあつて僕は丸一年

餘り勉强をして、つひ二ケ月前までは其處にゐたことなどを思ふと、靜かな寂しい氣持にもなるのである。取り卷い山嶽と遙か彼方に展開する國土と淸く澄んでゐる空氣と、さういふ空間的關係が如是の感情を起させる、その一種のあやしさこそ支那山水畫の動因ともなつてゐるのであらうか。

僕の今立つてゐるところを旅舍の者どもは『頂上』と謂つて居る。そこを少しく降りて左手に來ると直ぐ眼前に高山が重疊して、僕なんかを壓するといふ氣持である。その下にVierwaldstätter See(フイルワルドシュテツテル ゼエ)の一部が見える。この湖は此處から西南の方に章魚(たこ)の如くにひろがつてゐる大湖で、それに灑ぐ川などが系のやうに細くなつて見えてゐる。獄鴉のやうな黑い鳥が一羽湖の方へ飛んで行つた。明朝はこの山上を下りて、それから汽船でこの大湖を渡り、Luzern(ルツエルン)の方に行くつもりである。

この『頂上』は、風が强く、未だ九月下旬といふに僕は冬の外套を著てゐた。その丘に三四人の女が物を賣つてゐた。多くは媼で澁い模樣のある布をかぶつてゐる。若い娘が一二ゐて紅い豆しぼりのやうな模樣の布をかぶつてゐるが、頬が赤く、この高山の空氣に生育した面持であつた。是等の女どもは繪葉書だの、木細工の牛だの、笛だの、牛の頸につけてゐる鈴の小さいのだの、駄菓子のやうなものだの、そんなものを賣つてゐた。僕はそのそばに行つて、いろいろいぢつて見たが、餘り元始的で、故鄕の土産にするやうなものは極めて尠なかつた。小さい木製の牛をいぢつてゐると、耳が突然除(と)れたりした。これは膠(にかは)が丈夫でないので除れたのであつたが、僕は知らん振して多くの木製の牛の中にそれを交(ま)ぜてしまつた。

太陽は黃色になつて山嶽に近づくので、女どもはそろそろ歸り支度にかかつた。女どもは僕等の旅舍の建つてゐる、Rigi-Kulm(リギ クルム)に住んでゐるのではなく、もつと山腹の方に住んでゐる。女等の露店には頸をつけた山羊も時々寄つて來、

白い牛、犢牛、野羊なども寄つて來るが、女等はさういふ處にはかまはずに、鍋を片付けて居るのであつた。ここの旅舍の者を除いてさういふ住民のゐるところには小さい加特力の寺もある。これは或る信心ぶかい一人の女人によつて建てられたのだといふのもあつたし。それゆゑその近くの巖間から清冽な水の湧出るのを『尼の泉』と唱へるなどとも謂つた。また或處の小さい寺には、『雪の馬利亞』といふ名なども附いてゐた。

アルプス山系の一小部分とも謂つていゝ、この Rigi も十八世紀の中葉頃から、ぽつりぽつりと登山者の注目を牽き、十九世紀の初葉にはこの頂上まで登つて展望を樂んだ者は餘程增したといふことである。西暦一八一六年には此處に一つの旅舍が建てられたのださうである。然し何といつてもアルプス山系のうちの一つの山の頂である。ここに登るものも、年經てこの山腹あたりに住んだ者も皆信心ぶかいものであつたに相違ない。僕は暫く下界に住んで來て、さてこの山嶽をば通りしなに既にセガンチニの畫境の種々相を沁々と感得することが出來た。

セガンチニもいろいろなものを畫いた。けれども、その一つの傾向として、『晩』（或は『黃昏』）と題した油繪を取つて來てもいゝ。この繪を僕は或時は獨逸で看、また數日前に瑞西で看たのであつた。„Dämmerstunde“ となつてゐた時もあり、„trübe Stunde“ となつてゐた時もある。日出前の高原を場面として、（或は『黃昏』であつて、日沒後の餘光ともおもふ。）左手に一人の女が石に腰を掛け、膝の上に兩手を組んで眼を瞑つてゐる。厚ぼたい衣を著て、頭には水色の巾をかぶつてゐる。その女の前には鍋に何か煮てあり、それから白い蒸氣が立ち、鍋の下に赤い火の燃えてゐるところが畫いてある。そのあたり一面は小石原で、石と石との間には草が生へてゐる。セガンチニは、すべてさういふものをば種々の原色の顏料で、一筆一筆に盛りあげてゐる。その丹念に據つて、繪に靜さと厚みとが出來て來て、甘い感傷性と或る調和を保つてゐたのであつた。女の右手には一匹の大きい斑牛がゐて頸に鈴が附いてゐる。恰もいま吠えて

ゐるところで、頸を延べ口をあいた儘を畫いてある。その牛の彼方向うには柵と牧場とがあつて、一人の男が多くの牛羊を連出すところを段々と遠くに畫いてある。その向うには既に峻峰が迫つて居り、左手には寂しい人家を畫いてゐる。女の膝のところには焚火の火明りがうつつてゐるから、曉が未だほの暗いのであるが、太陽が暫くするとのぼる氣配を示して、黃色の光の放射しかけてゐるやうに畫いてゐる。その他の空の部分は、黃・赤・紫・靑など細かい顏料で埋めてある。

丹念で靜かなこの繪は、アルプス高山國の農民を題材として、疲れた旅人の僕の心を慰めて吳れたのであつたが、今も僕はRigi山上にあつて其等の繪を思ひおこし、その寫象は一種の現實性を帶びて僕の眉間にあらはれるのであつた。けれども僕はさういふ靜かな愛と神秘から、ハウプトマン劇にあるやうなもつと熱したものにも聯想が移つたが、若い伜が山上にのぼつて行くと、山羊の牝が寄つて來て、伜の持つてゐる聖典を食べてしまふあたり、豐かな娘のその紅い脣と心臟の鼓動と、さういふものにも移つて行つたが、それは長續せずに消えた。物質の女等の歸りかけたこの丘は、忽ちに寒風が通り、湖水の光もそれを弔ふ山嶽も、その山嶽の上に無限に疊まつて見える山嶽の峯も、つひに僕をして大戰後に起つた熱烈難澁な藝術には親ましめなかつた。

『だいぶ日が短かくなつたやうだな。やつぱりあの湖水の方が南らしいね』『さうね。巴里を立つてから、もう幾日か知ら。』『もうそろそろ二月だね。海峽でお前反吐ついたでないか。西洋人の尼の奴もお前の側で反吐ついて居たつたね』『あたし、もうホテルへ歸るわ。此處のところはだいぶ寒い』。

妻と二人は『頂上』の丘を下りて旅舍に歸つて來た。玄關で繪葉書などを買つて、そこの貼紙を見ると、『御客樣方は、日の出三十分前に、アルプス山の角笛を以てお起こし申上げます』:: St. vor Sonnenaufgang werden die Gaeste

durch Alphornblasen geweckt"と書いてあつた。

十四　Rigi 山上の一夜【下】

歸つて來て見ると、部屋は正方形ではなく角のところが少しく缺けてゐる。その部屋に小さい寢床が二つ竝んで居り、圓い卓が一つと、椅子が三つばかりある。

僕は外套を著、頸に襟卷を卷いて、窓の玻璃に額をおしつけるやうにして山を見てゐた。山は旅舍から南方に隔なはるもので、近いところから段々奥の方の山になると既に白い雪が降つて水晶の結晶群を見るやうである。窓の玻璃が僕のつく息で曇るのを、僕は手の掌で拭いた。

太陽は右手の山の向うに沒したらしく、山の色が刻々に變つて行つた。それから下の方にある湖水の一部分が鉛のやうに見えたり、深い蒼色に見えたりしてゐるうちに、雲が幾通りにも湧いて來て湖の方へ沈んで行つた。暮色のおのづから到つたころ、窓の下を太いズボンを穿いたひとりの若者が煙管をくはへながら通るのが見えた。

さうして僕は沈默して小一時間も山嶽を見てゐたたらう。妻は妻で、山嶽などは見なかつた。外套を著たまゝ妻は兩手を圓卓に突いて顳顬のところをおさへてゐるうちに自然と兩眼を瞑つただらう。山上のこの部屋の小一時間は、二人に調和があるやうでもあり、無いやうでもあつた。

そのうちに電氣燈がともつた。二人は思出したやうに相顧みて外套をぬぎ、幾らか儀容をただして食堂に下りて行つた。食堂は大廣間で立派であつた。眞夏の頃はこの食堂に客が一杯になるらしいが、けふはせいぜい三組か五組しかゐ

ない。僕等は窓際の食卓に就くと、給仕は其處に電氣暖爐を持つて來て呉れたりした。料理は凝つた旨いものを食べさせた。二人は、白葡萄酒などを飲み、しばらくぶりで靜かな夕餐をしたのであつた。これからサロンに行つて新聞などを見、けふ立つて此の山上にのぼつて來た道筋だの、明日立つて此の山をくだる旅程だのを話合つた。それから生れ故郷の誰彼に便りを書かうとしたが、ただ獨逸にゐる一人の友に繪ハガキ一枚書いたに過ぎなかつた。

差向き僕等は體の疲を休めようと欲してサロンを辭した。そして廊下で一人の女中に通り過がつたが、その女中は僕等に會釋をして通つて行つた。さて部屋に歸つて見れば、『籠る感じ』である。邪魔するもの丶無い氣安さと落付があるに相違ないから、ふたりは突然に相爭ふやうなことはなかつた。けれども今此處を領してゐる靜寂はつひに二人に情感の渦を起させることがない。ふたりは暫らく無言で部屋のなかにゐたけれども、僕は今度は服を脫して床のなかにもぐり込んだ。

さうすると床のなかに湯婆が入れてあつた。『おや湯婆が這入つてゐるぜ。……やつぱり山中は何か工合いのい丶ところがあるな。』そんなことを僕が云つて、足で觸つてみると民顯あたりの湯婆とは感じが違ふから、引出すと德利のやうな格好をした湯婆であつた。

『あたしの方にも入れてあるか知ら』

『あら、やつぱし入れてあるわ』

『これはまた妙ね。お酒か何かの入物ぢやないの。』

『さうだわ。此處に何か號があるんぢやないの。これはまた妙ね』

僕の妻はそんなことをいはないで、傀儡のやうな湯婆を元に戻して、これから何かしてゐる様子であつたが、間もなく眠に這入つて行つた。僕は初めて維也納で冬を越したとき、宿の婆さんに頼んで安らかな四角なブルキ製の湯婆を見付けて貰つたのであつたけれども、これでは矢張り駄目であつた。そこで僕は歐羅巴の人々は湯婆を餘り用ゐぬものと觀念して、冬の夜を宿に歸つて寢るまでは大部分カフエで過ごすやうにしたのであつた。然るに獨逸の民顯に來てみると此處には完全な銅製のものからブルキ製のものまで湯婆が揃つて居り、また机に向つてゐて足を暖める電氣仕掛の装置も出來てゐたので、僕は寒さの嚴しい民顯の冬を凌ぐことが出來た。

電燈を消してから暫くになるが、妙に僕の目が冴えてゐる。夜は靜かで、沁み透るやうである。蟲の音なんかも聞こえず、雁のこゑなんかもしない。妻はいつの間にか幽かな息をしながら寢入つたらしい。湯婆に觸つて見ると未だ冷めずにゐる。觀念のつながりは、所謂僕の妻は、天竺のむかし難陀の妻孫陀利のやうには行かぬといふことに落ちて行つた。併し大迦葉は、清淨な顏をしてゐた妻の妙賢女と合會することなしに十二年を經たとも聞いてゐる。僕の觀念のつながりはさういふところにも落ちて行つた。さて僕は稍諸國を遍歷して今アルプス山脈の中にゐるのであるが、日本の國土にゐるやうな氣もしてゐる。その差別は今の瞬間には無い。

僕は一ねむり二ねむりもしたと思ふけれども未だ眠から醒めてゐない。その時に既に角笛は鳴りはじめてゐた。はじめのうちは半ば夢のやうな狀態で、間の延びた物哀な角笛の音律を聞くともなく聞いてゐたのであつたが、意識がやうやく醒めて來るに從つて、節まはしが少し巧者過ぎるから喇叭ではないか知らんなどとも疑つたりした。けれどもそれは普通の喇叭などでなかつたから、目ざめて見れば二たび僕等をばアルプス山上の氣持に引戻すのであつた。程經て僕等は起きた。それからなるべく寒くないやうに着込んで階段をのぼつて行き、東方にむかふ窓のところ

に佇立して、いまだ黒く明け切らない、山脈の上の空がほんのりと黄色いのを見てゐた。變に凝つた雲のかたまりが少しづつ動いてゐるらしく、その上方の鋭い山脈の色合が黒から藍と變つて來ても、西洋人どもは誰ひとり見に來なかつた。そこで僕は部屋に行つて毛布を持つて來、二人はそれで寒さを防ぎながら隨分辛抱づよく其處に立つてゐた。

そこで、つまり僕達ふたりは障礙を微塵も受けずにアルプス山上の美しい日の出を見たのであつた。僕は獨逸文學のことは好く知らずにしまふが、その中には日出寫生のいゝ文章は幾つかあるであらう。山上の美しい日の出は、謂はば劫初の氣持であり、開運の徴でもある。それに較べると、現に連れ添うてゐる、我執をもつ僕の妻なんかは、實に奇妙な者のやうな氣がしたのであつた。

船の丸號

文學博士　新村出

義經記卷第四に「義經都落ちの事」と題する一章がある。日本の海洋文學のうちでは誦すべき文章であるが、いま日本文學大系本によると、第十三卷の五三六頁に次のやうな重要な一節が出てくる。

以上其の勢一萬五千餘騎なり、西國に聞えたる月丸といふ大船に五百人の勢を取りのせて財寶を積み二十五疋の馬ども立てゝ西國路を心ざす。

とある。事柄は文治元年十一月のことであるが、義經記の創作は、室町時代の初期か中期までであるらしいから、右の文句も文治以後二三百年のころのものとせねばなるまい。山岡明阿彌が類聚名物考の船車部第二に於て、この月丸をば、案ずるに舟に名付る事尤ふるしと云つたのは、多分船の名に丸の字をつけた例では一ばん古いといふ意味であらうが、それはその命名が鎌倉時代の初めにあると解してはならないことは勿論である。義經記製作年代の室町初期までにそのことを引きさげておかなければならないのは亦いふまでもない所である。

私が見た所で、船の丸號が見えてゐる文獻の最も古いのは、應永時代の文書である。即ち足利義持が將軍のときのものであつて、その一はまだ義滿が在生のころ、日明使節の往來があつた時分の文書で、應永十一年五月二十五日附、義持の御教書に見えるのである。それは將軍家の直轄に屬する御用船の名稱として、御所丸、御座丸、八幡丸の三隻が出て

ゐる。同年幕府は春日社及び興福寺の造營料として兵庫河上諸關の舟の關稅を寄附するために、それらの寺社の造營がをはるまでは、これらの御用船を除くの外、その他の過書船すなはち關舟、いはば從來特許狀を得て關稅免除を受ける船舶の特典を停止しようとしたのであつた。

第二の例としては、應永十九年、その年にはスマタラ島の或港から來た南蠻船が二度目に若狹に來航した年であるが、その年の六月と十一月との大友文書に見える過書船の名に春日丸といふのがある。その一通には大友殿春日丸船壹艘荷足千五百石と出てをり、他の一通には大友修理權大夫入道祖孝舟壹艘春日丸事云々と書いてある。大友入道祖孝とは、外國貿易で名を著はしてゐる持直の父になる親世のことであつて、筑紫の豪族として足利氏無二の味方である。その春日丸が兵庫の兩關と河上諸關との過書を得たことは翌年の二十年四月、翌々年の七月の文書にも存する。

應永十年代は明の永樂の初年代にあたり西曆の第十五世紀の初にあたるが、その時代に船の丸號が文獻にみえはじめるのである。應永年代に見えるとすれば、丸號の起源はもつと古いに違ひない。少くとも應永に接續する南北朝には丸號があつたと見てよからう。或は更に遡つて鎌倉時代に起つたと考へることが出來るであらう。間丸が鎌倉末期から南北朝にかけてその名を文書にあらはしてゐるが如く、船の丸號も同じやうな時期の文書記錄に見出され得るに至るかもしれないと思ふ。

義持時代の將軍の御用船のうちに八幡丸の名をみとめたのは、應永十一年であつた。それから約三十年後の永享四年のことであるから必ずしも同一の船であるとは斷定出來ないが、或は別の船ではないかとも思はれるが、滿濟准后日記の同年六月三日及び五日の條に、八幡丸といふ船の名が出てゐる。唐船事大略今日治定了、寄合(八幡丸號船也)船事云々と六月三日の日記にある。五日のには、八幡丸船頭方へ錢七萬疋をもつてゆくといふ事が書いてある。瀨戸內海の通航船では

なくて外洋に遠航する大船である。永享四年は明の宣德七年西紀一四三二年にあたるが、これより二十年程後の寶德の頃になると、丸號の船はますます多く文書記錄に見えてくるのである。

寶德二年十二月三日（景泰元年西紀一四五〇）の東大寺文書によるに、正米二百四十餘石を御寺に納めるために運漕して兵庫に着津する竈戶の關船藥師丸の名があり、五年經ての享德四年すなはち康正元年の五月の文書二通にも藥師丸が同樣の役目を演ずることがみえてゐるし、更に十數年後の應仁二年正月の東大寺文書にも、藥師丸年貢算用狀が存する。さて竈戶關とはすなはち周防の上之關のことであるが、こゝは大內氏の海關として名高かつた處である。戊子入明記には上關藥師丸として渡唐船としてあらはれてくる。この船は渡唐船として五百石また七百石と出てゐる。

戊子入明記とは、應仁二年戊子、すなはち明の成化四年（西紀一四六八）に、建仁寺の天與淸啓和尙が、再び幕命を奉じて、遣明正使として僧俗百餘人を率ゐて渡航したときの記錄である。隨行の禪僧中には有名な桂庵玄樹もまじつてゐた。これより十數年前の享德三年（景泰五年）の入明のをりにも、天與淸啓は正使を勤めたが、その時の勘合百枚中、三枚を使つて、一枚は一號船なる豐前の門司の和泉丸にあてられ、それには公方樣の御船として渡唐することとし、一枚は二號船なる同じく門司の宮丸にあてられ、それには細川右京大夫殿の御船として渡唐することとし、一枚は三號船なる同じく門司の寺丸にあてられ、それには大內新介殿の御船として渡唐することとして、この和泉丸と宮丸と寺丸との三隻が渡唐勘合船に割當てられた次第であつたが、後に示す船舶表によるときは、その外八隻と、その他別表にはなほ二三隻の丸號の船とがみえてゐる。この時の將軍は義政であり、細川氏は勝元、大內氏は政弘であつた。さて戊子入明記のうちに、「可成渡唐船分」と題する船名錄があるから、今それを參考に抄出する。

豐前門司　和泉丸　二千五百石、是は大船にて不渡唐也、

同　寺丸　千八百石、此寺丸も大船にて度々及難儀也、

同　宮丸　千二百石、是は無子細也、

周防富田　彌增丸　千石

同　上關　藥師丸　五百石

同　深溝　熊野丸　六百石

同　楊井　宮丸　七百石

備後尾道　住吉丸

同　鞆　宮丸　千石

同　田島　宮丸　七百石

同　院島　熊野丸　六百石

なほ別表によると、寺丸以下八隻の外に、門司の夷丸と牛窓の田原丸と上關の夷丸との三艘が丸號に見える。而して戊子入明廩給を檢すると、改め一號船の寺丸の乘船人數が百五十人で、その廩給が二百三十三石餘と算せられる。ともかくも、戊子の入明船は、最初の豫定が變更されてゐるのである。上に抄出した船名簿のうち富田の彌增丸の名は、京都大學所藏の富田公用米送進狀と題する應仁二年十一月二十八日附古文書にも見える。やはり米運上の船が兵庫着岸についての送狀である。

以上が私のしらべた足利時代中期以前の丸號船舶の實例である。すなはち應永應仁にわたる六十五年間の用例であつて、明の永樂成化間をふくむ西紀第十五世紀の約三分の二に及んでゐる。この前後の時代乃至この年代間における他の

用目的については、前後の制約を自他に期待することにしよう。蓋し、若し假りに以上の、乏しき例を多少補ふならば、ら得た實例によつて觀察を下すと、應永時代に於て、御所丸御座丸などの丸號と八幡丸春日丸などの丸號と共、兩々併行はれてゐたのであるが、それらは、みな將軍家や九州の豪族の所有にかゝるものであるから、ただ後にいふが如く諸の丸號も、武器や樂器の丸號とおなじく所有者の愛用物であるといふ觀念の名殘りをほのかに留めてゐるやうに思はしめるのである。後に寺丸や宮丸の名があるやうに、こゝには神社から來た八幡丸や春日丸があるけれども、他方には御所丸とか御座丸とかいふ名も附けられてゐるのは、丸號の由來を暗示するものと思はれるのである。所有者の愛用觀念から來る丸號は、武器および樂器に早くその例を見出すが、その起源は童名の丸號に遡り、童名より一方には普通の人名に及び、他方には卑親族被傭人その他賤民更に動物にまでも及び、即ち親愛また愛撫の情から起つたものが輕視また賤稱の意に落ちるのは自然の勢である。もと愛用の意味から出たらしい船の丸號も、御座船より御用船に及ぼし、次第に過書船關船にひろまり、河川近海所有のものが轉じて渡唐船にまで進み、遂に背景の所有者の意識は亡くなり、愛用の觀念は消え失せてしまつたのである。上記の實例では丸號は比較的大船に命名せられたやうに見え、あひにく未だ武器の丸號や樂器の丸號の如く愛用の意味が適切にあらはれてゐる場合は知られてゐない。義經記の月丸も文學的誇張ではあるが五百人乘りで其のうへ馬二十五疋を載せるといふほどの大船であつた。私はもつと小さい船に丸の字の附いてゐる例を古いところに見出したいと希望してゐる。池や川に使ふ小舟にさういふ丸號はなかつたものかと考へてゐる。今でいへばボートの如き輕舸に丸の字がついてゐさうに思はれてならないのである。

例へば江戸時代でいふならば、將軍家の御座船に名高い安宅丸があるが、それよりもむしろ隅田川の納涼舟などに丸號のものが見えるやうに、その種の命名が龍頭鷁首の類の船が、假令へば鎌倉時代なり南北朝なりの京都には見出され

得ないであらうか。紳搢家の遊覽船などには無かつたものであらうか。種彦の柳亭筆記一の卷を見ると、凉船と題して舫船の事と樓船の名とが數々擧げてある。博覧な種彦は例の如く盛に俳書狂歌集その他の草子類を引いて丸號のついてゐる舫船などの名を十ほど書上げてゐるが、私は今一々それを抄出しない。

戰國時代に入つて關東にあつては北條氏、關西にては豐臣氏などに丸號の大船がきこえてゐる。それらは皆北條氏豐臣氏徳川氏に屬する御用船の類であつた。私は征韓の軍船をはじめ御朱印船にまで丸號がついてゐたか否かを知らないが、聞く所によると、徳川氏時代丸號は初めは官船に限られたもので、後世は官から却て丸號を附けるやうにと命ぜられたものださうである。中期以後の漂流記を見ても諸國の廻船にみな丸號がついてゐる。一々それを記るすに堪へないが、寶暦十二年筑前唐泊の本宮丸が南洋に漂流したのやら、天明二年伊勢白子の神昌丸、有名な光太夫が北太平洋の魯領アレウト群島に漂流したのやら、史上に殘る船名が數多ある。幕末に至つて西洋型の船にも丸號が命ぜられたことはいふまでもない。歐式の船は徳川初期にも既に造られたが、大船建造の制止以後に於ては、天明七年長崎に於て三國丸といふ千五百石の新型船が出來たのが特筆するに價するであらう。この船は長崎本籠町大串五郎平なるものの新工夫にかゝり、外形が日本船で、船底が唐船仕立てで、帆が和蘭船に傚つて造られたもの、即ち和漢洋三國折衷の新造船であるから三國丸とつけたのであつた。日本文化の象徵ともいふべき興味ある試みであつた。北國の俵物を運送してゐた際に、處女航海後程なく羽州赤石濱に於て破船したといふのは不運であつたが、折衷船の運命の象徵としては面白い。

勝海舟が艦長として日本使節を載せて渡米した咸臨丸、澤太郎左衛門が艦長として初回の和蘭留學生を載せて渡歐した開陽丸をはじめ幕府の西洋型船にして歴史上にその名をひゞかせてゐるものが何艘かあることは私の今更いふまでもない所である。海舟の名著たる海軍歴史を閲すると、卷二十三（第九冊）に揭げた船譜をはじめ、卷二十四（同）等

の卷々に新時代の丸號船が載せられてゐる。色々の命名が見えてゐるが、[illegible]船譜のうちに、[illegible]外、丸號でなくして夕顏横笛羽衣乙女蜻蛉などといふ源氏名の船名があるのも面白く、長州に庚申丸丙辰丸乙丑丸などと、萬延元年文久二年慶應元年の干支を以て命名してあるのは或は新例かもしれない。

維新までは軍艦にも丸號がついてゐた。例へば開陽丸とも開陽艦とも兩樣に呼ばれて一定はしてゐなかつた。その他咸臨丸御船とか、久留米の晨風船とか、日本造船史上に由緒深き伊豆の戸田で出來た新造船の君澤形とかといふ呼び方もあつた。開陽御船とか千代田形御船とかの稱呼も行はれた。横須賀海軍船廠史によると、明治以來、軍船には艦號を附し御用船御座船運送船に丸號を限るやうな習慣が出來たやうに見える。後年とはちがひ、軍艦には龍驤艦とか清輝艦とか天城艦とか日進艦とかいつて一々艦といふ字を附ける習慣であつたことが、同書の明治四年紀七年紀十年紀あたりに見えてゐる。幕末の過渡期に於て兩樣に使はれてゐた習慣が、明治以後兩方に分れて一定してしまつたのである。明治二十年代に至つて、艦といふ文字が除かれてしまつたので、古くは何々艦といつたことは私たちの年頃の人の記憶してゐる所であらう。明治九年ごろには迅鯨號などといつて舊式な、寧ろ支那式な名も行はれたことを最後に附記しておく。

さて話もとにもどつて再び丸號の來歷談に移るが、船のマルと問丸のマルや本丸二丸などといふ城廓のマルと關係があるかないかといふ問題を一考しよう。金澤兼光の和漢船用集卷二に見える說、大塚嘉樹の蒼梧隨筆卷一に引ける或說の如きは、船の丸は城の丸と同じ意義だと云つて居る。殊に金澤氏は、問丸も船の丸も城の丸もすべて、渾圓に模し、天體に像どつたものだとした。渾圓說はもとより牽强附會で採るに足らないけれども、三者間に語原上の緣故が存することは考へ得られる。大塚氏の引いた一說には、大將軍の御座船は本丸を表し、前後左右の船をば二の丸三の丸に擬して本丸の副船としたので、即ちこれ全く城壘を丸といふより轉じて船號としたのであると見えるが、これは大なる

說である。大塚氏自身もそれを否定してゐる樣である。城郭に丸といふのが、何時頃から始まるか私は未だ詳にしたい。群書類從合戰部に收めてある應仁略記卷下の「今出川殿伊勢國御一向の事」と題する條の附錄なる「多武峰合戰一色世保生涯事」のうちには、世保氏の守城の諸壘を丸々などといひ、「城衆隨分の者共打出で追拂ふ間丸は寄手迷惑の體也」といふ文句がみえてゐる。こゝには未だ本丸とか二の丸とか中の丸とか西の丸とか出丸とかいふ特稱はない位で、城郭の丸の用例としては古いうちであらうと思はれる。史實は應仁の事柄であるが、記錄した年代は確かにわからない。さりとてさほど後代の編輯とも見えない。ともかくも、船の丸は前述の如く應永時代すなはち應仁よりも五十年以前から文獻に見えてゐるが、城郭の丸の方が決して古いとはいはれない。殊に應仁略記に出てゐる城の丸の用例から考へると、古今人々が說くごとく城の丸は特に城郭の曲輪の丸いといふ意味から起つたと見る方が當つてゐるかも知れない。然し城主の所有、城主に所屬といふ觀念からすると、前に述べたやうに、船の名の丸と同じく所有主を背後に豫想するとも云へる。唯應仁略記の例に出ると、固有名稱でなくて普通名稱として出て來るから、船の丸や問丸のそれとは起源を異にすると考へる方がむしろ適當であらう。

これに反して、問丸のマルと船の丸のマルと同じだといふ說の方が有力である。享保年間の編著出版たる小栗實記卷五に小栗判官が照姫と結婚する一條に、判官助重が問丸の吉郞といふ者の宅に泊つてゐたといふ文句があつて、その註に

古ハ家名ヲ丸トヨブ、今ノ屋ノゴトク稱ス、故ニ問屋ヲ問丸トヨベリ、其遺言ニヨツテ舟ノ嘉號ヲ何丸トヨブ、其本ハ家名ノ屋號ナリ、

とある。屋號を古く丸といつた例を私は知らないから、この說を直に贊成しかねるけれども、私は舟の丸と問丸との間には、關係がありはせぬかと推測してゐる。但しそれについては他日別に問屋名稱考に於て詳にしたいと思ふからこゝ

には深入しない。ともかく小栗實記の說に和漢船用集に於ては壽固を見、後れて文政年間の嬉遊笑覽巻十一なる商賈の部に見える問屋の考のうちには、その說を排斥されたながらも、尙ほ問丸も船の丸も同意同語だとされてゐる。運送業と關係ある點に於て、又商人の根據といふ點に於て、所有主といふ觀念を豫想される點に於て、兩者のマルの間に因緣がありさうに感ぜられるのである。

丸が童名に起り、人名の外に或は動物の名に使はれ、或は賤稱人倫を呼ぶに用ゐられた例は一々詳說しない。ここには二三主要な場合を摘錄しておくにとゞめる。稻見丸の例は古く本草和名和名抄の如き辭書、狹衣堤中納言の如き物語にもあらはれてゐる。即ち平安朝の中程の書である。猿を猿丸といふは、永久四年百首の俊頼の歌に見えてゐる。その歌は夫木集にも引かれてある。宇治拾遺巻十、吾嬬人止生贄事の物語のうちにも猿丸は三ケ所にあらはれてくる。雉を雉丸、蝦を蝦丸といふ例もあると俚言集覽に見えるが、私は未だその時代と出典とを見出さない。これらは普通名稱としてであるが、特稱の名前としては、古くは犬に枕草子の翁丸があり、近代には鷹に百合若大臣の綠丸があること人の知る如くである。近古このかた唐丸といふ鷄が支那或は海外から輸入された。輸入は慶長以前にあつたのであらう。例の慶長八年の長崎吉利支丹版の日葡辭書にも登載せられ、支那の家禽にして日本種よりも强大なりと葡語で解釋してある。漢字にては蜀鷄としてあるから、或はもと蜀の産ででもあつたのか。タウマルは鬪鷄に適してゐるさうであるが、元祿時代の辭書や本草書や浮世草子の類に散見してゐる。元祿十年所刊の平野必大の本朝食鑑巻五の鷄の部に、大なる者は唐麻呂と稱す是れ素と中華より來るの謂か、麻呂とは古へ男子の通稱なりなどと解してある。形狀の圓いといふ所から來たといふ說もある。圓いといふ連想もあつたかもしれないが、日本語古來からの本能から名づけられたものと解する方がよからうと思ふ。西鶴の胸算用巻二の第四に、唐丸啼鳴らして來たるところが描かれてゐるのみならず、同じ

作者の男色大鑑卷八の第二に、別れにつらき沙室(シヤムロ)の鷄と題して、シヤモ鷄三十七羽のうちに、鐵石丸火花丸東丸などといふ鬪鷄の名がみえる若衆のローマンスが出てゐる。唐丸は普通名稱だが、これらのシヤモの名は特稱であることは言ふまでもない。

器物をパーソニフアイして丸をつけた例は何れの時代から起つたか。萬葉集卷十六のうちには、興味深き有由縁歌がある。その一首に鎌をカママロと戲稱した例が古例としては唯一つある。所謂ディミニユチーヴで、人や物を可愛く呼ぶ例は、和漢洋いづれにも珍くはない。支那の子や兒の文字をつけていふ習慣をはじめ、我が國の古語、俗語および方言にもコをつけていふ幾多の例、歐洲古今のディミニユチーヴ、今列擧にいとまがないから略するが、わが日本に於ては、特に中古の末期乃至中世の初期より、器物に對して愛玩する意味からして、丸の字を附けて特稱する習慣が起つた。萬葉のカママロは普通名稱的に呼んだので、愛弄的戲稱にはちがひないけれども、特に愛用品といふわけではなかつた。それに反して武器や樂器に對して愛用者が特別の名を與へた例が、中古の末か鎌倉の初めあたりから文獻にみえる。尤もこれも何が最も古いといふことはわからない。記載してある事柄の年代と、記載の年代とを區別して考へねばならぬことは當然である。例へば源平盛衰記の劍卷に見える刀劍の丸號の如きはそれである。蕪村の鞘走る友切丸やほとゝぎすの句でも知られる源氏の名刀の本名鬚切、賴光が綱に貸して鬼の腕を切つたので改名された鬼丸、それと同時に滿仲が作らせた寶刀膝丸、それが蜘蛛切とも小烏ともなつたが、これらの名刀物語は、芝居や講談風に吾々の興味をそそるが、すべてこれらの刀の丸號がいつに始まるかは明かにされない。保元物語卷一の鵜丸、東鑑卷五文治元年十月の條下の吠丸および鵜丸などの寶刀、それらから推すときは平安朝の末期までは遡り得るであらうと思ふ。太平記卷九には名越尾張守の忠家の寶刀鬼丸がある。次にマルはひとり刀劍には限らず鎧にもつけられた。膝丸といふ鎧のことは

保元物語卷一の「新院爲義を召さるゝ事」のうちに見える。但し一二の昔しの學者の說に、髭丸は剃てあつて刀でないとあるけれども、刀にもあつたことは盛衰記の劍卷に見えるとほりである。中世胴丸又腹丸と稱く一種の鎧があつたが、これは圓みのあるところから類推的に出來た名稱であらう。後世の書ではあるが徐葆光の中山傳信錄卷四、今歸仁の地誌のうちに、寶金丸といふ古劍に關する傳說が見えてゐる。安齋隨筆卷三十二の所說によれば、爲朝が所傳の劍であらうといふ。果して然るや否やわからないが、ともかくこれを直に琉球に於て丸號を刀につけたといふ證據とすることは出來ない。甫庵の信長記卷首には、千秋紀伊守景持の所持であるアザ丸といふ刀のことが出てゐる。

樂器に丸をつけたのは何時代であつたか。これも平安朝中期以後のことと思はれるが、果して樂家某々の時代からと、後世の記錄のまゝに信じてしまふわけにはゆくまい。然し刀劍の丸號よりはやゝ古くはないかと推察せられる。拾芥抄上卷末二の樂器部に、笙や笛や篳篥や箏の名物に丸號がついてゐるのを見かける。例へば笙に蜂丸、笛に富士丸、篳篥に海賊丸、箏に獅子丸、都合十二の丸號が出てゐる。この海賊丸の名は、續教訓抄卷十一にも見え、それには一名を海賊逃れともいふとある。この名物は、和邇部用光の遺愛であつて海賊を退けたといふいはれのある篳篥である。樂學錄卷十一にも載せてあるが、文學書では十訓抄卷十および古今著聞集卷十二にもその逸事を敍してある。この話は先年私が書いた海賊の話（南蠻更紗）のうちにも記るしおいた。下つて德川時代に及んでも、龍聽丸とか吹上丸とかいつたやうな笛が仙洞の名器や樂家辻氏の物にあつたと類聚名物考の樂律部に見える。

武器や樂器などの丸號が船に及ぶやうになつたのではあるまいかと私は前に述べておいたが、船の丸號の文獻にあらはれる時期は武器樂器の丸號よりも少々遲いけれども、古來船に嘉名をつけ位階を與へられたやうな由來もあるから、かういふ徑路よりして船の丸號は發達したものと私はみとめるのである。然し賤稱として鎌倉時代以後、賤人の女房を

妻丸といつた、一例が、沙石集卷七下の第十六にあり、軍夫または雜役に服する人夫を夫丸（ブマル）といひ仕丁丸（ジチヤウマル）といつた例が室町時代の記錄文書にみえることから推して、問丸の丸もこれらの丸と起源を一にし、更に問丸からして舟の丸に及んだのではないかといふ樣に考へられぬかと別の考案を私はいだいてゐる。

夫丸はブマルと濁り、仕丁もジチヤウと濁つて言ふが、いづれも慶長八年の長崎版日葡辭典に載つてをる。別に夫兵（ブヒヤウ）傍仕（バウジ）といふ名ものつてゐる。室町時代以後の節用集一類にも、これら二三の語は出てゐるのもある。ブマルは運歩色葉集や饅頭屋本節用集にも登載されてゐるが、記錄では群書類從武家部の殿中以下年中行事といふ書の、應永十九年の事を錄してある條に、中間三人ばかりで夫丸に鍬をもたせて山にのぼり地を七尺ほど掘つて武家貴人の御胎を埋めるといふ行事が記るしてある。この書は享徳三年の傳受書であるから、この語の時代は明かである。ジチヤウマルの方は、大乘院記錄の寶徳三年と多聞院日記の文明十六年とにみかけたが、尚古くもあるであらう。からいふ賤民の稱呼から、問丸の丸が起つたのではあるまいかとも思はれる。これらは喜田氏や柳田氏の研究や意見を聞いて見たいものである。

最後に船の丸號に關する研究資料をあげて讀者の參考にしよう。

（一）新野問答。〔新井白石全集六〇五六五頁及五五六頁〕元祿寶永正德期の公卿學者中の俊才野宮定基の說が出てゐる。云く「船にても丸の字をつけ候は皆其物を愛して人の如くに丸の字をつけ申意にて有べく候」とある。後世の定論の基となつてゐる。

（二）小栗實記。卷五。伏見島山泰金著。穂積以貫參考。享保十八年序、二十年刊。

（三）和漢船用集。卷二「丸號の事。」

大阪堂島船工金澤兼光著。寶暦十年他序、明和三年刊。

（四）春湊浪話。卷上、〔存齋叢書本〕岡山土肥經平著。

安永二年自出。「古く後代船の名に丸といふ字を付へて呼ぶ、是九は船を愛して人になぞらふなり」。

(五) 蒼梧隨筆。卷一、(百家說林續上四二二頁)

大塚嘉樹著。享和三年歿、七十三。天明四五年頃の考か、遲くも寬政中。「船名稱丸之事」の一條。丸號に關する考說中最も詳細なり。野宮氏の說をも引く。

(六) 嬉遊笑覽。卷二下、器用。卷十一、商賈。

喜多村信節著。文政十三年自序。

(七) 傍廂。二編下(百家說林正上三八五頁。)鈴屋の門齋藤彥麿著。嘉永六年成。安政元年歿、八十七。

「舟の名を何丸といふ事」の一條あり。

なほ一二の書があるが舉げるほどの價はない。以上の七書以外一二の參考書は本文に出てゐるから省いたものもある。

最近の研究では左の四種を擧げねばならぬ。

A 海事大辭書。中卷、作川正一編、大正十四年十一月序及刊。「船名の丸」の條項。

B 社會史研究(民族と歷史)。第十卷二及三、大正十二年八月九月、「マロといふ名の變遷、」喜田貞吉稿。

但し船の丸のことに論及せず。

C 神戶市史。大正十一年十二年刊。

其一。別錄一。中世の兵庫、三浦周行稿。

二六及二七頁二九頁

其二。資料一。二二七頁、二七九及二八〇頁、三二四及三三二頁及三三三頁及三五七頁、三六二頁、

D 國語と國文學。大正十五年十月刊行軍記物語號。

「義經傳說の淵叢としての義經記、」島津久基稿。當號五〇五頁(第三章、製作年代と作者)

文藝時評

菊池寛

世相雜感

近來の世相の末期的な姿に、眉をひそめてゐるものは、獨り我々だけではないのだらう。過去二十年間、我々が相當な理解と見識とを持ち始めて以來、醜聞事件は可なり多かつた。國家にとつての不祥事件も可なり多かつた。だが近來の事件のやうに、不快なイヤな副事件を伴つたものは、極めて稀だと云つてもいゝ。

朴烈事件などより、幸德事件や、虎の門事件などの方が、國家に取つてもより大なる不祥事件で、我々の受けた激動も、はるかに大であつた。だが、あの兩事件とも筋はハッキリ通つてゐた。悲しむべきことであるが、出來た以上どうすることも出來ないことだつたと思つた。だが、今度の朴烈事件の如き、事件そのものよりも、その副事件から受けた感じのわるさ、後口のわるさに至つては、助からないやうな氣がするのだ。自分などが一番をかしく思ふことは、天皇の御名に依つて犯人を調べてゐる豫審判事が、なぜ囚人の御機嫌を取つてやらねばならないかと云ふことだ。刑事が犯人の御機嫌取りに、親子どんぶりを御馳走するなどは、いゝ。いやしくも司法權を行使してゐる裁判官が、犯人の御機嫌を取るなど云ふことは、法の威嚴を損ふも甚しいと云つてもいゝ。もし、犯人が不逞剛情で豫審が延びると云ふならば、何年延びても一向差支ないではないか。

しかし、豫審判事が、一時の便宜として、御機嫌取りをしたのならば、まだいゝが、調べてゐる判事の方が、却つて

犯人よりも、三三三を恐れてゐるのではないか。政府なぞは、内心と表面とで、ことごとく、まゝした卑怯な機嫌取をしたのではないか。

私は、該事件の内容については、あまり知らないが、朴烈の事件の如き、結局彼等たちむつ空想的な計畫で、實行性の伴はないものでなかつたかと思ふ。彼等の大言壯語を、彼等自身の口だけで、やゝ民間化した程度のものではなかつたかと思ふ。豫審の困難なども、かうした點に存在してゐたのではないかしら。近來、司法當局の非常識は、學生諸事件などにも現はれてゐるやうに思ふ。一學生の日記を問題にするが如き、あまりに極端ではないかしら。我々は、他見をゆるさない日記の中では、自分の頭で空想するのと同程度に、いかゞはしいことでも、不穩なことでも書かないとも限らない。恨みに思ふ戀敵の暗殺計畫などでも、日記の中では書かないとも限らない。日記をさう云ふ風に見られゝば、大抵の人間は多少とも罪を作つてゐると思ふ。

司法當局が、法の精神のまゝに、國法を侵す者を取締るのは、至極結構であるが、京都を放つてまで、天下の秘密私語をまで罪せんとするが如きは、却つて社會の安寧を亂すものではないだらうか。

とにかく、朴烈の減刑などは常識以下の當り前さである。未遂罪であり、しかも新附の民である以上、極刑などは當然避くべきだ。政友本黨が、減刑の不當を鳴らすが如きは沙汰の限りだと思ふ。

一體朴烈事件などは、國家として不祥事件であり、怪寫眞などの不快な副事件が生じた以上、朝野共なるべく早く該事件を、社會の記憶から葬り去るべきである。かう云ふ事件を、いつまでも世人の記憶に殘し、司法官の中にその行使する法律に確信を失つてゐる者がゐはしないかと云ふやうな、疑を世人に感ぜしめることなどは、一黨一派の消長などよりも、國家にとつては大切な問題ではないかしら。あの問題で、内閣の責任を問ふなど云ふことは、既成政黨乃至は

支配階級の自壞作用で、さうした國家的危險を無視し、若しくは自滅的作用にも氣がつかず、朴烈問題に執着してゐる政黨者等の態度は、馬鹿々々しいと云ふ外はない。

松島事件も、われわれ第三者から見れば既成政黨の自滅作用の大なるものであつた。殊に箕浦氏の告訴に依つて、その極に達したと云つてもよい。あの位な、醜聞は現在の政黨として、それほど驚きもしないが、いよ〳〵の土壇場に來ると、多年の黨友が、相誣告し合ふが如きは、人間として一番あさましいことである。默阿彌の白浪物の如き、惡事を働きながらも、惡人同志は情誼と義理とで、ピッタリと結び合つてゐる、現在の政黨者流には、それ丈の情誼も義理もないのだらうか。

新聞專制時代

現在は、新聞の王朝である。某大新聞社長が、俺は帝王の次ぎだと豪語したと云ふが、ウソか本當か知らぬが、たしかに一面の眞理である。反對黨の畫策に脅かされ、元老や樞密院の意向に氣兼しなければならぬ總理大臣などに比し、いかに大新聞社長の位地が、絕對的、君主的であるか比較にならぬと思ふ。

新聞紙は、現代に於て、完全に社會の耳目となり、社會の感覺となつてしまつた。社會の感覺を壟斷してしまつた。人間の意識が、感覺に支配せられるが如く、社會の意識は全く新聞紙に支配されてゐると云つてもいゝ。現代に於ては、事件が happen すると云ふことは、新聞紙に出ると云ふことと、全く同意語である。天下を騷がした鬼熊事件の如きも、若し當局者が犯人逮捕に支障ありとし早きに記事掲載を差止めたら、普通の殺人記事と、同じセンセイションしか起さなかつただらう。馬鹿々々しき山狩をした警察署のやり方も、をかしいが、一市井の兇漢の失踪を、大紙面を費

して、いやが上にもセンセイションを煽り立てゝ行く新聞紙の態度も、悲しきものであるかどうか。

あはれむべき一兇漢は、消防組頭の同情に依つて、出没自在の殺人鬼に祭り上げられ新聞紙の煽情的報導に依つて天下の英雄兒になつてしまつたと云つてもいゝ。宛として、シングの「プレイボイ」である。現代に於て、新聞紙は事件を報導するよりも、報導することに依つて、事件を作りかつ擴大するやうである。

新聞紙の政界人事に對する批評の如きも、動々もすれば無責任に陷りやすい。殊に、三四行の批評文の如きは、甚しきものがある。新聞紙ほど、何等の責任を負はずして、他を攻撃非難し得るものはないと云つてもいゝ。筆者は、悉く匿名で、茫洋たる新聞紙なる雲霧の中に籠つて、敵を攻撃し得るのであるから、こんな有利な立場はない。現代に於て、人が人と戰ふ場合、自分自身多少ともガラスの家を持つてゐる。新聞紙のみはガラスの家がないのである。攻撃された相手は、何に向つて矢を放てばいゝのか。その多くは、泣き寢入りである。どんなに、不當を感じても適確なる相手のないためと、相手があまりに大なるために、多くは泣寢入りである。

新聞紙は、またその報導の誤謬虚僞などに對しても、殆ど何等の責任も持たないやうである。最近に起つた甘粕大尉の會見記事の如き、讀者は何を信じ、何を疑つてよいのか。あれほどの不思議が、何の辯解も現はれず何の批評も受けずして、そのまゝに過ぎ去つてしまふのであるから、新聞紙は現代に於て、斬捨て御免、失策勝手次第の特權を持つてゐると云つてもよい。

凡そ、現代の機關にして、他の機關から監督や批評を受けないものは皆無と云つてもよい。たゞ、新聞紙丈は監督批評を受けないと云つてもよい。政府から受くる監督の如き、非常に部分的なものであつて、新聞紙の自由なる手足に對して何の拘束を與へるものではない。批評機關に至つては、絶無である。新聞紙が、あまりに有力であるために、これ

を批評し得るほどの機關は存在し得ないのである。しかも、新聞紙同志は無言の協定があつて、決して他紙の否を擧げないのであるから、新聞紙は天下に恐るべきものがないのである。

たゞ、新聞紙の恐るゝ者は、廣告主と讀者である。しかし、廣告主の如きは、根が商買人であるから、新聞との間は常に圓滿なる關係に於て在る。たゞ殘つてゐるものは、讀者である。

新聞紙は、讀者を恐れ重んじてゐる。讀者から來る一枚のハガキが、どんなに重視されるかは、想像以上である。しかし、この新聞紙の讀者ほど、連絡のない者はない。讀者が、會社の株主の如く連絡し得るものならば、新聞紙に對して、重大なる勢力を爲し得るだらうがさうした連絡の便宜も機會も絕對にないといつてもよいのである。

新聞の勢力は、現代に於ても恐るべきものである。批評と監督を受けてゐない勢力は恐るべきものだと思ふ。社會個人は、多少とも新聞紙の at the mercy に生きてゐるやうな氣がする。

しかし新聞紙が、かうした權力を持ちすぎると云ふことは、社會のためにも新聞紙自身のためにも、よいことではあるまい。權力のあるところに、反動の力が蒐まつて來るのは當然である。私は、新聞紙自身が、自然的にその勢力を調節すると同時に、新聞紙に對する公平峻嚴なる批評機關の出現を望んで止まないものである。

現代日本文學全集

改造社が豫約募集した「現代日本文學全集」は、人選、その他に就て、多くの物議を醸した。由來、かうした全集物は、常に多少の物議を持たないものはないと云つてもよい位だ。古くは、秋聲花袋兩氏の生誕五十年祝賀を紀念するための現代作家小說集も、その人選について行き惱みを生じ、最後に作家同志の投票に依つて、漸くこれを決した。文藝

家協會の「日本小說集」も新潮社の「現代小說全集」國民圖書株式會社の「現代戲曲全集」も、その大きさに於て、問題を起さなかつたものは皆無であると云つてもよい位だ。

近世の作家若しくは現存作家に就いて、その等級をつけるべき標準などの有り得やう筈はないのだ。たとひ、讀者の認識、或は市場價値等に依り強いて等差を作くるとしても、第十位までの作家を採れば第十一二位乃至第十五位の作家が不平不滿を感ずるは當然である。第十五位までを採れば、第二十位までの作家は恨むだらう。しかも、その恨みを避けんとして、第二十位までを採れば、第二十五位までの作家は怒るだらう。第三十位、第五十位、第百位に及ぼしても、次點者級の怒り恨みは到底防ぎ切れないだらう。

「現代戲曲全集」の如きは、次點者級の怨嗟を斷たんとした結果群小戲曲家を網羅し、その顚觸の如き紛擾を極めて、むしろ醜態に近い位だ。これに反して新潮社の「現代小說全集」は、むしろ少きに止めてある。此の場合、現代戲曲全集」の過ぎたるは「現代小說全集」の及ばざるにしかずの觀さへある。

とかく、現代の各作家から、有限の數を撰擇するが如き、容易の業ではないのだ。如何なる撰擇法をとるとも到底何等かの非難を免れることは出來ないのである。

改造社の撰擇法は、改造社一流の荒療治である。現存作家の如き、芥川、久米、里見、菊池を以て打ち切つてゐるのだ。此の點に就て、多くの非難のあるのは當然である。

而も、里見芥川の諸氏は二人を以て一冊分とし、自分菊池の作品は一人を以て一冊分としてゐる。かう云ふことも甚しく不合理に見えるに違ない。しかし、自分の確聞するところに依れば、里見氏芥川氏の如き、皆一人一冊たるを固辭した。自分の如きも、最初は一人一冊たるを辭退しようとした。それは、他でもない原稿紙千二三百枚の分量を、わづ

か一圓の廉價版にて賣らるる如きは、作家として苦痛である。かくの如き廉價版の存在は、作家の他の著書の賣行を脅威するものである。自分が、一人一冊たることを嫌つたのは、その理由である。芥川氏里見氏等が、一人一冊を嫌つたのも恐らくその理由ではないかと思ふのである。從つて、芥川氏や里見氏を一人一冊とし、自分を一人一冊としたことに依つて、改造社を非難するが如きは、當らざるも亦甚しい。

元來、今度の改造社の仕事は、背水の陣であり、改造社としては乾坤一擲の冒險であつたのだらう。從つて、その目的に盲進するの餘り、殆んどその手段を撰ばなかつた恨みがある。我々に承諾を求めるに當つても、「廉價版を出したい、千二百枚位の分量を、一圓で賣りたい」と云ふ以外、それを現代日本文學全集として發行する等の意志は、われ〳〵に少しも洩らさなかつた。その點に於ても、甚しく亂暴である。

殊に、現存作家である宇野浩二氏、豐島與志雄氏、長與善郎氏、山本有三氏、葛西善藏氏、廣津和郎氏、藤森成吉氏等を全く除外したことは、甚だ遺憾に堪えないことである。現代日本文學と云ふ以上、明治時代の作家よりも以上の諸氏を尊重して貰ひたかつたと思ふ。

しかしながら、改造社の現代日本文學全集の如き、根抵に於て、改造社の營利的企劃である。その人選の如きも、文學的名分は第二位であり、市場價値が第一であることは、當然である。市場價値が無くて、單行本などの世に行はれない作家を、全集丈けに採錄しなければならぬと云つたやうな義務は、出版書肆にはないと云つてもよい。文學的名分が、正しくないために賣れないとすれば結局損をするものは出版書肆である、他から彼是云ふ必要はないと云つてよい。

出版事業も、たとひその看板はどうであらうとも一個の營利事業である以上、文學的名分のみを以て、責むるのは無理である。たゞその營利と一致する限りに於て、どれほど文學的名分を守り得たかを、見る外はないのだらう。

改造社の現代日本文學全集は、その人選に於て、多くの缺陷があつたとしても、現代日本の大作家を、わずか一圓の廉價で、普及したことについて、充分の効績を認めていゝと思ふ。文學的讀者を、異常に開拓したことに依つて、現代日本文學に相當の寄與をしたものと見ていゝと思ふ。

保守反動の文壇

昨年度の文壇が、著しく保守的反動的であつたことは、到底否定することは出來ないだらう。昨年に於ては、何等新しき文藝的進展がなかつたと云つてもよいだらう。それは、文壇の編輯的要路に在る者乃至はジヤアナリズム的雜文業者が、悉く現狀維持派であるからであらう。

天分少くして、辛うじて現文壇に於て位置を占めてゐるものが、文壇の變化を怖れるのは當然のことであらう。彼等は、常に新しき勢力を怖れ、文壇の均衡を破るものを怖れてゐるのである。從つて、彼等は既製の老大家の功業は、口を極めて賞讃するのである。現社會制度の存續を希望するものが、現在の支配階級の功業を謳歌するのと非常に酷く似てゐる。

昨年の文壇に於て、老大家連が相當の力作を出したことは、これらの保守派連の讃嘆を博するのに充分であつた。しかしながら、昔ながらの大樹が一寸か二寸か延びたからと云つて、文壇の進展と何の關係もないと云つてよい。既知數が既知數なりに一なり二なりを加へたに過ぎないのである。

さうした既知數を以て、多數の未知數に對抗させ、未知數の發展を妨害しようとするやうな文壇全體の保守的風潮は、その背後に文壇の進展變化を恐怖する連中が、隱れてゐるだけに、唾棄すべき傾向である。

現在の文壇は、既製老大家連と、その取卷連中と、換言すれば既成小家と新進作家との三つに別れてゐると云つてもよ

い。而して、此の取卷連中は、既成小家連中は千松ではないが、千年萬年持つたとて、到底彼等自身の時代は來ないのである。否、既成大家連中が、榮えてゐる中に、どうにかかうにかして、自分自身を少しでも世に出さうともがいて見る丈である。彼等が、出來る丈既成大家の執政を長くしようとし、既成大家を擔いで、新進作家の擡頭を抑へようとするのも、當然である。

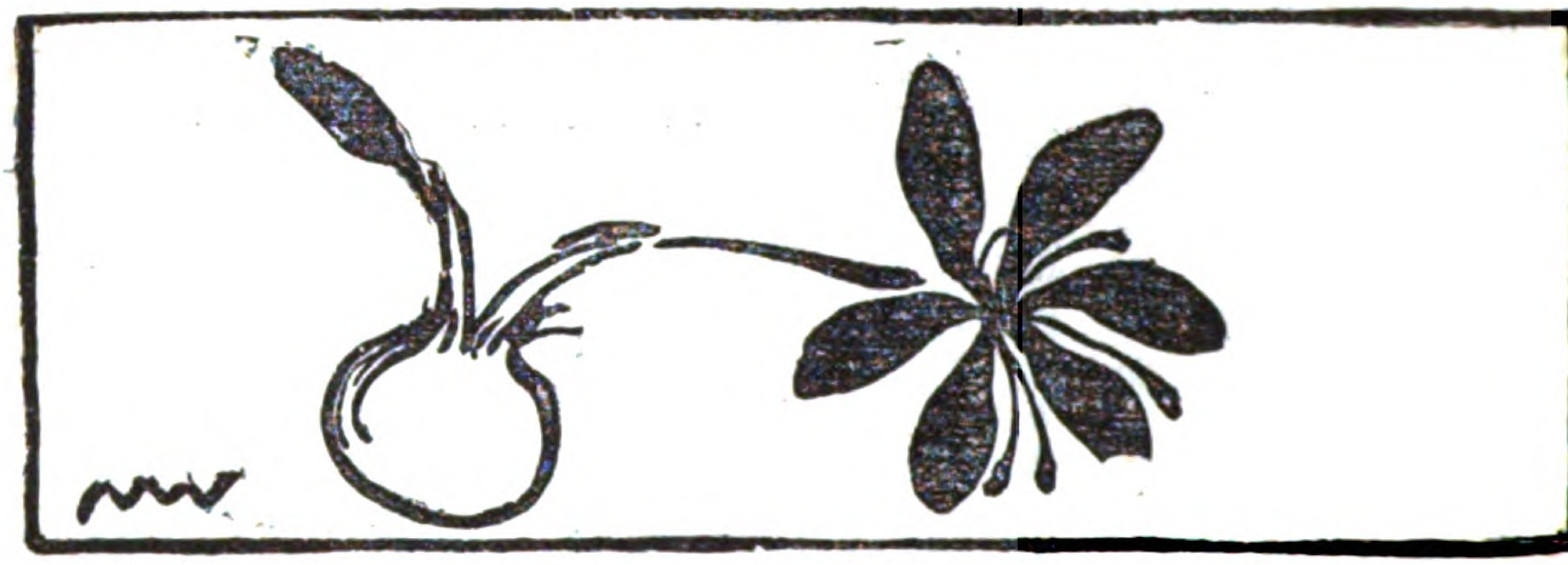
藤村、秋聲、白鳥氏の如き、尊敬すべき文壇の長老である。しかし此の三家が、昨年の文壇に於けるほど、無條件に肯定されたことは絶對にないと云つてもよい。我々は、五年前、十年前に白鳥氏も秋聲氏も、常に六分の肯定と四分の否定とを持つてゐたのを知つてゐるだけに、五年後、十年後の今日、その全肯定に近き狀態を見て、文壇の保守的風潮の旺盛を嘆ぜざるを得ないのである。

かうした保守的傾向については、文壇に、新しき主義主張が皆無なのも、一つの原因であらう。プロレタリヤ文藝は、今にして思へば、適時的な主張であつた。しかし、結局一の輸入候補であつた。落選したのは、仕方のないことである。だが、プロレタリヤ文藝以後文壇には、新主張新主義がないのである。新感覺派の如きは、その奇拔なる名稱に依つて、少しを獲て、多くを失つたと云つてもよかつた。

主義主張が、皆無な場合に依つては、個人々々が、その個性的な仕事をやつて行く外はないのだらう。その上、現狀維持をのぞむ、張三李四の徒が、既成老大家の萬歲を三唱するのであるから、文壇の進展しないのは當然であらう。

しかしながら、新しきを求め、新しきに飢えてゐる文藝の新時代が、かうした現狀に滿足しないのは當然であらう。十間も高い樹が、今年十間一尺に背が延びるよりも我々は、一間でも二間の高きでもいゝ、新しい樹木が、文壇に芽を出すことを望むものである。それと同時に、未知數の新樹をすぐ松の樹と比べて、否定し去らうとするやうな頑固な保守的批評を極力排斥したいと思ふ。

《中央公論新年大附録創作號》



勝敗

正宗白鳥

人

園村　大造（三十歳ぐらゐ）
岩瀬　俊一（四十歳ぐらゐ）
磯崎　欽也（三十歳ぐらゐ）
同妻とも子（三十歳ぐらゐ）
五百木龍子（二十三四歳）
河津　仙吉（三十五六歳）

時

晩秋の頃

（一）

あるホテルの一室。

それは地下室である。天井は低く、周圍の白壁にはヒヾがあつたり、汚點があつたりしてゐる。廢物利用の客室らしく、日當りや風通しの自然の恩惠は缺けてゐる。從つて部屋そのものは陰鬱である筈なのだが、大ホテルの餘光によつて、靜かなしつとりした住居になつてゐる。敷物やベツトや、机や椅子や、箪笥や、電燈や電氣暖爐などが、小奇麗に配置されてゐる。

岡村大造（三十歳前後の痩形な、しかし健康體な男）今、外から歸つて來たばかりといつた風で、黒つぽい背廣服を着け、靴を穿いたまゝ、暖爐に當つて、金口の西洋煙草を吸つてゐる。……ふと、吸殻を床上に投じて、兩手で頭を抱へて、顏を顰めて、踵でコツ〱音を立てながら、室内を小廻りに一廻りしたところへ、來訪者のノツクが聞える。

彼れは「お入りなさい」と應へて、頭から手をおろして、身構えをする。

岩瀬俊一（大造の實兄で、歳は四十あまり。大造よりは肥つてゐて、髯がのびて穢らしく、紋付の羽織に袴を着けて、見るから田舍紳士然としてゐる男）外套と鞄とを持つて入つて來る。

二人は相見て互ひに微笑する。

大造　僕は今外から歸つて來たところだ。丁度よかつた。

俊一　わしも用事が大抵片附いたから、成べくなら、今夜の夜行で歸らうと思つて居る。二度も電報が來とるんぢや。

外套や鞄を下へ置いて、暖爐の側へ腰をおろす。大造は、大儀さうにそのほとりへ椅子を引寄せて腰をおろす。

大造　こんな不景氣な時節に、兄さんの商賣は非常に繁盛してるんださうだね。ちよつと驚いたよ。

俊一　なあに、田舍の事業ぢや、儲かつても儲からなくつても、高が知れてらあ。お前なんぞの商賣のやうに、煙草を吸つて馬鹿話をしとるうちに、紙幣束が舞込んで來るやうなボロイことはないのぢや。（トゲ〱した口調で云ひなが

ら、袂から敷島とマッチを出して、一本火を點ける）

大造　何處にだつて、今時そんなボロイ儲けがころげ込んで來るものか。

俊一　だつて、東京の奴等はみんな金を有つてゐさうな面をしてるぢやないか。田舎の金はみんな都會へ捲上げられるんだからたまらないぜ。お前なぞも田舎者からさらつた金を東京へ持運んで來るのが役目なんだらう。銀行の重役だなんて、そんなことをしとれば役目が濟むんぢやから、うまいもんぢや。

大造　僕なんざ重役だか輕役だか分りやしないさ。

俊一　お前も園田家の養子になつて何年になるのぢや。まだ財産が自由にならんのか。意氣地がないぢやないか。第一東京に堂々とした自分の家があるのに、何だつて、田舎から東京へ出張するたんびにこんな宿屋に泊るのぢや。不見識だとは思はないのか。

大造　フヽン（と、せゝら笑つて）兄さんは東京へ來て何處に泊つてゐたのだ？

俊一　（澁い顏して）わしは巣鴨に泊つて居つた。……いや、泊つたのか泊らなかつたのか分らないやうなものだが、兎に角、蒲團の上に寢かして貰ふだけは貰つたのぢや。ハヽヽ。

大造　巣鴨から毎日東京まで用足しに出るのは厄介だな。

俊一　そのくらゐなことは構やあせんが。……宿代が助かるんぢやから。

大造　高が中學の先生の安月給取りの家ぢや、田舎のお客にたび〳〵泊られちや困るだらうからな。

俊一　空いた部屋へ寢るだけぢやないか。晩酌の一本の無心を云ふんぢやないし、どれだけの迷惑になるんぢや。……わしは今度から宿屋へ泊ることにしよう。

大造　それがいゝよ。商賣で來るのなら旅費はちやんと豫算に入つてゐるんだらうから。

俊一　豫算なんぞ當てに出來るものか。……わしは、お前を園田の養子にしといたら、ゆく〳〵子供の教育費くらゐは融通して貰へるだらうと、胸の中で豫算に組んでゐたのだが、そいつも結局水の泡になつたのだからな。

大造　そのかはり、僕には親爺の遺産が鐚一文たりとも分配されなかつたんだからいゝだらう。

俊一　何だ。おぬしは、堂々たる銀行の重役の養子になつてゐながら、田舎爺の爪の垢ほどの遺産のことをまた考へとるのか。ケチ臭いことを云ふな。……遺産と云つても、あれは親爺を助けてわしがつくり上げたものなんぢや。

大造　だから貰はうとは云やあしないよ。（不機嫌さうに云つて）まあ、紅茶でも、御馳走しようか。

さう云つて、椅子から立上つたところへ、五百木精助の娘龍子（今、美容院から出て來たばかりと云つたやうに頭髪と顔面とを美しく飾つて、ケバ〳〵した衣服を着けてゐる二十二三歳の豊麗な女）が、扉の間から半身を出す。

龍子　あら。お客様（と、云つて、扉を締めて引込む）

俊一　（不思議さうに）あの人は誰だ？

大造　僕の友人見たいな男と縁談が出來かゝつてる女だ。奇麗だらう。

俊一　奇麗と云ふよりも化物見たいぢや。

大造　どうせ女は化物なのさ（獨りで感じてゐるらしく云つて）隣りの部屋に泊つてる僕の友人の從妹なんだが、折角の良縁がちよつと行悩んでるのだ。行悩んでるのが、僕たちには面白いんだが。

俊一　どういふ譯で？

大造　先方の男は醫學博士で風采も可成立派なので、女の方から飛付くほどの良縁なんだが、いよ〳〵見合も濟んで話が極りかけた時に、男の方から不意にある條件を持出したのだ。それは、直ぐにも病院を建てたいから、輿入れの時にお土産として十萬圓耳を揃へて持つて來て呉れと云ふことなんだ。無論女の兩親は驚いたね。何處へ出しても耻か

[illegible]

出したものゝも方が随分きの事だといふのにひかされて、手土産の何割かを何分の一かに負けて呉れと、仲人の方を経て交渉をはじめたんだ。我らかの金をつけてやるのはきあいゝとしても、その金で藝者遊びなんかされちや詰らないから、遊蕩禁制の契約書でも書かせようかといふやうな話ではじまつてるんだから面白いだらう。

俊一（にが〳〵しさうに）そんな話が何が面白いものか。呆れた奴だ。金と結婚をするやうなものぢや。

大造　金と結婚が出来りや結構だが、我々は金のにほひばかり嗅がされて詰らないよ。……しかし、娘の結婚に、亭主の遊蕩禁止の契約書を書かせるのは奇抜だね。

俊一　當世の高等教育を受けた奴に、そんなに慾の皮が突張つとるのか。わしなぞは安氣に喰へさせすりや、餘計な金錢は不用だと思つてゐる。

大造　誰れでも云ひさうな御尤な理窟だが、必要な金と餘計な金との區別は分らないからね。

そんなことを云つてゐる間に、靴を脱いでスリッパを穿く。

大造　僕なぞは、目下のところ必要な金に不自由してるんだからね。

俊一　ハヽヽ。勝手なことを云つてらあ。こんな贅澤な西洋宿に泊つたりして居りながら。

大造　なにが贅澤なものか。……さうだ。紅茶でも御馳走しようか。

さう云つて、暖爐の側のベルを押さうとしてゐるところへ、ノックが聞える。「カム、イン」と、聲をかけると、磯崎欽也（三十歳前後の、稍々虚弱らしく見える男）要径をくゆらせながら、部屋着の寛やかな和服を着て入つて來る。

欽也　入つていゝのかい。

大造　あゝ、いゝとも。……これが、僕の一番上の兄なんだ、（と云つて、大造の方を見て）この方が、磯崎欽也君といい

ふ僕の友人なんだ。靜岡縣に廣大な果物畑を持つてゐる富豪の一人なんだ。

欽也　ハヽヽ。富豪はよかつた。（俊一に挨拶して）園田君からお噂は承つてゐました。

俊一は恭しく挨拶して、袂から名刺を出して欽也に渡す。

俊一　以後お見知り置かれますやうに（と、馬鹿叮嚀に自己紹介をするので、大造は苦笑を洩らす）

欽也　あなたのお家でもこの頃柑橘類の栽培を盛んにおやりになるさうですね。

俊一　いや、まだ着手したばかりで御座います。その道の御經驗の深いあなた樣のやうな方から、是非御意見を承りたいと存じます。

欽也　いや、わたしどもは他人（ひと）まかせで、自分にはなんにも分らないんですよ。

大造（二人の話を遮つて、欽也の方を見て）君は僕に何か用事があるんぢやないか。

欽也　僕よりも龍子が君に用事があると云つてる。急に話したいことがあるらしいんだ。河津が訪ねて來る前に、何か君に相談しときたいんだらう。

大造　相談と云つて何だらう（と、訝しげに云つて）ぢや、かうして呉れたまへ。龍子さんには此處へ來て貰つて話を聞くことにするから、君は兄貴を階上のパーラーへ連れて行つて、果物の話なり何なりすることにして呉れたまへ。

欽也　それもよからう。此方の話が濟んだら、僕が迎へに行くことにしよう

大造　それで、若しも河津が訪ねて來たら、君の部屋で待せて置くやうに、ボーイに吩咐けて置くんだね。

欽也　それがいゝ。ぢや、龍子を呼んで來るよ（と云棄てゝ出て行く）

俊一　あの人はお前くらゐな年格好だが、富豪の息子さんなのかへ。

大造　富豪といふほどぢやないが、兄さんつ所は喰ふに困らない財産はあるから、大きな温室なんか作つて、トマトや葡萄を育てたりして、贅澤な趣味生活をしてるんだ。その方は詳しいさうだから、よく聞いて見なさい。參考になるだらう。

俊一　わしだつて生果物の栽培には苦心して居る。あんな若い男の意見を拜聽しようとは思はんぜ。

聲高にさう云つてゐるところへ、欽也と龍子とが顔を出す。

欽也（俊一を見て）ぢや、あちらへいらつしやいますか。

俊一　ハイ。お伴いたしませう。

龍子に會釋して欽也に隨いて出て行く。

大造は、戸口から首を出して二人を見送つてから、外から開かぬやうに、扉に堅く錠をおろす。

龍子は窓際に寄添つて外を見てゐる。大造は取澄した目顔をして女の側へ寄つて來て、カーテンをおろす。そして、命令的口調で、

大造　まあ、そこへお掛けなさい。

龍子が椅子に腰をおろすと、大造も椅子に腰を掛ける。

龍子　今の方があなたのお兄さん？

大造　さうです。僕は用事を片付けて歸つて來ると、破崎の部屋を訪ねるさきに、自分の考へを極めて置かうと思つてゐたのに、兄貴が出抜けにやつて來て、例の田舍理窟を喋舌くるので、考へ事も何も出來やしなかつた。……それで、あなたの急用といふのはどんなことなんです？

龍子（冷然として）あたし、あなたのお考へを承りたいと思つてますわ。

大造　今はゆつくり話合つてる時間はないんだから、他人行儀は止して、短刀直入に事を極めませう。……あなた、河津の蟲のいゝ條件を容れて結婚する氣になつてるんですね（咎めるやうに云ふ）

龍子　だつて、それはあなたがお勸めになつたんぢやありませんか。河津さんの人物をこの上もない人間のやうに吹聽なすつて、あたしにも兩親にも頻りにお勸めになつたんぢやないの。

大造　だから、この縁談を成立させたらいゝでせう。

龍子　あなたはあたしに同情してさう云つて下さるのか知ら。あたし何だか怖いやうだわ。

大造　ハヽヽ、僕を怖がるんですか。僕はあなたの過去の弱點につけ込んで、あなたを脅迫するやうな卑怯な眞似はしませんよ。戸崎は完全に死んだのだから、あなたは平氣で博士夫人になれるんです。

龍子　あたし、博士夫人なんかになりたかありませんわ。どうせ田舍の商人の娘なんですもの。

大造（冷笑して）博士夫人になりたくない顏ではなさゝうに見えるけれど。

龍子（ふと嶮しい目をして）さう云つてあたしを侮辱なさるの？……ぢや、兩親が何と云つても、あたしこの縁談を斷はつてしまいますわ。

大造　それは御勝手だが、河津は僕の親友だから、河津の細君になる人を、僕は陥りやしません。河津の要求をあなたの御兩親に取次いで、要求の一部分でも聞入れて頂かうと、いろ〳〵と取做しをしてゐるのは、あなたの弱點に對して――あなたに云はせれば無論弱點ぢやないんだが――世間の道徳から見た弱點に對する賠ひにしてるつもりなんです。さうでなきや、あなたのやうな、東京の社交界へ出しても、直ぐクインになれさうな美人が、お化粧料自分持で結婚するつて法はないんですからね。……さう云つても、河津は何も知つてやしないんですから、あなたは安心して

いゝですよ。

龍子　有難うよ。あなたの恐ろしい御好意を受けて縁談を纏めて頂いたら、兩親も喜ぶでせうよ。

大造　……それで今日は、磯崎と僕と二人で、河津の意向をよく確めて、どちらかに話を極めようと思つてるんですが、その前に、龍子さんの本心をよく掴んどかなきや困りますからね

龍子　だつて、今日はあの方があたしと二人きりで話をしたいと仰有つたんぢやなくつて？あの方の意向は、あなたや欽也さんに確めて頂かなくつたつて、あたしからよく聞きますわ。それよりも、園田さんは何だつてあたし達の縁談にヤキモキしていらしやるんでせう。

大造　ヤキモキしてるなんて、いやなことを云ひますね。あなたの御兩親の熱心な依頼も受けてるし、河津は僕の親友ではあるし……

龍子　御自分の御本宅があるのに、こんなホテルにお泊りになつたり………

大造　それは氣樂だからですよ。別に意味のあることぢやない。

龍子　白ばくれていらつしやるわね（笑つて）あたし、機會を待つてゐたのですけれど、もう愚圖々々してゐられない場合になつたんですから、今あなたの前で云つちまひますわ。……死んだ戸崎があたしに云つてゐましたのよ。園田大造といふ男にだけは注意しろつて。

大造（意外な感じに打たれて）これは驚いた。どういふ譯なんです？

龍子　今となつては、それがたつた一つの遺言のやうに思はれますの。園田大造といふ男にだけは注意しろと、あの晩心底から戸崎が云つたのか、今耳元で聞えるやうですわ。

さう云つて、龍子は耳目を凝らしたが、ふと、結立ての頭髪を荒つぽく壊しにかかつた。

大造（驚いて、座を立つて）なぜ、そんな亂暴なことをするんです？

思はず彼女の手を執つて留めようとする。龍子は爭ひながら、

龍子　こんな髪に結つてまで、河津さんにお目に掛らなくてもいいんです。それよりも、戸崎が興津の海で溺死した時分の有樣があたしの目にはよく見えるんです。あなたのこの手が、波の中で惡魔の力をもつて動いてゐたのが、今見えるやうなの。……あなたは一生そのことを御自分一人の胸に收めてゐようと思つていらつしやるの？

大造　あなたは飛んでもない掛り合ひをつけますね。ぢや、興津で戸崎君が溺死をしたのは、僕の所爲だとでも思つてゐるんですか。

さも思ひも染めないことを云はれたのに呆れたらしく、彼女の手を放つて椅子にぐつたり腰をおろす。龍子は髪を壊しながら、昂奮して目に涙を浮べてゐる。

大造　あの時は戸崎君と一しよに海水浴をやつてゐたには違ひないが、僕は泳ぎが未熟だから、水際でバチャ〳〵やつてゐたし、戸崎君は波を切つて沖の方へ行つてゐたのです。泳ぎの下手な人間が泳ぎの上手な人間を海の底へ沈めることが出來よう筈はないし、第一、僕が何のために親友を溺死させる必要があるんでせう。……戯談にもそんなことを云つちや困りますよ。

龍子　でも、あの後のあなたの態度が證明してゐました。戸崎の注意を思合せてあたしは察したのです。女の直覺力をあなたは御存じないのね。

大造　恐ろしい邪推力をあなたは持つてる。邪推は御勝手だが、そんな馬鹿げたことを他人（ひと）に云つちや困りますよ。戸

僕とあなたとの關係は、僕だけが知つてゐたやうなものだから、それで、戸崎は僕を恨んでゐたかも知れないが。………

大造が考込むのに、龍子は目を注ぎながら、頭髮を亂したまゝ、椅子にぐつたり腰をおろす

龍子　でも、その手でよくあたしの災難の根を絕つて下すつたわね。戸崎が不意にこの世から消えてしまはないで、何時までも生きてゐようものなら、あたしの一生は破滅だつたのよ。あんな死に方をしたのは氣の毒だつたけれど、あたし、ホツとしました。……ホツと胸を撫で下したのはあたしばかりぢやないんです。兩親は夜が明けたやうに思つてましたわ。

大造　あなたは夢を見てるんですか。あなたやあなたの御兩親が戸崎の死を望んでゐたかゐなかつたかは、別問題として、僕は戸崎の死に關係はありませんよ。

龍子　まだ隱さうとしていらつしやるの？ぢや、それはどちらでもよ御座んすわ。……あの時、あなたが戸崎を沈めなかつたら、戸崎があなたを沈めたかも知れませんでしたのよ。……園田さん、今年の夏の興津の海のことをよく思出して御覽なさいね。海へ入る前、海へ入つてゐる間、海から上つた時のことを、よく思出して御覽になるといゝ。

大造。さうですね。こんな穴倉のやうな都會の一室の暖爐の側であの日のことを思出すと、僕でも感傷的になつて來るから不思議ですね。あの日は土用の明けた頃で、興津の濱は少し荒模樣だつた。波が恐ろしさに海へ入つてる者は極めて少かつたが、不斷はあまり大膽でもない戸崎が、どういふものだか、その日は馬鹿に元氣がよくつて、そのくらゐの波にビタ〳〵するやうぢや、男子の面目にかゝはると云つたやうな顏して、僕を誘つて飛込みましたよ（瞑想してゐるらしく）あの時、戸崎は胸に一物あつたかも知れませんね。

龍子　あなたは今はじめて氣がおつきになつたの？

大造　今日は思ふ存分波と鬪つて見るかなんて、笑ひ〳〵云つてゐました。……それである所までは、僕も後から隨いて、負けん氣で泳いだんですがね。

龍子　その時あなたは、あたしの顏を見ていらつしやらなかつたの？

大造（思ひ出の空想から目が醒めたやうに、彼女を見て）あの時あなたが濱にゐる筈はないでせう。

龍子　濱に立つてゐなくつても、波の上に浮んでたかも知れないわ。戶崎は確かにあたしの顏を見てゐました。

大造　そりや、戶崎は溺死の間際には、あなたのまぼろしぐらゐは見てゐたかも知れないが……（口調を改めて、慌てた態度で）磯崎なんかゞ、もう歸つて來るかも知れないから、肝心な話を早く極めなきやなりませんよ。それよりもそんな顏をしてゐちやいけませんよ。何事が出來たのかと怪まれますよ。

龍子　なぜ、そんなに慌てるんです？　興津の海を思ひ出すことがそんなにおいやになつて？

大造　溺死者の話はもう止しませう。戶崎は完全に死んでるんだから、あの男のことはもう忘れてしまひませう。死者をして死者を葬らしめよと、聖書にも書いてあるぢやありませんか。

龍子　あなたは本當にさう云ふ氣持におなりになつて？（喜ばしさうに）

そこへ、戶を叩く音が聞える。

大造は困つた顏して立つて行つて扉を開ける。そこにはボーイが立つてゐる。

ボーイ（名刺を出して）この方がいらつしやいましたから、お隣りの部屋へお通ししました。

大造　それでよろしい。

扉を閉めて元の席へ戻る。

大造　河津君が來たんです。……あなたも此處まで運んで來た話を、今になつて打壞さうと思つてやしないでせうね。

龍子　あなたこそ、この縁談を順當に運びたいと物好きに思つていらつしやるの？……あたしには、どうしてもあなたのお心が呑込めませんわ。……あたしを戸崎の毒手から救出して、河津さんの手へお渡しになるために苦勞なすつて、あなたに取つて、どういふ御利益がおありになるの？

大造　人間は慾得によつて動くとばかりは限りませんよ。

龍子　戸崎は園田大造には油斷するなと云つてゐましたのよ。興津の波の上ではあなたもあたしの顏を見ていらしつたんぢやない？

大造　あなたのその美しい顏をですか。（彼女を見詰めて、今までとちがつた心の顫えを感じながら）ぢや、興津の波の上で、戸崎と僕との二人が、あなたの顏を見ながら闘つてたとしてもよろしい。

龍子　戸崎はあたしの兩親よりもあなたの方を恐れてゐました。それで、あの人はあなたを恐れるたびにあたしを脅かしました（無邪氣らしく）……あなたはあたしを信じて下さらない？。あたしは戸崎には蛇のやうに附纏はれてゐたのですけど、あたしの身體は清淨潔白なんです。戸崎はあなたに勝利を誇りたいために、あたしの名譽を犧牲にして、自分勝手な捏造をしてお話したんでせうけれど、あたしは神樣の前へ出ても誓ひますわ。戸崎とあたしとの間には、後暗いことは決してありませんのよ。

大造　あなたがさう仰有るなら、僕はさう信じる外ありません。

龍子　あなたがそれを信じて下さらなきや、あたし河津さんのお話も壞してしまひますわ。……今、二人でかうして差向

ひでゐる一分か二分かの間は、あたしには一生の大切な場合なんかよりもまだ大切なのよ。あなたにも大切な場合のやうに思はれるんですけど、さうぢや御座いませんの？ あたし一生のうちたつた一分間で終るやうに思はれますのよ。

大山 人間の一生の大抵は瞬間に終ることなんですね。

二人はもどかしさうにしてゐるところへ、何の音か聞える。

照子（耳を傾けて）お兄さんと欽也さんとお帰つていらしつたのね。あたし洗面所へ行つて顔を洗つて化粧を直して来ますわ。

照子は扉を開けて、二人の側をくぐつて出て行く。欽也は照子の出た後の扉を怪しみながら、俊一といつしよに入つて来る。

欽也 どうだ、話は極つたのかね。

大山 ウン（曖昧に答へて、俊一の方を見て）面白い話があつたのかい。

俊一 あ、いろいろと為めになるお話を承はつた。ホテルの中も方々案内して見せて頂いた。

大山 大勢西洋人がゐて珍らしいだらう。何なら序に今夜一晩横浜へ泊つちやどうだね。

俊一 別にないことはなしにしよう。一人なれば泊りませう。わしなどは贅沢なのも困りますまい。

大山 しかし田舎の家に泊つて蚊が来やするよりはましだらう。

俊一 いや、わしは用事さへ片附いたら、一刻も早う家へ帰るつもりだよ。何でも野菜でも東京の物は高くつて味も付きやしない。

大山 ただ、東京にだつてまい物はあるさ。久振りに出て来たんだから、遊びの積りで少しゆるりしようよ。これに不案内な

話もあるんだから。

俊一　わしもお前にちよつと話しときたいことがあるんだ。明日立たなくつてもいゝさ。

大造　急いで故郷へ歸るにしても、夜汽車で立つんだらうから、それまではつくりしてるといゝ（欽也の方へ向いて）

さつき河津が來て、君の部屋で待つてるよ。

欽也　もう來たのか。誰れかお相手をしてるのか。

大造　なに。君の奥さんはまだ歸らないやうだし、龍子さんはお化粧をしに行つてるのだ。

欽也　ぢや、僕がお相手をしてゐようか。

さつきから、椅子にもかゝらないで、退屈さうにしてブラリ〳〵してゐた欽也は、挨拶をしたまゝ、出て行く。

俊一　わしは今夜夜汽車に乘つても、とても滿足に眠られやすまいから、その寢臺で寢かして貰はうか。

大造　あゝ。寢たけりや寢るがいゝさ。話すことがあるのなら、寢臺で寢ながら話したらどうだ。

俊一　それもさうだな。わしは袴なんぞ穿いてちや窮屈だ。

袴を脱いだり羽織を脱いだりしてゐる間に、大造は、首垂れて物を考へてゐる。

俊一　それはさうと、お前の夫婦なかは圓滿なのか。兩親とも折合つとるのか。

大造　相變らずさ。

俊一　相變らずといふのは、平穩無事に行つとるといふことなのか。

大造　張合ひのない平穩無事だよ。僕は今の今でも作家を飛出すくらゐな意氣込みは持つてるんだが、獨立して一仕事やりだす準備をしとかなきや駄目だからね。兄さんがこの頃うまく當てゝるんなら、少し資本を貸してくれまいか。

俊一　馬鹿を云へ。……わしの方でこそ、お前に賴みがあるんぢや。順三は來年中學を出たら、どうしても東京へ出修業したいと云つて、わしの稼業を嗣ぎさうでないから、お前の家の玄關番にでも置いて貰ひたいと思つてるんぢや。

大造　他所の玄關番なんぞさせるよりは、充分に學資を出して、寄宿舍へでも下宿屋へでも入れたらいゝぢやないか。僕は養子で懲りてる。順三を玄關番の居候なんかにならせたくないな。

俊一　お前を養子に出したのは、身內の者の面倒を見て貰ひたいためだつたのぢやぜ。

大造　蟲のいゝことを云つてらあ。僕は家族のために人身御供に上げられたんぢやないよ。養家に財產があつたつて、僕の自由になるんぢやなし、傍で思つてるやうな有難味はありやしない。

俊一は落着きの惡さうに寢床に橫はつて、

俊一　氣儘が出來ないくらゐ何だ。贅澤を云ふなよ。養父が何時までも生きとる譯ぢやあるまい。養父が死にや、あしこの大身代はみんなお前のものぢやないか。

大造　そんな夢でも見てゐるかな。……あの親爺は、大丈夫百までは生きてゐさうだ。僕が運よくあの家を相續が出來たにしても、その時分には、僕の方がよぼ〳〵のお爺いになつてるかも知れないよ（心がムシヤクシヤしたらしく）養子なんかになるもんぢやない。傍から羨まれても、兄弟中で僕が一番貧乏籤を引いたやうなものだ。

俊一（激したやうに）勝手なことを吐かせ。威張つた顏をしたいのなら、少しは兄弟の世話でもしてからにしろ。

俊一、うるさゝうに顏を背けて、椅子にもたれかゝる。

そこへ、欽也がノックもしないで、扉を開けてノソ〳〵入つて來る。

欽也　龍子が今、戸まどひして僕の部屋をのぞいたから、呼込んで河津君に會はせといたよ。それでいゝだらう。僕はあゝいふ才子のお相手にはなれないから、丁度よかつた。

事もなげにさう云つて、電氣暖爐の側の椅子に腰をおろして、煙草を吸ふ。

俊一はちらと欽也を見たが、直ぐに頭から夜具を被つた。

大造は突如として不安に襲はれたらしく、そして、聞えないものを聞き、見えないものを見ようと努力してゐる。

欽也　時節が時節だから、結婚披露が幾組もあるらしいね。そこらを歩いてると、絢爛な色彩が、田舎者の目には眩しいくらゐだが、しかし、晝間でも燈火（あかり）をつけなきやならないやうな、こんな地下室に押籠められてゐるのは、僕にはな息苦しいよ。やはり、果樹園か野菜畝を見廻つてるのが、僕には適してゐる。こんな所に一週間もゐようなら、僕の健康は臺なしだ。

大造は、それに答へないで、椅子を離れて、神經の亂れた態度で、部屋を歩く。

俊一は早くも高い鼾を洩らす。欽也は、その鼾を聞いて顧みて微笑す。

欽也　あんな風に雜作なく熟睡が出來ると結構だね。兄さんと君とは顏立は似てゐないやうでも、話つ振りはなか／＼よく似てるよ。兄弟は爭はれないものだ。

大造　河津は君に何か云つてゐたか。

欽也　君からいろ／＼聞いてるので、龍子さんには改めて會ふ必要はないんだが、お約束だから、多忙な時間をさいて來たなんて云つてたよ。僕なぞは並び大名同樣の傍觀者なんだが、兎に角この縁談は首尾よく纏まりさうだね。つまり君のお蔭なんだよ。

大造　しかし、まだ持參金の打合せが殘つてるぢやないか。龍子さんの兩親は何だつて、娘に大金を附けて結婚させようとするんだらう。

欽也（訝しげに相手を見上げて）だつて、それは君が勸めたのぢやないか。河津君は世間に稀れな立派な人間であるにしろ、龍子だつて、大威張りで誰れとでも結婚の出來る資格のある女だ。ひけ目を感じる點はちつともない譯だと、僕は思つてる

大造　君達はさう確信してるのかい。

欽也　君はさう思つてゐないのか。

大造　女といふものは分らないものだね。

欽也（微笑して）君がそんなことを云ふのは變だね。……僕の家内なんかは、龍子を一癖ある女のやうに云つてケナしてるけれど、單純な女ぢやないか。

大造　さうだらうね。

落着かない足取りで扉の方へ寄つて行つたところへ、龍子が顏を出す。

龍子（欽也を見て）今姉さんからあなたに電話がかゝつて來たから大急ぎで來て下さい。

欽也　何處からかけたんだらう。

欽也は急いで出て行く。龍子も直ぐに行きかけるのを、大造は慌たゞしく呼留める。

大造　ちよつと待つて下さい。一言あなたに云つときたいことがあります。

龍子は、さして動じない態度で入つて來る。大造は寢臺の方を一瞥してから、龍子に向つて、聲を潜めて話しかける。

大造　あなたは河津君にどんな返事をしました？

龍子　どんな返事と云つて、あの方のお訊きになることを承はつたゞけですわ。（邪氣なく云ふ）

大造　あとで、僕が河津君に會ふんですが、この縁談についてはあなたは異存はないと、河津君に云つていゝんですね。

龍子　それはあたくしの方からあなたに伺ふことですわ。

大造　だつて、僕はあなたと河津君との間の紹介者に過ぎないんだから（イラ〳〵した心を現はして）兎に角、あなたのお話が濟んだら、此處へ河津君を寄越して下さい。

龍子　お逢ひになりたきや、今直ぐにでも伺はせますわ。

大造　ぢや、直ぐに此處へ寄越して下さい。此處でちよつと河津に話をした後で、一しよに其方の部屋へ行つて、皆んなで珈琲でも葡萄酒でも飲んで祝意を表することにしませう。

龍子首づいて出て行く。大造は俊一の側へ寄つて寢息をうかゞつてから、暖爐の側の椅子に腰をおろす。

河津仙吉（三十五六歲。フロツクコートを着した美しき男。大造よりは氣障に見えるほどに粉飾（めか）してゐる）がノツクして入つて來る。そして、大造と顏を見合せると、互ひに親しげに會釋をして、椅子を並べる。彼れは、寢臺の方へは少しも氣がつかない。

仙吉　いろ〳〵御面倒をかけたね。

大造　なあに。……君は龍子さんと二人つきりで話をしたいと云つてゐたが、もう話は濟んだのかい。

仙吉　大して話もしないが、話はもう濟んだやうなものだ。……僕は持參金の件を讓歩してもいゝよ。

大造　讓歩したと云つて、いくらほど？（訝しさうに訊く）

仙吉　(ほゝ笑みながら)事によつたら零點まで引下げてもいゝね。

大造　どうして？

仙吉　清淨潔白な美しい女を、金の問題なんかを持掛けて汚すのは慘酷だと思はれるよ。

大造　ハヽヽ。本心で君はそんなことを云ふのかい。君の人生觀が一朝にして引くり返るのは不思議だね。

仙吉　人生觀なんか何時變るか分かつたものぢやない。變つたのを、僕は自分で祝してゐるよ。

大造　さうすると、君の要求を正面(まとも)に受けて周旋してゐた僕が馬鹿を見た譯だね。(不機嫌を顏付や口調に現はす)

仙吉　どうして？　君も仲介人として喜んで呉れてもいゝぢやないか。僕が金の問題を撤廢したのだから。

大造　さうすると、君の病院の建築はどうなるのだ？

仙吉　病院など急いで建てる必要はないよ。當分今の病院の一醫員として働いてゐて、そのうち時期を見て獨立すればいゝ。僕はまだ若いんだもの。

大造　あんなに熱心に計劃してゐた事業に一頓挫を來たしても後悔をしないのかい。

仙吉　事業は事業。結婚は結婚さ(呑氣さうに云つて)僕に話があるといふことだが、秘密(ないしよ)話なのかい。

大造　(相手の心を搜らうとするやうにジロリと見て)それよりも、龍子さんは君にどんなことを云つた？　自分の身の上に關して何か重要なことを云はなかつたか。

仙吉　あの人の身の上？　無論そんな話はしなかつたよ。……あの目とあの唇とあの手は、醫學上から觀察しても純潔なものだよ。君など素人には分らないだらうが、我々醫學者には直感で知れるんだ。(悦に入つてゐるらしく云ふ)

大造　大したものだね(嘲るやうに云つて)お醫者さんには、肉體の判斷は出來るかも知れないが、心理の觀察は不得

手なんぢやあるまいか。龍子さんが心の中でどんなことを思つてるか、君には到底分るまいね。

仙吉　ハヽヽ。そんな此問題は他日に讓つて、君は仲介者の義務として、結婚破談のことを、一刻も早く先方の兩親に傳へて呉れたまへ。

大造　さう知らせたら、先方の親爺は大恐悦だらう。折角出しかけた物も引込めてしまふだらう。僕が口を酸ばくして説得させたのが、無駄な努力になつてしまつたんだね。田舍の金持が貪つては蓄へてる財産を捲上げて、病院でも建てれば、死んでる金を生して使ふ譯になるのに、君は馬鹿だなあ(戯談らしくない口調で云ふ)

俊一はふと薄目を開けて、二人の方をぬすみ見して、また目を閉ぢる。二人は氣づかないでゐる。

仙吉　無論君のお骨折は感謝するよ。何かの方法で感謝の意を表はすつもりだ。

今まで希望の光に包まれてゐる人のやうであつた仙吉は、大造の不機嫌な樣子を見て、不思議さうに、

仙吉　君はどうかしたのか。先月會つた時よりは憔悴してるやうぢやないか。

大造　いや、御心配には及ばない。身體は健全だ。

仙吉　さうか。それならいゝが。……兎に角、あちらへ行つて、皆んなと祝盃を擧げようか。

大造　いや、まだ祝盃を上げるのは早い。(氣六ケしさうに云ふ)

仙吉　なぜ早い？　先月の君の話によると、先方の兩親は、金錢上の要求まである度までは受入れるくらゐに乘氣になつてゐるさうだし、龍子さんの氣持も今五六分間會つてゐた間によく分つたのだ。僕は話は略々決定したものだと自信してゐる。

大造　フヽン(皮肉な笑ひを洩して)君はあまりに人がよ過ぎる。少しじれつたくなつたから云はずともののことを云ふ

んだが、人並以上に容色のいゝ娘を、嫁はすのに、大金をつけてやらうといふのには、何かそこに曰くがなくちやならないと勘付きさうなものだ。

仙吉　曰くがある？（氣に留めないらしく云ふ）

　俊一、ふと咳をして身體を持上げる。仙吉は顧みて、はじめて寢臺の人に氣づいて驚く。

大造　故郷から來た客だ。

仙吉（立上つて）外に特別な話はないんだらう。僕はあちらへ行つてるよ。君も差支えがないのなら直ぐに來たまへ。

　俊一へは挨拶もしないで急いで出て行く。

　俊一、寢臺から下りて大造に近づく。

俊一　お前達の話が夢のやうに耳に入つたが、呆れたものぢや。

大造　そんなことに呆れなくつてもよからう。兄さんも隣りの部屋へ行つて、皆んなと一しよにコーヒーでも飲まうぢやないか。

俊一　さつきから前觸ればかりで、わしはまだお茶を一杯群ばれて居らん。

大造　さうだつたな。今度は大丈夫御馳走するよ、さあ、行かう。

俊一　いや、わしはこんな所に愚圖々々しとるよりや、一刻も早く故鄕に歸つた方がいゝ。電報も來とることぢやから、直ぐに停車場へ行つて、急行の出るのを待つて乘ることにしよう。

大造　何を感じて慌てるんだい。誰れも兄さんの財布を狙つてりやしないよ。

俊一　わしは、見ること聞くことが胸くそが惡い。

急いで身仕度に取掛る。

大造　ぢや、東京驛まで見送つて行かう。

俊一　それには及ばん。

大造　何が氣に障つたのだい。

俊一　……巣鴨へも牛込へも暇乞ひをせんで立つから、お前からよくさう云つといて呉れ。

手早く袴を着けて鞄を持つて出て行く。

大造　兎に角自動車で停車場まで見送ることにしよう。

隨いて出て行く。扉は開けつ放しのまゝになつてゐる。

卓上の電話が鳴りつゞける。隣室へ外出を知らせに行つた大造は、廊下でそれを聞きつけて、俊一を廊下に待せて置いて、急いで部屋へ入つて、受話器を手にする。

大造　モシ〱……さうです。……いや、お知らせしないで相濟みませんでした。實は據ろない頼まれ事があつて此方へまゐりましたので……さうです。その縁談で、大勢が一しよにまゐつて居ります。ちよつと身體が外せないんですが、明日も此方に逗留いたすやうでしたら、暇を見て伺ひます。……ハア。ぢや失禮します

電話を切つて、帽子を被つて、扉を締めて出て行く。

（幕）

（二）

前の場の隣りの部屋。室内の裝飾も略々同樣であるが、寢台暖爐家具などの配置が相違してゐる。卓上には紅茶が

用意されてある。龍子、欽也、仙吉、及び欽也の妻とも子（三十歳前後の丸髷に結つた女）の四人が、それぞれに氣樂な明るい態度で椅子に腰を掛けてゐる。

とも子　龍子さんはわたしが外へ出てゐる間に髪を壞したのね。折角奇麗に結つてゐたのに、なぜ壞したの？

龍子　だつて、園田さんの意地惡があたしの髪を侮辱するんですもの。

とも子　子供見たいなことを云つてゐる。

欽也　さつき僕は隣りの部屋へ、園田の兄だと云ふ人と一しよに入つた時に、龍子さんの髪が滅茶々々に壞れてるのを見て吃驚したのだよ。

仙吉　園田は時々惡戯をする男ですからね。わたしが結婚に不潔な金錢問題を持出したといふことも、園田の惡戯なんですよ。決してわたしの本心ではありません。

欽也　園田は、園田家の養子になつてゐながら、金のにほいを嗅されるばかりで、ちつとも財産が自由にならないんだからな。……だから何かにつけて金錢を問題にしたがるんだよ。

仙吉　園田はわたしと共謀になつて、龍子さんのお父さんからお金を出させて、そのうちの何割かを御自分の懐へ入れようと企んだのぢやありませんよ。（輕薄に笑つて）その點は誤解なさらないやうに願ひます。

欽也　それはよくわかりました。家へ歸つたら、わたしから龍子さんの兩親にさう傳へませう。

とも子　今度こそ、針で突いたほどの障りもなくつて、日本晴れで事が運ぶやうに、あたし達は淺間樣に願を掛けて來たので御座いますわ。

仙吉、（龍子を見て）先日はじめてお目にかゝつた時に、何だか見たことのある顔だと思つたのですが、わたしは、龍子

さんにお目掛につたことがありますよ、興津の濱の水浴場で、水浴着を着けて砂の上に腹匍ひになつてるあなたを見たに違ひないんです。八月の初旬でした。

何氣なくさう云ふと、龍子は極りの惡さうな顔をする。欽也はふと心に打撃を受けた顔をする。

龍子　あたし、ちつとも存じませんでしたわ。……今年は、二三度海へ入つたきりなんですけど。

欽也　ぢや、あの時、溺死した戸崎の死體を最初に檢死したのは、河津さん、あなたでしたか。岡川はあの時興津に來合せてゐた懇意な醫師を直ぐにお呼びして診て頂いたさうですが、その方はあなたでしたか。……ぢや　戸崎の溺死についちや、あなたがよく御存じの筈ですね。

仙吉　まあ、さうです。……しかし、今日は溺死者の話なんか止さうぢやありませんか。そんな話はどなたもおいやでせうから。

とも子（人のよさゝうに）でも、あの人の溺死はあたり前の溺死で、別段變つたことはなかつたんぢやありませんか。

欽也　それはどうだか分らないね（と云つて、皮肉に）しかし、興津の海の事が今度の緣談に連關してるやうに思はれだしたから不思議さ。……河津さんは御存じぢやないでせうが、あの戸崎といふ男は色魔と云つてもいゝやうな男でしたよ。あれは死んでよかつたのです。あいつが何時までも生きてゐたら、いろんな所に迷惑が掛つたかも知れないんでした。

仙吉（冷淡に）さうでしたか。色魔でも聖人でも死體に變りはありませんね。……今あなたは、興津の溺死人のことが今度の緣談に連關してるやうに仰有つたが、連關してゐるとすれば、それは他所ながら龍子さんにお目に掛つたことなんですよ。それが緣の糸口になつたんですね。

とも子　(人のよさゝうに)縁といふものは不思議なもので御座いますわね。

仙吉　(腕時計を見て)わたしはこれでお暇いたしませう。……それで、今度わたしに御用がおありになる時には、園田君を經ないで、あなたから直接に、わたしにお話し下さるやうに願つて置きませう。園田君は聰明な男だが、時々、云はずともいゝ餘計なことを云つていけませんよ。

欽也　承知しました。

仙吉　明日も此方に御滯在のやうだつたら、どこか、もつと落着いた所で御一しよに食事でもして、ゆつくりお話を承りませう。

立上つて挨拶して出て行く。欽也、義務として見送つて行く。

とも子　河津さんは御立派な方ね。心掛けも、園田さんに聞いたよりも、奇麗で優しさうぢやないの?

龍子　さうね。……でも、姉さん。あたし園田さんが怖いのよ。何か魂膽がありさうで。

とも子　魂膽と云つてどんな事?……園田さんはなぜ、あなたに髮を壞させたりなんかしたんでせう。河津さんにお會ひするために、わざ〳〵美容院で氣をつけて結つて貰つたのに。……あなたも、園田さんがどう云つたからつて、なぜ、そんな馬鹿な眞似をしたの。

龍子　あたし自棄になつて、あの方には會はないで、一人で靜岡へ歸らうと思つたのよ。

とも子　呆れた龍子さんね。あなたがそんな無茶なことをしたら、わたし達が伯父さんに申譯のないことになるぢやないの。

龍子　(懐つこさうに)姉さんや欽也さんはあたしを信じて下さるわね。

とも子　改まつて何を云ふんです！　……あなただつてわたしだつて、ちつとも後目たいところのない女ぢやないの？

龍子　姉さんは何時もさう思つて威張つてゐられるから氣樂ね。

とも子　わたし威張つたことなんか一度だつてありやしないよ。可笑な龍子さん。

龍子　あたしは、何時誰れかに脅かされやしないかと思つていつもビク〳〵してるのよ。

とも子　あなたを脅かす人なんか、何處にもゐないぢやありませんか。氣の弱い龍子さん。

龍子　ぢや、姉さんは、假りに、誰れかしら、今年の夏の興津の溺死は園田さんの所爲だと聞いても驚かなくつて？

死んだ戸崎の下手人は園田に違ひないといふ人があつても驚かなくつて？

とも子　そんな戯談に驚くものですか。

龍子　でも、世の中には根も葉もないことを云ふ人があるんですからね。

そこへ欽也が、不機嫌な顔して入つて來る。

とも子（微笑して夫を迎へて）今ね、龍子さんが恐ろしいことを云つたんですよ。今年の夏の興津の溺死は園田さんの

欽也（慌てゝ、妻の口を壓へるやうな樣して、遮つて）止せ、そんな不吉な話は。……

とも子（氣がついて）本當に不吉ですわね。そんな話止しませう。

欽也　おれもよつぽど迂濶だつたよ。何にも知らないで隨いて來たんだから。……あの河津といふ男にしても案外の曲者かも知れないね。最初は第一の條件にしてゐた金を、今になつて入らんと云出したのも變だが、あゝ奇麗な口を利いて、うまく緣を結んどいて、後でもつと大きく吹掛けるつもりかも知れないね。「白浪五人男」の日本駄右衛門見たいな、それこそ園田のうは手を行く惡黨かも知れない。

とも子　あなたこそ不吉なことを云つていらつしやる。
龍子　欽也さんの仰有ることは、ちつとも不吉なことぢやないわ。あたしには疾つくからそんな氣がしてゐたんです。あたしは、園田さんと河津さんとの間に取引されてゐた商品見たいに思はれますのよ。
欽也（慌てゝ龍子の口を壓へるやうにして）そのあとは云はん方がいゝよ。明日にも花嫁さんになる女が、そんな過激なことを云つちやいけないよ。あなたは何も知らない顔して澄してゐればいゝんだ。おれが引受けた。
とも子　御大層なことを云つていらつしやるのね。……紅茶でも入れかへて貰ひませうよ。
さう云つてベルを押さうとすると、大造が忙しげに入つて來る。
大造　河津はもう歸つたのか（あたりを見廻す）
欽也　君は馬鹿に早かつたね。兄さんを見送つて來たのか。
大造　發車時間にはまだ餘程間があつたから、停車場で別れて來た。河津がそんなに早く歸るんだつたら。見送りになんか行くんぢやなかつたのに。
欽也（昂奮した顔して）河津君はまた君に會つちや面倒だと思つて、早く出て行つたのかも知れないよ。……そこで。僕は短刀直入に云つてしまふがね。今度の縁談には、君にもいろ〳〵お骨折を願つたのだが、今日限り手をひいて吳れたまへ。龍子の兩親に代つて、僕が君に強要するんだよ。
大造（素直に）爲方がない。
欽也　君が二人を引合せて吳れたのは有難いが、當人同士に異存がないとすると、君の役目は濟んだやうなものだ。君の手を經ないでも、話は此方で運ぶようにしよう。

大造 それがいゝだらう。(苦笑して) 龍子さんお勝つたんだね。
欽也 誰れに？
大造 いや、誰れに勝つても勝つたのは結構さ、……僕なんかは、餘計なまぜつ返し屋にされてしまつた譯だね。ハ、、、。…死んだ人間のしたことや、僕の頭の中にあることは、この世の中に何處へ行つても通用されないものにされてしまつた譯だね。……明日、河津が來たら、皆んなで――僕を除いたみんなで――改めて祝盃を舉げたまへ。僕はこれでお暇して、獨りで家へ歸ることにしよう。………いや、今から出掛けると、兄貴の汽車に一しよに乘れるかも知れないな。……左樣なら。
大造は、三人を平等に見て會釋して出て行く。龍子は、心でその足音を追つてゐるやうである。
とも子 (夫に向つて) あなたは、隨分ひどいことを仰有るのね。園川さんを怒らせてもいゝんですか。わたしが行つてあやまつて來ませうか。
欽也 なに、いゝよ。怒るなら怒らせとくさ。(龍子に向つて) 龍子さんには、僕があのくらゐなことを、園川に云つてもいゝ譯があると思つてるだらうね。
龍子 えゝ (氣のない返事)
欽也 あなたは勝利者と云はれてる女ぢやないか。もつと元氣よく威張つてゐなきや駄目だよ。河津さんとの縁談についても、ビクともしなくていゝんだからね。龍子さんの方でいやでなければ。
龍子 よく云つて下すつたわ。有難う。あたしこれから元氣よく威張つてゐてよ。……姉さんもしつかりなさいよ。
龍子は突如として立上つて、とも子の手を取つて立上らせる。とも子ヨロ〳〵しながら立上つて、

とも子　どうしたのさ。わたし轉んぢまふぢやないの。

龍子面白さうに笑ふ。

ふと、卓上の電話が鳴る。龍子が受話器を執る。

龍子　モシ〳〵。……あたし、龍子です。……さうですか。……承知しました。……こちらでは、姉さんとあたしとでダンスでもはじめようとしてるところなの。……いらつしやらないの。……爲方がないわ。……左樣なら。奧樣によろしく。

電話が切れる。

欽也　誰れの電話だ？

龍子　園田さん。これから隣の部屋を出て行くところですつて。

とも子　わたし、ちよつと行つて樣子を見て來るわ。

欽也　止せ〳〵。

とも子　だつて、(出て行く)

欽也　(突立つてゐる龍子に向つて)生きてる者が死んだ奴に負けちやたまらないよ。僕は人間の死を喜ぶなんていやな心を起したのははじめてだが、今はそんな氣持がしてゐるのだ。龍子さんはさう思はないか

龍子直ぐには答へないでゐる。

欽也　死んだ奴に負けてなるもんぢやない。

龍子　さうですとも。

龍子力強く云ふ。欽也微笑す。

(幕)



生きてしまつた人と

佐佐木茂索

一

鎭目禮助は、講演を引受けたので、當日會場の學校へ――會場は彼の宅から十四五丁なので、人力を走らせた。

中學生と專門部の生徒が――彼の家へ講演の依賴に來たのも交つて、委員らしく胸に白いリボンをつけたのが、出迎へて、國旗を交叉した玄關を、校長室の方へ案內して吳れた。其處で彼は生徒のよりは少し太いリボンを胸につけるよう渡され、番茶を飮んだ。彼の手をつけかねる菓子が赤い色で、盆の上に積まれたままだつた。

講演會が始まつたので、二番目に出る彼も、會場の見渡せる――その代り、會場から見物される控室へ、出て行つた。まだ胸につけないリボンを手に持つてゐた。

一番目に出た有名な散文詩人は、ドストエッスキーの愛に就て、つつましやかに、話を運んでゐた。引例が豐富で、ちつとも急がず――講演に何時までも經つても

慣れない鎮目は、こんな具合にゆつくりやれたらと、悲いてゐた。

そこへ、胸を張つた生徒の委員が一人、名刺を持つて這入つて來た。

「鎮目先生、御面會です。」

鎮目は、今日(けふ)此處(ここ)で、講演する事を誰が知つて來たのだらうと、不審だつた。或は新聞記者でもあらうかと、見ると、名刺は唐澤氏のものだつた。

「唐澤精一。――」

意外だつた。しばらくして、彼は生徒に云つた。

「直ぐ行きます。」

「は、校長室が空いてゐますから、あすこに、御案内してあります。」

唐澤氏が、どうして、こんな場所へ現れたのか、――いづれにせよ、久しぶりな客だつた。鎮目が校長室へ這入つて行くと、唐澤氏は、にこにこと、癖の微笑で立ち上つた。

「暫く。」

「暫くでした。が――。」

鎮目の不思議がる目に、唐澤氏は直ぐ答へた。

「いえね、此頃――さう一昨日、上京したのですよ。そして弟の家に泊つてゐましてね、あなたの所も是非訪ねたいし、それにしては、切りつめた時間なので、どうだかと思つてゐますとね、そしてその事を弟にも云つてゐますとね、弟が、鎮目さんなら、けふ此處の學校で講演する筈だ、そんなポスターが出てゐたつけ、さう云ふものですから、鳥渡

お邪魔した譯です。弟の家は直ぐ此の近くなんですよ。」

　唐澤氏はいつもの如く元氣で、雄辯だつた。要領よく話しかけられて、鎭目が分つた顔をすると、

「それでね、」と云つた。「それで、けふはこれから横濱まで出かけるのです。さうでなけれや、是非君の講演を傾聽したいのだけど――。」

　そして哈哈と笑つた。

「いや、聽かれちや恐縮です。あなたが突然現れたのさへ、講演前の平靜を擾すに十分でしたから。――それで、幾日頃まで、今度は御滯在です？」

「そいつが、用の片づき次第と云ふので、自分でも確とは分らないのです。用事といふのが何ぶん他力本願の用ですからね。」

　では就職のことかなと、鎭目は用向きが分つた氣がした。いつも――そして恐らく何時までも、此人につき纏ふ用事のようで、それは鎭目を多少寂しくした。彼は、

「さうですか、とにかく――」そこで口籠つた。「お元氣で結構です。」

「元氣なつもりではゐますがね、――いや、お邪魔しました。御忙しいでせうから、失禮します。或は、用事の都合でお目にかかれぬかも知れませんが――。」

「さうですか。――」

　鎭目も、も一度會はねばならない用が別にある氣もしなかつた。が、彼は、もしもう一度會へたらと云つた。

「もし、御手すきがありましたら、私の家も此近所――十四五丁位ですから、一度御遊びにいらして下さい。」

「え、なるべく、その暇を持ちたいと思つてゐるんですが、——何にせよ、けふお目にかかれて、よござんした。ぢや失禮。」

「では——。」

鎭目は、此の病める先輩を、國旗のはたはたと風を呼んでゐる玄關まで送つて出た。玄關で、唐澤氏は、突然云つた。

「君も追追御成功で——。」

云ひながら指したところに、「鎭目禮助先生」と、——鎭目も一員で書き並べられてゐる講演會の立看板が、學校の門のところに、墨汁くろぐろと日に照らされてゐた。

鎭目に、「御成功で、」といふ言葉が奇異に響いた。こんな妙な言葉の、御世辭めいたものを、彼は始めて、自分に聞かされ——これは妙な、そして新しくさへある言葉だと、そんな事も突嗟に考へながら、彼は變な——厭なといつていい氣持ちでうつむいた。

二

講演が濟んで歸宅すると、妻が、訊いた。

「どうでして？」

「相變らず不出來さ。もう講演もいやになつた。」

「心臟が惡くなつたのでせう？」

「さう。」

「誰か知つてる方、いらしてて？」

「いいや誰も。」

さう答へようとして彼は唐澤氏を思ひ出した。

「誰も――ぢやない、けふは妙な人に逢つた。唐澤精一だ。」

「唐澤さん、東京にゐらつしやるの？」

「それが出て來たばつかしなのだとさ。そして弟の家が近所で偶然知つて學校へ面會に來たのさ。突然で驚いてしまつた。それに――。」

云ひかけて鎭目が、鳥渡躊躇したので、妻が聞き出した。

「それに？」

「妙な事を云はれたんだ。僕が成功したのだとさ。」

「成功？――ぢや、唐澤さん、講演聞いてゐらしたのね、御世辭なんでしよ。」

「お世辭には違ひなからうが――講演の出來ぢやないんだ。僕が成功者だと云ふ――。」

「何のことそれ？」

「講演でもするようになつて、偉くなつたといふことなんだらう。」

鎭目は、妻に云ひ出さなければよかつたと思つた。それで直ぐ云ひ足した。

「もう止す、つまらないこと、云つても仕様がない。」

――鎭目が唐澤氏のところに出入してゐたのは、もう十二三年も昔、彼が朝鮮にゐた頃だつた。その時分、其地方の學校長をしてゐた唐澤氏を中心に、讀書會といふのをつくつて、毎月二三度も會合してゐたのだつた。どういふ書籍を讀み、どういふ議論を交へ合つたか、それは大抵忘れ――また、忘れてもいいものばかりだつたに違ひなからうが、最初の會に、唐澤氏から、フアイトの名を聞かされ、歸りに、其著書「インデイヴイデユアリズム」を借りたのは、妙に何時までも記憶がはつきりしてゐた。その後、鎭目は東京へ來てしまひ、唐澤氏は致命的な病氣をえて休職になり、餘儀ない療養生活に這入つてしまつた。――その時分の鎭目、一外國商館の小僧に過ぎなかつた彼を知つてゐる唐澤氏から見ると、或は「御成功」なすつた今日の鎭目かも知れなかつた。――

講演のあと三日、鎭目がいつもの晝過ぎの朝飯を濟ましたところへ、唐澤氏が訪ねて來た。

「こないだは――。」

そんな挨拶があつて、――しかし、そのあとも格別重要な會話が始まつた譯ではなかつた。唐澤氏は、ともすると、ぼんやり默つてしまふ鎭目を氣にしてか、次ぎ次ぎに興味のありさうな、だが鎭目が一言二タ言答へると其まま消えてしまふ話題を持ち出した。鎭目は、唐澤氏の心づかひを神經にこたへさせながら、それでゐて調子が揃はなかつた。昔通りの唐澤氏だなと思つてゐた。

しばらくして鎭目は、唐澤氏の上京の首尾を聞かうとした。

「御用件はどうでした。片づきましたか。」

「いや、未だなんですがね、――少少面倒な人に會ふので。――手間どります。」

唐澤氏が擧げた相手は、有名な實業家だつた。多忙な人で、此頃は九州の方へ旅行してゐるといふことだつた。

「ぢや、歸つてくるまで待つてゐらつしやるのですね。」

「さう、今はない分には、どうにもならないのでしてね。うまく行けば相當大きな仕事になる苦ですから。」

唐澤氏の云ふところに據ると、今彼の靜養してゐる海岸の埋立工事が、大規模に某實業家の手で始まる、そして其處は、工業地になる、で、埋立工事の方で仕事の一部分なりを引受けたい、引受けるといふ程のことがむづかしければ、何かの場所で使つて貰つてもいい、その交渉に來た、といふのだつた。だがよく聞いてみると、例へ一部分でも引受けるといふやうな事が出來さうにもない大きな話だつた。色を拔いてしまふと、就職の運動に「何かの場所で使つて貰ひに來たのだつた。

「でもよくそれだけ精力的ですね、よほど近頃は御健康とみえますね、からだはどうなんです。」

あまり唐澤氏の話が元氣がいいので、領目は一應訊ねないでは過ぎられなかつた。

「先づ健康ですがね、――無理は出來ません。朝寢宵寢、出來るだけ寢てゐるのがいいのです。それだけ活潑を必要とする際は困ります。が、さうは健康ばかりも云つてゐられませんからね。」

いかにもさうであらう、永い間の療養生活が、よくも續けられたと思へる點もあるのだつた。それに、唐澤氏のような人にとつては、仕事を持たずにゐるといふ事は、隨分寂しい事に違ひなかつた。

「――」

「別な話だけど、寢てゐるにはやはりベッドがいいね。あんな田舍だけど、或日町の古道具屋を見て歩いてゐると、相當立派なダブルベッドの中古が出てゐてね、――どんな人が、あんな田舍で使つたのだか、――そいつを買つて、今使つてゐるけど、これなら晝間寢ころんでゐるにも、さう業々しくなくつてね、――」

さう云ふ唐澤氏の瞼の下の皮がたるみ、疲れた皺が著しかつた。

やがて夕暮の空になり、唐澤氏は土産に持つて來た果物籠を出すと別れを告げた。

「これでまた當分お目にかかれないかも知れないけれど。――」

「御用が手間取るようでしたら、またお遊びにゐらして下さい。そんなに遠くない筈ですから。」

「ありがと。」

唐澤氏は、屈んで靴の紐を結んでゐた。

三

唐澤氏が滯京中に、一度會を催したいと鎭目は思つた。かつて唐澤氏の生徒であつたもの、讀書會に關係のあつたもの、等で、在京のものが、鎭目の知つてゐるだけで四五人あつた。皆が一堂に會して、唐澤氏を招待する事は――しなければならない事のようにも彼には思はれた。鎭目が發起して、速達で飛ばせば、容易に出來る會のようであつた。さうしたら、遠い田舍から就職に出て來た此の七八歳年長の師友は、どんなにも悦ぶことか、それは分つてゐたが、折惡く、此頃の鎭目は、その會費さへ危い懷ろ具合だつた。その爲、速達も出す氣になれず、四五日經ち、ひよつとしたら唐澤氏ももう歸つたかも知れないと勝手な極めようをしてゐると、其處へ唐澤氏がやつて來た。鎭目も、さすがに親身に訊いた。

「どうでした。」

「會ひましたよ。會つて、結局駄目でした。」さうだらうと鎭目は寧ろ當然な氣がした。永びくのは、不結果を豫言して

ゐるやうに、彼には始めから思へてゐた。

「それは、――折角でしたね。」

「そいつはいいが、食ふとなつて、朝五時半に來いは弱りましたよ。老人、早起きが自慢ださうでね、一緒に食事をしながら希望を聞かうといふのです、仕方がないから、前晩碌碌眠らないやうな始末で、――何しろ出來るだけ睡なくちや僕はいけないんだから、五時半は堪えましたよ。」

「埋立は、どうだといふのです、やることはやるのですか。」

「やることはやるのですがね、まだ何年からかは、定つてゐないといふのでね、それに、使用する人間は、實は剩り過ぎてゐて困るといふのです。例の自分の汽船會社を他社へ賣りつけたでせう、で、失業者が、社員だけで、まだ四百人から片づかずにゐるんださうで、若しSさんが何か事業を始め、――差當り、その埋立てですな、そいつをやり始めれば、當然、これらの失業舊社員に、先取特權を與へんければならんといふのですよ。尤な話でもあり、仕方がないから朝飯を御馳走になつただけで別れましたよ。」

「さうでしたか。それは――。」

で、どうなさる、とも鎖目は訊けなかつた。唐澤氏に就ては、この程度で流れた話を、彼は既に、幾つか聞き知つてゐた。わざわざ長滯在して進めようとした話だけに、今度はよほど落膽したらうが、顏つきは割に平然としてゐるのも唐澤氏だつた。それだけ鎖目は痛痛しい思ひだつた。

「結局まだからだが本當でないから、遊んでゐろといふ誰かの命令かも知れない。さう思つてますよ。」

「ぢや、用事も、片づいたし、お歸りですか。」

「え、明日にも歸らうかと思つてゐますがね、弟の家にも、さう邪魔してゐるのも可愛相だし。」

鎭目は、よつぽど會のことを話さうかと思つた。しかし、實現の望みのないものを、云譯けがましく――恥ぢて彼は默つた。

唐澤氏が歸ると鎭目は妻に告げた。

「話は駄目ださうだ。氣の毒な人だ。いつでも大抵出來さうで、結局こはれてしまふのだからね。」

「お氣の毒ね。」

「と云つたところで仕方がないんだが。――何だよ、よし話が一旦は纏つても唐澤氏はもう駄目だね、健康診斷をしない大會社なんかないからね、その時はねられるに極つてゐるよ。あの故障の多いからだでは、人のあまつてゐる今の世の中で、何も出來ないだらう。人前では滅多に出さんようにはしてるが、聽力が衰へてゐるので、アツカスチコンだか何だか、擴音器を時時耳に當てるんだからね。――いろいろ、もうあの人も、生きてしまつた人の一人だ。これからはないも同じ殘りだけだ。さういふ人は、しばしばゐるものだ。」

「そんな事を――。」

「惡く云つてるんぢやない。」

何となく憂欝で、彼は散歩に出た。

四

銀座の散歩から、鎭目が歸らうかとしたときだつた、彼は、危くぶつかりさうに目近く、先程別れたばかりの唐澤氏

に行き合つた。兩方で一緒に歸いてしまつた。

「散歩？」

「歸りかけてゐるところです。」

唐澤氏は微笑した。

「僕はこれから、土産物を見つけようと思つてね。」

「ぢや、一緒にそこいら見て歩きませう。」

「迷惑ぢやない？　一緒に行つてくれれば、僕は好都合だけど。」

「迷惑なんか、ちつとも。」

鎭目は、せめて此際親切らしいものを見せたかつた。彼は唐澤氏に並んで歩き出した。

「土産つたつてね、大したものを買ふのでもないし、數を買ふんでもないのです。一つ、たつた一つ、小さな、荷とならぬものを買つて歸らうと思つてゐます。」

彼等は或百貨店に這入つた。手巾の賣場で唐澤氏は立止つた。そして、女持ちを取上げた。ちよつと意外だつた、女用の土産か、では、新しく細君が出來たのだらうか、――

狹い階段を並んで昇りながら、唐澤氏は、ちよつとはにかむ樣子で云つた。

「僕の友達でね、しつかりした婦人ですよ。いつも世話になるものだから、何か土産を持つて行つてあげようと思つてね。――いつも、君の噂さなんか、してゐますよ。」

餘り正面を切つてゐるので、奥さんを貰つたのぢやないのですかとも云へなかつた。時計などの賣場へ出た。どれも

値の張るものばかりだつた。玩具賣場へ出ると唐澤氏は、小さな女店員に訊いた。

「君、智惠の輪ありませんか。」

「おあいにくさまでした。」

鎭目は、不思議なものを訊くと思つた。

「智惠の輪ですつて？」

「なあにね、僕此頃智惠の輪を蒐集してゐてね、何處ででも玩具屋がありさへすれば、訊いてゐるのですよ。大ぶ集まつて、大抵この位の種類だと思つてはゐるのですがね。もつと集まれば集めたいと思つてね。」

店内を歩き廻つた上、唐澤氏は、飾りのついた婦人手袋を購つた。

「一番小さいのを下さい。大へん手の小さい人だから。」

唐澤氏は、向ふに行つてゐた店員を、大きな聲で勇敢に呼び寄せて、さつさと買物を濟ませた。

「もう少し歩きませうか。」

外へ出ると、鎭目はさう云つた。本來なら、夕食にでも誘ひたかつたのだが、此哀れな成功者は今夕も懷中が甚しく淋しかつた。

「買ひ物も濟んだし、――ぢや、もう少し歩きませう。」

散歩を續けながら、唐澤氏は玩具屋を見さへすれば、つかつかと這入つて、智惠の輪ありませんかと訊ねた。何處にも買ひたいものはないらしかつた。

「割にないものですね。」

「東京なんかには、反つて今どきあんなものはないかも知れない。田舍の小學校の前なんかに、どうかすると、いい掘出しがありますよ。」

「智惠の輪の掘り出しものですか、面白いですね。」

銀座の片側を歩き盡してから鎭目は云つた。

「お茶でも飲みませう。少しくたびれたでせう？」

「僕も、今さう誘はうかと思つてゐたところでしたよ。」

若し、食事を誘つても、恐らく同意してくれるであらう、それだのに、と思ふと鎭目は、お茶で我慢する義理が情けなかつた。

彼は、就職に成功せず、手袋の土産を買つて歸る人と、向き合つて腰を下した。彼を、成功者だと思つてゐる人と――そして、多分は、何と吝な成功者だと思つてゐるだらう人と、向き合つて珈琲の碗に手を觸れた

「東京は、こんな場所はさすがにハイカラですね。」

唐澤氏はそんなことを云つた。そんな話から、ぼつぼつ彼等は、唐澤氏の今住んでゐる地方のこと、それが引いて共通の知人の噂さになつて行つた。

「あの頃の連中で、今とにかく名前を知られてゐるのは、君と、落合君位のものでせう、觀測技手の落合君、覺えてゐるでせう。篤學の青年技師だつたが、今ぢや神戸の觀測所で、なかなか大したものですよ。此間も何か本を出したが。――

「落合技師、覺えてゐますとも。空瓶を流して日本海の潮流を調べた人もゐましたね、何とか云つて、――」

「掛川君でせう。あの人は、もう隱居してゐるようだが。――何にしても、知つてゐる人が偉くなつてくれるのはいいものだな。――君なんか、ますますこれからだし――。」

「仕事を。僕なんか何もしてゐない、せめて太陽の下野でも研究出来るといいのだが。」

「須佐君は未だに耐興の研究助手だし、――君と落合君だよ。」

唐深氏は感慨無量らしかつた。もし、これがちびりちびり酒でも呑みながらだつたら、堪らない事だつた、珈琲店だけに大いに助かるといふものだつた。岡田は、一緒に食事をしなくて、まだしもかも知れないとさへ思つた。宮里君が独逸土にまだなれない話。そして恐らくもうなれないだらう話。野田文平は巡査になつた話――唐深氏は珈琲に酔ふのかと思はせるほどだつた。疲れたらしく椅子にぐつたりして、いくらでも話があつた。

「さう云へば、勝俣君ね、僕の後任だつた勝俣六郎君さ、その後、何とか貯金組合とかいふのに這入つて、支店長か何かになつたのはいいとして、すつかり妙な目に逢つてね、私の前とも何とも、――それや酷い話なんだよ、それはね、――」

一時間近くも喫茶店に居たらうか、岡田は菓子と茶だけではいささか空腹だつた。だが、そのまま、出てしまふより仕方がなかつた。

彼等は同じ方向なので、郊外へ走る電車に一緒に乗つた。

「では岡田僕は降ります。」

停車場に降り立つと唐深氏はさう云つた。

「どうも失礼しました。お子様達よろしく。お見送りもしませんから。」

「いや、そんなことは。――」

そのままの別れだつた。久しぶりに会つて、分つたことは、お互に別々に年をとつてゐたといふことだつた。それだけの別れだつた。

田舍小景

武者小路實篤

（田舍の小川のふち野邊釣をしてゐる。小野登場）

小野。釣れるか。

野邊。釣れないね。

小野。一疋も釣れてゐないぢやないか。

野邊。あゝ、一疋もつれない。

小野。いつから釣つてゐるのだ。

野邊。もう二時間位いになるね。

小野。よくそれであきないね。

野邊。他にすることはないからね。

小野。だが呑氣でいゝね。

野邊。あんまり呑氣でもないよ。

小野。どうして。

野邊。又そろ〳〵詩でもかいて賣りに歩かないとね。
小野。たのみにこないのか。
野邊。たのみに來てるのもあるが、中々出來ないのだ。
小野。さうかね。君の詩には苦心がないやうに見へるがね。
野邊。それだけうまれるまで待たなければならない。
小野。こないだ荒木にあつたら隨分君の詩をほめてゐた。
野邊。さうかね。あいつにも詩がわかるやうになつたかな。
小野。あいつは隨分君に感心してゐた。君の生活にもね。
野邊。さうかね。まあ感心して見せたゞけだらう。
小野。いや本當に感心してゐたよ。
野邊。さうかね。それは本當かも知れない。人間と云いふものは自分と反對の性質を感心するものだからね。僕だつて荒木には感心してゐる。
小野。君が感心してゐるのかい、荒木に。
野邊。それは感心してゐるよ。あいつのありあまる力には感心してゐる。
小野。あんまりありあまつてもないやうだよ。いつも逢ふとかけないで困つてゐる。
野邊。さうかね。しかしかいたものを見ると少しもつかれてゐないやうだ。
小野。いや隨分つかれてゐるやうだ。

野邊。さうかね。しかしともかくあいつの仕事には感心してゐるよ。
小野。さうかね。荒木がきいたらよろこぶだらう。一度君に逢ひたいなぞと云つてゐたよ。
野邊。何年逢はないかね。あいつはこの頃は金がいくらでも入るのださうだね。
小野。それはさうだ。月に三千圓は入るらしい。
野邊。大したものだね。僕の收入の百倍だな。それぢや隨分金もたまるだらう。
小野。なにたまりもしないよ。あいつは益々道樂もするし、畫を買つたりするからね。
野邊。さうかね
小野。あいつは昔とかはつて隨分華々しい生活をしてゐるよ。あいつの家には崇拜家があつまつてくる。殊に女の人が多いよ。又あいつは相變らず女がすきだからね。この頃はチヽアンが一番すきらしいよ。
野邊。それで僕の詩を愛讀してゐるのか。
小野。さうだよ。
野邊。人間てへんなものだな。尤も僕だつてチヽアンが嫌ひぢやない。女だつて嫌ひぢやない。はでな生活だつて嫌ひぢやない。
小野。さうかね。人は見かけによらないね。
野邊。君だつてさうだらう。荒木の眞似もしたいだらう。そして僕の生活もわるくはないと思ふだらう。
小野。まあさうだね。
野邊。人間は地味に生活したい時もあるし、はでな生活をしたい時もある。どつちもその人にとつて嘘ぢやない。

小野。しかし荒木が君の生活をすることは考へられないし、君が荒木のやうな生活をするのを考へると滑稽だね。

野邊。さうかね。

小野。いくら君が金持になつたつて、荒木のやうな生活はしないだらう。又いくら荒木がいくら貧乏したつて自分には引こもれまい。そしてカフエあるきでもやるだらう

野邊。その時になつて見ないとわからないね。

小野。君は荒木の處へ行つて見る氣はないかい。

野邊。ないこともない。時々僕は荒木のことを思ひ出すよ。矢張りなんと云つたつて僕は荒木を愛してはゐる。

小野。荒木も同じことを云つてゐるよ。

野邊。それぢやその內、ゆくことにしやう。荒木に逢つたらよろしく言つてくれ玉へ。

小野。承知した。餌さをつゝき出したね。

野邊。あゝ今つつて見せるから待つてゐたまい。

小野。なんたかあぶないものだね。

野邊（勢ひよく釣竿をはねあげる）あはゝゝ久しくもつた。段々魚も利口になるよ。

小野。毎日よく退屈しないね。

野邊。退屈することもたまにはあるよ。しかし釣をしながら、蘆の風になびくのを見たり、水のぴしや〳〵うちよせてくる音をきいてゐると、心がのどかになる。そして眠くなれば仰向けにねて、雲を見ながらね入るのもわるくはない。

小野。本當に天下泰平だね。

野邊。あゝ天下泰平だよ。

（少年釣竿をもつて登場）

少年。先生、つれますか。

野邊。つれないね。

少年。先生、針でも出てゐるのではないのですか。

野邊。さうかも知れない。早く君も釣つたらいゝだらう。今日はまけないよ。

少年。僕だつて先生にはまけませんよ。

野邊。お客さんに、御挨拶おし。

少年。いらつしやい。

野邊。可愛いゝ子だらう。之は僕の詩の弟子で釣の先生さ。

少年。先生でもありませんわ。

野邊。そして僕の唯一の友達さ。

少年。いゝ友達でせう。

小野。本當に君はいゝ友達をもつてゐる。

野邊。羨やましいかい。

小野。羨やましくないこともない。

野邊。僕は幸福さ。僕はおちついて生活してゐられる。何にものぞみはないよ。かうやつて釣をしてゐればね。

少年。先生、うちに出來た芋をもつて參りましたが、おたべになりませんか。

野邊。ありがたう。小野、君はどうだ。

小野。ありがたう。

野邊。この野趣のあるたのしみは荒木には味はへまい。

小野。味はへないね。だがあいつは又あいつで、實際今時にない愉快な生活をしてゐるよ。

野邊。さうだらうね。

小野。あいつの所には若い女がいつもあつまつて、おどつたり、さわいだりしてゐるがそしてあいつはそれ等に勝手なことをさして一人ニコ〳〵してゐる。そしてあいつは買ひたいものを買つて、家のなかはいつも春のやうに賑かだ。

野邊。それでよく仕事が出來るね。

小野。あいつは仕事にだけは實に執着をもつてゐる。不思議だね。そしてどんなにさわいでゐる時でも、彼が「靜かに」と一こと云へば皆、しづまつてしまう。そして彼が書齋に入つてゐる間、聲高に話をするものはない。そして彼が書齋から出てくるのを靜かに待つてゐる。昔の大名のやうな生活を、新式にしたやうな生活をしてゐる。そして金をほしがるものが美人だつたら、彼は實に氣まいよく金をまきちらす。

野邊。相變らず臆面のない奴だね。

小野。臆面はない。そして彼は思つたまゝに生活してゐる。見てゐて痛快な位いさ。

野邊。さうかね。しかし時々淋しい時があるだらう。

小野。どうかね。あいつのことだからね。しかし生活費がどん〱膨脹するにはさすがに閉口してゐたよ。
野邊。一寸さうなつたら縮少するには困るだらう。
少年。先生、釣りましたよ。
野邊。もうつつたのか。さすがに先生だけあるな。
少年。僕は先生ぢやありません。
野邊。君は釣の先生だよ。
少年。それでも僕の方が始め講義していたゞいたのでした。
野邊。それは君が釣はまづさうなことを云つてゐたからね。しかし魚はゐることはゐるのだな。
少年。それはたしかに居ます。先生のは餌さがなくなつたのでせう。
野邊。そら、ついてゐるだらう。
少年。一寸見せて下さい。針が出てゐますよ。
野邊。それぢや引こめておいてくれ。
少年。餌さをかへておきますよ。
小野。厄介な釣り手だね
野邊。餌をかへるのがすきなのだよ。
少年。そんなことはありませんわ。
野邊。それでもいつか好きだと云つてゐたよ。

少年。さうでしたか知らん。

野邊。荒木はそんな出鱈目な生活をしてゐるのかね。

小野。出鱈目でもないが、何しろ贅澤な生活をしてゐるよ。

野邊。さうかね。もつといろ〳〵話してもらはうかね。なんだか話をきいてゐると、何か仕事をして征服してやりたくなる。

小野。荒木をかい。

野邊。いや、自分の内にある、快樂を求める心にね。僕は他人の贅澤を憎みはしないが他人の贅澤な話をきくと何か仕事がしたくなる。自分がまだ悟つてゐない證據かも知れないが、少くも元氣になる。だから僕は他人の贅澤な話は嫌ひぢやないのだ、自分はしたいとは思はないがね。思ひ切つたことをする奴は、よかれあしかれ活氣があつていゝ。

小野。君はさう思つてゐるのかい。一つ荒木の所へ行つて見たらどうだい。

野邊。行つてもいゝね。そしてうんと華かな生活でも見てくるかね。

小野。それぢや又くるよ。今日は失敬する。

野邊。まあいゝぢやないか。家へ行かう。

小野。僕はこの近所に一寸用があつて來たのだ。又近い内に來なほすよ。

野邊。荒木もさそつて來ないか。

小野。あいつは中々急がしいらしいよ。

野邊。あんまり急がしいのはよくないね。

小野。騷がしい方が活氣があつていゝと云つてゐたよ。

野邊。人にもよるかも知れないが僕はさうは思はないね。

小野。それぢや又くるよ。

野邊。それぢや失敬する。

小野。失敬。今度は荒木の處で逢ふことになるかね。

野邊。さうかも知れないね。荒木によろしく云つてくれ不意にゆくかも知れないつてね。

小野。あゝ。さよなら。

野邊。さよなら。

（小野退場）

少年。先生東京へいらつしやるのですか。

野邊。一寸行つて來やうかと思つてゐる。

少年。すぐ歸つてゐらつしやる。

野邊。それはすぐ歸つてくる。

少年。僕は先生がいつか東京へ行つて歸つてゐらつしやらないかとそれが心配で仕方がありません。

野邊。そんなことはないよ。

少年。先生がゐらつしやるので僕はたすかつてゐるのです。

野邊。僕も君がゐるので助かつてゐるのだよ。

少年。僕が詩人になれたら先生のおかげです。

野邊。君が怠けものになつたら僕のおかげかね。

少年。いゝえ。先生は僕に働くことを教へて下さいました。僕は先生を知るまでいや〳〵働いてゐました。

野邊。君の美しい心には僕は感心してゐる。

少年。先生のお心にくらべると僕はとても駄目です。

野邊。お互に知つてよかつた。君が僕の用はなんでもしてくれるので僕はどんなに助かつたか。

少年。僕は先生に本をかして戴いたのを實によろこんでゐます。その上いろ〳〵のことを教へて下さいました。

野邊。いゝことゝ、わるいことをね。

少年。そしていゝことはとつて、わるいことはすてゝ顧みないことをね。

野邊。君は僕よりも生々し、僕より優らなければならない。僕はやゝもすると傍觀者だが君は生きた人間にならなければならない。

少年。先生、僕は先生を今失つたら本當に困ります。

野邊。大丈夫だよ。今君に逃げられたら僕こそまいる。

少年。本當に先生を知つたのは、因緣だと思ひます。

野邊。僕もさう思ふよ。僕はここに來なかつたら君に逢へなかつた。僕はへんにこゝに來たかつたのは君に逢ふためだと思つてゐる。

少年。私の心のなかにいろ〳〵の花を咲かせて下さいました。

野邊。僕は夢のなかであこがれてゐたのは君だつた。

少年。僕こそ先生を夢見てゐました。僕を天國へ導いて下さる方を。

野邊。僕は君のやうな弟子を持つことが出來たことは、百人の弟子を得たよりうれしい。

少年。私は先生の期待に背かないやうにつとめます。

野邊。本當に靜かだね。

少年。本當に靜かです。

野邊。生れない前に歸つたやうだね。

少年。死んだ後の靜かさもこんなものか知れませんね。

野邊。このまゝ二人で死んだらどうだらうね。

少年。先生は死にたいんですか。

野邊。死ぬのはわるいとは思はないね。

少年。生きてゐるのはどうですか。

野邊。なほいゝね。

少年。先生は荒木さんが羨やましかつたのではないのですか。

野邊。うらやましいとは思はない。

少年。まるでゞすか。

野邊。一寸とは羨やましくないこともないが、しかしこゝでお前と二人こうしてゐるよろこびは又特別だ。

少年。僕は先生をどんなに尊敬してゐるでせう。

野邊。僕は君をどんなに愛してゐるか。

少年。私が女でしたら。

野邊。君が男だからいゝのだ。僕は女を愛することは恐ろしい。

少年。なぜです。

野邊。僕には他人の運命を背負ふ力はない。

少年。一人づゝ立つてゐればいゝわけですね。

野邊。子供が出來たらさうもゆくまい。この平和はなにものにもかへられない。

少年。先生の餌に魚がついてゐます。

野邊。君の方にもついてゐるよ。

少年。靜かで、心うれしい日ですね。

野邊。本當に心うれしい日だ。何かいゝことでもあるのかな。

野邊。そら。

少年。先生。

（二人釣竿をあげる兩方に魚がついてゐる。二人笑ふ）

野邊。愉快、愉快。

二

（荒木の客間。荒木と小野話してゐる）

荒木。　さうさ。僕は人に嫌はれることは嫌ひぢやない。僕は他人に好かれたいと思ふ氣が強いのを恥てゐるからかも知れない。僕はたへず二三人の敵をもつてゐる方が好きなのだ。僕の缺點をうの目たかの目で見てゐる人間のゐるのは悪いことぢやない。僕は他人と妥協するよりは、他人を怒らせる方が活氣があつていゝ。僕だつて人に好かれるのにはどうしたらいゝか知つてゐる。知りすぎてゐる。世間からほめられるのだつてどうすればいゝかは知りすぎてゐる。だから反つて時々逆に出てやるのさ。輕蔑されたり、怒られたりすることになれておくことは必要だからね。

小野。　皆、君の缺點を惜しがつてゐるよ。

荒木。　昔からね。しかし僕は事實、まだ圓滿な人間ぢやない。僕だつて人間だから一方聖者のやうな心ももつてゐるが、それだけぢやない。世間に氣に入るやうな聲色をつかうものを見ると、なほわざと嫌はれるやうなことが、一寸云つて見たくなる病ひだね。あまり賢くもないが、しかしそれでいつも生々してゐられる。そして自分の勝手なことが出來る。日本には恐ろしい人間はゐなすぎる。少し皆いぢけてゐる。僕は嫌はれるのを恐れて小さくはなつてゐられない。

小野。　君の氣持はわかるよ。しかしそれも一つの意固地だね。大きな、すなほな生活とはちがうね。

荒木。　無論ちがうよ。僕もせめて六十位いになつたら、このアクはなくして見せるつもりだが、それまではあくを持つてゆきたく思つてゐる。あまり若くつておさまりたくないからね。

（小間使登場）

小間使。末本さんがお見へになりました。

荒木。末本か、通してくれ。

小間使。はい。

荒木。何かいゝものでも見つけたかな。

小野。あんまり書を貰ふのは考へものだと、三本が云つてゐたよ。

荒木。人によるよ。更にいゝものをかけばいゝ。僕は三本のやうな社會改良家ぢやないからね。僕は自分の藝術を愛してくれるものさへ、よろこばせばいゝのだ。つまりどんな生活をしたつていゝものさへかけばいゝのだ。それには人間はどの位いよろこべるものか、知ることが必要だ。

小野。それだつて、君はこの頃、少しかきすぎるよ。

荒木。かきすぎるのはわるいことぢやないことをこの頃實にはつ切り知つたよ。僕はかきすぎることを心配したのは二三ケ月前の話さ、この頃急足に進歩して來たのは毎月全力的な仕事をすることが出來たからだと思つてゐる。

小野。それも一面の事實かも知れないが、つかれちや馬鹿氣てゐる。

荒木。この頃はつかれてはゐない。

（小間使、末本登場）

末本。今日は結構なお天氣で。

荒木。其處へ腰かけたまい。そして早速だがいゝものが見つかつたのですか。

末本。きつとお氣に入るものが見つかりました。

荒木。さうですか、それは是非拜見したいものですね。

末本。之で御ざいます。

荒木。誰のです。

末本。御らんになればわかります。

荒木。中々勿體をつけますね。

（荒木、風呂敷づゝみをうけとりあけ畫帖を見る）

荒木。之はすてきだ。どうしてこんなものが手に入つたのです。

末本。支那にゆく人に內々たのんでおいたのです。この畫の寫眞をわたして。

荒木。いくらですか。

末本。三千圓ださうです。

荒木。安いですね。

末本。え、運よく安く手に入つたのです。

荒木。それぢや早速ゆづつてもらいませう。

末本。ありがたう御ざいます。

荒木。本當にこれを見つけて下さつたのは手柄です。僕はこの畫のためになら一萬圓もよろこんで出しますよ。出來るだけ借金しても買ひますよ。

末本。それは惜しいことしましたね。
荒木。そのかはり、益々君を信用しますよ。
末本。それはどうもありがたう御ざいます。
荒木。金は月末まで待つてもらへますか。
末本。いつでも結構です。
荒木。安く手に入つて僕はこんなにうれしいことはない。(見てゐる小野に)大したものだね。
小野。あのヱだね。いつも君がほしがつてゐた。本當に大したものだ。
荒木。本當にうれしく思ひます。どうもありがたう。
末本。私の方もこんなによろこんで戴けるとうれしくなります。
荒木。偉いね、支那は。
小野。本當に大したものだね。
荒木。僕は早く支那が平和になつて、こんな人間がぞく〳〵出てくる時代をこさせたく思ふよ。生てゐる間にそんな時代が來たら隨分うれしいがな。
小野。本當だね。
末本。それでは失禮いたします。
荒木。どうもありがたう。又いゝものがあつたら見せてください。
末本。ありがたう御座います。

荒木。さよなら。

末本。さよなら。（退場）

荒木。今日は本當にいゝ日だ。僕はうれしくつて仕方がない。こんないゝものを見ると、人間と云ふ奴は偉い奴だと思ふ。恐ろしく良心をもつてゐる、眞劍な、微妙なことのわかる人間もゐてくれたものだと思つてありがたくなる。頭がさがる。

小野。本當に大したものが手に入つたね。

荒木。夢のやうな氣がする。ありがたい。ありがたい。

小野。三本なんかに見せたら、何んて云ふだらうね。

荒木。畫の方は碌に見ずに、三千圓と云ふ金だけが頭に入るだらう。三千圓あれば三百人の人が食へるつてね。

小野。まあそんな所だね。

荒木。さう云ふ考へもわるくはないよ。しかし僕はこのよろこびから三千萬人の人によろこびの曲を送つて見せる。

小野。三千萬人は大きいね。

荒木。その内の十分の九はまだ生れない奴だ。しかし、いゝものがかければそれまでの話だ。だがこの畫帳が日本のものになり、僕のものになり、そして多くの人の目にふれることが出來るやうになつたのは小さい仕事ぢやない。慈善に百萬圓の金を出す男よりは、他人に一文もほどこすのをいやがる內村さんの方を僕は尊敬するよ。金で人は救へるかも知れない。しかしその仕事は僕より適當な人間がいくらでもゐる。政府でやるといゝのだよ。しかしこんな云ひわけをしなければ、こんな畫帳も氣らくに買へない不景氣の世の中を自分ははがゆく思ふよ。人間はもつともつと盛

んに無遠慮に生ていゝと思つてゐる。正しい欲望、他人の生命を傷つけない欲望は何處までも滿されていゝと思つてゐる。しかし理屈はどうでも、僕はうれしい。

小野。何にしろ今は少し不景氣すぎるね。十圓の金でもムダづかいをするとなんだかすまない氣がして僕は困ることがある。

荒木。ともかくいぢけるのはいけないね。僕はますく無遠慮に自分の生命の滋養は取らうと思つてゐるよ。自分の藝術のエネルギーを枯死させようとは思はない。益々生てやるつもりだ。大きな木のやうに、自分のとれる滋養分は何處からも貪慾に取らうと思つてゐる。

小野。君のそのゆき方をよろこんでゐる若者を僕は知つてゐるよ。

荒木。僕はもつと多くの若者を知つてゐるよ。生々した、頭をたれない人間こそ、僕の友だよ、野邊の詩に。「われは日曜日の子、祭日の子なり、ほがらかな心をもつて、かぎりなく生くるなり」とある。そう云ふのが人類の愛兒のゆき方と僕は思つてゐる。かぎりなく生くる也。だ。

小野。野邊は來ないか。

荒木。まだ來ない。

小野。その內くるだらう。

荒木。來たら大いに歡迎してやりたい。僕はあいつの生活には感心してゐる。人間にはいろくの生き方がある。自分の質を根本からよくしてゐる人間には感心する。

小野。本當に質をよくすることは大事だね。

荒木。大事さ。質は中々一朝一夕でよくなるものぢやない。それだけ日常、自分の質を殺えてゐる人間はほめていゝ。いゝ人間が一人でも多く出て來ることは實によろこびだ。人間を馬鹿にし、低脳にする仕事には自分は組することは出來ない。

(小間使登場)

小間使。野邊さんがお見へになりました。

荒木。野邊が來たかすぐお通しゝてくれ。

小間使。はい。(退場)

荒木。一寸行つてくる。(退場)

(小野、畫帖を見る。まもなく荒木小野登場)

小野。よく來たね。

野邊。不意に來たくなつてね。

小野。それはよかつた。今も君の噂をしてゐたのだ。

野邊。さうだつてね。何しろおどろいたよ。

小野。何が。

野邊。荒木がこんな家に住まうとはね。

荒木。さう馬鹿にするものぢやない。

野邊。だがうれしかつたよ。立派なのでね。

荒木。君は不愉快がるかと思つてゐたよ。
野邊。不愉快なものかね。日本中の人のこらずが、こんな家に住めるやうになればいゝと僕は思つてゐるよ。
小野。君。自身もこんな家に住みたいか。
野邊。僕は別だよ。物好きな奴だけキタナイ家にすむのだね、さう云ふ時代では。
荒木。相變らず空想家だね。
野邊。空想家と云はずに、想像家と云つてほしいね。僕にとつては想像は時に現實以上の現實なのだ。
荒木。腰かけないか。
野邊。なんだか腰かけがよごれさうだな。
荒木。よごれたつていゝよ。
野邊。まさかよごれもしまい。しかし僕はもう少しで玄關拂にされるところさ。野邊だと云つたら急に丁寧にしてもらへたがね。
小野。その風ぢや乞食とでもまちがひたのだらう。
野邊。まあ、さうだらう。物好きにこんな風して來たわけぢやないのだ。たゞ荒木の處へ來るために着物を買ふ必要があるとは思はなかつたからね。
荒木。勿論結構だよ。着物を輕蔑する位いなことは僕だつて知つてゐる。
野邊。禮儀を尊敬する位いは僕だつて知つてゐるがね。
荒木。何しろよかつた。隨分暫くだね、君はちつともかはらないね。もつと齢とつたかと思つてゐたよ。

野邊。思ひがけなかつたよ。君は大分白髮がふへたね。十五年の間逢はなかつたのだからな。お互に[illegible]
だ。
荒木。本當に君は丈夫だね。
野邊。君こそ丈夫だね。君の仕事をするのにはおどろくよ。
荒木。僕は君の詩には實に感心してゐる。
野邊。まだだめだよ。しかし僕も之から一生懸命やらうと思つてゐる。もう少しのところだからね、
荒木。もうすつかりものになつてゐるよ。
野邊。まだ、まだだめだよ。君こそもうものになつた。
荒木。僕の方はまだだめだよ。之からもつと仕事がしたいと思つてゐる。なんだか仕事らしい仕事は一つもしなかつた
やうな氣がするよ。
野邊。すんだものは、もうすんだものだね。時々はなつかしくも思ふが。
荒木。今日は君はゆつくりしていつていゝのだらう。
野邊。今日はとめてもらはうかと思つてゐるのだ。
荒木。是非とまつてゆきたまい。
野邊。小野、その畫を見せないか。
小野。あゝ。
野邊。僕はこの家に一度來たやうな氣がするよ。

荒木。さうかね。

野邊。この詩は誰がかいたのだ。

荒木。八大山人だ。

野邊。支那の人か。

荒木。さうだ。

野邊。中々深い感じを持つてゐるね。

荒木。すべてを一度すて、又ひろつて來たと云ふ感じだらう。

野邊。まあ、さうも云へるかも知れない。

荒木。實にあたりまいのかき方がしてあるだらう。そのくせへんに深い。

野邊。不思議だね。僕もかう云ふ感じの詩がつくりたいと時々思つてゐたが、中々だめだ。

荒木。しかし君が無邪氣に云つてのけた詩に隨分いゝものがある。

野邊。さうかね。君がさう思ふならうそでもあるまい。しかしそんな話はよそう。

荒木。君の生活には僕は感心してゐるよ。

野邊。獨善な處があつて自分でいゝとは思つてゐない。僕だつて時々はあばれたくもなる。

荒木。さうかね。一つあばれて見たらどうだ。

野邊。しかしあばれて見たら、淋しくなるだらうよ。

荒木。今日は君を何處かへつれていつて御馳走したいと思ふがどうかね。

野邊。この着物ぢやね。
荒木。いゝぢやないか。そんなこと。
野邊。だが世界のちがいすぎる所にはゆきたくない。
荒木。本當かい、時々は世界のまるでちがう處にゆくのもいゝだらう。
野邊。惡くもないだらうが、僕は柄にあつたことが好きだよ。
荒木。それならこゝへお客をよばう。
野邊。いや、よばなくつていゝよ。
荒木。君に逢ひたがつてゐる人が大勢ゐるのだ。（呼鈴をおす）
（小間使ひ登場）
荒木。いつもの連中に電話をかけて野邊さんがお見へになつたから、來てくれと云つておくれ。
小間使。はい。（退場）
荒木。君が來たら大いに歡迎會をしたいと皆で云つてゐたのだ。
野邊。それはおどろくね。
荒木。まあ、僕の世界も見てくれ玉へ
野邊。それなら見せてもらはう。
荒木。小野、それなら廣間の方をいろ／＼君がさしづしていゝやうにやつてもらはうかね。
小野。承知した。（退場）

荒木。本當に二人切りで、久しぶりだね。僕は君にあやまりたいと前から思つてゐた。

野邊。もうすんだことだよ。

荒木。本當に許してくれてるのか。

野邊。もう許すもなんにもないぢやないか。僕は今の生活を幸福に思つてゐる。そして君が僕から靜子を取つたのは當然なことゝ思つてゐる。

荒木。僕は云ひわけはしないが、今になると君こそ僕の勝利者だ。

野邊。そんなことはない。

荒木。君は不滅の仕事をしてゐる。僕は空虚な仕事をしてゐるにすぎない。

野邊。そんなことはない。君は立派な仕事をしてゐる。

荒木。僕はさうは思はない。

野邊。そんなことがあるものか。

荒木。僕は誰にも本音は見せてゐない。君にだけ僕は本音をはくのだから、冗談にはとらないでほしい。小野にも正體は見せてゐない。

野邊。正體なんて誰にもわかるものぢやない。

荒木。しかし君にだけ話しておきたいのだ。本音をはけば、僕は自分の生活に滿足してゐない。

野邊。僕は君の圖太さを尊敬してゐるのだ。僕は君の弱は音はきゝたくないよ。

荒木。さう云はれゝば一言もないがね。

野邊。それに君を僕は正直ものだとは思つてゐないのだ。君は一生芝居をしてゐる男だと思つてゐる。

荒木。本當にさう思つてゐるのかい。

野邊。正體は君自身も知らないのだと思つてゐるよ。

荒木。それが君の本音かね。

野邊。君は僕のものをのこらずとつた。

荒木。それはさうだ。

野邊。しかし一番大事なものはとれなかつた。

荒木。さうかね。

野邊。それを君は今、又僕からとりたいと云ふのだらう。

荒木。君は本當にさう思つてゐるかい。そして君は何しにこゝに來たのだ。

野邊。僕は君に僕は何にも君にとられてゐたいことを示しに來たのだ。反つて君が僕に加へてくれたことは全部、僕のためによかつたことを君に示しに來た。

荒木。復讐に來たのかい。

野邊。君の魂をよびさましに來たのだよ。

荒木。裁きに來たのかい。

野邊。さうかも知れない。

荒木。しかしそれは駄目だよ。

野邊。表面はだめだらう、しかし實質ぢや、僕は君を裁くことが出來るつもりだよ。

荒木。君は復讐しに來たのだね。

野邊。君の言葉で云へばさうなるかも知れない。僕の戀人を奪つたのも君だ。僕と一緒に仕事をして破産さしたのも君だ。僕の名譽を根本からたゝきつけたのも君だ。君は僕を恐れすぎてゐた。そして萬事は君の思ふ通りに行つた。君は君ののぞんでゐた贅澤な生活も出來、名聲も得、そして一作ごとに批評家に提灯をもつてもらへてゐた。しかしそれで君はおちついてゐるわけにはゆかなかつた。それは君に良心があつたからではない。君が失なふものを失なつてゐない不安からだ。君はさつきの畫をかいた人をほめて、すべてを一度すて、又ひろつて來た人と云つたが、君はすべてをひろいすぎた。そして何にもすてたくないと云ふのだ。だから君はおちつかないのだ。

荒木。それは君らしい見方だよ。僕はそれなら僕らしい云ひ方をしやうね。僕は君の詩を感心してゐるのは見かけだけだ。僕は罪ほろぼしに君を引き上げたく思つてゐるだけだよ。僕は今の自分の生活を少しも恥てゐないよ。たゞ君に同情してゐるだけだよ。一寸弱は音をはいて見たのも、君の本心が知りたかつたからだよ。妻は君の戀人だつたかも知れない。しかし僕の處へ來たかつたのは妻だ。君と一緒に仕事をして破産したのは君許りぢやない、僕もだ。しかし僕は君のやうに勇氣を失なはなかつた。君は僕が君の惡口をさせたととつてゐる、しかしそれは君の神經衰弱の妄想にすぎない。

野邊。君はもう一度僕と戰はうと云ふのだね。

荒木。それは君がつけ上つた時の話だよ。

野邊。君は僕の詩を心の底では感心してゐないと云つてゐるね。

荒木。これは事實だからね。

野邊。本當にそれが事實かね。それが事實なら、君は仕合せものだよ。

荒木。君は自分の詩をそんなにすぐれたものと思つてゐるのかい。本當に。

野邊。本音をはけば思つてゐるよ。

荒木。さう思ふやうになつたのは、君の處へ匿名の手紙がゆくからだらう。あの匿名の手紙は僕が若い友人にかゝして、君の處へ出さしてゐるのだよ。文句も僕が教へてね。

野邊。それは噓だ。

荒木。いや、本當だよ。僕は君の内にいゝ素質があることを認めてゐたのは昔からのことだよ。それを僕が偶然のことからたゝきつぶした。それが僕の心をいためてゐた。だからどうかして君を元氣にさしたいと思つて、僕は友人にほめさしたのだよ。そのききめは目ざましいものだつた。

野邊。それなら僕の原稿を買つてくれる雜誌も、君がすすめて買はしたことになるのかい。

荒木。それは勿論、さうだよ。

野邊。君て云ふ奴は、本當にいやな奴だな。

荒木。君が思つてゐる程、わるい人間ぢやないのだよ。君さへつけ上らなければ、僕は君を勝利者にしておいて上げたのだよ。

野邊。君に憐んでもらう必要はないよ。

荒木。僕の友情をすなほにとる方がいゝよ。君のひねくれた性質が、君を實に毒してゐる。尤もその性質があるから、

君は活氣を失はないのかも知れないがね。今日は僕は君を勝利者として歡迎するつもりなのだ。

野邊。そんな方便はよしてもらはう。

荒木。わる氣にとるなよ。

野邊。君と云ふ人間の正體は、僕にはよくわからない。

荒木。僕にだつてわからないよ。第一正體をつかもうとするのからまちがいぢやないか。僕は君を大詩人につくり上げたく思つてゐるのだよ。君に適當な賞讃の雨をあてると君はめき〳〵といゝ詩がかける男だと云ふことを知つたからね。

野邊。そんなことはしてもらいたくない。

荒木。そんなら之からやめやうね。

野邊。それなら僕は歸るよ。

荒木。さうかい。それなら僕と又戰はうと云ふのだね。

野邊。勿論、戰ふよ。

荒木。僕は君を相手にしやうとは思はないよ。

野邊。君の仕事は空虚なものゝ上に出來上つてゐるのだ。

荒木。君の詩はうその賞讃の上にはへた木の子だよ。

野邊。僕は君と喧嘩するつもりで來たのぢやないが、殘念だが仕方がない。之で失敬する。

荒木。まあ、まちたまい。僕は自分の云つたことを全部とりけすよ。しかし君も、僕が君を中傷してやつけたと云ふ點

だけはとりけさなければいけない。僕はそんな卑劣なことはしたことはない。

野邊。それはとりけしてもいゝが、君が僕の詩を尊敬しないのが、事實なら、僕は君と和解する氣はない。

荒木、賣り言葉に買ひ言葉さ、氣にしないがいゝ。一寸君の出方が、出かたなので、一寸心にもないことを云つたまでだよ。僕は君の詩を尊敬してゐるのは本當だよ。しかし僕は自分の仕事をそれ以上尊敬してゐることも事實なのだよ。君の仕事が立派なやうに、僕の仕事も立派だと思つてゐるんだ。君は君の方が立派だと思ふことには少しも不服はないのだ。男同志に自惚はつきものだからね。

(戸をたゝく)

荒木。はい。

(靜子登場)

靜子。野邊さん、暫らく。

野邊。本當に暫らくでした。

靜子。相變らず御元氣で結構ですね。

野邊。えゝ、ありがたう、おかげで。

靜子。あなた、皆さんがお見へになりました。こちらにお通ししませうか、あちらにしませうか。

荒木。あつちにしやう。

靜子。はい。(退場)

野邊。僕は失禮するよ。

荒木。野邊。それは僕のわるいくせだよ。さつきのことは僕はあやまるよ。君の怒るのは無理がない。しかし男同志には輕蔑はよくないよ。それなら君の處へ行つて見やう。まだ怒つてゐるのかい。野邊。僕は本當は君を愛してゐるのだよ。君はまだ僕を憎んでゐるのかい。もう憎んではゐないのだらう。
野邊。大いに憎い處があるね。だが愛すべき所もある。
荒木。それで結構だ。それなら一緒に君の處へ行かう。

三

（日本風の廣間、男七八人女五六人坐つて酒をのみながら話をしてゐる。皆酒がまわりだしてゐる。）
荒木。（立ち上り）皆さんに私の舊い友人である野邊を御紹介出來ることを光榮に思ひます。野邊の詩人としての價値は皆さんがすでに御承知のこと丶思ひます。實際野邊の詩は田園の生活を實によくあらはしてゐ、田園をさまようやうな感じのする詩があります。都會人の我々にはその詩にふれることによつて實に新鮮な感じをうけ、秋風におとづれられて身がひきしまるやうな感じをうけます。こ丶には野邊の詩をすきな人が多いのですから、何にも云ふ必要はないと思ひます。野邊が不意に來てくれたことをよろこび、皆さんが早速かけつけてくれたことを感謝します。野邊は料理屋にゆくのをいやがりましたから、家で心許りの祝宴をあげたく思ひます。どうぞお氣らくに心うれしく一夕を過されることをのぞみます。（坐る。拍手）
野邊。（立ち上り）今荒木から紹介された私は野邊で御ざいます。荒木と私とは子供の時からの友達で、私の一番嫌ひなのは荒木で一番好きなのも荒木です。これは皆さんも御同意下さると思ひます。（笑聲と拍手）今さつきも二人は喧嘩

をしました。荒木は實際怕い奴です。私を手の内にまるめこまうとします。しかし私は手の内でまるめこまれてはをりません。私は少しひねくれものかも知れませんが、嘘はきらいです。皆が荒木に嘘でかためたやうな男です。そのくせ嘘をつかない人間よりも、本音を見せることが上手です。腹藝のうまい役者のやうな男で、僕とは大いに蟲があはないのです。そのくせなんとなくなつかしいので困ゝます。嫌ひなら嫌ひでいゝのです。さつきも腹を立てゝすぐ歸らうと思つたのですが、うまくまるめられて、こゝへつれこまれたのです。どうも面白くないのですが、歸る氣にはなれないのです。荒木は一種の奴です。皆さんも荒木にまるめ込まれないやうにおたのみします。僕のやうにです。(拍手と笑ひ)(坐る)

荒木。(立ち上る)。今の野邊の話をきいてゐるとどうも僕が嘘つきでかためた男になりますが、僕はそんな男ぢやありませんから、どうか、御安心を願ひます。

野邊。いや、さう云ふ人間だ。

荒木。さう思ふのは君許りだよ。

野邊。それなら一つ皆にきいて見たらいゝだらう。

荒木。それなら私を嘘つきだと思ふ人があつたらどうかお立ち下さい。

野邊。さあ皆立つた。

(皆たち上る。小野だけ坐つてゐる)

野邊。小野、君は荒木を嘘つきだと思はないか。

小野。さうだな。嘘つきでない人がこゝにゐるかね。

荒木。嘘つきでない人は見渡した所ゐないね。

野邊。しかし荒木はとく別だ。荒木參つたらう。細君にまで立たれるやうぢやね。

荒木。しかし細君と云ふものは嘘をつかれるやうに出來てゐるものだよ。君は獨身だから知らないが、一度細君をもつて見ろ、嘘がつきたくなるから。

（皆笑ふ

野邊。それなら坐りませう。こんな圖太い奴には叶ひませんからね。

荒木。どつちが圖太いかわからないね。人のうちに來て、自分の歡迎會に主人を嘘つきにするなんて。だが愉快だ。大いに愉快だ。嘘つきが通用した以上は僕は大いに嘘をついてやる。皆さん、野邊は僕のために貧乏になつたので、僕はいつもすまないと思つてゐるのです。それで僕は皆さんの前でちかいます。この一年の内に野邊君に一萬圓だけ返すことにします。

野邊。（少し醉つてゐる）嘘ならもらうが、本當ならもらはないよ。金なんて、月に三十圓あれば澤山だ。それ以上もつと蛆がわくよ。

荒木。人によるよ。

野邊。荒木なんか蛆をわかす名人ぢやないか。

荒木。うぢがわくか、花が咲くか、どつちかね。

野邊。花則ち蛆なりだらう。

荒木。野邊。君は相變らず酒ぐせがよくないね。

野邊。本音をはくだけだよ。本音を。美しい諸君。諸君よ荒木にだまされ玉ふな。荒木の細君を泣かしてはいけませんぞ。

小野。野邊よせよ。

野邊。いやよさない。僕は荒木を實に愛してゐるよ。荒木はたしかに天才だ。しかしそれは嘘つきの天才だ。僕の詩を荒木はほめてゐるが、それも嘘だ。僕の來たのをよろこんでゐる。それも嘘だ。

小野。野邊。だまつてゐろよ。

野邊。いや、默らないね。諸君は荒木の小説に感心してゐる。しかしそれも嘘だ。小野は正直ものだ。しかしそれも嘘だ。嘘でないものは皆さんは本當のことを知らないと云ふことだけだ。本當のことを知つてゐるものは何處にもゐないのだ。それでいゝのだ。嘘天才。僕は嘘がすきだ。だから荒木が好きなのだ。荒木一杯やらう。

荒木。一杯もらはう。

野邊。君の健康を祝す。大いに祝す。ます／＼まづい作をうんとかけ。そして日本一の金持になれ。君が金持になれば、僕に毎月三十圓の金をよこせ。

荒木。やつてもいゝよ。

野邊。嘘ならもらうが、本當ならもらはん。僕は荒木から恩をうけたくない。僕は一本立ちの男だ。皆さん、僕の詩が本當にわかりますか。君達、都會人にはわからないでせう。

靜子。野邊さん、酒はいゝ加減にしておゝきなさい。

野邊。いや奥さん。いくらあなたの御忠告でもそれだけはきけませんね。荒木が僕に酒をのましたから、僕は失戀したのです。

靜子。うそですよ。そんなこと。

野邊。いや本當です。皆さん。僕はこの奥さんにほれてゐたのです。處が僕が酒をのみすぎてゲロをはいた。それで僕の戀は破滅したのです。

靜子。そんなことは噓です。

野邊。噓ぢやありません。之ばかりは噓ぢやありません。荒木を見て御らんなさい。あいつはいくらのんでも、醉つたりはしませんよ。あいつは醉つたり、ゲロをはいたりしません。

荒木。野邊。いゝ加減にしろよ。

野邊。いや、いゝ加減にしないね。

荒木。誰か、餘興でもやらないか。

女一。やりませう。私が三味線をひくから、あなたおどりなさい。

女二。おどりませう。

野邊。おどりですか。それは是非拜見したいものですな。あなたは藝者ですか。

女一。藝者ぢやありませんわ。

野邊。女優ですか。

女一。女優でもありませんわ。

野邊。お孃さんですか。

女一。まあ、そんな處ですわ。

野邊。まあ〳〵、よく出來ましたね。早くひいて下さい。

（小間使三味線をもつてくる。音をあはせる）

野邊。愉快々々、三味線の音をきくのは久しぶりだよ。

荒木。さうかね。

野邊。僕は貧乏してから、一さい遊びはやめてゐたからね。お孃さんにひいてもらうわけにもゆかないからね。

（三味線をひき、まふ）

野邊。もう澤山。もう澤山。僕はもう歸るよ。

荒木。なぜだ。

野邊。なんだか泣きたくなつたからさ。

荒木。泣きたけらあ、泣きやいゝぢやないか。

野邊。見ともないからな。

荒木。見ともなくつてもいゝよ。

野邊。人のことだとね。荒木、僕は君にあやまるよ。

荒木。なにをだ。

野邊。君を憎んでゐたことをさ。

荒木。なんだ。君に憎まれる資格は僕にあるのだから僕は何とも思つてゐない。

野邊。荒木。僕は君を本當は愛してゐるのだ。

荒木。僕だつて君を愛してゐるよ。
野邊。男同志は憎んでゐる方がいゝね。
荒木。さうでもないだらう。
野邊。憎む方が面白いよ。愛するのは見ともない。
荒木。さうかね。
野邊。さあ、奥さんもう一杯下さい。
荒木。ついでおあげ。
野邊。御主人のお許が出たからいゝでせう。
女一。やめませうか。
荒木。おやりなさい。野邊いゝだらう。
野邊。どうか。
(女一、ひき、女二、おどる)
野邊。小野。
小野。なんだ。
野邊。あのおどつてゐる人はなんて云ふ人だい實に美しいね。
小野。あれは君、奥さんの姪で梅子さんだよ。
野邊。おどりもうまいね。

小野。それはうまいよ。

野邊。僕は泣きたくなつた。（大きな聲だして泣きぢやくりする）

四

（第一と同じ、少年釣をしてゐる。野邊釣竿をもつてやつてくる）

野邊。つれるかね。

少年。おや、先生、おかへりなさいまし。

野邊。相變らず釣をしてゐるね。

少年。先生はいつお歸りになつたのです。

野邊。たつた今歸つて來たのだよ。

少年。先生はもう歸つてゐらつしやらないのかと思ひました。

野邊。どうして。

少年。どうしてかそんな氣がしたのです。

野邊。それで歸つて來ないといゝと思つてゐたのか。

少年。歸つてゐらつしやらないと大へんだと思つてゐました。

野邊。本當にさう思つてくれたのか。

少年。えゝ。僕は先生と話をしないと心が空虛で困るのです。

野邊。さうかね。それ程までに思つてくれるのかね。
少年。東京はどうでした。
野邊。熱病にかゝりに行つたやうなものだつたよ。
少年。御病氣だつたのですか。
野邊。まあそんな處だね。
少年。それはいけませんでしたね。もうおよろしいのですか。
野邊。もうたいがいいゝ。こゝの風にふれたらさつぱりしたよ。
少年。本當にお身體を大事にして頂戴。
野邊。大事にするよ。僕も之から心を入れかへて勉強するつもりだよ。
少年。僕も今日から元氣に働きます。詩も二つ三つつくりましたから見て下さい。
野邊。あゝ、見せ玉へ。
少年。家においてあるのです。今晩おひまですか。
野邊。ひまだよ。
少年。それなら今晩もつて上ります。
野邊。是非もつておいで。
少年。先生。僕はこの頃、父にほめられるやうになりましたよ。
野邊。どうして。

少年。よく働くのです。心を入れかへると云ふ事がやつとわかつて來たのです。それから決心を新にすると云ふことが、

野邊。それはよかつた。

少年。之から本當に私はいゝ人間になるつもりです。モズがないてゐますね。

野邊。本當に秋になつたね。

少年。紅葉が奇麗ですね。

野邊。五穀がよく實つてゐる。

少年。本當に平和な景色ですね。

野邊。こんな景色を見てゐると人間程平和なものはないと思ふが、本當はさうぢやないのだから困る。

少年。本當に世の中にはいろ〳〵のことがありますのですね。

野邊。皆にこの平和な氣持がつたへたい。

少年。先生の詩にはその氣持が實によく生てゐますね。

野邊。まだ中々だめだよ。

（野邊魚をつる）

少年。立派な魚ですね。

野邊。魚にとつてはありがたくないだらう。

少年。魚は又小さい蟲を食つて生てゐるのですね。

野邊。まあ、さうだらう。しかしそんなことは考へないでいゝよ。本當に秋になつた。

少年。モッがなくと本當に秋らしくなりますね。
野邊。もうぢき冬がくる。
少年。冬も僕はすきですよ。
野邊。どん／＼年をとるね。
少年。僕は早くおとなになりたいのです。
野邊。僕は又早く老人になりたいよ。六十位いになつたら本當に平和が味はへさうに思ふからね。
少年。先生はまだ平和が味はへないのですか。
野邊。まだ／＼凡惱が去らないよ。
少年。さらないのもいゝのぢやないのですか。
野邊。去る方がなほいゝね。
少年。又先生と毎日お逢ひ出來ますね。
野邊。又同じ單調な生活がつゞく。だがその單調が實にうれしい。日がくれて來た。
少年。もうお歸りですか。
野邊。あゝ。
少年。それなら晩に又お伺ひします。
野邊。それぢや又晩に。
（少年見送る）

――幕――

結婚まで

瀧井孝作

一

信一は、笹島さんを彼女を戀して居る。この心持は段々にそれと自分に分つたが、信一は彼女をはつきりと思ふ工合になつても、この一ツの心持は誰れにも秘めてチツと堪えて居た。彼女に付いて知識は實になかつたが、姓だけで、名も年齢も、信一は未だ知らないのだが……。

其姓は、去年我孫子に居て始めてきゝ覺えた。近くの菅さんで、菅さんに向ひ夫人のてい子さんは「笹島さん〳〵」と曰ひ、笹島さんはある産婆の内に居たが、もう一人立ちで開業のできる人と噂された。彼女は我孫子へは折々たづねてきたが信一は本人に會はなかつた。秋の日だつたか菅さんの京都に移る別れを惜む泊り客できたが、信一は其客の跡へ行つたら、長女のルリ子さんは信一に向ひ「今笹島さんを停車場でお見送りしてきたのよ」といつた。それは我孫子の枯葭などと共に憶ひ出される。

この七月十三日、粟田口で信一は、かざらぬ束髪のましろい手術者の笹島さんが、奥の病室より廊下へたち出た所を見た。夫人の看護にけさ京都にきた。「てい子のかんごは笹島さんなら安心だ」と菅さんのことばやまた産婆とおぼえて居た信一は、年のいつた婦人とのみ思ひこむだが、會ふと未だ若かつた。初對面の信一は改めて紹介はされなかつた。菅さんは「君は我孫子で會つたと思つた」とあとで曰つた。

信一は同く我孫子から移つた蒲生君の宅にをるのだが、この蒲生君たちにも彼女は噂された。赤兒の假死で生れた折のことを

「笹島さんはハル子の兩足をもち上げ逆樣に振つてさ、我孫子の醫者はうろたへて笹島さんに叱られて見え、全く回春堂一人では危なかつたよ……ハル子よ、笹島さんはお前の恩人だよ」といふのだつた。

菅さんの宅で、信一は奥の病室へは行かなかつた。病人を疲らすと思ひ、また衰へたてい子さんに會ふと恐はいやうな心持だつた。で、笹島さんを近くで見たことは、七才のルリ子さんの發病の時からだつた。——

七月の二十日、朝から少し熱のあつたルリ子さんは、病氣にはすぐ弱るたちで大人しく下にゐたが、寢床を出て一人で妹のチヅ子さんの便器に掛つた。それからすぐ奥へきて「青いうんこしたわ、この鑵と同じ色」とロオト硬膏の鑵をもち上げておしへた。熱は高かつた。すぐきた小兒科の醫者は「疫痢」とみた。

蒲生君が電話でよばれて行つた。信一は晩に見舞ひに行くとルリ子さんは座敷の方だつた。菅さんは「手あての手おくれはないと思ふ」と曰つた。腸洗滌と云ふことや、食鹽注射や、ヒマシ油や。ヒマシ油は口に入れるとツキあげて傍の者まであぶらだらけだが、子供は「サイダーと一しよならのむ、あとで澤庵たべる、オルガンを買つて下さればのむ」と色々にいつていやがつた。菅さんはオルガンの音は厭で前にも欲しいといはれて斷つたのだが、かふ約束した。

皆心したらヒマシ油は少し通ほつた。皆んなの顔色は漸明るくなつた。丈は母ご斷洗滌で子供は實に災難にあつたが、笹島さんが器具を手に持上げるのだつた。彼女の白い手術着は油や水だらけだつた。

この晩、入院ときまつて京都病院の自動車が廻された。ルリ子さんは出際に「お母さんにおはせて」と円ひ、菅さんは涓ぐむで、「何だ、お父さんは泣いたりなどして」と自分にいつて、子供を抱きあげ奥の室へと立つて行つた。奥の室にの夫人は大きい蒲布團のうへに仰向きの容態だつた。

菅さんと蒲生君と附添ひで行つた。菅さんは麻布へやる知らせの手紙を信一に代筆させた。

翌日に二人病人ができて信一は毎日手助けに行くのだつた。

ルリ子さんの經過は良好で、子供は、看護婦と亦知つた人と傍に居て欲く、信一は日中居て、夕方蒲生君が代つて、十二時ごろお父さんが泊るのだつた。

菅さんは、宅のこんな狀態についていふいだつた。「この頃ずつと寢不足で、僕は此暑中よく體が持つと思ふ位だ。僕よりまた笹島さんは上ワ手だ。笹島さんはこちらにきて以來一ト晩も安眠をしないが、寢たと思つてもすぐ起きて、ていノ子の氷嚢を一時間目には取替へる。笹島さんは實によくつゞく。それで、倒れるとこまるモ一人たのまうか、と云ふと、看護婦は奥さんの爲にならばよんで頂いてもよろしいが、妾の爲云つて下さるのでしたら澤山です、といふ風だ」と。

今日も笹島さんは、主人の女中を用ふ家政もとつたが、披勞の面持はなかつた。信一が宵の口、座敷で四ツのチツ子

さんの相手になつてやがて子供がうたゝねをしたら、彼女は湯上りの浴衣に手にうちはを持ち出てきて、睡入つた子供を抱き上げ寢室の方へ行つた。信一は、彼女がいつもの手術著でない浴衣がけは初めてだが、浴衣の上から肩や腕はわり合にほつそりしてゐてしなやかに目にうつるのだつた。——

信一はこんな風で、笹島さんに毎日會ふのだつた。互に會ふあひだに信一は「若し好きになつたらイヤそれも面白いだらう」とこんな考へを私かに抱くのだつたが、兩方獨り者でこの事の道德上の用心はいらなかつたが、亦この事に臆病の方ぢやなかつたが、宅の狀態から何か悠くり語り合ふ機會はなかつたし、只毎日顏見合ふだけだつた。氣持はあつたがごく控へ目だつた。

さうしてこんな信一が歸る折には、彼女や女中や皆んな式臺に立つて見送るのだつたが、信一は皆んなに目禮する折殊に笹島さんの目もとには正しく目合せ、信一は何時もそれで別れて居るのだつた。（信一は人を見送つた時に相手の目がふれなくては淋しく思つた經驗を持つたから）亦こんな仕種からも彼女の心持を次第に捉へ得たと思ふ……。

八月に入り、信一は〆切日の近づいた仕事に從つた。七日程ひきこもるのだつた。信一は机に向つて居ると頭の向きは段々栗田口に行きたくなるのだつた。笹島さんに彼女に會ひに。僅か一日二日書齋にひきこもつて過しただけだが、切りに彼女に思ひは移つて仕方がないのだつた。一人居ると露骨にさうだつた。それでこの氣持の眞面目である自分自身に今更心付いておどろいた。

信一は「何であつても心持の芽生えは育てるべきだ」とこんな考へから、自分の戀心を大切に守る氣持だつた。此方の氣持だけで相手のそれは未だ圖ることはできないが、此方の氣持だけだつてもこれは好いなと思つた。

さうして、机から離れ今直ぐにも行きたくなるのだつたが、これぢや仕事の方がダメだと思つてこらへた。仕事は、

――結婚まで――

今仕事やれんと云つても自分は此生活を仕て居るのだからとさういふ言譯は持てたが、仕事は捨てられないのだつた。が、彼女には會ひたかつた。信一は窓の向ふに、日ノ岡の山がさへぎつてたから、

　大比枝や、小比枝の山は、寄りてこそ、寄りてこそ、山は寄らなれや、遠妻晴れと、

」と云ふ東遊の一首を思ひうかべなど仕た。

　さうして七八日目で信一は粟田口へ行つたら、菅さんの宅では夫人の病氣が大分快方に向いたと云はれた。それは一ト月目で他の醫者にみせることとなつた。其産科のA博士はみて「前の醫者のてあてを止めてほしい、病氣をかう加工せずに、病氣を露骨にして見れば病源も分るから、その上で治す方針を立てる」といつた。A博士の態度のはつきりして居ることは氣持よかつたし、病人も得心した。で、さうした。それで前の醫者の注射など斷はつて氷嚢も次第に退けてより發熱もさがり快方に向つたと云ふことだつた。これは大學病院などでも病源がはつきり分らず仕舞に病氣の治る例はある由をあとで聽いた。

「Iさん（初めの醫者）が如何にも人が善いので永くかゝつてゐたが」と菅さんは笑つて云ふのだつた。

　また、ルリ子さんは退院できたが、未だ著物の上から腹部に小さい毛布を捲き著けて、妹達と一しよだつた。子供たちの食事の折、ルリ子さんは皆んなと一樣にたべたがると、情に脆いお父さんは「ルリ子は完全に治つて、笹島さんのおゆるしがでたら、上げる」と笹島さんの助けをかりて、子供に逆ふ役目はそちらに廻はすのだつた。笹島さんはいつも「女丈夫」でやつてゐたから。

晩飯の時、信一や蒲生君や菅さんの從弟のSさんや、皆んな客間から立つて行つて食卓につくと、菅さんは「一夏すき焼は暑いけれど手がないからね」といふのだつた。笹島さんがコップの載つた盆か何か持つてきた。信一はこの時七八日目で顔見合せたが、彼女の面てに一寸複雜な表情があると思つた。彼女はすぐにはづしたから、信一も何氣なく食事をした。

背歩きに出て、菅さんは四條の繻店で「三十位の婦人の半幅の單帶」といつて品物を見た。二タ色あつて「蒲生君、笹島さんにはどれがよいかね」ときいて、蒲生君は黒地に銀のウロコの模様をえらむだ。信一は「ウロコは下品だ、それよりは」と、水色の地に霞の模様のある別の一ト色を指さした。信一は笹島さんの物なのでさう口だしたのだつた。それでそれに定められたが、また信一は「三十位の婦人」とき丶、年齢は三十すぎかと思つた。自分は三十才だが、年齢は年上でもよいなど思つた。

信一は段々に分つた自分の心持を友だちに語りたかつたが、語ればすぐに彼女が引合に廻され、つまり彼女に迷惑だつたらと云ふ場合が思ひやられた。未だ感情だけの場合で、事務とまで至らないから、他人にたのむなら云ふ風には未だ思ひ付かぬのだつた。自分で成遂げるべき事だと云ふ風に思つた。此事が自分だけで濟む場合は、後でこんなことがあつたと語ればよいと思つた。人に語るには今一倍確めて彼女に迷惑でないと定つた時、と思つた。未だ實に成らないことだと思つた。

翌日一日笹島さんは彼の涼しさうな幅せまの單帶しめてゐたが、それは一日だけでまた普段のめりんすの帶と更へた。儉約屋だと思はれた。

こんな風に信一は一人角力をとつて居たが、またこれが一人角力ではないと思はれる折が、折々あつた。

客の入浴の場合に女中が湯加減を見て桶へ湯をとりなどしたが、信一は體を拭いてあがるとえもん棹の着物をはづし

で信一へきせかけられ、いつもきまつて笹島さんの手でされ、信一は彼女が特別に自分に仕向ける仕種だと思つた。こんな仕種から彼女が心持を傳へると思つた。

信一のかいた短篇集二冊と長い小說のある雜誌と、奧の室に見えた。笹島さんはそれらをひま〱によんだ。信一は大方自分の材料をかいた小說だから、笹島さんは自分に付いての知識は凡そ得ると思つた。始めの方にも述べた如く、信一は彼女に付いて知識は實になかつたが、知識は段々に知りたく聽きたいのぞみが切りに起きた。で、さう云ふ自分と彼女と思ひ合せなど仕た。

二

こんな風に八月の日が經ち、そこへ、九月一日の東京の震災が、皆んなに傳つた。

一日の午、信一は疊の上で新聞をよんで居たら、不圖よみ難くなり「オヤ俺の頭どうかなつたぞ」と云つたが、すぐ次ぎには別狀がなかつた。大地震の餘波をあの折うけたとあとで知つた。

午後、信一は粟田口の郵便局へ爲替の用で行つて「東京方面の電報は受けたらあかんで、故障があるのどす」などの局員の會話をきいた。ぶら〱と步く道で、紙片れに東海道の汽車不通と出された地震の號外をみた。のん氣から信一は左程のことにも思はなかつたが、翌日の朝になつて、宵さんから蒲生君へ電話で、東京の惨害が大きいらしいから、一しよに東京へ行きたいと云ふのだつた。蒲生君は本鄉に親たちがあつた。蒲生君はまづ粟田口にいつた。信一は異常時に際會してはづむだ氣分であとから行つた。

菅さんは、昨日の朝の特急で歸京された麻布のお父さんが途中からの行先が案じられ、また女ばかりの麻布の宅のた
も氣になつた。

笹島さんは、芝の巴町の笹原と云ふ產婆の内から京都へきたが、その安否をきゝたかつた。また「もし八王子の方をお通りになれば八王子の様子をおたづね下さいますやうに」と菅さんに頼むだ。彼女は八王子に親たちがあつた。

菅さんは廻れたら八王子に廻るといひ、笹島さんから、「宅は郡役所の隣の植木屋ですけれど」と云ふ其所ガキをきいて手帖にとめた。それから「君の方は」と信一に向いた。信一は差當つて安否を知りたい所はなかつたからさういふと、「左う差當つてないね」と菅さんは笑つて、「では留守をたのむ」と曰つた。

ていさんは病床からやうやく起てる位で、見送りに起つてきて、「あぶないところへはお近寄りになつてはいやあよ、ずゐ分とお氣を、お付け遊ばせよ、ほんとにいやあよ」と、今年前厄と云ふ良人の年から、心配で仕方がなかつた。菅さんは「大丈夫々々々」と繰返した。

信一は停車場へ送つて行つた。京都驛は平日のとほりだが、案内所には東京附近の線路の面が、汽車不通の所に朱をつけて貼り出された。菅さんは信越線廻はりで川口町へ向ふのだつた。

未だ時間があつたから驛の階上の西洋料理店で食事した。蒲生君が食料など買ひあつめて、編むだショヒゴをふくらませて入つて來た。信一はけさ別れたなりだつたが、いま同じ料理をたべる蒲生君に向ひ、「東京へついたら泣き出さんやうに、もう燒野原になつてるらしいからな」といふのだつた。東京生れの友だちが焦土になつた町を眺める心持は常談を曰ひながら思ひやられた。菅さんは、昨日見た博物館の陳列替の話して「こんども又、相阿彌の繪が澤山出たよ中中好いね、未だ四時前で開いてるから、君は歸りに寄るといゝ」といつた。信一は戻りには博物館へ立ち寄りたかつ

た。この度京都にきて以来、繪は好きで毎月掛け替へのたびに各々見て廻つたが、先月は相阿彌の大仙院の山水だつたと云ふ襖繪の大幅にひきこまれ、之は皆んなで感服したのだつた。それで信一は二人を見送つてから、博物館の銖の中に入いり、今日の東京の震災の出來事などが思ひ合されて何百年も前の物がかく無事に傳はつたことを有難く思ひ、また自分を仕合せ者と思ひ、夕方粟田口に戻るのだつた。

粟田口で、信一は「東京の新聞がこないから、大阪の朝日毎日兩方入れるやうにきめましよう」といひ、近所の新聞販賣店へ自分で出かけた。また庸子さん（蒲生君の夫人）が、蒲生君は東京へ行つたし今日は一人ポツとして居れんからと見舞かたぐ\子供をつれてやつてきて居た。晩になつて共に山科へ歸るのだつた。

信一はかへり支度の庸子さんを待ち、門内の石だゝみに立つと育さんの留守と云ふことが何だか頭につくのだつた。篠島さんが蒲生君の子供を抱き上げ見送りに出た。信一は「さ、いらつしやい」と子供を受取る折に、彼女の手に手はふれ合ひ、兩方共詞いはずに暫時、小さい子供の腰のあたりで互の手は握りかはされた。信一は彼女と心持はほゞ傳はりわかり合つて居たが、この晩二人だけで佇むとすぐこんなに打明け合ふのだつた。格子戸から外に出て彼女は子供を抱き小さい脊のあたりで互の手は握りかはされ、兩方共子供に何か日ひ〳〵やゝ歩くのだつた。門燈の下より出てくる姙娠の目につく庸子さんを立ちどまつて待ち、篠島さんは停留所まで見送るといひ、やはり子供を抱きながらきた。信一は電車がきたから、おもたい子供を受取るのだつた。

翌日、信一は机に向ひ彼女へやる手紙をかきはじめた。けさてい子さんから、育さんの留守中心細いから庸子さんや

ハル子ちやんや皆んな一しよに泊りにきてくれと、左うたのまれた。また笹島さんの芝の巴町の宅は燒けたらしいと云はれた。で、信一は今笹島さんを何か慰めねばならぬと思つた。未だ語り合ふ折はないから手紙でと思つた。信一は机に向ひ、昨夜打明けた時何も云はなかつたから此方の心持は述べた方がよいと思ひ、併し手紙は他愛のないラヴレターでは、しつかり者の彼女に笑はれるぞと思ひ〳〵手紙をかくのだつた。――

私はいつも顏を合せ顏みるのをたのしみにしてゐました。互の心持は前から互に感じてゐたと思ひます。心持は互にもはや知合つて居るので今澤山は云ひませぬ。

東京の方が大變な場合で、遠く隔て故郷の安否の氣遣はれるあなたの心持を察します、が、こちらに居て命拾ひした事と又私の心持があなたのものになつた事を幸福と思つて下さい、私は心からあなたの力になります。

皆んなの難儀を聞いて安閑として居られませぬ、私は折を見て上京したい考へで居ります、私は多分新聞とか雜誌とかの仕事を手傳ふ事になるでせう、が、あなたがこちらに居られる間私もゐるでせう、あなたが東京へ行かれる折、私も一しよに行くと思ひます、あなたもこの上特別な事の起きない限り今急には行かないでせう、行かれるとこちらの皆んなは困るから、　　けふ

――日附はけふとかき宛名も何も拔きで、手渡しのできるやうに小さい結び文に造つた。信一は誰れにも秘めてヂツと堪へて思ひの重荷に壓されてならないのだつたが、自分のこの心持から推して笹島さんが中々辛棒强いが一人つらいだらうと思ひやられた。信一は、皆さんや蒲生君が戻れば漸と話が出來ると思ひこの事は皆んなに打明けたら、らくになれると思ふのだつた。一人机の前でこの事を思ふのだつた。

信一は晩にハル子ちやんを手で背中へ負ひ、庸子さんは風呂敷包をさげて、山科から出かけた。

さうして信一は手紙やる折を待つのだつたが、やつと寝る前に奥の室の蚊帳と蚊帳とのせまい所で、彼女の方から「手紙」と私いて手に持たせたら、何か分らないらしかつたが手の中には受取つた。信一はヂカに心持を傳へたかつたから、肩を抱きメめ頬のあたりに唇がブツかると彼女はすぐドギマギと脱れ出て行くのだつた。信一は頬笑たい氣持を押包んで、表座敷の方に戻つて、夫人や淅子さんやの話にしばらく混るのだつた。

それから次の室の白い蚊帳の傍に電氣スタンドをともして一人、信一は寢床で本をよむのだつた。信一の方の白い蚊帳は明るくて隣室の蚊帳から一ト見えだと思はれたが、別に恥かしがる所はなかつた。向ふの蚊帳には夫人と上の子たち二人と笹島さんとがやすむだ。

信一は本をよみ本から頭は外れて、彼女のことを切りに思ふのだつた。互に打明けた上に手紙などやり、共にまた消り合せた。今晩自分は落付かぬが之が本當だが、今晩彼女の方も眠らないだろ、とこんなに思ふのだつた。信一は、本を伏せて電氣スタンドを消したら、茶の間の方の明りから座敷の蚊帳が透いて、一番こちらがはにやすむだ、笹島さんがすぐ傍の所に見え、思つたより近くで信一はなほ眠れなかつた。で、再び明りをつけ本を開いた。

夜中に子供がオシツコか何かに起きたら笹島さんは附添つて行つて、戻りに向ふの電氣を消すのだつた。暫時して信一も明りを消したが中々眠れなかつた。信一はたゝみへ片手を伸ばすと彼女の手にブツかつた。手さぐりに手を握つたら、やはり眠れなかつた樣子で握り返した。眞ッ暗で分らない安心からユックリさうされた。心持をこめて手を握りしめてやつた。また互に代り番こに締め合つた。二人ともずつと無言だが、實によく氣持が傳はつた。信一は手を解き、彼女の手を押しやつて自分も元へ引き込め、やつと落付いて枕につくのだつた。

次の晩も殆ど同じ風だつた。笹島さんは一番あと蚊帳にはいるのだつたが、寢しなに、茶の間の方に一ツ點いた電氣を立つていつて消すのだつた。信一には彼女の下心が分るのだつた。暫時して信一も電氣スタンドの明りを消すのだつた。眞ツ暗で、やがて皆んなの寢息をうかゞふ樣にして、互に手を握り締め合つた。昨夜は滿足だつたが今晩は單にこれだけでは物足りなかつた。心持は充分知つたから、ヂカな氣持からは手と手位だけでは足りなかつた。モツト何かと云ふ慾望が出てくるのだつた。信一はたゝみの上へ乘り出して、

。　、　、　、　。　。　、

のだつた。

信一は、彼女のあまりにたやすくかうなつたことが、また色々にとれるのだつた。キツスも上手だと思ひ、或ひは前に既に經驗があるのぢやないかなど思ひ、三十近い年齢であり人づき合の多い彼女の生活から見て邪推深く云へば、今日までどんな場合もがあり得たどらうと思はれた。(冒瀆的な思ひ廻はしだが)信一はそれにしろ彼女を少しも咎める氣持は持たなかつた。自分が誘惑者の一人だからさう云へば自分が非難に價ひしたし、亦何を比べたつて自分の現在の滿足の方が大きいから、以前のそんな事はなんでもないのだつた。信一は假令さうだつたにしろ有勝の事だし情愛深さも好いなど思つた。かく簡單に片付け、あつさり片付けて差支へないと腹をきめた。自分はさんぐ\勝手を仕てきたし、處女は今更望めない事と思ひこむで居たから。信一は彼女をさうとると共に肉情がつのるのだつた。否、肉情が先に立つてこんな風に思ひ廻はした。

また次の晩は、笹島さんが例の一ツの電氣を消しかけたら、夫人は蚊帳から止めて「それは消さずにおいといて、又夜中に目がさめて明りがないとそれは厭やなの」といつてとめた。――てい子さんは省さんの立つた晩から早や心配で又ルリ子さんは「父さん歸つて〱」と呼んだが、それは去年我孫子で隣家の主人が頓死した時となりの子供が雨の井戸端に出て「父さん歸つて〱」と迷信からよぶ聲がきこえ、ルリ子さんは不圖眞似たのだが、てい子さんはこんな事からも尙心細くなつて山科から皆んなに泊りにきてもらつた。新聞には毎日日ましに震災の慘害が大きく出て、けふは被服廠の燒跡と云ふ寫眞の號外に、一ト目で目を反らしたが全くおびやかされた。てい子さんは見舞に行つた良人の上などが心配で〱、ヒドイ神經衰弱に罹りさうだつた。

夫人にとめられて、笹島さんは明りをつけて、寢るのだつた。

信一は前の晩は彼女が此方の室にきたらよいなど思ひ流石にさうはされなかつたが、今晩は電氣がついて尙六ケしいのだつた。自分では毎晩人の寢息をうかゞふ様な仕種に腹を立てたり心持は眞直ぐだと思つたり仕たが、やはり人目は憚かられた。人目があつて今晩駄目と分ると、信一は却つて漸と落付くのだつた。笹島さんは病床の夫人に惡い〱と思ひ〱きがねしていままでがせい一杯だつたから、で、あやまつ事は仕出來さなかつた。

七日の晝、大阪から電話がかゝつて、瀬生君の聲で「省さんと共に汽船で大阪についたがいま飯をたべてすぐ戻る、東京の知合は總べて無事」と云ふ電話だつた。留守宅では思つたより早い戻りで、夫人はじめ皆んな悦び合つた。而して二人は戻つた。

晉さんは地震後の　人騒ぎが關西にうつゝてないかと案じて急いで戻つたと曰つた。東京の親たち、親戚、友だち、皆んな無事で、吾々の知合は各々不思議な位に無事だと曰つた。下町は見渡すかぎり燒野原だつたと云ふ話から、今日大阪につき北濱の灘萬食堂の上から市街の屋根々々を見たら、「これらの建物が皆燃え草だ」と左う思つたと曰ふのだつた。

晉さんは臀に根太が出來て、往きの汽車では腰かけると痛くて復へりの汽船では臥られていくらかましだつたと曰つて、吸出膏薬など貼つた。蒲生君も湯上りの浴衣がけでくつろいだ。

晩に信一がハル子ちやんを手で脊中へ負ひ、蒲生君や雨子さんとともに、山科へ戻るのだつた。

九日のあさ信一へ、晉さんから電話で「君はMと一しよに今日東京へ行かないか」といつた。信一は前の日豫て話があつたから、承知の返事をした。

粟田口に行くと、Mさんが居た。――Mさんは日向の村で震災のことをきいて、直ぐ立つて五日に京都へきたが、五日から震災地へ向ふ者は震災地に住所或は親族がある事の地方長官の證明書がいると云ふ觸れが出て、Mさんは東京のお母さんを眞先に案じたが、京都で證明書がとれなくて留められた。八日に漸く大阪でとれた。――信一にMさんは向いて「君が共に行つてくれると心強い、君は書付けが今日とれなかつたら僕は待つてもいゝ、東京の方は晉がお母さんに合つてきたから安心だし、急がなくてもよい」と曰つた。

晉さんは、朝日毎日二つの新聞を見較べながら「これは朝日の方落付いてゐていゝね」といつた。朝日は第一面は普段の通りで中の方に震災記事を載せ、毎日は第一面が震災記事で埋つて刺激が強かつた。晉さんは震災地を見てきた氣持から成るべく早く落付きをのぞむだ。

信一はそれから、區役所、警察署、府廳などと歩き廻つて漸く書付けがとれた。東京に住所も親族もなかつたけれど區役所の役人のSさんの口きゝで證明書がとれた。夕方戻つたら菅さんは「それはよかつた、ぢやあ今晩立つといい」といつて、北陸線廻りで行く汽車の時間をしらべ、九時の富山行に定めた。

支度にと一遍山科にもどる信一に、夫人は「では夕御飯を先に召上がれ」と曰ひ、また「笹島さんもごいつしよにすましになつたらいゝわ」と、夫人から曰はれて茶の間で二人は向ひ合つてすませた。二人で食事は初めてだつた。

信一は山科の宅では旅支度をまとめながら、色々の思ひから、また彼女にやる手紙をいそいで次の様に書くのだつた。これは二週目にやる手紙だが。

私は今上京してもすぐ戻ります、それまであなたは待つてゐて下さい、あなたの上京の時また私は送つて行つてあげます、あなたはあなたの心持をてい子さんに話したらどう、もし私の所へお嫁にきてもよいのでしたら、そしてこれが諒解してもらへたらこちらで二人の行動も自由でせう、その方がよいと思ひますが、あなたの諾否は私に早くしらせて下さい、首をタテにうなづくか横にふるかで分ります、

九日

信一はこれだけかき例の結び文に造り、持ち行き手渡した。笹島さんはすぐかくれて讀むだが、出てきても普段の面持だつた。立ち際に、彼女は巴町の先生——赤坂の避難先の宅で五日に菅さんが會つたと云ふ元氣な老婆——へやる手紙を托した。信一は受取つてポケツトに入れた。

菅さん、浙生君二人に停車場へ送られ、Mさんと信一は汽車に乘込むだ。あとで信一は托された名刺や手紙などを改めて内ポケツトにしまふ折に手紙の彼女の名をみるのだつた。名前は玆で初めて知るのだつたが、笹島レン、と簡明に書かれてあつた……レン、蓮子と呼ぶわけかと思つた。………

三

十五日の晩、信一は山科の停車場に下りた。御陵まで一ト停留所乘馴れた電車で行つた。電車から離れたら夜寒ムの澄切つた星空がふり仰がれた。自分の白い麻の服に冷え／＼された。初秋を泌々覺えた。田中の向ふの明りのついた自分たちの二階をながめ、漸く戻つたと思ふのだつた。

宅につくと、蒲生君が二階から下りて來て、庸子さんは「まあ、お早かつたですわね」と曰つた。信一は風呂に入りたかつたが今日はたゝないと云はれ、風呂は粟田口にいつてはいることゝした。勝手の方で、庸子さんの國元からきた女中がひきあはされニコ／＼と溫和な女だつた。信一は汚れた服を脫いで、香ばしい珈琲が出て暫時話した。

信一は蒲生君と一しよに粟田口へいつた。宵さんはT君（東京からきた泊り客）と出かけてゐたが、病氣全快の夫人は茶の間に出て、次に笹島さんが奧の方から出てきた。七日目だつた。

「お風呂は妾いまいたゞいて、跡ですけれど」と笹島さんはいつて、信一は立つといつものやうに湯殿にきたが、二人はすぐに手を握り合つた。

無性髯ののびた信一は湯上りでさつぱりした。東京に三晩泊り、かへりも北陸線にのりこれが一等近道だつたと曰つた。笹島さんには巴町の先生に會つてきたと告げた。手紙の返事をあづかつていかうといふとお婆さんは郵便が行くやうになつたからあとで郵便で出します／＼といひ、自分は再びいふと同じ返事だつたが氣づよいお婆さんと思はれた。八王子の方は、中央線が開通したから歸途それとなく彼女の實家を見たい考へだつたが十三日の雨で又トンネルが崩れ

て、得う立寄らずだつた。迂り路して立寄つてきたらよかつたと今思ふのだつたが……。

次ぎの日の晩、笹島さんが門口に出てひとり佇むだから、信一は續いて外に出で、何か話懸ける振りで歩き出したら、彼女はつき從つた。二人限で歩くことが初めてだつた。廣い石だゝみの小上りになつた坂路から智恩院の方角に向つた。

「僕らのこと、てい子さんにつげた」

「いゝえ、まだですわ」

「なぜ」

「でも、あたし……」

粟田御所の楠ノ木の大きい枝を見上げ、二人肩と肩とくつ著つゝ手は交しつゝ、歩いていつた。

「雜誌の僕の長い小說讀むだ」

「よみましたわ」

「あれは、大體自分のことをかいたんで、僕は以前にはあんなことがあつた。が、かまはない」

「えゝ、事實と思ひましたわ。松子さんは、松子さんてかいてありましたねえ、もう亡くなつたんですから。妾それは別に、何も氣に懸けませんわ」

「それならよいけれど」

「…………」

「年は幾つ」

「あなたの二ツ下ですわ」

「左う、僕は同い年位かと思つてゐたが、左うか」

　信一は年齢を聴いて不圖憶ふのだつた……去年の二月亡くなつたあれはやはり二ツ年下だつたが、又名も（小説には松子としたが本名はれんと云ひ）同名だから、偶然の符合だが暫時不思議な心持にされた。

「お前さんの名はこのあひだ東京へ屆けた手紙の裏を見たから、初めて分つたが、僕の亡くなつた人もれんと云つたが、同名だ。いま又年齢が同い年で、おかしいな」

「さうを、松子さんはれん子さんと仰有つたの。妾と名もお年もおンなじですわね。ヘンですわねえ」

　と彼女が同感を持つた。暫時口を噤むだ。信一は彼女に付いてもつと知識を得たかつたから次ぎに聴いた。

「家にはお父さんやお母さんや、兄弟たちはある」

「えゝ、皆んな達者で。兩親と兄さんと弟が二人ですわ」

「僕は親父と妹と三人だが、兄弟たちが多いと心丈夫だらうな。……それで僕の所にくる。いま居る巴町の笹原さんはどう云ふ風になつて居るの」

「えゝ、笹原さんなら、あすこ何時出てもよいのですわ」

「左う」

「結婚はあたし初めてゞすから、あたしのうちには、あなたも初めてと云つて下さるでしよ、ねえ」

　と、彼女は取縋る風に寄添ひいふのだつた。智恩院の黒門の前から右手の寺中の境内の方へと向つた。廣い路傍の片方の木立に行きこゝではユツクリ接吻できた。再び歩きだして話した。

「結婚のこと若しお父さんが聴きいれなかつた場合。それでも僕の所にくる」

「えゝ、來ますわ」

「親たちをすてゝくる」

彼女は俯向勝に足をはこむだが、これには直ぐに返事されない風に默つたが、漸くにふかく點頭いて「まゐりますわ」といつた。

信一は自分を立貫く心持だつたからかく手づよく念をおしたが、之は彼女に背負はせるには荷が勝つかも知れないけれど仕方がなかつた。深く點頭いたのを見ていぢらしく思つた。こゝの古門と云ふ門のわりに大きい闘から街に出で、白川に沿ひ片側町をさかのぼり、宅の方の小路にはいらずに徜あるいていつた。「妾は昨晩湯殿で妙に心細く哀しくなりましてボロ〳〵泪が出て仕方がなかつたの。今日はお歸りになるかと待つても見えないしそれで心細かつたのでしようかしら。しますとお戻りになつた聲がしたのでまあよかつたと思ひましたわ」と、彼女は頬笑みこんなに曰つた。また一昨日は南禪寺から銀閣寺などへ青さんに案内され倬で見物にいつた話をした。話しつゝ疎水端、廣道など歩き、粟田神社の前から宅の方に向ひ、近所の染物工場の窓の下で再び接吻を交してこゝで別れ、彼女は介を見せて門口へいそいだ。

かく話が進むだから信一は、今日は青さんや漸生君たちに告げたいと思つた。青さんは毎日客が一しよだつた。どうも云ひ出す機會が見つからなんだ。と夫人に見とほされ、てい子さんの方から先に曰はれるのだつた。

この日信一は夏の麥稈も冠れないので鳥打帽がほしくてこんな買物は漸生君が細かいので共に丸善に行き、「この會社

のは質實でよい」と蒲生君にいはれてエーガーといふ英國のマークのあるやつを買つて被ぶり、それから新京極など歩いて晩に粟田口に立寄るのだつた。

背さんは見えなかつたが夫人は座敷に出て二人に會つた。笹島さんが、出て來ないので夫人は「こちらにいらつしやらない、ねえい丶ことよ」と招き、彼女は茶の間から振向き、容易に出て來なんだ。暫時居て二人は立ち、玄關に立つた。夫人は「妾おたづね致したい事があるの一寸」と信一に近づき、すぐに導きつ丶座敷のまた奥の室に行つた。簞笥の傍に夫人は立つた。信一は自分たちの事と樣子から分つた。先夜泊つた晩の事など多分さとられたと思ひ廻したり、亦旅行に立つ時彼女と二人食事などさせられた事が夫人の心蘇しと取れたから。

「先程妾の方から笹島さんにおたづね致したのよ。妾承はりましたけれど……、このことはねえ、御自身で背に仰有つたらどうを。背にさう仰有つて頂けば、妾それですむことに思ひますわ。なぜ仰有らないの」

「僕、いはうと思つて居たんですが、皆んなの前ではいひ難いし」

「え丶、ねえ」

「このあひだ中から話さねば悪いのですが。急に東京に行き、戻つても背さんはいつもお客さんが一しよだし、話の機會が見つからなんだもので」

「え丶そうですわ。御自身で背に仰有つてごらん遊ばせよね、それできつとお宜しいことよ」

「え丶僕から話ます」

立話で、兩方笑を湛へ、これで、信一は玄關に戻つた。蒲生君は帽を被ぶり立つて居た。買立ての帽を被つた信一は、「御新調で」と夫人にいはれた。

信一は、蒲生君とはしぢう機會を持ち、最初に菅さんにいはねばならぬと云ふ心持から、蒲生君には惡かつたが未だ得う持出さないのだつた。事柄の關係上、菅さんに第一番に話したかつた。信一にこんな堅くるしさがあつた。

次の日それで出向いたら丁度、菅さん一人だつた。差向ひに坐つたが信一は、太い庭の松など眺め、未だ掀ぢ〳〵して居た。

「うん、出やう、今日は中々いゝ天氣だ」

「少しあるきませうか」

信一と菅さんと二人歩くと二人共に足早やになるくせがあつた。近所のいつもの廣い石壘の坂路を上つて眞直ぐに向いた。

「このあひだ中から話したかつたけれど、いつもお客さんがあつて、工合惡かつたりしました」

「うん、うん」

「僕、筱島さんが好きになつて……。これはずつと前からですが、ずつと前に自分の氣持に心づきはつきり心持は極つたんですが、皆んなに、こちらの氣持丈け困つて仕舞ふことはどうかしらと思つて、默つて居たんです。今月の初めになつて、兩方同じだつたことが知れたんです」

「うん、うん」

「それで一昨日の晩に、このあたり二人して歩き廻つたりしたわけです。段々に話合つたら、筱島さんは僕の所にくるようなことを云つた次第です」

信一は急勝に要點を思ひ、細々得う話さずに、足りない氣もされ大體これだけだと思つたりした。菅さんは、聽きと

つた。

「うん、てい子は、何か二人がそんな様子らしいといつて居たやうだ。てい子は昨日の晝笹島さんにたづねたら、向ふも白狀したさうだよ……二人がそうなつたら、てい子の此夏の理由の分らぬ病氣に漸と意味が出てくるわけだね」

と、輕く笑つて青さんは、さらに聽き直した。

「結婚の話まで運んだのか」

「えゝさう」

「そりやあ、いいだらう、贊成だ。……君と笹島さんなら、鬼に金棒だらう」

「え、ありがとう」

「僕は、君は未だ一人身もよからうと思つて居たが、未だ三十だから急がないでもね」

と、信一に思つて居た事を告げ、また

「笹島さんはあゝ云つた勝氣だから、見合などのお嫁入には承諾できない側で、今日まで獨身で居たやうだ。當人にめづらしく結婚する心持が起きたと云ふなら、これは當人にとつていゝ事だと思ふね。こんな機會が來なかつたら結婚できない人だらうよ。……左うでなかつたら、先生の笹原婆さん（ずつと獨身で來た）がまたお手本だね」

と青さんは、笹島さんが段々婚期が過ぎて行くからかく見て氣にかけて居たのだつた。

信一は、話の結果快活にされた。往來から、小高い廣場の眞葛ヶ原に入り眞向きに歩きつゝ、信一は先日青さんの一ツの意見に無闇と反對した、あれを謝りたい氣持で序でに持出した。

「先日、三十日の晩三條大橋から歩いて、戀愛結婚より見合結婚の方よい樣に云はれた折、僕は無闇と反對したんです

が、あれは笹島さんに心持があつて、今日の下心があつたからです。亦僕の下心があの晩さとられ意見されるのかと思つたんです」

眞葛ヶ原がつきて、突當りの崖は人の踏禿げた路跡を附けてゐた。「坡を登らうか」と背さんは人の踏禿げの小徑に近づいて、登つて行き、直ぐ後ろに信一は從つた。上に登ると漸平らで、二人は、高く持上げられた氣持がされた。高臺寺の屋根が下に見えた。椎松杉其他の蘚著た木立の中に入りずつと足許は平らになつた。

「あの晩は君にそんな事があると氣付かなんだ。××君などの場合を考へたからだ。××君が東京でカフエーなどの若い女を選ぶんだつたら……さう云ふ場合は自分一人の狹い範圍で選ぶわけだが、それより見合などの方、多人數の助力があるから選ぶ範圍が廣いと思つた。結婚は結局一人を選び出すのだ。戀愛と結婚とは別々だと思つた。あの晩はさう話したやうだ」

信一は首肯いて、また友達の××君を思ひ、すぐに自分の現在に頭は還つた。背さんは、夫婦生活について心付いた事を信一に振向いていつた。

「僕の祖母は中々氣性の強いたちだつたが、家庭の事は一切自分で取仕切つてやつて居て、家事以外祖父のやる方面には、又決して一切口だし仕ない方針だつた。それが極めて工合よくいつた。君の所もさういくといゝと思ふね。笹島さんは中々勝氣だから」

信一は聽いて背さんの作に描かれたお祖母さんを思ひ出し前から親し味を抱いて居たが今、お祖母さんを例に持出されて有難いと思つた。自分たちもさう行きたいと思つた。

森の中から出て、ずつと下り坂路で足許は下つて居た。畦路に日が射した。稚兒ヶ淵と云ふ瀦水池一ツの傍通つた。

信一は、水引の花を一ト筋摘取つた。信一は花など持ち今日はふさはしい氣持がされ、却つて氣になり、暫時して捨てた。亦路傍に咲いてゐたから手翫びに摘取つた。

「君の長篇は未だ完成しなかつたね。續きをかくといゝが、笹島さんから文句が出ると工合が悪いから、最初に云つて納得さすんだね」

　信一は以前の女のことをかいたラヴストリーのことをいはれた。

「僕の小説は大方讀んだやうです。あれは事實だと曰つたら、亡くなつた女と云ふ點で納得したんです。小説を作る場合も何も曰はないでしよう」

「うん、それならいゝがね。……これから笹島さんは君が浮氣をしたらきつとこはいだらうよ。浮氣、できないね」

　二人共笑つた。すぐ路は廣い往來に合はさつた。「花山洞」のトンネルを出た往來だつた。駄菓子置いた茶店、牛車、行商人など、急に鄙びた風物だつた。往來から手の下には山科の村里が點々と指さゝれた。

「すつかり好い秋だね。どこもかしこも。實に好い氣持だ」

「こゝは田舍びて居ますな」

「こゝから竹ケ鼻は僅かだらう。竹ケ鼻に別荘の貸家があるさうだ。粟田口の宅は裏の部屋が冬寒い、子供のためによくないからね。きたついでにこゝから、貸家に廻つて見ないか」

「行つて見ましよう」

　粟田口から殆ど一ト息にやつてきたが、すぐ亦歩き出した。

四

信一は、「僕は笹島さんと、一しよになるかも知れぬ」と、蒲生君と食卓に向合つて曰つた。蒲子さんは一寸何か曰ひ好意をみせた。蒲生君夫婦は兩方共好きで一しよになつたから、かくいふ詞から凡そ察した。信一は他に別に曰はなかつたが次ぎに「さうなつて、當分此內へ一つになつても、いゝ」と、豫め諾否を聽きたくて持出した。「笹島さんなら私共遠慮がいりませんし、ねえ」と蒲子さんが良人に向いた。何時も口數の少ない男の蒲生君は只首肯いた。信一はしちう勝手我儘を曰つて居たからかく事務的に曰つて受容れられた。

皆んなに話して、信一は肩の荷がとれた。亦皆んなから何氣なく見られた。之までとちがつて二人一しよの待遇される風になつたと信一は思つた。笹島さんは季節にいる衣類など夫人に相談して拵へた――所持品の震災で燒けたことが笹原さんからの手紙で知れ、持物は少しづゝ更に拵へるのだ――。東京行の汽車も平常に復つたが、彼女が戻るなど信一には考へ得られなんだ。

女中に留守居させて散歩旁々粟田口に行つた。「彼岸の好い天氣だ。皆んな一しよに出よう」と菅さんはいつた。夫人は七月の發病以來今日初めて戶外を見ると云はれた。疲れる用心から下の子供を抱き俥の上で緩々行くのだつた。圓山の日曜の人出の中を通り、病後のやつれの目に立つ夫人は、歩きたい風で、それから代つて子供三人が相乘で積込れた。菅さんが連立つてくるといつでも高臺寺の甘酒屋で休む例で、甘酒屋の「蘭の湯」を今日は笹島さんがめづらしさうに呑んでみた。電車道に出で、赤鳥居の立並むだ狹い路地の中に子供や女連が見に入つた。ほの明い路地の內に彼女の顏がくつきりと浮出た。四條通のショーウインドウ、ショーウインドウに皆んな近寄り〳〵、或めりんす店で、女連

は買物の見立に悠くりとかゝつた。玆からてい子さんは俥で一ト足先にと戻つた。他の者は新京極、三條通を歩いて戻るのだつた。或漆器店から笹島さんは出て、二尺差と一尺差と手に持つた。信一は彼女に「晩に山科にこない」云え、

「まいりますわ」と曰つた。

粟田口で晩飯と雜談で九時頃になつたが信一等の立ちかけた時、彼女は夫人に向いて

「今晩あちらで何かあるといはれましたから」

と、出かけたいやうに曰つた。信一は先程から一しよに行きたかつたが

「今晩は遲いから」

と傍でいつた。音さんと夫人から

「行くといゝだらう」

「若し、遲くなるやうでしたら、お泊りになつてもお宜しいでしよ、ねえ」

と左ういはれて、一しよに出かけるのだつた。

宅に戻つた。浦生君夫婦は下の部屋にはいつた。二人は二階の座敷の卓に差向ひに坐つた。ゆき（女中）が紅茶の道具と熱い湯を持ち運んだ。卓の上に紅茶と菓子と置かれ、互に別段語り合ふ程ではなかつた。——彼女は二三日前子供たちと玆へ初めて遊びにきてあたりの景色に見とれ、昨日（信一が音さんに話した次の日）は大津石山見物にいつたと云ひ、音さんは往きの電車の窓から「未だ寢てゐるね」といつて二階の吊つた蚊張が見えた等、いろ〳〵話の種があつたーー今晩は只顏眺め合つて居る、工合だつた。

「泊つたらどう」

「でも、妾……」

「かまはないと思ふが、皆んなに話したんだし。これでいゝのちやあ、ないかな」

「でも、今晩はあたし、いけないのですもの。ねえ、今晩はかへつた方がよろしいの」

此詞から體の方の故障が聽きとれた。

「では。送つてあげよう」

電車道に出る小徑で、信一はいまは宜い様に思ひ

ときいた。彼女は深く點頭いた。

「これまで大切に守つて居た」

「左う。處女」

「えゝ、それはもう」

「初めてか。有難う〳〵。これまで左うと信じられないで、處女でないたつてよいと思つた位だ」

「どうして」

「いや僕は、年頃以上の女に處女なんてごくまれだ位に思つた。無禮だが御免なさい。僕は近づいた女が黑人だつたから、つまり經驗が未だなかつたので自分の物知らずから無禮な見方をしたが……」

信一は之までの女性觀が改まる思ひがされた。偏つた見方だつたが、直つた。結婚前の婦人の大部分はやはり處女だと思つた。また世間の婦人に抱く疑惑が漸とれた。

「あたしは大丈夫よ」

「有難う。禮を云ひたい、禮を云ひたい。大切なものを持つてゐるんだなあ貨物を。僕は仕合せ者だ」
「え、悦んで頂いていゝの」
そして歩きたくて歩くのだつた。明るい電車は傍通つて過ぎた。月夜の日ノ岡の峠路を上つて下るのだつた。彼女はセルの著物の肩や袖の上を手で撫で氣にした。折々氣にした。肩に夜露を感じるか、冷え〳〵してきたのだらう。粟田口に行きついたら貯鎖つて居た。門叩いたら、女中が出て開けた。信一は玄關までおくり届けて、別れて引還えした。やつと終ひ電車に乘込むだ。

次の日例の通りやつてきた信一は、奥の室の夫人に呼ばれてそこに行つて坐ると
「こよみを見ましたらお嫁入には二十六日と二十九日と日が吉いさうですけれど。今笹島さんとお話して居る所ですわ。私共と蒲生さんと、皆んなご一しよにどこかで御飯をいたゞいて、披露つてことになさいましたら、いかゞ」
と、いはれて信一は、またトン〳〵と運ぶやうに思つた。昨夜戻つて一人枕に付き二人が一しよになるには何か祝ひがあつても宜いと思つたが、どんな形でやるかは未だうまく思ひ付かなんだ。てい子さんの思ひ付きは宜かつたから、信一は首肯いた。
「日はどちらになさいますか、いつそ二十六日にきめたら、いかゞ。二十六日と云へば明日ですわね、お早い方がいゝでしよ。妾病氣してからこつち大分せつかちになりましたのよ。笹島さん明日でお宜しいこと」
と、夫人にいはれて、笹島さんは頰笑み默頭いた。育さんが外から戻つてきて、この話に混つて

「それでいゝだ。笹島さん、家の方は、大丈夫かね」

「えゝ。大丈夫です。あとから手紙をやります」

「まあ子供ぢやあ、ないのだから」

と背さんは曰ふのだつた。信一はこのあひだの晩あのやうに曰つて彼女は深く首肯いたわけだから、いま「大丈夫」と返事したと思つた。これで話は定つた。

彼女は晩に、襦袢のゑりか何か買物に行きたいといふと夫人から「ご一しよにいつて頂いて見立てをもらひになつたら」と曰はれた。また夫人から「明日座敷に花が欲しいのですからお歸りに花屋へお寄りになつて」と信一はいはれた。

明るい月魄が見え一しよに圓山の方角に向つた。人に見られない所人のきてない所と選むで、智恩院の境内に入り、上の一心院の中抜けて圓山に出ようかと石段を登つたら寺の門が開かなんだからまた引還えし、こんどは鐘樓の傍を通つて、見晴しの場所に出た。月に浮かれた人々に混つた。街の賑やかな燈火や彌外遠くまでキラ〳〵うごく電燈などに向いて暫時たゝずむだ。長樂寺に下りて堂の横で、また唇と唇を合せ、「明日まで待ちきれない位だ」とこんなに曰ふのだつた。それですぐに人聲のする方にと出て行つた。四條寺町の「襟正」で彼女は帯止も半襟と同じ藤色にした。信一は買物の金をやつて出た。夏の晩背さんたちと行つて單帶を選むだ話など笑つて曰つた。祇園の花屋から中で一等目立つ雁來紅を手に取つて出た。還えり路明日は何所へ飯をくひに行くか話合つたが、手頃な家が思ひ當らなんだ。

戻ると夫人から「まあきれいな花。でもこれは一本花ではいけないことよ」といはれた。彼女が明日の朝早く別に取つてくるといつた。「明日はどこへ行くかきまつたかね。四條の神田川のうなぎはどうだ。細く長くと云ふ諺もあるから、いゝ

だらう」と菅さんが笑つていつた。其所にきめた。

午前から支度して皆んなで出ようとしたところへ、蒲生君宛の電報がきて、庸子さんの兄さんが今日國からつくと云ふのだつた。で、庸子さんはのこることになつた。信一は不意に一人抜けたから此日の氣持から一寸の間何か淋しかつた。

粟田口では床の間の朝鮮の壺に今日は紫苑が澤山挿し込んであつた。「紫苑がきれいだね」と菅さんは眺めて居た。信一はこの日寫眞をとつて親たちに送つてやりたいと思つた。菅さんの器械の殘りのフイルムで足りぬから四條まで出て行つた。フイルムを持ち、戻つてきた。彼女はてい子さんから借りた紋附の支度ができた。信一は羽織袴を著た。菅さんもさうした。

座敷の方から間の唐紙しめて、四人坐るのだつた。ルリ子さんがきて、朱い三ツ組の盃と銚子との傍にすわつた。昆布などの肴の品も用意されてあるのだつた。菅さんと夫人と「こちらから先きでしよ」「左うかね」などと指圖で、ルリ子さんが銚子を持上げて、朱い盃が何遍も取交されるのだつた。信一は形式に即かず離れずの心持だつた。菅さんの夫人の心づくしは詞なく有難く思つた。彼女も然うのやうだつた。

このあと、座敷の緣側に革座布團を敷き四人並むだ圖を、蒲生君が庭先から寫眞に撮るのだつた。庭に殘暑の强い光りが射込んで居た。菅さんは袴の膝に埋る工合に手を組み、夫人と彼女も膝に手を重ねたが、信一は眞似る風だつたから兩膝に手をおき眞直ぐに向いたら寫された。兩人のは二枚撮つたが信一はワザと平氣にして却つて落付かなんだ。また普段のなりで銘々一人づつ、子供達なども、あるだけのフイルムに撮るのだつた。

電車で「神田川」へと向つた。鴨川沿ひの二階座敷に上り、向ひ側の屋根の上にずつと見える、東山は西日が上の方を照して鮮かだつた。信一は酒飲ではないが今日は酒が甘く厚味があると思つた。「うん、酒がうまいね」と酒飲でない

菅さんも同感を持つた。うなぎは東京風の焼方だ。菅さんは女中と神田の「神田川」の話などをした。眞向いの東山に月魄が見え初め「あの月の出るまで居よう」と、眺めて居た。

戸外に出て、「少し散歩しないか。てい子は先に俥で還つた方がよいよ、未だ夜分は用心しないと」と菅さんは曰つた。子供達はお母さんとかへると云つたから、俥二臺よんで、一臺にルリ子さんとチヅ子さんと相乘で行くのだつた。庸子さんにと、土産の折などさげた、蒲生君は客があるから一ト足先きに戻ると云つたから、信一は「今晩お客さんは下にやすむで欲いな」とこんなに曰ふと、蒲生君は點頭いた。菅さんと新京極のキネマ倶樂部に入つた。京都の活動小屋を彼女は初めて見た。終りの一ツ見殘して「もうよからう」と菅さんがいつて起つのだつた。

…………………

…………………

「今日すぐに、菅さんへ一しよにお禮に行かうよ」

「えゝ。あたしは持つてくる荷物もありますし」

あさ起きると二人は左う曰つた。信一は何よりも感謝の氣持が一杯だつた。

粟田口では子供たちが先づ曰つた。

「笹島さん、ゆうべ蒲生チヤンにお泊りになつたの」

「笹島さんは竹内さんのおくさんに、おなりですよ」

と、笑ひ顔のお母さんからいはれて子供たちはケヾンな笑顔で目成つた。

「ねえ、笹島さんではおかしいわね。お名前に致しましよね。れん子さんですわね」

と夫人はいふのだつた。――あとでも夫人からフイと「笹島さん」が出た。子供たちはなほ六ケしかつた。信一自身から「れん子」と呼び難く、詞かけるをり「あの」とか「おい」位だつた。――信一は彼女と荷物の傍へ行つた。大きい信玄袋一ツと風呂敷包二ツあつたが、今日は手にさげられる分のみ持ち戻るのだつた。

宵に二人は二階に上り、まもなく彼女が床のべるのだつた。信一は「まだやつと八時だ」と笑ふと、彼女は「する用がほかにありませんもの」と無邪氣に曰つた。次の晩は彼女が「床とつておく」といふ氣持ではなく早く床展べるのだつた。

信一は食物の好みがかはつた。淡泊なものより、油コイものがよくなつた。今日も鋤焼明日も鋤焼で、飽かなんだ。一しよに出歩けば寺町の村瀬や三島亭に立寄り鋤焼で飯をたべた。鯉こくをたべたいなあ、といつて錦から鯉をさげてきた。彼女は料理の上手な蒲生君夫婦から煮たきを教はるのだつた。信一は、支那の小説の金瓶梅をよみ、金瓶梅は性慾生活が主に描いてある、中に料理やうまさうな食物のことがしば〳〵出て、たべ物のことを澤山附加へた作者はよく見て居ると思つた。

信一は「小さい贅澤」と自分からいつて、亂費家の氣持になつた。一人者だと用心したが彼女がきてから自分の用心はいらなくなつた心持だつた。

（十五年十二月）

無明

近松秋江

一

その春の初の頃、郷里の方に居るすぐ上の兄から、今度思ひ立つて、アメリカに行く氣でゐる。神戸から乘船してもいゝが、或は東京見物かた〴〵横濱から乘船することにするかも知れぬといふ簡單な音信に接した。

その兄とは格別用事もないので、一年に一度か二度互に葉書の音信を交はすくらゐのものであつた。彼は中野よりも六年々長であつた。十年ほど前に實家から十里ばかり距つたオー市のある家へ養子にいつたのであつた。中野は、兄のその音信を見た時、いつものとほり極めて簡單な葉書の文面には、そんなことには何等言及してゐなかつたけれど、しかし中野は種々な想像を兄の上に加へてみた。アメリカに行くといつたところで、金を持つて漫遊に出掛けるわけではない。無論あの地方から年々多數渡航する出稼ぎに行くのであらうが、まだ、たしか七つか八つを頭に三人の子供を持つてゐながら、そんな決心をしたについては、何か知ら、養家に居り

たくない事情があるに相違なかつた。無論まだ三十五の壯齡であるから、たとひ子供が三人あらうとも、今日の時節に海外に出掛けるくらゐ何でもないことであるが、それも境遇や出立點の如何による話で、兄の場合にあつては、先づ、家内に何か特別の事情のないかぎり、そんなことを思ひ立つ筈はないのであつた。中野は、今の自分の惱みはなやみとして、兄の境地に同情を禁ずることが出來なかつた。もとより委しい事情は分らなかつたし、又強ゐてそれを知らうともしなかつたが、いづれにしても、養子にいつて、三人の子の親になつた上は、それで父爺になつて一生を無爲にして過せばいゝ譯であるのに、さうして居られないといふのは、止むに止まれぬ次第であらう。とにかくそれだけの決心をするまでには、いろんな苦衷を經た結果であらうとおもふと、中野は、兄の渡米を傷はり、慰め、勵ます爲にぜひとも横濱から船乘することを勸めて、東京に呼び迎へたかつた。

そして、兄が東京の方に立寄るなら、それと一所に、中野が多年の宿望である母をも呼び寄せたいとおもつた。彼は、まだ鄕里から學資を仰いでゐた時分からの希望で、どうにか自活してゆけるやうになつたら、母を東京に呼び迎へて、二人で、小女一人くらゐを使つて親子水入らずの生活をしたいのが一つの樂みであり理想でもあつたのだ。中野が十九の年の九月に初めて東京に出て來て、たつた三月ばかり居るかゐないかで父親が死んだので歸國したきり、一寸二年近く鄕里に引込んでゐたが、その間に彼の東京に行きたいといふ熱望は倍々募るばかりであつた。愛は解するといふが、中野の切なる希望を、蔭になり日向になり達成するやうに、一家の內で梶をとつてくれたのは、父の亡くなつた後の母であつたのだ。それゆえ、學校を卒業して、自活の道がどうにか立つやうになつたら、何より先きに母を呼び迎へて宿年の希望を滿足したいのであつた。ところが、親に對しては、子といふものは殊に我儘で勝手なもので、その自活の道が立ちさうになると、母を迎へる代りに女をこしらへてしまつた。

「家内が出来てから、先のやうに、もう私に、東京にこい／＼といふてくれんやうになりました。」と、母が述懐を洩したといふことが郷里の、他の方から中野の耳に入つたこともあつた。

去年の春の初から一年餘り同棲した女と、どうしても別れることになつてから、彼女は、「あなた、わたしが、こゝを出ていつたら、國からお母さんをお呼びなさい。さうすると、家の中が奇麗でいゝ。女房とも何ともつかない者を家に置いとくのは、あなたの出世の妨げだ。」といつてゐた。それは彼女自身の境地をも客觀的に思つて見てさういふのであつた。そして、そんなことをいはなければならぬ自分の生涯を、彼女は悲しく諦めてゐるとゝもに、屈辱に對する、抑へ切れぬ憤懣もあつた。中野は、彼女の、その心根を思ふと傷すに忍びざることを行ふやうな感があつた。自分の病的な愛慾に原因してゐる自我を沒却しさへすれば、大きくいへば一人の婦人の生涯を救ふて、好運に導くこともできるのであつたかも知れぬ。

時とすると、彼は、彼女に對する自分の氣持ちを思ひ浮べて、一年以上も同棲してゐる間に、はじめ三四ケ月の間、大海の荒れすさぶごとくあれほど心を惱ましてゐた、彼女に先の男のあつたことが、いつしか、自身の胸の中に消え和んでゐることに氣がついた。貧しいながらも、その日／＼の生活に、何かしらいそしんで動いてゐる彼女のまめまめしい容姿を見ると、自分達の一生はこの調子で無事に過ぎて行くのであらうかとおもはれた。

「いつそその方が心の平和が亂れなくつていゝかも知れぬ。」と、思つてみることもあつた。さうしてゐるとまた、强い自我の念がむら／＼と頭を擡げた。それで諦めてしまへば、あまりに自分が不幸である。どうしてもこの女とは別れてしまはなければならぬ。自分にはもつと好い女が何處かに居なければならぬ。

彼女が、わたしが出ていつた後、國からお母さんをお呼びなさいといつたのは、自分が奇麗に身を退けば、そのうち

何時か、中野の空想してゐるやうな女が幸福をもたらして來るであらうと思ふからであつた。彼女はそれくらゐに諦めてゐた。彼女が中野の家から出て行くのは、もう一所になつた時から始つて今日まで繼續してゐた宿題であつたのだから、何でもなくそれが斷行出來さうであつたが、中野にはやつぱり忍び難い感があつた。彼は、國から母や兄を呼び迎へるのを、彼女を離別することの自分に對する言譯に利用しようとした。

二

長い間宙にぐらついてゐた中野の決心が具形的に固まつて來たところで、それでもまだ心に迷つてゐるやうに、

「どうしようかね。」と沈吟してゐると、彼女は、「置いて下さいよ。人をひとり救けるやうなものだ。」彼女は絕望的な氣持ちで靜かにさういふのであつた。

「……………」

中野の胸には、それが突刺すやうに悲痛に響いた。全く自分の自我（エゴー）さへ殺してしまへば堪えられぬこともないのだと思つた。彼はたゞ息を吐いてゐた。

「その代り貴郎の爲には、どんなことでもしますよ。」彼女は唇の色を變へて眞心からいつた。

中野は堪えられなくなつて、ひとりでに眼頭が熱くなつた。そして鼻聲になりながら、「それは、今までだつて、お前がよく仕てくれることは分つてゐる。」

それから四五日過ぎて、中野の鄕里の家から封書が屆いた。それには、横濱から乘船することにして母と同道で五月の十日頃上京すると書いてあつた。そのほかに、中野が彼女と同棲してゐることに異存のあるやうなことを強い言葉で

簡單に書いてあつた。その實それは、中野が先頃自分の方から郷里の上の兄に手紙を遣つて、そんな文意を書いて越してくれろやうに頼んでやつたのであつた。彼女は、中野の郷里からそんなことを言はせねば、中野の傍を去らないといふやうな强請がましいところは少しもなかつたけれど、たゞ中野自身の氣休めにそんなことにでもしなければ、彼女を出て行かす最後の決心がつかなかつたのである。彼は、そんなことをする自分の愚かしさや、郷里の者に餘計なことを聞かす面伏さを承知しつゝも敢えてそれをしたのであつた。

中野の郷里から手紙が來ると、彼女はよく怯えたやうな表情を浮べてゐた。わざ〳〵自分で仕組んだ筋でありながら、中野は厭なものを見るやうな氣持ちで、さつとその手紙に眼を通してそのまゝ又封に入れてしまつた。そして半日ほど過ぎて、自分の氣を落着けてから、

「來月の十日頃にいよ〳〵來るさうだ。…………それからこんなことを書いてあつた。」といつて、書中の一部分を讀んで聽かせながら、自分も失望したやうな顔をした。しかし、それは彼にも虚僞の表情ではなかつたのだ。彼女は又彼女で、それを聞くと、唇の色まで忽ち蒼白になつて、やゝ痙攣狀態に顔面神經を戰かせながら、全身から力の拔けたやうに、少時口も利けなかつた。

中野はその瞬間の重苦しい氣持ちを散らかすやうに、

「十日といへば、今日が二十六日だから、まだ半月間がある」

「わたし今月中で歸ります。………もう居ないものときまつてゐるのに、居たつて詰らない。」彼女は、はね返すやうにいつた。

そして、それから四五日の間に、嵩張つた目ぼしい物を風呂敷に包んで、日が暮れてからぽつり〳〵、小石川の小日

向台からはあまり遠くない處に住んでゐる彼女の母親のところへ持つて歸つた

母親は、江戸川の石切橋を渡つて牛込の方にいつた赤城の森の下の方に住んでゐた。

去年の三月の初に、二人で始めて微かな新世帶を持つた時、一所に臺處道具などを買ひに歩いて、彼女が、「簞笥と長火鉢はどうします？」と、新世帶には何より無くてならぬものと、傳統的に確信してゐるらしい口調で訊いた時、中野は、もとよりそんな餘分の金も持つてゐなかつたし、そんな形式を整へるほど、彼女との同棲に心が彈んでゐなかつた。勿論彼女と同棲する時にも、ひとゝほり體裁のいゝことをいつて、鄕里の方から多少の送金を仰いだのであつたが、それまで三四ケ月ばかりの間戀愛關係のやうな狀態で、苦しい思ひをしながら逢つてゐた時分には、毎日顏を見てゐたかつたが、さていよ／＼思ひを遂げて、一所にならうとする段になると、永い行末のことを考へてみて、此の女を一生涯の妻としていゝか惡いかといふことを、もつと深く思つてみなければならなかつた。

彼は鄕里から受取つた金を懷中にして、その晩早速彼女に呼び出しをかけて、人通りの少い夜の街をぶら／＼歩きながら話した。鄕里から無心を聽いてくれて金を送つて來たらすぐ世帶を持たうと約束して、自分も樂み、女をも樂ませてゐたのであつたが、その金を手にして、切なる望みが叶ふことになると、中野の心は妙に躊躇して來た。彼はその金を懷中にして、女に逢ひに行く道々、「いつそ此の金をそつくりこのまゝ與れてやつて、約束を違へた言譯けにして、こゝで奇麗に手を切つてしまはうか。」といふ心もして來た。彼女を妻にするといふ自分の心が果して何時まで持續するであらうかと考へてみると、それには殆ど自信がなかつた。今切れてしまふ方が賢いといふことは中野にも明瞭に分つてゐた。それにもかゝはらず、彼は、毎日彼女の顏を見てゐたかつた。一日傍に引着けて彼女の愉快さうな聲を聽き、笑

ふ口元や女らしい匂のする襟頸のまはりを見てゐたかつた。そして、この金があれば、それが自分の思ひのまゝに、明日から實現できるのだとおもふと、今まで三月四月の間逢つてゐながら、少しも念頭になかつた、彼女の肉體によつて自分以前に、三年も四年もの長い間享樂した男のあつたといふことが、俄に降つて湧いたやうに、彼の心頭に暗鬱な雲を巻き起して來た。彼は何ともいへない厭嫉の感に胸が詰つたかと思ふほどな失望を覺えた。

「金は、いつてやつたどほり送つてくれた。」

彼は進まぬ足どりで暗い裏町を歩きながらいつた。

女は、小足に追掛けるやうに歩いて來ながら、

「好かつたですねえ。お國でも御承知なんですね。」

「まあさうなんだ………」彼は、餘程、今途中で考へてゐたことを言ひ出さうかと思案したが、少し言葉を曖昧にして、

「僕は何だか先の人間のことが氣になり出したんだ。」

すると、彼女は、夜目にも絶望の色が分るやうな息づかひであつたが、

「だつて、それはもう二年も三年も前に奇麗に話のついたことなんですもの。」

「いや、それは分つてゐる。」

「ぢや、どういふんですよ。」

「そんなことぢやないんだ。たゞ先のことが何だか氣になつて邪魔になるんだ。」

「それは、わたしが、まだ手附かずのむくの身體でないのは、あなたにお氣の毒だと思つてますさ。」

「…………さりかといつて、どんな女でも可いから初めての者でありさへすればいゝとも思へないし…………」

彼は半分獨りごとのやうにつぶやいた。そんなことをいひながら、明日までも待てないやうに、その足で、行きつけの、ある家へいつて泊つてしまつた。

そんな次第で、家財道具といふほどのものも持たなかつたが、一年あまりの間には、彼女が時々風呂敷に入れて持つて來たりしたものがいゝ加減の嵩になつてゐた。

「簞笥が一つなくつちや。……押入れの中が形付かなくつて。……わたしのを持つて來てもいゝでせう。」

彼女はそんなことをいつてゐたこともあつた。その簞笥は、彼女が初めて京橋の方へ嫁した時に兄から貰つてもらつたものであつた。それは、彼女の話で、いつか聞いてゐた。しかし彼は、その簞笥を自分の處へ持つて來ることを拒んだ。一度、たしかに、彼女が先に嫁してゐた先で使つてゐたらしい、そこの家の姓を書き記した小風呂敷を所持してゐるのを認めて、彼は胸を突上げるやうな反撥の惡感を覺えたことがあつた。それをいふと、それつきり彼女はその風呂敷を隱してしまつたことがあつた。

三

そのうち四月も盡きた。が、彼女は歸るともいはなかつた。彼も歸れともいはなかつた。互にそのことは口に出すことを欲しなかつた。今までのとほりに一日々々と、惜しい日が經つていくばかりであつた。しかし、もうそこまで來ると、のこりの十日の日は瞬く間に過ぎてしまつた。やがて母と兄と郷里を出立したといふ手紙と電報とがつゞけさまに

到達した。それから一日置いて明日は午頃の汽車で東京に着くことになつた。彼女は、まだ少しばかり、こまく／＼したもので持つて歸るものが殘つてゐた。

「わたし今晩自家へ行きます。」彼女は夕飯をすましながら、さういつた。

すると中野は、彼女の顔色を讀まうとするやうに、臆病な顔をして、

「……歸るの？」

「どうせもう居ないんですから。同じ歸るんなら夜の中がいゝ。」

中野は今にも泣き出しさうな顔をして、

「お前が去つてしまつたら寂しいよ。」

訴へるやうにいつた。彼女は、ちよつと笑ひながら、

「ほゝゝ……寂しいたつて、それは爲樣がありませんよ。今晩一晩だけですよ。明日はお母さんや兄さんが來るし、頼んである女中も今晩か明日の朝來てくれることになつてゐるんでせう。」

「うゝ、それはさうだけれど。……お前が去つてしまふと寂しくつて、今晩寢られやしない。明日歸つたらいゝぢやないか。今晩は持つて行くものだけ持つてゐておいて。」

「あなた、自分の都合のいゝことばかりいつて。今更らそんなことをいつたつて爲樣がないぢやありませんか。それで此處に居る人はいゝでせうけれど、明日晝日中歸つて行かれやしない。」

「それは、さうだけれど、明日だつて、人が見てゐるわけぢやないし、歸るのやら、行くのやら分りやしない。たゞ、これから夜になるのに俺一人では寂しいよ。」

「ほゝゝゝ」彼女は又笑つた。

「ぢや、とにかく持つて行くものだけ持つていつて置いて、又戻つて來ます。」

彼女も強ゐて行かうとはいはなかつた。中野は、それで、いくらか元氣づいたやうになつたが、やつぱり寂しかつた。どうして自分は、この女を、彼女がまだどこへも嫁さない時分に知らなかつたのだらうと、そんな愚かしいことまで又思つてみたりした。

彼女はそれから薄暗いランプの灯を背にして茶の室の押入れからこそ〳〵何か取出して風呂敷にまとめてゐたが、やがて、羽織を着て、中野が一人ぼんやり机に向つて坐つてゐる奥の三疊の室に入つて來て、

「そんなら、わたし一寸行つて來ます。」といつた。

「あゝ、……歸つて來るんだらう。」彼はわざと氣輕な調子でいつた。

「……………」

彼女は返事をしなかつた。

「ねえ、今晩はこゝへ戻つてくるだらう。」

彼は、對手が默つてゐるのでさういひながら、彼女の方を振向いた。と、彼女は、彼の方を背にして、壁の方を向きながら、

「これから自家に歸つて、一生下らなく暮すんだ。」鼻にかゝつた聲で、つぶやくやうにいつた。

中野は、その一と言で、はつと胸を突かれたやうな氣がした。それが自分の責任であるやうな苦痛と悲哀を感じた。慰めの言葉を口にしようとしても、それが餘りに出鱈目のやうで、やゝ少時の間默つてゐたが、

「そんなことはないよ。……又どうかなるよ。」彼は、何を意味してゐるのか、自分にも、はつきりしないことをいつた。

尙ほしばらくの間、彼女は壁の方を向いたまゝ無言でそこに突立つてゐたが、やゝあつて、濕つた聲で、

「そんなら、ちよつと行つて來ます。」

といつて、小脇に風呂敷包みを抱へて出ていつた。

中野は、彼女の出ていつたあとで、獨り、つまらなさうに、先つきからのまゝ、机の前に、つくねんと坐つたきりで居つた。彼女が今先き卿ちた言葉がまだ耳に膠り着いて、胸の中に暗い悲しい時雨雲をつけてゐた。「これから自家にかへつて、一生下らなく暮すんだ。」中野自身にも、まだ三十までには一年間のある年齢であつたが、今まで歩んで來た道ゝ十年餘の間、幾度か、そんな運命の巷に立つて行路難を卿ちたか知れなかつた。しかし、自身には、何か知ら、少くとも彼女よりはまだ幾らかの幸運が行く手に待つてゐるやうな心地がするのであるが、明日から自分の家を出ていつた彼女には、物質的にも何にも、明るい幸運が待ち受けてゐる希望は殆ど無かつた。後半生不幸の連續であつた彼女の母親の老いた姿と、零落のどん底に沈淪してゐる彼女の兄とが、二人でしがない同居暮しをしてゐる、悒せき裏屋住居の、醜い現實の姿が彼の眼にまざ〳〵と浮んで來た。この間から、話の樣子では、先の赤城下から、山吹町の裏の方に引越して來たといふことであつたが、山吹町といへば、つい三四年前までまだ殆ど早稻田つゞきの田圃であつたものだ。そこの濕地へ、一軒建ち二軒たちしてゐる間に、いつの間にか、そこが新開地の街になつてしまつた。生活の溢れものが、忽ちのうちにそこへ群り寄つた。

中野は、そこの裏長屋に住む者の生活を思つてゐると、人生が灰色に見えて來た。しかし、人の心は勝手なもので

彼は彼女の、これから歸へつて行く家のことを思つてゐると、人間生活の慘めさが胸を傷めるのであつたが、今、こ離れがたい心の絆を截斷つてしまへば、自分の前途には、どんな好きな女でも意のまゝに選ばれるのだといふ氣がして、あんまり感傷的になつてゐるのが愚かなことのやうに思はれた。そんなことを、とつおいつ、考へ直しては打消しゝて、何度となく一つことを頭の中で繰返してゐるところへ、がらりと表の入口の開く音がして、彼女が歸つて來た。

それでも先刻出ていつた時とは、いくらか氣分が變つたと思はれて、外見だけは平常のとほりになつてゐた。中野はその顏を見ると、自ら欺いてゐるやうな氣持でゐながら、やつぱり、いくらか心が落着いた。

しかし、もう、二人ともあんまりそのことに觸れぬやうにしてゐた。それは晩秋の宵で、疊數の十二三疊しか敷からない悒せき小家であつた。方々を鎖してしまふと、家の中が暖氣にこもつてゐた。

二人は、その頃習慣で互に足と足と向け合つて寢床をもうけてゐた。中野はそのまゝ默つて眠つてしまふのが何となく氣に濟まなかつた。それは自分の慾情からでなく、彼女に對して忍びぬやうな氣持からであつた。

……………………

「今更そんなことを、爲樣がないぢやありませんか。」彼女は勃然として跳ねつけた。

中野自身にも、そんなことは、彼女に對して出來ないことだと承知してゐるだけにさういはれてみると、今までの彼女とは大分異つたものに對するやうな氣持がして、一寸耻辱を感じた。そしてその耻辱をまぎらさうとする、照れ隱しに、わざとづう〱しい態度になつた。

「あなた人を馬鹿にしてゐる。」彼女は強くいつた。

四

その翌日になつた。昨日のとほり麗かな初夏の日は朝から輝いてゐた。母と兄とは昨夜は靜岡に一泊して、その日は丁度正午すぎに東京に着くことになつてゐた。

彼女の歸つて行く時間は刻々に迫まつて來た。出されてゆく家なんだもの、もう何も爲なくつてもいゝんだと、遠から彼女は何度そんなことを思つたか知れなかつたが、長い間の習慣で、やつぱりそこに居る間は、さうも出來ないのが彼女の性質であつた。

毎日のとほり十時頃には魚屋が荷を擔いで來た。この頃の季節で、海から上つてくるものには、眼を迷はすやうな、數々の品があつた。彼女は中野に相談して小鯛と夕方の刺身などをあつらへた。

それから、

「魚ばかりでもいけないでせう。」といつて、朝から野菜の甘煮などをこしらへてゐた。

そんなことをしながらも、彼女は心は落着いてゐられなかつた。

「もう、あなたステーションにお迎へにいかなけやならんでせう。」

「なに、一時頃着く筈だから、まだ大分間がある。」

「でも、もう十時半だ。」彼女はさういひながら、食べる物の支度が一とほり形付いたところで、あとの洗ひものなどは、その朝來た女中に頼んでおいて、自分は手を拭いた。それから一寸身づくろひをなほして、羽織を着て火鉢の前に改まつて坐つて、ゆつくり二三服吹つてゐた。

中野は、平氣でこれを見てゐていゝか、わるいかわからないやうな氣がしてゐた。一旦別れた以上は、これつかぎりもう生涯會はないのだと思ふと、男と女との關係くらゐ親疎の極端なものはないのであつた。彼等が別れるの別れないのと、二人の間で、いひ暮してゐた時分に、彼女はこんなことをいつたことがあつた。
「わたし、先の時にも兩方でさういつて別れて來たのです。いくら廣い東京に居たつて、又、いつ何處で不意に出會はないとも限らない。そんな時に、じつと顏を見てゐながら默つてゐるのは厭な氣がするにちがひないから、それと氣がついたら、互ひに一寸頭を下げるくらゐのことはしようといつて、出て戻りました。」
それを中野は今思ひ浮べてゐた。
「おや、もう、これで、わたし、いよ〳〵歸ります。………あなたもゝうステーションに行かなけりやならんでせう。」
彼女はもう、何も斯も一切のことを押包んで、しまつてゐるやうに、微笑を浮べながらいつた。
「あゝ、もうぼつ〳〵私も出掛けていゝ時分だ。」
「それでは、わたし一足先きにゆきます。」
それを機會に彼女はついと立ち上つて、針仕事の小道具などを入れた小さい包を袖で抱へるやうにして、靜に出ていつた。昨日までとちがつて、女中の手前もあるので二人とももう餘計な口を利かなかつた。中野はその後から無言のまま入口のところまで立つて出たが、彼女は向うをむいたまゝ、下駄を穿いて、そのまま外に出た。
中野はそれから一旦座敷の方に引返へしたが、心の中でたうとう行つてしまつたと思ふと、堪らない哀愁を感じて、そのまま靜としてゐられなかつた。ものゝ二分とも立たないうちに、女中に遠慮のない戸外でもう一遍彼女に口をきかうと思つて、そうつと急ぎ足に、形ばかりの門の外まで追掛けて出て見たが、五六間先で道が廻り角になつてゐるので、

勿論もうそこには姿は見えなかつた。又廻り角まで行くと、女の足でも早いもので、もう彼から、いゝ加減な距離を措けても届かないくらゐ遠くの方へ歩いていくのが見えた。腋の下に敷く針道具と二尺の物尺が肩のところに二つ覗いてゐるのが遠くから眼に入つた。

中野は、すぐ引返して家の中に入つたが、ステーションに行く時間も迫つて來たし、それに、強ゐて氣持ちを轉換させようとして出掛けた。

改札口のところに立つて、長いプラットフォームをぞろ〳〵歩いて來る群衆を見張つてゐると、母と兄とをその中に發見した。二人とも二三年見なかつた間に格別變つてもゐなかつたが、母は長い旅をして來たせいか何だかひどく日に熱けたやうな顏をしてゐた。母は今から十二三年前に、亡くなつた父と東京見物に來たことがあるので、東京はこれで二度めであつた。ステーションからすぐ俥に乘つて小石川小日向の家に戻つて來た。女中がひとり留守をしてゐた。

母は家に入つて、そこに坐りながら、ほつとしたやうに、

「やれ、まあ〳〵。たうどう來ました。」といつて、そこらをじろ〳〵見廻はしてから、

「それで、今のはどうした。」穏かな調子で訊ねた。

「もう歸つた。」

「あゝもぅ歸つたか。それで機嫌よう？」

「えゝ、機嫌よう…………つい先程まで居つたのだ。」

「さうか。…………」

母は靜かな言葉でさういつて、やゝ失望したやうな色を浮べた。彼女の考では、たとひ中野からそんなことをいつて

越しても、自分が東京について本人にも會つて、みたうへで、好ささうな者であつたなら、なるべく居つてもらふやうに話をしようと思つて出て來たのであつた。

で、その時は來早々のことで、その話は一時それきりにしたが、一と落着きしてから、母は又そのことをいひ出した。といふのは、中野の甥で、母には孫にあたる、中野の姉の息子が東京のある中學校に來てゐて、それが去年半年ばかり、中野がその女と同棲したところへ來て同居してゐたことがあつた。彼女はその時中野の甥に對しても深切に世話をした。甥が暑中休暇で歸郷して、東京のおばさんは好い人だと自分の母親に向つて賞讃したところから、そのことは中野の姉からすぐ中野の母の耳にも傳はつた。中野はその姉との間に三人の兄弟があつて、今度アメリカに行くのは、すぐ上の兄であつた。五人の姉弟で、一番年長の姉から見てゐると、弟達の嫁は平素からどれも氣に入らなかつた。そこへ、自分の長男が東京から歸つて來てそんな話をしたので、彼女はすつかり倅のいふことを信用したのであつた。實際、今までそんな遠くへ子供を手放して出したことのない親の身にしては、毎日家に居つて見てゐる子よりも見てゐない子のことの方が案じられるのは道理であつた。その子が家庭に居る時のやうに溫い待遇をせられてゐるといふことは、どんなに親の心を喜ばしたか知れなかつた。

そして中野の母はいふのであつた。

「この間中十日ばかりお姉さんの處へいて居るに、その話をしたら、お母さんそれでは、今度そのことで東京へ行くんですかといふから、いや、さうばかりでもないが、そのことがまあ主(おも)な用ぢやといふと、そんな憎まれ役を止めた方がいゝ、厚吉の話にも、えらい好い者ぢやといふから、それよりもなるたけ居つてもらふやうに話をする方がえゝでせうといふとつた。お姉さんのいふのでは、お前の方が好うないんぢやらうといふて居つた。…………お前は何にでもぢ

き他き性ぢやから困る。」

中野は、母や姉の噂してゐることが本當にちがひないとおもつたがそれよりもつと深い性理上のことについては説明することが出來なかつた。又そんなことをいひ出すことは好まなかつた。

五

それから一週間ばかりは、中野は、何かと母や兄との間に取交はされる水入らずの情話で氣をまぎらされてゐた。何處かへ一所に行つてみようといつても、母は、何處へも行きたくない。たゞ家にじつとしてゐるのが一番氣樂でいゝといつて外へはあんまり出たがらなかつた。兄も出航までには、まだ、ざつと一と月近くの餘日があるので、ゆつくりしてゐた。彼等は三人のほかに聞いてゐる者もないので遠慮なしに郷里の方の噂話に、長い日を、毎日のやうにいひ暮してゐた。それでも彼等には倦かぬ興味があつた。

そのうち渡航の手續や船のことなどで兄は一日横濱に出掛けた。

中野はもうこの間から、彼女がその後どうしてゐるか、そうつと様子を見に行きたいと思つてゐるのであつたが、何だか、自分の理性に對して耻かしいやうな氣がするので、出來るだけ感情を抑制してゐた。でも、遠くといふのでなく、小日向の台町を下りて江戸川橋を渡つて山吹町の道を少し行くのだと聞いてゐたから、いつてみるにはわけはなかつた。彼は午餐の散歩かたぐ\、聞いてゐたとほりに探ねていつた。野川の溝渠に架つた宗傳寺橋を少しいつて右側の白轉車屋と壐煎餅屋との間に、なるほど狹い露路があつた。それを入つて行くと、まるで貧民窟のやうな濕々した處に、見るから味氣ないやうな雜業諸の納屋が並んでゐた。それを、ずつと奥まで入つていくと、地尻に共用井戸があつて、

すぐそこの流しに向いた水口の處で、派手な唐棧の筒袖袢纏を着た彼女が、ちやうど鮪の刺身を料理つてゐるところであつた。まだ朝から頭髮も梳かないと見えて、寰れ放題に亂してゐる。向うでもすぐ中野を見付けて、

「あら。」と、飛び立つやうな笑ひ顏を見せて喜んだが、すぐその後から、はら〳〵と涙を流して眞赤に顏を染めながら、

「こんな汚いところへよく來て下すつたねえ、よく來て下すつたねえ。」と、奧の淺い家の中に氣をかねたやうに、低い優しい聲でいつた。そして濡れた手を前掛けで拭きながら、それで又眼を拭いた。涙のあとは又笑顏になつて、

「どうしました。お母さんは別にお疲れも出ませんか。」

「え〻、何事もない。」

「さうですか。それは好うござんすねえ。…………よく來て下すつた。隨分汚い處でせう。」さういひながら、又留め度なく湧き出る涙を拭いた。

「こんな汚い處ですけれど、まあお上んなさい。あちらから。」

「え〻、でも。」中野は躊躇してゐた。

「なに構はないです。あなたさへ汚くつて厭でなかつたら。」

「でも居るんだらう。」

「え〻、お母さんも兄さんもゐますけれど、構ひませんよ。あちらの入口の方から。」

中野はさういはれるま〻に井戸の脇から入口の格子戸の方に廻つた。彼女は早速そちらへ出て來て中野を座に通した。上つてみると、なるほど悒せき家であるが、茶の室の方とは、上り口の二疊ですつかり境をされてゐた。彼の通つ

たのは二疊であつたが、その向うにもう一室あつて、どれも小間だが四疊くらゐあるらしかつた。

彼女はお茶など持つて來て、

「あなたもう午飯はおすみになつて、内ではこれから。」

「私は今濟んで散歩に出たところなの。」

「さう、ぢや、ゆつくりしてもいゝんでせう。」彼女は、やゝ聲をひそめながら、懷しさに堪へられないやうに、嫣笑媚笑しながらいふのであつた。

「でも、可けないだらう。………何だか變ぢやないか。」中野も低聲でいつた。

彼女は頭振りをふつて見せながら、

「うむ、なに、いんですよ。」と、ひとりで呑込んだやうにいつて、

「一寸午飯を濟ましますから、待つてゝ下さい。」と又涙ぐんだ眼に熱情をこめて優しくいつた。

中野はやつぱり彼女を思ひ斷ちがたく思つた。質の惡い猫毛の頭髮を手束ねにして振り亂してゐるのであるが、決して縹致の好い女ではなかつたけれど、何といつてもまだ二十八か九である。それに眉毛のはつきりしたのと、口元が小く引締つて、それに相當した齒並の小く揃つてゐるのが、彼女を思ひ染めのそもそもから中野の愛慾をそゝつたのであつた。中野と同棲する以前、彼等が相知つたのは、牛込の盛り場に近い、ある割烹店に彼女が女中をしてゐた時であつた。彼女は、その一年ほど前に、四年ばかり下町の方に嫁いてゐた夫が道樂者であつたところから、たうどう夫婦別れをして家に出戻つてゐた。親元――といつても父親は彼女が生れて二た月もたゝぬに強盜の爲に不慮の横死をして亡い人であつたが――へ歸つてくると、長い間、亭主を持つて散々苦勞をした、その氣疲れが一度に切つて出て、彼女はそ

れから殆ど一年ばかりの間、ふら〳〵病のやうになつて寢たり起きたりしてゐた。割烹店の主人は、彼女の家がまだ今のやうに零落しない時分から懇意であつたので、そんなにしてゐては身體の爲にも良くないから、氣晴しと思つて少し手傳つてもらひたいといふやうなことから、彼女は、秋口からそこへ手傳ひに來てゐた。中野が彼女を見たのはそれから間もなくであつた。

女の方でもおほかたさうかも知れぬが、男には、たれでも、好きな女の型があるものだ。中野は、五六年前まだ、學生であつた時分、郷里の代議士を、芝濱のある、旅館に訪問した時、料理屋を兼ねてゐた、その家の江戸前の女中の一人を見て、まだ、さういふことにあんまり眼の開けてゐなかつた彼は、その女のすつきりとした容姿風俗にひどく魅惑を感じたことがあつた。その頃芝濱にあつたそれ等の旅館は一と頃の紅葉館などと同じやうに美しい女中を置いて、代議士などを顧客に隨分風俗を紊してゐたのかも知れなかつた。學生の中野は、その時あゝ、自分も他日志を得たならばあんな好い女に思つたり思はれたりしたいものだと、そんなことを思つて、自己の勉强心を鞭撻したことがあつた。それは、頭髮を銀杏返しに結つて、黒繻子の半襟のかゝつた薄い藍色の粋な唐棧の袷衣を着て、色の白い、目鼻立ちから口元の引締つた、二十三四の、あまり大柄でない女であつた。中野は、代議士の座敷にゐた間、その女を恍惚として見てゐた。…………

すると、彼女をその割烹店で初めて見た時、彼は、何よりも先きに五六年前芝濱の旅館で見たあの女中を聯想した。性來耽美的氣分の多い彼は、それが高尙な趣味であつたかどうかは別として、薄い藍色の唐棧を着た江戸前の女が、どうしてか、馬鹿に好きであつた。…………

彼女は、暫くそこに手傳て居つた時分から常に着古してゐた派手な唐棧の袢纏を着て、井戸端の流しで鮪の刺身をこ

しらへてゐた。さすがに中野の家に居つた間は殆どそんな風俗にしなかつたが、親元に戻つて來ると、露路裏相當に身裝を變して働いてゐるのであつた。

彼は一人そこにじつと坐りながら、あゝして母親と獨り者の兄と三人貧しいながらも魚を料理つて水入らずの食事をしてゐるのを見ると、露路の內の居まはりが汚いことなど少しも邪魔にならないで、以前のとほり彼女が手器用に拵へてくれる食膳がどんなに食味を唆るか知れないと思つた。

そんなことを思つて、ぼんやりしてゐると、

「お待たせしました。えへゝゝゝ。」と低い聲でいつて、笑顏をしながら彼女が入つて來た。

「どうしてゐます。女中さんよく働いてゐますか。」

「あゝ、まあ何か斯かやつてゐる。…………五目飯をこしらへることが上手でねえ、それに私も好き、母や兄もそれは好いといつて、よくこしらへてゐる。」

「さうですか、この頃は荷が安いから……」

「さうだ。……しかし、もう歸らう。」彼は遠慮するやうにいつた。

「まあ、もうちよつと待つてらつしやい。自家に御用はないんでせう。」

「うゝ、別に用もないけれど、可けないだらう。」

襖の方を眼で指しながらいつた。

「お母さんは今出て行きますよ。」

母親は、弟息子が少し先きの方で商賣をしてゐるのと、他にやつぱり同じ區內で姉娘の嫁いでゐる處とへ毎日通つて

いつてゐた。

「だつて兄さんがゐるだらう。」

「ゐたつて大丈夫ですよ。」

「でも可けないよ。」中野は、顏を合はすのが濟まないやうでもあり、又面伏せなやうでもあつた。

「こちらへ來る氣づかひありませんよ。自分の方でも厭ですもの。午飯が濟んだあとは每時も晝寢をすることにきまつてゐるんですから。」

彼等の父親は三十年も前にそんな橫死をしても、土地家屋のあつた相當な老舖であつたので、この兄の代になつても、古川に水絕えずの譬で、まだ何がしかの財產も殘つてゐたが、代々家業の商買の道には明るい癖に酒飲み道樂の爲に到頭身上を呑み潰してしまつて、二度も三度も持つた女房には死なれたり、去られたりして、四十の聲をきいてももう女房を持つ力もなく、又その氣もなく酒一つを命の慰めに、今は、古い知邊の世話で、さる局の郵便配達をして身を過してゐるのであつた。

中野はそれから暫く二人で差向ひでゐた。十日ばかり離れたと思つてゐた彼等には又火が燃え附いたのである。

六

一度道がついてから中野は、それが又足癖になつて、兄や母の話し對手をするか、職業の方の用事をしてゐる時のほか、家に落着いて居られないで暇さへあれば一寸々々彼女の處へ出掛けていつた。每日のやうにつゞけて行くこともあつた。

「一度こゝで御飯の御馳走になりたいなあ。」彼は、そこで彼女が手料理のものを食べたかつた。

「え、こんな處で不味くなかつたら、どうぞ食べて下さい。」彼女はいそ〳〵して支度をするのであつた。それからは、そこで時々食事をしてゐた。

彼女は、中野の處から歸つてくると、すぐ翌日から輸出物の羽二重のハンカチーフの縁をかゞる内職をしてゐた。問屋から原料を持つて廻はつて來た。同じ露地の中にもそれをしてゐる家が段々あつた。茶の室の肱掛け窓を開けると、少しの空地を隔てゝすぐ見通しになつてゐる向うの隣の家では四十恰好の肥つたお神が二三人の娘等と家内中で一日それを本職にしてやつてゐた。

「あのお神さん、面白い女だ。酒が好きらしい。朝から晩まで酔ぱらひのやうな大きな聲で歌をうたつてゐる。」彼女はそんなことをいつてゐたが少しく考へ深さうに聲を沈めて、

「あなたが來て下さるのは好いけれど、昨日だつたかあの神さんの聲で、わたしなんか幾ら困つても妾なんかにはなりたくないといつて話してゐるのが聞えてゐました。それは、たゞ何かの話にいつたのでせうが、何だかわたしがこんな手内職をして、あなたが始終井戸端を通つて入つて來るのを見て知つてゐますから、そんなことでもしてゐると思つてやしないか、そこはお可笑なもので、こちらの僻見で當て擦られてゐるやうにも聞きとれる。」

彼女は少しは愚痴も交つてさういふのであつた。中野はそれを聞いて、尤もだと思つた。自分の方から彼女を出して置いて、又此處へやつて來ることは、世間體からいつても、今彼女がいつてゐるやうな境地に彼女を置くことになるのだ。それをさうでなくするには、彼女を元のとほりに自分の方へ呼び戻すか、さもなければ、奇麗さつぱりと關係を絶つてしまふべきである。彼もやゝ悄然として、

「うゝ、それは尤だ。やつぱり來ない方がいゝんだよ。」と、自分を責めるやうにいつた。

「なに、來て下すつてもいゝんだけど、あのお神さん地聲が大きいもんだから、何でもなくいつたのでせうけれど、わたしがやつぱりこんなことをしてゐると、氣が僻むんですよ。」

彼女はさういひながら、少しの間も手を休めるのが惜しいといふやうに、仕事臺に張つた白羽二重の縁にせつせと針を運んでゐた。朝から一日白い物を見つめてゐると眼が痛くなるといつて眼鏡をかけて、糸臺と首つ引きをしてゐた。

中野は、生活することが、いかに苦痛であるかといふことを、面りに見るやうで、ひどく感傷的な氣持ちになつてゐた。以前よく愛讀してゐた一葉の「にごり江」といふ作の中にある、銘酒屋の女と無理心中をする蒲團屋の源七の女房が悒せき裏店住ひをして下駄の緒かなんかを綯げる內職をしてゐるところが、息詰まるやうな生活苦を、さながらに描いてゐると思つてゐたが、彼はそれを思ひ出した。彼女をこんな慘めな境遇に置いたのは自分が全部の責任者でないまでも、少しは何とかしなければならぬ責任があつた。それをどこまでも思つてゐると、彼は堪えられない人間苦を感ずるのであつた。勿論彼女は、中野と同棲する前から既に今のやうな境遇に置かれてゐたのであつたから、それが一年餘の間偶々中野と一所に生活してゐる間だけ、どうかかうか手內職をしないで居られたのであつた。それを考へると、今の彼女の生活は彼女にとつて、ありうべきことなのであるが、中野は今までの行きがかり上無關心に觀過することが出來ないやうな氣がするのであつた。しかし、それも畢竟中野の感傷的氣分に過ぎないのであつて、現實的に彼女の生活をよりよくすることについては、どうすることも出來なかつた。

中野はそれから我慢して四五日も露地の中を訪づれなかつた。そしてその次行くと、彼女の方でも待ち焦れてゐたように、嬉しさを顏に浮べて、

「おや、いらつしやい。あれから、どうしてゐらしつて、仕事の方がいそがしかつたのですか。」といつたやうな調子であつた。

六

中野の兄は二十日ばかり滯在してゐて、五月の末に到頭横濱から出航渡米した。母も横濱まで見送つてもいゝと思つたが、又、そのために却つて強い離愁を感ずるやうでは母にも兄にも思ひ切りがよくないと思つたので、中野は、つい、大川を一つ向う岸に越すぐらゐに手輕にいつて二人に、それとなく氣勢を附けた。………すると、これは、その時から四年めの秋であつた。兄はシヤアトルの客舍で敢えなく急死してしまつた。

二十日ばかり東京に居る間にも格別見物にも出たかつた。一度中野と二人で淺草の方を見て歩いて、中野もその時はじめて十二階の頂上まで登つてみた。

「五六年働いで金が出來たら、歸りにゆつくり見物する。」といつて、殆ど家にばかりゐて休息してゐた。

兄を立たしておいてから一と月ばかりして同じ表町の近い處に移轉した。彼は、母と二人に女中を一人使つて、これから理想的な生活をしたいと思つてゐたのであつた。それで、もつと家らしい家を心がけてゐたところ、ちやうど新築の家が大日坂のすぐ上のところに出來てゐたのでそこを借りて引越した。それは中野も一寸知つた資産家で今度三戸ばかり新築した、借家の一つであつた。廣い宅地内の茶園畑の一隅に建てたもので、高い芝生の土手を取り廻はして、それに小松が並んでゐたりした。庭も小ぢろく、湯室が附いて四室ばかりの家であつたが、木の香の新しいそこに移り住んでみると、中野は、どうか、せめてこれくらゐの家に永續して住むことの出來るだけの生活をしたいと思つた。家賃

は一ケ月十四圓五拾錢であつたが、それでも前の家よりは七圓高くなつた。女中は一と月ばかり居た先のがいけなくて歸してしまひ、今度は出入商人の妹で十五六の小女を、向うから頼まれて置くことにしたが、母は、年寄りのやうな女の子だといふくらゐ、おとなしく、よく働いた。

兄からは四十日ばかりして無事に上陸したといふだけの葉書が屆いた。やがて、すが／＼しい夏が來た。中野は、出來るたけ一日々々の生活を樂しいものにするやうに努めようとしたけれど、何となく生存上の不安に襲はれてゐた。それは經濟的に生活の基礎が不安定であることが重なる原因であつたが、その基礎を築き上げるのは、結局文筆の人としての自分の價値を高めることであると思ふのであつたが、それは何處まで行つても容易に到達せられさうになかつた。彼は幾度となく深い失望に沈んだり、懷疑に陷つたりした。そして徒らに年ばかり取つてゆくやうな寂しさを感じた自分の生活はこれから先どうなつて行くものとも分らなかつた。勿論そんな不安や失望が發作的に襲ふて來ることもあつたが、まだこれでも三十には來年まで間のある年であることを思ふと、そんなに悲觀ばかりしてゐる譯でもなかつた。今に、何か、自分には大きな仕事が出來るものゝやうに考へられたり、また、何か知らん非常に幸福なことが自分を見舞ふて來るやうにも思はれたりしてゐた。けれども文筆の人としてまだ一家を成してゐるといふわけでもないので、專ら筆のみに依つて生活をすることは不可能であつた。それは、彼自身の技藝が未熟であるといふばかりでなく、その時代の社會狀態や文化の關係などから、人間生活に直接に用のないものを世間がある程度以上には要求しなかつたのであつた。

それは、日露戰爭の始まつた年であつた。その爲の不況からといふわけではなかつたが、その前から二年ばかり續けて從事してゐた、ある書肆の仕事も終了したところで、彼はその夏からは全く定收入の途が絶えてしまつた。そんなこ

とを中野は母には話さなかつたが、この後いつまでも母を自分の傍に置いておくことは出來ないとおもつた。郷里では、田舍のことだから、東京にゐるような面白さはなかつたが、生活の安定といふ點からいふと、中野の實家では、そんな不自由な生活をしてゐるわけでもなかつた。それとゝもに、わづかに五六ケ月ばかり東京に來てゐたのでは、話し對手になる馴染の出來ることもなかつた。どちらを向いても知らぬ者ばかりのところに年老いた母を孤獨にして置くことは、あまりに察しのないことであることが中野には分つて來た。生活の費に離れた彼は、これからは今までよりも一層苦しいやり繰りをしたければならぬことになつた。自分は爲方のないことゝしても母にそんな慘めな生活を見せることは堪えられないことであつた。九月の末に、郷里から、倅を東京の學校に越してゐる中野の義兄が見物かた〴〵迎へに來て、たうどう連れて歸つた。

いよ〳〵歸ると定るまでは、歸心矢の如くであつた彼女も、自分が歸つたあとの中野一人のことを思ふと、親心には、やつぱり氣がゝりであつたが、それも結局どうすることも出來なかつた。

七

明日は母と義兄とが歸國するといふ前日の午後であつた。ある知つた者の世話で來ることに頼んでおいた女中が來てくれた。それまで一と月ばかりの間、あんまり年の若い小女は寂しがつたりして、居着かないので、女中なしにやつてゐたのであつた。世話をしてくれた者の話では、今まで女中などにいつたことはなく、一度か二度嫁いたけれど、緣遠が惡くつて家に戻つてゐる。極く堅い家だけれど、こちらのお人柄も分つてゐるので、向うへもそのことをよく話して來てもらふやうに頼んだといふのであつた。

で、その日の四時頃世話をした者と一所に來たところをみると、なるほど、そんなに身柄のわるい者でもなかつた。その時中野は一寸出てゐたが、歸つて來た時にはもう臺所で用事をしてゐた。大柄の背の高い女で、氣のさすやうな大丸髷に結つてゐた。

中野は、それを一と眼見ると、心の中で、これは困つたなと思つたけれど、默つてゐた。その晩義兄などと皆で夕食の時に、母は彼女の容姿をしげ〳〵打ちまもりながら、名をたづねたり、身の上のことなども二三言訊いてゐた。

「わたくしは明日立つて歸りますから、どうぞ何分よろしくお賴み申します。」と、改つていつてゐた。

中野の母は、惡い血統とか甚く素性の惡い者でないかぎり、どんな者でもいゝから彼に早く妻を持たせたいと思つてゐるのであつたが、どこにもそんな心當りはなかつた。そして、いよ〳〵歸國するとなると、後髮を引かれるやうに心殘りであつた。

中野は、停車場まで見送つていつて、歸つて來たのは午過ぎであつた。五月の初から五ケ月も居る間に母に安心を與へたり、樂ませたりするやうなことは碌にしなかつた悔いが、母の立つて去つた後の家に戾つてみると、新しく胸に迫つて來た。しかし、それも自分の業が未完成で、從つて生活の基礎が不安定な爲であると思ふと、爲方のないことであつた。もし、その、生活の不安定な自分が全責任をもつて、東京のやうな荒海の中に漾ひながら母を扶養しなければならぬのであるとしたら、どんなに、自分達親子は慘めなものであつたかも知れぬと思つてみたりしたが、その點は、幸に母は鄕里に歸りさへすれば安全なのであつた。中野はそんなことの意識から、自分はどんな生活の冒險をしても顧慮するところはないのだと考へることがあつた。

折しも十月の初め頃によくある濕つぽい天氣模樣で、母の歸つたあとの家の中は殊更に、すうつとしたやうにうすら

寂しかつたが、昨日來た女中は、留守の間に座敷を清々するやうに奇麗に形付けてゐた。そして彼の歸つて來たのを氣輕な調子で出迎へた。彼女は、自分では三十二といつてゐたが、名をお牛といつて、變に意氣に聞える名であつた。一日二日居る間に性質は善良な者であることは分つたが大きな丸髷に結つてゐるのが、彼には厭に氣になつて仕方がなかつた。そして口元のあたりがお婆さん口で、全體の相好が頓狂面であつた。こんな者が丸髷頭で家に居られては、第一出入りの商人などの思惑もちよつと變であると思つたが、それでゐながら、その女が家にゐるのが何となく樂みのやうでもあつた。もし、うつかりしたことをして、後に退引ならぬことになつては困るといふ臆病な心がわづかに中野の行狀を抑制してゐるばかりであつた。そして又、それくらゐの年頃の男と女とが二人きりで一つ家の中に起臥してゐて、どうもないのが不自然なやうでもあつた。夕食の後など二人の間に互の身の上ばなしが交換されたりした。

「お牛さんもまさか、今まで一人で居たわけでもあるまい。どうして家にゐたのだい。」

「ずつと家に居たんですよ。ほゝゝ」

「だれもそんなことを本當にするものはない。」

「でも本當なのですもの。」

「いや、それを強ゐて訊かうとも思はない。」

お牛は笑ひながら、

「本當ね、わたし東京には十何年も居なかつたのです。」

彼女の家は本郷の湯島あたりと、最初世話をする者から聞いてゐた。そこに母親と、まだ祖母なども一所に居るといふことであつた。

「そんなに長い間東京に居なかつた。何處に嫁いでゐたのだい。」
「嫁いてゐたのぢやないのです。」
中野は冷笑するやうに、
「そんな言譯をしなくつてもいゝ。どこにいつてゐたの。」
「足利。」
「織物の盛な處だな。」
彼女の話では、そこに父親と一緒にいつて何か商賣をしてゐたが、父親が死んでからも自分一人でしばらく繼續してゐたが最後にいけなくなつて去年東京に戻つて來たといふのであるが、はつきりしたことは分らなかつた。中野もそれを、もつと突留めて訊かうとする興味も持てなかつた。
「あなた、どうして先の奧さんとお別れになつたんです。大變取り廻はしのいゝ、賢い人だつたといふぢやありませんか。」
「うゝ、さうでないこともないが……」
中野は、彼女を知つた者の中に、そんな噂をしてゐるものがあると思ふと、やつぱり惡い氣はしなかつた。そして、その評が當つてゐると思つた。
「……もつと若くつて好い女が欲しいんだ。」
お半は苦い笑ひやうをした。そんな會話の交換は、二人をして、一週間も經たない間に、ある夜、彼等の寢室である八疊と六疊との境界の襖を越えしめた。中野にしては、勿論それは唯本能的の戯れに過ぎなかつた。秋の夜のうそ寒い

衾の間觸りが、そんな欲望を唆つたのであつた。

「いけないわよ、いけないわよ。わたし、そんなことをしたら、先の奥さんのやうに素直に歸らないわよ。」

中野は、そんな場合を豫想して、此の間から躊躇してゐたのであつたが、それは何でもないことであつた。そして一ト月ばかりさうしてゐる間に、何につけて、彼女の情味が段々深くなつて來るのが彼には氣づかひであつた。ほんの着替えだけ持つて來てゐたので、だん〳〵寒くなるから裕衣を取つて來るといつて、一度自家へ歸つた時母親と一所に戻つて來た。

「娘がいろ〳〵御厄介になります。」

といつて、母親は禮を述べた。まだ五十をちよつと出たくらゐで、小肥りのした上品な婦人であつた。母親に比べると娘のお牛の方が餘程生まれ落ちてゐた。

だん〳〵日を經るにつれてお牛が腹の無い、氣立ての好い者であることも分つたし、祖先が徳川の士族であつたりすることもわかつたが、彼女ときた曖昧な同棲生活をする氣にはなれなかつた。それに、この先、中野の生活はいよいよ切迫して來ることになつてゐた。それをお牛に知らしたくなかつた。しかし、彼女に知られては困るから知らしたくないのでなく、お牛とはまだ世帶の遣り繰りを語り合ふほどに親密になつてゐたわけでもなかつた。中野は、そのことを思ふと、やつぱり先の女の方が張り合ひもあるし、又目先きも利いてゐて、相談効ひがあるとおもつた。

お牛に淡い興味を持つてから、山吹町の露地を訪れるのも、いくらか間が遠くなつてゐたが、この先、とても、今の處では持つていけさうにない世帶を仕舞ふについては先の女よりほかに話してみるところがなかつた。

「どうも今居る女が變な女なんだよ。なに、別に質のわるい者でもないが、このまゝ二人きりで長く居つたら、第一世間體もよくないし。それに私も定つた收入が、どこからも全く入らなくなつたから、爲方ない、當分又、元の下宿屋へ

でも嫌がろうと思ふ。」

「そんなこともないでせう。一旦持つた所帶を仕舞ふ方が餘程世間體がわるい。あなたさへ堅くしてゐれば、そんな人が居つたつて一向差支へないぢやありませんか。よく動いてくれゝばよござんすよ。」

「えゝ、それは、氣さくによく仕事はしてくれるけれど。何だか大きな丸髷をてら／＼さしてゐるんだ……」

「ほゝゝ、何かお妾でもしてゐた人でせう。足利へいつて西洋料理屋をしてゐたといふんでは。」

「うゝ、どうもさうらしい。なに、それだつて構はないけれど。」

お半は黒縮緬の大ぶ疲れた羽織を着て來た。

「わたし、一ぺんあなたの家へ行つてみませうか。どんな家かいつてみたい。」

「あゝ、來て見てもらひたい。あの家にも長く居られないかも知れぬ。」

中野は、本當なら、母が居る時分に彼女を伴れて來て會せてもいゝのだと何度思つてみたか知れなかつた。けれども、自分には、彼女よりももつと優れた女が、奇しき縁の糸に操られて何處か未知の處に存在してゐるやうな氣がしてならぬのであつた。

その晩夕飯後に彼は出直して彼女を迎へに來た。そして家へ連れていつた。

「お半さん、今晩はお客樣をつれて來た。」彼は、わざと朗らかな調子でいつた。

彼女は座敷の端に行儀よく坐つて輕い挨拶をした。お半は妙に顏の神經を硬ばらせながら、腹のない蓮つ葉な調子で、

「よく來たわねえ。」といつた。

「へえ、なか／＼好い家ですねえ。」彼女は、坐つたまゝ押入れや天井などを見廻はしてゐた。

「まあ、こつちい來て見て頂戴。好い家でせう。」

「えゝ、ありがとうございます。………こゝを仕舞ふのは惜しい家ですねえ。」
「さうなんだけれど……仕方がない。」
中野は、お半にも、もう此の間から、今月中で、こゝの家は都合によつて畳んでしまふことだけは話して置いた。
山吹町の女は、それから直ぐに歸つてしまつた。中野のこぢれた本能的な欲望は、二人の女を見ると、無價値なお半一人だけを見てゐる時よりも、いくらか、ちがつた刺戟からお半に對する興味を唆られた。

八

お半を出して歸すについては、山吹町の女が相談に乘つた。
「お半さん、あんたにも長く居てもらひたいんだが、私もこれから先、家を持つて食つていけるか、どうかさへ分らない場合なんで、まあ暫くこゝを仕舞つて又下宿屋へでもゆかうかと思ふ。二た月ばかりの間大變よく氣を附けて働いてもらつて、有難かつた。」といつて、中野はその月の給料のほかに倘ほなにがしかの金を包んでお半の前に置いた。
そのことは、お半も、もう此の間から、なしくづしに聞かされてゐたので、別に驚きもしなかつたし、中野も、先の女に別ればなしを持ち出す時ほど心臟に喰入つた問題でもなかつたので、事もなくさういつて退けた。
「さうですか、こんなに戴いては、どうも濟みません。」
「なに、もつと、どうかしたいんだが、今の私では思ふとほりにならない。」
「ほんなら戴きます。どうも有難うございます。」
お半は、それでもさすがに腹の中には、いろ〳〵に怨みがあつた。その夜寢てからであつた。彼女は袂ごしに
「わたしは餘程馬鹿です。」といつにない荒い調子でさういふのであつた。

「どうして？」中野は襖のこちらから訊いた。

「本當にわたしは馬鹿だとおもふ。」

中野はなるたけそつとして置く方がいゝとおもつたが、それでもやつぱり氣になるので、默つてゐられなかつた。

「なぜ。」

「なぜつて馬鹿です。……自分の身のほども考へないで、あなたに思ひをかけたりなんかして。」

中野は、どの女に對しても濟まないやうな氣がした。

「そんなことはないさ。私だつて困らなかつたらお半さんに長く居つてもらひたいのが山々なんだもの。まあ諦めてもらふさ。………」

彼は寢床の中で身體を海老のやうにして、

「あゝ寒い…………お半さん………お半さん、一寸こつちへおいでよ。」

お半は暫く默つて答へなかつた。

それでも翌日になると、三十過ぎた女だけにわりに捌けたもので、お半は例の黒縮緬の羽織を着て改つた別れを告げて歸つていつた。

「あなた下宿屋にいつたら葉書で敎へて頂戴。お邪魔に行きますから。」

「あゝ、知らせる。遊びに來てくれたまへ。」

中野は、彼女が、執拗に附き纒ふやうな質の惡い女ではないことは分つてゐたが、でもこんな女にいつまでも馴々しくされると困るとおもつたが、憎む氣は少しもなかつた。

お牛が歸つてしまふと、これでも家の中が急にがらんと寂しくなつた。中野は耐え性もなく、人ツ氣の絶えてしまつた家に一人でゐる心もしなかつた。そしてその晩早速先の女の處をおとづれた。彼女は二三日前から先の山吹町から音羽の九丁目の母や兄と一所に家を引越して居た。

そこへいつて、お牛が無事に歸つたことを話すと、彼女は心が輕くなつたやうな顏をして、

「がら〳〵した人の好い女のやうだつた。」といつてゐた。

それから家の中では思ふやうに話が出來ないので二人は連れ立つて外に出て歩いた。彼等は互にどちらが口に出すともなく、又一所になるよりはかなかつた。

中野は、灯影の暗いところへ來た時に、何となく腹に寢かしておくことが出來ないやうな氣がして、ふら〳〵とお牛とのことを口に出してしまつた。と、彼女は歩いてゐた足を思はず停めて、

「ぢや、やつぱりさうだつた。厭になつてしまふ。わたし、きつとそんなことぢやないかと思つてゐたんだ。………もうわたし、あなたの傍に居る氣もしない。」

彼女はすつかり氣のなくなつたやうにいふのであつた。中野は、飛んだことを饒舌つてしまつたとおもつた。

「だつて、いゝぢやないか。もう去つてしまつたんだもの。」

「去つてしまつたつて、これからだつて、あなたのことだから會ふと思へば、どうでも出來る。」

「又會ふくらゐなら、何も別れて歸しはしないぢやないか。」

彼女は、忽ち湧いて來た胸の不快に、他のいふことは碌に耳にも入らぬやうに、

「わたし、もうあなたとかうして歩くのも厭になつてしまつた。………あなたもう自分の家へお歸んなさい。わたしもう自家に歸りますから。そしてもう、あなたとは、これつきり逢はないことにしませう。………わたしがやつぱ

り自分でいけないんだ。」
彼女はもう思ひ定めたやうに述懐した。
「そんなことをいつたつて爲様がないぢやないか。お牛を返したのは、やつぱりお前の方が好かつたからぢやないか。
は丶丶丶」
「厭ですよ、もう。わたし、あんな女と比べてもらひたくない。………あんたよく來たわねえ」………と、彼女は、此の間の晩、中野の家に來て、はじめてお牛を見た時、お牛のいつたことを、憎々しく口眞似しながら吐き出すやうにいつた。お牛は下口唇が變な形に突出てゐたので、そんな口つきをして見せた。
「あなたもう、こ丶からお歸んなさい。そしてもうあなたも明日から、わたしの處へなんか來ないで下さい。」彼女は頑強に言つた。
そこの坂の上にすぐ中野の家はあつた。中野はその晩足ついでに彼女を引張つてともかくも自家へ伴れて來るつもりであつた。彼女もそんな心であつた。
「ぢや俺は、そんなことをいふのではなかつた。」
彼はだいぶ悄氣てゐた。
「いはないたつて同じこつてす。」
「でも、いはなけりや、お前は知らないでゐるもの。」
「一體、どのくらゐそんな關係をしてゐたんです。」
「う丶、どのくらゐつて、………たつた五度ばかしだ。」
「五度も！」彼女は本當に驚いたやうにいつた。

「だつて、お前が先に嫁いてゐた時には四年も五年も居つたぢやないか。」

「それは、ちやんとして嫁いていつたのですもの。あなたのとはちがひます。」

「いや、ちがはない。やつぱり同じことだ。」

「それごらんなさい。あなたゞつて好い氣持ちはしないでせう。そして、その爲めに、わたしが、どうあつてもいけないといつて、わたしを歸したでせう。とにかくもう長う短うはないで、これでお互に別れた方がいゝんですよ。……わたしも折角かうなるのもお互に盡きぬ縁があるのだから、親や兄姉にも一應相談して、又一所になるものなら一所になつてもいゝと思つてゐたところだけれど、お牛とそんなことをしたと聞いて、もうあなたに、愛想が盡きた…又…又どうしてそんなことをする氣になつたんでせう。」

「それを今更いつたつて爲方がないよ。」

「あなたが、お牛とそんなことをしてくれなければよかつたんだがなあ。」

「だからもうしないよ。」

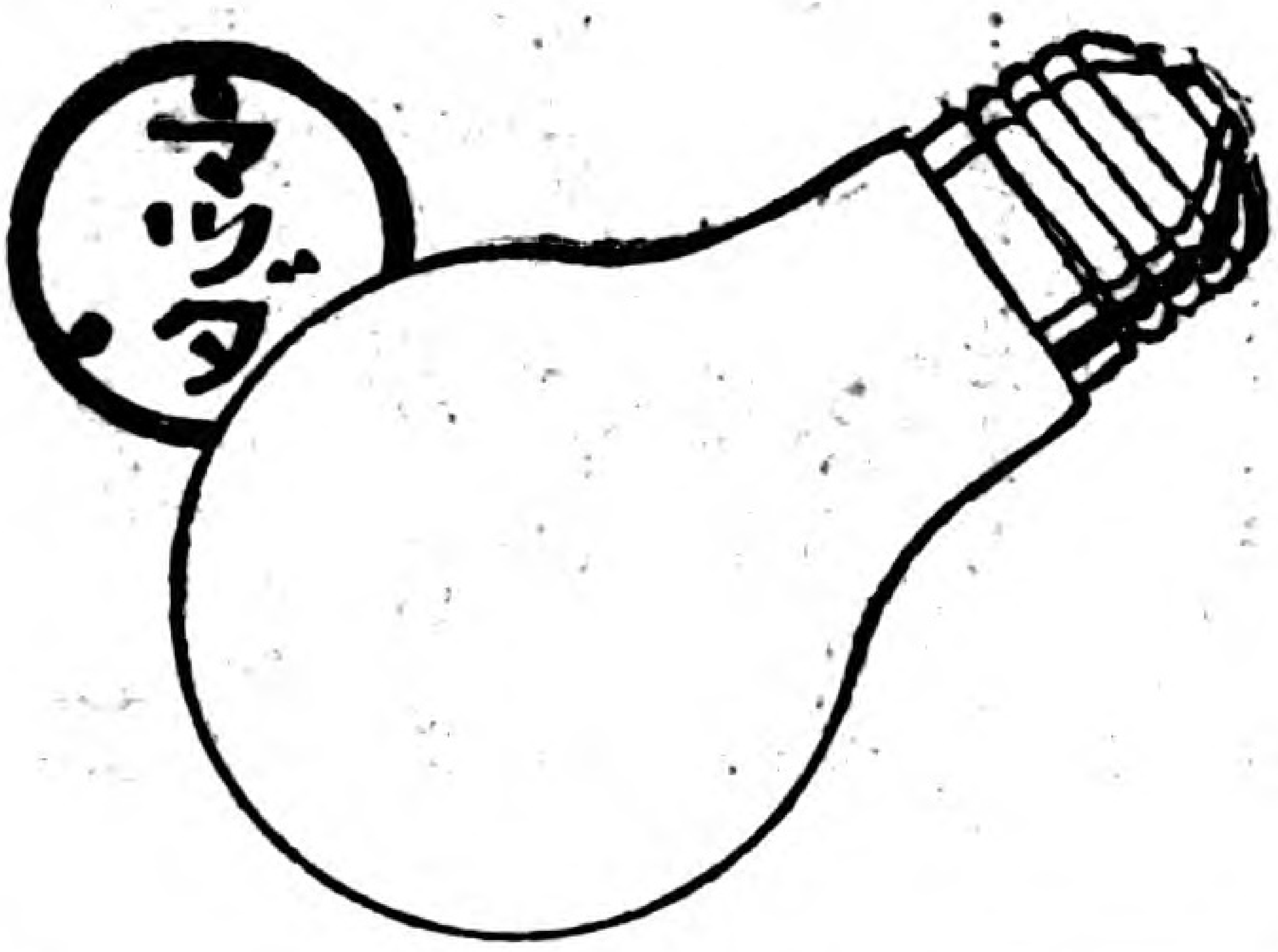
「もう、しないつて、もう駄目です。」

「おい、そんなことをいつまでも夜道に立つて、いつてゐないで、これから、自家へ行かうよ。」

「厭ですつたら、わたしもう、あなたといふ人を見るのも厭です。わたし自家へ歸りますから、あなたも一人で自家へおかへんなさい。」

彼女は氣づよくいひ放つて、暗い方へ、すたすた歩いていつた。

「おいおい。ねえおい！」と、彼は力をこめた聲で四邊を憚りながら、背後から呼んでゐた。（おはり）



マツダランプ大値下

大正十五年十二月一日ヨリ



新値段

マツダランプ	二四燭以下	四五錢均一
新マツダランプ	一二・五 二〇 三〇ワット	四五錢均一
マツダ瓦斯入	三〇 四〇ワット	五〇錢均一
新マツダ瓦斯入	三〇 四〇ワット	五〇錢均一

神奈川縣川崎市
東京電氣株式會社



山形

志賀直哉

その夏、凡そつまらぬ事から、私は父と衝突した。一週間程して、父は宮城縣の方に新しく買つた小さい銅山を一緒に見に行かぬかと誘つた。私は不思議な氣がした。どう云ふ心持から父がそんな事を云ひ出したか分らなかつた。然し、私は自分が狂暴とも云へる態度を父に對し、とつた事を心ひそかに悔いてゐたから、喜んで承知した。

夕方の汽車で上野からたつた。父は上等に乘り、私は中等に乘り込んだ。父はSM鐵道の専務取締をしてゐ、日本鐵道といつてゐた頃で此鐵道のパスを持つてゐた。然し一緒に行く旅で別々の客車に乘せられた事は私の心を淋しくした。

その五六年前、青森から上等で一緒に歸つて來た經驗があるので、此事は何故か氣輕には考へられなかつた。召使ひかなぞのやうにも思へ、愉快でなかつた。然し實際、一人づつで行くのは互に氣樂だつた。それ故に父もさうしたのだらうと思つたが、それなら、わざ〳〵旅に連出す氣持が私には分からなかつた。

翌朝仙臺で降り、其日は其所で一日暮らした。父は鑛山監督所に出掛けた。

私は宿で湯に入らうとした。先に女が二人ゐたが、關はず入ると、その内その連れらしい女が又五六人入つて來た。大きな風呂場ではあつたが三十から五十位の女達で其所が一杯になつた。ダブ〳〵した大きな肉體が大聲に笑ひ合つた。私は壓迫を感じ、夢の一場面のやうに思つた。

午后私は北一番町といふ所にゐる祖父の妹を訪ねた。八十に近い大伯母は不意の訪問を甚く喜んだ。私は其家の貧棒たらしい空氣を餘り好まなかつたが、其日は夕方まで尻を落ちつけた。大伯母は一分銀、一朱銀など云ふ錢を私に吳れた。

翌日小牛田まで行き、其所で父は用があり、私だけ乘合馬車で先に鳴子溫泉へ向かつた。

「商賣は何んだつす？」並んで腰かけてゐた五十ばかりの男が話しかけた。

「何にも商賣はしてゐない」

「お前え位の年で商賣のない人間はあるめえつさ。商賣もなしになんで旅なぞしてゐる」

男は私が隱してゐるとでも思つたらしく、一寸不快な顏をした。

「未だ學校にゐるんだ」

「ふうん」男は意外なやうに私の顏を見てゐたが、今度は家の商賣を訊いた。

「親爺は鐵道へ出てゐる」

「さうか。矢張り機關車にでも乘つてゐるか？」

「機關車の方とは異ふ」

一二三年前函根で無數の金ぶん〳〵が一つの木にゐるのを、目的もなしに捕つて壜につめてゐると、見てゐた年寄りが、それは一升幾ら位に賣れるのかと訊いた事がある。それを憶ひ出した。

途中たて場茶屋で晝食をし、又、同じ馬車に乘つて進んだ。

鳴子は如何にも田舍々々した溫泉場だつたが、賑はつてゐた。間もなく父も來た。

父と私とは一緒に東京を出て、出來るだけ離れて來た。然しその晩は珍らしく和らいだ氣持で話し合つた。

銅山の話から、

「足尾は最初お祖父さんが眼をつけ、古河と一緒に始めなすつた山だ。その頃のS家（舊藩主）はそんな事でもしなければ迚も立ち行かない財政狀態だつたのだ」そんな事を父は話した。それから私の家も其頃非常に貧乏だつた事なども色々話し、

「お前のおつ母さんが來た時はそんな風だつた」と云つた。亡き母の事である。私は今の母が義理の關係として此上を望めぬ程よくして吳れるのに對しても、亡き母の事は一切口にしなかつたが、今父の口から僅かでもこんな風に云はれると、矢張りわけの分らぬ感動を覺え、やがて此父に對しても、父子らしい氣持が湧いて來た。

翌日早起きし、四里ほどある熊澤といふその銅山に出かけた。木の繁つた美しい山で、その邊では「澤」と云つてゐる小さな流れが幾つかあり、青葉を透かした夏の光りが水の上に踊つてゐた。深い苔が岩石を被ひ、その上にがくの花が美しく咲き亂れてゐた。私達は澤づたひに登つて行つた。

「これが鑛脈です」案內に立つた技師は岩の間に酸化し、黑くなつてゐる、さういふ場所を所々杖で示しながら行つた。

「この脈がみんな中まで續いてゐれば大したものですが」と技師は笑つた。

然し父は最初から此小さな鑛山にさう大きな期待はしてゐなかつた。只、父は今まで、使用人として會社の爲め働いて來たが、近く會社の仕事が政府に買上げられるので、今度は自身の仕事を何かやつて見たい、そんな氣持だつた。そして前から知り合ひの足尾銅山技師長の世話で此山を買つたのだが、その人もいふやうに大きな利益もない代り、危險な仕事とも考へてゐなかつた。

三年程前私は内村鑑三、安部磯雄、片山潜、木下尙江等の渡良瀨川鑛毒事件の演說を聽き甚く惹き込まれた。その後被害地を見に行かうとし、父と其事で烈しい口論をした。

今の父はその時の事を全く忘れたやうに見えた。これはそれに拘泥されるよりはよかつたが、私は前とさういふ事には少しも考へを變へてゐなかつたから、父と同じ心持で此鑛山を見てはゐられなかつた。父にとつて一つの新しい樂みである鑛業が、私には甚く冷めたい氣持でしか見られなかつた。

採鑛區域を大體一ト通り廻はつた。山の脊から南側は他の所有で、其所は木も伐拂はれ烟突から烟を上げたバラック式の建物など所々に見えた。それは何んとなく鑛山らしい眺めで、早晩、此方側もそんなになるのかと思つた。

私達は木道を引き込んだ坑内にも二つ三つ入つて見た。そして其晩は坑夫の合宿所に續いた事務所に泊つたが、蚤にせめられ、よく眠られなかつた。

翌日鳴子に歸り、その翌日は、鬼頭の間歇溫泉を見に行つた。その途中、これも熊澤と一緒に買つた極く小さな鑛山を見に寄つた。子供のある夫婦、その他二三人の坑夫がゐて、高さ一間、幅何尺、奥へ一尺につき幾許といふ請負仕事で掘つてゐた。私達は一寸見て直ぐ出掛けた。

或る流れを渡る時、屈強な若者が穂が長く握りの短かい魚扠を逆手に持ち、一間ばかり落ちる水の瀧壺へ飛込んで鮭を捕つてゐた。見る間に二疋突いたが、水中に潜つて魚を追ひ廻すやり方が、如何にも原始的で勇敢な感じがした。私は水滸傳の張順を憶ひ出した。

鬼頭は地理でその名は子供から馴染深かつたが、一軒小さな宿があるだけで、淋しい場所だつた。熱海を見た眼には時々吹き出す間歇泉も噴水に過ぎなかつた。

東京を出て既に六日になる。私達はこれで來た目的は果したわけで、翌日は又もと來た道を引返へす事と思つてゐると、その晩父は不圖想ひついたやうに、こんな事を云つた。

「お前は歸り、山形へ寄つたら、どうだ」

山形とは私が子供から一緒に育つた四つ上の叔父の事で、叔父は日露戰爭で片眼を失ひ、今は退役大尉で山形にゐるMといふ盲人の禪僧についてゐる。

私は父と一緒にゐる事を今はさう苦にしてゐなかつたが、久し振りに親しい叔父と會ふ事も嬉しかつた。

父は大體の旅費を渡し、

「費つたものはちやんと書いて、殘りは返せ」と云つた。

父は乾度これを云ふ。私も金には几帳面だつたので、これを云はれると、いつも侮辱されたやうに感じた。

翌朝父に別かれ十六七里の路を一人、俥で行つた。その六七年前奥羽線のない頃私は此邊を一度旅した事がある。六石田から二日がけで最上川を下り、酒田から象潟を通り本庄まで十八里の路を俥で行つた。俥ではそれに次ぐ大旅行だつた。此日も尻が痛くなつて閉口した。新庄から汽車に乘り、山形の叔父の家に行つたのはもう夜だつた。叔父は裏に

畑のある素人屋の二階に住んでゐた。

私は私の不意の訪問を叔父が驚くだらうと思つてゐた。所が、叔父は、「來たか、疲れたらう」こんな風に恰も豫期してゐたやうなことを云つたので、初めて私は今までが總ては豫定の行動だつたと云ふ事にはつきり氣がついた。

叔父は父から手紙を受取つたのだ。叔父は自分の師匠であるMさんによく話して貰はう。然し露骨にさう云へば順吉は恐らく承知しまい。何氣なく此方へ寄越してくれないか。こんな返事をしたのだと私は察した。それで何氣なく私に鑛山行きを誘つたのである。そして何氣なく山形行きを勸め、私は何氣なく此所へ來て了つたのだ。さう私は思つた。

私は叔父にその事を訊いては見なかつたが、それに違ひないと信じ、さう自分が扱はれた事を快からず思つた。

翌朝私達はその禪僧のMさんを訪れた。持寺は三里程離れた川岸にあつたが、Mさんは町中の仕舞屋に住み、此所の聯隊で講話を續けてゐた。盲目で僻地の寺では不便でもあり、且つ、息子が從業員で山形の驛につとめてゐる關係もあるらしかつた。

顏の長い何所かすつきりした感じの人だつた。初めからの僧侶ではなく、幕府の旗本で、儒教で修業した方だつたが後年失明して禪へ入つたと云ふ話だつた。話し振りや樣子にも江戸ツ兒といふ風が殘つてゐた。

「秋になつて秋刀魚を憶ひ出すと一寸東京も戀しくなるね」こんな事をいつて笑つた。

「腐るかも知れませんが、お送りして見ませう」

最初そんな話をしてゐたが、Mさんは段々話を目的へ近づけようとした。Mさんは私が此四五年日曜毎に通つてゐる基督教のUさんの噂などを始めた。

「Uさんに社會主義に就いてはどう思つてゐるかね」

私はUさんの信仰と社會主義とは相容れないものがあり、毎日曜來てゐた中年の女の主義者をその理由で斷つてゐたのを見た。そんな事を話した。

「あなたはどう思ふ」とMさんは追求した。

私は父や叔父が私を社會主義にかぶれて、といふ風にMさんに話してゐるのだと思つた。

私は父と衝突する場合、父の尊敬してゐるものと自分の尊敬してゐるものとの相異を云ふのが一番手ツ取り早く、結局其所へ議論を落として了ふ。

「昔は殿様の御馬前で討死するのを名譽に思へたかも知れませんが、今學校にゐるあの馬鹿な連中の爲めに討死して私が名譽と思へなくなつたのは當り前ぢやあ、ありませんか」

こんな事も云つた。私の通つてゐた學校では大名華族の子弟が半數以上を占めてゐたからだ。かういふ私の考へ方は私の實感で、社會主義とは何の關係もなかつたが、父はそれをさう解して居たのだ。

私はMさんとそんな話をするのがいやだつた。私はなるべくそれを避け不機嫌な顔をしてゐた。

「兎に角」とMさんは云つた。「學生の間は學生らしく、學校の方だけを勉强して、大學でもいゝ成績で卒業するのが第一の急務だよ。社會の事は社會に出てからやるとして、今は勉强だけをおやり、それが一番だ。それに何といつても今は肩書の世の中だから、大學は何を措いても卒業する事だよ」

私は甚く不愉快になつた。こんな事を聽く爲め、山形まで連れ出されたかと思ふと腹が立つて來た。

間もなく私達はMさんの家を出た。叔父は歩きながら

「お前はMさんの話をどう思つた」といつた。私は直ぐ
「非常に下らないと思つた」と答へた。
叔父は返事をせず、不快な表情をした。
午后私達は二三里あるMさんの持寺に出かけた。川で泳ぐのが目的だつた。古いいゝ寺だつた。さびた庭があり、池には紅白の蓮が咲いてゐた。鐵道に出てゐるMさんの若い息子も來て、三人はわきの割りに流れの强い川で日暮れまで泳いだ。
暗い靜かな晩だつた。三人は書院に寢ころび、氣樂に話した。池の蛙だけが八釜しく、然しそれも時々グググググッと群を拔いて强く鳴くのがあり、それが鳴くとぱたりと皆鳴き止むので急に森と其所らが靜かになつた。少時すると、恐る〳〵又鳴き出すのがある。その聲が二疋になり、五疋になり、十疋になり、三十疋になり、忽ち、又元の八釜しい合唱となる。「又、親方が鳴くぜ」こんな事をいつてゐるとグググググッとそれが鳴き、ぱたりと又皆鳴き止む。何遍でも繰返した。
十時頃三人は蚊帳に入つた。
翌日もよく晴れた暑い日だつた。Mさんの息子は勤めで早く歸り、私と叔父とは又泳ぎ、午近くなつてその寺を出た。
「川魚料理で名代の家がある。寄つて見ようか」と叔父が云つた。
私達は一里程來てその家へ行つた。料理屋は素人屋のやうな家だつた。門を入ると捨石と松の木とで出來た小さい馬車廻しがあり、その向ふに式台つきの大きな玄關がある。夏の眞晝でひつそり閑としてゐた。
二三度叔父が大聲に呼んで、漸く五十ばかりの野暮なりに品のいゝ内儀さんが出て來た。

私達は二階の廣い座敷に通された。そして先づ料理よりも氷水だつた。

料理は却々出來なかつた。家の中は再び森閑として了つた。主人が要るだけの川魚を捕えに行つたのではないかと思はれる程だつた。

私は座蒲團を敷居に置き、片足を縁に出し、脊を障子の桟に持たせてゐた。

「お父さんとの衝突もいゝが……」叔父が云ひ出した。「少なくも、事、〇〇に關するやうな事を云ふのはよせよ」

「それは此方(こつち)も云ひたくないが、考へ方の相違がそんな事で一番簡單に明瞭(はつきり)するから、つひ出るんだ」

「然し兎に角さういふ事は口にするなよ」

「思つてる事は口に出るからね」

「お前はそんな事を始終思つてゐるのか」叔父は口調を烈しくした。

「常に思つてるわけぢやあない。そんな事を自分の仕事として決して焦點にも何も置いてはゐない。然しお父さんの方でさういふ事に拘泥して、さういふ點で此方を非難して來れば、此方も正直な事をいふより仕方がないぢやあないか」

「貴樣はどうしてもそれを云はなければゐられないのか」

「話が其所まで行けば、右の事を左といふわけには行かない」

私が此言葉を云ひ切らない内に叔父は怒鳴つた。

「馬鹿!」

同時に底の厚い氷水のコップが飛んだ。私は僅かに首を曲げ、それを避けた。コップは頬をかすめ、前の欄干に當たり、更に庭へ落ち、飛石の上で烈しい響と共に碎けた。

私達は興奮し、默つて了つた。

私の眼には自然に涙がにぢみ出た。私は顏を外向け、

「考への上の事は仕方がないぢやあ、ないか」と云つた。

叔父は返事をしなかつた。そして二人は一緒に聲をあげ、泣き出した。互にもう何も云はなかつた。歔欷は却々止らなかつた。

間もなく膳は運ばれたが二人には全く食欲がなくなつてゐた。大きな香魚、そんなものを私は無理に口へ運んだ。

其所から山形までは尙一里半程あつた。私達は前後三四間離れたまゝ默々として炎天の下を步いて行つた。興奮のあとの淋しい靜かな氣持だつた。私はぼんやり、煮賣屋の大きな皿に水に住む源五郞と云ふ蟲が煮つけになつて竝んでゐるのを眺めたのを覺えてゐる。

叔父は立止まつて私を待つてゐた。そして「お前はもう今晩歸れ」と云つた。

私は肯いた。私の氣持は今は不思議な程和らいでゐた。私は叔父に對し何の不愉快も感じてはゐなかつた。私は私自身の考へを所謂危險思想とは考へなかつたが、このまゝに若し一方に押進んだ場合、自分は誰よりも先づ、此叔父に屹度殺されるだらうと思つた。私はそれに殆ど恐怖は感じなかつた。恐怖を感ずるといふ事は許されなかつた。然し孤獨な淋しい氣持になつた。

叔父の下宿へ歸り、支度して、私は一人停車場へ向かつた。



溫室の前

岸田國士

大里貢
同　牧子
高尾より江
西原敏夫

一

東京近郊である。

一月中旬の午後五時――

大里貢の家の應接間――石油ストーブ――くすんだ色の壁紙　線の硬い家具――正面の廣い硝子戸を透して、溫室、グリーンハウス、フレム及び花壇の一部が見える。

硝子戸に近く、高尾より江――二十五六才に見える――が、ぢつと外を眺めてゐる。さつぱりした洋裝。

――間――

大里牧子――二十八九歳ぐらゐの目立たない女――小走りに現はれる。

牧子。どうも、お待たせしました。兄が何んにも云つてくれないもんですから、間誤ついちまつて……。（兩人腰をおろす）普段から、兄は兄、あたくしはあたくしでせう。何一つ手傳はせないんですの。あたくしも、また、それをいゝことにして、自分勝手なことばかりしてゐるんですけれど……。ですから、かういふ時、困りますの。でも、留守にすることなんか、滅多にないんですものね。さうですわ、こゝへ引込んでから、今日が始めてぐらゐですわ、東京へなんぞ出ましたのは……。

より江。もう、おからだの方は、すつかりおよろしいんですの。

牧子。だらうと思ふんですけれど……。その後、風邪一つ引きませんし……。あの顔色ですもの、大丈夫でせう。

より江。ほんとに、長らくお患ひになつてたなんて思へませんわ。でも、まあ、あなたが、よく……。

牧子。えゝ、これも、仕方がありません。――なんていふと、えらく悟つたやうですけれど、あたくしたちは、御承知の通り珍らしく身よりつていふものがないんですからね。物心のつく頃から、兄一人妹一人で、育つて來てるんですから、かうして一生お互の世話になつて暮すなんていふことが、それほど不自然には思へないんですの。（間）それや、兄さへその氣になつてくれゝば、兄の世話は「その人」に委せて、あたくしは、外へ出るなりなんなり出來ないこともありませんけれど――その爲に、一通り、覺えることは覺えておいたんですのよ――さあ、それが、何時の役に立ちますやら……。

より江。タイプライタアもなすつたんですつて……。
牧子。タイプライタアは邦文の方だけですけれど、速記も序に習ひましたし……。これに、何時ぞや、神田でお目にかかりましたわね、あの頃は、ミシンをやつてましたのよ。
より江。さうですつてね。あれから、もう四五年になりますか知ら……。逗子からお通ひになつてたんでせう。
牧子。えゝ。兄の病氣が、まだひどい頃でしたっ晝間だけ看護婦についてゝ貰つて……。（間）それでもあの頃は若う御座んしたわ。

（沈默）

より江。でも、不思議ですわね、こんなところで、またお目にかゝるなんて……。標札を見ると大里貢……なんだか聞いたことのある名前だとは思つてましたの。毎日通るんでせう。あなたのお兄樣だと知つたら……。それでも、あなたが御一緒にいらつしやるかどうかわからないし……。あれで、昨日、停車場であなたに御目にかゝらなかつたら、今頃は、まだ知らずに、あの前を通り過ぎてるんですわね。
牧子。でも、あたくしを御覧になつて、どうお思ひになつて……。（間）女も、かういふ生活をしてるとおしまひですわ。（間）さう云へば、あなたは、いま……なんて云つたらいゝか知ら……どういふ方のところへ……。
より江。あたくし……獨りなの。（間）いやですわ、そんな顔して御覧になつちや……。
牧子。でも……。
より江。そんな筈ないつておつしやるんでせう。さうね、御存知なのね。學校を出るとすぐ行くには行つたんですけれど、ぢきに出ちまひましたの。出されちまつたのかも知れませんわ。それから、ずつと、かうして働いてるんですの。

牧子。働いてらつしやるつて……。まだそのお話伺つてませんわ。
より江。銀座のピリエつていふフランス人の經營してる化粧品店、御存じない。あの店にゐるんですのよ。
牧子。まあ。
より江。母と二人、結構暮して行けますわ。男の厄介になんてならないだけましですわ。
牧子。ほんとに……。
より江。それはさうと、兄さまの、此の御商賣も、なかなか面白さうですわね。御繁昌で結構ですわ。
牧子。ところが、商賣つていふのは名ばかりで、ほんとは道樂なんですの。ですから流行らないのは我慢ができるとして、根が無愛想なたちでせう、一度來たお客様は大概、二度と來なくなつてしまふんですの。（間）でも、あなたのやうなお客様があると、それや、よろこびますわ。いゝえ、それがね、お交際が丸でないんですからね。口に出しては云ひませんけれど、やつぱり淋しいんでせう。學校時代のお友達も、こゝへ來てから訪ねて下さる方はたゞの一人もなし、あたくしがまた、引込思案なもんですから、御近所づきあひさへ、ろくにしない方で……。（間）それに、また、いろいろお話もあるでせう。ほんとに、時々、いらしつて下さいましね。毎日でもよろ御座んすわ。今晩は、ゆつくりしていらつしやれるんでせう。もうぢき歸つて來ますわ。
より江。えゝありがたう。昨日、一寸御目にかゝつただけですけれど、なんだか、親しみのもてさうな方つていふ氣がしましたわ。以前のことを丸で忘れてるもんですから……。やつぱり、草花なんか作つておいでになる方は、どこか、自然と同じ呼吸をしていらつしやるのね。これからちよいちよいお話ができるのは樂しみですわ。
牧子。ちつとも覺えてらつしやらないつて、不思議ですわね。兄は、あれで學校時代には法律をやつたり、文學をやつ

たりしたんですけれど、法律は始めから嫌ひでしたし、文學は、物事を複雑にするからつて、買ひ集めた本を、みんな賣つてしまひましたの。でも、時々、歌なんか作つてるらしいんですのよ。

より江。あたくしなんか、本が讀みたくつても暇がありませんもの。

長い沈默。

（此の時、硝子戸越しに、大里貢がフレムを見廻つてゐる姿が見える）

より江。（貢のゐるのに氣づき）お兄さまが御歸になつたやうですわ。あたくし、お暇しようか知ら……。

牧子（外をふり返り）あら、何時の間にか……。（起つて行つて、硝子戸に近づき、それを細目に開け）兄さま、もうお歸りになつたの。

貢（腰をかゞめたまゝ）誰か來なかつたかい。

牧子。學校の前の花屋さんから、いつもの人が來て、チュリップの球根を少し分けてくれつて云ふんですの。わからないから、今夜出直して來てくれつて、さう云つて置きました。それから、去年、一度來た、あのお爺さんね、露西亞人見たいな帽子を被た、あのお爺さんが來ましたよ――ほら、何時か、生意氣なことを云ふつて、あなた、お怒りなつた運轉手見たいな男ね、あれを連れて……。

貢。なんて……。

牧子。グリーンハウスを見せろつて……。

貢。そいで……。

牧子。あたくしにはわからないつて、斷はりましたの。

貢。どなたか、お客さん?
牧子。いま? えゝ。どなたかあてゝ御覧なさい。
貢。高尾より江さん。
牧子。あら、御存じなの。まあ、あきれた………。ぢや、どうして、早く御挨拶をなさらないの、
貢。今、行くよ。一寸、手を洗つて………。
牧子。(より江に笑ひかけ)知つてたんですつて………。氣まりが惡かつたんでせう。
より江。(これも面白がつて)そんな?
貢。(現はる)やあ、失禮………。
より江。昨日は………。
貢。ようこそ………。僕達は、お客さんのもてなし方を忘れてるかも知れませんが、しばらく辛棒して遊びにいらしつて下さい。そのうちに、また慣れると、いくらか殺風景でなくなるでせう。えゝと、紅茶でも入れたらどうだ。
より江。もう、どうぞ、おかまひなく……。
牧子。おかまひができればいゝんですけれど………。すつかりお話に夢中になつて………。ねえ、兄さま、より江さんはね、あの………(頭に兩手をやり)いろんなことが、ごつちやになつて………。(起ち上る)
貢。まあ、ゆつくり聞かう。それより、お菓子があつたかなあ。
牧子。さあ………。(奥に去る)
より江。横濱は、棧橋までいらしつたんで御座いますか。

貢。えゝ、船の着く處を見て來ました　ボルトスとかいふ佛蘭西メールにですか、なかなか立派ですね。

牧子。(茶の道具を持つて現はる)すぐおわかりになりました？

貢。わかつたさ。西原の奴、五年の間に、すつかりハイカラになつて來たよ。あの方ぢや、なかなか出世してゐるらしいね。出迎人が大したものだ。やれ、何々會の總代、やれ何々新聞の記者、さういふ連中に取り卷かれて、おれなんか、眼と眼とで、一寸挨拶をしたゞけだ。

牧子。何を研究にいらつしつたんですか。勞働問題ですか。

貢。まあ、さうさ。あの男は、しかし、なかなか才人だからね。なんでも、芝居なんかのことも調べて來たらしいよ。そんなことを新聞記者に話してたぜ。大に民衆劇の運動を起すんださうだ、どうです、高尾さん、僕の友人のやる民衆劇を、一つ、見に行つてやつて下さい。

より江。お芝居なら、あたくし、大好きですの。

貢。芝居も、長く觀ないなあ。

牧子。(茶を薦めながら)より江さんに案内して頂いて、何時か行かうぢやありませんか。

貢。お前がさういふ氣を起してくれゝば有りがたい。高尾さんは、全く、われわれの生活に、何か非常に尊い——例へば光りのやうなものを與へに來て下すつたんだね。失禮ですが、御主人は何處かへお勤めにでも……。

牧子。それが、今、お一人なんですつて……。お母さんと御一緒は御一緒なんだけれど……。

貢。へえ、さうですか。

長い沈默。

牧子。より江さんがね、一度、溫室を見たいつておつしやるの。兄さま、あとで御案內してね。
貢。あゝ、いゝとも……。今、あんまり花は咲いてませんよ。ぢや、暗くならないうち、一廻りして來ませうか。
より江。でも、お疲れになつてやしませんか知ら……。今日に限りませんわ。
貢。ちつとも疲れてなんかゐません。(起ち上る)
牧子。(制して)まあ、お茶を召上つてからになすつたら……。そんなに廣くもないんですから……。
貢。(腰をおろし)それやさうだ。
より江。今、どういふお花が咲いて居りますんですの。
貢。今はね、さうですね……シクラメン、ヘリオトロオプ、シネラリヤ……。
より江。へえ、シネラリヤが……。
牧子。そんなに感心なさるほどぢやありませんのよ。ほんの申譯に咲いてるんですの。
貢。そんなこと云ふなら、此の春來て御覽なさい。チユリツプがどんなに咲いてるか、丸で和蘭へ行つたやうですよ。
　それからヒヤシンス、これは東京中で一番見事な花を咲かして見せます。
牧子。効能書はもう澤山……。それだけのことを、外のお客様におつしやれたら、えらいんだけれど……。
貢。云つてるよ、みんなに云つてるよ。
より江。あたくしも、花の作り方を敎へて頂かうか知ら……。
貢。あなた、さういふこと、お好きですか。かういふ世話をして見たいとお思ひになりますか。
より江。えゝ、食べてさへ行ければ……(笑ふ)

牧子。さあ、それが問題ですわ。

貢（起ち上り）ぢや、お伴しませう。

より江（これも釣り込まれるやうに起ち上り）どうぞ……。

（兩人出で去る、やがて、硝子越しに、二人の後姿が見える。牧子、一つ時、ぼんやり、その方を見てゐるが、思ひ出したやうに、くるりと正面を向くと、兩臂をテーブルの上に突き、兩手で頬を支へながら、何事か瞑想に耽る。此の間、貢とより江の姿は、現はれたり、隱れたりする。長い間。牧子は、突然、テーブルを離れるが、何となくそわそわした樣子で、茶器を片づけたり、窓から外を見たり、鏡の前に立つて髮を直したり、つくづく手の甲を眺め入つたりなどする。再び長い間。やがて、また、彼女は、書架の間より寫眞帖を取り出し、その頁を繰り始める。そして、低く「西原」「西原」と云つて見る。それは、消えかけた記憶を呼び覺まさうとするものゝ如くである。また寫眞帖を繰る。一つの寫眞を長く見てゐる。外の足音に驚いて、寫眞帖を元の處にしまう。貢、續いてより江現はる）

牧子。外は寒いでせう。

より江。溫室から出るのがいやでしたわ。さあ、もうお暇しなくつちや……。

貢。まあいゝでせう。

牧子。ほんとに、おうちさへよければ……。

より江。いゝえ、晩くなると、やつぱし、母一人ですから……。それに、あの邊は、それや、寂しいんですのよ。

貢。お送りしませうか。
より江。まだ大丈夫ですわ。ぢや、御免遊ばせ。また、何れ近いうちにお邪魔させて頂きますわ。
牧子。そんなこと仰しやらないで、毎日、是非……。
より江。(笑ひながら)お兄さまの御留守の時を見はからつてね……。
貢。どうしてです。え、どうして……。
(より江を送つて、貢、牧子、出づ)
貢の聲。さよなら。
より江の聲。さうなら。
(やがて、貢、現はる)
貢。(あたりを見廻しながら)此の應接間も役に立つたね。(間)おい、牧子、一寸來て御覧(ポケットから、色々の化粧品を取り出しながら)來て御覧つてば……。
牧子。(現はれ)お腹が空いてらつしやるでせう。
貢。腹は空いてない。これ、どうだい。
牧子(不審さうに貢のすることを見ながら)それ、なんですの、一體……。そんなものどうなさるおつもり……。
貢。おれがどうするわけもないぢやないか。お前に買つて來たんだよ。
牧子。あたくし、眉墨や頬紅なんか、もう使ひませんよ。
貢。使はなくつてもいゝから、しまつとけ。

牧子。何を思ひ出して、こんなもの買つてらしつたの。

貢。いろんなことを思ひ出してさ。これはさうと、お前、西原は一人で歸つて來たよ。金髪美人を連れて來るだらうなんて云つてたけれど……。

牧子。まだ、どうだかわかるもんですか。後から追つかけて來ることだつてありますわ。

貢。疑ひ深い奴だなあ。しかし、あいつ、おれんとこなんかへ遊びに來るかねえ、久し振りでゆつくり話さうつて、今日、手紙を出しとかうと思ふんだが……。當分、神田の鳳凰閣つていふホテルにゐるらしい。一人ぢや、家を持つわけにも行くまひしね。奴さん、お前がかうしてるのを見たら、きつとびつくりするぜ。

牧子。(そんな話に興味はないといふやうに)ぢや、御飯の仕度をして來ますわ。

貢。まだ早いよ。もう少し話をしようぢやないか。今日は、なんだか、いろんなことが新しく始まるやうな日だよ。今日まで、世間から離れて、たつた二人つきりで送つて來た暗い生活の中へ、思ひがけなく、同時に、二人まで、華やかな――さうだ――二人の華やかな友達が訪れて來たんだ。來たと云つてもいゝ。あいつは、きつと來るよ。

牧子。兄さま、より江さんをどうお思ひになつて……?

貢。氣持のいゝ人だね。何してるの?

牧子。外國人の商店に働いてるんですつて、……。學見たいなもんか知ら……。でも、下品なところはないわね。

貢。さうか、職業婦人だね。なんでもいゝさ。お嫁に行つたつて云ふのはどうしたの。お前、昨夜、さう云つたらう。間違だつたの。

牧子。一度行つたんだけれど、うまく行かなかつたらしいの。

貢。はあ。なに、かまふもんか、そんなこと……。友達として交際ふ分にや、一度目だつて、二度目だつてかまやしない。

牧子。友達としてなんて仰しやらなくつてもいゝぢやないの

貢。まあ、さう、つけつけ云ふなよ。おれは、しかし、駄目だ。そんな氣は起さない方がいゝ。それよりも、おれは、何時も云ふ通り、お前のことを心配してゐるんだ。それも、今迄の生活では、何時どうといふ望みはなかつた。しかし、かうなつて來ると、お前の周圍にも、明るい、和やかな空氣が漂ひ出すんだ。それを、お前も、感じるだらう。感じなければうそだ。感じるやうにしなくつちやいけないよ。さうなれば占めたものさ。お前は、まだ若い。いや、若いんだよ。あの人を見ろ、より江さんを……。お前と同い年だらう。あれが、つまり、周圍の空氣を感じてゐる證據だ。お前も、あの通りになれ。——笑ふ奴があるか。

牧子。男つて呑氣なものですわね。いくつになつても空想があつて……そして、その空想に相應した興奮があつて……。

貢。何を云ふか。おれは、今日、自分でも少しはしやぎすぎるなとは思つてゐる。だからつて別に、さういふ氣持を制へる必要はないぢやないか。これはほんの譬へだがね、今、より江さんがおれの細君になり、西原がだよ、お前の旦那さんになつてくれてさ、さういふ二組の新しい生活が始まるとしたら、お互に、よろこんでもいゝぢやないか。それは、あり得ないことかも知れない。しかし、一昨日よりは、あり得べきことだらう。さういふ今日に廻り會つたことだけでも幸福ぢやないか。希望は逃げて行くもんだ。しかし、希望が一つ時でも、こつちを向いて笑つてくれゝば、こつちも、大に笑つてやればいゝぢやないか。

牧子。そんな理屈は成り立つかどうか知りませんけれど、兄さまの、さういふ元氣なお顔を見るだけでも、晴れ晴れし

ますわ。より江さんは、いろいろ事情もあるでせうけれど、きつと、そのうちに兄さまを好きになると思ひますわ。兄さまさへ、今のやうなお氣持でいらしつたら、話は、とんとん拍子できまると思ひますわ。さうなつたら、あたくしも安心ですわ。こゝのお勝手をあの方にお預けして、あたくしは、どつかへ働きに出ますわ。できれば、あの方の今の仕事を讓つて頂くやうにしますわ。

貞。そんなことをしなくつてもいゝよ。お前はお前で、ちやんと、結婚をして、此の近所に家を持つさ……。さうするまでは、そんな働きになんぞ出なくつたつて、一緒に家の仕事をすればいゝぢやないか。あの人は、花をいぢるのが好きだつていふから、そつちの方を手傳つて貰つてもいゝし……。

牧子。とにかく、もう少し、おつきあひして見ないとわかりませんわね。

貞。それもさうだ。急ぐことはないさ。下手に切り出して、もうこゝへは來ないなんて云はれちや、なんにもならないからね。それくらゐなら始めからなんにも云はずにゐて、いつまでも、友達として出入をして貰つた方がいゝよ。あゝいふ友達は、是非、必要だ、われわれの生活には……。さつき、温室の中で、おれの手を見て、丸で木の根見たいなだつて云ふんだ。觸つて御覽なさいつて、手を出したら、面白がつて、指を撫でたりなんかするんだよ。あゝいふ友達は是非必要だね、われわれの生活には……。

――幕――

二

同じ應接間。

三月下旬――午後一時頃。

鉢植の草花――新しい裸體畫――輕快な卓ランプなど。

貢と西原とが話をしてゐる。

貢。かうして、君が遊びに來てくれることは、僕らに、まだ生き甲斐があるといふことを敎へられるやうなものだ。あゝして、君が、僕の健康の爲めに乾杯してくれたのを見て、牧子は泣いてたよ。今も、どつかへ行つて、まだ泣いてるだらう。――あいつは、どうしてあんなに氣が弱いのか、近頃は泣いてばかりゐるんだ。（大きな聲で）おい、牧子……。

西原。まあ、もう少し靜かにさせておいてあげたらいゝぢやないか。かうしてゐると、いろんなことに氣を遣ふだらうからね。

貢。なにしろ、僕達は、あんまり世間から離れ過ぎてゐたよ。

西原。もうわかつたよ。いつまでもそんなことを云つたつてしようがない。これからは、大に交際を廣くするさ。君も、早く細君を貰つたらいゝぢやないか。

貢（狼狽して）いや、なにしろ、あいつから片附けなくつちやね。

西原。君は、それで、食ふに困らない財産はあるんだし、早く妹さんを片づけて、一度西洋へでも行つて來るんだね。さうすると、人をあんまりこわがらなくなるよ。早く云へば圖々しくなるよ、おれ見たいに、……。

貢。いや、その點ぢや、牧子なんかは、女だからでもあるが、久し振りで會つた君にさへ、いつもの通り、ろくに口もきけないんだからね。今日はこれで、四度目かい。まだ、昔通りにはいかないらしい。

西原。七年も別れてゐると、さうだらうな　こつちは、割合に、變つてないつもりなんだけれど………。

貢。だから、思つてることが云へない。云はうと思つてることを、みんな相手に云はれちまふんだ。

西原。それや、どうだか………。

貢（云ひ直して）みんなでもないが、どうでもいゝやうなことはさ（苦笑する）

（牧子が盆にコップをのせて現はれる。なるほど、泣いた後とは察せられるが、見違へるほどの若々しさである。）

牧子。こんなもの、お口にあひますか、どうですか………。

西原。今日は、あの方、見えないんですか。

牧子。あ、より江さん………。さあ、もう見えるかも知れませんわ。日曜の午後は、大がい、見えますから………。

貢。君に會つたら、いろんなことを云はうと思つてたんださうだ。

西原。だれ？

貢。いや、こいつがね。ところが、君の顏を見たら、なんだか、氣おくれがして………。

牧子。あら、氣おくれなんて、そんな………。

西原。僕はね、牧子さん、向うに行つてる間、何處へも手紙を出さなかつたんですが、一度だけ、あなたの處へ繪端書をあげようと思つたことがあるんですよ。思つたゞけぢや仕方がありませんが、それは、そん時丁度切手を買ふ金がなかつたんですよ。その繪端書つていふのは、多分、今でも何處かへしまつてある筈ですから、此の次、持つて來ま

す。

牧子。まあ、なんの絵端書でせう。

西原。あなたに似た女優の絵端書ですよ。（貢に）よく似てるんだよ。佛蘭西の女に、そんなに毛唐臭くないからね。

牧子。まあ、あたくしに似た女優なんて、ゐますでせうか。

西原。女優つて云へば、牧子さん、一つ、女優になつて見ませんか。

牧子。あたくしがですか。女優にですか。人が笑ひますわ。

西原。處が、笑ひません。なぜ笑はないかつて云へば、職業俳優にはできない芝居をやるんです。僕たちに、今度、市民劇場つていふ遊動劇團をこしらへるんですよ。どうです、晩、七時から九時まで、暇はありませんか。

牧子。さあ……。でも、あたくし、舞台なんぞへ出たら、足がすくんぢまひますわ。

西原。さういふ役を振らうぢやありませんか。足のすくむ役を……（一同笑ふ）男はいくらもゐるが、女がゐないんでね。

貢。君は、どうして、あつちの女と結婚しなかつたの。

西原。どうしてつて、そんな無理なことを云つたつてしようがないぢやないか。ねえ、牧子さん。

貢。さうかなあ。やつぱり、日本の女がいゝかね。

西原。いや、さういふ意味ぢやなくね。しかし、今では、もう、さう云つとくより外あるまいね。

貢。君は、日本の女の、どういふ女がいゝ。

西原。さあ、そいつは、見て見ないとわからん。

貢。見て見たうちでは、どんなのがよかつた。

西原。さういふつもりで見て見ないとね。

貢。さういふつもりで見て見ろよ。

牧子。（たまり兼ねて）兄さま、西原さんさへおよろしかつたら、少し、その邊を御一緒に散歩でもしてらしつたら……。

貢。食後、少しづゝ、歩くことにしてるんだ。なに、今日はどうでもいゝんだ。

西原。歩くなら歩かう。

貢。此の邊は、森がいゝんだ。あゝ、さうさう、家はまだ見つからないの。

西原。それがね、市中はやつぱり駄目だよ。と云ふのが、客が多くつてね。

貢。そんなら、此の邊へ來たらいゝぢやないか。家はいくらも空いてるよ。そんなに廣くなくつていゝんだらう。あの家はどうかね、尼寺の隣の家さ。此間まで札が出てたぜ。

牧子。あそこは道ばたでやかましいでせう。それより、あれはどうですか知ら……。少し不便ですけれど、より江さんの御近所に、なんでも、畫かきの建てた家が、建てたつきりになつてるんですつて……。借手があれば貸すらしいんですよ。

貢。アトリエ附だね。それやいゝぢやないか。

西原。いゝね。見せて貰へないか知ら……。

牧子。より江さんのお母さんにお話すれば、わかりませう。一寸、行つて、伺つて來て見ませうか。

西原。なんなら、散歩かたがた一緒に行つてもいゝね。

貢。それや、それでもいゝが……（獨言のやうに）家を空つぽにするわけにや、いかんし、おれがいきなり、より江さんの家へ行くのは、初めてなんだから、一寸、工合がわるいじやないか……。

牧子。そんなこと、かまひませんけれど、とても、わかり悪い家ですから……。

西原。ぢや、僕が牧子さんについて行かう。

貢。あゝ、さうし給へ。それがいゝ。

（貢は、西原と牧子とを送り出してから、やがて、その姿を、硝子戸の向うに現はす。しばらく、立つたまゝ、ぢつと一點を見つめてゐる。晴れやかな微笑。それから、上着を脱ぐ。煙草に火をつける。その煙を、空に向つて、大きく吹く。煙草を喫ひ終ると、温室の中から、鉢を二つづつ運び出して、花壇に並べはじめる。長い間。此の時、より江の姿が、また硝子戸の向うに現はれる。貢を見つけて、その方に近づいて行く。二人は立話をする。より江の快活な笑ひ聲。貢は、また仕事にかゝる。より江は、それを見てゐる。そのうちに、彼女も、手傳ひはじめる。仕事の區切がつくと、二人は、應接間にはひつて來る）

貢。今の家を借りたつていふのは、やつぱり畫かきですか。

より江。えゝ、さういふ話ですけれど……でも、畫かきらしくないんですの、その人が……。

貢。それがほんとかも知れませんね。ぢや、西原君が畫かきだつて云つて、はひつてもいゝわけですね。先生たちも、がつかりして歸つて來るでせう。

より江。家なら、ほかに、いゝ家がありますわ、いくらでも……。

貢。僕たちは、あんまり外へ出ないから、わからないけど、一つ、心掛けといて下さい。不便なのは、いくら不便でもかまはないつて云つてましたから……。

より江。西原さんつて、西原敏夫さんておつしやる方でせう。此の間、報知講堂で講演をなさいましたわね。

貢。さうですか。僕は、近頃、新聞なんか見ないもんだから……。

長い沈默。

より江。随分活動していらつしやるやうですわね。

貢。さうでせう。

長い沈默。

より江。近頃は、お忙しかありませんの。

貢。僕ですか。いゝや。（間）僕、かういふ歌を作つたんですが、どうでせう。――呼吸もつかず、足音も立てず、何者か、忍び寄る如し、綻びを縫ふ――つて云ふんです。實感なんです。

より江。（考へて）さあ……。あたくし、歌なんかわかりませんけど……。でも、あなた、御自分で綻びなんかお縫ひになるんですの。

貢。あなたの前で、かういふことを云ふのは可笑しいですけれど、妹なんていふものは、あれで、やつぱり、兄きの身のまわりの世話なんか、充分にできないものなんですね。どうも、自分のうちつていふ氣がしないらしいんです。あれで亭主の面倒が見れるかと思ふくらゐですよ。横着でしないわけぢやないでせうが、さういふ張合がないんでせうね。これ御覧なさい（上着の釦が取れかけてゐるのを見せ）これだつて、氣がついてゐるのか、ゐないのか、（間

前から、このまゝですよ。かうして（釦を引きちぎり）取れてゐたつて、こつちからぬひつけるまで直しやしません。

より江。でも、それは、お兄さまが、ずつとおうちにいらつしやるからですわ。外へお出ましになるやうな御商賣か

ら、きつと、氣をおつけになるんですわ。

貢。そんなら、うちの中は、どうでもいゝつていふわけですね。さうなんですよ。此の部屋だつて、あなたがたが見えるやうになるまで、額一つかけようとしないんですから……。さういふことは、女の氣持でどうでもなるんですからね。さういふ、うちの中の飾り方なんていふものは……。

より江。さうですか知ら……。

貢。僕は、自分で別段に、趣味のある人間だとは思つてゐませんが、相當生活に趣味らしいものをつけてくれるやうな人間が、そばにゐてくれゝばいゝと、いつでも思ふんです。さもなければ、活氣です。こいつが欲しい。實に、だれきつてゐるんですから、僕達の生活は……。

より江。さうは見えませんわ。

貢。近頃でせう、それは……。あなたがたのお蔭です。殊に、あなたのお蔭です。いゝえ、ほんとです。僕は、今、かうして元氣よく働いてゐるのも、あなたの爲めに、なるべく美しい花を咲かせようといふ希望があるからですよ。あなたが見に來て下さらなくなつたら、僕の溫室の花は、みんな色がさめてしまふでせう。

より江。（戯談に取つて）あら、そんな……。

貢。うそだと思ひますか。そんならもつとお話をしませう。僕たちが——まあ、僕かと云つてもいゝわけですが——かういふ仕事を始めたのは、別に、それで生活しなければならないからぢやないんです。なにか、健康的な、そして、

人手を煩はさずに自分の生活を明るくするやうな仕事はないかと、あれこれ考へた末、花を作つて見ようと思ひ立つたんです。牧子には、物をこしらへ上げるといふ樂しみがわからないんです。物を大切にしまつて置くことはできる。しかし、育てゝ行くことに興味がもてないらしいんです。おわかりになりますか。これは、たしかに、あいつの生涯を暗くしてゐます。從つて、僕の……。また愚痴を云ふやうですが、僕の生活を、半面に於て不幸にしてゐる。

より江。でも、牧子さんは、どなたの爲めにあゝして、今迄、お獨りでいらつしやるんですの。牧子さんの生涯が、まあ、假りに暗い生涯だとすれば、その責任は、どなたにあるんですの。

長い沈默

貢。（だんだん憂鬱になる）

より江。さういふことおつしやるもんぢやありませんわ。あたくしさう思ひますわ。

長い沈默

貢。僕の責任もないことはありません。だから、どうすればいゝんです。僕の力で、それがどうかなるんですか。

より江。早く牧子さんを自由にしておあげになることですわ。

貢。自由に……？　あいつは自由です。

長い沈默

より江。あたくし、かういふお話をしに來たんぢやありませんわね。

貢。いゝえ、かまひません。僕に間違つたところがあつたら、云つて下さい。僕は、さつき、あんなことは云ひましたけれど、實際は、牧子のことを一ばん心配してゐるんです。あなたが自由にしてやれつておつしやる意味は、どうい

ふ意味だかはつきりわかりませんが、あいつを幸福にしてやることなら、どんな犠牲でも拂ふつもりでゐます。いつか、今、どつかにいゝ口があつて、嫁入りでもするやうなことがあれば、僕は、勿論、自分の不自由ぐらゐは忍ぶつもりです。

より江。(笑ひながら)それは、あたり前ですわ。それは犧牲とは云へませんわ

貢。あゝ、さうですか。なるほど、それはまづい例へでした。そんなら、どうしたらいゝでせう。

より江。そんなこと、あたくしにお訊きになつたつて存じませんわ。また、お答へすべきことぢやないと思ひますわ。その事は、牧子さんが一番よく考へていらつしやる筈ですわ

貢。あいつには、意志がないんです。したくないことはあつても、したいことはないんですからね。それだけは、僕が一番よく知つてゐますよ。

より江。全くお氣の毒ですわ。

貢。あなたの力で、どうか、あいつに、前へ踏み出すことを教へてやつて下さい。あいつは、今、自分の眼の前に大きな幸福が待つてゐることを知つてゐるんです。それを知つてゐながら、どうすることもできずにゐるんです。

より江。でも、さういふことは、誰にだつてありますわ。

長い沈默。

より江。あたくし、また伺ひますわ。今日は少し急ぎますから……。お晝までに歸るつて云つてありますの。

貢。それぢや、御飯はまだでせう。

より江。いゝえ、それを濟ませて來たものですから、遅れてしまひましたの。一寸した用事でも、なかなか午前中には

片づきませんのね。またお邪魔させて頂きます。(起ち上り)途中で、牧子さんなんかにお逢ひするかも知れませんわね。

貢。また、いろいろお話ししたいこともあるんだけれど、御都合が悪るければ、また此の次にしませう。(これも起ち上り、より江を送つて出る。長い間)

より江の聲。もう。よろしんですのよ。ほんとにもう……。あら、こゝが、こんなに濡れてますわ。

貢の聲。はゝあ、バケツが漏るんだな。チョツ、しようがないな。

長い間。

貢。(やがて、二三通の郵便物をもつて現はれる。その一つを開封する。讀む。讀みながら、椅子を引寄せ、腰を卸す。また別のを開いて讀む。何れも、何んでもない手紙。さういふ時の精のなさゝうな表情。草花の鉢を一つ取り上げ、香を嗅ぎ、根ぎは、それから葉の裏を檢め、不用な葉を摘み取りなどする。窓ぎわに立つて外を見る。外へ出る。しばらくして歸つて來る。また出て行く。長い間。)

(此の時、牧子と西原とがはひつて來る)

西原。別に急がないんだから、よう御座んす。ゆつくり探すことにしませう。

牧子。ほんとに濟みませんでした。(入口の方を振り返り)さあ、どうぞ……。かまはないぢやありませんか、そんなこと……。いやな方ね。

より江。(ためらひながらはひつて來る)あら、お兄さまは……。

牧子。何處へ行つたんでせう。裏ですわ。一寸呼んで來ますから、どうぞ、御ゆつくり……(かう云つて出て行く)

西原。もう少し早いか遲いかするとよかつたですね。

より江。あたくしがでせう。
西原。僕達がですよ……。
より江。おんなじですわ、それぢや……。
西原。お母さんはまだお若いですね。
より江。あたくしがお婆さんだからですわ。
西原。さうお取りになつちや困りますよ。あなたは實に鋭敏だ。どうです、あなたは芝居をやつて見る氣はありませんか。
より江。どういふお芝居ですの。
西原。勞働者に見せる芝居です。勞働者とは限りませんが、つまり、面白い脚本を、頭のいゝ素人が、熱心にやつて、大勢に、安く見せる芝居です。
より江。あたくしに出來ますか知ら……。
西原。出來ます。
より江。暇がありますか知ら。
西原。夜は何時から暇です。
より江。五時から……。
西原。何時まで……。
より江。母に相談して見ますが、許してさへくれゝば、電車があるまで……。

西原。よろしい。範貞代と云ふ芸名しか出ませんよ。
より江。結構ですわ。
西原。明日から、僕の事務所へ來て下さい。
より江。母に相談して見ますわ。
西原。事務所は此處です（名刺を渡す）
より江。牧子さんにもおつしやつて御覧になりました？
西原。先生は、舞台に出ると、足がすくむさうです。
より江。あたくしもさうかも知れませんわ。
西原。無理に勧められない仕事ですからね……。
より江。あたくしからお勧めして見ますわ。
西原。お母さんさへお許しになればいゝんですね。
より江。ほかに許しを受ける人なんか御座いません。
西原。さうですか。
（牧子、續いて、貢、笑ひを浮べながらはいつて來る）
貢。殘念なことをしたね。（より江に）や、いらつしやい。
より江。生意地なく、引張られて參りました。
貢。さうあつてこそです。トランプでもしませうか。

西原。僕は知らない、さういふ遊びは……。まあ君達、おやんなさい。

牧子。お教へしますわ。

西原。いや、僕は勘辨して下さい。それより、水を一杯どうぞ……。

牧子。只今、紅茶を入れますわ。

西原。なに、水で結構……。水の方が結構。

牧子。(取りに行く)

貢。そいぢや、まあ、面白い話でもしよう。

西原。僕にかまはずに、やり給へ。

貢。どうせ暇潰しさ。何をしたつて同じことだ。僕たちは、二人きりだと、よく、トランプの獨り占をやるんだよ。二人が、めいめい、默りこくつて、あれをやつてゐると、夜かなんかね、一寸、神秘的だよ。

より江。さういふことがお好きらしいわね、お二人とも……。

西原。結局、閑人なんだね。

貢。いや、閑なことを苦にしてゐる人間なんだよ。

西原。閑人といふものは、閑を苦にしてる人間だよ。閑を樂んでる人間に、閑人なんかありやしない。

貢。それも一說だね。さうすると、僕たちは閑があり過ぎるのかなあ。

西原。あり過ぎるね。

牧子(水を持つて來る)あり過ぎるんですつて……。閑なんかありませんわね。

貢。こいつは、閑を閑とも思はない女なんです。忙しい忙しいつて云ひながら、何もせずにゐる。

牧子。あら、うそばかつし……。

より江。そんなことありませんわね。あたくしなんか。どうかすると、何んにもすることはないと思ひながら、一方で、なにかしなくつちやならないと思ふでせう。その氣持がこんがらかつて、結局、落ちつけないことがありますわ。

西原・貢（同時に）それはありますね。

牧子・より江（同時に）
牧子　さういふ時だつて……。
より江　つまり、さういふことが……。

牧子・より江（互に「どうぞ」といふ眼くばせ）

西原。（引取つて）閑は出來ちや駄目だね。作るやうにしなくつちや……。

貢。それを云ふだけならやさしいがね。

西原。商賣にもよるさ。

牧子。西原さんなんかは、おつしやるだけぢやないでせう。

貢。仕事の方は作るやうぢや駄目だらう。

より江。さうですわね。

西原。平凡な議論だな。

長い沈默。

貢。此の部屋はなんだか陰氣だね。外が馬鹿に明るいだけに、家の中は、なんだかすゝけてて慘めだ。

牧子。また、外でお茶にしませうか。

より江。溫室の前の芝生がよう御座んすわね。あそこで、何か戴くと、味が違ひますわ。

牧子。そいぢや、さうしませう。兄さま、一寸、また、手傳つて下さいません。

貢。机はあれでいゝだらう。

より江。えゝ、ですけど、椅子が………。

西原。椅子なら、僕が持つて行きます。

より江。あたくしも持つて行きますわ。

牧子。それぢや、めいめい、御持參で……。（先へ出る）

より江。（その後から、續いて）何かお手傳ひしませうか。

牧子の聲。いゝえ。いゝんですのよ。

貢。（より江が持つて行かうとする椅子を無理に取り上げ、兩手に一つづつ持つて出る）

西原。（これも、兩手に一つづつ持つて、その後に續く）行きますよ。

より江。（ひとり、窓から、溫室の方を見てゐる。懷中鏡を出し、手早く顏を直す。）

長い間。

牧子の聲。より江さん、いらつしやい。

より江。はい（と答へたきり、ちつと、眼を据へて、何か考へてゐる。寧ろ、何かを待つてゐる）

　長い間。

賓の聲。いらつしやい、より江さん。

より江。いま、すぐ……（さう云つて、まだ、動かない）

　長い間。

　此の時、突然、西原の姿が、硝子戸に近く現はれる。より江は、それを知らずにゐる。

西原。（極めて落ちついた調子で、しかし、親しみを籠めて）お茶が冷めますよ。

より江。（ハツとして、その方を振り返る。）

西原。（朗らかな微笑を以て之に應へる）

——幕——

三

　同じ應接間。

　五月初めの夕刻、七時頃——

　薄暗い燈火——窓掛が風にゆれてゐる。

牧子が現はれる。勿論、前場の若々しさは去つて、もとの目立たない女になつてゐる。窓ぎわに椅子を持つて、それに腰をかける。ぼんやり外を見てゐる。

呼鈴が鳴る。

彼女は、一寸首をかしげて、不思議だといふ眼つきをするが、急いで座を起つ。やがて、「あら、どうなすつたの。もうすんだんですの。」といふ彼女の聲――間――外出の服裝をした貢が、帽子を被つたまゝはひつて來る。恐ろしく沈んだ顏つき。牧子、そのあとから、不安らしくついて來る。

牧子。今日は、もつと、遲くなるだらうと思つてましたのに………。でも、あちらへ行き着くか行き着かないかぐらゐの時間ぢやありません………これぢや………？

貢。（牧子の腰かけてゐた椅子に腰を卸ろし、だるさうに帽子を脫ぐ。牧子、それを受け取る）さうさ。向うへ行きつくか行き着かないうちに歸つて來たんだもの………。

牧子。でも、顏だけは出していらしつたんでせう。

貢。いゝや、出して來ない。

牧子。あら。

貢。やつぱり、出さない方がいゝ――ふと、あそこまで行つて、さう思つたんだ。向うとしちや、おれたちを呼ぶ義務があるだらう。しかし、こつちに、行く義務はないからね。

牧子。でも、行かなけれや、變に思ふでせう。

貢。變に思ふだらうな。――しかたがない。こつちとしちや、やつぱり、行かずに濟ましたいからな。

牧子。……。

貢。どうなつたつて、お互にこれまで通りの交際(つきあひ)ができれば、それでいゝぢやないか。

牧子。此の一月つていふもの、だつて、交際(つきあひ)らしい交際はしてませんわ。さういふ話があつてからでせう、急にこつちへ來なくなつてしまふなんて、随分現金ですわ、二人とも……。

貢。その間に、あの、芝居といふやつがあつたからな。

牧子。より江さんていふ人の大膽なのには、あきれましたわ。どうでせう、あの大勢の前で……。

貢。さういふ女でなけれや、西原は動かせないんだね。

牧子。それは別の話ですけれど……。

長い沈默。

貢。先生達は、結局、いゝ相手を見つけたね。革命家に勞働婦人……。

牧子。……。

貢。西原つていふ男は、中學時代から秀才だつたが、それや、ひねくれ者でね……。

牧子。より江さんも、學校時代には、それや先生を手古摺らせた人なんですのよ。やさしい問題なんか、あてどもしようもんなら、存じませんつて、つんと横を向くんですの。

貢。西原にもさういふ處があつた。しかし、あいつは、熱情家でね。今でこそ、冷靜な口の利き方をし習つてゐるが、

昔は——その當時、熱血男兒つていふ言葉が流行つたが——その熱血男兒の模範だつたよ。

牧子。そのくせ、より江さんは、人一倍、涙脆いたちで、よく友達の身の上話なんか聽かされては、獨りで泣いてるんですよ。また。あの頃は、身の上話が流行つたもんですわ。——あたくしなんかも、隨分、聽かせろ、聽かせろつて、人から云はれましたわ。それが、ね、ずつと兄さまと二人つきりなもんで、何かわけがあるだらうと思ふんでせう。その身の上話つていふものを、初めてして聽かせた相手が、より江さんなんですわ。自分では、何氣なく云つてるつもりなのに、あの人、おいおい泣くんですのよ。しまひに、自分でも悲しくなつて……そこへ、また、何んとか、慰めるやうなことを云はれるもんだから、なほ胸がつまつて……。可笑しんですの。それからが、きまつて、例の、仲よしになりませうね、ですわ。

貢。西原の奴、一度、變なところへおれを連れて行つてね……。あれは、たしか、今考へると、戸山ケ原の射的場かなにかなんだが、薄暗い穴の中でね……。そこで、腕をまくれつていふんだよ。腕をまくつて見せたら、やつも、小さな腕をまくるんだ。それから、何をするかと思つたら、ポケットから、鉛筆を削るナイフを出しやがつてね、——さあ、おれも血を出すから、貴樣も出せ、お互にその血を飲み合はうつて、いきなり、そのナイフをおれの腕へ突き立てようとするから、おれは、まあ、待て、とね……。

牧子。さう、さう、あの人の寫眞道樂が大へんなもんでしたわ。毎週一枚ぐらゐづゝ新しく寫したのを持つて來やしませんでしたか知ら……。それが、また、一々、變つた寫し方で、その爲めに、わざわざ、髮の結ひ方を變へたりなんかしたんですからね。二三度、あたくしも一緒に寫されたことがありますわ。

貢。おれが、これ誰だつて訊いたら、どうしても云はなかつた、あれも、さうぢやないか、そら、お前がすわつて、そ

の行へ手をかけてる……。これ誰だつて訊いても、お前は笑つてゝ云はないから、學校へ見に行くつておどかしたぢやないか。

牧子。そんなこと、ありましたか知ら……。でも、その前に、あの人、うちへ來ましたわ。

貢。いゝや、來ない。卒業する一寸前に、始めて、お前が連れて來たんだよ。そん時、はゝあ、あれだなと思つたんだから……。

牧子。あの頃から、奇麗つて云ふより、目立つ人でしたわね。どつか、ぱッとした……

貢。さう云へば、あの時代に、先生と西原とうちで會つてやしないかしら……紹介はしなかつたかも知れないが……。

牧子。あつたにしても、兩方とも、忘れてるでせう。だけど、西原さんも、特長のある顏だし……。そんなことを、もう話し合つてるかも知れませんわね。

貢。無論、そんな話は、とつくにしてしまつてるさ。あゝ、あん時、ゐたのがあなただつたんですか、なんて、やつたにきまつてるさ。

牧子。ぢや、西原さんていふ方は、大學へいらしつてから、おとなしくおなりになつたのね。

貢。おとなしくつて……そんなにおとなしいか。

牧子。でも、お酒はあがらず、亂暴な口の利き方なんぞ、なさらなかつたでせう、ほかの方見たいに……。神谷さんなんか、出鱈目だつたぢやありませんか。

貢。神谷の方が馬鹿だよ、それや……。西原は、さうだね、大學へ來てから、急にすましだしたね。眼鏡を拭きながら話をすることなんか覺えてね。

牧子。それはさうと……。

沈默。

貢。なに？

牧子。いゝえ、なんでも……。

長い沈默。

貢。これで、先生たちが、同時にわれわれから非常に遠い處へ行つてしまふやうな氣もするが、それと反對に、何時までも、この邊をうろうろしてゐて、なかなかわれわれの頭の中から消えて行きさうもないつていふやうな氣もするんだ。

牧子。どつちにしても、あんまり……。

貢。うん……。それや、まあ、どうでもいゝさ。（間）おい、人が歸つて來たら、茶ぐらゐ飲ませろ。それから、此の間から云つてるぢやないか、此の電球をもつと大きいのと取り換へようつて、……。

牧子。兄さまこそ、序に、買つて來て下さればいゝんですわ（起ち上る）

貢。それがいけないんだ。自分で家の中をキチンとしようと思はなくつちや……。ねえ、もう少し、こゝだつて、家らしくできるだらう。

牧子。お茶は、たゞのでよろしいんですか。

貢。そんなことも、自分で考へろよ。

牧子。（出で去る）

貢。（頭を抱える）

長い間。

貢。（何となく落ちつかぬ様子で、室内を歩きまわる。時々立ち止つて、耳を澄ます。何を聴かうとしてゐるのかわからない。が、さういふ動作の後で常に、悩ましげな表情が浮ぶ）

牧子。（紅茶を運んで來る）お湯が少しぬるいんですけれど……。

貢。もう欲しくない。

牧子。（椅子に倚り、途方に暮れてゐる）

貢。何も考へることはないだらう。お前にはお前、おれにはおれの生活がある。仕事がある。どうしてそちを向くんだい（怒鳴るやうに）こんなことぢや、駄目だよ、何時までたつたつて……。

牧子。（ハッとして、そつちを振り返るが、その眼は、反感といふよりも、寧ろ隣憫の情に近い色で、淋しく瞬つてゐる）

長い沈默。

貢。（思ひ出したやうに書架の中から、恐らく手當り次第であらう、書物を一冊引拔き、肱掛椅子に投げかゝるやうにして、その頁を操りはじめる。勿論、それは、言葉の調子を變へる準備であつたに違ひない）事務所の電球を外して來てくれないか。

牧子。（素直に立つて出て行く）

貢。（書物をテーブルの上に投げ出し、右の靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、足の指をいぢる）

牧子。（電球を持つて來る。此の光景に聊か意外らしい一瞥を投じた後）電球、取換へませうか。

貢。あゝ。

牧子。(電球を取りかへる。貢の側に近寄り)マメですか。
貢。あゝ。
牧子。萬即膏か何か持つて來ませうか。
貢。それより、飯粒を持つて來てくれ、針と……。
牧子。そんなことなすつてよろしんですの。
貢。いゝんだよ。
牧子。(飯粒と針とを取りに行く)
貢。(針でマメを潰す。その上に飯粒を塗る。そして、紙片を張りつける)
牧子。(この間、ぼんやり、傍に立つてゐる)
貢。お前は、何か、することはないのか。
牧子。…………。
貢。自分の用事はないの。
牧子。いゝえ、別に……。
貢。可笑しいね、今夜に限つて、どうして、おれも、お前も、なんにもすることがないんだらう。
牧子。今夜、兄さまのお留守の間に、しようと思つたことはありますのよ。
貢。なんだ、どんなこと……。
牧子(椅子にかけ)手紙を書かうと思ひましたの。
貢。何處へ?

牧子。お友達のとこ。
貢。友達……？どんな友達……？誰……？
牧子。より江さんと同じくらゐ仲のよかつたお友達……。
貢。やつぱり、獨りでゐるの。
牧子。一昨年までは獨りでゐるつていふ話でしたわ。
貢。一昨年まで……。ふむ……。あゝ、何時か、何處かで會つたつていふ……、眼の大きな人だらう。
牧子。眼の大きな……、えゝ、庄司さん、……。
貢。書いたらいゝぢやないか。東京にゐるの。
牧子。もとの處にゐますかどうですか……、
貢。學校へ聞き合せればわかるだらう。(間) こつちから手紙をやれば、よろこぶだらうと思ふやうな奴もゐないな、おれの仲間にや……。神谷ぐらゐのものかな……。あいつなんか、もう子供の二三人もこさへてゐるだらう。案外近所に住んでゐて、知らずにゐる奴があるかも知れないね。
牧子。より江さんなんか、それでしたわ。
貢。此處の前なんか通らない奴でね。しかし、それや結局、縁がないんだね。
牧子。さうですわ。
　長い沈默。
貢。あしたはと……。あいつを植え替へてと……。
牧子。……。

貢。今夜は、もう寢てもいゝんだが、寢るのには惜しい晩だな。——風が出て來たね。
牧子。……。
貢。何か、かう、事件でも起りさうな氣がするな。
牧子。事件が起つてるぢやありませんか。
貢。こつちにもさ。——ぢつと待つてれば、何かやつて來さうな氣がするんだ。お前、そんな氣はしないかい
牧子。しますわ。
貢。ね、するだらう。變なもんだね。こんなものかねえ。
牧子。……。
貢。今夜、一晩、起きてゝ見ようか。こゝに、かうしてゝ見ようか。何かしら、あるよ、たしかに……。
牧子。いやですよ、そんなことなすつちや……。
貢。兎に角、これは大したことに違ひないよ。四つの魂が、此の月の光の中で、ダンス・マカアブルを踊るかも知れないよ。おれは、それが見たいね。一寸でもいゝから見たいね。
牧子。なんのことですの、それは……。
貢。靜かに眠ればいゝさ。(間)さもなければ、大きな聲で歌が唱へるか。(間)どつちも六ケ敷さうだね。それぢや、どうしよう。(間)かうしてゐるよりしかたがないぢやないか——かうして、ぢつとしてゐるより……。(椅子の背に頭をもたせかける、
牧子。(靜かに淚をふく)

——幕——



門を毀つ

水木京太

人

七尾嘉右エ門　町人、五十すぎ。
同　養助　その子、二十四五。
同　辰五郎　その甥、二十前後。
豐後節の師匠　三十二三。
その妻　三十位。
下婢　いと　十六七。
大沼　倉松　仙臺方の世話人、四十位。
裏廻り　善藏　二十八九。
同　市太郎　二十四五。
其他裏廻りの若い者、仙臺藩の兵卒

所

秋田藩横手城下。

時

明治元戊辰年八月十一日。

その一

横手大町にある嘉右エ門の家の内。廣い臺所。棟木を見せた天井。

中央爨敷きの部分が一段高くなつてゐる。大きい爐が切つてある。

上手は米倉の壁、それに沿うて戸棚や膳棚がある。その前は板敷。

下手は、入口から通つてゐる土間を隔てゝ內土藏、戸前の所が板敷になつてゐる。

前は廣い土間。所々に藍瓶が埋めてある。

臺所の正面、障子の蔭は茶の間や居間。上手隅に二階へ行く梯子段の裾が見える。

土間や臺所の上に、染物の反物が簽をつけて張り渡された儘である。

諸道具類は片づけられ、家族が立退いた後の空虚を感じさせる。

夕方近い。諸方の戸口が締められて家中が薄暗い。引窓が開かれて臺所の上手だけが稍明るい。

奥羽聯盟軍の横手城攻擊が既に開始されて、家に殘つた者は皆緊張してゐる。

養助は爐邊に坐つてゐる。

辰五郎は臺所の隅で火事装束に改めてゐる。いとそれを手傳ふ。

善藏が下手から河水を汲んで來て土間の側に置いて去らうとする。行き違ひに、嘉右工門が土藏の鍵を二三提げて這入つて來る。

嘉右工門。目塗りの土は出來たか。

善藏。新しく二舟こねましたから——

嘉右工門。よし。（内土藏の戸を締め錠を下ろす）みんな、裏の土藏で休め。

善藏去る。嘉右工門臺所に上つて柱に鍵をかける。

嘉右工門。辰五郎、なりだけは立派に固めたな。（坐る）もう人も通らなくなつたやうだ。門を締めて來い。

辰五郎。はい。

急いで土間に下り潜り戸を明けて表の方へ去る。

稍遠く二三の砲聲。

嘉右工門。（聞き澄まして）やつぱり山崎街道だ。山内口ぢやない。——もう着いた時分だな。

養助。いくら女の足だつて、とうに向ふに行つてゐますとも。

嘉右工門。三左工門の所に居さへすれば安心だ。——いと、お前も行けばよかつたのに。

いと。……。

嘉右工門。本當の戰ひはこれからだ。其時こわくなつても知らないぞ。はは。

いと。いえ——（上手流しの方へ去る）

嘉右エ門。兵糧方に泣き出されては困るからな。――養助。いさといふ時は先祖の御位牌を持ち出すのだぞ。それがお前の役だ、忘れるな。
養助。えゝ、支度してあります。
嘉右エ門。外の物は、辰五郎も居るし、どうでもいゝ。俺は最後までこの家を見屆ける。
養助。私らも――
嘉右エ門。いゝ。云はれた事だけしてくれ。――辰五郎は何を愚図〳〵してゐる。――辰五郎、辰五郎。
辰五郎。(潜りから顏を出して) あの、江戸者の師匠が逃げてくるんです。
嘉右エ門。(立つて) 豐後の師匠か。うん、入れてやれ。
挨拶の聲。門を閉ざす音。潜り戸をしめて師匠夫婦と辰五郎が這入つて來る。師匠は大きい布呂敷包、女房は三味線を抱へてゐる。
嘉右エ門。おゝ。師匠か。どうした。
師匠。へい。近くでどかん〳〵始まつたんで、御助けを願ひに上りました。
嘉右エ門。はは、よくやつて來た。――とにかくまあ上れ。さ、おかみさんもゆつくりして。
師匠の妻。御迷惑さまですが、どうぞよろしく御願ひ申します。
嘉右エ門。何の迷惑たものか。俺のところでもこれから籠城の覺悟だ。人數が殖えればいつそ氣が強くなるよ。はは。
――辰五郎、お茶でもいれろ。
養助も辰五郎も、色彩の變つた訪客を得て、一寸息苦しい緊張感から救はれた氣持で共に笑ふ。

師匠。有り難うございます。ところがとんだ臆病侍で、皆さまの手足まとひになりますばかりで……。

養助。それでも師匠、三味線を持つて來たのは流石だ。武士の魂だからな。

師匠の妻。本當ですよ若旦那、これがおまんまの種でございますもの。

師匠。えゝもう、去年から何度擔ぎ出したことですか。——自分の身が危ぶない時でも、これだけは忘れません。考へて見ると、一つは慾のさせる業ですね。

養助。いや、その道の道具を尊ぶのは感心だ。人間その心懸けが大事だ。

師匠。へい。（固くなる）

嘉右工門。さあ困つた。俺は好きで染物屋をしてゐるが、あの藍瓶を背負つて逃げ出すわけには行かないぞ。

師匠の妻。まあ旦那、御冗談を——。でも御商賣道具には算盤だつてございませう。

嘉右工門。さうか、算盤か。はは。しかしおかみさん、俺は商賣は一向不得手でな、算盤を彈くよりも、淨瑠璃を唸る方がまだうまいつもりだ。はは。

師匠。旦那も若旦那も、義太夫と來たら全く玄人ですよ。——お箱の朝顏日記も、暫く伺ひませんが……。

嘉右工門。嫌な時世になつたな。折角師匠に來て貰つても、世間の騷ぎに遠慮して、こそ〳〵土藏の中で稽古をする始末だ。そしてたうとう戰爭だ。

師匠。へい、私共藝人渡世の者なんぞ、この末どうなりませうやら。——三味線を彈くのも何だか惡い事でもしてゐるやうで……。

養助。いついつ迄そんな事はないよ。そのうちに世の中が治まるにきまつてゐる。——もう御一新といふものにもなつ

てゐるのだから。

師匠。早くさうならなければ、私共はもう上つたりです。やつと御當地まで來て、旦那方の御ひゐきをいたゞいて、やれ嬉しやと思つて居ましたら、またこんな騷動が始まつて――

嘉右エ門。――養助に義太夫を習はせた時分は、手廻り別家から同じ年頃の子供を呼び集めて、十何人一緒に大騷ぎで稽古させたものだ。――大びらに藝事も樂しめないやうでは、人の心が段々惡くなつて行く計りだ……。

砲聲二三、稍近づいて聞ゆ。

師匠の妻。段々近くなつて來ました。

嘉右エ門。おかみさんも、こんな田舍まで來てこわい目に遭はうとは思はなかつたらうな。――もう少し早ければ、うちの女子達の居るところへ送つて上げたんだが。

師匠。御新造樣方は、どちらへ御逃げになりました。

養助。山内の百姓のところだが――。（嘉右衛門に）さつき市太郎にでも、一緒に連れて行かせるんでしたね。

嘉右エ門。師匠もとうにどつかへ逃げたと思つたからな。氣の付かないことをした。

師匠。いえ。とんでもない。そんな御心配は。――去年からもうこわい目に遭ひつゞけなので、私共も糞度胸といふんですか、少しは圖々しくなりましてね。今日も、近所の人が皆立退いても、勝手はわからずつい愚圖ついてゐましたが、耳のはたで大砲が鳴り出したので急にあはて出して――

養助。だがわざ／＼大砲の彈の來る方へ、お城の近くへやつて來るなんて、師匠もよつぽど變り者だ。

師匠。でも旦那の御氣性からして、きつとおうちだらうと思ひましたから、――

嘉右エ門。それがもう少しで締め出しを食ふところだつたな。はゝ。

師匠の妻。もし皆さまが御立退きの後だつたらと、あたしはもう無我夢中で駈け出しました。大町通りへ來て、目印の御門が明いてゐるのを見た時は――

師匠。こいつは身輕だからどん〳〵先に走つて行きますが、私はこんな大きな御荷物を拔つて、目がくらみさうなんです。御門のところで辰五郎さんの姿をお見かけすると、安心して動けなくなりました。

嘉右エ門。まあいゝ。ここで落付いて籠城だ。――町人には勤王も佐幕もない、正直に家業を守つてゐる者に、攻めて來る敵もあるまい。――流れ彈がやつて來たら、それは時の災難といふものだ。惡い事さへして居なければ、どこの軍勢が押し寄せて來たつて、ちつともこわがる事はない。

砲聲二三。

嘉右エ門。たゞな、萬一大砲の彈でも破裂して火でも出たら、精出して消し止めるのだ。こわがつて逃げ出したら、こゝの家だけでなく、隣近所はおろか町中燒けないものではない。――町人は自分の家を守るのが務めだ。――師匠。俺はこの家が灰になるまではかうして頑張つてゐるよ。

師匠。もう私共には、どこがわが家といふものもありません。どうかいつまでもお側に置いてやつて下さい。

更に砲聲二三。

辰五郎。どうして――お城ではどうして默つてゐるでせう。さつきから賊があんなに打つてゐるのに。

養助。軍略にちがひない。間近く寄つて來たら、一時に打ち出すつもりだらう。

辰五郎。でもあんまり靜か過ぎます。あれだけ大砲の彈が飛んで行つたら、大騷ぎになる筈ぢやありませんか。誰も居

ないのではないかしら。

養助。馬鹿なことを。——横手中の侍が皆死を決して立て籠つてゐるのだ。——今に見ろ、賊なんか蹴散らされて了ふから。

嘉右エ門。しかし何だな、辰五郎のいふ通りお城が余り靜かだな。——うん、これは賊方で、嚇しの空砲を打つてゐるのぢやないか。

師匠。空砲ですか。

嘉右エ門。横手の戸村十太夫とへば、佐竹藩の執政として白石會議へ出られた方だ。奥羽聯盟に加はつて會津庄内の救解を願つた方だ。もとは立派な味方だ。——賊だつて、藩長の兵隊は憎くても、お國の人達になんの恨みがある。ましてこの横手のお城だ。流石に攻めたくないのだらう。

辰五郎。さうです、きつとさうです。

養助。そんな事があるものか。——軍略ですよ。——それに賊のひよろ〱彈なんか、まだお城へ屆かないのですよ。

師匠。一體——今度の戰爭の事は、私共なんぞには一向わかりかねますが、今日あのどん〱やつてゐるのは何處の兵隊なんでせうか。

嘉右エ門。庄内衆と仙台衆だ。

師匠。庄内といへば、あの酒井さまの御藩ぢやありませんか。それが——賊になつたんですかねえ

養助。何も不思議はない。會津と庄内はもと〱天朝の征伐を受けてゐる國だ。

師匠。さうですか。わからないもんですねえ。(女房を顧みて)みんないゝ方ばかりと思つてゐたのに

嘉右工門。どうしてだね。

師匠。まあ、私共の敵を討つて貰つたやうなものです。――江戸中をあばれ歩いた薩摩の惡侍を退治して下さつたんですから。

師匠の妻。大勢の薩摩つぽうが、市中を荒らしまはつて、それはそれはひどい亂妨を働くので、一時は夜歩きの人もなくなつた位でした。私共は稼業を駄目にされた上に、たうとう近所に附け火までされて丸焼けに遭つたのです。

師匠。江戸に住めなくなつたのもあの惡者共のせゐですから、そいつを懲らして下さつた酒井さまは正しい有り難い方だと思つてゐました。それが賊になつてこの横手へ攻めて來るとは、世の中は解らないものでございますねえ。

嘉右工門。いや賊でも官軍でも、その人のいゝ惡いにかはりはないよ。ほんの廻り合せで敵味方になる世の中だ。現に今だつて、一と月前の味方同志の戰ひぢやないか。

師匠の妻。どうしてまた、そんなことになつたのでせうね。

嘉右工門。わからないね、おかみさん。――養助はいろ〳〵講釋してくれるが、勤王とか佐幕とかの理窟だけでは、どうしても俺に納得出來ない。――ただ人の心の持ち様が亂れて無理が出來たのだとしか思へない。――この奥羽ばかりでなく、日本國中で戰爭が始つてゐるさうだからな。

養助。えゝ。どこでも戰ひです。勤王の大義を奉じない者を亡ぼし盡すまでは、どうしても必ずしなければならない戰爭です。――お父様の云ふやうな、そんな廻り合せでやつてゐるのではありませんよ。

嘉右工門。さうかな。戰ひをしてゐる侍ばかりか、町人百姓の難儀まで勘定に入れても、それでもしなければならない戰爭かな。どこかに無理はないかな。

養助。勤王の精神を徹底させるためにはやむを得ない事です。
嘉右エ門。ぢやあ養助、勤王の道理といふものは、ひどくむづかしくつて、えらい人でなければわからないものか。
養助。そんな事はありません。日本の國に生れた者には、日月の如く明かに、おのづからわかる筈のものです。それなのに――
嘉右エ門。まあ待て。――それからお前は、賊軍にはそれ程の道理がわかる人間がまるでゐないと思ふのか。仙臺藩にも米澤藩にも會津藩にも。わかつてゐるのは官軍方ばかりだと思ふのか。
養助。……。
嘉右エ門。それがわかつてゐながら、命懸けの軍さをする賊の方に、まだ外の譯はないのか。官軍方にも何かの間違はないのか。――俺には、今度の戰にどうも無理があるやうに思はれてならない。心の持方さへ正せば、日本國中で戰爭なんかしなくても濟むと考へるがな。
養助。無理――心の持方をどうするんです。
嘉右エ門。誰でも一段上の人を信じて從ふことだ。それが順繰りに一段づつ上の人を信じて行くのだ。――天子様でも將軍様でも、上に立つ方に間違のあらう筈はない。――ところが人といふものは、すぐ一段上位のことはわかつても、三段四段上のことが本當にわかるものぢやない。――ずつと上の方の御心を、一足飛びに飲み込んだつもりの連中が多くなつて幅を利かすと、世の中に無理が出來間違ひが起るのだ。今度の戰爭だつて――

突然やゝ近く、別の方角から砲聲起る。
一同驚いて顏を見合はす。

辰五郎。一寸、見て來ます。

下手へ走る。

更に別の方角で豆を炒る如き銃聲が起る。

養助。あ、お城方だ。

嘉右工門。さうらしい。——鉄砲だな。どうして大砲でどん〳〵やらないかな。

辰五郎姿を現はす。

辰五郎。今度は愛宕山の上から打ち出しました。——兄さんお城でも始まりましたよ。

續く砲聲。銃聲の斷續。表通りの方で喚聲が上る。

皆總立になる。いとも出て來る。

やがてかたりの人數が叫びながら走り行く足音。四五の砲車の重い轍の地響。

師匠。大砲ぢやありませんか。

養助。うむ。山崎街道からやつて來たのだらう。——ボンベイ（臼砲）といふ大砲だ。

師匠の妻。あんな地響がして——怖ろしく大きさうですね。

嘉右工門。——横手の城下にも、たうとう賊が足を踏み入れたか。（いとを見る）おい、いと。こわいか、こつちへ來い。

師匠の妻。（近づいて）まあ、ねえやあさんも殘つてゐたんですか。——みんな一緒だから、こわい事はありませんよ。

嘉右工門。誰もゐなければ御飯に困るだらうつて、殘つてくれたんだ。仲々これで豪傑だよ。

師匠。感心にねえ。（いとに）うちのかみさんも仲間入りだ。何でも手傳ひますよ。

養助。賊はボンペイを何處へ据えるでせう。

嘉右エ門。お城でも威勢よく大きな奴をぶつ放せばいゝに。――（女達に）さあこれからが本物だぞ。びつくりして腰を拔かしては困るぞ。

銃聲が一しきり聞こえる。辰五郎去る。

嘉右エ門。あんな物ぢや賊は追つ拂へない。なぜ大きい奴を打たないのかな。

養助。もしかすると――

近く砲聲二三響く。

女等は思はず耳を蔽うて寄り添ふ。

養助。さつきのボンペイだ。

騷音、喚聲が遙に聞こえて來る。

裏の方で辰五郎等の聲がする。

更に砲聲。

嘉右エ門。お城方はどうしたんだ。

辰五郎また出て來る。

辰五郎。賊が、もう川向ふへ渡りました。

養助。大砲はどこで打つてゐる。

辰五郎。川原町でせう――材木の間から煙が見えます。

嘉右エ門。お城方はどうした。――まだ打たないか。

辰五郎。鐵砲ばかりです。

砲聲。辰五郎去らうとする。

嘉右エ門。辰五郎、怪我しないやうに氣をつけろ。

そこへ善藏が來る。

善藏。親方。二の丸へ火がかゝりました。

嘉右エ門。なにお城が――

師匠夫婦といとを殘して一同下手へ走り去る。

騒音。喚聲が高まる。――段々遠くなる。しばらく。

もう薄暗くなつて、やがて引窓から炎の餘映がさしこむ。

三人は默つて窓を見上げてゐる。

師匠の妻が顔を伏せる。しく／＼泣き出す。

師匠。――どうしたんだ。えゝ。

師匠の妻。あなた、上野のお山が落ちる時も、こんなだつたらうと思ふと……

師匠。うむ。

いとも何となく引き入られるやうに顔を伏せる。しばらく。

養助だけ、音もなく戻つて來る。

爐邊に坐つて青ざめた顔をしながら、ぢつと引窓を見上げてゐる。

その二

同じ場面。

同じ日の夜。「その一」より三四時間後。

土間近く台所に行燈。茶の間の障子に灯影がさしてゐる。

爐邊には辰五郎と師匠。

內土藏の戸は開いてある。戸前に市太郎が腰をかけ、それを取卷くやうに、善藏其他裏まはりの若い者が三人。藍瓶に腰を下ろしてゐる者もある。

台所の上手で師匠の妻といとが遲い夕飯を食べてゐる。引窓は締めてある。

板敷には若い者達の膳椀が、まだ片付けずに置いてある。

辰五郎。（市太郎へ）——山內の方へも聞こえたらう。

市太郎。えゝ、それはよく聞こえました。（善藏に）どおん〳〵つて響いて來ても、賊の方かお城方かわからないんだから、たゞ胸をどき〳〵させてゐたよ。

善藏。なあに、あれあ皆賊の打つた奴だ。

市太郎。お城の方は小さいのか。
若い者一。小さいにも大きいにも、大砲なんか一發も打ちはしない。
市太郎。どうして。
若い者一。どうしてだか、鐵砲のバラ〳〵玉ばかりだ。
辰五郎。お城には大砲がないのさ。昨日官軍が退き上げる時、一つも置いて行かなかつたんだね。
市太郎。それぢやお城の落ちるのもあたり前だ。
善藏。見てゐて口惜しくなつてな。
若い者二。いよ〳〵戰爭が始まつたかと思ふと、もうお城が燃えてゐるんだから。
若い者一。愛宕山から見下しにやられては溜らないよ。――市太郎兄、あの天邊からどん〳〵打ち出したんだよ。びつくりして了つた。
善藏。お城の火が見えたか。
市太郎。山内では、ぼうと空燒けしただけだが、街道へ來ると、晝のやうに明るくなつてゐた。
若い者一。どうだ、街道で賊と逢つたか。
市太郎。一人も見ない。道で聞くと、庄内衆は餅田と赤坂へ引き揚げたさうだな。
若い者一。仙台衆はどうだな――淨光寺にみんなゐたか。
市太郎。役人みたいなのが少し居たきりだ。
若い者二。兵隊は町にゐないんだな。

喜蔵。市太郎兄、でも流石にやこわかつたらう。

市太郎。なあにこわいもんか。たゞびつくりしたよ。――大町通りまで来て、もううちへ帰つたつもりでゐると、剣付鉄砲を持つた番兵が「待て」だらう。

喜蔵。うん。

市太郎。竹に雀の高張を立てゝ篝火を焚いてゐたよ。――「何処から来た」つて云ふから、「山内から来て親方のとこへ戻る」と云つた。「何処の者だ」と聞くから「大町の七尺の裏通り」だつて返事をしたのさ。そしたら、傍にゐた大沼が居てね――

辰五郎。大沼三郎兵衛の息子だらう、竹松と云ふんだ。

市太郎。頷くと――「あゝ七尺の裏通りか」つて合図したので、すぐ帰されたよ。なんにもこわい事なんかありはしない。

辰五郎。大沼はやつぱり仙台家についたんだな。――この間から、内通してゐるといふ噂があつたぢやないか。

市太郎。えゝ。いろ／＼番卒を指図したり、妙に威張つてゐましたよ。

辰五郎。威張つてゐたのかい。

師匠の妻といとと云ふ娘を伴ひ来る。

いと、灯をつけて上手へ入り、師匠の妻と共に後片付にかゝる。

嘉右衛門お茶の間から声をかける。

嘉右衛門。――市太郎。

市太郎。へい。（立ち上る）

嘉右エ門。用ぢやない。——一ぱいやつたか。

市太郎。えゝ、いたゞきました。

嘉右エ門。さうか。今日は難儀をかけたな。——明日はまた早く山内へ行つてくれ。持つて行く物はあとで出して置く。——もう裏へ行つて休め。

市太郎。へい。明朝は暗いうちに參ります。

嘉右エ門。——善藏。

善藏。へい。（立ち上る）

嘉右エ門。誰か一人寢ず番を置いて、あとはみんな休ませろ。——（獨言のやうに）もう夜討の心配もないが、火の用心だ。——水だけは十分汲んで置けよ。

善藏。へい。——では御免蒙つて。

　若い者一同が下手へ去る。

　辰五郎延びをする。

師匠。辰五郎さん、今までつひ氣がつかなかつたが、ひどく丈夫に固めたもんですね。

辰五郎。（自分の刺子姿を顧みて）はは。

師匠。しかしあのボンベイといふ奴を聞いた時は、どうなる事かと青くなりましたね。今頃、こんなに延び延びして居られやうとは思ひませんでした。

辰五郎。なんだか張り合ひ拔けがした。——賊が打ち出す、すぐ落城だ。も少し華々しい合戰があるかと思つてゐ

たら――、

師匠。（手を振つて）いやこれが、華々しかつた日には大變ですよ。流れ彈か逸れ玉が降つて來ますぜ。また賊が負けてたとしたら只は逃げませんよ。町中火にして行くにきまつてゐます。

辰五郎。川原町に火をつけた位だからな。――戰ひよりも、あの方がよつぽど危ぶなかつた。

師匠。戰ひがこれ位で濟むなら、有り難い方ですよ。――去年の暮は、薩摩のあばれ者とお上の兵隊とが、江戸の町どこかしこで戰ひを始めるので、毎日毎晩おど／＼してゐました。そして揚句の果は火まで付けられるんですから、お話になりませんや。

辰五郎。――あんまりもろ過ぎたよ。

師匠。しかしあれはもとから覺悟の上の落城ですな。人數から云つたつて賊の方が何層倍も多いのに、大砲一つ持たずに合戰を始めるなんて。

辰五郎。官軍は皆引揚げて了ふし、お城に殘つてゐた横手侍と云つたところで、ほんの知れた數だからな。――敗けるのも、それは無理もないが……。

師匠。三方から大砲を打ちこまれたんですから、大方討死でせう。――あゝどかん／＼やられては、どうにもならない。

辰五郎。叔父さんも兄さんも、さつきからそれを案じてゐたが――殿様はじめ、皆がうまく引揚げてゐればいゝが。

師匠。こちらではお侍のお知合ひも多い事ですからな。

養助、二階から下りて來て爐邊へ來る。

養助。（茶の間へ聲を掛ける）お父様、山内へやる手紙を書いて置きました。

嘉右エ門。さうか。市太郎は朝早く出かけるさうだ。――それからな、序に子供のものを何か持たせてやれ。

養助。何がいゝでせう。

嘉右エ門。玩具と、飴でもやるか。――明日から賊が入りこんで來れば、樣子に依つては十日一週間と歸つて來られないかも知れない。あつちで子供に飽きられたら、だましやうがなくつて女子達が困る。――もう今夜から困つてるかも知れないぞ。

養助。えゝ、場所が變つてゐるし、きつとまだ寢ませんね。

嘉右エ門。うん。お前に似て宵つ張りだからな。いゝ所が似ないものだ。はは。

師匠。お孃さまも、知らない百姓家なんぞへ連れて行かれて、どうしたんだらうと思つていらつしやいますね。

嘉右エ門。大人にはたまに不自由させるのも藥だが、子供は可哀相だ。大なり小なり軍さには誰一人難儀をのがれられない。困つたものだ。

師匠。それあ全く。――戰場で功名手柄を立てる方はいゝとして、民百姓は迷惑ばかり背負はされるんだからやり切れません。

嘉右エ門。（灯を消して炭の間から出て來る）合戰だけは濟んでも、後始末はいつまでかゝるやら。――勝つても負けても有り難い事は一つもない。（養助に）俺は土藏から着類を出して來る。あとで玩具を運んでくれ。（呼ぶ）いと、いと。

いと出る。

嘉右エ門。手燭をつけて、俺について來い。そつちの方はおかみさんに賴んでな。

師匠。何にも御役にも立ちませんで。――今夜はまた御無理を御願しまして相濟みません。

嘉右エ門。いや、おかみさんみたいな別嬪を連れて夜步くと、燒餅をやいて、仙台衆がどんとやるからな。用心に越した事はない。はは。

嘉右エ門といと內土藏に這入る。

辰五郎。兄さん、大沼の事は本當でしたよ。

養助。倉松がどうした。

辰五郎。間者だ間者だつて云はれたでせう。――今日はもう仙台方の世話をして、淨光寺に詰めてゐるさうです。

養助。やつぱり前々から賊に內通してゐたんだな。

辰五郎。(師匠に)うちへなんぞもちよい〱來て、何知らぬ顏をしてゐたんだよ。

師匠。へえ、憎らしい奴ですな。お城があんなに早く落ちたのも、一つはそんな奴の手引きもあつたんですな。

辰五郎。間道傳ひにまで攻めて來たといふから。――それにしても、ひどく呆氣なく負けて了つたもんだ。

養助。何をいふ、橫手の侍が必死の覺悟で戰つたんだ。

師匠。多勢に不勢ぢや、どんな强い方だつつて叶ひませんやね。

辰五郎。そんなら、初めから人數を澤山にすればよかつた。橫手で合戰をやるのはとうにわかつてゐるのに、前の日になつて、官軍がみな引揚げるなんて話はない筈だ。

師匠。まあ、さうです。賊が大勢で押し寄せて來るのもわかつてゐますからね。

辰五郎。……第一薩長の兵隊が、大砲一門殘して行かないのだから、合戰らしい合戰も出來なかつたわけだ。自分さへ

よければ、ひとはどうでもいゝと云ふ腹なんだね。

養助。辰五郎、お前などの知つた事ぢやない。――軍略なら、仕方がない。

師匠。それあまた、いろ〳〵段取りがありませうからな。

辰五郎。だつて、その軍略だつて、みんな薩長の兵隊がきめる事でせう。あの人達は、どうせ横手を負けるものと踏んで、放つて置いて、みす〳〵見殺しにしたも同然なんです。

養助。下らない事を――お上の軍略に、お前などがとやかく口を挾むことがあるか。

辰五郎。――同じ官軍でありながら、横手が危ぶないのに加勢も來なかつたぢやありませんか。軍略などはどうでも、人情があつたら、急いで馳けつけるのが當り前です。――お城の人達も、さぞ心細かつたでせうよ。

養助。（息苦しく）勤王の大義のため、錦の御旗の下でする戰ひだ。みんな、悦び勇んで、討死を遂げられたにちがひない……。

辰五郎。私は、きつと官軍の不人情を恨んだと思ひますね。

養助。不埒なことを云ふな。（睨む）

座が白ける。

いとが内土藏から夜具布團を運び始めて戸前に積む。

師匠の妻が上手から手を拭き乍ら出て來る。

師匠の妻。ねえやさん、もう濟みましたが、あと、用はありませんか。

いと、頷く。

師匠の吹消した灯を持つて台所へ來る。

師匠。（宥めるやうに）しかし、まあ、過ぎた事ですし、とにかく戰爭も濟んで何よりでございますよ。毎日〳〵今日のやうにどん〳〵ぱち〳〵が續いたら、私共も生きた空がなくなりますからね。早く片付いた御陰で――

養助。（かつとして）師匠は、お城が早く落ちたのをよろこんでゐるのか。

師匠。いゝえ、そんなつもりぢやありませんとも。たゞ軍さには、これまでもうひどい目に遭つて來てゐるものですから、つひ――

養助。お前達は江戸者だ。官軍が徳川方に負けると、いゝ氣味にちがひないわけだ。

師匠。そんな、とんでもない。私共みたいな流れ渡りの者には、どこのお國も住めば都になつて、御世話になる土地の味方です。さつきもお城の火を見たら、悲しくなつてこれと二人で泣きました。

養助。なんで味方なものか。――勤王軍の張本薩摩が、お前達の敵だと云つてゐるぢやないか。

師匠。（きつとして）それも薩摩つぽうなら、官軍でも何でも怖いと思ひますが、御恩を受けてゐる横手の官軍が敗けたのを、なんで悦ぶわけがありませう。若旦那、物のわからない私共でも、そんな犬畜生にも劣る心は持つて居ません。

養助。――官軍に二つはない。

師匠。いえ、ありますとも。薩摩の無法者にどうして正路な事が出來るものですか。勿體なくも錦の御旗をかさに着てゐる僞者です。長五郎さんも云はれたやうに、義理知らず人情なしです。――若旦那、そんなわからない官軍があるものでせうか。あいつらはにせ者の官軍です。

師匠の妻。(はら〳〵して)あなた——そんな……。

師匠。あんな奴等が幅を利かしてゐては、官軍もきつと人の恨みの的になります。天朝方の名折れになります。

養助。だから、賊の味方をする氣だな。有り難い庄内勢の手引きでもするがいゝ。

師匠。(涙を浮べて)いかに若旦那でも、あんまりひどい……私が、私がさう見えますか。ひどい……口惜しいんです……

……(顏を蔽ふ)

嘉右エ門は少し前から内土藏を出て戸前に立つてゐる。いとに小聲で何事の處置を云ひつけ、手燭をそこに置いて爐邊に來る

嘉右エ門。養助。またお前の癇の蟲が起つたな。——師匠もおかみさんも、氣にかけてくれるな。これが惡い持病だ。

師匠。——私共こそ、物を知らない分際で口答へしたりして、どうか若旦那、御勘辨下さいまし。

嘉右エ門。——養助。官軍だの賊だので、よし惡しをきめる癖がまだ取れないのか。困つたものだ。お前はいくら本を讀んでも、それぢや何にもならないぞ。本に讀まれてゐるのだ。官とか賊とか、勤王や佐幕で物事を片づけるのが抑抑の間違ひだ。

養助。間違ひだとは思ひません。

嘉右エ門。何だと。

養助。道理にそむく者はいつだつて惡人です。泥棒が施しをしたとて、之を善人だとは云へません。施しはいゝ事でせう、しかしその本の、盗みをする人間を善人だとは云へません。——勤王の大義に從はずに佐幕の軍を起すやうな者は、天理にそむく惡人にちがひないぢやありませんか。

嘉右エ門。云ふ事は立派だ。それで師匠をいぢめたのか。ははは。しかしそれは木の上面だけしか見ない者の議ぞ。世の中へ出れば死んで了ふ議論だ。
養助。そんな事はありません。これが生きて行く上の、唯一つの正しい尺度です。
嘉右エ門。それは道理を計る物さしにはなつても、その奥の善悪を見る役には立たない。
養助。道理より奥に善悪はありません。
嘉右エ門。いやある。
養助。何です。
嘉右エ門。お前の忘れてゐるものだ。人の心だ。人柄だ。
養助。そんな物は――
嘉右エ門。道理の上の善悪よりも、人としてこの方のよし悪しが一番大本だ。お前は理窟を書いた文句に目がくらんで、それが見えない。道理を離れた仕業を、お前は道理の尺度で見ようとするから駄目だ。
養助。道理の尺度でなくて、何で計るのです。
嘉右エ門。人の心を知る目だ。
養助。それは言葉だけです。
嘉右エ門。うん、さう思ふか。それぢや養助、一つお前に聞く。お城の殿様をいゝ方えらい方とは思はないか。勤王の旗印を立てて、落城を覺悟で賊軍と戰つたのだ。
養助。無論えらい方です。そんなことは――

嘉右工門。ふん。ところが一月前まで、奥羽同盟の意見で藩論を動かしてゐたのは誰方だ。同じ戸村十太夫様ぢやないか。もし其時薩長の官軍が攻めて來て、今日の逆に賊となつたとしたら、それ丈で殿様をわるい人えらくない人と本當に思へるか。

養助。しかし殿様はもと／＼學問もあり、勤王の志もあつた方です。

嘉右工門。それ程の方が佐幕と見做される同盟に加擔したのは、色々事情があつたからではなからうか。藩の軍費が足りなかつたかも知れない、出來るだけ戰爭を避けて民百姓を苦しめまいといふ御趣意からだつたかも知れない。――とにかく一月前の佐幕でも今日の勤王でも、戸村様のえらさに變りはない。――師匠がよしんば庄内を慕つて薩摩を憎んでも、道理よりもつと深いものに動かされたからだ。

師匠。何も、庄内を慕ふなどといふわけぢやありませんが……

嘉右工門。――養助。官軍とか賊軍とかで人を片づけるのはよせ。もつと奥に、人の心のよし惡しを見なければならない。取りはづしの出來る看板なんぞのために、誰が命懸けの戰ひをするものか。どこの藩でも勤王佐幕と方針が定まるのは、たゞ廻り合せに依ることだ。それをきめるのは上にゐる人達の仕事だ。下々の知つた事ではない。

養助。それでも、私らにだつて意見といふものはあります。

嘉右工門。生兵法は大傷のもとだ。たゞ一段上の方を信じるのだ。俺は勤王でもなければ佐幕でもない、どこまでも戸村様に從ふだけだ。二段三段上の事は、理窟でわかつてもお心までよくわかるものぢやない。薩長の成り上り武士が、天朝の御意を體した氣でも、諸方で間違ひの種を蒔くのはその爲ぢやないか。天朝は有り難くても、薩長が憎くて賊になる者が出てはゐないか。

養助。……。

嘉右エ門。（氣がついて）みんなにえらい說敎を聞かせたな。はは、無禮な奴だ、辰五郎、欠伸してゐるぞ。——さあ今夜はゆつくり休める。おかみさん、あそこへ床を出させた。御座敷は二階だから、いとと行つてうまい工合に敷いて貰ひたい。

師匠の妻。何から何まで御迷惑をおかけしまして、本當にありがたうございます。

挨拶していとと共に二階へ布團を運ぶ。

嘉右エ門。師匠、こゝの家では世間とちがつてな、親父が下手な義太夫を唸つてゐると息子が子曰くだ。まあしかし、養助が本を讀むのもどうせ一つの道樂だと思ふから、なるべく肩身を狹くしないでゐるが、少し窮屈だ。どうだ師匠、豐後のうんと艷つぽいところでも授けて、養助をやはらかして貰へないかね。全く親父が助かるからな。はは。

門を叩く音がする。人聲もする。

嘉右エ門。（坐つたまゝ）誰だ。

返事の聲がよくわからない。

嘉右エ門。辰五郎、見て來い。

師匠の妻が二階から下りて來る。

辰五郎、潛り戶の外へ出る。話聲。

やがて門を開ける音。

辰五郎。（歸つて來る）叔父さん——

大沼倉松が仙台藩の兵卒を二人從へて這入つて來る。紋提灯を持つてゐる。

嘉右衞門。倉松さんぢやないか、何だねこんなに遲くなつてから。

倉松。七尾親方、少し用事があつてな。迎ひに來た。

嘉右衞門。ほう、さうかい。

倉松。御苦勞だが、一寸淨光寺まで來て貰ひたい。

嘉右エ門。妙だね。――淨光寺なら阿彌陀様ぢやあないか。うちとは宗旨ちがひだ。それにまだ俺だつて、お寺からお迎ひを受ける程の年でもないにな。はは。

倉松。親方、冗談事ぢやない。お前さんに用のある方がゐるんだ。

嘉右エ門。誰方だね。

倉松。仙台藩の松枝兵衞様といふお侍だ。

嘉右エ門。はて、知らないお名前だ。何の御用かね。

倉松。行つて御話を聞けばわかる。

嘉右エ門。商人は儲け話でないと氣が乘らないものだよ。――もし染物の御註文なら、算盤を持つて行かなければ用が足りないからな。

倉松。――松枝様は短氣な方だから、餘りお待たせしない方がいゝ。

嘉右エ門。まあ折角のお迎ひだ、すぐ出かける。

倉松。仙台勢の假御本陣だ、武藤折江様、川上與兵衞様といふ方もゐる。粗相のないやうにした方がお爲だよ、親方。

嘉右エ門。倉松さんは大層仙台方のことがくわしいんだね。
倉松。番兵に名前を云へば案内する。では御苦勞だがすぐ來て貰ひたい。
嘉右エ門。承知した。――お前さんも、よる夜中使ひ走りまでして御苦勞だな。

倉松等去る。

嘉右エ門。（一座を見て）はは、何も心配する事はない。一寸出かけて來る。――いと、いつもの袴羽織を持つて來い。
養助。いと、俺のも持つて來い。
嘉右エ門。お前なんぞ行かなくてもいゝ。
養助。お父樣一人はやれません。賊の奴等が――
嘉右エ門。養助、俺が留守の時、この上座に坐つて指圖をする役は誰だ。お前はうちにゐろ。
養動。……それでは辰五郎にお供させます。
嘉右エ門。あわてるな、惡い事さへしたければ、神佛だつて怖ろしいことはない。行つて話をして來るだけだ。――辰五郎、いらないぞ。生れた日から、五十年も毎日歩く大町通りだ。目をつぶつて行つても、怪我なんぞしない。――俺は一人で行く。

師匠の妻、身支度を手傳ふ。

辰五郎、提灯をつける。

嘉右エ門。どうせすぐ歸るから、寢酒の燗でもつけて置け。今日の草疲れ休めに一ぱいやらう。――ぢやあ養助、行つて來るぞ。

嘉右エ門出て行く。辰五郎と師匠夫婦が後を追つて見送つてゐる。しばらく

養助。辰五郎、辰五郎。

三人はひつて來る。

養助。お前後から行け。お迎ひだと云つて外で待つてゐるのだ。變つた事があつたらすぐ知らせに來い。――提灯を忘れるな。

辰五郎急いで出て行く。

師匠。若旦那、向ふだつて名のある侍なら、無暗な事はしますまい。

養助。さうは思ふが、何しろお父様はあの氣性だ……。

師匠の妻。元氣に歩いていらつしやるんで、賊の本陣へなど行く御様子ぢやありませんものね。

養助。……俺も、無理について行けばよかつた。

師匠。まあ辰五郎さんがゐますから――

しばらく。

養助。師匠、裏へ行つて市太郎を呼んで來てくれないか。

師匠。へい。

下手へ行く。

市太郎と善藏とを連れて來る。

市太郎。親方が、賊に呼び出されたんですか。

養助。大沼が迎ひに來てな。――市太郎、淨光寺はどんな工合だつた。

市太郎。奧の方はよくわかりませんが侍方は本堂にゐるやうでした。――門のところにも庭にも、篝火を焚いて兵卒が立つてゐました。

養助。賊がお前に何か亂暴な樣子を見せなかつたか。

市太郎。別段なこともありませんでしたが、劍附鐵砲を持つてゐるので、氣味が惡かつただけです。

養助。そんな奴が澤山ゐるのか。

市太郎。いゝえ、みなで二三十人――十人位が所々に番兵に立つて、あとは腰かけて休んでゐました。そして大沼があちこち歩いていろ〳〵世話を燒いてゐました。

一人一人若い者がはひつて來て、台所の板敷に腰かける。

二階から下りて來たいとが、そこへ行く。

師匠。なあ兄、そいつらは手荒な扱ひなんぞしないだらうな。

市太郎。薩摩の兵隊なんかより、おとなしさうな面付だつた。

善藏。さうおつかない連中でもないか。

市太郎。また大沼だつてところの人間だ。傍にゐて、親方に滅多な事はさせないよ。

善藏。（養助に）でも樣子を見て參りませうか。

養助。辰五郎が行つてゐる――はたで騷ぎ立てると、反つて惡いかも知れないな。

市太郎。大丈夫ですよ。親方が立派な人だとわかれば、相手だつて自然その氣になりますよ。

善藏。行つて、もうよつぽどになりますか。

師匠。まだ。それ程も經たないが。

市太郎。どら善藏兄、表へ行つて淨光寺の方でも見てゐよう。

市太郎善藏潜り戸の外へ出る。

しばらく。

師匠の妻。（氣がついて）旦那がさうおつしやいましたが、お寢酒の支度を致しませうかしら

養助。いつ頃戻るかわからないが――さう、歸つたらすぐ飮めるやうにして貰はうか。

いと師匠の妻、支度する

養助。……師匠、も一人誰かやつて見ようかな。

師匠。大抵御心配はないと思ひますが……

養助。用事だけならもう戻つて來てもよさうだ。

師匠。えゝ、さうですな。

善藏。（はひつて來る）こつちへ提灯が走つて來ます。

養助　走つて來る――辰五郞だな。

師匠。何かまた……。

門のところで辰五郞の聲。すぐ來る。

辰五郞。いま來ます。――すぐ後から來ます。

師匠。あゝよかつた。

師匠の妻。お歸りなんですか。

辰五郎。どうしても門の内へ入れないんだよ。でも叔父さんが本堂の階段を下りるところが見えたから、すぐ飛んで來た。

養助。何か――變つた樣子はなかつたか。

辰五郎。番兵が立つてゐる丈で、他の者は寢たのか、お寺はしんとしてゐましたよ。

嘉右エ門はひつて來る。

養助。お歸りなさい。どうかと案じてゐましたが……

嘉右エ門。つまらない心配なんかするもんぢやない。（市太郎を見て）なんだ、まだ寢ないのか。善藏も裏廻りもゐるな。――さうか丁度いゝ。みんな裏から大槌を持つて來い。

善藏。へえ、今頃大槌でどうするんですか、親方。

嘉右エ門。いゝから持つて來い。

若い者去る。

嘉右エ門上る。

辰五郎。槌で何をするんです、淨光寺へでも攻めて行くんですか。

嘉右衞門。はは。そんなところだ。今わかる。

養助。用事はどういふ事でした。

嘉右エ門。うん。松枝といふのは仲々しつかりした侍だ。俺も負けさうになつてな。

養助。何か無理難題でも云ひ出したんですか。

嘉右エ門。うん、俺にはどうしても染め上げられない註文だ。――明日から宿をしろといふのだ。

養助。え――あいつらが泊るんですか。

嘉右エ門。誰がおめ／＼泊めるものか。戸村様横手寄鄉十八ケ町の親御肝煎りまでつとめた家だ。お城に大砲を打ちこんだ敵の高張を立てられるか。五本骨の日の丸扇をかざした門に、竹に雀の幔幕が張られると思ふか。――無論斷つた。

養助。それで――承知しましたか。

嘉右エ門。しつこく、上げたり下げたり、頼むとまで云ふんだ。どうして私の家みたいな破屋が懇望かと聞いたら――どうだ、みな門のお蔭だ。

師匠。御門がどうしたんです。

嘉右エ門。大將様は淨光寺本陣の近くへ泊りたい。そこでうちの門へ白羽の矢を立てた――これなら諸人の目印になるといふのだ。――その時俺はうまい決心がついたよ。

養助。どうするんです、御父様。

嘉右エ門。修繕中だから出來たら貸すと云ひ拔けて來た。――それでいゝんだ、それでいゝんだ。

藏。親方、大槌は三つよりありませんが……。

若い者達が來る。

嘉右エ門。それ丈で澤山だ。――さあお前達、それを力一ぱい振り上げて、門をこわして來い。

市太郎。え、門を――

辰五郎。門を――

養助。お父様、――

嘉右エ門。――こわれた家が出來上らなければ、いつ迄も賊の宿にはならないぞ。鼻をあかしてやるんだ。――さあ愚圖愚圖するな。さつさと門を叩きこわせ。

若い者外へ行く。

嘉右エ門。早くこわせ――市太郎、善藏、元氣よくやれ。

門をこわす音始る。

養助。お父様、門はどうでも――賊に咎められたら大變ぢやありませんか。

嘉右エ門。はは、そんな事はとうに考へてゐる。俺は理窟がよくのみこめないから、勤王や佐幕で殿樣のお味方に立つわけに行かない。たゞ御恩になつた殿樣に刄向ふ奴等は誰でも彼でもみんな憎い敵だ。

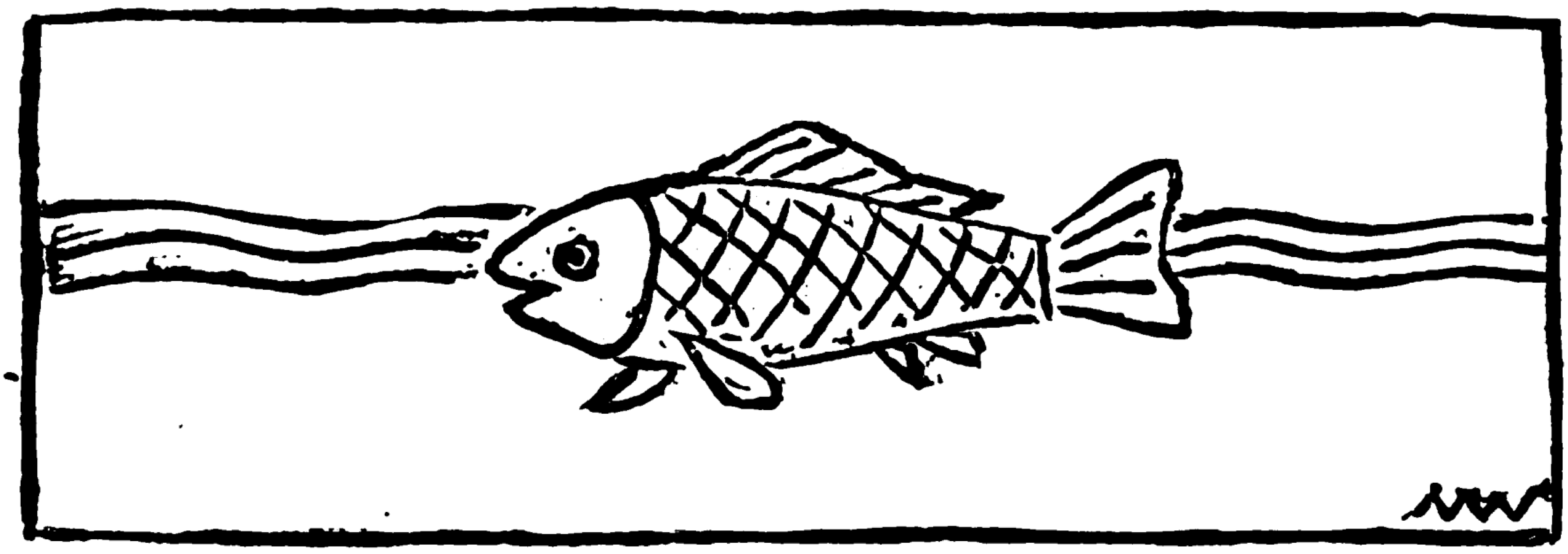
養助。もし門をこはして、あとで賊が――

嘉右エ門。侍には弓矢鐵砲の攻道具があるが、町人が自由になるものは自分の家だけだ。これをこわして敵が困れば、もう本望だ。情ないが、俺たちに出來る御恩返しは精々こんなものだ。

養助。……。

嘉右エ門。――養助。五十過ぎれば侍衆だつて戰場御免だ。俺が隱居首を持ち出してやる道樂だ。だまつて見てゐろ。(呼ぶ)おい、もつと力を入れて打つ叩け。塀なんぞ序にぶつ倒してもいゝ、門を滅茶滅茶にこわせ。(一層强い音。)――心ばかりの敵討ちだ。あの音を聞いてゐると、心が輕くなる。――師匠、さあ一ぱいやらう。これがお城の勝つた晩なら、お箱でも出すのだがな……。ははは、養助。親父が勤王の大忠臣になつた祝ひだ、お前も飮め。はははは。

門を毀つ音つゞく――



陰壽

里見弴

おこうが私の行つてゐた溫泉宿に尋ねて來て、湯あがりの化粧に、髪網（ヘヤ・ネット）にひつかかる不便から、指環を二つともぬいて、鏡臺のはしに載せて置いた時、ふと、王冠型の爪でうけたダイヤモンドの裏側に、白粉がいつぱいたまつてゐるのが目についたので、しようことなしの時間つぶしに、楊子の先に紙を捲いて掃除にかゝつたことがある。と、もう一つの、蒲鉾に、ぽつん〳〵細かなダイヤモンドを植えた方のを、おこうが、手早く取つて、左の藥指にはめて了つた。――そのくらゐの察しのつかなかつた自分を、ほんの微ながら間拔に感じただけで、無論私はなんにも云ひはしなかつたが、そのとき私に目に觸れさせたがらなかつた指環の裏の文字は、大正五年四月、それから、乙谷濟二の頭文字（イニシャル）、S・Oだつた。

それが大正十二年のことだから、その當時でも八年からの仲だつた。この、謂ふところの旦那なるものゝほかに、おこうには好きな人もあつた。

この二人から心持が離れて私に來た。初て逢つてから半年ほどすると、體ごと私

に來て了つた。

だん／＼聞いてみると、乙谷とおこうとの關係には、世の常でないものがあつた。ちよつとした友達には見られないほど、互に信用し合ひ、尊敬し合ひ、親しみをもち合つてはゐるのだが、男と女との愛情らしいものには缺けてゐた。萬事綺麗ごとで、十八世紀の宮人たちにでも適はしさうな、浮薄ではないが、決してピツタリとはしてゐない一種の愛をもち續けて來たのだ。

一體に、それが、深くは人の心を恃むまいとするけんのん性から來た、おこうの好みだつた。――自分でも好みとは思はず、さういふ性分と信じられたくらゐ深く根をおろし、また洗練されたものだつた。だから、もう一人の內城といふのなどは、美男の役者で、ちよつと話だけ聞けば、どんなにでも濃艶に想像されさうな關係でありながら、肉體的にはひどくさば／＼としてゐた。――さういふことから、女が、底ぬけに弱くなつて行くものだといふことに、意識下で、もちまへのけんのん性が、卑怯といつてもいゝほどの警戒線を張らせてゐた。

體ごと私に來ると同時に、內城とは別れたが、乙谷との間の、舊い、安心な、少しも可厭なところのない關係は、容易に斷つに忍びなかつた。――その氣持は、私にはよく嚥み込めた。

私にすれば、ひとのもちものと勝手なまねをしてゐる、といふ世の譏は、決して有難くはなかつたが、おこうの心が、そんな邪魔にもなんにもならないものでも、ひと思ひになくなして了ひたい、と感じる時が來るのを氣永に待つばかりで、少しでも矯めなほし、折り曲げるやうな無理は敢しなかつた。ひとつには、私はもう世の惡評くらゐには驚かなくなつてゐた。誰になんと云はれやうとも、自分でいゝと思ふことなら、平氣でどん／＼やつてのけるだけの自信が出來てゐた。だから、私とおこうとの行動を、出來るだけ他人の耳目から遁すやうにしてゐた氣持も、大體、乙谷に對

する遠慮に基いてゐた。えらいとは思はないが、十分好意のもてる人を、私とは反對の意味で、世の嘲りの前にしたくはなかつた。

初のうちは、氣が弱くなると、乙谷に、私からおこうを取り戻さうといふ熱意の湧くことを望んだりした。これが成功するとは思はないが、あまり手答のないことで、氣の毒だな、すまないな、といふやうな、それこそ氣の毒な、相濟まない感じ方が起つて來るには閉口した。少しでも手答があれば、すぐそれはなくせるのに、と、歯痒く思つたりした。

擧て相見てからまる三年たつた今年の秋、おこうは、なんの前ぶれもなしに、ほんのちよつとした機緣から、十一年も相倚つてゐた乙谷と別れ、天下晴れて私に投じて來た。

喜びながらも、おこうは、乙谷を想つて落す涙がなか〳〵收らなかつた。無理もないことだが、三四年も考へて來て、今更、と、少し可笑しく、私は少しもそこへは引き込まれなかつた「寄居蟲、殼を出でゝしぐれかな」などゝ、ふと口を衝いて出たまゝのいやがらせを云つてやつたりした。おこうも、もう疾から、心と體とを別々に感じるやうな女ではなくなつてゐたから、やがて、自分からも、その殉情主義は嗤へた。

それから半月もたゝない頃だつた、私は、八幡の裏山に建てかゝつてゐる新築の、工事の進みを見に出かけた。風はなかつたが、しぐれて、うすら寒い日だつた。師範學校の校庭をぬけるといくらか近いので、そこへはいつて行くと、もう放課後で、うちの近い子かなんかゞ、十人たらず遊んでゐるのを、裏門といふほどではないが、一箇所生垣の杜切れたところから、ぢつと眺め佇んでゐる紳士があつた。鳥打帽に半洋袴の運動服で、片手を外套の衣嚢に、右にはステツキを突いて立つた後姿は、ひどくハイカラだつたけれど、その、肩のあたりの寂しさが、ふと私の心を惹いた。——

と同時に、乙谷ぢやアないかな、と思つた。その人も、同じ土地の、而もいま私がうちを建てかけてゐるところから、さして遠くもない××に住んでゐた。また、うちの三番目の子と同じ級に通つて來る娘のあることも、女房の話に聞いてゐた。顔は、おこうのとこの寫眞帖でも、一二度、停車場などの行きずりでも、私には見覺えがあつた。

廣い校庭を眞直に突ッ切らずに、やゝ弓なりに、そつちの方へ近づいて行つたが、横顔の一瞥で、すぐその人と知れると、有繫に私もはツとした。

こんなうすら寒い日にも散歩に出て、子供たちの遊びにふと足をとめる、——それだけで、十分わかる氣持だつた。フツトボールを投げ合つてゐるものもあつた。馳幅飛をしてゐるものもあつた。なんのことか、たゞ二人で追ツかけツこをしてゐるものもあつた。子好きな人なら、ちよつとくらゐ足をとめたくなるかも知れないが、それにしても、櫻の葉のきたならしく散り敷いた、なんの風情もない、而も、どことも知れず放課後の寂しさをたゞよはせた運動場を、遠慮らしく踏み込んでも來ずに、遠くからぢツと見詰めたきり、身動きひとつしないでゐる、——その空洞な氣持は、そつくりそのまゝ私の胸へ映つて來た。——私の感動は可なり大きかつた。

その後、東京に出て、おこうに逢つた時、私は、平くその話をして聞かせて、

『ちよいと俺も、殉情的になつたよ』

と、輕くひと言だけつけ加へた。

おこうは、なんとも云はずに、大きく目を瞠つたまゝ、ぢつと私を見返してゐたが、だん〳〵そこに、潤ひが滲み出て來やうとした。

私は、冗談らしく笑つて云つた。

「安心しなさい。もう一つの寄居蟲（やどかり）も、御同様しぐれてゐるよ」

けれども、人に、さういふ日ばかりが續くものでないことを私は知つてゐた。しぐれて悲いのに、子供の遊びを、ぼんやり立つて眺めてゐるやうなことも、また晴れた日の晴れやかさ、爽かさに、役立てやうとさへ思へば、ちやんと役に立つて來るものだと云ふことを知つてゐた。

「酒匂てる〳〵、鈴鹿はくもる、あひの土山あめがふる、つてね、どうもこれア仕方がないことなんだよ」

これが、せめてもの慰めだつた。――いくらなんといつてみたところで、結局どうにもならないことだつた。

■淨められた女　　宇野浩二

右は本號へ掲載の筈であつたが、たまたま作者が發熱臥床したため中途で執筆不可能となつた。然し全快の曉は努力を新にして稿を續けられる事になつてゐるから二月號には必ず掲載する。此段讀者諸彥の御諒恕を乞ふ。

大阪毎日新聞

太陽の如く、空氣の如く。

「大阪毎日新聞」は、今やどこにも輝やき、どこにも遍在する。

たれか、太陽と空氣の必要を感ぜぬものがあらうか。

たれか、文化の王國たる、「大阪毎日新聞」の權威を知らぬものがあらうか。

太陽の如く、空氣の如く。

どの社會へ行つても、どの階級へ行つても、どこの家庭へ行つても、必らずそこに「大阪毎日新聞」が在る。

最も敏活に、最も豐富に、最も完全に、最も忠實に、社會奉仕に努力する新聞か、選ばれた唯一の新聞として、東洋最高の紙數を占めるに何の不思議があらう。

千葉龜雄

大阪毎日新聞社の事業

日刊 **大阪毎日新聞**
購讀料一部五錢 一箇月壹圓
廣告料 一行 壹圓八十錢

日刊 **東京日日新聞**
購讀料一部五錢 一箇月壹圓
廣告料 一行 壹圓五十錢

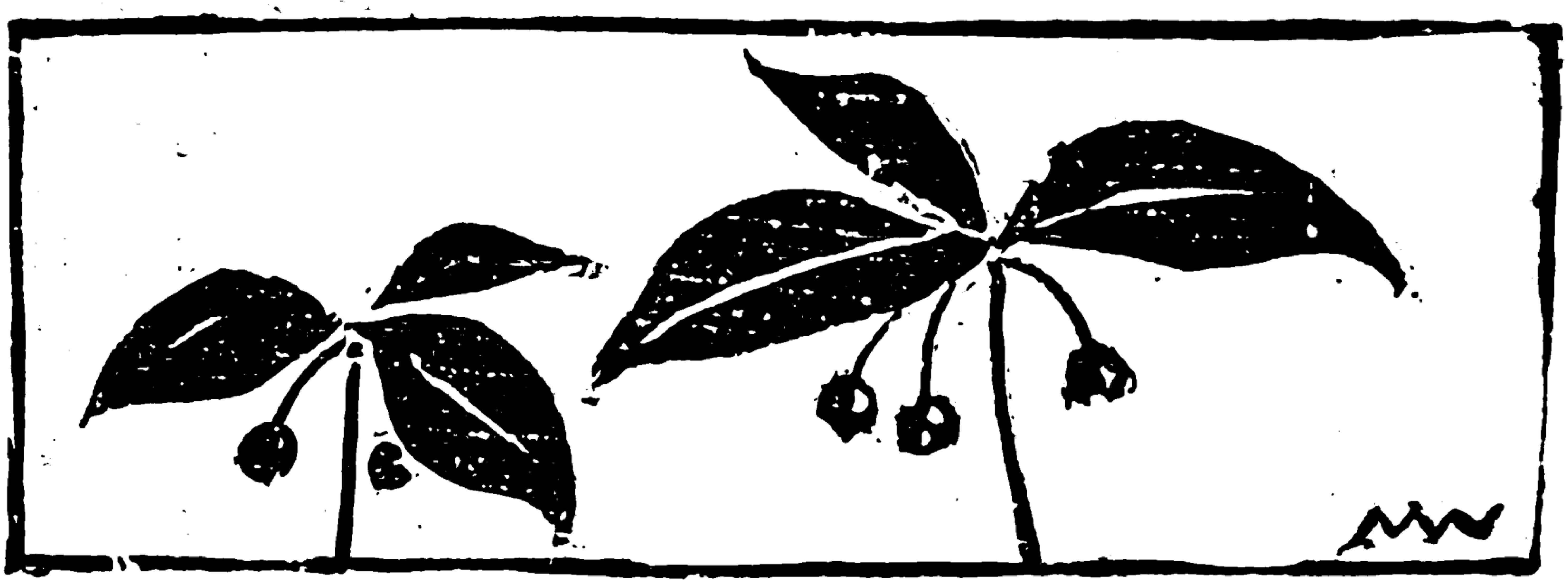
日刊 **英文「大阪毎日」**
購讀料一部五錢一箇月壹圓廿錢
廣告料 一インチ 五 圓

週刊 **サンデー毎日**
一部十二錢 一箇月四十錢

週刊 **點字「大阪毎日」**
一部十錢 三箇月壹圓廿錢

毎月二回 財政經濟雜誌 **エコノミスト**
一部 三十錢

月刊書報 **芝居とキネマ**
一部 八十錢



夜鴉

久保田万太郎

登場人物

恭介。　藤田屋の長男

おきぬ。　恭介の姉

信蔵。　おきぬの夫

おわか。　小料理屋のむすめ

おとよ。　カフェエのむすめ

徳造。　ずつと古く藤田屋につとめてゐたもの。

新吉。　徳造の長男

三次郎。　床屋のせがれ。

捨吉。　藤田屋の店のもの

三州屋。　藤田家の親戚

その他

時代。現代（大正十年前後）

場所。東京（淺草田町附近）

その一

……ある町と町とをつないでゐる古い露地。――そのなかの小料理もするおでんや。

十一月はじめの月のある晩。七時前後。

たんざく形の長い臺を置いた土間のうへに二三疊ほどの[illegible]わるところが出來てゐる。――恭介（二十三四）、そこのチャブ臺のうへに、すでにもう四五本の銚子をならべて醉つてゐる。――捨吉（二十二三）土間にあぐねたさまで立つてゐる。

間。

捨吉。けど……

恭介。（わけもなく邪慳に）何い？

捨吉。…………………（すぐにまた口をつぐむ）

恭介。分らねえな　手めえも。――嫌だといつたら嫌なんだ。――何ていつたつて嫌なんだ……

捨吉。…………

恭介。さういひねえ、うちへ行つて。——俺のいつたことをうちへ行つてはツきりみんなさういひねえ。——さうしたら分るだらう。——なぜつてことが兄貴にさうしたらよく分るだらう……

捨吉。…………

恭介。ふざけやアがつて、ほんとに。——何をいやアがるんだ……（銚子をとつて自分につぐ）

捨吉。さういつたつて、それは。——それぢやア、困ります……

恭介。何を困る？——何を手めえが困る？——手めえのこまることは何にもねえぢやアねえか？

捨吉。…………

恭介。手めえはたゞ。——手めえはたゞ俺の……

捨吉。さうは行きません。——そんなことをいつて旦那に……

恭介　生意氣いふな。使（つかひ）ぢやアねえか。手めえ……

捨吉　…………

恭介、使なら使らしく。——使らしく素直にさうでございますかと歸（けえ）りやアいゝんだ。——手めえがつべこべいふこたア何（なん）にもねえんだ……

捨吉。…………

恭介。（再び）ふざけやアがつて、ほんとに。——（半ば自分に）何をいやアがるんだ……

捨吉。…………

恭介。(癇癪にまかせて)歸れ。——歸れつたらけえれ……

捨吉、無言……

おわか(二十)、外からかへつて來る。——すぐ屋臺のかげへ入る。

間。

捨吉。(ふしやう不承に。——といふことはあきらかに反感をまじへて)歸ります。——歸れといふなら、えゝ、かへります……

恭介。……………(銚子をとつて自分につぐ)

捨吉。歸つてさういひます。——その通りちやんとさういひます。………

恭介。…………

捨吉。(屋臺のはうへ聲をかける)お邪魔さま、………

いひすてゝ、捨吉、そのまゝ出て行く。

恭介。(自分に。——いつそ冷に)ふざけやアがつて、畜生……(つぐ)——ないよ、酒が……(急にだゝつ子のやうに空いた銚子をふつてみせる)

おわか。たゞいま……

おわか、銚子を運んで來る。

恭介。(いつそ機嫌よく) 有難う……

おわか。すこしぬるいかも知れません……

恭介。ゐたか、三公?

おわか。えゝ、ゐました。——すぐ來るつていひました。

恭介。彼奴のすぐはあてにならねえ。——どうしてあゝすることがドヂだらう。

おわか。………………

恭介。けど、遲いぢやアねえか、お父つあんも?

おわか。えゝ。

恭介。どこまで行つたんだ。深川の?

おわか。古石場……

恭介。古石場?——知らねえな……

おわか。えゝ、洲崎のすこし手前(てまへ)……

恭介。つまらねえところへ行つたんだな。

おわか。でも伯母さんがゐるんですもの。

恭介。伯母さんつて?

おわか。いゝえ あたしの……

恭介。それは分つてる。——お父つあんの伯母さんと思やしねえ……

おわか。…………（わらふ）

恭介。そんな、けど。――知らなかつたた、そんな伯母さんのゐるの……

おわか。えゝ。――（きびしく）あんまりいまゝで行つたり來たりしなかつたんです……

恭介。…………？

間。（……恭介、銚子をとり上げる）

おわか。（急に）けど、お止しなさいよね。（恭介の顔を見る）

恭介。何だ？

おわか。いゝえ、あんたに酷くいふの。――幾らお店の人でも氣の毒ですわ。

恭介。氣の毒？

おわか。えゝ、捨どんに、あなた……

恭介。どうして知つてる？

おわか。おもてゞ聞いてゐましたわ。――うちへ入らうと思ふとあなたの大きな聲が外まで聞えるんですもの。

恭介。（急にまた不機嫌に）大ぜいゐやァがつたつて一人だつてまんそくに呼吸のかよつてる奴はゐねえんだから……

おわか。さういつたつてそれは無理ですわ……

恭介。（突つ返すやうに）どうして？――どうして無理だ？

おわか。無理ですわ。――誰にいはしたつて今夜はあなたが惡うごさんすわ。

恭介。悪い？
おわか。え丶。
恭介。（やゝ訴へるやうに）知つてるんぢやアないか？——知つてるんぢやアないか、君は？
おわか。知つてますわ。——知つてますけど。——知つてますけど、でも……
恭介。…………？
おわか。お宅に今夜ゐないつてことはありませんわ……
恭介。…………（眼をそらす。——ついで飲む）
おわか。かへつてそれぢやアおそのさんのためになりませんわ。
恭介。（険しく）どうしてならない？——どうしてためにならない？
おわか。さうぢやアありませんか。——あなたがゐなかつたらおそのさん。——あとはおそのさんによくない——おそのさんを大切に思はない方たちばかしなんぢやアありませんか……
恭介。…………
おわか。それぢやアおそのさん。——随分おそのさんにしたら心細いでせうと思つて……
恭介。…………
おわか。さう思ふと、あたし……
恭介。（遮ぎるやうに）そ、そうもそれア……（弱く）俺だつてさうもそれやア思つたけど……
おわか。…………？

恭介。癪に障るんだ。――兄貴の面アみると無體癪に障るんだ……

おわか。……………

三次郎（二十三四）ぬつと入つて來る。

三次郎。へ、お仲のよろしいことで……（幇間のやうな身ぶり）

恭介。馬鹿！

三次郎。恐入りやしたな、來匆々……

恭介。（はき出すやうに）止せよ、そんな。――氣色のわりい……

おわか、屋臺のはうへ立つ。

三次郎。あら行ツちやツたア……と。（はやす）

おわか。（ふり返つて）お猪口をもつて來て上げるんぢやアありませんか。

三次郎。お氣のつきますことで。――でしたら、おつひでに、おさかなのところもおみつくろひ下すつて……

おわか。お父つあんがゐなくつて今夜はなんにもありませんわ。

恭介。（側から）腹の足しになるものなら何だつていゝんだ。――鍋から雁もどきでも持つて來てやりやいゝんだ……

三次郎。雁もどき結構。――そも／＼雁もどきといふ食物は……

恭介。うるせえな。――默れよ、いゝ加減に……（猪口をあけて三次郎にさす）

三次郎。（うけとりながらふつと）おや……？（けゞんらしく恭介の顔をみる）

恭介。何だ？

三次郎。いゝえ、待つて下さいよ……（胸勘定に指を折つて）お逮夜ぢやアないんですか、今夜？

恭介。逮夜さ、

三次郎。（臆病に）それを。——いゝんですか、こんな……？

恭介。なぜ？

三次郎。いゝえ、あなたがゐなくつて……？

恭介。…………（こたへない）

三次郎。殺生ですよ。——大ていになさいよ、もう……

恭介。…………

三次郎。つまらないぢやアありませんか、いつまでそんな乾反つてたつて…

　　おわか、猪口だの銚子だのいろ〳〵運んで來る。

おわか。お待遠さま……

三次郎。ねえ。——さうでげせう、おわかさん……？

おわか。知りませんわ、あたし……

三次郎。知らぬとは曲がない。……知らぬ八方外ケ濱……

おわか。熱ごさんすわ、このはうが。――お酌しませう。

三次郎。ぢや、まア、これはそちらへお返し。（恭介に猪口を返す）――改めて一つ……

おわか、つぐ。

恭介。あとにしろよ、飲むのは……

三次郎。えゝ？（頓驚に顔を上げる）

恭介。たのみがあるんだ。――それで呼びにやつたんだ。

三次郎。な、なんの……？（猪口を下に置く）

恭介。穗積んところまで行つて來てくんねえ。

三次郎。すぐにですか？

恭介。すぐに。――一寸逢ひてえんだ。――だが、俺が自分で行つちやア工合のわりいことがあるんだ。

三次郎。けど、ゐるかしら？

恭介。ゐる。――大丈夫ゐる。――今夜は親父がゐないからどこへも出やアしねえ。

三次郎。はて？

恭介。おやぢは俺のうちへ來てゐるんだ。――俺のうちで、今夜、いろ／＼客の世話アしてゐるんだ

三次郎。で、行つて……？

恭介。俺がこゝにゐるといつて來りやアいゝんだ。

三次郎。（仔細らしく）こゝにゐると……

恭介。さういやア分るんだ。

三次郎。（額を叩く）こまつたなア、しかし……

恭介。何が？

三次郎。何がつて、その。——一寸苦手なんですよ……

恭介。苦手？

三次郎。えゝ。

恭介。誰が？

三次郎。あすこのおつ母さん。——新吉君母堂。——あの眼でヂロッとみられるときの氣味のわるさ……

恭介。…………？

三次郎。思はずぶるぶる。——ぶるぶるッと來ます。——頭のてつぺんから足の爪さきまで…………

おわか。（わらふ）眞逆……

三次郎。いゝえ、ほんたう。——ほんたうに……

恭介。金でも借りて返さねえんだらう。

三次郎。戯、戯談でせう。——いゝえ、誤解してゐるんです。——誤解してゐるんですよ、あッしを……

恭介。…………（自分について飮む）

三次郎。新ちやんの夜遊びするのをあッしのさりやくだと思つてる。——畢竟あッしがさそひだすから。——肯無た

くしてゐるものをあツしが行つて引つ張り出すから。——さう思つてるんです……

恭介。…………

三次郎。ねえ、そんな分らない奴はないぢやアありませんか。——それぢやアものが反對ぢやアありませんか。——みたらどつちが誘ひだすかぐらゐ分りさうなもんぢアありませんか……

恭介。（わらふ）手めえでさう定めてりやア世話アねえ。（嘲るやうに）

三次郎。そのくせお父つあんはよく分つてるんですよ。——一寸行かないと、どうした、三次さん。しばらく顔をみせなかつたぢやアないか。——さういつちやア機嫌よく、新ちやんのたとへゐないときでも、まア上れ。——久しぶりで一番指さうぢやないか。——それは、もう、ごくの上人で……

恭介。どつちかつてば俺もおやぢの方が好きだが。——だつていゝぢやアねえか、おふくろに知れねえやうに呼び出せば。——何とかそこに器用に……

三次郎。そ、それが出來ないんです。——といふのが片つぽのゐないときは、必ずおつ母さんどの店へでゝ眼張つてます。——うつかりそばへよれません……

恭介。そこが狡猾ぢやアねえか。

三次郎。えゝ……

恭介。何も店から行くこたアねえ、裏から行つたらいゝぢやアねえか。——そのはうが足掻もつくぢやアねえか……

三次郎…………

恭介。上總屋の横を入つてあすこの露地を。——さうすりやア、お前……

三次郎。いゝえ、それが。――（いひ惡さうに）それがさう行かないんで……
恭介。さう行かない？
三次郎。さう行かないわけがあるんで。――鬼門なんで、あすこ……
恭介。……………………
三次郎。必とあれ、上總屋んだらうと思うんですが、眞つ黑な、でかばちもない――とてもゝう凄い……
おわか。（口を出して）あゝ、クマ……
三次郎。あいつの名まへね？
おわか。音無しい犬ですわ、あれ。――みかけはあんなでも……
三次郎。音無しいどころか、あん畜生、みるたんび人を目の敵にしやアがつて。――何度くらひつかれ損つたか……
おわか。そんなことあるかしら？――こつちのはうへもとき〲遊びに來ますけどちツともそんなことありませんわ。――滅多に吠えだつてしませんわ。
三次郎。（やゝ狼狽てゝ）そ、そんなこたアない。――そんな奴ぢやアない。――こつちのはうへ來るときだけ共奴ア猫をかぶつてゐやアがんだ……
おわか。（おもはず笑つて）犬が猫を……？
三次郎。ほんとに。――いゝえ、ほんたうに。――およそ天下に犬ツくらゐ、癪に障る、色氣のないものは……
恭介。（急に）もういゝ。――たのまねえ……
三次郎。えゝ？

恭介。歸んねえ。――用はねえからけえんねえ……

三次郎。……………？（キヨトンとする）

恭介。嫌なら嫌とはツきりいへばいゝんだ。――嫌なものを無理に。――それでも無理にとはいはねえんだ。

三次郎。（全く狼狽てゝ）いゝえ、そんな。――嫌だなんて、そんな。――いやアしません、そんなこと……

恭介。何をいやアがる、ふざけやアがつて……

三次郎。そ、そんな。――そんなこと……

恭介。手めえも俺のいふことを聞かねえんだ。――俺もうこれからは手めえのいふことを聞かねえぞ。――何ていつたつて聞かねえからさう思へ……

三次郎。行、行つて來ます。――行つて來ますよ。（いそいで立上る）

恭介。行かなくつてもいゝ！

三次郎。いゝえ、行きます。――行て來ます……

三次郎、あたふたと出て行く。

恭介。小癪に障る奴だ。

おわか。でも……惡氣はちツともないんですわ、三ちやん……

恭介。それは分つてる。――それは分つてるがあんまりみえ透いたことをいやアがると。――さう〳〵こつちの蟲の居所のいゝときばかりはねえから……

おわか。（しみじみ）性分なんですわね。
恭介。さうなんだ。――人の機嫌氣褄をとらなくつちやア手めえが立たねえやうに思つてるんだ……
おわか。（微かに）え丶……
恭介。いへば可哀想なんだ……
おわか。やつぱり父つあんや母さんがなかつたりすると……（うつかりさういひかけて恭介のうへに心づく。――口をつぐむ）
恭介。さうなんだ、親のない奴はどうしても根性がヒン曲るんだ。――まんそくな料簡は持てねえんだ。――俺のやうにならなければ三公のやうになるんだ……
おわか。………
恭介。（さびしく）こんな、俺、慘めなことはねえと思ふ。――ほんたうだぜ、……
おわか。……
恭介。みんな、世間の奴ら、よつて集つて馬鹿にしやアがる。――馬鹿にして音無しくあるいてるとうしろから突飛ばすやうな眞似をしやアがる。――それで轉べば手を叩いてはやしやアがる。――ほんたうに親切に、氣の毒だ。可哀想だとこころから同情してくれる奴は十人に一人だつてありやアしねえ。
おわか。………
恭介。俺がこんな。――俺のやうな、我儘な、身勝手な奴がこんなことといふのは可笑しいかも知れねえ。――可笑しいかも知れねえが俺は常住口惜しいとおもつてるんだ。――恭さんの、恭介さんの、さういつて俺の機嫌をとつてくるいろんな奴らの、あれは何だぜ、俺の決して機嫌をとつて來るんぢやアないんだぜ。――みんな俺の……といつたつ

て、まだ、直接に俺が掴んでるんぢやアねえんだが。――兄貴の奴がまだ渡しやアがらねえんだが、おやぢが死ぬとき、俺の分として地面だの何だのをちッとばかり殘して行つてくれたんだ。――みんなそれを知つてゐやアがる。――だからみんなそれの機嫌をとつて來やアがるんだ。――俺の機嫌をとるんぢやなくつて其奴の機嫌をとりやアがるんだ。――俺にもし其奴がなかつたらどいつだつてふり向いてもみやアしねえんだ……（棄鉢な感じに猪口をとる）

おわか。…………

恭介。（ふつと外へ眼を走らす）誰か來たぜ、おもてへ……

おわか。（ふせた眼を上げる）あら、さうですか？

おわか、いそいで立上る。

おわか。（外をみて）どなた？――（間。やゝ不安げに）えゝ、いらつしやいます……

恭介。…………？（敏感に注意する）

おわか。（同じくやゝ不安げに）えゝ、どうぞ……

德造（五十八九）入つて來る。

德造。恭介さん……

恭介。…………（どつちかといへば弱つ氣で眼をそらす）

德造。こゝにおいでゞしたか？

恭介。（わざとおわかに）おい、酒だ……

おわか。はい……（徳造に氣を兼ねるとりなし）──おかけなさいまし……（徳造に腰かけをすゝめる）

徳造。あゝ有難う……

おわか、屋臺のかげに入る。

徳造。いゝえ、あなたのおみえがないから何うなすつたかと思ひまして……（腰をドろす）

恭介。…………、

徳造。ヒヨツと、また、此間中無理をしておいでになつたお疲れでもでゝお寢みにでも。──いゝえ、よくある奴で、大てい達者なものでもこのあとはやられますから。──が、店の人たちに訊くと、晝間おでかけになつたなりまだおかへりがない……

恭介。…………

徳造。しかしおいでになつてゐるところは分つてゐるから是からいまお迎へを出す。──と、ちやうど寄合つてさういつてるところ。──それは、まア、早く……

恭介。（急に）これでも、まだ、捨吉のやうなあんなものにさりやくされほど耄碌はしねえんだから。──うちへ行つてさういつてくれ、穗積さん……

徳造。いえ、さうしたら何か……

恭介。（癇癪にまかせておわかに）もつて來ねえかな、早く……

おわか。えゝ、いま……

　　おわか、銚子をもつて來る。

　恭介、うけとつてすぐ猪口をみたす。――立續けに飲む。

……おわか、徐とそれとなくチヤブ臺のうへの空いた銚子を下におろす。――それを運んですぐまた屛風のかげにかへる。

徳造。（前のいひかけた言葉をつゞけて）……何か、捨吉、お氣に障るやうなことを……

恭介。（かぶせてまた）馬鹿だよ、身のほどを知らないよ。――どだい生意氣だよ、あん畜生……

徳造。（うなづくやうに）いえ、それはもう……

恭介。いゝえ、あん畜生ばかりぢやアねえ、みんなさうだ。――店の奴らアみんなさうだ……

徳造。……………

恭介。いゝえ、生意氣はいゝ。――生意氣なゝアまだいゝ。――彼奴らアそのうへに薄情だ。――どいつも此奴もみんな不人情だ。――大ぜいゐやアがつたつて、彼奴ら、おそのゝ死んだのにこゝろから涙をこぼした奴はたゞの一人だつてありやアしねえんだ……

徳造。……………？（恭介の顏をみる）

恭介。随分おそのは店の奴らには眼をかけた。――影になり日向になりそれアよく面倒をみた。――煩ひでもしたことには、平生それがどんないやな奴でも、食ふものゝ心配から藥の世話、何からなにまで自分に引うけて女中の手にも

かけなかつた。——失敗つたり小言をいはれたりしたもの丶始末をつけるのもおそのなら、雨ふり風まや夜遅い使の電車賃をかげから内密に立引くのもおそのだつた。——それを彼奴らは何とも思やからねえんだ……

德造。…………………

恭介。といふのも——といふのも畢竟兄貴が悪いからだ。——兄貴ばかりぢやアねえ、姉貴も悪い。——二人の——肝心の二人の料簡が間違つてるから、上をみ習ふ下で彼奴らがさう増長しやアがるんだ……

德造。お言葉ですが、それは……

恭介。い丶え、さうだ、さうなんだ。——兄貴も、姉貴も、おその丶死んだのをいつそい丶ことに思つてるんだ。——結句い丶ことに喜んでるんだ……

德造。それは。——それはしかし、恭介さん……

恭介。（強情に）い丶え、さうなんだ。——だから。——だから俺はおそのが可哀想たんだ。——おそのが可哀想でしやうがねえんだ……（急に眼から泪あふれる）

德造。……………（眼をふせる）

恭介。さういつてもおそのはよく氣がついた。——あんな氣のつく奴はなかつた。——さうしこすることが親身だつた。——誰にも親身でやさしかつた。——優しかつた……（泪、とめどなくせき上げる）

德造。二十や二十一で亡るだけ。——お若くつて亡る方はどこかやつぱりお違ひになります

恭介。さうだらう？——さう思ふだらう？——さう思ふだらう、穗積さん？——それを。——それを何だ、あの葬ひは？——あの葬ひの出しかたは？——あれが、穗積さん、假りにも藤田屋から出る葬ひか？——藤田屋のレツキ

としたが血すぢのむすめの死んだ葬ひか？

徳造。いえ、それについても……

恭介。知つてるよ。――知つてるよ、それは。――親類とか何とか名のついた亡者どもがよつて集つてあんなことにしやアがつたんだ……

徳造。ですから、それは、旦那もお内儀さんも……

恭介。それが氣に入らねえんだ。――何だ、親類が？――矢の倉だの、龜井町だの、山谷だの、彼奴らに何が分るんだ？――彼奴らに人のうちのことがどこまで分るんだ？――三州屋の小父を拔かしたら、彼奴ら、手めえたちのみじんまくさへまんぞくに出來ねえ奴らばかり揃つてるんぢアねえか……

徳造。…………

恭介。手めえたちの、ケチな、あたじけねえ料簡で。――ケチな、あたじけねえ、針のメドのやうな料簡で高慢ツちやくれた、いつぱし世間を鵜呑にしたやうなことをいやアがる。――時節柄だの、早死だからの、いやアまだ一人前になつてゐないからの。――そんなことで人間大切な價値をきめられてたまるものか。――いふ奴もさうだが、それをまた仰せ御尤も、大きにさうでございますと、一も二もなく感心してその通りにする箆棒があるもんぢやアねえ。――矢の倉が一人じやく〳〵張つてとり仕切るものを俺が口をきくことはない。俺がいはなくつても信さんがいふ。さう思つたから俺は默つてゐた。――三州屋の小父ははつきりさういつた……

徳造。三州屋さんにお逢ひになりましたので？

恭介。逢つたとも。

徳造。いつ……？

恭介。葬ひのあくる日だ。

徳造。と、一昨日……？

恭介。急に逢ひたいところからつかひをよこしたんだ。——あの人だけだ。——俺のいまの心もちを汲んでくれるのはあの人だけだ。——外の奴にはだれにも分りやァしねえんだ……

徳造。………………（ふと顔に暗い影さす）

恭介。穂積さん、君にだつて分りやァしない。——君は俺のことを始終心配してゐてくれる。——心配してゐてくれても分りやァしねえ……

徳造。分りません。——分りませんからお迎へに出ました。

恭介。………………（聞かないかほ。——飲む）

徳造。お願ひいたします、恭介さん。——今夜だけ。——今夜だけ一つわたくしの顔をお立て下さいませんか？

恭介。………………

徳造。いえ、お歸りにならない——おかへりになりたくないと被仰るわけはわたくしにもよく分りました。——御尤もでございます。——あなたの御氣性とすれば御無理ございません。

恭介。………………

徳造。が、そこを。——そこを曲げて……

恭介。………………

德造。かさねては申しません。――とにかく今夜だけ。――お客さまがお揃ひになつても、あなたのおみえがないんお膳がまだ出ないんでございます。

恭介。出したらいゝぢやアねえか？――遠慮なく、構はねえ、出したらいゝぢアねえか。

德造。さうは行きません。

恭介。どうして行けない？

德造。（空を打たすやうに）お内儀さんが御承知なさいません。

恭介。（膠もなく）姉貴がそんなことをいふものか……

德造。いゝえ、それは……

恭介。以前の姉貴ならいつたかも知れねえ。――が、いまの姉貴はたゞもう兄貴のいふことばかり聞いてゐるんだ……

德造。しかし……

恭介。いゝえ、さうだ。――同胞より亭主のはうが大切なんだ。――亭主さへよければ同胞なんぞどうだつていゝんだ

……

德造。しかし、ほんたうにさう……

恭介。ぢやア、何だつて拾吉に、先刻あんな高飛車なことをいつてよこしたんだ？

德造。高飛車？

恭介　さうぢやねえか？――膳がもう出るから歸れ。――其奴がゐなければ膳を出せねえほどの。――それほどの大した相手にむかつていふそれが文句か？

徳造。ですからそれが……

恭介。（つゞけて）手めえでまさかに拾吉がさういつたんぢやァあるめえ。――誰かさういへといつたものがあるからその通りいつたんだらう……

徳造。いゝえ、ですからそれが。――出來ばかりになつたそのお話が、あなたの……

恭介。（いつそ冷かに）止さうよ、穂積さん。――いくらいつたつて同じだ。――（やゝ險しく）酔つてたつてそんなみえ透いた手にのるんぢやアねえんだ。

徳造。ですが……

恭介。（ずけりと）嫌だ。――嫌だつたら嫌だ。

徳造。…………

恭介。何もうちへ行かなくつたつて逮夜は出來るんだ。――俺は俺で好きにやる。――俺は俺で勝手にやる……

徳造。…………

恭介。そのはうがどのくらゐ供養になるか分らねえんだ。――どのくらゐ佛はよろこぶか知れねえんだ……

徳造。…………

恭介。さういつてくんねえ。――うちへ行つてさういつてくんねえ。（いそがしく猪口を口に運ぶ）

間。

徳造。いゝえ、さう被仰られては。――さう被仰られては、わたくし……

恭介。…………

徳造。いたし方ございません。——引取ります……

徳造、悄然とそのまゝ出て行く。

恭介、チャブ臺のうへに眼を落したまゝしばらく無言。

……おわか、出て來る。

恭介。（顔を上げて）一度こゝを綺麗にしてくれないか。

おわか。えゝ。

恭介。さうして改めて……

おわか。…………

恭介。ちッとも醉はねえ。——どうしたんだか今夜はさッぱり醉はねえ。——（おわかの顔をみて）何だ、泣いたのか？

おわか。いゝえ……（顔をそむける）

恭介。だつて眼のふちが……

おわか。そんなことありませんわ。——そんなことはありませんけど……

恭介。…………

おわか。あんたにまたいろ／＼……

恭介。俺のことをかげでみんな山犬(やまいぬ)といつてゐやがるんだ。——だから山犬なら山犬のやうに……

おわか。でも……

恭介。(やゝ耻づるやうに)穂積のおやぢに何もあんなにいふことはなかつたんだ。——自分でも、いけねえ、いひすぎると思つたんだ。——だが　いひかけたものをいまさら……

おわか。いゝえ　お姉(ねえ)さんのことを……

恭介。…………(口をつぐむ)

おわか。そんな方ぢやアありませんわ。——以前(せん)から聞いてゐますわ、あたし……

恭介。…………

おわか。あんなにいふのいけませんわ。——惡(わる)ござんすわ……

恭介。…………

おわか。あたし、聞いてゝお氣の毒で……(密と眼をふく)

恭介。…………

三次郎、裏のはうからのつそり入つて來る。

おわか。あら?

恭介。何だ。手めえ……

三次郎。何だ、手めえぢやアありませんよ。——驚いたよ、あツしア……

恭介。何を？

三次郎。何をぢやアありませんよ。——飛んで來て、勢ひよく、ガラツとぶつけるつもりが、おや？——よく似た奴と思つて覗くと、似てゐるわけです。本人がゐるんですもの……

恭介。…………

三次郎。此奴はいけない。——さう思つて忽ち引ツ返しの、やうす知つたるこの家のうち……

おわか。でも、よく開きましたわね、木戸が？

三次郎。それは、もう、たがひの心合鍵に、……

おわか。まア、鍵を……？

三次郎。眞逆！——いくら三ちやん抜けめがなくつたつてそこまでは手がとゞかない……

おわか。でも……

三次郎。（手つきをして）すみません。ちよツと。——たのんで、となりの、研屋の店を通らしてもらつたなざア……

おわか。まア……

三次郎。これも、つまりは、平生から顏をよくしておくからこそ……

恭介。（遮る）そんなこたアどうでもいゝ。——それよりどうした、穗積は？

三次郎。駄目です。

恭介。駄目？

三次郎。來ません。

恭介。どうして？――どうして來ない？――ゐないのか？（詰るやうに）

三次郎。いゝえ、ゐるんです。――ゐることたアゐるんです……

恭介。手めえ、何といつた？――俺のいひつけたとほりちやんといつたか？

三次郎。いひましたとも。――それは、もう、ちやアんと。――だから三枚ですぐ來るやうに……

恭介。何といつた？――さういつたら、穗積、何をいつた？

三次郎。それがね。――さういつても、はじめ、ほんたうにしなかつたんです。

恭介。…………

三次郎。けんもほろゝに、何をいやアがる、そんなことといつて來やアがつたつて駄目でえ……

恭介。…………

三次郎。うそだといひます。――今夜、そんな、ふら／＼してゐるわけはないといひます……

恭介。…………

三次郎。それからいひました。――ところがふら／＼してゐる。――燈火（あかり）のつかないうちから御機嫌で飲んでゐる……

恭介。…………

三次郎。と、それはいけねえ、そんなことつてねえ……

恭介。…………？

三次郎。それは違ふ。――いくら恭さんでもそんなことをしちやアいけねえ。――手めえ、歸（かへ）つてすぐさういひねえ……

恭介。…………

三次郎。といふから、來て、ぢやア、自分でさういつたらいゝぢやアないか？——ねえ、さういひたくなりませう？——と、俺は嫌だ、俺は行かねえ。——そんなとこへ俺は行かれねえ……

恭介。………………

三次郎。あげくが、手めえ、また、一しよになつて下らねえ太皷を叩きやアがると聞かねえぞ。——しつかりしろ、しつかり……

恭介。………………

三次郎。何のこたアない、怒鳴られに行つたやうな。——へんですよ。——一寸へんですよ……

恭介。………………

やゝ長き間。

恭介、急に立上る。——土間に下りてそのまゝ出て行かうとする。

三次郎。どこへ行くんです？——どこへ行くんです、恭さん？

恭介。どこへ行つたつていゝ。

三次郎。一しよに行きます。——一しよに行きますよ……

恭介。來なくつてもいゝ。

三次郎。そ、そんな。——そんな……

恭介。すぐ歸つて來る……（あともみずに出て行く）

三次郎、追つかけてあとから出る。——が、ぼんやりすぐもどつて來る。

三次郎。仕様（しやう）がねえな、ほんとに。——どこへ行つたんだらう…？

おわか。お宅へ行つたんでせう？

三次郎。お宅へ？

おわか。（固く信ずるやうに）必（きつ）とさうですわ。

三次郎。いけねえな、折角これから美登利亭（みどりてい）をせびらうと思つたのに……（いひかけてふとおわかへこなし）船中（せんちゆう）〳〵（口をふさぐ）

おわか、知らないかほでチャブ臺のうへの汚れものを下げる。……（幕）

その二

綿問屋藤田屋の一部。——恭介の部屋にあてられた土藏（くら）のうしろの一室。（障子のそとに、町中に、暗い、憂鬱な感じの庭をもつてる）

「その一」の十日ほどあと。冬めき深く曇つた午後。——三次郎、いま來たばかりの擧止（とりなし）、ぼつねんと火鉢のまへにすわつてる。

間。

恭介、含歎薬の壜をもつて障子のそとから返つて來る。

三次郎。ど、どうしたんです？――風邪ですか？

恭介。咽喉がわるくいがらツぽいんだ。

恭介、含歎薬の壜を机のうへに置いて火鉢のそばに來る。

三次郎。いつからです？

恭介。此間つからだ。

三次郎。だつて？

恭介。面倒臭えから昨夜まで打捨つといつたんだ。

三次郎。聲もすこし嗄れたぢやありませんか？

恭介。うむ。

三次郎。駄目ですぜ、用心しないと。――新ちやんとこのコレ（親指をみせる）みたやうにやり損ひますぜ

恭介。どんな工合だ、その後？

三次郎。こじらしたらしいんですね。――どうしても熱が下らないんださうです。

恭介。寢たつきりか？

三治郎。それは、もう……

恭介。この間、初七日の日寺詣に行つたときにはそんな風はみえなかつたが。――どつちかといつへば、いつもより、

晴々しい顔つきをしてゐた……

三次郎。さういつてました、新ちやんも。——あの日は、出て行くときも、歸つてからも、おやぢ、たいへんな機嫌だつた。——それには、珍しいことに、歸つて來たときすつかりおみツてた。——ふら〳〵して下駄がぬげなかつた。——そんなことは何年にもいまゝでないこつたさうです……

恭介。いゝえ、それは、歸途に精進落で一直へよつたんだ。——膳が並ぶと、おやぢ、ちやうど俺の眞んまへ。——向うは壁の方、此方は障子の方だが、見當にしてちやうど眞んまへにすわつてゐるんだ。——畜生、悪いところにゐやアがる。——と思つたなア、でなくつてもあんまりうれしくないところへあの前の晩のいきさつがある……

三次郎。前の晩ていふと？

恭介。逮夜の晩よ。

三次郎。あゝ、あの……

恭介。兄貴や外の奴らがいくらそばにゐたつてそんなこたア平氣だ。——ピクともしねえ。——端にかゝつてよけい飲めばつて掛酌なんぞしねえ。——が、まへにさう眼張つてゐられちやア。——先方にはそんなつもりはなくつても手も足も出ねえ。——親たちの時分の老人つていふと、不思議に、俺は、どうも一もく置きたくなるんだ。——正直いつて、積積のおやぢでも、俺アあの眼が怖いんだ。——何でもねえあの眼に押ツ伏せられのやうな氣のすることがあるんだ。——これで、何だぜ、俺にも人のいゝところがあるんだぜ……（さびしく笑ふ）

三次郎。それアさうですよ。——みんなさういつてゐますよ、蔭で……

恭介。何と？

三次郎。恭さんは人がいゝ……。

恭介。ふざけるな、馬鹿……

三次郎。いえ、實際。――ほんたうに。――あれで、恭さんは、根はごく人がいゝんだ。――人がいゝから人情にからむ。――だから、あゝ、畢竟すぐに腹も立てるんだ。――誰にでもすぐ突ツかゝるんだ……

恭介。（冷かに）だからすぐ三公なんぞに取卷かれるんだとはいはなかつたか？

三次郎。戯、戯談でせう。――（不足らしく）ちツともこのごろ取卷かせもしないで。――慍つてるんだから。――大へんあツしは慍つてるんだから……

恭介。たんと慍んねえ。――それだけこつちは人が惡くなつたんだ……

三次郎。可哀や、おかげで、半月といふものお松の顏をみないんぢやアありませんか。――同情して下さいよ。――すこしは逢へない奴の氣にもなつて下さいよ。――それは、あなたは……

恭介。うるせえな、默れよ……

三次郎。だつて……

恭介。手めえ、俺を盲目と思つてるのか？――なんにも俺が知らねえと思つてるのか？

三次郎。えゝ？

恭介。俺だといつちやア美登利亭へ電話をかけ、お松の奴を引つ張り出しちやア、上總屋の裏で、始終ケチな出合をしてゐるのを、手めえ、俺が知らねえと思つてるのか？――それで、手めえ、上總屋のクマに睨められてゐるんぢやねえか……

三次郎。(口に手をやる)あわ、わ、わ、わ、わ、……

恭介。………………(儞むやうにわらふ)

三次郎。で、どうしたんです、それから?

恭介。何が?

三次郎。いゝえ、一直でそれから?

恭介。ごまかすねえ……

三次郎。ごまかしやアしません……

恭介。(話をもとにもどす)と、一トわたり酒のまはつた時分、いきなり立つて俺のまへに來たものよ。

三次郎。誰がです?

恭介。穗積のおやぢがよ。

三次郎。はて?

恭介。恭介さん、一ついたゞきませう。——不意だから俺は面喰つたよ。

三次郎。それアさうでせう。——で、どうしました?

恭介。くれといふから遣つた。——と、すぐ飲んでかへした。——健氣な飲みぶりだ。——此奴はと思つた。——何か、此奴、いひ出すなと思つた……

三次郎。ふん、ふん……

恭介。案の定いひ出した。——前の晩のことをいひ出した。が、——ぐづ〳〵いふんぢやアねえ、よく歸つてくれた、

自分の顔を立てゝよく歸つて來てくれた。——もし、昨晩あのまんまあなたが歸つて來てくれなかつたら、わたくし、お姉えさんにあはせる顔がなかつた。——(やゝ寂しく) 姉貴、さすがに心配したらしいんだ。——心配して、さうといはず、頼んであゝ呼びによこしたらしいんだ……

三次郎。さうですよ。——それアさうですよ。——あとで、あのとき、わかちやんともさういつたんです……

恭介。(すぐに立直つて) 何よ、しだいによつたら構はねえ、一ト暴れと思つたんだ。さう思つて歸つたんだ。——と、何にもいふな、今夜は我慢しろ。——いきなり三州屋の小父に先を越された。——出端をおツぺしよられたかたちに、さア飲め、それ飲め。——癪だから片つ端から空けてやつた……までは覺えてゐるんだ。——あとは分らねえ。——眼をさますと、こゝで、床の上にちやんと寢てゐた……(くやまれるやうに) だらしがねえのよ……

三次郎。だつてあれだけ下地があつたんですもの。——たまるもんですか。……

恭介。そのくせ醉つてなかつた。——まるであの晩は醉つてゐなかつた。——幾ら飲んだつてあんなとき醉へることツちやアねえ……

若い女中、菓子鉢をそへて茶道具を持つて來る。

女中。(おづ/\した感じに) 相濟みません、遲くなりまして……

恭介。…………(こたへない)

女中、それ/\に茶をついで出す。——三次郎、ぼんやりそれをみまもる

恭介。（菓子鉢をみて）何だ、これは？

女中。…………？（顔を上げる）

恭介。何だ、この菓子は？

女中。…………

恭介。（聲をあらく）こんな、日ましの、黴臭(かびくせ)えものが喰へるか？——かなじむのもいゝ加減にしろ！

女中。…………

恭介。持つて行け！——早くあつちへ持つて行け！

女中、そのまゝおど〳〵と菓子鉢をもつて去る。

恭介。ふざけやアがつて、ほんたうに……

三次郎。（なだめるやうに）そんな。——そんな邪慳な……

恭介。邪慳ぢやアねえ。あたりめえだ……

三次郎。みす〳〵、だつて、喰べもしないものを……

恭介。喰はねえからつてあんなものを持つて來るその料簡が氣に入らねえ。——第一無禮ぢやアねえか。——何が喰はなくつたつて君が喰はうぢやアねえか……

三次郎。でも、それは……

恭介。（かぶせて）俺はこゝのうちの、居候でもなければ厄介ものでもねえんだ……

三次郎。（巧みにそらして）それにしたつて、あなた、あの可憐なる少女が。——（聲を低くして）よくなりましたねえ、しかし。——とても色つぽいぢやァありませんか。——この間まであんなぢやァなかつたが……

恭介ふん……（横をむく）

三次郎。（卑しくわらつて）内々……ぢやァないんですか?

恭介。誰がそんなしみッたれな眞似をする?——手めえぢやァねえ……

三次郎。で、ございませうよ。——おもては唐草、裏は花色もめん……

恭介。何ッ?

三次郎。……ほんの出來ごゝろ、貧のぬすみでございます。（あと口三味線。——落語家の身ぶり）

恭介。大ていにしろ、下らねえ……（不機嫌なとりなし）

店の者、入つて來る。

店の者。お電話でございます。

恭介。誰からだ?

店の者。佐藤さんとかいふ……

恭介。佐藤さん?

店の者。……とか加藤さんとか……

恭介。（三次郎に）誰だらう?

三次郎。さア。

恭介。ゐるといつたのか？

店の者。へえ。

恭介。…………（舌打して臆劫らしく立つ）

　　恭介、ともども店の者と出て行く。

間。

……三次郎、自分に茶をついで飲んだりする。——そのあと思ひ出したやうに立つて縁側の障子をあける。——恭介の丹精して
ゐるうぐひすの籠のまへにうづくまる。

　　恭介、返つて來る。

三次郎。分りましたか？

恭介。氣のきかねえ、切れてしまやアがつたんだ。

三次郎。切れて？——電話がですか？

恭介。朝ツから今日（けふ）はつけが悪いんだ。——飯をくへば飯ん中に石が入（へえ）つてるし、醫者へ行けば自働車に轢かれたといふ子供をかつぎ込んで來るし。——癪だから薬だけこしらへさせて外へ出れば下駄の齒が缺けやアがるし……

三次郎。…………

恭介。それにはこんなくさくさする天氣だと……

三次郎。そんなことといつたつて、それは。――それは無理ですよ。(わらふ)

恭介。俺は何が心細いつて途中で電話が切れるほど心細い氣のするものはねえんだ。――切れると、もう、一生つなげねえやうな。――ことに、いまのやうな、相手の分らねえ、とツつき端のねえ奴の切れたのは……(顔を曇らす)

三次郎。そんなわけはないんですがね。――今日は三碧はいゝはずなんですがね……

恭介。(急に)おい、行かう……

三次郎。(不意をうたれたかたちに)ど、どこへ……?

恭介。どこへでもいゝ。――どこでもいゝから出よう。――こんなときうちにゐれば必とまた何か入らざる癇癪を起すに違えねえ。――必と何かそんなことがあるに違えねえ……

三次郎。それは、まア、外へ出れば……

恭介。待つてくれ、仕度するから……

恭介、立つて、外へ出る身仕度をする。――三次郎、それにつれてともに立つ。

三次郎。(庭のうへに眼をやる)すつかり山茶花が咲きましたね。

恭介。うむ。

三次郎。かうした監梅しきに咲いたのをみると乙な花ですね、なかなか……

恭介。さびしい花だ。――(しみじみ)おそのは好きだつたんだ、山茶花が……

同。

恭介。さア行かう……

恭介、三次郎、出て行かうとする。——出合がしらに、おきぬ（三十一二）、羊羹を入れたあらたな菓子鉢を持つて出て來る。

おきぬ。（やさしく）お出かけ？

恭介。（冷かに）えゝ。

おきぬ。（愛想よく三次郎に）いらつしやい、三ちやん……

三次郎。（狼狽てゝ）いえ、御無沙汰を。——めつきりお寒くなりまして……（べたりとすわる）

おきぬ。（恭介に）すみませんでした、としがいま氣がつかないであんなお菓子を。——（機嫌をとるやうに）これ、藤村の、喰らない？

恭介。（づけりと）止したらいゝでせう、奉公人の落度にするのは……

おきぬ。（しづかに）えゝ？

恭介。それぢやア奉公人が可哀想だ。——行かう、三公……

恭介、そのまゝあともみずに出て行く。——三次郎、おきぬに氣を兼ねながらともぐ〜出て行く……

おきぬ、さびしくみ送る。

（拍柝かはる）

……町のはづれにある小公園の一部。——岡のうへからゝゝの石段の中ほど。近くに堀割の水を控へたさむ〲とした感じ……

前の場より二三十分ほど後。——落莫としてあたりに人のかげなし。——三次郎をさきに、恭介、張合を失つたやうにぼんやり石段の下から上つて來る。

三次郎。（一人言のやうに）……空にかけはし、かすみに千鳥、およびないとてほれまいものか……

恭介。…………

三次郎。惚れりや夜も日も……

恭介。どこへ行くんだ。こんな……？（氣のついたやうに急に立留る）

三次郎。（おなじく立留る）どこへ行くつて……

恭介。何のつもりで、手めえ、こんなところへ俺を引つ張つて來たんだ？

三次郎。何のつもりもありません。——たゞ、もう、でれりぼうと…（いへば上の空にそういひながらそれとなくあたりに眼をくばる）

恭介。（それには氣がつかず。——吐出すやうに）後生樂だな、ほんとに……

三次郎。折角來たもんです。——一寸、まア、さういはないで一ト休みして行かうぢやアありませんか？

恭介。こんなとこに突ツ立つてどこが面白いんだ？

三次郎。一寸、この、冬枯の。――これでもあなた、山谷堀といへば以前は。柳橋から小舟をいそがせ……

恭介。うるせえな。

三次郎。だつて、外に、この時間にこれといつて行くところもないぢやアありませんか？――ぶら〳〵運動、ぶらうん……とでもでかけない分には、あなたは講釋は嫌ひだし……

恭介。（いつそ捨鉢に）おわかのうちが休みと知つてゐれば出て來るんぢやなかつたんだ。

三次郎。と思つたから。――さう思つたからわざといはなかつたんです。

恭介。と、手めえ、あすこのうちの今日やつてねえことを知つてたのか？

三次郎。（狼狽てゝ）いゝえ、今日は……

恭介。だのに、手めえ、知らねえ顔で、いゝ間のふりにあとからのこ〳〵ついて來やアがつたのか？

三次郎。いゝえ、そ、そうぢやないんです。――さういふわけぢやアないんです……今日のことは知らないんです……

恭介。ぢやア、わざと、何でいはなかつたんだ？

三次郎。昨、昨日休んでゐたんです。――昨日やつぱりやつてなかつたんです……

恭介。（ふと不安げに）と、昨日と今日……

三次郎。二日休んでる勘定です……

恭介。一昨日一寸行つたが、そんなやうなけぶりは何にもみえなかつた。――おわかも何ともいつてゐなかつた。――いつもさういふとき、何日幾日はやすみます、どこへ行くから休みます。――はツきり彼奴さういふんだ、……

三次郎。ことによると、おやぢ、あんまり客の來ないのに驚いて稼業替でもするのかも知れませんね。

恭介。何かそんなこといつてたか？

三次郎。いつてやアしませんけど、あの源八おやぢ、あんなぼんやりした面アしてゐてもなか〳〵喰へないつていひますから。―、いつだつたか、隣の、研屋のぢいさんがさういつてゐました……

恭介。（やゝ臆病に）でも、さうならさうのやうに……

三次郎。（わらつて）それア大丈夫です。―だまつて止しやアしません。―そんなこたアありません……

恭介。……

三次郎。さぐります。―早速明日さぐります。―いゝえ、一寸聞込んだこともありますから……

恭介。（いきなり）何だ、それ？

三次郎。（狼狽てゝ）いゝえ、なアに……

恭介。（さきをくゞるやうに）おわかのこつたらう？

三次郎。えゝ。―いゝえ……

恭介。いへよ。―どんなことかいへよ……

三次郎。いゝえ、そんな。―そんな大したこつちやアないんです。―ほんの―ほんの一寸した……

恭介。思つたより、手めえ、悪黨だな……

三次郎。戯、戯談でせう……

恭介。なら、手めえ……

（この間に、おとよ（二十四五）、石段の上から下りて來て恭と二人のうしろに立つ）

おとよ。御心配だわね……（わらふ）

恭介、ふり返る。——双方とつさに無言…

おとよ。（すぐに）有難う、三ちやん……

三次郎。い、いつ來たんです？（不意をうたれたのと間のわるいのとにこと〲くどぎまぎする）

おとよ。三時から三時半までの間つて約束だから、あたし、正直にちやんと三時に來たわ。——随分だから待つたわ……

三次郎。何時です、いま？

おとよ。（手首をみて）あと五分で四時。——いくら待つても、あんた、キツカケをわたしてくれないんだもの……

三次郎。でも……（いひかけて恭介の氣を兼ねる）

おとよ。いゝわ、仕方がないわ。——連れて、來てくれたんだから負けて上げるわ。

三次郎。…………………

おとよ。いゝわ、もう。——たしかにうけとつたわ。——さきへうちへ行つて待つてゝ頂戴……

三次郎。大丈夫ですか？

おとよ。何が？

三次郎。いゝえ……

おとよ。人のことよりお松ちやんが首を長くして待つてるわ。——早く行つておやんなさいよ。

三次郎。…………（思はずニヤリとわらつて額を叩く）

恭介。（急に）三公！

三次郎。え？

恭介。よくも手めえ……

おとよ。（そばから）いゝわ、三ちやん、あたしが頼んだんだから。——あたしがたのんでしたことなんだから……

三次郎。えゝ……

おとよ。早く行つて頂戴。——邪魔だから、ゐちやア。——（わざと恭介に）ねえ、恭さん……

恭介。…………（横を向く）

三次郎、眼で念を押す。——おとよ、わらつてそれにこたえる。——三次郎、そのまゝ消えるやうに密と去る。……

間。

恭介、つゞいて去らうとする……

おとよ。どこへ行くの、恭さん？

恭介。…………

おとよ。逃げるの？

恭介。…………

おとよ。何を逃げるやうなわるいことしたの？
恭介。………………
おとよ。そんなにあたしが怖いの？
恭介。………………（鋭くおとよの顔をみる）
そのまゝ、恭介、ふり切るやうにそこを去らうとする。――おとよ、行手（ゆくて）を遮る……

恭介。何だ、手めえ……
おとよ。何だぢやアありませんよ。――卑怯よ。――卑怯よ、それは……
恭介。何が卑怯だ？
おとよ。さうぢやアありませんか、卑怯ぢやアありませんか。――男らしくない、人にばかり口をきかせて……
恭介。手めえに、俺は、口をきく義理はねえ。
おとよ。何ですつて？
恭介。さういふ約定ぢやアねえか。當分逢はねえ、しばらく縁切だ、――固くさういつたんぢやアねえか。――手めえ、忘れたのか、それを？
おとよ。忘れやアしません。――忘れないから、今日（けふ）まで、電話一つかけなかつたぢやアありませんか？――三月ふりに、今日（けふ）かけたの……
恭介。（聞きとがめる）今日（けふ）？

おとよ。それだつて今日のはかけたうちに入りやアしませんわ。――たゞあんたがゐるかゐないか、たゞそれをたしかめるだけにかけたんですもの。――くれ〲も三ちやんにたのみはしたもの丶、あゝいふ人だから途中でまたどんなヘマをするか分らない。――心配になつたのと一つは……

恭介。佐藤とか加藤とかいつたのは、ぢやア……

おとよ。え丶、さうよ、あたしよ。――でも、ゐると分つたらすぐ切つてあげたわ。

恭介。な、なんだつてそんな出たらめな……（失望をまじへた腹立たしさ）

おとよ。あら、出たらめぢやアないわ。――出たらめにそんなこと。――忘れたの、あなた？

恭介。（全くの反感で）何？

おとよ。佐藤つてのは、あたしの、十九のときはじめてお嫁に行つたさきの苗字。――そこへ行かなければ、あたし、こんないまのやうなさまにはならなかつた。――よくさうあんたに話したぢやアありませんか。――そのとき、あんたは何をいつて……？

恭介。…………

おとよ。忘れるのは心細いわ。

恭介。…………

おとよ。でも、無理はないわ。――おわかさんのことで、目下、料簡が一ぱいになつてゐるんだから……

恭介。…………

おとよ。いゝ子だわね、しかし。――音無しくつて、情があつて、色ツぽくつて。――氣に入つたわ。――口惜しいけ

ど、あたし、一ト目みて惚れたわ。――とてもあたしなんぞくらべものにならないわ……

恭介。…………

おとよ。素人にして置くのは勿體ない。――あつたらものをおでんの湯氣でくすぶらせる。――と思つたら、矢つ張、誰の氣も違はないわね。――それに、あのお父つあん、ほんとうの親子と思つたらさうぢやアないんですつてね。――死んだお内儀さんの連れつ子で立派な義理ある仲。――それぢや仕方がないわ。――いまゝで打捨つといたのが不思議な位だわ……

恭介。…………

おとよ。でも、あんな子をむざ〳〵藝妓にするなんて。――可愛想も可愛想ね。――長唄が少しくらゐ彈けたつてそれで立ち行けさうなわけはなし……

恭介。…………

おとよ。（全く嘲けるやうに）どうかしておやんなさいよ。――いまならまだ間に合ふわ……

恭介。（やゝ退けめを感じながら）手めえ、それ……

おとよ。（わざと）えゝ？

恭介。何をそんな。――どこからそんな……？

おとよ。あら、知らないの？

恭介。…………

おとよ。知らないの、あんた？

恭介。…………………

おとよ。（飽くまでおとしめるやうに）……といつて一ト揉も二タ揉もするところよ。――けど堪忍して上げるわ。――さういつてもあんまり他愛がなさすぎるから……

恭介。……………

おとよ。お止しなさいよ、みツともない。――三ちやんを掴へて、あんな、眼のいろ變へてあんなことといへばどこがおもしろいの？――あんな人に何が分ると思ふの？――狼狽てるにもほどがあるわ……

恭介。………………

おとよ。男つてとぼ〳〵するとさうも度胸がなくなるの？

恭介。ちやア手めえは？――どうして手めえは……？

おとよ。三ちやんちやアないがそれこそさぐつたわ。――一生けんめにあの人のことをしらべたわ。――だつて口惜しいんですもの。――あの人に、あたし、み替へられたんですもの。――あの人のために、あたし體よく抛り出されたんですもの。――（わらつて）さうしたらね。――さうしたらその絲のさきへさういふ思ひもよらない得ものがついてあがつて來たの……

恭介。…………

おとよ。（しら〳〵しく）神さまはやつぱりあたしに同情して下さるんだわね。

恭介。…………

おとよ。あんた、深川にあの人の伯母さんのあるのを知つてる？

恭介。……………

おとよ。知つてさうな顏ね。――その伯母さんよ。――その伯母さんが間に立つていろ〳〵さりやくしてゐるのよ。――聞いたら、その人、洲崎でもと新造とかしてゐた……

恭介。……………

おとよ。あんたがそばにゐてどうしてそんな人の好きにさせるの？――えゝ？――どうして、あの人、それよりあんたにそれを何ともいはないの？

恭介。……………

おとよ。あたし分らない。――あたしだつたら眞つ先にあんたにいふわ。――うち明けてどうしたらいゝか知慧を借りるわ。――でなきやアうそよ。――さうしないのは女が薄情よ……

恭介。…………………

おとよ。尤も、あんたが、それほどいゝ人にとられてゐないんならべつよ。――さきやさほどにも思つてゐないならそれは仕方ないわ。――けど……（いひかけてわらふ）止すわ……

恭介。（いつそ冷かに）手めえの料簡にくらべて何をいやァがる……

おとよ。えゝ？――何ですつて？

恭介。手めえには分らねえ。――いゝから默つてろ……

おとよ。默つてませんわ。――默つてませんわ、あたし。――こんなふみつけにされて誰がだまつてる……

恭介。そ、そんならいつてやる。――おわかと手めえぢやァ……

おとよ。（遮るやうに）えゝさうよ、雪と墨よ。――それはだから分つてるわ。――でも、それだからつてみ替られわけはないわ。――そんな筋はないわ……

恭介。そんなんぢやァねえんだ。――そんなこツちやァねえんだ……

おとよ。ぢやァどんなこと？――どんなことなの……？

恭介。おわかはおその、友だちなんだ。――子供の時分からのうまの合つた友だちだつたんだ……

おとよ。（冷かに）だから？

恭介。それだけよ。

おとよ。おそのさんこそ仕合ね、だしにつかはれて……

恭介。何い？

おとよ。生きてるうちで足らないで死んでまで苦勞させられる。――あたしだつたら浮ばれない……

恭介。いゝ加減にしろ。――何のせうがに、手めえ……

おとよ。性をつけて上げるのよ。

恭介。しやらくせいことをいふな。――文句をいふならいふやうになぜ正面からぶつかつて來ねえ。――手めえも美登利亭のおとよとか何とかいはれてゐる女ぢやアねえか。――何だ、しみツたれな、三公なんぞ抱込んで、小細工するにもホドがある

おとよ。それアこつちでいふことだわ。――嫁になつたらなつた、愛想が盡きたら盡きたとなぜ正直にはツきりいはないの？――おためごかしに、俺もすこし考へたことがある、いつまでいまのやうにぐづぐづもしてゐられない、何か

仕事にとりつきたい。――それにはしばらく逢はないから。――それを真にうけたあたしも馬鹿だけれど、よくもそんなしら〴〵しいことがいへたもんだわ……

恭介。さうに違えねえんだ。――仕事にとりつくに違えねえんだ。――うそと思ふなら穂積にでも三公にでも聞いてみろ……

おとよ。いゝわよ、聞かなくたつて。――どつちにしたつておわかさんに逢へる暇のあるだけは分つてるんだから。――おわかさんに逢へてあたしに逢へないつてわけはないでせう？――それともおわかさんならよくつてあたしだといけないの？――（鋭く）そんな勝手はいはせないわ……

恭介。…………………

おとよ。（すぐ冷かにわらつて）でもいゝわ。――すぐ、もう、あの人あんたの眼のまへからゐなくなるんだから。――どこから出るか知らないが、出てしまへば此方のもの、どうしたつて、あんた、あたしのところへ返つて來るより外はないんだから……（流眄に恭介をみる）

恭介。…………

おとよ。（急に快活に）これでいゝの。――これだけいへばいゝの。――せい〴〵したわ、あたし。……

恭介。…………

おとよ。さ、仲直りをしませう。（手を出す）

恭介。ふざけるな！

おとよ。お止しなさいよ、そんな顔するの。――行きませう。――さ、一しよにうちへ行きませう……

恭介。…………………………

おとよ。ねえ。――ねえ、もし……

恭介。………………

おとよ。恭さん……

恭介。………………

おとよ。（冷かにまた）いゝわ。――いつまでもさうしていらつしやい。――そのうちにはいゝお知慧も出るでせうから……

恭介。………………

おとよ。仕合ね、おわかさんといふ人は。――こんなにも思はれてゐるんだもの。――寒い……（襟もとを掻合す）――帰るわ、あたし……

恭介。………………

おとよ。待つてるわ。――来たくなつたらいつでもいらつしやいね。――含羞まないでね……（刺すやうにわらふ）

おとよ、石段を下りる。――下りかけてふり返る。――そのまゝ去る……

間。

……夕影すでに漂ひそめてゐる。――恭介、石のやうに身動がない。

三州屋（四十八九）その姿の藝妓（二十八九）をつれて石段のうへから下りて來る。――そばを通つて恭介と氣がつく……

三州屋。恭介ぢやアないか？

恭介。（夢からさめたやうに）あゝ小父さん……

三州屋。どうしたんだ？――何をしてゐるんだ、こんなところで？

恭介。えゝ、いま。――いま友だちが……

藝妓。（そばから）いつぞやは……

恭介。あゝ……

三州屋。待つてるのか、友だちを？

恭介。いゝえ、わかれたんです、いま……

三州屋。ぢやアどうだ？――いま聖天さまへお詣りしてこれからいつものところへ行かうと思ふんだ。――附合はないか？

藝妓。いらつしやいましな。

恭介。えゝ……

恭介。實は。――實は小父さんにすこし相談したいことがあるんですが……

三州屋。相談？――ぢやアちやうどいゝ。――飯でもくひながらゆつくり聞かうぢやアないか。

恭介。えゝ……

三州屋。さ、一しよにおいで、一しよに……

藝妓。お供しますわ。

恭介。(聞えぬ、ぢやア……

三人、ともに石段を下りる……　(幕)

その三

恭介の部屋。(その二の「一」におなじ)――前まくより三四日ほどあと……

外には、寒い、つめたい雨がふつてゐる。――恭介、おきぬ、火鉢をあひだに對座して向ひ合つてすわつてゐる。恭介、「その一」にも「その二」にも決して着てゐなかつたシャツを着てゐる。それに兩手をことごく繃帶で卷いてゐる。

長き間。(……一トしきり話のもつれたあとの、歪んだ、寂しい、氣不味い沈默)

恭介、急に立上る……

おきぬ。恭さん………

恭介。…………………

おきぬ。どこへ行くんです、恭さん……

恭介。あなたにはもう頼みません。

おきぬ。…………………

恭介。兄さんに逢ひます。――直接に兄さんに逢つていひます。

おきぬ。恭さん、それはお前。――(弱く)後生だからそれだけは止しておくれ……

恭介。なぜです？――どうしてゞす？――どうして止さなくツちやアいけないんです？

おきぬ。…………

恭介。あなたぢやア分らないぢやアありませんか？――話のらちがつかないぢやアありませんか？

おきぬ。でも、お前、これが五十圓とか百圓とかいふなら……

恭介。それつぱかりの金なら。――それつぱかりの端下金ならこんなにあなたに頭を下げていやアしません。――千兩が一文缺けたつて役に立たない金なんです！

おきぬ。だからそんなお金を。――そんなお金をお前のいまの身分で……

恭介。身分でつかふんぢやアありません。――どうしてもこゝにそれだけの金がなくツちやアこまるんです……

おきぬ。こまるつて、お前。――何に、そんな……？

恭介。だから人間一人助けるんです。――人間一人のいのちを買うんです。……

おきぬ。それが。――それがわたしに分りません……

恭介。どうして分りません？――どうして分らないんです？――人間一人助けるつていふのか……(すわる)

おきぬ。それは誰を？……誰を助けるんです。

恭介。友、友だちです。――だから友だちです……

おきぬ。だからどこの方？
恭介。…………………
おきぬ。どういふ方？
恭介。………………
おきぬ。わたしの知つてる方？
恭介。………………
おきぬ。いへないの？——いへないの、それが？
恭介。いへます。——いへますとも……
おきぬ。いつて御覧……
恭介。（ずけりと）女です。
おきぬ。恭さん……
恭介。はツきりいひます、女です。
おきぬ。お前、それは……
恭介。あなたは知らないかしれない。——知らないかしれないが……
おきぬ。（遮る）いゝえ、知つてゐます。——聞いて、わたしは、ちやんと知つてゐます。
恭介。ちやアいゝちやアありませんか？——分つてればいゝぢやアありませんか？——そんなら、あなた……
おきぬ。（しづかに）千圓ないとその人はどうなるんです？

恭介。藝、藝妓になるんです。――田舍へ藝妓に賣られるんです。
おきぬ。……………(さびしく※と眼をふせる)
恭介。親がないんです。――此方とらのやうにその女も親がないんです。――義理の仲の親のためにみなくつてもいゝさういふ憂目をみるんです……
おきぬ。…………
恭介。當人、それを。――誰にもしかしそれをいはなかつた。――自分の胸だけにをさめてだれにも打明けなかつた。――だからだれも知らなかつた。――(やゝさびしく)わたしでも。――わたしでも一昨日まで知らなかつたんです……
おきぬ。…………
恭介。それほどあきらめの强い、何もなりゆきなら仕方がない、世の中つてものはさうしたもんだ。――さう思つてる女です。――さう思つてる可哀さうな女なんです。――同い年とはいへおそのによく似てゐます。――おそのそつくりです。――それだけだつて打捨つて置くことたア出來ないんです……
おきぬ。(いなされたやうに)お待ち……
恭介。何です?
おきぬ。お前のいふのは。――お前のさういふのは美登利亭の……?
恭介。美登利亭?
おきぬ。(不安らしく)美登利亭のおとよとか……
恭介。(彈かれたやうに)馬、馬鹿なことをいつちやアいけません。――そんな奴と思つたんですか?――そんな奴のこと

ゝあなたは思つてゐるんですか？

おきぬ。だつて、お前……

恭介。彼、彼奴は。――彼奴は仇敵です。――彼奴はわたしの仇敵です……

おきぬ。仇敵？

恭介。そ、そうなんです。――さうなんです。――（いつそざんげするやうに）それア、彼奴と、腐合はないとはいひません。腐合ひました。――長いこと彼奴のため引摺り引んまはされました。――それは。――それはいま後悔してゐます。――（半ば自分に）そのために。――そのためにいま……

おきぬ。ぢやアその人とは、もう……

恭介。止して下さい。――そんなことをいはれるさへ氣色が惡い……

おきぬ。…………

恭介。（急にまた）さ、これだけはツきりいつたんです。――何もかもみんなぶちまけたんです。――どうかして下さい。――無理でもどうかして下さい……

おきぬ。…………

恭介。まだ、もし、うろんと思ふなら當人をつれて來ます。――眼の前へすぐでも連れて來ます。――みればあなたゞつてなるほどゝ思ひます。――どうにかしたいと必と思ひます……

おきぬ。…………

恭介。名まへもいひませう、おわかといふんです。――おわかといふんです……

おきぬ。けど、恭さん……

恭介。…………？

おきぬ。で、どうするの、あなた？――その方と御婚禮でもするの？

恭介。婚禮？

おきぬ。えゝ、そのお金を出してその人と……？

恭介。そんなこたア思ひません。――そんなつもりはありません……

おきぬ。でも……

恭介。助ければいゝんです。――いまの急場（きふば）さへすくへばそれで此方（こつち）はいゝんです……

おきぬ。（きッぱりした感じに）わたしには分らない。

恭介。（いきり立つ）どうしてゞす？――これだけいつてどうしてゞす？

おきぬ。…………

恭介。これだけいつてどうして分りません？

おきぬ。…………

恭介。そんな。――そんな……

おきぬ。…………

間。

恭介。（吐出すやうに）手めえのものが手めえの自由にならねえ。――よッぽどそのはうが分らねえ……

おきぬ。…………

恭介。（わざと念を押すやうに）姉さん。――ねえ、姉さん、何もわたしは兄さんのふところからそれを出してくれといふんぢやアないんですよ。――自分のふところから。――自分のふところからいやア出したいといふんですよ。

おきぬ。…………（恭介の顔をみる）

恭介。おやぢの残して行つた。――わたしの分、おそのゝ分としておやぢが兄さんの手へ置いて行つてくれたなかゝら出してくれゝばいゝんです。――そんなかゝら渡してくれゝばいゝんです。――自分のものを自分でつかふに何の不思議もないと思ひます。

おきぬ。…………

恭介。知つてますよ。――下谷のあの地面だけだつて二三萬。――どう安くつもつたつてその位にはなるつていふんぢやアありませんか。

おきぬ。…………

恭介。眞逆に、まだ、あれへまで手はつけないでせうね？

おきぬ。…………

恭介。田町の藤田屋もいよ〳〵兄さんでおしまひか？

おきぬ。恭さん……

恭介。結句、おそのは、いゝとき死んだんだ……

おきぬ。何をいふの、それは？

恭介。。世間でいつてることをいつてるんです。

おきぬ。世間で何と……

恭介。（あくまで毒をもつて）駄目ですよ、白ばツくれたつて。——この家屋だつて、もう、ほんとうに姉さんたちのものとはいへなくなつてるんぢアありませんか……

おきぬ。（再び）恭さん……（おもはずうしろをみ返る）

恭介。……………（ざまアみろといつたやうに。——とはいへ、暗い、寂しい、苦澁にみちた面もち）

おきぬ。（急に）勘忍しておくれ、恭さん……（袂と眼を拭ふ）

恭介。……………

おきぬ。隠しやアしない。——決して、わたし、お前にかくしやアしない。——たゞ。——たゞ……

恭介。……………

おきぬ。これには、いゝえ、いろ〳〵事情があるの。——それをいへば。——早くそれをいへばよかつたのを……

恭介。聞いたつて。——よし聞いたつて、そんな、ろくでもねえ話……

おきぬ。いゝえ、さうすればお前に……

恭介。わたしは、たゞ、あなたが兄さんのやうな、あんな……

おきぬ。いゝえ、兄さんは悪かアありません。——決して兄さんにつみはありません。——それだけは、恭さん、はツきりわたしいひます。

恭介。しかし世間では……

きぬ。世間では何といつてるか知りません。——でも、わたしにいはせれば、兄さんほど藤田屋の暖簾を大切に思つてる人はありません。

恭介。大切に思つてる人が、姉さん……

おきぬ。いゝえ、さう思へばこそ……（徐とまた眼をふく）——そこに恭さんの知らないことが……

恭介。…………　……（ふとそのさまにさそはれて無言）

おきぬ。話すわ。——いづれよく話すわ。——それまで待つて頂戴…………

恭介。…………

おきぬ。決して、そんな。——決してそんな店がこのまんまになつてしまふやうな……そんなことになるわけがありません。——そんなことにしていゝ位なら何にも心配はありません。——誰が何といつてもお前だけは。——お前だけは……（せき上げて來る泪を押へる）

恭介。…………（いへば、やゝ、拍子抜のした感じ）

おきぬ。それに、恭さん……

女中（「その二」のより年をとつてゐる）襖のそとに來る。

女中。一寸……

おきぬ。（泪をかくして）わたし？

女中。へえ、

おきぬ。何だい？

女中。一寸お顔を……

（おきぬ、立つて行く。——女中、何ごとかさゝやく。——おきぬ、おもはず眼をみ張るやうにする……

間。

おきぬ、うなづく。女中、去る。）

おきぬ。お前、とんだことが出來たよ……（憂はしくもとの座にもどる）

恭介。…………？

おきぬ。徳造さんが亡つたよ……

恭介。亡……？（自分の耳を疑ふやうにおきぬの顔をみる）

おきぬ。うちの人の代りに三ちやんがいま……

恭介。だつて入院したんでせう？

おきぬ。入院したんだけど。——矢つ張手遲れだつたんだね……

恭介。……

間。

おきぬ。（歎息するやうに）おその〻初七日からまだ十日とた〻ないのに。――まるで夢のやうな氣がする……

恭介。…………

おきぬ。恭さん、お前もこのごろどこか惡いやうだけど。――お醫者へ行つてるだらうね？

恭介。行きません。

おきぬ。どうして？――行かないの、矢島さんとこへ？

恭介。あんな藪醫者んとこへ行つたつてはじまりません。

おきぬ。矢島さんがいけなければ外のお醫者でも。――どこへ行つたつていゝぢやアないか――駄目ですよ、輕はづみをしちやア……

恭介。醫者へ行かなくつたつて藥は飮んでます。

おきぬ。どこが惡いの？

恭介。喉です。――偏桃腺がすこし惡いだけなんです。

おきぬ。手は？――どうしたの、繃帶して……？

恭介。濕疹です。――濕疹が出來たんです。

おきぬ。どうして、まア……？

恭介。（事もなく）大したこたアないんです。――直つて來てゐるんです。

おきぬ。（しみ〴〵）大切にしておくれ。――大切にしておくれよ、ほんたうに。――親身といつたら、わたし、お前一人

になつたんだから……（泣く）

恭介。（目蓋のうらのふと熱くなるのを覺える。——が、強ひてそれをふり掃ふやうに）そんなことはどうだつていゝんです。——そんなことより話です。——どうなんです、こつちの話は？

おきぬ。晩まで待つて下さい。

恭介。晩まで？

おきぬ。どうかします——兄さんと相談してどうかします。

恭介。（嵩にかゝつて）必としてくれますか？

おきぬ。……します。

間。

おきぬ。ぢやア、わたし、彼方へ行くから……

恭介。…………

おきぬ。穂積へすぐだれかやらなければならないし……

恭介。…………

おきぬ、立つ。——そのまゝ出て行く……

間。

恭介、ついと立つ。――障子をあける……

恭介。畜生。いつまでふりやアがるんだ……（自分を紛らはすやうにわざと聲を出していふ。）

三次郎、忍ぶやうに薪と入つて來る。

恭介。（間。――ふり返る）誰だ、手めえ……

三次郎。直訴。――直訴……

恭介。どの面下げて、手めえ……

三次郎。叱られます。――幾らでも叱られます。――が、今日は。――今日のところは……

恭介。何い？

三次郎。いつもの今日は三次郎ぢやアありません。――穗積新吉。――穗積新吉の代理です……

恭介。…………

三次郎。これを。――これを……（ふところから、新吉の手紙と、それに添えた袱紗づゝみとを出して恭介のまへに置く）

恭介。…………

三次郎。御覧になれば。――それを御覧になれば……

恭介、手紙をとり上げて封を切る。――讀む。

間。

……腑に落ちないもの丶あるさま。――袱紗づゝみをとり上げる。あけると中から一通のまた厳封した手紙が出る。――すぐまたその封を切る。――トわたり讀み終つて急に喪心したやうになる。

やゝ長き間。

恭介。呼吸を引取るときそばにだれがゐたんだ？

三次郎。新ちやんだけです

恭介。外のものは？

三次郎。昨日より今日のはうがずつと工合がいゝんで、おばさんは、一寸の間うちへ入用のものをとりに行きました。――心配して詰めてゐた親類の人たちも、この分ならと安心して、お晝ごろそれ〴〵引取つて行きました。――そのあとで急にへんのかはつたもんです……

恭介。で、お前はどうしたんだ？

三次郎。此方は何の氣なし見舞に行つたもんです。――と、いまいけなくなつたといふところ。――はう〴〵へ電話をかけるやら電報をうつやら。――一人で新ちやんやきもきしてゐるところへ飛込みました。――いゝところへ來てくれた、たのみがある。――といふんでそれを言附かつたわけなんですが。――秘密のもんだからかた〴〵手渡しするやうに。――必ず人にみられないやうに……

間。

恭介。死骸はどうした？

三次郎。病院からすぐ燒場へもつて行くやうな鹽梅です。

恭介。すぐ燒場へ？

三次郎。えゝ。

間。

恭介。（しみ〴〵と）……もう一度逢ひたかつた。

恭介、とり上げて、また、さびしくあとの手紙に眼をさらす。――俄に羞恥と悔恨の泪に身を浸す……

間。（……身に泌みるやうにふる雨の音。）

三次郎。（接穂のない感じを紛らすやうに）今日に限つて、また、意地わるく……（その雨の音のはうへこなし。――立つて障子をあける）可笑しいと思つたら白いものがまじつてゐます。

（幕）

その四

舞臺「その三」に同じ。――が、深く立てまはした屏風、厚く重ねられた白い寢具、さうしたものが部屋の感じをまるで變へて

みせてゐる。

雪ぐもりの午後。（「その三」の十日ほどあと）――恭介、この二三日急に病の重つた躰をさびしくそこに横へてゐる。

……醫者、診察を終つたところで手を洗つてゐる。――看護婦の外、信藏、おきぬ、深い憂色をみせてそばに附いてゐる。

――すこし離れて、三次郎、おづ〳〵したとりなしですわつてゐる。（よきところにうぐひすの籠を置く。）

同。

……誰も無言。

恭介。（急に）先生……

醫者。……………………

恭介。あとですこし起きちやアいけないでせうか？

醫者。起きて？　――起きてどうする？

恭介。兄さんや姉さんとすこし話がしたいんです。

醫者。話をするならそのまゝだつていゝぢやアないか？

恭介。寢てゐちやア出來ない話です。

おきぬ。恭さん……

醫者。よし、よし。……その元氣があればいゝ。――好きにし給へ。

恭介。（力なく）有難う……

間。

醫者。（看護婦に）昨日の粉藥はまだあつたね？

看護婦。ございます。

醫者。夕方、では、もう一服つかつてみてくれ給へ。

看護婦。かしこまりました。

醫者。（おきぬに）では……

おきぬ。有難うございました。

醫者、信藏に一寸眼で合圖して立つ。――信藏、心えてともに立つ。――看護婦、鞄をもつて二人の出て行くあとに從ふ。

間。

恭介。姉さん……

おきぬ。あいよ……

恭介。起して下さい。

おきぬ。大丈夫かい、お前？

恭介。大丈夫です。

おきぬ。無理をしちやア駄目よ。

恭介。そんなことありません。

おきぬ、手をかして恭介を起き直らせる。――恭介、辛うじて床のうへにすわる。――「その三」のことにして、わづかのうちに、いたましく、み違へるやうに面やつれしてゐる。

おきぬ。いゝかい、ほんたうに？

恭介。大丈夫です。――大丈夫です……

……おきぬのいろ〳〵な心づかひ。

間。

信藏をさきに、看護婦、かへつて來る。――もとゐたところにすわる。

恭介。兄さん、……

信藏。…………？

恭介。改めて。――改めて兄さんにお詫をいひます。――いまゝでのことはどうぞ堪忍して下さい。（がツくりした感じに手をつく。）

信藏。何をいふんだね。――急にそんなつまらない……

恭介。いゝえ、いはないと氣がすみません。――どうしても氣がすみません。――いはせて下さい……

信藏。それなら體（からだ）がよくなつてからでいゝちやァないか？——快くなつてから。——快くなつたらうへで、もし……

恭介。いゝえ、快くなつてからは快くなつてからのすることがあります。——わたしは馬鹿です。——馬鹿ですから人にのせられました……

信藏。恭さん……

恭介。たゞもう兄さんをよく思ひませんでした。——たゞもう兄さんをうらみました。——藤川屋のうちの根を枯らすものはあなた。——たゞわけもなくさう思ひました……

信藏。…………

恭介。それも、いへば、早くからもちくづした身のあかりをすこしでも立てたいため。——それへ親のない僻みをもち込んで、俺は不運だ、不仕合だ。——自分にさう勝手にきめました。——誰も何ともいはないのをいゝことに、我儘（わがまゝ）の、氣儘（きまゝ）の、したい三昧をやりました。——兄さんも、姉さんも、みてゐてさぞ眼にあまる。——腹の立つことばかりだつたらうと思ひます。——（さびしく）すみません……

信藏。…………

恭介。それにはその火に油をぶツかけるやうな奴がゐました。——三州屋です。——三州屋の畜生です……

おきぬ。恭さん……

恭介。いゝえ、いひます。——構ひません……（看護婦に）三澤さん、氷をすこし缺いて來てくれませんか。

看護婦。はい……（すぐ立つて行く）

間。

恭介。三州屋は、料理屋や待合へ、始終わたしをさそひました。——さうやつて、彼奴、わたしの機嫌をとりました。——なぜさうするのか始めわたしには分りませんでした。——親切な、氣のいゝ、自分を贔屓にしてくれる人——さうとばかり思ひました。——（恥づるやうに）來いといはれるのをいゝことにどこへでも此奴が喜んで附いて行きました。

信藏。…………

恭介。藤川屋のうちはいまどういふさまになつてゐる、兄さんのしもりをしてゐるお前の財産はいまどうなつてゐる、お前が人をよくしてゐたらどんな目をみるか分らない。——その間でだん／＼さうしたことをわたしの耳に吹ツ込んで來ました。——（おきぬに）姉さん、いつか世間でさういつてゐるとわたしはいひました。——世間ぢやアありません。——世間ぢやアそんなことは知りません。——三州屋がたゞあることないことさういつただけです……

おきぬ。…………

恭介。彼奴はおそろしい奴です。——油断もすきもならない奴です。——彼奴はこれと自分に眼をつけたものは何でも自分のものにしなければ置かない奴です。——そのためにはどんな酷いことでもする奴です。——彼奴の毒の手にかかつて、住馴れた土地を立退いたもの、夫婦わかれをしたもの、首をくゝつて死んだもの、この淺草だけでも二十何人あるさうです。——あんな、尤もらしい、蟲も殺さねえやうな面アして、彼奴、酒屋はほんのつけたり、ほんたうの稼業は鬼のやうな高利貸なんださうです。——兄さんはそれを知つておいでですか。

信藏。…………！

恭介、手を伸ばして蒲團の下をさぐる。

おきぬ。何？――何を出すの、恭さん？

恭介。こゝに。――こゝの下に袱紗づゝみがありますから……

おきぬ。…………（さがす。――「その三」の袱紗づつみを出す）これ？

恭介。えゝ。――兄さんに上げて下さい。

おきぬ、信藏にそれをわたす。――信藏、あけてなかゝら「その三」の手紙を出す。

恭介。それを御覽になればすべて分ります。――いつ書いたのか日が入つてないから分りませんが、穗積のおやぢの死ぬ一時間ほどまへ、病院で、自分がもし死んだらすぐにこれをわたしへとどけるやうに。――さういつて新ちやんにそれをわたしたんです。――新ちやんは、いはれた通り、すぐこれを三ちやんに言附けてよこしました。――わたしァそれをみて、急に眼のまへが眞つ暗になりました。

信藏。…………………

恭介。穗積のおやぢは三州屋の肚を疾うから知つてゐました。焚きつけて兄さんとわたしを不仲にする、わたしを自分の手に引取る、ともにわたしの身についたものを體よく自分の手へさらひこむ。――さうしたなりゆきになるのをはら〳〵しながらみてゐたんです。――ふん切つて、それを、生きてゐるうちわたしにさうはツきりいへなかつたのは、以前、三州屋に、いまの稼業をはじめるうへでいろ〳〵世話になつた義理があります。――あゝいふ堅い人だから、仲に立つて、隨分苦しかつたらうと思ひます……

信藏。…………………

恭介。いまにしてあのおその丶逮夜の晩のこと、初七日の日のこと。――らちくちもない人困らせをやるわたしを飽くまで宥めてくれたあの人の心もちがはツきり分ります。――それにしてもあのとき。――あのときめづらしく飲んだ酒が。――あれがあれつきりになるとは思ひませんでした。（だん〱疲れて來る）

おきぬ。（氣づかつて）恭さん、い丶加減にしてお休みでないか？

恭介。大丈夫です。――まだ大丈夫です。――それより姉さん、姉さんにあの無理をいつたあと。――あのあとすぐなんです、これをうけとつたのは。――泣きたくなつた。――わたしァ讀んで泣きたくなつた。――だつてわたしのいつたことの大ていは根も葉もないことだつたんですから。――どんなことがあらうと人のものには手をつけない。――さういふ兄さんの綺麗なお肚の中を、兄さんの代り、穗積はくり返し〱書いてゐます。――それには店の稼業のうまく行つてないわけもそれをみて分りました。――おやぢがそんな片手落なことをしてゐるとは夢にも知りませんでした。――わたしやおそのにだつてそれだけのことをして行つてくれたんです。――兄さんや姉さんには それ以上のことをして行つたに違ひないと思つてゐました。――それにはそんなにまで暢氣な、不味い稼業のしかたをいままでやつてゐたとは思ひませんでした。――はじめて知つて驚きました。――わたしにも良心はあります。――わたしア、姉さん、あとでまたあなたの入つて來たとき、ほんたうにはあなたの顏がみられなかつた。……

おきぬ。……………

恭介。と、また、あなたが。――あなたがちやんと千圓……

おきぬ。お休みよ。――え丶？――少しお休みよ……

恭介。(それにはこたへず)おれだけは。――あれだけは有難くもらつて置きます。――おかげで人一人救へました……

おきぬ。でも、役に立つてよかつたわ。

恭介。えゝ。――いま三ちやんに聞きました。――話がついて今日先方からうちへ歸つて來るさうです。――(やゝ昂奮して)どんなに、當人だつて、喜んだか知れやァません……

おきぬ。………………

恭介。でも、あの女のためにわたしは救はれました。――もつと早くあの女がわたしのまへに出て來たらかうまで深みへ陥らないですんだらうと思ひます。――かうまでやくざにならないでよかつたらうと思ひます。――それほどだれの料簡でもどんな汚い料簡でも綺麗にさせる女です……

おきぬ。…………

恭介。わたしの亡いあと、姉さん、この上ともどうぞ面倒をみてやつて下さい。――おそのと思つて氣をつけてやつて下さい。――この間もいつたとほりこれといふ身よりたよりのない身の上です。

おきぬ。…………(そつと眼をふく)

恭介。それからこゝにゐる三ちやん。――(信藏に)これは、兄さん、あなたにおねがひします。――音無しい、氣の練れてゐるのをいゝことに、三公、三公と、年上のものをつかまへて生意氣にいまゝで安くばかりして來ました。――それでも、腹も立てず、いまゝでそれはよくわたしのやうなものと附合つて來てくれました。――矢つ張身よりたよりのない躰です。――まさかのときはどうぞ力になつて下さい……

信藏。…………

恭介。（しみ〴〵三次郎に）三ちやん、君も、いまさら藝人になつたつて仕方がない。――手についた立派な職があるんぢやアないか。――それで身を立てないか？――人間、これといふしつかりした取ッつき端のないほど惡いこたアねえ。――俺にしたつてそも〳〵學校を途中で止したのがいけなかつたんだ。――俺たちには下らない氣迷ひが一番いけねえんだ……

三次郎。え〻。――え〻……（うなづく。――ぼろ〳〵泪をこぼす）

間。

恭介。（つく〴〵）これでせい〳〵した。――いひたいこともこれで大ていつたし……

信藏。何をいふんだ。――何を、そんな、氣の弱い。――早く體をよくしてこれからは一しよに藤田屋の眞をさからせる約束ぢやアないか…

恭介。（さびしく）え〻さうです。――わたしもさうしたいと思つたんです……

信藏。いま〻ではおたがひの間に遠慮がありすぎた。――君もわたしに對してへだてがあれば、わたしも君に對して木戸を立て〻ゐた。――それがいけなかつた。――これからは一しよにとき〴〵は酒も飲まう。――一しよにとき〴〵は物見遊山もしよう。――ねえさうしようぢやアないか……

恭介。え〻。――え〻……（泪、頰を傳ふ）

信藏。君もわたしを誤解してゐた。わたしも君を誤解してゐた。――が、今度でそれがはツきりした。――さういつてもわだかまりのない君の心もちがわたしによく分つた。――禍變じて福。――それだ。――つまりそれだ。――だか

ら早く養生して…

恭介。いゝえ、それが。――それが。――駄目なんです、それが。――（必要以上に恥ぢて）わたしの體には下らない女と腐合つたむくいが根を深く下ろしてゐるんです。

信藏。だからその療治をしてゐるんぢやアないか？

恭介。しかしもう手遲れになつてます。

信藏。そんなことはない。――決してそんな心配はない。

恭介。いゝえ、それは。――それはさうなんです。――あたりまへなら心配ないんです。――けど。――けどそれが…

信藏。…………？

恭介。さうと氣がつくと自分療治をはじめました。――たゞもう早く直したい一心でした。――げんのみえないのに氣をくさらして、性の知れない。筋のよくない藥もいろ〳〵のみました。――それが祟つて來てゐます……

看護婦、水をもつて歸へつて來る。

恭介、氷塊を口にふくむ。

看護婦。遲くなりました。――生憎切らしてとりに行つていたゞいてたもんですから……

看護婦。すこしお横におなりになりませんか？

恭介。疲れた。――さうしよう……

……急にぐつたりした感じ。——看護婦とおきぬにたすけられて横になる。

恭介。陰氣だ。——電燈(でんき)をつけて下さい……

看護婦、電燈(でんき)をつける。——あたりよみ返つたやうにあかるくなる。

……さびしく誰も無言。

間。

新吉、入つて來る。——信藏とおきぬのまへにすぐすわつて頭を下げる。——そのあと二人に何かさゝやく。——二人のうなづくので、立上り、すぐまた出て行く。

間。

新吉、再び入つて來る。——うしろにつゝましくおわか從ふ。——信藏、そばへ行けといふこなし……

新吉。(おわかをうしろに恭介の枕頭(まくらもと)による)恭さん、恭さん……

恭介。…………

新吉。恭さん……

恭介。…………

新吉。よく眠つておいでゞす……(信藏のはうをふり返る)

間。

……おわか、密(そう)と泣く。——それにさそはれて、おきぬ、三次郎。——つゞいて信藏、新吉、とも／＼みんな泪に沈る。

(幕)　(十五年十二月)

河北新報

玄鶴山房

芥川龍之介

一

……それは小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數奇を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし資産を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生姜さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や靑瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし「玄鶴山房」は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奥床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある

横町も殆ど人通りと云ふものはなかつた。豆腐屋さへそこを通る時は荷を大通りへおろしたなり、喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金釦の制服を着たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな。まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等はふたりとも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バット」の吸ひ殼が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

……

二

重吉は玄鶴の婿になる前から或銀行へ勤めてゐた。從つて家へ歸つて來るのはいつも電燈のともる頃だつた。彼はこの數日以來、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭氣を感じた。それは老人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にそんな匂の出る筈はなかつた。冬の外套の腋の下に折鞄を抱へた重吉は玄關前の踏み石を歩きながら、かういふ彼の神經を怪まない訣には行かなかつた。

玄鶴は「離れ」に床をとり、横になつてゐない時には夜着の山によりかかつてゐた。重吉は外套や帽子をとると、必ずこの「離れ」へ顏を出し、「唯今」とか「けふは如何ですか」とかの言葉をかけるのを常としてゐた。しかし「離れ」

の閾の内へは滅多に足も入れたことはなかつた。それは舅の肺結核に感染するのを怖れる爲でもあり、又一つには息の匂を不快に思ふ爲でもあつた。玄鶴は彼の顔を見る度にいつも唯「ああ」とか「お歸り」とか答へた。その聲は又力の無い、聲よりも息に近いものだつた。重吉は舅にかう言はれると、時々彼の不人情に後ろめたい思ひもしない訣ではなかつた。けれども「離れ」へはひることはどうも彼には無氣味だつた。

　それから重吉は茶の間の隣りにやはり床に就いてゐる姑のお鳥を見舞ふのだつた。お鳥は玄鶴の寢こまない前から、——七八年前から腰拔けになり、便所へも通へない體になつてゐた。玄鶴が彼女を貰つたのは彼女が或大藩の家老の娘と云ふ外にも器量望みからだと云ふことだつた。彼女はそれだけに年をとつても、どこか目などは美しかつた。しかしこれも床の上に坐り、丹念に白足袋などを繕つてゐるのは餘りミイラと變らなかつた。重吉はやはり彼女にも「お母さん、けふはどうですか？」と云ふ、手短な一語を殘したまゝ、六疊の茶の間へはひるのだつた。

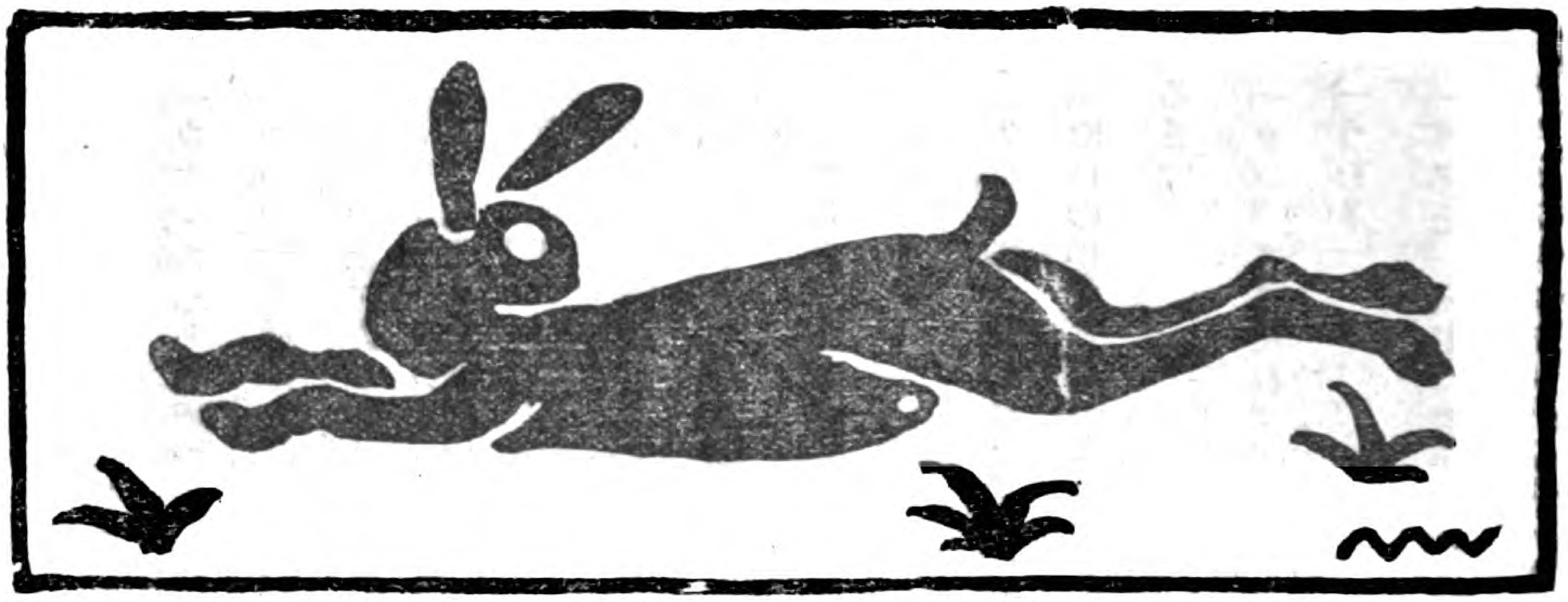
　妻のお鈴は茶の間にゐなければ、信州生まれの女中のお松と狹い臺所に働いてゐた。小綺麗に片づいた茶の間は勿論、文化竈を据ゑた臺所さへ舅や姑の居間よりも遙かに重吉には親しかつた。彼は一時は知事などにもなつた或政治家の次男だつた。が、豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才だつた。それは又彼の人懷こい目や細つそりした顋にも明らかだつた。重吉はこの茶の間へはひると、洋服を和服に着換へた上、樂々と長火鉢の前に坐り、安い葉卷を吹かしたり、今年やつと小學校をはひつた一人息子の武夫にからかつたりした。

　重吉はいつもお鈴や武夫とチヤブ臺を圍んで食事をした。彼等の食事は賑かだつた。が、近頃は「賑か」と云つても、どこか又窮屈にも違ひなかつた。それは唯玄鶴につき添ふ甲野と云ふ看護婦の來てゐる爲だつた。尤も武夫は「甲野さん」がゐても、ふざけるのに少しも變らなかつた。いや、或は「甲野さん」がゐる爲に餘計ふざける位だつた。お

鈴は時々眉をひそめ、かう云ふ武夫を睨んだりした。しかし武夫はきよとんとしたまま、わざと大仰に茶碗の飯を掻きこんで見せたりするだけだつた。重吉は小說などを讀んでゐるだけに武夫のはしやぐのにも「男」を感じ、不快になることもないではなかつた。が、大抵は微笑したきり、默つて飯を食つてゐるのだつた。

「玄鶴山房」の夜は靜かだつた。朝早く家を出て武夫は勿論、重吉夫婦も大抵は十時には床に就くことにしてゐた。その後でもまだ起きてゐるのは九時前後から夜伽をする看護婦の甲野ばかりだつた。甲野は玄鶴の枕もとに赤あかと火の起つた火鉢を抱へ、居睡りもせずに坐つてゐた。玄鶴は、——玄鶴も時々は目を醒ましてゐた。が、湯たんぽが冷えたとか、濕布が乾いたとか云ふ以外に殆ど口を利いたことはなかつた。かう云ふ「離れ」に聞えて來るものは植え込みの竹の戰ぎだけだつた。甲野は薄ら寒い靜かさの中にぢつと玄鶴を見守つたまゝ、いろいろのことを考へてゐた。この一家の人々の心もちや彼女自身の行く末などを。……

これは四十枚ほどの小說になる筈だつたのですが、風を引いた爲に締切り日に書き上げることが出來ず、とうとう始めだけ發表することになりました。殘りは來月號に載せて貰ふことにします。右讀者並びに編輯者へお詫びする爲にちよつと附記することにしました。　作者。



惡魔の玩具

佐藤春夫

一

上村讓二が顏の色を蒼くして部屋のなかへ這入つて來た。座についても容易に口を利かうとはしない。いつも氣のいいこの男がこんな顏つきをしてゐるのは唯事ではないと察すると同時に、これはてつきりカホルの事に關係してゐるなと私は直感した。カホルのことででもない以上は、上村に眞顏になれるやうな題目はありさうにもない。

カホルといふのは、私の從姉であるが、上村はその夫——といふか、何といふか、ともかくもそんな男なのである。年はカホルよりも三つ、さうして私よりも二つ若い。まだ或る私立大學生だが、ほんとうに學校へ毎日、通つてゐるかどうか私は知らない。

「上村君、どうした？　ひどく意氣銷沈してゐるぢやないか。君らしくもない」

「フム」

上村は今にも泣き出したいやうな顔をしてゐる。
「カホルさんと喧嘩でもしたのか」
「いいや」上村はしばらく默つてゐたが「カホルさんがね、どこかへ行つてしまつたのだ」
「へ？」上村よりも私の方が活氣のある聲を出した「逃げたの？　いつの事だい、それは」
「さ、もう十五日目になる。前々週の水曜日だからね」
「で、今までわからないの？　一たい、どういふわけだね、また。誰か君の友達とでも一緒に逃げたのかい」
カホルの氣風をよく知つてゐる私は、そんな質問を發した。
「いいや！　そんな事ではない」上村は今までよりずつと大きな聲で言つたが、再びもとのやうな元氣のない聲になつて「實はね、お父さんが病氣だといふ電報が來たのだ」
「いつさ？」
「だから前々週の水曜日、朝十時ごろだつたよ」
「原口の伯父さんが病氣？　そんな事はないな。そんな大病なら、僕のところへも何とか、はがきぐらゐは今までにあるさ」
「ウン。さうだね。――が、まあ、その時はさういふ電報が來て、その晩、堺へ發つたのだよ」
「うむ？」
「すると、それつきり何の音沙汰もないのだ。四五日はあの人の事ではあり、それにそんな場合とりまぎれて何とも言つて來ないのだらうと思つてゐたが、一週間たつてもやつぱり何とも言つて來ない。僕はそれでたうとう思ひ切つて原

口へ手紙を出したのだ。お父さんの病氣の見舞を兼ねて、心配だから、カホルにたよりをするやうに言つてくれと書いた。それがカホルさん(彼は自分の女のことを樣づけにしたり、……呼び捨てにしたりする。これはいつものことだが)が出てから十日目だつた。僕もそれまで音無しく待つてゐたのだよ。でも、あんなわけで原口の家と僕とはちよつと工合が惡いのだ、二年半の間に僕はまだ一ぺんも手紙を出した事はなかつた。始めて出す手紙だもの書きにくつてね。その返事がやつと今のさつきとどいたのだ」

上村は言ひながら懷中やら袂やらをさぐつてゐたが、しまひには立つて帶をほどいたりして、大事なもののやうに搜しあぐねながら「おや、落したか知ら。たしかに持つて來た筈だつたけれど」

「何を？その返事の手紙か。何と言つて來たの。手紙は無くなつたつていゝぢやないか。何も面倒なことを言つては來やしないのだらう」

あまり氣にして狼狽するのを見兼ねて私が注意をすると、上村は

「ア。何、ただね」言ひながらやつぱり氣にかかるらしい。懷へもう一度手を入れてみて「ただね、原口のお父さんが病氣なんて噓だ。それからカホルはうちには來てゐない。そんな電報なんて出したおぼえもない。とそれだけのことだつたが、お父さんの自筆の手紙らしい。……」

「ふむ。さうだらう、伯父さんが病氣なんてことは聞かないものね」

「………」

上村は默つて私の顏を見上げてゐる。少し間の拔けたやうな男なのだ。だが、その目の色に眞劍で純粹なところがあつた。

「それで君は心配して僕のところへ相談に來たのだね」私もつひ氣の毒になつて、平素は云はないやうなわかりきつたことを尋ねた。

「え、さうなのです」

上村は改まつた口の利き方をした。それが私には哀れつぽさとをかしさとを追加した。

「それで何かね、その前後、カホルさんがゐなくなる前後に、何か思ひあたるふしでもないのかね」さう私は尋ねかけたけれども、氣がついて問ひ直した「何かね、カホルさんは着物やなんぞ持つて行つたの？置いて行つたの？」

「持つて行つた。大ていのものは持つて行つた。――病人の看病に行くんだから永びくかも知れない。それにもう直ぐ羽織だの袷だのがいるやうになるのだからと云つて、大きな行李へ一ぱい持つて行つた」

「をかしいね。やつぱり君、それはどこかへ逃げたのだね。第一その電報といふのを誰が打つたのだか……」

「それがわからない。それからその電報より前に姉さんからお父さんが病氣だといふ手紙も來てゐた」

「君、その手紙を見たの？」

「いいや、聞いただけで手紙は見なかつた」

「何か、君、すこしは様子の變つた事でもありはしなかつたか。その前後からさ。少し君を厭きてゐたやうな様子でもさ――何しろ、あんなふうな女だから……」

「いいや、そんな事は何も無い。何も無い。それどころか、近ごろは間借ぢやつまらないから家を持たうと言ひ出して、何かと世帯道具など、ふたりで買ひ調へて用意したりしてゐた程なのだから」

「ふむ、それはいつごろ？」

「電報の來るすぐ前まで、一週間ほどのあひだの事だが」

彼女の行方はもとよりのこと、その心持も私にわからう筈はなかつた。私はたゞカホルと上村とがはしやぎ切つて、ふざけながら夏の夜の店さきを世帶道具を買つて歩く愉快な有様を空想しながら、人眞似に近ごろ手に入れた安もののマドロスパイプを啣へてゐたが、

「でも、カホルさんのものは、まだ何かしら少しは殘つてはゐるんだね」

「それや、少しはあるにはあるが」

「それをみると、何か多少の手がかりになるものでもなかつたかね」

「さう思つて、僕は自分で何べんも見てみるけれどわからぬ。……すまないけれど、あんたが來て一ぺん見てくれるといいがな」

「うむ。僕が行つてみても君にわからぬこと判らないのだが……」

さう言ひながらにも私は不性無性に自分の宿から出た。

二

本郷から代々木まで上村にひつぱられて來たら、初秋の一日はもうすつかり夜になつてゐた。上村は始めから終まで墓場の花のやうにしほれてゐた。

上村の部屋は、いづれは間借主の親切からであらう。カホルが一緒にゐたころなどよりも逈によく片づけられてゐた。それがかへつて、上村にはものさびしく感ぜられるに違ひないと私にも察せられた。さうしてこの部屋へ來てみ

て、私もどうしてだかどうやら少しは上村の心持になつてやることが出來た。先刻、上村が落したらしいといふ原口の伯父からの手紙は、やつぱりここに置き忘れてゐたので机の上にあつた。伯父の手でなかを開けてみても、さつき上村から聞いたより以上には何も書いてなかつた。

「お父さんは何だかやつぱりおこつてゐるらしいね」

上村は子供のやうに、私にそんな事をたづねたりした。

この部屋に殘されてゐるものといふのを見たけれども、洗濯物をよくもまあからためて置けたものだと思へた外には、何の發見するところもなかつた。白地や浴衣の洗はないのがカホル自身のと上村のとを合してざつと二ダースはあつた。

「駄目だね」私はさう言つて、さつきから問題にしてゐたことをまた新らしく思ひ浮べて「せつかく、買ひととなへた世帶道具ももうおぢやんだね。——どうした」

「それや、運送屋へあづけてある」

「運送屋へ？」

「うん然うや！」この男は日ごろからそんな駄洒麗をいふくせがあつた。それがこの場合、不似合なをかしさのためにへんに哀れでもあつた。それにしてもこの駄洒麗は我々上方の人間には自然である。

「ハ、ハハ。なんだ。しやれかい。まあ女が逃げたつてそれだけの元氣があればいいよ。——でも」私は腑に落ちないので尋ねた「どうして又運送屋へ預けてあるんだい？」

「買つても家がきまらなけや置きどころが無いといふので、家のきまる時まで、引越しまで運送屋へ預けて置いたまま

なのだ」

「なるほど、それは然うだね」私は一應うなづいたが、でもやはり少し妙だつた「それや、カホルさんの出て行く少し前のことだと言つたね。それや誰の考へだい。君の智恵ではあるまい」

「カホルさんが言つたのさ」

「さうだらう。それでいろんなものを買つて一々、その運送屋へ持ち込んだのか」

「買つた店からひとまづ、運送屋へとどけさせたのだよ」

「はあ？買つた店からね。一たいどんなものがあるつて」

「いろ〳〵あるよ。簞笥だの、針箱だの、鏡台から、鍋や釜……」

「そんなものまであるのか」

「それや世帯道具だもの。——百六七十圓買つたらう」

「はあ！」私はいよ〳〵をかしいと思つた。「もう一ケ月近くにもなるわけだね。運送屋からはまだ何とも言つて來ないかい。そんなにかさ張つたものをそんなに永く置いても」

上村は一向無表情で、何とも答へなかつた。上村はただカホルの瓜實顏でも思ひ出してゐて、そんな道具などのことは考へる必要もないらしかつた。私はしかし大きにさうでは無かつた。カホルといふ女の氣質がわかつてゐる私には、運送屋へ持ち込んでゐるといふこの荷物が一つの有力な謎であると同時にまたそれ自身で答でもあるやうに思へるのであつた。

一たい、私はカホルのやうな女を自分の從姉ながら見たことはない。三年前に歯醫者の岡島からこの上村のところへ逃げて來た時のやり方で、もう親類一同誰れも彼れもカホルにはあきれ返つてゐる。（それを知つてゐてカホル自身と上村とは、例の駄洒膾であきれカかルなどと、自分たちで言つて笑つてゐた）岡島の一件は永くなるから、さうして今話しかけてゐることと似たやうな事件だから今はやめるけれども、ともかくもそのために岡島と上村とも親類同士でありながら仲ちがひになり、カホルの家でも父親は末娘で可愛いいのだけれども岡島や上村への義理にも、カホルを取合ふことは當分出來ないでゐる。それは上村のせゐではない。まづ專らカホルのせゐだ。私の兄などはまだ青年のくせに役人になるだけにへんに石部金吉で、私が繪描きになりたがつたり戀愛の詩をつくるなどを見てさへ機嫌が惡いほどなのだから、カホルの事などはまるで女のやうには言はない。さうして私が今だにカホルと從姉弟づき合ひをしてゐるのさへ不服なのである。私の兄の世界では尤もなことだ。但、カホルは、私の見方ではさうむきになつて道德的の批判を下すべき素材でもないと思つてゐる。朽ちた木へ彫刻は出來ないわけで、もともと彼女自身のなかに德操の觀念が絕無なのだからやむを得ない。彼女の世界には罪惡はないわけだ。彼女は無論、どんな神でも無いが、また惡魔でもない。惡魔の手さきでもない。まあせいぜい彼女自身が惡魔のおもちやぐらゐに私は思つて、それで興味を持つてゐる。彼女はまるで子供がトンボの首をなぐさみにねぢり拔くやうに、普通の人情から見ると實にむごたらしいと思へることを笑ひながらやつてのける。さういふ點では女性そのものの一面を端的に現はしてゐるかも知れない。むごい點ばかりではなく、ばかばかしいのもまで子供だ。一度などはこんな事があつた。――

或る日、私が遊びに行くと上村が留守で彼女ひとりだつたが、私の顏を見るといきなり、

「わたしお金があるから今日は御馳走するわ」

と言つて私を誘ひ出した。さうして近くの、場末の一品料理へ入つたのはいいが、注文をしかけてからふと氣がついたやうに、懐中のしやれた札入れから、一枚の百圓札を取出して、ウエヰトレスに言ふのだ。

「わたし、困つたわ、これ一枚しかないのよ。これでおつりくれるでせうか」

「さあ、無いかも知れませんわね」

「困つたわ」さう云ひながら彼女は曲木椅子から立つて「ぢや、また來ませうよ」

ウエヰトレスはぢろ／＼私たちを見るし、それで無くてさへ私は穴へも入りたいほど恥しくもあり、またその家へも氣の毒であり、

「何を言ふのだ。僕が持つてゐるからいいよ」

と、言つたけども、カホルは言ふのだ。

「わたしおごると言つて來たのぢやなくつて。あなたになんぞお金を出して貰ふのいやよ」

彼女は私などには取合はずに、出て行つてしまつた。私はつづいて逃げるやうに出た。カホルは私の顔を見ると

「さよなら。またいらつしやい」

彼女はケロリとした顔で、自分の家の方へすたすたとひとり歸つたものだ。それが別に大した意味でたくらんだのではなく、私をさう大して愚弄したとも思はず、笑しい笑ひ事位にしか思はない。さうして自分がまるで女給や私に百圓札を見せびらかしたのが只うれしいらしいのである。――すべてが、そんな調子なのだから、私も近ごろはもう私の兄同然カホルには全く辟易してしまつて、しばらくは敬遠してゐた折からの事であつた……

* * * *

「上村君。君は三年前の報ひを今受けてゐるんだぜ。岡島と同じ目に逢つてゐるんだぜ」

私はさう言つた。

上村は答へないで例の眞劍で純粹なちよつと愛敬のある目を、哀願するやうに見ひらいて私の顏に注いだ。カホルは多分、上村のかういふところが先づ氣に入つたのであらう。かういふお人好しなところ、それに年の若い大學生であるところ、また田舍の豪農の息子で金の自由の利くところ、その外。上村にしてみればカホルの容貌が氣に入つてゐて、（さう言つてはをかしいけれども私たちの一族は美人の多い家系でなかでもカホルは一番であつたが）その上大ぜい兄弟の末娘で人にあまつたれる癖が今だに殘つてゐるところなども上村には向くのかも知れない。このふたりを思ひ合せると、いかにもそれは似合はしい個所がたくさん出て來さうだ。ただ上村には、今までの話でも大たい解るだらうとほりに、毒氣といふやうなものは藥にしたくてもない。カホルを惡魔のおもちやといふなら、これはまた神さまのおもちやと言つてもよからう。それだから一そよく合ふのかも知れない……

「ね、君」私は上村のその注視に目顏で答へながら「一つその運送屋へ行つてみようよ。多分カホルさんのゐどころはわかるよ」

「判る！　運送屋へ行けば？」上村は急に活氣づいた。

「僕はさう思ふね」

「でも、どうして？」

「その荷物を、運送屋に賴んで自分の行く先へ送らせるやうにしてあるぜ。あのひとのやりさうな事だもの」

「「そんな事はない！そんなことをするものか！」

「ともかくも、運送屋へ行つてみよう。近所だらう」

「あ」

「行つてみないか」

「あ」

上村は生返事をして容易に立ちさうにもなかつた。私はこの男の人の好すぎるのが歯がゆくなつて來た。さうしてかういふ男に智惠を與へるのにはカホルのやうな女もまんざら無益なものではないと思つた。

「君は、怖いのだらう。氣味が惡いかい、そこへ行つて見るのが」

「そんな事はないさ」

上村はやつと私について來た。聞けば運送屋といふのは新宿の驛の近所だとかで、私たちは代々木から新宿まで出た。彼等は新宿や四谷の通りで買物をしたものらしい。運送屋へ行つてみると果して荷物はもう無かつた。運送屋の主人は腑に落ちない顔をして、

「まだ屆きませんか」

といふのであつた。さうして送り狀を調べ出した。どこへ屆けたのだといふことを上村が聞かうとするのを私はそばから默らせた。運送屋は送り狀と帳面とを出して來たが、屆け先は神戸驛前のBといふ店であつた。出した日附を指折つて見ると、それが半月以上も前で、カホルが家出したすぐ前日か何かに當るらしい。

「そうれ見給へ」私は苦々しく、また上村には腹立しく言つた。何も私に上村をおこることは無いのだが、私はへんに腹が立つて來てゐた。さうしてまた別に運送屋には言つた「かういふところへ、誰がとどけようと言つたのだ」

「だつて奥さんがさう仰言つたぢやありませんか。神戸の方へ引越さなけやならないが家はきまらぬから、どこか郵[illegible]の店でも受取れるやうにしろと仰言つたのではありませんか。さうでせう」

「いや」私は聲を和げて「さうだよ。君の方はそれでよかつたのだよ。僕はこの男に言つてゐるんだがね」私は運送屋から聞くだけの事は聞いてしまつたものだから、そんな事を言つてみたが、それでも何だかその場はつくろへなかつた。といふのは上村があんまり度を失つてしまつて、その樣子が何も知らない相手の目にも益々腑に落ちないものに思はれさうだからである。私は上村の樣子をとりつくらふ爲めにもう一度言つた「實はまだ、この男が神戸へ行つて見ないものだからね。いや失敬」

上村のために私まで何だか少してれてしまつて、こんな事なら何もかもぶちまけて話した方がよかつたと感じながら急いでその店さきを出た。

たとへば目かくしをされてぐるぐる廻されてからさあ歩けと言はれた者のやうに、上村はそんな足どりでもあつたし、きつと心持もさうだつたらう。よほど歩いてから（それまでは私も默り込んでゐたが）彼は、思ひ出したやうに深い溜息をした。私はそれを機會といふわけでもないが立ちどまつて言つた――

「君、どうする。僕はもう自分の下宿へかへりたいのだがね」

「僕も、僕も一緒につれて行つてくれたまへ。――僕は今夜はどうしたつてひとりではゐられない。さびしくつて」

私はそんなことをいふ上村の顏を見つめたが、だんだん可愛さうになつて來た「さうか。それぢや僕のところへ來たまへ」

かうなつてはもう仕方がない。今夜は一緒にビールでも飲んで、上村の泣き出すのでも見ながら、彼の戀のお通夜を

してやらうと私は肚をきめて上村を自分の下宿の方へつれて來た。省線を水道橋で下りて途中、私は壹岐坂を登りながら上村に言つた。

「どうだ。まづビールで一杯やつて歸らうではないか。そんなふさぎ込んでゐたつて仕方がないからね」

「ウム」上村は全く氣のない聲で「でも、ビールを飲んでみても仕方がない」

「さうか。それぢや仕方がない。でもこのまま僕の下宿へかへつてみても仕方がないぜ。ハ、ハ、ハ」

私は氣を引き立ててやらうとそんな風にも言つてみたけれども、上村はそれには乘つて來なかつた。そのくせ彼は平素から酒は量こそいけないが、好きなのだ。

下宿に歸りついてしばらくすると上村は、今から上方へ旅行するから金を借せろと言ひ出した。堺の原口――つまりカホルの實家へも行つて相談をしてみたいし、神戸の方面も氣のすむまで搜して來るといふのだ。それには旅費が入用だけれども金が無いのださうだ。さうはつきりとは言はなかつたけれど、カホルが有金を持つて出てしまつて、田舍へその事情を言つてやれないので、まだ金を取寄せずにでもゐるらしい。無駄だとは思つたが、ここでひとりでくよくよさせて置くよりも上村の言ふとほりそんな事でもさせて置いたら氣が紛れて、そのうちには時も經つだらうと私も思つたから、私の持合せで足りないところは下宿のおかみに賴んでともかく汽車賃ぐらゐは出來た。

「ありがたう。これだけあれば澤山だ。どうせうちへも寄らなけやならないのだから、これはすぐ返すよ。」

三

上村は出發したきり何の便りもなかつた。さういふ事は案外かたい男だのに、いづれ私に金をかへすなどの閑もない

ほど、逆上してゐるに違ひない。おかげて私はヷオミリオン無しでダリアを描かなければならない。すると十日ほど經つてから上村は夜、ひよつくり下宿へやつて來た。まるで見違へるほどげつそり痩せてゐる。影のやうにしよんぼりしてゐる。

「ありがたう」

さう言ひながら、彼は行きがけの旅費をいきなり私の机の上へ置いた。

「そんな事より」私は言つた「どうだ、行つてみたつてやつぱり判らなかつたらう」

「………」默つて上村は首振つた。さうして私を見上げた目には涙がにじみ出して光つてゐた。それから上村はやつと話し出した。

「判つたのだよ。居るところは判つたのだよ。だが駄目なのだ」

彼は泣いてゐるのだか笑つてゐるのだか判らない聲だつた。さうして事情を話しつづけた——

* * * *

最初にまづ原口へ行つてみたけれども、本當にカホルはそこへ立寄つたらしくなかつた。父が病氣といふのはまんざらの嘘ではなく、二週間ぐらゐ暑さあたりでやられたことはあつたが、どこへもわざわざ知らせるほどの事ではなかつた。神戸のあたりに心あたりといふものはどこにもないが、Yの鑛山にカホルの姉がゐる。神戸とは多少違ふけれども、そこにゐる姉は、カホルとはカホルの直ぐ上で子供の時から仲がよく、たくさんある兄弟のうちで今カホルが音信をしてゐるらしいのはその姉ぐらゐなものだから、何とかカホルが身の上の相談を身内の者にするとすれば、まあ彼女だけだ。それにYにゐる姉なら父の病氣のことも知つてゐたし、もしやそこにでも行つてはゐないたらうかといふのが、原口

でのみんなの意見であつた。上村はカホルが逃げたことは言つたけれども、運送屋に預けてあつた世帯道具の件など、カホルのためを思つて言はなかつた。それでなくてさへ一家から相手にされないカホルなのだから。で、神戸の方といふことはどうしてわかつたかと言はれたから、上村は一度そんな事を言つたことがあるのでと答へた。

堺から上村は和歌山の近在の自分の家へ立寄つて旅裝をこしらへると、すぐその足でYの鑛山の方へ引き返した。さうしてカホルの姉(はユリといふのだ。一たい原口では面白い風に名をつけた。女の一番上が春野、そのつぎがスミレ、みどり、ユリ、それからカホル——これは上村の話ではないが)のところへ訪ねて行つた。輕便鐵道でそこに着いたのは午后の三時ごろだつたが、カホルの姉は家にゐた。(これからさきは上村の口調のままでないと面白くない)——

「そいで、僕はいきなり、カホルさんが來てゐませんかと訪ねると、來てゐますがどなたはんだすといふのだぜ。階の姉さんと僕とが會ふのは、それがはじめてやさかいにね。(上村は長話をすると十日程の間また時々上方なまりが這入つてしまつてゐる)僕は自分が上村やと言つて、詳しくわけを言つたのだ。すると姉さんは、カホルがいろ／＼お世話になりましてといつて禮を言つてくれてから、あなたとお別れするとすぐカホルは今更家へは歸れんからと言つて、私方へ來ましたといふのやぜ、ええか。まるで僕がカホルにひまでも出したやうな口調なのだ。さう思つてよく聞いてみると、さうやないのか言つて向ふで言ひをる。そんな事は無いとよくわけを言つても半信半疑なのだ。どうも姉さんの肚では僕が一たんひまをやつたけれど思ひなほして、未練でまたつれ返しに來たやうに思うてゐる。さうではないと僕がいつても、今更そんなことを言つて貰つてはこつちが困る。もうカホルはわたしの世話でわたしのたくの弟のところへ嫁にゐつてゐると言ふのや。ええか。(ここまで話して上村は涙をすすり上げたやうな氣がした)そんなめちやな事が!といふて見ても仕方がない。それぢや、とに角一度、カホルに逢うたがええ。つひすじ向ふ五六間さきの二一家

や、わたしが行つて上げるとええが、今女中が直ぐかへるならそのあとで行くと、姉さんが言ふので、僕ひとりで、カホルさんのゐるといふ家へ行つたのや。どんなうちに、どんな髮を結うてゐるだらうかと僕は思つてね。小さいが新らしい二階家だつた。格子の外からみると黑いやうな紅の花緒のすがつた新らしい女下駄が一足ぬぎ捨ててある。そんなぬぎくせはカホルのだ。格子をあけて「ごめんやす」と言つても返事がないので、もう一ぺん今度は大きな聲で同じやうに言うと「ハイ」といふのがカホルの聲や。直ぐまた「どなた」と言つてなかなか下りて來ん。僕の聲を知つて下りて來んのか知ら、何をしてゐるのやろ思うて、新らしい障子であつたけれど穴があつたので、そこからのぞいてゐるとね、君、

風のなか の
羽根のやうに
いつも變る
女ごころ

と、あれがいつも唱ふ歌を言ひながら、あれの足音がして、その足が見えて來た。玄關のつきあたりに梯子段があつたのだ。僕はもう我慢が出來なくなつて

「カホルさん。僕だよ」

といひながら障子をあけたのだ。カホルさんは僕を一目見たと思ふと、そのまま仰向けにすとんと倒れてしまつた。――僕が惡かつたのだ。あんまり不意だつたのでびつくりしたのだ。そんな事になつてしまつてはそれこそ僕もびつくりして、梯子段を下りたばかりのところで倒れて、梯子へのつけに倒れかかつてしまつたのだから、どこか打どころでも

悪いのぢやないかと思ふと、靴を脱ぐひまもない。片方は脱いだけれど片方はどうしても脱げない。

「どなたか來て下さい。――いらつしやらないのですか」

と呼んでも、カホルさんひとりでゐたらしい。片方は靴のままで玄關へ上つて、抱き起してみたけれどひとりでは仕方がない。氣がついたので姉さんのところへ、片方の靴はスリツパ見たようにつつかけたままで、僕は姉さんのところへ飛んで歸つた。姉さんを迎へて來て、お醫者は呼ぶ。また會社へ出てゐるといふ、今度の男も呼ぶ。息はふきかへしたのだけれども、カホルさんは正氣にならない。それが五日もつゞいた。食べるものは食べるのだが、何しろ口を利かない。利いても何やらわからない事を口走る。僕と今度の男とはカホルさんの枕もとへ座つたきり、僕はねえ君、寢る間も惜んで看病したのだ。僕が不意にびつくりさせたのがもとだし、それにカホルは僕に悪いことをしてゐたと思へばこそ、氣が咎めてこんなことになつたのだ。死ななければいいがと思つて僕はカホルのくしや〳〵になつた丸髷を見つめながら、それぱつかり枕もとで考へてゐたのだ。その間に今度の男といふのとも話はした。何でも以前から知つてゐたさうだ。で、カホルはどうしても正氣にはならないし、さうかと言つて醫者は大したことはないといふし、その男とふたりでゐると自然、深入りした話になる。その男はカホルの姉さんから僕の事を聞いてゐたと見えて、僕には氣の毒なやうなことを言つて、カホルが正氣になり次第よく相談をしようと言つた。僕はそんな事は誰にも一言も言はないでしまつたが、カホルはね、あんた、あんたが言つたやうにやつぱりあの荷物を持つて行つたのだ。その箪笥やら鏡台やらを並べた部屋へ寢かせたので、僕はいつもそれを見た。

五日目の朝だつたと思ふが、僕が今度の男と話をしてゐると、カホルさんは不意に身を起しふとんの上へ座つた。さうしてぢつと僕を見つめてゐたが、いきなり言つたよ。

「あなた誰です。いつたい何の用があつて、他人の家へをめ〳〵這入てくるんです。別れたらもう他人です。歸つて下さい。顏を見るのもいやです」

さう言つたかと思ふと、カホルはヒイ〳〵と聲を上げて泣き叫び出した。ヒステリイを起したのだ。僕が歸らなければそれはやみさうにもないのだ。(上村はここで五分ばかりものを言はなかつた)……僕はね、カホルの枕もとで看病してゐる間、今度の男はカホルが正氣になればよく相談しようと言つてくれるし、カホルは僕を見て後悔してゐる程だから、僕がこんなに心配して看病したと知つたら、直ぐに僕のところへ歸つてくれるとそれは信じてゐたのだ。それだのに正氣づくとまつさきに言つたのは今の言葉なのだ。僕はあきらめて歸るより外にはなかつた。

*　*　*　*

——かう聞いては、さすがに私も上村を慰める言葉もない。さうして今更だけれども今度といふ今度は、私も全くカホルにはあきれカヘルより外には手がない。洒麗どころの騷ぎではないと思つた。

「上村君」しばらくして私は言つた「あんな女はあきらめて歸つた方がいいのだよ。君はまだ年も若いのだ、お互に、まだワイフなどを持つ年ぢやないからね。それに自分の從姉ながら、あんな女はやめ給へ。やめ給へ。ああいふ女は一生そんなことをして暮すのだ。さういふ風に出來てゐるのだ。そのうちにはうつかりへんな男とかかり合つて、つひ殺されたりするのはあんな女なのだよ」

「しかし」と上村は答へた「僕は憎めない。怨めない。カホルは迷うてゐるのだ。僕のやうにカホルを愛してゐる男が外にあるものか、きつと今に氣がつく。さうしたら、直ぐにも僕にかへつてくる。僕はそれまで何年でもまつ。三年でも、五年でも」

かう言つたかと思ふと、上村は今まで我慢をしてゐた聲を上げて、咽び泣きをし出した。その聲を聞きながら、私はどうやら莫迦莫迦しさをとほり越して、崇高——と言つては言ひすぎるけれど、それに似た氣持がし出したのである。私は私の机の上に、描きかけたダリアの花瓶のかげに泣き伏してゐる上村を見入りながら考へた。この男にはせつかくの經驗も何の智慧の足しにもならないらしい。しかし、この男の心持なら、なまなか智慧などは入らないかも知れない。何故かといふのにこの男は誰をも何物をも怨んでゐる樣子はない。この場合女を怨まないだけのことなら只の二本棒でも出來はする。しかし上村はその新らしい相手の男を怨んでゐるでもなければ、またカホルの姉を怨んでゐる樣子もない。それかと言つて自分自身に不足をいふでもなく、また最後に運命などといふ抽象的なものをこしらへてそれに怨を背負せるといふでもない。これは誰にでも出來るといふ業ではない。さう思ふと私はふと「これは神さまのおもちや」と自分の心のなかで呟いてみた。前にも使つた「神さまのおもちや」「惡魔のおもちや」といふ言葉を私が思ひついたのは、この時のことである。

それにしてもカホルが愕いて氣絶したのはわかる。ありさうな事ではあるが、それが五日も正氣にかへらない云々といふ上村の話はどうも少し私には腑に落ちない。いや上村が嘘を言つてゐるわけではない。上村は疑つてみることを知らないから、自然本當もわからないのだらうが、私の考へでは、その五日の間カホルはそんな樣子をして「これはどうしたものだらう?」と考へて、わからないままに自分に對して、やけを起してゐたのでなからうか。さうして枕もとの連中の有樣を參考にした上でやつと決心をすると、始めて正氣づいたふりをして上村にそんなことを言ひ捨てたのではないだらうか。子供は本能的に狸寢入りの術を知つてゐる。さうして時期を見計らつては目を開いてみせる。カホルのは至極念入りの狸寢入りであつたかも知れない。それにしてもそんな五日の間にカホルがたうとうヒステリイにかゝつて

しまつたのは事實であつたらう……

四

その後、上村は二度ほど私のところへやつて來て同じ題目について同じやうな心持を述べた。私も一度彼の樣子を見には行つた。だんだん平靜にかへつてゐるやうだつたので、それつきりこちらからも行かず、向うからも來なくなつた。カホルと上村との縁が切れれば、私と上村ともいづれさうなるのは自然でもあつたし。ところがその次の年花見時であつたが、私は人ごみのなかで上村を見かけた。彼は若い女をつれて歩いてゐた。それで私は聲をかけないでしまつた。すると、その五六日後に、上村は何を思つたものか私の下宿へ顏を出した。元氣のいい顏つきになつてゐた。

「ちよつと通りかかつたものだから寄つてみました。暫く……」

「やあ、よく來たね。實は僕、この間上野で君を見かけたよ。何だか、しかし、御同伴だつたやうだから聲はかけなかつたがね」

「あんたも僕を見たのか？なあんだ。僕はまたあんたが氣がつかんのかと思つて知らんふりをしてゐた」

「御同伴は、君、なか〳〵シヤンだつたぢやないか」

「あれ？」上村は氣のいい笑ひを見せて「あれね、僕、今度貰つた。友人の妹だけれど」

上村はさう云ひながら倚りかかつてゐた窓から首を出した。何かと思つて私も首を延べてみると、下に――私の部屋は表の二階だつたから、その窓の下の方に小さくひとりの女が見おろされた。丸髷らしい。かげらふの立つやうな紫の羽織を着てゐる。上村はその方を見てから私をふりかへつた。私は言つた。

「あれが君、その新夫人かい」

「……」上村はただニヤりとした。

「あんなところに待たせないで、なぜ上げないのだい。僕にだつて見せてもいいよ」

「………」上村はやつぱり默つてニヤ〳〵してゐる。

彼の笑ひ顔がいかにも天下泰平の現象であつたので、それが私にふと彼をからかつて見たい衝動をおこさせた。

「君、上村君。カホルが逃げたばつかりに君にはもつといいのが見つかつたぢやないか」

「あんたは」上村は答へた「僕にそんな事を言ひだすだらうと思つて、しげ子は表へ待たして置いたのだ」

彼が眞顔でさう答へたのが私には更に面白かつた。

「しかし上村君、君はあの時はたしか、何年でも、三年でも五年でもカホルを待つと言つたつけね」一たいどんな顔を上村がするだらうかと私は思つたのだ。

「ク、ク、ク、ク、ク」

上村は喉の奥からまるで雞のやうな大きな聲を出して笑ひ出した。實に無邪氣な他愛のない聲なのだ。それが花ぐもりの空のなかへほがらかに消えたが、同時に下の方へもひびいたらしく、上村新夫人は夫のその笑ひ聲を聞きつけて、首をもたげて高く見上げた。その彼女を、窓によりかかつた上村も私も認めた。彼女も氣がついたらしく顔をふせてしまつた。上村はつと座り直して、

「や、ではさよなら。また來ます。――今度一つしげ子の顔を描いてやつて下さい」

さう言つたかと思ふと、彼はもう立つてゐた。

私は今までのとほり窓によりかかつて、マドロスパイプを吹かしながら、下の坂道をふたり並んで小さくなつて行く上村たちを見つめ、さうして上村を愛らしいとも思ひ、また羨ましいとも思つた。そのふたりづれの後姿をではない。私のいふのは上村の單純な心の事だ。彼は昨日カホルを疑はなかつたごとく、今日は人生の幸福そのものを疑つてゐない。

上村たちも、私の咋でもしてゐるのか、三四度私の方をふりかへつたが、町角を曲つて見えなくなつた。

女流百人題」號

挿畫

上村松園
有馬さと江
生田花朝女
埴原久和代
梶原緋佐子
西脇マジョリ
菱田きく子

短篇小說

■悲劇女優ヲ・モール……今東光
■母 颯爽……小島政二郎
■娘と若者……小川未明

壹圓(参錢)
振替東京三四
中央公論社

□去年の正月…山口宇多子
□女子教育の不振…吉岡彌生
□底知れぬ沼…望月百合子
□一家婦の生涯…宮島麗子
□牧羊生活への憧れ…城しづか
□石の上にも八年…伊澤蘭奢
□婦選の用意…河本龜子
□藝術と道德…目次耕紗子
□豆ラムプ…米澤順子
□まいにちのこと…長谷川かな女
□非現代的女房…石島菊枝

卽座の感興

坂木眞琴
岡村文子
八木秋子
關屋敏子
厨川蝶子
平井恒
堀江かど江
永島暢子
眞壁光
早見君子

□わらひたい…平井滿壽子
□自畫像…坂本茂子
□文學者よ…住井すゑ子
□ある美…龍城鈴子
□老婆心…松岡久子
□躍省一年…大竹清子
□氣の張り…村田嘉久子
□書き直し…ガントレット
□東京の觀念…福島けい子
□日本流…永井郁子
□珍妙なモダーン化…岩田八重子

現代女流百人一首

■此頃のことば…岡本かの子
■ひとつの感想…茅野雅子
■モサヒキ…堀江京子
■彼…丹野てい子
■ふと思ひついたはなし…小金井素子
■補片…ささきふさ
■勇敢なる大阪人…濱野ゆき
■寫眞帖の中から…林きむ子
■一人旅と青年…岡田初代
■栂ノ尾…松岡筆子
■吸ひとられた薔薇…若杉鳥子
■一圓の賞金…太田菊子
■夫に許しを乞ふまで…山本えい
■兎小屋から觀る…北川千代
■須勢理姫の事…山田邦子
■附木のばなし…三宅やす子

■戀愛と子供に就て私達の場合……山田順子
■新婚日記……島田濱子
■西洋人の觀た日本の風呂……柳靜子
■女監巡……堺眞柄
■「今様お七」女學生の級友より……田島りつ子

■國際女子オリムピック大會出場記……人見絹枝

本邦文壇のパルナスに位する

四大長篇小說

■顯現……谷崎潤一郎
■去年の雪いまいづこ……佐藤春夫
■夜曲ホ長調……久米正雄
■愚人の唄……正宗白鳥

定價		
	定價	送料
一册	八十錢	參錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年十二月二十日印刷
大正十六年一月一日發行　（禁轉載）

編輯兼發行人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
印刷所　株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京市丸ノ內ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番



あたゝかい滋強飲料
カルピス
時代は移りました
惡阻とカルピス
昔は酸さ青梅の實を盗んだ若嫁の手に
今は美味いカルピスの洋盞が運ばれる
運動とカルピス
昔は一回の競技にも疲勞した選手が
今はカルピスの力で回一回と元氣旺盛
科學とカルピス
昔は口先ばかりの味で滿足した飲料が
今は深い學理と尊い經
カル
ピル

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.